

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104

津 寺 遺 跡 3

山 陽 自 動 車 道 建 設
に 伴 う 発 掘 調 査 12

(本 文 編)

1 9 9 6

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104

津 寺 遺 跡 3

山 陽 自 動 車 道 建 設
に 伴 う 発 掘 調 査 12

(本 文 編)

1 9 9 6

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会



津寺遺跡全景（北から）



古墳時代前期の竪穴住居



古墳時代中期の竪穴住居



津寺遺跡出土の畿内系土器



津寺遺跡出土の東海系土器



津寺遺跡出土の北陸系土器



津寺遺跡出土の山陰系土器



津寺遺跡出土の四国系土器

序

山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点として瀬戸内海沿岸の主要都市を結び、山口県山口市に至る総延長約487kmの高速自動車道であります。岡山県においては、昭和63年3月の笠岡～早島インターの供用開始に始まり、平成5年12月には県内全線を開通することができました。広島県においても平成5年10月に全線が開通しており、ここに岡山県と九州を結ぶ交通の大動脈が完成することとなりました。

この山陽自動車道を建設するにあたり、日本道路公団広島建設局岡山工事事務所では、その予定路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて岡山県教育委員会と協議し、昭和56年から記録保存のための発掘調査を岡山県教育委員会に委託して実施してまいりました。その成果は、10分冊の報告書として岡山県教育委員会によりまとめられています。

第11分冊にあたる本書には、昭和63年から平成2年にかけて実施した岡山市津寺遺跡の発掘調査の成果を収載しました。津寺遺跡は、岡山ジャンクションの位置に所在する弥生時代～中世の集落遺跡で、80,000m²にもおよぶ大規模な発掘調査となりましたが、本書に報告するような数々の貴重な成果をあげることができました。この本が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、教育・学術のために広く活用されことを期待します。

最後に、発掘調査の実施や本書の編集にあたって御尽力いただいた岡山県教育委員会を初めとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成 8 年 3 月

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

所 長 佐 伯 博 三

序

瀬戸内地方はその温暖な気候と風土にめぐまれ、我が国の歴史を彩る幾多の文化を育んでまいりました。その瀬戸内海沿岸を東西に結ぶ山陽自動車道は、平成5年12月に県内全線が開通し、これらの地域相互の経済・文化の交流を促進する新たな交通網として重要な役割を果たしています。

この山陽自動車道の建設にあたって、岡山県教育委員会では、昭和47年度に国庫補助を受けて実施した埋蔵文化財の分布調査をもとに、その予定路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため、建設省および日本道路公団と繰り返し協議・調整を行ってまいりましたが、現状での保存が困難なものもまた存在しました。これらについては、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、昭和52年から日本道路公団の委託を受けて発掘調査を実施してまいりました。その成果については、10冊の報告書として刊行したところです。

第11分冊にあたる本書には、第10分冊に引き続き、昭和63年から平成2年にかけて実施した岡山市津寺遺跡の発掘調査の成果を収載しました。津寺遺跡は、弥生時代～中世の集落跡で、古代の官衙や護岸施設などの存在が明らかとなり、この地域を代表する遺跡として注目を集めました。この本が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに教育・学術のために広く活用されことを期待します。

最後に、発掘調査の実施や本書の編集にあたってご尽力いただいた関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。ことに埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生には有益な御指導・御助言をいただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

平成8年3月

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

例 言

1. 本書は、岡山県教育委員会が高速自動車国道山陽自動車道の建設に伴い日本道路公団の委託を受けて実施した、岡山市津寺に所在する津寺遺跡の発掘調査報告書の第3分冊である。
2. 本書に収載した発掘調査は、昭和63年度から平成2年度にかけて実施したもので、調査面積は7,658m²である。
3. 津寺遺跡の発掘調査および報告書作成にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の指導を得た。

水内 昌康 (岡山県文化財保護審議会委員)	昭和61年4月～
鎌木 義昌 (岡山県文化財保護審議会委員)	昭和61年4月～平成5年3月
近藤 義郎 (岡山県文化財保護審議会委員)	昭和61年4月～昭和59年3月
西岡憲一郎 (岡山県遺跡保護調査団)	昭和61年4月～平成2年3月
西川 宏 (岡山県遺跡保護調査団)	昭和61年4月～
間壁 葎子 (倉敷考古館)	昭和61年4月～
高見 周夫 (岡山県遺跡保護調査団)	昭和63年4月～
根木 修 (岡山市教育委員会)	昭和61年4月～
藤田 憲司 (倉敷考古館)	昭和61年4月～昭和59年3月
稲田 孝司 (岡山大学)	平成2年5月～平成4年3月
新納 泉 (岡山大学)	昭和60年4月～平成2年5月 平成4年4月～
亀田 修一 (岡山理科大学)	平成5年4月～
土井 基司 (岡山大学)	平成2年4月～平成4年6月

4. 本書の作成は、平成6年度に岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所において実施した。遺構・遺物の整理は、岡山県古代吉備文化財センター職員 井上 弘・長谷川澄博・小林関士・亀山行雄・澤山孝之・金田善敬の6名が担当した。
5. 本書の執筆は、発掘調査および整理担当者があたり、文責はそれぞれ文末に記した。
6. 本書で使用した方位は磁北を用いた。
7. グリッドは国土地理院第5座標系により、100mごとに設定した。
8. 本書で使用した標高は、海拔高である。
9. 遺構・遺物は、それぞれの種類に区別して、「津寺遺跡2」からの通し番号を付した。
また、遺構の全体図・配置図においては遺構の種類を表す記号として以下のものを用いた
 竪穴住居 H 掘立柱建物 B 井戸 E 袋状土壌 F 土壌 K
 土壌墓 X K 土器棺墓 X P 土器溜り X 溝 D
遺物には、それぞれの材質を表示するため、番号の前に次の記号を付した。
 土製品 C 石製品 S 木製品 W 金属製品 M 玉類 J
10. 本書に掲載した地形図には、国土地理院発行の1/25,000の地形図、総社東部、倉敷を複製して使用した。

11. 本書で使用した時代区分は歴史学の原理的区分に従い、その細分には一般的な政治史区分を使用した。ただし、原始・先史時代については考古学的時代区分を使用し、その時期区分については第2章第2節に解説を付した。

12. 本書の編集・構成は亀山が担当した。

13. 遺跡の環境や遺物の材質等に関する鑑定・同定については、下記の方々の協力を得た。

搬入土器鑑定	奥田 尚 (八尾市立曙川小学校)
	米田敏幸 (八尾市教育委員会)
土器胎土分析	白石 純 (岡山理科大学)
人骨鑑定	井上貴央 (鳥取大学)
獣骨鑑定	金子浩昌 (早稲田大学)
昆虫遺体鑑定	森 勇一 (三重大学)
植物遺体同定	松谷暁子 (東京大学総合研究室資料館)
	畦柳 鎮 (岡山商科大学)
	バリノ・サーヴェイ株式会社
花粉・珪酸体分析	バリノ・サーヴェイ株式会社
赤色顔料分析	[本田光子] (福岡市埋蔵文化財センター)
ガラス滓分析	刈谷道郎 (株式会社 ニコン)
鉄滓分析	九州テクノリサーチ株式会社
	大澤正巳
石材同定	妹尾 護 (吉備国際大学)
	高橋進一 (総社市教育委員会)

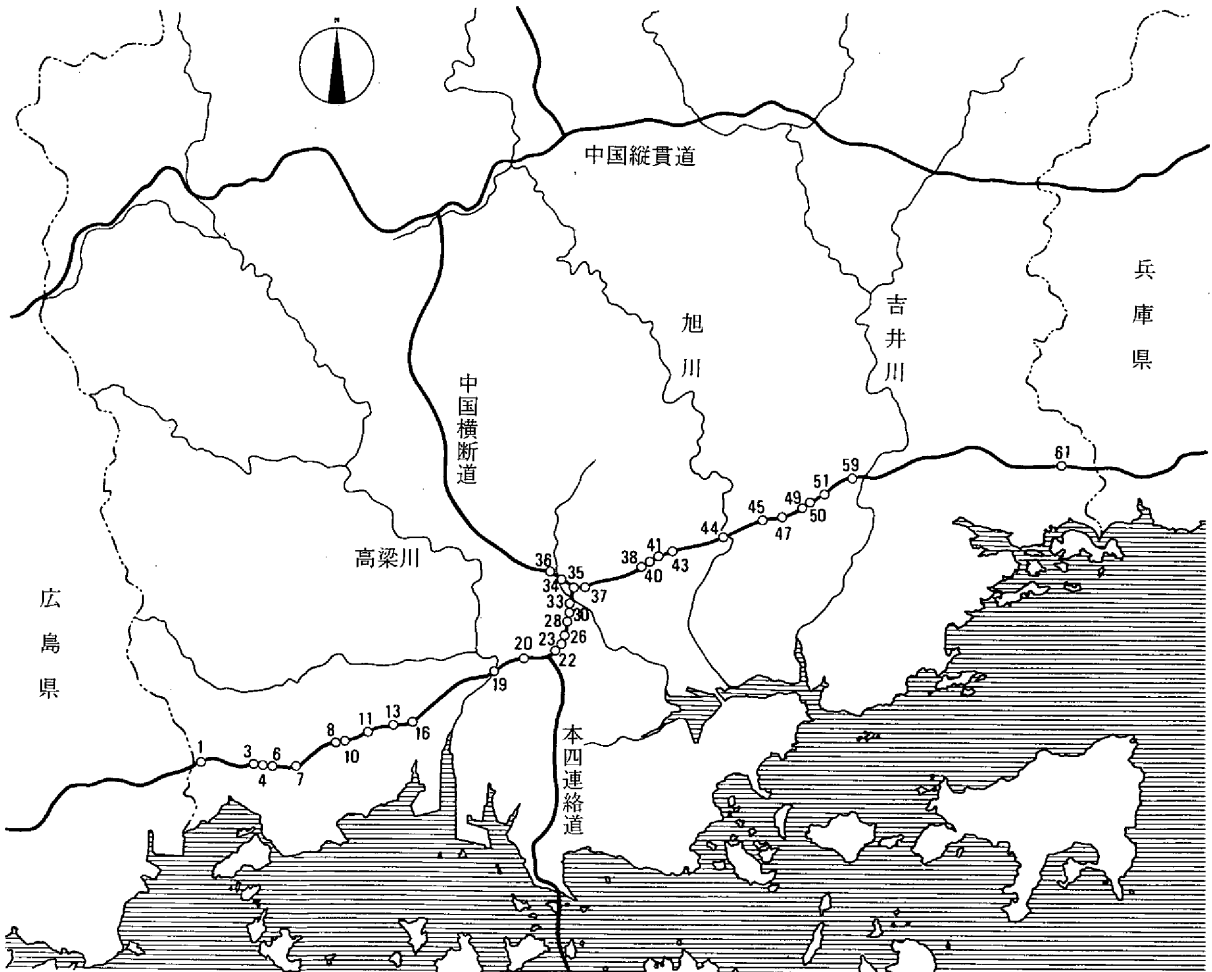
14. 本書に収載した遺物および記録の一切は、岡山市西花尻1325-3に所在する岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

山陽自動車道関連発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	報告書
1	内山遺跡 内山古墳	笠岡市篠坂		昭和59年度	550㎡	福田	70
2	中畦遺跡	笠岡市小平井		昭和59年度	98㎡	福田	70
3	鍛冶屋遺跡	笠岡市小平井	古墳時代～中世の集落・製鉄跡	昭和59～61年度	29,328㎡	松本・岡田・福田・田中	70
4	園井土井遺跡	笠岡市園井	中世の集落	昭和59～60年度	5,570㎡	福田・田中	70
5	彌宜ヶ崎遺跡	笠岡市園井		昭和59年度	460㎡	福田	70
6	本谷遺跡	笠岡市今立	中世の集落	昭和59年度	200㎡	福田	70
7	沖の店遺跡	鴨方町小坂西	中世の窯跡	昭和55年度		伊藤・浅倉	42
8	和田遺跡 宮の原古墳	鴨方町益坂	弥生時代の墳墓群 古墳時代の墳墓	昭和54年度 昭和54年度		伊藤・浅倉 伊藤・浅倉	42 42
9	向原遺跡	鴨方町益坂		昭和54年度		伊藤・浅倉	42
10	阿坂古墳	鴨方町益坂	古墳時代の墳墓	昭和54年度		伊藤・浅倉	42
11	上竹西の坊遺跡	金光町阿坂	弥生時代～古代の集落・窯跡	昭和56・58年度	9,650㎡	正岡・井上・福田・古谷野・武田	69
12	唐津池北遺跡	倉敷市玉島道口	弥生時代の集落	昭和58～59年度	5,230㎡	正岡・福田・古谷野	69
13	道口遺跡	倉敷市玉島	古墳時代の集落	昭和58～59年度	1,830㎡	正岡・福田・古谷野	69
14	沢寺遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	2,940㎡	正岡・福田・古谷野	69
15	西光坊遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	480㎡	正岡・福田・古谷野	69
16	亀山遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚・窯跡・墳墓	昭和58～60年度	10,160㎡	正岡・岡田・福田・古谷野・田中・武田	69
17	中山貝塚	船穂町中山	中世の貝塚	昭和59年度	850㎡	浅倉・中野	81
18	酒津八輪山遺跡	倉敷市酒津	古墳時代の遺物包含層	昭和59年度	770㎡	浅倉・中野	81
19	酒津一水江遺跡	倉敷市酒津	弥生時代～中世の遺物包含層	昭和59年度	260㎡	浅倉・中野	81
20	菅生小学校裏山遺跡 西坂古墳	倉敷市西坂 倉敷市西坂	旧石器～中世の集落 古墳時代の墳墓	昭和59・60～62 昭和61年度	21,450㎡	浅倉・中野・亀山・小松原 中野・亀山	81 81
21	三田散布地	倉敷市三田	中世の水田	昭和61年度	200㎡	井上	81
22	二子14号墳	倉敷市二子	古墳時代の墳墓	昭和61～62年度	1,700㎡	井上・松本・亀山	81
23	矢部古墳群A	倉敷市矢部	古墳時代の墳墓群	昭和59・61年度	4,760㎡	浅倉・大智	81
24	矢部古墳群B	倉敷市矢部	弥生時代の集落・古墳時代の墳墓群	昭和59・61～62	2,820㎡	井上・内藤・大智	82
25	矢部大塚遺跡	倉敷市矢部	弥生時代の集落・中世の祭祀跡	昭和62年度	1,200㎡	内藤・大智	82
26	矢部奥田遺跡	倉敷市矢部	縄文時代の貝塚・古墳時代の粘土探掘跡	昭和59・62年度	3,200㎡	山藤・浅倉・中野・内藤・大智・佐守	82
27	矢部堀越遺跡	倉敷市矢部	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和59・62年度	7,400㎡	浅倉・中野・内藤・大智・石田	82
28	郷境墳墓群	岡山市津寺	弥生時代～古墳時代の墳墓群	昭和61～62年度	1,365㎡	松本・亀山	89
29	前池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和61～62年度	6,835㎡	中野・小松原	89
30	前池内3号墳 前池内4～7号墳	岡山市津寺 岡山市津寺	古墳時代の墳墓 古墳時代の墳墓群	昭和62年度 昭和63年度	1,675㎡ 990㎡	田中・亀山 中野・後藤	89 89
31	後池内遺跡 後池内古墳	岡山市津寺 岡山市津寺	弥生時代・中世の集落 古墳時代の墳墓	昭和63年度 平成元年度	240㎡	正岡・田中・川崎・亀山 高畑・土井	89 89
32	黒住・雲山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓	昭和61～63年度	24,463㎡	正岡・山藤・川崎・佐守	89
33	南崎・天神山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓・城跡	昭和61～平成元	15,729㎡	宇垣・岡本・片山・大智・澤山・柴田	89
34	三手遺跡	岡山市三手	古墳時代～近世の集落・水田・墳墓	昭和61・63年度	20,584㎡	正岡・小柴・山藤・二宮・吉田・中野・川崎・小田・福田・亀山・大橋・後藤	90
35	津寺遺跡	岡山市津寺	弥生時代～近世の集落・水田・官衙・墳墓	昭和61・63～平成4年度	87,290㎡	葛原・正岡・小柴・井上・松本・高畑・山藤・岡田・二宮・福田・浅倉・林・吉田・野上・中野・窪田・栗尾・垣内・井上・川崎・光永・島崎・源・小田・福田・広瀬・山本・片山・田代・亀山・安井・佐守・大橋・小松原・澤山・弘田・柴田・古市・桑原・村田・久保・森・後藤・飯島・佐伯・谷岡・土井・石黒・波多野・守屋	90 98 104
36	高塚遺跡	岡山市高塚	弥生時代～中世の集落・祭祀跡	昭和62～平成元年度	16,195㎡	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・江見・岡本・栗尾・垣内・川崎・平井・長川・佐守・小松原・弘田・横山・森・谷岡・石田	未刊
37	政所遺跡	岡山市加茂	弥生時代～中世の集落・墳墓・铸造跡	平成元～4年度	17,683㎡	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・出原・江見・岡本・吉久・平井・川崎・長川・平松・亀山・古市・佐守・澤山・弘田・横山・柴田・森・守屋	未刊
38	富原西奥古墳	岡山市富原	古墳時代の墳墓	昭和63年度	300㎡	松本・佐守	83
39	富原大池奥山遺跡	岡山市富原		昭和63年度	300㎡	松本・佐守	83
40	大岩遺跡	岡山市富原	弥生時代～古墳時代の集落・墳墓	平成4年度	1,583㎡	正岡・浅倉・二宮・古谷野・中野・松岡・澤山・柴田	未刊
41	田益遺跡	岡山市田益	弥生時代～中世の集落・墳墓	平成2～3年度	5,440㎡	伊藤・松本・岡田・二宮・窪田・野上・山本・佐守・長門	未刊
42	白壁古墳	岡山市横井上	古墳時代の墳墓	平成2年度	300㎡	松本・佐守	83
43	白壁奥遺跡	岡山市横井上	古墳時代～古代の製鉄跡・墳墓	平成4年度	3,500㎡	下沢・竹井・滝川	83
44	平瀬古墳群	岡山市玉柏	古墳時代の墳墓群	平成元～2年度	1,000㎡	葛原・井上・大智	83

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	報告書
45	馬屋遺跡	山陽町馬屋	古代～中世の集落	平成3～4年度	10,412㎡	伊藤・下沢・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
46	池新田遺跡	山陽町穂崎		平成3年度	1,120㎡	伊藤・下沢・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
47	新屋敷遺跡	山陽町穂崎	弥生時代の集落	平成3年度	1,164㎡	伊藤・下沢・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
48	長尾遺跡	山陽町	遺物包含層	平成3年度	50㎡	下沢・平松・横山	99
49	斎富遺跡	山陽町斎富	縄文時代～中世の集落	平成3～4年度	20,580㎡	伊藤・下沢・井上・岡田・福田・平井・二宮・窪田・大森・野上・古谷野・竹井・吉久・山田・石田・山本・長川・田原・東呂木・松岡・安井・大橋・高田・横山・氏平・滝川・長門・根木	105
50	斎富古墳群	山陽町斎富	古墳時代・中世の墳墓群	平成3～4年度	1,683㎡	福田・松岡・安井・古市・澤山	99
51	勘定口2号墳	瀬戸町塩納	古墳時代の墳墓	平成4年度	370㎡	福田	99
52	塩納成遺跡A	瀬戸町塩納	遺物包含層	平成2年度	73㎡	下沢・栗原	99
	塩納成遺跡B	瀬戸町塩納		平成2年度	80㎡	下沢・栗原	99
54	実教寺北遺跡	瀬戸町万富	遺物包含層	平成2年度	270㎡	下沢・栗原	99
	実教寺南遺跡	瀬戸町万富		平成2年度	340㎡	下沢・栗原	99
55	保木池じり遺跡	瀬戸町保木		平成元年度	190㎡	下沢・大智	99
56	保木西遺跡	瀬戸町保木		平成元年度	220㎡	下沢・大智	99
57	保木窯跡	瀬戸町保木	古代の墳墓	平成2年度	200㎡	下沢・栗原	99
58	奥池西遺跡	瀬戸町万富		平成2年度	537㎡	下沢・栗原	99
	奥池北遺跡	瀬戸町万富		平成2年度			99
59	松尾古墳群	瀬戸町万富	古墳時代の墳墓群	平成元～2年度	610㎡	下沢・栗原・大智	99
	松尾窯跡	瀬戸町万富	中世の窯跡	平成元年度		下沢・大智	99
60	満願寺遺跡	熊山町奥吉原		平成2年度	58㎡	下沢・栗原	99
61	荒神社東遺跡	備前市福石		昭和51年度		岡本	25

平成8年3月31日現在



山陽自動車道関連調査遺跡位置図 (1/300,000)

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 遺跡をとりまく環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の契機と経過	9
第1節 調査の契機	9
(1) 既往の調査	9
(2) 第1次調査	9
第2節 調査の目的と方法	10
(1) 調査の目的と方法	10
(2) 調査の体制	10
第3節 調査の経過	13
(1) 調査の経過	13
(2) 日誌抄	13
第3章 報告書の作成	16
第1節 整理の方法と体制	16
(1) 整理の方法	16
(2) 整理の体制	16
第2節 報告書の構成	17
(1) 報告書の構成	17
(2) 時期区分	17
第3節 整理の経過と課題	20
(1) 整理の経過	20
(2) 整理の課題	21
第4章 調査の概要	22
第1節 調査区の概要	22
(1) 調査区の位置	22
(2) 基準層序	22
第2節 弥生時代の遺構・遺物	26

(1)	概要	26
(2)	竪穴住居	26
(3)	掘立柱建物	36
(4)	井戸	36
(5)	袋状土壌	36
(6)	土壌	54
(7)	土壌墓	69
(8)	土器溜り	70
(9)	溝	70
(10)	その他の遺構・遺物	73
第3節	古墳時代の遺構・遺物	75
(1)	概要	75
(2)	竪穴住居	75
(3)	掘立柱建物	120
(4)	土壌	121
(5)	土壌墓	133
(6)	土器棺墓	133
(7)	溝	134
(8)	水田	149
(9)	その他の遺構・遺物	155
第4節	古代の遺構・遺物	159
(1)	概要	159
(2)	溝	159
(3)	その他の遺構・遺物	163
第5節	中世以降の遺構・遺物	164
(1)	概要	164
(2)	掘立柱建物	164
(3)	井戸	170
(4)	土壌	171
(5)	土壌墓	175
(6)	溝	177
(7)	その他の遺構・遺物	183
第5章	結語	185
第1節	津寺遺跡の変遷	185
第2節	弥生時代の遺構と遺物	197
第3節	古墳時代の竪穴住居	211
第4節	古墳時代初頭の土器	226
第5節	津寺遺跡出土の石器	243

第6節 津寺遺跡出土の土製品	249
第7節 津寺遺跡出土の金属器	255
附 篇 自然科学的考察	261
Ⅰ. 津寺遺跡出土の非在地系土器	奥田 尚・米田敏幸 262
Ⅱ. 津寺遺跡出土土器の胎土分析について	白石 純 271
Ⅲ. 津寺遺跡中屋調査区出土の歯牙について	井上貴央 282
Ⅳ. 津寺遺跡中屋調査区出土のウマの遺骸	金子浩昌 283
Ⅴ. 津寺遺跡中屋調査区より産出した昆虫群集について	森 勇一 286
Ⅵ. 津寺遺跡中屋調査区出土の植物種子について	松谷暁子 289
Ⅶ. 津寺遺跡中屋調査区における植物珪酸体および花粉分析について	バリノ・サーヴェイ株式会社 292
Ⅷ. 津寺遺跡中屋調査区出土の炭化材について	バリノ・サーヴェイ株式会社 297
Ⅸ. 津寺遺跡中屋調査区出土の赤色顔料について	[本田光子] 299
Ⅹ. 津寺遺跡中屋調査区出土のガラス滓について	荻谷道郎 301
Ⅺ. 津寺遺跡中屋調査区出土の鉄滓について	編集者 303
遺構一覧表・遺物観察表	305
抄 録	390
図 版	

挿 図 目 次

第1図 津寺遺跡周辺微地形図 (1/1,000)	2	第16図 竪穴住居-114玉類出土状況 (1/1)	114
第2図 一次調査土層断面図 (1/20)	3	第17図 古墳時代遺構全体図2 (1/600)	115・116
第3図 中屋調査区出土の縄文土器 (1/3)	3	第18図 溝-16遺物出土状況 (1/60)	138
第4図 津寺遺跡周辺遺跡分布図 (40,000)	4	第19図 古代遺構全体図 (1/600)	161・162
第5図 調査区配置図 (1/2,000)	14	第20図 中・近世遺構全体図1 (1/600)	165・166
第6図 中屋調査区遺構全体図 (1/600)	23・24	第21図 中・近世遺構配置図 (1/300)	167
第7図 標準土層断面図 (1/100)	25	第22図 中・近世遺構全体図2 (1/600)	179・180
第8図 弥生時代遺構全体図 (1/600)	27・28	第23図 弥生時代全体図 (1/1,500)	186
第9図 弥生時代遺構配置図1 (1/300)	29	第24図 古墳時代前期全体図 (1/1,500)	188
第10図 弥生時代遺構配置図2 (1/300)	32	第25図 古墳時代中・後期全体図 (1/1,500)	190
第11図 袋状土壇-20出土遺物 (1/2)	42	第26図 古代全体図 (1/1,500)	192
第12図 古墳時代遺構全体図1 (1/600)	77・78	第27図 中・近世全体図1 (1/1,500)	194
第13図 古墳時代遺構配置図1 (1/300)	79	第28図 中・近世全体図2 (1/1,500)	195
第14図 古墳時代遺構配置図2 (1/300)	91	第29図 竪穴住居の主柱と規模	211
第15図 古墳時代遺構配置図3 (1/200)	110	第30図 竪穴住居の深度 (模式図)	212

第31図 竪穴住居の下部構造 (縮尺不同)	212	第57図 岡山県南部・山陰・讃岐の各地方の比較 (Sr-Rb 散布図)	275
第32図 床面における支柱の位置	213	第58図 岡山県南部・山陰・讃岐の各地方の比較 (Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ 散布図)	275
第33図 焼失住居にみる上屋の構造 (縮尺不同)	214	第59図 形態・技法的に分類されている各地域の土器と各地 方の在地産土器との比較 (K ₂ O-CaO 散布図) ..	276
第34図 住居構造の変遷 (模式図)	214	第60図 形態・技法的に分類されている各地域の土器と各地 方の在地産土器との比較 (Sr-Rb 散布図)	276
第35図 高床部の類型	216	第61図 形態・技法的に分類されている各地域の土器と各地 方の在地産土器との比較 (Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ 散布図)	277
第36図 特殊な中央穴 (1/30)	217	第62図 津寺遺跡出土土器と各地方の在地産土器との比較 (K ₂ O-CaO 散布図)	277
第37図 方形土塙の諸例 (1/30)	221	第63図 津寺遺跡出土土器と各地方の在地産土器との比較 (Sr-Rb 散布図)	278
第38図 カマドの諸例 (1/30)	223	第64図 津寺遺跡出土土器と各地方の在地産土器との比較 (Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ 散布図)	278
第39図 壺・甕形土器の類型	227	第65図 溝-18出土のウマの遺骸	285
第40図 甕A・Bの法量	229	第66図 溝-18におけるウマの遺骸出土状況	285
第41図 甕A・B・Dの形態比較図 (1/8)	230	第67図 井戸-2出土の昆虫遺体	288
第42図 高杯形土器の種類	231	第68図 井戸-2出土の植物種子	291
第43図 鉢・器台形土器の種類	232	第69図 植物珪酸体組成の層位的分布	294
第44図 土器に描かれた特殊な文様 (1/1.5)	234	第70図 水田層出土の植物珪酸体	296
第45図 刺突記号の類型	234	第71図 竪穴住居-122出土の炭化材	298
第46図 土器にみられる煤の類型	236	第72図 竪穴住居-55出土鉄滓の顕微鏡組織	304
第47図 土器にみられる黒斑の類型	237		
第48図 山陰系土器	238		
第49図 四国系土器	239		
第50図 畿内系土器	240		
第51図 その他の非在地系土器	241		
第52図 石包丁の法量	243		
第53図 石鏃の類型と法量	244		
第54図 重圏文鏡の分布	255		
第55図 西川調査区出土鉄器 (1/2)	257		
第56図 岡山県南部・山陰・讃岐の各地方の比較 (K ₂ O-CaO散布図)	274		

表 目 次

表1 調査・整理一覧表	15	表6 中屋調査区方形土塙一覧表	222
表2 岡山県の土器編年対比表	19	表7 中屋調査区カマド一覧表	223
表3 竪穴住居の類型	215	表8 岡山県のカマド	224
表4 住居類型と高床部の関係	216	表9 各遺跡の刺突記号出現率	236
表5 中屋調査区中央穴一覧表	219	表10 弥生土器(甕)にみられる煤の類型	236

表11 土師器(甕)にみられる煤の類型1	236	表20 井戸-2出土昆虫の分析結果	287
表12 土師器(甕)にみられる煤の類型2	236	表21 津寺遺跡出土の植物珪酸体および花粉分析試料	292
表13 土師器(壺)にみられる黒斑の類型	237	表22 津寺遺跡出土の植物珪酸体分析結果	294
表14 土師器(甕)にみられる黒斑の類型	237	表23 津寺遺跡における花粉分析結果	295
表15 津寺遺跡出土の石器組成	247	表24 津寺遺跡出土赤色顔料の分析試料と分析結果	300
表16 重圍文鏡の出土状況	256	表25 津寺遺跡出土ガラス滓の分析値	302
表17 津寺遺跡出土鉄器の組成	258	表26 岡山県出土ガラス滓の主成分の比較	302
表18 津寺遺跡出土の土師器に見られる砂礫	266	表27 津寺遺跡出土鉄滓の分析結果	303
表19 胎土分析試料と分析値	279		

図 版 目 次

図版1 竪穴住居-14・15平・断面図 (1/60)	図版23 土壙-41~45・47~51平・断面図 (1/30)
図版2 竪穴住居-16~19平・断面図 (1/60)	図版24 土壙-52~56平・断面図 (1/30)
図版3 竪穴住居-20~22平・断面図 (1/60)	図版25 土壙-57~60平・断面図 (1/30)
図版4 竪穴住居-24・25平・断面図 (1/60)	図版26 土壙-61~65平・断面図 (1/30)
図版5 竪穴住居-26・29平・断面図 (1/60)	図版27 土壙-66~71平・断面図 (1/30)
図版6 竪穴住居-28・31平・断面図 (1/60)	図版28 土壙-72~80平・断面図 (1/30)
図版7 竪穴住居-30、掘立柱建物-1 平・断面図 (1/60)	図版29 土壙-81~88平・断面図 (1/30)
図版8 井戸-1、袋状土壙-1~4平・断面図 (1/30)	図版30 土壙-89~94平・断面図 (1/30)
図版9 袋状土壙-5~10平・断面図 (1/30)	図版31 土壙-95~98平・断面図 (1/30)
図版10 袋状土壙-11~14平・断面図 (1/30)	図版32 土壙-99~102平・断面図 (1/40・30)
図版11 袋状土壙-15~18平・断面図 (1/30)	図版33 土壙-103~107平・断面図 (1/30)
図版12 袋状土壙-19~23平・断面図 (1/30)	図版34 土壙-46・108、土壙墓-2・3 平・断面図 (1/30・40)
図版13 袋状土壙-24~28平・断面図 (1/30)	図版35 溝-2・3・12~15断面図 (1/30)
図版14 袋状土壙-29~32平・断面図 (1/30)	図版36 竪穴住居-32平・断面図 (1/60)
図版15 袋状土壙-33~37平・断面図 (1/30)	図版37 竪穴住居-33~35平・断面図 (1/60)
図版16 袋状土壙-38~41平・断面図 (1/30)	図版38 竪穴住居-36平・断面図 (1/60)
図版17 袋状土壙-42~46平・断面図 (1/30)	図版39 竪穴住居-37平・断面図 (1/60)
図版18 袋状土壙-47~51平・断面図 (1/30)	図版40 竪穴住居-38平・断面図 (1/60)
図版19 袋状土壙-52~55・58平・断面図 (1/30)	図版41 竪穴住居-39・40平・断面図 (1/60)
図版20 袋状土壙-56・57・59・60平・断面図 (1/30)	図版42 竪穴住居-41平・断面図 (1/60)
図版21 袋状土壙-61~64平・断面図 (1/30)	図版43 竪穴住居-42・43平・断面図 (1/60)
図版22 袋状土壙-65~69平・断面図 (1/30)	図版44 竪穴住居-44平・断面図 (1/60)

图版45 竖穴住居—45平·断面图 (1/60)
图版46 竖穴住居—46平·断面图 (1/60)
图版47 竖穴住居—47·48平·断面图 (1/60)
图版48 竖穴住居—49·50平·断面图 (1/60)
图版49 竖穴住居—51·52平·断面图 (1/60)
图版50 竖穴住居—53~55平·断面图 (1/60)
图版51 竖穴住居—56·57平·断面图 (1/60)
图版52 竖穴住居—58~60平·断面图 (1/60)
图版53 竖穴住居—61~63平·断面图 (1/60)
图版54 竖穴住居—64平·断面图 (1/60)
图版55 竖穴住居—65平·断面图 (1/60)
图版56 竖穴住居—66·67平·断面图 (1/60)
图版57 竖穴住居—68·69平·断面图 (1/60)
图版58 竖穴住居—70平·断面图 (1/60)
图版59 竖穴住居—71·72平·断面图 (1/60)
图版60 竖穴住居—73~76平·断面图 (1/60)
图版61 竖穴住居—77·78平·断面图 (1/60)
图版62 竖穴住居—79·80平·断面图 (1/60)
图版63 竖穴住居—81平·断面图 (1/60)
图版64 竖穴住居—82平·断面图 (1/60)
图版65 竖穴住居—84平·断面图 (1/60)
图版66 竖穴住居—85·87平·断面图 (1/60)
图版67 竖穴住居—86平·断面图 (1/60)
图版68 竖穴住居—88·89平·断面图 (1/60)
图版69 竖穴住居—90平·断面图 (1/60)
图版70 竖穴住居—91平·断面图 (1/60)
图版71 竖穴住居—92平·断面图 (1/60)
图版72 竖穴住居—93·94平·断面图 (1/60)
图版73 竖穴住居—97·98平·断面图 (1/60)
图版74 竖穴住居—99平·断面图 (1/60)
图版75 竖穴住居—100·101平·断面图 (1/60)
图版76 竖穴住居—102平·断面图 (1/60)
图版77 竖穴住居—103~105平·断面图 (1/60)
图版78 竖穴住居—106平·断面图 (1/60)
图版79 竖穴住居—107·108平·断面图 (1/60)
图版80 竖穴住居—109~111平·断面图 (1/60)
图版81 竖穴住居—112·113平·断面图 (1/60)
图版82 竖穴住居—114平·断面图 (1/60)

图版83 竖穴住居—115平·断面图 (1/60)
图版84 竖穴住居—116·117平·断面图 (1/60)
图版85 竖穴住居—118·119平·断面图 (1/60)
图版86 竖穴住居—120~122平·断面图 (1/60)
图版87 竖穴住居—123·124平·断面图 (1/60)
图版88 掘立柱建物—2·3平·断面图 (1/60)
图版89 土壙—109~116平·断面图 (1/30)
图版90 土壙—117~124平·断面图 (1/30)
图版91 土壙—125~132平·断面图 (1/30)
图版92 土壙—133~136平·断面图 (1/30)
图版93 土壙—137~144平·断面图 (1/30)
图版94 土壙—145~152平·断面图 (1/30)
图版95 土壙—153~157平·断面图 (1/30)
图版96 土壙—158~165平·断面图 (1/30)
图版97 土壙墓—4、土器棺墓—7·8
平·断面图 (1/30)
沟—4断面图 (1/40)
图版98 沟—4断面图 (1/40)
图版99 沟—16·18·23·24·26断面图 (1/30)
图版100 水田断面图 (1/60)
图版101 沟—27平·断面图 (1/40)
图版102 沟—27~30·33·34断面图 (1/30)
图版103 掘立柱建物—4·5平·断面图 (1/80)
图版104 掘立柱建物—6·7平·断面图 (1/60)
图版105 掘立柱建物—8·9
平·断面图 (1/80·60)
图版106 掘立柱建物—10·11平·断面图 (1/60)
图版107 掘立柱建物—12~14平·断面图 (1/60)
图版108 掘立柱建物—15平·断面图 (1/60)
井戸—2平·断面图 (1/40)
土壙—166~168平·断面图 (1/30·40)
图版109 土壙—169~176平·断面图 (1/30·40)
图版110 土壙—177~182平·断面图 (1/30·40)
图版111 土壙—183~185平·断面图 (1/30)
图版112 土壙—186~191平·断面图 (1/30)
图版113 土壙墓—5~11平·断面图 (1/30)
图版114 沟—35~38·42~45·70·72、近世水田
断面图 (1/30)

図版115 溝-46~50・56・57・62~64・68・69・73・76
80・81断面図(1/30)

図版116 竪穴住居-14・16・18~20・22
出土土器(1/4)

図版117 竪穴住居-29・31出土土器(1/4)

図版118 竪穴住居-30・31、井戸-1、
袋状土壙-1・3・8出土土器(1/4)

図版119 袋状土壙-8・10・11出土土器(1/4)

図版120 袋状土壙-10・13出土土器(1/4)

図版121 袋状土壙-13・14・16~20出土土器(1/4)

図版122 袋状土壙-22・24~28・32出土土器(1/4)

図版123 袋状土壙-31~33・36~39出土土器(1/4)

図版124 袋状土壙-40・42・46・49~54・56出土土器
(1/4)

図版125 袋状土壙-56~59・61・69出土土器(1/4)

図版126 土壙-41・45・48・49・52・53出土土器(1/4)

図版127 土壙-53・57・61・65・67出土土器(1/4)

図版128 土壙-67・70~72出土土器(1/4)

図版129 土壙-72・74・75・80~82・84・86出土土器
(1/4)

図版130 土壙-86~88・90・91出土土器(1/4)

図版131 土壙-91~93・95・97出土土器(1/4)

図版132 土壙-97出土土器(1/4)

図版133 土壙-97出土土器(1/4)

図版134 土壙-97~100出土土器(1/4)

図版135 土壙-100出土土器(1/4)

図版136 土壙-101~103・105出土土器(1/4)

図版137 土壙-105~108出土土器(1/4)

図版138 土壙墓-2・3
土器溜り-1出土土器(1/4)

図版139 土器溜り-1、溝-3出土土器1(1/4)

図版140 溝-3出土土器2(1/4)

図版141 溝-3出土土器3(1/4)

図版142 溝-3出土土器4(1/4)

図版143 溝-3出土土器5(1/4)

図版144 溝-3、包含層出土土器1(1/4)

図版145 包含層出土土器2(1/4)

図版146 包含層出土土器3(1/4)

図版147 竪穴住居-32・34~37出土土器(1/4)

図版148 竪穴住居-37~39・41出土土器(1/4)

図版149 竪穴住居-41・42・44・45出土土器
(1/4)

図版150 竪穴住居-46~48出土土器(1/4)

図版151 竪穴住居-48~50出土土器(1/4)

図版152 竪穴住居-50~52出土土器(1/4)

図版153 竪穴住居-53出土土器(1/4)

図版154 竪穴住居-53~56・60出土土器(1/4)

図版155 竪穴住居-60~62出土土器(1/4)

図版156 竪穴住居-62~64出土土器(1/4)

図版157 竪穴住居-64・65出土土器(1/4)

図版158 竪穴住居-65~67出土土器(1/4)

図版159 竪穴住居-67~70出土土器(1/4)

図版160 竪穴住居-70・73~76出土土器(1/4)

図版161 竪穴住居-77~79出土土器(1/4)

図版162 竪穴住居-80~82出土土器(1/4)

図版163 竪穴住居-82~84出土土器(1/4)

図版164 竪穴住居-84出土土器(1/4)

図版165 竪穴住居-84・86・87出土土器(1/4)

図版166 竪穴住居-87~90出土土器(1/4)

図版167 竪穴住居-90出土土器(1/4)

図版168 竪穴住居-92出土土器(1/4)

図版169 竪穴住居-94・96・97出土土器(1/4)

図版170 竪穴住居-97・98出土土器(1/4)

図版171 竪穴住居-99出土土器(1/4)

図版172 竪穴住居-99出土土器(1/4)

図版173 竪穴住居-99~101出土土器(1/4)

図版174 竪穴住居-100~103出土土器(1/4)

図版175 竪穴住居-104~106出土土器(1/4)

図版176 竪穴住居-106~109出土土器(1/4)

図版177 竪穴住居-109・111出土土器(1/4)

図版178 竪穴住居-111・112出土土器(1/4)

図版179 竪穴住居-112~115出土土器(1/4)

図版180 竪穴住居-116・117出土土器(1/4)

図版181 竪穴住居-117・118出土土器(1/4)

図版182 竪穴住居-118・119出土土器(1/4)

図版183 竪穴住居-119・121・122・124

出土土器 (1/4)

图版184 土壙—111·115·116·117·120
出土土器 (1/4)

图版185 土壙—123·126·127·129~131·133出土土器
(1/4)

图版186 土壙—133·135·137·139出土土器 (1/4)

图版187 土壙—139·148·144·149·151出土土器
(1/4)

图版188 土壙—151·153~156·158~161出土土器
(1/4)

图版189 土壙墓—4、土器棺墓—7·8
溝—4出土土器1 (1/4)

图版190 溝—4出土土器2 (1/4)

图版191 溝—4出土土器3 (1/4)

图版192 溝—4出土土器4 (1/4)

图版193 溝—4出土土器5 (1/4)

图版194 溝—4出土土器6 (1/4)

图版195 溝—4出土土器7 (1/4)

图版196 溝—4出土土器8 (1/4)

图版197 溝—4出土土器9 (1/4)

图版198 溝—4出土土器10 (1/4)

图版199 溝—4出土土器11 (1/4)

图版200 溝—4出土土器12 (1/4)

图版201 溝—4出土土器13 (1/4)

图版202 溝—4出土土器14 (1/4)

图版203 溝—4出土土器15 (1/4)

图版204 溝—4出土土器16 (1/4)

图版205 溝—4出土土器17 (1/4)

图版206 溝—4出土土器18 (1/4)

图版207 溝—16出土土器1 (1/4)

图版208 溝—16出土土器2 (1/4)

图版209 溝—16出土土器3 (1/4)

图版210 溝—16出土土器4 (1/4)

图版211 溝—16出土土器5 (1/4)

图版212 溝—16出土土器6 (1/4)

图版213 溝—16出土土器7 (1/4)

图版214 溝—16出土土器8 (1/4)

图版215 溝—16出土土器9 (1/4)

图版216 溝—16出土土器10 (1/4)

图版217 溝—16出土土器11 (1/4)

图版218 溝—16出土土器12 (1/4)

图版219 溝—16出土土器13 (1/4)

图版220 溝—16出土土器14 (1/4)

图版221 溝—16出土土器15 (1/4)

图版222 溝—16出土土器16 (1/4)

图版223 溝—16出土土器17 (1/4)

图版224 溝—16出土土器18 (1/4)

图版225 溝—16出土土器19 (1/4)

图版226 溝—16出土土器20 (1/4)

图版227 溝—16出土土器21 (1/4)

图版228 溝—16出土土器22 (1/4)

图版229 溝—16出土土器23 (1/4)

图版230 溝—16出土土器24 (1/4)

图版231 溝—16出土土器25 (1/4)

图版232 溝—16出土土器26 (1/4)

图版233 溝—16出土土器27 (1/4)

图版234 溝—16出土土器28 (1/4)

图版235 溝—16出土土器29 (1/4)

图版236 溝—16出土土器30 (1/4)

图版237 溝—16出土土器31 (1/4)

图版238 溝—16出土土器32 (1/4)

图版239 溝—16出土土器33 (1/4)

图版240 溝—16出土土器34 (1/4)

图版241 溝—17出土土器1 (1/4)

图版242 溝—17出土土器2 (1/4)

图版243 溝—17出土土器3 (1/4)

图版244 溝—17出土土器4 (1/4)

图版245 溝—17出土土器5 (1/4)

图版246 溝—17出土土器6 (1/4)

图版247 溝—18·23·水田出土土器 (1/4)

图版248 水田出土土器2 (1/4)

图版249 水田出土土器3 (1/4)

图版250 水田出土土器4 (1/4)

图版251 水田出土土器5 (1/4)

图版252 水田出土土器6 (1/4)

图版253 水田出土土器7 (1/4)

- 図版254 水田出土土器 8 (1/4)
- 図版255 水田出土土器 9 (1/4)
- 図版256 水田出土土器10 (1/4)
- 図版257 水田出土土器11 (1/4)
- 図版258 包含層出土土器 1 (1/4)
- 図版259 包含層出土土器 2 (1/4)
- 図版260 包含層出土土器 3 (1/4)
- 図版261 包含層出土土器 4 (1/4)
- 図版262 包含層出土土器 5 (1/4)
- 図版263 包含層出土土器 6 (1/4)
- 図版264 包含層出土土器 7 (1/4)
- 図版265 包含層出土土器 8 (1/4)
- 図版266 包含層出土土器 9 (1/4)
- 図版267 包含層出土土器10 (1/4)
- 図版268 溝-27・28出土土器18 (1/4)
- 図版269 溝-28、包含層土壙墓-6・8・9
土壙-166・182、溝-43出土土器 (1/4)
- 図版270 溝-43・64、ピット包含層出土土器 (1/4)
- 図版271 中屋調査区出土石製品 1 (1/2)
- 図版272 中屋調査区出土石製品 2 (1/2)
- 図版273 中屋調査区出土石製品 3 (1/2)
- 図版274 中屋調査区出土石製品 4 (1/2)
- 図版275 中屋調査区出土石製品 5 (1/2)
- 図版276 中屋調査区出土石製品 6 (1/2)
- 図版277 中屋調査区出土石製品 7 (1/2)
- 図版278 中屋調査区出土石製品 8 (1/2)
- 図版279 中屋調査区出土石製品 9 (1/3)
- 図版280 中屋調査区出土石製品10 (1/1・2・3)
- 図版281 中屋調査区出土土製品 1 (1/2)
- 図版282 中屋調査区出土土製品 2 (1/2)
- 図版283 中屋調査区出土土製品 3 (1/2)
- 図版284 中屋調査区出土土製品 4 (1/2・3)
- 図版285 中屋調査区出土土製品 5 (1/4)
- 図版286 中屋調査区出土土製品 6 (1/4)
- 図版287 中屋調査区出土土製品 7 (1/4)
- 図版288 中屋調査区出土金属製品 1 (1/1・2)
- 図版289 中屋調査区出土金属製品 2 (1/2)
- 図版290 中屋調査区出土金属製品 3 (1/2)
- 図版291 中屋調査区出土金属製品 4 (1/2)
- 図版292 中屋調査区出土金属製品 5、木製品 (1/2)
- 図版293 竪穴住居-14 (南西から)
竪穴住居-14中央穴 (東から)
竪穴住居-14遺物出土状況 (東から)
- 図版294 竪穴住居-15 (南から)
竪穴住居-15中央穴 (北から)
竪穴住居-16・17 (西から)
- 図版295 竪穴住居-18・19 (東から)
竪穴住居-20 (東から)
竪穴住居-25 (北から)
- 図版296 竪穴住居-28 (西から)
竪穴住居-29 (北から)
竪穴住居-28 (北から)
- 図版297 竪穴住居-31 (西から)
竪穴住居-31 (南から)
竪穴住居-30 (北西から)
- 図版298 井戸-1土層断面 (南西から)
井戸-1 (南西から)
袋状土壙-1~5 (北東から)
- 図版299 袋状土壙-1 (北東より)
袋状土壙-4 (北東より)
袋状土壙-3 (北東より)
- 図版300 袋状土壙-5 (東から)
袋状土壙-6 (北から)
袋状土壙-7 (北西から)
- 図版301 袋状土壙-10 (南東から)
袋状土壙-12 (南西から)
袋状土壙-13 (西から)
- 図版302 土壙-14 (西から)
土壙-18 (北から)
袋状土壙-19 (西から)
- 図版303 袋状土壙-25 (南から)
袋状土壙-27 (東から)
袋状土壙-31 (西から)
- 図版304 袋状土壙-34 (西から)
袋状土壙-36 (北東から)
袋状土壙-37 (東から)

- 図版305 袋状土壙-37 (東から)
袋状土壙-41 (西から)
袋状土壙-42 (南東から)
- 図版306 袋状土壙-44 (北から)
袋状土壙-45 (北から)
袋状土壙-46 (北から)
- 図版307 袋状土壙-47 (南から)
袋状土壙-49 (南西から)
袋状土壙-51 (西から)
- 図版308 袋状土壙-52 (南西から)
袋状土壙-53 (西から)
袋状土壙-55 (東から)
- 図版309 袋状土壙-57 (南西から)
袋状土壙-61 (北から)
袋状土壙-69 (南から)
- 図版310 土壙-43 (北東から)
土壙-44 (西から)
土壙-45 (東から)
- 図版311 土壙-46 (北西から)
土壙-46 (西から)
土壙-48 (東から)
- 図版312 土壙-49 (北から)
土壙-50 (南東から)
土壙-52 (北から)
- 図版313 土壙-53 (南東から)
土壙-54 (北から)
土壙-72 (南から)
- 図版314 土壙-74 (北から)
土壙-100 (南から)
土器溜り-1 (北西から)
- 図版315 弥生時代全景 (南から)
溝-3 (北東から)
溝-3 遺物出土状況 (南西から)
- 図版316 竪穴住居-32 (北から)
竪穴住居-32中央穴 (東から)
竪穴住居-35 (南から)
- 図版317 竪穴住居-35 (東から)
竪穴住居-36 (南から)
竪穴住居-36中央穴 (南から)
- 図版318 竪穴住居-37 B (南東から)
竪穴住居-37 B 遺物出土状況 (南東から)
竪穴住居-37 B 中央穴 (南西から)
- 図版319 竪穴住居-37 A (南東から)
竪穴住居-38 B (南東から)
竪穴住居-39 (南東から)
- 図版320 竪穴住居-39 方形土壙 (北西から)
竪穴住居-39 中央穴 (北西から)
竪穴住居-37~41 (南から)
- 図版321 竪穴住居-40 B (南西から)
竪穴住居-41 (北東から)
竪穴住居-41 中央穴 (北から)
- 図版322 竪穴住居-42 (南から)
竪穴住居-42 中央穴 (東から)
竪穴住居-43 (南東から)
- 図版323 竪穴住居-43 中央穴 (北西から)
竪穴住居-44 (北東から)
竪穴住居-44 方形土壙 (北東から)
- 図版324 竪穴住居-45 B (西から)
竪穴住居-45 B 方形土壙 (西から)
竪穴住居-45 B 小ピット (南から)
- 図版325 竪穴住居-45 B 中央穴
竪穴住居-45 B 柱穴 (西から)
竪穴住居-45 B 遺物出土状況 (西から)
- 図版326 竪穴住居-46 B (西から)
竪穴住居-46 A (西から)
竪穴住居-46 B 中央穴 (南から)
- 図版327 竪穴住居-48 (北西から)
竪穴住居-48 方形土壙 (北西から)
竪穴住居-49 (北から)
- 図版328 竪穴住居-50・51 (東から)
竪穴住居-50 遺物出土状況 (南西から)
竪穴住居-50 遺物出土状況 (南東から)
- 図版329 竪穴住居-52 (北西から)
竪穴住居-53 (南西から)
竪穴住居-54 (南東から)
- 図版330 竪穴住居-55 (南西から)

- 竪穴住居-56 (北から)
 竪穴住居-58 (南西から)
 図版331 竪穴住居-60 (南から)
 竪穴住居-62 (西から)
 竪穴住居-64 (北から)
 図版332 竪穴住居-65 (南西から)
 竪穴住居-67 (南から)
 竪穴住居-67方形土壙 (南から)
 図版333 竪穴住居-67 (南から)
 竪穴住居-68 (南から)
 竪穴住居-72 (西から)
 図版334 竪穴住居-74 (北から)
 竪穴住居-76 (北から)
 竪穴住居-79 (東から)
 図版335 竪穴住居-81 (南から)
 竪穴住居-82 (南から)
 竪穴住居-82 (南から)
 図版336 竪穴住居-84 (北から)
 竪穴住居-84 (北から)
 竪穴住居-88
 図版337 竪穴住居-90 (北から)
 竪穴住居-91 (南西から)
 竪穴住居-94・95 (東から)
 図版338 竪穴住居-101 (南東から)
 竪穴住居-102 (北東から)
 竪穴住居-102遺物出土状況 (北西から)
 図版339 竪穴住居-102
 竪穴住居-103 (北から)
 竪穴住居-103遺物出土状況 (西から)
 図版340 竪穴住居-114 (北西から)
 竪穴住居-114カマド (南から)
 竪穴住居-114遺物出土状況 (東から)
 図版341 竪穴住居-117 (北から)
 竪穴住居-117カマド (南東から)
 竪穴住居-118 (南西から)
 図版342 竪穴住居-118土器出土状況 (南から)
 竪穴住居-118カマド (南から)
 竪穴住居-119・120 (西から)
 図版343 竪穴住居-119遺物出土状況 (北東から)
 竪穴住居-124 (南西から)
 竪穴住居-124遺物出土状況 (南西から)
 図版344 掘立柱建物-2 (南から)
 土壙-111 (北から)
 土壙-110 (南から)
 図版345 土壙-115 (西から)
 土壙-116 (南西から)
 土壙-119 (南から)
 図版346 土壙-126 (東から)
 土壙-127 (西から)
 土壙-134 (東から)
 図版347 溝-4 (北東から)
 溝-4 (北東から)
 溝-4 (南東から)
 図版348 水田検出状況 (南から)
 水田発掘作業風景 (西から)
 包含層出土遺物 (西から)
 図版349 溝-28 (南から)
 溝-27・28 (南から)
 図版350 中世全景1 (北西より)
 中世全景2 (北から)
 中世全景3 (西から)
 図版351 掘立柱建物-4 (北から)
 掘立柱建物-9 (西から)
 掘立柱建物-10 (北から)
 図版352 掘立柱建物-12 (南から)
 掘立柱建物-13 (南西から)
 井戸-2 (東から)
 図版353 井戸-2遺物出土状況
 土壙-176 (西から)
 土壙-180 (南から)
 図版354 土壙墓-5 (南から)
 土壙墓-6 (南から)
 土壙墓-8 (西から)
 図版355 土壙墓-9 (西から)
 土壙墓-10 (西から)
 土壙墓-7 (南西から)

- 图版356 竖穴住居—14·18·31
 出土土器 (1/3·1/4)
- 图版357 袋状土坑—3·8·11出土土器 (1/3)
- 图版358 袋状土坑—10出土土器 (1/3)
- 图版359 袋状土坑—18·20·25·27·33·36·37
 出土土器 (1/3)
- 图版360 袋状土坑—56·59·土坑48出土土器 (1/3·1/4)
- 图版361 土坑—49·52·53出土土器 (1/3·1/4)
- 图版362 土坑—61·72·81·84·87·91出土土器
 (1/3·1/4·1/5)
- 图版363 土坑—87·97出土土器 (1/3·1/4·1/5)
- 图版364 土坑—97·102出土土器 (1/3·1/4)
- 图版365 土坑—100出土土器 (1/4)
 沟—3出土土器 (1/3·1/5)
- 图版366 沟—3出土土器 (1/3·1/4)
- 图版367 沟—3·包含层出土土器 (1/3·1/4)
- 图版368 竖穴住居—36·37出土土器 (1/3·1/4)
- 图版369 竖穴住居—37·39·41·45·46·48出土土器
 (1/2·1/3·1/4)
- 图版370 竖穴住居—46·48·50·53出土土器
 (1/3·1/5)
- 图版371 竖穴住居—53出土土器 (1/2·1/3)
- 图版372 竖穴住居—53·54·55·56出土土器
 (1/2·1/3)
- 图版373 竖穴住居—56·60·62出土土器 (1/3·1/4)
- 图版374 竖穴住居—62·65出土土器 (1/3)
- 图版375 竖穴住居—65·67·77·78出土土器 (1/3)
- 图版376 竖穴住居—77·78出土土器 (1/3)
- 图版377 竖穴住居—82·84出土土器 (1/3·1/4)
- 图版378 竖穴住居—84·90出土土器 (1/3)
- 图版379 竖穴住居—90·92出土土器 (1/3·1/5)
- 图版380 竖穴住居—92·99出土土器 (1/3)
- 图版381 竖穴住居—99出土土器 (1/3)
- 图版382 竖穴住居—104·106出土土器 (1/3·1/4)
- 图版383 竖穴住居—107·109·111出土土器
 (1/3·1/4)
- 图版384 竖穴住居—111出土土器 (1/3·1/4)
- 图版385 竖穴住居—114·115·116·117
 出土土器 (1/3·1/4)
- 图版386 竖穴住居—117·118出土土器 (1/3·1/4)
- 图版387 竖穴住居—118出土土器 (1/3)
- 图版388 竖穴住居—118·119·121出土土器 (1/3)
- 图版389 土坑—111·116·129·139出土土器
 (1/3·1/4)
- 图版390 土坑—139出土土器 (1/3)
 土坑墓—4出土土器 (1/3)
 土器棺墓—7·8出土土器 (1/3·1/4)
- 图版391 沟—4出土土器 (1/3·1/4)
- 图版392 沟—4出土土器 (1/4)
- 图版393 沟—4出土土器 (1/3·1/4·1/5)
- 图版394 沟—4出土土器 (1/3)
- 图版395 沟—4出土土器 (1/3)
- 图版396 沟—4出土土器 (1/3)
- 图版397 沟—4出土土器 (1/3)
- 图版398 沟—4出土土器 (1/3)
- 图版399 沟—4出土土器 (1/3)
- 图版400 沟—4出土土器 (1/2·1/3·1/4)
- 图版401 沟—4出土土器 (1/3·1/4·1/5)
- 图版402 沟—16出土土器 (1/3·1/4·1/5)
- 图版403 沟—16出土土器 (1/4·1/5)
- 图版404 沟—16出土土器 (1/3·1/4·1/5)
- 图版405 沟—16出土土器 (1/4·1/5)
- 图版406 沟—16出土土器 (1/4)
- 图版407 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版408 沟—16出土土器 (1/3·1/4)
- 图版409 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版410 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版411 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版412 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版413 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版414 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版415 沟—16出土土器 (1/3)
- 图版416 沟—16出土土器 (1/3·1/4)
- 图版417 沟—16出土土器 (1/3·1/4)
- 图版418 沟—16出土土器 (1/3·1/4·1/5)
- 图版419 沟—16出土土器 (1/3)

- 図版420 溝-16出土土器 (1/3・1/4・1/5)
- 図版421 溝-16出土土器 (1/3・1/4)
- 図版422 溝-17出土土器 (1/3・1/4・1/6)
- 図版423 溝-17出土土器 (1/3・1/4・1/5)
- 図版424 溝-17出土土器 (1/3・1/4)
- 図版425 溝-17出土土器 (1/3)
- 図版426 水田出土土器 (1/3・1/4)
- 図版427 水田出土土器 (1/3)
- 図版428 水田出土土器 (1/3)
- 図版429 水田出土土器 (1/3)
- 図版430 包含層出土土器 (1/3・1/4)
- 図版431 溝-27・28出土土器 (1/2・1/6)
- 土城-166出土土器 (1/2)
- 包含層出土土器 (1/2)
- 図版432 中屋調査区出土石器 1 (1/2)
- 中屋調査区出土石器 2 (1/2)
- 図版433 中屋調査区出土石器 3 (1/2)
- 図版434 中屋調査区出土石器 4 (1/2)
- 中屋調査区出土石器 5 (1/3)
- 図版435 中屋調査区出土土製品 1 (1/2)
- 中屋調査区出土土製品 2 (1/2)
- 図版436 中屋調査区出土土製品 3 (1/2)
- 中屋調査区出土土製品 4 (1/2)
- 図版437 中屋調査区出土土製品 5 (1/2)
- 中屋調査区出土土製品 6 (1/4)
- 図版438 中屋調査区出土銅鏡 (1/1)
- 中屋調査区出土玉類 (1/1)
- 図版439 中屋調査区出土金属製品 1 (1/2)
- 中屋調査区出土金属製品 2 (1/2)

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

1. 足守川流域の地形

岡山県南部の中央を流れる足守川は吉備高原に源を発し、その流域に谷底平野を形成する。中流域の西岸には、標高223mの仕手倉山と302mの福山を中心とした山地が東北東から西南西にかけて連なる。その傾斜は北に比べて南が緩やかで、非対象の山容をなす。その北側に広がる標高40～70mあまりのなだらかな都窪丘陵は、主として白亜紀末の花崗岩・閃緑岩の深成岩からなるが、清音付近には古生層が認められる。この古生層を貫くように、古第三紀に貫入した流紋岩の岩脈が三因から矢部にかけて走っており、「郷境」となる丘陵を形作っている。また、矢部や砂原の丘陵斜面には扇状地が発達し、縄文時代～古墳時代の生活の場として利用されている。足守川の東岸に位置する中山丘陵は、標高の162mの起伏にとんだ孤立丘陵で、ホルンフェルス化して灰緑色をなす砂岩・泥岩などの古生層で形成されている。花崗岩類からなる丘陵に比べて谷密度は低いが、ここでも北麓を中心に扇状地が発達しており、縄文時代以来の集落が営まれている。北には、白亜紀の花崗岩類からなる地形が広がっている。北東には、標高285mの竜王山を中心とする足守丘陵地が広がり、北西には標高403mの鬼城山の前面に総社丘陵地が続く。こうした丘陵の頂部には、数多くの墳丘墓や古墳が立地している。

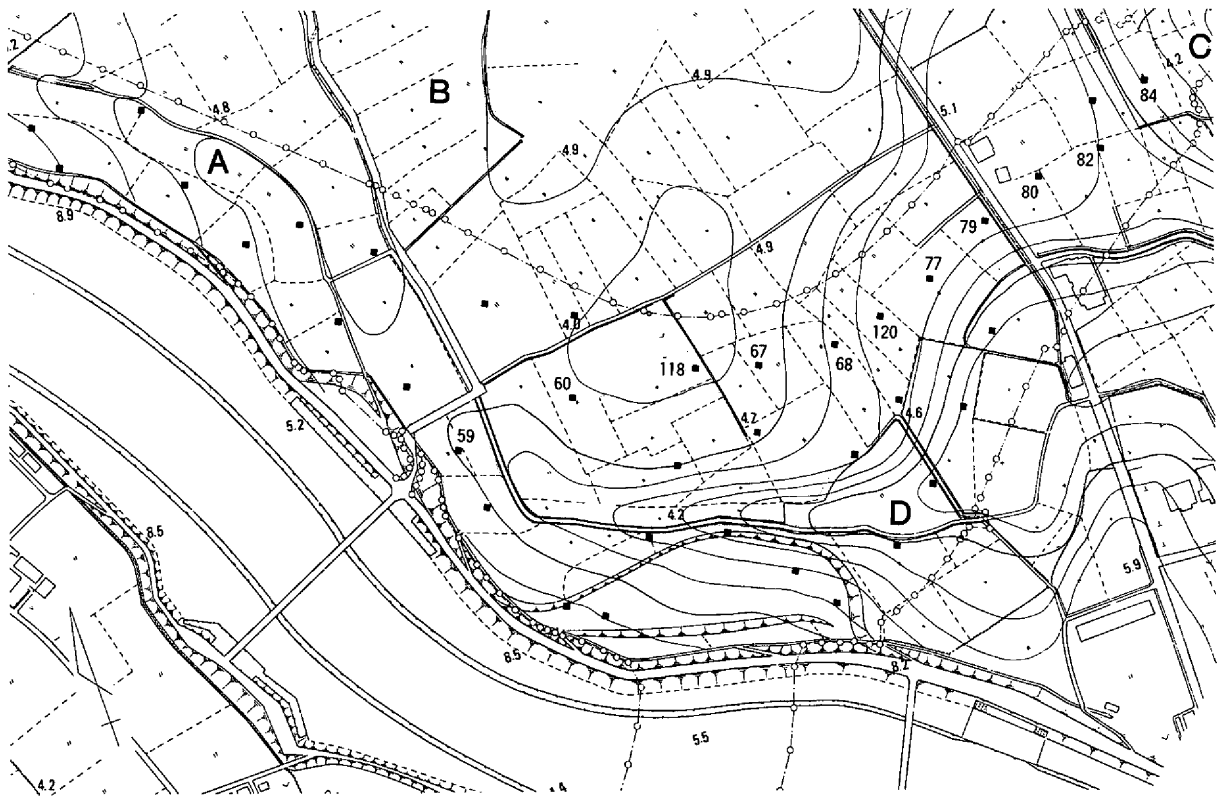
さて、足守川中流域に広がる幅2kmの平野部は谷底平野に分類されるが、沖積層の厚さは5～10mと旭川流域に比べ比較的浅い。現在では圃場整備や宅地開発によって判読が難しいが、大縮尺の地形図や航空写真を参照すると、網目のように走る旧河道やその縁辺に形成された自然堤防の痕跡を見出すことができる。自然堤防上には弥生時代から集落が営まれており、現在においても伝統的な集落はこの地形面に立地している。また、こうした自然堤防の背後に広がる氾濫原では、最近工場や住宅の進出が著しいものの、その大半は現在でも水田として利用されている。この地域の水田の多くは乾田に分類されるが、河道跡が低位部として残る加茂や新邸、立田付近、あるいは低位部が新たに築かれた堤防によって遮断される新庄や黒住などは、湿田や半湿田として残されている。

ところで、網目のように走る河道のうち、その本流をなすのは高梁川の東分流であった。これは、津寺遺跡や政所遺跡の北を通過して板倉に至り、東山に向けて南流するもので、その上幅は100mにも及ぶことが発掘調査によって明らかとなっている。この河道は平家物語に現れる板倉川に相当し、現在の加茂用水はほぼその流路に沿って走っている。板倉川の廃川時期については明らかではないが、太平記にもその名がみえるところから、少なくとも中世前半までは存在したことが知られる。また、津寺遺跡と三本木遺跡を隔てている河道は、一軒屋遺跡の東で東に向きを替え、加茂城を迂回して南流している。加茂城がこの河道を防御として利用していたことを考えれば、少なくとも中世末までは何らかの形で機能していた可能性がある。このように、津寺遺跡の周辺には多くの河道の痕跡が認められ、現在では想像できないほど起伏に富んだ地形であったことがわかる。これは生活の場として好適な環境を生み出した反面、条里のような広域な開発を遅らせた一因となったものと考えられる。

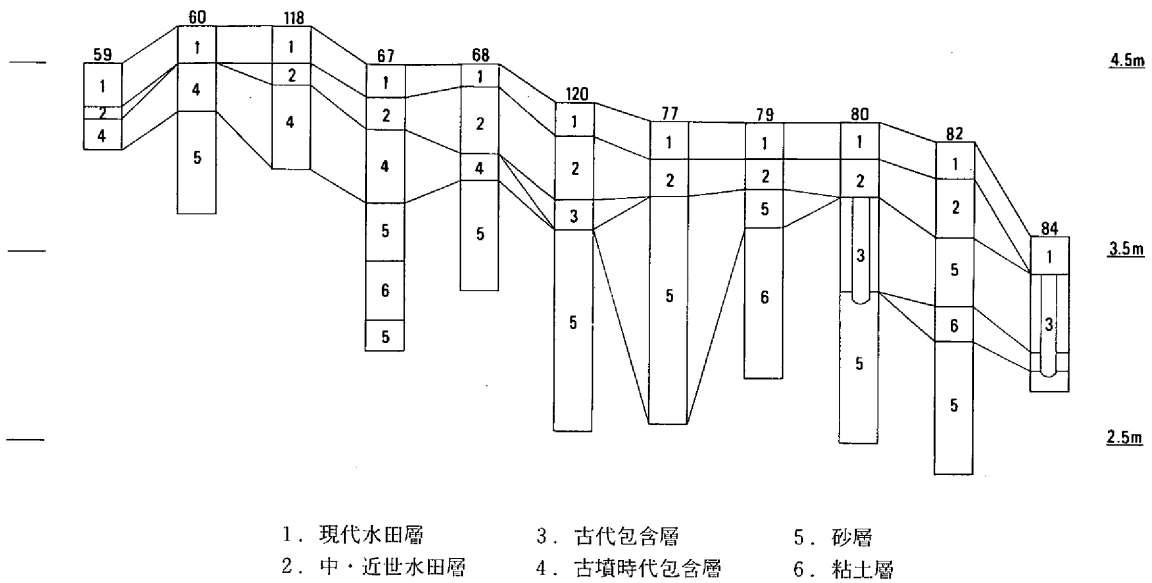
2. 津寺遺跡周辺の微地形

津寺遺跡が立地する岡山ジャンクション周辺は、標高4m前後の水田が広がっている。この地点を10cmの等高線で表したものが第1図である。これによると、ジャンクションの中央北側に標高4.7mを最高とする南北200m、東西150mの楕円形をなす微高地が想定される。その西側は、丸田から野上田にかけて続く幅60mの旧河道Aによって区切られている。この河道内の堆積からは古代に遡る遺物が出土しているが、上部に中世の集落が展開していることが二次調査によって明らかにされており、少なくとも古代段階まで機能していたものと思われる。また、そのすぐ東側を南西に向かって延びる幅140mの河道Bは、微高地の北端に築かれた7世紀に遡る護岸施設によって遮断されており、古墳時代後半に機能していた河道の痕跡と推定される。微高地の東端を区切る低位部Cは、古墳時代前期に水田であったものが、後期に至って微高地化したものであることが発掘調査によって明らかにされている。また、微高地の南には北西から南東に延びる狭い低位部Dが見られるが、発掘調査の結果、中世の水路跡であることが判明した。

このように、津寺遺跡周辺の微地形分析によって、集落の立地する微高地とその縁辺に広がる低位部や河道の痕跡をとらえることができたが、それらが機能していた時期はそれぞれ異なっていることが発掘調査によって明らかにされた。(亀山)



第1図 津寺遺跡周辺微地形図 (1/10,000)



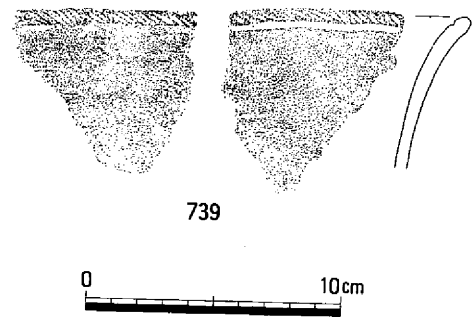
第2図 第一次調査土層断面図 (1/40)

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代～縄文時代

この地域における最初の人類の足跡は旧石器時代まで遡る。甬崎天神山遺跡で出土したナイフ形石器は、かつて日差山山塊に生活の場を求めた人々がいたことを物語っている。

縄文時代になると、矢部伊能軒遺跡や矢部奥田遺跡で早期の押型文土器が出土しているが、集落の痕跡が確認できるのは中期後半以降のことである。この時期には山麓の緩斜面を中心に甬崎天神山遺跡（後期後半～晚期前半）・矢部貝塚（中期後半～後期前半）・西尾貝塚（後期）・山地貝塚・大内田貝塚（中期）などが知られている。津寺遺跡でも後期後半の土器が出土しており、この時期に低地への進出がはじまったことがうかがわれる。



第3図 基盤層出土の縄文土器 (1/3)

2. 弥生時代

弥生時代になると、沖積地に大規模な集落が営まれるようになる。前期にはじまる集落は、今のところ岩倉遺跡・新邸遺跡・津寺遺跡などが知られている。中期になると、上東遺跡・高田遺跡・政所遺跡・前池内遺跡など、その数は飛躍的に増加する。これらの集落の多くは古墳時代にも継続して営まれているものが多い。その一方で、この時期の末には矢部大塚遺跡のように丘陵頂部に立地する短期間の集落も認められる。後期の集落では、高塚遺跡の銅鐸や貨泉、政所遺跡の銅釧、矢部南向遺跡



- | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 矢部奥田遺跡 | 9. 高田遺跡 | 17. 鯉喰神社遺跡 | 25. 小造山古墳 | 33. 大崎廃寺 |
| 2. 矢部伊能軒遺跡 | 10. 矢部南向遺跡 | 18. 楯築遺跡 | 26. 新池大塚古墳 | 34. 二子御堂奥窯跡 |
| 3. 西尾貝塚 | 11. 加茂A遺跡 | 19. 矢部大塚古墳 | 27. 王墓山古墳 | 35. 御堂奥廃寺 |
| 4. 上東遺跡 | 12. 津寺遺跡 | 20. 中山茶臼山古墳 | 28. 二子14号墳 | 36. 賀陽氏居館跡 |
| 5. 岩倉遺跡 | 13. 政所遺跡 | 21. 小盛山古墳 | 29. 日畑廃寺 | 37. 日幡城 |
| 6. 新邸遺跡 | 14. 高塚遺跡 | 22. 佐古田堂山古墳 | 30. 惣爪廃寺 | 38. 加茂城 |
| 7. 川入遺跡 | 15. 浦尾遺跡 | 23. 造山古墳 | 31. 津舘駅推定地 | 39. 天神山城 |
| 8. 東山遺跡 | 16. 雲山鳥打遺跡 | 24. 折敷山古墳 | 32. 都宇郡衙推定地 | 40. 三本木知行所 |

第4図 津寺遺跡周辺遺跡分布図 (1/40,000)

の小銅鐸や銅鏡など、舶載品を含む多量の青銅器の出土が認められ、後に吉備と呼ばれる地域の中核を形成していたことがわかる。それはまた、楯築遺跡や鯉喰神社遺跡・雲山鳥打遺跡・浦尾遺跡など平野を取り巻く丘陵上に築かれた墳丘墓の存在からもうかがわれる。ことに楯築遺跡は、長径30mの円丘の両端に狭長な突出部を備えた当時としては最大規模の墳丘墓で、主体部は排水溝を備えた木郭に木棺を納める特異な構造をとる。また、墳頂やその周囲には立石や特殊器台をめぐらすなど、従来の墓制には見られない特徴を備えており、傑出した首長の存在がうかがわれる。その被葬者は、特殊器台に象徴される祭式を共有した諸集団の中心的位置を占めていたものと推測され、以後造山古墳へと繋がる首長系譜の先駆けをなすものと考えられる。

3. 古墳時代

この地域における最古の前方後円墳には、特殊器台形埴輪をもつ中山茶臼山古墳(全長120m)や撥形の前部を備えた矢部大塚古墳(全長40m)などがあるが、13面の三角縁神獣鏡を副葬する車塚古墳(全長48m)や箸墓古墳の1/2規模墳である浦間茶臼山古墳(全長140m)が築かれた備前南部と比較してその数は少ない。しかし、加茂A・B遺跡や津寺遺跡の状況からすればこの地域が他地域との交流の拠点であったことは疑いようがなく、なおかつ箸墓古墳をはじめとする出現期の古墳に備中の特殊器台が持ち込まれていることからすれば畿内の首長との直接的な交流を想定すべきである。むしろこの地域における初期の古墳の僅少性は、畿内をはじめとする他地域との交流を独占し、他の造墓活動を規制しようとする有力な首長の存在を反映しているのではなかろうか。これに続く尾上車山古墳は狭長な前部をもつ全長135mの前方後円墳で、湊茶臼山古墳や牛窓天神山古墳と類似した形態を取るとともに、臨海性の立地においても共通している。ところが前期後半になると、首長墳の立地は内陸部へと移る。大平山の一支丘に築かれた佐古田堂山古墳は、2段に築成された全長150mの前方後円墳であるが、埴輪の使用は認められない。この時期の備前南部には全長165mの金蔵山古墳が築かれているが、網浜茶臼山古墳から続いた大形前方後円墳の築造はこの古墳をもって途絶える。前期の集落は、津寺遺跡のほか加茂A・B遺跡、矢部南向遺跡、政所遺跡、高塚遺跡、上東遺跡などがある。特に津寺遺跡では数百軒の竪穴住居が営まれており、この時期に最盛期を迎えている。

佐古田堂山古墳につづいて築かれる造山古墳は、全長360mといわれる吉備最大の前方後円墳で、ほぼ同規模の大阪府石津丘古墳との関係が指摘されている²。この古墳と同時期の大型前方後円墳はこれまで知られておらず、これを頂点とする古墳秩序の存在が想定されている³。これに続く首長墳には作山古墳や寺山古墳があるが、いずれも総社平野の南部に移り以後足守川中流域に築かれる大型の首長墳は全長142mの小造山古墳を最後に姿を消す。中期の集落には、高塚遺跡や津寺遺跡がある。これらの集落はカマドをつくりつけた竪穴住居で構成されており、朝鮮半島系の遺物出土するものも見られる。また、奥ヶ谷遺跡では陶質土器の生産が行われており、渡来系の氏族が居住していた可能性を示唆している。このことは後の文献からもうかがわれるが⁴、その背景に造山古墳の存在があったことは、その陪塚である榊山古墳に朝鮮半島系の遺物の出土をみることを思えば容易に理解できる。

後期にはいと、平野をとりまく丘陵上には大崎古墳群や矢部古墳群、王墓山古墳群といった数多くの群集墳が造営される。また、こうもり塚古墳(全長約100m)のような後期としては大型の前方後円墳の築造も見られるようになり、横穴式石室の導入を契機とした古墳秩序の再編成が想定されている。この地域にあっても、大型の横穴式石室に浪形石製の家形石棺を納め装飾付馬具を副葬した王墓

山古墳(全長25m)があり、その中心的な役割を担っていたものと推測される。しかし、全長45mの江崎古墳を最後に、この地域では古墳の築造が衰退していくが、その一方で二子14号墳のような外護列石をめぐらす2段築成の方墳(全長13m)も築かれている。また、これと相前後して大崎廃寺、日畑廃寺などの古代寺院の造営が始まる。これらの立地には群集墳との対応関係が見られ、在地の首長の中には中央政権に官人としてとりこまれるとともに、いち早く新来のイデオロギーを受容した人々が存在したことを示している⁵。ところで、二子御堂奥窯跡ではこれらの寺院に供給された瓦の生産が行われているが、その瓦は備中式と呼ばれる特色をもち、壬申の乱における吉備の役割と、その後の吉備分割へとつながる政治的動向を反映するものとして注意されている⁶。この時期の集落には前代から継続して営まれるものがある一方で、新たに形成された微高地に進出する分村的な集落も数多く見受けられる。ことに、窪木薬師遺跡では鉄器の生産が行われており、集落の拡大・拡散の背景にはこうした分業の発達を背景とする可耕地の拡大があったことが知られる。

4. 奈良時代～平安時代

律令体制の整備とともに、この地域も板倉川を境として北の加夜郡(評)、南の都宇郡(評)に分けられた。都宇郡は4つの郷からなる小郡で、津寺遺跡一帯は河面郷に属していたものと推定される⁷。都宇郡の郡衙は現在のところ明らかではないが、加茂地内の幸利神社一帯に比定する向きもある⁸。この場所のすぐ南には古代山陽道が推定されており、これに南面する水田中には惣爪廃寺の塔心礎が残る。その寺域や伽藍配置などは不明であるが、天平11年の大税負死亡人帳にみえる津氏の氏寺、あるいは都宇(津)郡の郡衙にかかわる寺院とする考えもある。惣爪廃寺から足守川を西に渡ると、津岷駅に比定される矢部遺跡がある⁹。ここから出土している平城宮式の軒瓦は、備中の「国府系瓦」として小田駅に比定される毎戸廃寺や国分寺・国分尼寺、泊に関わる施設に擬せられる川入遺跡などでも用いられている¹⁰。この時代の集落については不明な点が多いが、東山遺跡や矢部南向遺跡、津寺遺跡などで掘立柱建物により構成される集落が見つまっている。また、黒住・雲山遺跡などの丘陵裾部でもこの時期の遺物が出土しており、小規模な集落が営まれていた可能性がある。これに近接する前池内古墳群や甫崎古墳群ではこの時期に横穴式石室へ火葬骨を納める追葬がみられ、この地域に根差した官人層の墓と見られる。

律令体制の衰えとともに、この周辺でも足守庄・生石庄といった荘園の経営がはじまっている。政所遺跡は、その名からも荘園とのかかわりが想定されるもので、実際に緑釉陶器や墨書土器、風字硯などの出土を見ている。また、ここでは多量の平安前期の瓦とともに梵鐘の鑄造跡も見つかっていて、荘家にかかわるような小規模な寺院が存在していたものと思われる。なお、これと同様な寺院跡は、政所遺跡と同範の軒瓦を出土している大内田廃寺や御堂奥廃寺など周辺の丘陵部に散見される。また、日差山の山頂近くにある日差寺は、報恩太師開基の伝承をもつ天台宗の山上寺院で、寛永12年、法華改宗を迫った戸川氏に抗して山上の寺地を捨て廃寺となったが、かつては大伽藍を備えた密教寺院であったという。また、吉備津神社が文献に現れるのもこのころである。吉備津神社は吉備津彦の廟所として崇敬をあつめたが、中世においてはこの地域を支配する有力な領主であった。この吉備津神社に神官として仕えた賀陽氏は賀陽郡を本貫とする氏族で、「善家異記」によればその大領を務めていたことが知られる。また、賀陽豊年・真宗などの学者を輩出しており、臨濟宗の祖である栄西もその一族であるという。東山遺跡の北には賀陽氏のものと伝えられる居館跡が現在も残っている。

5. 鎌倉時代～室町時代

長く平家の勢力下にあった備中は、その滅亡後、院の近臣が国守に任じられる一方で、土肥実平のような有力御家人が守護として配された。承久の乱後は一時幕府の料所となったが、その後北条得宗家領となっていく。鎌倉時代におけるこの地域の動向は、東大寺再興のための料所とされた備前と比べれば必ずしも明らかではないが、吉備津常行堂を根拠に勧進僧重源の活躍が伝えられており、この地域においてもその宗教的な影響が及んでいたものと思われる。また、東大寺領となった備前国野田荘との争論に加茂荘の名が見えるなど、この地域とのかかわりを伝える資料も残されている。鎌倉幕府滅亡から南北朝に至る動乱において、この地域は度々その抗争の舞台となり、幾多の戦いが繰り広げられた。ことに、福山城の合戦では新田氏のもとに活躍した多くの国人の名が見える。この時代の集落としては三手遺跡や川入遺跡、東山遺跡、高塚遺跡などが知られているが、その構成については必ずしも明らかではない。しかし、墓の中には輸入磁器などの副葬品をもつものがあり、農民層のなかにも階層の別が存在したことをうかがうことができる。

室町時代の備中は、当初足利一門が守護に任じられていたが、南北朝合一後は細川氏の領国となり、以後幸山城に拠る守護代石川氏の支配するところとなる。一時、庄元資の反乱などもあったが、赤松氏と山名氏の抗争に明け暮れた備前に比べれば比較的安定した政治状況にあった。しかし、応仁の乱を契機に細川氏の領国支配が弱まるにつれ国人の台頭が目立つようになり、この周辺でも禰屋氏・日幡氏・生石氏・高塚氏などの活躍が伝えられている。天正3年(1575年)、備中守護代石川氏は、三村氏とともに毛利氏に攻められて滅亡し、この地は毛利氏の支配下に置かれた。しかし、中国の支配を目指す織田氏との争いがこの地をめぐる行われ、日幡城や加茂城はその合戦の舞台となった¹²。この戦いが織田方の勝利に終わると、この地域はいち早くこれに与した宇喜多氏の領有に帰し、その家臣である花房氏の支配するところとなった。この地域における宇喜多氏の治世については明らかでないが、足守川の築堤がこの時期と考えられることからすれば何らかの開発がここでも進められていたものと思われる¹³。元和の時点で、花房家が加茂村に703石もの開田に成功している事実は、こうした先行する開発によるところが大であったに違いない。室町時代の集落は、津寺遺跡土筆山調査区や三手向原遺跡、高塚遺跡などがあるが、これらのなかには周囲を溝で区画した屋敷が現れている。区画内には数棟の建物や井戸、墓を備えており、国人へと成長して行く自立した農民層の姿を彷彿とさせる。

6. 江戸時代以降

家中騒動を契機に宇喜多家を退転した花房職之は、関ヶ原戦後この地を所領として与えられたが、その死後は次男榊原職直にその遺領が分知され、三本木に知行所を開いた。しかしその運営は、専ら花房家の高松知行所に配された2名の代官に委ねられていた¹⁴。当初、加茂村において800石を分知されていた榊原領は、正保の時点で加茂村から558石、新庄村から242石に変更されており、花房氏との間で所領の再分配が行われたものと推測される¹⁵。新庄村の枝村であった黒住などはこの際に編入されたようで、現在のように足守川を越えて広がる津寺村はこれらをもとにして成立したものと思われる。ところで、津寺村は「寛永備中国絵図」に村高32石余の加茂の枝村と記されているが、宝永年間には村高812石を数える本村となり、以後この村高が踏襲されている。近世津寺村の成立には、旗本領の分知という政治的な要因も働いているものと思われるが、その背景には江戸中期以降急速に進んだ開

発があったものとみられ¹⁶、このことは発掘調査の結果からも裏付けられるところである。

明治維新後は倉敷代官所支配となるが、明治3年には足守藩の管轄とされた。明治4年の廃藩置県後は深津県の所管に移り、翌年には小田県と改められた。当時この地域は第14大区小26区と呼ばれたが、明治11年に大小区制廃止の後は岡山県都窪郡津寺村に改められ、明治22年には加茂・新庄上・新庄下・惣爪村と合併して加茂村となる。そして、昭和30年には高松町・生石村と合併して吉備郡高松町となり、昭和46年には岡山市に編入されて現在に至っている¹⁷。発掘調査の端緒となった山陽自動車道の建設は、この地域におけるさまざまな開発を促進し、かつて一面に広がっていた緑なす沃野にかえて、近郊地としての新たな景観を形作りつつある。 (亀山)

註1. 近藤義郎「橋築弥生墳丘墓の研究」1992

2. 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究154』1992

3. 葛原克人「大古墳」『えとのす25』1984

4. 天平11年の大税負死亡人帳には、秦人部・史戸・東漢人・西漢人・忍海漢部といった渡来系氏族の名が記されており、これらが占める割合は40%を越える。

直木孝次郎「吉備の渡来人と豪族」『岡山の歴史と文化』1983

5. 亀山行雄「7世紀の古墳」『吉備の考古学的研究(下)』1992

6. 伊藤晃「備中式瓦について」『古代97』早稲田大学考古学会、1994

7. 平城京二条大路出土木簡には、「備中国都宇郡中男作物楡蟹二斗九升 天平九年十一月」とあり、楡として蟹を納めていたことが知られる。

「平城宮発掘調査出土木簡概報22」奈良国立文化財研究所、1990

8. 千田稔「埋れた港」1974

9. 津嶋は「ツサカ」と訓まれ、窪屋郡へ至る峠道を指すものと見られる。この地において備中の「国府系瓦」とも言うべき平城宮6225・6663型式の軒瓦を出土する矢部遺跡はその有力な候補である。

10. 中野雅美「吉備における平城宮型式瓦について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会、1977

11. 賀陽清仲が生石荘の荘官を務めていたことが、「嘉応2年8月9日生石荘田堵散位賀陽清仲解」によって知られる。

12. 小早川方が布陣した甬崎天神山城は、発掘調査によって丘陵頂部に造成された主郭の周りに複数の郭面を配した構造が明らかとなっている。

宇垣匡雅ほか「甬崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994

13. 矢部南向遺跡では、堤防下から15世紀末の集落が検出されており、築堤の上限がこの時期にあることを示している。また、関ヶ原の戦以後、この地域が複数の旗本領に分割されている状況を考えれば、統一的な土木事業が容易であったとは思われない。むしろ、高松城の水攻めに用いられた上方の先進的な築堤技術を学んだ宇喜多氏によって、こうした工事がなされたと見るべきであろう。

江見正巳「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

14. 「備中国御蔵入并御給所」『岡山県史 近世Ⅱ』岡山県、1985

15. これは、12ヶ郷用水の水掛りに、花房家の本田に代わって榊原家の新田を当てる意図から出ており、「慶長年中湛井懸り高書付写」に津寺村の名が見えるのはこうした理由によるものであろう。

「岡山県土木史」1956

16. 都宇郡内の石高は元禄～享保年間で2割の増加を見ており、江戸時代において最大の伸び率を示す。

註15文献

17. 郷土誌編集委員会「郷土誌たかまつ」1971

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

1. 既往の調査

津寺遺跡一帯は古くから土器の散布が知られており、吉備考古館にはその一部が収蔵・展示されている¹。

昭和47～56年に、岡山市教育委員会によって行われた分布調査によって、長田から政所、一軒屋にわたる広範囲に遺跡が広がっていることが確認された²。昭和54年には、その北に接する三手遺跡で庄内幼稚園の建設に伴う発掘調査が実施され、古墳時代～中世の集落跡が確認された³。また、津寺遺跡の西を流れる足守川の河床では、河川改修工事に伴って昭和55～63年にわたり加茂A・B遺跡、矢部南向遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代～中世の集落跡が検出された。この調査では、弥生時代の小銅鐸や小形銅鏡などの青銅器をはじめ、特殊器台やト骨、多量の搬入土器など、この地域の特殊性を示す遺物が多数出土した⁴。昭和63年には、津寺遺跡の南に接する加茂小学校で校舎建設に伴う発掘調査が岡山市教育委員会によって実施された。ここでも弥生時代～中世の集落跡が検出されたが、とくに古墳時代後期の竪穴住居が多数検出されて注目を集めた⁵。さらに、津寺遺跡の調査が行われていた平成元～3年には、津寺地内を南北に走る県道大内田高松線の改良工事に先立って津寺三本木・一軒屋遺跡の発掘調査が実施され、弥生時代～中世にわたる遺構が確認された⁶。こうして、従来足守川下流域に比べてその実態が詳らかではなかったこの地域においても、弥生時代～中世にわたる多くの集落遺跡が存在することが明らかとなっていった。

山陽自動車道は、昭和46年に基本計画が策定され、その翌年にはルートが発表された。これをうけた岡山県教育委員会では、昭和47年に国庫補助をうけて遺跡保護調査団の協力のもとに分布調査を実施し、181箇所⁷の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後、路線変更も行われたが、最終的に決定された倉敷～岡山間の路線内には、なお津寺遺跡をはじめとする27箇所⁸の埋蔵文化財包蔵地が含まれていた。このため、日本道路公団は昭和59年10月に文化庁長官あて文化財保護法第57条の3に基づく通知を行い、以後その取り扱いについて協議を行うこととなった⁷。

2. 第1次調査

山陽自動車道の建設に先立ち実施された分布調査によって、ジャンクション部分に広域な散布地が存在するものと推定された。このため、遺跡の範囲とその構造を把握することを目的として、昭和61年12月～昭和62年2月にわたり第1次調査を実施することとなった。調査は、北に連なる三手遺跡とあわせて、2×2mのグリッドを82箇所設定し掘り下げを行った。その結果、三手から津寺に至る路線のほぼ全面に弥生時代～中世の遺構が確認された⁸。これをうけた文化課は、遺跡の取り扱いについて道路公団と数度にわたり折衝を重ねたが、現時点での路線変更は困難であり、記録保存とせざるをえないとの結論に達した。しかしながら、151,000㎡にも及ぶ遺跡の調査は、かつて例のないことであり、調査人員の確保や調査条件の整備など、さまざまな困難が予想された。しかも、平成4年の供

用開始にあわせて短期間のうちに調査を終了させることは極めて難しいものと思われた。したがって、調査の対象となる面積を極力限定することとし、文化庁とも協議を重ねた結果、盛土の薄いジャンクション中央の植栽部分や仮設道については地下の遺構に及ぼす影響が軽微であるものと判断されたため、これを除く87,000㎡を調査対象として昭和63年度から第2次調査に入ることとなった。

しかし、調査が進行する中で古代の護岸施設や官衙跡が確認されるなどして津寺遺跡の重要性に対する認識が深まり、植栽部分についても調査対象とするよう遺跡保護調査団から要望がなされるに至った。このため岡山県教育委員会は、当面この部分にジオグリッドを敷設するなどして土圧の軽減や不等沈下の防止を図り、後年次に調査を実施することで日本道路公団と了解に達した。なお、仮設道部分については、平成6年度に三手遺跡において一部調査を実施している。

第2節 調査の目的と方法

1. 調査の目的と方法

第2次調査は、1次調査によって明らかとなった津寺遺跡の範囲のうち、山陽自動車道の建設によって地下の遺構に何らかの影響を及ぼすと考えられる橋脚ならびに本線盛土部分を対象として実施した。この調査は、開発にともなう事前調査という性格上、記録保存を前提としたものとならざるを得なかったが、調査の結果その重要性が明らかとなった護岸施設については、現状のまま埋め戻すなどして保存措置が講じられた。

調査は工事と競合して実施したため、調査区の設定も工事工程にあわせることとなり、グリッドや現地割りなどに応じた形とはなっていない。このことは、やむを得ないことではあったが、調査全般にわたって多大な犠牲を強いる結果となった。調査にあたっては、まず調査員の指示の下に重機によって耕作土を除去した後、人力により遺構の検出・掘り下げを行った。その際、排土の運搬には騒音等に配慮して電動ベルトコンベアーを使用した。また、湧水や雨水の排出には排水ポンプを用いたが、その使用にあたっては沈砂池を設けるなどして用水への土砂流入を防止した。作業員は、従来から地元住民の協力をもとに募集を行って来たが、調査規模の拡大と共に地元での確保が困難となったため、総社市西部から岡山市北部にわたる通勤用のバス路線を独自に設定するなどして、その確保に努めた。

検出した遺構の測量は、国土地理院第5座標系に基づき、 $X = -145400$ 、 $Y = -48700$ を起点とする100mのグリッドを設定したうえ、これを10mの小区画に分割して行った。また高度は、一等水準点を基準として海拔高を使用した。これらの基準杭の設定は、当初業者に委託していたが、平成元年からは土木部から技師の出向を仰いでこれに対応した。写真撮影には工事用の足場を組み立てて使用したが、転落・倒壊による事故を防止するため随時航空撮影を行った。これら調査の記録には主に調査員があたり、調査補助員がこれを補佐した。

2. 調査の体制

昭和63年度における山陽自動車道関連の調査は、岡山県古代吉備文化財センターの調査2課が受け持ち、調査員33名がこれに専従することとなった。このうち9名は教員から、2名は県土木部からの出向である。また、備前市教育委員会から専門職員1名の出向を仰ぎ、倉敷市教育委員会、総社市

教育委員会からも随時協力を得た。調査は、これらの調査員3名を一組として11班を編成し、甬崎天神遺跡以東の3遺跡の調査にあたった。なお、この年度から調査補助員が8名採用され、調査実務を補助することとなった。

平成元年度には、岡山県古代吉備文化財センターに調査3課が新設され、山陽自動車道関連の調査のうち高塚遺跡と政所遺跡の調査を担当することとなった。津寺遺跡の調査を担当する調査2課では、教員11名・土木部職員1名の出向を含む調査員27名を配置し、9班を編成して調査にあたった。

平成2年度も、調査2課に調査員24名を配置し、7班を編成して津寺遺跡の調査にあたった。このうち教員出向は10名、土木部出向職員は1名である。これらの調査にあたっては、遺跡保護調査団から推薦を受け、本事業に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を委嘱して指導・助言を得た。

以上の体制をもって3カ年にわたる調査を行い、多大な困難に遭遇しながらも、地元住民をはじめ日本道路公団など関係機関の協力を得て、かろうじて完了することができた。

津寺遺跡の発掘調査体制（昭和63年度～平成2年度）

昭和61年度（1986年度）

岡山県教育委員会					
教 育 長		宮地暢夫	教 育 次 長		石井敏雄
文 化 課	課 長	高橋誠記	文 化 課	文化財保護主査	山磨康平
	課 長 代 理	逸見英邦		主 任	仁宮秀博
	係 長	正岡睦夫			
岡山県古代吉備文化財センター					
所 長		橋本泰夫	調 査 課	課 長	河本 清
総 務 課	課 長	佐々木清		文化財保護主査	井上 弘
	主 査	遠藤勇次		文化財保護主任	浅倉秀昭・中野雅美
	主 任	花本静夫		主 事	亀山行雄・大智 浩

昭和63年度（1988年度）

岡山県教育委員会							
教 育 長		竹内康夫	教 育 次 長		前 亮治		
文 化 課	課 長	吉尾啓介	文 化 課	主 査	藤川洋二		
	課 長 代 理	河野 衛					
	課 長 補 佐	伊藤 晃					
岡山県古代吉備文化財センター							
所 長		水田 稔	調 査 課	2 係	係 長	松本和男	
総 務 課	課 長	佐々木清			文化財保護主査	岡田 博・浅倉秀昭	
	総 務 主 幹	藤本信康			文化財保護主任	栗尾昭和・垣内一也 井上 篤	
	主 任	花本静夫・岡田祥司 片山淳司			文化財保護主事	片山泰輔	
	主 事	葛原克人		主 事	佐守 学・澤山孝之 柴田英樹・弘田和司		
調 査 2 課	課 長 補 佐	正岡睦夫		3 係	主 事	係 長	高畑知功
	文化財保護主幹	小柴充明				文化財保護主査	福田正継
		山磨康平・二宮治夫 吉田正士				文化財保護主事	光永真一・広瀬隆明
	文化財保護主任	中野雅美・川崎 肇				主 事	田代健二・小松原基弘 飯島賢治・佐伯英樹 谷岡孝久
	文化財保護主事	小田卓生・福田計治					
	主 事	亀山行雄・大橋雅也					
主 事	後藤信義						

第2章 調査の契機と経過

平成元年度 (1989年度)

岡山県教育委員会											
教 育 長		竹内康夫		教 育 次 長		竹本博明					
文化課	課 長		吉尾啓介 (～11/30) 鬼澤佳弘 (12/1～)		文化課	課 長 補 佐		伊藤 晃			
	課 長 代 理		河野 衛			主 査		藤川洋二			
岡山県古代吉備文化財センター											
所 長		長瀬日出明									
総務課	課 長		竹原成信			調 査 係	係 長		高畑知功		
	総務係	課 長 補 佐		藤本信康			文化財保護主任		中野雅美・島崎 東		
		主 任		岡田祥司・平松郁男 片山淳司			文化財保護主事		福田計治・山本了峰		
調査課	1 係	課 長		葛原克人			主 事		村田秀石・石黒 勉		
		課 長 補 佐		井上 弘					後藤信義・土井一行		
		文化財保護主査		二宮治夫・林 久夫 吉田正士			係 長		岡田 博		
		文化財保護主任		光永真一・源 俊二			文化財保護主任		井上 篤		
		文化財保護主事		広瀬隆明・安井 悟			文化財保護主事		片山泰輔・亀山行雄		
主 事		大橋雅也			主 事		澤山孝之・柴田英樹 古市秀治・波多野宏和				

平成2年度 (1990年度)

岡山県教育委員会											
教 育 長		竹内康夫		教 育 次 長		竹本博明					
文化課	課 長		鬼澤佳弘		文化課	主 査		藤川洋二			
	課 長 代 理		河野 衛								
	課 長 補 佐		伊藤 晃								
岡山県古代吉備文化財センター											
所 長		長瀬日出明									
次 長		河本 清									
総務課	課 長		竹原成信			調 査 係	係 長		高畑知功		
	総務係	課 長 補 佐		藤本信康			文化財保護主査		吉田正士・中野雅美		
		主 任		平松郁男・坂本英幸			文化財保護主事		福田計治・山本了峰 亀山行雄		
調査課	1 係	課 長		葛原克人			主 事		古市秀治・久保恵里子		
		課 長 補 佐		井上 弘			係 長		岡田 博		
		文化財保護主査		二宮治夫・林 久夫 源 俊二			文化財保護主査		野上和信		
		文化財保護主任		光永真一・井上 篤			文化財保護主任		栗尾昭和		
		文化財保護主事		広瀬隆明・安井 悟			文化財保護主事		片山泰輔		
主 事		大橋雅也			主 事		澤山孝之・柴田英樹				

調査協力

政田 孝・守屋佳慶・有森万久・濱本雅樹・馬場 洋・大谷博志・難波雅志・山田悌史
 錦戸 正・石井 啓・宝蔵光辰・福島伸啓・藤岡耕一

第3節 調査の経過

1. 調査の経過（中屋調査区）

昭和63年4月から始まった第2次調査は、三手遺跡と平行して実施されたため、調査員3名が1班を構成して先行することとし、三手遺跡の調査が終了次第これに合流することとなった。調査はまず橋脚建設箇所と排水路の切り換えに伴う掘削予定地を先行して行った。このうち総社インターチェンジに向かう橋脚部分(A2区)では、複雑に切り合った古墳時代初頭の住居跡が検出され、遺構が濃密に分布することが明らかとなった。これと平行して行われた東側の橋脚部分(P7区、後年次報告)では奈良時代の溝が確認された。この溝は、後に排水部分(H1区、後年次報告)で掘立柱建物数棟をとりまくように方形にめぐることが判明し、官衙の区画施設である可能性が強まった。また、総社インターチェンジに向かう本線盛土部分の西側(M2区)は、基盤が砂礫であるため遺構の検出は困難をきわめたが、ここでも弥生時代～古墳時代初頭の住居跡が確認された。岡山インターチェンジに向かう橋脚部分(AP7・BP7区)は、堤防に打ち込んだ鋼矢板に囲まれた劣悪な条件のもとでの調査であったが、東海系の土器を出土した大形住居をはじめとする弥生時代～古墳時代の遺構が多数確認されるなど、貴重な知見を得ることができた。

平成元年度は、津寺遺跡の調査が本格化した年である。本線盛土部分の中央(M3Ⅰ～Ⅳ区)では、西川調査区から南流する大溝2条が確認され、その埋土からは他地域からの搬入品を含む多量の土器が出土した。また、初期のカマドをもつ住居跡や、井戸や土壇墓を配した中世の屋敷跡も検出されている。本線盛土部分の南側(M5Ⅰ～Ⅱ、M7Ⅰ～Ⅱ)は、すでに調査した橋脚部分(A2区)につづく多数の住居跡を検出した。ここでは、P7区(後年次報告)で検出された奈良時代の溝が北に折れ曲がることが確認され、東西長約100mの区画であることが明らかとなった。大溝の末端にあたる本線盛土部分の南西側(M10Ⅰ～Ⅱ)は、弥生時代～古墳時代には水田として利用されていたようで、遺構は概して希薄な分布を示した。

本線盛土部分の調査は昨年度中にほぼ終了して、平成2年度の主力は東の高田調査区に移ったものの、工事工程の関係から未調査部分がわずかながら残されていた。すでに建設工事は大詰めを迎え、調査条件は極めて劣悪であったが、ここでも貴重な成果をあげることができた。本線盛土部分の東側(M6Ⅳ区)は、弥生時代～古墳時代の住居跡や中世の屋敷の一部も検出された。とくに、古墳時代のピットから出土した小形の銅鏡は注目を集めた。また、本線盛土部分の南東にあたるM13Ⅰ～Ⅲは、法尻の拡幅から調査が必要となったもので、周囲を高い盛土にかこまれて調査は困難を極めたが、この北西で確認された住居群や水田の広がりをここでも捕らえることができた。こうして、3カ年にわたった津寺遺跡の調査は、すべて終了した。

2. 日誌抄（中屋調査区）

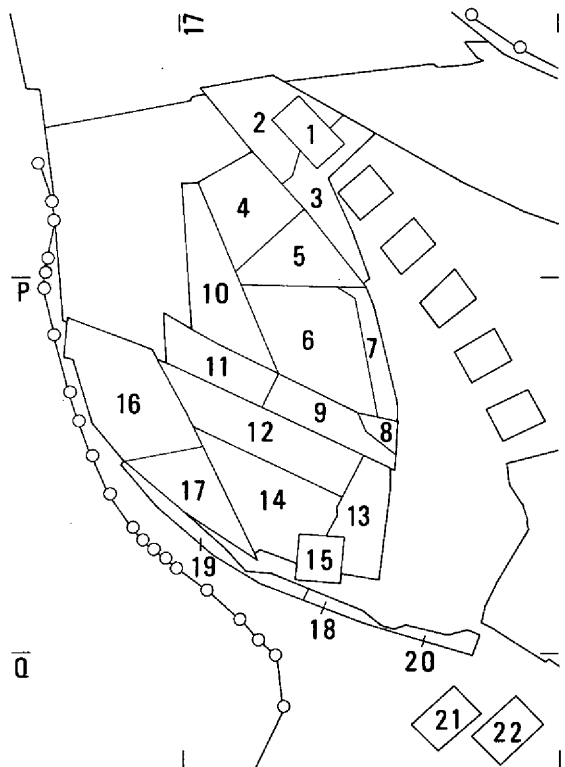
昭和63年

4月11日(月) A2区調査着手	8月19日(金) 官衙跡確認の新聞報道
5月27日(金) 埋蔵文化財保護対策委員会	10月12日(水) 埋蔵文化財保護対策委員会
7月6日(水) A2区調査終了	10月14日(金) M2区調査着手

第2章 調査の契機と経過

12月8日(木) M3Ⅰ区調査着手
 12月21日(木) A1区調査着手
 平成元年
 1月30日(月) AP7区調査着手
 1月31日(火) 埋蔵文化財保護対策委員会
 2月1日(水) BP7区調査着手
 3月13日(月) AP7区調査終了
 3月17日(金) 埋蔵文化財保護対策委員会
 3月18日(土) A1区調査終了
 3月25日(土) 津寺遺跡現地説明会開催
 3月31日(金) M2区調査終了
 BP7区調査終了
 4月4日(火) M3Ⅱ区調査着手
 M5Ⅰ区調査着手
 M5Ⅱ区調査着手
 5月25日(木) M5Ⅲ区調査着手
 6月6日(火) M7Ⅰ区調査着手
 6月12日(月) M3Ⅰ区調査終了
 M7Ⅱ区調査着手
 6月14日(水) M3Ⅱ区調査終了
 6月17日(土) 埋蔵文化財保護対策委員会
 6月28日(水) M3Ⅲ区調査着手
 6月30日(金) M5Ⅱ区調査終了
 7月6日(木) M3Ⅳ区調査着手
 7月14日(金) M7Ⅰ区調査終了
 7月29日(土) M5Ⅲ区調査終了
 M7Ⅱ区調査終了
 8月2日(水) M5Ⅰ区調査終了
 8月3日(木) M10Ⅰ区調査着手
 M10Ⅱ区調査着手
 10月4日(水) M3Ⅳ区調査終了
 10月23日(月) M3Ⅲ区調査終了
 10月30日(月) 埋蔵文化財保護対策委員会
 11月21日(火) M10Ⅰ区調査終了
 M10Ⅱ区調査終了
 12月5日(火) M6Ⅱ区調査着手

平成2年
 2月20日(火) 埋蔵文化財保護対策委員会
 3月5日(月) M3Ⅴ区調査着手
 3月12日(月) M3Ⅴ区調査終了
 3月31日(土) M6Ⅱ区調査終了
 4月10日(火) M6Ⅳ区調査着手
 6月12日(火) 埋蔵文化財保護対策委員会
 6月14日(木) M6Ⅳ区調査終了
 9月27日(木) 埋蔵文化財保護対策委員会
 11月26日(月) M13Ⅰ区調査着手
 12月5日(水) M13Ⅱ区調査着手
 12月13日(木) M13Ⅲ区調査着手
 12月20日(木) M13Ⅱ区調査終了
 M13Ⅲ区調査終了
 12月24日(月) M13Ⅰ区調査終了
 平成3年
 3月1日(金) 埋蔵文化財保護対策委員会



第5図 調査区配置図 (番号は表1に対応)

調査区	調査面積	調査期間	出土遺物	調査担当者	整理担当者
1 A I	116㎡	S 63, 12, 21~H 1, 3, 18	35箱	高畑知功・田代健二・飯島賢治	長谷川澄博・亀山行雄
2 M 6 II	430㎡	H 1, 12, 5~H 2, 3, 31	104箱	亀山行雄・古市秀治	長谷川澄博・亀山行雄
3 M 6 IV	405㎡	H 2, 4, 10~H 2, 6, 14	80箱	亀山行雄・古市秀治	長谷川澄博・亀山行雄
4 M 3 II	500㎡	H 1, 4, 4~H 1, 6, 14	161箱	亀山行雄・古市秀治	長谷川澄博・亀山行雄
5 M 3 III	380㎡	H 1, 6, 28~H 1, 10, 23	109箱	亀山行雄・古市秀治	長谷川澄博・亀山行雄
6 M 3 I	677㎡	S 63, 12, 8~H 1, 6, 12	132箱	井上 弘・山磨康平・吉田正士 大橋雅也	井上 弘
7 M 3 IV	182㎡	H 1, 7, 6~H 1, 10, 4	16箱	井上 弘・吉田正士・大橋雅也	井上 弘
8 M 3 V	51㎡	H 2, 3, 5~H 2, 3, 12	2箱	井上 弘・吉田正士・大橋雅也	井上 弘
9 M 7 II	307㎡	H 1, 6, 12~H 1, 7, 29	18箱	井上 弘・吉田正士・大橋雅也	井上 弘
10 M 2	522㎡	S 63, 10, 14~H 1, 3, 31	88箱	中野雅美・福田計治・後藤信義	金田善敬
11 M 7 I	325㎡	H 1, 6, 6~H 1, 7, 14	23箱	中野雅美・福田計治・後藤信義	金田善敬
12 M 5 II	710㎡	H 1, 4, 4~H 1, 6, 30	70箱	高畑知功・山本了峰	小林関士・澤山孝之
13 M 5 III	420㎡	H 1, 5, 25~H 1, 7, 29	30箱	島崎 東・光永真一・広瀬隆明 安井 悟・村田秀石・石黒 勉	小林関士・澤山孝之 金田善敬
14 M 5 I	720㎡	H 1, 4, 4~H 1, 8, 2	82箱	島崎 東・村田秀石・石黒 勉	小林関士・澤山孝之
15 A 2	86㎡	S 63, 4, 11~S 63, 7, 6	43箱	高畑知功・田代健二・飯島賢治	小林関士・澤山孝之
16 M10 I	1110㎡	H 1, 8, 3~H 1, 11, 21	49箱	島崎 東・村田秀石・石黒 勉	小林関士・澤山孝之
17 M10 II		H 1, 8, 3~H 1, 11, 21	26箱	島崎 東・村田秀石・石黒 勉	小林関士・澤山孝之
18 M13 II	172㎡	H 2, 12, 5~H 2, 12, 20	14箱	中野雅美・福田計治・久保恵里子	小林関士・澤山孝之
19 M13 I	60㎡	H 2, 11, 26~H 2, 12, 24	20箱	高畑知功・吉田正士・山本了峰 土井一行	小林関士・澤山孝之
20 M13 III	83㎡	H 2, 12, 13~H 2, 12, 20	9箱	亀山行雄・古市秀治	小林関士・澤山孝之
21 A P 7	210㎡	H 1, 1, 30~H 1, 3, 18	24箱	亀山行雄	小林関士・澤山孝之
22 B P 7	192㎡	H 1, 1, 30~H 1, 3, 18	48箱	山磨康平・吉田正士・大橋雅也	井上 弘
	7658㎡	S 63, 4, 11~H 2, 12, 24	1183箱	21名	6名

表1 調査・整理一覧表（中屋調査区）

註1 吉備考古館には岡山市津寺出土とされる遺物が収蔵されているが、西川宏氏のご教示によれば足守川川床出土の遺物とのことであり、足守川加茂A・B遺跡のものである可能性が高い。また、ここから出土した手焙形土器が江谷寛によって紹介されている。

江谷寛「手焙形土器の再検討」『古代学研究』1971

2 岡山市教育委員会「岡山市遺跡地図」1983

3 神谷正義ほか「三手遺跡（庄内幼稚園）発掘調査報告」岡山市教育委員会、1981

4 江見正巳・島崎東・光永真一ほか「足守川加茂A・加茂B・矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

5 岡山市教育委員会「津寺遺跡（加茂小学校校舎建築に伴う発掘調査）現地説明会資料」1988

岡山市教育委員会「津寺（加茂小体育館）遺跡現地説明会資料」1993

6 氏平昭則「津寺三本木遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告22』岡山県教育委員会、1992

高畑知功「一般県道大内田高松線改良工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告23』岡山県教育委員会、1993

高畑知功・山磨康平「県道大内田高松線改良に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告24』岡山県教育委員会、1994

7 「埋蔵文化財に関する協議」『岡山県埋蔵文化財報告15』岡山県教育委員会、1985

8 浅倉秀昭「三手・津寺遺跡一次調査概要」岡山県教育委員会、1987

9 中野雅美・大橋雅也・澤山孝之ほか「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書98』岡山県教育委員会、1995

第3章 報告書の作成

第1節 整理の方法と体制

1. 整理の方法

山陽自動車道建設に伴う発掘調査にかかわる報告書の作成は、平成3年度から6名の調査員を配置して実施してきた。とくに津寺遺跡では、87,000㎡にも及ぶ広大な面積を短期間のうちに調査したため、この遺跡にかかわった調査員はのべ117人にもものぼる。このため、調査担当者がことごとく整理に携わることは不可能となった。しかも、数多の緊急調査を抱える状況にあっては、その整理に十分な専門職員を配置することさえ困難であった。したがって、平成6年度は調査担当者2名を含む3名の専門職員と3名の出向教員を配置して整理作業を行うこととなった。

整理作業は、遺構・遺物の数量やそのまとまりを勘案して、6名が分担して行った。担当の内訳は表1のとおりである。整理作業は、これらの担当者の指導の下に、作業員2名が復元を、2名が実測・浄書を行った。また、写真撮影は調査員が行った。

本文の執筆については、整理作業の成果をもとに原則として調査担当者が行った。ただし、複数の調査区にまたがる遺構や遺跡全体の概要については整理担当者が分担して執筆した。 (亀山)

2. 整理の体制

平成6年度(1994年度)

岡山県教育委員会							
教 育 長		森崎岩之助		教 育 次 長			
文化課	課 長	大場 淳	文化課	主 査	若林一憲		
	課 長 代 理	松井新一					
	課 長 補 佐	高畑知功					
岡山県古代吉備文化財センター							
所 長		河本 清		調 査 2 課	課 長	伊藤 晃	
次 長		葛原克人			1 係	課 長 補 佐	井上 弘
総務課	総務係	課 長	丸尾洋幸			文化財保護主査	長谷川澄博
		課 長 補 佐	杉田卓美			文化財保護主任	小林関士
		主 査	石井善晴			文化財保護主事	亀山行雄・澤山孝之
		主 任	三宅秀吉			主 事	金田善敬

整理協力者

川崎敬子・川崎康代・川原啓子・神原さちみ・近藤明子・高塚睦子・原田美佐子・藤田さち子
山本恵美子・山元尚子・渡辺弘子

第2節 報告書の構成

1. 報告書の構成

本書では、本文の叙述の充実を図り、なおかつ編集作業を円滑に行うため、本文と図版を分離することとしたが、その併読の利便を考慮して2分冊の構成をとることとした。また、国の施策によるB5判からA4判への移行に伴い、従来の遺構・遺物の縮尺を一部変更して、その理解の増進に努めた。本書に現れる遺構・遺物の番号は、同一調査区での重複を避けるため一連の番号を割り振った。したがって、ここでの遺構・遺物の番号は、「津寺遺跡2」で報告した中屋調査区から連続するものである。遺構・遺物の記述は、原則として時期別に行ったが、時期・性格等の不明な遺構については配置図に掲載するに留めて記述を省略したものがある。また、文末には遺構・遺物の観察表を付した。遺物の観察表では、実測図に表現できない情報を盛り込むことに努めた。とくに煤や黒斑、記号等については類型化を図って記述している。

2. 時期区分

本書では、「津寺遺跡2」において採用した編年案を基本的に踏襲した¹。これは、百間川遺跡群で行っている大枠での時期区分に合わせたもので、弥生時代前期をⅠ～Ⅲ、中期をⅠ～Ⅲ、後期をⅠ～Ⅳ、古墳時代前期をⅠ～Ⅲ、中期をⅠ～Ⅱ、後期をⅠ～Ⅱに大別する(表2)。このうち古墳時代中期以降については、津寺遺跡の資料に基づき新たに時期区分を設定したものである³。ただし、本書に用いる編年は、津寺遺跡の資料全体を見通したものとはなっていないため、地域性や編年上の問題点については今後のまとめの中で示されて行くものと考えている。なお、文中に現れる弥・前・Ⅰ等の表記は、弥生時代前期Ⅰの略記であり、以下に概述する津寺遺跡の編年案に基づくものであることを意味する。

弥・前・Ⅰは、壺や甕の口頸部に見られる段や無軸木葉文に特徴づけられる時期で、岡山市津島遺跡の資料を標識とする。弥・前・Ⅱは、削り出し突帯が施される壺やヘラ描沈線文をめぐらす甕を特徴とする時期で、この地域においては岡山市高尾貝塚の資料があげられる。弥・前・Ⅲでは、壺に施された突帯が断面三角形の貼付突帯になり、壺や甕に施されたヘラ描沈線文が多条化する。この時期は従来門田式と呼ばれたもので、津寺遺跡でも遺構に伴わない土器がわずかながら出土している。

弥・中・Ⅰは、ヘラ描沈線文が櫛描文に変わる時期で、新相の壺は櫛描文と突帯で飾るが、甕では櫛描文が消失する。弥・中・Ⅱは従来の菰池式に対応し、津寺遺跡において集落の形成がはじまる段階である。壺や甕では内面下半にヘラケズリが見られるようになり、高杯が普及する。また器台が出現するのもこの頃である。弥・中・Ⅲは凹線文が盛行する時期で、壺や甕に見られた内面下半のヘラケズリが一般化する。また凹線文を飾る口縁部の拡張は著しく、器台も普及する。中屋調査区の溝-3に当該期の遺物を見ることができる。

弥・後・Ⅰは、上東・鬼川市Ⅰ式に相当する。壺の頸部に施されていた凹線が沈線へと変化し、甕とともに行われる内面のヘラケズリは頸部直下まで及ぶようになる。高杯は口縁端部を拡張して多条の凹線をめぐらし、長い脚部に施された透かしは退化傾向を示す。津寺遺跡では、西川調査区を中心に弥・中・Ⅲから弥・後・Ⅰへの過渡的な様相を示す資料が多く出土している。上東・鬼川市Ⅱ式に

あたる弥・後・Ⅱでは、上東式の特徴である長頸壺と大形の器台が盛行する。高杯は、外反する口縁部になり、短い脚部は薄くつくる端部をもつようになる。また、別づくりの脚部が見られるようになるのもこの頃である。この時期の遺物は西川調査区の溝-2において比較的まとまった出土を見る。弥・後・Ⅲは長頸壺の最終段階で、上東・鬼川市Ⅲ式に相当する。高杯は短脚となり小形化する。また、小形の器種では精良な胎土が使用されるようになる。器台は、墳墓などで特殊なものが見られるものの、集落においては減少する。オノ町Ⅰ・Ⅱ式にあたる弥・後・Ⅳは、酒津式の主体となる時期である。壺は頸部に長頸壺のなごりを留めるものの、甕では口縁部に擬凹線をめぐらすものが現れる。高杯は依然として小形であるが深い杯部をもつようになる。津寺遺跡の集落が拡大し始める時期である。

古・前・Ⅰは下田所式にあたる。壺は強く外反する二重口縁をもち、甕は擬凹線にかわって楕円沈線飾を飾る。高杯は中実気味につくられた長い脚部に变化する。中屋調査区の溝-16から出土した遺物の主体をなす時期である。亀川上層式にあたる古・前・Ⅱでは、壺や甕の体部に球形化が進み、底部は完全な丸底となる。布留式の指標とされる小形の器種が揃うのもこの時期である。中屋調査区の溝-4ではこの時期の遺物が多く出土しており、古・前・Ⅰ～Ⅱが津寺遺跡の最盛期とも言うべき時期にあたる。古・前・Ⅲは津寺遺跡の集落が縮小した段階であり、わずかに中屋調査区の竪穴住居-55において遺物の出土を見るにすぎない。壺は崩れた二重口縁をもち、甕では短く外反する口縁にかわる。球形の体部の内面はユビナデで調整する。高杯は杯部がしだいに深さを増し、内面をヘラケズリする脚部も長さを減じて透かし孔を消失する。

古・中・Ⅰは、須恵器が出現する段階であり、津寺遺跡においてカマドをもつ竪穴住居が現れるのもこの時期である。崩れた二重口縁をもつ壺がわずかに残るが、その法量は甕と大差なく、これ以後土師器の主要な器種ではなくなっていく。高杯は、杯部の屈折が鈍くなり、椀形のものも現れる。脚部の透かしは脚柱部に施されるようになる。西川調査区の竪穴住居-49では古相、中屋調査区の竪穴住居-118では新相の遺物が出土しており、大阪府陶邑古窯址群のTK73～TK208型式に並行するものと思われる⁴。古・中・Ⅱになると長胴の甕が出現し、高杯は椀形の杯部に絞り込んだ脚部をもつものが主体となる。集落で須恵器が見られるようになるのはこの時期であり、大阪府陶邑古窯址群のTK23～TK47型式に並行するものと思われる。

古・後・Ⅰ～Ⅱについては土師器の資料が十分でなく、須恵器をもってこれに代えたい⁵。また、7世紀以降は実年代を用いることとし、陶磁器等については従来の編年を援用した⁶。 (亀山)

註1. 正岡睦夫「時期区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995

2. 江見正巳「時期区分について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会、1980

3. この地域の編年案としては次のようなものが出されているが、それぞれの対応関係は必ずしも明らかではない。

柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会、1977

高橋護「弥生土器-山陽1～4」『考古学ジャーナル173・175・179・181』1980

高橋護「土師器の編年-中国・四国」『古墳時代の研究6』1991

高畑知功・平井泰男・柴田英樹「土師器」『吉備の考古学的研究(下)』1992

4. 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ、1966

5. 岡山県の須恵器の編年案として以下のものがあるが、他地域との対比も考慮して、ここでは註4文献に従う。

山磨康平・島崎東「須恵器」『吉備の考古学』1987

年代	時代	時期		津 寺	上 東	百間川	雄 町	高橋編年	田辺編年
50	弥 生 時 代	前 期	津 島	弥・前・Ⅰ		百・前・Ⅰ		Ⅰ 期	a b c
			門 田	弥・前・Ⅱ		百・前・Ⅱ	雄町1	Ⅱ 期	a b c
				弥・前・Ⅲ		百・前・Ⅲ	雄町2		
		中 期	南 方	弥・中・Ⅰ		百・中・Ⅰ	雄町3	Ⅲ 期	a b
			菰 池	弥・中・Ⅱ		百・中・Ⅱ	雄町4		Ⅳ 期
			前山Ⅱ	弥・中・Ⅲ	鬼川市0	百・中・Ⅲ	雄町5	Ⅴ 期	a b
			仁 伍				雄町6		Ⅵ 期
		後 期	上 東	弥・後・Ⅰ	鬼川市1	百・後・Ⅰ	雄町7	Ⅶ 期	a b c
				弥・後・Ⅱ	鬼川市2	百・後・Ⅱ	雄町8 雄町9 雄町10		d
				弥・後・Ⅲ	鬼川市3	百・後・Ⅲ			Ⅷ 期
			酒 津	弥・後・Ⅳ	才ノ町1 才ノ町2	百・後・Ⅳ	雄町11	Ⅸ 期	a b c
							雄町12		
	古 墳 時 代	前 期		古・前・Ⅰ	下 田 所	百・古・Ⅰ	雄町13	Ⅹ 期	a b c
							雄町14		d
									e
		中 期		古・前・Ⅱ	龜川上層	百・古・Ⅱ		Ⅺ 期	a b
								Ⅻ 期	a b
									TK73 ~ TK208
	後 期		古・前・Ⅲ	川入大溝	百・古・Ⅲ		Ⅼ 期	a b	
							Ⅽ 期	a b	
								TK23 ~ TK47	
	500			古・中・Ⅰ				MT15 ~ TK10	
								古・中・Ⅱ	TK43 ~ TK209
600			古・後・Ⅰ						
							古・後・Ⅱ		

表2 岡山県の土器編年対比表

伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』1987

中野雅美「須恵器の編年—山陽」『古墳時代の研究6』1991

山本悦世・土井基司・田代健二「須恵器」『吉備の考古学的研究(下)』1992

6. 本書で援用した陶磁器等の編年として次ぎのようなものがある。

間壁忠彦「備前焼ノート1~4」『倉敷考古館研究集報1・2・5・18』1966~1984

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館、1978

鈴木康之「土師質土器の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、1994

第3節 整理の経過と課題

1. 整理の経過

平成6年4月に、整理担当者間で今年度の整理方針と全体の計画について打ち合わせを行った。そのうえで、調査および整理担当者による第1回編集会議を開催し、これらについての了承をえた。

整理作業は、遺構と遺物を平行して行った。遺構については、整理担当者が調査担当者の協力を得て下図を作成し、トレースを行った。この際、遺構の一覧表をあわせて作成し、整理によって得られた情報を盛り込むこととした。また遺構写真については、図上に表せない細部を表現することに留意して選択した。遺物は、遺構ごとに接合・復元を行って、遺構相互の関係や遺物のまとまりを把握するとともに、遺構・遺物の時期や性格を考慮して実測遺物を選択した。遺物の観察表には、実測図に表現できない情報を盛り込むことに留意した。遺物写真は、縮尺を極力統一するよう努めるとともに、実測図版よりも縮尺を拡大してその理解を深めるよう配慮した。整理の終了した遺物は台帳を作成して収納したが、その際、遺物の実測番号と掲載番号の対照が可能となるよう配慮した。また、遺構原図についてもマイクロフィルムを作成し保管している。

こうした遺物の整理と併行して、その自然科学的検討を行った。中世の土壙墓から出土した人骨については鳥取大学医学部の井上貴央氏に鑑定を依頼し、被葬者が小児であるとの教示を得た。獣骨については早稲田大学の金子浩昌氏の手を煩わせた。また、三重大大学の森勇一氏には中世の井戸から出土した昆虫遺体について鑑定をうけ、井戸の環境を表す湿潤性歩行虫や、畑地の存在を示す食葉性昆虫の存在が明らかとなった。この井戸から同時に出土した種子については東京大学総合研究室資料館の松谷暁子氏による鑑定を得ている。パリノ・サーヴェイ社に委託した土壌の分析では、イネのプラントオパールが検出され、古墳時代の水田の存在が科学的にも裏付けられた。また、弥生時代の竪穴住居の炭化材については同社の同定によりクリ材であることが判明している。古墳時代の竪穴住居から出土した鉄滓については、九州テクノリサーチに成分分析を委託し、その結果について大澤正巳氏から鉄鉱石系の鍛冶滓であるとの評価を得ている。古墳時代の石杵に付着した赤色顔料は、福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏の分析により、水銀朱との結果を得た。土壙から出土した古墳時代のガラス滓についてもニコン株式会社の荻谷道郎氏により県下出土のガラス滓と同じ成分であることが明らかにされている。さらに、石製品については吉備国際大学の妹尾護氏、総社市教育委員会の高橋進一氏から材質の鑑定を受けるとともに、総社市教育委員会の平井典子氏から器種について教示を得た。土器については、八尾市教育委員会 米田敏幸氏、八尾市曙川小学校 奥田尚氏に非在地系土器の肉眼観察および型式学的検討を受けるとともに、岡山理科大学の白石純氏に蛍光X線分析による産地同定を依頼した。また、大阪府文化財センター 田中清美氏、龍野市教育委員会 岸本道昭氏、赤穂市教育委員会 中田宗伯氏には畿内系土器について、香川県埋蔵文化財センター 森格也氏には四国系土器について教示を受けた。

9月には対策委員会が開催され、報告書作成における留意点などについて指導を受けた。12月に開催した第2回編集会議では、整理の進捗状況について報告するとともに、整理の過程で生じた問題点について意見の交換を行った。この段階で、遺物の整理作業は一部の実測を残してほぼ終了したため、平成7年1月からは確定した遺構の時期をもとに時代別の全体図の作成および図版の割り付けに入っ

た。この作業と併行して、調査および整理担当者により各遺構・遺物に関する原稿の作成を行った。2月に開催された対策委員会では、整理作業の進捗状況を報告するとともに、これまでに明らかとなった成果について説明し、指導を受けた。こうした報告書作成にかかわる一連の作業は3月末にはほぼ完了し、編集作業を残して今年度の整理作業を終了した。

2. 整理の課題

冒頭にも述べたとおり、津寺遺跡の発掘調査を担当した調査員はのべ117人にもものほり、これら全ての担当者が整理にたずさわることが不可能であった。

したがって今年度は、前述したような体制のもとに、整理担当者が調査担当者の協力を得ながら遺構・遺物の整理を行い、その成果に基づいて調査担当者が原稿を作成することとなった。しかし、調査担当者にとっても、すでに調査から数年を経て遺跡に対する印象が薄れており、なおかつ日中は発掘調査に追われる中での原稿作成は、調査時の所見を十分に盛りこむ余地を奪う結果となった。また、整理担当者においても、調査に携わらなかった者は遺跡に対するイメージを構築するのに手間取って作業全体が遅れがちとなり、しかも整理作業を通じて得られた成果が原稿を作成する調査担当者へ十分に伝えられないもどかしさがあった。これに対し、調査に携わった整理担当者にとってはその認識・経験を生かし得るという点で有効であったが、原稿の作成に追われねばならないという面ももっていた。両者のこうした立場の違いは作業の進行を乱し、共通の認識のもとに整理を進めて行くことを困難とした。

しかし、こうした問題は単に今年度にとどまるものではない。津寺遺跡のように複数年次にわたって整理を行わねばならない場合、本来であれば整理方針や報告書の構成について十分な検討を行うべきであったが、整理担当者が年度毎に入れ替わる現状では不統一な内容とならざるを得なかった。このことは結果として、遺跡に対する十分な評価につながらず、整理に携わったものの一人として極めて遺憾とするところである。

今日のように研究の裾野が他方面かつ専門的に広がり、なおかつ調査と整理の分業が進むなかで、報告書の信頼性をどのように確保していけばよいのか。また、限られた期間と予算のなかで、わたしたちはいかなる努力をなし得るのか。こうした問いかけに対する答えはすぐには見つからないが、現在求められている報告書とはどのようなものであるか改めて考えてみる段階にきている。 (亀山)

第4章 調査の概要

第1節 調査区の概要

1. 調査区の位置

今回報告するのは中屋調査区の西半にあたる部分で、岡山市津寺、北緯 $34^{\circ}40'24''\sim 30''$ 、東経 $133^{\circ}49'12''\sim 17''$ に位置する。これは、山陽自動車道と中国横断道が合流する岡山ジャンクションの西側、山陽自動車道の岡山・倉敷インターチェンジから中国横断道の総社インターチェンジへ向かう本線盛り土部分および山陽自動車道の岡山・倉敷インターチェンジ間を結ぶ本線橋脚部分にあたる。すでに報告した野上田・西川調査区とは北に境を接し、後年次の報告となる中屋調査区の一部はこの東に続いている。調査前は水田として利用されていたが、近世以前は調査区全面に微高地が広がり、弥生時代中期にまで遡る集落が営まれていたことが調査によって明らかとなった。

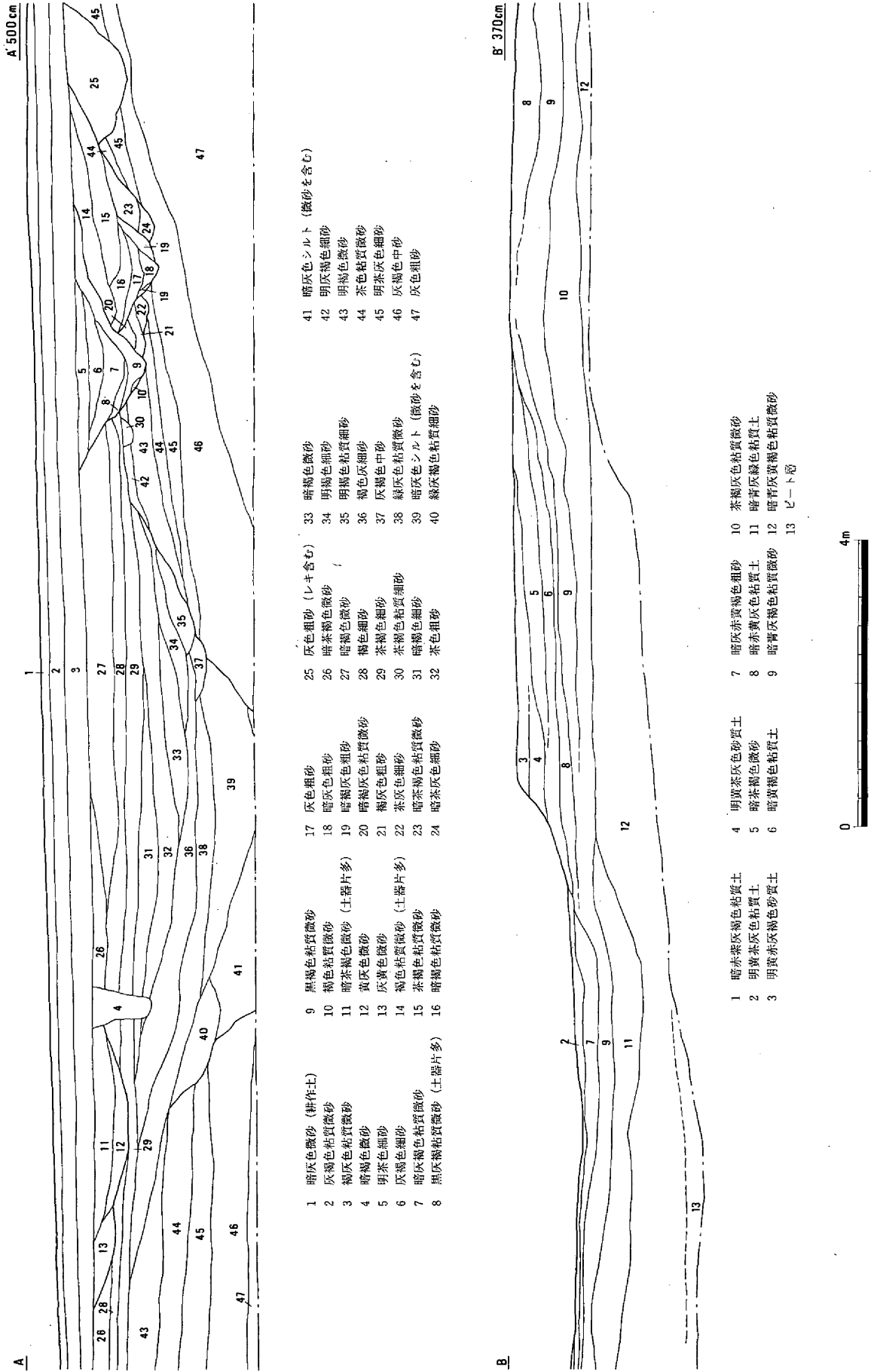
2. 基準層序

調査前は、北で標高4.5m、南で標高4.0mと、南へわずかに下る地形にあり、足守川東岸の堤防に接して全面に水田が広がっていた。このため、調査区全体は厚さ20cmほどの黒褐色をなす耕作土に覆われており、その下には橙色をなす粘質の床土が厚さ3cmにわたって認められた。この現代水田層の下には、厚さ40~20cmほどの灰褐色をなす粘質土層が堆積していた。これはほぼ調査区全体において認められたが、地形が高くなる箇所では確認できなかったところもある。層中には酸化鉄の沈着層が見られ、その下面にはマンガン層の厚い集積が認められた。これらのことから、この層は水田耕作にかかわる土層と見られ、包含される遺物から中・近世に属するものと推定される。この下層には褐色の砂質土が見られ、中世以前の遺構は、おおむねこれを基盤として掘り込まれている。ただし、上層に広がる水田の影響などから上面での遺構の検出が難しく、多くの場合この層を若干掘り下げる過程で遺構の検出を行っている。

ところで、微高地を形成する砂質土層は、西側では砂礫層となり、東側では粘質を帯びた微砂層にかわる。この砂礫層は北側の野上田調査区へと続いているが、ここでは砂礫層が微砂層の下部へ潜り込むように堆積していることが観察されている。これは、この微高地が現在の足守川の位置を南流していた河道によって上流から運搬された土砂の堆積により形成されたことを物語る。また、西側の砂礫層と東側の粘質微砂層砂の間には、ある段階で小さな河道が入り込んでいた。図1 A A'は調査区中央の東西断面であるが、これによると溝-12としたものは上幅7.2m、深さ2.5mを測る流路で、微高地中央を蛇行しながら南流している。その時期については判然としないが、弥生時代中期の溝-2・3に先行することは明らかであり、微高地の形成段階にまで遡る可能性が高い。この河道の痕跡は古墳時代前期まで残存していたようで、溝-4・16はこの河道が埋積する過程で形成された窪地に沿って流れている。また、調査区南西で検出された古墳時代の水田の下層からは、植物遺体を含む黒灰色の堆積層が認められた(B B')。これは微高地の形成を遡るものと見られ、沖積化の進む過程で生じた静水域に堆積したものと推定される。



第6図 中屋調査区遺構全体図 (1/600)



第7図 標準土層断面図 (1/80)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

(1) 概 要

今回報告する弥生時代の遺構には、竪穴住居18軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、袋状土壇69基、土壇68基、土壇墓2基、溝6条などがある。これらは、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの短期間に営まれたものであるが、ことに70基近くもの袋状土壇の存在は注目される。調査区南側における弥生時代の状況は、少なくとも古墳時代前半には機能していた水田のために判然としない。しかし開析部西側をめぐる、この水田の用水路として機能していたと考えられる古墳時代の溝-4と流路をほぼ同じくする弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの溝-3が、それと同等の役割を担っていたものと考えれば、この地域の水田経営は弥生時代後期に遡って行われていた可能性も否定できない。

遺物を見ると、土器では1104のような弥・前・Ⅱ～Ⅲの時期のものもわずかに見られるが、その主体は弥・中・Ⅱ～弥・後・Ⅱであり、そのなかでも弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの時期のものが大半を占める。逆に弥・中・Ⅰの時期の遺物については皆無であり、このことは現在までに確認されたこの周辺の土器様相と合致している。一方、西川調査区の溝-2において弥・後・Ⅱ～Ⅲの土器を多量に包含していたことは既に報告したところであるが、今回それらと直接対応する遺構は確認されなかった。このような遺物の時期の偏りは、弥生時代における西川・中屋調査区の集落相の違いを反映したものである。(澤山)

(2) 竪穴住居

竪穴住居-14 (図版1・116・293・356)

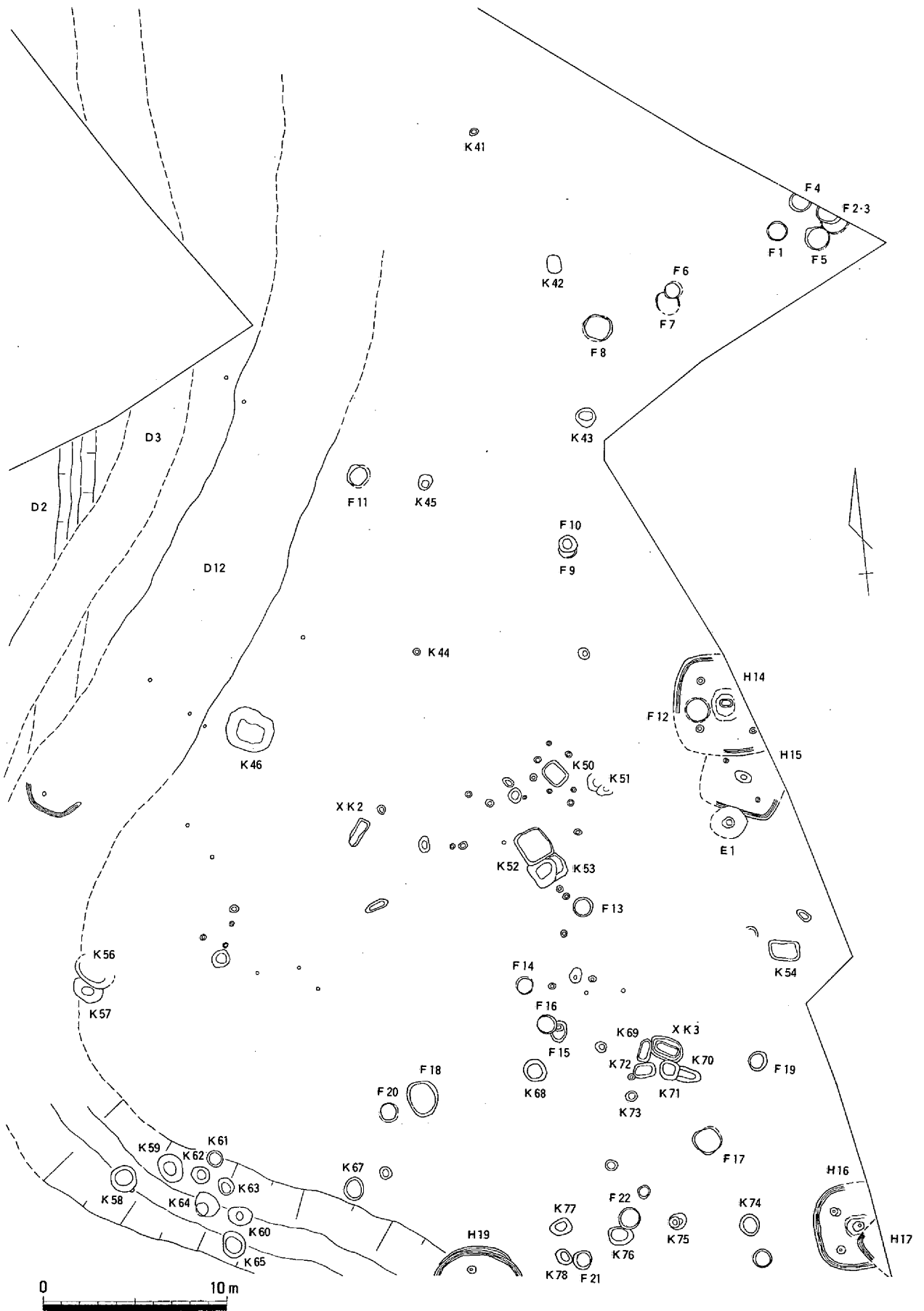
位 置 O17区の南東で検出した4本柱の住居で、北東は調査区外に延びている。南では竪穴住居-15を壊しているが、南西隅は古墳時代前期の竪穴住居-42によって切られている。

構 造 床面は長さ520cm、幅500cmの隅丸方形をなし、検出面からの深さは25cmを測る。主軸はN-5°-Eとほぼ南北で、床面積は21㎡ほどに復元される。標高371cmを測る床面の周囲には、幅10cm、深さ5cmの壁体溝がめぐっている。4本ある主柱の掘り方は、径40～55cmの楕円形をなし、深さは40cmほどある。壁体溝から95cm離れた位置にある主柱間の距離は290～254cmを測るが、重複する柱穴があることから建て替えが行われた可能性がある。床面の中央には、長軸170cm、幅160cmの範囲で幅20～30cm、高さ5cmあまりの土堤が楕円形にめぐっている。これは貼り床に用いる黄褐色の粘土を僅かに盛り上げて作りだしたものである。その内側には長さ75cm、幅43cm、深さ16cmの楕円形をなす土壇が検出されたが、壁面に被熱痕跡はみられず、炭や灰の堆積も認められなかった。

出土遺物 北西の床面から壺2・甕1・高杯2・器台1がまとまって出土している。このうち甕740は口径12.4cm、最大胴径20.0cmで、口縁部には3条の凹線をめぐらし、外面をハケメ、内面をヘラケズリで仕上げる。器台741は口径28.9cm、脚径25.4cm、器高25.4cmで、端部を上方に肥厚させた口縁部には2条の凹線をめぐらす。胴部には5～7条を単位とする幅広の沈線を三段にめぐらし、その間に方形の透かしを二段八方に穿つ。外面は保存が悪く調整は不明であるが、内面はナデで調整し一部にヘラミガキを施している。これらの遺物は、その特徴から弥・後・Ⅰ期に属するものと思われる。(亀山)



第8図 弥生時代遺構全体図 (1/600)



第9図 弥生時代遺構配置図1 (1/300)

竪穴住居-15 (図版1・294)

位 置 竪穴住居-14の南で検出した住居で、北側は竪穴住居-14に、西側は古墳時代前期の竪穴住居-42によって切られている。また、北東は調査区外に延びている。

構 造 残存する部分が僅かなため全形を知り得ないが、壁体溝と90cmほどの間隔をたもつ支柱の位置関係からして、長さ430cm、幅350cmあまりの隅丸方形をなすものと推定される。検出面からの深さは15cmほどで、床面の標高は390cmと竪穴住居-14より20cmほど高い。想定される主軸はN-23°-Eで、14㎡ほどに復元される床面の周囲には、幅10cm、深さ5cmの壁体溝がめぐっている。柱穴は2基検出されたが、支柱は本来4本で構成されていたものと思われる。柱穴は径25~37cmの楕円形をなし、深さは55cmほどある。柱間の距離は、検出された2基の柱穴が対角線上にあるため正確を期しがたいが、おおむね250×160cmになるものと思われる。床面の中央には長さ92cm、幅62cm、深さ13cmの楕円形をなす土壇が検出された。底面は被熱により赤変、硬化しており、炉と考えられる。

出土遺物 竪穴の埋土からは、床面上を中心に多量の炭化材が焼土を混じえて検出された。これらは径10cmの丸太材で、南西では20~30cmの間隔で放射状に並んでいる状況が観察された。しかしながら土器などの遺物は出土せず、詳細な時期については明らかでない。(亀山)

竪穴住居-16 (図版2・116・294)

位 置 竪穴住居-15の南約22mの位置に検出した。東側半分は調査区外に含まれるため検出していない。

構 造 約半分を調査したものであるが、円形を呈するものと考えられ、その径は443cmを測る。遺存状態は比較的良好で、検出面からの深さは45cmを測り、壁体に沿って幅15~25cm、深さ7~8cmの溝がめぐる。床面から2基の柱穴を検出した。柱穴の平面形はいずれも円形を呈し、直径45~50cmを測る。北側では2基の柱穴が重複し、南側では同一の掘り方の中に2本の柱痕跡がみられたことから、建替えがなされたものと思われる。床面の中央と考えられる位置に中央穴を検出した。平面形は円形を呈するもので、直径68cm、深さ52cmを測る。この中央穴を囲むように高さ7~8cmの土堤がめぐる。また、中央穴の南側に炭、灰の散布がみられた。

出土遺物 この住居跡からは少量の土器が出土している。器形の判明する遺物としては742、743に示した高杯がある。また、石鏃S40も出土している。これらは、弥・後・I期のものと考えられる。

(井上)

竪穴住居-17 (図版2・294)

位 置 竪穴住居-16の南側に、その住居を切る状態で検出した。東側は調査区外となり一部を検出するにとどまった。

構 造 方形の住居の一隅を検出したのみであるので具体的な構造は不明であるが、壁体に沿う幅約15cmの溝を検出した。この住居は、断面図からも解るように竪穴住居-16よりも新しいものである。また、この住居跡の下層にはもう一軒の住居が重複していた。断面図の10層に示すものがそれである。しかし、この住居が単独のものであるのか、竪穴住居-17の古い段階のものであるかは不明である。

出土遺物 調査範囲が狭いこともあって、出土遺物がなく明確な時期は不明であるが、弥生時代後期のものと考えておきたい。

(井上)

竪穴住居-18・19 (図版2・116・295・356)

位 置 竪穴住居-16の西18mの位置に検出した。

構 造 竪穴住居-19の平面形は、円形を呈するもので、長さ460cm、幅435cmを測る。検出面からの深さは、最も遺存状態のよい部分で70cmを測る。壁体に沿っては、幅10～15cm、深さ5～7cmの溝がめぐる。床面からは5基の柱穴を検出した。南東の1基は2基の柱穴が重複した状態で検出し、建替えのあったことを窺わせる。柱穴は、ほぼ円形を呈するもので、径40～60cm、深さ60～85cmを測る。床面のほぼ中央に二段に掘りこまれた中央穴を検出した。上段の平面形は長楕円形を呈しており、長径113cm、短径55cmを測る。下段はほぼ円形を呈するもので、長径68cm、短径55cmを測る。中央穴の西側には高さ4～5cmの土手状の盛り上がりを検出したが、東側については明確なものはいまみられなかった。また、中央穴の北側と南側には、灰、炭の散布がみられた。

なお、この竪穴住居の北側に竪穴住居-18の壁体を検出した。部分的であるため住居の形態等については不明であるが、断面図の21、22層がそれに相当するものであることからこの住居跡に先行するものである。

出土遺物 遺物は、壺、甕、高杯などの土器が出土している。744は直口壺で、胴部内面は全体をヘラケズリする。745、746は甕である。746は口縁部直下までヘラケズリが見られる。749はミニチュア土器である。これらの遺物からすればこの住居跡は、弥・後・Iと考えられる。 (井上)

竪穴住居-20 (図版3・116・295)

位 置 調査区のほぼ中央で検出した住居で、袋状土壌-24によって北東部の一部を切られている。
構 造 長さ463cm、幅400cmの隅丸方形で、検出面からの深さ25cmを測る。床面の標高は352cmで、面積は14.8㎡である。床面の周囲には南西部をのぞき幅10～25cm、深さ5～10cmの壁体溝がめぐっている。4本ある支柱穴は径45～55cmのやや不整形な円形で、深さは85～100cmといずれも非常に深い。柱間は180～215cmを測り、北西から南東方向の間隔が若干長い。床面中央には長さ72cm、幅55cm、深さ46cm程のやや楕円形をなす中央穴を設けている。この中央穴の周囲には長さ120cm、幅100cm、高さ5cm程の低い土堤状の高まりを設けている。竪穴住居内部の土層の堆積は明瞭でないが上下2層に分層可能な粘質微砂層であった。

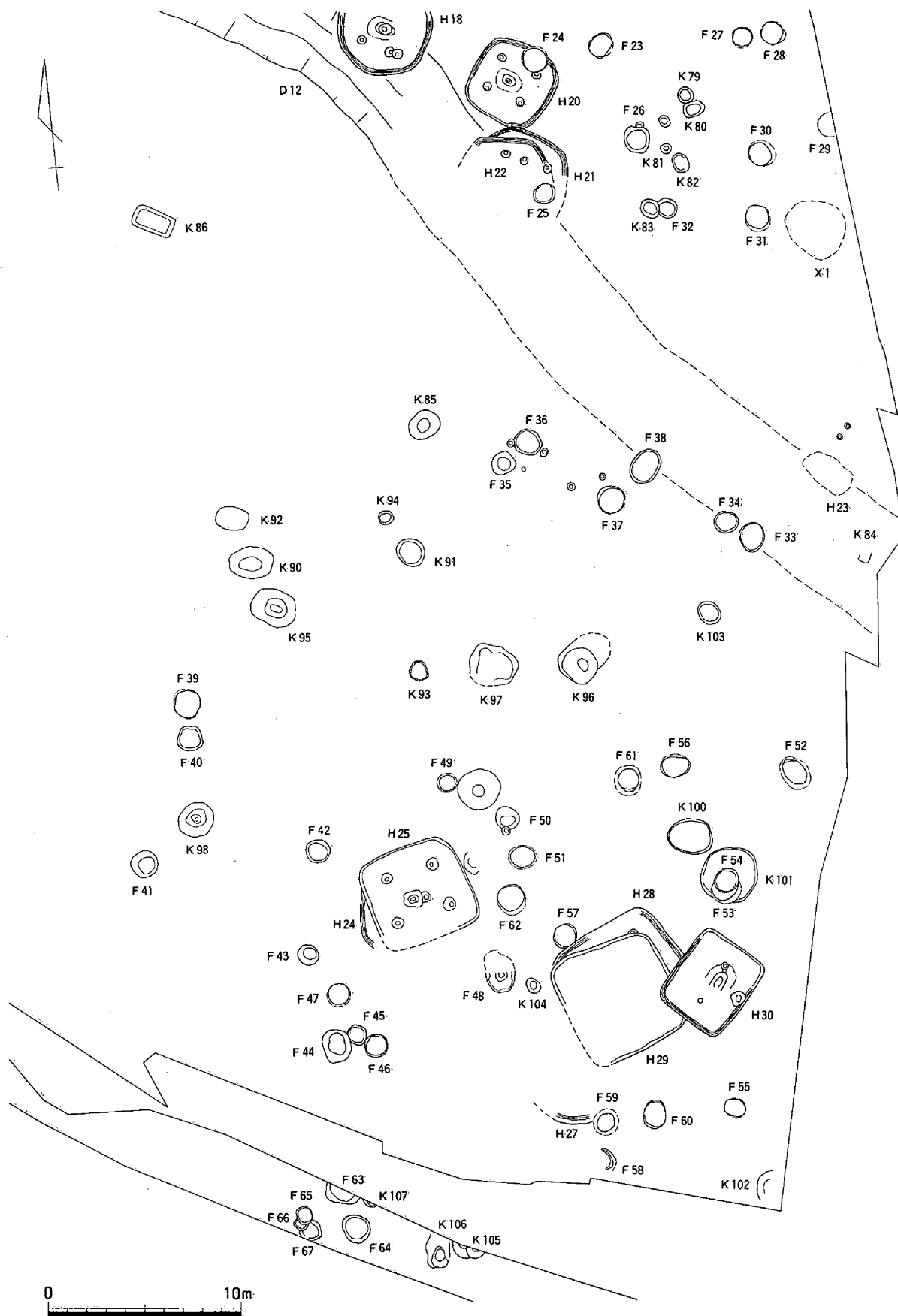
出土遺物 埋土中より弥生土器の甕、壺、高杯の各器種が出土している。甕は、く字形に大きく外反する口縁の端部を上下に大きく拡張し凹線文を施している。751は端部に棒状浮文、頸部に貼り付け凸帯の上に指による圧痕文を施している。体部内面の上半まではヘラケズリを行っておらず、高杯の杯部752の特徴からも弥生中期後半と思われる。 (山磨)

竪穴住居-21・22 (図版3・116)

位 置 調査区のほぼ中央で検出した住居で重複している。また、南側は中近世の溝-43により切られ、全体の1/3程度の残りである。

構 造 検出遺構の新旧は、断面観察から竪穴住居-22が切っているようである。現存長は、竪穴住居-21で長さ455cm、竪穴住居-22で400cmを測る。平面形は残存部から推定し多角形もしくは隅丸方形と推定される。検出面からの深さは20cm程である。床面の標高は竪穴住居-21で352cm、竪穴住居-22が若干高く356cmである。検出した床面の周囲にはいずれも幅15cm前後、深さ5cm程の壁体溝がめぐっている。支柱は3本で、柱穴は径40～50cm、深さ70～75cmを測る。このうち竪穴住居-22を切る柱穴と西端の柱穴の間が230cmを測り、竪穴住居-21の支柱の一部と考えられる。

出土遺物 遺物は、埋土中からの小片が多いが、竪穴住居-21から甕の口縁部片と竪穴住居-22から鏃とみられる鉄器が出土している。時期は弥・後・I期の範疇と思われる。 (山磨)



第10図 弥生時代遺構配置図2 (1/300)

竪穴住居-23 (図版4)

位置 竪穴住居-22の南東約20mの位置に中世の溝-70に削平される状態で検出した。

構造 中世の溝等により周辺を削平されているため壁体、壁体溝は残存しておらず床面のみ検出した。検出した範囲は長楕円形を呈しており長径約3m、短径約1.5mを測る。この範囲に黄色粘質土を薄く叩き締めた貼り床と認識できる平坦面を検出した。壁体、柱穴等が無いいため明確ではないが竪穴住居の床面と考えられる遺構である。

出土遺物 竪穴住居に伴う遺物は出土していないが、検出中に出土した遺物から弥生時代の遺構と考えられる。
(井上)

竪穴住居-24 (図版4)

位置 P17区の南西において竪穴住居-25にその大部分が切られ、僅かに南西側一部分が検出されたにすぎない。

構造 検出されたのは住居コーナー部分が1か所と比較的直線的に伸びる肩のプランであった。したがって住居構造の詳細については平面方形を基調とすることが推測される以外は言及できない。住居検出面は海拔375cmにあり、床面までの深さ約20cmを測った。床面からは壁体溝が1本検出されたのみで、その他柱穴、中央穴等は確認されなかった。

出土遺物 土器をはじめとする遺物の検出がまったく見られなかったことで、詳細な時期についてはできないが、この住居を切った竪穴住居-25との関係から推察するとおよそ弥生時代後期前半の範疇で理解されるものであろう。
(島崎)

竪穴住居-25 (図版4・295)

位置 竪穴住居-24の埋没後、その東側にほとんど重複した状態で構築されていた。南西側の一部が橋脚の基礎により一部切られていたが、比較的遺存状況の良好な住居であった。

構造 平面的には東西・南北方向を基調とした隅丸方形を呈する住居で、東西492cm、南北521cmの規模を測った。検出面は海拔380cmで、検出面から床面までの深さは約20cmである。床面からは、柱穴、中央穴、さらには4か所の被熱面の存在が確認された。柱穴は、70cm前後の径で床面からの深さ50~90cmの掘り方を呈するものであった。中央穴は、4本の柱穴のほぼ中央部分に大・小2基が切り合った状態で検出された。状況から共存したか否かは明確にできなかった。いずれも比較的浅く、大きいもので床面から約40cmを測った。その他に、床面直上には一辺15cm程度ではあるが、作業台としての置石が見られた。

出土遺物 図化可能な土器が見られなかったことで、出土遺物は掲載していないが、状況から弥生時代後期前半の範疇で考えて差し支えない。
(島崎)

竪穴住居-26 (図版5)

位置 P16区の東端北寄りにおいて、古墳時代の溝-24により一部切られた状態で検出された。

構造 長軸長374cm、短軸長354cmを測り、平面隅丸方形を呈する住居である。平面の検出面は、海拔340cmで、検出面から床面までの深さは約25cmと比較的遺存状況は良好である。床面からは、壁体溝、中央穴などが検出されたが、主柱穴については精査を行ったにも拘らず検出できなかった。中央穴は、住居中央に長軸長約1m、幅60cm、深さ20cmの楕円形の落ちとその上端面に厚さ約5cm前後、幅20~25cmの粘土帯がこれを取り囲むかの状況で見られた。さらにこの中央穴を中心に径20~30cm、深さ30cm前後の規模の柱穴が4本、住居の主軸方向を意識した状況で見られた。なお、東西方向の2

本は粘土帯と共存していたようで、粘土帯が柱穴の所でこれを避けるかの状況にあった。

出土遺物 床面に遺存した状態での在り方は認められなかったが、弥生中期中葉段階を示す土器片が散見された。(島崎)

竪穴住居-27

位置 調査区の南東付近に位置し、後述する竪穴住居-92~94によってそのほとんどを切られた状況で確認された。

構造 竪穴住居-92~94や調査時の損壊によりその大部分が削平されている。このため平面形や規模については不明であり、わずかに最大長約1.8m、最大幅約0.4m程度の壁体溝のみしか検出できなかった。壁体溝底の海拔高は約330cmであり、他住居が示す数値と大きな差はなく、床面の標高も340cm前後のものであったと思われる。

出土遺物 土器の出土は見られなかったが、サヌカイト製で最大長5.15cm、重量5.7gを測る大形の平基式石鏃S35が壁体溝の埋土より出土している。このことから時期はおおむね弥・中・Ⅲ~弥・後・Ⅰ期と考えられる。(澤山)

竪穴住居-28 (図版6・296)

位置 Q17区の南東部に位置し、袋状土壇-57を削る一方で、南半を竪穴住居-29・30に削られている。また、東部の上層は竪穴住居-90にも削られている。ただし、竪穴住居-29による改変の程度は低く、その床面下で構造を知る資料を得ることができた。

構造 西辺については不詳であるが、平面形は主軸をN-20°-Wにおく長方形に復元され、最大長軸長680cm、短軸長616cmをそれぞれ測る。北辺から東辺にかけて高さ50cmが残る壁体はやや外傾しており、両辺ともその裾をめぐる壁体溝より外側に膨らんでいる。壁体溝は南辺でも検出されており、幅10~22cm、深さ8cm程度を測る。復元面積約38㎡の床面には高床部は認められず、海拔高324cm前後でほぼ平坦である。柱構造は4本柱と考えられ、側壁から100cm程度内側で3本を検出している。柱間は北辺で310cm、西辺で350cmを測り、柱掘り方は径60cm程度の円形に復元され、深さは25cm未満と浅い。この他に3本検出された径30cm程度の柱穴については、性格不明である。中央穴は2基が重複して検出された。径80cm、深さ20cm程度の円形である。南辺の壁体溝を削る形で検出された130×115×30cmの楕円形の土壇は方形土壇として扱いうるものであるが、上層の竪穴住居-29に伴う可能性も残る。

出土遺物 土器は少量が出土したのみで、図示できるものはないが、壁体溝から有袋鉄斧M44、方形土壇から砥石S121が出土している。M44は鍛造品で、袋部を大きく欠いているがほぼ全容を知ることができる。S121は、側辺が4面とも使用されている。時期については、埋没後に竪穴住居-29・30に削られていることから、弥・後・Ⅳ期以前として捉えられる。(光永)

竪穴住居-29 (図版5・117・296)

位置 Q17区の南東部に位置しており、竪穴住居-28を削る。また、東辺を竪穴住居-30に、上層を竪穴住居-89・90に削られている。これらによる改変と、二次に分かれた調査のために全容が明瞭でない。

構造 平面形は、主軸をN-10°-Wにおく不整な隅丸方形と推定され、計測しうる規模は長軸長590cm、短軸長550cmで、復元される床面積は31.1㎡程度である。北辺において高さ45cm程度が残る側壁は外傾しており、検出された部分においては直線を呈さない。西辺の一部において幅15cm程度の

壁体溝を検出したが、他では断面においても検出されていない。海拔高326cmの床面には高床部は認められず、柱穴・中央穴等も検出されなかった。

出土遺物 遺物は埋土からの出土で、弥生土器の壺755・756、甕757～759、高杯761・762、鉢764、台付鉢763等の他に鉄器M56がある。このうち755・756・760は非在地系土器であり、前二者が讃岐系土器、後者が山陰系土器と考えられる。時期は、高杯の形態から弥・後・Ⅳに比定される。(光永)

竪穴住居-30 (図版7・118・297)

位置 Q17区の南東部に位置して、竪穴住居-28・29を削り、上層を竪穴住居-90に削られている。

構造 平面形は、主軸をN-37°-Wにおく長方形で、長軸長456cm、短軸長396cmを測り、床面積は17.3㎡である。北隅で最大高63cmが残る側壁は、比較的直立に近い。海拔高310cm前後の床面には高床部は認められず、幅10～15cm、深さ10cm程度の壁体溝が北辺を除いて検出されている。主柱穴は2本を検出しており、柱間226cmを測る。柱掘り方は、径22cmと48cmの円形で、深さ25cmと38cmを測り、側壁との距離110～120cmである。この柱穴間に、上幅20cm、高さ3cm程度の低平な土堤に囲まれた中央穴が位置し、試掘溝によって南および西端が失われているが、平面楕円形の浅いくぼみとなっている。側壁南東辺中央部に取りつく形で、方形土壙が検出されている。側壁に対して斜めに位置しているが、1辺70cm、深さ45cmを測り、甕774が出土している。この他に、北隅に近い床面上には焼土の堆積も認められた。

出土遺物 甕773～775、高杯776があり、前述のように774は方形土壙からの出土である。773・774はく字状に外反する口縁部で、775は上方に拡張する口縁部外面に擬凹線がめぐらされるものであるが、ともに底部内面に指頭圧痕が残っている。776は短脚である。時期は、弥・後・Ⅳに比定される。

(光永)

竪穴住居-31 (図版6・117・118・297・356)

位置 Q17区の北東に位置する橋脚部分で検出した竪穴住居で、その大半は南西の調査区外に広がっている。

構造 竪穴の一部を検出するにとどまったため全形を知り得ないが、北東隅の形状からすれば隅丸方形をなすものと推定される。現状の規模は、北辺で1.7m、東辺で2.8mを測り、深さは10cmほどある。標高323cmを測る床面はほぼ水平をなすが、埋土との区別は明瞭でなく、遺物の分布からかろうじて識別できたにすぎない。このため壁体溝など付属施設の有無については必ずしも明らかではない。

出土遺物 北東隅の床面を中心に壺、甕、鉢などの土器が出土している。765は口径25.8cmを測る大形の壺である。直立する頸部や上下に拡張した口縁端部に凹線をめぐらす。肩の張る体部は外面をヘラミガキ、内面をハケメで調整している。口径18.9cmを測る768は大形の甕で、外反する口縁端部を上方に拡張し凹線を飾る。体部は、外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面下半をヘラケズリする。769はく字形の口縁部をもつ甕で、口径24.8cm、器高28.8cmを測る。内外面とも板状工具によるナデで調整しており、九州地方からの搬入品である可能性が高い。770は直立する口縁をもつ壺の側方に取手をつけた水差形土器で、口径9.0cm、器高19.6cmを測る。外面にはハケメを施し、内面はヘラケズリで仕上げる。772は、径16.8cmを測る口縁部から直線的に窄まる鉢で、脚台を備えていたものと思われる。外面はヘラケズリで調整し、内面には丁寧なナデを加えた製塩用の土器である。これらの

土器はおおむね仁伍式の範疇でとらえられ、弥・中・Ⅲ期に比定される。

(亀山)

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物-1 (図版7)

位置 P16区に展開する微高地沿辺部に所在する。

構造 海拔330cmにおいて検出されたもので、径約40~70cm、検出面からの深さ約50~60cmを測る比較的規模の大きい柱穴で構成されていた。規模は梁間1間×桁行2間で、それぞれに300cm、210~240cmの柱間を測る。主軸は東西・南北方向を基調としたもので、棟方向はN-72°-Eを示す。柱穴は一部に柱痕跡を残すものも見られるが、ほとんど柱が抜き取られた後に砂質土と同様に埋積していた。

出土遺物 柱穴埋土中からは時期を明確に特定するだけの遺物の検出が見られなかった。したがって、この建物の時期については、僅かに小片ながら遺存していた土器片と周辺に所在する竪穴住居-26などとの関係、さらに柱穴埋積土の状況からおおよそ弥・中・Ⅲに比定されよう。

(島崎)

(4) 井戸

井戸-1 (図版8・118・298)

位置 竪穴住居-15の南辺を壊して掘りこまれたもので、O17区の南東に位置している。

構造 上面は、長さ173cm、幅170cmの円形を呈する。断面は、深さ108cmを測るすり鉢形の掘り方の中央に、径51cm、深さ75cmの土壌を穿った、漏斗状を呈する。底面の標高は250cmを測るが、湧水層に到達しておらず、自噴していたかどうかは明らかでない。

出土遺物 壺、甕、鉢などの弥生土器のほか砥石S93が出土している。777は口径22.8cmを測る非在地系の壺で、強く外反する二重口縁には楯状工具により波状文を描く。下方に窄まる頸部は、外面をハケメ、内面をヘラミガキで調整する。甕は図示できなかったが、二重口縁に数条の擬凹線を飾るものである。778は口径12.0cmを測る口縁部が、深い体部からわずかに屈曲して上方に延びる鉢である。これらの土器は、弥・後・Ⅳ期でも新しい様相を示している。

(亀山)

(5) 袋状土壌

袋状土壌-1 (図版8・118・298・299)

位置 O17区の北東に位置し、東側を袋状土壌-3に、南を古墳時代の竪穴住居-32によって壊されている。

構造 上面は径135cmの円形で、現状での深さは32cmを測る。平坦な底面は径142cmの円形をなし、標高は342cmを測る。壁面は底から垂直に立ち上がるが、上縁がわずかに外方に広がっている。土壌の内部には土層がレンズ状に堆積しており、とくに底面では長さ60cm、幅48cmの範囲に炭化物の分布が認められた。

出土遺物 埋土からは、甕3、高杯1のほか水差形土器の取手が1点出土している。779は高杯の脚部で、脚径12.2cmを測る。わずかに上方に拡張した口縁部には4条の凹線をめぐらしている。肩の張る胴部の外面は、上半をタテハケ、下半を縦方向のヘラミガキで調整する。内面は頸部までヘラケズリしており、弥・後・Ⅰ期でも新しい様相を示している。

(亀山)

袋状土壇－2 (図版8・298)

位置 袋状土壇－1の北を壊してつくられた土壇で、北東を袋状土壇－3によって切られている。

構造 残存する部分がわずかなため全形は明らかではないが、上面は径135cmの円形をなすものと推定される。標高342cmを測る底面は平坦で、径142cmの円形をなす。高さ32cmの壁面は、底からわずかに内傾しながら立ち上がり、袋状の断面形を有していたものと思われる。土壇の内部に堆積した土層のうち、下層には崩落した壁面の一部と思われる地山ブロックが多く含まれていた。しかし、出土遺物は比較的少なく、土器の小片がわずかに出土するにとどまった。

出土遺物 壺1、甕3、高杯1が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。これらは弥・後・I期の特徴を示しており、他の袋状土壇と相前後して営まれたものと思われる。(亀山)

袋状土壇－3 (図版8・118・298・299・357)

位置 古墳時代の竪穴住居－32の南東にかかって検出したもので、袋状土壇－2の南を壊してつくられており、北東は調査区外に延びている。

構造 全体の半ばを検出するに留まったが、上面は径144cmの円形に復元される。底面は平坦で径124cmの円形をなす。その標高は330cmと袋状土壇－2より12cm低く、深さは現状で45cmを測る。断面は、南東側が外傾するのに対し、北西側は内傾ぎみに立ち上がる。これは、南東側が袋状土壇－2の埋土を切りこんでいることによるものと思われる。埋土はレンズ状の堆積を示しているが、とくに最下層には壁面に由来する地山ブロックを含む。また、東壁にそって甕が1個体出土した。

出土遺物 埋土から出土した遺物には、甕3、高杯1がある。このうち780は底面から出土した甕で、口径14.6cm、最大胴径22.5cmを測り、わずかに底部を欠いている。上方に拡張した口縁部には4条の凹線をめぐらしている。肩の張る体部はタタキで成形したのち、外面の上半をタテハケ、下半を縦方向のヘラミガキで調整する。内面は下半をヘラケズリするに留まり、弥・後・I期でも古い様相を示している。(亀山)

袋状土壇－4 (図版8・298・299)

位置 竪穴住居－32の下層で検出した袋状土壇で、袋状土壇－3の北西1mに位置する。

構造 上面は径114cm、底面は径103cmの円形を呈している。底面はほぼ平らで、標高は343cmを測る。検出面からの深さは7cmと浅く、上部構造については明らかでない。

出土遺物 竪穴住居－32による削平を受けて遺存は悪く、遺物も高杯の脚部が1点出土するにとどまった。これは肥厚した端部をもつもので、弥・後・I期に比定される。(亀山)

袋状土壇－5 (図版9・298・300)

位置 袋状土壇－4の南西1mに位置し、竪穴住居－32の下層で検出した土壇である。

構造 上面、底面ともほぼ円形をなし、その規模は上面で径114cm、底面で径103cmを測る。底面はほぼ平らで、標高は303cmとやや低い位置にある。現状の深さは7cmと浅く、上部構造については明らかでない。

出土遺物 埋土からは高杯の脚部片が2点出土したのみでその数は少ない。やはり弥・後・I期の所産と考えられる。(亀山)

袋状土壇－6 (図版9・300)

位置 袋状土壇－5の南西6mで検出した土壇で、北東を袋状土壇－7に切られている。

構造 上面、下面とも径112cmの円形をなす。底面はほぼ平らで、標高は303cmを測る。高さ58cm

第4章 調査の概要

ある壁面は垂直に立ち上がり、筒形の断面形をもつ。

出土遺物 埋土中の遺物として壺2、甕2、高杯1がある。いずれも小片のため図示していないが、弥・後・I期の様相を示している。 (亀山)

袋状土壇一7 (図版9・300)

位置 袋状土壇一6の北東を壊してつくられた土壇である。

構造 円形をなす上面は径88cmを測り、検出面から深さ107cmにある底面は径99cmの不整形円形をなす。標高は265cmを測り、袋状土壇一6より38cm深くなっている。壁面は平坦な底面から内傾しながら立ち上がり、断面は袋状を呈している。

出土遺物 弥・後・I期とみられる壺の口縁部が1点出土している。 (亀山)

袋状土壇一8 (図版9・118・119・357)

位置 O17区の北東、袋状土壇一7の西2.5mで検出したものである。

構造 上面は径152cmの不整形な円形で、現状での深さは135cmを測る。径143cmの円形をなす底面は平坦であるが、西にむかってわずかに傾斜しており、最深部の標高は256cmを測る。壁面は底から垂直に立ち上がり、断面は筒形を呈している。土壇の内部には土層がレンズ状に堆積しており、崩落した壁面と思われる粘土ブロックが含まれていた。

出土遺物 埋土の下層からは、壺2、甕4、高杯3、台付鉢1などの土器が出土している。781は口径17.6cmを測る壺の口縁部で、上下に拡張した端部には5条の凹線をめぐらしている。782~784は上下に拡張した口縁端部に数条の凹線をめぐらす甕で、張りの弱い体部は外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。785は口径15.8cmを測る台付鉢で、上下に拡張した口縁端部には3条の凹線をめぐらし、算盤玉形をなす体部の上半には刺突文を連続して施す。径13.0cmを測る脚部は、鉢部と一体で成形されている。筒部には5条を単位とする沈線を4段にめぐらし、裾部には三角形の透かしを飾る。高杯786は杯部のみで、口径22.0cmを測る。浅い体部から屈折して立ち上がる口縁端部はわずかに肥厚し、2条の凹線をめぐらしている。これらの土器は、弥・後・I期でも古い特徴を備えている。 (亀山)

袋状土壇一9 (図版9)

位置 袋状土壇一8の南6mで検出したもので、袋状土壇一10により切られている。

構造 残存する部分がわずかなため全形は明らかではないが、上面は径135cmの円形をなすものと推定される。標高338cmを測る底面は平坦で、径142cmの円形をなす。遺存する壁面は7cmと浅く、上部の構造については明らかではない。

出土遺物 埋土からは壺、甕の体部と思われる小片が若干出土しているのみで、細かな時期については詳らかではないが、おおむね弥・後・I期とみて大過ないものと思われる。 (亀山)

袋状土壇一10 (図版9・119・120・301・358)

位置 O17区の北東に位置するもので、袋状土壇一9の北を壊してつくられている。

構造 上面は径152cmの不整形な円形で、現状での深さは135cmを測る。径143cmの円形をなす底面は緩やかに凹み、最深部の標高は256cmを測る。壁面は底から垂直に立ち上がり、断面は筒形を呈している。埋土はレンズ状の堆積を示し、中層からは多量の土器が廃棄された状態で出土した。これらはその出土状況から主として南からの投棄、流入を想定させる。

出土遺物 埋土から出土した土器は壺10、甕9、高杯4、鉢2を数える。796は口径9.7cm、器高

19.8cmを測る直口壺で、ほぼ完形である。口縁直下には1条の凹線をめぐらし、強く張る肩部には刺突文を連続して施す。口径15.5cmを測る797は、屈曲する頸から延びる口縁の端部をわずかに肥厚させ2条の凹線を飾る。張りのある体部は外面をヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリしたのちハケメを施している。798はほぼ完形に復元できた壺で、口径17.9cm、器高31.0cmを測る。直立する頸部と上方に拡張した口縁端部にはそれぞれ3条の凹線をめぐらす。801は口径16.0cmを測る大形の甕で、口縁端部を上下に拡張し、5条の凹線を飾る。強く張る肩には連続する刺突文を二段にめぐらす。口径16.0cmを測る鉢803は、口縁端部を下方に引き出す。肩の張る体部は浅く、外面にヘラミガキを施す。804は口径12.0cmを測る甕で、深い体部から短く外反した口縁部は面をなして終わる。台付鉢805は短く外反する口縁をヨコナデで調整し、張りのある体部はヘラミガキで仕上げる。脚端部は肥厚して面をなし、裾部には円孔を穿つ。806は高杯の杯部で、口径24.8cmを測る。浅い体部から屈折して立ち上がる口縁端部を水平に拡張して2条の凹線をめぐらしている。これらの土器は、いずれも弥・後・I期の様相を示している。(亀山)

袋状土壙-11 (図版10・119・357)

位 置 袋状土壙-10の北を壊してつくられている。

構 造 検出面の規模は径112cmの不整な楕円形をなし、緩やかに凹む底面は径104cmの楕円形を呈する。現状での深さは112cmで、最深部の標高は256cmを測る。壁面は底からほぼ垂直に立ち上がり、断面はU字形をなす。土壙内の埋土はレンズ状に堆積しており、上層を中心に土器が廃棄された状態で出土した。

出土遺物 埋土から出土した土器は甕6、高杯1を数える。壺787、788のうち、787は直立する頸部からわずかに外反した口縁部が径11.8cmを測り、端部を上下に拡張して4条の凹線をめぐらす。張りのある体部上半には二枚貝の圧痕を三段にわたり連続して施す。790・792・793は拡張した口縁端部に凹線を飾る甕である。このうち793はほぼ全形を知り得るもので、口径11.9cm、最大胴径21.8cm、器高28.7cmを測る。体部は肩が張り、最大径は上位にある。下半の外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。791は下半を欠いているが、算盤玉形の体部をもつ鉢になるものと見られる。径14.6cmを測る口縁部には4条の凹線をめぐらし、強く張った肩部には櫛状工具による刺突文を連続して施す。794は鉢で脚台を有していたものと思われる。体部は肩の張りが強く、外反する口縁は端部を拡張して4条の凹線をめぐらす。795は高杯の脚部である。径14.6cmを測る脚端の上縁を水平に引き出し、裾部には円形の透かし孔を穿つ。これらのなかには古い様相を示すものも含まれているが、おおむね弥・後・I期の範疇におさまるものと思われる。(亀山)

袋状土壙-12 (図版10・301)

位 置 O17区の南東、袋状土壙-9の南東10mに位置し、竪穴住居-14の下層で検出したものである。

構 造 不整円形をなす上面は径128cmを測るのに対し、標高317cmを測る底面は径141cmと上面より広がっている。これは、高さ51cmある壁面が平らな底からわずかに内傾しながら立ち上がり、断面袋状をなすことによる。

出土遺物 埋土中から壺1、甕2、高杯1を出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。しかし、出土した壺や甕は肥厚した口縁端部に数条の凹線をめぐらし、高杯も口縁端部を拡張して凹線を飾るなど、弥・後・I期の特徴を示している。(亀山)

袋状土壙-13 (図版10・120・121・301)

位 置 袋状土壙-12の南西11mで検出した土壙で、O17区の南端に位置している。

構 造 円形をなす上面は径110cmを測り、検出面からの深さは49cmある。緩やかに凹む底面は径107cmの円形を呈し、最深部の標高は333cmを測る。壁面は底からほぼ垂直に立ち上がり、断面はU字形をなす。土壙内にレンズ状に堆積した埋土からは、土器が拳大の礫を混じえて出土している。

出土遺物 埋土から出土した土器は、壺1、甕3、高杯5を数える。壺807は、凹線を飾る頸部は上方に向かって開き、径を測る口縁は端部が肥厚して3条の凹線がめぐる。808・809は口径12.0～15.0cmを測る甕で、端部を上方に拡張した口縁部には3条の凹線を施す。810～812は高杯の杯部で、口径18.6～20.5cmを測る。5条の凹線を飾る口縁部は、直線的に開く浅い体部から屈折して直立し、端部に凹面をなす。高杯の脚部813・814は、下方に向かって広がる裾部の端を上へ引き出し、脚径は10.4～12.0cmを測る。815・816は径50.4cmを測る大形の鉢の口縁部で、脚台を備えていた可能性がある。直線的に開く体部から緩やかに屈曲して立ち上がる口縁部は端部が肥厚して平面をなす。これに対し816は、内傾する口縁部が体部と強く屈折し、外面に6条の凹線を飾る。これらは弥・中・Ⅲ期の特徴を示している。
(亀山)

袋状土壙-14 (図版10・121・302)

位 置 P17区の北で検出した土壙で、袋状土壙-13の南西4mに位置している。

構 造 上面は径97cmの楕円形をなし、平坦な底面は径87cmの円形を呈している。検出面からの深さは48cmで、最深部の標高は350cmを測る。壁面はわずかに内傾しながら立ち上がり、断面は袋状を呈している。土壙内には土層がレンズ状に堆積しており、少量の土器が出土した。

出土遺物 埋土から出土した遺物は少なく、わずかに甕3を数えるにすぎない。このうち817、818は、口径12.9～16.0cmを測り、上下に拡張した口縁端部には数条の凹線をめぐらす。817はなだらかな体部の外面をヘラミガキするが、肩の張る818は粗いハケメで調整する。また内面は、いずれも頸部までヘラケズリしており、弥・後・Ⅰ期の特徴を示している。
(亀山)

袋状土壙-15 (図版11)

位 置 P17区北側中央に位置し、溝-12の東に所在する。袋状土壙-14の南東約3mにあり、後述する袋状土壙-16と切り合い関係をもち、これに後出する。

構 造 検出面での規模は127×96cmを測る、ややいびつな楕円形の平面形を呈する。深さは28cmほど残存するのみであり、上部は大きく削平を受けていると思われる。88×72cmを測る底面の標高は351cmと比較的高い。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦気味である。

出土遺物 残存状況が悪いためか、出土遺物は少ない。図示はしていないが、高杯などの破片が出土している。これらの出土遺物と切り合い関係をも加味すれば、袋状土壙-15の時期は弥・後・Ⅰの古段階になるものと推測される。
(大橋)

袋状土壙-16 (図版11・121)

位 置 溝-12の東側に位置し、袋状土壙-15の北西部分を壊すように検出された。

構 造 上面は98×95cmのほぼ円形を呈する平面形をもち、深さは40cmほど残存していた。88cmを測る底面には幅20cm、深さ5cm弱の溝が周囲にめぐっている状況が認められた。底面の標高は334cmであり、重複する袋状土壙-15と比較して17cm低くなっている。壁面は、わずかに内傾して立ち上がる状況が観察された。

出土遺物 出土遺物は多くはなく、掲載できたのは819の高杯と820の台付鉢と思われる脚部のみである。819の高杯はやや深い杯部をもち、口縁部端部は僅かにT字形に肥厚させている。このほかに、S45の石鏃が出土している。また、図示していないが袋状土壙-15・16の上層からも高杯、甕などの破片がある。これらの出土遺物から、袋状土壙-16の時期は弥・後・Iと判断している。(大橋)

袋状土壙-17 (図版11・121)

位置 P17区北側に位置し、前述した袋状土壙-15・16の南東約10mで検出した。

構造 検出面で146×125cmを測り、深さ約90cmほど残存していた。底面は円形を呈し、径145×139cm、標高298cmを測る。その周囲には、わずかに2～3cmほどの溝状の窪みが断面の観察により判別できた。壁面はいったん内傾し、中程で最小径110cmを測ったのち外傾する。埋土は、レンズ状堆積を示さず、北東側に傾斜した堆積状況が観察された。また、炭・灰を多く含む層もあり、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物 出土した土器は破片がほとんどであり、その量は多くない。図示したのは、821～823である。このうち、823は、手捏ねで作られた台付壺であり、器高7.8cmのミニチュア品である。これら図示した遺物から考えて、この袋状土壙の時期は弥・後・Iのなかにおさまるものと思われる。(大橋)

袋状土壙-18 (図版11・121・302・359)

位置 P17区北側、溝-12の東岸に位置し、袋状土壙-15の南西約7mで検出した。

構造 検出面で198×170cmを測るやや楕円形を呈し、深さ91cmほど残存していた。175×145cmを測る底面の標高は289cmである。この底面の東側で幅10cmほどの溝を検出した。壁面はほぼ垂直に立ち上がる状況が認められる。この袋状土壙の埋土は、炭層が確認される中位より上ではほぼレンズ状堆積を示す。

出土遺物 824～828を図示した。824・825は壺である。826は小形の台付鉢で、椀形の鉢部をもつ。828は取手付きの鉢である。器高8.5cm、口径10.0cmを測る。このタイプの取手付き鉢は津寺遺跡の中でも比較的少ない。これらの出土遺物から、この袋状土壙の時期は弥・後・Iになるものと思われる。

(大橋)

袋状土壙-19 (図版12・121・302)

位置 P17区北側、袋状土壙-15・16の東方約10mで検出したもので、溝-12の東岸から約18mの位置にある。

構造 検出面で105×99cmを測る円形を呈し、底面までの深さ88cmを測る。底面の標高は304cmであり、その規模は88×77cmを測る。土層断面の観察によれば、底面北側が溝状に窪む状況が看取されたが、湧水が激しく平面的には検出できなかった。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。この袋状土壙の埋土は、上半がレンズ状堆積を示し、ここに土器・炭が集中していた。おそらく、本来の機能を果たさなくなった後に、ゴミ穴として再利用されたものと理解される。

出土遺物 図示した遺物はすべて埋土上層からの出土で、829は壺、830・831は甕、832は高杯、833は器台である。これらの遺物は、直接的にこの袋状土壙の時期を示さないものの、さほど隔たるものではないと考えられる。また、他の袋状土壙などの状況から考えても、弥・後・I段階に位置づけてもさしつかえないものと思われる。

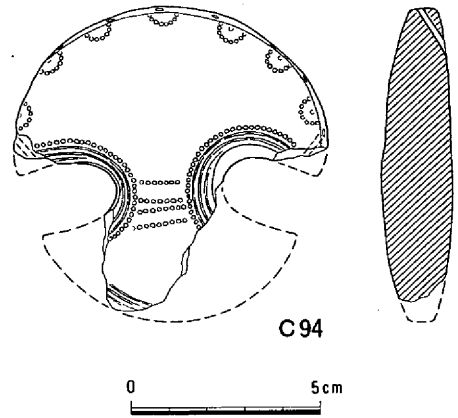
(大橋)

袋状土壙-20 (図版12・121・359)

位置 P17区北側、溝-12の東岸から約5m離れた位置で検出された。袋状土壙-18の南西隣に

ある。

構造 検出面での規模は97×93cmで、底径は114×108cmを測り、底面の方が広がる。円形の平面形をもつ。深さ95cmほどが残存しており、底面の標高は284cmを測る。壁面は、内傾気味に立ち上がる。底面には、平面的に確認できなかったものの、周囲が溝状にやや窪む状況が断面の観察で確認された。また埋土の1～5層は、これより下位とは異なった堆積状況を示し、この部分が何らかの目的で再利用された可能性が考えられる。



第11図 袋状土壇-20出土遺物 (1/2)

出土遺物 834～837、S46、C94を図示した。これらはいずれも1～5層から出土したもので、834が壺、835・836が甕、837が高杯である。835・836の甕の内面は、頸部下端までヘラケズリされている。837の高杯は口縁端部をT字形に肥厚させ、その外面端部と、杯部の立ち上がり部の二段に刺突文を施している。S46はサヌカイト製の打製石包丁と思われる。長方形を呈し、明瞭な挟りはもたない。C94は、津寺遺跡から出土した分銅形土製品のみで唯一全形を知り得るものである。上縁には刺突による弧文を飾り、これに対応する上端には背面へ貫通する孔を穿つ。ただし、幅8.2cmを測る上半の両端の孔は挟りこみに向かって貫通する。この挟りこみにそうように櫛描沈線と刺突文をめぐらしているが、上半に比べて小さくなる下半も櫛描沈線で縁取る。また、挟りこみの間には刺突文による4条の横帯を飾っている。厚さ1.7cmを測る断面は表面が膨らむように湾曲するものの、両端は角張って終わる。袋状土壇の時期は、これら上層から出土した土器をもとにして、弥・後・I段階と判断している。(大橋)

袋状土壇-21 (図版12)

位置 P17区の北側で検出した袋状土壇で、溝-12の東岸から約5m東方に位置する。

構造 検出面での規模は107×96cmを測り、円形を呈する。底部までの深さ68cmが残存しており、底面の標高は329cmと比較的高い。底面の周囲には幅約10cm、深さ約5cmほどの溝がめぐっている状況が認められた。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土の中位にあたる7層で土器片、礫などが比較的まとまって出土しているが、いずれも細片であった。

出土遺物 細片がほとんどのため、ここに掲載していないが、これらの土器片と他の袋状土壇の状況を勘案すれば、袋状土壇-21の時期を弥・後・Iと考えることが可能と思われる。(大橋)

袋状土壇-22 (図版12・122)

位置 P17区の北側、溝-12の東岸から約8mの位置にあり、古墳時代前半の溝-16の底で検出された。土壇-76の北東側と重複し、これを切る。

構造 溝-16の底で検出されたため、上部は大きく削平されているものと思われる。検出面での規模は116×114cmの円形を呈する平面形である。深さ88cmの位置にある底面は径104×102cmを測り、その標高は286cmであった。この底面の周囲にも幅約10cmほどの溝がめぐっていることが観察できた。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土はレンズ状堆積を示さず、人為的に埋めた可能性が指摘される。

出土遺物 出土遺物は細片がほとんどで、その量も少ない。ここでは836～838を図示した。これらからこの袋状土壇の時期は、弥・後・Iと考えられる。(大橋)

袋状土壇-23 (図版12)

位置 P17区北側、溝-12の東岸から約8mの位置にあり、袋状土壙-22の南東約5mで検出した。

構造 上面は132×104cmを測るやや楕円形の平面形を有する。検出面から深さ100cmの位置にある底面は平坦気味で、122×120cmの円形を呈する。壁面は、この底面からいったんやや膨らみながら立ち上がり、中ほどで内傾して口部へと続く、いわゆる袋状を呈する断面形が観察された。

出土遺物 ここには図示していないが、少量の破片が出土している。これらを参考にすれば、この袋状土壙の時期は弥・後・Iの段階とみて大過はないであろう。(大橋)

袋状土壙-24 (図版13・122)

位置 P17区に検出した袋状土壙で、弥生時代中期後半の竪穴住居-20の北辺を切っている。

構造 上面は長径134cm、短径124cmのほぼ円形で、現状の深さ73cmを測る。断面は底部が広がる袋状をなし、ほぼ円形をなす底面は平らで長径142cm、短径133cmを測り、標高は294cmである。埋土は7層に分離可能であったが意識的に埋め戻した堆積状況と思われる。

出土遺物 遺物には弥生土器の壺と高杯、磨製石斧片がある。その時期は遺構の切り合いや出土遺物の特徴から弥・後・I期の範疇におさまるものと思われる。(山磨)

袋状土壙-25 (図版13・122・303・359)

位置 P17区に検出した袋状土壙で、上面を中～近世の溝-43により削平されている。

構造 上面は長径103cm、短径96cmのやや不整形な円形をなし、現状での深さ44cmを測る。断面は筒状をなし、底面も上面と同様にやや不整形な円形をなし、長径85cm、短径78cmを測る。底面はほぼ平らで、標高281cmを測る。埋土は5層に分離可能で、第1層の壁面に接して完形の壺844が出土している。

出土遺物 壺844は、口径10.8cm、胴径16.5cm、底径5.5cm、器高23.3cmの完形で、上方に拡張する口縁部に数状の凹線文が残る。胴部外面はタテハケ、内面は胴部中央付近までヘラケズリを施している。弥・後・I期でも新しい様相を占めている。(山磨)

袋状土壙-26 (図版13・122)

位置 P17区の竪穴住居-55の南辺付近の下層で検出したもので、袋状土壙-32の北西3m程の位置にある。

構造 上面は長径140cm、短径131cmのやや不整形な円形をなすが、底面は長径110cm、短径103cmのほぼ円形を呈している。底面はほぼ平らで、標高303cmを測り、検出面からの深さは67cmある。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分離可能で下層より遺物の出土があった。

出土遺物 弥生土器の壺、高杯が出土している。高杯は長脚で円形の透かしを施す脚部851と、脚部との接合部に円盤充填を施し、口縁立ち上がり部の拡張の少ない杯部850とがある。時期は器形の特徴から弥・後・I期と思われる。(山磨)

袋状土壙-27 (図版13・122・303・359)

位置 P17区の北側やや東寄りに位置し、袋状土壙-26の北東約8mで検出された。この袋状土壙の北約2mにはほぼ同時期の竪穴住居-16・17が所在する。

構造 標高380cm付近で検出したもので、上面は径102cmを測る円形をなす。深さは74cmほど残っており、底面の標高は307cmである。底面は平坦気味であり径107×101cmを測る。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり口部へと続く。埋土は、底付近で炭・灰を多く含むが、中ほどでは黄褐色の粘質

第4章 調査の概要

土塊を含む層も観察され、いわゆるレンズ状堆積は認められない。このことから人為的に埋め戻したものと判断される。

出土遺物 出土遺物は細片がほとんどであり、ここでは比較的形状のわかる845・846のみを図示した。845は最大径を体部の中位やや上にもつ甕であり、肩部に刺突文をめぐらしている。口縁部は斜め上下に拡張させ外面を形成している。内面は最大径をもつ付近までヘラケズリされている。器壁は、灰色系の色調である。846は高杯の脚部と思われる。脚裾部に沈線状の凹部をめぐらしている。この袋状土壌の時期は、これらを勘案すれば弥・後・Iでも古相に位置づけられる。(大橋)

袋状土壌-28 (図版13・122)

位置 袋状土壌-27の東隣約0.5mで検出した。

構造 上面は127×117cmのややいびつな円形を呈し、底面は123×113cmを測る楕円形をなす。検出面から底面までの深さは66cmで、底面の標高は309cmを測る。土層断面の観察からこの袋状土壌も底面の周囲に幅約10cm程度の溝状の窪みが確認されたが、湧水が激しく平面的には把握していない。壁面は、この底面からほぼ垂直に立ち上がり口部へと続く。また埋土の下半には、土層が塊状に堆積している様相が認められ、人為的に埋められたものと理解している。

出土遺物 図示した土器のうち、852は甕、853は壺ないし甕の体部、854・855は高杯である。852の甕は最大径を体部中央よりやや上にもち、内面のヘラケズリも体部の中位までである。854は脚裾部に山形の刺突文を施している。855の高杯は、口唇部をわずかに肥厚させ上面を形成している。これらの出土遺物は袋状土壌-27と同様、弥生時代中期末の様相を強く残すものと思われる。この袋状土壌-28の時期は弥・後・Iでも古相段階と理解している。(大橋)

袋状土壌-29 (図版14)

位置 P17区の北半部東寄り検出されたもので袋状土壌-28の南東約5mの位置にある。調査区境の壁面の観察により存在を確認したが、平面的には検出していない。

構造 確認されたのは、袋状土壌の端に近い断面と思われ、これからこの土壌の平面形や規模をうかがい知ることはできない。しかしこの土壌は、標高418cmあたりから掘り込まれており、底面の標高は267cmを測る。深さは151cmあり、上部が一部後世に削平されている可能性はあるものの、袋状土壌の本来の深さを考える一つの指標となるであろう。壁面はやや内傾気味に立ち上がり、わずかに底面の中央が窪む状況が判明した。埋土は、下半部が水平、あるいは塊状に堆積していることから、この部分が人為的に埋め戻されていたと判断している。

出土遺物 壁面のみを観察であり、出土遺物は確認していないため、これからこの袋状土壌の時期を求めることはできないが、周辺に所在する他の袋状土壌を勘案すれば弥生時代後期初頭と考えても大過ないものと思われる。(大橋)

袋状土壌-30 (図版14)

位置 袋状土壌-29の南南西約3mに位置する。古墳時代初頭の溝-16の溝底で検出されたもので、上部は大きく削平されていた。

構造 検出面では、長径136cm、短径119cmの楕円形を呈するものである。中央がやや窪む底面は、158×127cmの楕円形を呈し、下底部の方が口部より大きくなる。深さは88cm残存しており、底面の標高は273cmであった。壁面は内傾して立ち上がり口部へと続く断面形をもつ。

出土遺物 出土遺物は細片がほとんどでここには掲載していないものの、これらの遺物と周囲の袋状

土壌の状況を加味すれば、この袋状土壌の時期は弥・後・I段階と考えることが可能であろう。

(大橋)

袋状土壌—31 (図版14・123・303)

位置 P17区の中央やや北寄りに位置し、袋状土壌—30の南約3mで検出された。

構造 検出面での規模は142×126cmを測る、やや大形の楕円形の平面形を呈するものである。底面では153×134cmを測り、上面より底面の方が規模がわずかに大きい。深さ95cmの位置にある底面の標高は285cmであり、ほぼ平坦であった。壁面は、北側でほぼ垂直に立ち上がるものの、南側は大きく内傾して立ち上がる状況が確認された。土層断面の観察から、下半部で炭・灰・焼土を多く含む層を認めた。

出土遺物 図示したのは、858～860、S95である。このうち860の甕は灰白色系の色調を示すが、内面のヘラケズリは口縁部の下端まで及んでいる。また859の壺は、口縁部外面に竹管文、棒状浮文を配し、また内面の上面にも竹管文とこれを結ぶ線刻が施されている。頸部下端には刺突文がなされており、加飾が著しい。S95は流紋岩製の砥石である。6面とも使用されているようである。これらの土器は弥生時代中期末の様相を残すものの、内面のヘラケズリが体部上部まで及んでいることなど新しい様相がみられ、全体的には弥・後・Iと理解している。

(大橋)

袋状土壌—32 (図版14・122・123)

位置 P17区に検出したもので袋状土壌—26と3m程の間隔を置き、重複する土壌—83に西半部を切られている。

構造 上面は長径118cm、短径113cmのほぼ円形をなすが、底面は長径98cm、短径79cmのやや不整形な円形を呈す。標高303cmを測る底面はほぼ平らで、検出面からの深さは71cmである。断面は逆台形を呈し、埋土は6層に分離可能であった。

出土遺物 3点の甕が図化可能であった。これらには口縁端部に凹線文を施した856と施さない857がある。胴部内面の頸部までヘラケズリを施している特徴等から、時期は弥・後・I期の範疇であろう。

(山磨)

袋状土壌—33 (図版15・123・359)

位置 P17区の中央部に位置し、溝—12の西岸で検出された袋状土壌である。

構造 上面は162×137cmを測るややいびつな楕円形を呈する。底面は160×131cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は中央部が凸状に脹らみ、結果的に周囲がやや溝状に低くなる状況が観察された。この底面中央部の標高は259cmを測る。

出土遺物 出土遺物はほとんどが細片であり、掲載できたのは861の台付鉢の脚部のみである。これと出土した細片の土器を考慮すれば、この袋状土壌の時期は弥・後・Iと判断される。

(大橋)

袋状土壌—34 (図版15・304)

位置 袋状土壌—33の北西隣に位置する。

構造 上面の径が124cmを測る円形を呈するものである。深さは57cm残存しており、径110cmを測る。底面の周辺には幅15cm、深さ5～10cmほどの溝がめぐる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる状況が観察された。埋土は、下層と上層においてレンズ状堆積を認めるものの、中層では塊状の層がみられ自然堆積とは思われない。

出土遺物 出土遺物は少量の細片であり、これからこの袋状土壌の詳細な時期を求めることはできな

第4章 調査の概要

いが、周辺に位置する他の袋状土壙の時期を考慮すれば、弥生時代後期前半とみても大きな相違はないものと考えられる。(大橋)

袋状土壙-35 (図版15)

位置 溝-12の西岸から約5m南西で検出されたもので、後述する袋状土壙-36の南西隣に位置する。

構造 南西半分を失っており、全体の規模、構造は不明であるが、検出できた範囲から推定すれば上面が長径107cmを測る楕円形を呈するものと思われる。深さは60cm残存しており、最大径82cmを測る底面はやや平坦気味のもので、溝等はない。壁面はやや外傾しながら立ち上がる。埋土はほぼレンズ状堆積を示した。

出土遺物 出土遺物は細片がほとんどであり、図示することはできなかった。しかしこの袋状土壙の時期も、前述した袋状土壙-34と同様、周辺に位置する他の袋状土壙の時期を考慮して、弥生時代後期前半とみても大きな相違はないものと考えられる。(大橋)

袋状土壙-36 (図版15・123・304・359)

位置 袋状土壙-35の北西隣に位置するものである。

構造 検出面での規模140×136cmを測る円形をなす。底面は径122×120cmを測り、深さは88cmある。底面の標高は286cmである。この袋状土壙も床面の周囲に溝状にめぐり窪みが確認された。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は上部ではレンズ状堆積を認めるものの、下半では不規則な堆積が観察され、人為的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物 出土遺物は比較的多い。このうち、おおよその形状がわかるものを図示した。**862**は無頸壺である。胴最大径付近に沈線状の凹みをもつ。口縁部には2方向に円形の透し孔がある。**863**は甕、**864・865**は高杯である。これらの出土遺物からこの袋状土壙の時期は弥・後・Iと考えている。

(大橋)

袋状土壙-37 (図版15・123・304・305・359)

位置 溝-12の西岸約2m、袋状土壙-35の南南東約5mで検出された。

構造 上面は、長径144cm、短径136cmを測るいびつな楕円形を呈する。これは西半部が一部崩落しているためと思われ、本来壁面は垂直に立ち上がるものと思われる。底面は円形を呈し、134×126cmを測る。深さ87cmの位置にある底面は、標高261cmを測り、その西半部に限って溝がめぐり状況が観察された。

出土遺物 出土遺物は**866~868**を図示した。**866**の甕の内面は下半がヘラケズリ、上半はハケメ調整されている。**867**の高杯は端部をT字形に肥厚させ上面を形成している。これらの出土遺物から、この袋状土壙の時期は弥・後・Iと考えている。(大橋)

袋状土壙-38 (図版16・123)

位置 溝-12の西岸に接して検出された。袋状土壙-37の北東隣に位置する。

構造 標高340cmあたりで検出したもので、深さは78cm残存していた。上面は長径193cmを測る楕円形を呈し、壁面は平坦な底面からやや内傾しながら立ち上がる。また、東半は堆積が進行する過程で大きく崩落しているものと理解している。

出土遺物 **869**の甕を図示した。出土遺物は少ないものの、これを参考にすれば、袋状土壙-38の時期は弥・後・I段階のものと考えられる。(大橋)

袋状土壙—39 (図版16・123)

位置 P17区の南西に位置する。古墳時代の竪穴住居—77の下層において微高地上面の海拔約325cmで検出された。後述の袋状土壙—40とは約50cmと比較的近接した位置にあった。

構造 既に上部構造の大部分は後世の微高地上面の削平により除去されていたため、本来の構造については不明である。検出面は、長軸長143cm、短軸長141cmを測るほぼ円形を呈するもので、検出面から壙底までの深さは深い部分で72cm、浅い部分で64cmを測った。断面形は、検出面から壙底までほぼ垂直か、部分的に壙底に近づくにつれて径を拡大するもので、台形を呈する。壙内には、壙底に甕が完形1点を含む3点の遺存が確認された程度でその他の遺物は検出されなかった。埋積土は、第1・5層以外にはすべて粘性に若干の差異はあるものの砂による堆積をみせるもので、おそらく洪水によって埋没したものと推測されよう。

出土遺物 壙底から出土した土器は甕870、高杯871～874である。特徴から時期は、弥・後・Iに比定され、後期初頭に位置づけられる。(島崎)

袋状土壙—40 (図版16・124)

位置 P17区の南西にあって、袋状土壙—39の南約50cmに近接した位置に所在が確認された。平面検出面の海拔は、290cmと袋状土壙—39に比較して浅い。

構造 上部構造は不明である。検出面が相当低位にあったため本来の状況については明瞭でない。検出できたのは長軸長131cm、短軸長125cm、検出面からの深さ28cmを測ったにすぎない。平面形が円形を基調とした不整形であり、断面形態が壙底から上部にかけて径を縮小するであろうという傾向が認められたことで袋状土壙と認定した。また、壙内の埋積土は袋状土壙—39と同様に砂質土であったことで、これも洪水によって埋没したことが推測された。

出土遺物 埋積土中から壺875、高杯876・877が散見された。これによると時期は、弥・後・I段階に比定される。(島崎)

袋状土壙—41 (図版16・305)

位置 P17区の南西において、古墳時代の竪穴住居—76下層で一部これと切り合った状況で検出された。検出面は、海拔365cmで前述の袋状土壙—39、40に比較して高い位置での検出であった。

構造 上部構造は不明である。また、下部構造についても一部竪穴住居との切り合いで明確ではないが、平面径139cmの長軸長を有する。壙底までの深さは検出面から94cmの規模を測った。断面は、胴部が比較的垂直気味に壙底へと至る。検出面の深さと、土壙内が前2者同様に洪水砂と推測される砂質土で底から上まで埋没していることから本来は袋状を呈するものと推測する。

出土遺物 出土遺物は埋積土中からはまったく検出出来なかった。したがって、詳細な時期についての言及はできないが、状況から弥生時代後期初頭に比定して差し支えないと考える。(島崎)

袋状土壙—42 (図版17・124・305)

位置 P17区の南西の海拔365cmを測る微高地上面において検出された。他の遺構との切り合いは見られなかった。

構造 上部構造は不明である。平面は径130cm前後を測る円形を呈する。検出面から平坦な面をもった壙底までは約90cmを測り、断面は検出面から徐々に径の規模を縮小する。必ずしも断面袋状を示さない。壙内埋積状況は、下層の第6・7層には炭の包含が多く認められるが、上層の第1～5層にかけては洪水によると考えられる砂の堆積が認められた。

出土遺物 覆土中から甕878と高杯879の2点が検出された程度であった。これによると時期は弥・後・Iに比定されよう。(鳥崎)

袋状土壙-43 (図版17)

位置 P17区の南西にあって袋状土壙-42の南約400cmの地点において検出された。検出面は海拔約360cmであった。

構造 上部構造は不明である。下部構造は平面検出面において若干の不明瞭な点が存在したが、基本的には長軸長を東西方向にもち規模は東西100cm、南北75cmの楕円形を呈するものであった。平面検出面から壙底までの深さは75cmを測り、その壙内断面形は検出面より壙底の方が径約86cmと大きい台形状を呈していた。壙内は、粘性の差異はあるものの基本的にはすべて砂によって埋没を完了しており、周辺の土壙と同じく洪水の結果と推測された。

出土遺物 壙内からは図化可能な状態での遺物はまったく検出できなかった。また、わずかに散見された土器片からも時期を特定させるだけの要素は見受けられなかった。したがって、時期については判然としないが、ただ周辺に所在する同様の袋状土壙などとの関係から、おそらく弥生時代後期前半までの範疇で理解して差し支えないであろう。(鳥崎)

袋状土壙-44 (図版17・306)

位置 P17区の南西、袋状土壙-44の南約4mの地点において海拔360cmで所在が確認された。

構造 遺存する平面形は、南北方向に長く東西方向に短い楕円形を呈していた。規模は、南北172cm・東西145cmを測った。検出面からの深さは、壙底が平坦面を見せないことで一定ではないが中央部で約70cmを、最深部で91cmを測った。断面は、検出面から壙底にかけて徐々に規模を縮小するもので逆台形を呈する。壙内埋積状況は、下半部の第3～6層は砂により、上層の第1～2層が粘質土によって埋没していた。

出土遺物 壙内からは土器片を含む一切の遺物の出土が認められなかった。したがって、時期についての詳細は不明であるが、周辺に所在を見せる同様の袋状土壙との関係から弥生時代後期前半の範疇で理解される。(鳥崎)

袋状土壙-45 (図版17・306)

位置 P17区の南西で袋状土壙-44と一部重複し、袋状土壙-44に切られた状態で検出された。平面検出面は、海拔360cmであった。

構造 土壙の上半部が削平を受けていたため全体像が判然としない。検出されたのは南北方向に長軸長をもったもので、その規模101cmを測り、幅約90cmが推測された。深さは、底面が東から西にかけて徐々に深さを増すことで判然としないが、中央部で約45cmを測った。平面検出面から壙底にかけては垂直もしくは緩やかに斜傾する壁をもつ、断面逆台形に近い形状であった。壙内埋積土は、周辺の袋状土壙が砂で埋没していたのと異なり第1層～第4層までが粘質土であった。

出土遺物 遺物の遺存が全く認められなかったことで時期についての詳細な検討はできないが、袋状土壙-44との切合い関係などを参考にすれば、おおむね弥生時代後期前半までの位置づけが推測されよう。(鳥崎)

袋状土壙-46 (図版17・124・306)

位置 P17区の南西にあって袋状土壙-45の南東側に接した状態で検出された。平面検出面は、海拔360cmにあってこれも前述の袋状土壙-45などと同じである。

構造 上部構造が後世の削平によって欠如していたことと東側の約1/2が調査区境の側溝によって削平を受けていたため明確ではないが、遺存する土壇は平面的には南北120cm、東西110cmを測る円形であった。壇底は比較的平坦で検出面からの深さ76cmを測った。壇内は、一部に粘質土の堆積が認められるもそのほとんどは砂であった。第4・5層は中央部が盛り上がった状況で、上部からの砂の流入、ひいては上部構造の在り方を示唆させるものであった。

出土遺物 わずかに甕880と高杯881の土器片が2点検出された程度であった。これによると土壇の時期は、弥生時代後期前半に比定されよう。(島崎)

袋状土壇-47 (図版18・307)

位置 P17区の南西において古墳時代の竪穴住居-86によりその上面の東側約1/2が切られた状態で検出された。前述の袋状土壇-45の北約150cmの地点に位置する。平面検出高は海拔380cmであった。

構造 上部構造が削平を受けていたため遺存するのはわずかに壇底から62cmの部分にすぎない。遺存部分は、平面検出面で径約100cmが推測された。壇内は、平坦な底と検出面から壇底まで緩やかに逆斜傾する壁を見せ、断面台形を呈するものであった。壇内埋積土は、基本的には砂による堆積を見せるのであるが途中第3層は粘質土の比較的薄い堆積が確認された。

出土遺物 壇内からは遺物がまったく検出されなかった。したがって、時期についての詳細は明確にできない。ただし、周辺に所在する同様の袋状土壇との関係からおよそ弥生時代後期前半までの位置づけで差し支えないものとする。(島崎)

袋状土壇-48 (図版18)

位置 竪穴住居-24・25の南東4mに存在している。複数年次に渡る調査行程のため、二時期に分けて検出・掘り下げを行なった袋状土壇で、確認された残存状況はかならずしもよいとは言えない。

構造 遺構は標高395cmで検出した。上面形態は大形の楕円形を呈し、その径は251cmを測る。底面形態は円形で、底径は75cmであった。断面形態は中央が凹む底面を有し、ある時期に壁面崩壊が起こったためか現状ではやや外傾ぎみであるが、本来下底面から壁面が直立ぎみに立ちあがっていたと思われる。深さについては70cmを測り、底面海拔高は325cmと他の袋状土壇に比べやや高めといえる。土層をみると第1～4層と第5層以下との堆積状況には、埋没に至る若干の時期差を想起させる。なお第2層には少量の炭、第6層には多量の焼土の混入が確認されたが、どのような所作にともなうものであるか不明である。

出土遺物 最大長2.7cm、最大幅1.8cm、最大厚1.38cmを測る小形の砥石S94が出土しているのみで、時期を示す遺物に乏しい。しかし、その規模と形態からしてこの土壇が袋状土壇である蓋然性は高く、その時期も周辺で検出されたものと大差ない弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期として差し支えないと思われる。なお平面図に示した遺物は上層より出土した土師器の甕であり、この袋状土壇が完全埋没したのは古墳時代前期以降と考えられる。(澤山)

袋状土壇-49 (図版18・124・307)

位置 P17区の南西において土壇-99の西側に検出面を接する状況で検出された。平面検出面は海拔374cmであった。

構造 後世の微高地上面の削平により上部構造が存在せず、現状での遺存部分が全体のどの程度になるのかは言及できない。検出されたのは径90cm、検出面からの深さ64cmと当該調査区にあっては

第4章 調査の概要

比較的小規模であった。断面は、底部の大きさが検出面での径より大きく径約105cmを測り、台形状を呈する。壙内における土砂の埋積状況は、これも他の袋状土壙と同様基本的には砂による堆積であるが、この土壙の場合間層に炭化物などの包含がよく確認された。

出土遺物 埋積途中に土器片の混入が確認された。土器はいずれも甕の破片で、これによると土壙の埋没は弥生時代後期前半までの範疇で理解される。(島崎)

袋状土壙-50 (図版18・124)

位置 P17区の南西に所在し、前述の袋状土壙-49の南東方向に約5mの地点に位置する。古墳時代の竪穴住居-88・91の下層において海拔320cmで検出された。

構造 竪穴住居-88・91によってその大部分が削平されて、検出されたのは径120~130cmの円形を呈するもので、深さ約20cm程度でしかない。一方壙底は基本的に平坦面をなしており、さらに壙内での砂の埋積状況などからかろうじて袋状土壙と認識されたにすぎない。

出土遺物 壙内からはわずかに土器片が散見された程度で、他に遺物の遺存は確認されなかった。時期は、弥生時代後期前半に比定されよう。(島崎)

袋状土壙-51 (図版18・124・307)

位置 P17区の南西において袋状土壙-50の東南約1mに近接して所在する。竪穴住居-88・91の下層、海拔320cmで検出された。

構造 上部構造が削平されているため全体像については不明である。検出されたのは下部構造の一部と考えられる。平面的には東西133cm、南北115cmの規模で、形態的には円形を呈する。壙底は、平坦面で底部の大きさは検出面での径の大きさを上回り、断面台形を見せる。壙内は、基本的に砂による埋積であるが上層に炭・焼土塊の包含が認められた。

出土遺物 埋積土中においては土器の小片が検出された程度で、他に遺物の出土は認められなかった。土器**885**は甕の底部であるが、時期については明言できない。周辺に所在する袋状土壙との関係からは弥生時代後期前半までの位置づけが妥当と推測される。(島崎)

袋状土壙-52 (図版19・124・308)

位置 Q17区の南東部に位置して、袋状土壙-56との距離4.7mを測り、上層を古代の溝-28に削られている。

構造 検出された平面形は楕円形で、長径150cm、短径107cmをそれぞれ測る。北肩口が若干崩落しているものの、深さ112cmの側壁は内傾し、断面形は台形を呈する。海拔高254cmでほぼ平坦な底面は、平面形楕円形を呈して、181×140cmの規模を測る。埋土は8層に分層でき、第4~8層がほぼ水平堆積をみせたのちに、肩口に第3層が流れこみ、第1・2層によって埋没している。

出土遺物 甕**886**、台部片**887**等の土器が出土しており、**886**に古相を残すが、遺構の所属時期は弥・後・Iに求めたい。(光永)

袋状土壙-53 (図版19・124・308)

位置 Q17区の南東部に位置して、土壙-101を削り、袋状土壙-54に削られている。

構造 北端を袋状土壙-54によって失っているが、検出された平面形は楕円形に復元され、短径136cm、復元長径153cmをそれぞれ測る。北西部に肩口の崩落がみられるが、深さ108cmが残る側壁は内傾して、断面形は台形を呈する。海拔高254cm前後でやや凹凸のみられる底面は楕円形を呈し、長径170cm、短径153cmをそれぞれ測る。埋土は8層に分層でき、南北方向の断面においては、南から埋

まっていた状況を示している。

出土遺物 甕888は、口縁部外面に2条の凹線がめぐらされ、最大径を低い位置にもつ体部外面はヘラミガキされている。時期は、弥・後・Iに比定される。(光永)

袋状土壙—54 (図版19・124)

位置 Q17区の南東部に位置し、袋状土壙—53、土壙—101を削っている。

構造 検出された平面形は不整な楕円形を呈し、長径128cm、短径108cmをそれぞれ測る。深さ62cmが残る側壁は、南西部において内傾をみせる他は直立からやや外傾している。海拔高298cmを測る底面はほぼ平坦で、114×102cmの不整な楕円形を呈する。6層に分けられる埋土は中央部のくぼむ堆積状況を示し、第3～5層には炭の混入がみられる。

出土遺物 長頸壺889は、口縁端部外面に6条の凹線がめぐらされ、口縁部内面と頸部下端に同一の工具によると思われる刺突文がめぐらされている。時期は、弥・後・Iに比定される。(光永)

袋状土壙—55 (図版19・308)

位置 Q17区の南東部に位置しており、袋状土壙—60との距離3mを測る。

構造 検出された平面形は楕円形で、長径120cm、短径102cmをそれぞれ測る。深さ35cmが残る側壁は、上半部は直立に近く、下半部は内傾を強めている。ほぼ平坦な底面は楕円形を呈して、120×110cmの規模を測り、海拔高333cmは周辺の袋状土壙のなかで最も高い数値である。4層に分けられる埋土は、北から埋まった堆積状況を示している。

出土遺物 図示できる土器はない。遺構の形態から、周辺の袋状土壙と同時期と考えたい。(光永)

袋状土壙—56 (図版20・124・125・360)

位置 Q17区の南東部に位置し、袋状土壙—61との距離は1mと近い。

構造 検出された平面形は楕円形で、長径160cm、短径110cmをそれぞれ測る。深さ100cmが残る側壁は北辺と南辺で内傾し、西辺が直立からやや外傾して、東辺は中位が内側へ膨らんでいる。底面は楕円形を呈して、154×119cmの規模を測り、やや南へ傾斜して海拔高272cmである。5層に分けられる埋土は中央部がくぼむ堆積状況を見せ、炭を含む第2層から第3層にかけて大形の土器片が廃棄されている。

出土遺物 上記の出土状況を示す土器には、壺890、甕891・893、高杯892がある。ともに口縁端部外面に凹線文をめぐらせる891と893であるが、891はやや上方へ拡張され、893はやや下方へ拡張されている。892は口縁端部上面と脚端面に凹線がめぐらされている。時期は、弥・後・Iに比定される。

(光永)

袋状土壙—57 (図版20・125・309)

位置 Q17区の南東部に位置しており、東辺を竪穴住居—28に削られている。

構造 検出された平面形は楕円形を呈し、長径123cm、最大短径104cmをそれぞれ測る。深さ84cmが残る側壁はほぼ直立し、北西辺と東辺でやや内傾して、北辺と南辺ではやや外傾している。海拔高277cm前後で若干凹凸のある底面は、平面形隅丸方形を呈して、1辺107cmを測る。埋土は5層に分けられ、第3・4層は南から埋められた状況を示していて、第3層には炭が含まれている。

出土遺物 口縁部外面に凹線をめぐらせる甕894が出土しており、時期は弥・後Iに比定される。

(光永)

袋状土壙—58 (図版19・125)

位 置 Q17区の南東部に位置し、袋状土壙-59との距離80cmと近い。

構 造 西半を調査対象外に置き、調査範囲内にある部分も調査時の損壊によって形状を損なってしまったために、全容は不明であるが、東辺は2段に掘られた形状を呈し、上段は側壁が外傾して、平面形は隅丸方形にみえる。検出面からの深さ55cm以下の下段は、側壁がほぼ直立し、海拔高290cmを測る底面はほぼ平坦で、最大径105cmを測る円形ないし楕円形に復元される。埋土については細かい観察ができていないが、炭・灰等の顕著な堆積は認められなかった。

出土遺物 壺895・896、甕897が出土しており、いずれも口縁部外面に凹線がめぐらされている。時期は、弥・後・Iに比定される。(光永)

袋状土壙-59 (図版20・125・360)

位 置 Q17区の南東部に位置しており、竪穴住居-29との距離2.2m、袋状土壙-60との距離1.4mをそれぞれ測る。

構 造 西辺を調査時の損壊によって失っているが、平面形は楕円形に復元され、長径111cmを測る。深さ83cmが残る側壁は上半が直立に近く、下半は内傾している。海拔高283cm前後でほぼ平坦な底面は、西辺が不明であるが、平面形は楕円形に復元され、長径135cm、最大短径113cmを測る。5層に分けられる埋土はほぼ水平堆積を示し、第2層から土器片が出土している。

出土遺物 甕898・899、高杯900・901が出土しており、甕はいずれも口縁部外面に凹線がめぐらされ、体部内面のヘラケズリは頸部にまで及んでいる。高杯は杯部から口縁部が屈曲して立ち上がるものであるが、900は口縁端部が下方へ折り曲げられ、杯部との屈曲部外面に刺突文がめぐらされるなど、非在地系土器とみなされる。時期は、弥・後・Iに比定される。(光永)

袋状土壙-60 (図版20)

位 置 Q17区の南東部に位置し、竪穴住居-29との距離は2.5m、袋状土壙-55との距離は3mを測る。

構 造 検出された平面形は楕円形を呈し、長径148cm、最大短径104cmをそれぞれ測る。深さ91cmが残る側壁は東および西辺においては若干の凹凸をもちながらもほぼ直立しており、北および南辺はやや外傾している。海拔高276cmの底面はほぼ平坦で、139×111cm程度の楕円形を呈する。埋土は8層に分けられ、下層は東に、上層は西にそれぞれ高くなる堆積状況を示している。

出土遺物 図示できる遺物は出土していないが、遺構の所属時期については、周辺の袋状土壙と同時期と考えられる。(光永)

袋状土壙-61 (図版21・125・309)

位 置 Q17区南東部に位置して、袋状土壙-56との距離1mと近い。

構 造 検出された平面形は不整な円形を呈し、径139cm前後を測る。深さ122cmが残る側壁は、下位に最大径をもち、最大径は162cmを測る。側壁は内湾して底面に至り、海拔高246cmでほぼ平坦な底面は、径140cm程度の不整な円形である。埋土は8層に分けられ、南から埋められた状況を示している。

出土遺物 甕902、高杯903・904が出土しており、高杯は長脚で、口縁部が杯部から屈曲して立ち上がる。時期は、弥・後・Iに比定される。(光永)

袋状土壙-62 (図版21)

位 置 P17区の南、竪穴住居-25と前記袋状土壙-51にそれぞれに1m前後の距離に近接した位置に所在が確認された。一部古墳時代の竪穴住居-91によって上部が切られていた。

構 造 上半部のほとんどが削平を受け、検出されたのはおそらく下部構造の一部と考える。土壙の形態としては、海拔335cmの検出面で径130cm前後の円形を呈し、検出面から壙底まではしだいに規模を拡大するもので、断面袋状であった。壙内埋積状況は、従来の袋状土壙が比較的単調に砂で埋没していたのと若干異なり、この土壙の場合砂と砂の間に間層として炭を含んだ粘質土が比較的複雑に介在しているのが検出された。

出土遺物 遺物としては古墳時代の土器片が2点検出されたのみで、本来当該土壙に伴っていたと考えられるものは検出されなかった。したがって、時期については周辺に所在を見せる同様の袋状土壙との関係に依存するしかなく、これによれば弥生時代後期前半の範疇での位置づけが妥当とされよう。

(島崎)

袋状土壙-63 (図版21)

位 置 調査区の南端、袋状土壙-44の南で検出した。

構 造 北半は調査区外となるので全容は不明であるが、確認された部分で長さ180cm、深さ86cm、底面の標高252cmを測る。断面はU字形で袋状を呈していないが、基盤が脆弱なうえ湧水もあり、壁面が崩壊したものと考えられる。底面も凹凸が激しい。埋土は5層に分かれ、第3～5層には炭を若干含んでいた。

出土遺物 遺物は、第3～5層から土器小片が少量出土しており、時期は弥・中・Ⅲ期と考えられる。

(久保)

袋状土壙-64 (図版21)

位 置 袋状土壙-63の南東に位置する。

構 造 上面径155cmの円形を呈し、深さ79cm、底面の標高266cmを測る。壁体はほぼまっすぐに立ち上がっている。埋土は5層に分かれ、1～3層はレンズ状に堆積している。2層には炭を多く含んでおり、埋没後掘り返しが行われた可能性が考えられる。

出土遺物 埋土中から土器小片が少量出土しており、弥・中・Ⅲ期と考えられる。

(久保)

袋状土壙-65 (図版22)

位 置 袋状土壙-64の北西に位置する。

構 造 上面89×80cmのやや南北に長い円形を呈しており、深さ54cm、底面の標高298cmを測る。上面がやや開き気味であるが、第2層にはブロック状の粘土が混在しており、壁体が崩落したものと考えられる。

出土遺物 埋土中から弥・中・Ⅲ期と考えられる土器小片が少量出土している。

(久保)

袋状土壙-66 (図版22)

位 置 袋状土壙-65の南に位置し、北側は袋状土壙-65に、南側は側溝によって切られている。

構 造 残存部で径約70cmの円形を呈し、深さ50cm、底面の標高297cmを測る。底面は平坦ではなく、断面形も袋状を呈していないが、底面の標高から、周辺の袋状土壙群の一つと考えた。

出土遺物 埋土中から土器小片が少量出土しており、弥・中・Ⅲ期と考えられる。

(久保)

袋状土壙-67 (図版22)

位 置 袋状土壙-66の東に位置する。

構 造 北側を袋状土壙-66に切られ、南西は調査区外へのびるため全容は不明であるが、残存部から径140cm前後の円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは82cm、底面の標高は264cmを測る。

出土遺物 埋土中から出土した少量の土器片より、弥・中・Ⅲ期と考えられる。(久保)

袋状土壙—68 (図版22)

位 置 Q17区に設定された北西—南北方向に細長く延びた調査区の中央付近に位置し、調査区境と南接するかたちで確認した。周辺に後述する竪穴住居—99・98が北西1 mに位置している。

構 造 遺構は標高404cmで検出した。上面および底面形態は円形を呈し口部径は138cm、下底径は85cmを測る。現状において断面形態はほぼ平らな底面を有し、下底面から壁面が基本的に直立ぎみに立ちあがっている。しかし部分的に外傾した壁面状況を呈する箇所があり、ある時期に壁面崩壊が起こったことを示している。深さは117cmを測り、底面海拔高は287cmである。図化し得ていないが、堆積土層は検出面下約30cm程度を境に大きく上下2層に分けられ、レンズ状堆積を示す上層部分には、平面図に示したような想定した時期よりも新しい遺物の混入が認められた。このことは埋没による時期差が考えられる。

出土遺物 少量ながら弥・中・Ⅲ期の壺、甕の破片が出土しており、遺構もほぼこの時期に比定されるものと思われる。一方上層からは須恵器導入期以降のものと考えられる甕2853やふいごの羽口C82、鉄片などが出土しており、このことからこの袋状土壙が完全埋没したのは古墳時代中期以降と思われる。なお上層下位において長さ約4 cm、太さ約1 cm、重さ3.2 gのガラス滓が認められた。詳細は附編にて報告している。(澤山)

袋状土壙—69 (図版22・125・309)

位 置 調査区境と南接する状況で確認され、袋状土壙—68の東4 mに位置している。

構 造 遺構は標高415cmで検出した。上面および底面形態は円形を呈し上面径は145cm、底面径は114cmを測る。断面形態は現状で平らな下底面から壁面がほぼ直立ぎみに立ちあがり、深さは127cmを測り、底面海拔高は288cmである。土層をみると第1—3層までのレンズ状の堆積に対し、第4層以下はやや不規則な堆積状況を示しており、埋没に至る若干の時期差が認められる。そのように考えると第1層の暗茶褐色粘質土に含まれる赤褐色焼土は、二次堆積時に混入したものと思われる。一方第3層と第7層が接する断面図右側あたりをみると、わずかながらに内傾気味に立ち上がってきた壁面が外傾に転じているようにも窺える。また断面図左側付近に認められる第4・5層が土壙中央に向かって堆積していることをみると、本来の断面形は中央付近に最小径を有するフラスコ形であり、どの時期か不明だが崩壊した可能性も考えられる。

出土遺物 図化し得る程度の遺物の出土はみられなかったが、細片から弥・中・Ⅲ期あたりのものと考えられる。なお土師器の壺、甕、高杯などの破片がみられるものの、これらは上層部分の二次堆積時の混入と考えられる。(澤山)

(6) 土 壙

土壙—41 (図版23・126)

位 置 O17区の北東、袋状土壙—1の西約17mで検出した土壙で、今回報告する弥生時代の遺構の中では最も北に位置する。

構 造 長さ53cm、幅49cmの円形をなし、検出面からの深さは17cmを測る。標高337cmの底面は平らで、壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。東からの流入を示す埋土には、拳大の角礫とともに少量の土器片が出土した。

出土遺物 出土した土器は小片のため詳しい時期については明らかではないが、弥生後期前半の範疇に含まれるものと思われる。(亀山)

土壙-42 (図版23)

位置 土壙-41の南東約7.5mで検出した土壙である。

構造 上面は長さ98cm、幅84cmの隅丸方形をなす。現状の深さは20cmで、標高382cmを測る平らな底面がかろうじて遺存するにすぎない。

出土遺物 底面から高杯の杯部片が1点出土した。この土器は袋状土壙-8から出土した高杯と接合しており、この土壙も袋状土壙-8とほぼ同時期の弥・後・I期に属するものと思われる。(亀山)

土壙-43 (図版23・310)

位置 O17区の中央東よりに位置する土壙で、土壙-42の南約8mで検出した。

構造 長さ113cm、幅107cmを測る上面は、不整な円形を呈する。壁面は緩やかな傾斜をなして下り、平坦な底面にいたる。検出面からの深さは35cmあり、底面の標高は378cmを測る。暗褐色をなす埋土の上面には20~10cmの角礫とともに、多数の土器が出土した。

出土遺物 出土した土器には、壺1、甕4、台付鉢1がある。このうち図示できた壺**907**は、口径16.2cmを測り、肥厚した口縁端部には2条の凹線をめぐらす。体部は肩の張りが強く、外面を粗いハケメ、内面をナデで調整する。**909**は口径10.6cmを測る甕で、張りのない体部から屈折して水平に延びる口縁部は端を上方に拡張して2条の凹線を飾る。外面をヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。**908**は長い脚をもつ鉢であるが、裾部は失われている。径12.1cmを測る口縁部は、端部をわずかに上方へ拡張して3条の凹線をめぐらす。低い体部は中央が強く屈折して算盤玉形をなし、肩部には楯状工具による刺突を連続して施す。鉢部の外面は、上半をハケメ、下半をヘラミガキで調整し、内面は下半をヘラケズリしたのちナデにより仕上げる。これらの土器は、弥・後・I期の様相を示している。(亀山)

土壙-44 (図版23・310)

位置 土壙-43の西約13mで検出した土壙で、O17区の中央西よりに位置する。

構造 長さ37cm、幅34cmの円形を呈し、深さは現状で10cmを測る。標高353cmを測る底面は凹み、壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物 埋土には拳大の角礫を含み、鉢に取り付いていたものと思われる脚台部が出土した。これは径11.0cmを測り、裾部には8つの円孔を穿つ。弥・後・I期に相当するものと思われる。(亀山)

土壙-45 (図版23・126・310)

位置 O17区の中央に位置し、土壙-44の南東約10mで検出した土壙である。

構造 不整円形をなす上面は、長さ53cm、幅51cmを測る。検出面からの深さは12cmと浅く、断面は緩やかに湾曲する皿状を呈する。

出土遺物 土壙内からは、弥・後・I期の様相を示す甕**910**が出土した。口径13.6cmを測る口縁は端部を上方に拡張し、2条の凹線をめぐらす。最大径22.4cmを測る体部は、肩の張る倒卵形をなす。外面は上半をハケメで、下半をヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。弥・後・I期に比定されるものである。(亀山)

土壙-46 (図版34・311)

位置 土壙-45の南西約15mに位置する土壙で、古墳時代前期の溝-16の下層から検出した。

第4章 調査の概要

構造 上面は長さ249cm、幅221cmの隅丸方形をなす。検出段階から炭・焼土の分布が認められたため、部分的に断ち割りを行ったところ、熱により赤変・硬化した箇所が確認された。このため焼土を残しながら掘り下げると、長さ111cm、幅106cmの範囲で、高さ51cmの円錐形に盛り上がっている状況が明らかとなった。しかも、その中央は長さ65cm、幅57cmの不整形な孔をなし、その内部から四方に向けて幅16cm、高さ7cmの孔が延びていることが判明した。これらの焼土は内部から被熱を受けていた。

以上の構造は、この遺構が炉であることを示しているが、内部にはわずかに灰の堆積が認められたに過ぎず、その具体的な機能については不明と言わざるを得ない。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期については明らかではないが、弥生中期の溝-12の上部にあたり、なおかつ古墳前期の溝-16の下層に位置することからすれば、弥生後期に属する蓋然性が高いものと思われる。(亀山)

土壙-47 (図版23)

位置 O17区の南西に位置し、土壙-46の東約11mで検出した土壙である。

構造 上面は、長径53cm、短径45cmの楕円形を呈している。検出面からの深さは30cmで、壁面が急な傾斜をもって立ち上がり断面はU字形をなす。暗褐色を呈する埋土の上層からは、土器が1点出土した。

出土遺物 壺ないし甕の底部で、外面をヘラミガキし、内面をヘラケズリで調整する。詳細な時期は明らかでないが、弥生後期前半に属するものと思われる。(亀山)

土壙-48 (図版23・126・311・360)

位置 土壙-46の南約9mで検出した土壙で、O17区とP17区の境界上に位置する。

構造 円形を呈する上面は、径53~49cmを測る。現状の深さは9cmと浅く、断面は皿形をなす。標高389cmの底面に接して甕が1個体出土した。

出土遺物 911は、口径20.6cm、最大径30.8cmを測る大形の甕である。水平に引き出された口縁は、端部を内方に拡張し、4条の凹線をめぐらす。倒卵形をなす体部の外面は、上半をハケメで調整し、下半にヘラミガキを施す。また内面は、上半をハケメで調整し、下半をヘラケズリする。これらの特徴は、弥・後・I期でも古相を示している。(亀山)

土壙-49 (図版23・126・312・361)

位置 土壙-48の南約2mで検出した土壙で、P17区の北西に位置する。

構造 土壙の上面は、長さ102cm、幅87cmの不整な楕円形をなす。検出面からの深さは11cmで、壁面が標高358cmを測る底面から緩やかに立ち上がる、断面皿形を呈する。暗褐色をなす埋土の上面で、1個体の土器が出土した。

出土遺物 912は、口径10.2cm、最大径20.5cmを測る直口壺である。直立する口頸部には楕状工具による刺突文を連続して施し、その端部は内傾する凹面をなす。肩が強く張る体部は、外面の上半をハケメ、下半をヘラミガキで調整し、内面の下半をヘラケズリで仕上げる。この土器は、その特徴から弥・後・I期に属するものと考えられる。(亀山)

土壙-50 (図版23・312)

位置 O17区の南東に位置する土壙で、土壙-47の東約4mで検出した。

構造 上面は、長さ131cm、幅107cmの方形を呈する。検出面からの深さは17cmで、壁面は標高

380cmを測る底面から急な傾斜をもって立ち上がる。3層に分かれる埋土は、主として南東からの流入を示している。

出土遺物 弥生土器の小片が若干出土するにとどまっております、詳細な時期については明らかではないが、他の遺構との関係から弥・後・I期に属する可能性は高い。(亀山)

土壌-51 (図版23)

位置 土壌-50の東1mで検出した土壌で、O17区の南東に位置する。

構造 検出段階では幅141cmの土壌と想定して掘り下げたが、断面観察の結果、2基の土壌が切り合いをもって重複していることが判明した。先行する土壌は、幅90cmあまりの楕円形をなすものと見られ、検出面からの深さは28cmを測る。標高370cmの底面は浅く窪み、壁面がゆるやかに立ち上がる皿形の断面をもつ。これを切る土壌は、幅65cmの不整な楕円形をなすものと推定され、現状の深さは36cmを測る。底面の標高は362cmで、断面はU字形を呈する。いずれも埋土はレンズ状の堆積を示し、先行する土壌の底面から甕の口縁部が1点出土している。

出土遺物 ここでは図示していないが、口径30cmを越える大形の甕と見られ、端部を上下に拡張した口縁部には凹線をめぐらしている。これは弥・後・I期に比定され、この土壌もこれを相前後する時期のものと思われる。(亀山)

土壌-52 (図版24・126・312・361)

位置 O17区の南端東よりに位置し、土壌-50の南約2mで検出した土壌で、南東側で土壌-52を壊している。

構造 不整形をなす上面は、長さ181cm、幅163cmを測る。高さ20cmある壁面は、標高377cmを測る平坦な底面から垂直ぎみに立ち上がる。

出土遺物 底面の南隅から甕が2個体出土した。**914**はほぼ完形に復元できた甕で、口径11.8cm、最大胴径17.6cm、器高23.0cmを測る。頸部から屈折して水平に延びる口縁の端部を上下に拡張し3条の凹線をめぐらす。体部は最大径を上位にもつ倒卵形をなす。外面は、なだらかな上半をハケメ、下半をヘラミガキで調整し、内面は下半のみヘラケズリする。**915**は口縁端部を上方に拡張し、3条の凹線を飾る。最大径を中位におく体部は、外面上半をハケメで調整し、下半にヘラミガキを施す。内面はヘラケズリしたのち、上半にハケメを加える。これらは弥・後・I期でもやや古い様相を備えている。(亀山)

土壌-53 (図版24・126・127・313・361)

位置 土壌-52の南東に重複して検出した土壌で、O17区の南東端に位置する。

構造 上面は長さ197cm、幅148cmを測る不整形を呈している。底面は標高332cmを測り、高さ52cmの壁面は南西側で斜め上方に立ち上がるが、北東側では深さ52cmで傾斜を変えて緩やかな段が広がり、一見二段掘りの形状を呈する。

出土遺物 埋土の下層から出土した土器は、壺4、甕10、高杯2、台付鉢1を数える。**915**は口縁部を欠いているが、最大胴径18.5cmを測る体部から屈曲して、外反する口縁部にいたる。外面にはヘラミガキを施し、内面はヘラケズリで調整する。**916**は口径14.0cmを測る壺で、直立する頸部から外反する口縁の端部は上方に拡張して3条の凹線をめぐらす。なだらかな肩部は外面をヘラミガキで調整し、内面にユピオサエの痕を残す。口径14.6cmを測る**918**は、端部を上方に拡張した口縁部に不明瞭な凹線を飾り、直立する頸部と体部の間には櫛状工具による刺突を連続して施す。最大径22.4cmを測

第4章 調査の概要

る体部は、外面を頸部から肩部にかけてハケメで調整したのち、下半にヘラミガキを加え、内面をヘラケズリで仕上げる。甕917～921は、口径10.0～10.2cm、最大径14.6～15.3cmを測る小形の917・920、口径11.4cm、最大径19.4cmを測る中形の919、口径14.2cm、最大径26.5cmを測る大形の921に分けられる。いずれも口縁端部を拡張して凹線文をめぐらしている。また、倒卵形をなす体部の外面は上半をハケメ、下半をヘラミガキで調整し、内面は下半をケズリ上げる。922は脚台を備えた鉢であるが、口頸部と脚裾部を欠いている。張りのある肩部には列点文を飾り、脚柱部には沈線をめぐらす。外面はヘラミガキで調整し、内面はヘラケズリののちナデを施す。高杯には、口径20.7cmを測る杯部923と、径16.0cmの脚部924がある。杯部は、直線的にのびる体部から屈折して直立する口縁部をもち、内外面をヘラミガキで調整する。脚部は緩やかに広がり、肥厚した端部の上端を水平に引き出す。柱状部との間に沈線をめぐらし、裾部には筋状の透かしを飾る。これらの土器は弥・後・I期でも古相を呈している。

(亀山)

土壙-54 (図版24・313)

位置 P17区の北東、土壙-53の東南東約11mに位置する土壙で、古墳時代前期の竪穴住居-49の下層で検出したものである。

構造 長さ165cm、幅110cmを測る上面は、不整な方形をなす。標高349cmを測る底面は平らで、高さ15cmほどの壁面は急な傾斜で上方に立ち上がる。

出土遺物 暗褐色を呈する埋土には遺物を含んでおらず、その時期については明らかでないが、土壙の形態からすれば弥生後期前半にまで遡る可能性がある。

(亀山)

土壙-55 (図版24)

位置 この土壙は、調査区の北西部に位置している。

構造 土壙の西側部は削平を受けているものの、規模は長さ約131cm、幅78cmを測る。平面形は楕円形を呈しており、深さは約45cm残存していた。土壙内には、第1・2層が堆積していた。

出土遺物 土壙内からは少量の土器が出土した。これらの土器は弥生時代後半期と考えられる。(中野)

土壙-56 (図版24)

位置 この土壙は、調査区の中央やや北西寄りに位置しており、土壙-55の南東約15mに検出された。

構造 土壙は北側部が削平を受けており、南側のほぼ半分が検出された。土壙の規模は長さ約224cmを測り、残存状態からみて楕円形を呈するものと考えられる。深さは、約19cm残存しており、上下2層が堆積していた。上層の淡茶褐色泥砂には炭・焼土が含まれていた。また、下層の淡褐色泥砂は底部に数cm堆積していた。土壙は、土壙-57と重複しているが、前後関係は明らかではない。

出土遺物 出土遺物は検出されていないが、切り合っている土壙-57とさほど時期差はないと考えられ弥・後・I前後であろうか。

(中野)

土壙-57 (図版25・127)

位置 土壙は調査区の中央やや北西部に位置し、土壙-56と重複して検出された。

構造 土壙の規模は、長さは約167cmで、幅は土壙-56に削平を受けているため明らかではないが残存状態から約130cm前後に復元される。平面形は楕円形を呈しており、深さは約44cmを測る。土壙内は、第1～3層がレンズ状に堆積している。最下層には、炭を含んでおり、土器も検出された。

出土遺物 最下層を中心に相当量の土器が検出された。図示できたものは925、926で、いずれも弥・

後・Ⅰの特徴を示している。

(中野)

土壙-58 (図版25)

位置 この土壙-58は、土壙-59~67を含めて調査区のほぼ中央部に位置している。土壙-58~67は、径約10mの内に集中して検出されたもので、土壙の大半はいずれも弥生時代前半期の溝-12の埋没後その上部に位置している。

構造 規模は156×144cmでほぼ円形を呈している。深さは約61cmで、断面形は台形を呈する。土壙内には第1~4層がレンズ状に堆積していた。

出土遺物 遺物は出土しなかったものの、土壙-61・65と同様な時期であろう。

(中野)

土壙-59 (図版25)

位置 土壙は、調査区のほぼ中央部に位置しており、土壙-58の北東約1.5mに検出された。

構造 規模は約173×132cmを測り、平面形は楕円形を呈している。深さは約82cmで、断面形は逆台形を呈する。土壙内には、第1~7層がレンズ状に堆積しており、最下層には約8cm程砂が認められた。この土壙は、周辺に集中する土壙の断面形とはやや異なる形状を示していた。

出土遺物 遺物は検出されなかったが、土壙-61と同様な時期と考えられる。

(中野)

土壙-60 (図版25)

位置 この土壙は、調査区のほぼ中央部に位置しており、土壙-59の南東約3mに検出された。

構造 土壙は長さ146cm、幅約127cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは約60cm残存しており、断面形は碗形を呈している。土壙内は第1~6層が堆積していた。

出土遺物 遺物は検出されなかった。時期については、周辺の他の土壙と同様に弥・後・Ⅰ前後と考えられる。

(中野)

土壙-61 (図版26・127・362)

位置 調査区のほぼ中央に位置しており、土壙-60の北西約2.5mに検出された。

構造 この土壙は、94×90cmで平面形は円形を呈している。深さは約61cmを測る。断面形は袋状を呈しており、底部は水平面を成している。土壙内は、第1~4層がレンズ状に堆積しており、第3層の下部には土器が面的に検出された。

出土遺物 遺物としては図示した927が出土した。927は壺で、直立する頸部から大きく外反する口縁部で、口縁端部では上下に肥厚し、外側端面には凹線を施す。外面はヘラミガキで調整しており、体部中位には竹管文を1列めぐらしている。内面は頸部までヘラケズリが認められる。927は、その特徴から弥・後・Ⅰと考えられる。

また、この土壙は平・断面形などからみて、袋状土壙と考えられる。

(中野)

土壙-62 (図版26)

位置 土壙は、調査区のほぼ中央部に位置し、土壙-61の南西約50cmに隣接して検出された。

構造 規模は、107×98cmの円形を呈している。深さは約58cm残存しており、断面形はやや外開きの筒状を呈する。土壙内は、他の土壙と同様に第1~7層がレンズ状に堆積している。

出土遺物 遺物は検出されなかった。時期については土壙-61と同時期であろう。また、この土壙の性格についても土壙-61と同じように袋状土壙としての貯蔵穴の機能を持つものと考えられる。(中野)

土壙-63 (図版26)

位置 この土壙は、調査区のほぼ中央部に位置しており、土壙-62の東約60cmに検出された。

第4章 調査の概要

構造 土壌の規模は102×84cmで、平面形は楕円形を呈する。深さは約73cmを測る。断面形は土壌-62と類似しており、外開きの筒状を呈している。

出土遺物 遺物は全く認められなかった。土壌の時期・性格は、土壌-61・62と同様と考えられる。
(中野)

土壌-64 (図版26)

位置 調査区のほぼ中央部に位置し、土壌-61～63の南側に隣接して検出された。

構造 土壌の規模は、156×118cmで、平面形は楕円形を呈している。深さは約99cmを測る。断面形は、やや異なるものの土壌-62・63と同様に外開きの筒状を呈する。土壌底部は、上部平面の中央部ではなくやや西側に位置する。これは土壌の東側壁面が崩落したものと考えられる。また、土壌底部は径約80cmで水平を成している。

出土遺物 遺物は検出されていない。土壌の性格については、平・断面形および堆積層などから土壌-61～63と同様の袋状土壌と考えられる。また、時期も同じと考えられる。
(中野)

土壌-65 (図版26・127)

位置 土壌は調査区のほぼ中央部に位置する。土壌-58～66で一群を形成しており、その中でも最も南側に位置し、土壌-60の南約数十cmに隣接して検出された。

構造 規模は、長さ約154cm、幅約124cmを測り楕円形を呈している。深さは約29cmで、断面形は他の土壌と異なり逆台形である。また、底部は水平を成している。

出土遺物 土器が少量出ており、図示できたのは928の甕であった。928は、頸部から大きく外反する口縁部で、口縁端部は上下に肥厚させている。また口縁部の端面には2条の凹線がめぐる。この土器は、特徴からみて弥生後期の前半と考えられる。
(中野)

土壌-66 (図版27)

位置 この土壌は、調査区のほぼ中央部に位置しており、土壌-60の下部に検出された。

構造 土壌は、土壌-60の削平を受けており、残存状態は悪く、土壌の南北の端部が検出された。土壌の残存状態から復元すると、その規模は134×100cm前後で楕円形を呈すると考えられる。深さは約32cmまで確認できる。底部は水平面を成しており、壁面は上部に向かって内傾気味に立ち上がるものと考えられる。

出土遺物 遺物は全く検出されなかった。土壌の性格については、平・断面形からみて袋状土壌と考えられる。時期も他の土壌と同様であろう。
(中野)

土壌-67 (図版27・127・128)

位置 竪穴住居-19の北西6mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は円形に近い楕円形を呈しており、長さ118cm、幅108cmを測る。壁面は垂直に近い状態で掘りこまれている。床面は平らでなく大きく凹凸があり、検出面からの深さは浅い部分で24cm、最も深い部分で38cmを測る。

出土遺物 遺物としては土器の破片が少量出土している。図示したものはいずれも甕で、930は胴部の内外面にハケメが施される。929、931は外面にハケメ、内面は口縁部の近くまでヘラケズリが施されるものである。これらの遺物から、土壌の時期は弥・後・Iと思われる。
(井上)

土壌-68 (図版27)

位置 竪穴住居-19の北10mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は円形を呈するもので、長さ125cm、幅115cmを測る。壁面はほぼ垂直に近い状態で立ち上がるものである。床面は浅く窪み全体の断面形は椀形にちかい形状を呈している。検出面からの深さは43cmを測る。底面の海拔高は339cmである。

出土遺物 この土壌から出土した土器は非常に少なく図示できるものは無かったが、わずかな破片から弥・後・Ⅰの時期と想定される。(井上)

土壌-69 (図版27)

位置 土壌墓-3に接して西側に検出した。

構造 検出面での平面形は長楕円形を呈するもので、長さ125cm、幅57cmを測る。壁面は外方に開くもので、床面は平らである。そのため、断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは23cmを測る。底面の海拔高は352cmである。

出土遺物 この土壌から出土した土器の量は非常に少なく図示できるものは無かったが、その破片から弥・後・Ⅰの時期に比定される。(井上)

土壌-70・71 (図版27・128)

位置 土壌墓-3に接して南側に検出した。

構造 土壌-70の西端を、土壌-71が切る状態で2基の土壌を検出した。土壌-70の平面形は長楕円形を呈するものと考えられ、長さ160cm以上、幅85cmを測る。壁面はゆるやかに外方に開き、床面は緩やかな凹凸があり、検出面からの深さは32cmを測る。床面の海拔高は366cmである。土壌-71の平面形は一部に直線的な部分も見られるが円形を呈するものであり、長さ103cm、幅98cmを測る。壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がるもので、断面形は皿形を呈している。検出面からの深さは21cmを測る。底面の海拔高は372cmである。

出土遺物 両方の土壌から少量の土器が出土している。図示したものは小破片であるが、弥・中・Ⅲに属するものと思われる。(井上)

土壌-72 (図版28・128・129・313・362)

位置 土壌-69に接して南側、土壌-70の西側に検出した。

構造 検出面での平面形は隅丸長方形を呈するもので、長さ127cm、幅75cmを測る。壁面は大きく外方に開きながら立ち上がり、底面はほぼ平らである。検出面からの深さは20cmを測り、底面の海拔高は394cmである。この土壌からは大量の土器が出土した。土器は完形のもの少なく、器面の剝離したものが多くなどから廃棄した状態と考えられる。

出土遺物 934は頸部にタタキの見られる壺で、口縁端部は下に折り曲げられ丸く収められている。935～937も壺であるが、何れも胴部内面は頸部の直下までヘラケズリが施される。938、939は別個体として実測したが、胎土、調整に共通するものが見られ同一個体の可能性もある。頸部には凹線、胴部外面には上半はハケメ、下半はヘラミガキが施される。内面は剝離のため遺存状態は良くないがエビオサエが見られる。941は壺で胴部内面にハケメが施される。942は底部に穿孔の見られるものである。944は高杯の杯部で多角形状にヘラミガキが施される。946は高杯で、杯部の内外面には縦方向のヘラミガキが施される。脚端部の円孔は貫通しない。内面はヘラケズリが施される。945も高杯の脚部で三角透かしと円孔が施される。三角透かしは裏面まで貫通するものとそうでないものがある。947は台付きの鉢である。脚部の上端にはヘラによる沈線が見られる。石器は打製の石包丁の破片S62・65が出土している。石材はサヌカイトである。(井上)

土壙-73 (図版28)

位 置 土壙-72の南側 2 m の位置に検出した。

構 造 検出面での平面形はほぼ円形を呈するもので、長さ63cm、幅55cmを測る。壁面は少し外に開きながら立ち上がるもので、断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。埋土は水平に近い状態であり、底面の海拔高は348cmである。

出土遺物 土壙からは少量の土器が出土している。図示できるものは無かったが、その調整から見て弥・後・Iと考えられる。 (井上)

土壙-74 (図版28・129・314)

位 置 竪穴住居-16の西 3 m の位置に検出した。

構 造 検出面での平面形は北側が尖るが楕円形を呈している。土壙の規模は長さ124cm、幅98cmを測る。壁面は外方に開きながら立ち上がるもので断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmを測り、底面の海拔高は394cmである。土層は水平状に堆積している。

出土遺物 土壙からは少量の土器が出土している。図示できるものは948の高杯1点のみである。杯部の内外面は放射状にヘラミガキが施され、脚部との境には円盤状の粘土を充填するものである。土器の時期は弥・後・Iと思われる。 (井上)

土壙-75 (図版28・129)

位 置 土壙-74の西 3 m の位置に検出した。

構 造 検出面での平面形は北側に少し折れ曲がるものが見られるが、ほぼ円形を呈する。土壙の規模は、長さ98cm、幅90cmを測る。壁面は外方に開きながら立ち上がり、底面は二段に掘られている。土層はレンズ状に堆積しており、検出面からの深さは33cmを測る。

出土遺物 土壙からは少量の土器が出土しており、図示できたものは一点のみである。949の甕は、胴部内面を口縁部直下までヘラケズリが施されるもので、弥・後・Iの時期と考えられる。 (井上)

土壙-76 (図版28)

位 置 土壙-75の西 2 m の位置に袋状土壙-22と重複した状態で検出した。

構 造 検出面での平面形は楕円形を呈するもので、長さ132cm、幅111cmを測る。壁面は緩やかに外方に立ち上がるものである。底面は浅く窪むため断面形は椀形を呈する。土層は土壙の形状に沿うようにレンズ状に堆積している。検出面からの深さは56cmを測り、底面の海拔高は333cmである。

出土遺物 土壙からはごく少量の土器が出土している。口縁部などの特徴のある部分がないため明確な時期は不明であるが、おおむね弥・後・Iに比定される。 (井上)

土壙-77 (図版28)

位 置 土壙-76の西 2 m の位置に検出した。

構 造 検出面での平面形は北側に直線的な部分は見られるがほぼ楕円形を呈するもので、長さ115cm、幅82cmを測る。壁面、底面ともに緩く弧を描くもので断面形は皿形を呈している。埋土は重層的なものは見られない。検出面からの深さは18cmを測り、底面の海拔高は379cmである。

出土遺物 土壙からはごく少量の土器が出土している。図示できるものはないが、土器片に見られる特徴から弥・後・Iの時期に位置づけられ、土壙も同じ時期と考えたい。 (井上)

土壙-78 (図版28)

位 置 土壙-77の南側 1 m の位置に検出した。

構造 検出面での平面形は楕円形を呈するもので、規模は長さ98cm、幅74cmを測る。壁面は外方に開きながら立ち上がるものであるが、底部が土壇の中央より北東側に寄っているため立ち上がりの角度に差がある。断面の形状は皿形を呈しており、検出面からの深さは21cmを測る。

出土遺物 土壇からはごく少量の土器が出土している。図示してはいないが土器の形態や特徴から弥・後・Ⅰの時期と考えられ、土壇も同じ時期と考えられる。(井上)

土壇-79 (図版28)

位置 竪穴住居-20の東側6mの位置に検出した。

構造 西側を古墳時代の竪穴住居により削平されているため全体の形状は不明であるが、ほぼ円形を呈するものと考えられ、判明する規模は長さ85cmを測るものである。土壇の遺存状態は悪く検出面からの深さは8cmを測るにすぎない。底面はほぼ水平で、断面の形状は浅い皿形を呈しており、底面の海拔高は370cmを測る。

出土遺物 土壇からはごく少量の土器が出土している。図示できるものはないが弥・後・Ⅰと考えられるものであるため、土壇の時期もその時期と考えておきたい。(井上)

土壇-80 (図版28・129)

位置 土壇-79に接した南側に検出した。

構造 検出面での平面形は隅丸長方形もしくは楕円形といった形状を呈するものである。土壇の規模は長さ116cm、幅88cmを測り、壁面はやや大きく外方に開きながら立ち上がる。検出面からの深さ27cmを測る底面は西に向けて少し下がり、その海拔高は348cmである。

出土遺物 土壇からは少量ではあるが土器が出土している。950は甕で、胴部の内面は器壁の剝離のため調整不明であるが、外面にはハケメが施される。951は高杯の杯部である。体部の内外面にはヘラミガキが施されている。952は高杯の脚部で、内面は横方向のヘラケズリ、外面にはヘラによる縦方向の沈線が施される。土器の時期は弥・後・Ⅰ期と考えられるため、土壇の時期も同じと思われる。(井上)

土壇-81 (図版29・129・362)

位置 土壇-80の南西150cmの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は円形を呈するものである。土壇の規模は長さ62cm、幅60cmを測る。土壇は浅く窪むもので、断面形は皿形を呈している。検出面からの深さは14cmを測り、底面の海拔高は381cmである。

出土遺物 土壇からの出土遺物は少ないが、953の鉢が出土した。器壁は内外面ともに荒れているため調整については不明である。口縁部は外方に開き端部は少し肥厚するものである。土器の時期は弥・後・Ⅱと考えられるもので、土壇も同時期と思われる。(井上)

土壇-82 (図版29・129)

位置 土壇-81の南東50cmの位置に検出した。

構造 東側を古墳時代の土壇により削平されているため全体の形状は不明であるが、おおむね楕円形を呈するものと考えられる。土壇の規模は長さ104cm、幅は不明であるが90cm前後を測るものと考えられる。底面は西に向けて下がっており、断面形は浅い皿形を呈している。検出面からの深さは9cmを測る。

出土遺物 土壇からはごく少量の土器が出土している。954は大形の高杯もしくは鉢と考えられるも

第4章 調査の概要

のである。口縁部の外面には凹線文、体部の外面は横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキが施される。土器の時期は弥・中・Ⅲと考えられる。(井上)

土壙-83 (図版29)

位置 土壙-82の南南西2mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は少し歪つな楕円形を呈している。土壙の規模は長さ106cm、幅97cmを測り、壁面は大きく外方に開く。底面はほぼ水平で、断面形は浅い皿形を呈している。検出面からの深さは13cmを測り、底面の海拔高は332cmである。

出土遺物 土壙からはごく少量の土器が出土している。図示できるものはないが、その調整などから弥生時代後期のものと考えられるため、土壙もその時期に属するものと思われる。(井上)

土壙-84 (図版29・129・362)

位置 P17区の中央に位置し、土壙-83の南東約20.5mで検出した土壙である。

構造 水路の付けかえ工事に伴う調査で検出したもので、掘り下げの段階で壺955が出土したため周辺を精査したところ、暗褐色土で埋まった長さ79cm以上、幅59cmの楕円形を呈する土壙の輪郭を検出した。しかし、工事との兼ねあいから、それ以上掘り下げを行うことができず下部の構造を明らかにするに至らなかった。

出土遺物 955は、口径25.9cmを測る壺で口縁端部を上下に拡張し、その外面を4条の凹線で飾る。緩やかに外反する頸部は外面をハケメ、内面をナデで調整し、基部に1条の凹線をめぐらす。これらの特徴から、弥・後・Ⅰ期に属するものと思われる。(亀山)

土壙-85 (図版29)

位置 袋状土壙-36の西側4mの位置に検出した。

構造 調査区の境に検出したため土壙の全体は不明である。想定される平面形は円形に近い形状を呈するものと考えられ、現状での規模は長さ159cmを測る。壁面は大きく外に開きながら立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。そのため断面形は上端の大きく開いた逆台形を呈している。検出面からの深さは54cmを測り、底面の海拔高は323cmである。

出土遺物 土壙からはごく少量の土器が出土している。特徴的な土器が見られないため明確な時期については不明であるが、弥生時代中期末ないし後期の前半と考えられる。(井上)

土壙-86 (図版29・129・130)

位置 この土壙は、調査区のほぼ中央に位置しており、土壙-85の北西約15mに検出された。

構造 土壙の規模は、長さ約217cm、幅約122cmで、平面形はやや隅丸の長方形を呈している。深さは約36cmを測り、土壙内は上下2層が堆積していた。

出土遺物 土壙からは956~959の土器などが出土した。これらの土器はいずれも弥・後・Ⅳの特徴を示していた。(中野)

土壙-87 (図版29・130・362・363)

位置 P16区の北東、掘立柱建物-1の北東約1mの地点で検出された。

構造 およそ東西方向に主軸をもった土壙で、長さ82cm、幅46cm、深さ20cmの規模を有する。壙内上層には土器が比較的多く投げ込まれた状況で堆積していた。

出土遺物 壙内から検出された遺物は、壺960・961、甕962、高杯963・964、器台965などの土器のみで他には検出されなかった。土器は、1点962が不明瞭ながらいずれも仁伍型式段階に併行するもの

である。

(島崎)

土壙-88 (図版29・130)

位 置 P16区の北東にあって掘立柱建物-1の西側約1mに所在する。

構 造 およそ南北方向に主軸を有するもので、長さ148cm、幅は最大で77cm、深さ50cmを測る。断面には規則性がなく不整形な状態であった。壙内埋積土は、中層の第2・4・6層において粘質土中に灰・炭・焼土塊などが多く包含されていた。

出土遺物 わずかに土器片が2点検出されたにすぎない。これによると時期は、弥生中期末頃と推測される。

(島崎)

土壙-89 (図版30)

位 置 P16区の北東にあって前述の土壙-88の南側約50cmに隣接して検出された。

構 造 長軸長105cm、幅80cm、検出面からの深さ22cmを測り、平面楕円形を呈するものであった。壙内は、上層に灰、炭、焼土塊などが多く含まれていた。

出土遺物 わずかに土器片が散見された程度であった。土壙の時期については、土器片と壙内埋積状況の周辺に所在する土壙との関係などによりおよそ弥生時代中期末段階への位置づけが推測される。

(島崎)

土壙-90 (図版30・130)

位 置 P17区の西側中央にあり、土壙-92、95に挟まれ北西から南東方向の一直線上に位置する。これら同方向に並ぶ傾向は土壙-94・91・97、土壙-93・99、袋状土壙-39・40、土壙-98、袋状土壙-43・47・45・46等にも共通に認められる。

構 造 長さ218cm、幅162cm、深さ29cmを測り、東西に長い楕円形の土壙である。底面海拔高は351cmを測り、埋土は2層からなる。遺物は第1層の暗茶灰色粘質微砂内からの出土である。

出土遺物 土器片12点、河原石3点のほとんどが底面から浮いた状態で出土しており、規則性は認められない。時期は弥・後・Iの古相に比定できる。

(高畑)

土壙-91 (図版30・130・131・362)

位 置 P17区の中央西よりにあり、土壙-94の南東に位置する。

構 造 長さ102cm、幅93cm、深さ28cmを測る円形の土壙である。底面の中央南よりに凹部があり、海拔338cmを測る。埋土は1層で、下位に炭の小粒が散布している。

出土遺物 遺物は土器片が7点、小石片が1点で4ブロックに分かれて出土しており、完形品は存在しない。底面に接して、974、972、973が出土しており、972、973は重ねられた高杯が横転した状況を呈する。弥・後・Iの古相に比定できる。

(高畑)

土壙-92 (図版30・131)

位 置 P17区の西側中央にあり、土壙-90の北西に位置する。

構 造 長さ171cm、幅124cm、深さ13cmを測る東西に長い楕円形の土壙である。底面海拔高は365cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 埋土内からの土器片であり、弥・後・Iの古相に比定できる。

(高畑)

土壙-93 (図版30・131)

位 置 P17区西側の中央にあり、土壙-97の200cm西側に位置する。

構 造 長さ97cm、幅87cm、深さ17cmを測る不整形の土壙である。底面海拔高は374cmを測り、

第4章 調査の概要

埋土は1層である。

出土遺物 土壌の底面傾きに一致する格好で土器片が堆積しており、土壌中央に集まっている。

25×22×16cmの花崗岩も土器と伴に放棄されており、石の上下から土器片が出土している。時期は弥・中・Ⅲの新相から弥・後・Ⅰの古相に比定できる。(高畑)

土壌-94 (図版30)

位置 P17区西側の中央南よりにあり、土壌91・97の並びの北西端に位置する。

構造 長さ82cm、幅68cm、深さ19cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は363cmを測り、埋土は1層である。土壌-92と底面海拔高は同数値を示す。

出土遺物 遺物は出土していないが、埋土の色調、土質等から弥生時代のものと考えられる。(高畑)

土壌-95 (図版31・131)

位置 P17区の西側中央にあり、北西から南東に同方位にて直線上に並ぶ土壌-92・90の南端に位置する。

構造 長さ229cm、幅189cm、深さ76cmを測り、東西に長い楕円形の土壌である。底面海拔高は302cmを測り、埋土は2層からなる。

出土遺物 第1層内に土器の小片が混在しており、弥・後・Ⅰの古相に比定できる。(高畑)

土壌-96 (図版31)

位置 P17区の中央にあり、土壌-97の東側約200cmに位置する。

構造 長さ195cm、幅173cm、深さ83cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は285cmを測り、埋土は3層からなる。第1～3層ともに微砂を基調にし、全体によく締まった状態であった。

出土遺物 土器小片が第1層中に含まれていたが、図化可能なものは無である。弥・後・Ⅰの古相に比定できる。(高畑)

土壌-97 (図版31・131・132・133・134・363・364)

位置 P17区の中央西よりにあり、北西から南東に一直線に並ぶ土壌-94、91の南東端、土壌-93と土壌-96に接する。

構造 長さ268cm、現状の幅205cm、深さ39cmを測る不整形の土壌である。底面海拔高は355cmを測り、埋土は3層からなる。遺物は第1、2層の上面から出土しており、一部で投棄された状況を呈する。

出土遺物 壺、甕の器種が多くみられ、完形になるものはなく、すべて破片である。土壌-93等に見られたように弥・中・Ⅲの新相と弥・後・Ⅰの古相の特徴を持つ一群がまとまって出土している。壺の987、甕の991、993、995、996等が新しい傾向を示すものである。(高畑)

土壌-98 (図版31・134)

位置 P17区の南西において、袋状土壌-40の南約3m、袋状土壌-41の北東約2mの位置に所在が確認された。検出面は、海拔367cmで周辺に所在する袋状土壌とほぼ同一高にあった。

構造 平面的には長軸長150cm、幅132cmの楕円形を呈する。壙内は、検出面からの深さ43cmと比較的浅く断面レンズ状を呈するものであった。埋積途中の第3層において柱穴状の掘り込みが見られ、一部壙底中央部を切った状態が見られた。基本的な埋積状況は砂によるものであった。

出土遺物 土壌上層のほぼ検出面に近い所で甕999が1点検出されたにすぎない。おそらく弥生時代後期前半までの範疇で理解されるものであろう。(島崎)

土壙-99 (図版32・134)

位置 P17区の南で前述した袋状土壙-49・50に挟まれた状態で海拔375cmにおいて検出された。
構造 平面は径225cm前後の比較的大きな規模でほぼ円形を呈し、断面は検出面から約50cm程度の深さをみせるレンズ状を呈するものであった。基本的には砂により埋没しており、最下層に部分粘質土が見られた。

出土遺物 埋積土中から、小片ながら甕1000・1001が2点検出された。これによると時期は、弥生時代後期前半への位置づけが考えられよう。(島崎)

土壙-100 (図版32・134・135・314・365)

位置 Q17区南東部に位置し、土壙-101との距離30cmと近接している。

構造 平面形は楕円形を呈して、長径232cm、短径184cmをそれぞれ測り、深さ26cmが残る側壁は直立からやや外傾している。212×166cmの楕円形を呈する底面は比較的平坦で、海拔高344cm前後である。埋土を土質によって分けることは難しいが、底面から浮いて東から西へ傾斜をみせながら、焼土とともに大形の土器片が一括廃棄された状態で出土した。

出土遺物 長頸壺1002～1005・1007、壺1006、甕1008～1010、台付鉢1012・1013、大形鉢1011等が出土している。長頸壺は、いずれも頸部が逆八字状に口縁部に向かって開いているが、1003が頸部から緩やかに口縁部へ移行するのに対して、1002・1004・1005では幅広の沈線がめぐらされる頸部の上端、下端とも屈曲をみせる。外面に凹線がめぐらされる口縁端部は、1003では内傾するが、1004・1005では内傾が弱く、1002では外傾している。胴部の残る1004・1005・1007・1010では肩部から屈曲して胴部へ移行し、底部は平底であるがやや膨らんでいる。1002・1004・1005・1007・1010は非在地形土器として扱われるものである。甕の口縁端部外面には凹線がめぐらされ、体部内面のヘラケズリは頸部にまで及んでいる。台付鉢には円盤充填技法が用いられ、大形鉢の口縁部は直立して外面に凹線がめぐらされている。これらにより、時期は弥・後・Iに比定される。(光永)

土壙-101 (図版32・136)

位置 Q17区の南東部に位置しており、袋状土壙-53・54に削られている。

構造 平面形は隅丸方形を呈して、1辺290cm前後を測る。深さ34cmが残る側壁は直立からやや外傾し、ほぼ平坦な底面の海拔高は327cm前後を測る。埋土は暗灰褐色粘質土の1層である。

出土遺物 長頸壺1014、高杯1015が出土しており、時期は弥・後・Iに比定される。(光永)

土壙-102 (図版32・136・364)

位置 Q17区の南東部に位置し、東半の大部分を調査区外に置く。袋状土壙-55との距離は3.2mを測る。

構造 全容が不明であるが、平面形は円形ないし楕円形と想定され、最大南北長150cmを測る。深さ70cmが残る側壁は外傾しており、底面の海拔高は294cmである。

出土遺物 壺1017、長頸壺1018・1019、甕1016・1020が出土している。1017は肩部上端に幅広の沈線が2条めぐらされる。頸部から大きく外反する口縁部は端部が上方に拡張され、その外面と上面に凹線がめぐらされている。逆八字状に口縁部に向かって頸部が開く長頸壺のうち、1016は土壙-100出土の1002に酷似している。1017・1018については非在地形土器と考えられる。体部内面のヘラケズリについては、1017では頸部近くまで及んでいるが、1016・1019・1020では下半にとどまっている。時期については、弥・後・Iに比定される。(光永)

土壇-103 (図版33・136)

位置 Q17区の南東部に位置し、上層を古墳時代の竪穴住居-68に削られている。

構造 平面形は楕円形に復元され、長径122cm、最大短径97cmをそれぞれ測る。深さ27cmが残る側壁は下端が内湾して底面に至り、ほぼ平坦な底面の海拔高は302cmである。3層に分けられる埋土のうち、炭を含んで底面上に堆積する第3層からは土器片が一括廃棄された状態で出土している。

出土遺物 直口壺1021、甕1022・1023等が出土しており、1021は口縁部上半と上面に凹線がめぐらされている。時期は、弥・後・Iに比定される。(光永)

土壇-104 (図版33)

位置 調査区の南東側に位置し、前述の袋状遺構-48の東1mに存在する。

構造 遺構は標高378cmで検出した。平面形態は円形であり、断面はやや北側に高まった底面からゆるく外傾ぎみに立ち上がった形態を呈している。規模は現状において長さ79cm、幅46cm、深さ46cmを測り、底面海拔高は332cmである。

出土遺物 図化し得なかったが壺の底部片が1点出土しており、時期は弥・後・Iと思われる。

(澤山)

土壇-105 (図版33・136・137)

位置 Q17区に設定された北西-南北方向に細長く伸びた調査区の中央付近に位置し、調査区境と北接する状況で確認した。そのため土壇の北半部分を大きく失い、確認された残存状況はかならずしもよいとは言えない。

構造 調査時において未分離の状況で掘り下げたが、平面形や断面形態の様子から本来この土壇は2つの土壇が切り合ったものと考えられ、平面図右側にあたるものが左側を切っていると認識している。しかしながら詳細はかならずしも明らかでなく、ここでは両者をまとめて報告することにする。遺構は標高352cmで検出した。平面形態は円形であり、断面は2つのU字形の底面からゆるく外傾ぎみに立ちあがった形態を呈している。規模は現状において長さ172cm、深さ51cmを測り、幅については不明である。底面海拔高は301cmである。平面図に示したように、遺構検出面直下でまとまった遺物の出土をみている。

出土遺物 壺1024~1026、甕1027、高杯1028が出土している。1024は平らな底部から肩部に向かって外湾気味に立ち上がり、短く外反する頸部に上下に拡張された口縁部には凹線3条を施している。また頸胴部には刺突文を行っている。外面にはタタキ成形ののちハケメ、内面は胴部上半に達するヘラケズリを行っている。1025は胴部から短くやや外反気味に立ち上がる頸部に上下に拡張された口縁部には凹線を施している。外面には粗いハケメ、内面はヘラケズリを行っている。1026は直行気味に立ち上がる頸部に上方に拡張させた口縁部に3条凹線を施している。頸部には凹線が2条残存している。1027は口縁部を短く字形に屈曲させ、端部を肥厚し端面に2条凹線を施している。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリを行っている。1028は浅い杯部に口縁部をやや内湾気味に外方へ立ち上がらせ、端部はやや下方に引き延ばしている。高い脚部にゆるく開く脚裾部をもち、脚端部は肥厚させ内面接地している。また、柱状部には円孔15個がめぐっている。時期はこれらの遺物から弥・後・Iと考えられる。

(澤山)

土壇-106 (図版33・137)

位置 調査区境と北接する状況で確認され、袋状土壇-105の西0.5mに位置している。土壇の北

半部分を削平を受けている。

構造 遺構は標高355cmで検出した。平面形態は楕円形と思われ、断面はゆるく外湾ぎみに立ちあがっている。また、ほぼ水平な底面の中央には長さ64cm、幅52cm、深さ18cm程度のやや深い凹みが認められた。上記のことから確認された残存状況はよいとは言えないが、規模は現状において幅110cm、深さ53cmを測り、長さについては不明である。底面海拔高は302cmである。

出土遺物 胴部に刺突文をもつ台付鉢1029をはじめ壺、甕、鉢などの破片が出土している。時期は弥・後・Ⅰと思われる。(澤山)

土壙-107 (図版33・137)

位置 土壙-106の北西3mに位置する。

構造 南西半面が損壊を受けているうえ、北東部分は調査区外のため推測の域を出ないが、平面形は楕円形であったものと思われる。長さや幅は不明だが、深さは64cmほどと推定される。断面形状は北西壁からほぼ一定傾斜で底部に向かい、南東壁は垂直ぎみである。

出土遺物 1030は大形の長頸壺と思われる底～胴下半部で、土壙底部から出土した。残存高31.6cm、底径14.6cmを測る。外面は丁寧なヘラミガキが施され、内面には下部から上部にかけてヘラケズリ調整がみられる。同時に壺・甕・高杯の土師器および用途不明の鉄片が数点出土したことから、弥・中・Ⅲ期に掘りこまれた土壙が、いくらかの土層の堆積をみた後、古・前・Ⅱ期の遺物の流入をもって埋没したものと思われる。(小林)

土壙-108 (図版34・137)

位置 Q17区の北東に位置する橋脚部分で検出した土壙で、古墳時代の竪穴住居-103にかかって検出したものである。

構造 上面の規模は、長さ99cm、幅82cmを測る方形を呈する。壁面の高さは46cmあり、標高283cmを測る凹んだ底面からやや急な傾斜をもって立ち上がる。3層に分かれる埋土の上層からは、拳大の礫とともに多量の土器が出土した。

出土遺物 1031は口径28.0cmを測る壺の口縁部で、上下に拡張した端部には凹線を施したのち棒状浮文を貼りつける。口径14.5cm、器高29.6cmを測る1032は、完形に復元できた甕である。外反する口縁の端部を上方に拡張し、倒卵形をなす体部の外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。1034は口径14.3cmを測る鉢で、下半を失っている。口縁部はわずかに肥厚して面をなし、強く屈折する体部の上半には列点文をめぐらす。内外面ともヘラミガキで調整する。これらの土器は弥・中・Ⅲ期に相当する。(亀山)

(7) 土 壙 墓

土壙墓-2 (図版34・138)

位置 Q17区の南端中央で検出したもので、土壙-46の南東約6mに位置する。

構造 削平を受けて南西端を失っているものの、現状では長さ173cm、幅68cmの長方形を呈しており、その形態から土壙墓と判断された。深さは7cmと遺存は悪く、標高376cmを測る平坦な底面がかろうじて残存するにすぎない。北東の検出面から甕が1個体出土している。

出土遺物 1036は口径15.0cm、器高24.2cmを測る甕で、底部をわずかに欠いているもののほぼ完形に復元できた。水平に引き出された口縁部は、上端をつまみあげて3条の凹線を飾る。体部は張りのあ

第4章 調査の概要

る肩部をヨコハケで調整し、下半にはヘラミガキを施す。内面は肩部までケズリ上げており、弥・後・Ⅰ期に位置付けられるものである。(亀山)

土壙墓—3 (図版34・138)

位 置 堅穴住居—16の北西11mの位置に検出した。

構 造 検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ194cm、幅123cmを測る。墓壙は二段に掘られており、墓壙のほぼ中央に検出面から22~24cmの深さで下段の掘り方を検出した。下段の平面形は長方形を呈するもので、長さ155cm、幅64cmを測る。下段の深さは14cmあるため全体の深さは38cmを測る。床面はほぼ水平に平らに掘られている。木棺などの痕跡は観られなかった。

出土遺物 甕、高杯などの破片が少量出土している。図示した**1037**は甕で胴部の内外面にハケメが施されるもので、弥・中・Ⅲの時期と考えられるため、土壙墓も同時期もしくはそれを若干下る時期のものと考えられる。(井上)

(8) 土器溜り

土器溜り—1 (図版138・139・314)

位 置 堅穴住居—16の南約11mの位置に検出した。

構 造 土器が径300cmほどの範囲にまとまって検出されたため、堅穴住居などの存在を考慮して精査した。しかし、土器の集中する部分は浅く窪むのみで、下部に遺構は確認できなかった。

出土遺物 壺、甕、鉢、高杯などが多量に出土したが、完形になるものは少ない。**1038**は短い頸部と外方に開いた口縁部を持つもので、その端部は丸く収められている。胴部は外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリが施される。**1040**は肩部に工具による刺突文が見られ、その部分より上はハケメ、下はヘラミガキが見られる。胴部内面は上端にはハケメが、肩部より下にはヘラケズリが施される。**1043**は外方に開いた口縁部の端部を上下に拡張するものである。頸部と胴部との境には小さな円孔が一つ穿たれている。胴部外面は上半にハケメ、下半にヘラミガキが施される。内面は上半に指頭圧痕が、下半にヘラケズリが見られる。**1044**は鉢と考えられるもので、胴部外面の調整は上半は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向のハケメが施される。内面は上半に指頭圧痕、下半にヘラケズリが施される。**1045**は口縁端部が円く納められるもので、肩部に工具による刺突文がみられ、ハケメが施される。**1046**は、高杯である。杯部の内外面は多角形にヘラミガキが施される。脚部はヘラによる縦、横方向の沈線と円孔が施され、内面にはヘラケズリが見られる。杯部と脚部の境は円盤状の粘土が充填されている。**1047**は注口の付く台付鉢で肩部に工具による刺突文とハケメ、下半はヘラミガキが施される。土器の示す時期は若干の時期差があると考えられるが、そのほとんどは弥・中・Ⅲと考えられる。(井上)

(9) 溝

溝—3 (図版35・139~144・315・365~367)

位 置 この溝は、中屋調査区の北側に位置する西川調査区の溝—1、既報告の中屋調査区の溝—3と一致するものである。今回検出し得た箇所は、調査区の西辺に沿って南流し、角度を南西方向に変える辺りである。調査区西辺を流走する溝の大半は後述する溝—4に大きく削平されており、その地点の規模については不明である。一方角度を南西方向に変える辺りでは残存状況が良好であり、そ

の検出範囲に比べて比較的多量の遺物の出土をみている。この付近は微高地内の開析部にあたり、その西縁辺部に沿ってこの溝は形成されたものと思われ、これ以降古墳時代前期に至る期間この開析部縁辺では溝の水制が数回なされ、南に広く広がる開口部では水田経営が行われるようになる。

構 造 遺構は348cmで検出し、残存状況が良好である南西地点の断面からその規模をみると、現状において幅140cm、深さ60cmを測り溝底の標高は288cmである。この地点の約75m北東に位置する西川調査区の溝-1断面の溝底の標高が340cmであったので、比高差52cmとゆるやかな傾斜をもって流れていたと考えられる。

出土遺物 埋土からの出土遺物として、土器では壺1048~1064、甕1066~1076、高杯1077~1093、鉢1094~1100、器台1065・1101~1103などがみられる。以下器種ごとに説明する。1048は肥厚させた端部に刻目をもつ口縁部が大きく開き、頸部には刻目突帯をめぐらす広口壺である。1049は端部に刻目を施した薄手の広口壺である。短頸広口壺1050は口縁端部を肥厚させ、端面には櫛状の工具により斜格子文に刻目を施している。また頸部には指頭による上下2段の刻目をもつ幅広の貼付突帯を付す。広口壺1051は口縁端部を垂下させ端面には細い刻目を施し、内面には櫛状工具による斜格子文を加飾する。広口壺1052は肥厚させた口縁部の端面に3条の凹線をめぐらし、棒状浮文を施す。1053は底部からゆるやかに外方に立ち上がり、短い頸部に上下に拡張させた口縁をもつ土器である。口縁端面には4条の凹線に3本1単位の棒状浮文を施し、肩部には刺突文がめぐっている。外面にはタタキ成形のちハケメ、ヘラミガキを行い、内面は胴部下半までヘラケズリが及んでいる。1054・1055は平らな底部から外傾気味に立ち上がり体部中央で屈曲し、短く直立する頸部にやや肥厚気味に上下に拡張させた口縁部をもつものである。口縁端面はそれぞれ3条の凹線を施している。なお1054の頸部には凹線状の浅い凹みが2条めぐっており、これはこの先駆形態にみられる貼付突帯の痕跡、また後続形態にみられる多状凹線の前段階の萌芽として示唆されるものである。内面のヘラケズリは胴部下半のみで認められる。1056も1054・1055と類似した形態を示すものの、胴部、頸部のそれぞれの変換点はゆるやかである。口縁端面は2条の凹線を施している。大形広口長頸壺1057は底部から上方に向かって外傾して立ち上がり、胴部上半付近で最大径を測り、長く直立する頸部に上下に拡張させた口縁部をもつものである。口縁端面は4条の凹線を施し、頸部には9条の凹線がめぐっている。内面のヘラケズリは胴部下半のみで認められる。色調は灰白色を呈しており、仁伍式の特徴をもつ。1058は体部中央でゆるく屈曲し、やや長めに直立する頸部にやや肥厚気味に上方に拡張させた口縁部をもつものである。口縁端面は3条の凹線に推定18個の棒状浮文と推定24個の円形浮文を交互に施している。頸部には凹線状の浅い凹みが5条程度めぐっており、その上方には推定4カ所に円孔がみられる。また肩部には綾杉状の刺突文を行っている。1059は平らな底部から外傾気味に立ち上がり体部中央で丸く屈曲し、短く内傾する頸部にく字形に立ち上がる複合口縁を有するものである。口縁部はそれぞれ4条凹線またはヨコナデによる浅い凹みをもち、端部は面取りをしている。また肩部にはノ字形の刺突文を施している。この地域ではみられない形態を呈しているが、内面ヘラケズリの静止箇所から考えると弥・中・Ⅲの時期のものと思われる。1060は胴部下方に最大径をもち、ゆるく内傾気味に立ち上がったのちわずかに外反する短い口縁部をもつ。口縁部には5条の凹線をもつ。この土器も他地域の出自をもつものと思われるが、頸部凹線の特徴から弥・中・Ⅲと思われる。1061~1063は、算盤玉形の体部にやや長めに直立する口縁をもつ台付壺と考えられ、頸部には順に7条、6条、9条の凹線を施している。また1063の柱状部には数条の沈線がみられる。1069は算盤玉形の体部に長めに内傾する

頸部をもつ台付壺と考えられる。**1065**は上方に向かって大きく開口する広口壺である。口縁部には3条の凹線またはヨコナデによる浅い凹みをもつ。

甕**1066**は短く屈曲する口縁端部を上方に拡張させ、端面には2条の凹線に細い刻目を施している。**1067**は長胴形を呈する体部に短く屈曲する口縁部を上側につまみ、端面には刻目を行っている。**1068**～**1069**は長胴形を呈し胴部上半に肩部を有する体部に短く屈曲する口縁部をもつものである。口縁端部は**1071**が内傾気味に立ち上がるものを除きT字状に上下に拡張した形態を示す。口縁端面は**1069**・**1071**に2条、**1075**・**1076**に3条、**1068**・**1072**～**1074**に4条、**1070**に5条それぞれ凹線がめぐり、**1069**には円形の刺突文が施されている。また**1071**の肩部には刺突文が認められた。調整は外面ハケメの下半をヘラミガキであるが、**1068**・**1072**・**1073**の肩部付近にはタタキ成形を残している。なお**1074**については赤化している。

1077は水平口縁をもつ高杯である。**1078**・**1079**はそれぞれ6条、3条の凹線をもつ浅い椀形の杯部を有するものであり、**1079**の脚裾部には5ないし6条を1単位とする沈線を三段にめぐらし、その間に2、2、5の未貫通の円孔を施している。**1080**～**1085**は浅い杯部を有し、直立またはやや外傾に立ち上がる口縁をもつものである。口縁端部は水平面をもちわずかに外方に拡張されるものが多い。杯部の内外面はヘラミガキを密に行っており、口縁部外面には基本的に強いヨコナデをしており**1081**のように凹線状を呈するものもある。脚部は**1084**のような短脚のものと**1085**のような長脚のもの2種類あり、前者の脚端部は内面で接地する。大形品の**1086**は深い杯部に広く開口し、やや外傾に立ち上がる口縁をもつものである。口縁端部は内面上方に上下に拡張される。端面には3条の凹線に棒状浮文を3条1単位を施している。杯部の内外面はヘラミガキをし、口縁部内外面にはヨコナデを行っている。脚端部は内面接地をする。**1087**は4条の沈線を3単位めぐらし未貫通三角孔13個を施したものの、**1088**は7条の沈線を3単位めぐらし未貫通三角孔26個を施したものの、**1089**は4ないし5条沈線を3単位めぐらし未貫通三角孔12個を施したものの、**1090**は6条の沈線を1単位めぐらし未貫通三角孔6個を施したものの、**1091**は現状において5条沈線を1単位と1条の沈線をめぐらし三角孔9個を施したものの、**1092**は現状において5条の沈線を1単位と2条の沈線をめぐらし三角孔推定5個を施したもので、脚端部は内面接地をする。なお**1087**～**1092**はその形態から一部に台付鉢の脚部の可能性も含む。**1093**は推定円孔35個を施したもので脚端部は上方に肥厚する。

1094・**1095**はゆるく内弯する体部に肥厚した口縁部をもつ鉢で端面は水平である。また外面口縁部付近には、前者が3条の凹線、後者が4条の凹線に細い刻目を施す。また前者は胴部中央には刺突文をめぐらしている。**1096**・**1097**は直線的に外傾した体部に面取りした口縁端面を有するものであり、いずれも外面口縁部付近に幅広の3条凹線がめぐっている。**1098**～**1100**は算盤玉形の胴部に短く屈曲した口縁部に上下に拡張させた端部を有する鉢部に脚部をもつものである。口縁端面には**1098**で3条の凹線に棒状浮文2個1単位、**1099**で4条の凹線、**1100**で2条の凹線が加飾され、いずれも肩部にはノ字形の刺突文を施す。脚部では**1099**は未貫通3個を含む三角孔8個をもつ。**1099**・**1100**ともに脚端部は上方に肥厚する。**1101**～**1103**はいずれも大形品であり、**1101**は3段6列の、**1102**・**1103**にも同様の円孔を穿っている。また脚裾部には幅広の凹線をめぐらせ、**1103**には刻目を施している。時期については弥・中・Ⅱを示す**1048**～**1051**、**1066**・**1067**、**1077**、**1094**・**1095**などを除き、おおむね弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの古相のものと思われる。

石器では、サヌカイト製の打製石包丁**S 50**・**52**・**53**・**54**、スクレイパー**S 74**・**75**が出土しており、

未図化の打製石包丁1点とともに、溝下底にあたる標高300m付近で互いに密接して重なり合うように検出された。何か有機質のようなものに包まれて一括投棄されたとも考えられる。この他玄武岩である砥石S122などが出土している。金属器では用途不明の細片が若干認められた。

以上のことから、この溝は弥・中・Ⅱ～弥・後・Ⅰの期間を中心に機能したと思われ、堆積層にいわゆる上東式の長頸壺を包含していないことから、弥・後・Ⅱ以降には埋没してしまったと考えられる。

(澤山)

溝-13 (図版35)

位置 この溝は溝-3の掘り直しと考えられる溝で若干南に振っている。

構造 構造は324cmで検出し、断面からその規模をみると、現状において幅60cm、深さ19cmを測り、溝底の標高は305cmである。

出土遺物 時期を示す遺物は認められなかったが、おおよそ溝-3と同じ弥・中・Ⅱ～弥・後・Ⅰの期間を中心に機能したと考えられる。

(澤山)

溝-14 (図版35)

位置 P16区東の微高地上面および古墳時代の水田の下層に部分的に削平を免れわずかに遺存するのが確認された。

構造 微高地上面の海拔330cmにおいては幅195cm、深さ60cmの規模で断面皿状に見られた。溝内に埋積していた土は、基盤のものと然程変わらない性質のものであったがわずかに砂質度の高さで判断した。

出土遺物 時期は出土遺物が小片で明確ではないが弥生時代中期前半頃と考える。

(島崎)

(10) その他の遺構・遺物

その他の遺構・遺物 (図版144～146・367)

ここで報告する弥生時代の遺物は遺構検出段階の掘り下げにより出土したもの、また古墳時代以降の遺構に混入したものなどである。土器について器種ごとにみると壺1104～1112、甕1113～1116・1118～1123、蓋1125、鉢1117・1124・1126～1131、高杯1132～1136などがある。

1104は弥・前・Ⅲの広口壺である。頸部が長く口縁部が大きく開口しており頸胴部付近に平行ヘラガキ沈線が6条めぐっている。外面と内面口縁部にヘラミガキを行っている。1105～1108は弥・中・Ⅱのものである。短頸広口壺1105は口縁端部を肥厚させ、端面には3条凹線に櫛状の工具により斜方向の細い刻目を密に施している。また頸部には指頭による上下2段の刻目をもつ幅広の貼付突帯を付す。外面にハケメのちヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを密に行っている。1106・1107は肥厚させた端部に刻目をもつ口縁部が大きく開き、頸部には刻目突帯をめぐらす広口壺である。そのうち1107には口縁端面に円形浮文を施している。広口壺1108は口縁端部を下方に垂下させ、端面には3条凹線に斜方向の細い刻目を施し、頸部には指頭による刻目をもつ貼付突帯を付す。1109・1110は弥・中・Ⅲである。1109はゆるやかに外反する頸部に下方に拡張させた口縁部をもつ広口壺であり、端面に細い刻目を施している。また肩部には刺突文をめぐらしている。外面にはハケメ、内面は肩部付近に指頭圧痕を残す。1110は胴張りの体部にやや内傾ぎみに立ち上がり、口縁部に向かって大きく開口する大形の広口壺である。口縁端部は上下に拡張させ、端面には5条の凹線に4本1単位の棒状浮文が推定6カ所に施され、頸部には9条の凹線を、また頸胴部にはハケメ原体による刺突文をめぐらし

第4章 調査の概要

ている。また外面はハケメのちヘラミガキ、内面は胴部中位にヘラミガキ、上位にはハケメを行う。**1111**はゆるく外反する頸部に上下に拡張させた口縁をもつ。**1115**はほぼ上方に立ち上がる頸部に上下に肥厚させた口縁をもつ長頸壺であり、頸部、口縁部ともに無文である。時期は弥・後・Ⅰである。

1113は口縁端部に刻目をもつもので弥・前・ⅡないしⅢである。**1114**は短くく字形に屈曲する口縁の端面に4条の凹線と刻目を施したものであり、弥・中・Ⅱである。**1115**～**1124**は総じて弥・中・Ⅲ新相から弥・後・Ⅰ古相とおもわれ、そのうち**1115**～**1120**は短頸広口甕である。**1115**や**1116**は短く外反させた口縁部を上下に肥厚または拡張させ、端面に**1115**は4条、**1116**は2条の凹線を施したものである。また**1115**の外面肩部付近にはタタキメを残す。**1117**は平たい円盤状の底部から外傾気味に立ち上がり、肩部で大きく内側に屈曲させてわずかに伸びる頸部に肥厚した口縁が付くものである。口縁端面には2条凹線、外面肩部には刺突文を有する。**1118**は胴張りの体部をもち、上下に肥厚させた口縁部の端面には3条凹線を施す。**1119**は厚手の底部から外傾ぎみに立ち上がり、肩部でゆるく内弯し短い頸部に肥厚させた口縁部をもつものである。**1120**は口縁部末端を折り返した上下拡張部分に4条の凹線を施し、棒状浮文と円形竹管文を加飾するものでやや古相のものといえる。**1123**・**1124**は肥厚させた口縁部を有する小形品である。**1125**は扁平したつまみをもつものである。**1126**～**1128**は椀状の形態を呈し、**1128**は口縁部が内側にわずかに屈曲する。これらは弥生時代後期の範疇に位置付けられるものである。**1129**～**1131**は丸みをもった胴部に短く外反した口縁部がつくもので、**1129**の口縁端面には凹線またはヨコナデにより凹みを残し、**1130**は頸部変換点付近に2孔1対の穿孔を行っている。**1131**の口縁端部は内側につまみ上げたものであり、外面肩部には**1109**にみられたタイプと同じ刺突文を施している。台付鉢の可能性が高い。これらは弥・後・Ⅰあたりのものと考えられる。**1132**～**1134**はいずれも浅い杯部に外傾気味に立ち上がる口縁を有し、**1132**は肥厚気味に、**1133**は面取り気味に、**1134**は水平に拡張した状況である。**1135**は脚裾部に円孔を9個配するものである。**1136**は脚部、脚裾部に加飾を行っており、縦沈線は12～13本1単位5ヵ所、横沈線は5本1単位で2ヵ所、円孔は横2個1単位で5ヵ所、縦2個1単位で5ヵ所施し、逆C字形の半裁竹管文を脚裾端部に行っている。**1135**・**1136**は両者とも弥・中・Ⅲと思われる。

土製品では、大形で櫛描文と刺突文などにより加飾された分銅形土製品**C20**・**21**・**25**や、小形で無文化している分銅形土製品**C23**・**24**・**26**・**27**がみられ、そのうち**C20**・**24**・**25**・**27**には上端部から裏面に貫通させた円孔がみられる。時期は前者の一群が弥・中・Ⅱ～Ⅲ、後者が弥・中・Ⅲ～後・Ⅰに比定されると思われる。

石器では石鏃**S29**～**34**・**36**～**39**・**41**～**43**や石包丁**S47**～**49**・**51**～**56**・**58**～**61**・**63**・**64**・**66**・**67**、スクレイパー**S68**～**73**・**76**、不明石器**S77**・**79**・**80**、石鏃**S81**、石斧**S84**～**87**などが出土している。石錘、砥石類については時期を特定することが困難なためここでの説明は省略する。なおそれぞれの石器の諸特徴については、第5章第5節にて詳細に検討を加える。

以上、このように遺物を見てみると、土器はわずかに弥・中・Ⅱや弥・後・Ⅰを含むものの主体は弥・中・Ⅲであり、この状況は既報告の中屋調査区のものとほぼ同じといえる。しかしながら北接する西川調査区では長頸壺を中心に弥・後・Ⅱの土器も多数みられており、両者には土器の時期において若干の差異が認められる。

(澤山)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

(1) 概 要

古墳時代の遺構には、竪穴住居93軒、掘立柱建物2棟、土壇57基、土壇墓1基、土器棺墓2基、溝12条のほか、調査区南西で検出された水田がある。これらの遺構のうち、古墳時代前期に属するものがその大半を占める。今回報告した前期の竪穴住居83軒は、大溝を境にして3群に分かれており、これらは住居の主軸で区分するとさらに数単位に分けられる。これによって、この集落を一時期に構成していた住居の数をおおよそ把握することができるが、その数は未報告の部分も考慮すれば、同時期の集落としてもかなりの規模と言える。また、竪穴住居の多くは互いに切り合いをもって存在している。しかもこれらは互いに位置をずらしながらも、その主軸を揃えて建て替えが行われていた。これらの住居から出土した土器は、こうした建て替えが短期間のうちに行われたことを示しており、住居の建て替えにあたって人為的な埋戻しが行われたものと推定される。最終的に放棄された住居の中には多くの土器が投棄された状態で出土するものがあり、遠隔地からもたらされた搬入土器も多く含まれていた。このことは、複数の銅鏡の出土とともに、この集落の性格について重要な示唆を与えるものである。ところが古墳時代前期末になると竪穴住居は激減し、今回は1軒を報告したにすぎない。このころには南西部における水田耕作も放棄されていたようで、集落が急速に解体した様相を示している。

古墳時代中期には、カマドをつくりつけた竪穴住居が現れる。これらは5世紀前半のものを最古として継続して営まれているが、その数は9軒と少なく、同時に存在した竪穴住居は数軒にとどまるものと思われる。また、古墳時代後期の竪穴住居は2軒にすぎず、これ以降、集落の中心は高田調査区に移ったものと思われる。

(亀山)

(2) 竪穴住居

竪穴住居-32 (図版36・147・316)

位 置 O17区の北東端に位置し、北東隅は調査区外(後年次報告)に延びているが、今回あわせて報告する。

構 造 隅丸方形を呈する4本柱の住居で、検出面からの深さは55cmを測る。床は少なくとも3面あり、建て替えが行われたものと考えられる。下層の床面Aは、標高360cmで、長さ397cm、幅360cmの隅丸方形をなす。主軸はN-12°-Eで、床面積は13.2m²を測る。壁体から40cmの位置にある4基の柱穴は径30~45cmの不整形円で、深さは35~52cmと東側の柱穴がやや浅くなっている。柱間距離は281~258cmを測る。この床面に伴う付属施設は確認できなかった。

中層の床面Bは、床面Aの上に厚さ3~5cmの黄褐色粘土を貼ってたたきしめたもので、長さ467cm、幅420cmの隅丸方形をなし、主軸をN-9°-Eにおく。15.8m²を測る床面の周囲には幅10cm、深さ5cmの壁体溝がめぐっている。主柱は4本で、柱穴は径45~65cmの楕円形をなし、深さは50cmほどある。柱間は242~240cmを測る。主柱と壁体溝の間には、幅110cm、高さ5cmほどの高床部を、南東を除く三方にコ字形に設けている。また、中央には径53cm、深さ10cmほどの円形をなす土壇が検出された。内部には炭が堆積し、底面には被熱痕跡が認められた。また、高床部を欠く南東の壁際には、

第4章 調査の概要

二段に掘りこまれた方形土壙が設けられているが、重複により規模は明らかでない。

上層の床面Cは、高床部に囲まれた床面Bの中央に黄褐色粘土を貼って水平にしたもので、標高は365cmを測る。南東の壁際には、やはり二段に掘りこまれた方形土壙が設けられていた。その上段は長さ59cm、幅52cm、深さ13cmの方形を呈し、下段は長さ38cm、幅25cm、深さ17cmの長方形をなす。主柱は床面Bの柱穴を踏襲しているが、その埋土からは土器片が出土しており、土層観察の結果からしても、住居が放棄される段階で柱が抜き取られたことを示している。

出土遺物 竪穴の内部には、多数の遺物を含む土層がレンズ状に堆積していた。ことに西側では竪穴の上部を崩しながら流入した状況が看取された。この住居出土の遺物として、壺13、甕39、高杯10、鉢3、器台1、製塩土器1、土製支脚1などがあるが、床面に伴うものは壺1、高杯1などわずかである。床面Cに伴う壺1137は口縁部を欠いているが、最大胴径30.2cmを測る。肩の張る胴部から窄まる頸部にいたり、屈折して斜め上方に開く口縁部へと繋がる。外面は粗いタテハケで調整したのちヘラミガキを加え、内面はヘラケズリで仕上げる。1138は口径6.8cm、器高8.5cmを測る小形の壺で、外面をヘラミガキ、内面をナデで調整する。口径8.2cm、器高10.4cmを測る1139は、椀形の杯部をもつ小形の高杯である。外面はナデで調整し、内面をハケメで仕上げている。1142は器高7.2cmを測る土製の支脚で、上面はわずかに傾斜し、側面に小さな突起をつける。手捏ね土器1143は方形土壙から出土したもので、口径5.4cm、器高4.2cmを測る鉢形をなし、内外面にユビオサエの痕をとどめる。これらの土器は古・前・I期に相当するが、床面Aはその構造からして弥・後・IV期以前に溯る可能性が強い。(亀山)

竪穴住居-33 (図版37)

位置 竪穴住居-32と重複して検出した住居で、北西は竪穴住居-32に、南東は竪穴住居-34に切られている。

構造 残存部分がわずかなため全形を知り得ないが、南西隅の形状から一辺550cmで主軸をN-10°-Eにおく方形ないし隅丸方形をなすものと思われる。床面の標高は393cmと高く、現状での深さは5cmしかない。壁体溝は幅23~18cm、深さ4cmを測るが、主柱は確認できなかった。

出土遺物 この住居に伴う遺物は少なく、詳細な時期については不明であるが、竪穴住居-33、35との切りあい関係からすれば古・前・I期ないしこれを若干遡るものとみて大過ないであろう。

(亀山)

竪穴住居-34 (図版37・147)

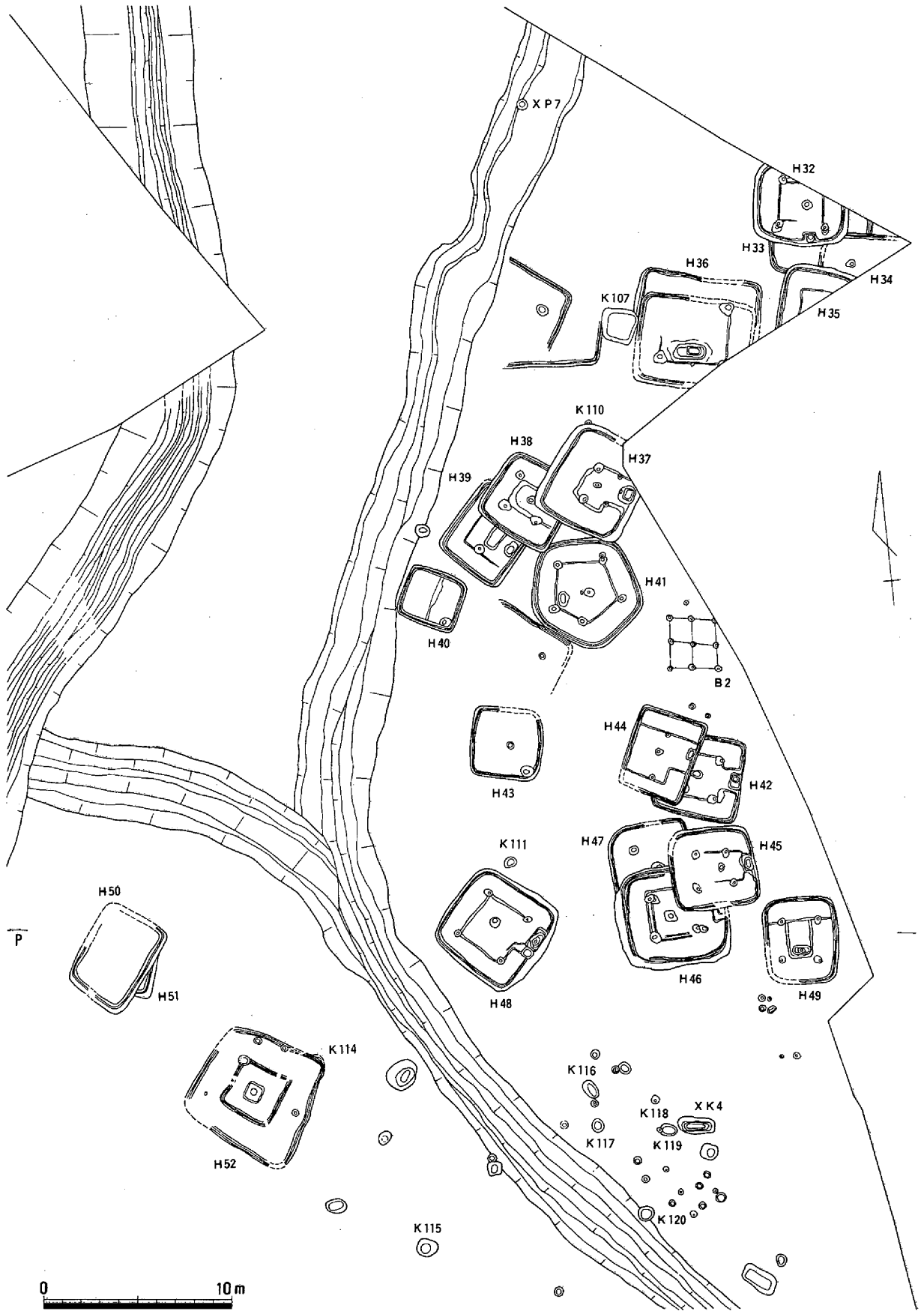
位置 竪穴住居-33の南東を壊してつくられた住居で、東側は調査区外に延びている。また、南西は竪穴住居-35によって切られている。

構造 北西隅の検出にとどまったため全容は明らかではないが、4本の主柱をもつ方形ないし隅丸方形の住居であったものと見られる。全形を知り得ないが、南西隅の形状から一辺550cmで主軸をN-7°-Eにおく方形ないし隅丸方形をなすものと思われる。幅22~17cm、深さ5~4cmの壁体溝がめぐる床面は標高390cmで、竪穴住居-33よりわずかに低く、検出面からの深さは8cmを測る。1本のみ確認できた主柱は、壁体溝から150cmの位置にある。径50cmの楕円形をなす掘り方をもち、深さは60cmある。

出土遺物 竪穴の深さはきわめて浅く、出土遺物も壺1、甕3、高杯2、鉢1の小片が出土するにとどまった。これらは図示できなかったが、二重口縁に葡萄沈線を飾る甕や、上方に大きく開く高杯の



第12図 古墳時代遺構全体図1 (1/600)



第13図 古墳時代遺構配置図1 (1/300)

形態からみて古・前・I期に比定される。

(亀山)

竪穴住居-35 (図版37・147・316・317)

位置 O17区の北東に位置する住居で、竪穴住居-33、34の南側を壊してつくられている。

構造 住居の過半は調査区外に延びているためその全形を知り得ないが、今回検出された北西隅の状況からすれば、主軸をN-17°-Eにおく一辺4mほどの方形をなすものと推定される。検出面から50cm下がった床面の標高は367cmで、その周囲には幅10~6cm、深さ6~4cmの壁体溝がめぐる。また、北・西辺には幅80cm、高さ3cmの高床部が設けられている。床面の中央には深さ4cmの方形をなす土壌が検出された。しかし、この住居に伴うような柱穴は確認できなかった。

出土遺物 埋土からは壺1、甕3、高杯1が、床面からは小形壺1、鉢1が出土している。埋土から出土した壺は小片のため図示できなかったが、端部を上方に大きく拡張した二重口縁をもつ大形の壺で、同一個体とみられるものが、ここから14m離れた溝-16から出土している。小形壺1144は北西の壁際から完形で出土した。口径10.8cm、器高8.0cmを測り、偏球形をなす胴部から屈折して斜め上方に延びる口頸部をもつ。胴部の外面はタテハケで調整し、内面はヘラケズリののちナデで仕上げる。小形鉢1145は、浅い胴部から緩やかに外反する口縁端部を斜め上方に拡張した二重口縁をもち、口径15.8cmを測る。内外面をナデで調整したのちヘラミガキを施している。これらは古・前・II期の特徴を示している。

(亀山)

竪穴住居-36 (図版38・147・317・368)

位置 竪穴住居-35の東1mで検出した住居で、南東隅は調査区外に延びている。

構造 4本柱の方形をなす住居で、当初は2軒の住居が重複したものと判断されたが、その後の調査で同一の住居である可能性が強まったため、ここでは1軒の住居として記述する。長さ590cm、幅582cmの方形をなし、主軸をN-15°-Eにおく。これは竪穴住居-32~35の主軸とほぼ等しい。検出面から48cm下がった床面の標高は365cmで、復元される面積は32.3㎡と大形である。床面の周囲には幅15~8cm、深さ5~3cmの壁体溝がめぐる。4本の主柱は壁体から120~150cmの位置にあり、その柱穴は径45~80cm、深さ35~70cmの不整円形で、柱間距離は343~303cmを測る。柱穴には径20cmほどの抜き方が認められるものがあり、土器片も出土していることから、住居を放棄するにあたって柱材が抜き取られた可能性がある。北辺に沿った床面は、長さ603cm、幅120cmの範囲で23cmほど段状に高くなっている。異なる住居の床面とも考えられたが、主柱に接している状況からすれば高床部の一種と見るべきであろう。また、南・東辺にも135~110cm、高さ3cmの高床部が設けられている。床面の中央南よりには、幅30cm、高さ5cmの土堤が、長さ230cm、幅120cmの楕円形にめぐっている。その内側には、長さ85cm、幅48cmの方形をなす土壌が検出された。深さ21cmある土壌の上縁はわずかに段状をなし、蓋の存在を想起させる。土堤に囲まれた範囲内には土壌底にいたるまで炭化物が薄い層をなして分布していたが、被熱痕跡は認められなかった。埋土の下層からは厚さ3cmほどの粘土が面をなして検出された。これらは上屋に由来するものと考えられる。また、北西の床面からは拳大の礫がまとまって出土したが、その意味については不明である。

出土遺物 埋土からは砥石のほか壺1、甕3、高杯1の小片が出土しているが、図示できるものはなかった。しかし、南辺の高床部からは高杯1141が伏せた状態で出土した。口径21.2cmを測る杯部は、浅い体部と斜め上方に立ち上がる口縁部からなり、内外面をハケメで調整する。脚部は長い柱状部を残すのみで、外面を横方向にヘラミガキする。類例に乏しいが、古・前・I期ないしこれを若干遡る

ものと考えたい。

(亀山)

竪穴住居-37 (図版39・147・148・318・319・368・369)

位 置 O17区の中央、竪穴住居-36の南西3mに位置する2本柱の方形住居で、北西で竪穴住居-38を壊してつくられている。また、南東隅は調査区外に延びており未検出である。

構 造 この住居では上下2層の床面が確認されている。下層の床面Aは、長さ475cm、幅386cmの方形をなす。検出面からの深さは57cmで、標高は354cmを測り、主軸をN-36°-Eにおく。14.5㎡を測る床面の周囲には幅17~12cm、深さ10~8cmの壁体溝がめぐり、南を除く三方には幅110~125cm、高さ10cmの高床部をつくりつける。2本の支柱穴は、径55~40cmの円形で、深さは40cmあり、柱間の距離は187cmを測る。床面の中央には長さ59cm、幅55cm、深さ8cmの土壌が設けられており、底面から側面にかけて被熱痕跡が認められる。被熱痕跡は、このほか南西の高床部など2箇所認められた。また、高床部が途切れた南辺の中央壁際には、二段に掘りこまれた方形の土壌が検出された。上段は長さ98cm、幅61cm、深さ10cm、下段は長さ70cm、幅50cm、深さ20cmを測る。この土壌の北には長さ13cm、幅5cm、深さ18cmの小ピットがあり、その周囲には長さ145cm、幅37cmの範囲にわたって砂利の散布が認められた。

標高360cmを測る床面Bは、床面Aに厚さ2~5cmの粘土を貼ったうえ、周囲を拡張して、長さ508cm、幅426cmの方形をなす床面をつくりだしている。その面積は18.2㎡で、主軸はN-35°-Eと床面Aにはほぼ等しい。床面の周囲をめぐる壁体溝は幅20cm、深さ5cmとやや狭くなっている。しかし、南を除く三方に設けられた高床部は幅125~160cm、高さ5cmと広がっている。2本の支柱の位置はほぼ踏襲されており、柱間の距離も178cmと近似した値をとる。床面の中央に穿たれた土壌は長さ42cm、幅35cm、深さ8cmと規模は縮小するものの、被熱痕跡は広範に認められる。南辺の中央壁際に設けられた方形の土壌は、やはり二段に掘りこまれている。上段は長さ99cm、幅84cm、深さ8cm、下段は長さ65cm、幅46cm、深さ21cmを測る。ここでも長さ29cm、幅12cm、深さ22cmの小ピットが北縁に掘りこまれている。また、この土壌の北東・西にあたる高床部の端には径25~22cmの柱穴が検出された。深さは13~5cmと極めて浅く、補助的な機能を担っていたものと思われる。

出土遺物 埋土からは壺26・甕133・高杯20・鉢7・小形壺7・器台1・製塩土器3など多量の土器が出土した。その多くは床面に接し、一部は付属施設に落ち込んでいることから、住居が放棄されて比較的早い段階に投棄されたものと思われる。また、その出土状況からすれば、投棄の主体は南東方向にあったものと推測される。壺は二重口縁をもつ広口壺と直口壺1146とがある。1146は、口径16.8cmを測る口縁部は斜め上方に延び、ヨコナデで調整する端部はあまい凹面をなす。肩の張る体部は外面をタテハケ、内面をヘラケズリする。1147~1149、1152~1153は、二重口縁に櫛状工具による多条の沈線をめぐらす甕で、体部は楕円形をなす。いずれも中型の法量をもつが、器高25.6cmを測る1148、1151はやや大きい。体部外面はタテハケで調整したのち下半にナデを施し、線状のヘラミガキを加えている。内面は薄くヘラケズリしたのち、下半を中心にユビオサエしている。また、1147、1149、1152の肩部には刺突文が認められた。1150~1151、1154は小形の高杯で、口径11.4~13.8cm、器高8.0cm前後を測る。杯部は、浅い体部から屈折して斜め上方に延びる口縁部をもち、柱状部から屈折して開く脚部は3つの透かし孔を穿つ。1155は大形の高杯で、口径20.6cmを測る杯部は平坦な体部から斜め上方に大きく開く口縁部をもち、脚部は中空の柱状部から屈折して広がる裾部をもち、4つの透かし孔を穿つ。脚径は14.4cm、器高14.8cmを測る。1156は浅い碗形をなす鉢で、口径15.7cm、

器高6.0cmを測る。外面は下半をヘラケズリし、内面はハケメで調整する。1157は二重口縁をもつ大形の鉢で、口径38.2cmを測る。肩の張る体部は、外面をハケメで調整し、内面をヘラケズリしたのちナデで仕上げている。これらの土器は古・前・Ⅱ期に属している。なお、埋土からは鉄器が数点出土しているが器種については明らかでない。(亀山)

竪穴住居-38 (図版40・148・319)

位置 竪穴住居-37の西に位置する4本柱の方形住居で、南東隅は竪穴住居-37によって切られている。また、南西側では竪穴住居-39と重複している。

構造 長さ407cm、幅402cmの方形をなす住居で、主軸はN-39°-Eと竪穴住居-37にほぼ等しい。床面の周囲には幅15~13cm、深さ6~3cmの壁体溝がめぐり、床面積は13.9㎡を測る。この住居でも上下2層の床面が確認されている。下層の床面Aは、検出面からの深さ25cmで、標高は374cmを測る。南東を除く三方に幅120~150cm、高さ5cmの高床部をつくりつける。壁体から80~115cmの位置にある3基の柱穴は、径50~65cmの不整円形で深さは60cmあり、柱間の距離は187~182cmを測る。床面の中央に設けられた土壇は、長さ52cm、幅35cm、深さ9cmの楕円形で、被熱痕跡が広範に認められる。また、高床部が途切れた南辺の中央壁際には、方形土壇と見られる幅49cmの掘り方の一部が検出された。

床面Bは、高床部にあわせて床面Aの中央に厚さ5cmの床土を貼ったもので、標高は379cmを測る。主柱の位置は床面Aとはほぼ一致するが、柱間の距離は187~182cmとわずかに狭まる。中央穴は長さ87cm、幅83cm、深さ16cmの円形で、側面の一部に被熱痕跡が認められる。

出土遺物 この住居の埋土からは、小形壺、甕、高杯、鉢、製塩土器のほか手焙形土器が出土しているがその量は少ない。1158の手焙形土器は、鉢部のみで覆部を欠いている。最大胴径14.2cmを測り、底部との境界には断面三角形の突帯をめぐらす。高杯1159は、脚部のみであるが、椀形の杯部を有していたものと思われる。ヘラミガキで調整した短い柱状部と大きく広がる裾部からなり、脚径16.6cmを測る。これらの土器は古・前・Ⅰ期に相当する。(亀山)

竪穴住居-39 (図版41・148・319・320・369)

位置 竪穴住居-38の西に位置する2本柱の方形住居で、北東半は竪穴住居-38の下層となる。

構造 床面の規模は、長さ450cm、幅357cmの長方形をなし、主軸を竪穴住居-38に近いN-42°-Eにおく。検出面からの深さは30cmで、床面の標高は364cmと竪穴住居-38より10cm深い。床面積は14.8㎡を測り、周囲には幅22~9cm、深さ10~6cmの壁体溝がめぐる。南東を除く三方に設けられた高床部は、幅80~100cm、高さ3cmを測る。2本の主柱は、壁体からそれぞれ110、120cm離れた位置にある。柱穴は径35~50cmの不整円形で、深さは60cmある。柱間の距離は209cmを測り、その間には長さ147cm、幅79cm、深さ11cmの長方形をなす浅い土壇が設けられている。底面には薄い炭化物の層が認められたが、被熱痕跡は確認できなかった。その南東には、二段に掘りこまれた方形の土壇が検出された。その規模は、長方形をなす上段で長さ82cm、幅40cm、深さ8cm、楕円形を呈する下段で長さ49cm、幅32cm、深さ10cmを測り、壁体溝から独立している点で他と異なっている。また、この土壇の北西には長さ41cm、幅19cm、深さ23cmの小ピットが穿たれている。

出土遺物 この住居から出土した遺物には、小形壺、甕、高杯、鉢など少量の土器がある。1160は完形に復元できた甕で、器高は24.4cmを測る。径15.1cmを測る二重口縁には櫛描沈線を飾る。倒卵形をなす体部は最大胴径21.7cmを測り、底部は小さな平底をなす。張りのある肩部は外面をハケメで調整

したのち、線状のヘラミガキを加え、刺突を施す。1161～1162の高杯は、浅い体部から外反してのびる口縁部をもつ。杯部に差し込んで接合された脚部は中実ぎみにつくられている。これらは古・前・Ⅰ期の様相を示している。(亀山)

竪穴住居-40 (図版41・320・321)

位置 竪穴住居-39の南西1mに接する柱をもたない小形の方形住居である。

構造 この住居の床面は上下2層に別れている。下層の床面Aは長さ313cm、幅275cmの方形をなし、主軸をN-28°-Eにおく。標高は382cmで、床面積は6.8㎡を測る。周囲には幅19～13cm、深さ8～5cmの壁体溝がめぐる。また、南東には長さ261cm、幅142cm、高さ4cmの高床部を設けており、その南隅には長さ71cm、幅63cm、深さ13cmの楕円形をなす土壇が掘りこまれている。この土壇の側面や床面には5箇所にわたって被熱痕跡が認められた。

床面Bは、床面Aの高床部にあわせて床を貼っており、その標高は389cmと高く、検出面からの深さは10cmときわめて浅い。壁体溝がめぐる床面は、長さ315cm、幅288cmの方形で、床面積は7.5㎡とわずかに広いものの、主軸は床面Aと変わらない。この面でも被熱痕跡が2箇所確認された。

出土遺物 この住居の埋土からは、甕、高杯、鉢、製塩土器などの土器が少量出土しているが、いずれも図示できなかった。甕は二重口縁に櫛描沈線をめぐらすもので、鉢は低い台をもった山陰系の土器である。また高杯は、平坦な体部から口縁部が上方に開く杯部をもち、古・前・Ⅱ期の特徴を備えている。(亀山)

竪穴住居-41 (図版42・148・320・321・369)

位置 竪穴住居-40の東3.5mに位置する5本柱の住居で、北は竪穴住居-37、38と接している。

構造 長さ562cm、幅535cmの隅丸五角形をなす。検出面からの深さは36cmで、床面の標高は358cmを測る。周囲には幅10～13cm、深さ7～4cmの壁体溝がめぐり、その面積は22.6㎡を測る。壁面に沿って設けられた高床部は、幅80～100cm、高さ3cmを測る。壁体から80～110cm離れた位置にある5本の主柱は、径35～60cm、深さ50～65cmの不整円形をなす掘り方をもつ。柱間の距離は244～177cmで、南西辺が短くなっている。床面の中央には長さ57cm、幅46cmの楕円形をなす土壇が検出された。深さは49cmと中央穴にしてはかなり深い。埋土には炭・灰は含まれておらず、被熱痕跡も認められなかった。ただし、この北側の床面で被熱痕跡が1箇所見つかっている。土壇の西には方形土壇に伴うことの多い小ピットが検出されている。長さ23cm、幅9cm、深さ12cmを測る。また、その西には主柱に接して長さ86cm、幅56cm、深さ33cmの不整な楕円形をなす土壇が設けられている。

出土遺物 出土した遺物には、壺、甕、高杯、器台などがあるが、床面に伴うのは壺2、甕1、高杯1、鉢1と少量である。床面から出土した1166はほぼ全形を知りうる壺である。屈曲する頸部から上方へ開く二重口縁は、口径15.6cmを測り、ヨコナデで調整する。体部は肩の張る球形を呈し、最大胴径24.2cmを測る。外面はハケメで調整したのちヘラミガキを施し、内面はヘラケズリして底部付近をユビオサエする。1164は口縁部を失っているが小形の直口壺と見られる。最大胴径13.3cmを測る球形の体部は外面を丁寧にヘラミガキし、内面をヘラケズリしたのちナデで仕上げる。1163、1164は、櫛描沈線を施した二重口縁をもつ甕である。1163は口径18.4cm、最大胴径27.0cmを測る大形で、張りのある肩部には刺突文を施す。これに対し1165は口径6.1cm、最大胴径15.0cmと小形であるが、球形をなす体部の肩には、やはり刺突文が認められる。これらの土器は古・前・Ⅱ期に相当する。(亀山)

竪穴住居-42 (図版43・149・322)

位 置 竪穴住居-41の南西4mで検出した柱をもたない方形住居で、北東隅は中世の井戸-1によって壊されている。

構 造 床面の規模は、長さ365cm、幅352cmの方形で、主軸をN-14°-Eにおき、その面積は11.9m²を測る。検出面からの深さは20cmで、床面の標高は380cmを測る。その周囲には幅10~13cm、深さ8~4cmの壁体溝がめぐっているが、そのほかにも幅11~6cm、深さ2cmあまりの溝が2条検出されている。1条は、北辺から110cm離れた位置を平行に295cmのびている。もう1条は、これと直交するように西辺と130cmの間隔をおいて直線的に213cm延びる。これらT字形をなす溝は高床部を設けるための施設とも考えられるが、その内外において高低差は認められない。床面の中央には長さ57cm、幅46cm、深さ49cmの楕円形をなす土壇が設けられているが、ここでは被熱痕跡は認められなかった。南東隅には長さ72cm、幅62cm、深さ35cmの不整な楕円形をなす土壇が掘りこまれている。

出土遺物 この住居からは遺物がほとんど出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、竪穴住居-40と類似した構造をとるところから、似通った時期が想定できる。(亀山)

竪穴住居-43 (図版43・322・323)

位 置 O17区の南東に位置し、竪穴住居-42の東4mで検出した2本柱の住居で、竪穴住居-42の西側上層につくられている。

構 造 長さ444cm、幅356cmの長方形をなす床面は、現状での深さ22cmを測り、その標高は370cmを測る。主軸をN-25°-Eで、その面積は14.3m²を測る。周囲には幅16~12cm、深さ7~5cmの壁体溝がめぐっている。2本の支柱は、壁体溝からそれぞれ90・120cmの位置にある。柱穴は径25~40cm、深さ30cmの円形をなし、柱間の距離は218cmを測る。高床部は、床面の南北にわかれて設けられている。北側の高床部は、長さ345cm、幅95cm、高さ5cmの長方形をなす。これに対し南側では、長さ333cm、幅75cmの南辺から、東辺に長さ105cm、幅100cmほど延びた鍵形をなし、高さは5cmを測る。床面の中央に穿たれた土壇は、長さ40cm、幅34cm、深さ9cmの楕円形をなし、側面の一部に被熱痕跡が認められた。また、南北にわかれた高床部の間にあたる東辺壁際には、壁体溝と接続して、長方形をなす土壇が二段に掘りこまれている。その規模は、上段で長さ56cm、幅35cm、深さ14cm、下段で長さ39cm、幅20cm、深さ27cmを測る。

出土遺物 この住居からは壺、甕、高杯、鉢などの土器のほか、手鎌とみられる鉄器が出土している。床面から出土した**1172**は、屈曲した頸部から大きく外反して開く二重口縁をもつ壺で、口径20.0cmを測る。二重口縁に櫛描沈線をめぐらす甕には、口径14.5cm、最大胴径19.6cmを測る中形の**1173**と、口径11.8cm、最大胴径17.0cmを測る小形の**1174**がある。いずれも体部下半を欠いているが、外面をタテハケ後ヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整している。また、**1173**の肩には刺突文が施される。高杯**1175**は杯部のみで、口径18.4cmを測る。平坦な体部から屈折して斜め上方に延びる口縁部は、半ばで鈍い稜をなす。椀形をした鉢**1176**は床面から出土したもので、口径15.6cm、器高5.5cmを測り、底部外面をヘラケズリで仕上げる。これらの土器は古・前・Ⅱ期に属するものである。手鎌**M41**は長さ5.9cm、幅2.2cm、厚さ0.35cmを測る。両端を折り返して柄に装着していたものと思われるが、木質は確認できない。(亀山)

竪穴住居-44 (図版44・149・323)

位 置 竪穴住居-43の東に重複して検出した4本柱の方形住居で、西側は竪穴住居-43の下層に位置する。

構造 この住居の床面は3層に別れている。下層の床面Aは長さ418cm、幅407cmの不整形をなす。検出面からの深さは41cmで、標高は356cmを測る。主軸はN-19°-Eで、幅21~13cm、深さ10~6cmの壁体溝がめぐる床面積は14.0m²を測る。壁体から90~113cmの位置にある4本の主柱は、径45~65cm、深さ40cmの不整形をなす掘り方をもち、柱間の距離は221~179cmを測る。主柱の外側には、東辺を除く3方に幅103~120cm、高さ5cmの高床部がコ字形につくりつけられている。また床面の中央には、長さ45cm、幅42cm、深さ5cmの不整形をなす土壌が穿たれている。東辺中央の壁際に設けられた方形土壌は、二段に掘りこまれており、上段は長さ83cm、幅56cm、深さ11cmの長方形、下段は長さ43cm、幅36cm、深さ20cmの楕円形をなす。

中層の床面Bは、床面Aの高床部にあわせて床を貼っており、その標高は389cmを測る。床面の規模は長さ423cm、幅412cmの方形で、床面積は16.4m²とわずかに広いものの、主軸は床面Aと変わらない。4本の主柱のうち南東の1本がわずかに西へずれるものの、他の3本は床面Aにおける位置を踏襲しており、柱間距離も223~172cmとほぼ等しい。床面の北東隅には、長さ151cm、幅116cm、高さ6cmの方形をなす高床部が設けられている。同様の施設は南東隅にも付設されていたようであるが明瞭に検出できなかった。方形土壌は壁体溝に接続して東辺中央の壁際に設けられており、つくりかえは行われていない。これに対し床面の中央に設けられた土壌は、長さ75cm、幅63cm、深さ10cmの円形で、床面Aの中央穴よりわずかに西にずらして掘りこまれている。

長さ459cm、幅430cmの方形をなす上層の床面Cは、標高356cmで主軸をN-18°-Eにおく。幅10cm、深さ5cmの壁体溝は西、南方に広がり、床面積は18.4m²と拡大される。4本の主柱は南西の1本が西へわずかに移るほかはほぼ床面Bと一致するものの、床面の拡張により壁体からの距離は110~150cmと広がっている。これらの掘り方は径45~80cmの不整形をなすが、深さは65~73cmと深くなっている。柱間の距離は220~174cmを測る。床面Cの方形土壌は、東辺中央の壁際に規模をわずかに縮小して二段に掘りこまれており、上段は長さ89cm、幅58cm、深さ23cmの長方形、下段は長さ37cm、幅32cm、深さ20cmの楕円形をなす。また、方形土壌が設けられた東辺を除く3方に幅103~120cm、高さ5cmの高床部がコ字形につくりつけられている。床面の中央には、長さ69cm、幅44cm、深さ13cmの不整形をなす土壌が穿たれている。

出土遺物 この住居の埋土から出土した遺物には、壺5、甕9、高杯2、鉢4などの土器や砥石がある。甕にはく字形の口縁をもつものと櫛描沈線をもぐらす二重口縁を有するものがある。後者のうち、1167は口径15.6cmの中形、1168は口径12.0cmの小形甕である。1169は大形の鉢で、口径は33.2cmを測る。口縁部は垂直に立ち上がる二重口縁で、内外面をヨコナデで調整する。わずかに肩の張る体部は、外面をヘラミガキ、内面をナデで仕上げる。椀形をなす鉢1170、1171は、口径15.0cm、器高5.5cm前後を測り、いずれも底部外面をヘラケズリするが、内面は1170はナデ、1171はハケメで調整する。これらは古・前・Ⅱ期の特徴を備えている。S99は柱穴から出土した方柱状の砥石で、長さ6.9cm、幅1.7cm、厚さ1.8cmを測り、側面を研磨に用いている。(亀山)

竪穴住居-45 (図版45・149・324・325・369)

位置 竪穴住居-44の南に接する4本柱の方形住居で、西側の竪穴住居-46、47を壊してつくられている。

構造 長さ416cm、幅395cmの方形を呈し、主軸はN-3°-Eとほぼ南北におく。幅11~7cm、深さ7~4cmの壁体溝がめぐる床の面積は14.3m²を測る。この住居では上下2層の床面が検出された。

第4章 調査の概要

下層の床面Aは、検出面からの深さ42cmで、標高は354cmと竪穴住居-43より16cm深い位置にある。4本ある主柱は、壁体から100~120cmの位置にある。径60~35cm、深さ60cm前後の楕円形をなす掘り方もち、柱間は176~159cmを測る。床面の中央には、長さ63cm、幅53cm、深さ11cmの楕円形をなす土壌が掘りこまれている。その壁面の一部には被熱痕跡が認められた。東辺中央の壁際には、壁体溝と接続して方形の土壌が設けられている。二段に掘りこまれた土壌の規模は、上段の長さ95cm、幅54cm、深さ7cm、下段の長さ63cm、幅36cm、深さ21cmを測る。

床面Bは、黄褐色粘土を貼って標高356cmを測る床面をつくっている。東をのぞく3方には、幅120cm、高さ3cmの高床部がコ字形に設けられている。4基の主柱穴や壁際の方形土壌はここでもそのまま踏襲されているが、方形土壌には新たに礫敷きが付加されている。これは1cm前後の細礫を、方形土壌の西に接する長さ65cm、幅33cmの範囲に敷設したものである。これに対し中央穴は、東に位置をずらして掘りこまれている。長さ40cm、幅34cm、深さ7cmの楕円形で、埋土には炭・灰の薄い堆積が認められた。また、その北側には被熱痕跡が1箇所確認された。ところで、床面Bでは西側を中心とする広範囲に炭・灰の分布が認められた。なかには細い炭化材が格子状をなし、炭化した草本類がこれを覆っている状況が観察された。これらは上屋ないし壁体構造の一部と考えられたが、桁や垂木とみられる炭化材は確認できなかった。また、柱穴から1177、1179のような土器が出土している状況からすれば柱材は抜き取られた可能性が強く、住居を放棄するさいに構造材の一部を焼却したことが推定される。

出土遺物 この住居の埋土からは、壺1、甕12、高杯12、鉢2、製塩土器1などの土器が出土しているが、以下に述べる床面の遺物は西側でまとまって検出された。1177、1178は小形壺で、1177は北西の主柱穴から、1178は方形土壌から出土した。いずれも口径7.8cm、器高8.9cmと小形で、外面をタテハケ、内面をナデで調整している。鉢1179~1183のうち、1179は1177とともに北西の主柱穴から出土したもので、口径12.2cmの椀形をなす。西の床面から出土した1183は、浅い体部から屈折して外反する口縁部をもつ。口径17.5cmで、体部外面はハケメで調整し、内面はヘラミガキを施す。甕1182は口縁部を失っているが、く字形をなしていたものと思われる。体部は倒卵形を呈し、小さな平底を有する。平行タタキで成形したのち外面をタテハケで調整し、内面はヘラケズリ後革状工具によるナデで仕上げる。これらの土器は古・前・I期の様相を示している。 (亀山)

竪穴住居-46 (図版46・150・326・369・370)

位置 竪穴住居-45の南西に重複する4本柱の方形住居で、北東は竪穴住居-45によって切られているが、北では竪穴住居-47を壊している。

構造 この住居の床面は上下2層に別れている。下層の床面Aは長さ505cm、幅451cmの方形を呈し、主軸を南北におく。検出面からの深さは33cmで、標高は350cmと竪穴住居-43よりわずかに深くなっている。20.2㎡を測る床面の周囲には、幅7~5cm、深さ5cmの壁体溝がめぐっている。壁体から100~135cmの位置にある4本の主柱は、径60~33cm、深さ65~78cmの不整円形をなす掘り方もち、柱間は264~193cmを測る。西と南の柱間には幅7~5cm、深さ2cmを測る溝が検出された。これは高床部の構築にかかわる施設と考えられるが、床面Bの高床部と重複するため、幅135~115cmを知り得るのみで高さについては明らかでない。床面の中央に設けられた土壌は、長さ40cm、幅37cm、深さ14cmの円形をなし、その壁面の一部には被熱痕跡が認められた。また、この土壌の北側には幅19cm、深さ13cmの溝が60cmにわたって延びている。方形土壌は、壁体溝と接続して東辺中央の壁際に掘りこ

まれている。床面Bに伴う方形土壙と重複しているため本来の規模は必ずしも明らかでないが、現状では長さ50cm、幅29cm、深さ20cmの楕円形をなす。

上層の床面Bは、長さ530cm、幅496cmの方形をなし、その面積は22.5㎡とわずかに拡張されている。黄褐色粘土を貼って標高352cmを測る床面をつくっており、東をのぞく3方には、高床部をコ字形につくりつけている。その規模は幅115～125cm、高さ3cmと、床面Aに比べて狭くなっている。このことは床面拡張の目的が、主として主柱内面積の拡大にあったことを示している。4本の主柱は、ほぼもとの位置を保つもののわずかに外側にずれ、柱間の距離は285～203cmを測る。これに対し、長さ71cm、幅59cm、深さ18cmの不整形円形をなす中央穴は、その位置を西にずらして掘りこまれており、ここでも幅33cm、深さ10cmの溝が北西および南東に延びている。中央穴内およびその周辺には、広く炭・灰の分布が認められた。東辺中央の壁際に二段に掘りこまれた方形土壙は、床面Aのものと重複しているが、その中心はわずかに南へずれている。その規模は、方形をなす上段で長さ89cm、幅70cm、深さ16cm、長方形を呈する下段で長さ50cm、幅29cm、深さ20cmを測る。また、この掘り方の西端には、長さ27cm、幅13cm、深さ24cmを測る長方形の小ピットが穿たれている。

出土遺物 この住居の埋土からは、壺、甕、高杯、鉢などの土器や砥石が出土しているが、床面の遺物は西側でまとまって検出された。1177、1178は小形壺で、1177は北西の主柱穴から、1178は方形土壙から出土した。いずれも口径7.8cm、器高8.9cmと小形で、外面をタテハケ、内面をナデで調整している。鉢1179～1183のうち、1179は1177とともに北西の主柱穴から出土したもので、口径12.2cmの碗形をなす。1183は浅い体部から屈折して外反する口縁部をもつ。口径17.5cmで、体部外面はハケメで調整し、内面はヘラミガキを施す。甕1182は口縁部を失っているが、く字形をなしていたものと思われる。体部は倒卵形を呈し、小さな平底を有する。平行タタキで成形したのち外面をタテハケで調整し、内面はヘラケズリ後革状工具によるナデで仕上げる。これらの土器は古・前・I期の様相を示している。床面Bに伴って出土した砥石S97は泥岩製で、長さ9.0cm、幅2.6cm、厚さ2.2cmの方柱状を呈しており、両端を除く4面を研磨に用いている。(亀山)

竪穴住居-47 (図版47・150)

位置 竪穴住居-46の北に位置する隅丸方形の住居で、南は竪穴住居-46に、東は竪穴住居-45によって切られている。

構造 残存する部分がわずかなため全体の規模は知り得ないが、一辺460cmあまりの隅丸方形をなすものと推定される。検出面からの深さは16cmと浅く、標高380cmを測る床面は、竪穴住居-45、46より25～30cmほど高くなっている。その面積は20㎡ほどに復元され、主軸はN-2°-Eとほぼ南北におく。これは竪穴住居-45、46の主軸とおおむね一致する。主柱は北西隅に1本を確認するにとどまったが、本来4本で構成されていたものと思われる。壁体から120cmの位置にある掘り方は、径50cm、深さ45cmの楕円形を呈している。柱間の距離は明確ではないが、壁体との位置関係からすれば220cmあまりと想定される。幅13～7cm、深さ7～4cmの壁体溝がめぐる床面の中央には、長さ79cm、深さ43cmの楕円形を呈する土壙が設けられていたが、被熱痕跡や炭・灰の堆積は認められなかった。

出土遺物 床面から、壺、甕、高杯、鉢などの土器が少量出土している。1194は、径16.4cmを測る二重口縁に櫛描沈線を飾る甕で、なだらかな体部の外面はヘラミガキし、内面をヘラケズリで調整する。これらの遺物は古・前・I期の特徴を備えている。(亀山)

竪穴住居-48 (図版47・150・151・327・369・370)

位置 O17区とP17区の境界中央で検出した4本柱の方形住居で、竪穴住居-46の3m西に位置する。

構造 床面は長さ505cm、幅493cmの方形を呈しているが、北側の隅は南側に比べて丸くつくられている。現状の深さは43cmで、標高は354cmを測る。21.3㎡を測る床面の周囲には、幅10cm、深さ5cmの壁体溝がめぐる。4本の主柱は、壁体から85~120cmの位置にある。掘り方は、径25~45cmの楕円形をなし、深さは60~70cmを測る。柱間距離は277~261cmで、その主軸はN-40°-Eにある。柱間の外側には、南東辺を除く三方に黄褐色土を盛り上げてコ字形の高床部を設けており、その規模は幅130~95cm、高さ5cmを測る。高床部の北東、南西の内縁には細い溝が走り、仕切りの存在をうかがわせる。床面の中央には、長さ55cm、幅53cm、深さ14cmの円形をなす土壌が穿たれており、その内部からは炭・灰が層をなして検出された。また、南東辺の壁際には、壁体溝に接して方形の土壌が2基併設されていた。南側の土壌は、長さ60cm、幅54cm、深さ20cmの方形をなす。これに対し北側の土壌は二段に掘りこまれており、その規模は長方形をなす上段で長さ121cm、幅63cm、深さ7cm、楕円形を呈する下段で長さ48cm、幅33cm、深さ30cmを測る。この土壌の西縁には幅20~8cmの溝がとりついており、西隅の主柱に向かって134cmほどのびている。

出土遺物 竪穴内の埋土は、主として南東方向からの流入を示している。この埋土から出土した遺物には、壺、甕、高杯、鉢、器台などの土器がある。1195は口径11.8cmを測る直口壺で、精良な胎土を用いてつくられており、外面には密なヘラミガキで調整している。1196は口径13.8cmを測る甕で、く字形をなす口縁部は端部をわずかに上方へつまみあげる。下ぶくれとなる体部は、外面にハケメを施し、内面をヘラケズリののちハケメで調整する。高杯1197、1198は、外方に大きく開く杯部と、中空の柱状部から屈折して広がる脚部からなる。杯部の内外面は密にヘラミガキし、脚裾部には3つの透かし孔を穿つ。1199~1201は皿形をなす鉢で、口径は13.5~15.7cmを測る。外面は底部付近をヘラケズリしたのちヘラミガキを加え、内面はナデにより仕上げる。1202、1205~1206は、丸い体部から屈曲して外反する口縁部にいたる小形の鉢である。口径10.0~12.4cmを測り、1202は外面をハケメ、内面をヘラミガキで調整し、1205~1206は内外面ともナデで仕上げる。1203~1204は小形の壺で、1206は手捏ねにより成形されている。小形器台1207は、脚裾部を欠いている。皿状をなす受部は、平坦な底部から口縁が斜め上方に立ち上がり、口径9.4cmを測る。直線的に広がる脚部は外面を丁寧なヘラミガキする。これらの土器は古・前・Ⅱ期の様相を示している。(亀山)

竪穴住居-49 (図版48・151・327)

位置 O17区の南東端で検出した4本柱の住居で、竪穴住居-46の東2mに位置している。

構造 隅丸方形をなす床面は、長さ443cm、幅370cmを測り、その面積は13.6㎡ある。深さは33cmで、床面の標高は372cmを測る。壁体から55~110cm離れた位置にある4本の主柱は、径50~30cm、深さ55~60cmの楕円形をなす掘り方をもつ。柱間の距離は224~194cmで、主軸はN-1°-Eとほぼ南北を指す。幅13~8cm、深さ9~4cmの壁体溝がめぐる床面は、主柱の外側に幅140~110cm、高さ5cmの高床部をつくりつける。このうち、北辺の高床部は他の部分よりわずかに高くつくられており、北側の主柱間には仕切りの痕と見られる細い溝が走っている。床面中央の南側では、二段に掘りこまれた土壌が検出された。その規模は、上段が長さ100cm、幅50cm、深さ15cmの長方形をなし、楕円形を呈する下段は長さ44cm、幅25cm、深さ9cmを測る。底面には薄い炭層が認められたが、被熱痕跡は確認されていない。

出土遺物 この住居からは壺2、甕13、高杯2、鉢1が出土している。このうち1209～1210は床面から出土したものである。1209は口径15.3cmを測る甕で、二重口縁には櫛描沈線をめぐらす。体部は肩の張りが強く、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。1210は口縁部が上方に大きく開く杯部をもつ。脚部は裾部を失っているが、杯部に差し込んで接合した柱状部は中実ぎみにつくる。内外面ともヘラミガキで丁寧に調整している。埋土から出土した1208はく字形の口縁部をもつ甕で、端部はわずかに上方へ拡張する。張りのある体部の外面にはタタキ成形の痕をとどめ、下半をハケメで調整する。また内面は、ヘラケズリののち丁寧なナデを施す。これらの土器は古・前・I期の特徴を示している。

(亀山)

竪穴住居-50 (図版48・151・152・328・370)

位置 調査区の北西部に位置し、溝-3の東側に検出された。

構造 規模は、長さ約464cm、幅約308cmで、平面形は方形を呈する。深さは、床面まで約70cm残存していた。床面の周囲は、幅10～20cm、深さ約8cm壁体溝が廻っている。床面には、中央部やや東寄りに径約60cm、深さ約10cmを測る中央穴が確認されている。この中央穴の周辺には小規模なピットが数基検出されている。

竪穴住居内の堆積は、第1～12層がレンズ状に堆積しており、床面直上には炭層が存在していた。

出土遺物 図示した1213～1214などの完形品は床面から検出されたものである。これらの土器はその特徴から、古・前・Iと考えられる。

(中野)

竪穴住居-51 (図版49・152・328)

位置 調査区の北西部に位置し、竪穴住居-50の下部に検出された。

構造 この竪穴住居は、竪穴住居-50と重なり合っていたため残存状態は良くなく、壁体溝が検出されたにとどまった。規模は、370×330cmで、平面形は隅丸方形を呈する。

出土遺物 検出された土器は少量で、図示した1225、1226であった。これらの土器は、古・前・I期に属するものである。

(中野)

竪穴住居-52 (図版49・152・329)

位置 P17グリッド北西隅で検出された竪穴住居である。竪穴住居-50・51の南東約5mに位置し、微高地上を貫流する溝-4と溝-16にはさまれた箇所所在する。他の竪穴住居との切り合いは認められなかった。

構造 長さ627cm、幅562cmを測るややいびつな方形を呈し、主軸方向はN-27°-Eを指す。検出面からの深さは約55cm、床面の標高は325cmであり、床面積は33.54㎡を測るやや大形の竪穴住居である。主柱穴は検出できず、本来的に無柱であったのかどうかは不明である。

竪穴住居内には幅約140cm、高さ約5cmほどの低い高床部を四方に設けており、この高床部の際に幅15cmほどの溝がめぐる。検出された高床部の上面には貼り床層は認められず、また叩き締めた状況も認められなかった。そのため、この面が元来の生活面であったかどうかは疑問が残る。高床部より1段低い床面には貼り床が認められた。床面中央には、約100cm四方の土壌状の窪みが検出され、その中央はさらに皿状に低くなっている。この方形の窪みは炭層で覆われており、焼土も多く認められた。

また、後述するように出土遺物には多くの鉄製品や鉄片があり、この竪穴住居が何らかの鉄加工に関わる可能性は非常に高いと考えられる。規模・構造の点から見ても、他の竪穴住居とはやや異なることも、この考えを否定しないと思われる。ただし、総社市窪木薬師遺跡で認められたような鍛造剣

片、粒状滓等の存在については、資料採集方法の問題から明らかではない。

出土遺物 出土土器は小片が多く、1227の甕と1228の高杯を図示したにすぎない。このほか鉄製品が多く出土したことは津寺遺跡全体の中でも特徴的である。7点を掲載したが、図示しなかった小鉄片もあわせ、23点確認された。M21・M36は鏃と思われる。他は、釘状を呈するもので、茎部と思われる破片もあるが、特にM88・M89・M90は、針状の鉄素材と考えている。図示しなかったが、このほかに刀子も出土している。また、用途不明な小片もあり、これらも鉄素材として利用された可能性を指摘したい。

出土した土器は少ないものの、これらからこの竪穴住居の時期は、古・前・Iと考えている。また、この時期における鉄製品の製作に関わる遺構として、注目されるであろう。 (大橋)

竪穴住居-53 (図版50・153・154・329・370~372)

位置 調査区の北西部に位置し、竪穴住居-50・51の南約8mに検出された。

構造 規模は、長さ約320cm、幅約250cmで、隅丸方形を呈している。竪穴住居の南側隅部は後世の溝により削平を受けている。深さは、床面まで約35cm残存しており、床面の周囲には壁体溝が廻っている。また、床面中央には径約25cm、深さ約15cmのピットが2ヶ所に検出されたが、間隔が約90cmと狭く支柱穴とは考えられない。さらに竪穴住居の北辺の中央部には、方形状の落ち込みが一部確認された。火処も床面中央部に1ヶ所存在した。

出土遺物 図示した土器はその大半が床面から検出されたものである。また、鉄器M48も1点出土している。これらの遺物は、いずれも古・前・Iの特徴を示している。 (中野)

竪穴住居-54 (図版50・154・329・372)

位置 中屋M3 I区に検出した住居で北西は竪穴住居-55と重複している。

構造 長さ275cm、幅230cmの小形の長方形で、ほぼ底面近くで検出した。床面の標高は372cmで、面積は6.4㎡である。床面の周囲には幅10~18cm、深さ5cm程の壁体溝がめぐっている。柱穴は住居のほぼ中央に径35cm、深さ60cmのものが1本検出できた以外は認められなかった。柱痕跡も観察できることから中央穴とは考えられず支柱の可能性が強い。中央の柱穴の東側には、長さ83cm、幅50cm、深さ5cmの浅い土壌と長さ90cm、幅6cm、深さ3cm程の溝状のものを検出した。また、柱穴の南側と北側の床面の広い範囲に炭、灰が認められた。

出土遺物 遺物は、埋土及び浅い土壌内より台付壺1253と高杯1254が出土している。時期は、出土遺物の器形特徴から古・前・I期と思われる。 (山磨)

竪穴住居-55 (図版50・154・330・372)

位置 北半やや東寄りで検出された竪穴住居であり、竪穴住居-54の北東隅と重複し、後出する。溝-16の上に構築されており、溝の埋没時期を勘案する好材料となる。

構造 主軸方向をN-54°-Wにとり長軸460cm、短軸355cmを測る長方形を呈する竪穴住居である。検出面からの深さは約25cm、床面の標高は390cmであった。床面積は、18.46㎡を測った。支柱穴は長軸方向に2本配され、柱間距離は150cmある。柱穴の断面観察から、径25cm弱の柱痕跡が確認された。2本の柱穴の中央やや北寄りに45×34cmの浅い窪み状の中央穴が確認された。床面は、黄褐色の貼り床が全面に認められた。南東辺やや北寄りに90×57×22cmの規模を持つ方形土壌が設けられており、この中から高杯1個体が完形で出土している。

出土遺物 出土した土器は、方形土壌から出土した1258の高杯以外は小破片である。1258の高杯は、



第14図 古墳時代遺構配置図2 (1/300)

脚裾部が折れ曲がり気味に外方へ大きく開くものである。1255はく字形口縁の甕、1256は壺である。1257の甕は他の土器と比較してやや時期が古いものであり、混入と思われる。このほか、土製紡錘車C72、用途不明の板状の鉄製品M82が出土している。M82については、南側の柱穴埋土から出土している。この竪穴住居の時期は、1258の高杯等から古・前・Ⅲと判断され、溝-17がこれ以前に埋没していたことを示している。(大橋)

竪穴住居-56 (図版51・154・330・372・373)

位置 竪穴住居-55の南西13mの位置の検出した。

構造 方形の住居であるが、東側と西側とでは長さが異なり、台形状を呈する。規模は西側の長辺が474cm、東側が400cm、幅は372cm、検出面からの深さ50cmを測る。住居の壁体に沿って、幅約10cmの溝がめぐるものであるが、北側では二条を検出した。内側の壁体溝は、住居内の最終的な埋土である焼土塊がこの溝を覆うことからこの溝は古い段階の壁体溝であり、拡張されて台形を呈するようになったものと考えられる。三方を高床部に囲まれた床の中央はL字形をなし、高床部との境は幅10cmから20cmを測る溝により区画されている。床部の南東隅には方形土壇があり、長さ55cm、幅40cm、深さ25cmを測る。この土壇の西側と床部の中央部に炭、灰の散布が見られた。方形土壇の北側にある床部と高床部を区画する溝の底には幅2～3cm、長さ70cmの帯状の痕跡を検出した。この痕跡は、溝の中央で食い違う状況を呈しており、板の埋められた状況を示すものと考えられる。住居跡の埋土には多量の焼土が含まれていた。特に大きな塊は高床部の直上で検出した。柱穴は床面を精査したものの検出できなかった。

出土遺物 壺、甕、高杯などが出土している。1259は、胴部外面にハケメ、内面はヘラケズリが施される。内面の頸部に近い部分にユビナデが見られる。播磨西部の系統を引くものと考えられる。1260は、口縁部外面に多条の櫛描沈線を施すものである。1261は、胴部外面にタタキを施すもので、他地域の系譜を引く可能性がある。1262、1263などの高杯は脚部が非常に短い。外面には細かいヘラミガキが施される。これらの遺物からして住居の時期は、古・前・Ⅰと考えられる。(井上)

竪穴住居-57 (図版51)

位置 竪穴住居-56の南東側に一部重なる状態で検出したものであるが、この竪穴住居のほうが古い。

構造 北側は中世の溝に、西側は竪穴住居-56に切られるためその一部を検出したのみである。そのため規模については不明であるが、検出面からの深さは40cmを測る。検出状況から見た住居の形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。2基検出した柱穴は円形を呈し、径45～55cm、深さ40～80cmを測る。西側の柱穴の底からは偏平な石を検出した。柱穴間の距離は210cmを測る。壁に沿っては、幅約10cm、深さ10cmの溝を検出した。住居跡の西壁に接して方形の土壇を検出した。土壇は竪穴住居-56に切られているため全体の規模は不明であるが、幅125cm、深さ12cmを測る。

出土遺物 遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、古・前・Ⅰと考えられる。

(井上)

竪穴住居-58 (図版52・330)

位置 竪穴住居-56の南西側に一部重なる状態で検出したが、この住居のほうが先行する。

構造 北東を竪穴住居-56に切られ、南西の隅は調査区境の溝により削平されているため全体は検出してないが方形を呈する小形の住居跡である。規模は、長さ364cm、幅323cm、検出面からの深さ

7 cmを測る。堅穴の壁に沿って、幅10～15cm深さ10～15cmを測る溝がめぐる。床面の中央には直径約27cm、深さ10cmを測る穴を検出した。穴の周囲には、長径120cm、短径100cmの範囲で炭、灰の散布が見られた。床面からは柱穴は検出されなかった。

出土遺物 埋土からは遺物が出土していないため、明確な時期については不明であるが、古・前・Iと考えられる。(井上)

堅穴住居-59 (図版52)

位置 P17区の中央部で検出された堅穴住居である。堅穴住居-56～58から南西約15mに位置し、堅穴住居-60・61と重複する。これらとの切り合い関係は、堅穴住居-60・61より先行する。

構造 堅穴住居-60によって、その大半を壊されており、西辺の壁体溝と床面の一部を確認できたにすぎないため、規模・構造等は不明であった。おそらくは、堅穴住居-60と大きくかわりなく方形を呈するものと思われる。床面の標高は334cmを測り、堅穴住居-60より約10cm高く、堅穴住居-61より約15cm低い。

出土遺物 遺存する部分がわずかであったためか出土遺物は微量であり、これらからは時期は判断できないものの、堅穴住居-60・61との切り合い関係から古・前・Iと判断している。(大橋)

堅穴住居-60 (図版52・154・155・331・373)

位置 P17区の中央部で検出された堅穴住居である。前述した堅穴住居-59、後述する堅穴住居-61と重複し、3軒のうち最も後出する堅穴住居である。北東隅は現有水路のため確認していない。

構造 長さ444cm、幅410cmを測る方形の堅穴住居で、主軸はN-4°-Eを指す。四方を幅約120cmほどの高床部がめぐる。また、北西隅が確認できていないものの、高床部を含めた床面積は18㎡ほどを測ると推定される。高床部の内縁の隅に配された主柱穴は4本であり、これに囲まれた高床部より15cmほど低い床面は195×220cmの規模を測り、標高は325cmである。床面南部には、42×32cmの方形を呈する深さ60cmの中央穴が検出された。この中央穴の埋土は炭・灰と焼土を多量に含み、掻き出し状に長さ154cm、幅91cmの浅い方形の窪みが認められた。また、北東と南西の柱穴のそばに焼土面が2カ所認められた。壁体溝は西辺中央でとぎれている。また、西辺南端近くの壁際に沿って、50cm四方の高床部より10cmほど高い方形の段が確認され、注意された。出入り口にかかわる施設の可能性を想起させる。

出土遺物 図示した出土遺物のうち、1267は二重口縁の壺、1268は小形の壺、1269～1271は甕、1272～1274は高杯である。このうち、1271の甕はタタキ成形であり、1270にもかすかにタタキメが観察される。また、1273の高杯はやや深い鉢状の杯部を有する。この高杯は北東の柱穴から出土している。このほかに、刀子M51が出土している。これらの出土遺物から、この堅穴住居の時期は古・前・Iと判断している。(大橋)

堅穴住居-61 (図版53・155)

位置 P17区の中央部で検出された堅穴住居で、堅穴住居-59より後出し、堅穴住居-60に先行する。東半の一部は堅穴住居-60に壊されている。この堅穴住居の上位には、古墳時代後半の堅穴住居-119・120が構築されている。

構造 平面形は長軸503cm、短軸484cmの方形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。主軸はN-4°-Wを指し、堅穴住居-60よりやや西に振る。床面の遺存状態は悪いが、幅15cmほどの溝が壁から約100cm離れた箇所の床面で観察された。このことから東側が開くコ字形を呈するか、もしくは

第4章 調査の概要

四方を囲う高床部を有すると判断している。主柱穴は4本であり、径15cmほどの柱痕跡も確認されている。柱穴間距離は280～300cmである。高床部を含む床面積は24㎡ほどに復元される。床面の最下部の標高は484cmである。中央穴は、49×44cmの円形を呈し、深さ10cmと浅い。またこの周囲は火を受けており、赤化していた。

出土遺物 出土した土器のうち4点を図示した。1275は二重口縁の壺、1276は甕、1277は製塩土器、1278は高杯である。1278の高杯は、有段の杯部を持つ。これらの出土土器、および竪穴住居-60との切り合い関係から、この竪穴住居の時期は古・前・Iと思われる。(大橋)

竪穴住居-62 (図版53・155・156・331・373・374)

位置 P17区の北西、南北に流走する大溝の左岸に位置する。竪穴住居-64の北側であり、竪穴住居-63と切り合い関係になる。

構造 長軸270cm、短軸193cm、深さ8cmを測り、主軸を南北にもつ長方形の住居である。床面には長さ80cm、幅約50cm、深さ18cmの中央穴を有するが、壁体溝、柱穴等は存在しない。床面海拔高は368cmである。

出土遺物 すべて土器であり、中央穴南側に左から1282、1283、1281、1289の4個体、中央穴東側に下から1279、1286、1284の3個体、西壁面近くに1285、1291、1293の3個体と1292の計11個体が出土している。1279、1284の壺と甕が住居床面より7～10cm浮いており、他は床面に近い状態での出土である。床面のものは弥・後・IV～古・前・Iにかけての時期であり、浮いている1284は古・前・Iの新相である。なお、1280、1287、1288、1290は竪穴住居-64の埋土中の出土である。1287、1288、1290、1292は竪穴住居-64の南隅上面から出土したものである。(高畑)

竪穴住居-63 (図版53・156)

位置 P17区の北西、南北に流走する大溝の左岸に位置する。竪穴住居-64の北側で竪穴住居-62と切り合い関係になる。

構造 住居プラン西側の確認は困難であった。一応、焼土面において床を想定し長軸358cm、短軸346cmの方形を推定した。壁体溝、柱穴等は持っていない。東側中央にみられる焼土面は長さ40cm、幅約20cmを測り、東西2か所に火を強く受けた場所がある。とくに東側が橙色を呈する。

出土遺物 床面北東部に破片ではあるが、1294、1295がまとまって出土している。1294は頸部を除き口縁と胴部に煤が付着しており、胴部には横位の細いハケメが認められる。2点とも山陰系の器形を呈する。古・前・Iに伴う甕と考えられる。(高畑)

竪穴住居-64 (図版54・156・157・331)

位置 P17区の北西にあり、北に竪穴住居-62・63、東に竪穴住居-66、南に竪穴住居-71・72に囲まれた中央に位置する。

構造 中軸432cm、短軸423cmの隅丸方形にて、検出面からの深さは50cmを測る。床面海拔高は328cm、床面積は18.2㎡である。住居内は幅10cm、深さ約5cmの壁体溝がめぐり、東南隅に長さ43cm、幅27cm、深さ約20cmの不整形な方形土壇が付設されている。床面は西側を除く三方向に幅40～50cm、高さ約10cmの高床部が設けられており、コ字形を呈する。床面には一辺30cmを測る方形の中央穴、不整形の幅60cm、深さ約20cmの土壇がみられる。4本の主柱穴は高床部にあり、柱穴間距離は北辺より245cm、西辺249cm、南辺237cm、東辺238cmを測る。柱穴掘り方は円形で直径40～50cm、深さ55～60cmを測る。

出土遺物 土器は住居の廃絶後、堆積が進行してゆく過程で投げ込まれており、破片が多い状況を呈する。そのうち床面から**1302**、**1304**、**1306**、中央穴上層から**1298**、中央穴下層から**1308**等の土器が出土しており、古・前・Iの新相に比定できる。(高畑)

竪穴住居-65 (図版55・157・158・332・374・375)

位置 P17区の北西にあり、40数軒からなる竪穴住居群の北西端部に位置する。

構造 長軸401cm、短軸396cmの隅丸方形にて、検出面から床面までの深さ約60cmを測る。床面海拔高は334cm、床面積15.9㎡である。住居内は幅15cm、深さ5cmの壁体溝がめぐり、床面に4土壙が認められた。南辺壁に接して不整形の土壙、北西隅に幅45cm、深さ10cmを測る円形の浅い土壙、中央に幅140cm、深さ15cmの皿状土壙、その西側に幅65cm、深さ37cmを測る柱穴状の土壙である。

出土遺物 床面に炭、焼土塊等が集中、点在し、埋土中には土器片、粘土塊、石等が包含されていた。土器は**1313**、**1316**、**1318**、**1319**等が不整形土壙の上面付近から横転した状態で出土している。**1316**、**1319**等は床着の可能性が強いが、**1313**、**1318**は同レベルにもかかわらず不整形土壙の埋土上面に位置しており、土壙の埋没後に置かれたことになる。住居に新旧の利用が考えられ、床面が2面あった可能性が強い。支脚**1324**は柱穴状の土壙上面からの出土である。古・前・Iの中相に比定できる。

(高畑)

竪穴住居-66 (図版56・158)

位置 P17区の北西にあり、竪穴住居-64の東隣りに位置する。

構造 長軸407cm、短軸345cmの北辺の広い台形にて、検出面から床面までの深さ約15cmを測る。床面海拔高は346cm、床面積は14.0㎡である。南辺に2段掘りの方形土壙を有し、88×67×4cmの浅い長方形、その中央は55×49×22cmの隅丸方形に掘られている。住居中央やや南に52×34×9cmを測る楕円形の中央穴、他に浅い皿状の小穴が3個存在する。方形土壙の北側に焼土面および炭の分布が認められた。

出土遺物 土器片が4か所に分散して出土しており、**1325**、**1326**は床着と考えられるものである。器内外面ともにハケメの調整が中心であり、ヘラミガキ、ヘラケズリの技法が認められない壺形土器である。溝-16にみられる**2149**に形状が近いと考えられる。古・前・Iに比定しておきたい。(高畑)

竪穴住居-67 (図版56・159・332・333・375)

位置 P17区の中央西よりにあり、古墳時代後期の竪穴住居-122の下位、竪穴住居-123の西側に位置する。

構造 長軸389cm、短軸316cmを測り、東西に長い方形を呈する。検出面から床面までの深さ45cmを測り、床面海拔高は339cm、床面積12.3㎡である。西側に高床部を持ち、東側床面との高低差は約5cmを測り、その間に幅15cm、深さ3cmの溝が屈曲して存在する。床面の南辺には2段の掘り方もつ長方形土壙があり、上段は82×62×12cm、下段は52×31×23cmを測る。床面中央に36×35×8cmの浅い中央穴があり、周辺を中心に藁状の炭化物が250×200cmの範囲に分布し、遺物はそれより上位において出土している。柱穴、壁体溝等は設けられていない。

出土遺物 遺物は住居廃棄後に投げ込まれたものがほとんどである。**1330**、**1332**、**1335**、**1337**は住居の北西部110×70cmの範囲内で高床部より12~20cm上位からまとまって出土している。同じく**1327**、**1329**、**1331**、**1334**等も方形土壙の周辺および内部より浮いた状態で出土している。**1336**、**S131**等も床面から約25cm上位での出土である。床着と考えられる**1328**が中央穴の東側、炭層上面から出土して

いる。古・前・Ⅰの新相に比定したい。

(高畑)

竪穴住居-68 (図版57・159・333)

位置 P17区の中央にあり、竪穴住居-59～61の南側に位置する。

構造 長軸498cm、短軸480cmを測り、東西が少し長い方形を呈する。検出面から床面までが約30cmで床面海拔高336cm、床面積は23.9m²を測る比較的大形の住居である。床面周縁に幅15cm、深さ10cmの壁体溝がめぐり、支柱は4本で柱穴径40～45cm、深さ100cmのものがある。柱間距離は北辺217cm、西辺220cm、南辺247cm、東辺240cmを測る。南を除く三方にコ字形に設けられた高床部があり、幅110cm、高さ5cmを測り、高床部、床部ともに粘土による貼り床である。高床部北西隅に長さ72cm、幅63cm、深さ32cmの方形土壇、床部中央北側に長さ81cm、幅59cm、深さ7cmの中央穴が存在する。

出土遺物 土器、砥石、鉄器が出土しており、1338が北西柱穴東側に横転、1339、1340、1342、1343が方形土壇内ですべて浮いた状態である。器台1345、M19が床面と同じレベルで出土している。

古・前・Ⅱの段階で廃棄されたと考えられる。

(高畑)

竪穴住居-69 (図版57・159)

位置 P17区の中央にあり、竪穴住居-59～61の南側に位置する竪穴住居-68によりほとんどが削平されている。

構造 竪穴住居-68の削平により壁体部分の西と南辺、そして、方形土壇、柱穴を残すのみである。住居は隅丸方形を呈していたと考えられ、床面海拔高は348cmを測り、竪穴住居-68の床面より12cmほど高い。幅20cm、深さ10cmの壁体溝が西辺のみに認められる。南辺に残存する方形土壇は、現状の長さ103cm、幅54cm、深さ15cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

(高畑)

竪穴住居-70 (図版58・159・160)

位置 P17区の南西において所在が確認された。土壇-135を切った住居である。

構造 調査時期の相違から全面を対象とした調査が出来なかった。したがって、平面の検出した各部分の海拔レベルがそれぞれに異なったことで平面的な在り方は不定形の感を否めない。基本的には方形を意図して造られた住居と考えられ、各辺直線的な掘り方を見せる。検出面から約30cm下層に検出された床面には、高床部と4本の柱穴、さらには中央穴の遺存が確認された。なお、高床部の下層には壁体溝が1条壁に並行した状態で検出された。本来高床部の下層にある壁体溝が当初の住居構造で、その後北東部に住居を一部拡張し、その際高床部を造り付けたものとする。柱穴は、径40～50cm、深さ50～60cmの規模のものが4本約207～233cmの芯心距離をもって検出された。中央穴は、柱穴間のほぼ中央部に不定形ながら床面からの深さ20cmを測って見られた。壇内には炭化物が粘土塊との互層となって埋積していた。

出土遺物 床面および覆土中からは壺1346・1347、甕1348～1351、高杯1352～1354、鉢1355を中心とする土器と砥石S104、石錘S88、石杵S92などの石製品が検出された。中でも注目されるのは、水銀朱の精製に用いられたと推測される石杵があげられる。時期は、古・前・Ⅱに比定されよう。

(島崎)

竪穴住居-71 (図版59)

位置 P17区の南西でも微高地沿辺部に近い位置で検出された。竪穴住居-72によって切られている。

構 造 住居のほとんどが竪穴住居-72によって切られていたため詳細は明瞭でない。僅かに遺存する平面および床面などの在り方から、一辺412~477cmを測る、方形を基調とする住居であることが知られた。平面検出面から床面までの深さは、約10cmと浅い。床面からは、東側壁に沿った状況での壁体溝が1条検出されたのみで、他に柱穴などの存在は確認されなかった。

出土遺物 床面および覆土中において土器を中心とする遺物の検出はできなかった。竪穴住居-72との切り合い関係により、時期的には古・前・Ⅱに比定されよう。(島崎)

竪穴住居-72 (図版59・333)

位 置 竪穴住居-71の埋没後、そのほぼ中央部を切って構築された住居である。

構 造 海拔390cmで平面が検出された。北西側の一部が調査時の損壊を被り判然としない部分も見られたが、平面的には東西・南北方向を基調とする一辺が346~350cmを測る、方形を呈するものであった。検出面から約60cm下層で検出された床面からは、柱穴の検出こそできなかったが、高床部、中央穴、方形土壙などの遺存が確認された。高床部は、住居中央部に一辺150~160cm、深さ約5cmの規模で窪み状の低位部をもたせるものであった。中央穴は、高床部低位部中央部にあって楕円形に小規模な窪み状に所在を見せるものであった。方形土壙は、住居東側の中央やや北寄りに長軸長70cm、幅50cm、深さ35cmに掘られたものであった。

出土遺物 床面および覆土中から土器片が見られたが、いずれもが胴部片で図化できなかった。胎土の状況からおよそ古・前・Ⅱに比定されよう。(島崎)

竪穴住居-73 (図版60・160)

位 置 竪穴住居-72の南東約1mに近接して所在する。竪穴住居-74・75とも重複し、竪穴住居-73はその中でも最も古く位置づけられる。

構 造 北東隅が側溝によって、さらに南側約1/2が竪穴住居-74によって切られていたが、平面的にはおよそ東西方向に約350cmと南北約330cm前後を測るおよそ方形にあったことが推測される。住居の検出面は、竪穴住居-75とほとんど同一面に重複していたため確認できなかった。床面からは、柱穴・壁体溝などの住居施設の検出はできなかったが火災による廃棄を物語る炭化した建築材と焼土塊の遺存が確認された。住居は、周辺の住居と同様に洪水砂と思われる淡黄灰色微砂で埋没していた。なお、竪穴住居-74の床面中央部に遺存する長軸長60cm、幅40cmを測る土壙は、位置的に竪穴住居-73の南限中央部に所在することから竪穴住居-73の方形土壙の可能性が高い。

出土遺物 床面および覆土中を通じて図化できたのは僅かに2点、甕1357と高杯1358にすぎない。これによると時期的には、古・前・Ⅱに位置づけられよう。(島崎)

竪穴住居-74 (図版60・160・334)

位 置 竪穴住居-73の埋没後この南側約1/2を切り、ほぼ重複し各辺並行した状態で検出された。

構 造 竪穴住居-73と同じく東西・南北方向に辺をもった方形住居で、南北310~330cm、東西350~370cmの規模を測る。海拔390cmの検出面から約55cm下層で検出された床面からは、高床部、方形土壙、さらに南東隅には浅く窪められた方形区画が検出された。柱穴は、精査にも拘らず検出することができなかった。高床部は、南側にコ字状に開口する低位面を有するもので、その壁際には長軸長65cm、幅60cmの平面楕円形を呈する方形土壙が1基検出された。

出土遺物 僅かに甕1359が1点小破片で検出されたにすぎず明確ではないが、周辺の竪穴住居とほぼ同じく古・前・Ⅱに比定して差し支えない。(島崎)

竪穴住居-75 (図版60・160)

位置 竪穴住居-73・74と平面的にほとんど重複した状態で、これらの切り合い関係中最も新しくつくられた住居である。

構造 竪穴住居-73・74と各辺並行した状態で検出された。そのため平面的には判然としない部分が多いが、土層断面中には床面および一部壁体溝の存在も明確な状態で検出されている。南北方向に主軸を有するもので長軸長411cm、幅366cmの規模を測る。平面検出面から約30cm下層で検出された床面からは、中央部において径45cm、深さ7cmと浅いながら円形の中央穴が炭で埋没した状態で検出された程度でその他柱穴、壁体溝などは確認されなかった。

出土遺物 主に覆土中から少量ながら土師器の壺1360、甕1361・1362、高杯1363などが検出された。これによると住居の時期は、古・前・Ⅱに位置づけられよう。(鳥崎)

竪穴住居-76 (図版60・160・334)

位置 P17区の南西の微高地肩部から約2m離れた地点で検出された。微高地肩の方向とほぼ同じで、およそ東西・南北方向を基調とする。住居は、竪穴住居-77・78を切った状態で検出された。

構造 住居中央部での距離は東西338cm、南北355cmとほぼ方形を呈するが、詳細には南北方向では南辺が北辺に比較して約40cm程短く、台形を呈するものである。住居は、床面形成前段階で先ず南北方向にそれぞれ幅約60~80cm程度の長楕円形を基調とする窪みがあたかも除湿を窺わせるかの状態で掘られ、その埋積後床面が全面貼られていた。床面からは、柱穴の検出はできなかったが南と北側中央部において方形土壇と、さらに床面中央部からは炭の広がりが見出されている。方形土壇は本来住居1軒に1基といった在り方が通常であるが、本住居からは南と北の相対した位置に認められた。

出土遺物 床面および覆土中からは土師器の壺、高杯1365、器台1366、鉢1367・1368などが出土しており、これらの特徴から推測すると時期は、古・前・Ⅱに比定されよう。(鳥崎)

竪穴住居-77 (図版61・161・375)

位置 P17区の南西において竪穴住居-76に南側一部が切られた状態で検出された。さらにこの住居は、埋没後竪穴住居-78によって切られる。

構造 竪穴住居-78の調査終了後、その下層の海拔360cmにおいて平面を確認した。平面規模は東西420cm、南北370~440cmと若干の差異はあるものの、プランは方形を基調とするものであった。床面は平面検出面から約25cm下層で確認されたが、床自体かならずしも平坦面を呈した状態での検出はなされなかった。検出された施設としては柱穴が4本あげられる程度で周辺の住居で見られる方形土壇、高床部などは確認されなかった。柱穴は、各辺コーナー部分で径約25~30cm、深さ約25~35cmの比較的小規模なものであった。柱穴間の距離は、芯心で東西180~200cm、南北150~160cmと南北長に対して東西長が長い特徴を有する。

出土遺物 床面および覆土中から出土したのは、土師器の壺、甕、鉢、高杯、器台などの器種で期的には古・前・Ⅱに比定される。(鳥崎)

竪穴住居-78 (図版61・161・375・376)

位置 前述の竪穴住居-77の上層においてほとんど重複した位置での構築が確認された。竪穴住居-77とは主軸を若干違い、さらに規模も拡大されていた。

構造 海拔390cmにおいて検出された方形を基調とする住居で、東西510cm、南北530cmの規模を測る。検出面から約30cm下層で床面が確認されたが、床面からは柱穴、壁体溝などの施設についてそ

の存在については確認出来なかった。僅かに北東側の床面上において比較的遺存状況の良い土器が一括で認められたにすぎない。

出土遺物 床面から土師器の壺、甕、高杯、鉢などが検出された。これによると時期は古・前・Ⅱに比定されよう。(島崎)

竪穴住居-79 (図版62・161・334)

位置 竪穴住居-78の東約1～2mに所在が確認された。後述の竪穴住居-80～83とはほとんど同じ地点に所在し、いずれもが複雑な切り合い関係のもと検出された。

構造 海拔380cmにおいて平面方形を呈するプランが確認され、床面までの深さは最深部で約50cmを測った。形態的にはおよそ東西・南北方向を基調とした平面の在り方をみせるもので、東西436cm、南北490cmの平面規模を測る長方形住居であった。床面からは、住居中央部において南北の各辺から約1m、東西の各辺から約80cmの間隔を置いてさらに中央低位面へと落ちる高床部の肩口が検出された。その比高は、約5cm前後と比較的浅いものであった。ただし、柱穴は精査にも拘らず検出はできなかった。僅かに壁体溝の一部が確認されたが、これも壁下を全周するものではなかった。

住居は、埋没過程において下層は粘質土で、上層は砂質土による埋積であった。

出土遺物 床面から土師器の甕1384・1385、小形器台1387が散見されたにすぎない。これによると时期的には古・前・Ⅱに比定されよう。(島崎)

竪穴住居-80 (図版62・162)

位置 P17区の南西に重複して所在を見せる竪穴住居-77～79、81などの中間にあって、これらに切られた状態で海拔375cmで検出された。

構造 およそ東西・南北方向を基調とする住居であるが、南西側が竪穴住居-77、78に、北東側隅が竪穴住居-79、81によって切られていたため全体像の詳細については明瞭でない。わずかに遺存する北西および南東隅の状況からおよそ一辺が500cmを前後することが推測されたにすぎない。平面検出面から床面までは最深で約40cmを測り、床面には南側と西側に約20～50cm幅の高床部の存在が認められた。床面からは、その他壁体溝、中央穴、柱穴等の遺存がみられたが、いずれも明瞭な状態ではなかった。中央穴は、住居中央部にあって長軸長160cm、幅120cm、床面検出面からの深さ約10cmを測る比較的浅いもので、埋積土中には炭の包含がみられた。柱穴は他の住居に切られてか1本が住居中央部において検出されたにすぎない。その他、床面には最大50cm近い角礫が作業台として置かれているのが確認された。

出土遺物 床面を中心として土師器の甕1388・1389、高杯1390・1391、鉢1392・1393、さらに小形の砥石S106が1点検出された。時期は、およそ古・前・Ⅱに比定される。(島崎)

竪穴住居-81 (図版63・162・335)

位置 P17区の南西にあって竪穴住居-80・82を切り、竪穴住居-79によって切られるなどの切り合い関係をみせる。

構造 南側約1/3が竪穴住居-79によって切られていたが、東西・南北方向を基調とした住居で、規模は東西約470cm、南北450cmにあったことが推測される。床面は、海拔380cmの平面検出面から約50cm下層で検出された。床面からは柱穴、中央穴などの存在が確認された。柱穴は、各コーナー付近で径30cm、深さ30～40cmのものが4本、東西方向で210cm、南北方向で180～190cmの芯心距離をもってみられた。中央穴は、4本の柱穴を結ぶ対角線の交点に相当する箇所に見られ、東西85cm、南

第4章 調査の概要

北75cm、検出面からの深さ約5cmの規模で平面楕円形を呈するものであった。壙内には被熱面は見られなかったが、東側においては焼土塊および灰の面的な広がり確認された。

住居は、床面直上から平面検出面まではほぼ住居内全域にわたって砂による堆積が認められ、状況から洪水によりほとんど同時に埋没したことが推測された。

出土遺物 床面西側部分において土師器の甕1394～1396 3点の遺存が確認された。時期は、甕1395において形態的に若干新相を示すものも見られるがおよそ古・前・Ⅱの範疇で理解されるものである。

(島崎)

竪穴住居-82 (図版64・162・163・335・377)

位置 P17区の南西において竪穴住居-81との切り合い関係をもって検出された住居である。

構造 住居は、北側の各コーナーが竪穴住居-81および調査時の側溝により切られていたことで判然とはしないが、南側の2つのコーナーおよび各辺の状況から先述の竪穴住居-79・80と同様に東西・南北方向を基調とした住居であることが推測される。規模は、平面が東西方向で495cm、南北が515cm、検出面から床面までの深さ約30cmを測った。床面からは、柱穴、中央穴などの存在が確認された。柱穴は、各コーナー付近で計4本がそれぞれ径35～50cm、深さ50cm前後のものがみられた。北西側の1本が若干壁寄りに所在し、他の柱穴の在り方と相違する。各柱穴間の芯心距離は東西270～280cm、南北250～300cmを測る。中央穴は、住居中央やや南よりで南辺の柱穴にはほぼ並行する状況で長軸長250cm、幅約150cmを測る平面楕円形を呈するものと、住居中央部において径約70cm前後の土壇状のものが切り合った状況で検出された。前者の埋積土中には焼土塊の包含が、後者からは炭の広がりが認められた。ただし、両者の関係については明瞭でなく判然としない。住居は、周辺の住居が砂で埋没していたのとは若干異なり、粘質土によって埋没していた。

出土遺物 床面および覆土中から土師器の鉢1408～1412、手焙形土器1416などが出土した。鉢は、大形と小形のものが見られ、小形のものの中には台付の製塩土器1413～1415が散見される。手焙形土器は、胴部・覆部の一部および覆部口縁拡張帯を欠損するため明確ではないが、時期的には古・前・Ⅱの範疇に比定して差し支えないと考えられる。

(島崎)

竪穴住居-83 (図版163)

位置 P17区の南西にあって竪穴住居-79・81・82に切られ、それらの僅かな間にかろうじてその存在が確認された。

構造 僅かに平面で肩口が断面において床面などが確認されたことで住居であると認識されたが、詳細については不明である。

出土遺物 覆土中から高杯1417が1点検出されたにすぎない。これによると時期は、古・前・Ⅱ期に比定される。

(島崎)

竪穴住居-84 (図版65・163～165・336・377・378)

位置 P17区の南西において竪穴住居-79の南約1mに近接した位置に海拔380cmで検出された。他の住居との切り合いは認められなかった。

構造 およそ東西・南北方向を基調とした住居である。平面規模は、東西が500cm、南北が510cmを測り、形態はやや胴張り気味の方形を呈する。当該調査区にあっては中規模な住居である。床面は検出面から約40cm下層において検出され、比較的遺存状況の良好な住居であった。床面には、高床部と4本の柱穴、さらに南側の壁中央部に方形土壇が検出された。高床部は、住居中央部と南側中央部

から南東部にかけて、高位面と低位面との境を方形と東西に長い長方形の窪み状を呈して南側の壁に取り付くもので、低位面と高位面との比高差5～10cmを測った。その平面変換点はちょうど柱穴と方形土壇の在り方と深く関係しているようで、柱穴および方形土壇の配置がこれとよく符号する状況で確認された。柱穴は、径25～35cmの円形のもので東西で約180～220cm、南北で約220cmの芯心距離を測った。ただし、個々の柱穴の在り方は判然とせず、検出した深さは床面から最深で25cmと浅い。方形土壇は、南側の壁に接する状況で長軸長95cm、幅65cm、深さ20cmを測った。なお、北東肩部周辺には2～3cm大の小石の散在が認められた。遺存状況から本来方形土壇の周辺に敷かれていた可能性が示唆される。また、北東コーナー付近には作業台と考えられる石が床面に据え置かれた状況で認められた。

出土遺物 床面には比較的多量の土器の遺存が確認された。土器には、壺、甕、高杯、器台など他の住居に比較して器種・量的にはるかに多い。中には、在地産と考えられる土器に混じって山陰、西部瀬戸内地方など他地方からの搬入と考えられる1423・1424・1449も散見された。時期は、在地土器の形態の特徴から古・前・Ⅱに比定されよう。(島崎)

竪穴住居-85 (図版66)

位置 P17区の南西に重複した状態で検出された竪穴住居-86、87などとの切合い中、最も古く位置づけられる。

構造 他の住居との切合い関係により検出できたのは僅かに1か所のコーナー部分と約2m程度の直線的な長さを見せる肩口にすぎない。したがって、住居が方形もしくは長方形を呈することが推測される程度で、その他については一切不明である。

出土遺物 覆土中から甕片が出土した。これによると時期は、古・前・Ⅱに比定されよう。(島崎)

竪穴住居-86 (図版67・165)

位置 工事工程の違いから調査時期が異なり2つに分断された。この結果、竪穴住居-86も途中で分断され、あまり良い状況での検出とはいえない。検出状況を総合すると、竪穴住居-86は竪穴住居-87によって切られ、竪穴住居-85を切った住居であることが判明した。

構造 竪穴住居-85と同様住居の大半が埋没後竪穴住居-87によって切られていたため、住居構造は明確ではない。僅かに残る住居のコーナー部分2か所とその間の直線的な肩の在り方から、住居のプランが方形を基調とすることが推測される。住居は、海拔約380cmのところで平面が検出され、床面は平面検出面から約20cm下層において確認された。床面からは、4本の支柱穴と高床部の存在を推測させる西側の柱穴間に認められる段状の肩口、壁体溝などの遺存が確認された。柱穴は、径30～40cmの掘り方を有するもので、深さ50～60cmを測った。柱穴間は柱穴の方向によって距離が大きく異なり、南北方向で200～210cm・東西方向で260～270cmの芯心を測った。中央穴については、該当部分が調査区境の側溝などにより既に欠如していたため存在については判然としない。なお、床面下層北側と西側には深さ10～20cm程の掘り方をもった長楕円形の窪みが見られた。前述の竪穴住居-76と同じく住居床面の下層にあって一種の除湿を意図したものと推測される。

出土遺物 床面直上から土師器の壺1450、甕1451、製塩土器1452・1453などの器種が検出された。時期は、古・前・Ⅱに比定される。(島崎)

竪穴住居-87 (図版66・165・166)

位置 P17区の南西において前述の竪穴住居-85・86と同一の位置にあって、竪穴住居-86を

切った状態で検出された。

構造 竪穴住居-86と同じく調査区および調査時期の差異により判然としない住居であった。状況から平面的には東西・南北方向を基調とする一辺500cm前後の住居であることは理解される。住居は海拔370cmで平面の在り方を、さらに検出面から約30cm下層で床面を確認したが、柱穴、中央穴などの施設については検出出来なかった。

出土遺物 床面および覆土中から土師器の甕1454～1458、製塩土器1461・1462の遺存が確認された。これによると住居の時期は、古・前・Ⅱに比定される。(島崎)

竪穴住居-88 (図版68・166・336)

位置 P17区の南西にあって、竪穴住居-91の埋没後これを切った状態で検出された。

構造 調査区および調査時期の違いから住居の形態に若干の違和感を有するが、基本的に住居は方形を基調とした平面プランを呈するもので、その規模は長辺で約530cm、短辺で450cmを測る。床面は、平面検出面から約25cm下層で検出されたが、柱穴、壁体溝、中央穴などの施設は明確でなく壁体溝および柱穴は南側調査区においては検出できなかった。柱穴は、湧水により底の検出ができなかったが、検出された3個の柱穴によれば東西方向で約250cm・南北方向で約230cmの柱間が推測された。

出土遺物 床面を中心として土師器の壺1463、高杯1464・1465、製塩土器1466～1468が散見された程度であった。これらの在り方から住居の廃絶の時期は、古・前・Ⅱに比定される。(島崎)

竪穴住居-89 (図版68・166)

位置 竪穴住居-90に西接して、竪穴住居-29を削っており、Q17区の南東部に位置している。

構造 平面形は台形に近い長方形で、主軸をN-7°-Eに置いている。東半と西半を別個に調査したため、西半について不明瞭な点が多いが、規模については、最大南北長450cm、最大東西長368cmを測り、床面積は15.8㎡程度に復元される。東辺において高さ25cmが残る側壁は外傾しており、南西隅を除いて幅10～20cm、深さ20cm以内の壁体溝が検出されている。南東部においては、2条の壁体溝が検出されており、南側壁からそれぞれ20cmと85cm離れている。これにより、1回の拡張が想定されるが、他の住居内構造にこれを指示する材料はみられない。床面はほぼ平坦で高床部は認められず、海拔高340cmを測る。柱穴は3本が検出されているが、東寄りの2本による2本柱と考えられ、柱間は194cmを測る。柱掘り方は長径40cm前後の楕円形で、深さは55cmと60cmを測り、側壁との距離は100～150cmと想定される。この柱穴間の中央に長径48cm、深さ12cm程度の楕円形の土壇が位置し、中央穴と考えられる。東辺中央の側壁に接して、105×25×20cmの規模を示す土壇が検出されており、平面形は楕円形を呈するが、機能的には方形土壇に準ずるものと考えられる。

出土遺物 壺1469・1470、甕1471、高杯1472、小形器台1473・1474等が出土しており、1470は頸部内面と体部外面にタタキメを残し、体部内面上半がハケメ後にヘラケズリされていないなど、非在地系土器と考えられる。1471の口縁部外面には櫛描沈線がめぐらされ、1474の円孔は4孔2段に施されている。時期は、古・前・Ⅰに比定される。(光永)

竪穴住居-90 (図版69・166・167・337・378・379)

位置 Q17区の南東部に位置し、竪穴住居-89に東接して、竪穴住居-28～30を削っている。

構造 平面形は方形を呈し、主軸をN-14°-Wに置いて、長軸長528cm、短軸長450cmをそれぞれ測る。高さ45cm程度が残る側壁はやや外傾し、隅部をはじめとしてこの側壁から部分的に離れる形で壁体溝が全周している。壁体溝の規模は幅10～25cm、深さ7～15cm程度で、これに囲まれる床面積

は27.8㎡となる。柱構造は4本柱で、柱間は262～294cmを測り、東西方向に長く設定されている。柱掘り方は長径60cm弱の楕円形で、深さ50～55cmに揃っており、2本で柱痕跡が確認された。柱穴および壁体溝には改変の状況は見られないが、これ以外の床面の状況には2段階が認められる。最終床面においては、高床部が4辺にみられ、幅50～100cm、中央部との比高3～8cmを測る。中央穴は長径60cmの楕円形で浅く、床面上からは土器・礫が出土している。これに対して、下層の床面では、南辺の高床部が幅115cm程度にわたって途切れており、南側壁際に108×64×35cmの規模を測る方形土壇が一部2段に掘られている。中央穴はほぼ同じ位置で、62×58×12cmの規模で不整形に掘られ、炭・灰が充填されている。中央穴の東に径60cm、深さ30cm程度の土壇が検出されている他、中央穴南東方向に床面の段差も認められる。

出土遺物 壺1475、甕1476～1483、高杯1485～1496、鉢1497、小形器台1484、製塩土器1498～1500等の土器と鎌と考えられる鉄器M154・162が出土しており、この内の1476～1480・1485～1492・1494～1497・1499・1500とM154が床面上での出土である。1483を除く甕は口縁部外面に櫛描沈線がめぐらされており、1482の胴部最大径は下半にある。高杯には、椀形の杯部に短脚がつくものと、長脚で上面が平坦な杯部から口縁部が斜めに立ち上がるものの2種があり、後者に属する1496では口縁部が2段に開き、脚柱部は中空となっている。1497は浅く、丸底の外面がヘラケズリされている。時期については、古・前・Ⅱに比定される。

(光永)

竪穴住居-91 (図版70・337)

位置 P17区の南西に位置し、前述の竪穴住居-88の下層において存在が確認された住居である。

構造 竪穴住居-88に切られているとはいえ住居の遺存状況は比較的良好で、海拔390cmの平面検出面から床面までの深さは最深部で約70cmを測った。検出面での平面形態は、およそ東西・南北方向を基調とした長方形を呈するもので、長軸長が南北方向で約580cm、短軸長が東西方向で約490cmを測った。床面には、東側の一辺中央部に不定形ながら方形土壇の存在と、中央部に方形を呈する高床部の存在を示唆させる溝が高床部の低位部と高位部との境に壁体溝と同様に幅20～30cm、低位面から約3～5cm程度の深さにみられた。これは、低位部を取巻く高位部の断面中において盛土としての堆積を認めることから壁体溝と同様化粧板がめぐらされていたことが推測される。柱穴は、低位部のなかにあって住居の平面形態の在り方に並行する状況で中央南北方向の両端部に径50～60cm、最深30cm程度の浅い窪み状の穴が2本確認された。柱穴とするには決して明確ではないが、柱穴とすれば住居の主軸方向に2本が芯心距離200cmの柱間を有するものといえよう。中央穴は、柱穴間に挟まれる状況で長軸長55cm、幅40～50cm、深さ10cmの平面楕円形を呈する窪み状の土壇の存在が認められた。なお、上記住居の貼り床除去後においてもさらに古い床面に伴う別の高床部の一部と中央部に埋土中に炭を多く含む中央穴の存在、さらに住居東側やや北寄りの地点に方形土壇の存在が認められ、状況から住居は一度床面の貼り替えが行われたものと推測された。壁体溝の位置的な在り方から面的な拡張を伴ったものではないことが知られる。ただし、これに伴う柱穴については上層で確認した柱穴以外には検出出来ず、おそらくその柱穴2本が当初から支柱穴として用いられていたものと推測される。また、住居床面最下層には住居掘削の際に除湿効果をねらったと見られる長軸長310cm、幅50～70cm、深さ10～15cmを測る長楕円形に掘り窪められた窪みが北と南側に同規模に確認された。

出土遺物 覆土中および床面のいずれからも土器を中心とする多くの遺物の出土を見なかった。僅かに土師器の高杯、土錘、砥石などの存在により、時期的にはおよそ古・前・Ⅱ段階に比定して差し支

えないものと推測する。

(島崎)

竪穴住居-92 (図版71・168・379・380)

位 置 調査区の南東側で竪穴住居-85～87の南東1.4mに存在し、竪穴住居-93～94の南西付近を切る状況で確認した。

構 造 遺構は標高430cmで検出した。長さ392cm、幅373cmの正方形で検出面からの深さは55cmを測る。床面の標高は375cmで面積は11.9㎡ある。主軸方向はN-10°-Eを示す。床面の周囲には幅25cm、深さ9cm程度の壁体溝がめぐっている。支柱は4本で、うち3本については柱痕跡を確認している。柱穴は径35～54cmの円形をなし、深さは50～60cmほどである。住居の中央には楕円形を呈するピットがみられ、規模は長さ40cm、幅53cm、深さ9cmを測る。断面の状況から住居覆土の流れ込みが認められ、使用時には開口していた可能性が高い。

出土遺物 壺1501・1502、甕1503～1506、高杯1507～1509、鉢1510・1511など比較的まとまった遺物の出土がみられた。1501は肩部よりやや下がったところに最大径をもつ胴部に発達した二重口縁を有するものである。1502は球形ぎみな胴部に短く直立した頸部をもち、大きく外反する二重口縁をもつもので、外面にはタタキ成形の後にハケメを、内面には粗いハケメを行なっている。非在地系土器とみられ、畿内周辺または播磨あたりの出自と思われる。1503～1505は短く立ち上がる口縁部に櫛描沈線を施し、球形化がすすんだ体部をもつ。外面にはハケメのちヘラミガキ、内面にはヘラケズリを行い、底部には指頭圧痕がみられ、そのうち1503にはC3、1504はA2のそれぞれ肩部刺突文が認められる。また1504には吹きこぼれの痕跡が明瞭に残されていた。1506はほぼ球形に近い体部に短く外傾する口縁を有し、外面には細かいハケメがみられる。非在地系土器とみられ、畿内の出自と思われる。1507は杯部が外方へ開く、1508、1509は短脚に碗形の杯部を有するもので、いずれもヘラミガキを密に行なっており、精良な胎土を使用している。1510は浅い皿状の1511は口縁部がゆるくく字形に立ち上がるものである。一方貼り床上面からは頁岩製の砥石S108が、住居覆土中よりサヌカイト製の石鏃が出土している。これらの時期は古・前・IIと思われる。

(澤山)

竪穴住居-93 (図版72)

位 置 調査区の南東付近に位置し、竪穴住居-92・94によってそのほとんどを大きく切られた状況で確認した。

構 造 竪穴住居-92の床面が本住居より低いため、その大部分が削平されている。平面形は方形と推測されるものの、規模については不明である。検出面からの深さは7cmを測り、床面の標高は350cmである。主軸方向はN-Sを示す。住居南壁側の床面の周囲には幅21cm、深さ15cm程度の壁体溝の一部が確認されたが、支柱は認められなかった。

出土遺物 住居の残存状況は良好でなく出土遺物も認められなかったが、後述する竪穴住居-94との切り合い関係からおおむね古・前・IIと思われる。

(澤山)

竪穴住居-94 (図版72・169・337)

位 置 調査区の南東側に位置しており、竪穴住居-92にその南西部分を、また土壇-140・147に北西・北東隅を切られる状況で確認した。

構 造 竪穴住居-92の床面は本住居より高いため、比較的良好な状況で床面が確認できた。遺構は標高361cmで検出した。長さ466cm、幅458cmの正方形で検出面からの深さは28cmを測る。床面の標高は333cmで面積は21.3㎡ある。主軸方向はN-82°-Eを示す。床面の周囲には幅22cm、深さ13cm程

度の壁体溝がめぐっている。主柱は4本で、柱穴は径25～50cmの円形をなし、深さは64～96cmほどである。床面は貼り床によって幅80cm、高さ6cm程度を測る高床部が周囲に設けられている。床面中央には2段の掘り込みを有する浅いピットがみられた。その平面形は上段が不整楕円形で、規模は長さ69cm、幅51cm、深さ9cmである。下段は楕円形で規模は長さ14cm、幅25cm、深さ14cmを測る。また、このピットの西壁付近には炭や灰、焼土などが掘り方に沿った状況で認められ、炉として使用されたものと考えられる。一方住居の北壁、南壁に接する状況で方形土壌が2ヶ所確認された。前者の平面形態は不整長方形であり、規模は長さ61cm、幅84cm、深さ32cmを測る。後者も同一形態を呈し、規模は長さ63cm、幅93cm、深さ19cmである。北壁側の土壌の断面状況では住居覆土と異なる埋土がみられたが、使用時に開口していたかどうかは不明である。なお、床面南西隅あたりに炭層の広がりを確認している。

出土遺物 甕1512・1513・1515、高杯1514・1516、鉢1517などの遺物の出土がみられた。1512・1513は短く立ち上がる口縁部に櫛描沈線を施し、外面にはハケメのちヘラミガキ、内面にはヘラケズリを行い、1512の底部には指頭圧痕がみられる。そのうち1512は北東側柱穴より出土したほぼ完形である。胴部には焼成後に穿孔を1ヶ所施しており、小形甕の用途を考える上で考慮される。1514～1516は杯部が外方へ開くもので、1514は有段を呈す。1510は浅い皿状の形態で内面にハケメを残す。金属器では床下から出土した現存長2.13cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重量1.15gの銅鏃M7や、住居覆土中から出土した鉄釘M176がある。これらの時期は土器から古・前・Ⅱと思われる。(澤山)

竪穴住居-95 (図版337)

位置 調査区の南東端と呼べる地点に位置しており、その本体は調査区外に存在していると思われる。調査時には認識し得なかったが、その下位に竪穴住居-96が存在したことが、整理の過程で明らかとなった。つまり本住居が切っていることになる。

構造 上述の経緯により、その平面形や規模については不明である。ただし住居東壁にあたる部分から推測すると隅丸方形と思われる。また主軸をみるとN-13°-Eを示し、周辺で検出された住居の主軸方向と大差ない。床面の標高は402cmを測る。

出土遺物 遺物の出土が見られず時期を知り得るものはないが、周辺の状況から古・前・Ⅱ期と思われる。(澤山)

竪穴住居-96 (図版169)

位置 P17区の南西において、竪穴住居-86、87に近接した状態で検出された。東側で検出された竪穴住居-95と重複する可能性が高いことから竪穴住居-95の下位構造に相当するものと推測される。

構造 調査区境の狭小な部分での検出とあって、確認されたのは僅かに方形を基調とする住居のコーナー部分にすぎない。東側で検出された部分と総合させるとおよそ平面約600cm前後の規模にあったことが推測される。住居は、砂質土で厚く埋没しており、洪水による堆積と推測された。

出土遺物 土師器の甕1518、高杯1519・1520・1524、鉢1522、大形鉢1521、小形鉢1523などが見られる。時期は、古・前・Ⅱ期に比定されよう。(島崎)

竪穴住居-97 (図版73・169・170)

位置 調査区の南端、竪穴住居-96の南において検出した。

構造 南半が調査区外となるため全容は不明であるが、確認された部分から、一辺約430cmの方

形を呈すると考えられる。検出面からの深さは66cm、床面の標高は358cmを測る。床面の周囲には幅20cm、深さ3cm程度の壁体溝がめぐっている。また、壁側から幅80~110cm、高さ3cm足らずの高床部を設けているが、その半ば以上が調査区外のため、全体の形状は確認できなかった。支柱穴は北東で一基を検出するにとどまり、北西では確認できなかった。基盤が砂であり、湧水も激しいことから崩壊、埋積したとも考えられるが、竪穴住居-37のように、もともと4本柱ではなかった可能性も否定できない。

出土遺物 壺・甕・高杯・鉢・手焙形土器などが出土している。1525は、竪穴住居検出面と同一面で検出した。胴部に焼成後の穿孔があるため壺棺の可能性も考えて精査を行ったが、掘り方は確認できなかった。竪穴住居埋没過程で投棄されたと考えられるが、穿孔部を上に向けほぼ完形で出土しており、意図的に据え置かれた可能性もある。頸部から口縁部にかけての屈曲部はあまくなり、肩部もなだらかになっている。1526~1533は床面上の土器で、竪穴住居西半に集中している。1527は、肩の張りが弱く、底部も丸みを帯びている。1526のような小形の甕もみられる。1526にはB2、1527にはB3の刺突文が施されている。1529の杯部は直線的に外方へ開き、脚部も中空である。透かしは4孔穿たれている。1531の鉢は浅く、底部外面はヘラケズリのままである。これらの土器の特徴は古・前・Ⅱ期でも新しい様相を示していると考えられる。(久保)

竪穴住居-98 (図版73・170)

位置 調査区南側に設定された北西-南北方向に細長く伸びた調査箇所中央付近に位置し、土壇-150と西壁を接した状況で確認された。

構造 遺構は標高397cmで検出した。平面形は正方形と推測され、規模については幅416cm、検出面からの深さは62cmを測り、床面の標高は335cmである。主軸方向はN-Sを示すが、その規模については不明である。床面の周囲には幅19cm、深さ7cm程度の壁体溝がめぐっている。支柱は4本と考えられ、そのうち2本について確認している。柱穴は径26~43cmのやや楕円形をなし、深さは約40cm程度と思われる。床面中央には浅いピットがみられた。平面形は円形で、規模は長さ47cm、幅46cm、深さ6cmである。またこのピットの北壁付近には、焼土などが掘り方に沿った状況で認められており、炉として使用されたものと考えられる。局所的な観察であるが、住居北東隅の埋土をみると上下2層に分層され、いずれの層にも焼土と炭が混入していた。

出土遺物 甕1534・1535、高杯1536~1538などの遺物の出土がみられた。1534は肩部付近に最大径をもつと推測される胴部から短く字形に屈曲した複合口縁を有するもので、内面にヘラミガキ、外面にヘラケズリが認められる。1535は短く立ち上がる口縁部に櫛描沈線7条を施し、球形化した体部をもつ。外面にはハケメのちヘラミガキ、内面にはヘラケズリを行い、底部には指頭圧痕がみられ、A1の肩部刺突文が認められる。1536・1537は杯部が外方へ開く、また1538は椀形の杯部に脚裾部に3つの円孔を有するもので、いずれもヘラミガキを密に行なっている。胎土は3個体とも赤色土粒を含む。なお1538は椀形の杯部をもつものの、薄手のつくりの短脚で脚裾部が拡張する形態をもつものでなく、石器では頁岩製の砥石S109がみられた。これらの時期は土器から古・前・Ⅱと思われる。

(澤山)

竪穴住居-99 (図版74・171~173・380・381)

位置 当住居の西壁と竪穴住居-98の東壁とがほぼ接する状況で確認されており、またその下層には土壇-152が存在する。

構造 遺構は標高432cmで検出した。平面形は正方形と推測され、検出面からの深さは95cmを測り、その意味において残りのよい状況であったといえる。床面の標高は337cmである。主軸方向はN-85°-Eを示す。なお竪穴住居-98と同様に、規模については不明である。床面の周囲には幅13cm、深さ6cm程度の壁体溝がめぐっている。主柱は4本と考えられ、そのうち2本について確認している。柱穴は径62~79cmの円形をなし、深さは44cm程度と思われる。埋土には柱を抜き取った後に混入したと思われる甕を中心とした土器片や長さ20~30cm程度の礫などが多く包含していた。床面は、貼り床によって幅90cm、高さ8cm程度を測る高床部が三辺以上に設けられている。住居の南西隅付近には平面形態が楕円形を呈する方形土壙が確認され、規模は長さ91cm、幅60cm、深さ23cmを測る。埋土の状況から水田開田により住居上半部分を削平されたことが認められた。また底面中央付近にあたる箇所には柱痕状の痕跡が認められ、その周囲はやや浅い凹み状を呈している。前述の竪穴住居-70にも同様な形態のものが窺え、このような状況から本来この位置に中央穴が存在していたと考えられる。またこの凹みの埋土をみると住居覆土の流れ込みが確認されており、使用時は開口していた可能性が高い。底面付近の堆積層下位には炭層がみられ、このことも考え合わせると炉であったと思われる。

出土遺物 壺1539~1542・1571~1573、甕1543~1554、高杯1555~1558、鉢1559~1569・1574~1579 小形器台1570など大きく削平を受けているにもかかわらず、かなりまとまった遺物の出土がみられた。1539~1542は発達した二重口縁で、端部に向かってゆるく外反して広く開口する。そのうち1541・1542をみると体部中央に最大径を測る長胴形を呈している。外面にはハケメのちヘラミガキ、内面はヘラケズリを行い、1542の外面上半には連続したヘラミガキを施している。1543~1551は短く立ち上がる口縁部に楕円沈線を施し、ほぼ球形化した体部をもつ。基本的に外面にはハケメのちヘラミガキ、内面にはヘラケズリを行い底部には指頭圧痕がみられる。また1543はC3、1545はA1、1546・1547はA2のように肩部刺突文が施されたものも多くみられた。また1545には焼成後に行った底部穿孔が認められた。改めて形態をみると1543・1550のような小形品や1551のような大形品のものがあり、容積に差異がみられる。また1543のようにほとんど球形のものや、1544~1548のようにやや肩部に張りがあり、長胴ぎみの体部に若干ながら尖る底部をもつものや1549のようにいわゆる長胴形を呈するものなどが認められた。1552はすばまった体部上部に短く字状に開く口縁を有し、外面には粗いヘラミガキを、内面にはヘラケズリを行っている。1553は体部中央に最大径をもつ胴部に短く字状に開く口縁を有するもので、外面にはやや右上がりのタタキメを残し、内面にはヘラケズリを行っている。1554は体部中央に最大径をもつ胴部にゆるく外に開口する口縁を有するもので、外面にはハケメと思われる細かな条線の単位がみられ、内面にはヘラケズリを行い、肩部付近に指頭圧痕を密に残している。1555・1556は長脚に杯部が外方へ開くものであり、1557・1558は脚裾部が広がった短脚に椀形の杯部を有するもので、いずれもヘラミガキを密に行なっている。1555・1557・1558にはそれぞれ3個の円孔がみられる。1559・1560は外傾ぎみに立ち上がる二重口縁を有する大形品である。1561~1569は浅い皿状のものであり、外面にはヘラケズリを行い、内面にはハケメのみを施した1568を除き、放射状のヘラミガキを行っている。そのうち1561・1562にはヘラミガキ以前にハケメを施したことを明瞭に残すものもある。1571・1572は球形の体部に逆八字の口縁が立ち上がるものであり、内外面にはハケメのち横方向のヘラミガキを行っている。また口縁の内外面と胴部外面付近には赤色顔料が塗布されており、1573と同様に精製品である。1574~1579はいわゆる製塩土器であり、外面にタタキメを残す。石器では最大長7.4cm、最大幅7.25cm、最大厚4.4cmを測り、重量333.2gで両端打ち欠き

による切れ目を入れた石錘 S90が柱穴から出土している。材質は玢岩製であった。遺構の時期は古・前・Ⅱと思われる。(澤山)

竪穴住居-100 (図版75・173・174)

位置 竪穴住居-101の下層で検出した方形の住居で、南西は調査区外に広がっている。

構造 北東隅を検出するにとどまったため、全体の規模は明らかではないが、主軸をN-12°-Wにおく一辺4mあまりの方形をなすものと推定される。標高336cmを測る床面の周囲には、幅18cm、深さ8cmの壁体溝が走る。主柱は壁体から74cm離れた位置で1本を確認したにすぎないが、その位置関係から本来4本で構成されていたものと思われる。掘り方は、径54cmの円形を呈し、深さは49cmを測る。その底面には径13cmほどの凹みが見られ、柱痕跡を反映したものと思われる。

出土遺物 竪穴住居-101と重複しているため、この住居に伴う確実な遺物は検出できなかった。しかし、住居の構造からすれば古墳前期に属する蓋然性は高く、竪穴住居-101が古・前・Ⅱ期に位置付けられることからして、これを大幅に遡ることはないものと思われる。(亀山)

竪穴住居-101 (図版75・173・174・338)

位置 竪穴住居-100の上層に重複して検出した多角形をなす住居で、Q17区の北東に位置している。

構造 床面の大半が調査区外に広がっているため、全形を知り得ないが、北東で検出された2辺の状況からすれば、対辺長6.5mあまりの五角形になる可能性が強い。各辺には、緩やかな弧を描くように幅27~16cm、深さ20~12cmの壁体溝が走る。その内側には、幅121~94cm、高さ13cmの高床部が設けられている。床面中央の標高は343cmで、検出面からの深さは62cmを測る。主柱は1本のみ検出した。壁体からの距離は105cmを測り、角頂からわずかに南東にずれた位置にある。円形をなす掘り方の規模は、径59cm、深さ47cmを測る。中央穴や方形土壇などの付属施設は確認されていない。

出土遺物 この住居の埋土からは、甕、高杯、鉢、製塩土器などの土師器が出土している。1580~1583は口径11.9~14.4cmを測る甕で、短く立ち上がる二重口縁には楯描沈線を飾る。外面にはヘラミガキを施し、内面はヘラケズリで調整する。1584は口径19.9cmを測る高杯の杯部で、内外面を緻密なヘラミガキで調整する。1585~1587は小形の杯部をもつ高杯である。杯部が中程で屈折して稜をなす。1585は、口径12.2cmを測る。短い柱状部から屈折して大きく開く裾部には3つの透かし孔を穿つ。1586・1587は椀形の杯部をもち、口径12.1~12.8cmを測る。柱状部は短く、裾部には3つの透かし孔を飾る。口径16.5cmを測る1590は皿形をなす鉢で、底部をヘラケズリしたのちナデで調整する。鉢1592は小さな底部から直線的にのびる口縁部をもち、内外面をハケメで調整する。1592・1593は小形の鉢で、口径7.8~8.5cm、器高5.4cmを測る。丸みを帯びた体部から屈曲してのびる口縁部をもち、1592はヘラミガキ、1593はナデを施す。口径12.0cm、器高10.4cmを測る1589は、皿形の受け部と直線的に広がる脚部をもつ小形の器台である。受け部は内外面をヘラミガキで調整し、3つの透かし孔を穿つ脚部は外面をヘラミガキ、内面をハケメで仕上げる。1594~1596は製塩土器の脚部で、径5.2cmを測る。タタキ成形された鉢部は失われているが、脚部にはユビオサエの痕を残す。これらの土器は、その特徴から見て古・前・Ⅱ期に属するものと思われる。(亀山)

竪穴住居-102 (図版76・174・338・339)

位置 竪穴住居-101の南21mで検出した4本柱の方形住居で、Q17区の西側橋脚部分に位置し、南東隅は調査区外にのびている。

構造 調査前の掘削によって部分的な破壊を被っているが、おおむねその全形を知り得る。それによると、床面の規模は長さ577cm、幅548cmの方形で、主軸をN-35°-Eにおき、復元される床面積は31㎡と大形である。壁体の高さは現状で92cmを測り、床面の標高は269cmと今回報告する住居のなかでは最も深い。幅16cm、深さ11cmの壁体溝がめぐる床面の周囲には、黄褐色の粘土を盛り上げて高床部が設けられている。北西や南西辺の高床部は幅148cm、高さ14~11cmを測るのに対し、北東辺の高床部では幅117cm、高さ11cmとやや狭くなっている。また、南東辺の高床部は、南西から100cmほどのびている。4本の支柱は壁体から150~105cm離れた位置にあり、その掘り方は径50~30cm、深さ65~75cmの楕円形をなす。柱間の距離は348~326cmと、今回報告した竪穴住居のなかでは最大である。床面の中央は損壊を被っているため中央穴の存在は確認できないが、南東の壁際では2基の方形土壌が並んで検出された。北東側の土壌は、長さ74cm、幅67cm、深さ29cmの方形をなす。これに対し、南西側の土壌は長さ68cm、幅58cm、深さ32cmの方形を呈している。このうち北東側の土壌は、埋土に黄褐色の粘土塊を含み、人為的に埋め戻された状況がうかがわれた。このため、併設された2基の土壌が同時に機能していたかどうか現状では判断できない。また、この2基の土壌の間から、長さ22cm、幅10cmの小ピットが検出された。高さ18cmを測る壁面は直立し、ほぼ垂直に掘りこまれている。

出土遺物 床面からは、甕・高杯・器台などの土師器が出土している。1597・1598は口径14.3~14.9cmを測る甕で、方形土壌の上面から出土したものである。二重になる口縁部には櫛描沈線をめぐらし、倒卵形をなす体部は外面をハケメののちヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。口径18.3cm、器高12.7cmを測る1599は、内外面をハケメで調整する鉢で、小さな底部には5つの円孔を穿つ。1600~1602は中実ぎみの脚部をもつ高杯で、柱状部の短い1601・1602は大きく広がる裾部に4つの透かし孔を飾る。1603は直線的に開く脚部で、小形の器台になるものと思われる。これらの土器はおおむね古・前・I期の範疇でとらえられるもので、この住居の時期を表すものと思われる。(亀山)

竪穴住居-103 (図版77・174・339)

位置 Q17区の西側橋脚部分に位置する小形の方形住居で、竪穴住居-102の北西1.7mで検出したものである。

構造 主軸をN-6°-Eにおく床面は、長さ318cm、幅276cmの方形を呈し、壁面の高さは現状で32cmを測る。標高321cmを測る床の面積は8.6㎡あり、その周囲には幅20~16cm、深さ10~8cmの壁体溝がめぐる。支柱は確認されておらず、中央穴や方形土壌などの付属施設も知られていない。ただし、南西の床面には長さ60cm、幅40cmの範囲で赤変・硬化した被熱痕跡が認められた。

出土遺物 この住居の床面からは、甕、高杯、鉢などの土師器が出土している。1604は口径17.6cm、器高22.9cmを測る非在地系の甕で、く字形に外反する口縁部とタタキ成形する倒卵形の体部からなる。外面は下半を中心にハケメで調整し、内面にハケメとユビオサエを施す。口径20.5cmを測る1605は高杯の杯部で、内外面を緻密なヘラミガキで仕上げている。1606は小形の鉢で、口径11.2cm、器高6.2cmを測る。外面にはタタキメを残し、内面はハケメで調整する他地域からの搬入品である。M49は先端を欠いているが、全長6.7cm、幅1.0cmの刀子とみられる。これらの遺物は、古・前・I期に相当するもので、近接する竪穴住居-102と併存する可能性が指摘される。(亀山)

竪穴住居-104 (図版77・175・382)

位置 Q17区の北東隅で検出された竪穴住居である。ここでは竪穴住居-104~113を含め10軒が、集中して検出された。

この部分は橋脚部にあたり、調査前に一部掘削が行われていたため、これらの竪穴住居も断片的に検出するにとどまった。また、この調査区は現在の足守川の堤防部分に位置するため、遺構面までの深さは5 m以上あり、矢板に囲まれた調査となった。このため工事範囲より若干控えて遺構検出を行った。ただし、この部分については掘削に伴う立会調査を行い、壁面の観察や遺物の取り上げによって調査成果を補足した。以下、竪穴住居113までの遺構の推定線はこれにもとづくものである。なお、これらの遺構は砂層上に位置しているためか、概して床面の遺存状況は悪く、また激しい湧水も手伝って検出作業は困難を極めた。

竪穴住居104は、竪穴住居106・107と重複し、これらより後出する。

構造 長さ400cmほどの東辺の一部が検出されたのみである。主軸方向は、N-8°-Eを示す。主柱穴は1本確認しているが、その配置から4本柱であったものと思われる。この柱穴の底からは、角礫が検出されており、礎板の役割を果たしていたと思われる。標高303cmを測る床面の東辺やや北側には、壁に沿って52×31×26cmを測る方形土壇が確認された。

出土遺物 出土遺物は細片のため図示していないが、これらと他の竪穴住居との関係から竪穴住居104の時期は古・前・Iの段階と考えて差し支えないと思われる。(大橋)

竪穴住居105 (図版77・175)

位置 竪穴住居104の南約1 mに位置する。竪穴住居106と一部重複し、これより後出する。

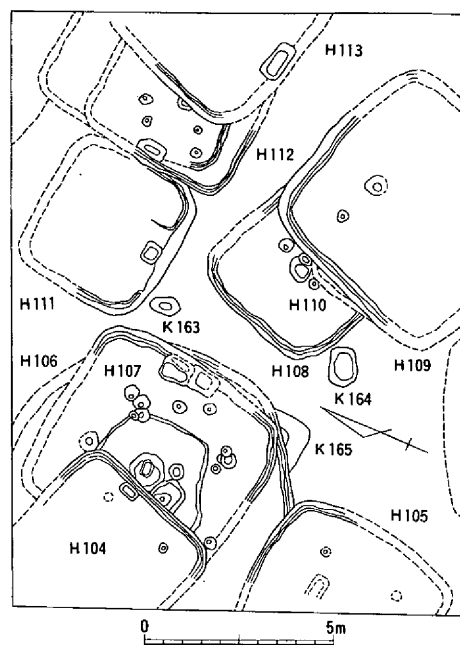
構造 平面的には、北東隅の一部を検出し、柱穴1本を確認したのみであるが、壁面の観察等によって、他の2本の柱穴と方形土壇の存在を確認しており、4本柱の構造を有するものと思われる。主軸はN-1°-Wを指し、標高309cmを測る床面には黄褐色の貼り床が認められた。

出土遺物 出土遺物は微量である。図示したのは、1608が鉢、1609は製塩土器である。またC28は、有溝管状土錘で、重さ約150 gを測る大形品である。溝は短軸方向にめぐると長軸の片面に施されている。この竪穴住居の時期は、出土遺物が少なく確証に欠けるものの、周辺で検出された他の竪穴住居との関係から古・前・Iのなかにおさまるものと考えている。(大橋)

竪穴住居106 (図版78・175・176・382)

位置 竪穴住居104・105の東に位置し、切り合い関係を有し、これらに先行する。西側は竪穴住居104によって床面まで壊されている。また、竪穴住居107とほぼ重複し、これに後出する。

構造 確認された平面形が部分的によるため確証に欠けるが、一辺約200~300cmの五ないし、六辺を有す多角形のプランを呈するものと判断される。これによれば、軸方向で700cmを超えるものと推定され、大形の竪穴住居が復元される。また、幅200cmほどの高床部が壁の辺に沿うように多角形を示してめぐると確認された。高床部と一段低い床面との比高差は5 cmほどと遺存状況は悪い。主柱穴と思われるものは、高床部の辺の角に配されており、4カ所で確認された。またそのうちの2



第15図 古墳時代遺構配置図3 (1/200)

カ所では柱穴の重複が認められた。柱穴の深さは50～60cmを測る。床面には、114×82×19cmと、102×81×26cmの2基の中央穴を確認した。これらのことから、少なくとも1回の立て替えが行われていたことが想定される。いずれの中央穴も焼土、炭で埋まっていた。

出土遺物 出土した土器は、比較的多く、床面に密着した状態で出土したのも数ある。また、非在地系と思われる土器も認められる。

1610～1613・1615が壺、1616は小型丸底系の壺、1614は東海系のS字状口縁の甕、1617～1623がく字形口縁をもつ甕、1624～1627は在地の甕、1628は椀状の杯部を有する高杯、1629～1631が鉢である。このうち非在地系の土器としては、1611・1614が挙げられる。1611は、大きく外反する頸部下端に貼り付け突帯をめぐるす壺で、西部瀬戸内系の特徴を示す。内外面ともハケメで調整されている。1614は、現在のところ県内で唯一全形がわかる東海系の台付甕である。ゆるいS字状の口縁部を持ち、その外面下端には櫛状工具による刺突文をめぐるしている。体部はやや丸い倒卵形を呈し、台部は下端を内側に折り返している。外面のハケメ調整は、上半に斜方向の後、横方向に、また中位から下半にかけては縦方向に粗く施されている。内面は、下半にハケメがなされているが、特に底部では放射状に施される。胎土には金雲母、角閃石を特徴的に含み、この地域のものとは異なる印象を受ける。しかし、1614の台付甕は東海地方のものとはやや異なるとの指摘もあり、搬入品であったとしても東海地方周辺で製作されたものであろう。このほかにも、1621のようにタタキメを施した甕も認められる。土器以外の出土遺物としては、土錘C29・30、土製紡錘車C77、砥石状の石器S110を掲載した。この竪穴住居は、規模・構造、および非在地系土器の出土等からみて他の住居に傑出し、集落の中核的存在であったことが推測される。この竪穴住居の時期は、これらの出土遺物から古・前・Iの古相段階になると考えている。

(大橋)

竪穴住居-107 (図版79・176・383)

位置 竪穴住居-106とはほぼ重複する。竪穴住居-106の調査後、床面の掘り下げ中に検出された。互いに切り合い・重複関係を持つ竪穴住居-104～107の前後関係は、古いものから竪穴住居-107、106、104・105の順であり、竪穴住居-107が最も古いと考えられる。

構造 一辺550cmほどの規模の隅丸方形の竪穴住居と考えられる。主軸はN-4°-Wを指す。床面の標高は292cmを測り、竪穴住居-104・106より低い。主柱穴は2カ所で2本ずつ計4本検出された。このうち、G-H断面で観察される柱穴は貼り床層で覆われていた。また、東壁に沿って方形土壙が2基検出されており、同一プランを呈する立て替えが行われたものと判断される。検出された柱穴の配置から4本柱の構造と考えられ、柱穴間距離はそれぞれ255cm、288cmある。中央穴は確認できなかった。方形土壙は、古いもので幅65cm、深さ12cmを測り、これを切るようにその北側に80×70×11cmの規模のものが造り付けられている。

出土遺物 埋土の大半を重複する竪穴住居-106に削平されているため、出土遺物は多くない。このうち1634～1635の5点を図示した。1632は在地の甕、1633は外面がハケメで調整されたく字形口縁の甕である。1634はややにぶいく字形口縁をもつ甕、1635・1636は鉢である。このうち1635は、新しい方形土壙から出土している。

これらの出土した土器と、竪穴住居-106との重複関係から竪穴住居-107の時期は古・前・Iの古相段階になると考えられる。

(大橋)

竪穴住居-108 (図版79・80・176)

位置 竪穴住居-106の東方約5mに位置する。後述する竪穴住居-109・110と切り合い関係を持ち、この3軒のうちもっとも後出する。

構造 平面的には北東隅の一部を確認したのみであるため全容については不明であるが、おそらく一辺550cmほどの隅丸方形の竪穴住居と考えられる。検出面から床面までの深さは約60cmを測り、床面の標高は287cmである。主軸方向はN-10°-Eを指す。床面には厚さ5cmほどの貼り床層が確認された。柱穴を2本検出したが、うち東側のものについては、この竪穴住居に確実に伴うものかどうか断定できない。西側の柱穴の位置関係から4本柱の構造をとるものと推定される。また、幅20~30cm、深さ10~15cmほどの壁体溝が確認された。このほかの付属施設は検出していない。

出土遺物 出土した土器は小片がほとんどであり、また多くはない。図示したのは、1637の壺、1638の高杯、1639の小形器台である。

これらの出土遺物からこの竪穴住居の時期は古・前・I段階になると判断している。(大橋)

竪穴住居-109 (図版80・176・177・383)

位置 竪穴住居-108の西側にあり、東半部をこれに壊されている。また、竪穴住居-110とも切り合い関係を有し、この3軒のなかでは最も古い竪穴住居である。

構造 長軸方向で365cmを測る、やや小形の隅丸方形を呈する竪穴住居である。主軸方向はN-6°-Eを指す。検出面からの深さは約30cmほどであり、床面の標高は317cmと竪穴住居-108と比較して30cmほど高い。中央穴は、68×54×15cmの規模を測り、その埋土からは炭、灰が認められた。この中央穴の南北に柱穴が検出され、2本柱の構造をなすものと考えている。柱穴間距離は125cmである。また、南壁中央近くでピットが確認されたが、貯蔵穴状の機能を持つものとしてこの竪穴住居に伴うものと理解している。

出土遺物 床面直上で比較的まとまって検出された1640~1648を図示した。1640はやや肩の張ったす胴の体部を持ち、内傾する頸部と二重口縁部を有する。1641・1642は在地の甕であるが、うち1641には斜め方向に配された刺突文を肩部に持つ。1644~1646は高杯であり、そのうち1646は杯部が鉢状を呈する。1647・1648は鉢である。

これらの出土遺物から竪穴住居-109は古・前・Iの古相段階のものと理解している。(大橋)

竪穴住居-110 (図版80)

位置 竪穴住居-108に西接し、その大半を壊されている。切り合い関係のある竪穴住居-108~110の3軒の先後関係は竪穴住居-109、110、108の順に新しく造られていると考えられる。

構造 竪穴住居-108に壊され、西北隅の一部の壁体溝を確認したのみであり、詳細な構造は不明であるが、おそらく隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は想定出来ないが、床面の標高は、確認できた箇所では307cmを測った。

出土遺物 出土遺物は細片のみであり、これからはこの竪穴住居の時期を判断出来ないが、竪穴住居-108・109との切り合い関係から古・前・Iと考えている。(大橋)

竪穴住居-111 (図版80・177・178・383・384)

位置 竪穴住居-106の北東に隣接し、竪穴住居-109の北約1mに位置する。後述する竪穴住居112とは、東辺で切り合い関係を持ち、これに一部切られている。

構造 全体の南半部を検出した。これによれば、一辺約4m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN-5°-Eを指す。東壁に沿って幅約100cm、高さ10cmほどの高床部が確認され

たが、住居全体を検出していないため、高床部の形態は不明である。一段低い床面の標高は298cmであり、検出面からの深さは60cmを測った。また、南壁中央壁際に53×46×23cmの方形土壇が確認された。主柱穴は検出できておらず、柱構造は不明である。

出土遺物 堅穴の埋土中には多量の土器が包含されており、住居の廃絶後の窪みに土器を廃棄したものと考えられる。これらはそのほとんどが破片であり、ここでは比較的全体の器形がわかるもの、特徴的なものとして1649～1673を掲載した。ただし遺物の総量は10箱近く出土している。

1649～1651は二重口縁の壺である。1652・1653はやや外反する口縁部をもつ壺であり、特に1652は肩部を体部の中程にもつ。1654・1658・1659はく字形口縁の甕であるが、1658は球形に近い体部もちタタキメが施されている。また、1659は讃岐系のものと考えられる。1655～1657は在地の甕であるが、1656・1657は小形であり体部も球形に近い。高杯は、1660～1663の4点を図示した。1664～1671は鉢である。1664は大形で二重口縁を有し、1665は丸底系のものである。1666～1671は浅い杯状の体部をもつものであり、1667には底部外面にヘラガキの線刻が認められる。1672・1673は鼓形器台である。1672には外面に線刻がある。

これら図示した出土遺物は古・前・Ⅱの特徴を示すが、すべて堅穴住居廃絶後に投棄されたものであり、直接的にこの住居の時期を指し示すものではない。堅穴住居-111の存続期間自体は、後述する堅穴住居-112との切り合い関係から考えて古・前・Ⅰ段階とみても差し支えないであろう。(大橋)

堅穴住居-112 (図版81・178・179)

位置 堅穴住居-111の東に隣接し、西辺で重複する。また、東半は堅穴住居-113に切られる。この堅穴住居も断片的な検出であり全容は不明と言わざるをえない。

構造 検出できたのは堅穴住居の南西隅であり、全体の1/4ほどと推測される。これによれば、主軸をN-6°-Wにとる一辺約420cmほどの方形の堅穴住居が復元される。床面の標高は308cmであり、厚さ5cmほどの貼り床層が認められた。柱穴は4本確認されたが、そのうちC-D断面で示した西側の2本が主柱穴を構成し、4本柱の構造をとるものと考えられる。柱穴間の距離は約150cmである。西壁際には約70×45×9cmの規模の方形土壇が確認された。中央穴は径48cmの円形を呈し、深さは約50cmを測った。なお、中央穴の埋土には炭層が認められた。

また、この堅穴住居の床面の精査中に南側の一部で別の壁体溝が検出された。当初高床部に伴うものと考えていたが、その後の検討の結果立て替えが行われたものであり別の堅穴住居のものとして理解している。これを以下、Bとして説明する。堅穴住居-112Bは、壁体溝の一部のみを検出したにすぎず、全容は不明であるが、一辺約500cm弱の隅丸方形を呈するものと考えられる。柱穴はE-F断面で示すものと推測されるが確証には欠ける。床面は、堅穴住居-112によって掘削されている。そのほかの付属施設等については明らかにはできなかった。

出土遺物 1674～1677の4点を図示した。1674は、畿内系と思われる壺であり、直立する頸部と緩やかに外反しながら立ち上がる二重口縁部をもつ。口縁部外面にはヘラガキ文が施されている。これらの遺物から堅穴住居-112の時期は、古・前・Ⅰの新段階に位置づけられる。(大橋)

堅穴住居-113 (図版81・179)

位置 堅穴住居-112と重複し、これを切る。

構造 南東隅部を検出したのみであり、規模は不明である。方形を呈すると考えられる。主軸方向はN-7°-Eを指す。検出した床の標高は293cmであり、堅穴住居-112より15cmほど低い。断面

第4章 調査の概要

の観察により深さ10cmほどの方形土壙が南壁に沿って確認できたが規模は不明である。レンズ状の堆積をしめす埋土は下層に炭を多く含む。支柱穴等は検出できず、柱構造は明らかでない。

出土遺物 比較的多くの土器が出土したが、細片がほとんどであり、図化していない。掲載したのは1678～1681である。また、土錘C39も出土している。竪穴住居-113の時期は、これらの出土土器および切り合い関係を考えれば、古・前・Ⅱと考えられる。(大橋)

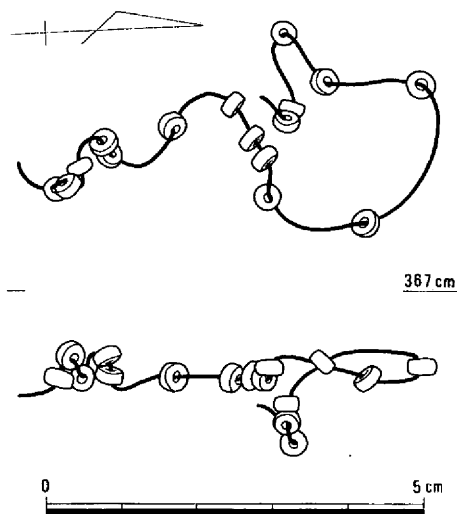
竪穴住居-114 (図版82・179・340・385・438)

位置 O17区の北で検出したカマドをもつ方形住居で、今回報告した住居の中では最も北に位置する。

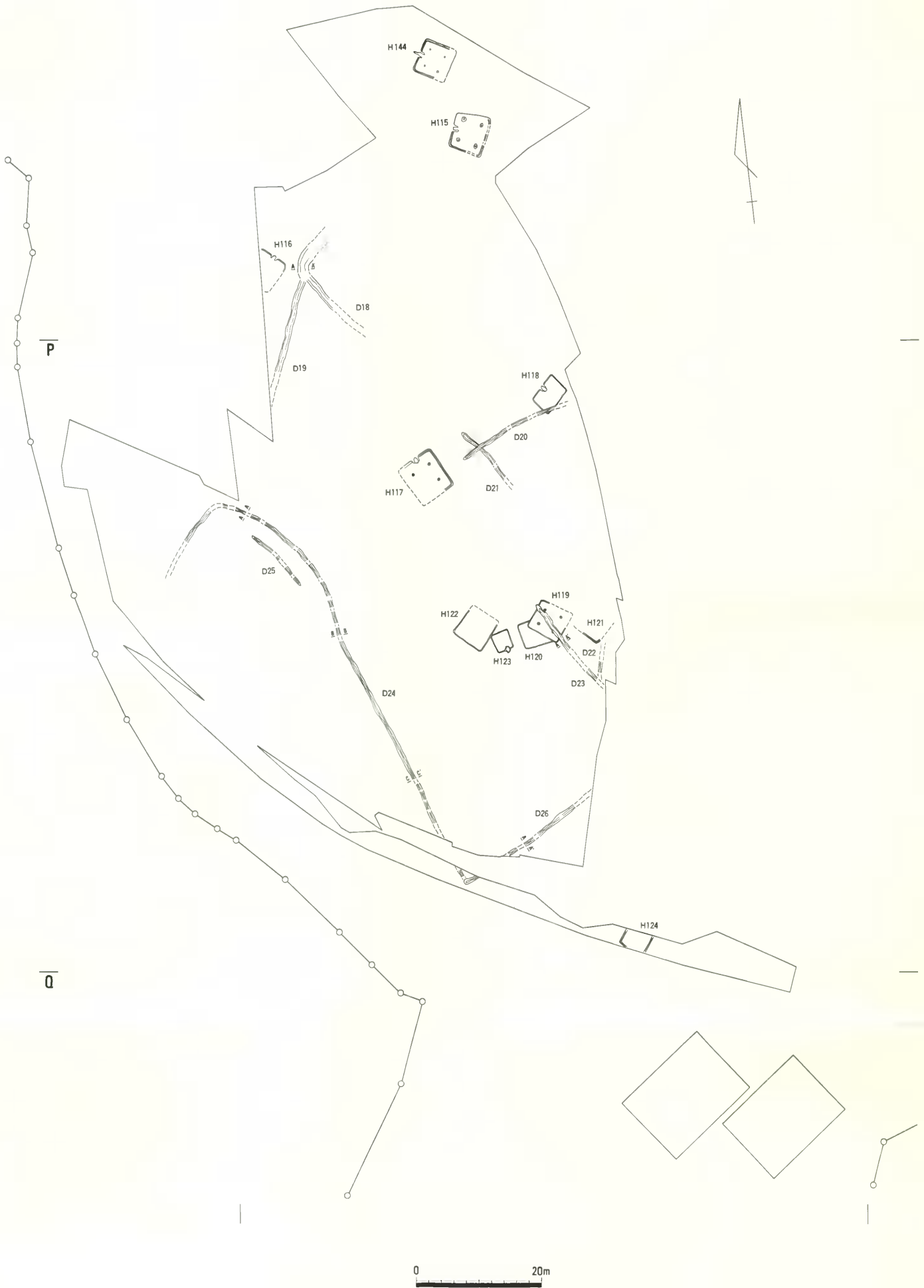
構造 方形を呈する床面は、長さ532cm、幅508cmを測る。検出面からの深さは40cmで、床面の標高は362cm

を測る。竪穴の主軸はN-31°-Eを指し、床面積は25.7m²を測る。床面の北東側では、幅15～12cm、深さ8～4cmの壁体溝を検出したが、南西側では確認できていない。支柱は4本検出したが、いずれも壁体から150～120cm離れた位置にある。柱間の距離は267～230cmで、円形をなす掘り方は深さ40～60cmを測るが、その径は42～17cmと小さく確認された柱痕跡も径13cmとかなり細い。北東辺の中央に設けられたカマドは、高さ40cmほど確認できたが、天井部はすでに崩落し袖部の遺存も良好ではなかった。屋内に設けられた燃焼部の長さは91cm、幅55cmを測り、わずかに凹む底面には長さ45cm、幅30cmの範囲で被熱痕跡が認められた。煙道は、現状の長さ86cm、幅24cmを測り、24°の傾斜をもって屋外に延びている。その主軸はN-29°-Eと竪穴の主軸とほぼ一致する。燃焼部の下には、長さ122cm、幅115cm、深さ18cmの楕円形をなす浅い土壙が掘りこまれており、その埋土には少量の土器片が含まれていた。この土壙は、カマドの構築に先立って設けられた下部構造と見られる。

出土遺物 床面から土師器、須恵器を出土した。また南東の床面からは、玉類がまとまって出土している。須恵器には、蓋、杯、高杯がある。1682～1687は、口径11.5～12.6cmを測る蓋である。口縁部は直立し、端部に内傾する凹面をもつ。丸みを帯びた天井部は、外面を左方向にヘラケズリし、口縁部との間に鈍い稜をなす。このうち1682は、天井部にボタン状のつまみをもち、高杯の蓋と考えられる。1688～1691は杯ないし高杯の杯部と見られるもので、口径10.0～10.6cmを測る。立ち上がりは長くのび、端部は内傾する面をなす。受部は水平に引き出し、丸い底部は外面を左方向にヘラケズリする。1692～1698は高杯の脚部で、脚径8.2～11.0cmを測る。端部は肥厚して段をなし、裾部には方形の透かしを四方に穿つ。1699は土師器の甕で、口径16.6cmを測る口縁部はく字形をなす端部を丸く収めている。体部は復元できなかったが、外面を粗いハケメで、内面をヘラケズリで調整している。これらの須恵器は陶邑古窯址群のTK23型式に並行し、古・中・Ⅱ期に属するものと考えられる。床面から出土した玉類には、凝灰岩製の管玉1、滑石製の白玉20がある。青灰色をなす管玉J30は、長さ1.8cm、幅0.5cmで、両面から径0.3cmの孔を穿っている。管玉から65cm離れた位置でまとまって出土した白玉J1～17は、長さ3.75～1.5cm、径5.0～4.75mmを測る。いずれも緑灰色ないし暗緑灰色を呈し、張りのある側面には研磨による擦痕が残る。これらの出土状態には一定の規則性が認められ、緒



第16図 竪穴住居-114玉類出土状況 (1/1)



第17図 古墳時代遺構全体図2 (1/600)

に通した状況で遺棄された可能性がある。

(亀山)

竪穴住居-115 (図版83・179・385)

位置 竪穴住居-114の南5mで検出した方形住居で、O17区の北に位置している。調査段階では複数の住居が重複したものと想定していたが、それぞれに組み合う主柱は検出できず、また分離して取り上げた遺物の間にも接合関係が認められることから、ここでは西辺にカマドをつくりつけた1軒の住居と考えたい。

構造 床面は長さ618cm、幅521cmの台形を呈し、主軸をN-21°-Eにおく。28.5㎡を測る床面の標高は408cmと高く、遺存する壁面の高さも9cmときわめて低い。主柱は4本あり、それぞれ壁体から133~85cm離れた位置にある。掘り方は径84~46cmの円形で、深さは82~69cmを測る。柱間の距離は352~291cmで、掘り方に残る柱痕跡から材幅は17cmと推定される。辺の中央につくりつけられたカマドは、袖部の長さ106cm、燃烧室の幅52cmを測る。燃烧部の中央には自然石の支脚が残り、その前面には長さ54cm、幅34cmの範囲で被熱による赤変・硬化が認められた。また、住居外にのびる煙道は確認できず、壁体にそって立ち上がっていたものと推定される。カマドの北側に接して、長さ101cm、幅80cmの不整形円形をなす土壌が検出された。底面は凹凸が激しく、深さは最大で21cmを測る。この土壌を覆うように焼土の分布が認められたが、その機能については明らかではない。

出土遺物 この住居に伴う確実な遺物は少なく、土師器の甕・高杯、須恵器の甗を图示するとどまった。1702はカマドの前面から出土した甕で、口縁部を欠いている。楕円形の体部は内外面を粗いハケメで調整する。高杯1701は径10.1cmを測る脚部で、柱状部から裾部に移る屈曲部には3つの透かしを穿つ。1700の甗は、住居を切る溝の遺物として取り上げられたが、その位置関係からこの住居に伴う遺物として取り扱う。口縁部を欠いているが、頸部には楕状工具による波状文を施す。偏球形をなす体部は最大径11.5cmを測り、中程に円孔を穿つ。これは陶邑古窯址群のTK23型式にほぼ並行し、古・中・Ⅱ期に属するものと思われる。

(亀山)

竪穴住居-116 (図版84・180・385)

位置 調査区の北西端に位置する。

構造 この竪穴住居は、北辺部を中心に約1/3ほど平面形が検出された。この残存する平面形から隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約15cm残存していた。床面には、柱穴、火処等は確認できなかった。しかし、北辺の壁際には造り付けのカマドが検出された。カマドは、壁面の一部と焚口部が残存していた。

出土遺物 出土遺物は、床面から検出されたものである。1705~1709は須恵器の有蓋高杯で、その他1704の高杯、1703の甕などの土師器が出土した。これらの土器はいずれも5世紀末の特徴を示している。

(中野)

竪穴住居-117 (図版84・180・181・341・385・386)

位置 P17区に検出した住居で南西は中~近世の溝-43により切られている。また、西端は調査区境の側溝で未検出である。

構造 長さ667cm、推定幅550cmの長方形で、検出面からの深さは30cmを測る。床面の標高は387cmで、面積は約36.7㎡である。床面の周囲には幅15cm、深さ5cmの壁体溝がめぐっている。主柱は溝-70により南西部が欠損するが4本と想定され、柱穴は径40~45cmの円形をなし、深さは50~80cm程である。北北西の一辺のほぼ中央とみられる付近にカマドが設置されている。燃烧部の長さ

第4章 調査の概要

69cm、幅54cmを測る。燃焼部の底面に2個体の甕を並列し検出した。支脚等は認められないが、おそらく連結する構造のカマドの可能性はある。

出土遺物 遺物には、造り付けのカマド内の東側に1712、西側に1715の土師器の甕が出土している。住居内の北東部の柱穴と壁面の間付近からは置きカマドが出土している。その外埋土中より須恵器の杯の蓋1710と身1711、土師器の甕1713が出土している。時期は須恵器の形態の特徴から6世紀の中葉前後であろう。(山磨)

竪穴住居-118 (図版85・181・182・341・342・386~388)

位置 P17区に検出した住居で、植栽範囲の調整で二度にわたって調査を行い、ほぼ全貌を検出することができた。

構造 長さ498cm、幅350cmのややいびつな長方形で検出面からの深さ25cm程を測る。床面の標高は404cmで、面積は16.2㎡である。壁体溝及び支柱穴は精査したにもかかわらず検出できなかった。北西の長辺のほぼ中央に燃焼部の長さ87cm、幅46cmのカマドを設けていた。焼成部の底面には長さ25cmの石製の支脚を検出した。

出土遺物 須恵器と土師器の各器種と土錘が床面及び埋土中から出土している。須恵器の杯蓋は口径12.2~12.5cm、高さ3.3~4.0cmを測り、外面に明瞭な稜線を施す器種である。つまみをもつ蓋も同様に外面に明瞭な稜線を施す。杯身も受け部立ち上がりが1.7~2.2cmを測る。高杯は杯部外面に2本の稜線と波状文を施し、取手を設けている。脚部は透かしを有す短脚である。時期は古・中・Ⅱ期と思われる。(山磨)

竪穴住居-119 (図版85・182・183・342・343・388・438)

位置 P17区のほぼ中央部で検出された。古墳時代初頭の竪穴住居-61の上位に位置する。後述する竪穴住居-120と切り合い関係を有し、これに後出する。また、溝-23に切られ、床面の一部まで壊されている。なお、東隅部は現有水路の確保のため検出していない。

構造 長軸531cm、短軸478cmの規模をもつ方形の竪穴住居である。主軸方向は、N-31°-Wを示す。床面の標高は364cmであり、検出面からの床面までの深さは約25cmであった。全体を検出していないため床面積は推定であるが、およそ25㎡ほどであると思われる。支柱穴は径45cm、深さ45~70cmほどのものが4本確認された。柱穴間の距離は最大で275cm、最小で257cmを測る。北西辺中央に検出されたカマドは、片袖だけを確認した。支脚には棒状の自然礫が用いられている。カマドの主軸方向の土層観察によれば、煙道部の傾斜は認められず垂直気味に壁が立ち上がる状況が観察された。壁体溝は検出されず、本来存在していなかったものと考えられる。

出土遺物 図示したものうち、1739~1744は土師器であり、1745~1746は須恵器である。1739は、器壁の厚い二重口縁をもつ壺で、外面はハケメで調整されている。1740は球形に近い体部を有する。1741~1742は高杯、1744は甕である。底部の孔は不明である。1745・1746は杯部に沈線状の凹部をもつ須恵器の高杯である。1745の口縁端部は凹面をなす。1746の脚部には1条の突線がめぐる。これら土器のほかに、この竪穴住居からは、玉が多く出土したことが注意される。J18~J26は、滑石製の白玉であり、それぞれ径0.4~0.5cmの大きさである。J27は滑石製の勾玉、J28・J29は琥珀製の平玉であり、それぞれ最大長で1.3cmを測る。平玉は、県下で津山市築瀬2号墳や山陽町岩田8号墳などの出土例が知られているのみで、類例は少ない。また、これらはいずれも碧玉製で、本例のような琥珀玉はほかに知られていない。琥珀玉は岩手県久慈産と推定されるものが多いが、本例では分析を

経ていないため、その産地を特定することはできない。

以上の遺物でみると、1739の壺、1745・1746の須恵器の高杯には古い様相が認められるものの全体を勘案すれば、この竪穴住居の時期は、古・中・Ⅱ段階になると思われる。(大橋)

竪穴住居-120 (図版86・342)

位置 P17区のほぼ中央部に位置し、竪穴住居-119と重複し、これに切られている。

構造 竪穴住居-119に東半部を壊されているため、全体の規模は不明であるが、確認できた範囲から、長軸500cm、短軸390cmほどの方形の竪穴住居と判断される。検出面から床面まで10cmほどと、遺存状況は悪かった。これは、古代以降の削平が及んでいるためと考えられる。床面の標高は373cmと竪穴住居-119より約10cmほど高い。主柱穴は検出されなかったが、本来的に柱を持たない構造であったかどうかは不明である。壁体溝は確認していない。

出土遺物 出土土器は細片のみで、遺存状況も悪かったことからここに図示していない。したがって遺物からはこの竪穴住居の時期を判断することはできないが、竪穴住居-119との切り合い関係等の諸状況を考慮すれば、古・中・Ⅱ段階とみても差し支えないと思われる。(大橋)

竪穴住居-121 (図版86・183・388)

位置 P17区の東側中央で検出したもので、竪穴住居-119の南東約2mの位置にある。

構造 南西隅を検出するにとどまったため、その規模については明らかではないが、一辺4～5mほどで主軸をN-1°-Eにおく方形をなすものと推定される。標高379cmを測る床面の周囲には幅19～12cm、深さ5cmの壁体溝がめぐり、壁面の高さは現状で16cmを測る。

出土遺物 南西の床面から須恵器の杯が2点出土した。やや高い位置から伏せた状態で出土した1748は、口径12.9cm、器高4.0cmで、浅い体部から引き出された受部は水平にのび、短く内傾する立ち上がりは厚くつくられている。底部外面は広くヘラケズリし、内面には仕上げナデを施す。1747は正位を保って出土したもので、口径13.1cm、器高4.4cmを測る。底部を狭くヘラケズリする体部は浅く、短い立ち上がりは内傾して延びる。これらの須恵器は、陶邑古窯址群のTK47ないしTK209型式に並行するものとみられ、古・後・Ⅱ期でも新相に位置付けられる。(亀山)

竪穴住居-122 (図版86・183)

位置 P17区の中央やや西側に位置する焼失住居である。古・前・Ⅰ期の竪穴住居-67を切ってその上部に造られている。

構造 一辺約530cmの方形住居と考えられる。検出面から床面まで18cmであり、床面海拔高は385cm、床面積は27㎡を推定できる比較的大形の住居である。同時期と考えられる竪穴住居-118、119等の長辺、短辺の規模と同数値を共有している。柱穴、壁体溝等は設けられておらず、東隅にカマドのみが認められた。しかし、上部の構造は削平等により焼失しており、自然石の支柱と焼土面が残るだけであった。カマド下部には現状の長さ200cm、幅160cm、深さ35～40cmを測る不整形土壙が掘られた後に埋め戻されており、カマド焼土面はほぼその中央に位置する。除湿等を考えた下部構造の可能性が考えられる。

出土遺物 土器はカマド周辺を中心に少し浮いた状態で出土しており、土師器の破片のみである。定形に復元可能なものは皆無である。カマドの南側に横転した甑の破片、さらにその南側に甕の破片が見られた。住居床面では5世紀末～6世紀初頭の須恵器杯身小片が出土している。他に住居北辺から70×20cm規模を最大にいくつかの炭化材が認められた。樹種はクリであり、強度、耐久性ともに構築

材に適した木材である。

(高畑)

竪穴住居-123 (図版87)

位置 P17区の中央やや西側に位置し、竪穴住居-122と近接している。

構造 長軸286cm、短軸273cmを測る方形の住居である。検出面からの深さ約10cmを測り、床面海拔高約390cm、床面積は7.8㎡と小型である。壁体溝、柱穴は持たず、住居内北東部の294×250cm範囲内に炭、焼土が環状に分布し、その中央に55×38cmの浅い焼土壙が認められた。床面下位に住居プランにそって約10cm掘り下げられた凹凸状の掘り方が存在する。なお、南辺の土壙は本住居跡より若干新しいものである。

出土遺物 床面から土器小片が4点出土しており、なかでも東辺壁面に沿う形で小型器台の杯部がみられた。形態・調整は溝-16出土の2480に類似しており、古・前・Ⅱの時期に比定できる。(高畑)

竪穴住居-124 (図版87・183・343)

位置 Q17区の北東に位置するもので、竪穴住居-119の南約42mで検出した竪穴住居である。

構造 調査範囲が狭く全形を把握するに至らなかったが、主軸をN-38°-Eにおく幅49cmの方形をなすものと思われる。標高371cmを測る床面の周囲には、幅25~16cm、深さ8~5cmの壁体溝がめぐる。主柱は確認できなかったが、本来柱をもたない構造をとっていた可能性が強い。

出土遺物 床面から土師器の甕や鉢、須恵器の蓋や高杯、壺、器台などが出土している。1752は口径13.1cm、器高19.2cmを測る甕で、斜めに延びる口縁は端部を丸くおさめ、楕円形をなす体部は外面を粗いハケメ、内面をナデで調整する。1753は椀形をなす鉢で、口径10.8cm、器高5.7cmを測る。内外面をナデで調整したのち、ヘラミガキを施す。蓋1754は、口径12.0cm、器高4.5cmを測り、丸い天井部はヘラケズリで調整し、直立する口縁部との間に鋭い稜をなす。1755・1756は高杯の杯部で、ヘラケズリで調整した偏平な底部から緩やかに立ち上がる受け部は水平に引き出され、斜めに延びる長い立ち上がりの端部は口径10.6cmを測る1755が凹面をなすのに対し、口径10.3cmの1756は丸くおさめている。三方透かしを飾る1757・1758は端部が肥厚して面をなし、その径は1757で10.0cm、1758で8.9cmを測る。壺の口縁部とみられる1759は口径15.4cmを測り、肥厚した口縁端部は鈍い稜をなす。1760は、壺ないし器台の脚部とみられる破片で、外面には櫛状工具による波状文が施されている。これらの須恵器は陶邑古窯址群のTK23型式にほぼ相当し、古・中・Ⅱ期でも新相を示している。(亀山)

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物-2 (図版88・344)

位置 O17区の南東、竪穴住居-37と竪穴住居-44の間に位置する建物で、竪穴住居-41南東約1.5mで検出した。

構造 桁行2間、梁間2間の総柱の建物で、不整形をなす平面の面積は6.7㎡を測り、棟方向はN-4°-Eとほぼ南北を指す。床面南北を向く桁行の総長は、東辺が257cm、西辺が275cmとわずかに西辺が長い。柱間は、東辺では北から131・126cmと北がやや広いのに対し、西辺では逆に129・146cmと北が狭くなっている。東西を指す梁間の総長は、北辺が252cm、南辺が254cmとほぼ等しいが、中央では233cmと狭く不揃いになっている。柱間は、北辺では東から137・115cm、南辺では134・120cmとどちらも東が広がっているが、中央では118・115cmとほとんど差は認められない。柱穴は径40~25cmの不整形円形をなし、現状の深さは最大30cmを測る。柱穴内に残る柱痕跡によれば、柱材の

直径は10cmあまりと推定される。

出土遺物 柱穴の埋土からは、大形の壺とみられる土器片が出土しており、おおむね古墳前期に属するものと考えられるが、弥生時代終末まで遡る可能性はある。(亀山)

掘立柱建物-3 (図版88)

位置 P17区の西側中央にあり、竪穴住居-58・65・66・67に囲まれた中央部に位置する。すぐ西側に土壇-129が接する。

構造 4本柱からなる掘立柱建物と考えられ、棟の方向はN-62°-Eである。平面は台形を呈し、柱間距離は北辺が186cmと広く、南辺が162cm、東西片が145cmを測る。柱の掘り方の残存高は約10cmと浅く、削平を受けている。掘り方平面は円形を呈し、直径27~40cm、柱の直径は約9cmを測る。

出土遺物 遺物は皆無であるが、柱穴埋土の暗茶灰色粘質微砂から古墳時代の遺構と考えられる。

(高畑)

(4) 土 壇

土壇-109 (図版89)

位置 O17区の北、竪穴住居-36の西に接して検出された土壇である。

構造 上面は、長さ179cm、幅133cmの方形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。壁面は、標高352cmを測る平坦な底面から急な傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物 埋土には少量の弥生土器を含んでいたが、竪穴住居-36を壊してつくられていることから、その時期は古・前・I期以降と考えられる。(亀山)

土壇-110 (図版89・344・438)

位置 竪穴住居-37の北隅で検出した土壇で、O17区の中央東よりに位置している。

構造 竪穴住居-37を掘り下げる際に検出したため、正確な規模は把握できなかったが、上面で40cm前後の径をもつ円形をなしていたと思われる。深さは現状で55cmを測り、その断面は柱穴状を呈している。埋土は2層に分かれ、その上層からは銅鏡M6が、上を向いた背面をわずかに南に傾けた状態で出土した。

出土遺物 M6は面径6.65cmを測る小形鏡で、重量は41.3gある。幅6.65cmを測る周縁は、厚さ0.35cmの平縁である。幅1.0cmの外区をめぐる籬歯文は、平行かつ緻密である。内区には3重の圏線からなる重圏文を飾る。鈕は径1.6cm、高さ0.7cmの半球形をなし、貫通する孔の断面は幅0.7cm、高さ0.4cmの半円形を呈する。鈕座は、珠文を圏線で連ね、内区との間に1条の圏線をめぐらしている。重圏文鏡は古墳時代前期前半に多く見られるが、これのみで詳細な時期を特定することは困難である。この土壇は、検出段階の所見から竪穴住居-37を切って掘りこまれたものと判断したが、住居内に廃棄された銅鏡を、その錆の影響から誤認したとの疑いも捨て切れない。いずれにしても、銅鏡が埋納もしくは廃棄された時期は、竪穴住居-37が放棄された古・前・II期と接近しているものと考えられる。(亀山)

土壇-111 (図版89・184・344・389)

位置 O17区の南端中央に位置する竪穴住居-48の、北約0.5mで検出した土壇である。

構造 上面は、長さ73cm、幅64cmの楕円形を呈する。現状の深さは22cmあり、わずかに凹む底面から壁面が急な角度で立ち上がる。

出土遺物 暗褐色をなす埋め土の上層からは壺1、甕2、高杯2などの土器が出土している。このうち、図示した1761は口径15.0cmの二重口縁をもつ壺で、長い頸部から広がる肩部には二枚貝による波状文をめぐらす。体部の外面はハケメで調整し、内面にはヘラケズリを施す。この土器は、溝-16から出土した甕と胎土や焼成を共通にし、他地域からの搬入品である可能性がある。このほかにも、タキ成形する壺や甕の体部片があり、古・前・I期に比定される。(亀山)

土壌-112 (図版89)

位置 この土壌は、調査区の北西端部に位置し、溝-3・4の西側に検出された。

構造 規模は146×113cmで、平面形は楕円形を呈している。深さは、約59cmを測る。土壌内には、第1～3層がレンズ状に堆積していた。

出土遺物 土師器の小片が少量出土した。古墳時代前半の可能性が強いと考えられる。(中野)

土壌-113 (図版89)

位置 竪穴住居-52と重複して検出したもので、住居より新しい。

構造 東側の一部が削平されているため明確ではないが平面形は楕円形を呈するものと考えられる。土壌の規模は長さは推定で65cm、幅52cmを測る。壁面は外に開きながら立ち上がり、床面は少し窪むため断面形は椀形を呈する。検出面からの深さは24cmを測る。

出土遺物 土壌からはごく少量の土器が出土している。図示できるものはないが、その特徴などからして古・前・IIの時期と考えられる。(井上)

土壌-114 (図版89)

位置 竪穴住居-52の東隅の位置に検出した。

構造 住居と重複しているため部分的に推定される部分もあるが、平面形は少し歪つな楕円形を呈するものである。土壌の規模は、長さ158cm、幅128cmを測るものと想定される。床面はほぼ平坦であり、浅いため断面は浅い皿形を呈する。

出土遺物 土壌からはごく少量の土器が出土している。図示できるものはないが土器片の特徴から古墳時代前期と推定される。(井上)

土壌-115 (図版89・184・345)

位置 竪穴住居-52の南東8mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は卵形に似た楕円形を呈するもので、長さ112cm、幅86cmを測る。壁面は大きく外に開くもので、底面はほぼ平坦である。そのため断面形は椀形を呈する。検出面からの深さは25cmを測り、底面の海拔高は374cmである。

出土遺物 土壌からは少量の土器が出土している。図示できたのは一点のみである。1762は甕で、口縁部外面に櫛描沈線が多条に施される。胴部は薄手に作られるもので古・前・I期に位置づけられる。(井上)

土壌-116 (図版89・184・345・389)

位置 竪穴住居-52の東14mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は楕円形を呈しており、長さ110cm、幅63cmを測る。壁面は外に開きながら立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。そのため断面形は逆台形を呈している。検出面からの深さは34cmを測る。この土壌からは多量の土器が出土している。出土位置はほぼ検出面に集中し、底部からの出土は少なかった。埋土の状態をみるとレンズ状の堆積はみられず、一気に埋められた様

子がうかがえる。また、出土した甕、高杯などのなかには完形に近いものなどもあり同一個体ごとのまとまりが見られることから、土壌の埋没する一時期に一括して遺棄されたものと推定される。

出土遺物 土壌からは甕、高杯、鉢などの土器が多量に出土した。1763は甕である。口縁端部がさらに開くもので、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリが見られる。1765も甕で、口縁部がく字状に外反するもので胴部の外面はハケメ、内面はヘラミガキが見られる。1766～1771は高杯である。杯部は1766のように平坦に近く浅いものと、1767のように少し丸みを持ち深いものがある。外面の調整の残るものでは細かなヘラミガキが施される。1772は、鉢である。緩やかに弧を描きながら立ち上がる体部の内面は滑らかであるが、外面には多角形状の稜線が全体に見られる。稜線で囲まれる部分は平坦である。土器の示す時期は古・前・Ⅰとされるものと考えられ、土壌の時期も同じ時期のものと推定される。 (井上)

土壌-117 (図版90・184)

位置 土壌-116の南2 mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は少し南北に長いがほぼ円形を呈するものである。規模は長さ68cm、幅62cmを測る。底面の中心は少し東に寄るため壁面の傾斜は東側と西側とではやや異なるが、全体的には少し内側に向けて弧を描きながら立ち上がるもので、断面形は楕形を呈する。検出面からの深さは26cmを測る。

出土遺物 土壌からは少しまとまった量の土器が出土した。図示したものは甕と高杯である。1773は口縁部外面に櫛描沈線が多条に施されるものである。1774は口縁部がく字状に外反するもので、外面の調整は不明であるが内面はヘラケズリが見られる。1775、1776は高杯で、内外面に横方向の細かいヘラミガキが施されるものである。これらの土器の時期は古・前・Ⅰと考えられる。 (井上)

土壌-118 (図版90)

位置 土壌-117の東約3 mの位置に検出した。

構造 東側の一部を削平されているため正確な平面形は不明であるが楕円形に近い形状を呈していたものと推定される。土壌の規模は幅59cmを測り、長さは86cm程度と推定される。壁面が垂直に近い状態で立ち上がる断面逆台形を呈しており、検出面からの深さは27cmを測る。床面はほぼ平らであり、その海拔高は353cmである。

出土遺物 土壌からはごく少量の土器が出土している。図示できるものは無かったが、土器片の特徴から古墳時代前期に属するものと思われる。 (井上)

土壌-119 (図版90・345)

位置 土壌-117の南東約2 mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は円形に近いが四方に直線的なものが見られ隅丸方形を呈している。土壌の規模は長さ66cm、幅65cmを測る。壁面はほぼ垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。断面の形態は逆台形を呈しており、底面の海拔高は393cmである。

出土遺物 土壌からはごく少量の土器が出土している。図示できるものは無いが、土器片に見られる特徴から古墳時代前期に比定される。 (井上)

土壌-120 (図版90・184)

位置 土壌-119の南240cmの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は少し歪つではあるが円形を呈するものである。土壌の規模は、長さ、

第4章 調査の概要

幅ともに78cmを測る。壁面は少し外に開きながら立ち上がるものである。底面は少し凹凸が見られるが、断面形は皿形に近い形状を呈している。底面の海拔高は362cmである。

出土遺物 土壌からはごく少量の土器が出土している。図示した1777は、畿内の系譜を引く壺の口縁部である。頸部、口縁部には内外面にヘラミガキが施される。土器の時期は古・前・Ⅱと考えられ、土壌も同じ時期と推定される。(井上)

土壌-121 (図版90)

位置 P17区に検出したやや大形の土壌である。

構造 上面は、長さ257cm、幅186cmのやや楕円形を呈し、底面は長さ84cm、幅49cmの長円形をなす。底面はほぼ平らで、標高366cmを測り、検出面からの深さ26cmである。断面は皿状を呈し2段の掘り方をなす。埋土は2層に分離可能であった。

出土遺物 埋土中から細片が出土したのみで図化できたものはないが、口縁部細片の二重口縁の特徴等から古・前・Ⅱ期の範疇と思われる。(山磨)

土壌-122 (図版90)

位置 竪穴住居-58と一部重複してその北側に検出した。

構造 南側の一部を竪穴住居により一部削平されているため全体を検出することはできなかったが平面形は小判型に近い隅丸長方形を呈するものである。検出面での規模は長さ210cm、幅161cmを測る。壁面は少し外に開きながら立ち上がるもので、底面はほぼ水平であり平坦である。検出面からの深さは25cmを測り、底面の海拔高は361cmである。

出土遺物 土壌からはごく少量の土器が出土している。図示できる土器はないが、それらの特徴から古・前・Ⅱ期に位置づけられるものである。(井上)

土壌-123 (図版90・185)

位置 P16の北東の微高地上面において検出された。検出高は、海拔330cmで西側の一部が後世の削平により消失していた。

構造 およそ南北方向に主軸をみせる楕円形を呈するもので、規模は長軸長121cm、検出面からの深さ最深部で約9cmと比較的浅い土壌であった。

出土遺物 検出面に近い位置において甕1778が1個体分遺存しているのが確認されたにすぎない。これによれば時期は、古・前・Ⅱ段階に比定されよう。(島崎)

土壌-124 (図版90)

位置 P17区の南において一部切られた状態で検出された。検出高は、海拔390cmであった。

構造 北側が検出されなかったことで全体像については判然としない。検出されたのは検出面からの深さ約22cmを測る、状況から円形が推測されるものであった。

出土遺物 壙内からは土器片が散見された程度で他には遺物の出土は見られなかった。時期は、古・前・Ⅱ段階に比定されよう。(島崎)

土壌-125 (図版91)

位置 P17区の北西にあり、竪穴住居-63、64間に位置する。

構造 長さ47cm、幅38cm、深さ12cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は393cmを測り、埋土中に河原石の小円礫を多く含む。約30石にて最大で10×7×6cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。(高畑)

土壙-126 (図版91・185・346)

位置 P17区の北西にあり、竪穴住居-65の東側に位置する。

構造 長さ85cm、幅80cm、深さは現状で22cmを測る。円形の土壙である。底面海拔高は355cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 約20点の土器片が底部に向かう格好で分散して認められる。古・前・Iに比定できる。

(高畑)

土壙-127 (図版91・185・346)

位置 P17区の中央西よりにあり、竪穴住居-67の南西隅に接するところに位置する。

構造 長さ88cm、幅86cm、深さ24cmを測る円形の土壙である。底面海拔高は368cmを測り、埋土は1層である。

出土遺物 底面に接するものはなく、土器片8点はすべて浮いた状態である。古・前・IIに比定できる。

(高畑)

土壙-128 (図版91)

位置 P17区の北西にあり、竪穴住居-66の南60cmに位置する。

構造 長さ128cm、幅98cm、深さ18cmを測る楕円形の土壙である。底面海拔高は362cmを測り、埋土は1層である。

出土遺物 遺物は出土していない。

(高畑)

土壙-129 (図版91・185・389)

位置 P17区の北西にあり、建物-3の西側に位置する。

構造 長さ177cm、幅136cm、深さ18cmを測る楕円形の土壙である。底面海拔高は385cmを測り、埋土は2層からなる。

出土遺物 遺物は第2層中からの出土であり、廃棄された状況である。甕、高杯が認められた。時期は弥・後・IV～古・前・Iに比定できる。

(高畑)

土壙-130 (図版91・185)

位置 P17区の中央西側にあり、掘立柱建物-3から東へ240cm、竪穴住居-67から北に200cmに位置する。

構造 長さ86cm、幅76cm、深さ22cmを測る円形の土壙である。底面海拔高403cmを測り、埋土は3層からなる。

出土遺物 埋土中から甕の口縁部が1点出土しており、古・前・Iに比定できる。

(高畑)

土壙-131 (図版91・185)

位置 P17区の北西にあり、竪穴住居-72の東側に位置する。

構造 長さ69cm、現状の幅57cm、深さ12cmを測る円形の土壙である。底面海拔高362cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 埋土中の上位・下位から出土しているが、底面からの出土はみられない。古・前・IIに比定できる。

(高畑)

土壙-132 (図版91)

位置 P17区の中央やや西側にあり、土壙-133の北東260cmに位置する。

構造 現状の長さ65cm、幅65cm、深さ13cmを測る楕円形の土壙である。底面海拔高は352cmを測

り、埋土は1層からなる。

出土遺物 遺物は出土していない。

(高畑)

土壌-133 (図版92・185・186)

位置 P17区の西側中央にあり、竪穴住居-82の北側60cmに位置する。

構造 長さ296cm、幅239cm、深さ14cmを測る不整円形の土壌である。底面海拔高は381cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 土壌内に大きく5ブロックに分かれて出土しており、すべて埋土中である。古・前・Iの中相に比定できる。

(高畑)

土壌-134 (図版92・346)

位置 P17区の南西において一部が調査区境の側溝によって切られた状態で検出された。平面検出面の海拔高は400cmであった。

構造 西側が側溝によって切られていたため、詳細について言及はできないが、状況から平面東西方向に主軸をもった楕円形であったことが推測される。

出土遺物 壙底に甕を中心とする土器片が散見された程度であった。時期は古墳時代前半への位置づけが考えられる。

(島崎)

土壌-135 (図版92・186)

位置 P17区の中央にあり、竪穴住居-70の北西に位置し、竪穴住居-70を切って造られている。

構造 長さ210cm、現状の幅90cm、深さ31cmを測る隅丸方形の土壌である。底面海拔高は341cmを測り、埋土は2層からなる。

出土遺物 遺物は、第1層の炭、焼土塊等を含む暗赤灰褐色粘質土中からの出土であり、時期は古・前・IIに比定できる。

(高畑)

土壌-136 (図版92)

位置 P17区の中央にあり、竪穴住居-69の西側150cmに位置する。

構造 長さ136cm、幅122cm、深さ49cmを測る楕円形の土壌である。底面海拔高は345cmを測り、埋土は4層からなる。

出土遺物 埋土第1、2層中から土器小片が出土しており、古・前・IIに比定できる。

(高畑)

土壌-137 (図版93・186)

位置 P17区南西に所在する竪穴住居-88の北側約1mの地点に、竪穴住居-88の北辺に並行した状態で、海拔405cmの位置で検出された。

構造 長軸長92cm、幅45cmの規模を測る楕円形を呈するものであった。検出面からの深さは、比較的深く約25cmを測った。埋積土中には、炭化物の混入が多く確認された。

出土遺物 土壌南側端部に1個体の甕1802がほぼ完全な状態で検出された。これによると時期は、古・前・II段階に位置づけられよう。

(島崎)

土壌-138 (図版93)

位置 調査区の南東付近に位置し、北東隅を溝-24に切られ、また竪穴住居-85~87を切るかたちで確認した。

構造 遺構は標高364cmで検出した。平面形態は北西-南東方向に長軸をもつ楕円形であり、断面形は2段の掘り方を有し、浅い凹み状の底面からゆるく立ちあがった形態を呈している。現状の規

模は上段が長さ159cm、幅100cm、深さ35cmで、下段が長さ124cm、幅38cm、深さ9cmを測る。底面海拔高は320cmである。このような形態を呈するものに後述する土壙墓-4や西川調査区の土壙墓-6などがあり、人骨や副葬品は認められないものの、この土壙は木棺墓であった可能性も考えられる。

出土遺物 土師器の甕や高杯の破片が10数点程度出土しているものの形にはならなかった。時期は古・前・Ⅱあたりと思われる。(澤山)

土壙-139 (図版93・186・187・389・390)

位置 調査区の南東付近に位置し、竪穴住居-94の北0.4mに存在する。

構造 標高375cmで検出したもので、調査当初は小規模な土器溜りとして認識していた遺構である。平面形態は楕円形であり、断面は平らな底面からゆるく外傾ぎみに立ちあがった形態を呈している。規模は現状において長さ81cm、幅62cm、深さ16cmを測り、比較的浅めの掘り方を有する土壙である。底面海拔高は359cmである。

出土遺物 壺1804・1805、甕1806～1816、高杯1817～1819、小形器台1820、鉢1821・1822、台付鉢1823など比較的まとまった遺物の出土をみた。1804は胴部から口縁部に向かってゆるく外反するもの、1805は大きく外反するものでいずれも讃岐周辺に出自をもつ非在地系土器と考えられる。1806～1814は短く立ち上がる口縁部に櫛描沈線を施し球形化した体部をもつ。基本的に外面にはハケメのちヘラミガキ、内面にはヘラケズリを行い、底部には指頭圧痕がみられる。ただし1809の外面肩部付近にはタタキ成形の痕跡が確認され、この種の甕の製作技法に示唆を与える。また1807にA2、1809はB2、1811はA3、1813はA4の肩部刺突文がそれぞれに認められる。改めて形態をみると1809や1810のような小形品や1813や1814などの大形品のものがあり、容積に差異がみられる。また1809のようにほとんど球形のものや、1811のようにやや肩部に張りがあり、長胴ぎみの体部に若干尖る底部をもつものや1813・1814のようにいわゆる長胴形を呈していると推測されるものなどが認められた。1815はほぼ球形の体部に短く字形に外反させた口縁をもち、端部は上方に摘み上げている。外面には右上がりの細かいタタキメにハケメを行っている。色調はいわゆるチョコレート色を呈し、生駒西麓産の胎土の特徴とされる角閃石や金雲母を多く含んでいた。これらのことからこの土器は河内産の搬入品と考えられる。1816は1815に類似する形態であり、球形の体部に短く字形に外反させた口縁をもち、端部は内側上方につまみ上げている。外面には縦方向のハケメのち肩部を中心に横方向のハケメを、内面にはヘラケズリを行い、底部には指頭圧痕を残す。この土器も畿内、特に最終末の庄内甕と深い関係を示唆させる非在地系土器である。1817・1819は長脚に杯部が有段をもって外方へ開くものであり、1818は短脚に椀形の杯部を有するものでいずれもヘラミガキを密に行なっている。1820は浅い皿状の杯部をもつものである。1821・1822はゆるく字形に立ち上がる体部をもつものである。1823はいわゆる製塩土器であり、外面にタタキ成形を行っている。改めて甕を中心にみると、1806～1814の在地産と考えられる一群と1815・1816の畿内産または畿内系と思われる土器の一群を比較したとき、前者がやや古く位置付けられるようである。このことは1821や1822のような小形鉢を伴っているものの、小形の丸底壺や鉢、器台の精製品がみられないことからとも言える。一括性の問題を含むものの畿内との併行関係をみる上で示唆に富んでいる。時期は古・前・Ⅱと思われる。(澤山)

土壙-140 (図版93)

位置 竪穴住居-94の北西隅の付近を切っている状況で検出している。

構造 遺構は標高332cmで検出した土壙で、平面は楕円形をなし、断面は平らな底面から外傾ぎ

第4章 調査の概要

みに立ちあがった形態を呈している。規模は現状において長さ92cm、幅65cm、深さ15cmを測り、比較的浅い土壌である。底面海拔高は347cmである。

出土遺物 土師器の高杯を中心に破片が10点ほど出土しているが図化できなかつた。時期は古・前・Ⅱと考えられる。(澤山)

土壌-141 (図版93)

位置 竪穴住居-93の北側20cm地点で検出された。

構造 狭長な楕円形を呈し、長径112cm、幅37cm、深さ21cmを測る。壁面はほぼ垂直に下がり、底部は平坦である。

出土遺物 甕の二重口縁部および数器種の小片のみではあるが、時期を推し測るに古・前・Ⅱ期と思われる。(小林)

土壌-142 (図版93)

位置 竪穴住居-85~87の南1m、土壌-138の南西0.6mの位置に存在している。

構造 遺構は標高386cmで検出した。平面形態は北西-南東方向に長軸をもつ楕円形であり、断面は平らな底面から外傾ぎみに立ちあがった形態で北側はゆるやかに開口している。規模は現状において長さ122cm、幅50cm、深さ13cmを測る。底面海拔高は373cmである。土層断面をみると土壌底に厚さ4cm程度の炭、焼土を多く含む層が底面中央付近に認められ、なんらかの炉として使用されたと思われる。

出土遺物 土師器の甕、高杯などの破片のみが出土しており、時期は古・前・Ⅱあたりと思われる。なお遺構に直接伴うものではないが、凝灰岩製の磨製石斧S84も出土している。(澤山)

土壌-143 (図版93)

位置 土壌-139の南西50cmに位置し、南半分を竪穴住居-94に切られた形で検出された。

構造 平面は東西方向に幅を持つ長楕円形で、長さ132cm、深さ20cmを計測する。西壁は緩やかな傾斜を持ちながら底部に向かい、東壁部でやや立ち上がりが急になる。

出土遺物 削平を受けている関係からか遺存は悪く、埋土から壺・甕・高杯の小片が出土するに留まった。これらはおおむね古・前・Ⅱ期の様相を示している。(小林)

土壌-144 (図版93・187)

位置 竪穴住居-92の南西1.4mに位置している。

構造 遺構は標高394cmで検出した土壌で、平面はほぼ南北方向に長軸をもつ楕円形をなす。断面は底面北側付近に段を有し、そこからゆるく立ちあがった形態を呈している。現状の規模は上段で長さ170cm、幅45cm、深さ34cm、下段で長さ93cm、幅25cm、深さ8cmを測る。底面海拔高は352cmである。このように2段の掘り方を有する土壌には前述した土壌-138などがあるが、下段にあたる掘り方の規模からすれば墓墳であった可能性は低いと考えられる。平面図に示したように、遺構検出面表層で主に細片であるが遺物の出土をみている。

出土遺物 図化し得るものはほとんどなかつたが、土師器の壺、甕、高杯、鉢などの破片が比較的多く出土した。このうち壺1826は丸みを帯びた体部に内傾して立ち上がる頸部を有し、逆ハ字形に開く口縁に、やや尖り気味に収めた端部をもつ。外面にはハケメのちにヘラミガキ、内面はヘラケズリにより大きく器面を削り込んでいる。(澤山)

土壌-145 (図版94)

位置 調査区の南東側に位置し、南東部分を溝-26に大きく切られる状況で検出した。

構造 遺構は標高345cmで検出した。平面形態は円形と思われ、断面形はU字形を呈する。規模は現状において長さ、幅ともに不明であるが、深さは38cmを測る。底面海拔高は307cmである。

出土遺物 遺構の時期を示す遺物はみられなかったが、溝-26との切り合い関係と周辺の遺構の検出状況から古墳時代前期と考えられる。(澤山)

土壙-146 (図版94)

位置 土壙-141の北西0.2m、竪穴住居-94の北0.6mに位置している。

構造 遺構は標高323cmで検出した。平面形態はほぼ東西方向に長軸をもつ楕円形と考えられ、断面形は平らな底面からやや垂直ぎみに立ちあがった形態を呈している。規模は現状において長さ162cm、深さは45cmを測るが、幅については不明である。底面海拔高は352cmである。

出土遺物 遺構の時期を示す遺物はみられなかったが、周辺遺構の検出状況から古墳時代前期と考えられる。(澤山)

土壙-147 (図版94)

位置 竪穴住居-94の北東隅の付近を切っている状況で検出している。

構造 標高380cmで検出した土壙で、平面はほぼ円形をなす。断面形は平らな底面からやや垂直ぎみに立ちあがった形態を呈している。規模は現状において長さ118cm、幅106cm、深さ53cmを測り、底面海拔高は327cmである。土層はレンズ状の堆積を示し、第4層と第5層の境界付近には炭や焼土の包含状況が確認された。また第2層にはマンガンの沈着が多くみられ、比較的長い期間上位が開口し、滞水状況にあった可能性が考えられる。なお形態的には弥生時代にみられる袋状土壙と類似するが、遺構検出において竪穴住居-94を切っていたことや他の袋状土壙の底面の標高に比べてやや高いことなどから、ここでは土壙として報告した。

出土遺物 遺構の時期を示す遺物はみられなかったが、上記の状況から古墳時代前期と考えられる。(澤山)

土壙-148 (図版94・187)

位置 Q17区南東部に位置し、竪穴住居-70との距離3.6mを測る。

構造 平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長110cm、短軸長57cm、深さ8cmの規模を測る。

出土遺物 直立する口縁部外面に櫛描沈線がめぐらされる甕のほか、閃緑岩製の砥石S105が出土しており、時期は古・前・I～IIに比定される。(光永)

土壙-149 (図版94・187)

位置 竪穴住居-98の南東7m地点で検出された。

構造 北半部分が削平を受けているが、遺存部の形態から、ほぼ円形を成していると推定される。長さ103cm、深さ50cmを測る。円筒状に掘り込まれており、土壙底部は平坦である。

出土遺物 1827はやや内傾する口縁部に8条の沈線をめぐらした、口径15.0cm、最大径20.8cmを測る甕である。口縁から胴部にかけて1/3が残存し、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリ後ユビオサエで調整する。1828は皿状の鉢で、口径15.0cm、残存高3.4cmである。外面ヘラケズリ、内面は放射状にヘラミガキが施されている。その他、土師器片が少量出土した。時期は古・前・IIと考えられる。(小林)

土壙-150 (図版94)

位 置 竪穴住居-97の南東5mに位置し、竪穴住居-98の壁体部分を切った形で北側半分を検出した。

構 造 遺構の全体像は定かでないが、ほぼ楕円形と推定される。検出範囲での最大幅は137cmを測る。底面は平坦で、標高334cm、検出面からの深さは26cmを測る。土壌内部には、やや微砂を含む淡茶色粘質土が堆積していた。

出土遺物 埋土から、甕・高杯・製塩土器片等が若干出土した。いずれも小破片であるが、古・前・Ⅱに比定される。(小林)

土壌-151 (図版94・187・188)

位 置 調査区の南端、竪穴住居-97の北西に位置する。微高地が西へ下がる肩口近くにあたる。

構 造 長さ157cm、幅98cmの南北に長い不整楕円形を呈しており、検出面からの深さは27cm、底面の標高365cmを測る。断面は皿状で、埋土は2層に分けられる。

出土遺物 甕・高杯・製塩土器などがあり、多くは上層から出土している。1829は胴部が張り、下膨れを呈している。1830は底部が若干すぼまり気味だが肩部の張りは弱い。古・前・Ⅱ期と考えられる。1832は高杯の脚部で、柱状部は中空となっており、裾部には透かしが3孔穿たれている。(久保)

土壌-152 (図版94)

位 置 竪穴住居-99の床面直下より検出された。

構 造 遺存部の形状から長径130cmの隅丸方形と推定される。断面逆台形状を呈し、深さ25cmを測る。

出土遺物 土師器の細片が数点出土するに留まった。断定し得るものではないが、古・前・Ⅱと考えられる。(小林)

土壌-153 (図版95・188)

位 置 P17区南端の中央東よりで検出した土壌で、竪穴住居-101の西6.5mに位置する。

構 造 調査区の南端にかかって検出したため、全形を知り得ないが、現状では幅113cm、長さ110cm以上の楕円形を呈する。深さは60cmを測り、すり鉢状をなす底面の中央は一段深くなっている。下層の埋土には焼土を含み、高杯1836が出土した。

出土遺物 1836は口径20.1cm、脚径13.8cm、器高14.5cmを測る。上方に大きく開く杯部に4つの透かし孔を飾る脚部を差し込んで接合しており、古・前・Ⅰ期でも新しい様相を示している。(亀山)

土壌-154 (図版95・188)

位 置 Q17区の北東に位置する橋脚部の中央で検出した土壌で、土壌-156・160と切り合いをもつ。

構 造 調査に先行する掘削工事により北端を失っているものの、現状では長さ331cm、幅132cmの長楕円形を呈しており、本来は長さ4mあまりの舟底形をなすものとみられる。高さ95cmを測る壁面は、標高267cmの底面からやや垂直ぎみに立ち上がる。上部には、炭を含む黒褐色土がレンズ状に堆積しており、ここから土器片が多く出土している。

出土遺物 黒褐色土から出土した遺物として、壺・甕・高杯・鉢などの土器がある。1837は壺の二重口縁で、口径24.6cmを測る。甕には、二重口縁をもつ1838・1839とく字形の口縁部をもつ1840とがある。口径14.1cmを測る1838は、櫛描沈線をめぐらすのに対し、口径17.4cmの1839はヨコナデで仕上げている。肩の張る体部の外面はハケメとヘラミガキ、内面はヘラケズリで調整する。1840は口径

17.3cmを測り、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。1841は高杯の脚部で、短い柱状部から屈折して開く裾部には4つの透かし孔を飾る。径4.9cmを測る1842は、製塩に用いられた鉢の脚部で、内外にユビオサエの痕を残す。これらの土器は、おおむね古・前・Ⅱ期の様相を示している。

(亀山)

土壙-155 (図版95・188)

位置 土壙-154の北東約4mで検出した土壙で、Q17区の北東に位置し、東端は調査区外にのびている。

構造 上面は長さ189cm以上、幅63cmの長楕円形をなし、一見溝状を呈する土壙である。深さは18cmしかなく、断面は浅い皿形をなす。暗褐色を呈する埋土から、土器がまとまって出土している。

出土遺物 埋土から出土した遺物には、甕・高杯などの土器がある。1853は二重口縁に楕円沈線を飾る甕で、口径は16.2cmを測る。高杯1843~1847は、口径18.9~19.2cmを測る浅い杯部と、3つの透かし孔を穿つ中空の脚部からなる。いずれも内外面をヘラミガキで密に調整しており、古・前・Ⅱ期に比定される。

(亀山)

土壙-156 (図版95・188)

位置 Q17区の北東に位置する橋脚部の中央で検出した土壙で、土壙-154に切られている。

構造 西側を土壙-154によって壊されているため全形を知り得ないが、現状の長さ68cm、幅60cmを測る。標高328cmの底面は比較的平坦で、壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物 この土壙に伴う遺物は少なく、わずかに1848を図示し得たにすぎない。これは、径13.8cmを測る高杯の脚部で、短い柱状部は中実ぎみにつくられ、裾部には4つの透かし孔を穿つ。外面をハケメで調整しており、古・前・Ⅰ期に位置付けられるものである。

(亀山)

土壙-157 (図版95)

位置 土壙-156の西約1mで検出した土壙で、Q17区北東の橋脚部に位置している。

構造 南側を失っているため全形を知り得ないが、残存部分から推測すれば、幅54cm、長さ83cm以上の楕円形を呈するものと思われる。標高354cmを測る検出面からの深さは4cmに過ぎず、遺存状況は極めて悪い。

出土遺物 底面がかろうじて残存する状況のため、遺物は出土していない。このため詳細な時期を知る手掛かりに乏しいが、埋土の様子や周辺の遺構との関連から古墳前期のものともみて差し支えないであろう。

(亀山)

土壙-158 (図版96・188)

位置 Q17区の北東に位置し、土壙-156の南に接して検出した土壙である。

構造 中央に損壊を受け、東西にわかれて検出したが、本来同一の土壙と思われる。それによると、長さ289cm、幅50cmの溝状に復元され、断面はU字形をなす。検出面からの深さは、東が30cm、西が21cmとわずかに西にむかって傾斜している。

出土遺物 埋土中から高杯が出土している。1849は椀形の杯部をもつ高杯で、口径11.7cmを測る。脚部は短く、内外をハケメで調整する。1850は高杯の杯部であるが、口縁端部を欠いている。平坦な底部から口縁部が斜め上方にのびるもので、内外にヘラミガキを施している。径11.7cmを測る1851は高杯の脚部で、短い柱状部から緩やかに広がる裾部には3つの透かし孔を飾る。これらは古・前・Ⅱ期に属するものと思われる。

(亀山)

土壙-159 (図版96・188)

位 置 土壙-158の北約1.1mで検出した土壙で、Q17区の北東に位置する。

構 造 西側を別遺構に壊されているものの、長さ48cmあまりの楕円形に復元される。現状の深さは16cmあり、標高330cmの底面から急に立ち上がる壁面をもつ。土壙の底面に接して長さ48cm、幅44cmの石材が検出され、その下部から土器が出土した。

出土遺物 土壙底から出土した**1852**は平底をもつ甕の体部で、底部付近は右上がり、体部中央は水平のタタキで成形したのち、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。これらの特徴は、古・前・I期の様相を示している。 (亀山)

土壙-160 (図版96・188)

位 置 Q17区北東の橋脚部で確認したもので、土壙-156の西に接して検出した。

構 造 長さ117cm、幅107cmを測る上面は、不整な楕円形を呈する。標高352cmを測る底面は平らで、高さ14cmほど遺存する壁面はやや急な傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物 埋土からは甕・高杯などの土師器が出土している。**1854**は二重になる口縁部に多条の櫛描沈線を施す甕で、口径は14.1cmを測る。**1855**はく字形の口縁をもつ甕で、径17.8cmを測る口縁端部をわずかにつまみあげている。張りのある肩部は右上がりのタタキで成形したのち、水平のタタキで調整する。内面はヘラケズリを施したのちナデを加えている。**1856**は径13.8cmを測る高杯の脚部で、中実ぎみにつくる柱状部から屈折して開く裾部には4つの透かし孔を穿つ。この土壙は、これらの土器から古・前・I期に比定される。 (亀山)

土壙-161 (図版96・188)

位 置 土壙-155の南東約4mで検出した土壙で、Q17区の北東にあたる橋脚部に位置する。

構 造 北側が調査区外にのびており、全体を把握するに至らなかったが、現状での規模は長さ100cm、幅51cmの長楕円形をなす。検出面からの深さは18cmで、標高343cmを測る底面から壁面が急な傾斜で立ち上がる断面形をもつ。埋土の下層からは、甕や高杯などの土師器がまとまって出土している。

出土遺物 **1857**は短い二重口縁に櫛描沈線をめぐらす甕で、口径15.2cmを測る。なだらかな肩部の外面はハケメで調整し、内面をヘラケズリする。口径14.3cmを測る**1858**は、張りのある肩部から屈折して外反する口縁の端部をつまみあげる。肩部の外面にはナデを施し、内面はヘラケズリで仕上げる。これらの土器は、その特徴から古・前・I期に属するものと思われる。 (亀山)

土壙-162 (図版96)

位 置 Q17区の西側橋脚部で検出した土壙で、竪穴住居-103の西に接している。

構 造 標高356cmを測る上面は、長さ91cm、幅58cmの楕円形を呈する。現状の深さは10cmしかなく、断面は浅い皿形をなす。

出土遺物 埋土から遺物は出土していないため正確な時期は明らかでないが、暗褐色をなす埋土の状況からみて古墳前期に属するものと思われる。 (亀山)

土壙-163 (図版96)

位 置 Q17区の北東隅、竪穴住居-111の南隣りで検出された。

構 造 検出面で長軸約100cm、短軸で74cmを測る楕円形の土壙である。検出面から深さ23cmの位置にある底面の標高は330cmを測る。断面形は皿状になる。

出土遺物 出土遺物は細片で少量であり、詳細な時期判断はできなかった。しかしながら埋土の状況

等を勘察すれば、この土壙の時期は古墳時代初頭と思われる。

(大橋)

土壙-164 (図版96)

位置 土壙-163の南約5mに位置し、竪穴住居-109の南辺に接して検出された。

構造 長さ約80cm、幅約45cmを測る楕円形の土壙である。深さは8cm残っていたにすぎず、断面は浅い皿形を呈する。底面の標高は290cmであった。

出土遺物 出土遺物はほとんどなく、細片のみであった。周囲の竪穴住居の埋土との比較からほぼ同時期と思われ、この土壙の時期を古墳時代初頭ととらえている。

(大橋)

土壙-165 (図版96)

位置 Q17区の北東隅、竪穴住居-106の南に接して検出された。

構造 その大半を竪穴住居-106に壊され、全体の形状・規模は不明である。確認できた範囲では、壁面は二段に掘り込まれている。大きさは100cm以上はあり、方形を呈すると思われる。深さは20cmほどが残存していた。

出土遺物 竪穴住居-106にその大半を壊され、出土遺物はなかった。そのため詳細な時期についての検討はできないが、他遺構との切り合い、および埋土の状態を考慮すれば、この土壙の時期を古墳時代初頭に位置づけることが可能と思われる。

(大橋)

(5) 土 壙 墓

土壙墓-4 (図版97・189・390)

位置 竪穴住居-52の東19mの位置に検出した。

構造 検出面での平面形は隅丸長方形を呈しており、その規模は長さ193cm、幅91cmを測る。上段の平面図は墓壙掘り下げの中間段階のものである。この面において長さ130cm、幅32cmの方形区画を検出した。その区画内の西側に土器がまとまって出土した。粘土等による明確な痕跡は検出されなかったが、状況からして木棺の痕跡である可能性は高く、特に西側の短辺では両側板に小口板が挟まれていたような状況も見られた。これを木棺の痕跡と考えれば内法の全長は130~138cmあったものと思える。下段の平面図は完掘の状況を示したものである。図からも解るように、墓壙は東西の断面図に示すように二段に掘られている。下段の掘りかたはほぼ木棺の大きさにあわせて墓壙の中央に掘りこまれたものである。床面はほぼ水平で、検出面からの深さは61cmを測る。

出土遺物 壺、甕、鉢などの器種が数個体分出土している。1859は壺と考えられるもので、胴部の外面にヘラミガキ、内面は頸部の直下までヘラケズリが施される。1860、1861は甕でやや内傾する口縁部には多条の櫛描沈線が施される。1862、1863は鉢である。何れも器壁が荒れており表面の調整は不明である。土器の時期は古・前・Iと考えられるため、土壙墓も同時期と推定される。

(井上)

(6) 土 器 棺 墓

土器棺墓-7 (図版97・189・390)

位置 O17区の南端中央に位置する竪穴住居-48の北約0.5mで検出したものである。

構造 棺を納める墓壙の掘り方は、長さ55cm、幅51cmの円形を呈する。現状の深さは10cmを測るにすぎないが、土器棺の遺存状況からみれば、本来は30cmを越える深さを有していたものと考えられる。土器棺は、口頸部を打ち欠いた壺を、標高404cmを測る墓壙底に接するようにほぼ水平に据えて

第4章 調査の概要

棺身としている。その主軸はN-26°-Eを指し、北々東に向けて開口する。開口部を覆う遺物は確認できず、有機質の蓋が想定される。棺内には土が充満していたが、人骨や副葬品等は確認できなかった。

出土遺物 1864は棺身に用いられていた壺で、最大径24.3cm、現存高24.4cmを測る。口頸部は埋葬に際して除去されており、径20.1cmの孔が開けられている。球形をなす体部はやや肩が張り、外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げている。この土器棺は、その形態からみて古・前・Ⅱ期に比定される。(亀山)

土器棺墓—8 (図版97・189・390)

位 置 P17区の北側中央付近に位置する。溝-16の西岸に接する状態で、竪穴住居-55の南東隅から1mと近接する。これは、西川調査区で検出された土器棺群と同様、溝の縁辺に占地されているものと思われる。

構 造 墓壙の掘り方は、長さ57cm、幅47cm、深さ28cmのやや楕円形をなすものである。墓壙の底面の標高は388cmである。この墓壙内に、頸部から上を打ち欠いた壺**1865**を開口部を上にして約82°傾け、棺身として据えていた。打ち欠かれた口部径は約15cmと小さい。棺身内からは、歯などは検出できなかった。

出土遺物 棺身として用いられた**1865**の壺は、現存器高約25.0cm、胴部最大径で30.0cmを測る。やや肩の張る丸みを帯びた倒卵形の体部をもち外面はヘラミガキで調整されている。

これから、この土器棺墓の時期は古・前・Ⅰの新相と考えている。

(大橋)

(7) 溝

溝—4 (図版97・98・189~206・347・391~401・417)

位 置 西川調査区の西側で検出した溝-1・2の下流部にあたるもので、O17区の西を南流し、その南西において西に向きを変え、P17区の北西に至る。

構 造 今回報告する長さは70mを測るが、西川調査区からの総延長は170mに達する。弥生時代の溝-3の流路と重複しており、現状の幅は6mにも及ぶが、断面観察の結果では上幅2.7mほどの溝が重複している状況がうかがわれる。古墳時代の溝は、古・新の2つに区分され、それぞれが西川調査区の溝-3・4に対応するものと見られる。検出面からの深さは123~95cmほどで、溝底の標高は北端で300cm、西端で280cmとあまり大きな差は認められない。これはこの溝が、西川調査区の北端から取り入れた水をP17区に広がる水田に供給する、用水としての役割を担っていたことと関係するものとみられ、このことは弥生時代以来、度々掘り直しが行われた様子が認められることから推察される。しかし、堰などの施設は特に検出されておらず、導水がどのように管理されていたのか、現状では判然としない。古墳時代の溝のうち、最終的に機能していた溝の埋土からは、後述するように古・前・Ⅱ期の土器が投棄された状態で多量に出土している。また、その上層では古・中・Ⅱ期の溝が検出されており、この段階では完全に埋没していたものと思われる。同様な状況は下流の水田においてもうかがわれ、古・前・Ⅱ期において集落が縮小、解体すると同時に水田も放棄され、この溝もその機能を終えたものと推定される。

出土遺物 埋土から出土した遺物には、壺・甕・高杯・鉢・器台・手焙形土器など300箱もの土器がある。これらは、溝の切り合いによって古・新の区分されるが、新段階の遺物はその大半を占める。なお、古段階の溝に伴う遺物には弥生時代末にまで遡るものも含まれているが、ここでは溝内遺物

としてのまとまりを考慮し、一括して取り扱うこととしたい。

1869～1896は壺である。1869・1870は、上方にむかって大きく開く口頸部を備えた広口壺で、口径18.8～20.7cmを測る。1869は球形をなす体部の内外面をハケメで調整しており、讃岐などに系譜をもつものである。1871・1872は上方に窄まる頸部から屈折して広がる口縁部をもつ。肩の張る体部は外面をヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。下半に穿孔を施す1872は、胎土に金雲母や角閃石を含む非在地系の土器である。1873は口縁部を欠いているが、直立する頸部と球形の体部からなる。外面にはハケメを施し、内面はヘラケズリののちナデで仕上げる。1874も口頸部を失っているが、タタキ成形する体部の外面をハケメで調整し、内面をヘラケズリとハケメで仕上げる。いずれも非在地系の土器と見られる。口径15.5cm、器高27.5cmを測る1875は、球形の体部から屈曲して外反する口縁部をもつ。外面はハケメののちヘラミガキを施し、内面をヘラケズリで調整する。1876・1877は、肩の張る体部から屈折して開く口縁の端部を上方に拡張する。1877は上方に窄まる頸部から屈折して開く二重口縁をもつ壺である。肩の張る体部の外面はハケメとヘラミガキで調整し、内面にヘラケズリを施す。口径22.0～23.2cmを測る1878・1879は、直立する頸部から水平にのびる口縁の端部を上方に大きく拡張した二重口縁をもつ非在地系の土器である。1880は、直立する二重口縁を備えた壺で、口径13.0cmを測る。張りのある肩部の外面にはヨコハケを施し、内面はヘラケズリで調整する。2149と似通った胎土をもち、中国山間部に系譜の見られる壺である。1881～1883は上方に大きく開く二重口縁と偏球形の体部からなる。口径18.6cmを測る1881は口縁部の内外面や肩部に櫛状工具による波状文を施す。1882・1883は最大径17.0～21.3cmと小形で、体部の外面はハケメないしヘラミガキ、内面はナデかハケメで調整する。いずれも畿内に系譜をもつ土器であり、1881は胎土の観察から播磨西部からの搬入品と推定される。1884～1891は二重口縁をもつ在地の壺である。このうち口径18.4cm、器高31.1cmを測る1887は、やや肩の張る球形をなす体部をもつ。これに対し1891は体部が楕円形を呈し、口径19.8cm、器高37.2cmを測る。いずれも体部の外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げています。1891はこれらと類似した形態をとるが、頸部は長く屈曲し、肩部にはヨコハケを施している。中国山間部からの搬入品である可能性が高い。口径17.4～20.0cm、器高33.0～34.2cmを測る1895・1896は、二重口縁にヨコナデによる凹凸を顕著に残し、頸部以下の外面を細かいハケメで調整する備後系の壺である。

1897～1912はく字形の口縁部をもつ甕である。口径12.7～13.3cm、器高21.1cmを測る1897・1898は内外面をナデで調整する粗製の甕で、粘土紐の接合痕を顕著に残す。1900～1903は外面をハケメ、内面をヘラケズリないしハケメで調整する甕で、口径12.4～12.5cmを測る小形の1900・1901と、口径14.5～15.5cm、器高14.1～16.8cmを測る中形の1902・1903に分けられる。1904～1907はタタキ成形する甕で、口径13.5～15.2cm、器高16.5～21.7cmを測る。体部の上半には右上がりのタタキメを残し、下半をハケメで調整する。また、内面はナデないしハケメで仕上げています。1908～1911は外面をハケメで調整する畿内系の甕である。口径13.6cm、器高17.0cmを測る1908は、張りのある肩部をヨコハケで調整し波状の沈線を飾る。内面はヘラケズリで仕上げており、底部付近にユビオサエを施す。1909・1910は、径14.8～17.3cmを測る口縁の端部を上方につまみあげる庄内甕で、河内からの搬入品である。なだらかな肩部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整している。口径17.8cmを測る1911は、口縁端部を内側に丸く肥厚させており、庄内式でも新しい様相を示す。1913～1967は、二重口縁に櫛描沈線をめぐらす在地の甕である。1917～1923のように倒卵形の体部をもつものもあるが、その

第4章 調査の概要

多くは体部が楕円形ないし球形をなす。体部の外面はハケメで調整したのち線状のヘラミガキを施し、内面は薄くケズリあげる。これらは、口径11.4~13.0cm、最大径15.6~18.2cm、器高11.9~18.6cmを測る小形の1913~1916・1924・1925・1935・1946~1948・1950・1959~1961、口径12.2~15.9cm、最大径17.8~20.6cm、器高20.0~23.2cmを測る中形の1917・1926~1930・1934・1936~1938・1939・1941・1949・1951~1955・1958・1962~1966、口径13.5~16.2cm、最大径19.7~22.5cm、器高22.8~25.0cmを測る大形の1918~1923・1931~1933・1940・1942~1945・1956・1957・1967に分けられる。1968~1977は、ヨコナデで調整する二重口縁を備えた山陰系の甕である。体部は、肩の張る倒卵形をなし、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。また、1968・1971~1974は肩部に二枚貝による波状文を施す。口径12.5~15.3cmを測る小形の1968~1970、口径15.0~17.5cmを測る中形の1971~1976、口径19.3cmを測る大形の1977に分けられる。なお、1977は形態や調整において他と異なり、中国山間部など山陰周辺での製作になるものと推測される。口径23.6~26.6cm、器高36.8cmを測る大形の1978~1980は、二重口縁をもつ在地の甕である。倒卵形をなす体部の外面は、ハケメで調整したのち3段にわけてヘラミガキを施し、内面をヘラケズリで仕上げる。

高杯には1981~2020がある。このうち1981~1994は、椀形の杯部をもつ高杯で、口径11.2~13.7cm、器高7.8~10.3cmを測る。短い柱状部から大きく広がる脚部には3つの透かし孔を穿つ。いずれも内外面をヘラミガキで調整している。口径13.6cm、器高11.4cmを測る1995・1996は、小形で深い杯部と3つの透かし孔を飾る低い脚部からなる。内外面に緻密なヘラミガキを施す。2002は山陰系の高杯で、口径17.2cmを測る杯部は口縁部がわずかに外反する皿形をなす。2003~2006は口径19.4~20.3cm、器高12.9~15.1cmを測り、中空につくられた脚部には3つの透かし孔を穿つ。内外面をヘラミガキで調整している。口径21.0cm、器高13.0cmを測る2007は、浅い杯部を縦にヘラミガキする。4つの透かし孔を飾る脚部は中実ぎみで、杯部に貼りつけて接合する。2008・2009は2段に屈折する杯部をもつ高杯で、口径18.1cm、器高15.2cmを測る。中空につくられた脚部には3つの透かし孔を穿つ。口径19.8cmを測る2010は、杯部が屈折して段をなし、斜めにのびる口縁の端部をわずかに上方へ拡張する。2011・2012は、口縁部がわずかに外反する鉢形をなす杯部をもつ。直線的に開く脚部には2つの透かし孔を飾る。口径16.6cm、器高11.8cmを測り、外面をヘラミガキ、内面をハケメで調整する。脚径18.1~18.6cmを測る2015・2016は、短い柱状部から大きく開く裾部からなり、3つの透かし孔を穿つ。1981~1994のような椀形の杯部をもつものと思われる。2020は、柱状部から緩やかに広がる裾部をもつ。杯部に貼りつけて接合しており、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する山陰系の高杯である。

2022~2024は直線的に広がる口縁部をもつ直口壺である。2022は口径11.1cm、器高16.5cmを測り、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。2023は外面にヘラミガキを施し、外面をハケメで調整する2024は穿孔を施す。口径10.0~11.6cm、器高10.6cmを測る2025・2026は二重口縁をもつ小形壺である。2025は外面にヘラミガキを施し、内面をヘラケズリで調整する山陰系の土器である。2030・2031は小形の丸底壺で、口径8.5~10.0cm、器高7.4cmを測る。2028はこれらと相似した形態をとるが、口径17.6cm、器高14.1cmと大形で、外面をハケメ、内面をヘラケズリする。

2032~2034は半球形の体部から屈折してのびる口縁部をもつ。口径11.2~12.5cm、器高6.3~7.7cmと小形で、外面をハケメないしヘラミガキ、内面をナデで仕上げる。2035~2038はタタキ成形する鉢で、径4.4~5.2cmの小さな脚台を備えている。製塩に用いられた土器である。2041~2048は椀形をな

す鉢である。口径11.9cm、器高4.3cmを測る**2041**は、外面にユビオサエの痕を残す粗製の土器である。**2042**は小さな底部から直線的に開く鉢で、口径12.2cm、器高5.5cmを測る。**2043**～**2044**はやや深い椀形を呈し、底部は小さな平底をなす。口径11.6～13.0cm、器高6.7～8.1cmを測り、内外面をナデないしハケメで調整する。椀形をなす**2045**～**2048**は口径12.5～14.2cm、器高5.0～5.6cmを測り、内外面をナデで調整する。**2051**～**2056**は皿形をなす鉢で、口径14.2～16.9cm、器高4.0～5.7cmを測る**2051**～**2055**と、口径28.0cm、器高7.4cmを測る**2056**とに分けられる。いずれも底部外面をヘラケズリし、内面にヘラミガキを施している。**2058**～**2060**は深い椀形をなす鉢で、内外面をナデで調整した口径12.2～15.2cm、器高7.4cmの**2058**・**2059**と、タタキで成形しヘラミガキを施す口径18.5cm、器高9.8cmの**2060**に分けられる。**2061**～**2067**は外反する口縁部をもつ鉢である。**2065**・**2066**は口径15.3～16.3cm、器高8.8cmを測る小形で、外面をハケメないしナデ、内面をヘラケズリとナデで調整する。中形の**2067**は、口径23.8cm、器高13.4cmを測る。体部の外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキで仕上げる。口径33.8cm、器高15.0cmを測る**2062**は大形の鉢である。外面にはヘラミガキを施し、内面をヘラケズリで調整する。**2063**・**2064**は口径29.0～29.8cmを測る大形の鉢で、器高は19.5～22.3cmと深く、広い平底をもつ。外面は粗いハケメで調整し、内面にヘラミガキを施す。二重口縁をもつ**2068**～**2072**は、口径24.2～30.0cm、器高17.0cmを測る中形の**2069**・**2070**と、口径35.8～37.2cm、器高23.0cmを測る大形の**2068**・**2071**・**2072**に分けられる。いずれも体部の外面をハケメとヘラミガキ、内面をヘラケズリののちナデで調整している。**2073**～**2075**は偏球形の体部をもつ鉢で、短い二重口縁には櫛描沈線をめぐらす。形態や調整など**1913**～**1967**の甕と共通する点が多いが、浅い体部をもつところからここでは鉢に分類した。

2076～**2080**は小形の器台で、口径9.5～10.0cmを測る受け部は、端部が斜めにのびる皿形をなす。直線的に開く脚部は直線的に大きく開き、3～4つの透かし孔を穿つ。**2083**～**2086**は鼓形器台で、口径15.4cm、器高8.7cmを測る小形の**2083**と、口径ないし脚径22.5～25.4cmを測る大形の**2084**～**2086**に分けられる。外面をヨコナデ、内面をヘラケズリで調整し、赤色顔料を塗布する。山陰系の土器であるが、中国山間部で製作された蓋然性が高い。土製支脚には、中空の**2081**と中実の**2082**がある。

手焙形土器**2087**～**2089**のうち、完形の**2087**は、鉢部径16.7cm、器高20.9cmを測る。鉢部は外反する口縁部をもち、皿形をなす底部と体部の間に突帯を貼りつける。鉢部に接合する覆部は、口縁端部を上下に拡張する。鉢部径15.1cmを測る**2089**は、外反する鉢の口縁端部を上方に拡張し、底部に突帯をめぐらす。覆部は上半を失っているが、ヘラキリする口縁端部は角張って終わる。**2088**は覆部の上半と鉢部の下半を欠いている。鉢の口縁部は短い二重口縁をなし、鉢部径14.4cmを測る。覆部は口縁端部を上下に拡張して突帯を飾り、ハケメで調整する外面には羽状のヘラ描文を施す。

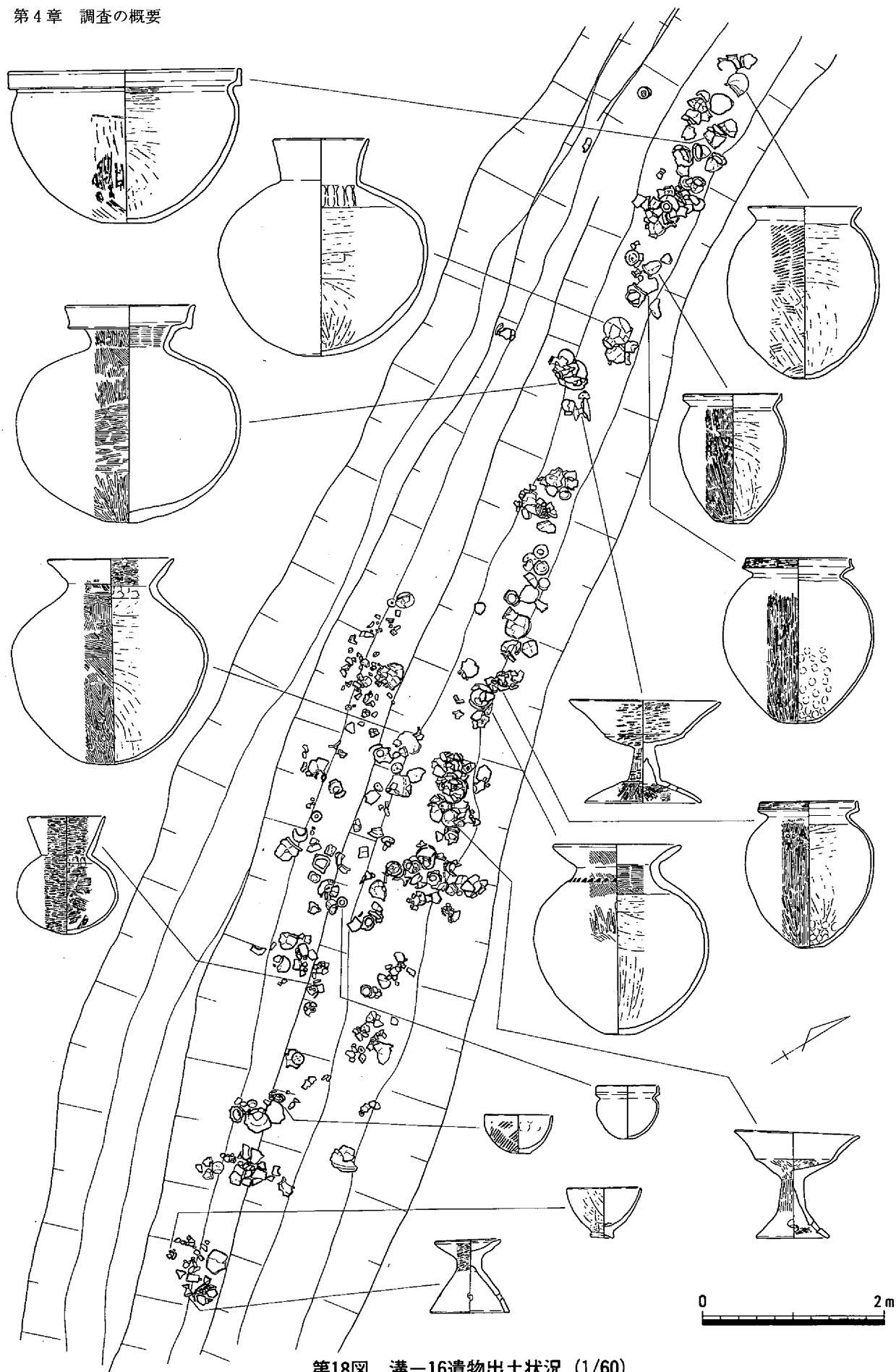
石製品には頁岩製の砥石**S111**・**116**がある。

金属製品には鉄鏃や用途不明の鉄器がある。**M10**・**29**・**30**は柳葉形の鉄鏃で、長さ4cm、重量6gあまりの小形の**M10**と、長さ10cm以上、重量40g前後の大形である**M29**・**30**に分けられる。**M39**は刃部を欠いているが、幅1.2cm、厚さ0.6cmの方頭式の鉄鏃とみられる。長さ9.4cm、幅2.3cmを測る**M84**は方形をなす金具で、上端が短く折れ曲がる。

これらの遺物は、すでに述べたように弥・後・Ⅳ期に遡るものを含むものの、その主体は古・前・Ⅱ期にあり、この溝の廃絶時期を示している。 (亀山)

溝-16 (図版99・207～240・402～421)

位 置 西川調査区の東側で検出された溝-5の下流部にあたり、O17区の北東からP17区の南東



第18図 溝-16遺物出土状況 (1/60)

に向かって緩やかに弧を描きながら走流する。

構 造 検出した溝の長さは95mを測るが、その後の調査で溝の総長は250mにもなり、微高地の南端に達していることが判明している。幅180cm、深さ57cmの流路が2～3条にわたって認められた。これらは違いに切り合いをもち、流路を東に移しながら南に向かって流れている状況がうかがわれた。ところで、この溝の走流方向は河道とみられる溝-12とおおむね一致している。これは、この溝が溝-12の埋没する過程で形成された窪みを流れることによるもので、その窪みが埋没し平坦化する過程で流路を次第に東へ移していったものと思われる。しかし、その溝底は同時期の竪穴住居と比較しても深いとは言えず、水流の形跡に乏しいことからすれば何らかの水路として機能していたとは考えられない。むしろ集落を区画するとともに、一時的に窪地に滞った水を排出する機能をもっていたものと思われる。

出土遺物 溝の埋土からは、壺、甕、高杯、鉢、器台、手焙形土器など、のべ500箱もの土器が出土している。これらは、流路の切り合いによって細分が可能であるが、その間に大きな時期差は認めがたい。ここに図示し得たのはそのごく一部にすぎないが、大略はほぼ網羅し得たものと信じる。

壺は、口縁部片によれば個体を数える。**2090**、**2091**は球形の体部に直立する口頸部をもつ。体部外面はヘラミガキし、内面はヘラケズリする。**2090**は頸部に刺突文をめぐらす。口径12.0cmを測る**2092**は、体部にタタキ成形の痕をとどめ、内面をヘラケズリする。またこの土器は、体部の上半と下半では異なる胎土を用いて製作されている。**2093**は、胎土に角閃石、金雲母を多く含む非在地系土器で、口径13.8cmを測る。体部の外面はハケメで調整し、内面にはユビオサエの痕をとどめる。**2094**は口径14.8cmを測る加飾壺である。平らに収めた口縁端部や頸部に貼り付けた突帯に刻みを施し、張りのある肩部には櫛状工具による波状文を飾る。**2095**は口頸部を欠いている。偏球形をなす体部は分割して成形されており、内外面とも粗いハケメで調整している。**2096**は短く外反する口頸部をもち、口径15.2cmを測る。球形をなす体部はタタキで成形し、内面をナデで調整する。**2097**は口径15.7cmを測り、短く外反する口縁端部は外傾する面をなす。肩の張りは強く、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。**2098**は緩やかに外反する短い口頸部と、倒卵形をなす体部からなる。径12.6cmを測る口頸部は内外をヨコナデで調整し、最大胴径21.7cmの体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで仕上げる。**2099**は短く開く口頸部をもつ壺で、径17.6cmを測る口縁は端部をまるく収めている。肩の張る体部は外面を粗くヘラミガキし、内面をヘラケズリで仕上げる。**2100**、**2101**は球形の体部と短く外方に開く口縁部をもつ。体部の上部は窄まって不明瞭な頸部をなし、**2101**では二枚貝の圧痕を連続して施す。**2102**は、上部が窄まる球形の体部と屈折して広がる口縁をもつ。径19.7cmを測る口縁部は端部をわずかに上方へ拡張し、篋目が残る体部の外面はハケメで調整し、内面は下半のみヘラケズリで調整する。**2103**は、口径19.8cmを測る口縁部が窄まる頸部から屈折して水平に開き、端部を上方に拡張する。最大径を上位にもつ体部は外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリしたのちナデで仕上げる。讃岐系の土器と見られる。**2104**～**2106**は頸部から屈折して開く口縁部となだらかに下る体部をもつ。外面はタタキ成形の**2105**を含めてハケメで調整し、内面は**2104**がナデ、**2105**・**2106**がヘラケズリで仕上げる。**2107**は、筒状をなす頸部から屈曲して斜めに延び、端部をわずかに上方へつまみあげる口縁に至る。やや張りのある体部の外面は粗いハケメにヘラミガキを加え、内面はヘラケズリしたのちハケメで調整する。この地域では系譜の辿れない土器で、讃岐西部に類例が見られる。**2108**は、上方に向かって開く頸部から緩やかに屈曲して水平に伸びる口縁部をもち、口径17.8cmを測

第4章 調査の概要

る。体部はタタキで成形したのち、外面をハケメとヘラミガキで、内面をハケメで調整する。讃岐からの搬入土器と見られる。2109は倒卵形をなす体部と、上方に向かって広がる口頸部をもつ。この地域では類例のない非在地系土器である。2110は体部を失っているが、口径22.0cmを測る口縁部は水平に開き、短い頸部には刻みを施した突帯を貼りつける。2111は2103に似た口頸部をもつが、体部の張りは強く最大胴径は36.9cmある。口径21.9cm、器高36.5cmを測る讃岐系の土器である。2112は口径18.5cm、器高27.5cmを測る広口壺で、直立する頸部から口縁部が外反して延び、その端部は凹面をなす。球形をなす体部は最大径26.0cmを測り、外面をハケメしたのちヘラミガキを加え、内面をヘラケズリで調整する。2113は口縁部を欠いているが、上方に大きく開く口縁部をもった広口壺と見られる。最大径28.5cmを測る体部は球形をなし、その中央には穿孔が施されている。2114は、筒状をなす長い頸部から屈折して水平に開く口縁をもち、口径18.9cmを測る。体部は倒卵形をなし、内外面とも粗いハケメで調整している。金雲母や角閃石を含む胎土をもち、讃岐東部からの搬入品と思われる。2115～2118は、中位に最大径をもつ体部から屈折して短く開く二重口縁をもつ在地の壺である。2115・2116は体部の外面をヘラミガキで、2116・2117はハケメで調整し、内面はいずれもヘラケズリする。2119も類似した形態をとるが、口径20.0cmを測る長く拡張した口縁部には二重の沈線で鋸歯文を描いている。2120・2121は、張りのある体部から屈曲して延びる口縁の端部を上方に拡張して3～4条の沈線をめぐらす。偏球形をなす体部は、外面をハケメにヘラミガキを加え、内面をヘラケズリののちハケメで仕上げている。口径20.2～22.0cm、器高36.0cmを測る非在地系の土器である。口径16.6～19.4cmを測る2122～2128は在地の土器で、上方に窄まる頸部から屈折して開く口縁の端部を斜め上方に拡張した二重口縁をもち、2125では二枚貝の圧痕文を飾っている。倒卵形をなす体部は、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。2129は、短い頸部から屈折して開く口縁の端部を上方に拡張する。肩の張る体部は外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。口径19.4cm、器高35.8cmを測り、備中北部に類例が認められる。2130は、口縁の端部を上方に大きく拡張した二重口縁をもつ壺で、倒卵形をなす体部から窄まる頸部を備えている。体部外面はハケメしたのちヘラミガキを施し、内面をヘラケズリで調整する。口径20.9cm、器高31.2cmを測る。2131は2122～2128と類似した口頸部をもつが、外面を粗いハケメで調整した頸部には櫛状工具による刺突を連続して施す。口径20.4cm、器高36.5cmを測る2132は、窄まる頸部から屈折して開く二重口縁と、偏球形をなす体部をもつ。外面には赤色顔料を塗布しており、備中北部の特色を示している。2133は、直立する頸部から屈曲して開く口縁の端部を上方に拡張した二重口縁をもつ。タタキ成形した体部は倒卵形を呈し、外面をハケメのちヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。口径18.0cm、器高36.1cmを測り、讃岐西部からの搬入が想定される。2134は、長い頸部から屈曲して開く口縁の端部を上方に拡張した二重口縁をもち、口径17.7cm、器高39.0cmを測る。球形をなす体部は最大径36.5cmを測り、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。2135・2136は口縁の端部を上方に大きく拡張した二重口縁で、口径22.2～23.6cmを測る。外面をハケメ、内面をヘラミガキで調整する。口径18.6cm、器高31.6cmを測る2137は、2134と類似した形態をもつが、筒状をなす頸部は短く、最大径32.4cmを測る体部も偏球形となる。外面は粗いハケメで調整したのち底部にヘラミガキを施し、内面はナデで仕上げている。2139・2140は、上方に窄まる頸部から外反する口縁の端部を斜め上方に大きく拡張する二重口縁をもつ。なだらかな肩部をもつ体部は外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。備中南西部から備後南部に見られるものである。2142は、屈曲する長い頸部から上方に

のびる二重口縁をもつ山陰系の土器で、口径17.2cm、器高35.0cmを測る。倒卵形をなす体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。2143～2146は外反する二重口縁をもつ壺である。口径17.1cm、器高33.0cmを測る2143は厚手で、肩部に刺突文を施している。2145は口径19.8cm、器高37.2cmを測り、楕円形をなす体部は外面をハケメのちヘラミガキし、内面をヘラケズリで仕上げる。球形の体部をもつ2146は、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整し、口径20.0cm、器高33.1cmを測る。肩部には棒状工具による刺突文を施す。2147は山陰からの搬入品とみられる壺で、上方に大きく開く二重口縁は径24.0cmを測り、屈曲してのびる長い頸部には楯状工具による刺突文を飾る。2148・2149は直立する頸部から強く外反してのびる二重口縁を備えた、畿内系の壺である。口径23.4cmを測る2148は、内外面ともヘラミガキで調整する。2149は口縁部を欠いているが、タタキ成形する体部の張りは強く、内外面をハケメで調整している。

2150～2224は、く字形の口縁をもつ甕である。このうち2150～2181は、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。口径11.4cmを測る2151は球形をなす体部の外面をヨコハケで調整し、内面を薄くヘラケズリする。灰白色の胎土をもつ非在地系の土器である。2156は、肩の張る体部から屈折して水平に延びる口縁部をもつ甕で、口径13.9cmを測る。2157・2158は、口縁部を水平に引き出した甕で、口径15.5～15.7cmを測り、2158は肩部に楯状工具による刺突を連続して施す。器壁を薄くケズリあげており、他地域からの搬入品と思われる。口径14.8cmを測る2159は、わずかに内湾する口縁の端部を丸く肥厚させた布留甕で、球形をなす体部は外面をハケメしたのちナデを加え、内面をヘラケズリで薄く仕上げている。金雲母、角閃石を含む胎土をもち、河内からの搬入品と思われる。2164～2168は頸部の締まりが弱い深鉢形をなす甕で、口径14.1～18.0cmを測り、2166～2168は口縁端部をわずかに拡張している。2160～2163、2170・2171・2173・2174は口径14.9～18.0cm、器高27.3～28.1cmを測る長胴の甕で、外面の調整は粗く、2162では肩部に刺突文が施される。2172・2175・2176も長い体部をもつが、肩の張りは強く倒卵形をなす。2172・2176は内面をハケメで調整し、2175は肩部に二枚貝による波状文を飾る。2175は、二重口縁をもつ壺1761と共通する胎土や色調を備えており、その間に強いつながりがうかがわれる。2177・2178は深い鉢形をなす。口径12.6cm、器高14.6cmを測る2177は、外面をヘラケズリののちハケメで調整し、内面にナデを施してヘラミガキを加える。口径12.8cm、器高16.7cmを測る2178の調整は粗く、上方にのびる口縁の外面にはユビオサエの痕を残す。2183～2189は内外面をハケメで調整する甕である。2183は、球形をなす体部から斜め上方にのびる口縁部をもつ。口径21.0cm、器高28.0cmを測り、底部内面をユビオサエする。口径14.3～15cm、器高14.3～21cmを測る2184・2185は、楕円形の体部の内外面を粗いハケメで調整する。タタキ成形になる2186・2188・2189の形態は歪つで、内外面の調整はきわめて粗い。口径14.7cm、器高25.2cmを測る2186は2184・2185と類似した形態をとり、底部内面をユビオサエする。肩の張る2188は口径16.0cmを測り、肩部に棒状工具による刺突文が施される。2191～2193は外面をナデ、内面をヘラケズリで調整する甕で、口径15.2～16.9cm、器高21.0～23.3cmを測る。2191・2192の体部は倒卵形をなすのに対し、2193は球形を呈する体部をもつ。2194～2199は体部を粗いタタキで成形する甕で、外面を板ないし革状工具によるナデで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。2194～2196は長胴をもつ甕で、2160～2163、2170・2171・2173・2174と類似した形態をとる。口径17.4cm、器高27.9cmを測る2194は、底部に右上がりのタタキメを残し、肩部に棒状工具による刺突を施す。2197・2198は口径13.9～14.5cm、器高19.4～19.6cmを測り、やや肩の張る体部は右上がりのタタキで成形し、口縁部は斜め上方に短くのび

第4章 調査の概要

る。**2199・2200**は、13.0～13.8cmを測る器高に対して口径が13.8～14.6cmと大きい鉢形を呈する。**2200**の肩部や底部には右上がりの、体部には水平のタタキメをとどめている。**2201～2206**はタタキ成形の甕で、短く引き出された口縁の端部は丸くおさめている。口径14.3cm、器高18.5cmを測る**2201**の体部は球形をなし、底部は尖りぎみにつくる。右上がりのタタキメが残る外面をハケメで調整し、内面を革状工具によるナデで仕上げる。右上がりのタタキで成形した楕円形の体部をもつ**2204**は口径16.0cm、器高25.4cmを測り、外面下半を板状工具によるナデ、内面をヘラケズリで調整する。口径17.0cmを測る**2205**は、灰白色の胎土をもつ播磨からの搬入品である。外反する口縁部は外面にハケメを施し、平行タタキで成形した楕円形の体部は内面を革状工具によるナデで調整する。**2206**は**2204**と類似した形態をもつが、口径12.4cm、器高18.8cmと小形で、体部の内面もハケメで仕上げている。**2207～2223**は、口縁の端部をわずかに上方へつまみあげる甕である。倒卵形をなす体部は上半を水平のタタキ、下半を右上がりのタタキで成形され、外面下半はハケメで調整する。内面はヘラケズリののちナデを加える。底部は径1.8～5.0cmの平底をなす。これらは、口径13.9～14.2cm、最大胴径16.5cm、器高17.1cmを測る**2209・2210**が小形に、口径15.8～17.8cm、最大胴径18.3～21.8cm、器高22.5～24.8cmを測る**2207・2208、2211～2214、2220・2221**が中形、口径21.5～22.2cm、最大胴径27.6～29.5cm、器高32.4cmを測る**2218・2219**が大形に分類される。これらの甕の出自については明らかではないが、肩の張る体部に尖りぎみの底部をもつ**2216**は、胎土に金雲母や角閃石を含み、河内から搬入された庄内甕と見られる。**2225～2308**は、短い二重口縁をもつ在地の甕である。**2225・2227・2228**はヨコナデで仕上げた二重口縁と平底を備えた倒卵形の体部をもつ。外面にはハケメを施し、内面はヘラケズリで調整する。**2226・2231・2232～2234**は、最大胴径に比して口径が広い深鉢形をなし、短く立ち上がる二重口縁には櫛描沈線をめぐらす。これに対し**2229・2230**は頸部が強く括れ、二重になる口縁部には櫛描沈線を飾る。平底をもつ倒卵形の体部は厚手につくられ、外面をハケメののちヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。**2235～2242**は、わずかに内傾する二重口縁に擬凹線を飾る甕で、倒卵形をなす体部の外面はハケメのみで調整する**2237・2238**と、ヘラミガキを加える**2235・2236・2240～2242**とがある。二重口縁に櫛描沈線をめぐらす甕**2243～2308**は、口径11.7～13.0cm、最大胴径15.8～16.3cm、器高10.9～15.4cmを測る小形**2290～2292**、口径12.0～15.0cm、最大胴径17.0～20.8cm、器高19.1～26.7cmを測る中形**2243～2251、2255～2261、2266～2273、2277～2281、2283～2284、2288・2289・2293**、口径14.2～16.2cm、最大胴径20.3～23.3cm、器高22.9～26.1cmを測る大形**2252～2254、2262～2265、2274～2276、2282・2285～2287、2294～2307**に分けられる。これらは、体部の外面をハケメで調整したのち、上半と下半に分けてヘラミガキを施す。内面はヘラケズリで調整し、底部付近をユビオサエする。底部は不明瞭な平底ないし尖りぎみの丸底をなし、穿孔を行うものも認められた。また、肩部にヘラないし棒状の工具による刺突文を有する個体が多く見られた。**2309**は、長い二重口縁に沈線をめぐらす甕で、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する体部は尖り底をもつ。加賀南部からの搬入品と思われる。**2310**は口径26.2cm、器高37.0cmを測る大形の甕で、大きく外反する二重口縁と、楕円形をなす体部からなる。なだらかな肩部はハケメで調整し、下半にはヘラミガキを施す。**2311～2320**は椀形の杯部をもつ高杯である。**2314**は口径9.6cmを測る手捏ね土器で、水平に延びる脚裾部を欠いている。**2311～2313、2315**は、口径9.9～12.0cmを測る杯部に短い脚部をもつ。口径12.3～13.4cmを測る**2316・2317**は、短い柱状部から屈折して開く裾部に4つの透かし孔を穿つ。**2318**は、内湾する口縁部と体部との間に鈍い稜をなす。短い脚部は杯部に差し込んで接合しており、内外

面を緻密なヘラミガキで調整する。2319・2320は浅い椀形をなす杯部で、口径19.2~20.2cmを測る。差し込んで接合した脚部は脱落している。2321~2324は口径16.4~18.7cmを測る高杯で、口縁部が斜め上方に延びる深い杯部と、短い柱状部をもつ脚部からなる。杯部は密にヘラミガキし、4つの透かし孔を穿つ脚部はハケメで調整する。2325~2327は口径20.4~22.4cmを測る深い杯部の内外面をヘラミガキで調整し、4つの透かし孔を飾る脚部の外面にヘラミガキを施す。2330・2331は、短い柱状部から屈折して大きく広がる裾部に3つの透かし孔を穿つ脚部で、椀形の杯部を有していたものと思われる。口径14.4~18.8cmを測る2332~2335の杯部は、浅い体部から外反して延びる口縁部をもち、内外面をヘラミガキで調整する。柱状部は中実ぎみにつくられ、屈折して開く裾部には4つの透かし孔を飾る。口径18.0~21.2cmを測る2336~2347の杯部は、平坦な体部から屈折して立ち上がり上方に大きく開く口縁部をもつ。また、中実ぎみにつくられた柱状部は杯部に差し込んで接合され、大きく広がる裾部には4つの透かし孔を穿つ。2348~2358は浅い杯部をもつ高杯で、口径18.1~20.7cmを測る。広く平坦な体部から外反して開く口縁部をもつ。柱状部は中実ぎみで、裾部には4つの透かし孔を飾る。

2359~2363は、口縁部が大きく開く浅い杯部をもち、その口径は21.8~25.7cmと器高に比して大きい。脚部は、中実ぎみの柱状部から屈折して広がる裾部に4つの透かし孔を飾る。杯部はタタキで成形し、内外面をハケメのちヘラミガキで調整している。胎土には粗砂を多く含んでいる。2364は口径16.7cmを測り、上方に開く口縁部が浅い体部とわずかに段をなす。杯部の外面は、口縁部をヘラミガキ、体部をヘラケズリで調整する。口径18.0cm、器高13.7cmを測る2365は、開きの弱い脚裾部に3つの透かし孔を飾る。2367・2368は中実の柱状部をもつ高杯で、外反して斜め上方にのびる口縁部は内外面を縦にヘラミガキし、わずかに内湾する裾部には4つの透かし孔を穿つ。胎土は比較的粗く、口径20.6~21.5cm、器高14.4~17.3cmを測る。2369・2370は口縁部が体部から直線的にのびる杯部をもち、脚部は長い柱状部とわずかに広がる裾部からなる。口径17.8~18.8cm、器高15.8cmで、内外面をヘラミガキで調整し、脚径9.9cmを測る裾部には4つの透かし孔を飾る。2371・2372も直線的に開く杯部をもつ高杯で、口径18.7~19.3cm、器高11.8~13.5cmを測る。脚部は、中実ぎみの柱状部から裾部が大きく開き、4つの透かし孔を穿っている。胎土には粗砂を多く含み、内外面ともヨコナデないしナデで粗く調整している。2373~2375は底部から直立した口縁部が屈折して大きく開く杯部をもつ。口径19.9cm、器高12.6cmを測る2374は杯部の内外面をヘラミガキで調整し、4つの透かし孔を穿つ脚裾部はハケメで仕上げる。2375は、径22.4cmを測る口縁の端部をわずかに上方に拡張し2条の沈線めぐらす。内外面をヘラミガキで調整し、中実ぎみの長い柱状部から屈折して広がる裾部には4つの透かし孔を飾る。2376~2379は二段に屈折する杯部をもつ。深い杯部をもつ2377は口径17.0cm、器高13.2cmを測り、水平に広がる脚裾部には4つの透かし孔を穿つ。2378は脚裾部に4つの透かし孔を飾る完形で、口径18.4cm、器高15.0cmを測る。2380・2381は口径5.4~11.6cmを測る小形の高杯で、口縁部が斜め上方に長くのびる深い杯部と、短い柱状部から屈折して大きく開く脚部をもつ。内外面をヘラミガキで調整している。口径9.5cmを測る2382は、口頸部が長く直立する深い杯部をもつ。2383~2385は湾曲する体部から内湾ぎみにのびる口頸部をもつ脚付杯で、外面にはヘラミガキを施す。口頸部の長い2383・2385と、短い2384に分けられる。2387~2390は口縁部が短く外反する壺である。2387は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整するが、2388~2390は内外面ともナデで仕上げている。2391~2394は直線的にのびる口縁部と球形の体部をもつ直口壺である。口径9.0cmを測る2391は直立する口縁部の外面をヘラミガキで調整する。2392~2394は口径9.2~11.4cm、器高17.0~17.2cmを

測り、外面をヘラミガキで調整し、内面にハケメを施す。口径10.0cm、器高18.0cmを測る**2395**は、内傾する口頸部と倒卵形をなす体部をもつ。外面はヘラケズリで調整し、内面にはナデを施す。**2396**は、半球形の体部から斜め上方に開く口縁部をもつ小形丸底壺である。口径10.9cm、器高10.2cmを測り、体部をタタキで成形している。**2397**～**2400**は二重口縁をもつ壺である。口径9.8cm、器高11.2cmを測る**2397**は、体部外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。**2398**・**2399**は外面に緻密なヘラミガキを施しており、**2399**には赤色顔料が認められた。

2401～**2402**は口径11.1～12.4cmを測る小形の鉢で、丸みをもった底部から直線的に開く口縁部をもつ。外面をハケメで粗く調整し、内面にヘラミガキを施す。口径13.6～14.9cmを測る**2404**～**2406**も類似した形態をとるが、**2405**・**2406**では突出した平底を備えている。**2406**はタタキで成形されている。**2408**～**2413**は直線的に開く鉢部に低い台を付けたもので、口径10.8～13.8cm、器高5.8～10.2cmを測る。外面はナデ、内面はヘラミガキで調整するものが多い。口径12.9cm、器高10.2cmを測る**2413**は、底部に径9.4cmの脚台を備えた鉢である。鉢部の外面はハケメで調整し、内面はナデで仕上げている。**2414**～**2430**は椀形をなす鉢である。タタキ成形になる**2414**・**2415**のうち、尖底をもつ**2415**は胎土に金雲母や角閃石を含むところから搬入品と見られる。口径15.9～19.5cm、器高6.4～6.9cmを測る**2417**・**2418**は、底部付近をヘラケズリしたのちハケメやヘラミガキで調整する。**2419**・**2420**は口径16.6～17.2cm、器高7.0～7.6cmを測る。外面をハケメで調整し、内面をハケメないしナデで仕上げている。**2421**～**2426**は底部外面をヘラケズリしたのち、内外面をナデで仕上げしており、口径12.0～13.5cm、器高6.0～7.0cmを測る。深い椀形をなす**2427**～**2430**は、口径12.8～14.2cm、器高6.9～8.6cmを測る。**2427**・**2430**は直立する口縁部は体部との間に稜をなし、**2428**は体部と口縁部の境に凹線をめぐらす。また、**2428**・**2429**が内外面をヘラミガキで調整するのに対し、**2427**・**2430**はハケメないし革状工具によるナデで粗く仕上げている。**2431**～**2448**は口縁部が外反する小形の鉢である。**2431**～**2433**、**2435**は口縁の外反が弱く、口径15.2～16.3cm、器高7.7～8.9cmを測る。外面をハケメで調整し、内面にヘラミガキを施す。口径17.6～18.0cm、器高6.0cmを測る**2434**は浅い体部をもつ鉢で、外面をヘラミガキ、内面をナデで調整する。**2437**・**2438**は深い体部をもち、底部は不明瞭な平底をなす。口径12.8～13.0cm、器高11.1cmを測り、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。**2439**～**2443**は口縁部が強く外反してのびる鉢で、口径14.2～14.7cm、器高8.0～8.2cmを測る**2439**・**2440**と、口径16.6～19.8cm、器高9.1～10.6cmの**2442**・**2443**、口径17.2cm、器高11.1cmを測る**2441**に分けられる。これらの多くは外面をハケメで調整し、内面をナデで仕上げている。**2444**・**2445**は、球形の体部に外反する口縁部をもつ小形の鉢で、口径10.6～11.0cm、器高7.4～9.0cmを測り、内外面をヘラミガキで調整している。口径8.3cm、器高5.7cmを測る**2447**・**2448**は、丸みを帯びた体部から屈曲して直立する口縁部をもつ。**2449**～**2452**・**2475**は浅い体部から外反する口縁部をもつ中形の鉢で、口径25.2～34.8cm、器高14.0～20.5cmを測る。**2449**・**2450**は内外面をヘラミガキで調整するのに対し、タタキ成形になる**2452**は内外面をハケメで仕上げている。また、**2451**は内外面をハケメで調整したのち、底部外面や内面をヘラケズリする。口径17.8cmを測る**2465**は、偏球形の体部から屈折して延びる口縁部をもち、その端部をわずかに上方へつまみあげる。体部はタタキで成形され、内外面をハケメとヘラミガキで調整する。底部を欠いているが、**2538**と同様の脚台を有していたものと思われる。浅い体部に外反する口縁部をもつ**2453**・**2454**・**2459**は、口径40.2cm、器高24.0～27.5cmを測る大形の鉢である。**2453**・**2454**はタタキで成形されており、**2453**の体部には内側からの穿孔が認められる。これらは外面をハケメ、内面をヘ

ラミガキで調整している。**2455～2458**は深い体部をもつ鉢で、口径19.0～22.8cm、器高15.5～18.5cmを測り、外面はナデ、内面はヘラケズリで粗く調整する。**2455・2458**では外反する口縁の端部に面をなし、**2458**の底部はヘラケズリにより凹底をなす。**2460～2474**は二重口縁をもつ鉢である。口径26.8～34.5cm、器高22.5cmを測る**2460～2462・2467**は、浅い体部から屈曲して延びる二重口縁をもち、**2460・2462**では多条の沈線をめぐらす。外面をハケメで調整し、内面をヘラケズリないしヘラミガキで仕上げている。**2463**は口径41.4cm、器高24.0cmを測る大形の鉢で、体部から外反して短く立ち上がる二重口縁をもつ。内外面ともハケメのちヘラミガキで調整する。**2472**は、大きく外反する二重口縁をもつ鉢で、口径36.8cmを測る。肩の張りは強く、外面をハケメ、内面をヘラケズリする。口径40.8～40.9cmを測る**2473・2474**は、二重口縁をもつ大形の鉢で、浅い体部は屈折する肩部から直線的に窄まり平底に至る。外面をハケメ、内面をヘラケズリしたのちヘラミガキを施しており、備中南部から備後南部に系譜をもつ土器である。**2464・2468～2471**は深い体部をもつ鉢で、口径18.3cm、器高18.6cmを測る中形の**2468**と、口径9.4～14.6cm、器高7.6～15.2cmを測る小形の**2464、2469～2471**に分けられ、**2464**の二重口縁には沈線をめぐらしている。これらは体部の外面をハケメないし革状工具によるナデで調整し、内面をヘラケズリで仕上げている。

2476・2477は小さな脚台を備えた深鉢形の土器で、口径9.4～10.7cm、器高15.0～15.5cmを測る。鉢部はタタキで成形されており、内面は丁寧にナデで仕上げている。製塩土器に特有の形態を備えているが、**2477**では口縁部が外反する点でやや異なる。また、火を受けた痕跡はなく、実際に製塩に使用されたものとは考えにくい。

2478～2485は小形の器台である。**2478**は中実の柱状部の上下を引き出して受け部と裾部をつくり出したもので、受け部径7.5cm、脚径9.0cm、器高8.5cmを測る。内外面ともナデで調整する。**2479・2483・2485**は、浅い受け部と中実ぎみの柱状部から広がる裾部をもつ。受け部径は9.3～10.6cmで端部は角張って面をなし、径10.0～13.3cmを測る脚部の裾には4～5つの透かし孔を穿つ。**2482・2484**は、径8.6～9.7cmを測る受け部に比して3～4つの透かし孔を飾る脚部の開きは弱く、器高も10.7～11.0cmと高い。**2480・2481**は皿状をなす受け部と、直線的に広がる脚部からなる。口径8.2～9.4cm、脚径10.3～11.3cm、器高8.6～9.1cmを測り、脚部には4つの透かし孔を穿つ。**2486**は受け部を欠いているが、大きく開く脚部と一体につくられている。4つの透かしを飾る脚部の径は11.6cmを測る。**2487**は鼓形の器台で、口径19.6cm、器高13.4cm、脚径18.2cmを測る。山陰に系譜をもつ土器であるが、搬入品であるかどうか明らかでない。

2488・2489は手焙形土器である。**2488**は鉢部径14.2cm、器高16.0cmを測る完形で、外反する鉢部の口縁に半球形をなす覆部を接合して形作っている。覆部の口縁端部を内外に拡張し、全面をナデで調整している。**2489**は、径20.2cmを測る鉢部の口縁に接合して形作った高さ11.8cmの半球形をなす覆部で、鉢部を欠いている。口縁端部は内側に拡張され、外面をハケメ、内面をナデで調整する。

金属製品には7点の鉄鏃がある。**M8・11・15・25・28**は小形の柳葉鏃で、長さ4.0～5.0cm、重量5～7gを測る。**M32**は狭長な身部をもった鉄鏃で、全長8.8cm、重量10g以上の大形のものである。**M35**は頭部が尖った圭頭鏃で、基部を失っているものの、全長5.0cm、重量5g前後に復元される。

これらの遺物のなかには弥・後・IV期まで遡るものも含まれるが、その多くは古・前・I期に属するものと思われ、比較的短期間のうちに廃絶したものと推定される。 (亀山)

溝-17 (図版99・241～246・421～425)

位 置 O17区の南西で検出した溝で、溝-16の中央から分岐して北西にのびている。

構 造 検出長は20mで、溝-4より西については確認できなかった。溝底には流水による凹凸が認められ、断面観察からも複数の流路が重複している様子が看取された。したがって現状の幅は350cmを測るものの、実際に機能していた溝の幅は190cmあまりと推定される。溝底は北西に向かって下っており、その深さは最大で34cmを測る。これは溝-16の走流方向とは異なるが、その西端が溝-4と交錯している状況からすれば、むしろ微高地中央の窪地に滞った水を溝-4に向けて排出する機能をもっていたものと考えられる。しかし、この溝から出土した遺物には後述するように大きな時期差は認められず、比較的短期間のうちに埋積したものと推定される。

出土遺物 溝内からは数箇所に集中する状況で、壺、甕、高杯、鉢、器台などの土器が多数出土している。

2490~2494は口頸部が直線的に延びる直口壺である。口径15.3cmを測る2490は短く直立する口頸部の内外面をハケメで調整し、強く張る肩部の外面をハケメ、内面をナデで仕上げる。2491は、長い口頸部が上方に向かってわずかに開き、口径19.2cmを測る。なだらかな肩部は外面をヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリする。2493は、直線的に延びる口頸部と偏球形をなす体部からなる畿内系の土器である。口径14.8cm、器高23.5cmを測り、体部の内外面をハケメで調整する。2494は口径13.0cmを測る長い口頸部をもつ。球形をなす体部は、上半に緻密なヘラミガキを施し、下半をヘラケズリして仕上げる。2492・2495~2499は口縁部が上方へ大きく開く広口壺である。2492は中程に最大径をもつ体部の外面をハケメののちヘラミガキし、内面をナデで調整する。口径17.0cmを測る2495は、外反して広がる口頸部をもつ。体部は最大径23.8cmを測り、外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をナデで仕上げる。2492・2495とも非在地系の土器である。2496は、緩やかに外反する口頸部をヘラミガキで調整し、なだらかな肩部の外面をハケメののちヘラミガキし、内面をヘラケズリで調整する。2497は短く外反する口縁の端部をわずかに上方に拡張し、頸部に突帯を貼りつけて半截竹管による押圧を加える。外面はハケメ、内面はナデで調整した非在地系の土器である。口径17.0cmを測る2498は、直立する頸部から屈折して水平にのびる口縁をもち、その端部はわずかに上方へつまみあげる。なだらかな肩をもつ体部は外面をハケメ、内面をナデで調整しており、讃岐に系譜をもつ土器である。2499は屈曲する頸部から上方へ広がる口縁部をもつ。径14.6cmを測る口縁の端部は凹面をなし、張りのある肩部は外面をハケメで調整し、内面をナデで仕上げる。2500~2509は二重口縁をもつ壺である。2500は口縁部を失っているが、内傾する頸部から上方に大きく開く二重口縁を備えていたものと思われる。肩の張る体部は最大径29.3cmを測り、ヘラミガキで調整する外面から径3cmほどの円孔が穿たれている。2501~2503は直立する頸部から屈折して上方に大きく開く二重口縁をもつ壺で、讃岐系の土器と見られるものである。2501は口縁部を欠いているが、球形をなす体部は内外面をハケメで調整する。2502は、口径22.5cm、器高39.9cmを測り、倒卵形を呈する体部の外面をハケメののちヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリとナデで仕上げる。頸部にはハ字形の線刻が認められた。口径20.9cm、器高34.5cmを測る2503の形態は歪つで、内外面の調整も粗い。肩の張る体部の外面はヘラミガキを施しているが、内面は下半をわずかにヘラケズリするのみで粘土紐の接合痕を顕著に残す。2504~2508は、屈曲する頸部から斜め上方にのびる二重口縁をもつ在地の壺である。2504・2505・2508の体部は肩の張る倒卵形をなすが、2507は楕円形に復元される。口径は20.2cmを測り、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。2509は口径20.4cm、器高43.0cmを測る大形の壺で、二重になる口縁部には板

状工具による沈線をめぐらす。外面には赤色顔料を塗布しており、備中北部の土器と思われる。

2510～2517はく字形の口縁部をもつ甕である。口径10.5cm、器高13.0cmを測る2510は、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、肩の張る体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。2511は、径18.6cmを測る口縁の端部をわずかにつまみあげる。なだらかな体部の器壁は厚く、外面をヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。2512は口縁端部を欠いているがほぼ全形を知り得る。倒卵形をなす体部は外面をハケメで調整するが、内面は上半をハケメ、下半をヘラケズリで仕上げる。褐色をなす胎土には角閃石や金雲母を含み、讃岐東部からの搬入品とみられる。口径14.3cmを測る2513は、右上がりの粗いタタキで成形し、内面をナデで調整する。2514・2515は口縁部が水平に短くのびる甕である。口径14.2cmを測る2514は、体部の外面をハケメで粗く調整し、内面をヘラケズリする。タタキ成形する2515は口径16.8cmを測り、外面をハケメ、内面をヘラケズリにハケメを加えている。2516・2517は、口縁端部をわずかに上方へ拡張するもので、倒卵形をなす体部は上半を水平、下半を右上がりのタタキで成形したのち、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。2516は口径14.1cm、器高14.9cmを測る小形、2517は口径17.0cm、器高20.8cmを測る中形に属する。2518～2521は二重になる口縁部に多条の櫛描沈線を飾る在地の甕である。肩の張る体部は倒卵形をなし、外面にはハケメのちヘラミガキを施し、内面はヘラケズリする。口径13.2cmを測る2518は小形、口径14.1～15.5cm、器高24.1cmを測る2519～2521は中形に分類される。

2522・2523は、口径19.8～19.9cmを測る杯部と短い柱状部をもつ低い脚部からなる。内外面をヘラミガキで調整し、大きく開く裾部には5つの透かし孔を飾る。口径19.0cm、器高13.8cmを測る2524は、斜め上方にのびる口縁の外面を横、内面を縦にヘラミガキする。短い脚柱部は中実ぎみに作り、大きく広がる裾部には4つの透かし孔を穿つ。2525～2529は口縁部が斜め上方に大きく開き、浅い杯部をつくる。脚部は中実ぎみにつくられた長い柱状部から屈折して広がる裾部をもつ。杯部は口縁をハケメ、底部をヘラケズリしたのち、ヘラミガキを施す。脚部は、柱状部を面取りし、裾部にハケメを施して、ヘラミガキを加え、4つの透かし孔を穿つ。溝-16の2359～2363に類似する。口径20.7cm、器高14.6cmを測る2530は杯部に段をもち、内外面をヘラミガキで調整する。脚部には3つの透かし孔を飾り、外面をヘラミガキで仕上げる。杯部が二段に屈折する2531・2532は口径19.9cmを測り、内外面をナデないしヘラミガキで調整する。

2533は、ほぼ完形で出土した手焙形土器で、鉢部径15.8cm、器高17.4cmを測る。鉢部は外反する口縁部をもち、丸みをもった底部の外面をヘラケズリし、内面に革状工具によるナデを施す。覆部は口縁部をわずかに上方に拡張し、外面をハケメ、内面をナデで調整する。2536は小形の壺で、口径12.4cm、器高7.9cmを測る。口縁部は斜めにのび、浅い体部は尖底をもつ。内外面ともハケメのちヘラミガキで調整する。胎土には金雲母、角閃石を含み、他地域からの搬入品と見られる。口径10.5cm、器高9.8cmを測る小形器台2537は、皿形の受け部と直線的に開く脚部をもつ。受け部の端は斜め上方にのび、脚部には3つの透かし孔を飾る。

2534・2535・2538～2544は鉢である。2534は口径12.4cm、器高3.8cmの椀形をなす小形の鉢で、直立する口縁部は体部との間に段をなす。口径11.6cm、器高8.8cmを測る2535は、浅い体部から屈折して口縁部が短く直立する。外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整し、丸い底部には穿孔が認められる。2538～2542はく字形の口縁部をもつ鉢である。2538は、偏球形をなす体部から斜め上方にのびる口縁部をもち、その端部はわずかに上方に拡張する。底部には低い脚台を備えており、口径17.8cm、

第4章 調査の概要

器高21.0cm、脚径13.9cmを測る。外面はハケメののちヘラミガキで調整し、内面はヘラケズリにナデを加えて仕上げているが、2465との類似からタタキで成形された可能性がある。2540は、浅い体部から屈折して外反する口縁部をもつ。口径25.3cmを測り、内外面を粗いハケメで調整する。口径32.2cm、器高18.6cmを測る2541は、広い平底をもつ体部と斜めに短くのびる口縁部からなり、内外面をナデで粗く調整している。2539・2542は、小さな平底をもつ体部から屈曲して外反する口縁部を備えており、端部が角張る2542は内外面をハケメとヘラミガキで調整し、2539はヘラケズリののちハケメで仕上げる。口径36.4cm、器高23.6cmを測る2539は大形、口径28.8cm、器高20.4cmの2542は小形に分類される。2543・2544は径25.5～27.2cmの二重口縁をもつ鉢で、偏球形をなす体部の張りは強く、外面をハケメ、内面をヘラケズリののちナデで調整する。

これらの土器は、溝-16のものと同形態・調整において類似し、おおむね古・前・I期の範疇におさまるものと思われる。 (亀山)

溝-18・19 (図版99・247)

位置 これらの溝は、調査区の北西部に位置しており、竪穴住居-116の東側に検出された。

構造 溝は幅約165cm、深さ約20cmを測り、暗灰色砂質土が堆積していた。堆積土などから溝-18・19は同時期と考えられる。この溝は、部分的にしか検出されていないものの、北東方向から流走した2本の溝(溝-18・19)に分かれる。溝-18は南南東、溝-19は南南西方向に流れる。

出土遺物 溝からは5世紀中頃から7世紀前半の須恵器が少量出土している。 (中野)

溝-20

位置 竪穴住居-117と竪穴住居-118の間に両者を結ぶような位置に検出した。

構造 検出した溝は直線的に延びるもので断面形は椀形を呈しており、幅は約60cm、検出面からの深さは20cmを測る。溝は全長約16mを調査した。北東端部で竪穴住居-118と重複するが、溝が新しい。

出土遺物 時期を確定できるような遺物は出土していないが、竪穴住居-118より新しく、古代の溝である溝-27より古いことから古墳時代後期に属するものと考えられる。 (井上)

溝-21

位置 竪穴住居-117の北東約6mの位置に溝-20と直行する位置に検出した。

構造 検出した溝は少し弓状に曲がるもので、断面形は皿状に窪むものである。溝の規模は幅約60cm、深さ33cmを測る。溝は全長約10mを調査した。溝-20と重複するが、この溝が古い。

出土遺物 図示できるものではないが若干の土師器が出土しており溝-16の遺物よりも新しいものと考えられる。また、溝-20よりも古いことから古墳時代中期に属すると考えられる。 (井上)

溝-22

位置 竪穴住居-121の南約2mの位置に検出した。

構造 調査区の境に検出したため一部のみの調査となった。全長約2mを調査したもので、断面形は浅い皿形を呈している。溝の規模は幅約40cm、深さ約5cmを測る。

出土遺物 調査範囲が少ないこともあってほとんど遺物は出土していないが、調査した状況からして古墳時代に属するものと考えられる。 (井上)

溝-23 (図版99・247)

位置 竪穴住居-119と重複する位置に竪穴住居を切る状態で検出した。

構 造 検出した溝は直線的に延びるもので断面形はU字状を呈している。溝の規模は幅60～90cm、検出面からの深さ20cmを測る。溝は一部途切れるが全長約16mを調査した。

出土遺物 溝からは須恵器の杯身が出土している。底は浅く偏平で、たちあがりが高く端部は内傾して段をもつもので、古・中・Iに属するものと考えられ、溝の時期はそれと同時期かそれよりも新しいものと考えられる。

溝-18、溝-21、溝-23は途切れ途切れに調査したが互いに似る点もあり、本来は一本の溝であった可能性も考えられる。 (井上)

溝-24 (図版99)

位 置 P17区の南西隅に位置し、ある時期に微高地の周縁付近をめぐっていた可能性が考えられる溝である。

構 造 地形に沿う格好でP16東端中央付近にて東西に分かれて下降しており、溝の幅27～70cm、深さ15～40cm、溝底の海拔高は347～364cmを測り、凹凸が認められる比較的小規模なものである。

出土遺物 溝埋土の暗茶灰色粘質土中から須恵器の壺の口縁部2707が出土しており、形態・手法等から5世紀末から6世紀初頭に比定できる。 (高畑)

溝-25

位 置 P17の区南西隅に位置し、溝-24の約250cm西側に並行する溝状の遺構である。

構 造 約13cmの大溝内落ちこみ状部分にのみ認められる溝であり、残存長12.5m、幅25～50cm、深さ6～23cm、溝底は347～363cmを測り、溝-24に比べて凹凸が少ない。南北両端が大溝の両岸に向かい、溝が消失している状態である。

出土遺物 埋土中は無遺物であるが、溝の方向、形状等から溝-24を前後する時期が想定できる。 (高畑)

溝-26 (図版99)

位 置 Q17区の南東部に位置し、北東から南西方向にのびる溝である。

構 造 検出された長さは約11m、幅は約0.8mである。この溝の北東端は古代の溝-27に切られている。溝-26はQ17南端部付近で溝-24とほぼ直角にまじわり、溝-24とともに何らかの区画を形成していた可能性が高い。

出土遺物 溝内から少量の土師器片および土錘片が出土した。しかし、溝の年代を直接示すものはみられなかった。この溝の年代については溝-26が溝-27によって削平されている点および溝-24との関係から古墳時代後期と推定した。 (金田)

(8) 水田

水田 (図版100・247～257・348・426～429)

位 置 P17区にあり、17ラインに沿って東側を南流する幅約10mの溝である。約200m上流に微高地北辺を西流する河道があり、そこより微高地中央を南流する幹線水路が設けられている。その取水口から南に下降するにしたがい溝の幅が少しずつ広くなり、P17北西隅のあたりで分岐し、南西と南東方向に流れる。

構 造 南東に流れる溝は幅10m、深さ約95cmを測り、最下層中央部分に幅20cm～55cmの小溝が4条認められる。海拔275cmの溝底から上位30cm間に幅2～4cmの明褐色系の粘質土が間層をもって4

面(第2、4、6、9層)認められ、水平堆積状況を呈する。その4面上位の淡茶灰色粘土(第1層)を含め、植物珪酸体分析結果では明褐色系の粘質土4面からイネ科の葉身機動細胞珪酸体が発見されている。この層相は津寺遺跡地内において検出されている畦畔を伴う水田土層と同様の形状を呈しており、下流から大溝の分岐点すぐ南側まで水田として機能をしていたことが理解できる。古墳時代前期の水田、およびそれ以前の水田遺構の可能性が指摘できる。

出土遺物 水田上層の淡茶灰色粘土層中には古墳時代前期の土器片等の遺物が左岸の微高地から多く投げ込まれており、幅50cmの帯状に堆積している。同層中(第1層)から刀子一点が出土している。それらの約1m西側に5世紀末を中心とする須恵器、土師器、製塩土器、鉄滓、焼土面等が出土している。これらの遺物には若干のレベル差が認められるが、300×400cmの範囲内に比較的まとまって分布している。これらの遺物が溝の埋没過程に放棄されたものか、あるいは遺構に伴うものかが明確にし得なかった。出土遺物には、壺2547～2587・2628～2638、甕2588～2612・2694～2698、高杯2613～2627、鉢2637～2675・2681・2682・2690～2692、鼓形器台2676～2680、土製支脚2683～2685、小形器台2686～2689、手焙形土器2693などの土師器のほか、杯2699～2702、高杯2703～2706、甕2707などの須恵器がみられる。特に土師器では各器種のなかに多様な形態や特徴を有するものが多く、在地産の土器はもちろん、他地域からの搬入品や模倣品が存在していることは確かなところである。細かく型式を提示しながら報告すべきだが、確実に他地域との比較において合致しないものも多く、また胎土分析による所見から在地・非在地の峻別が困難なことから、ここではそれぞれの土器を大まかに捉えて説明をしていく。

2547～2551は基本的に頸部が直線的にのびて開口する壺である。2547の外面肩部には櫛描沈線による鋸歯文が見られる。2549は球形の体部に外面にはタタキ成形ののちハケメ、ヘラミガキを施し、内面には板状工具によるナデを行っている。系譜的には畿内の第五様式から繋がる壺と考えられる。2550は胴部上半に胴部最大径をもつもので、下半には焼成後と思われる内面からの穿孔が1ヵ所認められる。2551は口縁端部が外に屈曲しており、外面にはハケメののちヘラミガキを行っている。2552は頸部から口縁部にかけての稜線が不明瞭であるものの、二重口縁を呈する大形品である。器壁はかなり厚手で、調整は平行なタタキ成形ののちハケメをしている。当地域で見られる二重口縁の壺とは出自を異にするものと思われる。

2553～2559は基本的に頸部が外弯気味に立ち上がる形態の壺である。2553の外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを行う。2554は頸部の立ち上がりやや外反しており、外面はタタキメを残し、内面はユビナデを行っている。

2555～2560は頸部が比較的ゆるく外反する壺であり、基本的にハケメ調整が内外面の口頸部付近に及んでいる。このことは前述した2549の特徴と類似しているといえる。口縁部は多様であり、2555はやや内弯し2556はやや外弯している。また2557は端部を肥厚させ、2559は面取りし端面に沈線状の凹みをもつ。2558もこれらの土器の特徴を有しているが、器壁がかなり厚い。

2561は肩部に胴部最大径を有するいわゆる長頸壺の一種であると思われる。口縁部形態が欠損のために不明であるが、底部も平底の形状を残しており、弥生時代後期あたりに比定されるものとも考えられる。

2562～2568は口頸部が発達し、口縁部が大きく外反する壺である。これらの土器も2555～2560と同様にハケメ調整するものが多い。口頸部は2562・2565・2567のように内傾気味に立ち上がるものや

2563・2564・2566・2568のように外傾気味になるものに分かれる。口縁部も2563・2566のようにほぼ水平方向にのびるものや2564・2565・2567のように外上方に開口するものや2568のようにS字状になるものがみられる。これらは讃岐、播磨周辺を出自とする非在地系土器と考えられる。

2569～2576は厚手で比較的大形の壺であり、いずれも複合口縁を有するものである。2569は直行する口頸部に大きく屈曲する口縁に上方に拡張した端部を有するものであり、外面にハケメを施している。2570は内傾する口頸部に上外方にのびる口縁に上方に拡張した端部を有するものであり、頸部には刻目を施した貼付突帯が認められる。このことから西部瀬戸内地域周辺を出自とするものと思われる。2571～2574はゆるく内弯気味に立ち上がる口頸部に上方に拡張した端部を有する。2571・2572の口縁端部外面には強いヨコナデを行っており、2571の外面はヘラミガキ、2572はハケメを施している。2575は長頸壺の形態を呈し、外弯する口縁部をもつ。口頸部にはヘラミガキを散漫に行い、内面にはハケメをする。

2576は口縁部下を肥厚させ、外見上複合口縁ともみえるものになっている。拡張した口縁外面にはハケメ状工具で波状文を施している。2577は丸い肩部からやや直行気味に立ち上がる口頸部に広く開口する口縁部を有する土器で、内外面にはハケメ調整が施されており、前述の2562～2568との関わりが問題となる。

2578は球形の体部に細めの直行する口頸部に、2576同様口縁部下を肥厚させたものである。外面には胴部に細いヘラミガキを密に行い、内面は口頸部にヘラミガキ、口縁部にハケメを施している。この土器は非在地系土器と思われる、播磨周辺を出自とすると思われる。2579は精良な胎土をもつ。口縁部竹管文と円形浮文を施しており、内面調整はヘラミガキである。畿内周辺の影響をもつものと思われる。2580はほぼ球形の体部に細く短い頸部をもつもので外面には細かいヘラミガキを施す。これらは畿内周辺の影響をもつ壺と思われる。

2581～2587はそれぞれ複合口縁を有する大形の壺の一群である。形態的には2583・2585のように肩部付近に胴部最大径をもつものが主体と思われるが、2587のように肩部の張りが見られないものもある。複合口縁部を見ると2581・2583のようにやや厚手で短く直線的に立ち上がるものや逆に2585・2586のように薄手で長く外弯気味に開くものなどがみられ、これらの差異は時期差から生じていると思われる。基本的に調整は外面にはハケメのちヘラミガキを、内面はヘラケズリに下半を中心に指頭圧痕を行っている。2585には在地の甕にみられるような米粒状の刺突文が横方向に現状において2個施されている。

2628～2630は直口壺の一群であり、外面と内面頸部には横方向の細かいヘラミガキを施している。2630の外面の口縁端部には一条の沈線がめぐっている。

次に甕の概要について報告する。2588は肩部に胴部最大径をもち、短くく字形に外反する口縁部にゆるい段をもつ端部を有する形態である。外面はヘラミガキをし、内面は体部上位に指頭圧痕が見られる。胎土には角閃石・雲母等を含んでおり、その色調からいわゆる讃岐系の甕であると認められる。2589・2590はほぼ長胴気味の体部にく字形に外反する口縁部を有するものである。外面はそれぞれハケメを用い、2589は極めて細かい条線をもつものである。内面はヘラケズリである。2591はほぼ球形の体部に屈曲する口縁部を有するもので、端部は外方につまみだす。外面は細かなハケメを用い、内面はヘラケズリである。これらの形態や調整から非在地系土器の可能性が高いと考えられる。

2592～2600は基本的に外面にタタキメを残す一群の土器である。2592・2593は小形で、ほぼ球形の

体部にく字形に長く外反する口縁部を有するものである。**2592**は外面にタタキ成形のちハケメを、**2593**はハケメののちヘラミガキを行っており、内面にはヘラケズリをしている。器壁は比較的薄手である。

2594は体部中央付近に器高とほぼ同じ長さの最大胴径をもつ形態で、短くく字形に屈曲する口縁部を有し、端部はやや強めのヨコナデで段をもつようにみえる。調整は外面を右上がりのタタキ成形の後ハケメを行い、体部中位付近をユビナデで成形状況を消したようになっている。内面はまずユビナデで成形したのちヘラケズリを施しており、下半には指頭圧痕が認められる。器壁はヘラケズリを内面に用いているものの比較的厚手である。**2595**は長胴で下膨れの形態であり、口縁部は短く内弯気味に外方に立ち上がる。調整は外面を右上がりのタタキで成形した後ユビナデをし、体部下位ヘラミガキを施している。内面はヘラケズリを行っているが、**2594**同様に器壁は厚手である。**2596**は肩部に丸みをもつ長胴気味の体部からゆるく外反する口縁部をもち、端部はつまみ上げたような形状を呈する。調整は外面にはやや細かな左上がりのタタキメをし、内面はヘラミガキを行う。**2597**は短く外弯する口縁部をもつ長胴の体部を有し、外面には右上がり大きく粗いタタキ成形ののち下半にハケメを施している。内面には胴部中位付近で収まるヘラケズリに口縁部や胴部上半にハケメを行っている。**2598**は短く外上方に立ち上がる口縁部をもち、破片ながらほぼ球形に近い体部を有すと思われ、外面にはほぼ横方向の細かなタタキ成形、内面はヘラケズリを施している。器壁はヘラケズリによりかなり削り込んでいるようで薄手である。**2599・2600**は**2594～2598**と比較すると大形である。**2599**は広くく字形に開口する口縁部にやや下膨れ気味の球形を呈し、外面には右上がりの細かいタタキ成形を、内面はヘラケズリを行っている。**2600**は大きく屈曲し内弯気味に立ち上がる口縁部にやや球形気味の形態をもち、外面はほぼ横方向の細かなタタキ成形ののちハケメをし、内面はヘラケズリと口縁部にハケメを施している。器壁は薄手である。以上、**2592～2600**の甕についてはその形態や調整から非在地系土器の可能性を想起させる。さらに言えば、タタキ成形を主たる外面調整に用いる畿内周辺や瀬戸内沿岸部周辺を出自としているとも考えられる。しかし胎土分析の所見や他地域の土器の形態の比較から当地での製作も否定できず、現在の状況ではある特定地域を限定することは困難であると思える。

2601・2602は短く立ち上がる口縁部をもつものであり、調整は外面にハケメ、内面はヘラケズリを行う。器壁はやや厚手で、弥生時代後期末にさかのぼるものと思われる。

2603～2611は吉備甕と呼ばれている一群の土器であり、短く立ち上がる口縁部に6～9条程度の楕円沈線を描く線を描くものである。器壁は薄手で、調整は外面にハケメのちにヘラミガキ、内面はヘラケズリを行いその下半には指頭圧痕が認められる。なお調整の省略化についてはほとんどないと思われる。また外面の肩部には1～3個程度の米粒状の刺突文を多様に施している。形態は口縁部がやや内傾もしくは直立しており、体部は胴部最大径がまだ肩部付近にあり倒卵形を呈するともいえるもののやや胴部下半にも膨らみをもち、中にはほぼ球形に近いものも見られる。また底部の丸底化も漸移ながら進んでいるものが多く認められた。一方、**2608・2609**のような大形品とともに**2603**のような小形品も存在し、そこから土器の機能差が窺える。

2612は大形で球形の体部に内傾して立ち上がる二重口縁をもつものであり、端部は面取り気味に外方に屈曲する。調整は外面にハケメ、内面はヘラケズリを用いている。この地域ではあまり見られないものであり、出自が判然としないものの非在地系土器と考えられる。

2694～2698は短くく字形に外反する口縁部をもつもので、口縁端部は丸く留めている。基本的に外

面にはハケメ、内面にはヘラケズリを施している。また形態的には長胴化が見られはじめている。**2697**は成形時の接合痕が明瞭に認められる。これらの甕は後述する須恵器の時期にほぼ比定されるものと思われる。

続いて高杯について説明する。**2613**は丸い杯部から直行気味に立ち上がる口縁部をもつものである。弥生時代の最終末からその出自が認められる**2614**～**2617**は、椀状の形態をもつ杯部に短脚を有し脚裾部は広く八字形に開きそれぞれ3個の円孔を穿つ。**2618**～**2624**は大きく上方に立ち上がる口縁部を有する杯部を有し、**2618**は短脚、**2619**・**2620**・**2623**・**2624**はそれぞれ長脚をもつものである。そのうち脚裾部を残すものにはそれぞれ4個の円孔を穿つ。杯部や脚部外面には基本的に細かなヘラミガキ調整を施しているが、**2623**の杯部内面のハケメや**2622**の杯部外面のタタキメのように成形段階に用いたと思われる調整が認められるものもある。**2625**・**2626**は前述の大きく上方に立ち上がる杯部をもつものと類似するものの、杯部が若干深く、立ち上がりの中位付近にゆるい段を有している。調整はそれぞれ細かなヘラミガキを行っている。**2627**は杯部が段状に屈曲して外上方にのびるもので、こちらも細かなヘラミガキを行っている。

鉢はその形態に多様性が認められ、またその法量にも差異が見られる。これはそれぞれの時間的な変化はもちろん、出自と用途の違いがここから窺える。ここでは小形品から順に説明していく。

小形の鉢としては**2631**～**2661**・**2681**・**2682**・**2690**～**2692**などが挙げられる。これらは二重口縁を有しており、特に**2632**は口縁部が外方に長く伸びている。なお口縁部外面には櫛描沈線などの施文は行っていない。体部は**2631**はやや長胴形、**2632**・**2633**は胴部最大径がやや中位上方にもちながらもほぼ球形に近い。**2632**にはハケメ、**2633**は粗いヘラミガキがそれぞれの外面に認められる。山陰もしくは美作などの岡山県北部に出自をもつ非在地系土器と思われる。

2634～**2636**・**2639**は鉢として取り扱ったが、小形壺の一種とみなし得るものも含んでいる。球形または**2633**・**2639**のようにやや中位上に胴部最大径をもつ体部に逆八字形に開口する口縁部を有する形態をもち、そのうち**2635**は高台風の平底を有している。基本的に外面にはヘラミガキを施している。**2637**・**2638**は若干下膨れ気味の体部に、く字形に短く屈曲する口縁をもつものである。**2638**はやや尖り底である。**2638**の外面と口縁内面にはハケメを行っている。**2640**～**2644**は平底または平底気味な底部からゆるく外弯して立ち上がり、く字形に短く屈曲する口縁をもつものである。ただしこれらの一群が同一の系譜にまともなるものであるとは考えにくい。**2645**は平底でやや外弯気味で外上方に立ち上がるもので、あまり見られない形態である。内外面とも細かいヘラミガキを行っている。

2646～**2657**は口径と比較して器高が高い椀状の形態や同じく器高が低い皿状の形態を呈するものである。漸移的であるが椀状の形態から皿状の形態へ器高が徐々に浅くなっていくと考えられる。椀状の形態のうち**2646**・**2647**のような小形品と**2648**・**2649**・**2657**のような大形品とが存在している。基本的に内外面の調整はハケメのちヘラミガキを施しているが、**2654**・**2655**のように外面に成形時のヘラケズリを残すものも認められ、このような調整は後出のものである。

2658～**2661**は台付鉢である。**2658**は深い杯状の鉢部にやや内傾気味に直立する口縁部をもつもので、底径の小さい円盤状の底部をもつ。内外面ともハケメ調整を用いている。**2659**はやや厚手で粗雑な造りであり、外面鉢部下半にタタキメを残しのちヘラミガキを施している。**2660**は鈍い橙色を呈したいへん薄手に造り上げており、調整は内外面ともに横方向の細かいヘラミガキを密に行っている。**2659**・**2660**ともに八字形に開く高台をもつ。**2661**は椀形態の高杯に類似する。

2681・2682はいずれも手捏ね土器である。2690～2692は外面にタタキメを残し器壁がたいへん薄いもので、製塩土器と考えられているものである。これらは後述する須恵器の時期に比定されると思われる。このほかの小形の鉢のなかにも、時期的に須恵器出現期以降のものも含まれていると思われるが、峻別することは難しく、ここでは主に形態の差異による説明に留めた。

2665～2669は中形の鉢である。2665は幅広の円盤状の底部をもち深鉢形の形態をもつもので、器壁は厚い。内外面はユビナデにより整えている。これに似たものは岡山市田益遺跡で出土しているが、あまり類例のない土器である。2666は球形、2667は内弯気味に立ち上がる体部に短くやや上外反する口縁部をもつもので、外面調整はともにユビナデを用いている。2668は平底で体部は外反して立ち上がり肩部で屈曲し短く外方に開く口縁部をもつものであり、形態的には甕に分類できるものとも思われる。外面に右上がりの粗いタタキで成形をし、のちハケメを行っている。内面にはハケメを施している。2669は砲弾形の体部に小さな底部を有するもので、焼成前に穿孔を1ヵ所行っている。2668・2669は畿内周辺に出自をもつ非在地系土器と思われる。

大形の鉢には2662～2644・2670～2675などが出土している。2662～2664は肩部付近に胴部最大径をもつ球形の体部に短く字形に屈曲する口縁部をもつ形態を呈するもので、器壁が比較的厚い。また2664にはわずかながらに底部が認められる。内面の最終調整にはヘラミガキなどが用いられている。2670・2671は肩部からく字形に屈曲して上外方に立ち上がる口縁部に短く内傾する端部をもつもので、二重口縁の萌芽が窺える。内面にはヘラケズリが見られる。ただし、ここでは出土状況から2662～2644・2670・2671を共伴遺物として取り扱ったが、改めてこれらの土器の特徴をみると本来は弥生時代までさかのぼるものもここに存在していると考えている。

2672～2675は発達した複合口縁を有するもので、それぞれ外面にはハケメのちヘラミガキ、内面はヘラケズリの調整を施している。口縁部の拡張に比して器壁の厚さも薄手となる傾向を示す。

鼓形器台2676～2680は非在地系土器と思われるが、2676～2678の受部・脚台部の内面に、明瞭な接合痕が見られるなど全体的に造りが粗雑の感を受け、山陰からの搬入品と考えるよりも備中北部あたりで製作されたものと思われる。なお2676・2678～2680には赤色顔料が塗布されている。

土製支脚は3個体確認された。2683は棒状の粘土を互いに接合し三つの突起をもつもので、そのうちの一つを欠損している。2684・2685は中空の体部から粘土の貼り付けによる三つの突起をもつもので、前者は3本とも欠損するものの、後者は完形品である。いずれも全面に成形時の指圧痕を残している。出自については不明であるが、津寺遺跡周辺での報告例も多くないことから非在地系土器とも考えられる。特に煮沸行為と関係する土製支脚は当地域の土器組成からしても異質であり、他遺構からも数点出土していることからすれば、土器自体の移動はもとより生活様式の異なる他地域からの人の動きを想起させる。

小形器台2686～2688は脚部に円孔4個がみられ、2687は1ヵ所未貫通である。また2689は現状において脚部に円孔6個が認められ、他のものと異なる。また2688・2689には逆ハ字形に開く口縁部を有し、脚柱部は棒状工具により貫通させたように中空となっている。2686にも接合部にすき間がみられる。

手焙形土器2693は破片のため図上にて復元している。鉢部は低い円盤状の底部から膨らみをもった体部にゆるくく字形に外反する口縁部をもち、そこに覆部を張り付けた造りをもっている。また底部と口縁部には突帯をめぐらしている。

最後に主に水田廃棄後の堆積に包含されていったと考えられる須恵器について説明する。杯蓋2699・2700は天井部は丸みをもち1/2前後の回転ヘラケズリを行っている。稜はやや鈍くなっており、口縁端部には凹状の内傾する明瞭な段を有する。杯身2701・2702は杯蓋同様に底部に丸みをもち、1/2前後の回転ヘラケズリを行っている。受け部端部は内傾する面を呈している。また、2702の断面をみると、杯底部部に受け部を接合している。有蓋高杯2703・2704および2705は基本的に杯蓋の成形と同様である。2705・2706のハ字形に開く脚部に方形の透し孔をもち、後者の端部には段をもつ。2707は大形品であり、体部からゆるく外反する頸部に口縁端部は肥厚気味に丸くおさめ、内外面には浅く鈍い凹面をもつ。また体部外面には平行タタキのちカキメ、内面は同心円タタキメを行う。

以上これまで見てきた土器の一群から、水田および水田廃絶の後の凹みに包含した遺物は、一部弥生時代後期あたりまでさかのぼると考えられるものを含むものの、おおむね古・前・Ⅰ～古・中・Ⅱの範疇で捉えられそうである。しかしながら、このなかには古・前・Ⅲ～古・中・Ⅰの遺物は含まれておらず、水田経営とその廃絶そして微高地化の流れのなかに確実に断絶する時期が存在したと思われる。また水田経営を行っている段階でこれだけの多量な土器が破棄されたとは考えにくく、このことは微高地上の堅穴住居の変遷とともに考慮すべき点である。

このことから微高地の開析部を利用したこの水田は、古・前・Ⅰ～古・前・Ⅱの間は機能したものと考えられ、加えて弥・中・Ⅲの時期と考えられる溝-3が、溝-4同様にこの水田の用水路として機能を早くから担っていたと考えられるならば、その上限はさらにさかのぼることとなる。

(高畑・澤山)

(9) その他の遺構・遺物

その他の遺構・遺物 (図版258～267・348・430)

掘り下げを行っている段階で、古墳時代に属する多数の遺物が出土している。その多くは、溝-4・16・17や水田を検出する過程で出土しており、本来はこれらに伴うものと思われるが、ここでは包含層の遺物として一括して取り扱う。

2708～2712は口縁部が直線的にのびる壺である。口径10.2cmを測る2708は、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。2710は径19.6cmを測る口頸部が内湾してのびる。外面にヘラミガキを施し、内面をヘラケズリする。2712は径15.4cmを測る口縁端部にユビオサエの痕を残し、なだらかな体部の上半をハケメ、下半をヘラケズリで調整する非在地系の土器である。口径16.8～19.9cmを測る2713・2714は、肩の張る体部から短く外反する口縁部をもつ。2713は外面をハケメのちヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整し、2714は外面に粗いタタキメを残すものの、内面はヘラケズリで仕上げている。2713は溝-16に伴う可能性が高い。2715～2720は、筒状をなす頸部から屈折ないし屈曲してのびる口縁部を備えており、口径は15.3～18.6cmを測る。内外面をハケメで調整する四国系の土器で、2715・2718は溝-17に、2717・2720は溝-16に伴うものと思われる。口径18.4～18.8cmを測る2721～2724は、上方に窄まる頸部から屈折して開く口縁部をもつ。体部は倒卵形をなし、外面にハケメのちヘラミガキを施し、内面をヘラケズリする。2721・2724は溝-16、2723は溝-17に伴うものと見られる。2725～2727は球形の体部から短く屈折してのびる口縁部をもつ壺で、口径21.0cm、最大径33.8cmを測る大形の2726や、口径18.8cmを測る中形の2727では端部を上方に拡張して沈線をめぐらす。外面をハケメ、内面をヘラケズリで仕上げている。口径17.6cm、最大径30.0cmを測る2728は、短く直

第4章 調査の概要

立する頸部から屈折して水平にのびる口縁部をもつ。体部は肩の張りが強く、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。**2729**は短く屈折した口縁の端部を上方に拡張するもので、口径16.5cm、最大径27.5cmを測る。溝-16に伴うものと思われる。口径16.2cm、最大径25.6cmを測る**2730**は、上方に窄まる頸部から短く立ち上がる二重口縁をもつ。体部はハケメののちヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。**2731**は直立する頸部から内傾ぎみに立ち上がる二重口縁をもつ壺で、**1878・1879**と類似し、口径17.2cmを測る。張りのある肩部はタタキ成形ののちハケメで仕上げる。胎土に金雲母や角閃石を含み、讃岐からの搬入品と見られる。**2732**は、短く直立する頸部から屈折して水平にのびる口縁の端部を上方に拡張した二重口縁をもち、口径22.4cmを測る非在地系の土器である。**2733**は直立する二重口縁をもつ壺で、灰白色の胎土に赤色顔料を塗布する備中北部ないし美作西部の土器である。溝-17に伴うものと思われる。**2734**は、口径16.5cmを測る二重口縁にヨコナデによる凹凸を残し、体部の外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する備後系の土器である。溝-16に伴う可能性が高い。口径16.9cmを測る**2736**は、直立する頸部から上方に大きく開く二重口縁をハケメで粗く調整する。備中北部に類例の見られる土器で、溝-16に伴うものと思われる。**2737**は筒状の頸部と大きく開く口縁部からなる。口径は22.4cmで、頸部の内外面をハケメで調整する。**2738・2739**は**2737**と類似した形態をとるが、口縁部の外面には櫛状工具による波状文を描き、竹管による刺突を施した円形浮文を貼りつける畿内系の壺である。**2740~2742**は、上方に窄まる頸部から屈折して広がる二重口縁を備えており、**2742**には楯や鋸歯文をヘラ描きする。口径は18.4cmで、体部の外面をハケメないしヘラミガキで粗く調整し、内面をヘラケズリで仕上げる在地の土器である。口径18.0cmを測る**2743**は、長く屈曲する頸部から上方へ大きく開く二重口縁をもつ山陰系の壺で、体部の外面にはハケメを施し、内面はヘラケズリで調整する。**2744~2748**は口縁端部を斜めに大きく拡張した二重口縁をもつ在地の壺で、口径14.6~21.4cm、器高36.7cmを測る。張りのある体部はハケメののちヘラミガキで調整し、内面はヘラケズリで仕上げる。

2751~2763はく字形の口縁をもつ甕である。口径14.9~15.8cmを測る**2753・2754**は、外面をナデで粗く調整し、内面をヘラケズリで仕上げる。**2754**は溝-16に伴うものと思われる。径15.2cmの口縁部が水平にのびる**2755**は、タタキ成形する体部の外面をナデで調整し、内面は下半のみヘラケズリする。金雲母や角閃石を含む褐色の胎土を有し、讃岐東部からの搬入品と思われる。**2756・2757**は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する甕で、口径13.6~15.2cmを測る。このうち**2757**は畿内からの搬入品とみられる。**2758~2762**は右上がりのタタキで成形する甕で、肩部は水平のタタキを施したのちハケメで調整する。また内面は、ヘラケズリののちナデで仕上げている。外反する口縁は、端部を尖りぎみにおさめる**2758**と上方につまみ上げる**2759~2762**があり、これらは口径14.3cmを測る小形の**2759・2760**、口径16.8cmを測る中形の**2768**、口径18.0~18.4cmを測る大形の**2761・2762**に分けられる。このうち**2759・2761・2762**は溝-16に、**2760**は溝-17に伴う可能性が高い。**2764~2781**は二重口縁に擬凹線ないし櫛描沈線をめぐらす在地の甕である。口径11.3~13.1cm、器高18.9cmを測る**2766・2767・2769~2772**は小形、口径12.4~14.2cm、器高22.7cmを測る**2765・2775~2777**は中形、口径13.8~16.8cmを測る**2764・2768・2773・2774・2778~2781**は大形に分類される。体部が倒卵形をなす**2764~2768・2773・2774**は古く、楕円形ないし球形をなす**2772・2775~2781**は新しい様相を示す。いずれも外面にはハケメののちヘラミガキを施し、内面はヘラケズリで調整する。**2764・2766・2779**は溝-17に、**2767・2768・2774・2780**は溝-16に属するものと推定される。

2782・2783は椀形の杯部と低い脚部からなる高杯で、口径10.0cm、器高7.8cmを測る。外面はヘラミガキで調整し、器裾部に3つの透かし孔を穿つ。口径13.7cm、器高10.3cmを測る2784は、底部から屈折して口縁部が斜め上方にのびる小形の杯部をもつ。短い柱状部から大きく開く裾部には3つの透かし孔を飾る。2790は、2371・2372と類似したもので、口径19.3cmを測る口縁の端部はわずかに上方へ屈曲する。内外面ともナデで粗く調整する。

2799～2802は口頸部が直線的にのびる直口壺である。このうち2801は、直立する口頸部と偏球形をなす体部からなる小形の壺で、口径5.6cm、器高12.7cmを測る。外面を縦にヘラミガキしており、四国に系譜をもつ土器と考えられる。

2805は溝-16の上層で出土した蓋とみられる粗製の土器で、径12.5cmの皿形をなす中央にはつまみを貼りつける。

鉢には2803～2840がある。2803・2804は偏球形の体部から口縁部が短く直立する鉢で、口径12.0～13.2cmを測る。外面はハケメないしヘラミガキで調整し、内面はヘラケズリののちナデで仕上げる。2806～2809は深い鉢形を呈するもので、本来甕として扱うべきものであるが、頸部の括れは弱く、ここでは鉢に含めて説明する。2806～2807は深い体部から口縁部が外反し、外面をナデないしヘラケズリ、内面をハケメまたヘラケズリで調整する。口径10.6cm、器高10.0cmを測る2806に比べ、口径12.5～16.8cm、器高12.5～16.4cmを測る2807・2808はやや大きい。2809は口径11.8cmを測り、2806～2808と類似した形態をとるが、体部には張りがあり、口縁端部をつまみ上げる。外面にはタタキメを残し、内面をヘラケズリののちナデを施す。2810～2817は椀形をなす小形の鉢である。口径10.1cm、器高5.3cmを測る2810は口縁部がわずかに外反し、外面にユビオサエによる凹凸を残す。口径11.0～14.2cm、器高4.8～6.2cmを測る2811～2817は、底部外面をヘラケズリし、内面をナデで調整するものが多い。2810・2811・2814・2815は溝-16に、2813は溝-4に伴うものと思われる。2818～2822は皿形をなす鉢で、口径14.8～17.1cm、器高4.8～5.6cmを測る。底部外面にはヘラケズリを施し、内面はヘラミガキで調整する。2823は小さな脚台を備えた製塩土器で、外面にはタタキメを残し、内面はナデで仕上げている。口径14.3～17.2cm、器高6.0cmを測る2824～2826は山陰系の土器で、皿形の鉢に小さな脚台を貼りつけている。外面をハケメないしナデで調整し、内面にはヘラミガキを施す。いずれも溝-4に伴うものと思われる。2827は径15.1cmを測る口径に比して、8.2cmと深い器高をもつ鉢である。内外面とも粗いナデで調整している。2828～2830は小さな平底から直線的に開く小形の鉢で、口径11.8～14.4cm、器高7.1～8.0cmを測る。2831・2836・2837は口縁部が外反してのびる鉢である。2831は口径11.8cm、器高7.6cmを測る小形で、外面をナデ、内面をハケメで調整する。口径13.5cm、器高13.7cmを測る2836は中形の鉢で、やや深い体部は外面にヘラミガキを施し、内面をヘラケズリののちナデで仕上げる。2837は口径34.8cmを測る大形で、タタキ成形ののち内外面をハケメで調整する。2832・2833・2835・2838は、外反する口縁の端部を上方に拡張する。口径13.2～13.5cm、器高8.0～8.9cmを測る小形の2832・2833は、内外面をハケメないしヘラミガキで仕上げている。中形の2834は口径10.0cm、器高9.2cmを測り、外面をハケメ、内面をヘラミガキで調整する。2838は口径33.6cmを測る大形で、外面をハケメ、内面をナデで仕上げる。二重口縁をもつ2839・2840は、口径37.5～40.4cmを測る大形の鉢で、体部の外面にハケメを施し、内面をヘラケズリとハケメで調整する。

2841～2844は小形の器台である。2841は、径10.5cmを測る皿形の受け部をもち、中空の脚柱部には3つの透かし孔を穿つ。受け部径6.7～8.3cm、器高8.6～8.9cmを測る2842・2843は、浅い皿形を呈す

第4章 調査の概要

る受け部の端が角張り面をなす。脚部は直線的に広がり、4つの透かし孔を飾る。内外面をハケメないしヘラミガキで調整する。**2844**は、受け部の端を斜めに引き出すもので、直線的に広がる脚部には3つの透かし孔を穿つ。受け部径9.3cm、器高8.6cmを測る。**2845**は**2844**と似通った受け部をもつが、脚部は中空の柱状部から屈曲して広がる形態をとる。灰白色の胎土をもつ山陰東部からの搬入品である。**2846**は受け部径15.0cm、器高9.4cmを測る鼓形器台で、ヘラミガキで調整する外面には赤色顔料を塗布する中国山間部の土器である。

2847・2848は中空の土製支脚で、3つの突起をもつ。**2847**はタタキ成形し、**2848**はナデで調整する。

2849・2850は手焙形土器の覆部で、鉢部を失っている。いずれも口縁端部を上下に拡張しており、**2850**では内外面にハケメを施して調整する。

2851～2854は古墳時代中期の土師器である。**2851**は、底部に開けた円孔の周りに3つの半月孔を配した甑で、口径25.9cm、器高26.5cmを測る。内外面をハケメで調整したのち、側面に1対の取手を貼りつける。**2852**は口縁部が上方にのびる鉢で口径12.6cm、器高13.2cmを測る。外面はナデで調整し、内面はヘラケズリで仕上げる。く字形の口縁部をもつ**2853**は口径14.4cm、器高16.7cmを測る甕で、外面に粗いハケメを施し、内面をヘラケズリで調整する。**2854**は高杯の脚部で、中空につくられた柱状部と屈折して広がる短い裾部からなる。

2855～2858は古墳時代中～後期に属する須恵器である。**2855**は有蓋壺の口縁部で、口径11.0cmを測る。立ち上がりは長く直立し、頸部の外面には櫛状工具による波状文を飾る。**2856**は広口壺で、径22.0cmを測る口縁の端部は肥厚して稜をなす。口径12.0cm、器高4.5cmを測る蓋**2857**は、天井部との間に鋭い稜をなす。**2858**は口径11.6cm、器高5.0cmを測る杯で、立ち上がりはやや内傾し、ヘラケズリする底部は尖りぎみにつくる。
(亀山)

第4節 古代の遺構・遺物

(1) 概 要

奈良時代の遺構は、溝-27~35を検出するにとどまり、前代に比べて遺構数は極端に少なくなる。調査区の東端を南北に並走する溝-27、28は、方形の区画を構成していたことが明らかとなっている。その性格については明らかではないが、これらの溝が築地の側溝とみられるところから、官衙にかかわる遺構と考えられる。後世の削平を考慮すれば、現時点での状況が旧状を正しく反映しているとは断言できないものの、当該期における遺構数の減少はむしろこうした公的施設の占地に起因するものとみてよい。また、溝-29~35が耕作にかかわる遺構とみられることからすれば、この周辺は空地として耕作に利用されていたものと考えられる。(亀山)

(2) 溝

溝-27 (図版101・102・268・349・431)

位 置 O17区からP17区の東端で検出した溝で、溝-28の約4m西を南北に並走する。
構 造 上幅は0.7~2.3mと一定ではないが、主軸はN-2°-Eと真北をさし、ほぼ直線的に延びる。その検出長は110mで、北端は調査区外に続くが、南端は直角に折れ曲がって東に延びる様相を示す。溝の深さは20~30cmと幅があるが、底面の標高はおおむね南に向けて低くなる傾向を示す。下幅0.4~1.5mを測る溝底には不連続に掘りこまれた土壌状の凹みが認められた。これは長さ1.5~4.5m、幅1~1.5m、深さ9~12cmの不整楕円形を呈しているが、その間隔には規則性はみられない。埋土は暗褐色を呈するが、とくに北側では上層に灰褐色土の堆積が認められ、中世においてもなおこの溝が完全に埋没していなかったことがうかがわれる。

出土遺物 溝内から出土した遺物には土師器、須恵器などのほか、瓦や鉄器がある。土師器は杯や高杯などが出土した。2889は高杯の脚部で、面取りした外面には丹塗りを施す。2890~2893は須恵器で、杯とすり鉢がある。2890は口径12.0cm、器高4.2cmを測る無台の杯で、完形で出土した。口縁部はヘラキリした底部から湾曲しながら立ち上がり、端部を尖りぎみにおさえている。2891・2892はヘラキリした底部に外方にふんばる高台を貼りつけた杯で、いずれも口縁部を失っており、高台径は2891で9.9cm、2892で12.1cmを測る。播鉢2893も底部のみ出土した。分厚くつくられた底部の径は10.3cmを測り、底面には工具による刺突が多数認められる。これらの土器は、いずれも8世紀中葉の範疇におさまるものと考えられる。C89・90は凸面に縄タキを施した平瓦で、内面には布目が残る。M37は方頭形の鉄鏃で基部を欠いている。身幅2.4cm、重量7.2gを測る。(亀山)

溝-28 (図版102・268・269・349・431)

位 置 溝-27の約4m東側を南北に併走する溝で、O17区からP17区の東端に位置する。
構 造 検出長は110mで、北端は調査区外に続くが、南端は直角に折れ曲がって東に延びる様相を示す。また、南端から40mの箇所では東に向かって延びる溝が直角に取り付いている。上幅は0.9~2.9mと一定ではないが、直線的に延びる溝の主軸はN-2°-Eと真北をさす。溝の深さは20~50cmで、溝-27よりやや深く掘りこまれているが、南に向けて下る状況は同じである。またその溝底

には、長さ150～650cm、幅100～250cm、深さ10～20cmの不整楕円形をなす土塊状の凹みが認められたが、ここでは側面にまで及んでいる。南側では長さ55cm、幅35cmの大形の石材が投棄された状態で検出された。その上面は平らで、礎石として用いられていた可能性がある。

出土遺物 埋土からは土師器や須恵器のほか、瓦などの土製品や鉄器が出土しており、その量は溝-27より多い。土師器には杯、高杯があり、その多くに丹塗りが施されている。杯**2863～2869**は、法量によって2つに分けられる。1類**2862・2863・2865**は口径13.7～15.0cm、器高2.9～3.0cmで、径高指数4.7～5.0を示す。わずかに外反する口縁は、端部を丸く収めている。口径15.0～16.9cm、器高2.8～3.0cmを測る2類**2864・2865**は、径高指数5.4～5.6をさす。このうち**2864**は、わずかに外反する口縁の端部を内側に丸く肥厚させる。また**2865**では、口縁部内面に斜放射の暗文を施すものの、その間隔は粗い。底部にはいずれもヘラキリの痕を残す。**2859～2861**は高杯の脚部で、外面をヘラケズリにより面取りする。須恵器には蓋、杯、鉢、甕がある。**2867～2873**はボタン状のつまみをもつ蓋で、天井部はヘラケズリする。口径15.1～17.4cmを測り、端部を下方につまみだす**2870・2871**と、口径18.5～18.7cmで、端部が角張っておわる**2872・2873**に分かれる。**2874～2876**は無台の杯で、口径12.6～13.3cm、器高4.0～4.3cmを測る。ヘラケズリする底部は**2874・2875**が丸みをもつものに対し、**2867**では平坦につくる。**2878～2884**は底部に高台を貼りつける杯である。口縁部は体部から緩やかに屈曲して立ち上がり、ヘラケズリした底部には外方にふんばる高台をもつ。これらは、口径14.0～14.8cm、器高3.6～4.4cmで径高指数3.4～3.9を示す**2878～2882**と、口径14.0～14.8cm、器高3.6～4.4cmで径高指数3.4～3.9を示す**2883**に分けられる。また**2880・2883**は、底部中央が高台を越える不安定な形態をもつ。**2866**は口径41.4cm、器高9.1cmを測る大形の鉢で、平坦な底部から斜めに立ち上がる口縁の端部は角張る。播鉢**2885**は下半を残すのみであるが、分厚くつくられた底部から直線的に開く口縁部を備えていたものと推定される。底部の外面には工具による刺突が認められる。**2886・2887**はいずれも甕の口縁部である。口径33.2cmを測る**2886**は上方に開く口縁の端部を水平に拡張して平坦な面をつくる。**2887**は、大きく外反する頸部からわずかに屈折して内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。口径38.8cmを測る口縁部には櫛状工具による刺突文を連続して施し、頸部には2条を単位とする沈線を2段にめぐらしてその間にヘラガキ文を飾っている。**2888**は口縁部を欠いているが、最大径41.2cmを測る甕である。楕円形をなす体部は外面に平行タタキの痕をとどめ、内面には同心円の当具痕を残す。**C83～88**はいずれも平瓦で、凸面には縄タタキの痕をとどめ、凹面には細かな布目を残す。側面はヘラケズリしたのちナデで仕上げる。**C51・58・59**は狭長な紡錘形をなす管状土錘で、長さ4.4～5.2cm、幅1.55～1.75cm、重量9.5～10.7gを測る。土玉**C70**は、径2.5cm、重量13.3gの球形をなすが、その用途については不明である。これらの土器は8世紀中頃に位置付けられ、この溝の時期を示すものと考えられる。

(亀山)

溝-29～34 (図版102)

位置 溝-27の西約20mで検出した東西に走る溝で、O17区の南西からP17区の北西にかけて位置している。

構造 主軸をN-85°-Eにおいて直線に延びる6条の溝で、それぞれ1.5～2.5mの間隔をもってほぼ東西に走る。幅は30～40cmで、長さは最長で16.5mを測る。検出面からの深さは50～20cmと幅の割に深く、壁面がほぼ垂直をなす断面U字形を呈する。底面の標高は350～335cmで、わずかに西へ下る傾向にあるものの、水が流れた形跡はうかがわれぬ。むしろ、その形状からすれば畝のような



0 20m

第19图 古代遺構全体図 (1/600)

耕作にかかわる溝である可能性が高い。

出土遺物 埋土からは土師器、須恵器が出土している。土師器は古墳時代前期の鉢で、溝-16のものと接合したことから混入の可能性がある。また、須恵器は杯の小片で、5世紀後半のものである。これらの遺物からすれば古墳時代後期以降のものと考えられるが、埋土の状況や検出面の標高からみて、古代にまで下る可能性がある。(亀山)

(3) その他の遺構・遺物

その他の遺構・遺物 (図版269・287・431)

時期が判然としない柱穴や土壌の中には古代にまで遡るものも含まれているものと思われるが、出土遺物のない現状ではこれを識別することは難しい。ただし、Q17区の北東に位置する橋脚部で瓦を出土した柱穴が1基確認された。直径34cmの円形をなす掘り方の底面に、礎板の代わりに敷かれていたC91は、凸面に格子目タタキを施し、凹面に細かい布目を残す平瓦である。今回報告した瓦のなかで、格子目タタキをとどめるものはこれ1点である。

このほかに、溝-27・28を検出する段階でも若干の遺物が出土している。これらは溝に伴うものと考えられるが、ここでは包含層の遺物として取り扱う。包含層の遺物としては、土師器・須恵器のほか、土錘や瓦などがある。土師器2889は高杯の脚柱部で、外面をヘラで面取りし丹塗りを施す。須恵器の杯のうち、口径12.0cm、器高4.2cmを測る2890は平坦につくる底部の調整を省略している。また、2891・2892では底部に径9.9・12.1cmの高台を貼りつける。2893は須恵器の鉢で、分厚くつくられた底部の径は10.3cmを測る。瓦は丸瓦と平瓦があるが、いずれも小片である。C92は玉縁をもつ丸瓦で、凸面は縄タタキののちナデで調整しており、凹面には布目を残す。C93は凸面に縄タタキ、凹面に布目を残す平瓦であるが、表面の摩滅が著しい。いずれも溝-27・28の遺物と同じ8世紀中葉に位置付けられるものである。土錘は細身の紡錘形をなすが、古代以前あるいはそれ以後のもの形態的に区別が難しく、ここでは古代に属する可能性を指摘するにとどめたい。(亀山)

第5節 中・近世の遺構・遺物

(1) 概 要

中世の遺構には、掘立柱建物12棟、井戸1基、土壙26基、土壙墓7基、溝56条がある。このうち、鎌倉時代にまで遡る遺構として掘立柱建物数棟があるが、この時代の集落の中心は後年次に報告するように中屋調査区の南端にあり、今回報告した建物の多くは室町時代のものとみられる。これらはO17、P17区に散在しているが、とくにO17区の南東からP17区の北東にかけて柱穴が密集している。これに繋がる柱穴群は東側の橋脚部分でも確認されており（後年次報告）、未調査部分にも広がっていることが判明している。ここでは、コ字形に区画する溝がめぐるが、これに伴う建物は確認できなかった。しかし、柱穴群が調査区の中程で途切れ、西に広がりを見せない状況からして、屋敷地の境界を示しているものと思われる。この柱穴群の北西に設けられた井戸の埋土からは、食葉性の甲虫類が検出されており、この周辺に畑地が広がっていたことが予想される。また、この一画から土壙墓がまとまって検出されており、屋敷墓とも言うべき性格を有していたことが想像される。しかし、この集落も15世紀には放棄され、他の場所に移動したようである。今回報告した建物のうち、北側に集中するものは、遺物に乏しいため明瞭にはできないものの、西川調査区で検出された中世末ないし近世初頭の集落の一端を構成していた可能性がある。

近世にはほぼ全域が水田化されており、その耕作にかかわる溝や段が調査区の各所で見受けられる。これらはほぼ南北を指向するものの溝-70を境にしてやや異なっており、地形や既存水路に即した地割りとなっている。水田層から出土した遺物の多くは17世紀後半から18世紀の年代を示しており、微高地全面の耕地化がほぼこの時期に達成したものと思われ、近世津寺村の成立と深くかかわっていたものと思われる。

(亀山)

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物-4 (図版103・351)

位 置 O17区の北に位置する東西棟で、北東隅は調査区外に延びているが、今回あわせて報告する。

構 造 桁行4間、梁間2間の長方形をなす建物で、面積は16m²を測り、その主軸をN-86°-Eとほぼ東西におく。東西となる桁行の総長は759cmで、柱間距離は中央の2間がそれぞれ155、136cmを測るのに対し、両端の2間は236、232cmと広がっている。南北を指す梁間は総長429cmで、柱間距離は北の1間が226~222cmを測るが、南は207~190cmとやや狭くなっている。柱穴は、東の梁間が削平を受け遺存状態が悪いものの、径20cm、深さ20cmの円形をなし、掘り方底面の標高は一定である。一部で確認された柱痕跡から、柱材の直径は10cm前後と推定される。

出土遺物 この建物に伴う遺物は出土しておらず、詳細な時期については不明であるが、西川調査区で検出された建物との関連からして、中世後半でも新しい時期が想定できる。

(亀山)

掘立柱建物-5 (図版103)

位 置 掘立柱建物-4の南西約13mで検出した庇をもつ東西棟で、O17区のほぼ中央に位置して



第20図 中・近世遺構全体図1 (1/600)



第21図 中・近世遺構配置図 (1/300)

いる。

構造 桁行3間、梁間2間の身舎は、23.6㎡を測る長方形をなす。その主軸はN-87°-Wとほぼ東西を指し、掘立柱建物-4の棟方向とおおむね一致する。東西を向く桁行の総長は647cmを測る。北辺の柱間距離は、230~198cmと西の1間がやや狭くなるのに対し、南辺では逆に240~189cmと東の1間が狭くなっている。南北を指す梁間の総長は、東辺が365cm、西辺が356cmとわずかに西辺が狭い。その柱間距離は、北の1間が203~186cmを測るが、南は175~170cmとやや狭くなっている。

庇は、身舎北辺の西側2間から西辺2間にかけてく字形に取り付く。北辺の庇の総長は506cmで、庇の出は93~88cmを測る。3間ある柱間のうち、東1間が213cmを測るのに対し、西2間はそれぞれ148、145cmと狭くなっている。西辺の庇の総長は454cmで、88~87cmを測る庇の出は北辺とほぼ同一である。損壊のため柱間は明確ではないが、北辺と同じ3間で構成されていたようで、その距離も北2間が狭くなっていたものと思われる。柱穴の掘り方は、径30~20cmの円形をなし、深さは遺存状態のよいもので30cmほどあるが、庇の柱穴は身舎のものに比べてわずかに浅くなっている。これらの掘り方からは直径15cmほどの柱痕跡が確認されている。

出土遺物 この建物においても、その時期を示すような遺物は出土していない。しかし、掘立柱建物-4と棟方向を同じくすることからすれば、近似した時期を想定できる。(亀山)

掘立柱建物-6 (図版104)

位置 O17区の北東に位置する建物で、掘立柱建物-4の南約3mで検出した。

構造 床面積12.5㎡を測る桁行3間、梁間1間の建物で、その主軸はN-29°-Wと大きく西に振れている。桁行の総長は、北東辺で633cm、南西辺で606cmと北東辺が広がっている。その柱間距離も、北東辺が213~210cmとほぼ一定しているのに対し、南西辺では210~194cmと不揃いである。梁間の総長は、北西辺が210cm、南東辺が193cmとわずかに南東辺が狭い。円形をなす柱穴の掘り方は、径42~26cmを測り、深さは最大で32cmほどある。

出土遺物 柱穴からは弥生土器の小片が出土しているが、埋土の状況からすれば中世に属する可能性が高い。ただし、掘立柱建物-4、5と比べれば掘り方の規模は大きく、その主軸も大きく異なることからすれば、古代後半にまで遡ることも考えられる。(亀山)

掘立柱建物-7 (図版104)

位置 掘立柱建物-5の東約2mで検出した南北棟で、O17区の中央西よりに位置する。

構造 桁行5間、梁間1間の長方形をなす建物で、床面積は32.6㎡を測る。主軸はN-1°-Wと南北を指し、掘立柱建物-4、5の棟方向とはほぼ直交する。南北を向く桁行の総長は955~953cmで、その柱間距離は196~185cmを測る。また梁間の総長は、346~338cmを測る。柱穴の掘り方は、径46~22cmの円形で、深さは46cmほどあり、一部で直径12cmの柱痕跡が確認された。

出土遺物 柱穴の上部を壊した土壙-165からは12世紀前半の椀が出土しており、平安時代末を遡る建物と見られる。(亀山)

掘立柱建物-8 (図版105)

位置 P17区の北端に位置する東西棟で、掘立柱建物-7の南約21mで検出した。

構造 桁行3間、梁間1間の建物で、長方形をなす床面積は32.6㎡を測る。N-84°-Wを指す主軸は、掘立柱建物-4、5とほぼ一致する。南北を向く桁行の総長は、北辺が950cm、南辺が940cmで、南辺がわずかに広い。3間ある柱間の距離は、中央が250~240cmを測るのに対し、東西はそれぞれ

350cmと広がっている。また南北を指す梁間の総長は、460～450cmと東辺がやや狭くなっている。柱穴の掘り方は、径46～22cmの円形で、深さは46cmほどあり、一部で直径12cmの柱痕跡が確認された。**出土遺物** 柱穴からは14～15世紀の椀、小皿、鍋などの土師器が出土しており、室町時代前半の建物と推定される。(亀山)

掘立柱建物－9 (図版105・351)

位置 P17区の北部中央付近に位置する。掘立柱建物－8の南10mで検出された。

構造 身舎は梁間1間、桁行2間であり、南側に庇が付属する掘立柱建物である。棟方向は、N-9°-Eを指し、梁間334cm、桁行375～376cmを測る。庇は、南側に付属し95～98cmの幅を有する。身舎の床面積は約13㎡ほどである。柱穴は径35cmほどの円形であり、深さは最も深いものでも検出面から40cmと浅く、全体的に大きく削平されているものと思われる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、灰黄褐色の砂質土で埋まっており、周囲に散在する柱穴とほぼ同じ埋土であった。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は細片のみであり、図化し得なかった。これらからこの掘立柱建物の時期を判断することはできなかった。しかしながら、周囲に散在する同じ埋土をもつ柱穴などの遺構から出土した遺物を参考にすれば、この建物の時期を中世に求めることが可能と思われる。(大橋)

掘立柱建物－10 (図版106・351)

位置 この建物は、調査区の北西端に検出された。

構造 規模は、3×1間の建物で、桁行は562～568cm、梁行は320～326cmを測る。柱間は桁184～190cm、梁320～326cmで、棟の主軸N-5°-Wにとる。柱穴の掘り方はすべて円形であった。柱穴内は、淡黄褐色土が堆積しており、当調査区の北側の西側調査区で検出された大型建物の埋土と類似している。

出土遺物 出土遺物は認められなかったものの埋土などから中世末～近世の可能性が強い。(中野)

掘立柱建物－11 (図版106)

位置 この建物は、調査区のほぼ中央部に位置し、掘立柱建物－9の西約18mに検出された。

構造 規模は、3×2間で桁行464～468cm、梁行276～284cmを測る。建物の北、東の隅部の柱穴は検出できなかった。柱間は、桁148～166cm、梁98～150cmであった。建物の主軸は、N-35°-Wにとる。柱穴はすべて円形で、柱痕跡が残存しているものも認められた。また、柱穴内の埋土は灰黄褐色を呈しており、掘立柱建物－10とは差違がある。

出土遺物 出土遺物は検出されなかったが、埋土などから掘立柱建物－10よりは古相を示すと考えられる。(中野)

掘立柱建物－12 (図版107・352)

位置 この建物は、調査区のほぼ中央部に位置しており、掘立柱建物－11の南約12mに検出された。

構造 建物1×1間の規模で、桁行280～258cm、梁行222～226cmを測る。柱穴は円形で、柱痕跡も確認されている。

出土遺物 遺物は検出されていない。時期は不明である。(中野)

掘立柱建物－13 (図版107・352)

位置 この建物は、掘立柱建物－12と位置が重複しており、調査区のほぼ中央部に位置する。

構造 規模は2×1間の建物である。北東隅部の柱穴は中世～近世の溝によって削平を受けてお

第4章 調査の概要

り検出できなかった。桁行414cm、梁行190cmを測る。柱間は、桁194～220cm、梁190cmであった。柱穴はいずれも円形のもので、柱痕跡も確認されている。この柱痕跡から、5本の内3本の角材が使用されていたと考えられる。

出土遺物 遺物は検出されていない。時期は不明である。 (中野)

掘立柱建物-14 (図版107)

位置 P17区南側西よりに所在が確認された。

構造 海拔350cmにおいて砂質土を基盤とするなかにあって全て淡灰色を呈する粘土で埋積した特徴をもって確認された2間×2間の掘立柱建物である。建物の主軸はN-12°-Eで桁行および梁行の柱間は420cm、405cmを測り、それぞれに芯心で207cm～210cm、195～210cmの規模を測った。柱穴は、各コーナーの掘り方が隅丸方形もしくは楕円形を呈し、それぞれに径15cm前後の柱痕跡が確認された。

出土遺物 各柱穴内において遺物の検出はまったく見られなかった。したがって、時期についての詳細は不明である。ただし、柱穴内へ埋積した土の状況は古代以前、さらに中世の特徴を見せるものではない。 (島崎)

掘立柱建物-15 (図版108)

位置 P17区の南西において古墳時代の水田埋積土上層の海拔390cmで検出された。

構造 柱穴は、中世段階のものに比較して小規模で、径約20cmを測る。建物は、南北方向を基調とするもので東西1間×南北2間で棟方向はN-72°-Eであった。規模は、桁行270cm、梁行170～180cmを測った。

出土遺物 柱穴内からの遺物の検出は見られなかった。時期は、周辺に所在する水田、溝などの在り方、柱穴内埋積土の状況から中近世段階と考える。 (島崎)

(3) 井 戸

井戸-2 (図版108・352・353)

位置 掘立柱建物-7の南約9mで検出したもので、O17区の中央南よりに位置する。

構造 方形をなす上面は、長さ237cm、幅229cm、深さ123cmを測る。標高305cmを測る底面は西側がわずかに凹み、60°前後の傾斜をもって壁面が立ち上がる。南西側には幅140cm、深さ5cmを測る浅い溝が220cmほど延びているが、この遺構に伴うものかどうかは明らかでない。底面は湧水層に達しておらず、井戸といいながら自噴していた可能性は乏しい。こうしたことから他の機能も想定されるが、自然遺物の鑑定結果からすれば水を溜める土壙と考えたい。

出土遺物 埋土からは、早島式土器の椀、小皿、鍋、亀山焼の甕などの土器が出土している。また、グライ化した下層の粘質土からは、椀や草履などの木製品のほか、獣骨や昆虫、植物遺体などの自然遺物が多数出土した。土器はいずれも小片のため、ここでは図示していないが、椀には断面三角形をなす矮小化した高台を貼り付けており、口径8.0cmほどの小皿もユビオサエの痕を残す浅い丸底をなすことから、14～15世紀に比定されるものである。木製品の椀W1は挽きもので、底部には径5.9cmを測る低い平高台をもつ。内外面は黒漆を塗って仕上げている。長さ22.7cm、幅8.0cmを測るW2は、幅4cmの薄板2枚をはぎあわせて草履の芯としたもので、検出段階では表面を覆うワラ状の繊維が厚く認められた。板の上部には幅0.8～0.5cmほどの一対の孔が穿たれ、側面には横緒のための挟り込みが認められる。埋土の下層から検出した植物遺体にはアカマツ、カシワ、センダン、エノキなどがあ

り、湿潤地表性歩行虫のゴミムシや食植性昆虫であるヒメコガネなどの昆虫遺体も確認された。これらはこの土壌の性格を示すばかりでなく、周辺の環境を物語るものとして注意される。(亀山)

(4) 土 壙

土壙-166 (図版108・269・431)

位 置 O17区の中央に位置し、掘立柱建物-7の柱穴と重複して掘りこまれている。

構 造 上面は、長さ64cm、幅60cmの円形を呈し、検出面からの深さは51cmを測る。底面は平らで、その標高は415cmを測る。

出土遺物 2層に分かれた埋土の下層からは、完形の土師器の椀2898が出土している。口径14.0cmを測る体部は湾曲し、底部には径5.7cmの高台を貼り付ける。これは早島式土器のなかでも比較的古相を示し、12世紀後半に位置付けられるものである。(亀山)

土壙-167 (図版108)

位 置 掘立柱建物-7の南端と重複して検出した大形の方形土壙で、西側を土壙-168によって切られている。O17区のほぼ中央、土壙-166の東1mに位置する。

構 造 長さ286cm、幅220cmの不整形をなす。高さ12cmほど遺存する壁面は、標高434cmを測る平坦な底面から緩やかに立ち上がる。

出土遺物 灰褐色を呈する埋土からは、早島式土器の小片が出土しており、おおむね13~14世紀に位置付けられるものである。(亀山)

土壙-168 (図版108)

位 置 土壙-167の東側を壊してつくられた大形の土壙で、掘立柱建物-7の南端と重複している。

構 造 検出面の規模は長さ236cm、幅224cm、深さ26cmの方形をなす。標高386cmを測る底面は平らで、その南西には、長さ133cm、幅98cm、深さ13cmを測る方形の凹みが確認された。しかし、この凹みがこの土壙と同時に機能したものであるかどうかは明らかでない。また、南東から偏平な石材が出土したが、この土壙の機能と直接かわるものかどうかは判然としない。

出土遺物 灰褐色を呈する埋土からは、早島式土器の小片が出土しており、おおむね13~14世紀に位置付けられるものである。(亀山)

土壙-169 (図版109)

位 置 O17区のほぼ中央に位置し、土壙-168の東約4mで検出した土壙である。

構 造 長さ51cm、幅48cmの円形をなし、検出面からの深さは38cmを測る。壁面は、標高403cmを測る底面から東側は垂直に、西側はやや傾斜をもって立ち上がり、断面U字形をなす。

出土遺物 埋土は2層に分かれ、その上層からは早島式土器の椀や小皿、鍋など少量の土器片が出土した。いずれも図示できなかったが、椀は径5.5cmの矮小化した高台を備えており、14世紀前半に位置付けられるものである。(亀山)

土壙-170 (図版109)

位 置 土壙-169の東約0.5mで検出した土壙で、O17区の中央に位置する。

構 造 円形をなす上面は、長さ80cm、幅68cmを測る。現状の深さは13cmと浅く、断面は皿状を呈する。

出土遺物 埋土は2層に分かれ、その上層から早島式土器の椀や鍋が少量出土した。細片のため、詳

しい時期は明らかでないが、おおむね13～14世紀とみて大過ないであろう。(亀山)

土壙-171 (図版109・439)

位 置 O17区の中央南よりに位置する土壙で、土壙-170の南1mで検出したものである。

構 造 上面は、長さ104cm、幅67cmの東西に長い方形をなし、現状の深さは9cmを測る。平坦な底面は標高408cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。その平面形から土壙墓とも考えられたが、これをうかがわせるような出土遺物はなく、その機能については不明である。

出土遺物 底面の北端から、鉤形の鉄製品M85が出土した。二またに分かれた手前は片側を欠失しているが、緩やかに湾曲しながら先細りし先端は鋭く尖る。断面長方形をなす基部には木質が残り、木柄に取り付けられていたものと思われる。そのほかに13～14世紀に属する土師器の小皿や亀山焼の甕の小片が若干出土している。(亀山)

土壙-172 (図版109)

位 置 土壙-171の南約8mで検出したもので、O17区の南に位置する。

構 造 北東に損壊をうけて旧状を知り得ないが、現状では長さ132cm、幅60cmの長楕円形を呈する。主軸をほぼ南北におき、深さ11cmと浅い横断面は皿形をなす。

出土遺物 この土壙に伴う遺物はなく、時期については判然としないものの、灰褐色をなす埋土の状況からすれば、他の土壙とほぼ同時期とみて差し支えないものと思われる。(亀山)

土壙-173 (図版109)

位 置 O17区の南東に位置し、土壙-172の北西を切るように検出した土壙である。

構 造 南北に長い方形をなす上面は、長さ58cm、幅50cmを測る。高さ16cmを測る壁面は、標高398cmの底面から、南では緩やかな、北では急な傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物 灰褐色をなす埋土からは、鍋と思われる土師器の小片がわずかに出土している。詳細な時期については明らかではないが、他の遺構と同じく13～14世紀に属するものである可能性が高い。(亀山)

土壙-174 (図版109)

位 置 土壙-173の南西約3.2mで検出した土壙で、O17区の南東に位置する。

構 造 調査時の損壊によって南西を失っているが、長さ82cmほどの円形をなす土壙と思われる。深さは15cmで、断面は緩やかに湾曲する皿状をなす。

出土遺物 埋土から出土した遺物には、早島式土器の椀がある。小片のため図示できなかったが、底部に貼り付けた高台の径は4cmと小さく、14世紀前半のものともみてよいであろう。(亀山)

土壙-175 (図版109)

位 置 O17区の南東に位置し、土壙-174の南東約10.6mで検出した土壙である。

構 造 南北に主軸をもつ方形をなし、その規模は検出面で長さ139cm、幅71cmを測る。深さは6cmと浅く、平坦な底面の標高は393cmを測る。

出土遺物 その規模や整った平面形からすれば土壙墓の可能性も考えられるが、それをうかがわせるような遺物は出土しておらず、時期についても明らかではない。しかし、埋土の状況からして中世に属することは明白であり、他の土壙と同じ13～14世紀代に比定できよう。(亀山)

土壙-176 (図版109・353)

位 置 O17区の南東端に位置する土壙で、土壙-175の南西3.3mで検出したものである。

構 造 上面は長さ276cm、幅252cmの方形を呈する。検出面から深さ36cmの位置にある底面は平坦で、その標高は430cmを測る。壁面は東側で急な傾斜をもって、西側で緩やかに立ち上がる。底面の東側では人頭大の石材6つを並べた、長さ123cm、高さ21cmの石列が検出された。これは石材の面を内側にそろえ、わずかに外傾するように据えたもので、一部で石材が二段に積まれている。また、西側でも同様な石材が認められたが、その数は少なく列をなす状況にはない。

出土遺物 早鳥式土器の椀や小皿、鍋、備前焼の甕・播鉢、魚住焼の播鉢など多くの土器が出土している。いずれも小片のため図示できなかったが、おおむね14世紀代に位置付けられるもので、この土壙もほぼこの頃のものと考えられる。 (亀山)

土壙-177 (図版110)

位 置 土壙-176の北約6.2mで検出した土壙で、P17区の北東端に位置する。

構 造 長方形をなす上面は、長さ77cm、幅46cmを測る。平坦な底面の標高は420cmを測り、検出面からの深さは4cmと浅い。

出土遺物 この土壙に伴う遺物は出土していないが、灰褐色をなす埋土の特徴から中世に属するものと推定され、周辺の遺構との関係からすれば14世紀代とみて大過ないものと思われる。 (亀山)

土壙-178 (図版110)

位 置 P17区の北東に位置する土壙で、土壙-175の南東約6.5mで検出した。土壙-179と重複している。

構 造 長さ118cm、幅112cmを測る上面は方形を呈する。検出面から深さ18cmの位置にある底面は平坦で、その標高は398cmを測る。東側の壁面はやや急に、その他では緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物 出土遺物はなく、詳細な時期を知り得ないが、埋土の特徴などから周辺の遺構と同じ室町時代前半と想定される。 (亀山)

土壙-179 (図版110)

位 置 土壙-175の南東約6.9mで検出した土壙で、土壙-179と重複している。

構 造 南東部を失っているが、長さ76cm、幅66cmの楕円形をなすものと思われる。現状で高さ40cmを測る壁面が、標高436cmの平坦な底面から垂直ぎみに立ち上がる、コ字形の断面をもつ。埋土は上下2層に分かれるが、遺物などは出土しておらず、その機能については明らかでない。

出土遺物 土壙-178との切り合いから、これに先行することは明らかであるが、埋土の状況からすればさほどの時期差は認められず、14世紀の範疇におさまるものと推測される。 (亀山)

土壙-180 (図版110・353)

位 置 P17区の北東に位置し、土壙-179の西約3.1mで検出した大形の土壙である。

構 造 南側が損壊を被っているため旧状を正確に把握できなかったが、現状では長さ303cm、幅301cmの不整な楕円形を呈する。高さ13cmと低い壁面は、標高416cmを測る平坦な底面から緩やかに立ち上がり、浅い皿形の断面形をもつ。

出土遺物 埋土から早鳥式土器の椀や小皿、鍋、亀山焼の甕などが出土した。いずれも図示できなかったが、14世紀代のものと考えられる。 (亀山)

土壙-181 (図版110)

位 置 調査区中央やや西寄りに位置し、掘立柱建物-11の東に隣接して検出された。

第4章 調査の概要

構造 この土壌の規模は、308×296cmで平面形は隅丸方形を呈する。深さは約60cmで、土壌内は粘土質の土層がレンズ状に堆積している。この土壌の南東隅部からは、幅約50cm、深さ約74～66cmの溝が南側に延びる。この溝は、約5m南で北西から南東方向に逆走する幅約10mの溝-70に合流している。これらのことからこの土壌は、集水を目的としたものであると考えられる。

出土遺物 中世を中心とする土器の小片が少量出土している。 (中野)

土壌-182 (図版110・269)

位置 この土壌は、土壌-181の西3mに位置している。

構造 土壌の規模は、121×114cmで平面形はほぼ円形を呈する。深さは約8cm残存していた。土壌内には10～数cmの河原石が多数検出された。性格については不明である。

出土遺物 出土遺物としては、中世の土器が少量検出された。 (中野)

土壌-183 (図版111)

位置 建物-9の北約6mの位置に検出した。

構造 北西部が他の土壌と切り合っているため少し歪つであるが検出面での平面形は方形に近い形状を呈している。平面の規模は長さ488cm、幅468cmを測る。土壌は浅く窪むもので、断面形は浅い皿形を呈している。検出面からの深さは46cmを測る。床面はほぼ平坦である。土壌からは長径30～40cmを測る石が検出されている。石は、南側と西の辺に平行にならんでおり、L字状に検出した。また、土壌の底面からは直径10cm前後の杭の痕跡を検出した。北側と南側とにおいて列をなしてみられ、南側の一部は先に述べた石列と方向を同じくするものがある。

出土遺物 土壌からは多くの土器が出土している。土器は小破片がほとんどである。2902は小皿で、底部外面にヘラキリが見られる。2903、2905、2906は早島式の椀で、2903、2905は断面が三角形の高台が貼り付けられている。2907、2908は土鍋で外面は粗いハケメが施される。2909は外面に格子目タタキが施された甕の破片で、亀山焼と考えられるものである。 (井上)

土壌-184 (図版111)

位置 P17区の北西にあり、土壌-184の北側710cmに位置する。

構造 長さ107cm、幅76cm、深さ12cmを測る楕円形の土壌である。底面海拔高は367cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 無遺物であるが、土質、色調等において、弥生、古墳時代のものと相異なる。 (高畑)

土壌-185 (図版111)

位置 P17区の西側中央にあり、土壌-183の南側710cmに位置する。

構造 長さ88cm、幅87cm、深さ28cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は380cmを測り、埋土は4層からなる。

出土遺物 遺物は出土していない。 (高畑)

土壌-186 (図版112)

位置 P17区の西側中央にあり、土壌-186の170cm北側に位置する。

構造 長さ96cm、幅89cm、深さ36cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は351cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 遺物は無く、時期決定は困難であるが、弥生、古墳時代のものとは異なる。 (高畑)

土壌-187 (図版112)

位 置 P17区の中央西よりにあり、土壌-187の西側150cmに位置する。

構 造 長さ70cm、幅61cm、深さ18cmを測る隅丸方形の土壌である。底面海拔高は378cmを測り、埋土は1層である。

出土遺物 遺物は出土していない。 (高畑)

土壌-188 (図版112)

位 置 P17区の西側中央にあり、土壌-186の東側150cmに位置する。

構 造 長さ78cm、幅60cm、深さ34cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は347cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 遺物は出土していない。 (高畑)

土壌-189 (図版112)

位 置 P17区の中央西側にあり、土壌-187から300cm南に位置する。

構 造 長さ158cm、幅100cm、深さ28cmを測る楕円形の土壌である。底面海拔高は346cmを測り、2層の埋土からなる。

出土遺物 遺物の出土をみていない。 (高畑)

土壌-190 (図版112)

位 置 P17区の西側中央にあり、土壌-188の南東620cmに位置する。

構 造 長さ211cm、幅123cm、深さ22cmを測る楕円形の土壌である。底面海拔高は356cmを測り、埋土は1層である。

出土遺物 遺物は確認できなかった。 (高畑)

土壌-191 (図版112)

位 置 P17区の中央やや西よりにあり、溝-92の北方200cmに位置する。

構 造 長さ90cm、幅90cm、深さ27cmを測る円形の土壌である。底面海拔高は366cmを測り、埋土は1層からなる。

出土遺物 遺物は出土していないが、土壌-183から189は弥生、古墳時代の遺構ではなく、中・近世のものと考えている。 (高畑)

(5) 土 壙 墓

土壙墓-5 (図版113・354)

位 置 O17区の中央東より、掘立柱建物-7の南東約4.4mで検出した土壙墓である。

構 造 上面は、長さ140cm、幅65cmの長方形を呈し、主軸をN-88°-Wとほぼ東西におく。標高409cmを測る平坦な底面からは、脆弱化した人骨と刀一口が検出された。人骨は、中央やや東側から頭骨が、西からは四肢骨と思われる長骨が出土しており、東に頭位をおいて埋葬された可能性がある。

出土遺物 全長39.2cmを測る刀M59は、身長28.5cm、身幅3.7cmの平造りで、腰刀として用いられたものと考えられる。土器が出土していないため、詳しい時期は明らかではないが、周辺の遺構との関連からみて室町時代前半である可能性が高い。 (亀山)

土壙墓-6 (図版113・269・354)

位 置 掘立柱建物-8の東約4.6mで検出した土壙墓で、O17区の南東に位置する。

構 造 長方形をなす上面は、長さ106cm、幅63cmを測り、その主軸はN-86°-Eとほぼ東西を指

第4章 調査の概要

す。検出面からの深さは10cmと浅く、平らな底面の標高は429cmを測る。人骨は遺存していないが、その構造や遺物の出土状況から土壙墓と考えた。

出土遺物 灰褐色をなす埋土の上面からは小皿が2点出土している。上を向いていた**2897**は、口径7.6cm、器高1.6cmを測り、丸い底部にはユビオサエの痕を残す。口径8.2cm、器高1.6cmを測る**2896**は伏せた状態で出土した。ヘラキリした底部は平坦で、直立する口縁部は厚くつくられている。これらの土器は14世紀後半～15世紀前半の製作になるものと見られる。 (亀山)

土壙墓-7 (図版113・355)

位置 O17区の南東に位置し、井戸-2の北に接して検出された土壙墓である。

構造 検出面は極めて浅く、なおかつ調査時の損壊を被っており、その一部を検出したにすぎない。このため全体の形状は把握できなかったが、他の土壙墓と同様に方形の掘り方を有していたものと思われる。標高418cmを測る底面の南西で検出された人骨は、頭骨と長骨であるが、いずれも脆弱化が進み、遺存はきわめて悪い。しかし、かろうじて残存していた歯牙から、被葬者が5～6才の小児であることが判明した。

出土遺物 釘とみられる鉄器**M66**を1点検出したのみで時期を示すような遺物は出土していないが、他の土壙墓と近似した時期を想定して大過ないものと思われる。 (亀山)

土壙墓-8 (図版113・269・354)

位置 井戸-2の北西約0.7mで検出した土壙墓で、O17区の南東に位置する。

構造 上面は、長さ97cm、幅65cmの長方形をなし、深さは3cmと極めて浅い。N-3°-Eをさす底面は平坦で、その標高429cmを測る。底面からは、北に頭位をおく人骨と土師器の小皿が検出された。頭骨は遺存が悪かったが、西に顔面を向けた状態が復元される。また、中央西よりから検出した上肢骨や、南側で確認した下肢骨の状況から、手足を折り曲げていた様子がうかがわれ、西側臥屈葬と判断される。

出土遺物 北東から出土した小皿のうち、上向きの**2899**は、口径6.6cm、器高1.3cm、下向きの**2900**は、口径7.0cm、器高9.1cmを測る。いずれも底面にはヘラキリの痕をとどめる。これらは13～14世紀に属するものと思われる。 (亀山)

土壙墓-9 (図版113・269・355・439)

位置 土壙墓-8の南約3.6mで検出したもので、O17区の中央南よりに位置する。

構造 長さ103cm、幅87cmを測る上面は、N-5°-Eに主軸をおく方形をなす。深さは現状で39cmを測り、底面の標高は441cmを測る。土壙内からは人頭大の石が検出されたが、これらはその下部で検出された棺を構成するのに用いられたものと思われる。木棺痕跡は、長さ83cm、幅60cmの方形をなす。棺内には北に頭位をおく人骨と、土師器の小皿、砥石を添えた剃刀が各1点出土した。

出土遺物 小皿**2901**は、頭骨と棺材の間に立て掛けるようにおかれていた。径7.4cmを測る口縁部は、ヘラオコシされた底部から斜め上方に短く延び、その器高は1.4cmを測る。**M58**は全長18.7cmの剃刀で、砥石**S117**の上に置かれていた。身長10.8cm、身幅2.4cmを測る。小皿の示す年代は14世紀後半で、この土壙墓の時期を表すものと考えられる。 (亀山)

土壙墓-10 (図版113・355)

位置 O17区の中央南よりに位置し、土壙墓-9の西約0.8mで検出した土壙墓である。

構造 水田の削平により東側を失っているが、長さ112cm、幅60cm以上の長方形に復元される。

検出面からの深さは5cmと浅く、残存状況は総じて悪い。標高405cmを測る平坦な底面の南側で、2本の長骨がわずかに検出された。これらの長骨は脆弱化し、部位の特定は困難であるが、他の土壌墓の被葬者が北に頭位をおくことからすれば下肢骨である可能性が高い。

出土遺物 時期を示すような遺物は出土していないが、埋土の状況からみて他の土壌墓と同様の年代が類推される。(亀山)

土壌墓-11 (図版113)

位置 P17区の北東に位置し、土壌-181と重複して検出された土壌墓である。

構造 南半は土壌-182に切られているが、幅59cm、長さ76cm以上の長方形を呈していたものと思われる。検出面からの深さは3cmと浅いにもかかわらず、底面にはスギとみられる棺材が遺存していた。標高405cmを測る平坦な底面の東側で検出された板材は、長さ62cm、幅25cmを測る。その西側には長さ26cm、幅11cmの板材が直交するように重なっていた。しかし、これらは本来の位置を保っているとは考えにくく、これにより棺の構造を推定することは困難である。棺材の上からは若干の人骨が出土している。いずれも長骨であるが、保存が悪く部位については不明である。

出土遺物 土器は出土しておらず、時期については正確を期しがたいが、土壌-182との切り合いを勘案すれば、おおむね14世紀前半の年代が与えられる。(亀山)

(6) 溝

溝-35 (図版114)

位置 O17区の中央東よりを鍵形に走る溝である。

構造 N-88°-Wと東西を走る溝は、西端を水田により削平されているものの、東端は南へ直角に折れ曲がる。長さ14.3m、幅108~89cmで、深さ14cmを測る断面は、平坦な底面から壁面が緩やかに立ち上がる皿形をなす。南北に走る溝の主軸はN-2°-Wで、その一部は調査区外になるものの長さ10mを測る。幅は70cmと東西よりも狭くなり、深さも徐々に浅くなって、その南端は溝-36に切られて終わる。この溝は、その形状から何らかの区画を構成していた可能性が考えられるが、土壌-166・167やその周辺に見られる柱穴や土壌の存在は、この溝が屋敷などの地割りにかかわるものである可能性を示唆している。

出土遺物 灰褐色をなす埋土から早島式土器の椀と土師器の鍋、鉄釘などがある。いずれも図示できなかったが、13世紀後半~14世紀前半に位置付けられる遺物である。(亀山)

溝-36 (図版114)

位置 O17区の南東をコ字形にめぐる溝で、北東で溝-35の南端を切る。

構造 長さ10.2mを測る北辺は、幅109~85cm、深さ26~9cmを測り、主軸をN-86°-Eとほぼ東西におく。その両端は南に折れ曲がる。N-6°-Wと主軸を南北におく東辺は、長さ9.8m、幅109cmで、検出面からの深さは15~9cmを測る。N-89°-Eに主軸をおく南辺は、東辺の南端から西へ443cmのびて終わっており、幅112~48cm、深さ10~7cmを測る。北辺の西端から南へ折れ曲がる西辺も、井戸-2と接するあたりで不明瞭となり、全長を確認することはできなかった。溝底は四隅がわずかに低くなるものの、その標高は430~425cmとほぼ一定で、その形状からも何らかの区画を目的としていたものと見られるが、これに伴う掘立柱建物などの施設は確認できていない。

出土遺物 ここでは図示していないが、土師器の鍋、備前焼の播鉢、亀山焼の甕などが出土している。

第4章 調査の概要

小片のため細かな時期については明らかではないが、おおむね13～14世紀に属するものとみてよい。
(亀山)

溝-37 (図版114)

位置 O17区の南東に位置する鍵形の溝で、溝-36の南東に接して検出した。

構造 長さ6.5mを測る西辺は、幅86～53cm、深さ9cmほどあり、溝底の標高は428cmとほぼ一定している。西辺の主軸はN-6°-Eとほぼ南北を指し、その北端は東へ曲がり308cmほど延びる。西辺に比べ溝底が8cmあまり高くなるため遺存は総じて悪く、幅42～19cm、深さ4～3cmを測るにすぎない。東端は南へ曲がる傾向を示すものの、古代の溝-27に切られており、その続きは確認できなかった。

出土遺物 この溝に伴う遺物は少なく、わずかに土師器の鍋の細片が出土したにすぎない。このため、その所属する時期を知ることは困難であるが、溝-35・36と近似した時期を想定しても大過ないものと思われる。
(亀山)

溝-38 (図版114)

位置 調査区南側の範囲でわずかながら認められた。

構造 海拔高422～439cmで検出し、規模は幅62～74cm、深さ11～20cm程度を測り、断面形は浅い皿状を呈している。

出土遺物 溝の時期を示す遺物は出土していないが、近世のものと思われる。
(澤山)

溝-39・40

位置 O17区の北西を北々西から南々東に走る溝で、溝-42～44に切られている。

構造 幅45～30cm、深さ19cmを測る溝で、主軸をN-23°-Wにおく。長さは最大で10mを測る。2条の溝の間隔は約3mあり、溝底はいずれも南に下る傾向を示すものかならずしも一定でなく、水流の痕跡は認められないところから、耕作にかかわる遺構である可能性が強い。

出土遺物 埋土から遺物が出土していないため、正確な時期については明らかではないが、溝-49～64に先行し、建物に後出することから中世後半～近世前半に比定される。
(亀山)

溝-41

位置 O17区の北西を東北東から西南西に走る溝で、溝-39・40とほぼ直交し、溝-45・46に切られている。

構造 主軸をN-63°-Eにおいて直線的にのびる溝で、検出した長さは8m、幅41～33cmを測る。深さは18cmで、断面は浅い皿形をなす。

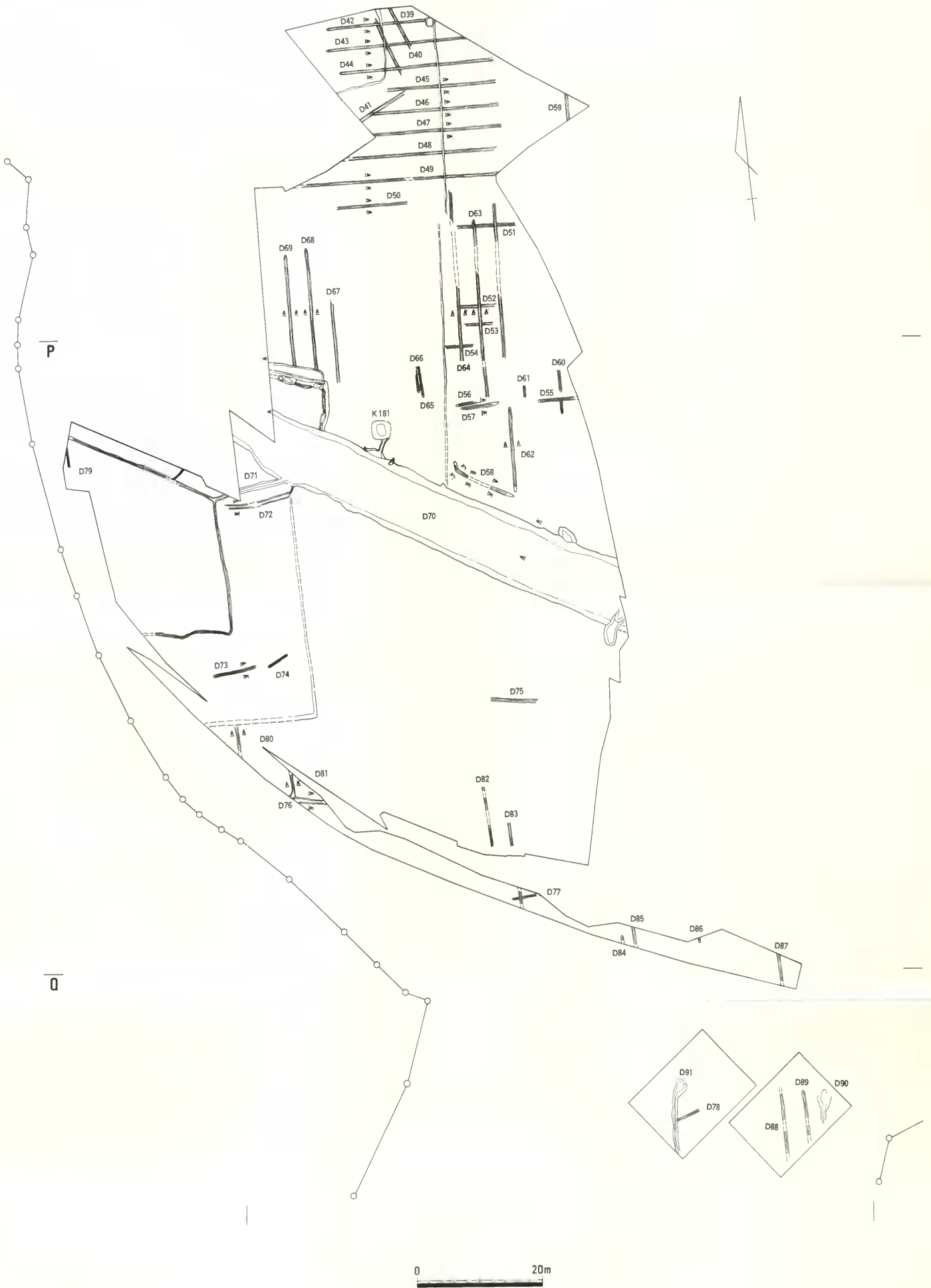
出土遺物 遺物が少なく時期を特定することは困難であるが、溝-46・47との位置関係からして、これらと同じ中世後半～近世前半の時期が想定される。
(亀山)

溝-42～57 (図版114・115・269・270)

位置 溝-63の北東を東西に走る溝で、O17およびP17区の北半で検出した。

構造 溝-59～62に直交する溝で、幅54～31cm、深さ20～6cmを測る。長さは最長31mを測り、その方向はN-86～89°-Wとほぼ東西をさす。それぞれの溝は、約3～4mの間隔を保って並走しており、これと直交する溝-59～62に先行する。溝底の標高は一定せず、水が流れた痕跡は認められない。畝のような耕作にかかわる遺構と考えられる。

出土遺物 灰褐色をなす埋土には遺物がほとんど含まれておらず、正確な時期については明らかでは



第22図 中・近世遺構全体図 2 (1/600)

ないが、建物に後出し、水田に先行することからして、中世後半～近世前半に位置付けられる。

(亀山)

溝-58 (図版115)

位置 溝-65から2.5m離れた北東を、北西から南東に走る溝で、P17区の北西で検出した。

構造 現状で長さ11.2m、幅67～43cm、深さ12～8cmを測り、北西端はわずかに北へ折れ曲がる。その主軸は溝-63とほぼ並行し、なおかつ北西端は水田の段に沿って北へのびている。このことからすれば、溝-63の北東に広がる耕地にかかわる遺構と考えられる。

出土遺物 遺物は出土していないが、灰褐色をなす埋土や、その構造から考えて、溝65～76と同じく中世後半～近世前半に位置付けられるものと思われる。

(亀山)

溝-59～69 (図版115)

位置 O17およびP17区の北半で検出した溝で、溝-70の北東を南北に走っている。

構造 直線的に延びる幅60～36cm、深さ9～3cmの溝で、長さは最長29mを測る。それぞれの溝は、約3mの間隔を保って並走しており、その方向はN-2°-Eとほぼ南北をさす。これらは、直交する溝-42～57に切られており、時間的に後出するものと思われる。溝底の標高にはばらつきがあり、水が流れた痕跡は認められない。溝-42～57と同じく耕作にかかわる遺構と考えられる。

出土遺物 遺物は少なく、時期を知る手掛かりに乏しいが、掘立柱建物や水田との切り合い関係から、溝-42～57と同様に中世末～近世前半と推定される。

(亀山)

溝-70 (図版114)

位置 今回報告する調査区のほぼ中央に位置する。

構造 溝は北西から南東に向けて流れるもので、検出面での最大幅は約10mを測る。この調査区での全長は約70mを測る。溝の断面形は大きくはU字状を呈するもので、検出面からの深さは0.85mを測る。溝の最初の掘削は中世と推定されるものであるが、それ以後も使用され幅は狭めているが調査中も同じ位置に存在しており用水としての機能をはたしていた。溝-71、72はこの溝に対する枝溝とされるものであろう。溝の北側には浅い掘り込みがあり、用水を利用しての洗い場的な機能を推定させるものもある。また、溝の北約2mの位置に池状の掘り込みを造り幅70～80cmの溝で水を引く施設も見られるが、それがどのような機能を果たしていたかについては不明である。

出土遺物 溝からは壺、甕、播鉢、土鍋などが出土している。何れも破片で完形になる物はない。2912は播鉢で、口縁端部が少し拡張する。内面には8～9条単位の播目が放射状に施される。2913は乳白色を呈する土鍋で、外面は縦方向のハケメ、内面は口縁部をヨコナデ、体部を横方向のハケメで調整する。2915は早鳥式の椀で、断面が台形の高台が貼付けられる。播鉢の時期は鎌倉時代後半から終わり頃と考えられ、溝もその頃には機能していたものと推定される。

(井上)

溝-71

位置 P17区西側中央にあり、溝-24の上部を東西に走る溝である。

構造 幅約65cm、深さ8～10cmを測り、溝底は海拔395cm前後である。

出土遺物 溝内からの青磁片が一点出土しており、伴出した早鳥式土器片から中世に比定できる。

(高畑)

溝-72

位置 P17区西側中央にあって、溝-71の100cm北側に位置し、2本の溝が東西に重複する。上

位の溝の埋土は小さい河原石を含み、茶褐色系の土が認められる。

構造 溝幅100cm、深さ20cm、溝底の海拔高は387cm、下位の溝は幅50cm、深さ17cm、海拔高370cmを測り、埋土は粘質土である。

出土遺物 溝内の遺物は認められない。 (高畑)

溝-73・74 (図版115)

位置 調査区の中央南西側に位置する。

構造 調査区南西域に広がりを確認した水田のうち、ほぼ磁北を基準とする区画の水田内で確認されているが、この水田と直接的に関係するものかどうかは不明である。検出面の海拔高は404cmで、規模は幅42cm、深さ10cm程度を測り、断面形は浅い椀状を呈する。

出土遺物 時期を示す遺物は認められなかったが、その水田の関係から近世のものと思われる。

(澤山)

溝-75

位置 P17区中央付近にあり、砂利および肥前系陶磁器の投げ込まれたゴミ穴により破壊を受けている。

構造 ほぼ東西方向にのびる溝で、幅50cm、深さ7cmを測り、溝底の海拔高は412cmである。

出土遺物 暗灰茶色粘質微砂の埋土には、備前焼の小片を含む。 (高畑)

溝-76~78 (図版115)

位置 3条とも溝-70より南半で検出された溝で、互いに離れた位置に存在する。

構造 溝-76~78はいずれも並行関係にあり、溝-76は溝-81と溝-77は溝-83と直交している。しかしながら、溝-70より北半で検出されている互いに直交する溝群の方向とはそれぞれ若干振っている。海拔高420cmで検出し、規模はおおむね幅54cm、深さ9cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。

出土遺物 時期を示す遺物は認められなかったが、近世のものと思われる。 (澤山)

溝-79

位置 調査区の中央西端に位置する。

構造 ほぼ南北方向に延びる溝であり、海拔高407cm付近で検出した。規模はおおむね幅36cm、深さ8cm程度を測り、断面形は浅い逆台形状を呈する。調査区南西域に広がりを確認した水田に取りつく用水路と考えられる。

出土遺物 時期を示す遺物は認められなかったが、その検出状況から近世と思われる。 (澤山)

溝-80~87 (図版115)

位置 溝-70の南を南北に走る溝で、P16・17区およびQ17区において検出した。

構造 幅38~33cm、深さ9~7cmの直線的に延びる溝で、長さは最長10mを確認している。これらの間隔は、溝-82と83で3m、溝-88と89で3.5mを測るが、溝-59~69に比べれば必ずしも一定していない。方向はN-2°-Wで、溝-59~69より4°西に振れている。

出土遺物 時期を示す遺物に乏しいが、掘立柱建物や水田との切り合い関係から、溝-67~77と同様に中世末~近世前半の耕作にかかわる遺構と考えられる。 (亀山)

溝-90・91 (図版269・270)

位置 Q17区の北東に位置する橋脚部でそれぞれ検出した溝である。

構造 幅87~65cm、深さ37~19cmの、南北に走る溝で、長さは溝-90で最大12mを確認している。

2条の溝は主軸をN-18°-Eにおき、約24mの間隔を保って存在する。また、それぞれの溝の北端は広がって、長さ278cm、幅178cm、深さ34cmの不整楕円形を呈する土壌状をなす。溝底はこの土壌に向かって傾斜しており、灰褐色をなす埋土には流水の痕跡が認められることから、南から水を導くための施設と見られる。

出土遺物 溝内には焼土の混入がわずかに見られたが、遺物は出土していない。このため、その時期については明確にできないが、溝-78を切り、なおかつ近世水田に先行することからすれば、近世前半の年代が与えられる。
(亀山)

(7) その他の遺構・遺物

その他の遺構・遺物 (図版270・291・292)

建物-8の周辺では、建物としてまとめられなかった多数の柱穴がある。これらの埋土からは若干の遺物が出土している。また、これらの遺構を検出する際にも少なからぬ遺物が出土している。

碗**2918・2919・2942**は底部に高台を貼り付けた碗である。口径14.7cm、高台径7.5~6.3cmを測り、内外面をヘラミガキする。この種の碗のなかでは比較的古く、12世紀後半~13世紀前半に位置付けられる。**2933~2936**は底部中央がわずかに凹む碗で、口径10.0~9.2cm、器高3.9~2.6cmを測る。14世紀後半に比定される。底部をヘラキリした小皿**2920~2932**は、口径5.8~8.1cm、器高1.0~1.9cmの小形、口径9.4~10.3cm、器高1.5cmの中形、口径12.0~12.8cm、器高2.4cmの大形に分けられる。大・中形および小形の一部は口縁部が斜めに長く引き出されており、口縁部が短く立ち上がる小形よりも新しい様相を示している。前者は14世紀後半、後者は13~14世紀前半に属するものであろう。鍋**2945**は、器高10.3cmを測る浅い体部から屈折した口縁部は端部に平坦な面をなす。内外とも粗いハケメで調整しており、13世紀後半~14世紀前半にかけてのものである。白磁**2940**は径5.4cmを測る高台のみであるが、その形態からして口縁部が玉縁をなす碗になるものとみられ、11世紀後半に位置付けられる。**2943**は中国の青磁碗で、口径15.0cmを測る口縁の端部は丸く肥厚して玉縁をなす。14世紀後半に比定される。**2942**は肥前陶器の碗で、削り出された高台の径は6.3cmを測る。

備前焼には灯明皿**2939**と甕**2944**、播鉢**2946~2948**がある。**2939**は口径9.8cmを測る灯明皿で、内面のかえしには芯を受ける抉りをもつ。**2944**は、径20.2cmを測る口縁の端部を丸く折り曲げて玉縁をつくる。張りのある肩部は茶褐色をなし、一部に黄胡麻がかかる。**2947**は27.4cmを測る口縁に比して底径は16.9cmと広く、器高は11.3cmある。わずかに湾曲しながら立ち上がる体部には7条を単位とする播目を施す。肥厚した口縁部は面をなし、片口を取り付ける。**2948**は灰色に焼成されており、径14.0cmを測る底部から直線的にのびる体部をもつ。口縁部は端部を上へ拡張し、口径26.9cmを測る。播目は8条を単位として八方に施される。これらはⅢ期新相ないしⅣ期古相に属する備前焼で、おおむね14世紀代に位置付けられる。**2946**は魚住焼の播鉢で、径26.0cmを測る口縁部は肥厚して面をなす。

金属製品には鉄釘や金具のほか銅銭や釣針などがある。釘**M60~77**は、いずれも頭部を平らに打ち延ばした角釘である。全長を知り得るものは少ないが、長さ8cm以上、幅0.8cmの大形**M60~64**と、長さ5~6cm、幅0.6~0.5cm前後の中形**M65~72**、長さは明らかではないが幅0.4cmの小形**M73**に分けられる。**M80・81**は用途不明の金具である。**M80**は逆U字形をなす金具で、手部の先端を欠失している。湾曲する体部の断面が楕円形をなすのに対し、手部の断面は偏平な長方形となり、毛抜きになる可能性もある。コ字形をなす**M81**は断面方形を呈し、縁金具の一部とも考えられる。刀子、**M57**は、

第4章 調査の概要

長さ6.3cm、幅1.4cmを測る小束の柄で、銅の薄板を巻いて作っている。**M83**は銅製の釣針で、高さ6.3cm、幅3.0cm、重量10.1gを測る。先にあぐをもたないスレ針で、軸に括れをいれてかえしをつくる。銅銭**M95~100**はいずれも中国からの輸入銭で、**M95・96**は唐銭（初鑄621年）、**M97~100**は北宋銭（初鑄990~1078年）である。

土製品には管状土錘がある。長さ4.6~4.8cm、直径1.6cmの細い紡錘形をなすもので、中世以前あるいはそれ以降のものと形態的に区別することが難しく、この時期の土錘を特定することはできない。しかし、包含層から出土した土錘の中には堅緻な焼成を示すものがあり、これらについては中世にまで下る可能性が高い。

（亀山）

第5章 結 語

第1節 津寺遺跡の変遷

1. 弥生時代

弥生時代の遺構は、弥・中・Ⅲ期のものを初現として、竪穴住居60軒、掘立柱建物1棟、土壙墓3基、土器棺墓10基、井戸2基、袋状土壙204基、土壙183基、溝数条を確認している。とくに、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期という短期間のうちにその多くが営まれている状況は、当該期における集落相を如実に示している。このうち、竪穴住居は随所で建て替えや拡張の跡が認められ、その位置関係からしても同時期に並存した住居は必ずしも多くはない。しかし、200基にもものぼる袋状土壙は、その切り合い関係を考慮しても、同時期に存在した住居の数に比べればはるかに多い。しかも、これらは住居とともに複雑に重なり合い密集した状況にある。こうした遺構の極端な偏在は、好適な居住環境に起因するというよりは、むしろ居住域に対して何らかの規制が働いた結果と見るべきであろう。さらに、貯蔵施設と考えられる袋状土壙の密集は、集落における計画的な集中管理体制をも想起させる。弥生時代の集落で注目すべきは、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅱ期に見られた夥しい遺構が、弥・後・Ⅲ期に至って減少ないし消滅するものの、弥・後・Ⅳ期に入ると爆発的な増加に転じる点である。もっとも、弥・後・Ⅲ期の遺物は少量ながらも微高地斜面の堆積層や溝の埋土に包含されており、この時期に集落が廃絶したことを意味しない。むしろ、集落が周辺へ分散、移動した可能性を想定すべきであろう。その場合、河道の侵食によってすでに失われた微高地北側はその有力な候補地である。しかし、弥・後・Ⅲ期を境にして集落が大きく変貌を遂げたことは明らかであり、この時期に集落の再編成が行われた可能性を示唆するものである。

次に個々の遺構を見ると、津寺遺跡では袋状土壙に比べて掘立柱建物が極端に少ないことが注意される。掘立柱建物が、貯蔵施設として袋状土壙と同様な機能を果たしていたとすれば、火災や略奪を恐れて袋状土壙という貯蔵形態を採用した結果とも考えられるが、防湿に優れた掘立柱建物と、保湿・保温に適した袋状土壙とでは、その用途や内容物に何らかの差があったことは十分に考えられる。この遺跡における掘立柱建物の僅少さは、その具体的な機能とともに今後の検討を要する。また、調査区の南側に広がる低位部では、古墳時代前期に水田経営が行われていたことが明らかになっている。現時点ではその開田時期を知る手掛かりに乏しいが、この水田の用水として役割を果たしていたと考えられる溝-3が、弥・中・Ⅲ期にはすでに機能していたことからすれば、水田経営が弥生時代にまで遡る可能性は高いと言える。

弥生時代の遺物は、前期に遡るものもいくつか含まれるが、基本的には弥・中・Ⅱを初現とする。弥・中・Ⅱ期の土器は、備中内陸部ではこれまで実態が明らかではなかったが、ここでは比較的まとまった出土をみており、今後この地域の指標となりうるものである。遺構がもっとも多い弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期の土器は、住居や袋状土壙から多量に出土しているが、それらの多くは中期末から後期初頭にかけての漸移的な変化を示しており注目される。このほか、石包丁や石鏃などの石器や、分銅形土製品・紡錘車をはじめとする土製品が数多く出土している。(澤山)

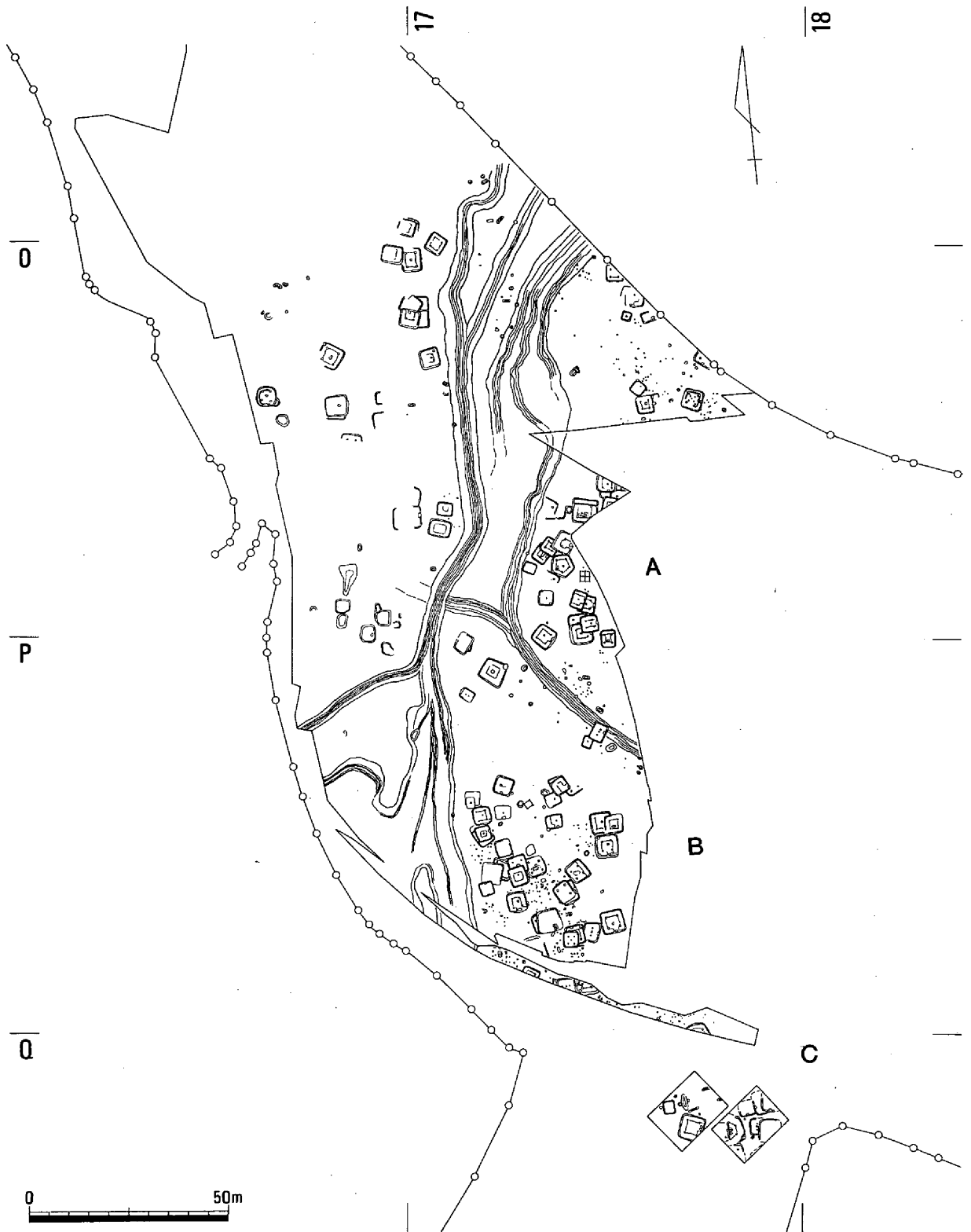


第23図 弥生時代全体図 (1/1500)

2. 古墳時代

古墳時代前期の遺構には、竪穴住居83軒、土壙20基、土器棺墓2基、溝6条のほか、調査区南西で検出された水田がある。これらの遺構は、溝-16を境に北東と南西の2群に大きく分けられる。さらに南に広がる遺構群はP17区とQ17区の2つに区分される可能性がある(第1図)。これらを詳細にみると、溝-16の北東、O17区に広がるA群の竪穴住居は、今回検出されただけでも20軒にのぼる。その多くは互いに切り合いをもって存在しており、その数は最大で4軒を数える。これらはそれぞれ位置をずらしながらも、その主軸を揃えて建て替えが行われているが、これらの住居から出土した土器は、建て替えが短期間のうちに行われたことを示しており、建て替えを行うにあたって人為的な埋戻しが行われたものと推定される。これは、先行する住居に遺棄された遺物が見られず、主柱も抜き取られるなど、建て替えにあたって何らかの片付けが行われていることから裏付けられる。このように主軸を揃えるように重複しながら建て替えられた住居は、その主体が同一であったことを示すものであり、そのことは逆にそれぞれの主体が占有する場所が定められていたことを物語っているように思われる。そこで、これらをその主軸をもとに区分すると、主軸をN-9~17°-Eと北々東におく竪穴住居-32~35、N-35~42°-Eと北東におく竪穴住居-37~39、N-25°-Eにおく竪穴住居-43・44、N-SからN-4°-Eとほぼ南北におく竪穴住居-45~47の4つの単位に分けられる。同様の例はP17区のB群、Q17区のC群においても認められる。これらの単位は同時に存在した住居の数を表しているものとみてよいだろう。そこで最も広域に調査されたB群をもとにして考えると、30~40軒の住居からなる各群は、一時期に8~10軒あまりで構成されていたものと推定される。これらの各群は中型住居を中心に構成されているが、数軒の小型住居や大型住居も含まれている。これらは比較的独立した位置を占めるものが多く、前述した住居単位との有機的な関連は必ずしも明らかではないが、表1に示した類型比によれば1軒の小型住居が各単位に付属していた可能性は高いと言える。また各群に大型住居が1~2軒見られることからすれば、このような住居は複数の単位が共用する施設ないしはこれらを統括する有力な家族体の住居とも考えられる。いずれにしても、津寺遺跡を構成する各群の規模はこの時期の一般的な集落にも匹敵するものであり、この遺跡が拠点的な集落として機能していたことを裏付けている。

次にこの時期の遺物について見ると、この遺跡を特徴づけるものとして、まず多量の非在地系土器の存在があげられる。この中にはもちろん吉備で製作された模倣品も含まれているが、山陰や四国、畿内地方のほか北陸や東海地方などの遠隔地からの搬入品も認められる。これらの多くは溝に投棄された状態で出土しているが、放棄された竪穴を利用した土器の廃棄場においても認められる。ところが、こうした非在地系土器の出土地点にはある偏りが認められた。これがいかなる意味をもつのか直ちに明らかにはできないが、西川調査区の土壙墓群に供献されていた搬入土器はその手掛かりを与えてくれる。すなわち、土器棺墓に混じって存在するこれらの土壙墓の被葬者は、幼児埋葬地として定められた墓域の一面に葬られた特殊な人々であり、これらの土器がその出自を表すものとして供献された可能性は高いと言える。もしそうであるならば、非在地系土器の偏った出土も、そこに居住した人々の出自を反映しているのかもしれない。いずれにしても、遠隔地からもたらされた多量の搬入土器の存在は、この遺跡と同様の在り方を示す加茂遺跡や矢部南向遺跡とともに、この地域の中核的な



第24図 古墳時代前期全体図 (1/1500)

存在であったことを物語るものであり、古墳出現の背景ともなった広範な地域間交流の拠点として極めて重要な役割を果たしていたものと推定される。

ところが、古墳時代前期末には竪穴住居が激減し、今回確認しえたのはわずかに1軒のみであった。この時期には南西に広がっていた水田の経営も放棄され、埋積が急速に進んでいる。しかし、こうした集落の解体の背景には自然あるいは人為による災害といった要因は認め難く、むしろ津寺遺跡が弥生時代終末において急激にその規模を拡大したと表裏一体をなすものと見られる。このことは、流通の拠点として機能したこの集落の形成自体がすぐれて政治的なものであったことを予感させる。

古墳時代中期に入ると、カマドをつくりつけた竪穴住居が現れる。最も古いものは西川調査区で検出された竪穴住居-49で、つくり替えに際して南西の壁際にカマドが新たに設けられている。須恵器は出土していないが、出土した土師器からTK73型式に併行する時期が想定され、県内でも初期のカマドに属する。これに続くものにはON46型式の須恵器を出土した竪穴住居-118があり、以後TK23~TK47型式をピークとして、TK43型式に至るまで継続して住居が営まれている。これらの中には、西川調査区の竪穴住居-53・55、中屋調査区の竪穴住居-114・115のように、主軸やカマドの位置を同じくする住居が隣接して見られ、時期的にも重複することから、両者が有機的な関連をもって機能していた可能性はある。住居の規模は、一辺6.6mの大型から2.8mの小型まで見られるが、前期に比べて大型の占める割合は高く、総じて住居は大形化の傾向にあったと言える。しかし、中・小型の住居にあっては主柱をもたないものが増加し、大型の住居にあっては柱材の径は小形化する。これは、竪穴の浅化とともにカマドの導入に伴い住居構造に何らかの変化が生じた結果と想定される²。ところで、この時期の住居の総数は西川調査区を含めても19軒にしか過ぎず、同時に存在した住居は数軒にとどまるものと見られる。これは、前期前半の状況からすれば極端に少ないが、集落としてはむしろ一般的な在り方であり、逆に前期前半の集落の特異さを印象づける。しかし前期後半から継続して営まれてきたこの集落も後期後半に至って断絶したようで、以後中世にいたるまでこの中屋調査区における集落の営造は見られない。

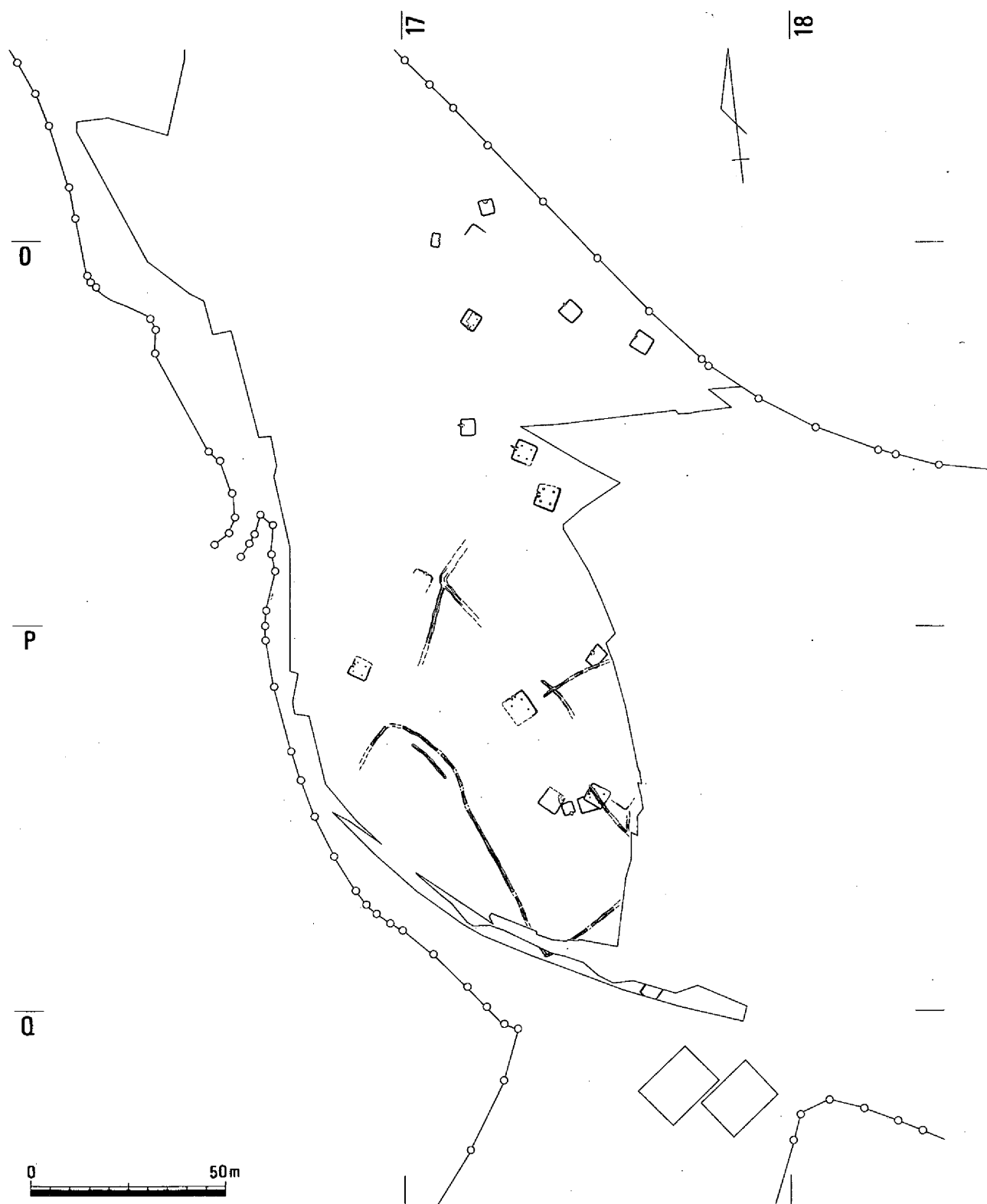
7世紀に入ると微高地北端に護岸施設の築造が始まる。後期以前の遺構の分布は、微高地が検出された以上に北へのびていたことを推測させるが、後期のある段階で北東方向から新たな河道の侵入によって失われたものと思われる。その結果、河道を現状で固定し、微高地のこれ以上の侵食を防ぐことを目的として護岸施設が築造されたのであろう。この時期における微高地の利用形態は十分に明らかとはなっていないものの、居住地としてはすでに放棄されていたこの段階においてかかる大規模な土木工事が実施されたことは、いささか唐突の感は否めない。このため、飛鳥時代の軒瓦の出土を根拠に、後に現れる官衙に先行する施設の存在を想定する向きもあるが、遺構が検出されていない現状ではその立証は難しく、ここでは報告者の意見にしたがって³、下流部に展開する集落や耕地あるいは公的施設などの保護を目的として築かれたものと理解しておきたい。(亀山)

註1. 弥生時代や古墳時代中・後期の住居では、しばしば焼失の痕跡をとどめるものが見られるが、この時期にはそうした例に乏しく、片付けが行われていたことを間接的に示しているのかも知れない。

註2. 本書第5章第3節参照

註3. 非在地系土器に乏しいA群は2面の鏡を出土しており、集落の中心的位置を占めることから考えても、B・C群に対する優位を想定することも不可能ではない。

註4. 柴田英樹「河道の護岸施設」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995



第25図 古墳時代中・後期全体図 (1/1500)

3. 古 代

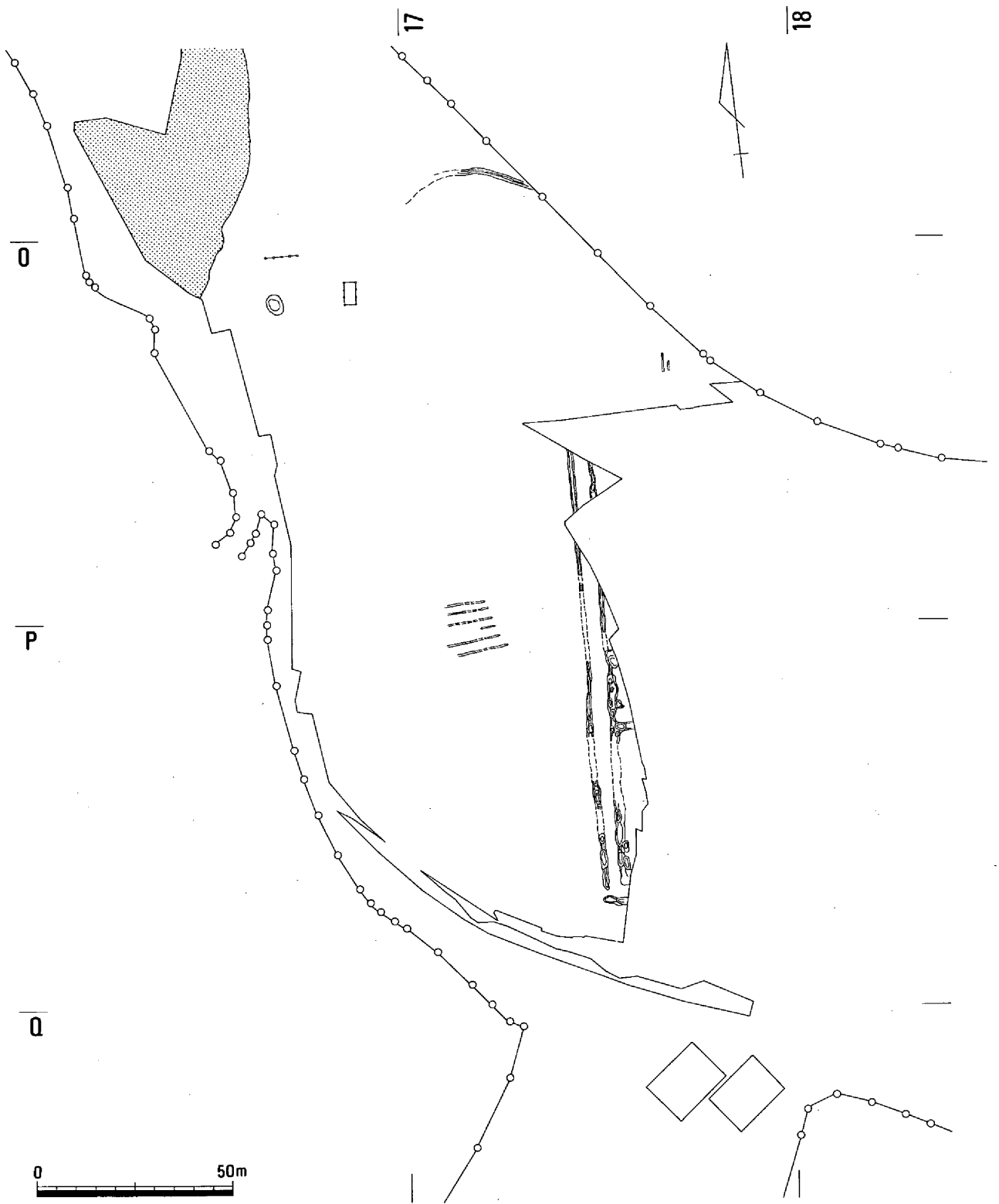
奈良時代に入ると、中屋調査区のほぼ中央には2条の溝で方形に区画された施設が現れる。この区画溝は、既に報告したように底面に土壌状の凹凸をもち、削平の甚だしい箇所では一見土壌を連ねた状況を呈する。こうした構造をとる溝は、この時期の官衙遺構にしばしば認められるところであるが、その意味については掘削の際の単位を表すものとの説明がなされている。しかし、隣接する地点で底面の高さを揃えることはさほど困難なことではなく、また溝としての機能を考えれば、異なった目的をもって意図的に掘りこまれたものと考えられる。ところで、このような溝は、津山市美作国府や勝央町勝間田遺跡(勝田郡衙推定地)でも検出されており、いずれも築地の側溝と理解されている¹。今回報告した溝の間隔は芯心距離で4mを測り、その内端は後世の削平を考慮しても2mを下ることはない。これが直ちに築地の規模を反映するものではないにしても、その大きさは美作国府に準ずるものとなる。もしこの溝が、このような規模をもつ築地の側溝であるならば、溝底に見られた凹凸も築地に用いる土砂を確保するための工夫とみることできる。次に、こうした築地に囲まれた遺構の性格が問題となるが、区画内の構造が明らかでない現時点では、その推定は困難といわざるを得ない。ただし、中屋調査区の南1kmには古代山陽道が東西に走り、これに面するように、津舘駅に比定される矢部遺跡や、都宇郡衙の推定地である幸利神社が存在する²。また、備中国府とは古高梁川の水運によって直接結ばれている。こうした津寺遺跡の立地からすれば、この官衙遺構が国衙、郡衙関連の施設であった可能性が高い。さらに、この周辺の微地形を観察すると、微高地は網目のような小河道によって分断され、多機能を併せ持った郡衙が展開するに十分な地形を確保し得たかどうか疑わしい。実際、倉院のような施設が郡内に分置された例は他にも見ることができる。詳細については後年次の報告に待たねばならないが、ここでは一応郡衙関連施設の可能性を上げておきたい。なお、この施設の時期は出土した遺物からみて8世紀中葉に位置付けられるが、長期にわたって存続したものとは思われない。この遺構の北にあたる西川調査区では、奈良時代のものとみられる掘立柱建物が数棟検出されているが、柱穴の掘り方は小さく、その主軸も異なることから官衙に伴う施設とは考えにくい。北辺に護岸施設が設けられ、微高地が安定したとは言え、比較的狭小な立地にあっては、付属施設の広範な展開は望めなかったのであろう。ただし、古代に遡る畝状の溝が、微高地の縁辺部で確認されていることからすれば、その周辺は一部耕地として利用されていたことは考えられる。

平安時代前半の遺構は、中屋調査区においてほとんど確認できない。この時期には官衙施設も廃絶していたようで、西を流れる河道も機能を停止しつつある。ただしその埋積土からは、西から投棄された状況で平安時代前半の緑釉陶器、灰釉陶器や、「上厨」、「倉」といった墨書をもつ土師器が出土しており、何らかの理由で官衙施設が西方へ移動したことも考えられる。しかし平安時代末には、掘立柱建物数棟が現れ、以後中屋調査区に展開する中世集落の先駆けとなっている。(亀山)

註1. 河本清「美作の官衙」『吉備の考古学』1987

2. 千田稔「埋れた港」1974

3. 浅倉英昭「津寺遺跡野上田調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994

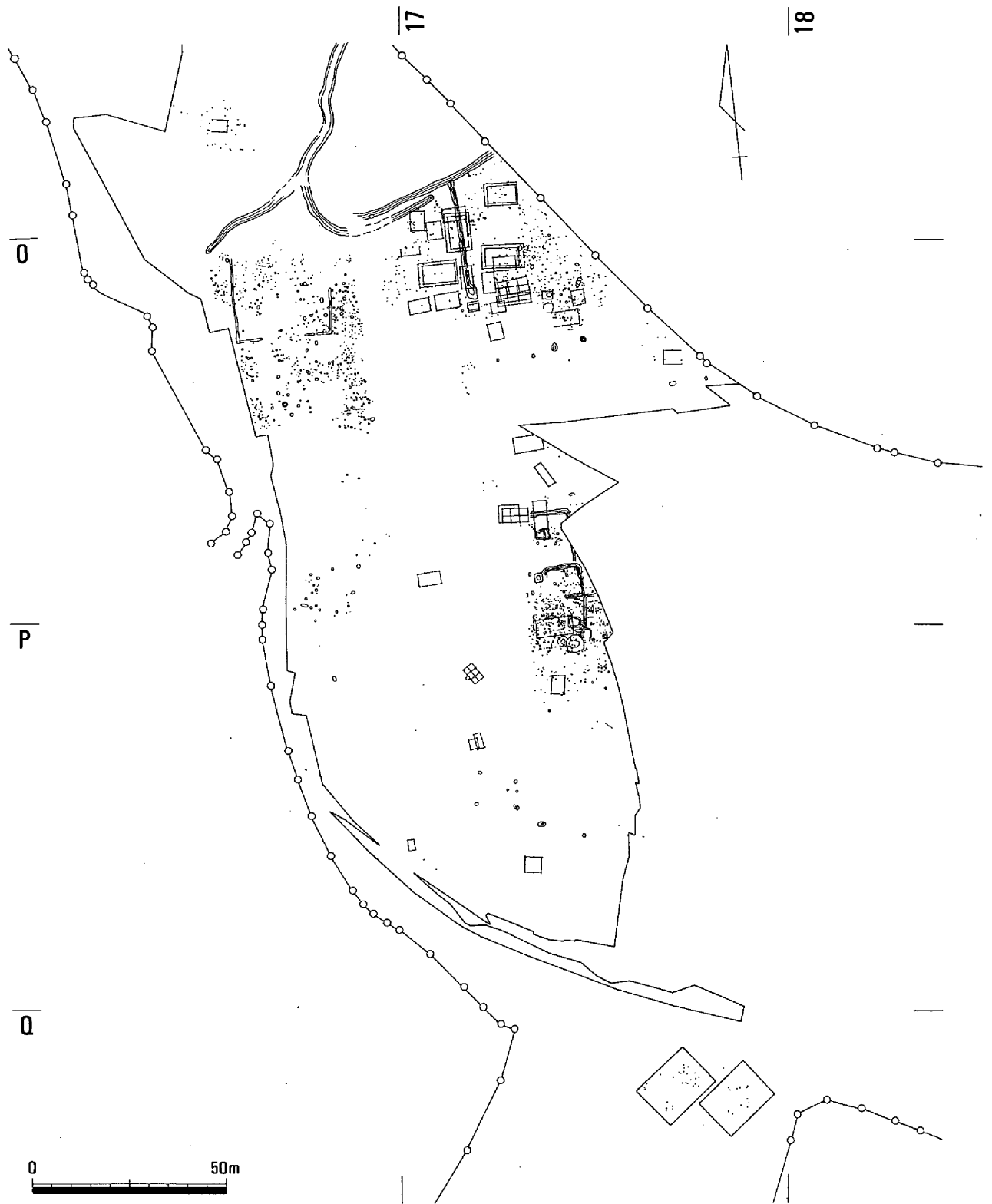


第26図 古代全体図 (1/1500)

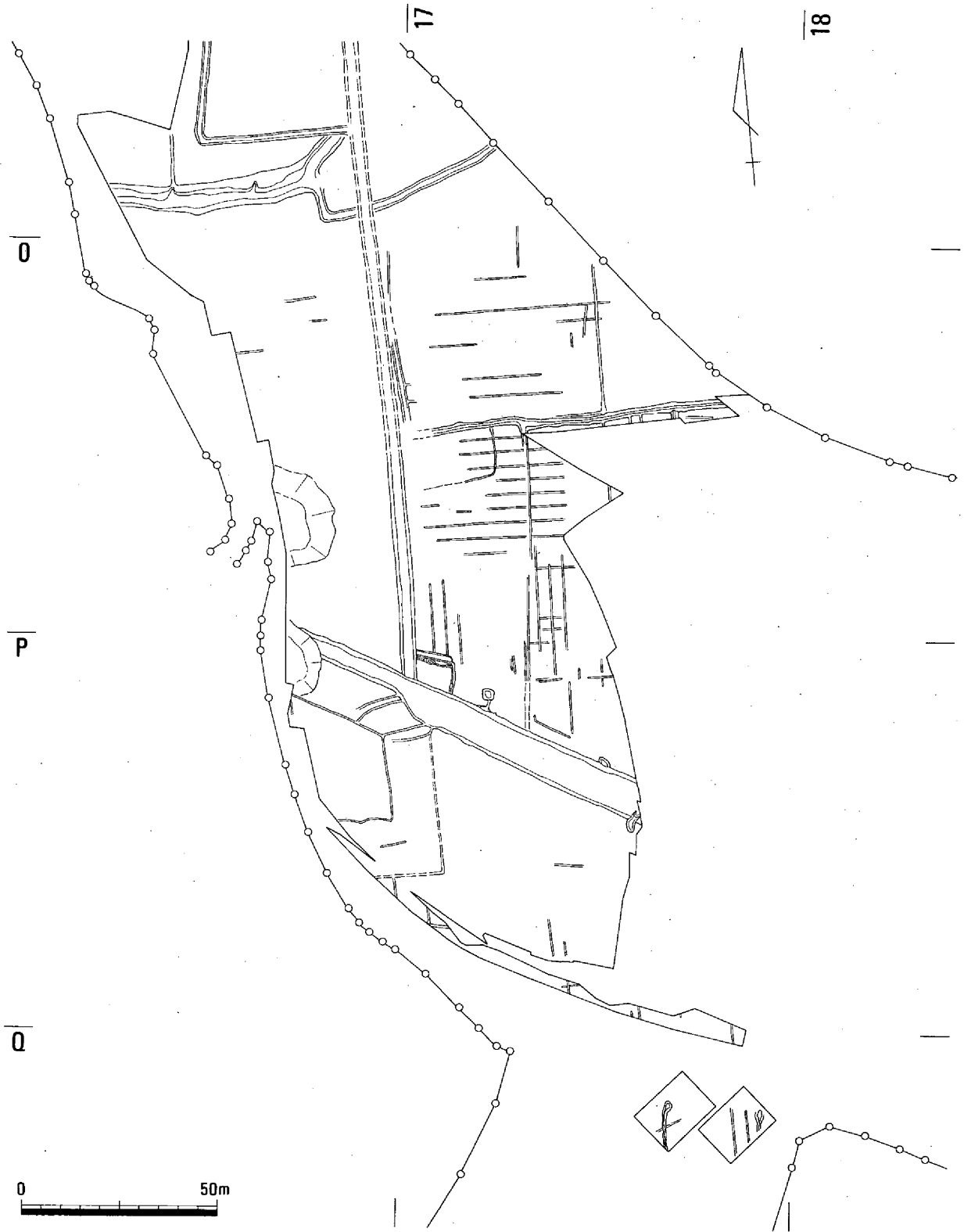
4. 中・近世

中世の遺構には掘立柱建物12棟、井戸1基、土壇26基、土壇墓7基、溝57条がある。このうち掘立柱建物には、主軸を北西から南東におくものと、南北におくものが見られた。前者はその構造からしても後者に先行する可能性が強く、古代後半にまで溯る可能性も否定できない。一方、南北に主軸をもつ一群にはまとまりがなく時期幅があると見られるが、遺物に乏しく明確にはできない。しかし、O17区の南東からP17区の北東にかけて柱穴が密集しており、ある期間集落とも言うべき空間を構成していたものと思われる。その分布は東側の橋脚部分でも確認されており(後年次報告)、一定の広がりが見られる。ところでこの集落は、土筆山・丸田調査区のように屋敷地を区画する溝などの施設は認められなかった。しかし、柱穴が調査区の中程で途切れ、西に広がりを見せない状況からして、何らかの区画が存在した可能性はある。集落を構成する建物は複雑に密集する柱穴のためわずかに3×2間の東西建物を1棟をまとめたにすぎないが、一定のまとまりをもつ柱穴の分布が数箇所にあつて見られることからすれば、複数の建物の存在を想定することは可能である。これらの建物と重複する方形の土壇は、中世の集落に一般的に見られる存在であるが、その機能・用途については定説がない。むしろその普遍的な在り方からすれば、特殊な機能を想定するよりは穴倉のような役割を考えるべきであろう。また、柱穴群の北西に設けられた方形の土壇は素掘りの井戸とみられるが、湧水していた様子はなく、水溜めとして機能していたものと思われる。また、ここからは食葉性の甲虫類が検出されており、この周辺に畑地が広がっていたことが予想される。さらに、井戸の周辺から土壇墓がとまとまって検出されている。これらは屋敷墓とも言うべき性格を有していたものとみられるが、この中には木棺の痕跡や棺材とみられる木材片が遺存したのも見られることから、本来は木棺墓と認識すべきものかもしれない。野上田調査区において良好な状態で検出された木棺は、長さ83~63cm、幅50~39cm、高さ28cmの箱形を呈しており、今回報告した土壇墓-9の木棺痕跡とはほぼ一致する。内部に納められた遺骸のうち姿勢が判別できたものは例外なく、北に頭位をおく側臥屈葬であった。しかも頭骨が遺存するものは顔面を西に向けているのが注意された。副葬品は土師器の碗や小皿、剃刀や砥石など総じて貧弱であり、土筆山・丸田調査区で見られた白磁碗などを副葬する伸展葬とは好対照をなしている⁴。この集落からは、高台を失った土師器の碗や丸底の小皿のほか、備前焼・亀山焼・魚住焼の甕や播鉢、青磁の碗を主体とする少量の輸入磁器などが出土しており、これらの遺物から14世紀後半から15世紀にかけて営まれたものと思われる。しかし、この集落も16世紀には放棄され、北よりの位置に移ったようである。今回報告した建物のうち、北側に位置する掘立柱建物-4・5・7は、遺物に乏しいため帰属する時期を明確にできないものの、その規模や構造からすれば西川調査区で検出された中世末の集落の一端を構成していた可能性がある。この集落は、四面に廂をもつ大型の建物を持ち、一般的な農村とは趣を異にしている。このため、在地領主を支えた有力農民の居宅あるいはこれを中核とする村落とみる意見もだされているが、現段階では意見の一致を見ていない⁵。

近世にはいと微高地全体が水田化されたようで、これにともなう段や溝が各所で検出されている。これらの主軸はおおむね南北を指向するものの、溝-70を境にやや異なっている。これを周辺の現地割が示す方位と比較すると、高松地区ではN-17°-E、加茂地区ではN-16°-Eで、いずれとも一致しない⁶。大体において津寺周辺では地割が大きく乱れ統一性がみられない。これは微地形が複雑に交錯していることによるものと思われるが、それと同時に微高地全面にわたる水田化は、条里のような



第27図 中・近世全体図1 (1/1500)



第28図 中・近世全体図2 (1/1500)

統一的な地割によらない、比較的新しい時期の所産であったことを物語っているのではなかろうか。実際、近世の水田層から出土する遺物は17世紀後半から18世紀の年代を示しており、近世津寺村の成立時期ともほぼ一致する。

これ以降、山陽自動車道が建設される今日まで、津寺遺跡の一带には豊かな水田が広がり、この地域の人々の生活を支えて来たのである。 (亀山)

註1. 正岡睦夫・松本和男「津寺遺跡土筆山調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994

岡田博「津寺遺跡丸田調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会、1994

2. 高畑知功「鍛冶遺構・遺物について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65』岡山県教育委員会、1987

3. 土壙墓-4のように底板がなく、棧木のみ残るものも見られた。これと同様な例は兵庫県養久・乙城山遺跡でも知られている。これは、棧木の上に据えた木枠の中に筵を敷きこみ、遺骸を納めたもので、養久・乙城山遺跡ではそのまま火が放たれていた。

深井明比古・市橋重喜「養久・乙城山」『兵庫県文化財調査報告書58』兵庫県教育委員会、1988

4. 註1文献

5. 大橋雅也「津寺遺跡西川調査区」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995

6. 石田善人「岡山県の地理」

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1. はじめに

津寺遺跡における弥生時代の概要については、第5章第1節で簡略ではあるが説明をしている。ここでは特に個々の遺構や遺物の特徴について検討し、整理を行っていく。野上田・西川調査区の状況についてはすでに報告しており、これに中屋調査区の成果を加味してみたい。ただし本遺跡の整理は現在も継続しており、本節は現時点の資料から得られた中間報告であることをおことわりしておく。なお本稿を進めるにあたり、便宜上各調査区・遺構については略称を使用し、以下に遺構番号を付すこととする(例 中屋調査区竪穴住居-1→中住-1、西川調査区袋状土壇-10→西袋-10)。同様に、遺物については各調査区の略称に、以下遺物番号を記載する。

2. 遺構について

竪穴住居

竪穴住居は60軒検出されている。各時期ごとの軒数の変化をみると、弥・中・Ⅲ期が13軒(21.7%)、弥・後・Ⅰ期が21軒(35.0%)、弥・後・Ⅱ期が7軒(11.6%)、弥・後・Ⅳ期が11軒(18.3%)であった。このことから集落変遷を考えると、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅱ期に生活拠点が出現・定着したものの、弥・後・Ⅲ期にこれが縮小や分散・断絶が起き、弥・後・Ⅳ期になると再び集落が構成されたと推測される。

次に住居の立地をみると、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期の住居が微高地上に比較的偏りなく認められるのに対し、弥・後・Ⅱ期は微高地北側に偏在する傾向を示す。また野住-2が旧河道で一部侵食されていることからすれば、本来の微高地はさらに北に延びていたことは間違いなく、このことから弥・後・Ⅱ期あたりから集落の緩やかな北方への移動がはじまり、弥・後・Ⅲ期にはこの侵食された微高地上に住居が立地していたとも推測される。しかし当然のことながらこの集落移動が一方向のみに起きたものとは限らず、今後未報告部分の集落相についてもみなければならぬ。またこのような弥・後・Ⅲ期の集落の変質と相反する、弥・後・Ⅳ期から古墳時代前期初頭の爆発的な遺構の増加、つまり集落の再構成についてもその要因を検討する必要がある。

加えて別の視点で集落相をみると、同時期のうちに住居の建て替え・拡張が最低10カ所で認められることが指摘される。ことに西住-2・21～23では最高4回に及ぶ建て替え・拡張が行われていたようである。さらに弥・後・Ⅰ期とされる西住-16・17、西住-18、西住-21～23では住居間が極めて近接しており、藤田憲司氏の住居の占有空間についての指摘にしたがえば、これらすべてが同時に存在したとは考えられない。この状況は環境が良好で住居移動が不必要であった表れかもしれないが、むしろ何らかの社会的制約により移動制限や集落内の住居占地に厳しい規定が存在していたと考えられ、想像を逞しくすれば、ある一世帯が特定の居住域を与えられ、その居住域内で住居を建て替え・拡張の繰り返しを行わざるをえなかったとも推測される。

遺存の良好な57軒の平面形態をみると、「円形」系17軒(29.8%)、「方形」系13軒(22.8%)、「隅丸方形・楕円形・多角形」系27軒(47.3%)であった。各時期の変化をみてみると、「円形」系の住居形

態のピークは弥・後・Ⅰ期(8軒)であり、「方形」系は弥・後・Ⅳ期(6軒)であった。しかし「隅丸方形・楕円形・多角形」系とした一群はその微妙な形態の差異や出自について検討する必要がある、上屋・支柱構造との関係を踏まえ、円形住居と方形住居の変遷を明らかにしなければならないと思われる³。

住居の床面積は各時期おおむね15~20㎡前後の数値を示している。そのなかで西住-9・11のように10㎡未満の小形住居や西住-20・22や中住-28・29のように30㎡を越える大形住居も散見される。このような小形・大形住居はなんらかの機能差や集団内格差が推測されるが、詳細については不明である。

床面海拔高をみると、350~400cm程度を示すものが多数である。そのうち海拔400cmを越える住居は野住-1~4、西住-2・3・7・21~23・27があり、海拔350cm未満のものは西住-4・10・11・17、中住-23・26・28~31・60などが認められる。これらの住居立地から旧地形を推測すると大局的には地形は北から南に向って下がり、微高地北側については微・細砂層で形成された東側と砂礫層で形成された西側は高く、これらの微高地の間で確認された「たわみ」上の地表は一段低くなっていたようである。なお床面海拔高の最高値は弥・中・Ⅲ期の野住-2で海拔高431cmを測り、最低値は野住-2から南に約130mに位置する同期の中住-26の海拔高299cmであることから、その差が実に132cmにも及んでいたことになる。

床面状況を見ると、砂礫層が基盤である微高地で検出された住居を除く8割以上のものには、時期や平面形態に大きく左右されず壁体溝がめぐらされることが確認されている。また床面は粗い掘り下げののちに、その底部に厚さ数~10cm程度の粘土を用い貼り床をしているものも多数みられた。またこの張り床により生活面を一段高くした高床部をもつものが8軒検出されている。時期をみると弥・中・Ⅲ期と弥・後・Ⅰ期が各1軒、弥・後・Ⅳ期が6軒であり、当地の古墳時代住居の高床部の状況から弥・後・Ⅳ期より広く普及されていた構造といえる。なお床面に欠損がない弥・後・Ⅳ期の4軒をみると4辺のものが3軒、3辺が1軒であった。このほか床面に施設をもつ住居として、敷石のある中住-3・4や溝をもつ西住-4、梯子穴を想起させる小ピットを有する西住-16b・17、壁体溝周辺に小柱穴3基を検出した西住-9などが認められている。

支柱は、基本的に4本柱のものが多数であるが、平面形態が円形のものに4本以上の柱をもつものが認められる。例えば野住-2や西住-4・16aは5本柱であり、西住-1・16b・22・23は6本柱であった。一方、弥・中・Ⅲ期で平面形が隅丸方形を呈する中住-26は中央穴の両端に2本の支柱穴(小柱穴を含めると4本)を配するもので、あまり類例のない柱穴配置である⁴。しかし、弥・後・Ⅳ期で平面形が方形を呈する中住-30の2本柱は、棟持柱として上屋を支えていたものと考えられ、4本柱住居とならび古墳時代にも引き続き認められる柱穴配置である。

中央穴を有する住居は34軒であった。この数は床面に欠損を生じた住居数を考えるとかなり高率の保有を示している。平面形態は基本的に円形または楕円形が中心であり、西住-29cのように大小2基が同時併存するものや西住-12・23、中住-25・28のように新旧2基が検出されたものもある。規模は50~100cm程度に収まるが、弥・後・Ⅳ期の住居には100cmを越えるものが目立つようである。また西住-4・9・12・28、中住-14・16・19・20・26で見られるように、中央穴の周囲には数cm~10cm程度の粘土帯をめぐらし土堤を配しているものが多く窺える。なお当遺跡では中央穴から屋外に延びる「排水溝」が取り付くものは認められていない。これらの断面形は、浅い皿状のものやU字形

を呈するものがみられるが、やや深く2段掘りのものも比較的多く認められる。埋土には炭や灰が堆積するものが多く、加えて西住-4では灰白色粘土を、中住-15では焼土を、中住-26では焼土と黄色粘土塊をそれぞれ確認している。また西住-16bでは炭と砂質土に、西住-27では炭と灰色砂による互層堆積が認められている。その一方で、西住-3・12・17・18・23、中住-25では中央穴内に覆土の流れ込みが認められ、使用時はともかく少なくとも住居廃棄時には中央穴は開口していたものと考えられる。また、野住-3、西住-17・18の中央穴の周辺では炭・灰の掻き出しがみられ、西住-8、中住-16の中央穴の上面では炭の堆積が確認されている。また西住-9では中央穴の両端で焼土塊がみられ、西住-11では炭化物・焼土塊の掻き出しと思われる状況を呈している。これらの状況に加えて、西住-12の中央穴に被熱痕跡がみられることなどから考えると、中央穴は住居内の「火処」として機能していたものと推測される。このような中央穴の状況は、都出比呂志氏が「灰穴炉」と呼称する事例・条件と合致するものであり、深いピット内に灰をつめ、この媒介物の上で火が使用されたと推測した中央穴の使用方法を示していると思われる⁵。

しかし、そのなかで中央穴を有しながらも野住-3や西住-4、中住-1・2・25・60のように床面で焼土面が検出されているものもみられ、この傾向は古墳時代の住居でも高率とはいえないものの認められる。住居内の「炉」を考える上で、「地床炉」の痕跡とも思われる焼土面についても検討が必要である。

その意味で、百間川原尾島遺跡で出土した百・後・I～II期(津寺遺跡の時期設定では弥・後・I・II期併行にあたる)の甕103個体の煤付着部位および範囲による類型化の結果は示唆に富む。すなわち底部に煤が付着する甕が47%、煤の付着が認められない甕が50%とほぼ拮抗した割合を示すとされる⁶。これが煮沸方法の差異によるものならば、煤が付着する甕は床面に残る焼土面が「地床炉」として使用された痕跡のものと推測でき、煤の付着が認められない甕は地面下方つまり床面下に底部がくる場合は「穴」の中に甕を据えて燃焼されたと考えられる。前述の都出氏が想定する中央穴の使用方法を例にとれば、灰の詰まった中央穴に底部を埋めて地上に露出した胴部下半を中心に燃料を燃やしたと推測される。またこの場合では底部を埋める深さにより、胴部下半から底部付近に生じる煤や色調の変化も微妙な差異を呈すると思われる⁷。以上のことから、中央穴を使用した「炉」と焼土面の痕跡が示すような「炉」が同時併存していたことを示しているとも考えられる。

ところが中央穴周辺の状況に着目すると、中央穴＝「炉」とすぐに肯首しかねる事例が認められる。西住-4・18・22、中住-26では中央穴を挟む対称的な位置にピットが確認されている。もしこのピットに棟持柱が設置されていたならば、中央穴で火を焚くことは危険がともなう。中間研志氏の「松菊里型住居」の分析によれば、中央楕円形土壇の性格を単純に炉とすることは当を得ていないとし、土壇底に砥石・作業台石・石皿・砥石などが置かれる例の報告や床面状況や出土遺物などの検討から、石器製作に関わる作業土壇または脱穀・粉碎に用いた臼としての機能を推定している。また中央穴の両端で見られる2柱も基本的には棟支柱と考えられるとしながらも、中央穴と2柱が近接する場合はそれに加え、中央土壇を各作業場と考え、「杵的存在」の「支え」を設置するのに必須の状況を示すと考えている⁸。中間氏の分類に従えば、先程の住居は「発展松菊里型住居」⁹に形態的には類似している。このように中央穴の両端に近接する形で(小)柱穴を配している住居は、現在のところ県北を中心に確認されており¹⁰、時期は弥生時代中期から後期にかけてのものが多。ただしこれらの住居が北部九州から影響を受けて生じたものか、当地で萌芽したものなのか、また北部九州の住居と

の時期的な差異の解釈などについては今後検討を要する。

改めて県下で確認されたこれらの住居をみると、基本的には中央穴の堆積に炭や灰が包含した住居が多く見られるが、崩レ塚遺跡住居址²や一貫西遺跡住居址⁴の中央穴底部に人頭大の礫が、また赤野遺跡1号住居址¹³にはし字状に石がそれぞれ検出され、押入西遺跡1号住居址¹⁴の中央穴周辺には砥石が配されていたようなものも存在している。焼土の位置をみると奥坂遺跡No34住居址¹⁵、崩レ塚遺跡住居址2、大畑遺跡住居址¹⁶、別所谷遺跡住居址⁷では両柱穴と直交するように2ヵ所で確認されており、崩レ塚遺跡住居址4や別所谷遺跡住居址2は中央穴と近接する場所で1ヵ所検出されている。竹ノ下遺跡7号住居址¹⁸では建て替えに合わせて中央穴も造り直されているが、中央穴と一体で機能していたかのようにいずれにも小柱穴が配されていた。また竹ノ下遺跡4号住居址¹⁹の柱穴断面からは径10cm前後の柱状痕跡が確認されている。

このような諸状況に加え、中央穴に「排水溝」が取り付く住居の存在も含め考えてみると、現段階で中央穴が「炉」また「作業場」であると即断することは困難であるといえる。今後も中央穴の機能追求は必要であると思われるが、時期差や地域差による中央穴の機能変質の可能性も念頭に入れて、個々の住居についても検討する必要があるといえる。

方形土壙は弥・後・Ⅳ期中住-28・30の2軒で確認されている。設置位置は中住-28は南南東、中住-30は南東に配され、古墳時代住居の状況を踏まえると、南または東方向を指向する傾向が窺える。古墳時代の住居も含めて規模をみると、平面形の長さや幅は多様であるが、深さは25~40cm程度を測るものが多い。これは方形土壙が機能的に「広さ」よりも「深さ」に重点が置かれるものであったと推測される。

焼失住居は3軒確認している。西住-1は中央よりも壁側にあたる周辺付近に炭・炭化材や焼土が検出され、特に焼土は床面東側の主柱穴間に広く堆積しており示唆に富む。また炭・炭化材や焼土は床面から若干浮いた状況で確認されており遺物量も少ないとされる。西住-24は床面全面に多量の炭・炭化材や焼土塊が確認され、平面図からは炭化材が中央に向って放射状を呈するような状況やそれらの炭化材と交差するように中央を取り囲む状況が床面に南西側で窺える。遺物は比較的多量に出土しているものの、そのほとんどが炭・炭化材や焼土塊の上層からのものとされる。また、柱痕断面からは細片ながら炭の流入が認められ、柱は焼失後に抜き取られたとされる。中住-15は散漫ながらも床面全面に炭・炭化材や焼土塊が確認され、平面図からは西住-24同様に中央に向う炭化材とそれらの炭化材と交差するように中央を取り囲む状況が窺える²⁰。しかしこの3軒では、いずれも床面に密着した遺物は出土しておらず、焼失前に土器などの生活用品が片付けられていたといえる。この片付けが出火以前に行われたとするならば、この焼失は放火や失火に類するものでなく住居破棄に伴う計画的な焼却と推測されよう。特に西住-24は焼失中に土器の投棄がなされたと報告されており、その可能性は高いと思われる。しかしなぜこのような住居の焼却が行われたのかについては、正確な理由付けはできない。焼失住居は上屋構造の復元や住居破棄の状況を明らかにする好資料であり、今後の発見により詳細な検討がなされるものと期待される²¹。

掘立柱建物

掘立柱建物は、今回2×1間の中建-1を1棟報告したのみであり、既報告分の野上田・西川・中屋調査区では全く確認されていない。余剰生産物を貯蔵する施設が、1棟のみ単独で存在したとは考えられず、集落構成を考える上で今後検討を要する。

埋葬施設

埋葬施設についてみると、土壙墓は弥・中・Ⅲ期に1基、弥・後・Ⅰ期に2基の合計3基が確認されている。また弥・後・Ⅰ期の中土-21では土壙全面に人骨と思われる小骨片が散在し、墓壙の可能性を示唆している。各土壙墓の特徴をみると、西土墓-1は掘り方の北東辺に接するように主体部を設けており、中土墓-2は北東側に土器がまとまって出土し、中土墓-3は墓壙中央に2段の掘り方をもつことが挙げられる。

土器棺墓は、既報告分で弥・後・Ⅱないし弥・後・前期のものが6基、弥・後・Ⅳ期のものが4基の合計10基を検出している。弥・後・Ⅱないし弥・後・前期の土器棺墓は西溝-1・2+中溝-2・3の西方に位置し、小規模なまとまりながら3地点で認められている。弥・後・Ⅳ期の土器棺墓はこの溝の東方の「たわみ」に4基がまとまって確認されている。西土棺-2・5、中土棺-5では棺身に胴部穿孔がなされている。また棺内遺物をみると西土棺-1では鏃と思われる鉄器が出土しており、中土棺-1では乳歯が認められる。なお当地の土器棺墓の様相については古墳時代のものも含めて既に詳細な検討がなされている²¹。

井戸

井戸は今回中井-1の1基のみを確認しており、既報告分でも袋状土壙の形態に酷似するとして西井-1の検出に留まっている。このことから当地では多くても井戸が2基しか存在していなかったこととなり、60軒の住居と比較して極めて少ないことが指摘される。調査区の設定によるとも考えられるが、今後検討を要する。

袋状土壙

袋状土壙は今回69基が、そして既報告分では西川調査区で135基が確認されており、当地では204基の袋状土壙が存在していたこととなる。立地をみると、西溝-1・2+中溝-2・3が存在する「たわみ」、もしくはそれらの東側の微高地上に集中している。各時期ごとの基数の変化をみると、弥・中・Ⅲ期が15基、弥・中・Ⅲ~弥・後・Ⅰ期が1基、弥・後・Ⅰ期が149基、弥・後・前期が39基であり、弥・後・Ⅰ期前後に検出数の上で爆発的な遺構の増加が認められる。しかし集落の再編成が行われた弥・後・Ⅳ期のものは全く検出していない。西川調査区における袋状土壙の位置と立地については先に指摘があるように²²、複数の切り合い関係が各所で認められることから、袋状土壙の機能は短期間であったと推測される。また前述の竪穴住居との切り合いや両遺構の併存期間の問題、そして集落としての貯蔵施設の集中管理体制の存否についても今後検討を要す。

底部の平面形態は円形または楕円形のものが多いが、西袋-5・17・23・55・79・118のように方形または隅丸方形を呈するものがみられる。掘り方規模(底面長軸)を遺存の良い190基でみると、最小径は中袋-66の50cm、最大径は西袋-5の225cmであり、その分布傾向をみると100~120cmと120~140cmを測るものがそれぞれ45基(23.7%)と最も多く、以下80~100cmが33基(17.4%)、140~160cmが27基(14.2%)、60~80cmが16基(8.4%)、160~180cm(7.9%)が15基と続いている。

断面形態については上面の削平や壁面の崩壊など検出状況を考慮しなければならないが、基本的に壁面の立ち上がりが西袋-47・101、中袋-10・11のように直立気味のもの78基(38.4%)、西袋-1・2、中袋-51・52のように内傾気味のもの69基(33.8%)、西袋-17・21、中袋-63のように外傾気味のもの20基(9.8%)、西袋-4・12のように崩壊により外傾か直立気味が不明のもの西袋-108・121のように袋状のものそれぞれ17基(8.3%)、中袋-9・50のように形態不詳のもの3

基(1.4%)の割合で検出されている。また内傾気味のものや袋状のものの中には、西袋-42・55・78・80、中袋-7・17・61のように上部径・下底径以外に土壌の上～中位に最小径をもついわゆる「フラスコ」形のものも認められる。時期による形態変化をみると、断面形態を土壌の最大・最小径の部位の位置により6類型に細分し検討した西川調査区の所見によれば、土壌の中央付近に最大径を有するいわゆる袋状を呈するもの(I類)が、内傾気味または直立気味に立ち上がる形態(II・III類)よりも後出である可能性を示している²³が、今回報告分ではその点が判然としなかった。一方底面部分の形態をみると、特に西川調査区で検出された袋状土壌には湧水等により変形がかなりみられており数値的に問題が残るが、底部が水平なものが184基(90.2%)と高率で検出され、以下西袋-8・27、中袋-11・13のように凹状のものが11基(5.4%)、中袋-21・22・33のように凸状のもの(土壌底に周溝を巡らすもの)が9基(4.4%)で確認している。

埋土は、西袋-3・27、中袋-5・26のようにレンズ状または水平堆積を示すものが多くみられる。しかし西袋-5・74・85・94・97・125、中袋-19・20・27のように断面上部がレンズ状または水平堆積、下部が不規則な堆積を示すものも存在しており、この堆積状況の差異は二次堆積により生じたものと考えられる。また中袋-21・52などの埋土の堆積状況からは本来は「フラスコ」形の断面形態であったことを想起させる。包含遺物として西袋-8・81・107には貝類、魚・獣類遺体などが、また西袋-71には製塩土器片の集中が認められ、一種「ゴミ穴」状を呈していた。

底面海拔高をみると、最大値は西袋-125の405cm、最小値は西袋-48の234cmであった。これらはいずれも弥・後・I期と同時期のもので、北西-南東方向に約35mしか離れていないにもかかわらず、その比高差171cmにも及んでいる。またそれぞれの分布状況をみると280~290cmが33基(16.2%)、290~300cmが30基(14.7%)、300~310cmが24基(11.8%)、330~340cmが18基(8.8%)の割合で検出されており、この傾向から分布に大小2つのピークが存在することが窺える。そこで微高地南側に主に位置する今回報告分69基と微高地北側に位置する既報告分の135基とに分けて底面海拔高を比較してみると、前者は230~360cmの範囲で分布し、順に280~290cmが11基(15.9%)、260~270cmが10基(14.5%)、300~310cmが9基(13.0%)の割合で認められている。一方、後者は230~410cmの範囲で、290~300cmが23基(17.0%)、280~290cmが22基(16.3%)、300~310cmが15基(11.1%)の割合であった。このことから微高地北側の袋状土壌の中には南側では確認していない底面海拔高が360cm以上を越すものが存在していること、また底面海拔高の分布ピークが北側は290~300cmであるのに対し南側が280~290cmであり、北側の方が若干ながら底面海拔高が高いことが指摘される。以上のことから微高地の旧地表面が北から南に下がっていることが推測され、底面海拔高の大小2つのピークはそのことが起因すると考えられる。

袋状土壌はその断面形態と床面状況から、地下を利用した貯蔵施設であると考えられる。西川調査区での検討では堅果類や根茎類を短期に貯蔵・保管したと想定し、その機能期間の短さが複数の作り替えや切り合い関係を生じさせたとしている。特に堅果類については水さらしによる灰汁抜きが同時になされたとしている²⁴。しかし縄文時代で認められている貯蔵穴と質的に同一系譜かは不明であり、むしろ弥生時代に稲作文化と同時に流入された貯蔵施設とみるべきでなかろうか。その場合北部九州周辺での袋状土壌のピークが弥生時代前期から中期であるのに対し、岡山県下では弥生時代後期から新しくは古墳時代前期初頭まで認められ、このような明らかな時期差についても今後解明すべき点であろう。また貯蔵物についても北部九州周辺の袋状土壌では、壁面を焼き、内部を乾燥させて使用し

たと思われる遺構が検出されており、その多くに米・粃などの植物遺体の出土があるとされる²⁵。また当遺跡から南に1kmの位置にする足守川加茂B遺跡²⁶の袋状土壌や「長方形土壌」(壁面が垂直に近い傾斜を示し、底部が水平な形状を呈するもので、この遺跡において弥生時代後期後半に袋状土壌を補完すると考えられる遺構)では炭化米の出土をみたものも存在している。これらのことから現段階で貯蔵物を特定するのは困難に思える。

一方、同じ貯蔵施設の遺構としては掘立柱建物が挙げられるが、当地ではわずかに1棟しか確認していない。このことは火災や掠奪防止などのため掘立柱建物が使用できない集落であったとも考えられるが、微高地の調査区域外の適地に存在する可能性や後世の削平も考えられ、その評価については今後も検討を要する。ただ高乾燥で防湿に優れた掘立柱建物とそれと相反する環境の袋状土壌の機能と使い分けの有無や貯蔵物の内容については今後も検討すべき課題であろう²⁷。また、江見正巳氏は沖積地の袋状土壌の機能を水さらしを伴う貯蔵穴とみる場合、地下水位からほぼ同一底面レベルをもつ井戸との数量的差異について言及しており、この点も今後注目を要する²⁸。さらに、主に丘陵地に立地する遺跡では袋状土壌と掘立柱建物が併存しているものが多く確認されており³⁰、ここでも両者の機能差について考えるに示唆に富む。加えて、沖積地と丘陵地の袋状土壌では形態的には類似するものが多いものの、湧水や乾燥の度合いなど土壌内部の環境が異なっているとも思われ、そこに用途の差異があったかどうかについても検討が必要であろう。

他遺跡での袋状土壌の形態で注目されるものとして、門前池遺跡土壌³¹には穴の底に4本の柱穴があり、土壌6にも1本の柱穴が底面より確認されている。また上野遺跡土壌-36・42・43³²や大岩遺跡³³の1基では土壌を取り囲むかたちで4柱穴が認められ、このことは袋状土壌の一部に上屋構造をもつものが存在したと考えられる。また荒神遺跡³⁴や椽山遺跡³⁵の袋状土壌は土壌の中央部に柱穴状の穴をもつものから、袋状また変形タイプとして斜めに掘り込んだり、土壌内の底面の一隅からさらに下方にもう一層掘り込み、二段状の断面形態を呈するものへ変化することを指摘している。このことも袋状土壌の機能や使用状況を考えるなんらかの手掛りになりえるであろう。

土 壌

土壌は当地で183基が存在している。平面・断面形態や規模については多様であるが、中土-4・61-63などのように本来袋状土壌に分類されると思われるものもこのなかに一部含まれている。各時期ごとの基数の変化をみると、弥・中・中期が1基、弥・中・Ⅲないし弥・中・後期が35基、弥・中・末期～弥・後・初期が3基、弥・後・Ⅰ期が91基、弥・後・Ⅱ期が3基、弥・後・前期が15基、弥・後・Ⅳ期が1基であり、この他に弥・中期が8基、弥・後期が24基、時期不詳が2基確認されている。この状況は竪穴住居や袋状土壌などの遺構変遷と軌を一にする。立地をみると弥生時代中期の土壌が微・細砂層で形成されている微高地北西側に偏在することが指摘される。

溝

溝についてみると旧河道から取水し、微高地を北から南へ貫流して下流付近で南西方向に角度を変える西溝-1・2+中溝-2・3がある。検出時には溝の東肩はほぼ並行に流れをもった古墳時代の西溝-3・4+中溝-4により大きく削平された状況であった。断面形態をみると皿状を呈しており、微高地北側の西川調査区では海拔430cmで検出され、規模は幅が650cm程度、深さは約90cmを測り、溝底の標高は340cm前後であった。微高地南側の中屋調査区では海拔348cmで検出され、規模は現状において幅140cm、深さ60cmを測り、溝底の標高は288cm程度であった。この数値をもとめた両地点の距離

が約75m離れており、溝底の標高差が52cmとなることからこの溝はたいへんゆるやかな傾斜をもって流れていたと考えられる。しかしながらこれだけの規模を有する溝であることから、当地では主要水路であったと推測される。

この溝の形成は微・細砂層で形成された東側の微高地と砂礫層で形成された西側の微高地の間に古くから「たわみ」の水筋を踏襲されたものであり、古くは弥・中・Ⅱ以前と考えられる中溝-12も同様である。一方微高地南側は開析部にあたり、その西縁辺部に沿ってこの溝は形成されたものと思われる。この溝以降、古墳時代前期に至る期間この開析部縁辺では西溝-3・4+中溝-4のように水制が数回なされ、南に広く広がる開口部では水田経営が行われるようになったと考えられる。ただし開田時期がどこまで遡るかは残念ながら定かではない。遺物は弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期の土器を中心に石器・土製品など多量の出土がみられ、西溝-2では弥・後・Ⅰ～Ⅳ期までの幅広い時期の土器が認められている。このほかに当地では数条程度の溝を確認しているが、機能など詳細については不明である。

2. 遺物について

弥・中・Ⅱ期以前の土器

当地の出土遺物のうち上限を示すものは、縄文時代後期後葉から晩期にかけての野400～404、中1・2・739などがあり、その多くの器面は磨滅している。つづいて古相を示すものとして弥・前・Ⅱ～Ⅲ期の遺物で、野460～461・543～546、中3～5・1104・1113などがみられる。いずれも小片で少量の出土であり、このうち遺構に伴うものは認められなかった。また現在のところ弥・中・Ⅰ期の遺物は確認されていない。これに検出されている遺構をみると当地の定住化は弥・中・ⅡないしⅢ期以降であったと考えられるが、中屋調査区の東側では弥生時代中期前葉に比定される焼失住居が検出されていることから³⁶、微高地全体では当地よりも早い時期に別所で集落構成がはじまっていたようである。なお現在同地域は整理の段階であり、正式報告によりこの実態が明らかになる。

弥・中・Ⅱ期の土器

弥・中・Ⅱ期の土器様相について備中南部の内陸部ではこれまでほとんど判然としなかったが、今回の調査では比較的まとまった出土をみている。

弥・中・Ⅱ期は弥生時代中期中葉に比定される時期であり、従来から菰池式として呼称されてきたものである³⁷。現在までに提示されている編年案を概観してみると、高橋護氏は雄町遺跡の編年案で同期を船山5類、菰池式、雄町4類と3分類している³⁸。山磨康平氏は高本遺跡の整理のなかで同期を2期に分け、高本Ⅰ式を菰池式に包括されるものと考え、高本Ⅱ式を菰池式と前山Ⅱ式の間に位置するとしている³⁹。伊藤晃氏は城遺跡で同期を3期に分け、中期2は畿内第Ⅲ様式(古)、中期3は畿内第Ⅲ様式(新)、中期4は畿内第Ⅳ様式(古)にそれぞれ併行関係をみている⁴⁰。高橋護氏は弥生土器を10期29型式に細分するなかで、これらをそれぞれⅣ-a～c期に対応させている⁴¹。神谷正義氏は南方遺跡(国立病院)の調査で畿内第Ⅱ・Ⅲ様式に対応するものとし南方Ⅱ・Ⅲ期を設定し、両期ともa～cに細分を行っている⁴²。平井泰男氏は百間川遺跡群の中期土器を検討するなかで百・中・Ⅱを古相、中相、新相の細分を説明している⁴³。

最近では正岡睦夫氏は備前第Ⅲ様式を設定し、将来中間の様式設定の可能性を指摘しつつ、2期に分け、Ⅲ-1様式は高橋編年のⅣ-a期と一部Ⅳ-b期を、またⅢ-2様式は同編年のⅣ-c期に比

定させている⁴⁴。高畑知功氏は備中第Ⅲ様式を設定しこれを3期に分け、Ⅲ-1様式は高橋編年のⅣ-a期、またⅢ-2・3様式は同編年のⅣ-c期に比定させている⁴⁵。藤田憲司氏は中期土器編年の整理のなかで同期を2期区分し、前半期に百間川中期1新しいし神谷編年南方Ⅱc~Ⅲa期をおき、後半期は要素として2小期に細分されるものを含むとされるが、菰池式に代表される一群を設定している⁴⁶。また高橋編年との関係を見ると前半期はⅢ-b~Ⅳ-a期に、後半期はⅣ-b期にそれぞれに相当するとされる。平井典子氏は中期中葉から後期前半の土器の検討で、該期を内面ヘラケズリ技法や凹線文の出現をもって中-II a期と中-II b期の2期に分けている⁴⁷。また同氏は中期の土器と集落をみるなかで該期をⅢ-1期とⅢ-2期の2期に分け、前者を高橋編年のⅣ-b期に後者を同編年のⅣ-c期にそれぞれ対比している⁴⁸。

以上、それぞれの編年案をみるといわゆる菰池式土器との新旧関係や貼付突帯文や凹線文の出現と展開、新器種の出現と型式変化、内面ヘラケズリ技法の出現などがそれぞれの細分の画期となっているようであるが、各氏により微妙な差異も窺える。今回ここではこの期の新出属性である凹線文の有無を細分の基本的な拠り所とし、Ⅱ期を古相と新相の2期に分け、おおむね古相を高橋編年Ⅳ-a期に、新相を高橋編年Ⅳ-b~c期に比定させることで説明を行っていく。

古相を示すものとして、西797~799・1028・1029、中46・175・200・337・1106・1107のように弥・中・Ⅰ期に系譜をもち、頸部に数条の刻目貼付突帯を施す壺や西274・837、中202・1052のように肥厚させた口縁部に綾杉文ないし格子文を行い、頸部に2段の指頭圧痕を施す幅広突帯をもつ壺がみられる。また西840・1037は大きく外反する頸部の口縁端部に刻目を施すものである。このほか中1109のように肥厚気味な口縁端部に刻目をを行い、外面胴部に刺突文を施すものも認められ、これもほぼ同相のものとして推測される。

甕は短く屈曲した口縁部で肥厚させた端部に刻目を施す西813・814、中98・1067がみられる。西691・817~822・1049、中11・89はゆるく外湾するく字形の口縁を有し、口縁内面をナデ上げて、上方に丸みをもつ端部のものである。西810~812は短くく字形に屈曲する口縁に端部をやや肥厚させたものであり、西855、中87・182・305・339はこの形態の頸胴部へ指頭圧痕突帯を施したものである⁴⁹。いずれも胴部内面にはハケメ・ヘラミガキが看取されるが、口縁部はヨコナデで仕上げられており、口縁内面までヘラミガキが達するものはみられなかった。なお破片が多いため、一部新相のものを含む可能性がある。

新相を示すものとして、野462・547、中306・1105は肥厚させた口縁部に凹線を行い、頸部に2段の指頭圧痕を施す幅広突帯をもつ壺がある。西688・805・838・839・1041、中176・1108は頸胴部に指頭圧痕を施す突帯をもつ壺であり、直口する西838と口縁部欠損の西839以外はいずれも口縁端面に凹線を施し、刻目等の加飾を行っている。一方、西800・804、中76・303・304・333は1ないし2条の断面三角形の突帯を頸胴部に施す壺である。中71は頸胴部に3条の凹線を施すものであり、前述の三角形突帯をもつ壺より後出と思われる。

また破片のため全体がつかめないが垂下口縁をもつ野550・551、西801・1035・1038、中177・332・334や肥厚した口縁端部をもつ西277、また口縁端部をヨコナデにより平坦に仕上げた西1036・1037、中289~291などにはそれぞれの口縁端面に凹線を施し、口縁内面も含め刻目や貼付文や沈線文による加飾がなされている。同様に胴部片の西802・803・1030~1034、中292・293では多様な加飾が施されている。この施文には弥・中・Ⅲ期まで引き続いて認められるものがあり、これらにも時期が

下るものを含む可能性がある。無頸壺としては西276・中77・178・179・287・288が認められ、口縁部に凹線を施し棒状浮文を加飾するものが多い。

甕は中86のように短く屈曲した口縁部の肥厚させた端部に凹線と刻目を施すものがみられる。また中57・97のように短く字形に屈曲する口縁の頸部に指頭圧痕突帯を施し、口縁端面に凹線を行うものが認められる。形態的には古相とした一群とほとんど差異がないといえる。

高杯をみると、水平口縁をもつものうち野549・中299・1077は端部を丸く収めており、西825・862は面取りを行っている。また、野406・西1050はやや下降する口縁に端部が尖り気味である。このほか西1051・1052、中13・1479・80・92などは皿形の形態を呈するものである。脚部では野465・中93などがそれにあたると思われる。これらの新旧関係は判然としないが、弥・中・Ⅱ期を通じて認められる土器である。

鉢もしくは高杯は野466・467・548、西828～831・868～871・1039・1040、中216・300・301・1094・1095のように口縁外面に凹線に刻みを行い、平坦に肥厚した端面には貼付文や沈線文による加飾がなされ、一部に円孔を行っているもの認められる。野464、中50の体部と脚部の変換点には指頭圧痕突帯を貼り付け、西835・中78には断面三角形の突帯を施している。これらは壺の頸胴部で見た加飾と軌を一にするものと考えられる。これらは新相の所産と思われる。

器台は野468が認められ、刻目貼付突帯に棒状浮文を施し方孔を穿つものである。これは新相になり出現した器種である。

以上、弥・中・Ⅱ期を凹線文の有無を基準とし古相と新相の2期に分けて出土土器をみてきた。大局的にはこのような変化はみてとれると思われる。しかしながら凹線文の出現が壺の口縁部からはじまり、その後、壺の頸部や甕や高杯などの他器種へ用いられていたとするならば、壺と他器種の間新旧関係が生じることになる。また凹線文の出現以降も口縁端部はヨコナデのみを行い、無施文のままであった土器も存在していたとも考えられ、その場合同時併存のものも二分してしまっている可能性もある。つまり、ここで分類した土器相のなかに、実際はさらに搬出できるものや搬入できるものの可能性が残されていると思われる。また明確に一線を引いたために、実相であった漸移的な土器変化を捉えられなかった恐れもある。ただし、当地周辺で良好な遺跡や一括性の高い土器群が確認されない現時点ではここまでしか言及できないと思われる。これらの問題点は今後の調査による資料増加による解決を待つことにしたい。

弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期の土器

弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ期の土器様相の問題は既に土器の発色と胎土分析の結果から整理を行っている⁵⁰。ここではこの時期の一樣相を示すと思われる西土-57、中土-97の出土土器について若干触れてみたい。

西土-57は報告により弥・後・Ⅰ期の古相に位置付けている遺構である。土器は壺755～761、甕762、高杯764、器台765・766などが出土している。これらの土器の発色はいずれも灰白色または鈍黄橙色・鈍橙色を呈し、いわゆる褐色系のもは含まれていなかった。胎土分析ではこれらは同一のプロットに収まるとの結果を得ている⁵¹。

個々の土器をみると、壺755～760は器壁が全体的にたいへん薄く仕上げられており、形態は肩部があまり張らない体部から短く直口气味に立ち上がる頸部に外上方に外反する口縁部を有している。また口縁端部の拡張は垂直またはやや内傾するように短く折返し、端面には凹線を施している。頸部外面に

は凹線とも強いヨコナデともつかぬ調整が行われている。内面は胴部下半にヘラケズリがみられるものの、上半はハケメに成形時に付いたと思われる指頭圧痕が口縁部下まで及んでいる。壺761もたいへん薄い器壁で、外面胴部には2段に刺突文を施している。口縁端部の拡張部は上下ともにはねあがる形状で、端面には凹線が認められる。内面のヘラケズリは胴部中位付近までしか達していない。

甕762も器壁は薄く、口縁端部は上下に拡張し端面には凹線がみられる。高杯764はわずかに外反気味に立ち上がる杯部に無文化した口縁を有し、端部がわずかに肥厚しつつある形態である。器台765・766は器高の高い形態に凹線と方孔により加飾された土器であり、外下方に垂下した口縁部の端面には鋸歯文が施されている。

中土-97は報告で弥・中・Ⅱ期の新相と弥・後・Ⅰ期の古相に位置付けている遺構である。土器は壺981～990、甕991～996、高杯997・998などが出土している。これらの土器の発色をみると壺981～990、高杯997はいずれも灰黄色または鈍黄橙色・鈍橙色などの灰色系を呈し、甕991～996、高杯997は橙色・赤色・鈍黄橙色・鈍赤褐色・鈍褐色など褐色系と考えられるのものであった。なおこれらの土器については胎土分析を実施していない。

土器をみると、壺983～986・988～990は前述の西土-57の壺755～760と同様の特徴を有している。成形時の指頭圧痕により器壁は薄く仕上げられているものの、器面の凹凸が激しい。壺981・982・987は大型品であり、ゆるく外方に開口する頸部と上下に拡張された口縁部の端面にそれぞれ凹線を施し、壺981には棒状浮文を、壺987には口縁内面に波状文が加飾されている。

甕991は丸みを帯びた体部に短く字形に屈曲する口縁が付き、肥厚させた端部にはヨコナデ風の凹線が施されている。内面ヘラケズリは胴部中位付近よりやや上まで及んでいる。甕992は小型品で短く字形に屈曲する口縁が付き、上部に拡張させた端部にはヨコナデないし凹線を行っている。甕993は大型品と推測され、上下に拡張させた口縁端部には凹線を行い、頸部には指頭圧痕による刻目が認められる。内面ヘラケズリは頸部変換点付近まで達している。甕994は球形に近い体部に外方に開く口縁部に内傾する端部を有し、端面に凹線を施している。胴部上半には成形時の指頭圧痕が明瞭に認められる。また甕991・992・994の外面胴部にはそれぞれ刺突文が行われている。甕995・996はいずれも長胴であり、短く屈曲する口縁部の肥厚もしくは拡張させた端部にはヨコナデもしくは凹線が施されている。内面ヘラケズリは胴部上半まで及んでいる。

高杯997・998はいずれも脚部のみ確認しており、前者は脚杯部に沈線を施し、後者は脚裾部に未完通の円孔を行っている。また両者とも脚端部はシャープさがみられない。

以上、2つの土壌より出土した土器をみてきたが、これら一群の土器は上東・鬼川市0式（仮称）の標識遺構となった上東遺跡・東鬼川市調査区P-151土壌⁵²や上東遺跡・東鬼川市調査区7-P-52土壌⁵³の出土土器との併行関係が考えられる。しかしながら前述した個々の土器の特徴を従来の編年観に基づいてみると、西土-57の壺755～761や中土-97の壺983～986・988～990では中期色が看取されるのに対し、西土-57の高杯764、器台765・766や中土-97の甕991～996、高杯997・998などの形態や調整からは後期土器の様相が認められる。この点についてはこれら一群の土器がすべて混入であるとも指摘できようが、例えば中土-97の遺物出土状況が示す極めて高い一括性はこのような考えに再考を促すものといえ、本来この状況こそが該期の土器組成の実相を示しているとも考えられる。またその場合、壺と他器種とでは土器変容に時期差が生じているともみてとれ、土器の発色の差異つまり胎土選択の違いも含め興味深い現象である。

加えて上記の壺の形態に着目すると、口縁端部の拡張が垂直気味に短く折り返す端面に凹線を施す収め方は、中袋土-10の壺798や中土-100の壺1002~1005、中土-101の壺1018など、当遺跡では比較的多く認められている。しかし、百間川遺跡群⁵⁴をはじめとする備前地域はもちろん、当遺跡より3 km南に位置する上東遺跡^{40,41}でもこの形態の壺は確認されておらず、南溝手遺跡⁵⁵から出土した建物3の壺1528・1529や土壙128の壺1703・1704程度が共通した特徴を示す土器と言える。つまり、この形態の壺は備中中央部を中心とした比較的狭い範囲で出現する型式の可能性が考えられ、弥生時代中期後葉（Ⅳ期）は旧国単位・平野部・山間部・島嶼部等で若干の地域差がみられるとされる土器様相と合致しよう⁵⁶。特に壺が中期色を保持しつつ、そのなかで独自の土器変容を遂げながら地域性を示すことは示唆に富むと言える。

なお、高畑知功氏は郷内小学校裏山遺跡⁵⁷資料の壺・甕にみられる口縁拡張部の折返しをとらえて、前述の7-P-52土壙の資料をⅣ-3様式に、P-151土壙の資料をⅣ-4様式にそれぞれ細分している⁵⁸が、これらの一群の土器はⅣ-4様式の一様相としてとらえられるものと思われる。

該期の土器については、竪穴住居や袋状土壙、溝を中心に良好な資料が認められ、今後も継続的に詳細な検討が加えられることにより、弥・中・Ⅲ~弥・後・Ⅰ期の過渡的な土器様相が明らかになるう。

3. 小 結

本節は今回までに明らかになった弥生時代の津寺遺跡の様相について遺構・遺物に分けてそれぞれみてきた。遺構については、竪穴住居の床面構造や袋状土壙の機能・用途に関して問題の提示と、それに対する若干の検討・予察を加えた。また遺物については、弥・中・Ⅱ期の細分と弥・中・Ⅲ~弥・後・Ⅰ期の過渡的な土器様相について触れた。津寺遺跡の報告書は5分冊の予定であるが、このたびは3冊目の刊行にあたる。今後の整理は遺跡の中央から東側部分に対象が移るが、ここでは現在まででは判然としなかった弥生時代前期から中期前葉の遺構・遺物が確認されている。したがって報告の完了をもって弥生時代全般を通じた遺跡の実態が明らかになるものと思われる。また既報告の豊富な資料から今後も多角的な検討が加えられ、新知見が出されるものと期待される。（澤山）

註1. このほか、弥・後・前期が4軒(6.6%)、弥・後・後期が1軒(1.7%)、弥・後が3軒(5.1%)の割合で報告されている。

2. 藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」『考古学研究122』1984

3. 宮本長二郎「住居と食事」『弥生文化の研究7』雄山閣、1986

宮本長二郎「住居」『岩波講座日本考古学4』岩波書店、1986

4. 石野博信「人の移動と居住型の地域性」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館、1990

5. 都出比呂志「住居と消費生活の単位」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店、1989

6. 高田恭一郎「煤付着土器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』岡山県教育委員会、1995

7. 西川卓志「弥生時代の煮沸形態とその変遷」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』1983

藤田至季子「古墳時代前期の煮沸形態について—矢部遺跡を中心に—」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49』1986

8. 中間研志「松菊里形住居—我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究—」『東アジアの考古と歴史 中岡崎敬先生退官記念論集』同朋舎、1987

9. 北部九州では弥生前期~中期前半に集中し、以外では若干時期の下降するものもみられるとされる。

10. 例えば、南溝手遺跡竪穴住居9、奥坂遺跡No34・No66住居址、沼E遺跡1号住居址、赤野遺跡1号住居址、押入西遺跡1号・7号住居址、竹ノ下遺跡4号・7号住居址、西吉田遺跡住居址3・6・7・9、崩レ塚遺跡住居址2・4、一貫西遺跡住居址4、大畑遺跡住居址17・18、別所谷遺跡住居址2・6・7、野村高尾遺跡住居址3などが該当すると思われる。
11. 保田義治「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市教育委員会、1989
12. 行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会、1990
13. 橋本惣司・山磨康平・岡田 博「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会、1973
14. 河本 清・橋本惣司・下澤公明ほか「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会、1973
15. 高畑知功・福田正継「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53』岡山県教育委員会、1983
16. 行田裕美・小郷利幸・平岡正宏「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告47』津山市教育委員会、1993
17. 行田裕美「別所谷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告49』津山市教育委員会、1994
18. 中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告11』津山市教育委員会、1982
19. 石野博信氏の分析にしたがって焼失状況から出火場所を推測するならば、床面中央付近で炭・炭化材があまりみられない西住-1は、その部位の建築材が完全燃焼してしまったと考えられ、出火場所が住居内中央であったと推測される。一方、床面のほぼ全面に炭・炭化材や焼土塊が確認される西住-24や中住-15は、住居外の複数地点からの出火であるとも想像される。
石野博信「火災住居跡の課題」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館、1990
20. 他遺跡において住居構造が推測される焼失住居としては南溝手遺跡竪穴住居5、門前池遺跡25号住居址、菰池遺跡竪穴住居1などが挙げられる。
21. 亀山行雄「土器棺墓について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995
22. 大橋雅也「西川調査区の袋状土壌について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995
23. 註22文献
24. 註22文献
25. 木下正史「貯蔵と調理」『弥生文化の研究2』雄山閣、1988
26. 光永真一「足守川加茂B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995
27. 袋状土壌が多数確認され、掘立柱建物がほとんど検出されていない遺跡としては、当遺跡をはじめ、足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡などが挙げられ、その状況と逆の傾向を示す遺跡としては百間川遺跡群などがある。
28. 江見正巳「結語」『足守川矢部南向遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995
29. 県南の沖積地で確認された遺跡のなかで、井戸がわずかもしくは全くみられぬ代わりに袋状土壌が多数検出された遺跡は、当遺跡を始め足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡などがあり、袋状土壌は検出されないものの井戸を多数確認した遺跡は、百間川遺跡群・鹿田遺跡・上東遺跡などが挙げられる。
30. 例えば奥坂遺跡・大岩遺跡・天神原遺跡・上野遺跡・荒神遺跡・稼山遺跡・大田十二社遺跡などが挙げられる。
31. 枝川 陽・新東晃一・松本和男ほか「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9』岡山県教育委員会、1975
32. 山磨康平「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91』岡山県教育委員会、1994
33. 松岡浩太郎「大岩遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告23』岡山県教育委員会、1993
34. 橋本惣司・村上幸雄「稼山遺跡群Ⅰ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』1979
35. 註34文献
36. 二宮治夫「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告21』岡山県教育委員会、1991
37. 正岡睦夫「時期区分について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995

38. 高橋 護「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会、1972
39. 山磨康平「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会、1975
40. 伊藤 晃「倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会、1977
41. 高橋 護「山陽」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社、1983
42. 出宮徳尚・神谷正義 「南方遺跡(国立病院)発掘調査報告」岡山市教育委員会、1981
43. 平井泰男「弥生時代中期の土器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会、1982
44. 正岡睦男「備前地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰—』木耳社、1992
45. 高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰—』木耳社、1992
46. 藤田憲司「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社、1992
47. 平井典子「弥生時代からみた備前・備中南部とその周辺」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社、1992
48. 平井典子「弥生時代中期の土器と集落(岡山県)」『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会四国支部第八回大会資料、1994
49. この一群の土器に対し、紫雲出遺跡では壺形土器E、百間川平井編年では甕Dとして分類している。
小林行雄・佐原 真『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会、1964
50. 中野雅美・大橋雅也・澤山孝之「まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995
大橋雅也「集落の変遷について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995
51. 白石 純「津寺遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会、1995
52. 伊藤 晃・柳瀬昭彦ほか「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2』岡山県教育委員会、1974
53. 柳瀬昭彦・江見正巳・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会、1977
54. 江見正巳「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会、1980
正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』岡山県教育委員会、1984
平井 勝・宇垣匡雅「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88』岡山県教育委員会、1994
平井 勝「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』岡山県教育委員会、1995
正岡睦夫・高畑知功「百間川兼基遺跡Ⅰ・百間川今谷遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会、1982
55. 平井泰男「南溝手遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会、1995
56. 註48文献
57. 高橋 護「郷内小学校裏貝塚出土弥生式土器の編年位置について」『遺跡23』1955
58. 註45文献

第3節 古墳時代の竪穴住居

1. 竪穴と上屋

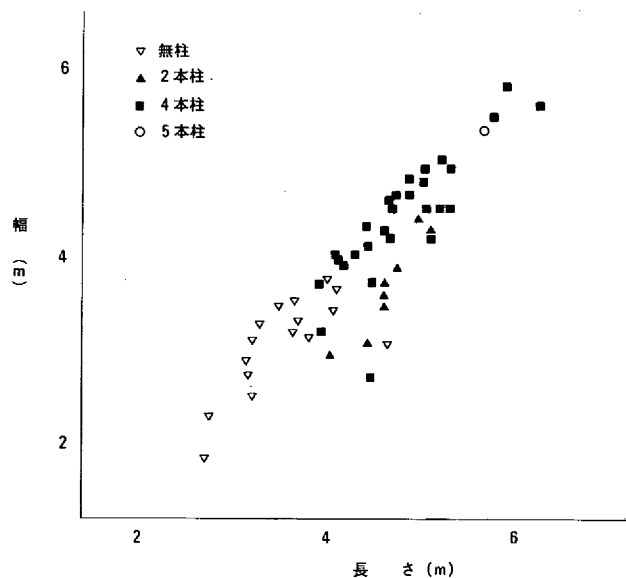
竪穴の構造

津寺遺跡で検出された140軒の竪穴住居は、弥生時代中期後半から古墳時代後期後半にわたっているが、ここでは古墳時代前期のものを取りあげる。

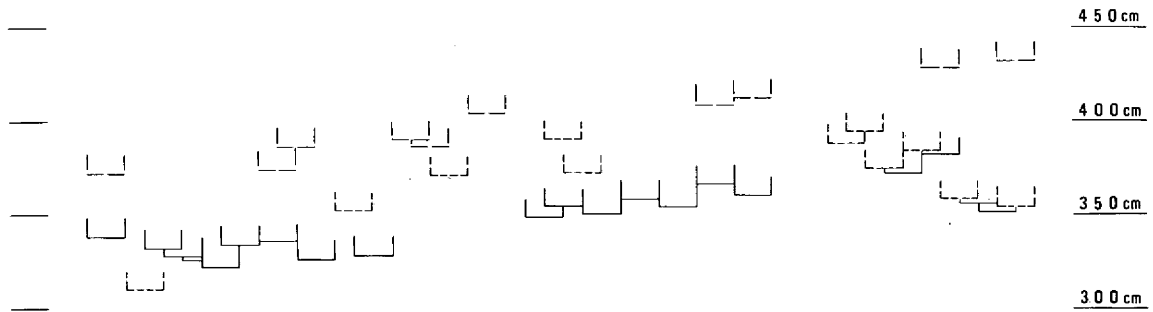
古墳時代前期における竪穴住居の平面形は、多角形、隅丸方形、方形がある。このうち、多角形や隅丸方形の平面形をとる竪穴住居は比較的古いものに多い。その規模は、一辺が2.5～6mで床面積は7～35㎡を測るが、これらは一辺2.5～4mあまりで床面積が7～14㎡前後の小型と、一辺4～5.5mで床面積が14～28㎡の中型、一辺5.5m以上で床面積が30㎡を越える大型に分けられる(第29図)。その構成比は、小型住居が19軒で21%、中型が66軒で72%、大型が6軒で7%と、中型住居がその大半を占める。こうした竪穴規模と主柱との関係をみると、小型住居(A類)では柱をもたないものがほとんどである。これに対し中型の住居では、2本柱のもの(B類)と4本柱のもの(C類)とがある。2本柱の住居は、長さが3～5.5mとC類に等しいが、幅は3～4.5mと短く、平面長方形を呈する。また、その面積も14～22㎡とやや小規模なものが多い。大型住居(D類)では4本柱のほか多角形平面をとる関係から5本以上の多柱のものが見られる(表3)。

竪穴の深さは、最大で91cmを確認できるが、後世の削平を受けているため正確には把握できない。そこで床面の標高を比較すると、北から南にかけて低くなる傾向が認められるが、これは主として旧地形を反映したものと考えられる。これを時期別にみると、弥生時代の住居が3.9～3.5m(平均3.7m)、古墳時代中期以降の住居が4.1～3.7m(平均3.9m)を測るのに対し、古墳時代前期では3.8～3.2m(平均3.5m)とやや深くなっている(第30図)。これは、その後の堆積や削平によるものとも考えられるが、他の集落においても同様な傾向がうかがわれることからすれば住居構造に生じたなんらかの変化を反映したものである可能性が高い¹⁾。

ところで竪穴の掘削によって生じた土砂の量は、中形住居でおよそ20㎡にもなる。これらの土砂は、もっぱら竪穴の周囲に盛り上げて周堤を築いたり、屋根を葺き上げるのに用いられたと考えられる。実際津寺遺跡では、これらに由来するものと思われる地山土が薄い層をなして堆積している状況がしばしば認められた¹⁾。また総社市窪木薬師遺跡では、砂礫を盛り上げた幅2～2.5mの周堤が確認されている²⁾。仮に、これらの土砂を用いて幅2m前後の周堤を築くとすれば、30cmという高さが得られるが、これは群馬県黒井峰遺跡で確認された周堤



第29図 竪穴住居の主柱と規模



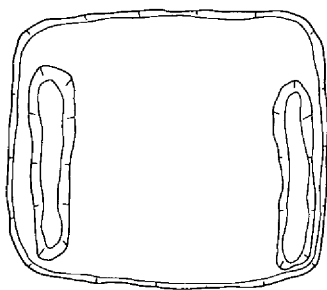
第30図 竪穴住居の深度模式図

(点線は弥生後期、実線は古墳前期、破線は古墳中期)

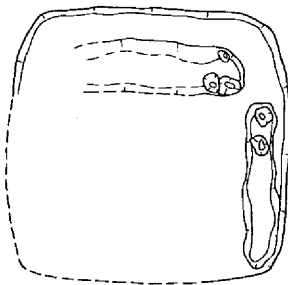
の規模に一致する³。したがって竪穴の深さは、本来1 m以上は確保されていたものと思われるが、これは人間が居住するのに十分な空間であったに違いない。

竪穴の底面には地山土を薄く貼って床を造るが、その下部に壁体に沿うようにめぐる幅1 m、深さ30~10cmほどの溝がしばしば認められた(第31図)。これは竪穴を粗掘りした際の痕跡とも思われるが、今のところ沖積地の住居に限って認められることからすれば防湿のための工夫とも考えられる。

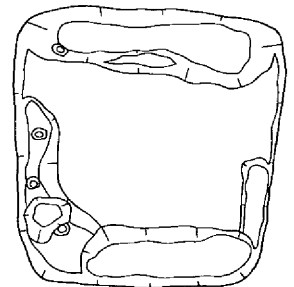
貼床は、住居の造替(拡張)よるもののほか、床面の補修としても頻繁に行われている。これは住居内における活動の中心となる中央穴の周辺において顕著に認められる。この貼床土の下部にはしばしば炭化物の広がり⁴が認められた。これは厚さ5 mmにも満たない薄層で、貼り床を施すにあたって草本類を燃やすなどして床面を乾燥させるとともに、防湿を目的として貼り床の下地としたものと考えられる。また、床面の周囲には幅10cm、深さ5 cmほどの溝がめぐっている。これは周溝、壁溝、壁体溝などと呼ばれるもので、津寺遺跡ではごく一部の例外を除けばほとんどの住居で認められた。その機能についてはこれまで板や網代などによる壁体を構築するためのものと考えられてきたが、実際にその痕跡が確認された例は少ない⁵。むしろ、住居外へ延びる排水溝がこの溝と連絡している状況からすると、排水を主たる目的とした施設であった可能性が強い⁶。しかしながら、居住段階でこの溝がどの程度機能していたかどうかは明らかでなく、今後詳細な観察が必要となる⁷。



竪穴住居-91



竪穴住居-86



竪穴住居-76

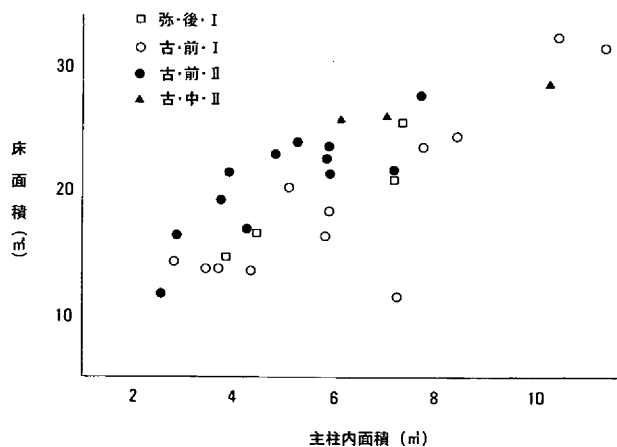
第31図 竪穴住居の下部構造 (縮尺不同)

- 註1. 総社市窪木遺跡では、古墳時代前期の住居の床面は平均標高6.8mであるが、中期以降は7.2mと浅くなっている。
 鳥崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1993
2. 焼失住居で炭化材を覆うように分布する焼土は、この屋根葺材に由来するものと考えられており、岡山市前池内遺跡の竪穴住居-3はこうした状況を示す良好な資料である。
 中野雅美「前池内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994
3. 註1文献
4. 以下、黒井峰遺跡に関する知見は群馬県子持村教育委員会石井克巳氏のご教示による。
5. 笹森健一「住まいのかたち」『季刊考古学32』1990
 宇垣匡雅はこの溝を先行する住居の壁体を撤去した痕跡と考えている。
 宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88』岡山県教育委員会、1994
6. 群馬県黒井峰遺跡や中筋遺跡では、壁面を網代で覆ったり泥土を塗るなどした状況が観察されている。
7. 宮本長二郎「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学32』1990
 本文では壁体溝と呼称したが、以上の理由からここでは壁溝として記述する。
8. 壁溝が居住段階で開放していたかどうかについては十分に明らかにされておらず、今後の検討課題と言える。

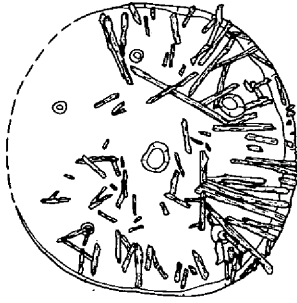
主柱と上屋

竪穴住居の上屋を支える主柱の掘り方は、直径30~50cmの円形ないし楕円形で、その深さは60cm前後である。柱痕跡が遺存していたものをみると柱材の直径は20~30cmほどであるが、古墳時代中期以降ではやや小ぶりになる傾向が認められた。その長さについては実物が遺存しないため明らかではないが、鳥根県西川津遺跡では2~3mほどの柱材が出土している。これらの主柱の数は、弥生~古墳時代を通じて4本が主流であるが、弥生時代後期では5本以上のものが多く見られる。また、古墳時代前期~中期では前述したように2本柱や柱を持たないものが多く見られるようになる。このうち、柱間は2m前後で、弥生~古墳時代を通じて一定しているが、古墳時代前期以降の大形住居では3mを越えるものがみられるようになる。これは、弥生時代の住居がもっぱら主柱の数を増やすことで住居の拡大を果たしていることからすれば、一定の技術的前進が認められる²。

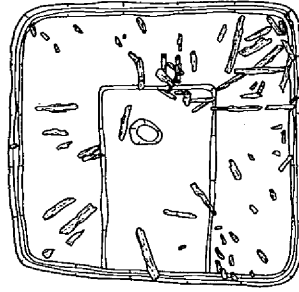
ところで、床面における主柱の位置を見てみると(第32図)、同一面積の住居において弥生時代のは古墳時代のものより主柱内面積は大きい。また、主柱内面積を同じくする住居にあっては、古墳時代のものは弥生時代のものより床面積が大きい。このことは、主柱と壁体との距離の差としてあらわれる。すなわち主柱と壁体との距離は、弥生時代で0.5~1.2m、古墳時代で1.5~2.0mと、時代が下るにつれ広がる傾向にある³。これはおおむね垂木の長さを反映すると考えられ、桁の長化とともに構造的進歩を認めてよい。しかし垂木の伸長は、これが支える上屋面積の拡大を意味し、たちまち荷重の増加に



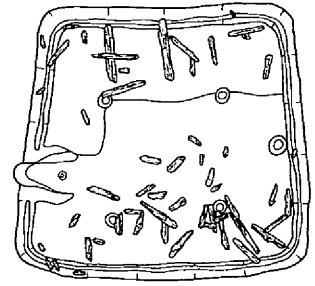
第32図 床面における主柱の位置



門前池遺跡住居25



窪木薬師遺跡住居9



西川調査区住居49

第33図 焼失住居にみる上屋構造 (縮尺不同)

つながってしまう。ここで前述した竪穴の深さを考慮すれば、竪穴の深い古墳時代の住居では十分な生活空間が確保されるため、弥生時代の住居のように上屋の傾斜を急にする必要はない(第34図2)。したがって垂木の伸長とは言いながら、実際には上屋の傾斜を変えるなどして垂木の著しい伸長を防ぐとともに、過度の負荷を克服していたものと思われる。また、浅い竪穴をもつ古墳時代中期以降の住居では、カマドの採用に併せて壁を地上に立ち上げることで居住空間を確保していたことが予想される。その結果、これまで地山に据えられていた垂木尻は壁によって支えられることとなり、壁の位置をこれまで垂木が据えられていた場所まで拡大することが可能となったはずである(第34図3)。しかもこの時期の住居では、前代よりも垂木の間隔が広がることから、土葺きから草葺きへの移行が推定される(第33図)。これによって上屋の荷重は大幅に軽減され、垂木の伸長すなわち住居面積の拡大を果たすことができたものと思われる。

註1. 内田律雄『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ・Ⅴ』高根県教育委員会、1988・89

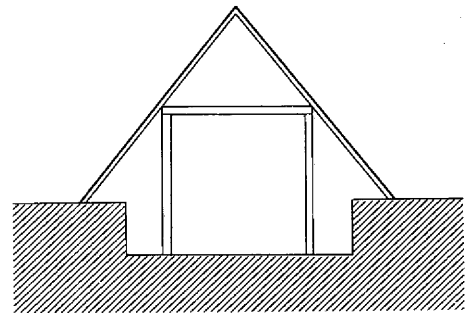
2. 村上幸雄「竪穴式住居址について」『椋山遺跡Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会、1979

3. 4本柱の住居では、主柱内面積が床面積に占める割合が時代が下るにつれ減少するように見えるが、実際には床面積が増大していく傾向にある。

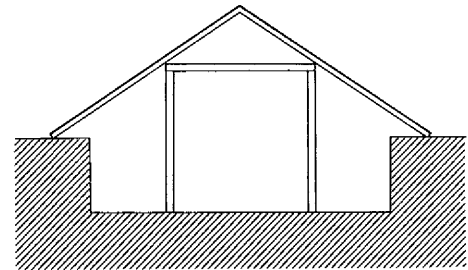
4. 群馬県黒井峰遺跡では、周堤に遺存していた垂木尻が30°の傾斜を保っていたことが報告されている。

5. 津山市押入西遺跡の住居では、幅50cmのテラスに垂木尻を据えていたことが報告されている。また群馬県黒井峰遺跡でも、垂木の出は30cmほどであったことが観察されている。

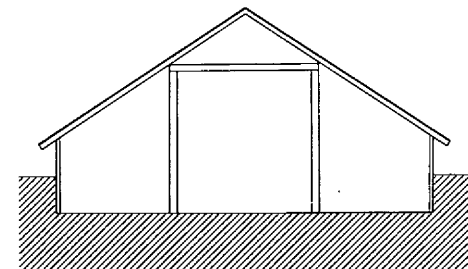
井上弘・橋本惣司ほか「押入西遺跡」『岡山市埋蔵文



1. 弥生後期



2. 古墳前期



3. 古墳中期

第34図 住居構造の変遷

類 型		A 類	B 類	C 類	D 類	計
構 成	軒 数	19軒	11軒	55軒	6軒	91軒
	構 成 率	21%	12%	60%	7%	100%
規 模	長 さ	2.5~4.0m	4.0~5.0m	4.0~5.5m	5.5~6.5m	2.5~6.5m
	幅	2.5~4.0m	3.0~4.5m	4.0~5.5m	5.5~6.5m	2.5~6.5m
	床 面 積	7~14m ²	14~22m ²	14~28m ²	22~33m ²	7~33m ²
主 柱	本 数		2 本	4 本	4・5本	2・4・5本
高 床 部	類 型	I 類	II・IV類	IV 類	IV・V類	I~V類
	保 有 数	5/15軒	6/11軒	27/44軒	5/5軒	40/75軒
	保 有 率	33%	55%	61%	100%	59%
中 央 穴	保 有 数	10/15軒	10/11軒	32/34軒	4/4軒	56/64軒
	保 有 率	67%	91%	94%	100%	86%
方 形 土 壙	保 有 数	10/15軒	10/11軒	19/27軒	2/5軒	41/58軒
	保 有 率	67%	91%	70%	40%	71%

表3 竪穴住居の類型

化財発掘調査報告書3】岡山県教育委員会、1974

6. 弥生~古墳時代前期の焼失住居では、径10cmの垂木が密に配されている状況がうかがわれる。宮本長二郎はこれを土で葺いた上屋を支えるための構造と理解した。実際に、群馬県黒井峰遺跡では厚さ10cmの土で葺いた上屋が確認されており、津寺遺跡でも多くの住居で地山土の薄い堆積が観察されている。これに対し古墳時代中期の焼失住居では、垂木が30cmほどの間隔をもって配されている。この時期の焼失住居は、炭化材の遺存状況が総じて悪いが、これは前代の住居が火災に遭うと土屋根の重みによって半焼のまま倒壊するのに対し、この時期の住居は草葺き屋根のため全焼することが多いことによるものとも考えられる。宮本長二郎「穴の中から床上の生活へ」『日本古代史5』1986
宮本長二郎「住居」『岩波講座 日本考古学4』1986

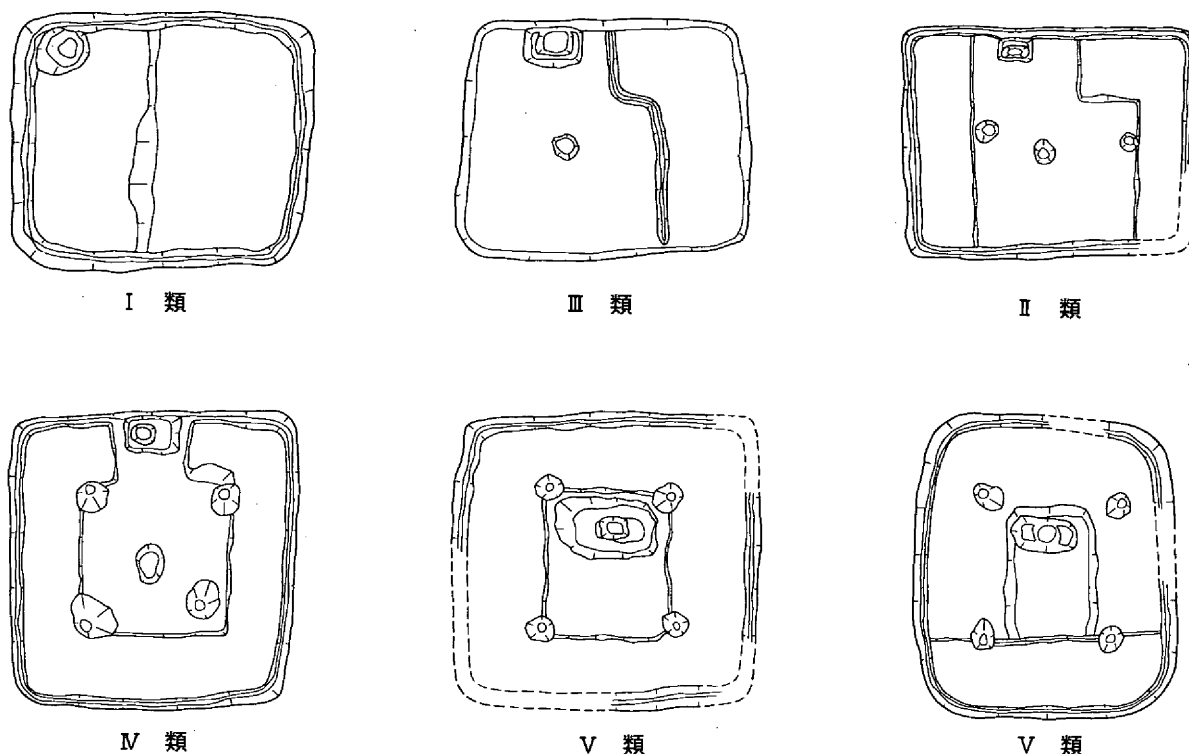
2. 付属構造

高床部

壁体と主柱の間の幅1~1.5mほどの床面を、土を盛り上げて10cmほど高くしたもので、一般にベッド状遺構とよばれている。その内縁には、しばしば浅い溝が認められるところから、その構築にあたって板材による仕切りが設けられていたものと推定されている。高床部は主柱の外周に設けられることが多いことから、その規模は主柱と壁体の距離と一致し、時期が下るに連れ幅が広がる傾向にある。

岡山県では弥・後・Ⅲ期に出現し、古・中・Ⅰ期まで認められる。津寺遺跡では高床部をもつ住居が占める割合は59%であったが、これは高床部の保有率が高いとされる弥生後期の九州地方が30%であることを考えれば、全国的に見てもきわめて高率と言える。

この高床部を類型化すると、一辺につくりつけるⅠ類、対向する二辺につくりつけるⅡ類、隣あう二辺につくりつけるⅢ類、三辺につくりつけるⅣ類、周囲につくりつけるⅤ類に分けられる(第35図)。これを前述した住居の類型と高床部の関係を見ると、小型の住居ではⅠ類が見られるが、その保有率



第35図 高床部の類型

は33%と低い。中型住居ではIV類が主体をなすが、2本柱のB類ではII類が特徴的に見られた。また、大型のD類にはIV類とV類が見られた。津寺遺跡全体としてみると、I類が3例、II類が1例、III類が2例、IV類が25例、V類が9例とすべての類型が認められたが、とくにIV類が最も多く、高床部をもつ住居全体の62%を占める²。これはI・II類型が主体となる九州地方と大きく異なるところであり、この地域の特色をなしている³。また、初期の高床部にはV類が多いが、この時期に至ってIV類が増加するのは方形土塼の出現と深くかかわっているものと思われる⁴。

註1. 宮本長二郎は高床部を設ける以外にも、仕切りを設けることで寝床を区別する場合があったと想定している。

宮本長二郎「ベッド状遺構と屋内施設」
『季刊考古学32』1990

2. 三辺に高床部をつくりつけるIV類の中には、中辺の高床部を一段高くするものが見受けられる。

3. 註1文献

4. IV類については出入り口との関連を説く向きもあるが、方形土塼の出現以前ではV類が主体であったことを思えば、IV類盛行の要因は方形土塼の設置にあるものと思われる。

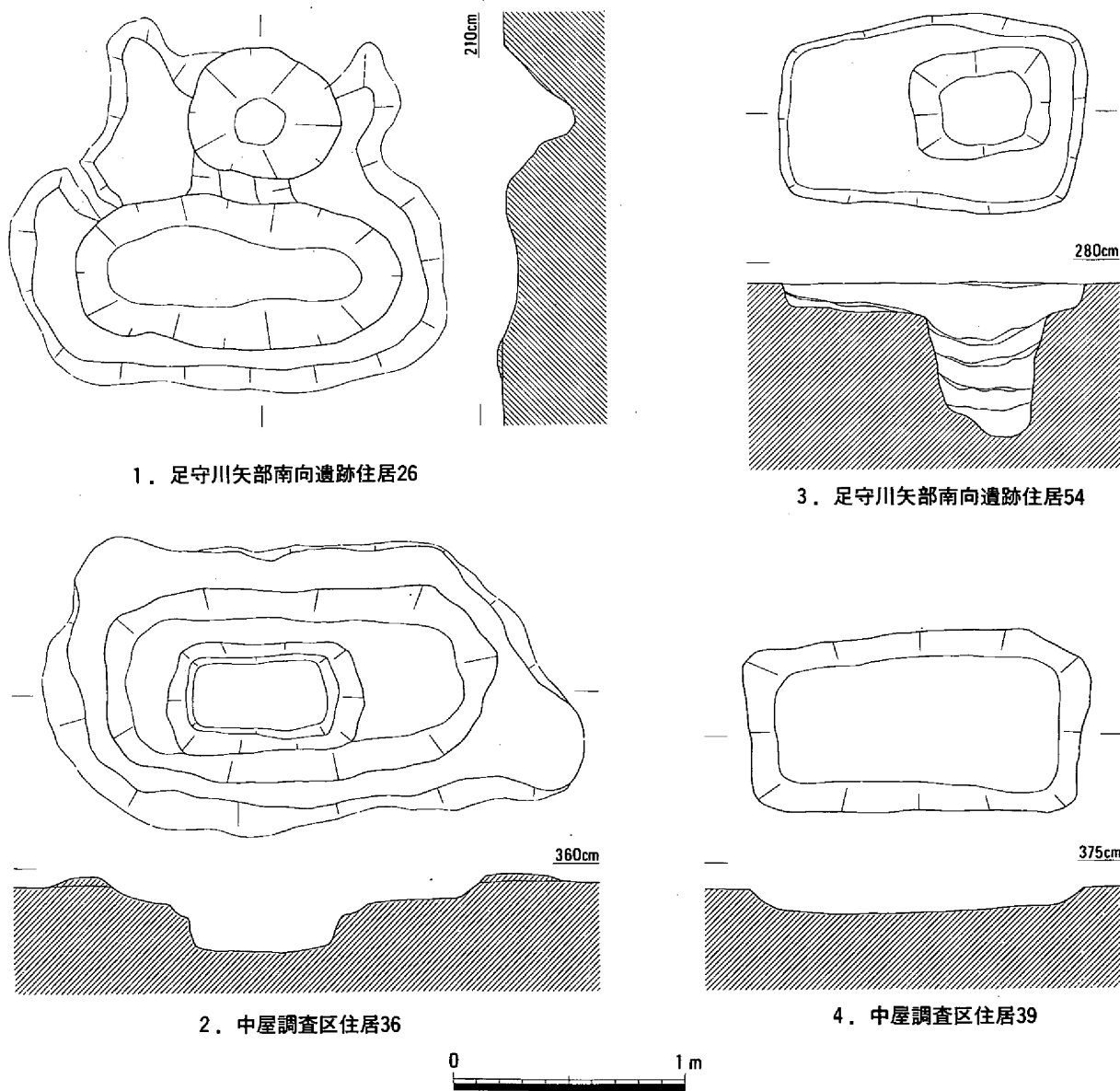
類 型	堅 穴 住 居				計	
	A類	B類	C類	D類		
高 床 部	I類	1		2	3(8%)	
	II類		1		1(3%)	
	III類	1		1	2(5%)	
	IV類	2	5	17	1	25(62%)
	V類	1		4	4	9(22%)
計	5(12%)	6(16%)	24(60%)	5(12%)	40(100%)	

表4 住居類型と高床部の関係

中央穴

住居の床面中央に設けられたピットで、津寺遺跡では弥・中・Ⅲから古・前・Ⅱにわたって認められる。その保有率は86%で、検出された住居の大半で認められたが、小型住居の保有率は67%とやや低くなる。その規模は径80~40cmほどの円形ないし楕円形を呈しており、深さは10cm前後の浅いものが大半であるが、堅穴住居-13のように40cmと深いものもある²。また、弥生時代末の住居では、中央ピットの周囲に土を盛り上げて土堤を造り出しているものも見られた。これらの中央穴にはしばしば熱を受けた痕跡が見られ、底部には炭や灰の堆積が認められることからほぼ炉とみなしてよいものである。

ところで岡山県では、床面の中央に土壙を設ける住居は弥生前期から古墳前期にかけて認められ、その保有率は各時期を通じて高い³。中央穴の平面形は円形ないし楕円形で、津寺遺跡のものと大差ない。しかし、その深さは10cmに満たない浅いものから100cmを越える深いものまでみられ、とくに弥



第36図 特殊な中央穴 (1/30)

生後期に深いものが集中する⁴。また、この時期には二段に掘りこむ特殊なものが見られる。こうした中央穴の機能について、津山市沼遺跡では被熱痕跡が見られず、蓋の存在を推測させるような二段の掘りこみが見られることから貯蔵穴とする見方が出された⁶。鳥取県福市遺跡でも、中央穴から鏡片が出土したことなどから特殊な性格をもった貯蔵穴と推定された⁷。この考えは青木遺跡においても継承され、中央穴と方形土壙との形態的類似から、祭祀にかかわる土壙が中央から壁際に移動したものと考えた⁸。また宮本長二郎は、貯蔵穴を主体としながらも地床炉や柱穴と推定されるものも含まれているとして、中央穴に多様な機能を想定する⁹。これに対し、中央穴の埋土に炭や灰が認められることに着目した都出比呂志は、中央穴に被熱痕跡が認められないのは内部に灰を詰めて使用したことによるものとして、「灰穴炉」と推定した¹⁰。安川豊史も津山市東蔵坊遺跡の観察から中央穴を炉と推定したうえ、地域や時期を越えて異なる機能を推定するべきではないと主張する¹¹。

たしかに弥生時代中期以前の中央穴は、古墳時代前期以降と同じように浅いものが多く、被熱痕跡も認められるところから炉と見なしてよいようである。また、古墳時代中期のカマド出現と同時に住居内から姿を消すことは、炉としての性格を間接的に証明するものである。しかし、弥生後期における中央穴の構造の変化(深化)を「灰穴炉」とするだけでは説明できないのも事実である¹²。ここで、この時期に発達する床溝(排水溝)に注目すると、これらが中央穴に集結していることに気づく。これは、中央穴が炉と同時に集水施設としての機能を有していたことを示しているのではないだろうか¹³。これは、一見相反する機能のように思われがちであるが、「灰穴炉」自体が湿気を下部に逃がすことを想定した構造であることからすれば、必ずしも矛盾する機能とは言えないだろう。むしろ、平坦な床面に土壙を穿ち、屋内に流入した雨水を集めて排出することは合理的な方法と言える。このように、弥生時代後期における中央穴の深化は集水という新たな機能が付加された結果と考えられる。それならば、古墳時代の中央穴が浅い構造に変化するのとはなぜであろうか。

改めて弥生時代後期の中央穴を見ると、ピット状の中央穴に楕円形の浅い土壙が対をなして検出されている例がしばしばあるのに気付く。足守川・矢部南向遺跡では、これらが土堤で囲まれており、同時に機能したことは明らかである(第36図1)¹⁴。また、弥生時代末にはこれらが一体となったような二段掘りの中央穴も出現する(第36図2)。しかし、古墳時代初頭には同じ平面形をもちながらも浅い構造へと変化しているのである(第36図4)。このような住居では例外なく方形土壙が設けられており、その形態の類似性ととも、中央穴の構造変化が方形土壙の出現と深くかかわっていることを予感させる。

註1. 竪穴住居-12は床面積が30㎡を越える大形の多角形住居であるが、中央穴の深さがその規模とかわりがあるのかどうかは明らかではない。ただし宮本長二郎は、中央穴が円形・多角形という住居平面と深くかわるものと想定している。

宮本長二郎「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学32』1990

3. 註1文献

4. 村上幸雄・橋本惣司「椽山遺跡Ⅰ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』久米開発事業に伴う文化財調査委員会、1979

5. 近藤義郎『津山弥生住居址群の研究』1957

6. 佐々木謙・大村俊夫ほか『福市遺跡の研究』山陰考古学研究所、1971

7. 清水真一ほか「竪穴住居-その総括-」『青木遺跡発掘調査報告Ⅲ』青木遺跡発掘調査団、1978

8. 註1文献

9. 都出比呂志「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部、1985

遺構名	平面形	規模 (cm)			炭灰	土埧	焼土	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
竪穴住居-14	楕円形	75	43	16		○		弥後Ⅰ	
竪穴住居-15	楕円形	99	62	13			○	弥後前	
竪穴住居-16	円形	56	70・53	47		○		弥後Ⅰ	
竪穴住居-19	楕円形	111・64	55・52	49	○	○		弥後Ⅰ	
竪穴住居-20	楕円形・楕円形	72・26	55・18	51	○	○		弥中Ⅲ	
竪穴住居-25	隅丸方形・楕円形	85・46	96・61	21・41	○		○	弥後Ⅰ	
竪穴住居-26	楕円形	59	94	16	○	○	○	弥中Ⅲ	
竪穴住居-28	円形	80	76	22				弥後Ⅳ	
竪穴住居-30	楕円形					○		弥後Ⅳ	
竪穴住居-32 B	円形	53	52	10	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-35	方形			4				古前Ⅱ	
竪穴住居-36	長方形	85	48		○	○		古前Ⅰ	有蓋か
竪穴住居-37 A	不整円形	59	55	8			○		
竪穴住居-37 B	楕円形	42	35	8			○	古前Ⅱ	
竪穴住居-38 A	楕円形	52	35	9					
竪穴住居-38 B	円形	87	83	16			○	古前Ⅰ	
竪穴住居-39	長方形	147	79	11	○			古前Ⅰ	
竪穴住居-41	楕円形	57	46	49				古前Ⅱ	
竪穴住居-42	円形	38	37	13			○	古前Ⅱ	
竪穴住居-43	不整円形	40	34	9			○	古前Ⅱ	
竪穴住居-44	楕円形				○			古前Ⅱ	
竪穴住居-45 A	楕円形	63	53	11	○		○		
竪穴住居-45 B	楕円形	40	34	7	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-46 A	円形	40	37	14					
竪穴住居-46 B	不整円形	71	59	18	○			古前Ⅱ	
竪穴住居-47	楕円形・円形	79		43				古前Ⅰ	
竪穴住居-48	円形	55	53	14	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-49	長方形・円形	100	50	24	○			古前Ⅰ	2段掘り
竪穴住居-50	不整円形	64		10				古前Ⅰ	
竪穴住居-52	方形・円形	96・38	94・34	14	○			古前Ⅰ	
竪穴住居-53	楕円形	38	36	3	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-55	楕円形	45	34	5			○	古前Ⅲ	
竪穴住居-58	円形	30	29	10	○			古前Ⅰ	
竪穴住居-60	長方形・方形	154・42	91・32	60	○		○	弥後Ⅳ	2段掘り
竪穴住居-61	楕円形	49	44	9	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-62	不整楕円形	156	122	24				古前Ⅱ	
竪穴住居-64	不整円形	36	29	(15)				古前Ⅰ	
竪穴住居-65	楕円形	?	145	12	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-66	楕円形	34	52	9				古前Ⅱ	
竪穴住居-67	円形	36	35	8				古前Ⅱ	
竪穴住居-69	楕円形	59	81	7				古前Ⅱ	
竪穴住居-70	不整楕円形	(123)	(100)	20	○			古前Ⅰ	炭と粘土の互層
竪穴住居-72 B	不整円形	(92)	(105)	9	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-74	楕円形	43	62	9	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-75	円形	48	52	6	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-79	円形	36	34	4				古前Ⅱ	
竪穴住居-80	不整楕円形	98	127	12	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-81	楕円形	69	85	9	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-82	円形	82	69	18	○		○	古前Ⅰ	
竪穴住居-84	楕円形	(79)	64	27	○			古前Ⅱ	
竪穴住居-89	円形	48		16				古前Ⅱ	
竪穴住居-90 A	円形	62	58	12	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-90 B	楕円形								
竪穴住居-91 A	円形	46	(55)	13	○				
竪穴住居-91 B	不整円形							古前Ⅱ	
竪穴住居-92	楕円形	40	53	9				古前Ⅱ	
竪穴住居-94	不整楕円形・楕円形	69・14	51・25	9・14	○		○	古前Ⅱ	
竪穴住居-98	円形	47	46	6			○	古前Ⅱ	
竪穴住居-106 A	円形・楕円形	102	82	19・26	○				
竪穴住居-106 B	楕円形・円形	114	81					古前Ⅰ	
竪穴住居-109	不整円形	68	54	15	○			古前Ⅰ	
竪穴住居-112	円形	48	48	49	○			古前Ⅱ	

表5 中屋調査区中央穴一覧表

10. 安川豊史「東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告9』津山市教育委員会、1981
11. 津山市向林遺跡や岡山市奥坂遺跡など多くの住居で中央穴に埋土が流入している状況が観察されている。これについて、安川豊史は註8文献で、本来中央穴に充満していた炭・灰層が土圧によって圧縮されたものと理解しているが、中央穴にしばしば完形の土器が投棄されている状況からすれば、住居が放棄された段階では開口していたとみるべきであろう。中央穴を「灰穴炉」に擬すならば、住居の移動に伴って灰を掻き出すような行為を想定すべきかもしれない。また、山陰の中央穴のように蓋の存在が想定できるようなものについては、むしろ集水機能を積極的に担った構造を想定すべきかもしれない。
12. 床溝は、これまで間仕切り溝ともよばれていたものの一部で、中央穴と壁溝を直線で結ぶもののほか、中央穴から不定方向に延びるものもある。その傾斜は中央穴に向かって下っており、住居内に侵入した水を中央穴に導く役割を果たしていたものと思われる。
また、住居外へのびる排水溝は中央穴の底面よりも浅く、ここに集められた水を完全に排出する構造にはなっていないことに注意すべきである。このことは中央穴が水で溢れるような状態に立ち至らない限り、その機能に支障をきたすものではなかったことを示すものである。
さらに、この時期の住居にしばしば見られる床面の被熱痕跡は、炉としての機能を一時的に喪失した中央穴に代わるものとも考えられる。
13. その用途については明らかではないが、炭や灰の堆積が見られるところから、ピット状の中央穴から灰や炭を掻き出したり、炊飯を行ったりする施設とも考えられる。

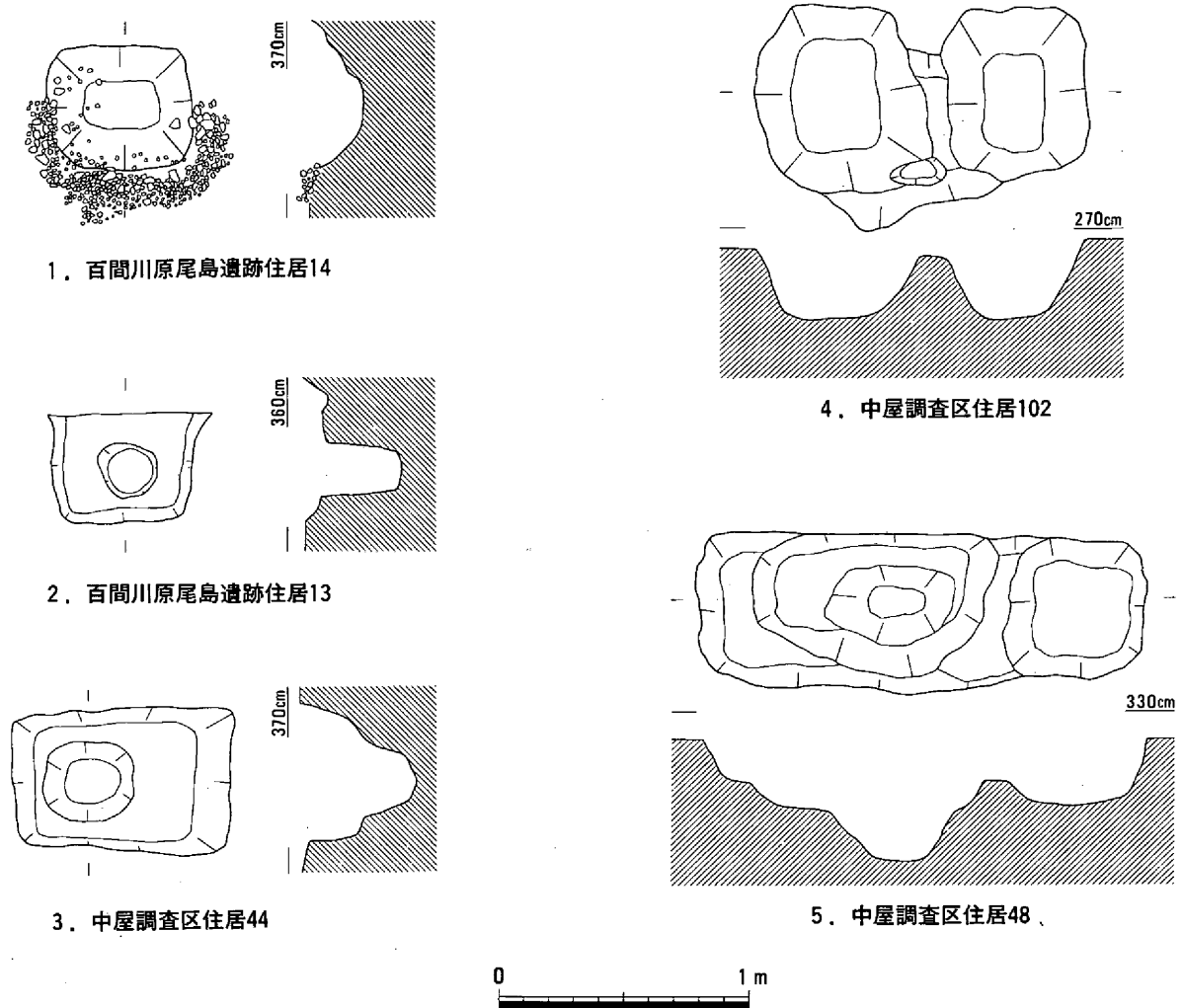
方形土壇

方形土壇は、住居の壁際中央に付設される土壇で、その多くは二段に掘り込まれているところから特殊ピットとも呼ばれている。津寺遺跡で確認できるのは古・前・Ⅰ期以降であるが、県下では弥・後・Ⅳ期まで遡る例が知られている。その規模は、上段が長さ80~60cm、幅60~50cmの方形をなすのに対し、下段は長さ60~50cm、幅40~30cmの楕円形を呈している。深さは60~20cmほどあるが、上段の深さは10cm前後と極めて浅い(第37図)。これらの機能については貯蔵穴と見る向きが多く、最近では木蓋の存在が確認された例も知られてきている。しかし、この土壇が設けられている位置では高床部が途切れていて、住居の出入り口を想定しうる場所にあたる²。方形土壇の前面に見られる砂利敷きは、こうした足場を固める施設とも考えられるのである³。もし、この土壇が貯蔵穴であれば、恒常的に人が出入りするこのような場所が好適であったとは思われない。また、この土壇に付随するようにしばしば認められる小ピットから梯子などの存在を想定すればなおさらである⁴。しかも、上段に比して著しく小規模な下段の掘りこみは、貯蔵に十分な空間が確保されていたとは思われない。鳥取県青木遺跡で、二段掘りという形態の類似から中央穴が壁際に移動したとする考えが出されていることはすでに述べた⁵。津寺遺跡で検出された方形土壇は、排水溝と考えられる壁溝と接続するものが多く、またこれに水を導くように床溝が掘られているものも見受けられた⁶。こうしたことからすれば、方形土壇は集水専用の施設として機能したものと思われる。つまり、これまで中央穴が担っていた集水の機能をこの土壇が受け持つことによって、中央穴は炉としての役割を確立したものと考えたい。

方形土壇が壁溝から独立し、貯水施設として積極的な役割を担うようになるのは、カマドの採用によって炊飯の場所が壁際に固定されて以降のことであろう⁷。

註1. 宮本長二郎「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学32』1990

2. 方形土壇は、住居の中心から見て南東から南西方向に設けられているものが多く、南向きを意識した出入



第37図 方形土壇の諸例 (1/30)

り口を反映したものと思われる。これらは多くの場合、住居の長軸に対して直交方向に設けられており、平入りであったことがうかがわれる。弥生～古墳時代において平入りの建物が主流であったことは、家を象った容器や埴輪からも知られるところである。

3. 鳥取県上種第5遺跡では、方形土壇の上面にも砂利敷きが及んでいるところから、方形土壇が恒常的には蓋などによって閉塞されたままの状態であった可能性を指摘している。

根鈴智津子ほか「上種第5遺跡発掘調査報告」『大栄町文化財調査報告書14』大栄町教育委員会、1985
また、雄町遺跡3号住居の例からすれば、方形土壇上部の砂利敷きは導水や排水の際の透過性を考慮していた可能性がある。

正岡陸夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会、1975

4. 長さ15cm、幅5cm、深さ10cmほどの方形をなすピットで、壁体から70cmほど離れた方形土壇の前面にほぼ垂直に掘りこまれている。土壇にともなう施設（蓋を開閉する装置など）の可能性もあるが、これまでに確認されている例からしても梯子穴である蓋然性は高い。なお、これらの梯子はおよそ70°の傾斜をもって据えられていたことが報告されており、このピットを梯子穴と仮定すれば竪穴の深さは120cmほどと推定される。

小宮恒雄「住まいの入口」『季刊考古学32』1990

5. 清水真一ほか「竪穴住居跡—その総括—」『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青木遺跡発掘調査団、1978
6. 床面も方形土壇に向かってわずかに傾斜している。
7. 都出比呂志「竪穴式住居と消費単位」『日本農耕社会の成立過程』1989

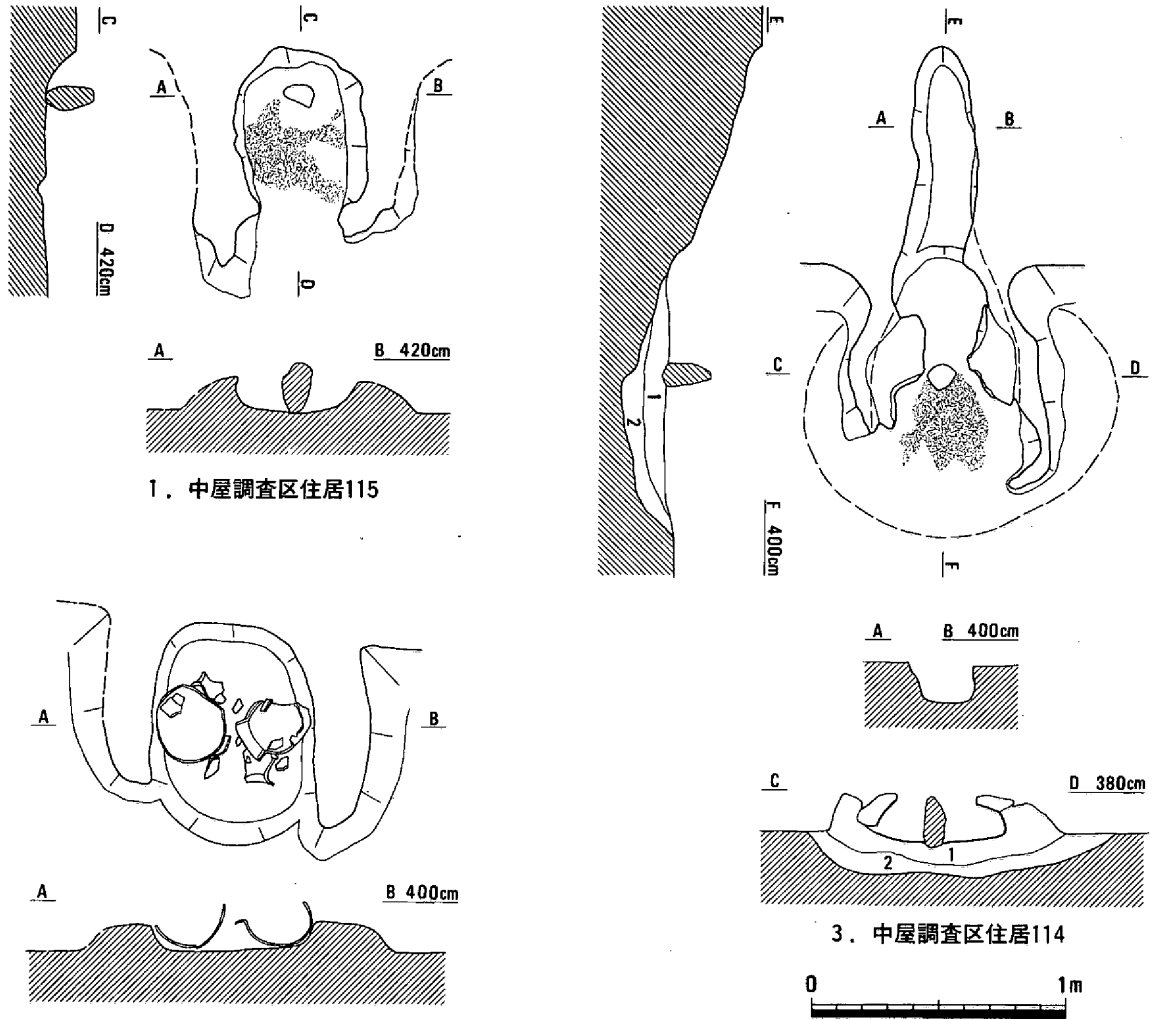
遺構名	平面形	規模 (cm)			位置	ピット	石敷	時期	備 考
		長さ	幅	深さ					
竪穴住居-28	不整形	150	116	32	南南東			弥後Ⅳ	
竪穴住居-30	楕円形	88	68	32	南東			弥後Ⅳ	
竪穴住居-32B	方形・長方形	59・38	52・25	13・17	南南西			古前Ⅰ	
竪穴住居-37A	長方形・方形	98・70	61・50	10・20	南東	○	○		
竪穴住居-37B	方形・方形	99・65	84・46	8・21	南東	○		古前Ⅱ	
竪穴住居-38A	方形	—	49	—	南東				
竪穴住居-38B	方形	—	49	—	南東			古前Ⅰ	
竪穴住居-39	長方形・楕円形	82・49	40・32	8・10	南東	○		古前Ⅰ	
竪穴住居-43	長方形・長方形	56・39	35・20	14・27	南東			古前Ⅱ	
竪穴住居-44A	長方形・楕円形	83・43	56・36	11・20	南南東				
竪穴住居-44C	長方形・円形	89・37	58・32	23・20	南南東			古前Ⅱ	
竪穴住居-45A	長方形・長方形	95・63	54・36	7・21	東	○			
竪穴住居-45B	長方形・長方形	95・63	54・36	7・21	東	○	○	古前Ⅱ	
竪穴住居-46A	方形・楕円形	89・56	70・40		東				
竪穴住居-46B	長方形・長方形	89・50	70・29	16・24	東	○		古前Ⅱ	
竪穴住居-48	長方形・楕円形	121・48	63・33	15・9	南東			古前Ⅱ	2基並列
	方形								
竪穴住居-53	楕円形	—			北東			古前Ⅰ	
竪穴住居-55	楕円形	90	57	22	東南東			古前Ⅲ	
竪穴住居-56	長方形	55	38	24	南東			古前Ⅰ	
竪穴住居-64	楕円形	86	55	15	南東			古前Ⅰ	住居南東隅
竪穴住居-65	楕円形・円形	82・43	107・58	16・39	南南西			古前Ⅱ	
竪穴住居-66	長方形・方形	67・49	88・55	4・22	南			古前Ⅱ	
竪穴住居-67	長方形・方形	62・31	82・52	12・23	南南東			古前Ⅱ	
竪穴住居-68		54	(103)	15				古前Ⅱ	
竪穴住居-69	隅丸方形	72	63	32	北西			古前Ⅱ	住居北西隅
竪穴住居-72A	楕円形	(48)	(71)	31	東北東				
竪穴住居-72B	楕円形	(48)	(71)	31	東北東			古前Ⅱ	
竪穴住居-74	不整形楕円形	39	61	18	南南東			古前Ⅰ	
竪穴住居-84	楕円形	66	101	18	南			古前Ⅱ	
竪穴住居-90B	方形・楕円形	108	64	35	南南東			古前Ⅱ	
竪穴住居-91A	楕円形	79	53	18	北東			古前Ⅱ	
竪穴住居-94	不整形	61	84	32	北北西			古前Ⅱ	
竪穴住居-94	不整形	63	93	19	南南東			古前Ⅱ	
竪穴住居-99	楕円形	91	60	23	南西			古前Ⅱ	住居南西隅
竪穴住居-102	方形	69	55	33	南東	○		古前Ⅰ	2基並列
	方形	78	69	30	南東				
竪穴住居-104	長方形	52	31	26	東北東			古前Ⅱ	
竪穴住居-107	長方形	80	70	11	東北東			古前Ⅰ	
	長方形		65	12	東北東				
竪穴住居-111	方形	53	46	23	南			古前Ⅱ	
竪穴住居-112	長方形	(74)	45	9	西			古前Ⅱ	
竪穴住居-113	長方形	—	48	12	南南西			古前Ⅱ	

表6 中屋調査区方形土壌一覧表

カマド

岡山県において現在までに確認されているカマドの出現は古・中・Ⅰ期であり、津寺遺跡西川調査区の竪穴住居-49bはその初現にあたるものである。住居におけるカマドの位置をみると、住居の北辺ないし東西辺に設ける例が最も多く、南につくりつける例は稀である²。これは古墳時代前期の住居において高床部の形状や方形土壌の存在から推定された出入り口とは反対方向となり、カマドの位置が出入り口の方向と無関係でないことを意味している³。

つぎにカマドの構造であるが、燃烧室の下部に土壌を掘り込み、これを埋め戻した後、黄褐色の地山土を用いて構築している。まれに石材を芯として使用しているものもあるが、岡山県では一般的ではない。燃烧部の幅は50cm前後で、袖の長さは90cmを測る⁴。懸け口については良好な資料がないため



1. 中屋調査区住居115

2. 中屋調査区住居117

3. 中屋調査区住居114

第38図 カマドの諸例 (1/30)

遺構名	位置	主軸	燃焼部		煙道部			支脚	土壇	時期	備考
			長さ	幅	長さ	幅	傾斜				
竪穴住居-114	北北東	N-29°-E	91		86	24	24°	石		古中Ⅱ	
竪穴住居-115	西北西	N-85°-W	93	50				石	○	古中Ⅱ	
竪穴住居-116	北東	N-35°-E	44	62	44		23°			古中Ⅱ	
竪穴住居-117	北北西	N-27°-W	69	54	-	-	-	-	-	古後Ⅰ	
竪穴住居-118	北西	N-47°-W	87	46	-	-	-	石	-	古中Ⅱ	
竪穴住居-119	北西	N-61°-W	85	45	-	-	-	石	-	古中Ⅱ	
竪穴住居-122	東北東	-	(82)	(63)	-	-	-	石	○	古中Ⅱ	
竪穴住居-123	南南東	-	-	-	-	-	-	-	○	古中Ⅱ	破壊か

表7 中屋調査区カマド一覽表

正確を期し難いが、高田調査区や政所遺跡の例(後年次報告)などからして径30cmほどであったものと思われる。煙道は、基部から垂直気味に立ち上がるA類(第38図1・2)と、緩やかな傾斜をもって竪穴外に長く延びるB類(第38図3)に区分できる。A類は古・中・Ⅰ~古・後・Ⅰ期の比較的古い段階のものに多いのに対し、B類は古・中・Ⅱ期以降の住居に一般的である(表8)。カマド内に据えられた支脚には自然石を用いるものが多いが、高坏などの土器を転用する例も認められる。これらは燃焼部の中央に据えられており、一つ掛けのカマドと想定される。ところが、今回報告したカマドの中に

は二口の甕が横並びに検出されたものが1例ある。二つ掛けのカマドは東日本で多く確認されているが、西日本では今のところ知られておらず、これがただちに二つ掛けを表すものかどうか問題が残る。

ところで、A類のような初期のカマドにおいてはこうした支脚が多く遺存するものの、それ以後のカマドではほとんど確認できない。このことは住居の移動に際して支脚が持ち去られている可能性を示している。また、古式のカマドのなかには故意に破壊されたとみられる例が少なからず認められた。このことは、カマドに対する思惟がカマド本体から支脚へ移ったことを示すものとも見られ、カマドの定着とともに独自の習俗が派生していった様子をうかがわせる。

註1. 土器に付着した煤の状況から古墳時代前期にカマドの存在を推定する向きもあるが、岡山県では今のところこの時期まで確実に溯るカマドは知られていない。

柳瀬昭彦「米の調理法と食べ方」『弥生文化の研究2』1988

藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について」『矢部遺跡』奈良県教育委員会、1986

また、津山市正善庵遺跡では5世紀後半～6世紀前半の竪穴住居が検出されているが、つくりつけカマドは確認されていない。山陰地方はつくりつけのカマドをもたないことで知られているが、弥生時代後半～古墳時代をとおして山陰地方と強い結び付きをもっていたこの地域におけるカマド導入の遅れにはこうしたことも影響していたことが予想される。

小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告書44』津山市教育委員会、1992

遺 跡 名	類 型		位 置	支 脚	時 期
	A 類	B 類			
百間川原尾島遺跡	6 (86%)	1 (14%)	北東～北西	9 (90%)	5 C後
矢部南向遺跡	1 (100%)		北西		6 C前
加茂B遺跡	1 (100%)		西	1 (100%)	6 C前
津寺遺跡	12 (86%)	2 (14%)	東北東～西北西	10 (86%)	5 C前～5 C後
三手遺跡	1 (100%)		北西	1 (100%)	5 C後
窪木薬師遺跡	4 (67%)	2 (33%)	北々東	3 (50%)	5 C前～6 C前
樋本遺跡	3 (100%)		北東～北西	4 (80%)	5 C後～6 C前
谷尻遺跡	2 (100%)		北西	2 (100%)	5 C後
小 計	29 (85%)	5 (15%)		28 (82%)	5 C前～6 C前
百間川原尾島遺跡		2 (100%)	北東～西		6 C後
原 遺 跡	1 (100%)		北西		6 C後
矢部南向遺跡	1 (100%)		北西		6 C後
加茂B遺跡		2 (100%)	北々東・南西		6 C後
前池内遺跡	3 (100%)		北西		7 C初
三手遺跡		2 (100%)	東北東・西北西		6 C末～7 C初
窪木薬師遺跡	2 (13%)	14 (87%)	北東～北西	1 (6%)	6 C後
三須・畠田遺跡	1 (13%)	7 (87%)	北東～西北西		6 C後
樋本遺跡	1 (100%)		北々東		6 C末～7 C初
上竹・西の坊遺跡	1 (100%)		西		6 C末～7 C初
勝央工業団地遺跡	1 (100%)		南西		6 C前
上相遺跡	2 (100%)		西北西		6 C後
東蔵坊遺跡		1 (100%)	北西		6 C末
天神原遺跡	2 (100%)		西		6 C末～7 C初
大畑遺跡		1 (100%)	東北東		6 C後
大開遺跡		2 (100%)	北々東		6 C後
領家遺跡	2 (67%)	1 (33%)	北々西・南西		6 C末～7 C初
小 計	17 (36%)	30 (64%)		1 (2%)	6 C後～7 C初

表8 岡山県のカマド

2. 各辺における位置は、中央からやや偏することはあっても隅に設けられた例は確認できない。
3. 総社市窪木薬師遺跡の竪穴住居-15では、カマドの反対方向に二段掘りの土壇が設けられている。同様の例は津寺遺跡でも知られており(後年度報告)、カマド導入後も出入り口に方形土壇を設ける場合があったことを示している。
4. 燃焼部は時期が下るにつれ壁体側に移動するため、袖の長さも次第に短くなる傾向にある。これはカマドを壁側に寄せることで煙道を短く済ませるとともに住居内の有効面積を確保するねらいがあったものと見られる。また、カマドの高さを知る手掛かりには乏しいものの、支脚の長さや甕の器高からして50~60cmあまりと推定される。
5. 第32回埋蔵文化財研究集会で示されたカマドの分類のうち、B類がここで言うA類に、C類がB類に対応する。ただし資料編(岡山県)で示された類型とは必ずしも合致していない。
正岡睦夫・中野雅美ほか「岡山県」『古墳時代のカマドを考える』埋蔵文化財研究会、1992
6. 亀田修一「中国・四国地方のカマド」『古墳時代のカマドを考える』埋蔵文化財研究会、1992
7. 杉井健「カマドの地域性とその背景」『考古学研究』1993
8. 寺沢知子「カマドへの祭祀行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』1992

3. まとめ

これまで津寺遺跡の例を中心に、古墳時代の住居構造について見てきたが、ここで簡単にまとめておきたい。

岡山県の弥生時代の竪穴住居は、円形ないし多角形を基調とした求心構造をもつ平面形をもつ。これらは、桁や垂木に規制された結果、多柱化によって住居規模の拡大を果たしており、後期においてこの傾向が著しい。古墳時代にはいと、竪穴平面は方形に統一される。これと同時に住居構造にも変化を生じ、桁や垂木による制約を一定程度克服した4本柱の大形住居が出現する。この時期の住居は、高床部や中央穴、方形土壇などの施設を備える点で斉一性が強い。ことに、新たに出現した方形土壇は集水(貯水)専用の施設とみられ、これまで中央穴が担っていた機能の一つを独立させたものと考えられる。こうした斉一的な住居構造が、西日本を中心とする広範な地域に普及展開した背景には、土器の移動に示されるような地域間交流があったものと考えられ、こうした動きが前方後円墳体制とも呼ばれる新たな政治的秩序を生み出したものと思われる。

しかし古墳時代中期に至って、朝鮮半島から渡来した氏族との交流により新たな生活様式が採用されると、再び竪穴住居の構造に変化が生じることとなった。ことにつくり付けカマドの導入は、炊爨方法のみならず住居における場の機能にも変化をもたらし、新たな習俗を生み出す結果となった。以後、7世紀に掘立柱建物にその主体が移るまで、竪穴住居は生活の場として機能し続けるのである。

本稿は、津寺遺跡の調査成果をもとに岡山県下の竪穴住居についてまとめたものであり、ともに津寺遺跡の調査に携わった古代吉備文化財センター諸氏の教示によるところが大きい。事実の認識や評価に不十分な点があったとすれば一重に筆者の力量不足によるものであり御寛願したい。最後に、群馬県子持村教育委員会の石井克巳氏には黒井峰遺跡について数々の御教示にあずかった。これは時期や地域を異にするものの、住居構造に関するイメージを構築する上で極めて有益であった。末筆ながら記して感謝する。
(岡山)

註1. 都出比呂志「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部、1985

2. 村上幸雄「竪穴式住居址について」『椽山遺跡Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会、1979

第4節 古墳時代初頭の土器

1. はじめに

今回、中屋調査区から出土した1180箱もの遺物を対象として整理を行い、その一部を報告した。その中心を占めたのは、西川調査区から続く大溝出土の土器であり、その数は500箱に及ぶ。これらは、弥生時代中期後半～古墳時代前期前半のものであるが、弥生土器については第2節において検討しており、ここではその主体となる古墳時代初頭の土器について考察を加えることとしたい。

昭和17年、笠岡市高島遺跡の発掘調査を実施した坪井清足は、王泊5・6層の土師器を酒津式に後続し、畿内の小若江北式に先行するものとして位置付けた¹。昭和40年には、田中琢が布留式に先行する最古の土師器として庄内式を設定し、酒津式との並行関係を想定した²。しかし、都出比呂志は前方後円墳の出現を布留式期に認め、庄内式を畿内第6様式とする見解を示している³。

一方岡山県では、緊急調査による資料の蓄積を踏まえて、精力的な編年研究が進められた。昭和40年、高橋護は岡山市雄町遺跡の土器を14類に分類し、12類を酒津式に、13・14類を王泊6層に比定した⁴。また、倉敷市上東遺跡の土器を分類した柳瀬昭彦は、酒津式に並行するオノ町Ⅱ式を最古の土師器としてとらえ、これに続く下田所式と庄内式、亀川上層式と布留式の対応関係を想定した⁵。その後、岡山県の編年研究はこれらを軸として進められたが、高橋護はさらにⅤ～Ⅷ期にわたる細分案を示し、岡山県に於ける土器編年の大綱を明らかにした⁶。

しかし、本稿で取り扱う遺物は溝という遺構の性格から細分を行うことが困難であるため、遺構単位で検討を行い、この遺跡の土器が示す様相とその意味するところを考えてみたい。

註1. 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」1956

2. 田中琢「布留式以前」『考古学研究46』1965

3. 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究80』1974

4. 高橋護、正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会、1975

5. 柳瀬昭彦「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会、1977

6. 高橋護「土師器の編年 中国・四国」『古墳時代の研究6』1991

2. 分類

壺形土器

壺Aは口頸部が直線的にのびる直口壺である。壺全体に占める割合は14%で、溝-16と溝-4の間でも一定している。口頸部が直立するもののうち、口径14～19cmを測る大形のA1(2091～2093・2490・2491・2550)は、外面をナデ、内面をヘラケズリで調整しており、周辺地域を含めた吉備南部の土器と見られる。A2は、口径9～11cmを測る口頸部が直立する小形の直口壺(2022・2391～2394・2494・2628～2630・2799～2802)で、精良な胎土をもち、外面を緻密なヘラミガキで調整するものが多い。古・前・Ⅰ期を主体とする溝-16では口頸部の開きが弱いものが多いが、古・前・Ⅱ期が中心となる溝-4では大きく開く形に変化している。A3(2395)は、口頸部が内傾するもので、倒卵形の体部をもつ。外面はハケメで調整し、内面はヘラケズリないしナデで仕上げる。しかし、この

形態の壺ではむしろ脚部をもつA 3(2383~2385)が一般的である。これらは口径9~11cmで精良な胎土をもち、外面は緻密なヘラミガキで調整する。弥生後期から見られる器種で、溝-16から多く出土しているものの、溝-4ではほとんど見られない。また、溝-16では口頸部が短い2384から長い2383・2385へと変化している。A 4(601)は、ヨコナデで調整する長い二重口縁をもつもので、体部は球形をなす。口径10cm、器高15cm前後で、法量はほぼ一定している。体部外面は、全体にナナメハケを施したのち、とくに体部上半をヨコハケで仕上げる。内面はヘラケズリで調整する。

壺Bは、口頸部が上方に大きく開く広口壺で、壺全体に占める割合は9%を占める。この割合は溝-16で10%、溝-4で9%と差が認められない。これらは、口頸部が短く外反するB 1(1869・2096~2099・2495・2496・2451~2459・2713・2714)と、長く屈曲して開くB 2(2109・2495・2496・2557・2559・2715)に分類できる。B 1のうち、楕円形の体部をもつ2554・2714は、外面に水平のタタキメを残し、内面をナデで調整している。流紋岩組成の灰白色をなす胎土をもち、播磨系の壺と思われる。

壺Cは、口縁部が頸部から屈折して大きく開く広口壺である。壺全体で15%を占めるが、その割合は溝-16で18%、溝-4で9%と時期が下るにつれ減少する傾向にある。これらは頸部が内傾するC 1(1871・1872・2102~2106・2721~2724)、直立するC 2(2107・2111・2112・2114・2498・2499・2717・2720)、外傾するC 3(1870・2108・2715・2716・2719)に細分される。C 2・3では頸部の内外面を粗いハケメで調整するものが多い。また、体部の外面はハケメで調整し、内面は下半のみをヘラケズリし、上半にハケメを施すものが一般的である。これらの特徴は、壺Cの出自が讃岐を中心と

類 型	A	B	C	D	E	F
溝-16	29(13%)	21(10%)	41(18%)	30(13%)	37(17%)	54(24%)
溝-4	20(14%)	11(9%)	11(9%)	3(2%)	11(8%)	72(56%)
総 計	49(14%)	32(9%)	52(15%)	33(9%)	48(14%)	126(36%)

G
11(5%)
3(2%)
14(4%)

類 型	A	B	C	D
溝-16	446(16%)	2154(82%)	5(1%)	1(1%)
溝-4	106(8%)	1116(85%)	73(6%)	16(1%)
総 計	552(14%)	3270(83%)	78(2%)	17(1%)

第39図 壺・甕形土器の類型

する中・東部瀬戸内沿岸部にあることを示している。このことは、高松平野の土器に特徴的な金雲母・角閃石を含む褐色の胎土をもつものがあることから裏付けられる。

壺Dは、短く立ち上がる二重口縁をもつもので、内傾する頸部をもつD 1 (1877・2122～2127・2730)と、頸部をもたないD 2 (1876・2115～2118・2729)に分けられる。体部は倒卵形をなし、外面をハケメとヘラミガキで調整し、内面をヘラケズリする。弥生後期末において、この地域に普遍的にみられる壺で、溝-16において13%と高い割合を占めるのはこうしたことによるものである。

壺Eは、内傾ないし直立する二重口縁を備えたもので、頸部をもつE 1 (1895・1896・2130～2139・2587・2731～2734)と、もたないE 2 (2129)に分けられる。壺全体に占める割合は14%であるが、溝-16では17%と多いのに対し、溝-4では8%と減少する。これらは中国山間部ないし西部瀬戸内地域に多く見られる壺である。

壺Fは、外反する二重口縁と屈曲する頸部をもつもので、壺全体の約1/3を占める。その主体をなすF 1 (1884～1891・2144～2146・2504～2508・2583～2586・2744～2748)は、短く屈曲する頸部を備えた在地の壺で、倒卵形から球形に変化する体部は外面をハケメの後ヘラミガキし、内面をヘラケズリで調整する。その出土比率は溝-16で24%、溝-4で56%と時期が下るにつれ増加する傾向にあり、壺Dにかわる存在であることを示している。長い頸部をもつF 2 (475・1814・2142・2147・2743)は山陰系の壺で、頸部に羽状文を飾るものも見られる。全形を知り得るものは少ないが、肩部外面をヨコハケで調整する特徴をもつ。

壺G (1881・1883・2148・2149・2502・2503・2575～2580・2737～2739)は、強く外反する二重口縁と直立する頸部をもつもので、壺全体の4%を占める。これらは口縁部や肩部に波状文や円形浮文を飾る畿内系のG 1と、口縁部が短く屈曲する四国系のG 2がある。G 1は、球形ないし偏球形の体部をもち、口径15cm、最大径16～21cm、器高19～23cmの小型(1882・1883・2579・2580)と、口径20～27cm、最大径30～32cm、器高31～35cmの大型(1212・1881・2739)に分けられる。小型は精良な胎土をもつものが多く、外面をヘラミガキで調整する。また外面の装飾は時期が下るにつれ省略される傾向にある。このうち、灰白色をなす1881は播磨、褐色を呈する1212は大和からの搬入品と推定される。G 2 (2148・2503)は、外反する口縁部が強く屈曲する特徴を有し、体部下半をヘラケズリする四国系の壺である。

甕形土器

甕Aは、短く外反するく字形の口縁部をもつもので、甕全体の14%を占める。また、溝-16では16%、溝-4では8%と時期が下るにつれ減少する傾向にある。これらは、端部が角張るか丸くおさめるA 1と、端部を拡張ないし肥厚させるA 2 (1907～1912・2207～2223・2759・2760)に分けられる。

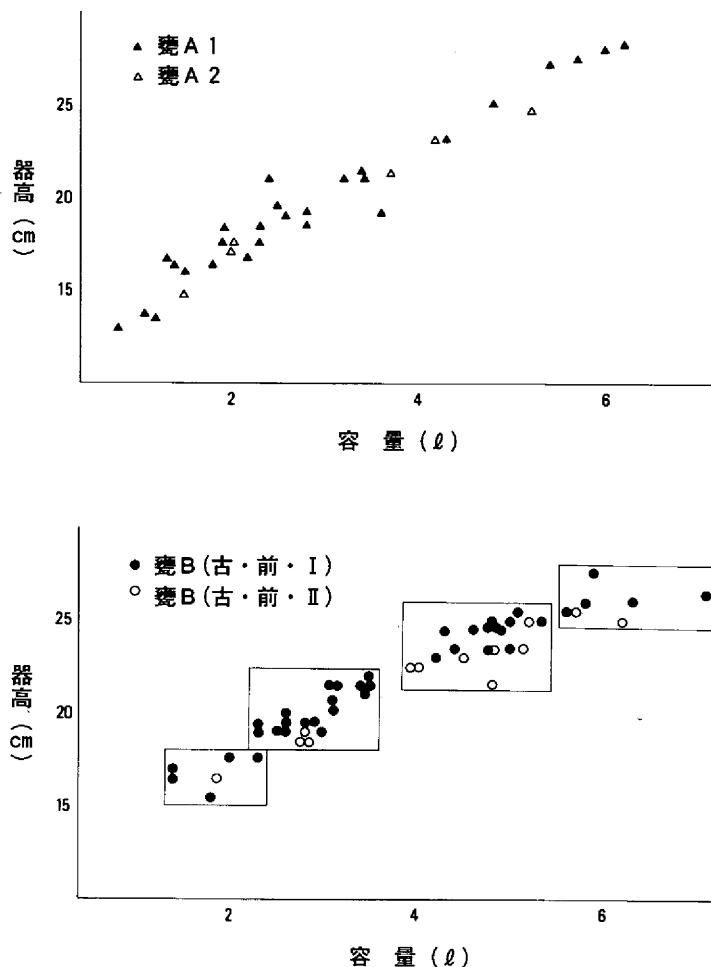
A 1は、内外面をナデで調整する、外面をハケメ、内面をヘラケズリする、外面をタタキ、内面を下半のみヘラケズリするに分けられる。内外面をナデで調整するものは吉井川以西に、外面をハケメ、内面をヘラケズリするものは旭川や足守川流域に分布することが知られている。また、外面をタタキ、内面を下半のみヘラケズリするものは島嶼部において見られる。とくに口縁部を短く水平に引き出す2588・2755は金雲母や角閃石を含む褐色の胎土をもち、讃岐からの搬入品とみられる。これらは、甕Bが主体となる集落においても一定量存在することが指摘されており、集中的な製作・供給が想定されている甕Bを補完するために各集落で製作されたものと思われる。このことは、甕A 1の中に甕Bと類似したものが見られることからうかがわれる。

A 2 には、畿内からの搬入品 (1909・1910・2158・2159・2216・2757) とこれを模倣した 1907～1912・2207～2223・2759・2760 とがある。搬入品と見られるものの多くは、外面に右上がりの細かいタタキを施す河内型の庄内甕である。一方、その模倣品と見られる甕は、倒卵形の体部に小さな平底をもつ。外面を右上がりのタタキで成形したのち上半に水平のタタキを施し、一部をハケメで調整する。内面は薄くケズリあげ、ナデを加える。法量は、口径16cm、器高17～18cm、容量2ℓの小型、口径18cm、器高22～25cm、容量3.8～5.1ℓの中型、口径23cm、器高32cm、容量12ℓの大型に分類され、形態のうえで在地の甕Bと類似するが、成形手法はもちろん、内面に施されたヘラケズリの方向など調整手法においても大きく異なっている。この種の甕は甫崎天神遺跡でも出土

しているが、隣接する足守川遺跡群では認められず、極めて限定された場所での製作・使用が推定される。米田らは庄内甕とのかかわりを認めているが、その当否はともかく、極めて規格性の高いこのような甕がこの地域で製作されている点は注意すべきであろう。

短い二重口縁をもつ甕Bは、全体の83%を占める在地の土器である。口縁部に櫛状の工具で多条の沈線を施す甕が主体をなすが、溝-16では擬凹線を飾るものも見られる。溝-16の甕は、体部が不明瞭な平底を備えた倒卵形をなし、外面にはヘラミガキが2段にわけて施される。これに対し溝-4では、体部が楕円形ないし球形をなし、外面のヘラミガキが省略されるものもある。これらは、その法量から口径11～13cm、器高11～18cm、容量1.4～2.4ℓの小型、口径12～16cm、器高19～23cm、容量2.2～3.6ℓの中型、口径13～16cm、器高22～26cm、容量3.8～5.6ℓの大型に分類される。ところで、溝-16から出土した甕Bの中には胴径に比して口径が大きい2231～2234が見られた。口縁部には櫛描沈線を飾るものの、その立ち上がりは短い。また、外面をハケメで粗く調整する体部は長胴ぎみで、2161～2163・2170～2173といった甕Aの一部と類似した形態をとる。これらは斉一的な形態に統一される以前の様相を残すもので、奥坂遺跡など周辺部の集落に多く認められる。台付甕B(1614)は、受け口状の口縁をもつ甕で、体部の内外面を粗いハケメで調整し、筒状になる脚台の端部は内側に折り曲げている。東海地方に系譜をもつ甕である。

全体の2%を占める甕Cは、長く外反する二重口縁をもつ甕で、溝-4で多く出土している。これ

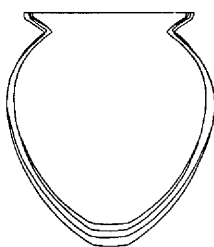


第40図 甕A・Bの法量

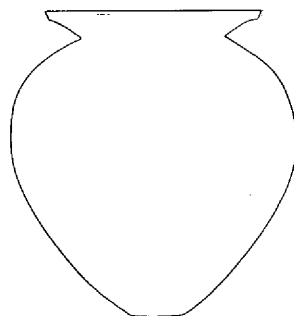
甕
A



小 型

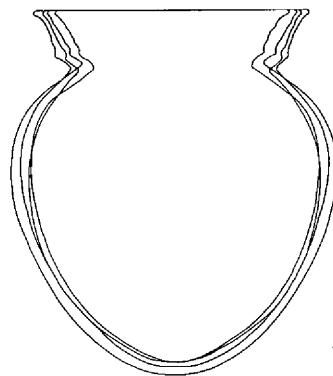
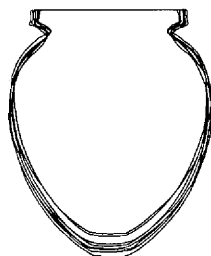
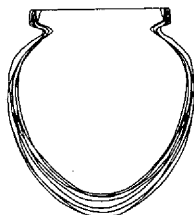


中 型



大 型

甕
B・D



第41図 甕A・B・Dの形態比較図 (1/8)

らは、口縁部をヨコナデで仕上げるC 1と、その上に沈線を飾るC 2に分けられる。C 1は、体部の外面をハケメで調整し、肩に二枚貝の複縁を利用した波状文ないし平行沈線文をめぐらす。内面は薄くヘラケズリするが、底部付近にはユピオサエを残す。法量は、口径20cm、器高25cmの小型(1968～1970)、口径15cm、器高20cmの中型(1971～1976)が主体をなす。これらは、灰白色を呈する胎土に流紋岩起源の砂粒を含む山陰系の甕である。溝-16から出土したC 2(2309)は、口径14.4cm、器高17cmを測る小型の甕で、尖りぎみの底部をもつ。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整しており、北陸地方からの搬入品と考えられる。

甕D(1978～1980・2310)は、口径23～26cm、最大径30cm、器高37cmを越える大形の甕で、二重になる口縁部は壺Fや鉢Gと類似する。調整の手法は甕Bと同様に外面をハケメ後ヘラミガキ、内面をヘラケズリで仕上げている。2310は溝-16の出土ではあるが、楕円形の体部をもつ点で後出的である。この種の甕は、全体の1%と量的にはあまり多くはないものの、この地域では一般的な器種である。







高杯形土器

高杯A(1981～1994・2311～2318・2613・2614・2617・2782)は杯部が碗形をなすもので、脚部は短い柱状部から屈折して開く。全体の23%を占め、特に溝-4において多数の出土を確認している。

全体の9%を占める高杯B(1995～1996・2380・2381・2784)は、屈折して開く小形の杯部をもつもので、短い柱状部から屈折して開く脚部をもつ。高杯Aとともに時期が下るにつれ増加する傾向にある。

高杯C(2002・2020)は杯部が皿形をなすもので、屈曲して開く脚部は杯部に貼り付けて接合している。内外面をハケメのちナデで調整しており、山陰からの搬入品と見てよいものである。

高杯Dは、口縁が屈折して開く杯部をもつもので、高杯全体の50%を占め、この地域で普遍的に見られる高杯である。溝-16では杯部が深く、短い柱状部も中実のものが多い。これに対し、溝-4で

類 型	A	B	C	D	E	F
						
溝-16	7(12%)	3(5%)	4(7%)	35(61%)	5(9%)	3(5%)
	72(22%)			252(78%)		
溝-4	11(48%)	4(17%)	1(4%)	5(22%)	1(4%)	1(4%)
	82(29%)			202(71%)		
総 計	18(23%)	7(9%)	5(6%)	40(50%)	6(7%)	4(5%)

第42図 高杯形土器の類型

は浅い杯部と中空につくられた長い脚部をもつものが多い。脚部は杯部に差し込んで接合するが、接合部に刻み目を施すものが少からず認められる。また、脚裾部の透かしは、溝-16の4孔から、溝-4の3孔へと推移している。これらは精良な胎土からなるものが大半であるが、胎土に砂粒を含む高杯も一定量認められた。2359~2363・2525~2529は、口径21~25cmを測る大形の杯部と中実につくられた長い柱状部をもつ。ハケメののち横方向のヘラミガキで粗く調整する杯部にはタタキメを残す。甕A2と似通った胎土をもつことから、何らかの関連が想定される。2367・2368・2524は、口径19~21cmを測る杯部の口縁を縦方向にヘラミガキするもので、中実につくられた柱状部から屈折して広がる裾部は中程でわずかに膨隆する。畿内の高杯と共通した点が多く、搬入品の可能性もある。2369・2370は、直線ぎみに広がる杯部と、開きの弱い脚部からなる。津山市天神原遺跡に類例が認められ、あるいは播磨に系譜を求められるものかも知れない。2371・2372・2790の杯部は直線的に開き、口縁部をヨコナデで調整する。体部はヘラケズリののち粗いナデで仕上げている。これと類似した高杯は、倉敷市御堂奥遺跡で出土しており、周辺地域での製作になるものと推定される。以上のような高杯は主として溝-16から出土しており、精良な胎土をもつ在地の高杯が主体をなす溝-4とは対称的な在り方を示す。







高杯E(2010・2373~2375・2530・2627)は杯部が段をなすもので、脚部は屈折して開く。溝-16からの出土が多く、高杯全体では7%を占める。


全体の5%を占める高杯F(2008・2009・2376~2379・2531・2532・2625・2626)は杯部が2段に屈折するもので、脚部は柱状部から屈折して大きく開く。溝-4では溝-16に比べて杯底部が広がり、杯部の屈曲も弱まって直線的になる。





鉢形土器

鉢Aは皿形をなすもので、全体の28%を占める。Aには、口径14~16cmの小型(2051~2055・2653~2655・2817~2822)と、口径28cmの大型(2056)がある。いずれも底部外面をヘラケズリで調整し、内面には放射状のヘラミガキを施している。これらは溝-4において多量の出土を見る。低い台を備えたAは、口径14~19cmで、時期が下ると器高を減じ低平になる。その多くは山陰からの搬入品と見られる。

鉢Bは椀ないし杯形をなすもので、全体の28%を占める。口径に比して器高の高いB1(2645~2647・2648)は形態、調整とも多様である。器高の低いものには、椀形をなすB2(2044~2048・2058

類 型	A	B	C	D	E	F
						
溝-16	68(32%)	7(4%)	30(15%)	7(4%)	39(21%)	10(5%)
溝-4	22(13%)	91(55%)	17(10%)	6(4%)	3(2%)	1(1%)
総 計	80(23%)	98(28%)	47(13%)	13(4%)	42(12%)	11(3%)

G

34(19%)
25(15%)
59(17%)

類 型	A	B	C	D
				
溝-16	4(22%)	12(66%)	1(6%)	1(6%)
溝-4		17(65%)		9(35%)
総 計	4(9%)	29(66%)	1(2%)	10(23%)

第43図 鉢・器台形土器の類型

～2060・2414～2430・2648～2652・2657・2811～2817)と、杯形を呈するB3(2401～2413・2828～230)がある。またB2は口径12～14cmの小型と、口径16～19cmの大型に区分できる。これらは、内外面をナデないしヘラミガキで調整する2046～2048・2421～2429と、タタキやハケメで粗く調整する2414～2420とに分けられる。前者は精良な胎土をもつものが多く、口縁部を凹線や段で区画するものも見られる。これらは溝-16で多く出土している。また後者は、この地域では系譜の辿れないもので、2415のように金雲母や角閃石を含む胎土を有するものが見られることからすれば、東・中部瀬戸内沿岸で製作された非在地系土器と考えられる。これらには低い台を備えたB3'がある。

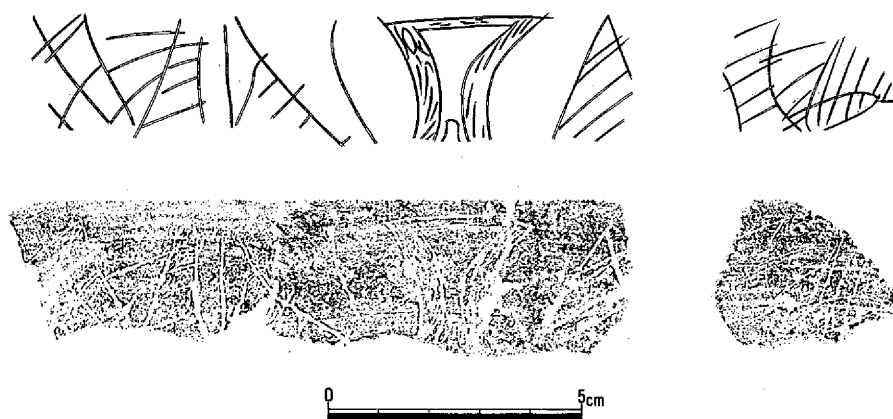
鉢Cは口縁部が外反する小型の鉢で、鉢全体に占める割合は溝-16で15%、溝-4で10%と、溝-16でわずかに多くなっている。外面をハケメ、内面をナデで調整するものが多い。

鉢Dは口縁部の端を上方に拡張した二重口縁をもつ。鉢全体の4%を占め、溝-16、溝-4ともその割合は一定している。ただし、溝-4では精良な胎土をもつ小形鉢がわずかながら認められる。

全体の13%を占める鉢Eは、外反する口縁部をもつものである。内面はヘラケズリのちハケメないしナデで仕上げているが、ハケメで調整する外面にはタタキメを残すものも見られる。これらの占める割合は溝-16において高率である。

鉢Fは短い二重口縁をもつもので、全体の3%を占める。内面はハケメないしナデで仕上げているが、ハケメで調整する外面の仕上げは粗く、タタキメを残すものも見られる。このうち備後系と見られる2473・2474は口縁部にヨコナデによる凹凸が顕著で、直線的に開く体部と頸部とは強く屈折する特徴をもつ。

鉢Gは、壺F、甕Dに似た外反する二重口縁をもつ在地の土器で、全体の17%を占める。溝-16に比べて溝-4では肩の張りが弱くなっている。



第44図 土器に描かれた特殊な文様 (1/1.5)

は、二重になる壺の口縁部にヘラ描の文様を描いたもので、中央に撥形の器物を置き、その左右に鋸歯文を配している。撥形に描かれた器物は楯と見られ、沈線で区画された縁を斜線で埋め、基部の中央には逆U字形の表現が見られる。武具としての楯はまた、邪気を防ぐものとして埴輪に象られ、古墳の主体部を護るかのように墳頂に立て並べられた。また、大阪府美園遺跡では首長の居宅を模した家形埴輪に楯を掲げる例があり²、生活の場においても避邪を目的として用いられることがあったことを示している。このように、楯を中心に描いたこの文様には、倉敷市酒津遺跡や菅生小学校裏山遺跡の土器に描かれた直弧文の祖形(原単位直弧文)とともに³、呪的な効果が期待されたものと思われる。

以上、津寺遺跡の土器にみられる絵画について述べてきたが、弥生土器において見られた多様な絵画は古墳時代に入ると減少し、わずかに見られる作例も抽象的な表現が主体となる。その背景には、春成が説くように、集団の「まつり」から首長の「まつりごと」への変化があったものと思われる⁴。

また、この時期には記号をもつ土器も見られる。これらは、ヘラや棒状工具などによる刺突の組み合わせで⁵、専ら甕Bの肩部に施される。この刺突記号は、甕Bの成立する弥・後・IVから、その終焉にあたる古・前・IIまで認められ、この器種との深いつながりをうかがわせる。これらは、その形態からA1～C4の10種類に分けられるが、1個体に1種類を原則とする。こうした記号は、窯印と同じく製作単位を表す記号として用いられたものと考えられており⁶、地域や時期をこえて広く認められる⁷。岡山県では、壺F(478・559・1889・1884・2585・2146・2745・2746)にもこうした記号が見られるところから、これらが甕Bとともに製作されたことがわかる。津寺遺跡で出土した甕Bにおける記号の保有率は溝-16で1/3、溝-4で1/2以上を占める。各類型の出現率は表9のとおりであるが、A1を除けばA2が最も多く、B2・A3がこれに次ぐ。同様の傾向は百間川遺跡群など他の遺跡でも認められ、各遺跡における類型の出現率に偏りは認められなかった。こ

	1	2	3	4
A	○	○○	○○○	○○○○
B		○ ○	○ ○	○ ○ ○
C			○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
D				○ ○ ○ ○

第45図 刺突記号の類型

器台形土器

器台Aは、受け部が皿状をなすもので、脚部が直線的に広がるものをA1(2076～2080・2480・2481・2537・2842～2844)、柱状部から屈折して開くものをA2(2479・2482～2485・2841)、屈曲して開くものをA3(2845)とする。A1は、口縁部が斜めにのびるものと、屈折して立ち上がるものがあり、前者は溝-16で、後者は溝-4で多く見られる。また、A2は溝-16で多く出土している。

器台B(2486・2688・2689)は、受け部から脚部にかけて孔が貫通するもので、脚部は直線的に広がる。

器台C(2083～2086・2487・2676～2680・2846)は、受部と脚部が二重になった鼓形の器台で、外面をヨコナデ、内面をヘラケズリで調整する。溝-4の器台Cでは、溝-16のものに比して器高が低く、稜も鈍くなっている。赤色顔料を塗布するものが多くあり、中国山間部で製作されたものが主体を占めているようである。

土製支脚

土製支脚A(1142・2081)は、中実につくられた截頭円錐形をなすもので、頂部はわずかに傾斜する曲面をなし、側面には取手がわりに短い突起を取り付ける。外面はナデで調整している。

土製支脚B(2082)は、先端が斜めにのびる角状をなすもので、A類と同じく中実につくられている。外面にはユビオサエの痕をとどめる。四国北西部に多く見られるものである。

土製支脚Cは、頭部に土器を支持する2つの腕と、取手がわりの短い突起を取り付ける。外面に平行のタタキメを残すもの(1324・2847)と、ナデで調整するもの(2683～2685・2848)とがあるが、いずれも中空につくられている。

手焙形土器

手焙形土器A(1317・2488・2533)は、鉢形土器を利用してつくられたもので、足守川加茂B遺跡のB類にあたる。これらは次の手焙形土器Bに比べて装飾に乏しく、比較的簡素なつくりとなっている。

手焙形土器Bは、皿状の底部に体部を接合してつくった鉢部をもつもので、足守川加茂B遺跡のC類に当たる。接合部で屈折するものが多く、突帯をめぐらすもの(1416・2087・2089・2693)もある。ハケメないしナデで調整するものが多いが、タタキメを残すものもある。外面に波状文や羽状文を飾るものがあり、その胎土から搬入品と判断されるものも含まれている。

註1. 島崎東ほか「足守川加茂B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

3. 絵画と記号

津寺遺跡から出土した土器のなかには、ヘラ描の文様(絵画)をもつものがわずかなから認められた。これらは幾何学文のような抽象的なものと、鹿や船、楯といった具象的なものとに分けられる。すでに報告した470は、壺の頸部に2艘の船を描いている。いずれの船も首尾が反り上がったゴンドラ形をなし、大阪府久宝寺遺跡例のように刳船の舷側に板を取り付けた準構造船と見られる。船上には簡単な構造物が表現されており、瀬戸内海を航行する船を描いた可能性がある。これは、この土器が瀬戸内沿岸地域で製作されたものであることからもうかがわれる。岡山県で船を描いた土器は、ほかに倉敷市城遺跡(弥生中期後半)や足守川加茂A遺跡(古墳前期前半)でも出土しているが、これらも水上交通にかかわる位置にあり、航海の無事を願う祈りがこめられていたのかもしれない。また2742

遺跡名	A				B			C		D	総計
	1	2	3	4	2	3	4	3	4	4	
百間川米田遺跡			1 17%		2 33%	1 17%		2 17%			6
百間川沢田遺跡	11 22%	11 22%	3 6%		14 28%	6 12%		5 10%			50
百間川原尾島遺跡	4 10%	11 28%	2 5%		10 25%	5 13%		6 15%	2 5%		40
鹿田遺跡	9 36%	2 8%			9 36%	3 12%		1 4%	1 4%		25
備前南部	24 26%	24 26%	6 7%		33 36%	15 16%		14 15%	3 3%		91
矢部奥田遺跡		2 22%	1 11%		2 22%	4 44%					9
矢部南向遺跡	2 9%	6 27%	3 14%		7 32%	2 9%		2 9%			22
加茂A遺跡	5 11%	10 22%	2 5%	2 5%	14 32%	5 11%		4 9%	2 5%		44
加茂B遺跡	2 8%	7 29%	5 21%	1 4%	8 33%	3 13%		3 13%			24
津寺遺跡	35 13%	68 25%	32 11%	5 2%	60 22%	43 15%	1 1%	26 9%	1 1%	1 1%	272
備中南部	44 12%	93 25%	42 11%	8 2%	91 24%	57 15%	1 1%	35 9%	3 1%	1 1%	371

表9 各遺跡の刺突記号出現率

のことは、ある記号を保持する製作単位が供給の単位ではなかったことを示すものであろう。また、こうしたことから甕Bの集中的な製作を想定することも可能であるが⁸、足守川遺跡群では津寺遺跡に見られない固有の刺突記号が認められることからすれば、これらの土器の生産・供給が複数の地域で行われていた可能性も考慮すべきであろう。

註1. 一瀬和夫ほか「久宝寺南(その2)」大阪文化財センター、1987

2. 渡辺昌宏ほか「美園」大阪府教育委員会・大阪文化財センター、1985

3. 名本二六雄「原単位直弧文の一類型」『遺跡25』1984

中野雅美・亀山行雄「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』岡山県教育委員会、1993

4. 春成秀爾「絵画から記号へー弥生時代における農耕儀礼の盛衰ー」『国立歴史民俗博物館研究報告35』国立歴史民俗博物館、1991

5. 次山は、工具や施文方法の相違から、ハケメ列点文、米粒形列点文、雨粒形列点文に分類する。津寺遺跡では米粒形列点文が主体で、ハケメ列点文もわずかに認められた。また、ここでは棒状工具による円形の列点文も少数ながら存在する。

次山淳「波状文と列点文」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所、1995

6. 池橋幹「弥生後期土器の地域色とその背景」『考古学研究』1985

7. 註4文献

8. 備前・備中南部の甕Bについて蛍光X線による胎土分析を行った白石純は、その分析値がまとまることを指摘している。しかし、両地域の甕Bに形態や調整の差を認める意見もあり、胎土分析がどこまで型式差を反映し得るか検討が必要である。

4. 煤

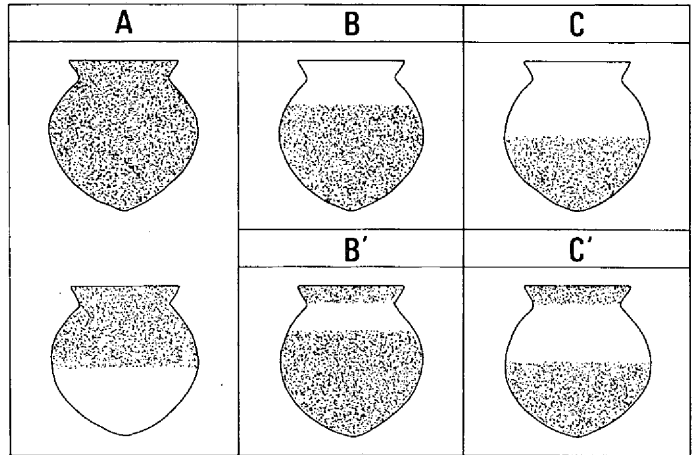
甕などの煮炊具に煤が遺存する例はしばしば目にするところであるが、従来その観察結果が報告されることは少なかった。しかし、土器に付着した煤に着目した西川卓志は、土師器における丸底化が支脚で持ち上げられた底部の熱効率を考慮した結果であることを明らかにした¹。また藤田至希子は、煤の付着状況からカマドの存在を想定し²、上東遺跡の資料を検討した柳瀬昭彦もこの考え方を支持するなど、土器に付着した煤を手掛かりとして種々の考察がなされている³。

このため、ここでは甕の口頸部をA、体部をB、底部をCとして煤の付着部位を類型化し、その結果を表10～12にまとめた。ここで、藤田や柳瀬がカマド型と想定するC類に注目すると、津寺遺跡においては時期が下るにつれC類が減少し、逆にA類が増加する傾向にある。このことは、カマドの普及を考えれば矛盾した結果といえる。弥生時代末において土器による煮沸が支脚上で行われるようになると、必然的に土器に対する炎の位置は低下し、C類の出現をみたと考えられる。しかし、体部の球形化が進展するとともに、器高および最大径の位置の低下を招き、再び炎の相対的上昇が起きたと思われる。つまり、C類は土器の煮沸形態の変化により一時的に生じたものであって、決してカマドの存在を証明するものではない。実際、前期に遡るカマドの存在はこれまで確認されていないし、仮に存在したとしてもそれが一般的な存在であったとは思われない。

註1. 西川卓志「弥生時代の煮沸形態とその変遷」『考古学論叢』1983

2. 藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について一矢部遺跡を中心に」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49』奈良県教育委員会、1986

3. 柳瀬昭彦「米の調理法と食べ方」『弥生文化の研究2』1988



第46図 土器にみられる煤の類型

A類	B類	B'類	C類	C'類	計
13 (35%)	12(32%)	10(27%)	1(3%)	1(3%)	37 (100%)
	22(59%)		2(5%)		

表10 弥生土器(甕)にみられる煤の類型

A類	B類	B'類	C類	C'類	計
36 (12%)	141(47%)	40(13%)	81(27%)	4(1%)	302 (100%)
	181(60%)		85(28%)		

表11 土師器(甕)にみられる煤の類型 1

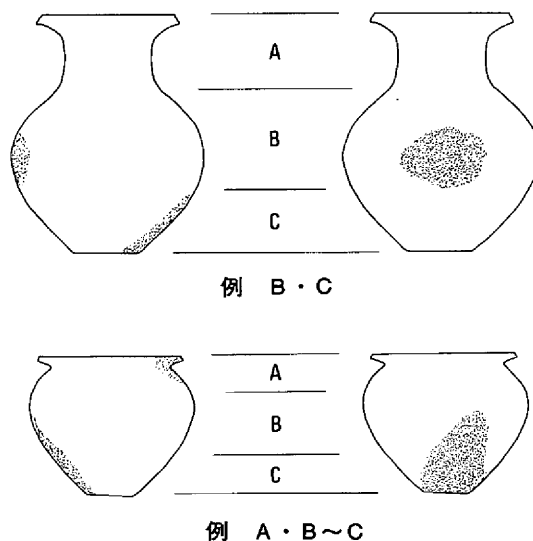
	A類	B類	B'類	C類	C'類	計	
溝	甕	3	24(41%)	10(17%)	20(34%)	1(2%)	58
	A	(5%)	34(59%)		21(36%)		
	16	甕	5	22(38%)	10(17%)	20(34%)	1(2%)
B		(9%)	32(55%)		21(36%)		
総計		8(7%)	66(57%)		42(36%)		116
溝	甕	2	4(44%)	1(11%)	2(22%)		9
	A	(22%)	5(56%)		2(22%)		
	4	甕	6	25(51%)	5(10%)	12(24%)	1(2%)
B		(12%)	30(61%)		13(27%)		
総計		8(14%)	35(60%)		15(26%)		58

表12 土師器(甕)にみられる煤の類型 2

5. 黒 斑

今回出土した土器には、壺を中心として黒斑を有する個体が少なからず確認された。そこで、ここでは口頸部をA、体部をB、底部をCとして黒斑の存在位置を類型化した。その結果をまとめたのが表13・14である。これによると、底部および体部に黒斑のあるものが79%と圧倒的に多く、口頸部に見られるものは19%に満たない。また、1つの部位に黒斑をもつものが大半であるが、複数の部位に黒斑が見られるものも22%存在した。

阿部は、黒斑の断面構造により、表面に薄く見られるⅠ類、内部に浸潤したⅡ類、器壁の黒化層とつながるⅢ類に区分した¹。そして、Ⅰ類は表面に炭素が吸着したものであり、Ⅱ・Ⅲ類は長時間にわたって焼成が不良であった箇所が生じたものと理解する³。津寺遺跡で見られた黒斑はⅡ・Ⅲ類のみであり、その多くは、焼成時の状態を反映したものととらえられる。百間川の弥生土器を分析した平井は、黒斑が底部に多くみられることから、立て並べた状態で焼成したものと推定した。また、同一の土器に見られる複数の黒斑は他の土器との接触を想定している⁴。しかし、同一の土器に複数の黒斑が見られる場合でも、同一方向にあるものと、対向する方向にあるものとが見られる。後者は他の土器との接触の結果と考えられるが、前者は土器が転倒した状態ないしは焼成土壌の壁面に立て掛けた状態で焼成されていたことが推測される。津寺遺跡では後者が一般的であり、その比率が1対4であることからすれば、10個の土器のうち2個は相互に接触した状態で焼成されたことになる。



第47図 土器にみられる黒斑の類型

A	B	C	76	89
15(13%)	25(22%)	36(32%)	67%	
A~B	B~C	A~C	13	78%
2(2%)	11(10%)		11%	
A・A	B・B	C・C	2	25 22%
1(1%)	1(1%)		2%	
A・B	B・C	A・C	17	
4(4%)	11(10%)	2(2%)	15%	
A・A~B	B・A~B	C・A~B	1	
	1(1%)		1%	
A・B~C	B・B~C	C・B~C	3	
1(1%)	2(2%)		3%	
A・A~C	B・A~C	C・A~C	1	
1(1%)			1%	
A~B・A~B	A~B・B~C	B~C・B~C	1	
		1(1%)	1%	
A~B・A~C	B~C・A~C	A~C・A~C		
26(19%)	58(41%)	54(40%)	114(100%)	

表13 土師器(壺)にみられる黒斑の類型

A	B	C	86	116
9(7%)	38(29%)	39(30%)	66%	
A~B	B~C	A~C	30	89%
11(8%)	14(11%)	5(4%)	23%	
A・A	B・B	C・C		16 12%
A・B	B・C	A・C	15	
3(2%)	11(8%)	1(1%)	11%	
A・A~B	B・A~B	C・A~B		
A・B~C	B・B~C	C・B~C	1	
	1(1%)		1%	
A・A~C	B・A~C	C・A~C		
A~B・A~B	A~B・B~C	A~B・A~C		
B~C・B~C	B~C・A~C	A~C・A~C		
29(17%)	83(49%)	57(34%)	132(100%)	

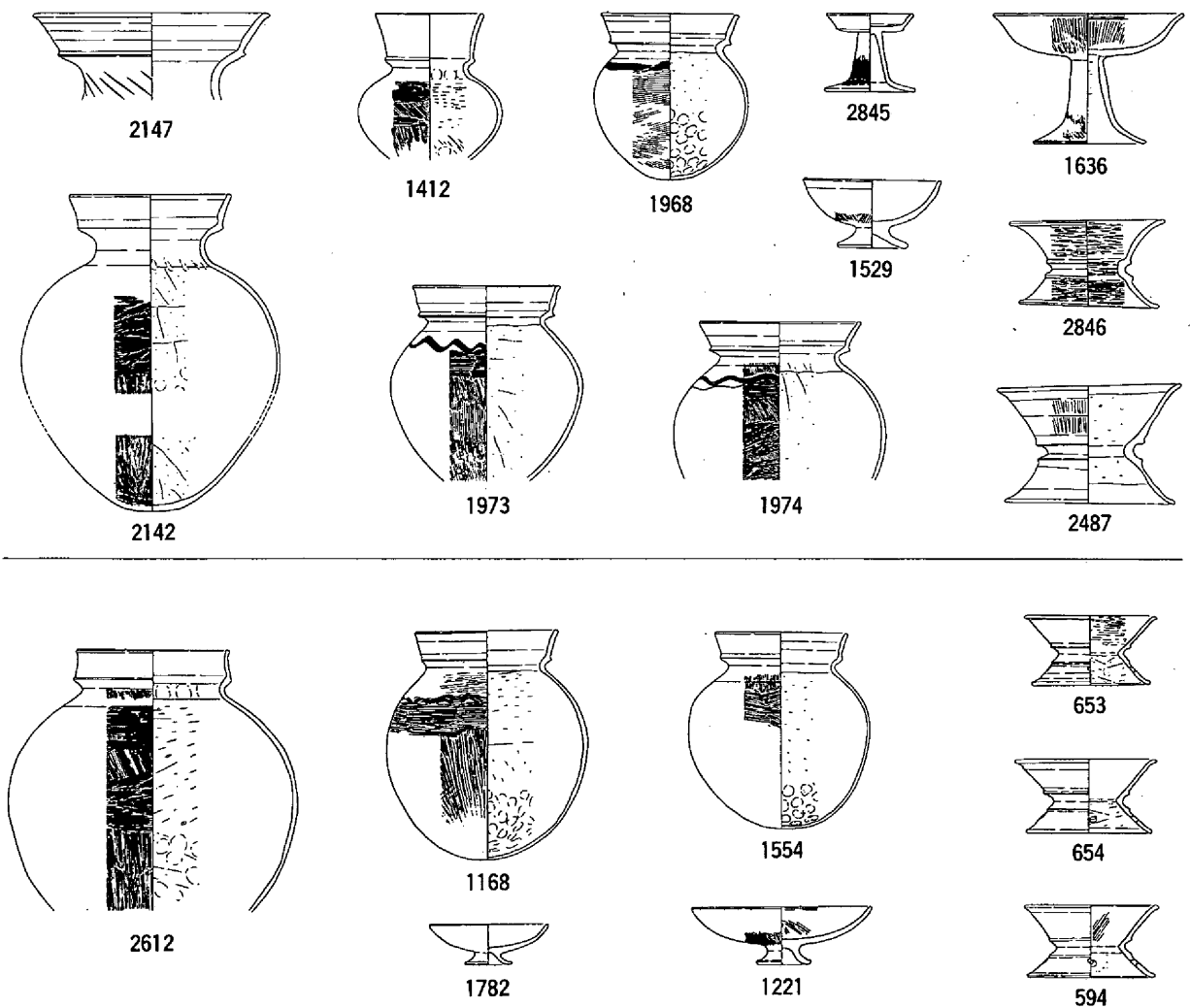
表14 土師器(甕)にみられる黒斑の類型

- 註1. 阿部芳郎「弥生前期土器の器体構造について」『津島岡大遺跡5』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、1995
2. 佐原真が想定した黒斑の成因をこの類型に想定する。
佐原真「紫雲出」詫間町文化財保護委員会
4. 平井勝「弥生土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』岡山県教育委員会、1995

6. 搬入と模倣

津寺遺跡から出土した土器のなかには、この地域で系譜を辿ることのできない非在地系土器が数多く見られた。しかし、周辺地域の状況は必ずしも明らかでなく、また筆者の浅学もあってこれらすべての出自を明確にすることはできなかった。したがって、ここでは系譜の判明したものを中心としてその並行関係やそれらが意味する問題点を指摘しておきたい。

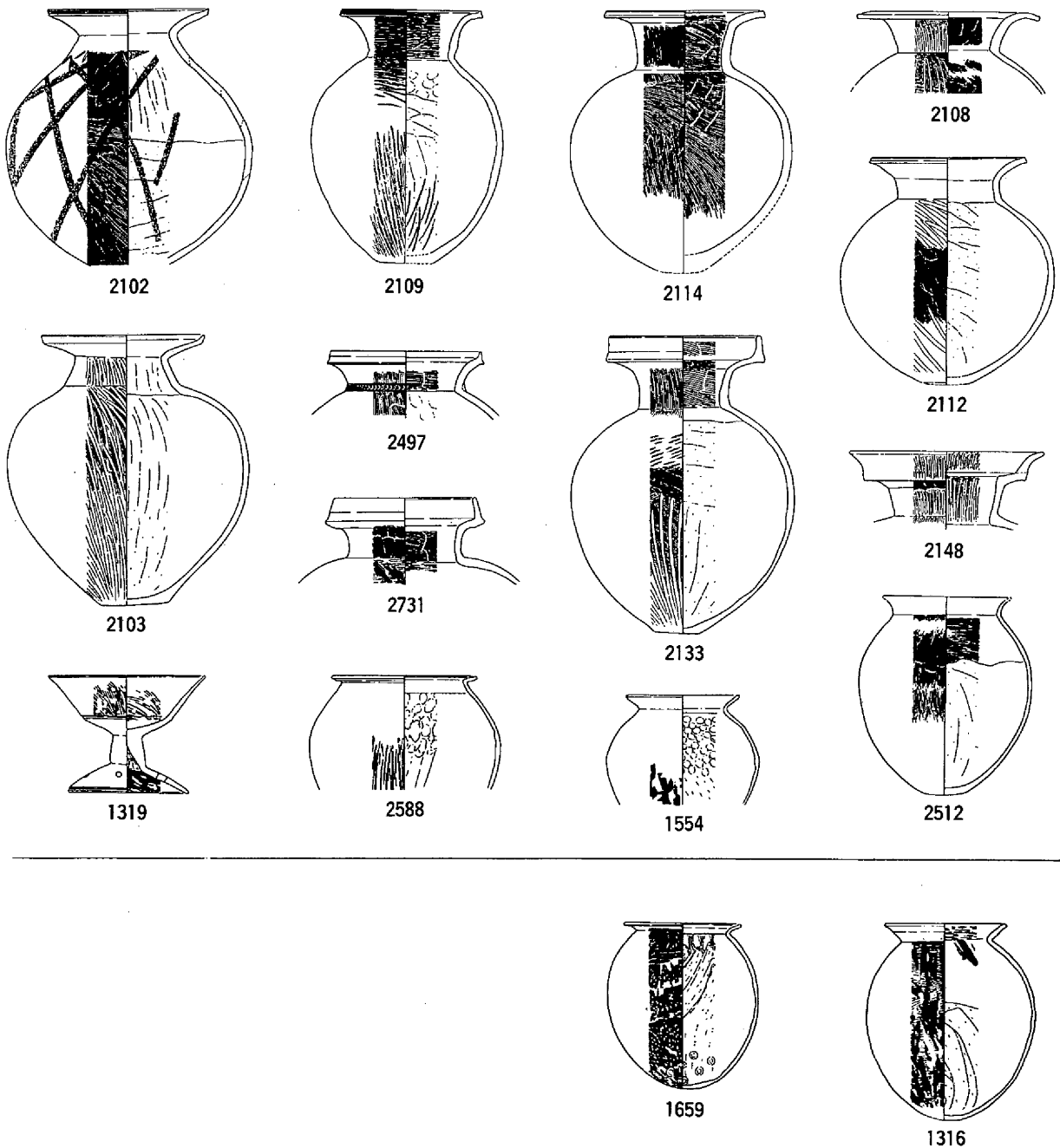
山陰系土器には、壺F 2・甕C 1・高杯B・台付鉢A・器台Cなどがある。これらは流紋岩組成の砂礫を含む灰白色の胎土を有し、明褐色を基調とするこの地域の土器と明瞭に識別できた。山陰系土器のうち、最も多かったのは中・小形の甕C 1であり、台付鉢Aがこれに次ぐ。また、器台Cの



第48図 山陰系土器

出土も目だったが、その多くは中国山間部で製作されたものとみられ、山陰から直接搬入されたものは少ないようである。これらの時期は、古・前・Ⅰにあたる溝-16出土の土器が秋里Ⅰ式に、古・前・Ⅱに相当する溝-4出土の土器は秋里Ⅱ式に比定され、山陰地方との並行関係を示している。ところで、山陰系の土器は九州地方から畿内地方にわたる広い範囲に持ち運ばれているが、その一方でこうした地域から山陰に搬入された土器はきわめてまれである。その意味において山陰系の土器は一方的な流出状況を示しており、この地域の交流の在り方を考えるうえで興味深い。

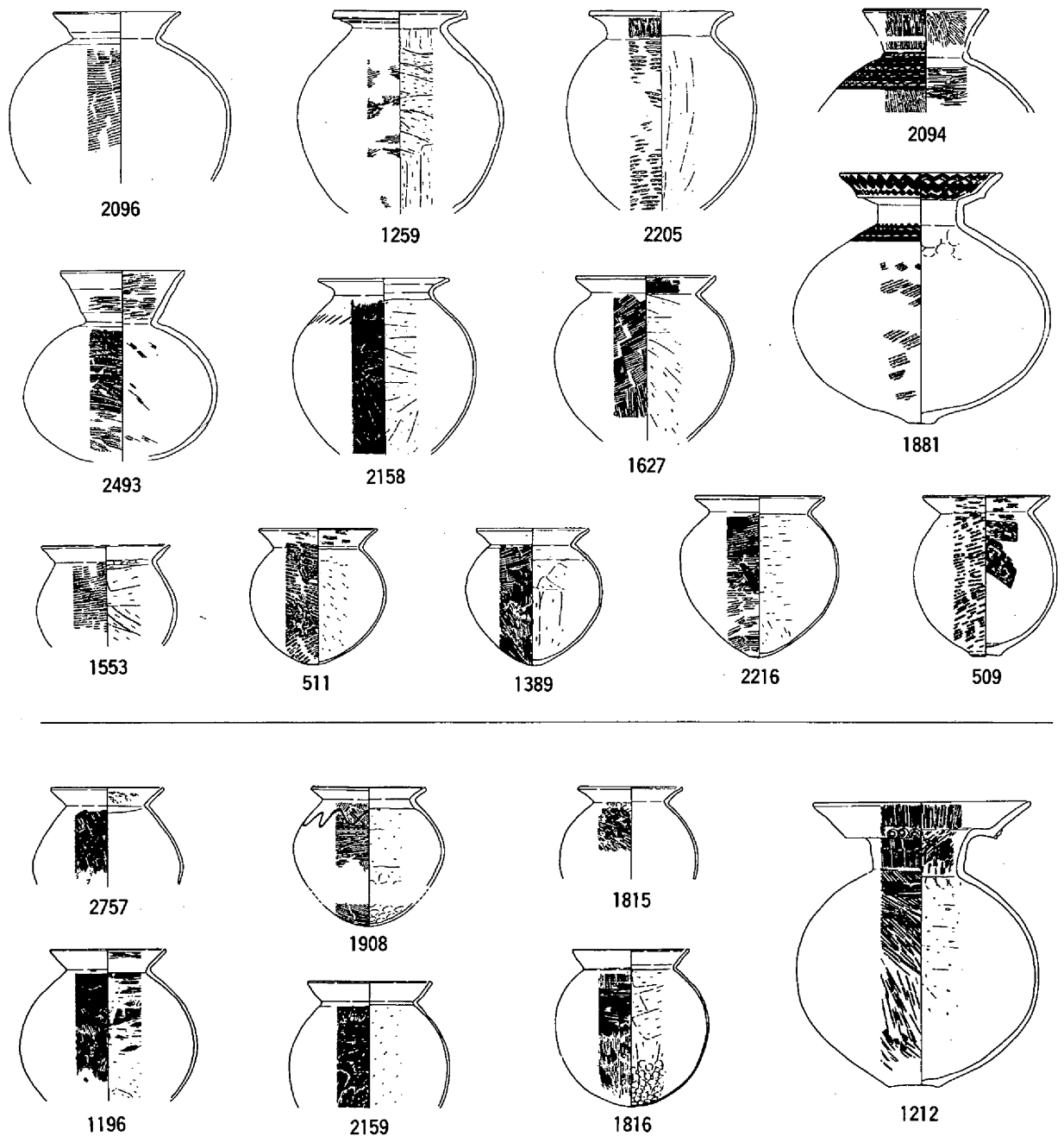
四国系土器には、壺B・C・G 2、甕A 1、高杯Cが認められる。これらは、島嶼部のものとの識別が困難であるため正確な数量は明らかではないが、その多くを大・中形の壺が占めており、甕はごくわずかであった。岡山市高下遺跡では、高松平野に特有の金雲母・角閃石を含む褐色の胎土をもつ



第49図 四国系土器

土器が多く見られるが²、ここでは比較的少なく、むしろ讃岐西部の土器に似た胎土をもつものが大半である。これには、地理的な位置関係が深くかかわっているものと思われる。

畿内系の土器には、壺B・G1・甕A2・鉢がある。四国系と同様に周辺部のものとの識別が困難であったが、甕が主体であることに間違いはない。壺も、中形ないし小形が中心で、大形のものとは比較的少ないようである。これらには播磨・摂津・大和などからの搬入品と見られるものが含まれているが、溝-16から出土した河内の庄内甕はⅠ～Ⅲ式に、溝-4から出土したものはⅣ～Ⅴ式の年代を示しており、この地域との対応関係を示している。岡山市鹿田遺跡では、弥・後・Ⅳ期に優勢であった讃岐系の土器に代わって、古・前・Ⅰ期には播磨系の土器が顕著になることが指摘されており³、古墳の出現ともかかわって注意される。



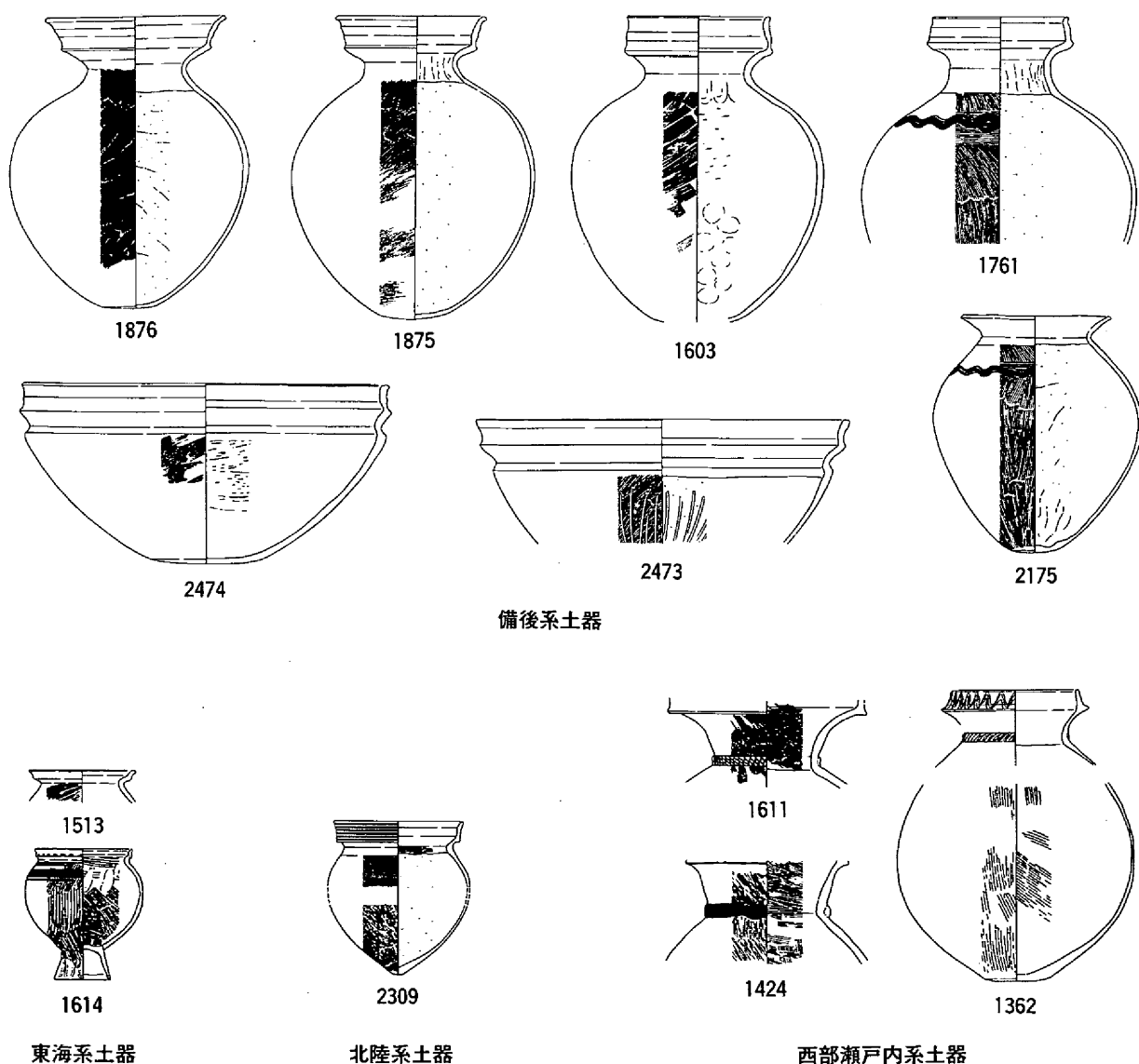
第50図 畿内系土器

西部瀬戸内系の土器には、壺E・鉢Eがある。壺は、いずれも頸部にヘラによる刻み目や竹管による刺突を施した突帯をめぐらしている。これらは山陽西部ないし四国北西部といった西部瀬戸内沿岸地域に出自があるものと思われるが、その製作地を特定することは難しい。

東海系の土器では、台付甕B'が3点確認できた。全形のわかる1614は、口径10.7cm、器高15.0cmと小形である。東海地方のものと比較すると細部に相違が認められ、畿内地方のような東海周辺地域での製作が想定される。ただし、胎土観察の所見からこの地域で製作された可能性も指摘されており、その場合には製作者の出自が問題となろう。

北陸系の土器は、甕C 2が1点見られただけである。これは月影Ⅱ式に相当し、⁵共伴する古・前・I期の土器との並行関係を示す。

以上、津寺遺跡から出土した搬入土器について述べてきたが、本書で非在地系土器として扱ったものにはこれらを模倣したものも含んでいる。山陰系の土器について見ると、その特徴的な胎土から搬入品と判断されるものがある一方で、山陰系の口縁部を持ちながら備南的な調整を施す甕や、その逆



第51図 その他の非在地系土器

に吉備の特徴を持ちながら肩部に二枚貝による沈線をめぐらす甕も見られる。これらは、模倣品と見てよいものである。こうした模倣品は、その度合いによって「忠実型」、「変換型」、「変容型」に区分されている⁶。「忠実型」とは、胎土は異なるものの、形態・調整については同一であり、製作者の移動によるものと考えられる。また、構成要素を部分的に変換した「変換型」や、「変容型」は、搬入品を直接または間接に模倣したものであり、搬入品のように人やものの移動を直ちに意味するものではない。こうした区分は非在地系土器の意義を考えるうえで重要な視点と思われるが、型式学的検討のみでは限界があり、自ずと胎土分析といった自然科学的手法によるところが大きい。その形態や調整から東海系と推定された1614は、胎土観察の結果からこの地域で製作されたものと判断された。もしこれが「忠実型」に相当するものであるならば、その製作者は土器が必要とされるような長期間の滞在(移住)が想定される。これは、この集落の性格を考えるうえで極めて重要な手がかりとなりうるものであるが、分析結果が多角的な視点で検証が行えない現時点では結論を保留せざるをえない。しかしこうした検討は、非在地系土器のもつ意味を考えるうえで不可欠なものであり、今後に残された課題といえよう。

註1. 平川誠「秋里遺跡Ⅳ」鳥取県教育委員会、1987

2. 1992年調査・未報告

3. 山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、1988

4. 附編Ⅰ参照

5. 田嶋明人ほか「漆町遺跡Ⅰ」石川県埋蔵文化財センター、1986

6. 中山俊紀「岡山県北部におけるいわゆる山陰系土器の様相」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』埋蔵文化財研究会、1986

8. 小 結

津寺遺跡から出土した古墳時代初頭の土器には、搬入品を含む多数の非在地系土器があることが明らかとなった。これと似通った状況は、隣接する加茂A・B遺跡でも認められるところであり、この周辺が他地域との交流の拠点として機能していたことを物語る。こうした地域間の交流は、古墳の出現ともかかわって大いに注意される場所ではあるが、その実態については必ずしも明らかとなっていないのが実情である。しかし、この遺跡から出土した多量の非在地系土器の在り方は、移住をも含めた人の移動を示しており、津寺遺跡における集落規模の拡大と相俟って興味のもたれるところである。今回は時間の関係から十分な検討を行うことができなかったが、津寺遺跡の全体像が明らかとなった段階で、改めてこうした点を中心に考察を加えることとしたい。

なお、本稿は調査・整理担当者の協力を得てまとめたものであるが、細部については見解の一致を見なかったところもある。本稿をなすにあたり、奥田尚(八尾市曙川小学校)、岸本道昭(龍野市教育委員会)、田中清美(大阪文化財センター)、中田宗伯(赤穂市教育委員会)、平井典子(総社市教育委員会)、森格也(香川県埋蔵文化財センター)、米田敏幸(八尾市教育委員会)の諸氏からご教示に預かった。末筆ながら記して感謝します。(亀山)

註1. このような拠点集落として、山陽地方では広島県御領遺跡、山陰地方では鳥取県秋里遺跡、四国地方では愛媛県宮前川遺跡などが知られている。

第5節 津寺遺跡出土の石器

1. はじめに

今回報告した石器は106点ほどあるが、すでに報告したものを合わせるとその数は255点にのぼる。津寺遺跡全体の石器に関する考察は最終報告に委ねることとして、ここではこれまでに報告した石器について明らかになった点を指摘するにとどめたい。

津寺遺跡では弥生中期後半以前の遺構は確認されておらず、そのためか石器の総量は他の遺跡と比較して必ずしも多いとは言えない。器種としては、石包丁・石鍬・石斧・石鎌・石剣・スクレイパー・石杵・石錘・砥石・叩き石・台石などがあり、以下、その主なものについて個別に検討を加える。

2. 石器の概要

石包丁

石包丁は、打製52点、磨製2点の計54点が出土した。これは、石器全体の21%を占める。しかし、完全なものは28点と半数ほどで、そのほかは小さく折損した状態で出土している。

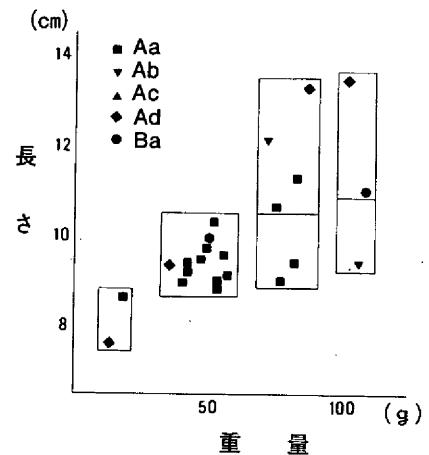
打製の石包丁は、両端に抉りをもつA類と抉りのないB類に分けられるが、A類が主体を占め、B類は1点出土したに過ぎない。また、刃部と背部を調整するaと背部のみを調整するb、逆に刃部のみを調整するc、刃部・背部とも調整を行わず素材となる剥片に抉りを入れるのみのdがある。背部を調整するa・bでは背潰しが行われているが、背部を調整しないc・dでは自然面を残すものが多い。

次にこれらの法量を見ると、長さ13.5～14.0cmのⅢ類と、9.5～12.5cmのⅡ類、7cmのⅠ類に分けられる。また重量は30g以下の1類、30～50gの2類、70～90gの3類、100g以上の4類に分けられる。これらを形態との関係から見ると、AaがⅡ2・3類であるのに対し、AbはⅡ4、Ⅲ3類に、AcはⅡ3・4類に、AdはⅠ1、Ⅱ2、Ⅲ3・4類に分かれる。これらの割合は、Aaが15点(68%)、Abが2点(9%)、Acが1点(5%)、Adが4点(18%)となり、Aaが最も多い。また、Aaの法量は比較的まとまっており、他の類型に比べて規格性が高い。また、Ad類のなかには法量が小形のものが含まれているが、こうした石包丁は新しい段階に位置付けられている。こうしたAd類がAa類に次ぐ割合を占める状況は、弥生中期後半から後期前半が主体となるこの遺跡の在り方を反映している。

註1. 平井典子「石器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会、1982

石 鍬

長さ23.1cm、幅11.7cmの撥形を呈し、重量は674gを測る。厚さ2.4cmの古銅輝石安山岩の板石を素材として、身部の表面に打撃を加え自然面を除去したのち、側縁に調整を加えて形態を整えたもので、

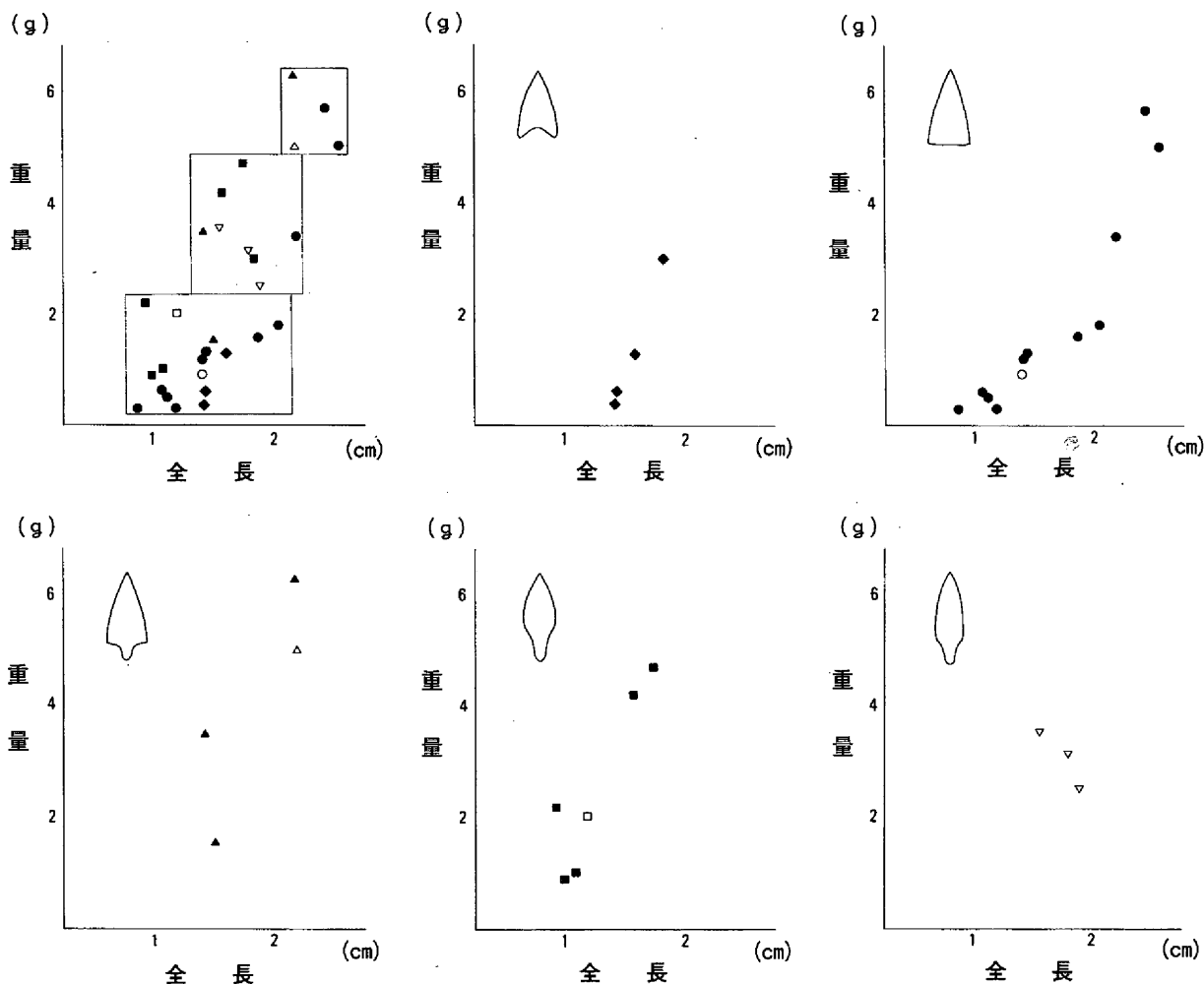


第52図 石包丁の法量

基部には白く風化した自然面を残す。岡山県内では岡山市百間川沢田遺跡や津山市押入西遺跡などで出土しているが、その初現は縄文時代晩期に遡り、農耕とのかかわりを示す遺物として注目されている。本例は包含層からの出土であるためその時期を明確にしえないが、周辺の遺構とのかかわりを考えれば弥生中期後半に属する蓋然性が高い。

石 斧

石斧は、今回5点を報告しているが、いずれも磨製の両刃をもついわゆる蛤刃石斧である。完存するのはS83・84の2点にすぎない。長さ14.6cm、幅6.4cm、重量798.5gを測るS82に比べ、S83は長さ19.5cm、幅8.1cm、重量1492.5gと大形である。S82・85~87は刃部ないし基部の破片であるが、その断面形からすればS82・87は小形に、S85・86は大形に分類される。これらの石材は石英斑岩が主体であるが、岡山市南方遺跡では石斧の未製品が出土しており、こうした拠点集落において石斧の製作が行われていたことがわかる。石英斑岩が主体となる本例も、あるいは近傍での採取、加工を想定してよいのかも知れない。また、加工斧たる片刃石斧の欠落は、伐採斧に先んじて鉄器化した結果とも考えられ、この遺跡の時代相を反映するものとして理解される。



第53図 石斧の類型と法量 (白抜きは推定)

石 鏃

中屋調査区から出土した石鏃は27点ある。これらを形態別に分類すると、三角形で基部が凹む凹基鏃4点(14%)、三角形で基部が平らな平基鏃12点(41%)、三角形の身に茎をもつ有茎鏃A類が4点(14%)、倒卵形の身に茎をもつ有茎鏃B類が3点(10%)、柳葉形の身に茎をもつ有茎鏃C類が6点(21%)となる。

次にこれらの法量を見ると、全長2cm以下で重量が2g以下のⅠ類は17点(59%)、全長が1.4～2.2cm、重量が2～5gのⅡ類は8点(27%)、全長が2cm以上、重量が5g以上のⅢ類は4点(14%)ある。これを類型別に見ると、平基鏃にはⅠ～Ⅲ類があるが、小型のⅠ類が多数を占める。有茎鏃A類にもⅠ～Ⅲ類があるが、出土量が少ないためか偏りは認められない。有茎鏃B類は中型のⅡ類のみで、形態・法量とも比較的まとまっている。有茎鏃C類にはⅠ・Ⅱ類があるが、小型のⅠ類が主体を占め、有茎鏃としては軽量な部類に属する。

こうした石鏃は、溝ないし包含層出土のものが多く、その時期については明らかではないが、周辺に存在する遺構の時期からすれば中期後半から後期前半の範疇におさまるものと思われる。有茎鏃の占める割合は45%で、比較的新しいことを裏付けている¹。また、重量が5gを越えるような大形の石鏃は全体の14%を占める。松木武彦は、このような大形の石鏃を戦闘用としてとらえ、その地域性の分析から地域内の抗争を想定した²。津寺遺跡から出土した石鏃は必ずしも多くはないが、こうした大形石鏃の存在は、吉備中枢域の一画を占める集落として、こうした抗争とは無縁ではなかったことを物語る。

註1. 佐原真「石器」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会、1964

2. 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究140』考古学研究会、1989

石 剣

中屋調査区の包含層から出土した頁岩製の断片で、現状の長さ3.9cm、幅2.6cmを測る。中央に鑄をもつ断面は、厚さ0.7cmの菱形をなす。小片のため、石戈の可能性も否定できないが、類例の多さから石剣と考えてよいように思われる。

岡山県では、岡山市百間川兼基遺跡¹、同百間川沢田遺跡²、総社市南溝手遺跡³、同すりばち池遺跡、津山市一丁田遺跡⁴で出土しており、本例で6例となる。これらは武器として用いられたものと考えられるが、打製石剣が主体となるこの地域にあってはやや異質な存在であり、その石材からして畿内からの搬入品とも考えられる。もしそうならば、このような石剣は単なる武器以上の意味をもっていたことも考えられる。

註1. 平井勝ほか「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』岡山県教育委員会、1976

2. 平井勝「百間川沢田遺跡の磨製石剣」『所報吉備16』岡山県古代吉備文化財センター、1994

3. 平井泰男ほか「南溝手遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会、1995

4. 中山俊紀「津山盆地の弥生時代」『えとのす24』1984

環状石斧

環状石斧は、西川調査区の土壌-1から1点出土している。全体の半ばを失っているが、現状で径

9.4cm、幅5.3cm、重量113.4gの安山岩製で、厚さ1.9cmある断面は砲弾形をなす。刃部には研磨による擦痕が認められるが、使用痕は確認できない。

環状石斧は、縄文時代において分布の中心は東日本にあったが、弥生時代には西日本に広がっている。岡山県における岡山市百間川沢田遺跡¹1点、同百間川今谷遺跡²1点、山陽町便木山遺跡³1点、同用木山遺跡⁴3点、久米町椽山遺跡⁵1点、同久米廃寺⁶1点、落合町宮の前遺跡⁷1点、津山市一丁田遺跡⁸1点、同東蔵坊遺跡⁹1点、作東町大海廃寺¹⁰1点などの諸例はいずれも弥生中期の範疇でとらえられるもので、本例も伴出した土器から中期後半に位置付けられる。これらの機能については必ずしも明らかではないが、民俗例の類似から、棍棒の頭に装着し武器として用いられたものと想定されている¹¹。しかし本例では、径2.2cmを測る孔の内面に摩擦痕は確認できなかった。このことは棍棒への装着を直ちに否定するものではないが、摩擦を生じるような頻繁な脱着、ひいては強い打撃が加わっていないことを示している。一般に、環状石斧は出土例が少なく、また完形での出土がまれであることなどからすれば¹²、儀器としての色彩が濃いように思われる。

- 註1. 平井勝ほか「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84』岡山県教育委員会、1993
 2. 正岡睦夫ほか「百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会、1982
 3. 神原英朗ほか「便木山遺跡発掘調査報告」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報2』1971
 4. 神原英朗ほか「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報4』1977
 5. 村上幸雄・橋本惣司「椽山遺跡群Ⅰ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』1979
 6. 栗野克巳ほか「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』岡山県教育委員会、1973
 7. 二宮治夫「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』岡山県教育委員会、1976
 8. 中山俊紀「津山盆地の弥生時代」『えとのす24』1984
 9. 津山郷土博物館所蔵、未製品
 10. 岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告33』岡山県教育委員会、1979
 11. 佐原真「石器」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会、1964
 12. 平井勝「弥生時代の石器」『考古学ライブラリー64』1991

石 錘

石錘はすでに報告したものを加えても5点にすぎない。このうち、偏球形をなす河原石の側面に浅い溝をめぐらして紐がかりを設けたS14・89は瀬戸内型とも呼ばれるもので、重量は185g・200gと小形である。これに対し、扁平な河原石の両端を打ち欠いたS88・90・91は縄文時代に多く見られるもので、重量163g・333g・578gとばらつきがある。石材は花崗岩、安山岩、斑岩、玢岩とさまざままで、近傍で採取できる手頃な河原石が利用されたものと思われる。

これらはいずれも古墳時代前期の遺構からの出土であるが、この時期の石錘はきわめてまれである²。しかし、岡山市奥坂遺跡などでは弥生時代終末まで石錘の出土が見られ、古墳時代前期においてもやや特殊ではあるが郷境5号墓の出土例があることから³、これらすべてを混入と見る必要はないように思われる。むしろ、この時期に瀬戸内地方で急速に発達、普及した錘具を用いる網漁において、土錘を補完する役割を果たしていたのではなかろうか⁴。

- 註1. 和田晴吾「土錘・石錘」『弥生文化の研究5』1985
 2. 大野佐千夫「漁撈」『古墳時代の研究4』1991

3. 郷境5号墓から出土した2点の石錘は、紡錘形をした側面に十字形の溝をめぐらし2つの孔を穿つもので、黒色片岩でつくられている。このような石錘は九州型と呼ばれ、玄海灘沿岸を中心に古墳時代後期に至るまで用いられている。こうした石錘が墳墓に供献された背景には、瀬戸内地方に網漁の普及・展開をもたらした北九州地域との交流があったのではなかろうか。

松本和男・亀山行雄「郷境墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994

下条信行「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化研究所紀要29』九州大学文学部付属九州文化史研究施設、1984

4. 津寺遺跡ではこれまで有溝土錘が出土しておらず、あるいは石錘がこれに代わる機能を担っていたのかもしれない。

石 杵

古墳時代前期の竪穴住居-70から出土したもので、長さ18.0cm、幅5.1cm、重量337gの棒状をなす。安山岩の自然石を利用したもので、平らな両端に敲打痕が認められるが、上端に比べてやや広くなる下端は摩滅し赤色顔料の付着がわずかに認められた。これは本田光子氏の分析によって、水銀朱であることが明らかにされている。石杵は本例のような棒状のものとL字形のものに分類されており、前者は敲打に、後者は擦り潰しに用いられたとされている。

岡山県では、岡山市足守川加茂A遺跡3点³、同足守川加茂B遺跡2点⁴、同百間川原尾島遺跡1点⁵、御津町原遺跡1点⁶などが報告されているが、これらは弥生時代後期前半から古墳時代前期前半にわたっている。また、朱が付着した鉢や特殊な器形をもつ土器も同時に見つかり、石杵を用いて朱を精製する行為があったことを示している⁷。北条芳隆は、古墳に収められた石杵・石臼の分析から、朱擦りの行為が葬送儀礼として執り行われたことを想定しており、弥生時代の集落や墳丘墓で行われていた行為が、古墳の成立とともにその祭式の一部に取り込まれ、形式化していった過程を読み取ることができる⁸。

註1. 附編参照

2. 本田光子「石杵考」『古代90』早稲田大学考古学会、1991
 3. 光永真一ほか「足守川加茂A遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995
 4. 高崎東ほか「足守川加茂B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995
 5. 平井勝ほか「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』岡山県教育委員会、1995
 6. 二宮治夫「原遺跡」御津町教育委員会、1988
 7. 北条芳隆「葬送儀礼における朱と石臼」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団、1992
 8. 註5文献

農具	石包丁	打製	52	21%
		磨製	2	
工	石斧	両刃	8	3%
		片刃	1	
具	スクレイパー		70	27%
	不明石器		5	2%
武	石	鏃	47	18%
		槍	2	1%
		剣	1	0.5%
		環状石斧	1	0.5%
その他	石	錘	6	2%
		杵	1	0.5%
		叩石	4	1.5%
		台石	2	1%
		砥石	58	28%
計			255	100%

表15 津寺遺跡出土の石器組成

津寺遺跡から出土した石器の組成は表15のとおりである。

ここで注意されるのは石包丁の比率が比較的高いことである。これは、武器や工具に比べて、農具の鉄器化の遅れを反映したものと理解され、中期後半～後期後半を主体とするこの遺跡の様相を象徴的に示している。また、素材や剥片、未製品などはほとんどなく、この遺跡において石器製作が行われ

第5章 結 語

ていた可能性は少ない。これまでに見つかった石器の総重量はわずか5850gにすぎず、総社市南溝手遺跡に比べればはるかに少ない。しかも製品に自然面を残すものが多く¹、石材の制約を強く受けていたことが判る。これについて平井典子は、弥生時代に入ると石器の原材料の入手が困難になった状況を想定しており²、津寺遺跡においても同様な状況にあつたものと推定される。

以上、津寺遺跡から出土した石器について述べてきたが、冒頭にも触れたように現段階は津寺遺跡の東半部を報告したにすぎず、その全体像については後日に委ねたい。なお、石材については吉備国際大学 妹尾護氏の鑑定による。また、打製石器全般にわたって総社市教育委員会 平井典子氏の教示にあずかった。末筆ながら記して感謝する。

(亀山)

註1. 自然面の遺存状況からすれば、板状の素材が用いられたものと推定され、その風化度をみれば転石として産したものと思われる。

2. 平井典子「石器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』岡山県教育委員会、1993

第6節 津寺遺跡出土の土製品

1. はじめに

これまでに津寺遺跡から出土した土製品は、野上田・西川調査区のものも含めて総計126点にものぼる。これらの概要はすでに報告したとおりであるが、ここではその主要な器種について概観し、津寺遺跡から出土した土製品のまとめに代えたい。

2. 土製品の概要

分銅形土製品

津寺遺跡で出土した分銅形土製品は、既に報告した18点を加えて総計29点となる。これは、一集落の出土量として必ずしも多い数とは言えない。この28点のうち、住居からの出土は1点にとどまり、その多くは土壌や溝に廃棄された状態で見つかっている。また、いずれも完形になるものはなく、すべてが破片の状態である。これらの形態を見ると、幅11～12cmの大形(野上田C32・33、西川C9・12・13、中屋C18・19・27)と、8～9cmの中形(西川C2・4・15、中屋C23・25・26・94)、5～6cmの小形(西川C17、中屋C24)に分けられる。またその文様は、櫛状工具で重弧文や眉状の文様を描く櫛描文タイプ(野上田C30・31・32・33、西川C2・6・8・9・12・13・15・16、中屋C1・5・18～22)と、棒状工具による刺突によって飾る刺突文タイプ(中屋C25～27)、簡略した文様あるいは文様を全くもたないタイプ(西川C4・7・14、中屋C23・24)とがある。これらの相関関係は必ずしも明らかではないが、櫛描文タイプに大形のものが多く、その断面も厚手で端部が角張るものが目立つ。これらは、中期後半から後期前半にかけて櫛描文タイプから刺突文タイプへと推移するものと考えられており、櫛描文タイプが多数を占める津寺遺跡の状況は、中期末～後期初頭が中心となる遺構のあり方とも矛盾しない。

次に、これまで確認されている分銅形土製品について見てみたい。分銅形土製品は、岡山県の166例を最高に、山口県25例²、広島県29例³、愛媛県35例⁴、香川県25例⁵、鳥取県44例⁶、兵庫県29例、大阪府8例、京都府3例、奈良県1例⁷の計365例を数える。その系譜については必ずしも明らかではないが、最近その初現とも考えられる資料がいくつか見つかっている⁸。鳥取県目久美遺跡で確認された扇形をなす土製品は前期末～中期前半に属するもので、下端が厚く平坦に作られており、据え置いて使用されたことを示している。初期の分銅形土製品の下半が小さく作られていることは、こうした土製品との繋がりによるものかもしれない。

ところで、広島県以東の中・東部瀬戸内に見られる分銅形土製品は、上・下半が半円形をなす、いわゆる分銅形を呈しているが、山口県や愛媛県などの西部瀬戸内では、方形に近い形態をとることが知られている。もっとも、中・東部瀬戸内にあっても時期が下るにつれ、方形のものが見られるようになる。これらは厚手で端部が角張る特徴をもつが、時期が下るにつれくりこみが浅くなる点では円形をなす分銅形土製品と一致している⁹。

分銅形土製品の文様は、既に述べたように櫛描文タイプと刺突文タイプに分けられ、前者が先行することが明らかにされている¹⁰。吉備とその周辺の櫛描文タイプでは上半が連続した重弧文で縁どられ

ているが、畿内では類似した形態をとりながらも上縁は平行線を飾るのみでこうした装飾が見られない。また上端に穿たれた小孔も、摂津以西の畿内では刺突に置き換えられている¹¹。櫛描文タイプに見られる眉状の文様は人面を抽象化した表現と考えられるが、西部瀬戸内においては粘土を盛り上げて眉や鼻を具象的に現わすものが多い¹²。吉備以東においても刺突文タイプに伴ってこうした表現をとるものが見られるようになり、その形態的变化とも相俟ってこれらの地域からの影響が及んだものと思われる。

分銅形土製品は、用木遺跡のように使用状況を示すような出土状態を示すものは少なく、土壙や溝などに廃棄された状態で出土するケースが多い。それらも完形を保つものは僅少であり、多くは破片で出土する。分銅形土製品の用途については、既に先学の説くように、護符としての使用が考えられるが、その出土状態からすれば形代としての機能も想定できる。また、一集落における出土量からすれば、集団における特定の人物が保持していたものと思われる。いずれにしても分銅形土製品は、吉備を中心として山口県から奈良県の広域にわたって広まった、家族体レベルの習俗を表す遺物と考えられる。

註1. 神原英朗「分銅形土製品」『吉備の考古学的研究(上)』1992

これ以降に公表された資料として、川上村下郷原田代遺跡1、岡山市百間川原尾島遺跡2、岡山市黒住・雲山遺跡2、倉敷市矢部堀越遺跡1、倉敷市矢部奥田遺跡1、倉敷市矢部古墳群B2、岡山市足守川加茂B遺跡8、倉敷市矢部南向遺跡6、総社市南溝手遺跡1、総社市三須畠田遺跡1、御津町原遺跡3の計28点がある。

平井勝ほか「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』岡山県教育委員会、1995

井上弘「矢部古墳群B」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82』岡山県教育委員会、1993

浅倉秀昭「矢部堀越遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82』岡山県教育委員会、1993

山磨康平「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82』岡山県教育委員会、1993

正岡陸夫「黒住・雲山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994

下澤公明「下郷原田代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』岡山県教育委員会、1995

平井泰男ほか「南溝手遺跡I」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会、1995

光永真一ほか「足守川加茂B遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

江見正巳「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

武田恭彰「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報2(平成3年度)』総社市教育委員会、1993

二宮治夫「原遺跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告3』御津町教育委員会、1988

2. 谷若倫郎「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学10』1989

3. 川越哲史「安芸・備後の分銅形土製品」『広島大学統合移転用地埋蔵文化財発掘調査年報II』1985

4. 谷若倫郎「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学10』1989

5. 角南聡一郎「讃岐地方の分銅形土製品雑考」『考古文集』1995

6. 鳥取県埋蔵文化財センター「弥生時代の鳥取県」『鳥取県埋蔵文化財シリーズ2』1987

7. 角南聡一郎「祭祀土製品小考」『大阪文化財研究5』1993

8. 清水真一「分銅形土製品の一考察」『考古学と地域文化』1987

9. 註4文献

10. 下澤公明「分銅形土製品」『えとのす24』1984

11. このように、吉備に分布する分銅形土製品は、眉状の弧線による抽象化された顔面表現と、重弧文に縁どられた上端に穿たれる小孔に特徴付けられる。こうした「吉備型」とも言える分銅形土製品は、時期的に限定されるが、讃岐と伯耆にも分布している。

12. 註2文献

13. 註10文献

土 錘

津寺遺跡から出土した土製品のうち、最も多数を占めるのは土錘である。今回は30点を報告したが、これらはその形態と重量から5種類に分類できる。1類(C28・29)は長さ8.2cm、直径4.5cmの紡錘形をなす大形の管状土錘で、その側面を溝状に凹ませて紐がかりを設けている。孔径は0.5～0.8cmと細く、重量は148gを測る。2類(C30)も大形の管状土錘で、長さ7.5cm、直径5.4cmのずんぐりした紡錘形をなす。孔径は1.8cmで、重量は202gを測る。3類は直径3～5cmの円筒形を呈する管状の土錘で、孔径1.5～2cmで肉厚のA類と、孔径1.5cm以下で薄手のB類に分けられる。これらはさらにその法量によって長さ7～6cm、重量120～70gのAⅠ類(C31・32・37)、長さ44cm、重量98gのAⅡ類(C36)、長さ7.5～5.5cm、重量50g前後のBⅠ類(C33～35、38～40)、長さ5cm、重量35gのBⅡ類(C41)に区分できる。4類は直径1.5～2cmの長細い紡錘形をなす土錘で、長さ6cm、重量30gのA類(C43～45)、長さ4～5cm、重量10～15gのB類(C46～69)に区分できる。5類(C71)は偏球形をした土錘で、直径4.1cm、厚さ3cm、孔径0.9cmを測り、重量は50gある。6類(C78)は棒状の土錘で、両端に直径0.6cmの孔を穿つが、そのうちの一つは貫通していない。

1～2類は、弥生時代後期以降に瀬戸内海にみられるとされているが、早島町奥坂遺跡No29・41・46・47住居などで古・前・Ⅱ期の土器とともに出土しており²、津寺遺跡においても古墳時代前期のものともみられるべきであろう。3類は、弥生後期に現れ古墳時代前期に発達をみるもので、瀬戸内海から東海の太平洋沿岸にかけて分布するとされている。岡山県でも、岡山市百間川原尾島遺跡の竪穴住居³や同百間川沢田遺跡の竪穴住居⁴、倉敷市足守川矢部南向遺跡土壙995から出土しており、古・前・Ⅰ期に用いられていたことは明らかである。4類は、中屋調査区の竪穴住居-118や百間川原尾島遺跡の竪穴住居²¹からまとまって出土しており、古・中・Ⅱ期にはすでに現れていたことがわかる。これと類似した形態のものは現在でも用いられており、古代から中・近世にわたって普遍的な存在であったものと見られる。5類は、4類のバリエーションとして弥生後期から古墳時代にかけて盛行したものであるが、岡山県では比較的類例に乏しい。6類は、岡山市雄町遺跡⁶や倉敷市御堂奥遺跡⁷など古墳時代前期の集落で見つかっているが、このような土錘は、瀬戸内海から紀伊水道にかけて分布することが知られている。

さて、このような土錘を使用した古代網漁の実態は必ずしも明らかではない。しかし最近では、民俗例との対比により、これを復元する試みがなされている⁸。それによると、1類のような有溝土錘は、曳き網漁に使用されたものと推定されている。これは、側面の溝を利用して土錘を網網に緊縛することによりその偏りを防ぎ、海底との密着を高める目的があったものと思われる。また2～3類は、大形で沈子網を通す孔も大きいことから、やはり曳き網に使用されたものと考えられている。さらに、これらの土錘が主として海浜部を控えた遺跡から出土することから、内海漁業に用いられたものと想定されている。これに対し4類は、小形でまとまって出土することが多く、内陸部からの出土も多いことから、刺網や打網などの河川漁業に使用されたものと思われる。今回、中屋調査区の竪穴住居-118で出土した点の土錘は一具として使用されていた可能性があり、その実態を内容を知ることのできる貴重な資料である。6類は、現代の民俗例には見当たらないが、両端に穿たれた孔は負荷に弱く、曳き網には不適と考えられる。また、東南アジアでは河川の刺網に用いられているとの報告があり、ここでも同様な機能が推定される。ただし、その重量からすれば内海で用いられた可能性も否定できない。

以上、津寺遺跡から出土した土錘について述べてきたが、1～3類のような大形土錘の存在は、彼らが積極的に外海に進出していた様子を物語っており、足守川加茂遺跡で確認された豊富な魚種はこのことを裏付けている。しかし、その出土量は二子御堂奥遺跡のような海浜部の遺跡と比較して必ずしも多いとは言えず、これらに多くを依存していたとは考えにくい。むしろ、この遺跡に持ち込まれた製塩土器などから考えれば海浜部の集団との交流を通して海の幸を入手していたことが予想される。また、4類の土錘全体にしめる割合の高さからすれば、古墳時代中期以降は専ら隣接する河川での網漁がその主体をなしていたものと思われる。

ところで、2・3・6類のような土錘は古墳時代前期にいたって急速に普及することが知られているが、この周辺で土錘を使用した網漁が一般化するのもこの頃である。その背景には土器の移動に示されるような広範にわたる人的交流があったものと思われる¹⁰。

註1. 土錘の形態については和田晴吾の呼称に従う。

和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』1982

2. 高畑知功ほか「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会、1983

3. 宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88』岡山県教育委員会、1994

4. 平井勝ほか「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84』岡山県教育委員会、1993

5. ここでは34点の土錘が一括して出土しており、装着状況を示すような出土状態にはなかったものの、一具として使用されていた可能性が強いものである。

江見正巳ほか「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

6. 註3文献

7. 正岡陸夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会、1972

8. 葛原克人ほか「二子御堂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2』岡山県教育委員会、1983

9. 真鍋篤行「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要7』瀬戸内海歴史民俗資料館、1994

10. こうした漁法の革新は、足守川加茂A・B遺跡の貝塚における魚種の変化からもうかがわれる。

岡山市郷境5号墓には、北九州型とよばれる石錘が供献されており、漁業面での交流がこうした変化をもたらしたものと考えられる。

金子浩昌「岡山県足守川加茂A・B遺跡出土の動物遺体と骨角製品」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995

松本和男・亀山行雄「郷境墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会、1994

紡錘車

紡錘車は、円板状をなす1類(C73～78)と截頭円錐形を呈する2類(C72)とがある¹。1類は、直径3.5～2.9cm、孔径0.4cm、重量15gを測る小形のA類(C74～76)と、直径7.1～5.8cm、孔径0.7～0.6cm、重量20～18gを測る大形のB類(C73・77・78)に分けられる。これらはいずれも、土器片を円板状に打ち欠いて周縁を粗く研磨し、その中央に錐で両面から孔を穿ったものである。これに対し2類は、截頭円錐形に整えた粘土を焼成したもので、直径3.6cm、高さ1.9cm、重量25gを測る。1類は主として溝-3から出土しており、弥生中期後半から後期前半のものと思われる。2類は、遺構に伴うものではないが、その形態からすれば古墳中期に属する可能性が高い。

これらについては、紡錘用のほか穿孔や発火具に用いられるはずみ車としての機能も想定されているが²、孔径から知られる軸木はさほど太いものではなく、その主体的な用途はやはり紡錘であったものと思われる。そこで、これらを紡錘車として見たとき、1類における重量差は使用される繊維の強

度によるものと考えられ、1A類は細い糸、1B類は太い糸を紡ぐのに用いられたものと思われる³。また、紡錘車は繊維によりをかけるための道具であるが、糸が湿ったままではよりが戻るため、その乾燥をまって次ぎの工程に移らなければならない⁴。このため、布を織るのに十分な量の糸を紡ぐためには複数の紡錘車が同時に必要とされたはずである。ところが、津寺遺跡で出土した紡錘車は既に報告されたものを加えても19点に過ぎない。同様の傾向は他の遺跡においても認められる⁵。また、古墳時代前期の西日本では土製紡錘車が姿を消すことが既に指摘されており、岡山県においてもこの時期の確実な例はほとんど知られていない⁶。その理由として、木製品などへの転換が想定されているが、弥生時代においても土製品を補完するかたちで木製紡錘車の使用を想定することは可能であろう⁸。

註1. 1類は佐原真の土製B種に相当し、弥生時代中期の瀬戸内から畿内において主体となる類型である。

佐原真「土製品」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会、1964

2. 註1文献、藤村淳子「紡錘車」『弥生文化の研究5』1985

3. 竹内晶子「弥生の布を織る」『UP考古学選書9』東京大学出版会、1989

4. 註3文献

5. 紡錘車は、丘陵部に点在する分村的な集落において極めて僅少であり、平野部の拠点的な集落からの出土が目立つ。これは集落の規模やその存続期間ともかかわるが、あるいは分村が母村に一部の物資を依存するような関係を想定してよいのかも知れない。

6. 総社市窪木薬師遺跡では例外的に古墳時代初頭の堅穴住居-6から10点の紡錘車（未製品を含む）が出土している。

島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1993

7. 註1・2文献

8. 木製紡錘車の遺例はわずかであるが、大分県安国寺遺跡や奈良県唐古遺跡などで出土している。

羽 口

羽口C82は、袋状土壙-68の上部に形成された窪みに廃棄されていたもので、共伴した遺物から古墳時代中期に属するものと考えられる。先端および基部を失っており、全体の形状を知り得ないが、現状で長さ12.8cm、径8.1~7.5cmの円筒形なす。外面には灰褐色に還元した被熱痕跡が残り、炉壁に対して43°の角度で挿入されていたことがわかる。送風孔の径は4.5cmと大きく、製練のような高火度の工程に用いられた可能性が指摘されている¹。

ところで、古墳時代前期前半の堅穴住居-52では鉄素材と思われる鉄片が多数出土しており、小規模な鍛冶が行われていた可能性を示している²。また、前期後半の堅穴住居-122から出土した鉄滓も、鍛冶に際して排出されたものと推定されている。古墳時代後期には総社市窪木薬師遺跡のように鉄生産を専業として行っていた集落が現れ³、津寺遺跡高田調査区においても類似した傾向がうかがわれる（後年次報告）。しかし、今回報告した津寺遺跡中屋調査区においてはそのような痕跡は認められず、集落内で使用する鉄器の加工、再生産を目的とした小規模な鍛冶が行われていたものと思われる。その点でこのような大形の羽口の存在が問題となるが、この羽口と同一層位からガラス滓が見つかったことに注意したい。ガラスの熔融温度は1400~1500度にも及び、強力な送風装置が必要とされたに違いない。岡山県内では岡山市百間川、同鹿田遺跡などでガラス滓が出土しているものの、これらに伴う羽口が確認されていないため、本例と比較検討することはできないが、その共伴関係と羽口の構造から両者の関連も考慮しておきたい。

註1. 大沢正巳氏教示

2. 附編第6節参照

3. 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1993

瓦

今回報告した瓦の多くは奈良時代の区画溝-27・28から出土したもので、その総量は整理箱2箱といたって少ない。しかも、この中には軒瓦は含まれておらず、平瓦・丸瓦のみである。また、丸瓦は平瓦に比べて出土量は極端に少なく、その出土も溝-28の北側に限られる。ただしこれが、瓦の使用状況を反映したものかどうかについては明らかでない。

平瓦は長さ34cm、幅24cmで、凸面には狭端側から右よりの縄目ないし格子目叩きを縦位に施したのち、狭端側を幅8～9cmにわたってナデ消す。凹面は緩やかな曲面をなし、細かい布目を残す。側面はヘラケズリののちナデを施しており、鋭角をなす凹面側はしばしば面取りされる。丸瓦は玉縁式で、全形を知り得るものはないが、幅は12cmほどに復元される。凸面は縄叩きののちナデで調整し、凹面にはやはり細かい布目を残す。平瓦には模骨痕が認められず、その側面も凸面側は鋭角であるなど、一枚づくりの特徴を示している。岡山県において、桶巻きづくりから一枚づくりへの移行がいつであったかは未だに明らかにされていないが、国分寺の創建瓦が一枚づくりと見られることからすれば、畿内とさほど大差ない時期であったものと思われる。

ところで、これらの瓦はその出土量からして築地に用いられていたものとは考えられず、区画内に存在する建物に葺かれていたものが流入したものと思われる。しかし、その場合でもその量は少なく、現時点で軒瓦も確認できないことからすれば、棟などに使用されていた可能性も否定できない。いずれにしても、瓦については官衙遺構の全体像が明らかになった段階で再度検討したい。(亀山)

註1. 後年次の報告となるが、官衙周辺からは奈良県奥山久米寺のⅢa類と類似する軒丸瓦、倉敷市矢部廃寺Ⅰ・Ⅲ類と同文の軒丸瓦、Ⅲ類と同範の軒平瓦が出土しているが、それぞれ1～2点にすぎず、建物に葺かれていた可能性は少ない。また、矢部廃寺と同型の平城宮式軒瓦は、備中の「国府系瓦」とも言うべきもので、津寺遺跡も国衙ないし郡衙にかかわる施設である可能性は高い。

大脇潔「飛鳥時代初期の同範軒丸瓦」『古代97』早稲田大学考古学会、1994

伊藤晃「矢部遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県、1986

高橋美久二「市と交易の発達」『古代史復元9』1989

3. 上原真人「平安貴族は瓦葺建物に住んでいなかった」『歴史学と考古学』1988

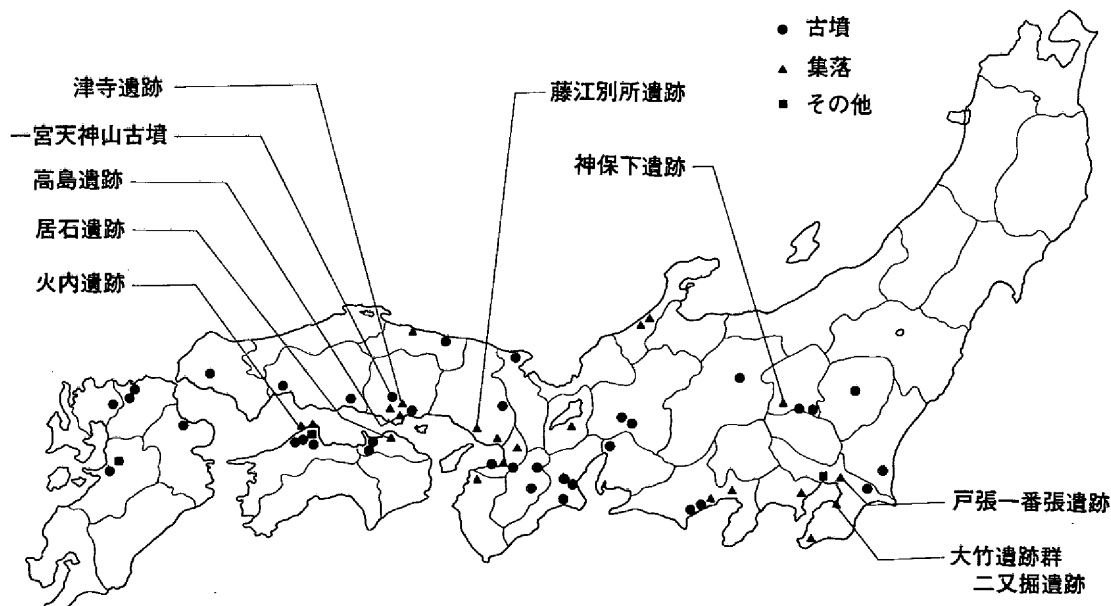
第7節 津寺遺跡出土の金属器

1. 重圏文鏡について

津寺遺跡では全調査区で合計3面の鏡が出土している。そのうち2面は重圏文鏡であり、今回報告した鏡はそのうちの1点である。重圏文鏡は、弥生時代後期から古墳時代前期を中心に主に古墳から出土する鏡であり、また、弥生時代の小形仿製鏡と密接な関係が指摘されており、古墳時代の仿製鏡を考える上でも重要な鏡である。ここでは重圏文鏡の出土状況の分析をとおして、この津寺遺跡から出土した重圏文鏡の出土意義について考えてみたい。

重圏文鏡は全国では60面ほど出土している(第54図)¹。その分布は東は茨城県、西は熊本県まで広域にわたって分布している。県下では津寺遺跡で出土した重圏文鏡2面をふくめ、5面の出土例がある²。また、第2図に重圏文鏡の出土状況を示した。それによると重圏文鏡の過半数は古墳より出土していることがわかる。そして、次に多いのが集落からの出土であり、全体の40%も占めていることは見逃せない傾向である。次にそれぞれの出土状況をみてみよう。

古墳から出土する重圏文鏡は副葬品であり、他の遺物とともに古墳祭祀における祭具としての役割が考えられる。県下では岡山市一宮天神山2号墳で出土例がある³。一宮天神山2号墳は津寺遺跡から東へ5kmほどのところに位置する全長約60mの前方後円墳である。竪穴式石槨2基が確認され、その中の一つのB主体から捩文鏡とともに重圏文鏡が1面出土している。しかし、このような大規模古墳から発見される例は少なく、その多くは中小規模の円墳などで発見される例が多い。これについて、今井堯は、重圏文・素文・珠文鏡の古墳への副葬について「古式古墳・首長墳の従的埋葬から始まる」という傾向を指摘している⁴。



第54図 重圏文鏡の分布

表16 重圏文鏡の出土状況

古 墳 34面 (56%)	集 落 24点 (39%)			その他 3面 (5%)
	住 居 7面(15%)	住居以外 9面(15%)	包含層 6面(9%)	

次に、集落から出土したものについてみてみよう。集落から出土したものについて、詳細にみると、堅穴住居から出土したものが目立つ。堅穴住居から出土した重圏文鏡は9面存在するが、その出土状況を詳細に検討すると、そのうちのいくつかは焼失住居より出土していることがわかる。千葉県君津郡袖ヶ浦町大竹遺跡群二又堀遺跡⁵では古墳時代前期の堅穴住居跡から重圏文鏡が1面出土しているが、この住居跡では火災を受けた形跡が認められている。同様のケースは千葉県柏市戸張一番割遺跡30号住居跡⁶および群馬県多野郡吉井町神保下條遺跡1号住居⁷でも確認できる。このような例は重圏文鏡以外に他の小形仿製鏡でもみられる。岡山市百間川沢田遺跡高縄手A調査区では堅穴住居-21から小形素文鏡が出土しているが、調査担当者はこの住居跡は火災を受け、廃棄されたと考えている⁸。

また、堅穴住居以外の遺構からの出土例として土壙、井戸、溝および河川からの出土例があげられる。しかし、いずれも出土数は少なく、ことに土壙から出土した重圏文鏡はほとんど例がない⁹。しかし、重圏文鏡ではないが、土壙から銅鏡が検出された例はいくつか存在する。その例として岡山市百間川沢田遺跡横田調査区土壙18出土小形銅鏡¹⁰および百間川原尾島遺跡土壙84出土小形仿製鏡¹¹があげられる。沢田遺跡出土例について、調査担当者は共伴した土器がどれも細片であること、また、埋土に炭粒や焼土を多量に含むこと、また種子も検出されたことから、その土壙をゴミ穴と判断し、鏡もその中に投棄されたものと考えている。また、百間川原尾島遺跡出土例については、土壙内から鏡の他に弥生土器や鉄器が検出されているが、いずれも破片であり、あたかも土器とともに廃棄されたかのような印象をうける。このように、土壙から出土する銅鏡は欠損していたり、また、出土状況も意識的におかれていた形跡はなく、無造作に廃棄されたかの状況で出土している。

また、井戸、溝および河川から出土したものはいずれも水に対する祭祀に使用されたものと推測されている。兵庫県明石市藤江別所遺跡¹²では井戸内から素文鏡3点、櫛歯文鏡3点、珠文鏡2点とともに、重圏文鏡が1面出土している。井戸内では鏡のほかに、車輪石、銅鏃、滑石製勾玉、土師器などが出土しており、井戸から湧きでてくる水に対して、祭祀が行なわれていたことを示している。また、香川県高松市居石遺跡¹³では河川から水路への水の取り入れ口付近から素文鏡1点、珠文鏡1点とともに重圏文鏡が1面出土した。出土地点が河川や水路にちかいことから水の安定供給をねがった祭祀であると調査担当者は考えている。また、まれであるが、祭祀遺跡から出土する例もある。岡山市高島遺跡¹⁴は旭川の河口付近に位置する島であるが、その中で重圏文鏡は島の岩盤山の山頂で、鉄鏃、石製模造品、土師器、須恵器とともに出土した。高島遺跡は九州と畿内を結ぶ瀬戸内海北岸航路の中間地点に位置することから、航海の安全をねがった祭祀遺跡と考えられる。同様な例として、愛媛県越智郡吉海町火内遺跡¹⁵から出土した重圏文鏡があげられる。火内遺跡からは来島海峡を臨むことができ、重圏文鏡は海上の航海の安全を祈った祭祀に伴うものと考えられている。このように水の安定供給や海上航路の安全に関する祭祀として重圏文鏡が重要な役割をになっていたと考えられるが、このような使用例は時期的にも堅穴住居および土壙出土例のものより後出する傾向がうかがえる。

以上、重圏文鏡の出土傾向を検討してみた。最後に、これらの成果および従来の研究史等もふまえ、津寺遺跡出土の重圏文鏡の特徴および意義についてまとめると次のようになるであろう。

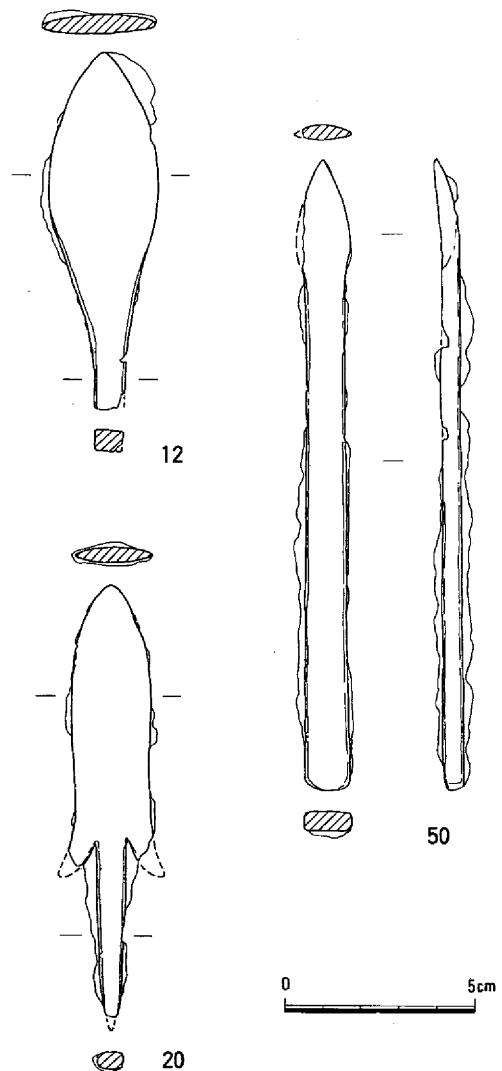
まず第一に、古墳時代初頭の集落からほぼ完形の重圏文鏡が単独で出土した点があげられる。重圏文鏡は従来から集落跡より出土する傾向があることが指摘されていたが、今回のような出土状況を示す例はほとんどなく、その意義は不明である。しかし、重圏文鏡以外の小形仿製鏡で土壌から出土した例はいくつか存在しており、その出土状況はいずれも鏡が意識的におかれたといったような出土状況ではなく、あたかも無造作に廃棄されたかのような状況で出土している点が共通している。この点について、今回の津寺遺跡出土の重圏文鏡も同様であるといえる。このような鏡の出土状況について明確な答えを持ち合わせていないが、当時の鏡の扱いを示す資料の一つとして注目できる。

第二の点として、従来、重圏文鏡は近畿地方以東に分布する傾向が指摘されており、特に集落出土の重圏文鏡についてはその傾向が顕著であった。そのため、古墳時代における東日本の社会的な特質と結び付けて理解しようとする傾向があったが、今回、近畿地方以西に存在する津寺遺跡で重圏文鏡が発見されたことはこれらの見解に再考を要するものであるといえる。

2. 津寺遺跡の鉄器生産について

津寺遺跡中屋調査区では弥生時代から中・近世に至るまで、破片を含めて約200点もの鉄器が発見されている。しかし、これらの鉄器は主に弥生時代後期から古墳時代前期の集落にともなうものと、中・近世の集落にともなうものの大きく二つにわけられる。中でも弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて営まれた集落跡からは数多くの鉄器が出土している。ここでは、これらの鉄器に注目し、主に古墳時代前期の津寺遺跡における鉄器の様相について考えてみたい。

今回報告した津寺遺跡中屋調査区の弥生時代後期から古墳時代前期の集落から出土した鉄器で図示しえたものは59点である。また、中屋調査区に北接する西川調査区においても弥生時代後期から古墳時代前期の集落から鉄器が出土している。第55図には西川調査区から出土した鉄器の一部を示した。12と20は鉄鏃である。12は茎部の一部が欠損しているが、柳葉鏃である。また、20は腸袂柳葉鏃と呼ばれるものである。50は鉞である。全長は16.7cmで、小形の部類に属するものである。今回報告する中屋調査区は前回報告した西川調査区に比べ、遺構数も多く、また、津寺遺跡の中心部に近いということもあって、鉄器の出土数および器種も豊富である。表17にその内訳をしめた。それによると武器が約54%を占めるのに対し、農工具が約26%を占めている。武器としては鉄鏃が大部分を占めるが、短剣などの武器も出土していることは注目される。また、農工具については出土し



第55図 西川調査区出土鉄器 (1/2)
(番号は西川調査区金属器観察表に対応)

表17

津寺遺跡出土鉄器の組成
(弥生後期～古墳前期)

武器 32点(50%)		農 工 具 15点(26%)				不 明 12点 (20%)
銅鏃・鉄鏃 31点(52%)	剣 1点(2%)	刀 子 5点(8%)	手 鎌 4点(7%)	鈍 3点(6%)	その他 6点(6%)	

た量の多さにくわえ、器種も豊富である点が特徴としてあげられる。その内訳は農具として、鍬・鋤先1点、手鎌4点、工具としては鉄斧1点、鈍3点、刀子5点、錐1点が出土している。このように古墳時代の生産用具である鉄器が多数出土したことは、古墳時代前期の生業を知るうえで重要な成果がえられたといえる。

しかし、器種の豊富さに加え、津寺遺跡で重要なことは、古墳時代前期の鉄器生産の痕跡がかいまみれたことである。

まず、第一は竪穴住居から鉄滓が出土したことである。鉄滓が出土したのは竪穴住居-55で一辺4.6mほどの比較的小規模な竪穴住居である。時期は古・前・Ⅲ期とされる。鉄滓は分析結果から鍛冶滓と判断でき、竪穴住居-55およびこの周辺で鍛冶が行なわれていた可能性がある。このように、古墳時代前期以前に鍛冶滓と推定される鉄滓を出土した遺跡は県下では数例を数えるのみである¹⁸。また、この竪穴住居からは一端が少し折りまげられた板状の素材M82が見つかっており、鉄素材の可能性も否定できない。このように、古墳時代前期の集落において鍛冶が行なわれていた痕跡をうかがわせる資料は、九州地方および関東地方を中心に類例が増加しつつある¹⁹。また、近年では奈良県桜井市纏向遺跡で古墳時代前期の遺構から鉄滓やフィゴ片、砥石が出土しており、当地で鉄器生産がおこなわれていたことがわかった²⁰。特に纏向遺跡は大和地方における中枢的な集落であり、同様に津寺遺跡も吉備地方の中枢に近い位置に存在する集落である。このように、古墳時代における代表的な拠点集落において鍛冶生産の痕跡が見出せたことは、古墳時代の鉄器生産を考える上で重要である。

次に特定の竪穴住居から多くの鉄片が出土している点である。それは竪穴住居-52で、一辺約6.3mを測る方形の竪穴住居で、古・前・Ⅱ期に属する。住居からは小片をふくめ、計24点の鉄片が出土した。そのうち、今回8点を図示した。内訳は鉄鏃2点(M21・36)、刀子1点(M53)、他は棒状片および鉄片(M67・76・88・89・90)である。近年、特にこのような鉄片を鍛造剥片としてあつかい、鉄器製作の過程を復元しようとする研究がみられる。これらはその形態から三角形、叉状、棒状、板状などと分類がこころみられており、竪穴住居-52で出土した鉄片をこの分類に照らし合わせるならば、棒状鉄片がその主流を占める。しかし、竪穴住居-52ではその他に複数の鉄片が錆着したもの、あるいは竪穴住居-55でみられた板状素材M82の一部と考えられる鉄片が出土しており、裁断を中心とした鉄器生産の痕跡がうかがえる。今回の調査区で、このように大量の鉄片を出土した遺構はなく、また、付近に鉄滓を出土した竪穴住居-55も存在していることから、この付近で鉄器生産がおこなわれていた可能性が指摘できる。また、津寺遺跡では、遺構にともなうものではないが、三角形鉄片のような鉄片M91・92・93・94も出土している。いずれも包含層からの出土であるが、調査区の周辺で鉄器生産が行なわれていた可能性がある。

以上の成果から、津寺遺跡は古墳時代の鉄器生産を考える上で次の点で評価できる。

- 1) 津寺遺跡では武器・農具などの鉄器が多数出土しており、また、器種も豊富である。
- 2) 竪穴住居-55から鉄滓が出土しており、分析の結果、鍛冶滓との結果をえた。したがって、この住居跡、あるいはその周辺で鍛冶がおこなわれていた可能性がある。

- 3) 竪穴住居-52から多くの鉄片が出土しており、また、遺構にともなうものではないが、三角形鉄片と思われる鉄片も検出されていることから、津寺遺跡では鉄器生産が営まれていた可能性がある。
- 4) このように、吉備地方の拠点集落の一つである津寺遺跡で古墳時代前期における鍛冶および鉄器生産の痕跡が見出せたことは、当時の鉄器生産体制を考える上で重要である。

しかし、鉄器生産を示す資料は断片的であり、また、少量であること、および、鍛冶で不可欠な鍛冶炉、およびフイゴ羽口等の遺構・遺物が検出されていない点が今後の課題としてあげられる。

岡山県において古墳時代の代表的な鍛冶集落として総社市窪木葉師遺跡がある²²。当遺跡では鉄鉈のほか大量の鉄器および鉄器未製品、また約165kgにおよぶ鉄滓が発見されている。このような状況から窪木葉師遺跡は古墳時代の鍛冶専門集落とみられている。しかし、今回報告した津寺遺跡は窪木葉師遺跡にくらべるとその操業規模は格段に小規模であるといえる。おそらくは集落内の鉄器需要をまかなう程度の操業がなされていたのであろうが、津寺遺跡はまだ整理途中であり、この点についての結論は差し控えたい。

(金田)

註1、「共同研究 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民族博物館研究報告第56集』国立歴史民族博物館、1994

林原利明「弥生時代終末～古墳時代前期の小形仿製鏡について－小形重圏文仿製鏡の様相－」『東国史論5』群馬県考古学研究会、1990

- 2、県下では津寺遺跡以外に岡山市一宮天神山2号墳、邑久郡邑久町忠明古墳および岡山市高島遺跡で出土している。

正岡陸夫「岡山県」『共同研究 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』1994 456～487頁

- 3、鎌木義昌・亀田修一「一宮天神山古墳群」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会、1986 249～253頁

- 4、今井 堯「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡－小形倭鏡の再検討Ⅰ－」『古代吉備13』、1991 22頁

- 5、藤田孝司・諸墨知義・稲葉昭智「大竹遺跡群」『君津郡市文化財センター 年報No7』(財)君津郡市文化財センター、1989 18頁

- 6、(財)千葉県文化財センター「古墳時代(1)」『房総考古学ライブラリー5』209頁

- 7、右島和夫『神保下條遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会、1992 154～160頁

- 8、山磨康平「百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財調査報告59』岡山県教育委員会、1985 192～195頁

- 9、千葉県安房郡千倉町駒形遺跡では、重圏文鏡が土壌から出土しているが、竪穴住居跡からの流入と考えられている。

白井久美子「千葉県」『共同研究 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』1994、82～83頁

- 10、岡本寛久「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財調査報告84』岡山県教育委員会、1993 70～72頁

- 11、光永真一「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告56』岡山県教育委員会、1984 133～135頁

- 12、明石市立文化博物館『発掘された明石の歴史展－藤江別所遺跡－』1994

- 13、山元敏裕『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会、1992 66頁

- 14、鎌木義昌「備前高島遺跡について」『サヌカイト1』岡山理科大学考古学部編、1969

西川 宏「高島の祭祀遺跡」『岡山県史 原始・古代』岡山県史編纂委員会、1991 600頁

- 15、真鍋昭文『埋文えひめ16』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター、1992 4頁

- 16、小林三郎「古墳時代初期仿製鏡の一側面－重圏文鏡と珠文鏡－」『駿台史学46』1979 84～85頁

- 17、林原利明「弥生時代終末～古墳時代前期の小形仿製鏡について」1990(前掲註1) 62頁

林原利明「東国の初期銅鏡」『季刊 考古学43』雄山閣、1993 26～29頁

- 18、岡山県下において、古墳時代前期以前の遺構から鉄滓が検出された遺跡は数例のみである。赤磐郡山陽町

第5章 結 語

門前池遺跡では土壌内より鉄滓および鉄器が検出され、鍛冶遺構と判断されている。時期は弥生時代中期後半とされている。また、総社市折敷山遺跡では段状遺構から鍛冶炉が検出され、鉄滓および炭が検出されている。時期は弥生か古墳時代と判断されている。

枝川陽他「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9』岡山県教育委員会、1975 210頁

村上幸雄・前角和夫「折敷山遺跡 雲上山11号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告10』総社市教育委員会、1993 24～25頁

19、村上恭通「弥生・古墳時代における鉄器生産の諸問題」『鉄器文化研究会集會—資料』鉄器文化研究会、1995

村上恭通「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻第3号 1994

20、橋本輝彦「纏向遺跡」『大和を掘る』橿原考古学研究所、1995 20頁

21、村上恭通「弥生時代における鍛冶遺構の研究」1994（前掲註19） 70～71頁

22、島崎 東他「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会、1993

附編 自然科学的考察

- | | |
|------------------------------------|--|
| I. 津寺遺跡出土の非在地系土器 | 八尾市立曙川小学校
奥田 尚
八尾市教育委員会
米田 敏幸 |
| II. 津寺遺跡出土土器の胎土分析 | 岡山理科大学自然科学研究所
白石 純 |
| III. 津寺遺跡中屋調査区出土の歯牙について | 鳥取大学医学部解剖学講座
井上 貴央 |
| IV. 津寺遺跡中屋調査区出土のウマの遺骸 | 早稲田大学文学部
金子 浩昌 |
| V. 津寺遺跡より産出した昆虫群集について | 三重大学生物資源学部
森 勇一 |
| VI. 津寺遺跡中屋調査区出土の植物種子について | 東京大学総合研究資料館
松谷 暁子 |
| VII. 津寺遺跡中屋調査区における植物珪酸体および花粉分析について | パリノ・サーヴェイ株式会社 |
| VIII. 津寺遺跡中屋調査区出土の炭化材について | パリノ・サーヴェイ株式会社 |
| IX. 津寺遺跡中屋調査区出土の赤色顔料について | 福岡市埋蔵文化財センター
本田 光子 |
| X. 津寺遺跡中屋調査区出土のガラス滓について | 株式会社ニコン相模原製作所
荻谷 道郎 |
| XI. 津寺遺跡中屋調査区出土の鉄滓について | 編集者 |

I. 津寺遺跡出土の非在地系土器

八尾市立曙川小学校 奥田 尚
八尾市教育委員会 米田 敏幸

1. はじめに

津寺遺跡から出土した土師器の器形と表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。器形から判断される時期と産地、砂礫から推定される産地について述べる。器形の検討については米田、砂礫による検討については奥田が分担した。以下に観察結果について述べる。

2. 資料の抽出について

観察した土器は、任意に抽出したものであるが、抽出にあたっては、岡山県古代吉備文化財センターから非在地系土器として提示されたもののうち、特に畿内における従前の庄内式土器研究の成果によって

- 1) 形態上畿内等周辺部の土器と類似するもの。
- 2) 吉備以外からの搬入土器と認識できる器形、胎土を呈するもの
- 3) その他遺構解釈の上で重要な土器と思われるもの

に留意し、与えられた2日という時間の範囲で観察可能な個体数のみ選別を行い、観察土器の抽出にあたった。以下に抽出理由を資料ごとに列記してみる。

1259：外面にタタキメを残す壺で、畿内の甕の影響が考えられる。河内などでも外面タタキメをもつ壺は存在するが口縁が東部瀬戸内的である。近畿では播磨に多い白っぽい色調の土器である。

1881：庄内式に典型的に見られる加飾壺であるが、浮文や突帯が欠落し、口縁の伸びにもシャープさが無い。加飾壺は、河内では庄内式の古相期に多いが、浮文、突帯のない点で時期的に庄内式の新相期に下るものと理解できる。

1212：やはり庄内式に見られる加飾壺であるが、浮文のみで櫛による装飾は見られない。肩部の加飾は畿内では見ないもので瀬戸内的である。やはり時期的に庄内式の新相期に下るものと理解できる。

2577：無飾の複合口縁壺で、口縁の屈曲の甘さより庄内式の新相期に下るものであろう。

1422：頸部に加飾突帯をもつ長胴の壺と思われ、瀬戸内地方西部系の壺に類する。

2205：外面にタタキメを残す直口の壺で、V様式系の甕と共通する体部をもつ。肩の竹管文は畿内にはあまり例をみない。乳灰色の色調から播磨の土器の可能性が推定されたものである。

1816：いわゆる古相の布留式甕で、米田が布留系甕D類と呼ぶものである。加賀南部の漆町遺跡の分類では8群に属するものである。同類の甕は、河内の萱振遺跡S E03で、最新の庄内河内型甕E類や球形胴をもつ吉備甕などと共伴して出土している。

2159：**1816**と同形態の布留式甕であるが、色調が茶褐色を呈し、質感の異なるものである。

2757：最新段階の庄内河内型甕で、米田のいう庄内河内型甕のE類に属する。口径は小さく、左下がりのタタキメが極めて細かい。右下がりに施されたハケメが頸部に達するのが特徴。

1659：肩部内面に指押さえをし、口縁端部が断面三角を呈する全面タテハケ調整の甕は四国東部の

土器で、直線的な作りで色調が暗い茶褐色を呈するのは讃岐の土器、曲線的な作りで淡い赤褐色を呈するのは阿波の土器に多く、当資料は前者のものと推定された。

1815：最新段階の庄内河内型甕で、米田のいう庄内河内型甕E類に属する。口径は小さく、左下がりのタタキメが極めて細かい。右下がりに施されたハケメが頸部に達するのが特徴。

2219：口縁部と体部は庄内甕の特徴を備えるが、タタキメが粗いことや底部形態が畿内や播磨のものとは異質で、底部形態だけを見るとむしろ吉備甕の特徴に近い。形態上は粗目のタタキをもち、底部を残す最古相期の庄内甕との共通点を見いだせる。

1910：口縁端部が外傾肥厚する布留系甕は、庄内併行期の北陸南部地方から西部瀬戸内、九州に多く分布する米田のいう布留系甕C類に属する。加賀南部では漆7群土器の指標である。

1658：庄内甕に近い特徴を持つが、タタキが粗目であり、畿内で伝統的なV様式系甕の終末期の特徴も合わせ持つ。

1261：畿内の伝統的なV様式系甕で、庄内式併行期に至っても畿内及び周辺地域の庄内甕のない地域に広く分布している甕である。

2216：最古相の庄内河内型甕で、米田のいう庄内最古相期の庄内河内型甕A類の特徴をもち、口縁端部のつまみ上げやタタキメの細かさはそのうちでも新しい要素である。

1614：東海地方に特徴的なS字口縁甕の小型品。口縁端部が垂直で外に列点文がみられるのは赤塚氏のいうS字口縁甕のA類の範疇に含まれる。

2309：典型的な月影式の甕で漆4群に近いものかと推定される。

1221：山陰系の低脚の杯で、複合口縁壺や小型丸底壺、庄内甕等との共伴関係をもつ。

2025：複合口縁の山陰系の小型壺である。

1294：複合口縁の典型的な山陰系の甕で、体部が下すばまりになることから青木V・VI期、長瀬高浜I期に平行する可能性があろう。

1502：強い外反口縁を持つ複合口縁壺は、瀬戸内東部の四国東部や播磨に分布する複合口縁壺に近似する。

1904：肩部外面に波状文、ヨコハケをする布留系甕は、北陸から九州まで分布するが、口縁が外反し、口縁端部が外傾する点で布留系甕B類に該当し、北陸の国府クルビ式つまり漆7群土器に酷似する。

1554：口縁が水平方向に開き、内面肩に指頭痕を多く残す外面タテハケの甕は四国東部の土器の特徴で、曲線的な作りで淡赤褐色を呈するものは阿波の土器である場合が多い。

1553：庄内大和型甕で、横方向のタタキをもつ。タタキメが細かく胎土の白っぽいものは播磨長越遺跡以西に分布する庄内甕の特徴をもつ。

1222：山陰系の低脚杯である。

1230：山陰系の複合口縁甕の口縁である。

2190：口縁部まで叩きだした、全面にタタキメを残す甕である。上半を横方向に叩くなど播磨や摂津地方の土器と類似性を持つが、器壁が極めて薄く、底部の形状が畿内のものとは全く違い、吉備甕の形態に類似する。

2599：左下がりのタタキメに内面ヘラケズリした甕は、庄内甕の一種である。体部内面を頸部まで削り込まず、口縁部も長く伸びた形状をもつ。河内型にも大和型にも分類できず、白っぽい色調から庄内播磨型甕と言える。

2208：横方向のタタキメを持ち、内面を頸部までヘラケズリする庄内甕に分類できる甕であるが、底部の形状が吉備甕の底部形状に近い形をもつ。津寺に多いこの種の甕は、口縁形状だけ見ると庄内河内型甕に酷似するが、やはり大和型にも河内型にも該当する器形がなく、播磨にも同形状のものは見当たらない。河内では吉備系の土器が多量に出土した中田遺跡刑部3丁目土坑に類品がある。

1324：土製の支脚である。播磨長越にも同様の支脚が存在する。

1319：庄内系の高杯であるが、器面のヘラミガキを用いずハケ調整のみで、脚端部や杯屈曲部の沈線のある高杯は畿内や吉備のものには見られない。茶褐色を呈する特徴的な高杯である。

2158：上半部をヨコハケし、肩部に列点文を配する古式の布留系甕。口縁部が外反し、端部が外傾するものは、布留傾甕B類に属し、北陸の漆7群土器などに類似する。

1883：畿内型の複合口縁壺ではあるが、頸部が短いのが畿内のものとは異なる。庄内式の新相に併行するものであろう。

2592：小型の庄内甕であるが、器壁が厚く、畿内の庄内甕とは違和感がある。

511：庄内大和型甕で右下がりの粗いタタキメをもち、褐色を呈するものは大和の東南部を中心とする地域の土器の中にしばしば見られるものと同様である。

509：畿内の庄内併行伝統的のV様式系甕で、北鳥池タイプの甕は庄内式の内古相期に多い。

2481：小型器台は、吉備と畿内の庄内式に共通する器形をもつもので、畿内における土器の胎土観察によると、しばしば吉備より運ばれたものが見られる。したがってこれらの器種が吉備起源か畿内起源かが問題となっている。

3. 砂礫からみた産地について

土師器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。始めに土師器全体を裸眼で観察し、次に倍率30倍の実体鏡で観察良好な部分をみた。観察でき得た砂礫種は岩石片として花崗岩、閃緑岩、流紋岩、安山岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉍物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。これら砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大10mmである。石英・長石が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大2mmである。長石・角閃石が噛み合っている。角閃石には柱状で自形を示すものもある。

流紋岩：色は灰色、灰白色、暗灰色、茶褐色、褐色、淡赤色、淡赤褐色、赤褐色、黒色と様々である。粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大6mmである。石基はガラス質で、石英の斑晶があるものがある。

安山岩：色は灰色、粒形が亜角、粒径が最大1mmである。石基はガラス質で、角閃石の斑晶がある。

砂岩：色は褐色、茶褐色で、粒形が亜角、亜円、円で、粒径が最大1.5mmである。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色、褐色、黒色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大3mmである。

チャート：色は茶褐色で、粒形が角、粒径が最大8mmである。

片岩：色は淡茶色、黒色で、粒形が角、亜角、粒径が最大8mmである。泥質片岩、石英質片岩等である。

火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.7mmである。貝殻状、フジツボ状、束状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大4mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、無色透明で、粒形が角、粒径が最大 8 mm である。

黒雲母：金色、黒色で、板状、粒状である。粒径が最大 2 mm である。

角閃石：黒色で、粒形が角、粒状・柱状をなし、粒径が最大 5 mm である。結晶面が認められるものがある。また、自形をなすものもある。

輝石：褐色透明、黒色透明、黒褐色透明で、粒形が角、柱状・粒状をなし、粒径が最大 0.7 mm である。自形をなすものが多い。

以上のような砂礫種から源岩を予測した砂礫種構成を求めれば、Ⅰ類型、Ⅱ類型、Ⅳ類型、Ⅶ類型、Ⅷ類型の 5 類型に区分され、更に、僅かに含まれる砂礫種から亜類型に区分すれば、Ⅰa 類型、Ⅰb 類型、Ⅰbdg 類型、Ⅱa 類型、Ⅱad 類型、Ⅱd 類型、Ⅳe 類型、Ⅳeg 類型、Ⅳegh 類型、Ⅳeh 類型、Ⅳn 類型、Ⅶn 類型、Ⅷn 類型の 13 亜類型に区別される。

各類型について述べる。

Ⅰ類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫からなる……………Ⅰa 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅰb 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートを僅かに含む砂礫からなる……………Ⅰbdg 類型

Ⅱ類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅱa 類型

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫や流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅱad 類型

閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅱd 類型

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅳe 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩・泥岩を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅳeg 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩、片岩を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅳegh 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、片岩や自形をなす角閃石を僅かに含む砂礫からなる

……………Ⅳeh 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石や輝石を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅳn 類型

Ⅶ類型：砂岩や泥岩、チャートを主とする砂礫からなる。

チャートを主とし、角閃石を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅶn 類型

Ⅷ類型：片岩起源と推定される砂礫を主とする。

片岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石を僅かに含む砂礫からなる……………Ⅷn 類型

土師器に含まれる砂礫の採取地を出土した津寺遺跡を中心にして求める。津寺遺跡は花崗岩が広く

表18 津寺遺跡出土の土師器に見られる砂礫

試料番号	器種	岩 石														鉱 物										海綿の骨片	類型		
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石				輝石	
		肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍	肉眼	30倍			肉眼	30倍
津寺遺跡 1259	壺					M-僅角	L-微角											M-中E中	M-微					M-僅E多	M-微E多	IVe	掃磨		
津寺遺跡 1212	壺	L-僅角	L-稀角															L-中E稀	L-中	M-微		S-稀板	L-中	L-多			IIad		
津寺遺跡 1881	壺					L-中角	L-多角											M-稀E僅							S-稀E非		IVe	掃磨	
津寺遺跡 2577	壺					L-多亜角	L-僅角			M-稀E角						M-僅E板		M-中E中	M-微	M-微				S-稀E僅			IVeg	掃磨	
津寺遺跡 1422	壺						M-稀E角											M-微E多	L-多	M-僅E中	M-稀E中				M-中E多		IVe		
津寺遺跡 2205	壺					M-中E角	L-僅角											M-僅E板	M-中E中	M-微	M-稀E中					S-稀E非	IVe	掃磨	
津寺遺跡 1816	甕						L-僅E角											L-微E多	L-中	M-僅E中	S-稀板	M-稀E中			S-稀		IVn	加質?	
津寺遺跡 2159	甕		L-稀角															L-僅E稀	L-中	L-中	M-稀E板	L-中E粒	L-多	L-中			IIad		
津寺遺跡 2757	甕			L-稀角	L-微角													L-稀E稀	L-僅	L-僅	S-稀板	M-微E板	M-多	L-非			IIa	河内	
津寺遺跡 1659	甕																	L-僅E僅	L-微	M-中E中	S-僅E板	M-中E板	M-僅E中	M-中E中			IIc	旗鼓	
津寺遺跡 1815	甕	L-稀角			L-微E角													M-僅E僅	L-僅	M-僅E中	M-稀E板	M-中E板	M-僅E中	L-僅			IIa	河内	
津寺遺跡 2219	甕			L-微角			L-稀E角											M-僅E僅	M-微E中	M-稀E中				S-稀			Ib	在地	
津寺遺跡 1910	甕														M-中E板		L-中E僅	M-稀E中	M-僅E中	S-微E板	S-中E板		S-稀				IVa		
津寺遺跡 1658	甕	L-僅角	L-微角															M-僅E僅	L-僅	M-僅E中	L-僅		S-微E板				Ia	在地	
津寺遺跡 1261	甕					L-稀E角	L-微角						L-稀E角												M-稀E非		IVeh	掃磨	
津寺遺跡 2216	甕																	L-僅E中	M-稀	M-中E中	S-稀E板	M-微E板	L-多	L-多			IIa	河内	
津寺遺跡 1614	甕		L-稀角															M-中E中	L-多	M-僅E中	L-僅	M-稀E板	L-微E粒				Ia	在地	
津寺遺跡 2309	甕					M-中E角	L-僅角					L-稀E角						M-中E中	L-僅E中					L-稀	S-稀E非		IVeg	越前?	
津寺遺跡 1221	杯					L-微角	L-中E角								M-稀E角		M-僅E中	M-中E中	S-微					S-稀E中	M-微E中	IVe	因幡		
津寺遺跡 2025	壺					M-微角	L-僅E角											M-微E中	M-中E中						S-稀E非		IVe	因幡?	
津寺遺跡 1294	壺					L-僅E角	L-中E角					M-稀E角	L-稀角		M-稀E角			M-僅E中	L-中E中	L-微				S-稀E多	S-微E多	IVegh	因幡		
津寺遺跡 1502	壺					L-僅角	L-多角											M-僅E中	L-微E多	L-中	M-多			S-僅	S-僅E中	IVe	掃磨		
津寺遺跡 1904	壺						L-中角												M-多E多		S-稀				M-微E僅		IVe	加質	
津寺遺跡 1554	壺											L-多E角	L-多E角		L-稀E角			L-僅E中	L-僅		S-稀			S-稀			IVn	阿波	
津寺遺跡 1553	壺					L-中E角	L-中E角			L-微E角	L-稀E角	M-稀E角			M-稀E角			M-僅E中	L-中E中	S-僅E中					M-僅E中		IVegh	掃磨	
津寺遺跡 1222	杯					L-稀角	M-多角											M-中E中	M-僅E中	M-微E中	S-稀			S-稀E中	S-稀E多	IVe	因幡		
津寺遺跡 1230	壺						L-僅角											M-多E多	L-多E多	M-中E中	M-僅E中		M-微E中	M-微E中	S-微E多	IVe	因幡		
津寺遺跡 2190	壺		L-微角		M-稀角													M-微E中	L-中E中	M-僅E中			S-微E中	S-僅E中		Ib	吉備		
津寺遺跡 2599	壺					L-中E角	L-僅E角											L-微E多	M-僅E中	L-僅E中	L-微				S-稀E非		IVe	掃磨	
津寺遺跡 2208	壺	M-微角	L-稀角		L-稀角													L-多E僅	M-僅E中	M-僅E中	S-稀板		M-僅E中	M-中E中		IIad	吉備		
津寺遺跡 1324	支脚	L-稀角	L-稀角		L-稀E角							L-微E角						M-多E僅	M-微E中	M-僅E中			M-稀E中	S-僅E中		Ibdg	在地		
津寺遺跡 1319	高杯	L-稀角	L-稀角		L-稀角													L-微E僅	L-僅E中	M-微E中	L-微E板		L-多E中	M-非E中		IIa	旗鼓		
津寺遺跡 2158	壺						L-僅角								M-多E角		M-稀E中	M-多E中	M-僅E中	M-稀					M-稀E多	IVe	掃磨		
津寺遺跡 1883	壺					M-微角	L-中E角											M-僅E中	L-中E中	M-微E中				M-微E中	M-稀E非	IVeh	掃磨		
津寺遺跡 2592	壺	M-稀角	L-微角	M-稀角	L-微角													S-稀E中	M-微E中	M-僅E中	M-中E中			M-中E中		IIad	吉備		
津寺遺跡 511	壺	L-僅角	L-稀角				L-稀角											M-微E中	L-僅E中		S-稀		M-微E中	M-中E中		IIad			
津寺遺跡 509	壺		L-稀角									L-中E角	L-微角					M-微E中	L-僅E中		M-僅E中			S-稀			IVn	振津?	
津寺遺跡 2481	器台																	S-稀E中	S-僅E中				S-微E中	S-僅E中			区分不能		
津寺遺跡	器台		M-稀角															M-微E多	S-多	L-微E中	S-中		S-稀E中	S-稀		Ib	在地		

肉眼=肉眼観察 顕微鏡による観察: L=粒径2mm以上 M=粒径2mm未満0.5mm以上 S=粒径0.5mm未満 非=量が非常に多い 多=量が多い 中=量が中 僅=量が僅か 微=量がごく僅か 稀=量がごくごく僅か 30倍=実体鏡の倍率が30倍 実体鏡による観察: L=粒径1mm以上 M=1mm未満0.3mm以上 S=粒径が0.3mm未満 量は顕微鏡と同じ -=以下の粒径がある E=自形 EF=結晶面がある W=白雲母が含まれる 板=板状 貝=貝殻状 束=束状 フ=フジゴ状

分布する総社平野の東部、足守川の流域に位置する。遺跡の南方や北方には閃緑岩の岩体が点々と分布する。このような岩石分布の影響を受けて当遺跡の北側の足守川では花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、南方の加茂遺跡付近になれば閃緑岩質岩起源の砂礫が主を占めるようになる。しかし、流紋岩質岩起や碎屑岩起源、片岩起源の砂礫を主とするような砂礫は当遺跡付近では得られない。遺跡付近の砂礫構成（砂礫相）を考慮して、土師器に含まれる砂礫の採取地を以下に推定する。

I a 類型、I b 類型に属する砂礫は花崗岩質岩起源の砂礫が分布する地域の砂礫と考えられ、当遺跡付近の砂礫と推定される。I b 類型で吉備とした砂礫は角閃石が柱状で、結晶面があり、閃緑岩に柱状で自形をなす角閃石が含まれることから、足守川中流域の加茂遺跡付近の砂礫と推定される。この砂礫相を示す吉備系の甕や高杯は大和や河内を始めとして各地で見られる。I b dg 類型の砂礫は砂岩や流紋岩質岩起源の砂礫が含まれることから高梁川の砂礫か津寺遺跡下層の砂礫と推定される。II a 類型で河内とした砂礫は裸目で長石や角閃石が目立ち、実体鏡下では角閃石が多く、くさっているものが多い。また、砂礫の粒形は角である。このタイプの砂礫は八尾市恩智付近の砂礫と推定され、黒雲母が多いタイプは八尾市水越付近と推定される。従来から言われているような東大阪市客坊谷の砂礫には角閃石や輝石、橄欖石が含まれていることから異なる。讃岐とした砂礫は細かく、粒形が明瞭な角閃石や長石が多く、閃緑岩質岩起源の粘土に花崗岩質岩起源の砂礫を混和したような砂礫構成を示す。高松市岩清尾山の南部付近の砂礫と推定される。また、角閃石が多く、花崗岩質岩起源の砂礫を僅かに含む砂礫構成のもので、桜井市米川や寺川、檀原市八釣川の砂礫かと推定されるものがある。このタイプは檀原市弁天塚古墳の壺や桜井茶臼山古墳の壺等の砂礫相に似ている。II d 類型の砂礫は砂礫相から讃岐、高松市付近が推定される。IV e 類型の砂礫は砂礫相から播磨西部、加賀南部、因幡に区分されるものと、自形の角閃石が多く砂礫の採取地を推定しがたいものがある。IV e g 類型の砂礫は砂礫相から播磨西部と越前の平野部の砂礫と推定される。IV n 類型で加賀とした砂礫は砂礫相から加賀南部、梯川流域の砂礫と推定される。IV e h 類型の砂礫は砂礫相から播磨西部の砂礫と推定される。IV e gh 類型の砂礫は砂礫相から因幡千代川下流域の砂礫と播磨西部の砂礫が推定される。VII n 類型の砂礫はチャートが多いことから丹波帯の南部にあたる摂津東部の砂礫の可能性はある。VIII n 類型の砂礫は片岩起源と推定される砂礫を主とすることから、三波川帯の片岩分布留意の砂礫と推定される。場所としては吉野川下流の阿波地域が推定される。

以上のように砂礫の採取推定地は北が加賀、越前、因幡、東が河内、播磨、南が阿波、讃岐となる。

4. 搬出地からみた津寺遺跡の搬入土器

土器の観察結果より提起される問題は多岐に及ぶが、中でも特に庄内甕の起源の問題や地域同士の拠点間の土器交流の問題が大きな問題として浮かび上がって来る。そこで地域毎の土器の傾向について述べることにしたい。

河内からの搬入土器

形態：まず溝-16出土の庄内河内型甕A類2216であるが、まさしく古相期の典型的な特徴をもつ庄内河内型甕と呼ぶべきもので、下半のハケ調整も顕著ではなく、わずかに底部をのこすもので、庄内式期I~II期のものとみてよい。

一方溝-4出土の1815と土器溜り出土の2757は庄内河内型甕E類に分類することができ、庄内式でも終末にあたるもので、庄内式期Vに属すると考えられる。このように今回観察したもの以外の庄内

甕を含めて当遺跡では河内の庄内式の最古段階から最新段階の資料が揃っているため、河内と吉備の相互編年の対応を考えるうえで良好な遺跡資料であると考えられる。

胎土：2216、2757は長石と角閃石の粗い粒が目立ち、砂礫に顕著な角があり、閃緑岩質岩の媒乱砂を花崗岩質岩起源の砂礫の混じる粘土に混和した胎土である。このような砂礫構成の甕は八尾市中田付近に多量に出土する。大和川沖積地の粘土に八尾市恩智付近の閃緑岩の媒乱砂を混ぜた胎土に酷似する。1815は黒雲母が多く、八尾市水越付近に多く出土する甕の砂礫構成に酷似する。水越付近には黒雲母を多く含む角閃石の媒乱砂が多くみられる。この砂礫と付近の粘土を混和すれば、1221の胎土に酷似する。

大和からの搬入土器

形態：511のような庄内大和型甕や2159のような布留式甕、1212のような畿内系複合口縁壺のうち茶褐色を呈するものは、纏向遺跡や柳本遺跡、藤原宮下層遺跡等の大和盆地東南部で特徴的に出土する庄内甕や祭祀用の土器の胎土に共通するもので、大和の土器では特異な胎土の土器である。

胎土：511、1212、2159の砂礫には共通して長石が目立つ。閃緑岩質岩起源の媒乱砂というよりも谷川のような砂礫にみられる水洗いされたような砂礫である。また、花崗岩質岩の砂礫も僅かに含まれるが、この砂礫も水洗いされたような砂礫である。砂礫の採取地としては充分なる検討を得ていないが、桜井市西南部から橿原市東南部にかけての寺川や米川上流域や八釣川上流域が予測される。このような砂礫構成の土器は奈良盆地東南部で出土する祭祀用土器や庄内甕の一部にみられる。纏向遺跡出土庄内甕の一部や柳本四ノ坪遺跡出土庄内甕の多く、箸墓古墳前方部出土の複合口縁壺、桜井茶臼山古墳・橿原市弁天塚古墳出土の複合口縁壺等の砂礫構成と同じである。また、高松市岩清尾山南方付近にもみられる。

摂津からの搬入土器

形態：摂津地域から播磨東部にかけては庄内式の影響が少なく、布留式直前の比較的遅い時期まで509のようなV様式系甕が残存するが底部が明瞭に残ることから庄内式の古相期に併行するものか。

胎土：509はチャートの角～亜角砂礫が多いことから、チャートが多量に流出する地域で、花崗岩質岩起源の砂礫が僅かに含まれる地域である。このような砂礫構成は大阪府東部の高槻市付近の砂礫と推定される。

四国からの搬入土器

形態：1554のような明るい赤褐色を呈し、肩部内面に押さえ痕を多く残す曲線的な作りのものは、阿波地域の土器として認識でき、矢野式などの名称で呼ばれているものである。一方、形態的に似通っており、同様な指押さえ痕があっても茶褐色を呈し、口縁や肩部が直線的でシャープさのある1659のような甕は、1319のような茶褐色を呈する高杯とともに讃岐からの搬入土器である。

胎土：1554は結晶片岩を多量に含む。結晶片岩砂礫には黒雲母を含む石英片岩が多く、絹雲母片岩、泥質片岩が僅かであることから変成度がやや高い地域の結晶片岩分布域の砂礫である。片岩分布域は三重県檜田川、和歌山県紀ノ川、徳島県吉野川、愛媛県土居町、同県肱川流域があげられるが、檜田川や紀ノ川の砂礫には花崗岩質岩起源の砂礫が僅かに含まれ、土居町付近では変成度が高すぎる。吉野川か肱川の砂礫が推定される。

1319、1659は非常に細粒から粗粒の角閃石を含むことから閃緑岩質岩起源の粘土と推定され、長石が目立つ。このような砂礫は高松市岩清尾山南方付近で多量に出土する土器の砂礫に酷似する。付近

には閃緑岩質岩の媒乱砂も見られる。角閃石を多く含む河内の砂礫構成とは異なる。

北陸からの搬入土器

形態：溝-16出土の1319は、北陸の月影甕で、漆4群土器で、庄内式期Ⅰ～Ⅱの庄内河内型甕A類2216が共伴していることにも時期的矛盾はないように思われる。1904は漆7群土器で、国府クルビ式段階の加賀南部の土器が搬入されたとみてよい。庄内式期Ⅳ併行に考えられる土器である。1816は漆8群土器で、布留系甕D類と共通する器形である。庄内式期Ⅴの庄内河内型甕E類1815と共伴することにも時期的な問題はない。

胎土：1319は流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、角閃石や自形の輝石を含み、加賀南部の砂礫に似ているが、砂岩や泥岩を含み、流紋岩質岩の岩相等から加賀南部よりも越前平野の砂礫に酷似する。1904は細粒の流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、僅かに自形の輝石が含まれ、砂礫相が石川県小松市梯川流域の砂礫相に酷似する。1816は加賀南部の可能性が高い砂礫構成を示す。

山陰東部からの搬入土器

形態：小型の複合口縁壺2025、低脚杯1221、1222、複合口縁甕1230、1294がある。いずれも因幡の鳥取市周辺からの搬入土器で、庄内式期Ⅲ～Ⅴに平行する秋里Ⅰ～Ⅱ期に該当し、青木Ⅴ～Ⅵ期、長瀬高浜Ⅰ～Ⅱ期併行の時期で矛盾はないであろう。

胎土：1294は流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、片岩や泥岩、チャートを僅かに含む砂礫構成と砂礫相から因幡、千代川下流秋里付近の砂礫構成に酷似する。1221、1222、1230、2025は砂礫相から千代川流域の砂礫の可能性はある。

播磨からの搬入土器

形態：1553、2599のような白っぽい色調を呈する庄内甕や1261のようなV様式系甕のうち胎土の白っぽいものは播磨西部の土器として間違いない。2158のような布留系甕で肩部に列点文をもつものは、広島県神辺御領遺跡、愛媛県宮前川遺跡、北部九州等瀬戸内海周辺の古式の布留系甕にも多く見られる。庄内式期Ⅳ以後の時期が考えられる。1881の畿内系の加飾複合口縁壺や1259のような短頸広口壺、1502や2577、1883のような無飾の畿内系複合口縁壺等も長越遺跡で出土しているものと類似しており、当遺跡出土の畿内系の壺の多くは、播磨西部の土器とすることができる。

胎土：1553は砂礫種構成の区分では因幡と同じになるが、砂礫相的には播磨西部の砂礫を示す。1259、1261、1502、1553、1881、2158、2599は流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、自形をなす輝石が含まれ、角閃石も含まれることがある。流紋岩質岩と輝石の相から播磨西部の砂礫と推定される。いずれの砂礫も砂礫相的には播磨西部揖保川から市川流域を中心とした地域の砂礫と推定される。

西部瀬戸内からの搬入が推定される土器

形態：1422のような頸部に加飾突帯をもつ長胴の壺は、山口県や大分県等瀬戸内地方西部に分布する壺に類似する。

胎土：1422は自形の角閃石が多く、且つ、流紋岩質岩起源と推定される砂礫が多い。砂礫の採取地については推定しがたい。

吉備で製作された土器

形態：2208や2219のような庄内河内型甕A類と共伴する異形の庄内甕は、畿内の庄内甕にはない特異な形状を呈する。上半は畿内の庄内甕に類似しているのに下半は吉備甕のプロポーションをもつ。このような甕が吉備の甕として庄内甕の出現期に存在することは、庄内甕の起源を考える上で大きな

問題である。これをもって畿内の庄内甕が吉備甕に影響を与えて吉備にこのような土器を出現させた
とすることができるであろうか。しかしこれらが庄内式期Ⅰ期に併行する可能性からみると、むしろ
逆に吉備甕の変異形としてこのような土器が先に存在し、それが播磨や河内の庄内甕を成立させる背
景となったとする考え方もできるであろう。1658や2592の甕のようにこの甕の系譜を引く吉備産の庄
内甕は、庄内式併行期の新しい段階になっても継続して吉備で製作され続けているのである。今後吉
備におけるこの種の土器の在り方には十分注目していく必要がある。

胎土：1658、2219は花崗岩質岩起源と推定される砂礫からなることから当遺跡あるいは遺跡の北方
付近の砂礫と推定され、2208、2592は角閃石と閃緑岩の特徴及び砂礫構成から当遺跡南方の加茂遺跡
付近の砂礫と推定される。

〈参考文献〉

- 米田敏幸「土師器の編年・近畿」『古墳時代の研究』雄山閣、1991
- 米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器」『考古学論集』考古学を学ぶ会、1985
- 米田敏幸「中河内の布留系土器群について」『考古学論集』考古学を学ぶ会、1990
- 田嶋明人『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター、1986
- 赤塚次郎『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1990
- 清水真一『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青木遺跡調査団、1976他
- 清水真一『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県教育文化財団、1981他
- 大野薫『萱振遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大阪府教育委員会、1983
- 松下勝・渡辺昇『播磨長越遺跡』兵庫県教育委員会、1978
- 山本昭・高木真光『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会、1981

Ⅱ．津寺遺跡出土土器の胎土分析

—古墳時代初頭の土器を中心として—

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. はじめに

蛍光X線分析法により津寺遺跡から出土した古墳時代初頭の土器について、以下の点について検討した。

(1) 以下に述べる古墳時代初頭の各地域の遺跡の土器の間で胎土分析値に差がみられるかどうか。

三重県鳥羽市粥鍋遺跡、山陰の鳥取県東部の鳥取市秋里遺跡・岩吉遺跡、中部の倉吉市猫山遺跡、西部の米子市上福万妻神遺跡・米子城跡西町遺跡・青木遺跡の7遺跡と、岡山県南部の総社市窪木薬師遺跡・岡山市足守川加茂A遺跡・百間川原尾島遺跡の土器との比較をおこなった。

また、時期は異なるが弥生時代後期初頭の香川県高松市上天神遺跡(高松平野)と西部の善通寺市旧練兵場遺跡、東部の大川郡志度町八丁地遺跡の土器を比較資料として、合わせて検討した。

(2) 津寺遺跡出土土器で形態・技法的に山陰、美作、備中北部、備後南部、備後北部、讃岐、畿内、播磨、北陸、東海に分類されている土器が胎土分析でどのように分類されるか。また、この他の津寺遺跡内から出土した土器がどのように分類されるか検討した。

2. 分析方法および結果

分析方法は、波長分散型蛍光X線分析装置で分析し、測定方法・条件・資料の作製は、現在まで筆者がおこなっている方法である。

測定資料は、表19に記載した津寺遺跡149点(壺・甕・高杯・鉢・器台・支脚・粘土)、矢部奥田遺跡1点(粘土)、三重県鳥羽市粥鍋遺跡5点(甕)、鳥取市秋里遺跡10点(壺・甕・高杯・器台)、岩吉遺跡4点(壺・甕・高杯)、倉吉市猫山遺跡10点(甕・高杯・器台)、米子市上福万妻神遺跡6点(甕・高杯・器台)、米子市米子城跡西町遺跡4点(甕・器台)、米子市青木遺跡2点(甕)の合計191点である。

分析の結果、(1)の検討課題である各地域間での分析値の比較では、第56図 K_2O-CaO 、第57図 $Sr-Rb$ 、第58図 $Fe_2O_3-TiO_2$ の各散布図から、山陰各地域の遺跡のうち鳥取県東部の秋里・岩吉遺跡と中部の倉吉市猫山遺跡がカリウム(K_2O)およびストロンチウム(Sr)の量に差がみられ識別できた。しかし、西部の上福万妻神・米子城跡西町・青木の各遺跡が東部と中部の両方の地域に広くプロットし、識別できなかった。

また、山陰地域と岡山県南部地域、高松市上天神遺跡(高松平野)・善通寺市旧練兵場地域(讃岐西部)、志度町八丁地(讃岐東部)との比較では、山陰地域と岡山県南部地域の土器の分布範囲が半分ほど重複し、識別が困難である。そして、時期は異なるが、高松平野部、讃岐西部・東部との比較では、東部地域が岡山県南部、山陰領域と重なった。

次に、(2)の課題である津寺遺跡出土土器のうち形態・技法の特徴から各地域(山陰・美作・備中北部・備後南部・備後北部・讃岐・畿内・播磨・北陸・東海)に分類した土器が蛍光X線分析でどのように分類されるか検討した。この結果、第59図 K_2O-CaO 、第60図 $Sr-Rb$ 、第61図 $Fe_2O_3-TiO_2$ の各

散布図から、山陰系の土器(資料番号60, 176, 177, 180, 181, 182, 183, 186)と考えられている8点のうち180(甕)をのぞいた他の土器は、一つにまとまりグループを作った。そして、これらのグループは山陰と岡山南部が重複するあたりに分布している。ただ、第60図の $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ では、山陰領域に分布した。

美作系と考えられている土器(92, 96, 185)のうち、96(壺)と185(甕)は山陰系のグループに入った。また、備中北部系の7点の土器(61, 67, 70, 100, 187, 189, 190)のうち、61(壺)、70(壺)、190(鼓形器台)も山陰系の土器群のグループに属した。100(壺)は、どのグループにも属さず、単独でプロットされた。

備後南部系と考えられている4点の土器(69, 95, 97, 98)は、ほぼ一つにまとまり、備後北部系と考えられる土器(65, 113)もほぼ一つにまとまった。備後南部系は山陰と岡山南部が重複する部分にプロットされた。

讃岐系と考えられている土器(49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 63, 64, 72, 78, 79, 80, 126)は、ほとんどが岡山県南部地域、山陰地域、讃岐東部が重複するの領域にプロットされた。ただ、126(甕)だけは、どの領域にも入らず第61図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ の散布図で讃岐の領域に入った。

畿内系と考えられている土器(57, 81, 84, 85, 109, 110, 111, 133, 134, 135, 136, 142, 147, 148, 151)のうち57(壺)・84(壺)・110(甕)・133(甕)・151(甕)の5点が、他の畿内系土器と離れてプロットし、岡山県南部・山陰地域の領域にも入らなかった。このことは、畿内からの持ち込まれたことが十分考えられる。また、この5点のうち84, 151と57, 110, 133の二つのグループに分かれるようである。

播磨系(173)、北陸系(157)の土器は、岡山県南部および山陰地域が重複する領域にプロットし特徴的な分布は示さなかった。ただ、第61図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ の散布図で北陸系の土器157(甕)は山陰系の領域にプロットされた。

東海系の土器(154, 155, 156)3点はほぼ一つにまとまり、第59図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ ・第60図 Sr-Rb の各散布図では、岡山県南部と山陰の領域からややはずれてプロットされた。

瀬戸内海沿岸部(周辺)で生産されたと考えられる土器(43, 44, 45, 90, 119, 144)のうち44(壺)、45(壺)の2点がまとまり、どの領域にも入らずプロットされた。

次に、津寺遺跡および周辺で生産されたと考えられる土器のうち114(甕)、131(甕)、152(甕)の3点が畿内系の土器の分布範囲に入り、分析値が似ていることがわかった。また、第62図 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 、第63図 Sr-Rb の散布図から44(壺)・45(壺)・77(壺)・145(甕)の4点の土器が岡山県南部・山陰の領域から外れてプロットされた。なお、44, 45は瀬戸内海沿岸部地域で生産された土器と考えられている土器である。

3. ま と め

以上、津寺遺跡出土の古墳時代初頭の土器の分析結果から、わかったことを述べまとめとする。

1) 山陰(鳥取県東部・中部・西部)と岡山南部および讃岐地方(高松平野部・東部・西部)の土器の比較では、まず山陰の東部と中部ではっきり識別できた。しかし、山陰西部の土器が両方の地域に重なり識別できなかった。そして、これら山陰と岡山南部および讃岐の土器の比較では、山陰と岡山南部が半分ほど重複し、讃岐の土器は東部(志度町八丁地遺跡)以外はほぼ識別できたが、東部の土器は山

陰および岡山南部の土器が重複する部分に重なる結果となった。

なお、讃岐地方の土器は、弥生時代後期初頭の土器で時期が異なっており、讃岐に関しては、今後同時期の土器を分析し、再検討する必要がある。

2) 形態・技法的な検討から各地方で生産され、津寺遺跡に持ち込まれたと考えられる土器の分析では、山陰系(60, 176, 177, 181, 182, 183, 186)がほぼ一つにまとまり、山陰領域に分布した。このことから、これら土器は、現段階の蓄積試料からは山陰から持ち込まれたものと推測される。また、美作系(96, 185)、備中北部(61, 70, 190)の5点の土器が山陰系のグループに属した。このことは、美作、備中北部の在地の土器がこれら山陰の領域に入るのか、今後在地土器の分析をおこない検討しなければならない。

備後南部系(69, 95, 97, 98)は、ほぼ一つにまとまったが、山陰と岡山南部が重複する領域にプロットされ、特徴的な分布を示さなかった。しかし、備後北部系(65, 113)はどの領域からも外れ生産地がはっきりしなかった。今後備後地域の在地産土器を分析し、比較する必要がある。

讃岐系の土器のうち126以外は、ほとんどが岡山南部と山陰が重複する領域にプロットされた。しかし、今回讃岐地方の古墳時代初頭の在地産出土の土器を分析しておらず、比較する資料がないため、津寺遺跡出土の讃岐系土器については詳しく検討できなかった。ただ、参考資料として讃岐地方の弥生時代後期初頭土器群と比較をおこなった。この分析結果では、讃岐東部の在地産土器が岡山県南部と山陰が重複する領域にプロットされ、岡山南部、山陰、讃岐東部の各領域が識別できなかった。このことから津寺遺跡出土の讃岐系土器が讃岐からの搬入品かどうか推定するには、現段階では困難である。ただ、今回の比較資料が時期が異なることもあり讃岐系土器かどうか判断するには、讃岐の在地産土器の基礎資料の蓄積が必要である。

畿内系と考えられる土器のうち、ほとんどが岡山南部、山陰の領域に入ったが、57, 84, 110, 133, 151の5点だけが離れてプロットされ、どの領域にも入らなかった。また、津寺遺跡出土土器で114, 131, 152の3点も前記した5点の分布領域に入り、同じ胎土であることが推定された。このことから、これら8点の土器は岡山南部、山陰、讃岐以外からの搬入品と考えられ、形態・技法的に畿内的要素を持つことから、畿内から持ち込まれたことが十分考えられる。ただ、畿内の在地産土器を分析しておらず、これらとの比較が必要である。

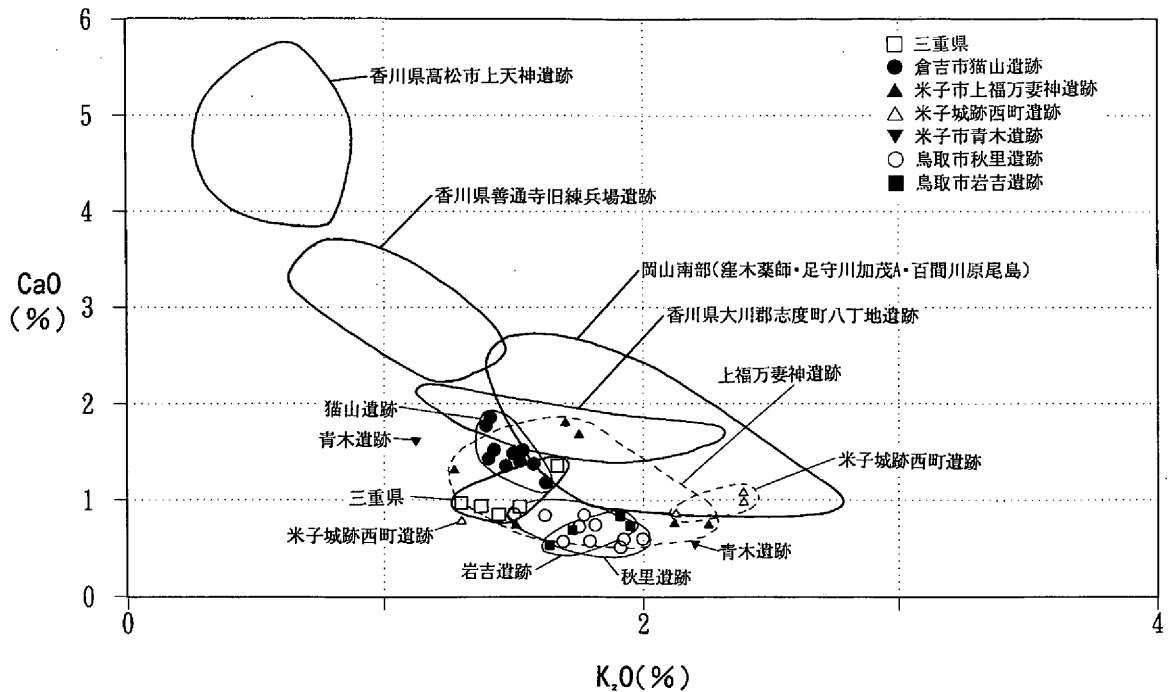
瀬戸内海沿岸部系と考えられている土器のうち44, 45が単独でグループをつくり、この領域に瀬戸内沿岸系の土器が分布することが十分考えられる。

以上、津寺遺跡出土の古墳時代初頭の土器の胎土分析をおこなってきたが、形態・技法的に各地域に分類されている土器でも胎土分析的にはあまり差がみられないものが多かった。特に、讃岐系と考えられる土器は、岡山南部と山陰が重複する領域にプロットされ、識別できないものもあった。

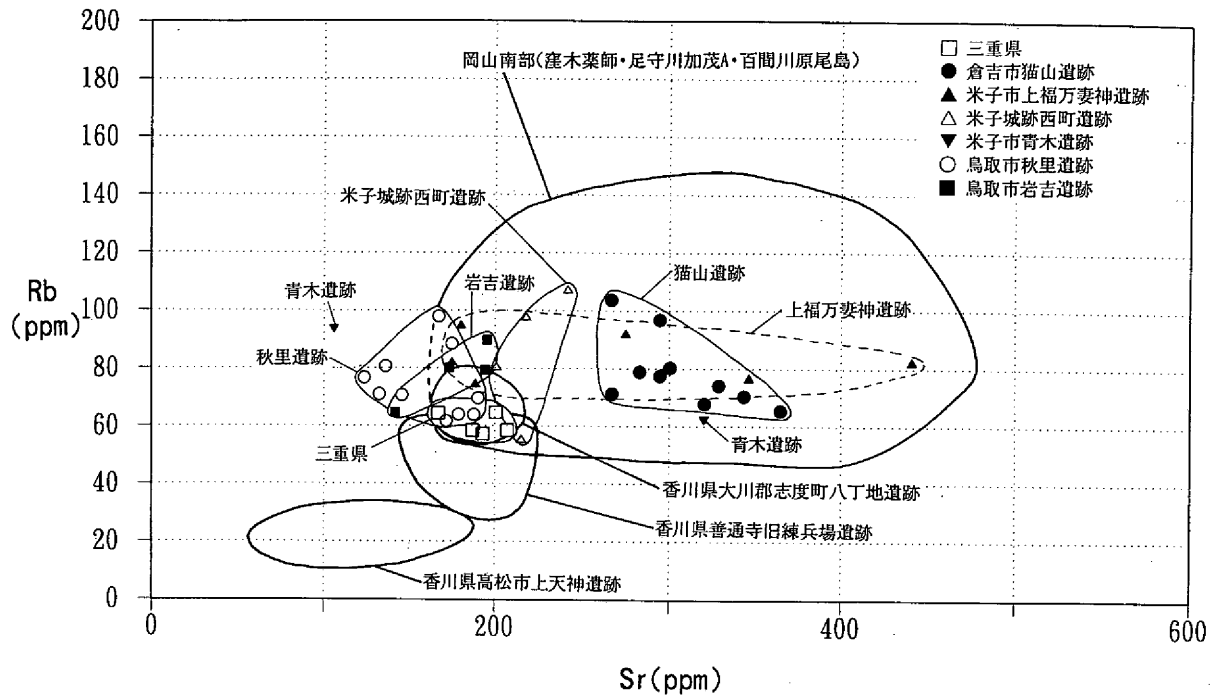
また、畿内系と考えられる土器のうち、明らかに別のグループをつくり、搬入品と考えられることを示唆する土器もあった。しかし、畿内、讃岐の在地産の土器を分析しておらず、基礎データが無いことで、これ以上の検討は困難である。

最後になりましたが、この分析をおこなうにあたり資料を提供いただいた鳥取市教育委員会、倉吉市教育委員会、米子市教育委員会、鳥羽市教育委員会に対し謝意を表します。

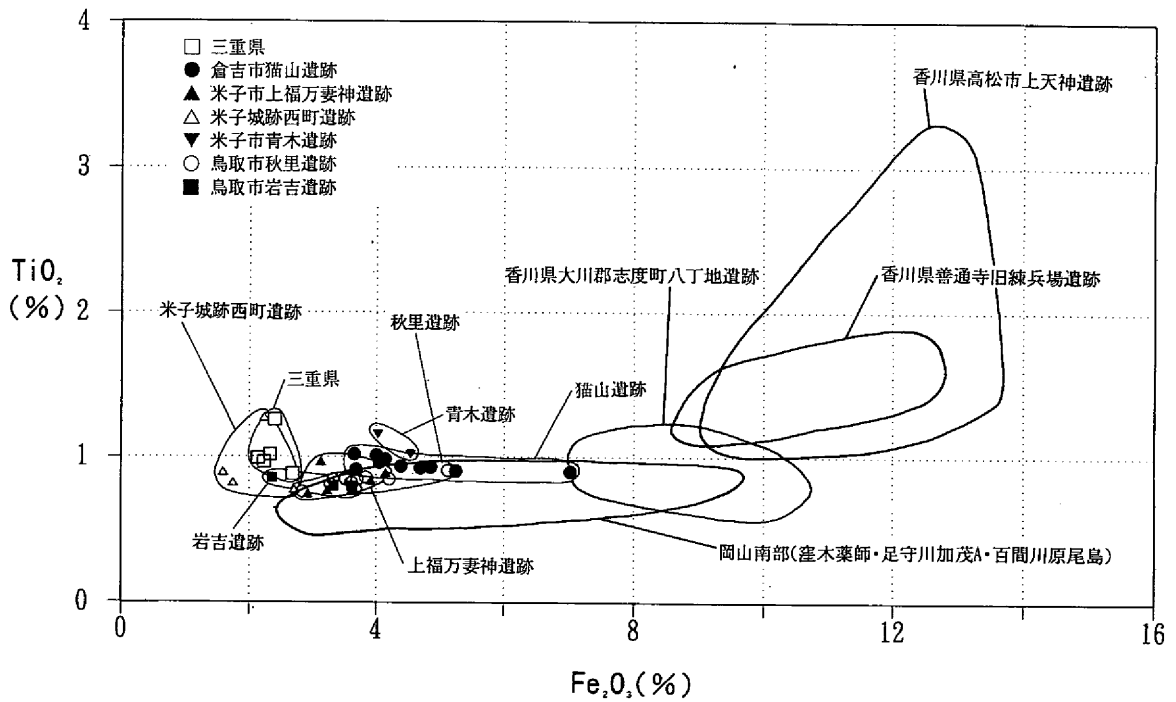
- 註1. 白石 純「窪木薬師遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会 1993.PP245-269
2. 白石 純「足守川加茂A・B遺跡、足守川矢部南向遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会、1995.pp1117-1125.
3. 白石 純「百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88』岡山県教育委員会、1994.pp301-307.
4. 白石 純「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 上天神遺跡(第2分冊)』香川県教育委員会、1995.12 pp324-334。
5. 形態的・技法的な分類は資料提供者による。



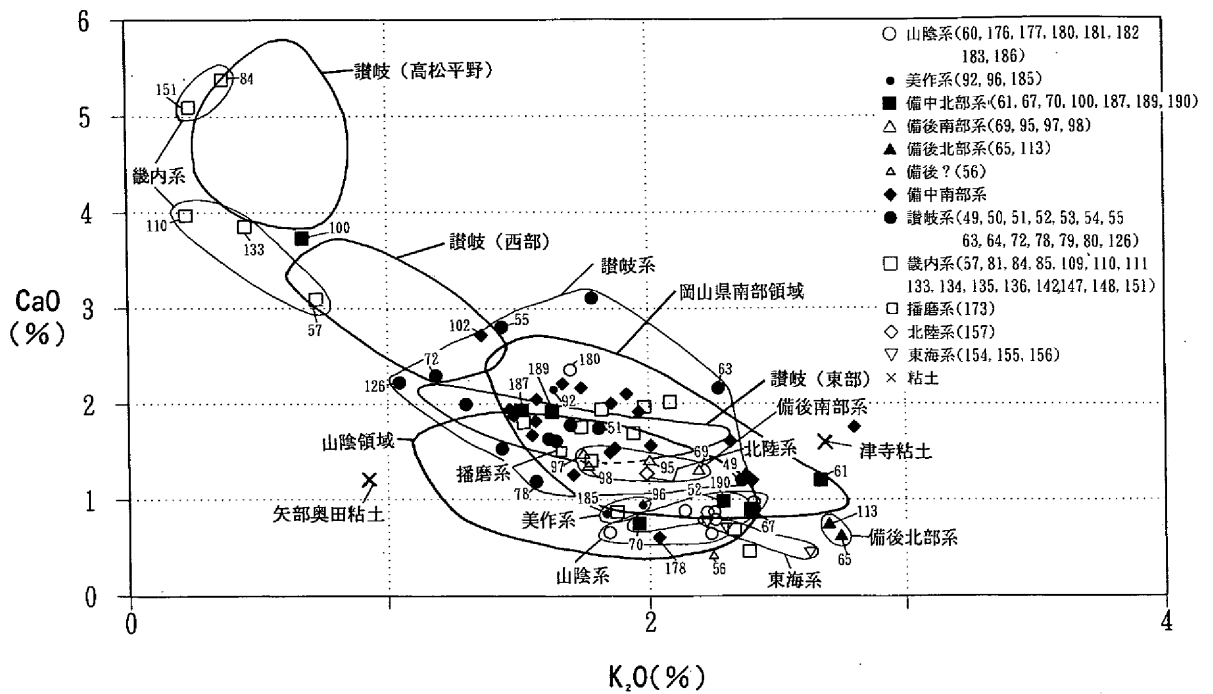
第56図 岡山県南部・山陰・讃岐の各地方の比較 (K₂O—CaO 散布図)



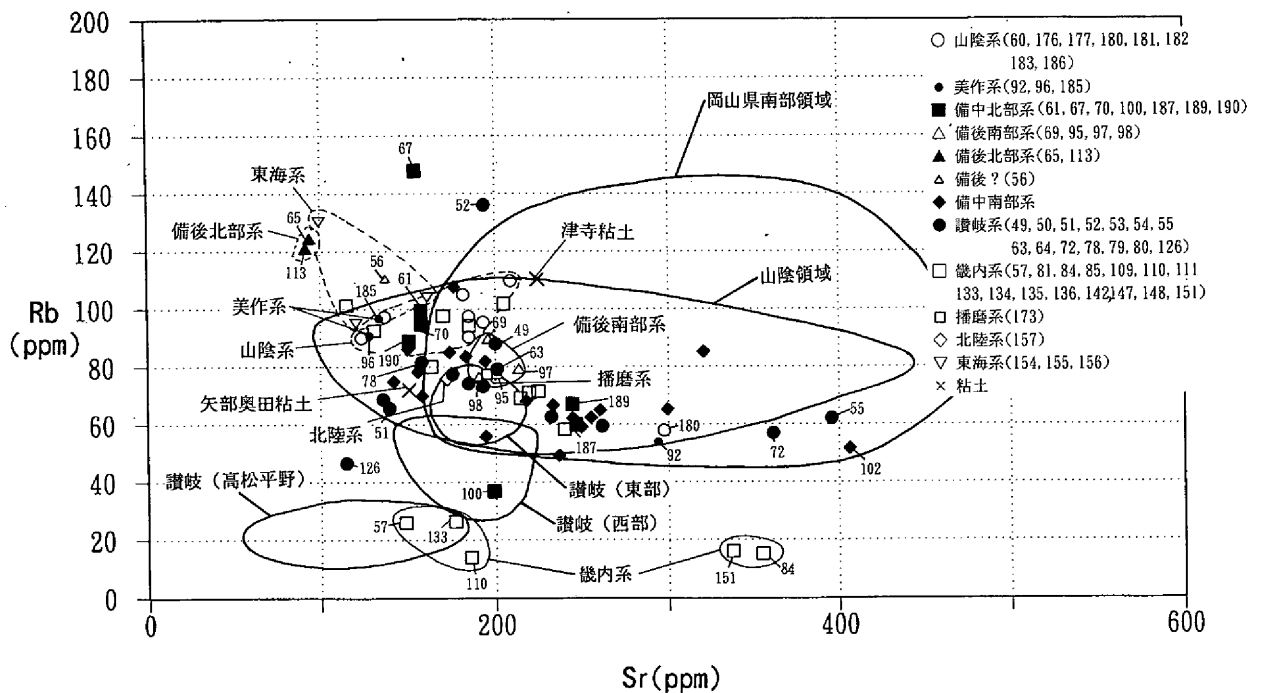
第57図 岡山県南部・山陰・讃岐の各地方の比較 (Sr-Rb 散布図)



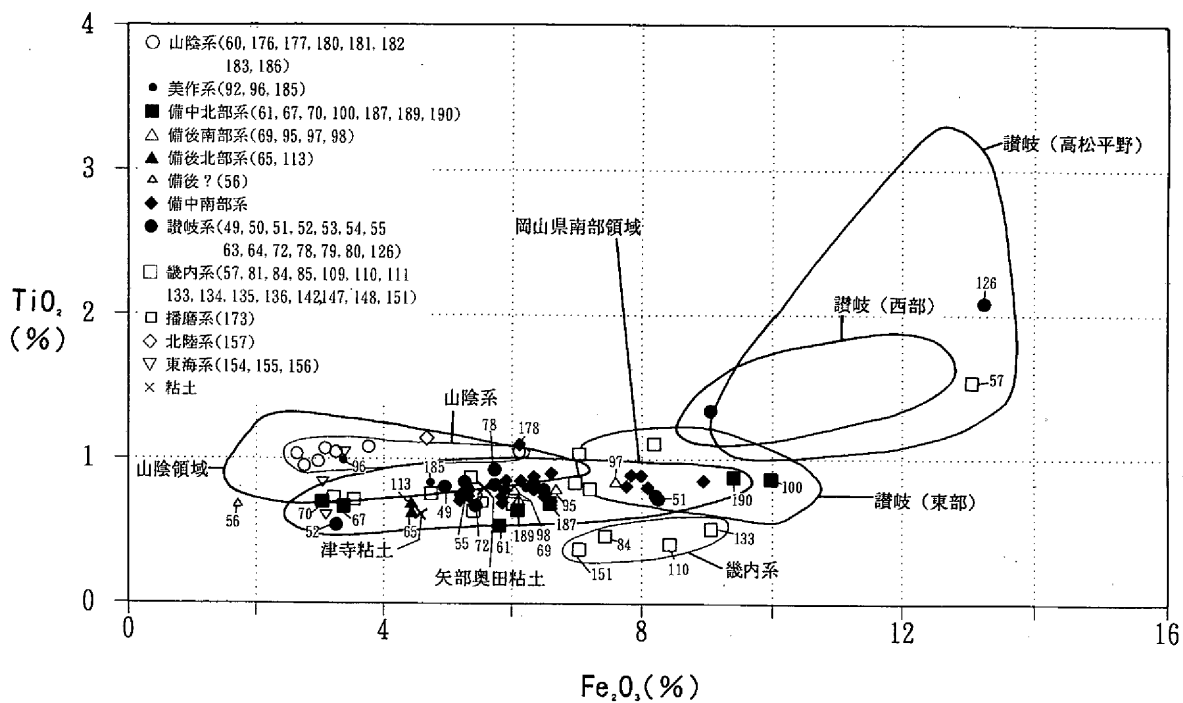
第58図 岡山県南部・山陰・讃岐の各地方の比較 (Fe_2O_3 - TiO_2 散布図)



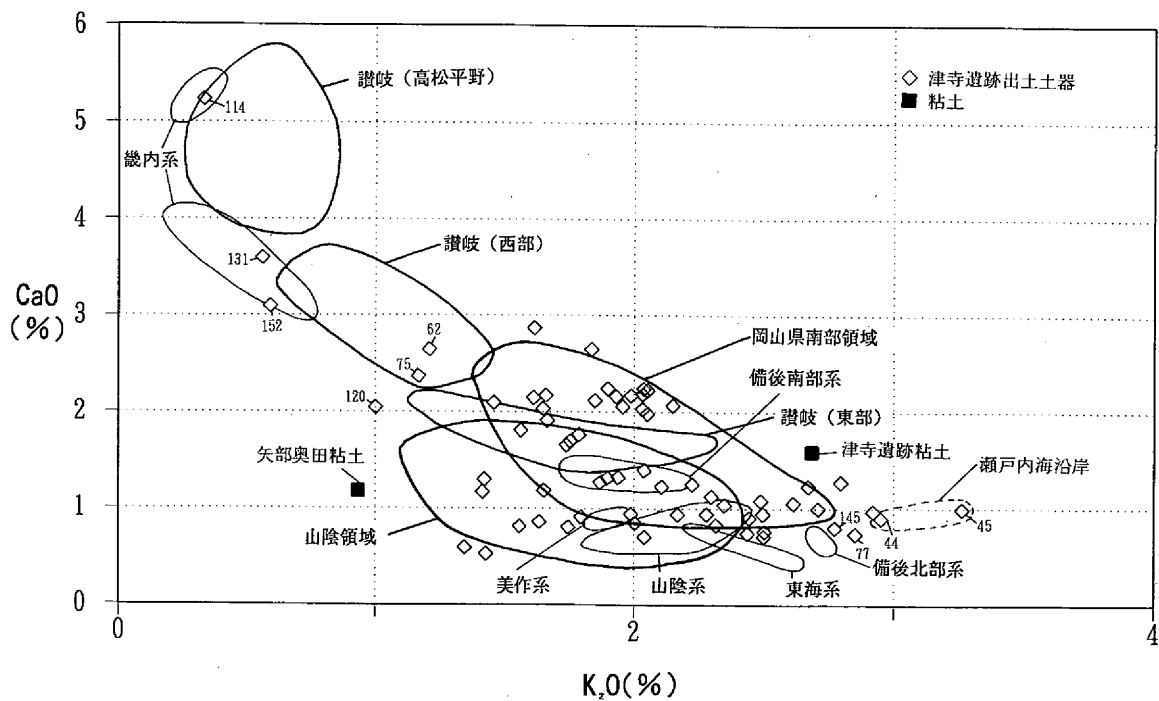
第59図 形態・技法的に分類されている各地域の土器と各地方の在地産土器との比較 (K₂O—CaO 散布図)



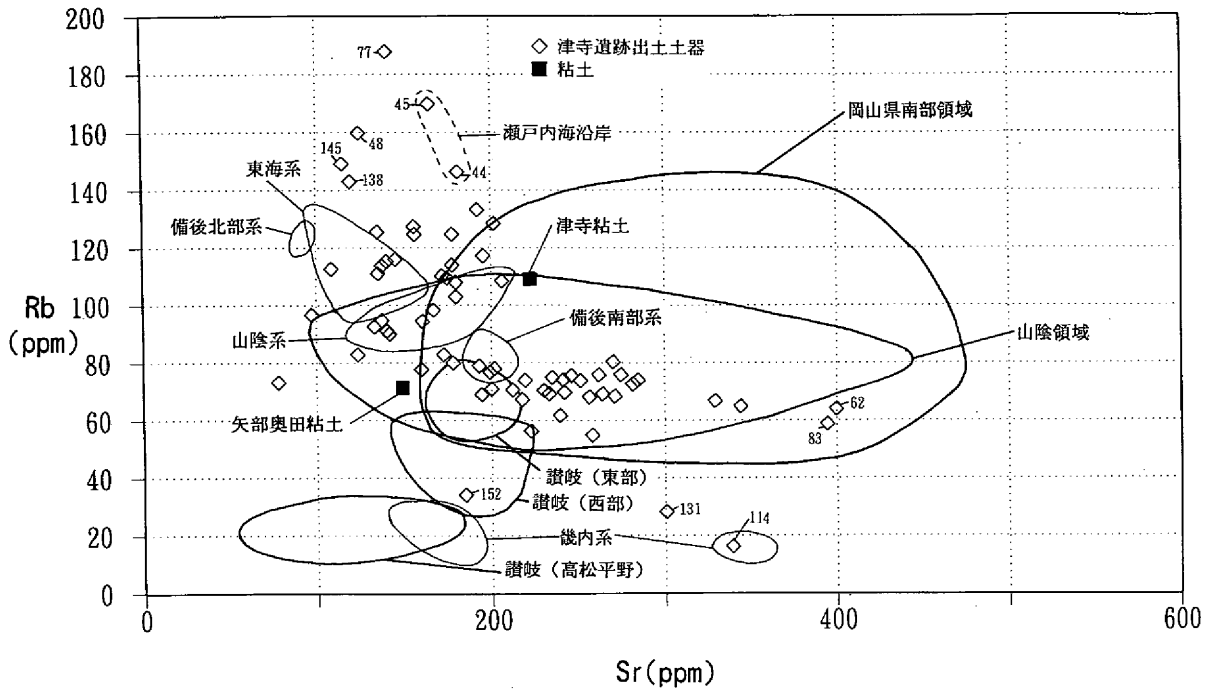
第60図 形態・技法的に分類されている各地域の土器と各地方の在地産土器との比較 (Sr—Rb 散布図)



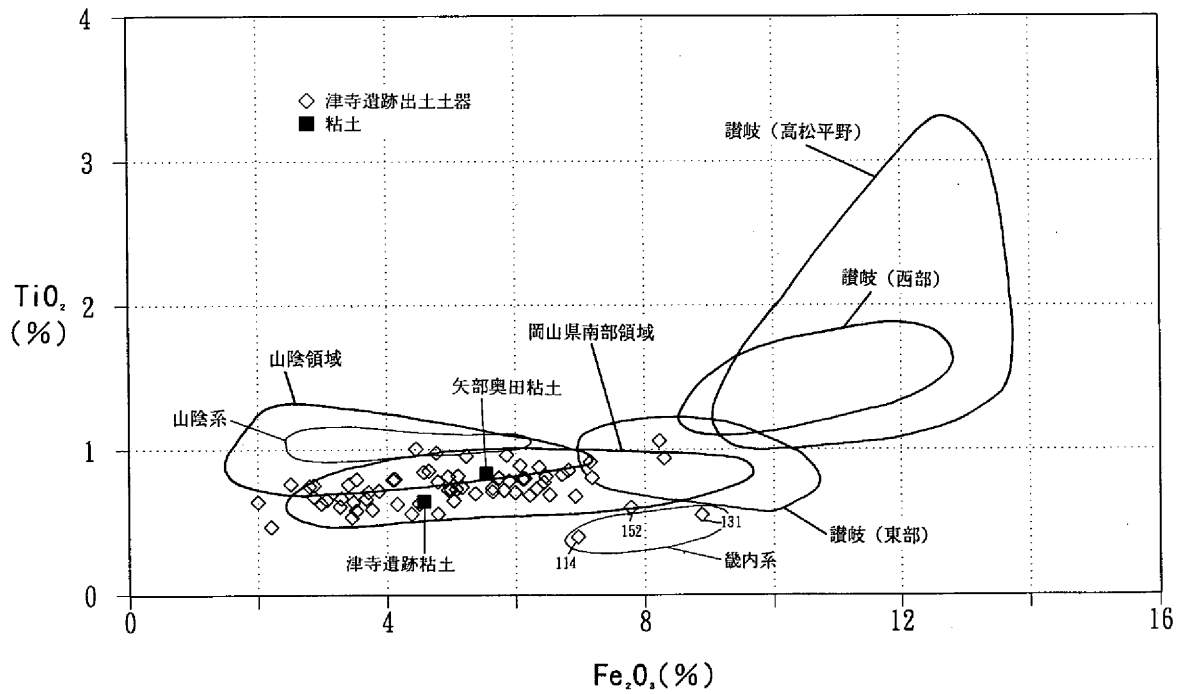
第61図 形態・技法的に分類されている各地域の土器と各地方の在地産土器との比較 (Fe₂O₃-TiO₂ 散布図)



第62図 津寺遺跡出土土器と各地方の在地産土器との比較 (K₂O-CaO 散布図)



第63図 津寺遺跡出土土器と各地方の在産土器との比較 (Sr-Rb 散布図)



第64図 津寺遺跡出土土器と各地方の在産土器との比較 (Fe₂O₃-TiO₂ 散布図)

Ⅲ. 津寺遺跡中屋調査区出土の歯牙について

鳥取大学医学部解剖学第二講座 井上貴央

1. はじめに

津寺遺跡中屋調査区土壌墓-7より検出された歯牙の同定をおこなった。伴出遺物等の考古学的検討により、本人骨は室町時代前半の「屋敷墓」であった可能性が高いと判断されている。

2. 同定結果

1) 遺物番号1

左上顎第1乳臼歯と左上顎第2乳臼歯で、上顎骨は風化がすすんでいるものの、2本の歯牙が釘植した状態で検出されている。ほかに左上顎第1大臼歯の歯冠部が遊離した状態で検出されている。この歯牙の歯根はまだ完成しておらず、もともと上顎骨のなかに埋伏した状態にあったものと考えられる。

2) 遺物番号2

下顎骨のオトガイ部～右側下顎体にかけての部分で骨は風化がすすんでいるが、歯牙は釘植状態で検出されている。右側では、第1乳切歯、第2乳切歯、乳犬歯、第1乳臼歯、第2乳臼歯の部分が残っている。左側では、第1、第2乳切歯は検出時に人為的に破損されたようであり、それより遠位側の歯牙は残っていない。しかし、左犬歯(永久歯)の歯冠部分が下顎骨内に埋伏しており、その歯冠はほぼ完成している。

3) 遺物番号3

2点の遊離歯である。1点は右上顎第2乳臼歯であるが、他の1点は破損が大きく同定はできない。この乳臼歯はもともと歯根が完成していたようであるが、破損をきたしており歯根は存在しない。

3. 考 察

今回検出された歯牙のうち、上顎骨及び下顎骨に釘植していた歯牙は、すべてが乳歯である。永久歯の一部も検出されているものの、顎骨内に埋伏していたもので未萌出のものである。検出歯牙から判断すると、被埋葬者はすべての乳歯が生えそろう、永久歯はまだ萌出していない小児であったものと考えられる。

乳歯がすべて生えそろうのは2才以後である。また、永久歯のなかでも萌出時期のはやい第2大臼歯や中切歯は6-7才で萌出するが、本個体では未萌出であるので、これよりも若い個体である。下顎骨のなかには未萌出の犬歯が確認できたが、この犬歯の歯冠はほぼ完成していた。また、上顎第1大臼歯の歯冠もほぼ完成していた。これらの歯冠の完成時期は、それぞれ3-4才、6-7才とされており、乳歯の萌出状況や埋伏永久歯の歯冠完成状況等から総合的に判断して、本個体の年齢は、5-6才と考えるのが妥当である。

本個体は小児であるため、性別については特定できない。

IV. 津寺遺跡中屋調査区出土のウマの遺骸

早稲田大学 金子 浩 昌

1. はじめに

津寺遺跡中屋調査区の発掘調査においてウマの遺骸が出土した。溝-18内においてはウマの頭蓋と下顎骨が並ぶような状態で出土している。当時のウマの扱い方を知る上での興味ある例である。馬歯の出土状況、形状について報告する。

2. ウマ *Equus caballus* の遺骸の記載

A. 溝-18出土の馬歯

上顎歯

左右の上顎歯が平行して並ぶように出土している。歯は噛み合わせる面を下にして並んでいたがおそらくこの場所にウマの頭蓋が顔の面を上にした状態で埋存していたのであろう。なお、切歯らしいものが発掘時の写真にはみることができたが、破損したためか標本としては採取されていない。

臼歯は保存がわるくエナメル質部分を残すのみであり、また歯のすべてが当時のままに残されているわけではなかった。右側では $P^4M^{1,2,3}$ (第66図2)のみが残され、左側(第66図1)ではかなり破損している歯もあったが、臼歯のすべてが残されていたとみられる。

上顎歯計測値 左側 $P^3 \sim M^3$: 130mm, 同 $M^1 \sim M^3$: 76mm.

下顎歯

上記の臼歯列からやや離れた位置に下顎歯が埋存していた。これは左側下顎臼歯列であって、 $P_{2,3,4}M_{1,2,3}$ をほぼ確認することができた。

歯は上顎歯同様に保存はわるく、エナメル質と象牙質の一部を残し、一括して取り上げられた歯列が土と共にかたちを保っているのみである。

下顎歯計測値 左側 $P_2 \sim M_3$: 160mm.

これと別にこの地点を撮影した写真には、右側下顎骨の歯列が上顎歯列と平行するように出土した様子を見ることが出来る。おそらく全臼歯があったものと思われる。

以上のような出土の状況からこの地点には、ウマの頭蓋と左右の下顎骨があったようである。下顎骨については原状を確認する資料に乏しいが、おそらく左右が別々にされて頭の傍らに置かれていたのではなかろうか

B. 溝-69出土の馬歯

右側 $P_2 \sim M_3$ までの臼歯がほぼ並んだ状態で出土している。歯冠高を計測できるような状態ではないが、60mm位はあったのではないかと思われる。

C. 包含層出土の馬歯

ウマの右側下顎歯である。4点の臼歯があるが3点が完存、1点は断片である。 $P_{3,4}, M_1$ がその残

された歯の歯式と考えられる。P_{3,4}は土が歯に着いたまま取り上げられており、P₄はほとんど未咬耗の状態で、P₃は未萌出で、乳歯(dm₃)がその上にかぶさっていたのではないと思われる。それはP₃がP₄よりも低い位置で並んでいたことから推測される。

3～4才未満の個体である。

3. まとめ

津寺遺跡中屋調査区において検出された獣骨はすべてウマの臼歯、顎骨であった。二つの地点で検出されているが、溝-18とした地点では上顎臼歯列と下顎臼歯列が近い位置に並ぶような状態であった。上顎臼歯列は左右があり、この場所に頭蓋があったことを推測させるのに十分な在り方である。埋葬などを考えるには頭蓋の位置が不自然であるので、むしろ頭蓋のみがここに置かれていたと考える方が、歯の出土状態にあった説明であろう。そして、その脇にあった下顎臼歯列は、標本から確認できる右側と写真に写る左右不明の臼歯列で、それが左側のものとするとも左右の下顎骨があって、両方とも頬側をみせるような状態で置かれていたようである。とすると左右が向きを変えて置かれていたことになる。

このような在り方から、これらが何らかの祭祀に関わるものであったろうということは推測し得るであろう。

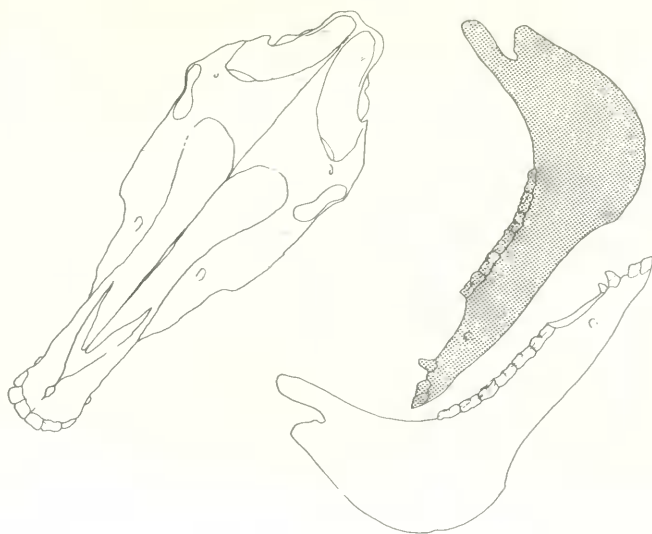
別の溝-69とした場所に右側下顎臼歯が一組、包含層としたものにやはり右側下顎臼歯があった。おそらくこれらも何らかの目的があって置かれたものであったのであろう。

こうした頭蓋、下顎骨は既に骨になっているものを使っているのではないかと考えられる。つまり祭祀のある毎に使われるあらかじめ用意された骨があったのである。埋葬されたウマの遺骸から頭蓋をはずしているのではないと思われる状態にあった例を調査したことがある(静岡県長崎遺跡)。

ここで出土したウマの大きさについてであるが、標本が歯のみしか残されていないこと、保存がわるく土ごと採取されていることなどから計測には不都合な状態であった。上記した計測値はそのようななかでの結果であるが、西中川(1989)によれば、日本在来馬の中型若しくは中小型(木曾馬あるいは御崎馬)の大きさをもつ個体であったと推定される。

〈引用文献〉

- 西中川 駿「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究—特に日本在来種との比較—昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書」1989年3月
金子浩昌「静岡県長崎遺跡出土の動物遺体」『長崎遺跡Ⅳ』静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第59集、1995



第65図 溝-18出土のウマの遺骸

出土状況の写真を元にして、ウマの頭蓋と下顎骨が当初に置かれた状態を推定した図である。網のかけられた下顎骨は写真には写っていない。標本から推定されたものである。



第66図 溝-18におけるウマの遺骸出土状況

V. 津寺遺跡中屋調査区より産出した昆虫群集について

三重大学生物資源学部昆虫学研究室 森 勇 一

1. はじめに

日本のような湿潤な気候下で、しかも有機質に富む土壌中には外骨格がキチン質から成る昆虫の節片が多数保存されている。また昆虫は花粉や珪藻化石のような古生物資料にくらべ、死後の移動が少ないことから遺跡周辺の古環境の復元に有効である。ここでは、岡山県津寺遺跡の屋敷地内の遺物包含層中より保存良好な昆虫分析試料を得ることができたので、以下にその概要を報告する。

2. 分析試料および昆虫化石群集

昆虫分析試料は、津寺遺跡中屋調査区の中世後半(14~15世紀)の井戸-2埋土中より採取されたものである。井戸は長さ約2.5m、幅2.3mの方形を呈し、深さは約1.2mであった。昆虫化石(昆虫遺体ともいう)を産した土壌埋土下層の暗灰色シルト層からは中世の土器片や、ワラジ・加工痕のある木製品とともに、マツ属・コナラ亜属等の大型植物遺体を随伴した。

昆虫化石の産出点数が必ずしも多くなく、しかも発掘調査時ならびに種子等の水洗選別作業の過程で取り上げられたものであるため、得られた組成が当時の昆虫相を正しく反映しているとみることはできないが、屋敷地をめぐる古環境を考察するうえで重要な資料を提供する。なお、ここに示した昆虫化石の点数はいずれも節片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数ではない。検出された昆虫化石は、筆者採集の現生標本と1点ずつ比較のうえ同定した。主な出現種については、第67図に示した。

産出した昆虫化石は、計30点であった。発見された昆虫化石のうち、大半の19点(63.3%)が地表性歩行虫で占められた(表1)。その中には湿潤地表面に生活し、肉食ないし雑食性のツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. (7点)、および同じく湿潤地表面に多い肉食性のヤマトトクリゴミムシ *Lachnocrepis japonica* が2点認められた。これらは、通常のゴミムシ科 HARPALIDAE のような生活ゴミや汚物・食物残渣等が蓄積した汚れた環境から見いだされることはむしろまれで、水生植物の繁茂する比較的清澄な湿地帯や、落葉層が累積するような雑木林内の水溜り付近に認められることが多い。ハネカクシ科(1点)もまた、湿潤地表面を特徴づける地表性歩行虫の仲間である。

なお、湿潤地表面のみならず乾燥した地表面にも棲息し、肉食性の地表性歩行虫であるアオゴミムシ属 *Chlacnius* sp. も1点発見された。

地表性歩行虫のなかに、食糞性昆虫の仲間であるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* (1点)が認められた。本種は人糞や獣糞などに集まり、人為度の高い開けた場所を好む糞虫として知られている。

残りの11点は食植性昆虫であった。そのなかに人家近くに植栽された果樹・畑作物などの葉を食害するヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (2点)や、サクラコガネ属 *Anomala* sp. (2点)が見いだされた。また、食植性昆虫で、草本植生を中心に多様な植物の葉上に認められるゾウムシ科 CURCULIONIDAE(5点)が、多数検出された。水生昆虫は1点も発見されなかった。



- | | |
|---|--|
| <p>1. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY
左鞘翅 (長さ9.6mm)</p> <p>2. コブマルエンマコガネ <i>Onthophagus atripennis</i> WATERHOU'S
左鞘翅 (長さ4.3mm)</p> <p>3. アオゴミムシ属 <i>Chlaenius</i> sp.
右鞘翅上半部 (長さ6.2mm)</p> <p>4. ツヤヒラタゴミムシ <i>Synuchus</i> sp.
右鞘翅 (長さ8.4mm)</p> <p>5. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY
腹部腹板 (幅6.4mm)</p> | <p>6. ゴミムシ科 HARPALIDAE
腹部 (長さ2.8mm)</p> <p>7. ゴミムシ科 HARPALIDAE
前胸背板 (幅3.6mm)</p> <p>8. サビキコリの一種 <i>Agrypnus</i> sp.
前胸背板 (幅3.9mm)</p> <p>9. ハナムグリ亜科 CETONINAE
頭部 (長さ2.2mm)</p> |
|---|--|

第67図 井戸-2出土の昆虫遺体

VI. 津寺遺跡中屋調査区出土の植物種子について

東京大学総合研究資料館 松谷 暁子

1. 試料

井戸-2の中から取り上げられ、水漬けの状態を送付されてきた種子類について、実体顕微鏡での観察を行った。

2. 観察結果

長さ15mm、幅8mmくらいの比較的大きい種子状のものが1点あり、5本の稜が認められる。この大きさと形態から、センダン科のセンダンの内果皮(核)と判断される(第68図1)。

長さ6mm、幅4.5mmくらいの薄い破片のような試料2点は、タデ科のソバの果皮と考えられる(第68図2)。中の部分は残らないで果皮だけが残ったのであろう。

その他の大多数の試料は、径3-4mmの円形ないし楕円形をしており、外側に殻状の部分が付着しているものもある。殻状の部分には稜が認められ、外形からニレ科のエノキの内果皮(核)かと考えられた。しかし、現生のエノキの核(第68図6)と比較するとかなり小さい(第68図3・4)。さらに分解して中の部分が残った状態と考えられる。

3. 考察

上記の植物遺残は昆虫破片とともに、井戸-2から出土しているが、この井戸は、長さ2.5m、幅2.3mの方形で、深さ1.2mあり、14-15世紀と想定されている。センダンやエノキは比較的暖かい所に生育する樹木である。果実の固い核の部分が残り、他の部分はとけてしまったと考えられる。エノキの果実(第68図5)は果肉の部分が食用になるが、中の固い核(内果皮)が、ネアンデルタール人の遺跡(Matutani 1987)やさらに古くは北京原人の遺跡の炉の灰から出土している。

日本でもエノキの核はしばしば出土しているが、灰の中からではなく、縄文時代中-晩期の包含層(南木・山尾・粉川1985)、縄文時代後晩期の貯蔵穴(沖・山本1994)、弥生時代中期の溝(黒松・粉川1986)、弥生時代後期の河川跡(松谷1993)や平安-中世の井戸(笠原・藤沢1988)などから出土している。

センダンは、果肉や樹皮、根皮が薬用に利用される(柴田1949)。津島岡大遺跡の縄文時代後晩期の貯蔵穴(沖・山本1994)や埼玉鍛冶谷・新田口遺跡の近世遺構の井戸跡(南木陸彦1986)から核が出土している。

栽培植物であるソバの瘦果が井戸から出土した例としては、前述の平安-中世の井戸(笠原・藤沢1988)などがある。

〈引用文献〉

- 沖陽子・山本悦世 1994 貯蔵穴出土の種子—小型種子を中心に—。「津島岡大遺跡4—第5次調査—」 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、P 249—260。
- 笠原安夫・藤沢浅 1988 佐々木アサバタケ遺跡（平安—中世）より出土の植物種実の同定。
「佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ」、石川県立埋蔵文化財センター、P 7—28。
- 黒松康悦・粉川昭平 1986 亀井遺跡出土の大形植物遺体。「亀井—その2」近畿自動車道天理—吹田線 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、P 339—338。
- 松谷暁子 1993 新保田中村前遺跡出土植物遺残。「新保田中村前遺跡Ⅲ」
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、P 175—184。
- Matsutani, A. 1987 Plant remains from the 1984 Excavations at Douara Cave. In Akazawa, T&Y. Sakaguchi eds, 'Paleolithic Site of Douara Cave and Paleogeography of Palmyra Basin in Syria.' Bulletin 29, The University Museum, The University of Tokyo, P 117-122.
- 南木睦彦 1986 鍛冶谷・新田口遺跡出土の種実類。「鍛冶谷・新田口遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 報告書62集、P 411—412。
- 南木睦彦・山尾政之・粉川昭平 1985 北白川追分町遺跡出土の種実類。京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ、P 113—138。
- 柴田桂太編 1949 「資源植物事典」 北隆館。



1. 出土センダン核 (内果皮) × 6



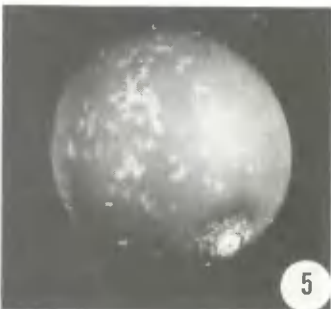
2. 出土ソバ × 6



4. 出土エノキ核 (内果皮) × 6



3. 出土エノキ核 (内果皮) × 6



5. 現生エノキ果実 × 6



6. 現生エノキ内果皮 × 6

第68図 井戸-2 出土の植物種子 (倍率は同一)

Ⅶ. 津寺遺跡中屋調査区における 植物珪酸体および花粉分析について

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

津寺遺跡は、岡山平野の北西部、足守川の氾濫原上に位置しており、縄文時代後期以降の遺物や遺構が検出されている。本遺跡では、微高地部に弥生時代中期後半～中世の住居・土壇・溝などが確認されており、低位部では弥生時代後期以降の水田跡が検出されている。

今回、津寺遺跡の低位部における植生について検討するため、植物珪酸体および花粉分析を行ったので、その結果を報告する。

2. 試料

植物珪酸体および花粉分析を実施した試料は、低位部の下層(自然堆積層：泥炭層)から採取された1点(試料番号10)、微高地を形成する自然堆積層から採取された2点(試料番号8・9)、水田覆土から採取された7点(試料番号1～7)の合計10点である(表21)。試料の土層名は第7図の土層断面図(B-B')に対応する。

試料番号	土層名	土色	層相	
1	1層	灰黄色	粘土	酸化鉄沈着
2	2層	灰黄色	粘土	酸化鉄沈着、植物遺体含む
3	3層	灰黄色	粘土	酸化鉄沈着、植物遺体含む
4	4層	黄褐色	粘土	酸化鉄沈着、植物遺体含む
5	6層	にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄沈着
6	8層	灰黄褐色	シルト質砂	酸化鉄沈着
7	9層	褐灰色	シルト質砂	酸化鉄沈着
8	11層	灰色	シルト質砂	
9	12層	緑灰色	粘土	
10	13層	暗オリーブ灰色	泥炭(弱分解～分解)	

表21 津寺遺跡の植物珪酸体および花粉分析試料表

3. 植物珪酸体分析

(1) 分析の方法

植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250 KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.6)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉

部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するため植物珪酸体組成の層位的分布図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

(2) 結果

結果は、表22・第69図に示す。植物珪酸体は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに保存状態が悪い。植物珪酸体組成は、試料番号10～8と試料番号7～1で異なる。試料番号10～8は、タケ亜科が多産し、ネザサ節・ヨシ属・ウシクサ族を伴う。この内、タケ亜科は試料番号9・8で機動細胞珪酸体が増加する。試料番号7～1は、ほぼ同様な種類が検出されるが、タケ亜科が減少し、イネ属が増加、多産する。また、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科も増加傾向を示す。

4. 花粉分析

(1) 分析の方法

花粉・胞子化石は、湿重約5～10g前後の試料中からHF処理→重液分離(ZnBr₂:比重2.2)→アセトリシス処理→KOH処理の順に物理的・化学的な処理を施して抽出した。なお、泥炭であるNo10は、植物遺体を除去するため重液分離の後に篩別を行った。

処理後の残渣は、よく攪拌した後にマイクロピペットで適量を取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成した。検鏡はプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類(Taxa)について同定・計数した。

結果は一覧表として検出個体数を表示した。なお、表中で複数の種類をハイフンで結んだものは数種間の区別が困難なものである。

(2) 結果

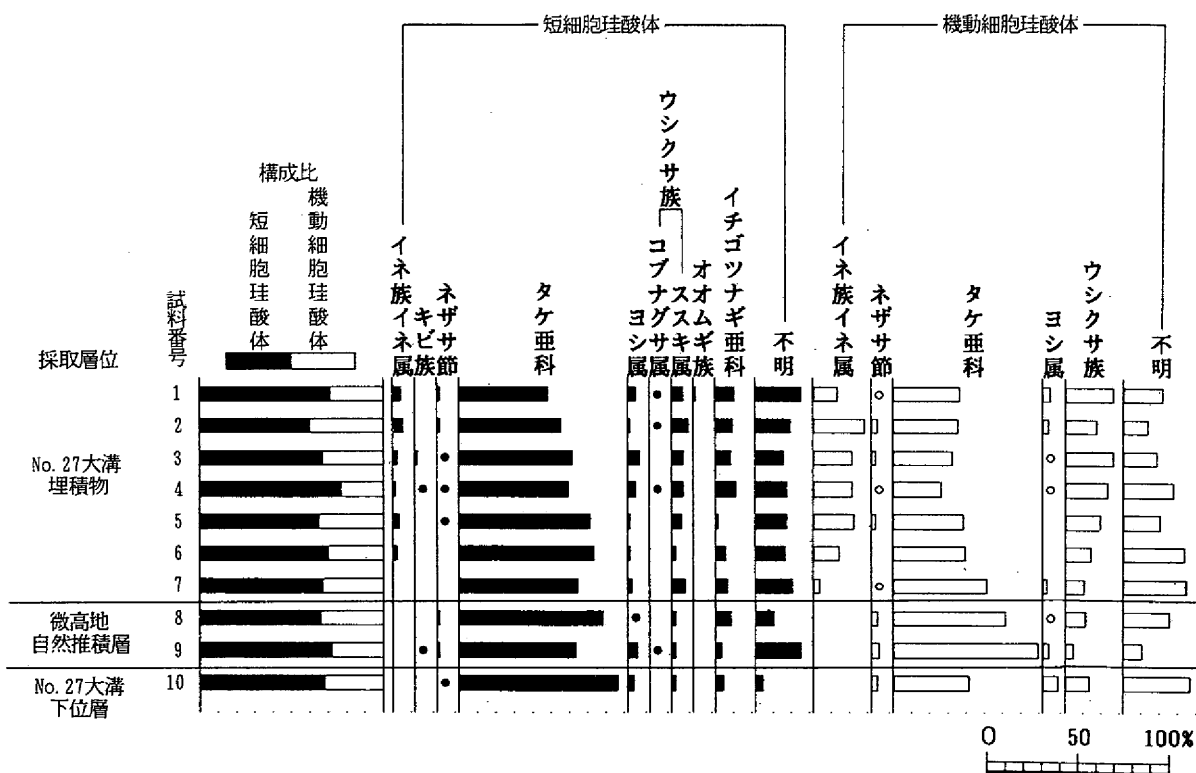
分析結果を表23に示す。検出されたほとんどの花粉・胞子化石は保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたりまた壊れていた。特に試料番号1～9では花粉・胞子化石がほとんど検出されなかった。一方、試料番号10では、アカガシ亜属が多産し、次いでモミ属・スギ属・コナラ亜属が算出したが、草本花粉は数種類・検出個体数共に少なかった。

5. 考 察

花粉分析の結果は、微高地を形成する自然堆積層(試料番号8・9)および低位部埋積土(試料番号1～7)から花粉化石がほとんど検出されなかったが、低位部下層の自然堆積層(試料番号10)では花粉化石が検出された。その出現傾向は、次のとおりである。木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、モミ属・スギ属を伴う。草本花粉では検出個体数が少ないが、イネ科・クワ科・アカザ科・ヨモギ属が検出される。これによれば、試料番号10が堆積した古墳時代前期以前、周辺にはタケ・ササ類、ススキの仲間、イチゴツナギ亜科、クワ科・アカザ科・ヨモギ属などの現在でもごく普通にみられる草本類が生育していたと考えられる。また、低湿地など周辺の山地などは、アカガシ亜属を中心とする暖

表22 津寺遺跡出土の植物珪酸体分析結果

種類 (Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属		12	10	5	5	7	6	-	-	-	-
キビ族		-	-	3	1	-	-	-	-	2	-
タケ亜科ネザサ節		3	3	2	2	1	-	-	3	3	2
タケ亜科		128	119	130	203	158	181	160	170	166	191
ヨシ属		10	3	12	14	3	3	6	2	12	7
ウシクサ族コブナグサ属		1	1	-	1	-	-	-	-	2	-
ウシクサ族ススキ属		17	19	12	22	12	5	17	4	6	5
イチゴツナギ亜科オオムギ族		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科		27	20	16	38	3	13	15	18	8	9
不明キビ型		12	11	12	26	14	15	18	3	4	7
不明ヒゲシバ型		30	21	11	19	11	8	17	16	40	7
不明ダンチク型		24	8	10	14	12	16	16	3	22	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属		14	40	23	22	26	15	4	-	-	-
タケ亜科ネザサ節		1	5	2	1	2	-	1	3	4	3
タケ亜科		38	51	34	27	45	42	64	69	81	43
ヨシ属		4	5	1	1	-	-	2	1	3	8
ウシクサ族		28	25	28	24	23	15	12	12	4	13
不明		22	18	19	28	24	36	42	28	10	37
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体		267	215	213	345	221	247	249	219	265	232
イネ科葉身機動細胞珪酸体		107	144	107	103	120	108	125	113	102	104
検出個数		374	359	320	448	341	355	374	332	367	336
組織片											
イネ属類珪酸体		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-



第69図 植物珪酸体組成の層位的分布

出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともそれぞれの総数を基本数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

表23 津寺遺跡における花粉分析結果

種 類 (Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉											
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	39
ツガ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
マツ属 複雑管束亜属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属 (不明)		1	-	1	-	1	-	-	-	-	1
スギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	20
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サワグルミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
クマシダ属-アサダ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
ハシバミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ブナ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	30
コナラ属アカガシ亜属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	76
コナラ属 (不明)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	10
クリ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
シイノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
カラスザンショウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
トチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	10
ツバキ属近似種		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
イボタノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉											
イネ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-	5
クワ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アカザ科		-	1	-	-	-	-	1	-	-	2
ナデシコ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ヨモギ属		-	1	1	-	-	-	-	-	-	7
不明花粉		2	-	1	-	-	-	-	-	-	53
シダ類孢子											
ヒカゲノカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イノモトソウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
他のシダ類孢子		74	11	18	8	10	11	16	12	-	74
Pseudoschizaca		5	1	1	-	-	-	-	1	-	-
合 計											
木本花粉		1	0	2	0	2	0	0	0	0	233
草本花粉		1	2	16	0	1	1	1	0	0	19
不明花粉		2	0	1	0	0	0	0	0	0	53
シダ類孢子		74	11	18	8	10	11	16	12	0	76
総花粉・孢子		78	13	37	8	13	12	17	12	0	381

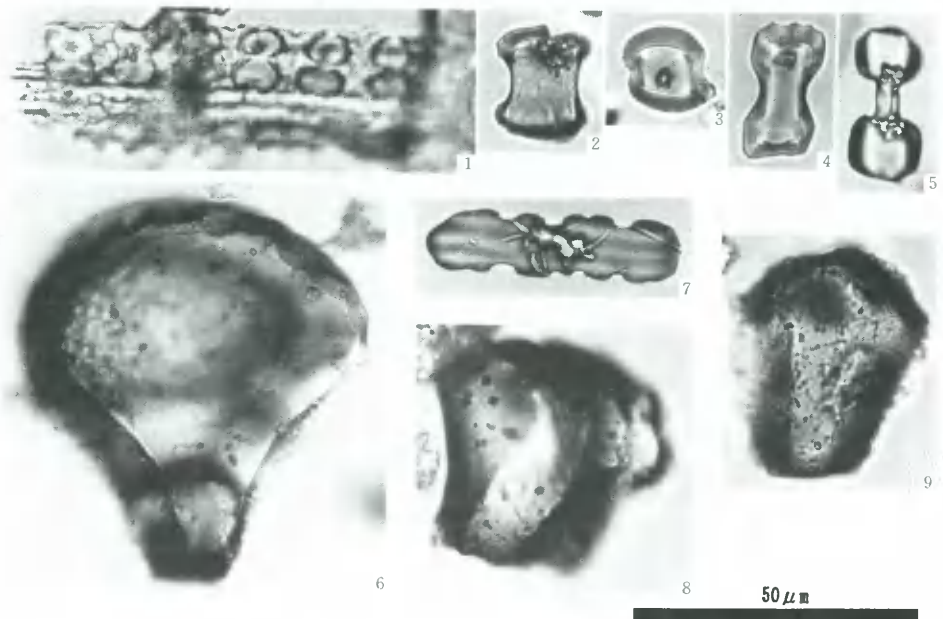
温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)が存在しており、これにモミ属、スギ属などの針葉樹が混交していた可能性がある。

試料番号8・9の植物珪酸体組成は、タケ亜科機動細胞珪酸体が増加するものの、ほぼ同様な種類構成からなる。これより、微高地を形成する自然堆積層が堆積した頃、周辺に生育していたイネ科植物の種類構成は大きく変化していなかった可能性がある。

古墳時代前期になると、周辺ではイネ科草本類の中でもススキ属、イチゴツナギ亜科などが増加したとみられる。また、周辺の低地でイネ属が増加したこともうかがえる。この時期、本遺跡では、発掘調査により水田跡が確認されており、しかもイネ属機動細胞珪酸体が50%前後の出現率で検出され

ていることがこれまでの調査で明らかにされている。このことからみても、低位部埋積土(試料番号1～7)におけるイネ属珪酸体の増加は、この地点で稲作が行われていたことを反映している結果とみられる。これは、低位部が水田として利用されていたとする発掘調査の所見とも調和的な結果と言える。

註1. 一般的に花粉・胞子化石は好気的な条件下において、化学的な酸化やあるいは土壤微生物の影響により分解・消失することが知られていることから、試料番号1～9の中の花粉・胞子化石は常に冠水しているような状態でなかった可能性がある。



- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体列 (試料番号3) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号8) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号3) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (試料番号4) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号2) | 6. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号2) |
| 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号6) | 8. ネザサ節機動細胞珪酸体 (試料番号2) |
| 9. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号8) | |

第70図 水田層出土の植物珪酸体

Ⅷ. 津寺遺跡中屋調査区出土の炭化材について

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

岡山市津寺に所在する津寺遺跡は、岡山平野の北西部を流れる足守川の氾濫原上に位置しており、微高地部に弥生時代中期後半～中世の住居・土塋・溝などが確認されている。この津寺遺跡のほぼ中央にあたる中屋調査区において、古墳時代中期の竪穴住居から住居構築材とみられる炭化材が検出された。そこで、古墳時代の人々がどのような木材を利用して住居を構築したのか検討するために炭化材の同定を行う。

2. 試料

試料は、中屋調査区の竪穴住居-122(古墳時代中期)から一括採取された住居構築材と考えられる炭化材である。試料は2袋に分かれており、試料間の接合の有無などを確認した上でそれぞれの袋から各3点計6点を抽出した。

3. 炭化材の同定の方法

試料の木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)を用いて木材組成の特徴を観察し、種類を同定する。

4. 結果

炭化材は全てクリであった。クリの解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列であるが、全て年輪で割れている。小道管は孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

5. 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、全てクリであった。この結果から、少なくともクリが住居構築材として利用されたことが明らかとなった。クリ材は強度が高く、耐久性もあるために構築材には適した木材である。住居構築材としての出土例は、関東地方・北陸地方・東北地方の縄文時代遺跡を中心に数多く知られている(千野, 1983, 1990; 高橋・植木, 1994)。岡山県内では、川入・上東遺跡、岡山大学構内遺跡等で樹種同定の報告例が知られているが(畦柳, 1974, 1977; 能城, 1992)、住居構築材と考えられる試料を対象とした例はない。そのため、今回確認されたクリが本地域において住居構築材として一般的であったのか否かは不明な点が多い。

鳥取県倉吉市では、大仙峯遺跡・頭根後谷遺跡・中尾遺跡で、出土位置を明らかにした上で、多くの住居構築材について樹種同定が行われている。(パリオ・サーヴェイ株式会社, 1990a, 1990b,

1992) これらの結果をみると、住居構築材は多くの種類で構成されている。このことを考慮すれば、今回調査したNo7住居においてもクリ以外に住居構築材として利用された木材があった可能性がある岡山県における住居構築材の用材選択は、資料の蓄積が開始された段階であり、今後さらに類例を蓄積して検討することが必要である。

<引用文献>

千野裕道 (1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生 —南関東地方を中心に—。東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p.27-42.

千野裕道 (1990) 縄文時代に二次林はあったか —遺跡出土の植物性遺物からの検討—。東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.215-249.

近藤謙二・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-64.

畦柳 鎮 (1974) 川入・上東遺跡出土木器類樹種鑑定総合所見。「山陽新幹線建設に伴う調査II」, p.351-353, 岡山県教育委員会。

畦柳 鎮 (1977) 川入・上東遺跡出土木器の樹種鑑定。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16「川入・上東都市計画道路(富本町・三田線)に伴う埋蔵文化財発掘調査」, p.169, 岡山県教育委員会。

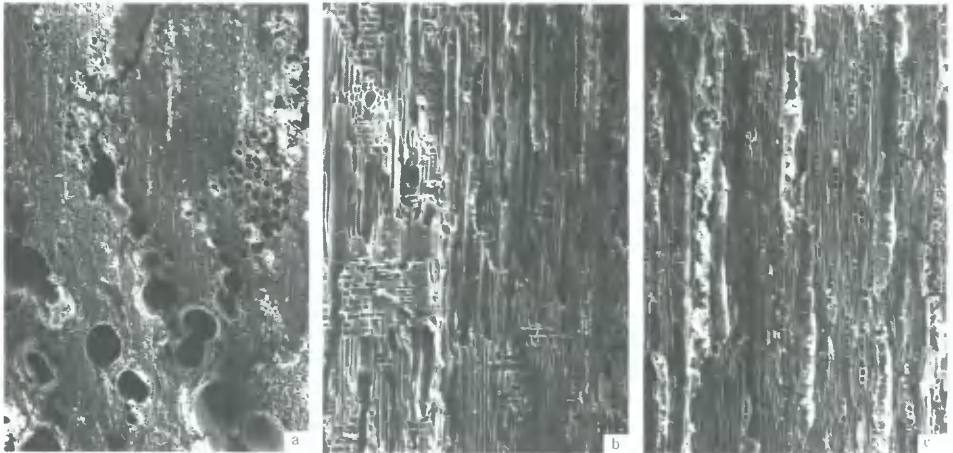
能城修 (1992) 岡山大学津島地区から出土した木材化石の樹種。「岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊」, p.169-187.

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1990a) 大仙峯遺跡1号住居址出土炭化材同定について。倉吉市文化財調査報告書第60集「立縫遺跡群V 大仙峯遺跡発掘調査報告書」, 倉吉市教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1990b) 頭根後谷遺跡住居址出土の炭化材樹種同定について。倉吉市文化財調査報告書第61集「立縫遺跡群VI 頭根後谷遺跡発掘調査報告書」, p.1-11, 倉吉市教育委員会。

バリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 炭化植物の同定と炭化木の¹⁴C年代。倉吉市文化財調査報告書第69集「中尾遺跡発掘調査報告書」, P.130-140, 倉吉市教育委員会。

高橋 敦・植木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PARYNO, 2, P.5-18.



クリ a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μm : a

200 μm : b, c

第71図 竅穴住居-122出土の炭化材

Ⅸ. 津寺遺跡中屋調査区出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本 田 光 子

1. はじめに

岡山市津寺遺跡出土の鉢形土器1606内面、および石杵S92に付着した赤色物が何であるかを、顕微鏡観察と蛍光X線分析により調査した。

出土例に関する今までの知見に寄れば、出土赤色物は鉍物質の顔料であり、酸化第2鉄を主成分とするベンガラと、硫化水銀(赤)を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹が考えられる。鉛丹の出土例はまだ皆無であるが、これら3種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を表に示した。

2. 試 料

No1は鉢形土器内面の一部に薄く付着しているもので、実体顕微鏡下でステンレス製メスに付く程度の量を採取した。No2は棒状石杵S92の磨面の凹部にわずかに付着しているもので、これについても実体顕微鏡下でメスにより微量を採取した。採取試料から針先に付く程度の量を取り、光学顕微鏡下で、観察を行った。

3. 顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

No1、2に、朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等である。そのほかに顕著なベンガラの特徴を持つ赤色顔料粒子は認められなかった。ただし、きわめて微粒のものについてはどの赤色顔料であるか判断できなかった。

4. 蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。エネルギー分散型蛍光X線分析装置(X線管球;モリブデン対陰極、印加電圧;40kV、印加電流;2.50mA)を用いて測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有無のみ表中に記した。No1、2とも赤色顔料の主成分元素としては鉄と水銀が検出された。この他主として混入の土砂、土器胎土、石材部分に由来する元素は省略した。ただし、鉄はこれらの部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。No1、2とも、水銀に比べて鉄のX線強度は、きわめて小さいので、赤色の由来となる主成分元素は水銀と推定される。両試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

5. まとめ

以上の結果から、鉢形土器内面および石杵の磨面に付着していた赤色物は赤色顔料であり、朱であることがわかった。No1は鉢形の内面朱付着土器であり、No2は棒状石杵(c類)である。

内面朱付着土器とは、土器の主として内面に「朱」が付着し、外面には煤が付着するものが多く、土器の破断面やヒビ割れに朱が染み込んでいる土器である。器種は小破片では甕が、完形では片口を持つ土器が多いが、高杯あるいは異形の専用品もある。現時点では北九州、瀬戸内、近畿地方の弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡で出土している。

石杵と呼ばれる石器は、3種類の赤色顔料のうち、特に「朱」を「すりつぶす」ための磨石の一種である。この石杵は、生産地出土の辰砂(朱の鉱物名)粉碎・精製用のもの、L字状石杵と呼ぶ磨面が曲面を有する逆勾玉形のもの、磨面がほぼ平坦な棒状石杵とに分かれる。棒状石杵は、古墳出土のものとならないものがある。前者は、丁寧に整形された定型のもので下部が撥形に開くものと円筒状でやすばまるもの(棒状石杵a類)と非定型で整形が少ないもの(棒状石杵b類)に分かれる。後者は、円柱状で使用面に軽い敲打痕、擦痕、磨滅が認められるもの(棒状石杵c類)である。

棒状石杵c類は、徳島県黒谷川郡頭遺跡、奈良県矢部遺跡、同県戸石辰巳前遺跡、同県大宇陀小学校等辰砂の生産地に近接した遺跡での出土例がある。生産地から離れた出土例としては、本例の他には北九州から近畿地方までである。また棒状石杵c類は庄内式併行期に現れると考えられるが、この時期の北九州ではまだL字状石杵が残り、棒状石杵c類は認められず、内面朱付着土器も完形ではなくすべて小破片である。なお、本例のように同一遺跡内で内面朱付着土器を出土する遺跡は、黒谷川郡頭遺跡、矢部遺跡、戸石辰巳前遺跡がある。

内面朱付着土器や石杵を用いてどのような作業が行われていたのかは、現時点では不明であるが、「朱」を伴う何等かの「所作」が、庄内式併行期にはそれまでとは違う形に変化し始めたことを示すものと思われる。

最後に、X線分析についてお世話になりました奈良国立文化財研究所村上隆氏、松井敏也氏に感謝致します。

No	試料	出土位置	顕微鏡観察	蛍光X線		赤色顔料の種類
				鉄	水銀	
1	内面朱付着鉢形土器(1606)	堅穴住居-103	朱	+	+	朱
2	棒状石杵(S92)	堅穴住居-70	朱	+	+	朱

表24 津寺遺跡出土赤色顔料の分析試料と分析結果

X. 津寺遺跡中屋調査区出土のガラス滓について

株式会社ニコン・相模原製作所 荻谷道郎

1. 資料および実体顕微鏡観察結果

資料のガラス滓は岡山県津寺遺跡中屋調査区袋状土壙-68内上層の流土中から検出され、共伴した遺物からその混入時期は古墳時代後期ごろと推定されている。資料は灰色の棒状多孔質体で、長さ40mm、太さ約10mm、重さ3.2g、比重約1.4である。実体顕微鏡観察によれば多数の未溶解の白色砂粒を含有する焼結体で、多数の泡を含有する暗緑色のガラス化部分が散在している。ガラス化部分の周囲にはガラスが浸食され2次生成した微少な針状結晶が密に存在する。百間川今谷遺跡ほか出土の「ガラス滓」と同類のいわゆる「ガラス滓」で、ガラス化があまりされず、地中埋蔵中に水に浸食され激しく風化されたものと推定される。

2. 分析結果と組成の推定

資料をエネルギー分散型X線分析装置(フィリップスEDA9100)で分析した。分析は安立伸夫氏(株式会社ニコン・相模原製作所技術開発部)に依頼した。分析結果を表25に示す。

本分析法では表面の約 $1\mu\text{m}$ までの組成を半定量している。表面が不均質であり、本分析法では微小部分を分析しているため、組成として多数点の分析値を示した。組成分析値はNa以上の重元素について合計100%になるように計算した半定量値である。Mnは本分析法では検出されなかった。(MnOとし1%以下、百間川原尾島遺跡出土のガラス滓²では2.5~7%のMnOが検出された)。

3. 考 察

資料の主成分の組成を百間川今谷遺跡出土・鹿田遺跡出土のガラス滓、および百間川原尾島遺跡出土のガラス滓と比較し表26に示した。部位bの分析値は他部位に較べ Al_2O_3 が少なく、MgO、CaOが顕著に多い。未溶解の鉱物部位を分析したと考え、異常値として主成分組成のバラツキの計算から除いた。

資料は他の遺跡出土のガラス滓と較べ Na_2O が少ない。これは地中埋蔵中に水によって溶出した影響があり、 Al_2O_3 が多いのは溶出されない残分として多くなっていると考えられる。MgO、CaOが多いのは部位bの分析値からも原料由来と推定され、他の成分は百間川原尾島遺跡と鹿田遺跡出土のガラス滓の中間値を示す。百間川今谷遺跡のガラス滓はガラス光沢を持ち、水による浸食が少なかった。資料は百間川今谷遺跡のガラス滓に較べガラス化が進んでおらず、水に浸食されており、生成時の加熱温度が百間今谷遺跡のガラス滓より低かったと推定される。

註1. 三浦定俊、荻谷道郎「鹿田遺跡1」『岡山大学構内遺跡発掘報告第3冊』P463

2. 荻谷道郎「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘報告88』P318

表25 岡山県津寺遺跡出土ガラス滓の分析値

資料 分析部位 組成 wt%	津寺遺跡出土ガラス滓						
	a	b	c	d	e	f	g
SiO ₂	51	50	57	56	51	55	55
Na ₂ O	1.6	1.6	1.8	2.3	2.0	2.3	1.8
K ₂ O	1.8	1.2	0.9	1.9	1.9	1.6	1.6
MgO	5.4	11	2.6	3.9	5.3	4.6	3.9
CaO	6.1	15	1.5	3.0	4.4	4.0	2.9
Al ₂ O ₃	28	16	29	25	28	24	29
TiO ₂	0.9	1.3	0.7	0.6	0.6	0.9	0.9
Fe ₂ O ₃	5.5	4.6	6.0	7.3	6.4	6.7	5.1

表26 岡山県出土ガラス滓の主成分の比較

資料	津寺遺跡	百間川原尾島遺跡	鹿田遺跡	百間川今谷遺跡
SiO ₂	54.1±2.34	50.6±3.5	60.7±1.8	62.6±1.8
Na ₂ O	1.9±0.46	2.5±1.0	9.4±0.4	11.5±1.2
K ₂ O	1.6±0.24	1.5±0.5	2.0±0.6	1.3±0.3
MgO	5.2±0.96	3.3±1.2	5.7±1.3	4.9±1.1
CaO	5.3±1.43	2.3±1.4	3.6±1.0	2.6±0.5
Al ₂ O ₃	27.1±1.95	20.8±5.0	9.7±1.7	9.5±2.0
Fe ₂ O ₃	5.9±0.73	14.7±4.2	5.1±1.9	4.2±1.0

(単位：wt%、±の後は標準偏差)

XI. 津寺遺跡中屋調査区出土の鉄滓について

1. 資料の概要

今回、分析を行ったのは、津寺遺跡中屋調査区の中央東よりに位置する竪穴住居-55から出土した鉄滓である。この住居は古墳時代前期前半の溝-16の上層につくられたもので、長さ460cm、幅355cmの長方形をなし、床面積は18.5m²を測る。主柱は2本あり、それぞれ直径50~45cmの円形をなす掘り方をもつ。柱間の距離は150cmを測るが、その中央には長さ45cm、幅30cm、深さ8cmの中央穴が検出された。また、南東辺の中央壁際には、長さ90cm、幅55cm、深さ25cmの方形土壇が認められた。この土壇からは古墳時代前期後半の高杯が出土している。このほかにも、床面から鉋が1点出土している。古墳時代前期後半に属する住居は、津寺遺跡では今のところほかに知られておらず、その在り方が注意されるものである。

2. 分析の結果

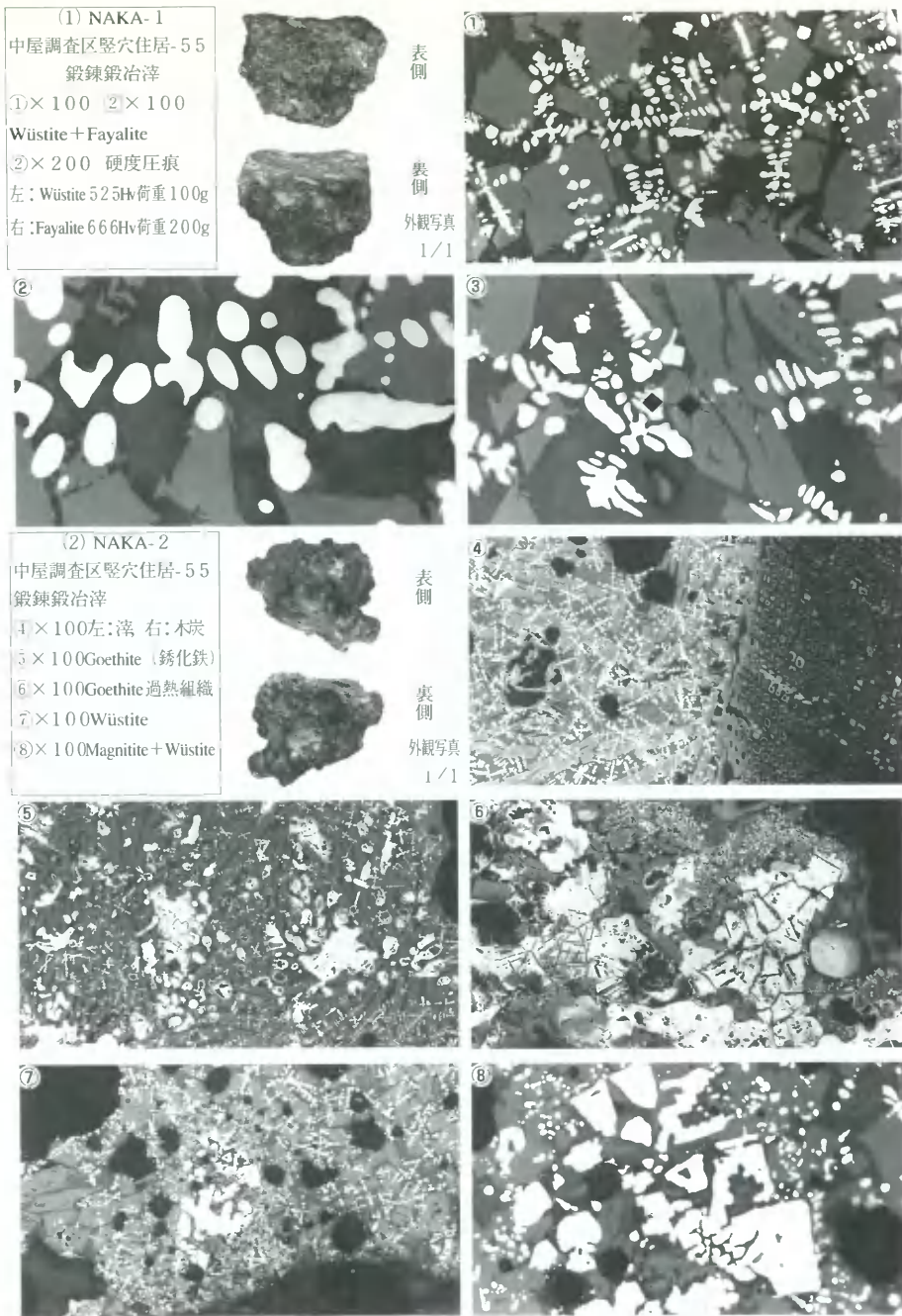
分析は九州テクノリサーチ株式会社に委託して行った。分析の方法は、T. Fe、FeOは容量法、C、Sは燃焼赤外吸収法、その他はICP法(誘導結合プラズマ発光分光分析法)により、その結果は次表にまとめたとおりである。これについては、大澤正己氏から、鉄器製作における折り返し曲げ鍛接などの高温作業において排出された鉱石系鉄素材の鍛冶滓と考えられるとのご教示をいただいた。

津寺遺跡においては、鉄素材と思われる鉄片が古墳時代前期前半の住居や溝などから出土している。また、古墳時代後期後半には鍛冶炉と想定される遺構を備えた住居(工房)も確認されており、集落内で小規模な鍛冶が行われた可能性が指摘されていた。竪穴住居-55は、前述したように前期前半の集落が解体した直後に位置付けられるものであり、今回分析を行った鉄滓は、その後に展開する集落の先駆けとなるこの住居の性格を考えるうえで重要な手掛かりになるものと思われる。(亀山)

名称	T. Fe	Me. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO
鉄滓	47.21	0.13	55.97	5.11	25.27	6.00	2.30	1.41

MnO	TiO ₂	V	Cu	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Ma ₂ O	K ₂ O	C	S
0.39	0.28	0.885	0.036	0.27	0.015	0.630	1.35	0.10	0.01

表27 津寺遺跡出土鉄滓の分析結果 (単位%)



第72図 堅穴住居-55出土鉄滓の顕微鏡組織

遺構一覽表

1. 豎穴住居一覽表
2. 掘立柱建物一覽表
3. 袋狀土壙一覽表
4. 土壙一覽表
5. 土壙墓一覽表
6. 土器棺墓一覽表

遺物觀察表

1. 土器觀察表
2. 石器觀察表
3. 土製品觀察表
4. 玉類觀察表
5. 金屬製品觀察表

1. 遺構一覧表

竪穴住居

- ・平面形は、床面の形状を表す。
- ・規模は、竪穴底面の長・短軸、ないし対辺の壁体溝芯心間における最大距離を表示した。
- ・主軸は、磁北を基準としたときの竪穴の主軸方位を表示した。
- ・面積は、竪穴底面ないし壁体溝芯心で囲まれた面積を表示した。ただし(面積)は推定を表す。
- ・標高は、床面最深部の海拔高を表示した。
- ・主柱は、住居本来の本数を示しており、(主柱)は推定であることを表す。
- ・高床部は、1辺につくりつけるものをⅠ類、向かい合う2辺につくりつけるものをⅡ類、隣り合う2辺につくりつけるものをⅢ類、3辺につくりつけるものをⅣ類、周囲につくりつけるものをⅤ類に類型化して記入した。
- ・中央穴は、円形ないし楕円形を呈するものをA類、方形ないし長方形を呈するものをB類に類型化して記入した。
- ・方形土壇は、壁際中央に設けられたものをA類、隅に設けられたものをB類に類型化して記入した。
- ・焼土面は、中央穴を除く被熱箇所の数に記した。
- ・カマドは、煙道が竪穴外に延びないものをA類、延びるものをB類に類型化して記入した。

掘立柱建物

- ・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、桁行総長、梁間総長をそれぞれ表す。
- ・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。
- ・面積は、建坪の面積を表す。
- ・棟方向は、身舎の主軸方位を表す。

袋状土壇

- ・規模は、上面および底面の長径と深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・断面形は、底面形態(平らなものをA、くぼむものをB、盛り上がるものをC)と、壁面形態(上部が広がるものをA、筒状をなすものをB、下部が広がるものをC)を組み合わせで表した。
- ・底面形は、底部の平面形を表す。
- ・土器は、出土量が多い場合を◎、少ない場合を○、ごく少ない場合を△として表現した。

土壇

- ・規模は、検出面での長さ、幅、深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。
- ・断面形は、底面形態(平らなものをA、くぼむものをB、盛り上がるものをC)と、壁面形態(上部が広がるものをA、筒状をなすものをB、下部が広がるものをC)を組み合わせで表した。
- ・土器は、出土量が多い場合を◎、少ない場合を○、ごく少ない場合を△として表現した。

土墳墓

- ・規模は、検出面での長さ、幅、深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。
- ・主軸は、掘り方の主軸方位を表す。
- ・副葬品は、掘り方内から出土した遺物をあげた。

土器棺墓

- ・掘り方の平面形は、検出面での形状を表す。
- ・掘り方の規模は、検出面での長軸、短軸、深さを表す。
- ・標高は、底面最深部の海拔高を表示した。

2. 遺物観察表

土器

- ・法量のうち、脚台径は底径として表した。また(器高)は現存高を表す。
- ・色調は新版標準土色帳を使用した。
- ・胎土は、含まれる砂礫の粒径が2mm以上を礫、1～2mmを粗砂、1mm以下を細砂として表した。
- ・煤は、土器全体に及ぶものをA、胴部上半に及ぶものをB、胴部下半にとどまるものをCとし、B・Cにあっても口縁部に煤が見られるものはB'、C'に分類して表した(第46図)。
- ・黒斑は、口縁部をA、胴部をB、底部をCとして、その部位を示した(第47図)。
- ・刺突記号は第45図の類型にしたがって記入した。

石器

- ・法量は、長さ、幅、厚さの最大値を表す。また(長さ)は現存長であることを示す。
- ・重量のうち、(重量)は残存重量であることを表す。
- ・材質の鑑定は、吉備国際大学 妹尾護氏による

土製品

- ・法量は長さ、幅、厚さの最大値を表す。また(長さ)は現存長であることを示す。
- ・色調は新版標準土色帳を使用した。
- ・胎土は、含まれる砂礫の粒径が2mm以上を礫、1～2mmを粗砂、1mm以下を細砂として表した。

玉類

- ・法量は、長さ(高さ)、幅(直径)、厚さ、孔径の最大値を表す。また(長さ)は現存長であることを示す。
- ・重量のうち、(重量)は残存重量であることを表す。
- ・材質の鑑定は、総社市教育委員会 高橋進一氏による。

金属製品

- ・法量は、長さ、幅、厚さの最大値を表す。また(長さ)は現存長であることを示す。
- ・重量のうち、(重量)は残存重量であることを表す。

遺構名	平面形	規模(cm)		主軸	面積(m ²)	標高(cm)	主柱	柱間(cm)		高床部	方形土城	中央穴	焼土面	カマド	時期	備考
		長さ	幅					最大	最小							
竪穴住居-111	隅丸方形	403	377	N-5°-W	-	298	-	-	-	○	A	-	-	-	古前Ⅱ	
竪穴住居-112A	方形	-	-	N-6°-W	-	308	4	-	-	-	-	-	-	-		
竪穴住居-112B	方形	-	-	N-6°-W	-	308	4	-	-	-	A	A	-	-	古前Ⅱ	
竪穴住居-113	方形	-	-	N-7°-E	-	293	-	-	-	-	A	-	-	-	古前Ⅱ	
竪穴住居-114	方形	532	508	N-31°-E	25.7	362	4	267	230	-	-	-	-	B	古中Ⅱ	
竪穴住居-115	方形	618	521	N-21°-E	28.5	408	4	352	291	-	-	-	-	A	古中Ⅱ	焼失か
竪穴住居-116	隅丸方形	-	-	N-40°-E	-	386	-	-	-	-	-	-	-	A	古中Ⅱ	
竪穴住居-117	方形	667	-	N-27°-W	-	387	4	290	287	-	-	-	-	A	古後Ⅰ	
竪穴住居-118	長方形	498	350	N-41°-E	16.2	404	-	-	-	-	-	-	-	A	古中Ⅱ	
竪穴住居-119	方形	531	478	N-31°-E	26.0	364	4	275	257	-	-	-	-	A	古中Ⅱ	
竪穴住居-120	長方形	-	390	N-9°-W	-	373	-	-	-	-	-	-	-	-	古前前	
竪穴住居-121	方形	-	-	N-40°-W	-	380	-	-	-	-	-	-	-	-	古後Ⅱ	
竪穴住居-122	方形	527	-	N-35°-E	-	385	-	-	-	-	-	-	-	○	古中Ⅱ	焼失か
竪穴住居-123	方形	286	273	N-14°-W	7.8	389	-	-	-	-	-	-	-	○	古前Ⅱ	
竪穴住居-124	方形	419	-	N-38°-E	-	371	-	-	-	-	-	-	-	-	古中Ⅱ	

中屋調査区建物一覧表

遺構名	規模			柱間距離(cm)		面積(m ²)	棟方向	時期	備考
	間数	桁間(cm)	梁行(cm)	桁	梁				
掘立柱建物-1	2×1	480	300	210~270	300	14.4	N-18°-W	弥中Ⅲ	
掘立柱建物-2	2×2	275	254	146~129	137~115	6.7	N-4°-E	古前前	総柱
掘立柱建物-3	1×1	162, 183	144, 153	162, 183	144, 153	2.5	N-62°-E	古前Ⅱ	
掘立柱建物-4	4×2	759	429	236~136	226~190	16.0	N-86°-E	中世	
掘立柱建物-5	3×2	647	365	240~198	194~170	11.9	N-87°-E	中世	2面庇
掘立柱建物-6	3×1	633	210	213~194	210~193	12.5	N-29°-W	中世	
掘立柱建物-7	5×1	953	346	196~185	346~338	32.6	N-1°-E	中世	
掘立柱建物-8	3×1	950	460	350~240	460~450	43.0	N-84°-W	中世	
掘立柱建物-9	3×1	474	334	95~195	334	15.8	N-9°-E	中世	
掘立柱建物-10	3×1	562~568	320~326	184~194	320~326	20.8	N-85°-E	中世	
掘立柱建物-11	3×2	464~468	276~284	148~166	98~150	13.7	N-35°-W	中世	総柱
掘立柱建物-12	1×1	258~280	222~226	258~280	222~226	5.9	N-8°-W	中世	
掘立柱建物-13	2×1	406~412	166~190	194~220	166~190	7.9	N-14°-W	中世	
掘立柱建物-14	2×2	420	405	207~213	195, 210	17.0	N-12°-E	中世	
掘立柱建物-15	2×1	264, 279	180	120, 159	180	4.5	N-8°-W	中世	

中屋調査区袋状土壌一覧表

遺構名	規模(cm)			断面形	底面形	底面標高(cm)	土器	時期	備考
	上面径	底面径	深さ						
袋状土壌-1	135	106	32	A b	円形	342	○	弥後Ⅰ	
袋状土壌-2	154	157	34	C b	円形	342	○	弥後Ⅰ	
袋状土壌-3	144	124	45	A b	円形	330	○	弥後Ⅰ	4に先行
袋状土壌-4	114	103	7	O b	円形	343	△	弥後Ⅰ	
袋状土壌-5	111	105	45	B b	円形	303	△	弥後Ⅰ	
袋状土壌-6	112	112	58	B b	円形	303	○	弥後Ⅰ	
袋状土壌-7	88	79	107	C b	円形	265	○	弥後Ⅰ	31に先行
袋状土壌-8	152	143	135	B b	円形	256	◎	弥後Ⅰ	
袋状土壌-9	-	-	7	O b	円形	338	△	弥後Ⅰ	6に先行
袋状土壌-10	96	61	79	B a	円形	269	◎	弥後Ⅰ	
袋状土壌-11	112	104	112	B a	楕円形	235	○	弥後Ⅰ	
袋状土壌-12	128	141	51	C b	円形	317	○	弥後Ⅰ	
袋状土壌-13	110	107	49	B a	円形	333	○	弥中Ⅲ	
袋状土壌-14	93	87	48	C b	円形	350	○	弥後Ⅰ	
袋状土壌-15	127	72	25	B b	楕円形	351	△	弥後Ⅰ	
袋状土壌-16	98	88	47	B c	円形	334	△	弥後Ⅰ	

遺構名	規模 (cm)			断面形	底面形	底面標高 (cm)	土器	時 期	備 考
	上面径	底面径	深さ						
袋状土壙-17	146	145	92	C b	円形	298		弥後 I	
袋状土壙-18	198	175	91	B c	楕円形	289	○	弥後 I	
袋状土壙-19	105	88	88	B b	円形	304		弥後 I	
袋状土壙-20	97	114	95	C c	円形	284	○	弥後 I	
袋状土壙-21	107	83	68	B c	円形	329		弥後 I	
袋状土壙-22	116	104	88	B c	円形	286	△	弥後 I	
袋状土壙-23	132	122	100	C b	円形	297		弥後 I	
袋状土壙-24	134	142	73	C b	円形	294		弥後 I	
袋状土壙-25	103	85	44	B b	円形	281		弥後 I	
袋状土壙-26	140	110	67	A b	円形	303		弥後 I	
袋状土壙-27	102	107	74	B b	円形	307		弥後 I	
袋状土壙-28	127	123	66	B b	円形	309		弥後 I	
袋状土壙-29	—	132	151	B b	—	267		弥後 I	
袋状土壙-30	136	158	88	B b	楕円形	273		弥後 I	
袋状土壙-31	142	153	95	C b	楕円形	285		弥後 I	
袋状土壙-32	118	98	71	A b	楕円形	303		弥後 I	
袋状土壙-33	162	160	72	B c	楕円形	259	△	弥後 I	
袋状土壙-34	124	110	57	B c	円形	264		弥後前	
袋状土壙-35	107	82	60	A b	円形	324		弥後前	
袋状土壙-36	140	122	88	B c	円形	286	○	弥後 I	
袋状土壙-37	144	134	87	B c	円形	261	○	弥後 I	
袋状土壙-38	193	173	78	B b	楕円形	263	△	弥後 I	
袋状土壙-39	143	141	74	B b	円形	250	○	弥後 I	
袋状土壙-40	131	125	28	B b	円形	260	○	弥後 I	
袋状土壙-41	139	106	94	B b	円形	272		弥後 I	
袋状土壙-42	133	105	93	B b	円形	275	△	弥後 I	
袋状土壙-43	121	86	77	C b	円形	287	△	弥後前	
袋状土壙-44	173	118	91	B b	楕円形	270		弥後前	
袋状土壙-45	101	—	45	B b	円形	316		弥後前	
袋状土壙-46	119	112	76	B b	円形	283	△	弥後前	
袋状土壙-47	—	109	62	C b	円形	317		弥後前	
袋状土壙-48	251	75	70	A a	楕円形	325	○	弥中Ⅲ～弥後 I	
袋状土壙-49	89	106	67	C b	円形	303	△	弥後前	
袋状土壙-50	131	120	19	0 b	円形	302	△	弥後前	
袋状土壙-51	134	132	70	C b	円形	249	△	弥後前	
袋状土壙-52	153	185	112	C b	楕円形	254	△	弥後 I	
袋状土壙-53	153	170	108	C b	円形	254	△	弥後 I	炭含む
袋状土壙-54	122	127	62	C b	円形	298	△	弥後 I	炭含む
袋状土壙-55	119	120	(35)	C b	楕円形	333	△	弥後 I	
袋状土壙-56	145	159	100	C b	楕円形	272	○	弥後 I	炭含む
袋状土壙-57	115	103	84	B b	円形	277	△	弥後 I	炭含む
袋状土壙-58	—	—	72	B b	—	290	△	弥後 I	
袋状土壙-59	112	134	83	C b	円形	283	○	弥後 I	炭含む
袋状土壙-60	149	140	91	B b	楕円形	276	△	弥後 I	
袋状土壙-61	148	166	122	C b	円形	246	△	弥後 I	
袋状土壙-62	138	142	75	C b	円形	260		弥後前	
袋状土壙-63	180	—	86	A a	楕円形	252	△	弥中Ⅲ	
袋状土壙-64	155	133	79	B a	円形	266	△	弥中Ⅲ	
袋状土壙-65	89	70	54	B a	円形	298	△	弥中Ⅲ	
袋状土壙-66	73	50	50	B a	円形	297	△	弥中Ⅲ	
袋状土壙-67	—	—	82	B a	楕円形	264	△	弥中Ⅲ	
袋状土壙-68	138	85	117	A b	円形	287	△	弥中Ⅲ	
袋状土壙-69	145	114	127	B b	楕円形	288	△	弥中Ⅲ	

中屋調査区土壙一覽表

遺構名	規模 (cm)			底面標高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壙-41	53	49	17	337	円形	A b	△	弥後前	
土壙-42	—	84	20	382	隅丸方形	O b	△	弥後Ⅰ	
土壙-43	113	107	35	378	不整円形	A b	◎	弥後Ⅰ	
土壙-44	37	34	10	353	円形	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-45	53	51	12	359	円形	A a	○	弥後Ⅰ	
土壙-46	249	221	37	300	隅丸方形	A a		弥後前	
土壙-47	53	45	30	379	楕円形	A a	△	弥後前	
土壙-48	53	49	75	389	円形	A a	○	弥後Ⅰ	
土壙-49	102	87	11	358	不整円形	A a	○	弥後Ⅰ	
土壙-50	131	107	17	380	方形	A b		弥後前	
土壙-51	141	60	37	462	—	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-52	181	163	20	477	方形	A b	○	弥後Ⅰ	
土壙-53	197	148	52	332	方形	A b	◎	弥後Ⅰ	
土壙-54	165	110	15	349	方形	A b		弥後前	
土壙-55	131	78	45	301	楕円形	A a	△	弥後前	
土壙-56	224		19	315	楕円形	A a		弥後Ⅰ	炭・焼土
土壙-57	167	116	44	295	楕円形	A a	○	弥後Ⅰ	炭
土壙-58	156	144	61	262	円形	A a		弥後Ⅰ	
土壙-59	173	132	82	258	楕円形	A a		弥後Ⅰ	
土壙-60	146	127	60	330	楕円形	A a		弥後Ⅰ	
土壙-61	94	90	61	304	円形	B b	○	弥後Ⅰ	炭
土壙-62	107	98	58	293	円形	A a		弥後Ⅰ	
土壙-63	102	84	73	292	楕円形	B a	△	弥後Ⅰ	
土壙-64	156	118	99	244	楕円形	B b		弥後Ⅰ	
土壙-65	154	124	29	292	楕円形	A b	○	弥後前	
土壙-66	134	100	(32)	239	楕円形	B b		弥後Ⅰ	
土壙-67	118	108	38	328	楕円形	B b	○	弥後Ⅰ	
土壙-68	125	115	43	339	楕円形	A a		弥後前	
土壙-69	125	57	23	352	楕円形	A b	△	弥後前	
土壙-70	—	85	32	366	長楕円形	A b	△	弥後Ⅱ	
土壙-71	103	98	21	372	楕円形	A a	△	弥後Ⅲ	
土壙-72	127	75	20	394	楕円形	A b	◎	弥中Ⅲ	
土壙-73	63	55	40	348	円形	A b	△	弥後Ⅰ	
土壙-74	124	98	25	394	楕円形	A b	△	弥後Ⅰ	
土壙-75	98	90	33	364	円形	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-76	132	111	56	333	楕円形	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-77	115	82	18	379	楕円形	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-78	98	74	21	377	楕円形	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-79	85	83	8	370	円形	A b	△	弥後Ⅰ	
土壙-80	116	88	27	348	楕円形	A b	○	弥後Ⅰ	
土壙-81	62	60	14	381	円形	A a	○	弥後Ⅱ	
土壙-82	104		9	383	楕円形	A b	○	弥中Ⅲ	
土壙-83	106	97	13	332	楕円形	A b	△	弥後前	
土壙-84	—	59	—	—	楕円形	—			
土壙-85	159		54	323	円形	A b		弥後前	
土壙-86	216	122	42		長方形	A b	○	弥後Ⅳ	炭
土壙-87	75	44	20	330	楕円形	A a	○	弥中Ⅲ	
土壙-88	148	68	50	291	長楕円形	A a	○	弥中Ⅲ	
土壙-89	100	80	22	318	楕円形	A b	△	弥中Ⅲ	
土壙-90	218	162	29	351	楕円形	A a	○	弥後Ⅰ	
土壙-91	102	93	28	338	円形	A a	○	弥後Ⅰ	
土壙-92	171	124	13	365	楕円形	A b	△	弥後Ⅰ	
土壙-93	97	87	17	374	不整円形	A a	○	弥中Ⅲ	
土壙-94	82	68	19	363	円形	A b	△	弥後Ⅰ	
土壙-95	229	189	76	302	楕円形	A b	△	弥後Ⅰ	

遺構名	規模 (cm)			底面標高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壙-96	195	173	83	285	楕円形	A a		弥後Ⅰ	
土壙-97	268	-	39	355	不整円形	A b	◎	弥中Ⅲ	
土壙-98	197	75	68	278	楕円形	A a	△	弥後前	
土壙-99	223	218	78	297	円形	A a	△	弥後前	
土壙-100	232	(184)	26	345	楕円形	A b	◎	弥後Ⅰ	焼土
土壙-101	(300)	290	34	254	円形	B b	○	弥後Ⅰ	
土壙-102	-	-	70	294	-	A a	◎	弥後Ⅰ	
土壙-103	-	115	27	299	楕円形	A a	○	弥後Ⅰ	炭
土壙-104	79	77	46	332	楕円形	A a	△	弥後Ⅰ	
土壙-105	172	-	51	301	円形	A a	○	弥後Ⅰ	
土壙-106	-	110	(53)	(302)	楕円形	A b	○	弥後Ⅰ	
土壙-107	-	-	(64)	(301)	楕円形	A a	△	弥中Ⅲ	
土壙-108	99	82	46	283	隅丸方形	A a	○	古前Ⅰ	
土壙-109	179	133	25	352	方形	A b		古前Ⅰ	
土壙-110	103	67	9	374	円形	A a	△	古前Ⅱ	銅鏡
土壙-111	73	64	22	249	楕円形	A a	◎	古前Ⅰ	
土壙-112	146	113	59		楕円形	A a	△	古前前	
土壙-113	65	52	24	336	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-114	158	128	8	358	楕円形	A b	△	古前前	
土壙-115	112	86	25	374	楕円形	A b	△	古前Ⅰ	
土壙-116	110	63	34	380	楕円形	A a	◎	古前Ⅰ	
土壙-117	68	62	26	358	円形	A a	○	古前Ⅰ	
土壙-118	86	59	27	353	楕円形	B b	△	古前前	
土壙-119	66	65	26	393	円形	A b	△	古前前	
土壙-120	78	78	23	362	円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-121	257	186	26	366	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-122	(210)	161	25	361	楕円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-123	121	-	9	319	楕円形	A a	○	古前Ⅱ	
土壙-124	-	-	24	365	楕円形	A a		古前Ⅱ	
土壙-125	47	38	12	393	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-126	85	80	(22)	(355)	円形	A a	○	古前Ⅰ	
土壙-127	88	86	24	368	円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-128	128	98	18	362	楕円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-129	177	136	18	385	楕円形	A b	◎	古前Ⅱ	
土壙-130	86	76	22	403	楕円形	A a	△	古前Ⅰ	
土壙-131	69	-	12	362	楕円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-132	-	65	13	352	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-133	296	239	14	381	不整楕円形	A b	◎	古前Ⅰ	
土壙-134	-	108	14	384	楕円形	A b	△	古前前	
土壙-135	210	-	31	341	長方形	A b	○	古前Ⅱ	
土壙-136	136	122	49	345	不整円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-137	91	46	27	278	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-138	159	100	44	320	長方形	B b	△	古前Ⅱ	
土壙-139	81	62	16	359	楕円形	A a	◎	古前Ⅱ	
土壙-140	92	65	15	317	楕円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-141	112	37	21	360	長楕円形	B b	△	古前Ⅱ	
土壙-142	122	50	13	373	長楕円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-143	132	-	20	323	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-144	170	45	42	352	長楕円形	A b	○	古前Ⅱ	
土壙-145	-	-	38	307	円形	A a		古前前	
土壙-146	162	-	45	278	楕円形	A b		古前前	
土壙-147	118	106	53	327	楕円形	A b		古前前	
土壙-148	110	57	8		楕円形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-149	103	-	50	369	楕円形	B b	△	古前Ⅱ	
土壙-150	-	137	26	334	楕円形	A b	△	古前Ⅱ	

遺構名	規模 (cm)			底面標高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壙-151	157	98	27	365	楕円形	A a	○	古前Ⅱ	
土壙-152	130	-	25	375	方形	A b	△	古前Ⅱ	
土壙-153	-	113	60	315	楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-154	-	139	95	267	長楕円形	A b	◎	古前Ⅱ	
土壙-155	-	63	18	347	長楕円形	A a	△	古前Ⅱ	
土壙-156	-	-	24	328	楕円形	A a	△	古前Ⅰ	
土壙-157	-	58	4	354	楕円形	A b	△	古前前	
土壙-158	-	-	29	318	長楕円形	A a	○	古前Ⅱ	
土壙-159	48	44	16	330	円形	A a	△	古前Ⅰ	
土壙-160	117	107	14	352	楕円形	A b	○	古前Ⅱ	
土壙-161	-	51	18	343	楕円形	A a	△	古前Ⅰ	
土壙-162	91	58	10	346	楕円形	A a		古前前	
土壙-163	(99)	74	23	330	楕円形	A b		古前Ⅰ	
土壙-164	79	45	8	290	楕円形	A a		古前Ⅰ	
土壙-165			20	313	方形	A a		古前Ⅰ	
土壙-166	64	60	51	415	円形	A a	△	中世	
土壙-167	286	220	6	434	方形	A b	○	中世	
土壙-168	236	224	26	386	方形	A b	○	中世	
土壙-169	52	48	38	403	円形	A a	△	中世	
土壙-170	80	68	13	410	楕円形	A a	△	中世	
土壙-171	104	67	9	408	方形	A b	△	中世	
土壙-172	132	60	11	399	長楕円形	A b	△	中世	
土壙-173	58	50	16	398	方形	A b		中世	
土壙-174	83	57	15	324	円形	A a	△	中世	
土壙-175	139	71	6	393	長方形	A b		中世	
土壙-176	276	252	36	430	方形	A b	◎	中世	
土壙-177	77	46	4	420	方形	A b		中世	
土壙-178	118	112	18	398	方形	A b		中世	
土壙-179	76	66	40	436	楕円形	B b		中世	
土壙-180	35	27	35	418	不整方形	A b	○	中世	
土壙-181	308	296	60	418	不整方形	A b	△	中世	
土壙-182	121	114	8	377	不整円形	A b	△	中世	集石
土壙-183	322			324	不整円形	A a		中世	
土壙-184	107	76	12	367	楕円形	A a		中世	
土壙-185	88	87	28	380	円形	A a	△	中世	
土壙-186	96	89	36	351	円形	A a		中世	
土壙-187	70	61	18	378	方形	B b		中世	
土壙-188	78	60	34	347	楕円形	A a		中世	
土壙-189	158	100	28	346	楕円形	A a		中世	
土壙-190	211	123	22	356	楕円形	A a		中世	
土壙-191	90	90	27	366	円形	A b		中世	

中屋調査区土壙墓一覧表

遺構名	規模 (cm)			底面標高 (cm)	平面形	主軸	副葬品	時期	備考
	長さ	幅	深さ						
土壙墓-2	173	68	7	376	長方形	N-31°-E	甕	弥後Ⅰ	
土壙墓-3	194	123	38	343	長方形	N-59°-E		弥中Ⅲ	
土壙墓-4	193	91	61	358	長方形	N-82°-W		古前Ⅰ	
土壙墓-5	140	65	30	409	長方形	N-88°-W	刀	中世	人骨出土
土壙墓-6	106	63	10	429	長方形	N-86°-E	小皿	中世	
土壙墓-7	-	-	2	418	-	-		中世	人骨(小児)出土
土壙墓-8	97	65	3	429	長方形	N-3°-E	小皿	中世	人骨出土
土壙墓-9	103	87	39	441	方形	N-5°-E	小皿・刀子・砥石	中世	人骨出土
土壙墓-10	112	-	5	405	長方形	N-8°-E		中世	人骨出土
土壙墓-11	-	59	3	405	長方形	N-5°-E		中世	棺材(スギ)遺存

中屋調査区土器観察表

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
739	包含層	縄文土器	深鉢				(6.1)	黒褐色 (10YR3/1)	細砂	良好	口縁内外面 L R 縄文
740	竪穴住居-14	弥生土器	甕	12.4	20.0		(10.8)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 B
741	竪穴住居-14	弥生土器	器台	28.9		25.4	25.4	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	胴部に沈線
742	竪穴住居-16	弥生土器	高杯	22.0			(4.6)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑 A
743	竪穴住居-16	弥生土器	高杯	11.2			(5.5)	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	粗砂	良好	
744	竪穴住居-18	弥生土器	壺	8.9	12.4	4.7	15.6	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	完形
745	竪穴住居-19	弥生土器	甕	12.8			(9.0)	淡黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
746	竪穴住居-18	弥生土器	甕	14.1			(7.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、スス A
747	竪穴住居-19	弥生土器	高杯	19.9			(3.6)	黒褐色 (7.5YR3/1)	細砂	良好	口縁部に凹線
748	竪穴住居-19	弥生土器	高杯			8.9	(3.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
749	竪穴住居-19	弥生土器	高杯			5.7	(6.8)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	脚部に鋸歯文
750	竪穴住居-20	弥生土器	甕	13.9	21.9		(14.0)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、スス B
751	竪穴住居-20	弥生土器	甕	27.8			(9.4)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文、頸部に突帯
752	竪穴住居-20	弥生土器	高杯	22.2			(3.7)	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 A
753	竪穴住居-20	弥生土器	台付鉢		22.6	10.1	(23.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	肩部に列点文、脚部に鋸歯文、黒斑 B
754	竪穴住居-22	弥生土器	甕	9.5			(3.1)	鈍い赤褐色 (5YR4/4)	細砂	良好	スス A
755	竪穴住居-29	弥生土器	壺	19.6			(3.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	四国系土器
756	竪穴住居-29	弥生土器	壺	15.2			(15.2)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	黒斑 B、四国系土器
757	竪穴住居-29	弥生土器	甕	12.3			(3.9)	灰褐色 (7.5YR2/6)	細砂	良好	
758	竪穴住居-29	弥生土器	甕	13.2	14.2	2.5	13.8	灰褐色 (7.5YR5/2)	粗砂 細砂	良好	スス A、タタキ成形
759	竪穴住居-29	弥生土器	甕	13.5	16.3	4.0	18.2	明褐色 (5YR7/1)	粗砂 細砂	良好	スス A
760	竪穴住居-29	弥生土器	壺	15.2			(3.6)	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	
761	竪穴住居-29	弥生土器	高杯				(6.0)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	透かし孔 4
762	竪穴住居-29	弥生土器	高杯	18.9			(11.0)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
763	竪穴住居-29	弥生土器	台付鉢			6.4	(4.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
764	竪穴住居-29	弥生土器	鉢	9.7			4.8	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 細砂	良好	黒斑 C
765	竪穴住居-31	弥生土器	壺	25.8	34.5		(47.5)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑 B
766	竪穴住居-31	弥生土器	壺	8.1			(6.4)	鈍い褐色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 A B
767	竪穴住居-31	弥生土器	壺			10.9	(18.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
768	竪穴住居-31	弥生土器	甕	18.9	29.4		(19.3)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線
769	竪穴住居-31	弥生土器	甕	24.8	24.6	7.3	28.8	橙色 (5YR6/8)	粗砂 礫	良好	九州系土器
770	竪穴住居-31	弥生土器	水差	9.0	14.6	5.1	(19.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑 B・C
771	竪穴住居-31	弥生土器	鉢	11.9			(5.4)	灰黄色 (2.5Y7/3)	細砂	良好	
772	竪穴住居-31	弥生土器	台付鉢	16.8			(10.1)	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑 B、製塩土器
773	竪穴住居-30	弥生土器	甕	13.8	15.0		(13.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
774	竪穴住居-30	弥生土器	甕	16.0	16.1	4.9	16.4	黒褐色 (5YR3/1)	細砂	良好	ススA
775	竪穴住居-30	弥生土器	甕	12.4	14.8	3.8	14.6	黒褐色 (7.5YR3/1)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、ススA
776	竪穴住居-30	弥生土器	高杯			10.2	(5.5)	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	透かし孔4
777	井戸-1	弥生土器	壺	22.8			(6.3)	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	口縁部に波状文、畿内系土器
778	井戸-1	弥生土器	鉢	12.0			(7.5)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	
779	袋状土壇-1	弥生土器	高杯			12.2	(17.4)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	透かし孔三段
780	袋状土壇-3	弥生土器	甕	14.6	22.5		(28.6)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、コゲ、ススA、タタキ成形
781	袋状土壇-8	弥生土器	壺	17.6			(6.2)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
782	袋状土壇-8	弥生土器	甕	13.5			(5.6)	褐灰色 (5YR5/1)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
783	袋状土壇-8	弥生土器	甕	12.0	19.6		(23.0)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、ススB
784	袋状土壇-8	弥生土器	甕	12.8		5.8	28.2	鈍い赤褐色 (5YR5/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
785	袋状土壇-8	弥生土器	台付鉢	15.8	21.7	13.0	26.7	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
786	袋状土壇-8	弥生土器	高杯	22.0			(5.7)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	
787	袋状土壇-11	弥生土器	壺	11.8	21.0		(18.5)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に貝殻圧痕文
788	袋状土壇-11	弥生土器	壺	18.3			(6.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線
789	袋状土壇-11	弥生土器	甕	12.8			(7.3)	橙色 (7.5YR6/8)	細砂 粗砂	良好	口縁部に凹線
790	袋状土壇-11	弥生土器	甕	14.2			(5.0)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
791	袋状土壇-11	弥生土器	台付鉢	14.6			(5.0)	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
792	袋状土壇-11	弥生土器	甕	13.4			(10.0)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
793	袋状土壇-11	弥生土器	甕	11.9	21.8	6.0	28.7	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線、ススB
794	袋状土壇-11	弥生土器	台付鉢	14.4	18.4		(6.0)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線
795	袋状土壇-11	弥生土器	高杯			14.6	(8.5)	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	
796	袋状土壇-10	弥生土器	壺	9.7	15.3	7.2	19.8	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	礫	良好	肩部に列点文、黒斑B・C
797	袋状土壇-10	弥生土器	壺	15.5	23.2		(24.0)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B・B
798	袋状土壇-10	弥生土器	壺	17.9	21.7	7.5	31.0	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、頸部に沈線、黒斑B・B
799	袋状土壇-10	弥生土器	壺	16.0			(6.0)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
800	袋状土壇-10	弥生土器	壺	16.2			(7.0)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線
801	袋状土壇-10	弥生土器	甕	16.0			(12.8)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
802	袋状土壇-10	弥生土器	甕	11.8			(7.3)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	ススB
803	袋状土壇-10	弥生土器	鉢	16.0	20.5	7.8	15.0	鈍い黄褐色 (10YR7/4)	礫	良好	
804	袋状土壇-10	弥生土器	甕	12.0			(10.2)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	
805	袋状土壇-10	弥生土器	台付鉢	13.0	17.9	11.6	19.9	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑B・C
806	袋状土壇-10	弥生土器	高杯	24.8			(4.8)	明赤褐色 (5YR5/6)	細砂	良好	
807	袋状土壇-13	弥生土器	壺	14.0			(7.2)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口頸部に凹線
808	袋状土壇-13	弥生土器	甕	12.0			(4.5)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
809	袋状土壙-13	弥生土器	甕	15.0			(4.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
810	袋状土壙-13	弥生土器	高杯	19.2			(3.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線
811	袋状土壙-13	弥生土器	高杯	18.6			(4.1)	明黄褐色 (10R6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線
812	袋状土壙-13	弥生土器	高杯	20.5			(3.7)	明褐色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
813	袋状土壙-13	弥生土器	高杯			12.0	(4.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
814	袋状土壙-13	弥生土器	高杯			10.4	(4.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	礫	良好	
815	袋状土壙-13	弥生土器	台付鉢	50.4			(5.0)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	
816	袋状土壙-13	弥生土器	台付鉢				(6.7)	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線
817	袋状土壙-14	弥生土器	甕	12.9			(6.2)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線
818	袋状土壙-14	弥生土器	甕	16.0			(7.7)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線
819	袋状土壙-16	弥生土器	高杯	16.0			(5.3)	浅黄橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	
820	袋状土壙-16	弥生土器	台付鉢			10.4	(8.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	礫	良好	
821	袋状土壙-17	弥生土器	甕	12.5			(4.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	
822	袋状土壙-17	弥生土器	甕	15.2			(6.1)	灰褐色 (5YR5/2)	細砂	良好	ススA
823	袋状土壙-17	弥生土器	台付壺	4.2		2.2	7.8	褐灰色 (5YR4/1)	細砂	良好	手握ぬ土器
824	袋状土壙-18	弥生土器	壺	14.0			(7.4)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線、ススA
825	袋状土壙-18	弥生土器	壺	14.0			(5.0)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
826	袋状土壙-18	弥生土器	台付鉢	8.9		5.6	7.5	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
827	袋状土壙-18	弥生土器	鉢	20.0			(4.7)	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	
828	袋状土壙-18	弥生土器	鉢	10.0		5.4	8.5	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	黒斑B
829	袋状土壙-19	弥生土器	壺	12.9			(7.9)	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線
830	袋状土壙-19	弥生土器	甕	12.1	16.7		(10.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
831	袋状土壙-19	弥生土器	甕	12.6			(10.1)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線
832	袋状土壙-19	弥生土器	高杯			12.0	(5.3)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
833	袋状土壙-19	弥生土器	器台				(21.7)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	胴部に凹線
834	袋状土壙-20	弥生土器	壺	13.8			(4.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、ススA
835	袋状土壙-20	弥生土器	甕	15.6			(7.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
836	袋状土壙-20	弥生土器	甕	16.8			(5.2)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑A
837	袋状土壙-20	弥生土器	高杯	30.4			(3.4)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
838	袋状土壙-22	弥生土器	甕	21.2			(9.1)	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂	良好	
839	袋状土壙-22	弥生土器	高杯	23.2			(3.3)	黄橙色 (7.5YR8/8)	細砂	良好	
840	袋状土壙-22	弥生土器	高杯			14.8	(5.2)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	
841	袋状土壙-24	弥生土器	壺	13.0			(3.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、スス
842	袋状土壙-24	弥生土器	壺		12.4	6.0	(6.0)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	肩部に竹管文
843	袋状土壙-24	弥生土器	高杯	17.4			(10.0)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	透かし孔二段

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
844	袋状土壙-25	弥生土器	壺	10.8	16.5	5.5	23.3	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B、完形
845	袋状土壙-27	弥生土器	甕	11.0	18.2	6.3	24.2	褐灰色 (7.5YR5/1)	礫	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、ススA
846	袋状土壙-27	弥生土器	高杯			13.3	(14.7)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	
847	袋状土壙-26	弥生土器	壺	14.2			(6.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
848	袋状土壙-26	弥生土器	壺	16.8			(6.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
849	袋状土壙-26	弥生土器	壺	11.2			(6.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	
850	袋状土壙-26	弥生土器	高杯	23.8			(6.1)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
851	袋状土壙-26	弥生土器	高杯			15.2	(14.5)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	粗砂	良好	透かし孔三段
852	袋状土壙-28	弥生土器	甕	13.1	21.0		(12.4)	灰褐色 (5YR4/2)	粗砂	良好	口縁部に凹線、スス
853	袋状土壙-28	弥生土器	甕		21.0	6.7	(18.7)	褐灰色 (5YR4/1)	細砂	良好	ススA
854	袋状土壙-28	弥生土器	高杯			8.4	(3.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	
855	袋状土壙-28	弥生土器	高杯	20.6			(4.3)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
856	袋状土壙-32	弥生土器	甕	12.6			(7.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
857	袋状土壙-32	弥生土器	甕	10.8			(10.4)	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	
858	袋状土壙-31	弥生土器	壺	10.6	14.0		(15.2)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	ススB'
859	袋状土壙-31	弥生土器	壺	19.6			(11.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文・円形浮文、頸部に沈線
860	袋状土壙-31	弥生土器	甕	10.9	15.9		(11.8)	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	口縁部に凹線 ススA
861	袋状土壙-33	弥生土器	高杯			12.0	(11.8)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	
862	袋状土壙-36	弥生土器	鉢	11.8	18.0	4.4	13.3	橙色 (5YR6/8)	礫	良好	黒斑B
863	袋状土壙-36	弥生土器	甕	12.4			(5.7)	褐灰色 (5YR4/1)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑A B
864	袋状土壙-36	弥生土器	高杯	16.6			(7.8)	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	口縁部に凹線
865	袋状土壙-36	弥生土器	高杯			9.3	(9.0)	灰褐色 (5YR5/2)	粗砂	良好	
866	袋状土壙-37	弥生土器	甕	16.4	25.8		(19.5)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B
867	袋状土壙-37	弥生土器	高杯	22.9			(4.5)	橙色 (2.5YR7/8)	礫	良好	黒斑A
868	袋状土壙-37	弥生土器	高杯			12.4	(20.0)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	透かし孔三段、黒斑B C
869	袋状土壙-38	弥生土器	甕	15.3			(12.0)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	ススB'
870	袋状土壙-39	弥生土器	甕	10.8	14.5	4.4	18.9	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	ススB'
871	袋状土壙-39	弥生土器	高杯	25.4			(3.3)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
872	袋状土壙-39	弥生土器	高杯	21.8			(3.1)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	
873	袋状土壙-39	弥生土器	高杯	19.0			(7.0)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
874	袋状土壙-39	弥生土器	高杯			12.4	(5.9)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	
875	袋状土壙-40	弥生土器	壺	15.0			(11.0)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
876	袋状土壙-40	弥生土器	高杯			12.6	(19.7)	鈍い橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔五段
877	袋状土壙-40	弥生土器	高杯				(13.0)	赤色 (10R5/6)	細砂	良好	
878	袋状土壙-42	弥生土器	甕	10.0			(6.6)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線

掲載 番号	造 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
879	袋状土壙-42	弥生土器	高杯			12.8	(15.3)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	
880	袋状土壙-46	弥生土器	甕	13.0			(4.5)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
881	袋状土壙-46	弥生土器	高杯	22.0			(3.3)	鈍い黄橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
882	袋状土壙-49	弥生土器	甕	12.6			(11.2)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B・C
883	袋状土壙-49	弥生土器	甕	13.0			(9.6)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑B
884	袋状土壙-50	弥生土器	高杯			15.8	(8.3)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	
885	袋状土壙-51	弥生土器	甕			7.8	(8.2)	赤色 (10R5/6)	細砂	良好	
886	袋状土壙-52	弥生土器	甕	12.1			(3.8)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
887	袋状土壙-52	弥生土器	台付鉢			10.5	(5.1)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑C
888	袋状土壙-53	弥生土器	甕	12.8	16.6		(12.1)	灰褐色 (7.5YR6/2)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、ススB'
889	袋状土壙-54	弥生土器	壺	23.2			(14.0)	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、頸部に沈線
890	袋状土壙-56	弥生土器	壺	10.0	15.4		(14.3)	鈍い黄褐色 (7.5YR7/4)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B
891	袋状土壙-56	弥生土器	甕	15.0	24.2		(19.6)	鈍い褐色 (7.5YR5/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、ススC'
892	袋状土壙-56	弥生土器	高杯	21.9		13.2	19.3	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
893	袋状土壙-56	弥生土器	甕	20.5	31.1	10.5	38.8	褐灰色 (10YR4/1)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、ススC、黒斑A
894	袋状土壙-57	弥生土器	甕	12.9	19.6	6.0	(25.0)	黒色 (10YR2/1)	細砂	良好	口縁部に凹線、ススA
895	袋状土壙-58	弥生土器	壺	14.7			(7.0)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
896	袋状土壙-58	弥生土器	壺	18.0			(7.1)	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口頸部に凹線
897	袋状土壙-58	弥生土器	甕	14.6			(4.8)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
898	袋状土壙-59	弥生土器	甕	16.5			(12.6)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	礫 粗砂	良好	口縁部に凹線
899	袋状土壙-59	弥生土器	甕	17.6	20.5	5.8	26.1	灰黄褐色 (10YR5/2)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、ススB
900	袋状土壙-59	弥生土器	高杯	16.8			(4.9)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	
901	袋状土壙-59	弥生土器	高杯	30.1			(5.2)	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	粗砂	良好	
902	袋状土壙-61	弥生土器	甕	11.5			(5.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	ススB'
903	袋状土壙-61	弥生土器	高杯				(6.8)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
904	袋状土壙-61	弥生土器	高杯	22.0			(3.1)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	
905	袋状土壙-69	弥生土器	甕	11.7	15.3	5.0	14.7	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、ススB、タタキ成形
906	袋状土壙-69	弥生土器	甕	14.9			(6.8)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線、タタキ成形
907	土壙-43	弥生土器	壺	16.2			(10.5)	浅黄褐色	粗砂	良好	口縁部に凹線
908	土壙-43	弥生土器	台付鉢	12.1			(10.3)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑B
909	土壙-43	弥生土器	甕	10.6	14.2		(10.1)	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線
910	土壙-45	弥生土器	甕	13.6	22.4		(26.5)	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	粗砂 礫	良好	口縁部に凹線、ススB'
911	土壙-48	弥生土器	甕	20.6	30.8		(17.6)	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
912	土壙-49	弥生土器	壺	10.2	20.5		(17.5)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	頸部に列点文、黒斑B
913	土壙-52	弥生土器	甕	11.3	17.5		(18.0)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に凹線

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
914	土壙-52	弥生土器	甕	11.8	17.6		23.0	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
915	土壙-53	弥生土器	壺		18.5		(10.2)	橙色 (5YR6/8)	礫 粗砂	良好	
916	土壙-53	弥生土器	壺	14.0			(9.0)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	口縁部に凹線
917	土壙-53	弥生土器	甕	10.2	14.6		(9.9)	橙色 (5YR6/8)	礫 粗砂	良好	口縁部に凹線
918	土壙-53	弥生土器	壺	14.6	22.4		(19.0)	明赤褐色 (5YR5/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、頸部に列点文
919	土壙-53	弥生土器	甕	11.4	19.4		(19.7)	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	粗砂 礫	良好	口縁部に凹線
920	土壙-53	弥生土器	甕	10.0	15.3		18.0	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線
921	土壙-53	弥生土器	甕	14.2	26.5	8.5	33.8	橙色 (2.5YR6/8)	礫 粗砂	良好	口縁部に凹線
922	土壙-53	弥生土器	台付鉢		19.0		(14.1)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	肩部に列点文
923	土壙-53	弥生土器	高杯	20.7			(7.5)	黄橙色 (7.5YR7/8)	礫 粗砂	良好	
924	土壙-53	弥生土器	高杯			16.0	(7.6)	黄橙色 (7.5YR7/8)	細砂	良好	
925	土壙-57	弥生土器	高杯	20.0			(4.3)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	
926	土壙-57	弥生土器	高杯	16.4			(8.3)	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口縁部に凹線
927	土壙-61	弥生土器	壺	17.0	31.0		(27.8)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑B
928	土壙-65	弥生土器	甕	12.0			(5.6)	鈍い赤褐色 (5YR4/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、スズB'
929	土壙-67	弥生土器	甕	14.8	21.6		(10.7)	明褐色 (7.5YR7/1)	粗砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、スズB'、黒斑B
930	土壙-67	弥生土器	甕	12.4			(4.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線
931	土壙-67	弥生土器	甕	14.0	17.1		(10.7)	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂	良好	口縁部に凹線
932	土壙-70 〳-71	弥生土器	甕	16.0			(4.2)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	口縁部に凹線
933	土壙-70 〳-71	弥生土器	高杯			10.5	(6.0)	淡黄色 (2.5Y8/3)	粗砂	良好	
934	土壙-72	弥生土器	壺	13.6			(6.2)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形
935	土壙-72	弥生土器	壺	13.2			(8.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
936	土壙-72	弥生土器	壺	17.2			(15.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
937	土壙-72	弥生土器	壺	18.6	23.6	9.8	31.8	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
938	土壙-72	弥生土器	壺	21.2			(9.9)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	頸部に凹線
939	土壙-72	弥生土器	壺			13.2	(30.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	肩部に列点文
940	土壙-72	弥生土器	壺	9.8			(25.8)	浅黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	肩部に列点文、黒斑B C
941	土壙-72	弥生土器	甕	14.8			(9.3)	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	
942	土壙-72	弥生土器	甕			6.6	(14.0)	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	底部穿孔
943	土壙-72	弥生土器	甕			7.6	(18.5)	褐灰色 (7.5YR5/1)	細砂	良好	底部穿孔
944	土壙-72	弥生土器	高杯	26.0			(5.6)	黄橙色 (7.5YR8/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線
945	土壙-72	弥生土器	高杯			15.0	(16.2)	浅黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	
946	土壙-72	弥生土器	高杯	24.3		11.6	20.9	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	ほぼ完形
947	土壙-72	弥生土器	台付鉢	18.2			(5.2)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文、肩部に列点文
948	土壙-74	弥生土器	高杯	22.4			(5.4)	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑C

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
949	土壇-75	弥生土器	甕	14.8			(3.8)	明褐色 (7.5YR7/1)	粗砂	良好	口縁部に凹線
950	土壇-80	弥生土器	甕	14.5			(4.5)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
951	土壇-80	弥生土器	高杯	22.4			(3.1)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	
952	土壇-80	弥生土器	高杯			11.0	(6.9)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	
953	土壇-81	弥生土器	鉢	19.0	20.8	6.0	10.0	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	黒斑 B C
954	土壇-82	弥生土器	高杯	37.4			(5.5)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
955	土壇-84	弥生土器	壺	25.9			(13.1)	橙色 (5YR6/0)	細砂	良好	
956	土壇-86	弥生土器	甕	14.6	12.7		(11.2)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、スス B
957	土壇-86	弥生土器	高杯	14.5			(6.3)	淡橙色 (5YR8/3)	精良	良好	口縁部に凹線・棒状浮文
958	土壇-86	弥生土器	鉢	9.6			5.5	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
959	土壇-86	弥生土器	高杯				(9.2)	橙色 (2.5YR6/6)	精良	良好	外面に赤色顔料
960	土壇-87	弥生土器	壺	20.0			(7.6)	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑 A
961	土壇-87	弥生土器	台付壺	7.9	16.0	9.2	21.6	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	礫	良好	口頸部に凹線
962	土壇-87	弥生土器	甕	13.9	15.4		16.6	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	粘土紐輪積み、黒斑 C、タタキ成形
963	土壇-87	弥生土器	高杯	19.0			(3.4)	灰白色 (10YR8/2)	礫	良好	口頸部に凹線、黒斑 A
964	土壇-87	弥生土器	高杯	18.0			(4.1)	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	
965	土壇-87	弥生土器	器台	25.6		21.3	35.6	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線・竹管文、胴部に凹線 黒斑 C
966	土壇-88	弥生土器	甕		31.3	7.2	(28.2)	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	黒斑 B C
967	土壇-88	弥生土器	台付鉢	13.4	17.2		(5.8)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
968	土壇-90	弥生土器	壺	14.4			(5.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に凹線
969	土壇-90	弥生土器	高杯	14.8			(3.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
970	土壇-90	弥生土器	高杯	23.7			(5.5)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
971	土壇-91	弥生土器	甕	12.0		5.4	(8.7)	明褐色 (7.5YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 A ~ C
972	土壇-91	弥生土器	高杯	11.3			(11.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に凹線
973	土壇-91	弥生土器	高杯			8.8	(11.7)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	
974	土壇-91	弥生土器	鉢	9.1		4.0	5.2	灰褐色 (7.5YR5/2)	細砂	良好	
975	土壇-92	弥生土器	甕	12.2			(6.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
976	土壇-92	弥生土器	高杯	19.2			(4.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	
977	土壇-93	弥生土器	壺	16.5			(11.2)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口頸部に凹線
978	土壇-93	弥生土器	壺	17.2			(8.6)	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に凹線
979	土壇-93	弥生土器	高杯	18.8		10.1	18.0	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、外面に赤色顔料
980	土壇-95	弥生土器	壺	12.4			(8.9)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
981	土壇-97	弥生土器	壺	30.6	45.5		(43.2)	鈍い黄褐色 (10YR7/1)	細砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文、頸部に凹線、 黒斑 A・B
982	土壇-97	弥生土器	壺			13.9	(28.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑 B
983	土壇-97	弥生土器	壺	16.6	22.6	9.8	32.2	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂	良好	口頸部に凹線

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
984	土壇-97	弥生土器	壺	17.0	22.9	9.0	35.0	灰黄色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑 B
985	土壇-97	弥生土器	壺		21.7	9.8	(25.6)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	黒斑 B C
986	土壇-97	弥生土器	壺	17.7	22.3	9.3	32.5	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑 B
987	土壇-97	弥生土器	壺	22.3			(22.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口頸部に凹線、波状文
988	土壇-97	弥生土器	壺		21.4	9.3	(28.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
989	土壇-97	弥生土器	壺		20.3	8.9	(29.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	頸部に凹線、黒斑 B
990	土壇-97	弥生土器	壺		22.7	9.6	(23.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑 B
991	土壇-97	弥生土器	壺	15.4	30.2		(24.8)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
992	土壇-97	弥生土器	甕	15.9			(7.5)	灰赤色 (2.5YR6/2)	細砂	良好	肩部に列点文
993	土壇-97	弥生土器	甕	15.8			(9.4)	鈍い赤褐色 (2.5YR5/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
994	土壇-97	弥生土器	甕	19.9	29.7		(14.8)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
995	土壇-97	弥生土器	甕	13.5	27.3	6.8	20.7	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 B C
996	土壇-97	弥生土器	甕	13.3	20.8	7.6	6.7	赤色 (10YR5/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 B C
997	土壇-97	弥生土器	高杯			7.3	(8.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
998	土壇-97	弥生土器	台付鉢			11.6	(8.8)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	
999	土壇-98	弥生土器	甕	10.0	9.8	3.4	14.5	鈍い黄橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	
1000	土壇-99	弥生土器	甕	12.8			(5.3)	暗赤褐色 (2.5YR3/1)	細砂	良好	
1001	土壇-99	弥生土器	甕	21.4			(4.3)	鈍い黄橙色 (2.5YR5/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
1002	土壇-100	弥生土器	壺	17.1			(5.3)	灰白色 (7.5YR8/2)	粗砂	良好	口頸部に凹線
1003	土壇-100	弥生土器	壺	20.4			(8.9)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	口頸部に凹線
1004	土壇-100	弥生土器	壺	12.6	23.6	9.4	31.8	鈍い橙色 (10YR1/2)	細砂	良好	口頸部に凹線、スス B'、黒斑 C
1005	土壇-100	弥生土器	壺	18.8	23.8		33.7	褐灰色 (7.5YR6/1)	粗砂	良好	口頸部に凹線、スス B'
1006	土壇-100	弥生土器	壺	11.8	18.5		(9.8)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	スス B
1007	土壇-100	弥生土器	壺		21.2	9.6	(25.9)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑 C
1008	土壇-100	弥生土器	甕	14.5			(6.5)	褐灰色 (5YR4/1)	礫	良好	口縁部に凹線、スス B'
1009	土壇-100	弥生土器	甕	14.7			(10.5)	鈍い黄褐色 (6/4)	粗砂	良好	口縁部に凹線、スス B
1010	土壇-100	弥生土器	甕	18.9	31.4	10.3	38.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、タタキ成形
1011	土壇-100	弥生土器	台付鉢	49.8			(14.7)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	粗砂 礫	良好	口縁部に凹線
1012	土壇-100	弥生土器	台付鉢			10.2	(14.5)	明褐灰色 (7.5YR7/1)	粗砂	良好	黒斑 B
1013	土壇-100	弥生土器	台付鉢	15.6	20.7		(14.5)	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線
1014	土壇-101	弥生土器	壺	10.4			(4.3)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑 A
1015	土壇-101	弥生土器	高杯	23.4			(8.1)	橙色 (10YR7/6)	細砂	良好	
1016	土壇-102	弥生土器	甕	14.0	20.2		(13.7)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	スス B
1017	土壇-102	弥生土器	壺	28.5			(11.7)	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑 A
1018	土壇-102	弥生土器	壺	19.7			(5.9)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口頸部に凹線

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1019	土壇-102	弥生土器	壺	17.6	25.2	9.6	35.6	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂 細砂	良好	口縁部に凹線、頸部に沈線、黒斑C
1020	土壇-102	弥生土器	甕	13.8	22.3		(26.3)	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、ススB
1021	土壇-103	弥生土器	壺	11.8			(4.5)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	口頸部に凹線
1022	土壇-103	弥生土器	甕	11.6	15.0		(8.3)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	肩部に列点文
1023	土壇-103	弥生土器	甕	13.0			(10.0)	黒褐色 (10YR3/1)	細砂	良好	口縁部に凹線、ススB'
1024	土壇-105	弥生土器	壺	17.7	26.8	9.5	32.8	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、頸部に列点文、黒斑 B C、タタキ成形
1025	土壇-105	弥生土器	壺	16.5			(9.4)	橙色 (5YR6/6)	粗砂 礫	良好	口縁部に凹線
1026	土壇-105	弥生土器	壺	17.1			(6.6)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口頸部に凹線
1027	土壇-105	弥生土器	甕	10.9	17.0		(11.9)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑A B
1028	土壇-105	弥生土器	高杯	24.9		14.7	21.2	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	黒斑A・B
1029	土壇-106	弥生土器	台付鉢	19.6			(6.8)	鈍い黄褐色 (10YR6/4)	細砂	良好	肩部に列点文
1030	土壇-107	弥生土器	壺			14.6	(31.6)	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1031	土壇-108	弥生土器	壺	28.0			(2.8)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文
1032	土壇-108	弥生土器	甕	14.5	(22.4)	7.6	29.6	灰黄色 (2.5Y7/3)	細砂	良好	ススB
1033	土壇-108	弥生土器	甕	11.0	(11.8)		(9.7)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	ススB
1034	土壇-108	弥生土器	台付鉢	14.3			(5.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	肩部に列点文
1035	土壇-108	弥生土器	鉢	16.0		5.4	6.5	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1036	土壇墓-2	弥生土器	甕	15.0	20.3	8.0	24.2	明赤褐色 (5YR5/6)	細砂	良好	口縁部に凹線
1037	土壇墓-3	弥生土器	甕	14.5			(7.2)	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に凹線
1038	土器溜り-1	弥生土器	壺	10.6	13.8	4.8	16.1	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
1039	土器溜り-1	弥生土器	壺	13.0			(8.5)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線
1040	土器溜り-1	弥生土器	甕	14.8	27.9		(13.5)	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
1041	土器溜り-1	弥生土器	甕	15.4			(10.0)	浅黄褐色 (10YR8/4)	粗砂	良好	
1042	土器溜り-1	弥生土器	甕		27.4	6.4	(27.7)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
1043	土器溜り-1	弥生土器	甕	13.1	18.3	5.1	21.5	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B
1044	土器溜り-1	弥生土器	台付鉢	28.0	36.0		(21.9)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に凹線
1045	土器溜り-1	弥生土器	鉢	20.0	27.7	7.9	24.1	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	粗砂	良好	肩部に列点文
1046	土器溜り-1	弥生土器	高杯	23.0		12.8	22.9	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔三段
1047	土器溜り-1	弥生土器	台付鉢	22.2			(11.9)	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
1048	溝-3	弥生土器	壺	19.2			(6.9)	灰赤色 (2.5YR5/2)	細砂	良好	口頸部に突帯
1049	溝-3	弥生土器	壺	17.0			(1.6)	鈍い褐色 (5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に刻目
1050	溝-3	弥生土器	壺	25.5			(8.2)	淡褐色 (5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に刻目、頸部に突帯
1051	溝-3	弥生土器	壺	17.9			(1.6)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に刻目、黒斑A
1052	溝-3	弥生土器	壺	22.6			(2.2)	褐灰色 (7.5YR4/1)	細砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文
1053	溝-3	弥生土器	壺	13.7	30.3	10.1	36.1	淡褐色 (5YR4/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文、肩部に列 点文、黒斑C、タタキ成形

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1054	溝-3	弥生土器	壺	11.1	17.2	6.5	20.5	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑C
1055	溝-3	弥生土器	壺	12.3	16.9	5.8	19.6	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に凹線
1056	溝-3	弥生土器	壺	12.0	15.8		(13.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
1057	溝-3	弥生土器	壺	29.8	38.4	14.2	57.7	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑B C
1058	溝-3	弥生土器	壺	12.8	19.7		(17.6)	灰白色 (10YR8/1)	礫	良好	頸部に凹線・棒状浮文・凹形浮文、 肩部に列点文
1059	溝-3	弥生土器	壺	11.6	19.8		25.5	灰白色 (10YR8/2)	礫	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑 B・C
1060	溝-3	弥生土器	壺	7.1	14.2	6.4	16.0	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑B C
1061	溝-3	弥生土器	台付壺	7.1	14.3		(14.2)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	口頸部に凹線、黒斑B
1062	溝-3	弥生土器	台付壺	7.7	16.3		(13.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	口頸部に凹線
1063	溝-3	弥生土器	台付壺	18.2	16.6		(18.8)	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口頸部に凹線
1064	溝-3	弥生土器	台付壺		16.4		(23.2)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	
1065	溝-3	弥生土器	器台	31.2			(8.5)	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	口縁部に凹線
1066	溝-3	弥生土器	甕	15.0			(4.5)	橙色 (2.5YR5/8)	細砂	良好	口縁部に刻目、黒斑A
1067	溝-3	弥生土器	甕	25.2	26.4		(10.8)	灰褐色 (5YR5/2)	細砂	良好	口縁部に刻目
1068	溝-3	弥生土器	甕	13.6	23.3		(27.6)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、タタキ成形
1069	溝-3	弥生土器	甕	15.4			(9.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、竹管文
1070	溝-3	弥生土器	甕	16.0	30.8		(17.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑 B
1071	溝-3	弥生土器	甕	11.8	18.2		(16.4)	明褐灰色 (5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、ススA
1072	溝-3	弥生土器	甕	13.7	22.3		(12.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に凹線、タタキ成形
1073	溝-3	弥生土器	甕	13.0	20.9		(13.6)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	口縁部に凹線、スス、タタキ成形
1074	溝-3	弥生土器	甕	12.1	20.0	5.9	27.9	灰褐色 (7.5YR6/2)	礫	良好	口縁部に凹線、ススB、赤化
1075	溝-3	弥生土器	甕	18.6			(5.1)	褐灰色 (7.5YR6/1)	細砂	良好	口縁部に凹線
1076	溝-3	弥生土器	甕	15.0	25.8		(13.7)	灰褐色 (7.5YR6/1)	細砂	良好	口縁部に凹線
1077	溝-3	弥生土器	高杯				(2.4)	黒色 (7.5YR2/1)	細砂	良好	外面に赤色顔料
1078	溝-3	弥生土器	高杯	10.0			(4.0)	灰褐色 (5YR6/2)	細砂	良好	口縁部に凹線
1079	溝-3	弥生土器	高杯	10.1		6.7	9.2	灰褐色 (5YR4/2)	礫	良好	口縁部に凹線
1080	溝-3	弥生土器	高杯	26.8			(4.4)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1081	溝-3	弥生土器	高杯	21.8			(5.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	礫	良好	口縁部に凹線
1082	溝-3	弥生土器	高杯	23.0			(9.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	
1083	溝-3	弥生土器	高杯	19.6			(4.2)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	黒斑A
1084	溝-3	弥生土器	高杯	22.5		10.3	19.0	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	
1085	溝-3	弥生土器	高杯	19.6			(11.2)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	
1086	溝-3	弥生土器	台付鉢	44.8		16.5	21.5	淡黄色 (2.5Y8/4)	細砂	良好	
1087	溝-3	弥生土器	高杯			16.7	(19.6)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	礫	良好	黒斑C
1088	溝-3	弥生土器	高杯			12.2	(12.2)	鈍い橙色 (5YR7/4)	礫	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1089	溝-3	弥生土器	高杯			15.2	(18.9)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	礫	良好	
1090	溝-3	弥生土器	高杯			9.0	(11.7)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	
1091	溝-3	弥生土器	高杯			11.2	(12.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
1092	溝-3	弥生土器	高杯			9.4	(5.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1093	溝-3	弥生土器	高杯			7.9	(9.1)	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	
1094	溝-3	弥生土器	鉢	23.0			(6.0)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	口縁部に刻目、黒斑A B
1095	溝-3	弥生土器	鉢				(3.8)	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に刻目
1096	溝-3	弥生土器	鉢				(5.7)	灰褐色 (5YR5/2)	細砂	良好	
1097	溝-3	弥生土器	鉢	43.0			(16.0)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に凹線、黒斑A B
1098	溝-3	弥生土器	台付鉢	19.1	24.7		(13.7)	灰白色 (5YR8/2)	細砂	良好	口縁部に凹線・棒状浮文、肩部に列点文、黒斑B
1099	溝-3	弥生土器	台付鉢	16.6	23.2	10.9	22.3	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑B
1100	溝-3	弥生土器	台付鉢	17.4	23.4	11.4	21.7	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	礫	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文
1101	溝-3	弥生土器	器台				(23.5)	灰褐色 (5YR5/2)	細砂	良好	脚部に凹線
1102	溝-3	弥生土器	器台			33.0	(6.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	脚部に凹線
1103	溝-3	弥生土器	器台			25.0	(13.5)	鈍い橙色 (5YR4/6)	粗砂 細砂	良好	脚部に凹線、黒斑C
1104	包含層	弥生土器	壺	21.2			(17.1)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂 細砂	良好	頸部に沈線
1105	包含層	弥生土器	壺	14.8			(5.2)	鈍い黄褐色 (5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に刻目、頸部に突帯
1106	包含層	弥生土器	壺				(2.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	口頸部に突帯
1107	包含層	弥生土器	壺	15.2			(5.7)	鈍い橙色 (5YR6/3)	細砂	良好	口頸部に突帯
1108	包含層	弥生土器	壺	16.8			(5.3)	褐色 (7.5YR4/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線、頸部に突帯、黒斑A
1109	包含層	弥生土器	壺	15.4			(12.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に刻目、肩部に列点文
1110	包含層	弥生土器	壺	22.3	43.8		(23.6)	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂 礫	良好	口縁部に凹線・棒状浮文、頸部に凹線
1111	包含層	弥生土器	壺	13.4			(6.0)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
1112	包含層	弥生土器	壺	21.0			(14.0)	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	
1113	包含層	弥生土器	甕				(1.2)	橙色 (7.5YR6/6)	礫	良好	口縁部に刻目
1114	包含層	弥生土器	甕	17.2			(2.5)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	口縁部に刻目
1115	包含層	弥生土器	甕	19.6			(9.9)	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、タタキ成形
1116	包含層	弥生土器	甕	12.6			(6.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
1117	包含層	弥生土器	鉢	17.0	23.2		19.4	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に凹線、肩部に列点文、黒斑C
1118	包含層	弥生土器	甕	23.4	26.4		(13.2)	淡橙色 (5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
1119	包含層	弥生土器	甕	16.9	24.6	7.7	30.2	明灰褐色 (5YR7/2)	粗砂	良好	黒斑B
1120	包含層	弥生土器	甕	15.0			(10.8)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に凹線・竹管文・棒状浮文、肩部に列点文
1121	包含層	弥生土器	甕			6.6	(10.5)	鈍い褐色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	スス
1122	包含層	弥生土器	甕			6.5	(11.6)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑C
1123	包含層	弥生土器	甕	9.5	11.7		(14.5)	黒褐色 (7.5YR2/2)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1124	包含層	弥生土器	鉢	7.8	8.6	4.3	8.9	橙色 (2.5YR7/8)	細砂	良好	
1125	包含層	弥生土器	蓋	12.7			(3.2)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	スス、黒斑
1126	包含層	弥生土器	鉢	14.0			(6.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	
1127	包含層	弥生土器	鉢	10.6			5.7	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	ススB
1128	包含層	弥生土器	鉢		14.5		(7.9)	橙色 (2.5YR7/8)	粗砂	良好	
1129	包含層	弥生土器	鉢	9.7	11.1		(5.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)	精良	良好	
1130	包含層	弥生土器	鉢	10.8	13.7	5.8	11.4	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	粗砂	良好	
1131	包含層	弥生土器	台付鉢	12.7	17.7		(6.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	肩部に列点文
1132	包含層	弥生土器	高杯	24.4			(6.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
1133	包含層	弥生土器	高杯	22.4			(5.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
1134	包含層	弥生土器	高杯	21.2			(5.5)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	
1135	包含層	弥生土器	高杯			7.0	(7.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
1136	包含層	弥生土器	高杯			20.9	(13.6)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	透かし孔三段
1137	竪穴住居-32	土師器	壺		30.2	7.2	(32.0)	橙色 (5YR7/8)	礫	良好	黒斑C
1138	竪穴住居-32	土師器	小形壺	6.8	8.0	3.0	8.5	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑B・C
1139	竪穴住居-32	土師器	高杯	8.2		10.4	10.4	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1140	竪穴住居-34	土師器	高杯	20.9			(7.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精良	良好	黒斑A
1141	竪穴住居-36	土師器	高杯	21.2			(12.2)	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	ススA・B、黒斑A
1142	竪穴住居-35	土師器	支脚			7.6	(7.2)	橙色 (7.5YR6/6)	細砂	良好	
1143	竪穴住居-32	土師器	鉢	5.4			4.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑A～C、手握ね土器
1144	竪穴住居-35	土師器	小形壺	10.8			8.0	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
1145	竪穴住居-35	土師器	鉢	15.8			(5.5)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
1146	竪穴住居-37	土師器	壺	16.8			(15.7)	灰白色 (7.5YR8/1)	粗砂	良好	黒斑A・B
1147	竪穴住居-37	土師器	甕	14.6	21.3		(17.4)	鈍い橙色 (5YR3/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、黒斑B
1148	竪穴住居-37	土師器	甕	15.0	22.2	4.6	25.6	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1149	竪穴住居-37	土師器	甕	14.4	21.0		23.0	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススA、黒斑B・C
1150	竪穴住居-37	土師器	高杯	13.8			(8.0)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1151	竪穴住居-37	土師器	高杯	11.4		8.6	7.9	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
1152	竪穴住居-37	土師器	甕	16.4	22.7	4.6	24.9	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB、黒斑C
1153	竪穴住居-37	土師器	甕	14.8	20.4		(19.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1154	竪穴住居-37	土師器	高杯	13.2			(6.4)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
1155	竪穴住居-37	土師器	高杯	20.6		14.4	14.8	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
1156	竪穴住居-37	土師器	鉢	15.7			6.0	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑C
1157	竪穴住居-37	土師器	鉢	38.2			(21.4)	灰白色 (5YR8/2)	粗砂	良好	黒斑B
1158	竪穴住居-38	土師器	手焙				(6.8)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1159	竪穴住居-38	土師器	高杯			16.6	(6.4)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
1160	竪穴住居-39	土師器	甕	15.1	21.7	4.1	24.4	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB
1161	竪穴住居-39	土師器	高杯	18.7			(7.2)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	
1162	竪穴住居-39	土師器	高杯	17.2			(7.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススA B
1163	竪穴住居-41	土師器	甕	18.4	27.0		(13.5)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススB
1164	竪穴住居-41	土師器	壺		13.3	5.2	(11.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂 礫	良好	黒斑C
1165	竪穴住居-41	土師器	甕	6.1	15.0		(13.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、黒斑B
1166	竪穴住居-41	土師器	壺	17.0	27.0		(29.1)	淡黄色 (5YR8/3)	粗砂	良好	
1167	竪穴住居-42	土師器	甕	15.6			(7.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1168	竪穴住居-42	土師器	甕	12.0	17.0		(10.8)	褐色 (7.5YR4/3)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1169	竪穴住居-42	土師器	鉢	33.2			(19.9)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	
1170	竪穴住居-42	土師器	鉢	15.8			5.4	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	
1171	竪穴住居-42	土師器	鉢	15.0			(5.6)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	
1172	竪穴住居-44	土師器	壺	20.0			(9.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	
1173	竪穴住居-44	土師器	甕	14.5	19.6		(12.5)	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、黒斑B
1174	竪穴住居-44	土師器	甕	11.8	17.0		(9.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1175	竪穴住居-44	土師器	高杯	18.4			(7.5)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	黒斑A
1176	竪穴住居-44	土師器	鉢	15.6			5.5	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	
1177	竪穴住居-45	土師器	小形壺	7.8	8.8		8.9	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1178	竪穴住居-45	土師器	小形壺		7.7		(8.0)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	
1179	竪穴住居-45	土師器	鉢	12.2			5.6	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
1180	竪穴住居-45	土師器	鉢	6.9			3.9	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
1181	竪穴住居-45	土師器	高杯	20.5			(6.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1182	竪穴住居-45	土師器	甕		22.3	4.0	(23.9)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	ススB、タタキ成形
1183	竪穴住居-45	土師器	鉢	17.5			7.8	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	黒斑B C
1184	竪穴住居-45	土師器	鉢	3.2			3.0	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	手捏ね土器
1185	竪穴住居-46	土師器	壺	7.2	13.8		13.3	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	
1186	竪穴住居-46	土師器	高杯	19.6		10.7	(7.1)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4
1187	竪穴住居-46	土師器	甕	15.8	22.0		(17.2)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1188	竪穴住居-46	土師器	鉢	9.9			6.7	橙色 (5YR6/6)	細砂 粗砂	良好	
1189	竪穴住居-46	土師器	鉢	11.4			8.0	橙色 (2.5YR7/8)	礫	良好	
1190	竪穴住居-46	土師器	鉢	11.4			(4.2)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1191	竪穴住居-46	土師器	台付鉢	14.0			(6.0)	橙色 (5YR6/8)	礫	良好	
1192	竪穴住居-46	土師器	鉢	12.0			(6.1)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1193	竪穴住居-46	土師器	鉢	25.1			(8.0)	黄色 (2.5Y8/6)	細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1194	竪穴住居-47	土師器	甕	16.4			(9.8)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1195	竪穴住居-48	土師器	壺	11.8			(11.9)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1196	竪穴住居-46	土師器	甕	13.8	21.6		(18.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	非在地系土器
1197	竪穴住居-48	土師器	高杯	20.3		13.7	14.1	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔3
1198	竪穴住居-48	土師器	高杯	22.7		14.4	16.4	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂 礫	良好	
1199	竪穴住居-48	土師器	鉢	13.7		3.4	(5.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1200	竪穴住居-48	土師器	鉢	13.5			(5.1)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1201	竪穴住居-48	土師器	鉢	15.7			(5.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1202	竪穴住居-48	土師器	鉢	12.4			(7.0)	鈍い赤褐色 (2.5YR5/3)	粗砂	良好	
1203	竪穴住居-48	土師器	小形壺	6.2	7.2		7.0	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
1204	竪穴住居-48	土師器	小形壺	5.8			5.0	灰赤色 (2.5YR6/2)	細砂	良好	手捏ね土器
1205	竪穴住居-48	土師器	鉢	11.0			(4.8)	橙色 (2.5YR7/8)	粗砂	良好	
1206	竪穴住居-48	土師器	鉢	10.0			5.8	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	
1207	竪穴住居-48	土師器	器台	9.4			(6.0)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	
1208	竪穴住居-49	土師器	甕	16.5			(13.1)	鈍い橙色 (5YR6/3)	細砂	良好	ススB、黒斑B、タキ成形
1209	竪穴住居-49	土師器	甕	15.3			(7.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1210	竪穴住居-49	土師器	高杯	21.8			(9.2)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑A
1211	竪穴住居-50	土師器	壺	20.6			(10.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
1212	竪穴住居-50	土師器	壺	26.6	29.9	6.3	34.7	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	礫 細砂	良好	口縁部に円形浮文、黒斑C、畿内(大和)系土器
1213	竪穴住居-50	土師器	甕	14.5	22.2		(24.8)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1214	竪穴住居-50	土師器	甕	14.0	20.6		23.3	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、ススC
1215	竪穴住居-50	土師器	甕	12.5	17.5		18.9	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1216	竪穴住居-50	土師器	甕	14.0	18.6		(11.8)	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1217	竪穴住居-50	土師器	甕	12.0	16.3		(8.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1218	竪穴住居-50	土師器	甕	13.7			(11.6)	灰赤色 (2.5YR6/2)	粗砂 細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1219	竪穴住居-50	土師器	甕	14.0	20.2		22.1	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	細砂 礫	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B2、ススB
1220	竪穴住居-50	土師器	小形壺	11.4	8.7		8.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑B
1221	竪穴住居-50	土師器	台付鉢	19.4		5.5	6.3	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	山陰(因幡)系土器
1222	竪穴住居-50	土師器	台付鉢	14.0			(6.2)	淡橙色 (5YR4/8)	粗砂	良好	山陰(因幡)系土器
1223	竪穴住居-50	土師器	高杯			19.1	(6.4)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	透かし孔3
1224	竪穴住居-50	土師器	高杯			18.6	(5.6)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1225	竪穴住居-51	土師器	甕	15.7			(5.1)	灰白色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1226	竪穴住居-51	土師器	高杯				(9.3)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1227	竪穴住居-52	土師器	甕	15.9			(5.0)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1228	竪穴住居-52	土師器	高杯	20.1			(5.9)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1229	竪穴住居-53	土師器	壺	16.0	29.5	9.0	(36.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂 細砂	良好	黒斑C
1230	竪穴住居-53	土師器	甕	15.9			(6.3)	灰白色 (7.5YR8/1)	粗砂	良好	山陰(因幡)系土器
1231	竪穴住居-53	土師器	壺	20.6	30.4		(17.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
1232	竪穴住居-53	土師器	甕	13.2	18.8	5.3	22.3	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	胴部穿孔、ススC、タタキ成形
1233	竪穴住居-53	土師器	甕	19.4			(4.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	四国(讃岐)系土器
1234	竪穴住居-53	土師器	甕	10.8	12.6		11.0	明褐灰色 (5YR7/1)	細砂	良好	肩部に刺突文B3
1235	竪穴住居-53	土師器	甕	12.8	17.8		16.1	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	肩部に刺突文B2、ススC
1236	竪穴住居-53	土師器	甕	14.71			(5.7)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1237	竪穴住居-53	土師器	甕	14.8	18.9		(10.0)	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1238	竪穴住居-53	土師器	甕	13.1	18.1		18.1	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1239	竪穴住居-53	土師器	甕	14.0	20.0		25.3	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1240	竪穴住居-53	土師器	甕	14.1	21.3		22.0	鈍い橙色 (10YR7/3)	粗砂 細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1、ススC
1241	竪穴住居-53	土師器	甕	16.4	21.0		22.5	褐灰色 (7.5YR4/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1242	竪穴住居-53	土師器	高杯	20.6			(7.4)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	黒斑A
1243	竪穴住居-53	土師器	高杯			14.2	(6.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4、ススB
1244	竪穴住居-53	土師器	高杯	11.3		18.8	11.3	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
1245	竪穴住居-53	土師器	小形壺	8.1	5.7		(5.2)	灰白色 (5YR8/2)	粗砂	良好	
1246	竪穴住居-53	土師器	鉢	11.6	12.5		9.9	明褐灰色 (5YR7/2)	粗砂	良好	ススC
1247	竪穴住居-53	土師器	鉢	15.7			(5.3)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	ススC
1248	竪穴住居-53	土師器	鉢	12.8			5.2	浅黄橙色 (10YR8/4)	粗砂	良好	
1249	竪穴住居-53	土師器	鉢	13.8			(4.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	ススC
1250	竪穴住居-53	土師器	鉢	15.9			(3.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	
1251	竪穴住居-53	土師器	鉢	16.3			(4.1)	褐灰色 (7.5YR5/1)	粗砂	良好	
1252	竪穴住居-53	土師器	鉢	26.5		9.9	13.7	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B・C、タタキ成形
1253	竪穴住居-54	土師器	脚付壺	10.3			(21.7)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1254	竪穴住居-54	土師器	高杯	21.7			(7.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1255	竪穴住居-55	土師器	甕	12.2			(4.3)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
1256	竪穴住居-55	土師器	甕	15.2			(5.7)	浅黄橙色 (10YR8/4)	礫	良好	黒斑A
1257	竪穴住居-55	土師器	甕	17.3			(3.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1258	竪穴住居-55	土師器	高杯	18.6		11.3	12.4	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	
1259	竪穴住居-56	土師器	壺	14.7	24.9		(25.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形、畿内(播磨)系土器
1260	竪穴住居-56	土師器	甕	15.8	21.4		(14.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B2
1261	竪穴住居-56	土師器	甕	16.0	15.5		(12.7)	鈍い褐色 (7.5YR5/3)	礫	良好	タタキ成形
1262	竪穴住居-56	土師器	台付鉢	12.2			(7.5)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	透かし孔4、外面に赤色顔料
1263	竪穴住居-56	土師器	高杯			12.8	(5.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	透かし孔4

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1264	竪穴住居-56	土師器	鉢	15.1			(5.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑 A
1265	竪穴住居-56	土師器	脚付壺	3.2			(5.9)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔 4、スス
1266	竪穴住居-56	土師器	高杯			11.6	(5.2)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	透かし孔 4、黒斑 C
1267	竪穴住居-60	土師器	壺	15.3			(5.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1268	竪穴住居-60	土師器	小形壺			3.8	(6.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料
1269	竪穴住居-60	土師器	甕	13.2	18.4		(11.2)	鈍い橙色 (5YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1270	竪穴住居-60	土師器	甕	14.7	16.5		17.0	褐灰色 (5YR4/1)	粗砂	良好	スス B、黒斑 C
1271	竪穴住居-60	土師器	甕	14.5	14.7		(15.9)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑 B C、タタキ成形
1272	竪穴住居-60	土師器	高杯	16.4			(9.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	
1273	竪穴住居-60	土師器	高杯	10.9			(8.9)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
1274	竪穴住居-60	土師器	高杯			13.2	(6.1)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	透かし孔 4
1275	竪穴住居-61	土師器	甕	12.8			(5.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	スス A
1276	竪穴住居-61	土師器	甕	12.3	18.8		(13.6)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、スス B
1277	竪穴住居-61	土師器	台付鉢			4.4	(3.3)	鈍い褐色 (7.5YR5/3)	粗砂	良好	製塩土器
1278	竪穴住居-61	土師器	高杯	19.6			(7.3)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1279	竪穴住居-62	土師器	壺	20.8			(13.9)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	スス A、黒斑 B・C、非在地系土器
1280	竪穴住居-62	土師器	壺	16.9			(7.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂 粗砂	良好	
1281	竪穴住居-62	土師器	壺	12.2	22.6		(21.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 礫	良好	黒斑 B
1282	竪穴住居-62	土師器	甕	21.2	26.7	6.5	(27.6)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	黒斑 B C
1283	竪穴住居-62	土師器	甕	13.8	19.6	3.8	(24.5)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、スス B、黒斑 B C
1284	竪穴住居-62	土師器	甕	12.1	21.1	4.2	(23.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 A 2、胴部穿孔、スス B'、黒斑 C
1285	竪穴住居-62	土師器	高杯	16.8		11.6	10.8	鈍い橙色 (5YR6/4)	精良	良好	透かし孔 4
1286	竪穴住居-62	土師器	高杯	19.2			(7.1)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1287	竪穴住居-62	土師器	高杯	19.3			(5.3)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
1288	竪穴住居-62	土師器	高杯	18.8			(6.1)	橙色 (2.5YR7/8)	精良	良好	
1289	竪穴住居-62	土師器	高杯	15.8			(4.7)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1290	竪穴住居-62	土師器	高杯	20.5			(5.7)	橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1291	竪穴住居-62	土師器	台付鉢	9.9			(6.6)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
1292	竪穴住居-62	土師器	鉢	11.8		4.0	5.4	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	ほぼ完形
1293	竪穴住居-62	土師器	鉢	14.0		4.8	6.0	灰赤色 (10R6/2)	細砂	良好	スス、ほぼ完形
1294	竪穴住居-63	土師器	甕	15.2	19.8		(20.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	スス B、山陰系土器
1295	竪穴住居-63	土師器	甕	14.8			(9.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	山陰系土器
1296	竪穴住居-64	土師器	壺	8.6	12.8	4.7	13.1	黄橙色 (10YR8/6)	精良	良好	
1297	竪穴住居-64	土師器	壺				(6.6)	浅黄色 (2.5Y7/3)	礫	良好	
1298	竪穴住居-64	土師器	甕	14.6	21.4		(13.0)	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼 成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1299	竪穴住居-64	土師器	甕	12.3	18.0		(18.6)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススA
1300	竪穴住居-64	土師器	甕	14.8	19.3		(8.4)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
1301	竪穴住居-64	土師器	甕	18.0	18.1	3.9	(19.8)	明赤灰色 (2.5YR7/4)	粗砂	良好	ススA
1302	竪穴住居-64	土師器	甕	14.4	15.8		(20.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑B C、タタキ成形
1303	竪穴住居-64	土師器	甕	15.4	21.2	5.4	(25.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	ススB、黒斑C
1304	竪穴住居-64	土師器	高杯	20.0			(6.7)	黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	
1305	竪穴住居-64	土師器	高杯	20.0			(6.8)	鈍い赤褐色 (2.5YR5/4)	精良	良好	
1306	竪穴住居-64	土師器	高杯			15.4	(8.0)	黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	透かし孔3
1307	竪穴住居-64	土師器	高杯			12.4	(9.7)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
1308	竪穴住居-64	土師器	鉢	13.5			6.5	赤橙色 (10YR6/6)	精良	良好	黒斑A~C
1309	竪穴住居-64	土師器	鉢	24.0			(13.9)	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	非在地系土器
1310	竪穴住居-65	土師器	壺	17.8			(7.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	礫	良好	
1311	竪穴住居-65	土師器	壺	14.4			(4.7)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	
1312	竪穴住居-65	土師器	甕	14.7			(9.7)	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線
1313	竪穴住居-65	土師器	甕	13.2	17.9	3.3	15.6	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
1314	竪穴住居-65	土師器	甕	13.8			(10.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線
1315	竪穴住居-65	土師器	甕	14.8			(10.0)	橙色 (5YR7/8)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線
1316	竪穴住居-65	土師器	甕	14.6	20.5		24.1	浅黄橙色 (10YR8/6)	細砂	良好	ススB、黒斑A B、タタキ成形、四 国(讃岐)系土器
1317	竪穴住居-65	土師器	甕	14.6			(5.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)	礫	良好	タタキ成形
1318	竪穴住居-65	土師器	甕	15.6	25.0	5.4	29.3	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	非在地系土器
1319	竪穴住居-65	土師器	高杯	19.0		14.4	14.4	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	透かし孔4、黒斑A・C、四国(讃 岐)系土器、ほぼ完形
1320	竪穴住居-65	土師器	高杯			21.6	(7.4)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	透かし孔4
1321	竪穴住居-65	土師器	鉢	14.0	12.0		(5.0)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	
1322	竪穴住居-65	土師器	鉢	12.8			(5.0)	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	
1323	竪穴住居-65	土師器	鉢	6.4		1.8	4.3	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	黒斑A~C、完形
1324	竪穴住居-65	土師器	支脚			(9.4)	(13.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑A~C、タタキ成形、畿内系土 器
1325	竪穴住居-66	土師器	壺				(3.6)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	良好	1326と同一個体、黒斑A、非在地系 土器
1326	竪穴住居-66	土師器	壺		26.3	5.2	(13.9)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	良好	1325と同一個体、黒斑B C、タタキ 成形、非在地系土器
1327	竪穴住居-67	土師器	壺		31.0	7.1	34.3	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	底部穿孔、黒斑B
1328	竪穴住居-67	土師器	甕	14.3	20.9	4.3	22.5	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
1329	竪穴住居-67	土師器	甕	15.1	21.2		22.7	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
1330	竪穴住居-67	土師器	甕	13.8	23.0		13.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1331	竪穴住居-67	土師器	甕	14.8	10.6		10.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB
1332	竪穴住居-67	土師器	甕	14.1	19.1		9.0	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A B
1333	竪穴住居-67	土師器	甕	12.9	14.4		12.1	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	ススB、黒斑B C

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1334	竪穴住居-67	土師器	鉢	13.9			5.5	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A~C
1335	竪穴住居-67	土師器	鉢	9.6			7.1	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑A~C、タタキ成形
1336	竪穴住居-67	土師器	器台	8.1		9.0	7.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
1337	竪穴住居-67	土師器	手焙		16.2		(15.4)	鈍い黄橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料、黒斑A B、ほぼ完形
1338	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	壺	10.4	14.4	4.1	13.6	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	粗砂	良好	黒斑A B・B
1339	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	高杯	19.3			(5.5)	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	
1340	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	高杯	19.4			(6.0)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	黒斑A
1341	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	高杯	12.4			(6.7)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1342	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	高杯	19.8			(5.8)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1343	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	鉢	14.8			(3.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
1344	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	鉢	11.7		3.1	(7.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B C
1345	竪穴住居-68 〃 -69	土師器	器台	10.2		11.2	9.2	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	透かし孔3
1346	竪穴住居-70	土師器	壺	33.4			(27.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	四国系土器
1347	竪穴住居-70	土師器	壺	8.8			(8.8)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	
1348	竪穴住居-70	土師器	甕	13.0	19.6		(11.0)	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線
1349	竪穴住居-70	土師器	甕	14.7	20.4	3.8	23.7	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススB
1350	竪穴住居-70	土師器	甕	13.9			(3.9)	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂	良好	タタキ成形
1351	竪穴住居-70	土師器	甕	14.4			(9.4)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	粗砂	良好	非在地系土器
1352	竪穴住居-70	土師器	高杯	19.0			(12.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	透かし孔4
1353	竪穴住居-70	土師器	高杯			13.5	(8.5)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	黒斑C
1354	竪穴住居-70	土師器	高杯				(5.4)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1355	竪穴住居-70	土師器	鉢	13.4			6.2	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	精良	良好	
1356	竪穴住居-70	土師器	鉢	12.8			(5.1)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1357	竪穴住居-73	土師器	甕	15.6	21.7		(12.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1358	竪穴住居-73	土師器	高杯				(7.0)	鈍い橙色 (5YR6/4)	精良	良好	
1359	竪穴住居-74	土師器	甕	13.2			(2.2)	褐灰色 (10YR6/1)	細砂	良好	
1360	竪穴住居-75	土師器	壺				(11.7)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	礫	良好	
1361	竪穴住居-75	土師器	甕	18.0			(6.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1362	竪穴住居-75	土師器	甕	13.5			(5.9)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1363	竪穴住居-75	土師器	高杯	20.6			(13.1)	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	
1364	竪穴住居-76	土師器	壺		33.2		(30.2)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	外面に赤色顔料、黒斑B・C
1365	竪穴住居-76	土師器	高杯	21.1			(6.4)	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	
1366	竪穴住居-76	土師器	高杯				(8.8)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	透かし孔3、非在地系土器
1367	竪穴住居-76	土師器	鉢	17.8			(6.5)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	
1368	竪穴住居-76	土師器	鉢	10.7			6.2	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1369	竪穴住居-77 -78	土師器	甕	13.3	20.2		21.5	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B C
1370	竪穴住居-77 -78	土師器	甕	12.6	19.4		21.4	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1371	竪穴住居-77 -78	土師器	甕	13.0	18.0		(18.2)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススC
1372	竪穴住居-77 -78	土師器	甕	14.1	23.3		(18.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススB
1373	竪穴住居-77 -78	土師器	高杯	19.5		13.8	15.9	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
1374	竪穴住居-77 -78	土師器	高杯	13.0		18.4	10.6	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1375	竪穴住居-77 -78	土師器	高杯			14.3	(9.0)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
1376	竪穴住居-77 -78	土師器	器台	8.7		12.7	8.9	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3
1377	竪穴住居-77 -78	土師器	壺	13.0	16.5		19.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料、黒斑C
1378	竪穴住居-77 -78	土師器	鉢	8.5			5.3	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B C
1379	竪穴住居-77 -78	土師器	鉢	15.4			5.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	黒斑B C
1380	竪穴住居-77 -78	土師器	鉢	14.1			4.5	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1381	竪穴住居-77 -78	土師器	鉢	1.2			7.4	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1382	竪穴住居-77 -78	土師器	小形壺	14.1			8.5	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	礫	良好	
1383	竪穴住居-77 -78	土師器	小形壺	10.6	11.2		9.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑B
1384	竪穴住居-79	土師器	甕	14.9			(8.5)	灰黄褐色 (10YR6/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1385	竪穴住居-79	土師器	甕	11.4	15.6		(11.3)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1
1386	竪穴住居-79	土師器	高杯	12.8			(4.6)	鈍い橙色 (5YR7/3)	精良	良好	
1387	竪穴住居-79	土師器	器台	8.7			(6.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	礫	良好	
1388	竪穴住居-80	土師器	甕	13.5	19.6	3.7	21.6	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススA
1389	竪穴住居-80	土師器	甕	12.9	18.7	4.2	19.6	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1390	竪穴住居-80	土師器	高杯	12.0			(8.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1391	竪穴住居-80	土師器	高杯			13.1	(7.9)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4
1392	竪穴住居-80	土師器	鉢	14.1			6.3	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	
1393	竪穴住居-80	土師器	鉢	6.5			5.2	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1394	竪穴住居-81	土師器	甕	13.6	18.7		20.6	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススA、ほぼ完形
1395	竪穴住居-81	土師器	甕	14.2	20.3		22.5	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススC
1396	竪穴住居-81	土師器	甕	13.7	16.7		17.6	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	ススC
1397	竪穴住居-82	土師器	甕	17.0			(4.5)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1398	竪穴住居-82	土師器	甕	13.8	16.7		(7.4)	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1399	竪穴住居-82	土師器	壺	15.2			(4.0)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	
1400	竪穴住居-82	土師器	甕	12.0	13.8		(5.5)	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑A
1401	竪穴住居-82	土師器	甕	13.3			(5.3)	褐灰色 (10YR5/1)	細砂	良好	タタキ成形
1402	竪穴住居-82	土師器	甕	14.1			(6.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	タタキ成形
1403	竪穴住居-82	土師器	甕	15.0			(6.0)	灰黄色 (2.5Y6/2)	粗砂	良好	黒斑B

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1404	竪穴住居-82	土師器	甕	12.8	12.8		(11.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	
1405	竪穴住居-82	土師器	高杯	15.4			(8.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	礫	良好	
1406	竪穴住居-82	土師器	高杯	20.2			(7.9)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	
1407	竪穴住居-82	土師器	高杯			13.7	(10.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	精良	良好	透かし孔4、黒斑C
1408	竪穴住居-82	土師器	鉢	38.8	37.2		(13.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	スス
1409	竪穴住居-82	土師器	鉢	14.8			7.6	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	精良	良好	
1410	竪穴住居-82	土師器	鉢	11.7			6.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	黒斑BC
1411	竪穴住居-82	土師器	鉢	11.7	11.2		(5.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑B
1412	竪穴住居-82	土師器	鉢	15.4			(7.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
1413	竪穴住居-82	土師器	台付鉢			4.6	(2.7)	鈍い橙色 (5YR6/3)	礫	良好	製塩土器
1414	竪穴住居-82	土師器	台付鉢			5.0	(2.2)	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	礫	良好	製塩土器
1415	竪穴住居-82	土師器	台付鉢			4.8	(1.7)	鈍い赤褐色 (2.5YR5/3)	礫	良好	製塩土器
1416	竪穴住居-82	土師器	手焙				(11.1)	黄橙色 (7.5YR8/8)	精良	良好	覆部に波状文、黒斑C
1417	竪穴住居-83	土師器	高杯			16.9	(9.9)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1418	竪穴住居-84	土師器	甕	26.7			(17.3)	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	
1419	竪穴住居-84	土師器	壺	14.5			(8.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1420	竪穴住居-84	土師器	壺	16.5			(7.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1421	竪穴住居-84	土師器	壺	16.3			(5.9)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	
1422	竪穴住居-84	土師器	壺	14.4	27.3	6.4	30.4	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	黒斑C
1423	竪穴住居-84	土師器	壺	17.0	25.5	3.0	28.3	鈍い橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口頸部に線刻、黒斑BC、タキ成形、非在地系土器
1424	竪穴住居-84	土師器	壺				(11.7)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	頸部に突帯、非在地系土器
1425	竪穴住居-84	土師器	壺	11.3	14.2		15.2	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	
1426	竪穴住居-84	土師器	甕	14.0			(3.9)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	
1427	竪穴住居-84	土師器	甕	14.1	21.7		(13.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑B
1428	竪穴住居-84	土師器	甕	14.6			(7.2)	灰褐色 (7.5YR6/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1429	竪穴住居-84	土師器	高杯	21.0		14.6	14.9	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	精良	良好	透かし孔3
1430	竪穴住居-84	土師器	高杯	12.7		16.7	11.3	橙色 (2.5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3
1431	竪穴住居-84	土師器	高杯	11.0			(7.4)	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	粗砂	良好	
1432	竪穴住居-84	土師器	鉢	38.0	35.0		(14.4)	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	粗砂	良好	
1433	竪穴住居-84	土師器	鉢	14.2			14.8	明褐色 (7.5YR7/2)	粗砂	良好	黒斑A~C
1434	竪穴住居-84	土師器	鉢	16.1			(6.7)	鈍い橙色 (5YR6/4)	粗砂	良好	外面に赤色顔料
1435	竪穴住居-84	土師器	鉢	10.2			5.7	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	
1436	竪穴住居-84	土師器	鉢	9.2		3.0	5.5	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑C
1437	竪穴住居-84	土師器	鉢	13.4			5.9	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1438	竪穴住居-84	土師器	鉢	13.3			6.0	鈍い褐色 (5YR7/4)	精良	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1439	竪穴住居-84	土師器	鉢	10.5			6.1	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂	良好	黒斑A~C
1440	竪穴住居-84	土師器	鉢	8.0			9.2	鈍い橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1441	竪穴住居-84	土師器	鉢	7.7			7.5	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
1442	竪穴住居-84	土師器	鉢	8.1		1.9	5.9	黄灰色 (2.5Y5/1)	細砂	良好	
1443	竪穴住居-84	土師器	鉢	5.4	6.5	4.1	6.6	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1444	竪穴住居-84	土師器	台付鉢			5.0	(3.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	製塩土器、タタキ成形
1445	竪穴住居-84	土師器	台付鉢			4.7	(3.4)	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	粗砂	良好	製塩土器、タタキ成形
1446	竪穴住居-84	土師器	台付鉢			5.1	(2.7)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	粗砂	良好	製塩土器、タタキ成形
1447	竪穴住居-84	土師器	器台	10.1		11.9	8.9	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
1448	竪穴住居-84	土師器	器台	8.8		9.3	9.3	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	透かし孔4
1449	竪穴住居-84	土師器	器台				(7.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	山陰系土器
1450	竪穴住居-86	土師器	壺	19.0			(17.7)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	粗砂	良好	
1451	竪穴住居-86	土師器	甕	14.4	22.2		24.5	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B2
1452	竪穴住居-86	土師器	台付鉢			4.8	(3.6)	褐灰色 (7.5YR5/1)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1453	竪穴住居-86	土師器	台付鉢			4.3	(3.6)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂 礫	良好	タタキ成形、製塩土器
1454	竪穴住居-87	土師器	甕	12.7			(12.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B2、ススA
1455	竪穴住居-87	土師器	甕	12.0	16.8		(11.2)	鈍い橙色 (5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑B
1456	竪穴住居-87	土師器	甕	14.4			(11.0)	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2
1457	竪穴住居-87	土師器	甕	14.0	20.6		22.6	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、ススA、黒斑C、ほぼ完形
1458	竪穴住居-87	土師器	甕	12.0			(6.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A3、ススB
1459	竪穴住居-87	土師器	高杯	20.0			(6.1)	鈍い橙色 (5YR6/3)	精良	良好	黒斑A
1460	竪穴住居-87	土師器	鉢	15.6			4.2	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
1461	竪穴住居-87	土師器	台付鉢			4.5	(1.9)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	製塩土器
1462	竪穴住居-87	土師器	台付鉢			4.9	(2.3)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	粗砂	良好	製塩土器
1463	竪穴住居-88	土師器	壺	20.8			(8.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
1464	竪穴住居-88	土師器	高杯	14.2			(5.0)	鈍い橙色 (5YR6/4)	精良	良好	
1465	竪穴住居-88	土師器	高杯	6.3			(5.2)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1466	竪穴住居-88	土師器	台付鉢			4.6	(2.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂 礫	良好	タタキ成形、製塩土器
1467	竪穴住居-88	土師器	台付鉢			4.6	(2.5)	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1468	竪穴住居-88	土師器	台付鉢			5.1	(2.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1469	竪穴住居-89	土師器	壺	16.6			(5.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	黒斑A
1470	竪穴住居-89	土師器	壺				(25.8)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C、タタキ成形、非在地系土器
1471	竪穴住居-89	土師器	甕	15.7			(6.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1472	竪穴住居-89	土師器	高杯			(11.8)	(6.5)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	透かし孔4
1473	竪穴住居-89	土師器	器台	9.8			(6.0)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔4

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1474	竪穴住居-89	土師器	器台			(13.7)	(7.3)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 6
1475	竪穴住居-90	土師器	壺	21.4			(9.0)	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	
1476	竪穴住居-90	土師器	甕	14.7			(7.4)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、タタキ成形
1477	竪穴住居-90	土師器	甕	14.1			(8.7)	灰黄橙色 (10YR6/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
1478	竪穴住居-90	土師器	甕	13.8			(6.1)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1479	竪穴住居-90	土師器	甕	14.8			(8.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1480	竪穴住居-90	土師器	甕	14.9	17.8		(13.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1481	竪穴住居-90	土師器	甕	16.0	25.2		(14.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、タタキ成形
1482	竪穴住居-90	土師器	甕	14.2	22.1		(24.0)	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1483	竪穴住居-90	土師器	甕	12.7			(6.0)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
1484	竪穴住居-90	土師器	器台	9.8			(3.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	
1485	竪穴住居-90	土師器	高杯				(7.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	透かし孔 4
1486	竪穴住居-90	土師器	高杯			16.4	(6.2)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 3
1487	竪穴住居-90	土師器	高杯			19.4	(6.9)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 3
1488	竪穴住居-90	土師器	高杯	12.9		16.4	10.5	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 3
1489	竪穴住居-90	土師器	高杯	11.9		17.0	9.5	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	透かし孔 4
1490	竪穴住居-90	土師器	高杯	19.2			(5.8)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	黒斑A
1491	竪穴住居-90	土師器	高杯	19.5			(6.4)	橙色 (7.5YR6/8)	精良	良好	
1492	竪穴住居-90	土師器	高杯	18.4			(5.6)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
1493	竪穴住居-90	土師器	高杯	20.1			(6.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	
1494	竪穴住居-90	土師器	高杯	18.9			(6.7)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	黒斑A
1495	竪穴住居-90	土師器	高杯	18.4			(5.6)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	黒斑A
1496	竪穴住居-90	土師器	高杯	18.8		13.9	14.1	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	透かし孔 4、黒斑C
1497	竪穴住居-90	土師器	鉢	14.5			5.3	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	
1498	竪穴住居-90	土師器	台付鉢			4.6	(2.4)	鈍い橙色 (5YR1/4)	粗砂 細砂	良好	製塩土器
1499	竪穴住居-90	土師器	台付鉢			4.5	(2.7)	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂 細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1500	竪穴住居-90	土師器	台付鉢			5.0	(2.9)	鈍い橙色 (2.5YR)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1501	竪穴住居-92	土師器	壺	10.1	29.5		38.9	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
1502	竪穴住居-92	土師器	壺	19.7	27.4		31.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B・C、タタキ成形、畿内系土器
1503	竪穴住居-92	土師器	甕	13.4	20.9		22.8	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C3、ススB
1504	竪穴住居-92	土師器	甕	14.3	20.6		22.2	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、黒斑C
1505	竪穴住居-92	土師器	甕	13.4	16.0		(8.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1506	竪穴住居-92	土師器	甕	13.6			(6.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	ススB、タタキ成形
1507	竪穴住居-92	土師器	高杯	18.3			(6.2)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1508	竪穴住居-92	土師器	高杯	13.6			(8.4)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	透かし孔 3

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1509	竪穴住居-92	土師器	高杯	13.4			(8.3)	鈍い橙色 (5YR6/4)	精良	良好	
1510	竪穴住居-92	土師器	鉢	16.2			5.0	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑 C
1511	竪穴住居-92	土師器	鉢	12.3			7.6	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	
1512	竪穴住居-94	土師器	甕	11.2	13.2	2.3	12.1	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、胴部穿孔、黒斑 B C、ほぼ完形
1513	竪穴住居-94	土師器	甕	12.4			(6.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1514	竪穴住居-94	土師器	高杯	19.8			(6.2)	浅黄橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1515	竪穴住居-94	土師器	壺	19.2			(5.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1516	竪穴住居-94	土師器	高杯	19.3			(6.0)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
1517	竪穴住居-94	土師器	鉢	15.4			(5.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑 C
1518	竪穴住居-96	土師器	甕	14.6	19.9		(19.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 B 3
1519	竪穴住居-96	土師器	高杯	15.2			(5.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	黒斑 B
1520	竪穴住居-96	土師器	高杯	14.7			(5.2)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔 4
1521	竪穴住居-96	土師器	鉢	33.6	35.2		(13.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑 A B
1522	竪穴住居-96	土師器	鉢	6.4			5.0	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑 B、手捏ね土器
1523	竪穴住居-96	土師器	鉢	5.4			3.3	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	黒斑 B C、手捏ね土器
1524	竪穴住居-96	土師器	高杯	13.4			(5.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
1525	竪穴住居-97	土師器	壺	13.8	30.5		34.2	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	胴部穿孔、黒斑 B C
1526	竪穴住居-97	土師器	甕	10.4	12.5		10.8	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 B 2、スス C
1527	竪穴住居-97	土師器	甕	11.9	16.9		(17.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂 礫	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 B 3
1528	竪穴住居-97	土師器	甕	13.7	17.5		(16.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	スス B、黒斑 B C
1529	竪穴住居-97	土師器	高杯	18.4		13.5	11.0	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔 4
1530	竪穴住居-97	土師器	鉢	37.5			(16.4)	橙色 (5YR7/6)	粗砂 礫	良好	
1531	竪穴住居-97	土師器	鉢	14.4			4.3	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	完形
1532	竪穴住居-97	土師器	壺	15.1	16.5		(12.3)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	黒斑 B
1533	竪穴住居-97	土師器	手焙				(12.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
1534	竪穴住居-98	土師器	甕	22.4	27.7		16.3	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	スス B
1535	竪穴住居-98	土師器	甕	13.4	18.1		18.6	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 A 1、スス B
1536	竪穴住居-98	土師器	高杯	20.5			(7.0)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1537	竪穴住居-98	土師器	高杯	19.6			(6.0)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1538	竪穴住居-98	土師器	高杯	13.8		10.5	12.5	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 3
1539	竪穴住居-99	土師器	壺	23.2			(9.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	
1540	竪穴住居-99	土師器	壺	20.9			(8.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1541	竪穴住居-99	土師器	壺	17.8	25.7		(27.1)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	黒斑 B C
1542	竪穴住居-99	土師器	壺	19.2	29.1		(21.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1543	竪穴住居-99	土師器	甕	12.0	17.5		17.7	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 C 3、スス B、ほぼ完形

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1544	竪穴住居-99	土師器	甕	12.4	17.8		18.7	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、底部赤化
1545	竪穴住居-99	土師器	甕	13.1	17.8		18.9	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1、底部穿孔、ススB
1546	竪穴住居-99	土師器	甕	12.5	18.5	2.5	19.6	褐灰色 (10YR4/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、ススB
1547	竪穴住居-99	土師器	甕	13.7	18.2		(17.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2
1548	竪穴住居-99	土師器	甕	13.1	19.1		(18.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑B、底部赤化
1549	竪穴住居-99	土師器	甕	13.0	19.4		(21.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑B
1550	竪穴住居-99	土師器	甕	11.8	14.0		(8.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1551	竪穴住居-99	土師器	甕	15.1			(11.4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1552	竪穴住居-99	土師器	甕	12.4	18.1		(11.0)	明褐灰色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑A・B
1553	竪穴住居-99	土師器	甕	15.2	16.8		(12.5)	浅黄橙色 (10YR8/2)	細砂	良好	黒斑B、タタキ成形
1554	竪穴住居-99	土師器	甕	13.6	18.5		(13.3)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂 礫	良好	ススB、非在地系土器
1555	竪穴住居-99	土師器	高杯	19.6		13.1	13.4	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔4、黒斑A
1556	竪穴住居-99	土師器	高杯	19.0			(8.5)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A
1557	竪穴住居-99	土師器	高杯			17.9	(10.2)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
1558	竪穴住居-99	土師器	高杯	13.2		18.0	10.6	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
1559	竪穴住居-99	土師器	鉢	42.0			(11.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に凹線、黒斑B
1560	竪穴住居-99	土師器	鉢	42.0			(16.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	口縁部に凹線
1561	竪穴住居-99	土師器	鉢	15.9			5.3	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	スス、ほぼ完形
1562	竪穴住居-99	土師器	鉢	15.0			5.2	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1563	竪穴住居-99	土師器	鉢	19.5			(4.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1564	竪穴住居-99	土師器	鉢	16.2			4.9	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
1565	竪穴住居-99	土師器	鉢	15.7			(4.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
1566	竪穴住居-99	土師器	鉢	16.6			(5.4)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	
1567	竪穴住居-99	土師器	鉢	14.9			(4.3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
1568	竪穴住居-99	土師器	鉢	15.1			5.2	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
1569	竪穴住居-99	土師器	鉢	14.7			(5.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
1570	竪穴住居-99	土師器	器台	10.4		11.4	9.9	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1571	竪穴住居-99	土師器	壺	10.7			(13.5)	橙色 (2.5YR6/6)	精良	良好	外面に赤色顔料
1572	竪穴住居-99	土師器	壺	12.8	15.2		(12.4)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	外面に赤色顔料
1573	竪穴住居-99	土師器	小形壺	12.0			(7.3)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	
1574	竪穴住居-99	土師器	台付鉢			4.0	(11.1)	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1575	竪穴住居-99	土師器	台付鉢			4.8	(6.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1576	竪穴住居-99	土師器	台付鉢			4.7	(2.4)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1577	竪穴住居-99	土師器	台付鉢			5.5	(2.6)	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1578	竪穴住居-99	土師器	台付鉢			5.3	(2.8)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1579	竪穴住居-99	土師器	台付鉢			5.1	(3.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1580	竪穴住居-100 -101	土師器	甕	11.9	17.8		(10.9)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1581	竪穴住居-100 -101	土師器	甕	12.1			(9.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1582	竪穴住居-100 -101	土師器	甕	14.4			(4.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1583	竪穴住居-100 -101	土師器	甕	12.8			(5.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1584	竪穴住居-100 -101	土師器	高杯	19.9			(8.1)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1585	竪穴住居-100 -101	土師器	高杯	12.2			(10.9)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3
1586	竪穴住居-100 -101	土師器	高杯	12.1			(9.6)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔3
1587	竪穴住居-100 -101	土師器	高杯	12.8			(5.9)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A・B
1588	竪穴住居-100 -101	土師器	高杯	12.0			(5.7)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1589	竪穴住居-100 -101	土師器	器台	12.0		13.0	10.4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	透かし孔3、ほぼ完形
1590	竪穴住居-100 -101	土師器	鉢	16.5			6.4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	黒斑C
1591	竪穴住居-100 -101	土師器	鉢	12.5		3.6	5.1	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑C
1592	竪穴住居-100 -101	土師器	鉢	8.5		1.5	5.4	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
1593	竪穴住居-100 -101	土師器	鉢	7.8		1.5	5.4	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	黒斑B
1594	竪穴住居-100 -101	土師器	台付鉢			5.0	(2.2)	褐灰色 (7.5YR5/1)	細砂	良好	製塩土器
1595	竪穴住居-100 -101	土師器	台付鉢			4.2	(2.3)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	製塩土器
1596	竪穴住居-100 -101	土師器	台付鉢			5.2	(2.5)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1597	竪穴住居-102	土師器	甕	14.3			(22.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1598	竪穴住居-102	土師器	甕	14.9	19.3		(23.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1、ススC
1599	竪穴住居-102	土師器	鉢	18.3		5.1	12.7	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	底部に円孔、黒斑B・C、畿内(播磨)系土器
1600	竪穴住居-102	土師器	高杯				(9.6)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	透かし孔4
1601	竪穴住居-102	土師器	高杯			16.3	(6.1)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	透かし孔4
1602	竪穴住居-102	土師器	高杯			14.2	(5.2)	鈍い橙色 (5YR6/4)	精良	良好	透かし孔4
1603	竪穴住居-102	土師器	器台			10.0	(9.7)	橙色 (2.5YR6/8)	精良	良好	透かし孔4、非在地系土器
1604	竪穴住居-103	土師器	甕	17.6	20.1	2.8	22.9	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	ススB、タタキ成形、非在地系土器
1605	竪穴住居-103	土師器	高杯	20.5			(8.0)	橙色 (7.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A
1606	竪穴住居-103	土師器	鉢	11.2			6.2	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	良好	内面に赤色顔料、タタキ成形、非在地系土器
1607	竪穴住居-104	土師器	高杯	21.3		14.4	13.3	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	透かし孔4、黒斑A・C、ほぼ完形
1608	竪穴住居-105	土師器	鉢	10.0			(6.4)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1609	竪穴住居-105	土師器	台付鉢			4.5	(3.8)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1610	竪穴住居-106	土師器	壺	21.7			(10.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	非在地系土器
1611	竪穴住居-106	土師器	壺				(9.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	西部瀬戸内系土器
1612	竪穴住居-106	土師器	壺	20.3			(9.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	礫	良好	
1613	竪穴住居-106	土師器	壺	12.5			(6.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	礫	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1614	竪穴住居-106	土師器	台付甕	10.7	13.2		15.0	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	粘土紐輪積み、東海系土器
1615	竪穴住居-106	土師器	壺	10.6	14.5		15.2	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	粘土紐輪積み、ススB、黒斑A・B、 完形
1616	竪穴住居-106	土師器	鉢	9.3			7.3	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	
1617	竪穴住居-106	土師器	甕	11.9			(5.6)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	礫	良好	粘土紐輪積み、タタキ成形
1618	竪穴住居-106	土師器	甕	16.1	16.9		16.8	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	タタキ成形
1619	竪穴住居-106	土師器	甕	16.3			(11.7)	灰黄褐色 (10YR5/2)	細砂	良好	粘土紐輪積み
1620	竪穴住居-106	土師器	甕	14.8			(10.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1621	竪穴住居-106	土師器	甕			2.1	(12.4)	明褐灰色 (7.5YR7/1)	粗砂	良好	タタキ成形、非在地系土器
1622	竪穴住居-106	土師器	甕	13.8			(6.4)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	
1623	竪穴住居-106	土師器	甕	19.0			(5.9)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	
1624	竪穴住居-106	土師器	甕	14.0	18.0	3.7	18.9	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑B
1625	竪穴住居-106	土師器	甕	14.7			(8.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑 B
1626	竪穴住居-106	土師器	甕	13.3			(11.2)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1627	竪穴住居-106	土師器	甕	16.8			(7.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1628	竪穴住居-106	土師器	高杯	10.3			(7.2)	橙色 (2.5YR6/8)	礫	良好	
1629	竪穴住居-106	土師器	鉢	15.7		5.3	8.2	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
1630	竪穴住居-106	土師器	鉢	10.4		3.6	6.0	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	
1631	竪穴住居-106	土師器	鉢	34.7			(10.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料
1632	竪穴住居-107	土師器	甕	14.2			(2.7)	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1633	竪穴住居-107	土師器	甕	12.9			(4.4)	灰白色 (10YR8/1)	礫	良好	
1634	竪穴住居-107	土師器	甕	11.5	13.7		12.0	明褐灰色 (5YR7/2)	粗砂	良好	ススB、黒斑C
1635	竪穴住居-107	土師器	鉢	8.3		2.9	4.3	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
1636	竪穴住居-107	土師器	鉢	15.8		2.8	6.4	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	
1637	竪穴住居-108	土師器	壺	14.2			(4.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	外面に赤色顔料
1638	竪穴住居-108	土師器	高杯			13.4	(9.0)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	透かし孔4
1639	竪穴住居-108	土師器	器台			12.5	(8.3)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔3
1640	竪穴住居-109	土師器	壺	18.1	27.8	9.0	32.1	橙色 (2.5YR6/8)	礫	良好	黒斑A・B
1641	竪穴住居-109	土師器	甕	14.8	19.9	4.7	21.8	鈍い橙色 (5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2
1642	竪穴住居-109	土師器	甕	14.9			(6.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1643	竪穴住居-109	土師器	甕	12.8	14.1		9.8	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	
1644	竪穴住居-109	土師器	高杯	20.5			(8.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑A
1645	竪穴住居-109	土師器	高杯			12.8	(6.4)	橙色 (5YR8/6)	細砂	良好	透かし孔3
1646	竪穴住居-109	土師器	台付鉢	14.7			(7.1)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	
1647	竪穴住居-109	土師器	鉢	14.2		3.3	(8.1)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑A
1648	竪穴住居-109	土師器	鉢	24.5			(11.1)	浅黄色 (2.5Y7/3)	細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1649	竪穴住居-111	土師器	壺	19.9			(14.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
1650	竪穴住居-111	土師器	壺	20.4			(15.3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	礫	良好	
1651	竪穴住居-111	土師器	壺	20.0			(19.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
1652	竪穴住居-111	土師器	壺	17.5	30.4		(24.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	礫	良好	
1653	竪穴住居-111	土師器	壺	16.2			(8.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
1654	竪穴住居-111	土師器	甕	13.1			(8.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
1655	竪穴住居-111	土師器	甕	13.5			(8.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1656	竪穴住居-111	土師器	甕	9.9	12.9		(10.8)	赤色 (10R5/6)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1657	竪穴住居-111	土師器	甕	11.9	15.9		16.0	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑B、タタキ成形
1658	竪穴住居-111	土師器	甕	14.1	18.6		(17.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	ススB、タタキ成形
1659	竪穴住居-111	土師器	甕	13.7	18.1		20.4	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	黒斑C、四国(讃岐)系土器
1660	竪穴住居-111	土師器	高杯	13.6			(5.4)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
1661	竪穴住居-111	土師器	高杯				(7.9)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
1662	竪穴住居-111	土師器	高杯	18.1			(7.2)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	透かし孔3
1663	竪穴住居-111	土師器	高杯			17.9	(6.5)	橙色 (2.5YR6/8)	精良	良好	透かし孔3
1664	竪穴住居-111	土師器	鉢	34.0			(13.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
1665	竪穴住居-111	土師器	鉢	15.5			6.1	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	
1666	竪穴住居-111	土師器	鉢	13.7			(4.5)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	
1667	竪穴住居-111	土師器	鉢	15.5			4.7	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
1668	竪穴住居-111	土師器	鉢	13.4			4.3	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
1669	竪穴住居-111	土師器	鉢	14.3			4.9	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1670	竪穴住居-111	土師器	鉢	14.9			(4.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
1671	竪穴住居-111	土師器	鉢	13.6			4.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑C
1672	竪穴住居-111	土師器	器台			11.8	(4.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
1673	竪穴住居-111	土師器	器台			7.7	(3.8)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
1674	竪穴住居-112	土師器	壺	18.9			(8.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1675	竪穴住居-112	土師器	甕	14.2			(4.3)	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	
1676	竪穴住居-112	土師器	甕	14.0	19.7		(12.3)	灰褐色 (5YR5/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1677	竪穴住居-112	土師器	鉢	13.9			(6.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1678	竪穴住居-113	土師器	甕	12.8			(4.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1679	竪穴住居-113	土師器	甕		23.5		(23.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	ススB、非在地系土器
1680	竪穴住居-113	土師器	鉢	10.0		3.2	6.8	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	ほぼ完形
1681	竪穴住居-113	土師器	高杯			12.7	(8.6)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
1682	竪穴住居-114	須恵器	蓋	11.5			5.5	明青灰色 (5B7/1)	粗砂	良好	ボタン状のつまみ
1683	竪穴住居-114	須恵器	蓋	11.5			2.8	明青灰色 (10BC7/1)	細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1684	竪穴住居-114	須恵器	蓋	12.0	12.0		(3.6)	灰色 (5Y6/1)	細砂 礫	良好	
1685	竪穴住居-114	須恵器	蓋	12.6			4.8	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
1686	竪穴住居-114	須恵器	蓋	12.2	12.8		(4.2)	灰色 (N6/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
1687	竪穴住居-114	須恵器	蓋	12.2	12.4		(4.1)	灰色 (N5/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
1688	竪穴住居-114	須恵器	杯	10.0			5.0	灰白色 (N7/)	細砂	良好	ロクロ順回り
1689	竪穴住居-114	須恵器	杯	10.4	12.3		5.0	灰色 (5Y4/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
1690	竪穴住居-114	須恵器	杯	10.6	12.4		(4.2)	灰色 (N6/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
1691	竪穴住居-114	須恵器	杯	10.3	12.3		(4.2)	灰色 (N6/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
1692	竪穴住居-114	須恵器	高杯			10.2	(4.0)	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	四方透かし
1693	竪穴住居-114	須恵器	高杯			11.0	(6.2)	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	四方透かし
1694	竪穴住居-114	須恵器	高杯			10.6	(3.5)	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	四方透かし
1695	竪穴住居-114	須恵器	高杯			8.8	(4.2)	灰色 (N6/)	細砂	良好	四方透かし
1696	竪穴住居-114	須恵器	高杯			8.2	(5.4)	灰色 (5Y5/1)	細砂	良好	三方透かし
1697	竪穴住居-114	須恵器	高杯			8.4	(4.9)	灰白色 (N7/)	細砂	良好	三方透かし
1698	竪穴住居-114	須恵器	高杯			8.2	(4.4)	灰色 (N6/)	細砂	良好	三方透かし
1699	竪穴住居-114	土師器	甕	16.6			(4.4)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	
1700	竪穴住居-115	須恵器	甕			4.9	(7.3)	灰色 (N6/)	粗砂	良好	
1701	竪穴住居-115	土師器	高杯			10.1	(5.5)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	精良	良好	透かし孔3
1702	竪穴住居-115	土師器	甕				(19.5)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	
1703	竪穴住居-116	土師器	甕	17.0	25.3		(14.5)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	ススB、黒斑B
1704	竪穴住居-116	土師器	高杯	14.0		4.7	11.9	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔3、黒斑A
1705	竪穴住居-116	須恵器	蓋	11.6			(4.6)	灰色 (N6/)	細砂	良好	ボタン状つまみ、ロクロ逆回り
1706	竪穴住居-116	須恵器	蓋	12.5			5.5	灰白色 (N7/)	細砂	良好	ボタン状つまみ、ロクロ逆回り
1707	竪穴住居-116	須恵器	蓋	12.1			5.5	灰色 (5GY7/1)	細砂	良好	ボタン状つまみ、ロクロ順回り
1708	竪穴住居-116	須恵器	蓋	12.8			6.1	灰白色 (N7/)	細砂	良好	ボタン状つまみ、ロクロ順回り
1709	竪穴住居-116	須恵器	高杯	10.4		9.3	10.0	灰色 (N5/)	細砂	良好	四方透かし
1710	竪穴住居-117	須恵器	蓋	14.7			4.4	灰色 (N6/0)	粗砂	良好	ロクロ順回り
1711	竪穴住居-117	須恵器	杯	13.0			4.3	灰色 (N7/0)	粗砂	良好	ロクロ順回り、重ね焼き痕
1712	竪穴住居-117	土師器	甕	18.8	23.3		25.6	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑B
1713	竪穴住居-117	土師器	甕	21.9	26.7		29.6	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	
1714	竪穴住居-117	土師器	竈	33.7		32.3	37.3	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	礫	良好	黒斑A・B・C
1715	竪穴住居-117	土師器	甕	21.0	25.8		25.0	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	細砂	良好	
1716	竪穴住居-118	土師器	甕	17.7	27.9		29.1	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	ススB
1717	竪穴住居-118	土師器	甕	14.3	16.8		16.2	鈍い褐色 (5YR7/4)	粗砂	良好	ススA
1718	竪穴住居-118	土師器	甕	13.3	16.0		13.7	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	粗砂	良好	黒斑B C

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼 成	特 徴
				口 径	最 大 径	底 径	器 高				
1719	竪穴住居-118	土師器	甕	15.8	26.1		26.9	鈍い橙色 (5YR6/4)	粗砂	良好	
1720	竪穴住居-118	土師器	甕	14.5	20.6		20.8	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B、ほぼ完形
1721	竪穴住居-118	土師器	高杯	14.5			(5.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1722	竪穴住居-118	土師器	高杯	14.3			(5.4)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1723	竪穴住居-118	土師器	高杯			9.4	(6.0)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	透かし孔3
1724	竪穴住居-118	土師器	高杯			9.2	(6.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	透かし孔3
1725	竪穴住居-118	土師器	鉢	13.1			5.4	明赤褐色 (2.5YR5/8)	細砂	良好	完形
1726	竪穴住居-118	土師器	鉢	13.1			5.6	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
1727	竪穴住居-118	土師器	鉢	13.6			5.9	鈍い橙色 (5YR7/4)	礫	良好	
1728	竪穴住居-118	土師器	甌	22.5		6.9	21.3	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	透かし孔1
1729	竪穴住居-118	土師器	甌	24.4			(20.0)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	ススA、黒斑B
1730	竪穴住居-118	須恵器	蓋	13.0			5.6	青灰色 (10BG6/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り、輪状のつまみ
1731	竪穴住居-118	須恵器	蓋	12.7			5.6	青灰色 (10BG5/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り、輪状のつまみ
1732	竪穴住居-118	須恵器	蓋	12.5			3.3	暗青灰色 (10BG4/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り、完形
1733	竪穴住居-118	須恵器	蓋	12.2			3.5	暗青灰色 (5B4/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
1734	竪穴住居-118	須恵器	蓋	12.0			4.0	暗青灰色 (10BG4/1)	礫	良好	ロクロ順回り、完形
1735	竪穴住居-118	須恵器	杯	9.7			4.0	暗青灰色 (5BG4/1)	礫	良好	ロクロ逆回り、ほぼ完形
1736	竪穴住居-118	須恵器	杯	11.8			5.0	灰白色 (2.5Y8/1)	粗砂	不良	ロクロ逆回り
1737	竪穴住居-118	須恵器	杯	10.5			5.3	灰色 (N5/0)	礫	良好	ロクロ逆回り、完形
1738	竪穴住居-118	須恵器	高杯	17.0		9.8	13.6	灰白色 (N7/0)	粗砂	良好	四方透かし、ほぼ完形
1739	竪穴住居-119	土師器	壺	16.6	32.5		(24.2)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	黒斑B
1740	竪穴住居-119	土師器	甕	13.1	18.4		(18.6)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	
1741	竪穴住居-119	土師器	高杯	13.5			(5.4)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	
1742	竪穴住居-119	土師器	高杯	13.5		9.3	11.7	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	
1743	竪穴住居-119	土師器	高杯	14.4		8.9	12.1	鈍い赤褐色 (5YR5/3)	細砂	良好	透かし孔3
1744	竪穴住居-119	土師器	甌			9.0	(17.1)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	黒斑C
1745	竪穴住居-119	須恵器	高杯	13.9			(4.1)	青灰色 (5B6/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
1746	竪穴住居-119	須恵器	高杯	13.7		9.5	9.7	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂	良好	
1747	竪穴住居-121	須恵器	杯	13.1			4.4	灰白色 (10Y7/1)	細砂	良好	
1748	竪穴住居-121	須恵器	杯	12.9			4.0	灰白色 (N7/0)	細砂	良好	
1749	竪穴住居-122	土師器	甕	17.6			(12.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	粘土紐輪積み、黒斑A
1750	竪穴住居-122	土師器	甌				(16.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B
1751	竪穴住居-122	土師器	高杯	14.1			(5.1)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	
1752	竪穴住居-124	土師器	甕	13.1	17.3		19.2	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	ススB、胴部赤化
1753	竪穴住居-124	土師器	鉢	10.8			5.7	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑A～C、ほぼ完形

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1754	竪穴住居-124	須恵器	蓋	12.0			4.5	灰白色 (N7/)	粗砂 礫	良好	ロクロ順回り
1755	竪穴住居-124	須恵器	高杯	10.6			(4.6)	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	ロクロ順回り
1756	竪穴住居-124	須恵器	高杯	10.3			(4.5)	灰色 (N5/)	細砂	良好	ロクロ順回り、三方透かし
1757	竪穴住居-124	須恵器	高杯			10.0	(5.9)	灰色 (N5/)	細砂	良好	三方透かし
1758	竪穴住居-124	須恵器	高杯			8.9	(4.1)	灰色 (N5/)	細砂	良好	三方透かし
1759	竪穴住居-124	須恵器	壺	15.4			(2.2)	灰色 (7.5YR5/1)	細砂	良好	
1760	竪穴住居-124	須恵器	器台				(1.7)	灰白色 (N7/)	細砂	良好	脚部に波状文
1761	土壙-111	土師器	壺	15.0	31.0		(25.8)	橙色 (7.5YR6/6)	礫	良好	肩部に波状文、黒斑A、非在地系土器
1762	土壙-115	土師器	甕	16.4			(7.0)	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1763	土壙-116	土師器	甕	13.9	17.6		(15.7)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
1764	土壙-116	土師器	甕	11.6			(4.7)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	
1765	土壙-116	土師器	甕	12.1	14.1		(8.8)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	ススA
1766	土壙-116	土師器	高杯	18.1		14.7	13.7	黄橙色 (7.5YR7/8)	細砂	良好	透かし孔4
1767	土壙-116	土師器	高杯	18.4		13.8	13.6	橙色 (2.5YR6/8)	礫	良好	透かし孔4
1768	土壙-116	土師器	高杯	16.2			(8.0)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	
1769	土壙-116	土師器	高杯			13.5	(7.8)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	透かし孔4
1770	土壙-116	土師器	高杯			13.6	(9.9)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	透かし孔4
1771	土壙-116	土師器	高杯	19.5			(6.6)	橙色 (5YR6/8)	礫	良好	
1772	土壙-116	土師器	鉢	17.6		5.0	7.1	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	礫	良好	
1773	土壙-117	土師器	甕	15.1	21.4		(11.3)	灰黄褐色 (10YR6/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
1774	土壙-117	土師器	甕	14.8	15.9		(15.5)	灰褐色 (5YR6/2)	礫	良好	ススA
1775	土壙-117	土師器	高杯	17.5			(7.2)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A
1776	土壙-117	土師器	高杯	18.8			(5.0)	褐灰色 (5YR6/1)	細砂	良好	
1777	土壙-120	土師器	壺	17.9			(4.4)	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	非在地系土器
1778	土壙-123	土師器	甕	12.8	21.4		(18.0)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、スス
1779	土壙-126	土師器	甕	16.7			(7.6)	灰褐色 (7.5YR6/2)	礫	良好	
1780	土壙-126	土師器	高杯				(9.1)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
1781	土壙-129	土師器	甕	16.1	24.0		(22.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	黒斑B
1782	土壙-129	土師器	甕	15.2	16.7		(13.3)	黄灰色 (2.5Y5/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A B
1783	土壙-129	土師器	甕	14.2			(3.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、黒斑A
1784	土壙-129	土師器	甕	9.4			(5.1)	灰黄色 (2.5Y6/2)	細砂	良好	黒斑A B
1785	土壙-129	土師器	高杯	16.2			(6.4)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	
1786	土壙-127	土師器	高杯	13.8			(3.9)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	内外面に赤色顔料
1787	土壙-129	土師器	高杯	17.2		12.6	10.7	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	透かし孔4
1788	土壙-129	土師器	高杯	14.6			(11.2)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼 成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1789	土壇-129	土師器	高杯	15.8			(12.0)	赤橙色 (10R6/8)	精良	良好	透かし孔4
1790	土壇-129	土師器	高杯			11.9	(6.4)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4
1791	土壇-130	土師器	甕	15.0			(3.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1792	土壇-131	土師器	甕	15.0			(4.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1793	土壇-133	土師器	甕	12.5	14.9	4.3	14.8	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C 3、ススB'
1794	土壇-133	土師器	甕	14.0	17.8		(16.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑 A・B
1795	土壇-133	土師器	甕	14.0	18.3		11.8	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1796	土壇-133	土師器	甕	16.8			(8.3)	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	タタキ成形
1797	土壇-133	土師器	甕	12.0			(5.9)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	タタキ成形
1798	土壇-133	土師器	高杯	18.8			(5.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
1799	土壇-133	土師器	高杯			14.1	(8.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4
1800	土壇-133	土師器	高杯			16.0	(8.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	透かし孔5、黒斑C、畿内系土器
1801	土壇-135	土師器	高杯	19.4			(11.1)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂 礫	良好	透かし孔4、黒斑A
1802	土壇-137	土師器	甕	13.8	17.2	3.2	19.1	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1803	土壇-137	土師器	甕	13.4	21.0		(20.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1804	土壇-139	土師器	壺	19.0			(7.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
1805	土壇-139	土師器	壺	17.7			(5.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
1806	土壇-139	土師器	甕	12.8			(3.7)	灰褐色 (7.5YR6/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、スス
1807	土壇-139	土師器	甕	13.2	17.8		(10.8)	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2
1808	土壇-139	土師器	甕	14.1	20.3		(10.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1809	土壇-139	土師器	甕	12.8	15.7		(17.8)	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB、黒斑C、タタキ成形
1810	土壇-139	土師器	甕	12.5	17.8		(16.5)	灰黄褐色 (10YR5/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1811	土壇-139	土師器	甕	14.0	20.3		(22.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 3、ススB、黒斑C
1812	土壇-139	土師器	甕	14.0	10.5		(11.5)	明褐色 (5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1813	土壇-139	土師器	甕	14.7	21.7		(14.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 4
1814	土壇-139	土師器	甕	14.5	22.0		(17.1)	鈍い黄橙色 (10YR6/8)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1815	土壇-139	土師器	甕	12.5	17.0		(11.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形、非在地系土器
1816	土壇-139	土師器	甕	14.9	19.9		19.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	ススC、畿内系土器
1817	土壇-139	土師器	高杯	10.7		14.9	15.3	鈍い橙色 (5YR6/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
1818	土壇-139	土師器	高杯	12.7			(7.8)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1819	土壇-139	土師器	高杯			13.3	(9.2)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
1820	土壇-139	土師器	器台	11.7			(4.2)	明褐色 (5YR7/2)	細砂	良好	黒斑A
1821	土壇-139	土師器	鉢	10.0		2.2	6.4	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1822	土壇-139	土師器	鉢	10.8			6.3	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	
1823	土壇-139	土師器	台付鉢			3.7	(5.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1824	土城-148	土師器	甕	13.4			(13.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1825	土城-148	土師器	高杯			10.6	(2.0)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
1826	土城-144	土師器	壺	18.1			(12.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂 礫	良好	
1827	土城-149	土師器	甕	15.0	20.8		(12.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1828	土城-149	土師器	鉢	15.0			(3.4)	橙色 (7.5YR6/6)	細砂	良好	
1829	土城-151	土師器	甕	12.9	20.1		(20.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑C
1830	土城-151	土師器	甕	12.1	17.6		(19.6)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑A B
1831	土城-151	土師器	高杯	19.0			(7.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1832	土城-151	土師器	高杯			13.4	(8.1)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔3
1833	土城-151	土師器	台付鉢			4.7	(2.6)	浅赤橙色 (2.5Y7/4)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1834	土城-151	土師器	台付鉢			4.1	(2.8)	明赤褐色 (5YR5/6)	粗砂 礫	良好	タタキ成形、製塩土器
1835	土城-151	土師器	台付鉢			4.5	(1.9)	明赤褐色 (2.5Y5/6)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
1836	土城-153	土師器	高杯	20.1		(13.8)	(14.5)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4、黒斑A
1837	土城-154	土師器	壺	24.6			(7.4)	鈍い赤褐色 (5YR5/6)	細砂	良好	
1838	土城-154	土師器	甕	14.1			(3.1)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A
1839	土城-154	土師器	甕	17.4			(9.7)	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	タタキ成形
1840	土城-154	土師器	甕	17.3	20.2		(11.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑A B
1841	土城-154	土師器	高杯			13.6	(4.2)	黄橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4
1842	土城-154	土師器	台付鉢			4.9	(2.6)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	赤化、タタキ成形、製塩土器
1843	土城-155	土師器	高杯	18.9			(4.9)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
1844	土城-155	土師器	高杯	19.2			(4.8)	鈍い黄橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
1845	土城-155	土師器	高杯			11.7	(6.5)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4
1846	土城-155	土師器	高杯			13.2	(7.5)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	良好	透かし孔3、黒斑C
1847	土城-155	土師器	高杯			13.3	(13.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
1848	土城-156	土師器	高杯			13.8	(5.6)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4、黒斑A
1849	土城-158	土師器	高杯	11.7			(6.1)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4
1850	土城-158	土師器	高杯				(6.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
1851	土城-158	土師器	高杯			11.7	(6.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
1852	土城-159	土師器	甕			6.0	(12.4)	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	細砂	良好	底部赤化、タタキ成形
1853	土城-155	土師器	甕	16.2			(3.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1854	土城-160	土師器	甕	14.1			(3.4)	橙色 (7.5YR6/6)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A
1855	土城-160	土師器	甕	17.8			(3.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形
1856	土城-160	土師器	高杯			13.8	(9.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4
1857	土城-161	土師器	甕	15.2			(5.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に擬凹線
1858	土城-161	土師器	甕	14.3			(4.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1859	土壙墓-4	土師器	壺	16.0			(8.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
1860	土壙墓-4	土師器	甕	17.0			(4.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に凹線
1861	土壙墓-4	土師器	甕	14.6			(3.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1862	土壙墓-4	土師器	鉢	15.4		4.2	6.2	灰白色 (2.5YR8/2)	細砂	良好	
1863	土壙墓-4	土師器	鉢	8.5		5.4	3.6	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	手捏ね土器
1864	土器棺墓-7	土師器	壺		24.8	4.5	(24.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部打ち欠き、黒斑C
1865	土器棺墓-8	土師器	壺		29.7	4.5	(24.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部打ち欠き、黒斑C
1866	溝-4	土師器	壺	14.8	24.5		32.1	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	黒斑B・C
1867	溝-4	土師器	壺	17.6			(8.2)	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	
1868	溝-4	土師器	壺			27.0	(24.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑B C、畿内系土器
1869	溝-4	土師器	壺	18.8			(13.7)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	ススB
1870	溝-4	土師器	壺	20.7			(6.4)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	四国系土器
1871	溝-4	土師器	壺		23.8	5.8	(27.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑C
1872	溝-4	土師器	壺		29.5	5.2	(31.0)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	不良	胴部穿孔、黒斑B C・B C、四国 (讃岐)系土器
1873	溝-4	土師器	壺		31.0	6.0	(28.4)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑C、非在地系土器
1874	溝-4	土師器	壺		30.4	6.3	(27.5)	黄橙色 (7.5YR8/8)	礫	良好	黒斑B C、タタキ成形、非在地系土器
1875	溝-4	土師器	壺	15.5	25.9	5.0	27.5	鈍い橙色 (5YR6/4)	礫	良好	ススC、四国系土器
1876	溝-4	土師器	壺	13.9	26.1		(19.2)	灰白色 (7.5YR8/2)	粗砂 細砂	良好	ススB
1877	溝-4	土師器	壺	14.4	28.2		(23.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	ススC
1878	溝-4	土師器	壺	22.0			(6.1)	橙色 (5YR7/6)	細砂 礫	良好	非在地系土器
1879	溝-4	土師器	壺	23.2			(6.1)	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	非在地系土器
1880	溝-4	土師器	壺	13.0			(13.0)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑A、非在地系土器
1881	溝-4	土師器	壺	18.6	31.2	3.5	16.7	灰白色 (2.5YR8/2)	粗砂 細砂	良好	口縁・肩部に波状文、黒斑C、タタ キ成形、畿内(播磨)系土器
1882	溝-4	土師器	壺		17.0		(13.0)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	畿内系土器
1883	溝-4	土師器	壺		21.3		(19.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	精良	良好	黒斑C、畿内系土器
1884	溝-4	土師器	壺	17.4			(16.9)	白灰色 (5YR8/2)	粗砂	良好	肩部に刺突文B 2
1885	溝-4	土師器	壺	17.4	27.8		(19.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	
1886	溝-4	土師器	壺	18.8	26.5		(20.6)	橙色 (7.5YR7/)	粗砂	良好	
1887	溝-4	土師器	壺	18.4	28.2	6.4	31.1	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C
1888	溝-4	土師器	壺	19.6	28.0		(20.3)	灰白色 (5YR8/2)	粗砂	良好	黒斑B
1889	溝-4	土師器	壺	20.6			(15.1)	灰白色 (7.5YR8/2)	粗砂 細砂	良好	肩部に刺突文A 3
1890	溝-4	土師器	壺	18.8			(13.1)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
1891	溝-4	土師器	壺	19.8		28.3	37.2	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	黒斑C
1892	溝-4	土師器	壺	17.4			(13.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	細砂	良好	
1893	溝-4	土師器	壺	15.8			(8.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂 細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1894	溝-4	土師器	壺	17.2			(14.5)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	良好	ススA、山陰系土器
1895	溝-4	土師器	壺	17.4	27.8	7.7	34.2	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A、山陽(備後)系土器
1896	溝-4	土師器	壺	20.0	26.5	6.1	33.0	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑B・B、山陽(備後)系土器
1897	溝-4	土師器	甕	13.3	17.4		21.1	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	黒斑A~C
1898	溝-4	土師器	甕	12.7			(5.8)	褐灰色 (7.5YR5/1)	細砂	良好	粘土紐輪積み
1899	溝-4	土師器	甕	12.2	12.3		12.2	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂 礫	良好	
1900	溝-4	土師器	甕	12.4	13.9		(8.2)	鈍い橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	ススB'
1901	溝-4	土師器	甕	12.5	15.9		(9.8)	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	
1902	溝-4	土師器	甕	15.5	17.2		16.8	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	礫	良好	ススB
1903	溝-4	土師器	甕	14.5	15.5		14.1	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	細砂	良好	ススC、黒斑C、赤化
1904	溝-4	土師器	甕	15.2	19.6	3.7	21.7	灰白色 (10YR8/1)	粗砂	良好	ススC、黒斑C'、タタキ成形
1905	溝-4	土師器	甕	13.5	16.0	4.0	16.5	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	良好	ススB、黒斑C、タタキ成形
1906	溝-4	土師器	甕	14.7	17.5	3.3	18.5	褐色 (7.5YR4/4)	粗砂	良好	ススB、黒斑C、タタキ成形
1907	溝-4	土師器	甕	13.9			(7.3)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	タタキ成形
1908	溝-4	土師器	甕	13.6	18.3		17.0	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	肩部に波状文、非在地系土器
1909	溝-4	土師器	甕	17.3			(8.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	畿内(河内)系土器
1910	溝-4	土師器	甕	14.8			(6.0)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	ススA、畿内系土器
1911	溝-4	土師器	甕	17.8			(7.0)	橙色 (5YR6/6)	細砂 粗砂	良好	畿内系土器
1912	溝-4	土師器	甕	16.0	22.2		(14.9)	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	黒斑B
1913	溝-4	土師器	甕	11.4	16.0		21.1	明褐灰色 (5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススB、黒斑BC、ほぼ完形
1914	溝-4	土師器	甕	11.9	16.5	5.0	11.9	褐灰色 (7.5YR6/1)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C 3
1915	溝-4	土師器	甕	12.0	17.1		17.5	鈍い黄褐色 (10YR4/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススC'
1916	溝-4	土師器	甕	11.9	16.0		15.2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粗砂 細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB
1917	溝-4	土師器	甕	13.6	17.8		(11.6)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、ススB
1918	溝-4	土師器	甕	15.2	21.5		(19.7)	鈍い黄褐色 (10YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑B
1919	溝-4	土師器	甕	14.0	20.6		(21.8)	鈍い黄褐色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
1920	溝-4	土師器	甕	15.9	19.9		(13.6)	褐色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	肩部に刺突文A1、ススB
1921	溝-4	土師器	甕	14.2	19.7	5.3	22.8	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB
1922	溝-4	土師器	甕	16.2	22.4		(23.4)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に擬凹線
1923	溝-4	土師器	甕	14.1	21.6		(22.6)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススB
1924	溝-4	土師器	甕	12.1	17.4		17.3	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 3
1925	溝-4	土師器	甕	12.7	17.9		(14.4)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 4、ススB
1926	溝-4	土師器	甕	14.0	20.2		(18.6)	灰白色 (10YR7/1)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑C
1927	溝-4	土師器	甕	13.5	20.4		23.2	褐灰色 (10YR5/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススC
1928	溝-4	土師器	甕	13.8	18.7		(11.5)	明褐灰色 (5YR7/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 3、ススC

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼 成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1929	溝-4	土師器	甕	13.9	20.0		21.9	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、タタキ成形
1930	溝-4	土師器	甕	13.8	20.6		22.5	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1931	溝-4	土師器	甕	14.2	21.2		(14.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1932	溝-4	土師器	甕	14.3	20.1	2.6	23.7	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1933	溝-4	土師器	甕	14.3	22.1		24.9	灰白色 (10YR8/1)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A3、ススC
1934	溝-4	土師器	甕	13.2	19.5		22.0	灰白色 (7.5YR8/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、胴部穿孔、ススA、タタキ成形
1935	溝-4	土師器	甕	12.1	15.6		(14.8)	灰白色 (5YR8/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1936	溝-4	土師器	甕	13.4	19.4		(16.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1937	溝-4	土師器	甕	13.2	18.9		21.1	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、ススA
1938	溝-4	土師器	甕	13.5	19.0	2.5	20.3	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、内面にコゲ、ススB'
1939	溝-4	土師器	甕	13.8	18.7		(9.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1、ススB
1940	溝-4	土師器	甕	14.8	21.5		(17.7)	鈍い赤褐色 (2.5YR4/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
1941	溝-4	土師器	甕	14.8	20.5	3.4	22.5	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1、ススB'、黒斑C
1942	溝-4	土師器	甕	13.9	14.9		(19.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A3、ススB、タタキ成形
1943	溝-4	土師器	甕	13.5	20.9		23.5	灰白色 (7.5YR8/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑C
1944	溝-4	土師器	甕	13.7	21.9		25.0	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1945	溝-4	土師器	甕	15.6	22.0	4.0	24.8	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑C
1946	溝-4	土師器	甕	11.6	15.5		(10.2)	鈍い橙色 (10YR2/7)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、ススB
1947	溝-4	土師器	甕	13.0	17.9		(15.9)	暗赤灰色 (2.5Y3/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B2、ススA
1948	溝-4	土師器	甕	12.4	18.2		(10.0)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A3、赤化
1949	溝-4	土師器	甕	14.5	18.9		(15.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B3、ススB
1950	溝-4	土師器	甕	12.9	17.6		(11.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1951	溝-4	土師器	甕	15.2	20.2		(10.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
1952	溝-4	土師器	甕	13.3	20.4		22.0	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A3、ススC
1953	溝-4	土師器	甕	14.0	20.4		(20.0)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A2、ススC
1954	溝-4	土師器	甕	15.9	17.8		20.2	黒褐色 (10YR3/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B2、ススA
1955	溝-4	土師器	甕	13.7	19.7		(18.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
1956	溝-4	土師器	甕	15.1	22.5		(20.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
1957	溝-4	土師器	甕	14.8	21.8		24.2	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑BC
1958	溝-4	土師器	甕	12.2			(9.4)	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	
1959	溝-4	土師器	甕	11.6		16.2	16.5	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1960	溝-4	土師器	甕	13.9	18.2	3.9	18.6	浅黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C3
1961	溝-4	土師器	甕	13.5	18.4	2.4	18.6	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C4
1962	溝-4	土師器	甕	13.5	18.4	4.3	20.0	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
1963	溝-4	土師器	甕	13.6	19.4		20.6	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	肩部に刺突文A2、ススB

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1964	溝-4	土師器	甕	12.7		21.2	(21.5)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
1965	溝-4	土師器	甕	14.2	19.4		(14.5)	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 3、ススB
1966	溝-4	土師器	甕	15.6	20.8	5.7	(21.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススC
1967	溝-4	土師器	甕	14.3	21.9		23.9	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 3、胴部穿孔、ススC、黒斑C
1968	溝-4	土師器	甕	14.4	16.6		18.2	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	肩部に波状文、山陰系土器、ススB
1969	溝-4	土師器	甕	12.5			(8.0)	灰白色 (5YR8/2)	粗砂	良好	黒斑B、山陰系土器
1970	溝-4	土師器	甕	15.3	16.5		(11.0)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	ススA、山陰系土器
1971	溝-4	土師器	甕	15.8			(7.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	肩部に波状文、ススA、山陰系土器
1972	溝-4	土師器	甕	15.0			(11.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂 礫	良好	肩部に波状文、ススB'、山陰系土 器
1973	溝-4	土師器	甕	15.5	20.4		(21.5)	浅黄橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	肩部に波状文、ススB'、山陰系土 器
1974	溝-4	土師器	甕	17.5	23.2		(17.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	肩部に波状文、ススB、山陰系土器
1975	溝-4	土師器	甕	15.8			(7.2)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	山陰系土器
1976	溝-4	土師器	甕	16.5	21.2		(13.3)	淡黄色 (2.5Y8/3)	粗砂 細砂	良好	山陰系土器
1977	溝-4	土師器	甕	19.3			(14.2)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A、山陰系土器
1978	溝-4	土師器	甕	23.6			(14.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	肩部に刺突文A 1
1979	溝-4	土師器	甕	26.6			(14.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	ススB'
1980	溝-4	土師器	甕	24.0	30.0		(36.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススC、黒斑C
1981	溝-4	土師器	高杯	11.8			(4.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	
1982	溝-4	土師器	高杯	11.8			(5.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	
1983	溝-4	土師器	高杯	13.7			(6.0)	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	
1984	溝-4	土師器	高杯	12.2			(6.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	
1985	溝-4	土師器	高杯	12.6			(7.3)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
1986	溝-4	土師器	高杯	12.5			(6.8)	橙色 (5YR7/6)	粗砂 礫	良好	
1987	溝-4	土師器	高杯	11.2			(8.4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
1988	溝-4	土師器	高杯	12.2			(8.0)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	礫	良好	
1989	溝-4	土師器	高杯	14.0			(7.8)	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	
1990	溝-4	土師器	高杯	12.8			(8.0)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
1991	溝-4	土師器	高杯	13.4			(8.4)	淡橙色 (5YR8/3)	礫	良好	透かし孔3
1992	溝-4	土師器	高杯	11.9			(9.4)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
1993	溝-4	土師器	高杯	11.8		15.5	10.0	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1994	溝-4	土師器	高杯	13.1		18.0	10.3	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1995	溝-4	土師器	高杯			17.6	(10.8)	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
1996	溝-4	土師器	高杯	13.6		16.9	11.4	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
1997	溝-4	土師器	高杯	16.8			(6.2)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	接合部に刻目
1998	溝-4	土師器	高杯	15.9		10.5	10.7	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
1999	溝-4	土師器	高杯			13.3	(12.7)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2000	溝-4	土師器	高杯	20.1			(7.3)	鈍い橙色 (5YR7/3)	精良	良好	黒斑A
2001	溝-4	土師器	高杯	19.6			(11.1)	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	
2002	溝-4	土師器	高杯	17.2			(5.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	山陰系土器
2003	溝-4	土師器	高杯	19.6		13.3	12.9	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
2004	溝-4	土師器	高杯	20.3		13.2	14.5	淡橙色 (5YR8/3)	精良	良好	透かし孔3
2005	溝-4	土師器	高杯	19.1		14.0	14.6	黄橙色 (7.5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4
2006	溝-4	土師器	高杯	19.4		13.4	15.1	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
2007	溝-4	土師器	高杯	21.0		14.4	13.0	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 礫	良好	透かし孔4
2008	溝-4	土師器	高杯				(6.4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	黒斑B
2009	溝-4	土師器	高杯	18.1		12.7	15.2	鈍い橙色 (5YR7/3)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A・C
2010	溝-4	土師器	高杯	19.8			(5.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
2011	溝-4	土師器	高杯	16.6		10.0	11.8	明褐灰色 (5YR7/2)	精良	良好	透かし孔4、非在地系土器、ほぼ完形
2012	溝-4	土師器	高杯			8.1	(7.7)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	良好	透かし孔4、黒斑C、非在地系土器
2013	溝-4	土師器	高杯			8.0	(5.7)	灰白色 (10YR8/2)	細砂 礫	良好	非在地系土器
2014	溝-4	土師器	高杯			9.0	(4.8)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
2015	溝-4	土師器	高杯			18.1	(5.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	接合部に刻目、透かし孔4
2016	溝-4	土師器	高杯			18.6	(7.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	透かし孔3
2017	溝-4	土師器	高杯			14.0	(8.2)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	透かし孔4
2018	溝-4	土師器	高杯			14	(7.1)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2019	溝-4	土師器	高杯			12.4	(7.0)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔4
2020	溝-4	土師器	高杯			10.7	(6.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	山陰系土器
2021	溝-4	土師器	台付壺	7.7			(6.6)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2022	溝-4	土師器	壺	11.1	15.5	2.9	16.5	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
2023	溝-4	土師器	壺		14.8		(11.0)	灰赤色 (2.5YR5/2)	細砂	良好	
2024	溝-4	土師器	壺		15.2		(13.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	胴部穿孔、黒斑B
2025	溝-4	土師器	壺	10	12.4		(10.8)	浅黄橙色 (5YR8/6)	粗砂	良好	山陰系土器
2026	溝-4	土師器	壺	11.6	11.3		10.6	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	外面に赤色顔料、ススC
2027	溝-4	土師器	壺	9.4	9.6		10.4	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	ススC
2028	溝-4	土師器	壺	17.6	14.2		14.1	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形
2029	溝-4	土師器	小形壺	10.0		2.3	8.8	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	
2030	溝-4	土師器	小形壺	8.5		8.0	7.4	灰白色 (2.5YR8/2)	粗砂 礫	良好	黒斑A・A C
2031	溝-4	土師器	小形壺	10.0			(7.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
2032	溝-4	土師器	小形壺	12.5	8.6		7.7	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	
2033	溝-4	土師器	鉢	11.2			6.3	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				色調	胎土	焼成	特徴
				口径	最大径	底径	器高				
2034	溝-4	土師器	鉢	11.6			6.9	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
2035	溝-4	土師器	台付鉢			4.4	(5.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑B、タタキ成形、製塩土器
2036	溝-4	土師器	台付鉢			4.6	(4.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形、製塩土器
2037	溝-4	土師器	台付鉢			5.2	(3.4)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	粗砂	良好	ススC、タタキ成形、製塩土器
2038	溝-4	土師器	台付鉢			5.2	(2.3)	淡橙色 (2.5YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C、タタキ成形、製塩土器
2039	溝-4	土師器	鉢	5.7			3.5	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	手捏ね土器
2040	溝-4	土師器	鉢	6.4	6.6		(3.6)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	
2041	溝-4	土師器	鉢	11.9		2.7	4.3	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑A C
2042	溝-4	土師器	鉢	12.2		3.1	5.5	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	
2043	溝-4	土師器	鉢	11.6	12.0	2.2	8.1	鈍い橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑A
2044	溝-4	土師器	鉢	13.0		3.9	6.7	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	黒斑A B
2045	溝-4	土師器	鉢	12.5			5.0	鈍い黄橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	ススA
2046	溝-4	土師器	鉢	13.4			5.2	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	精良	良好	
2047	溝-4	土師器	鉢	14.2		3.0	5.0	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2048	溝-4	土師器	鉢	13.2			5.6	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂 細砂	良好	
2049	溝-4	土師器	鉢	8.4			4.2	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2050	溝-4	土師器	鉢	10.6	8.6		(7.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	精良	良好	
2051	溝-4	土師器	鉢	14.5			4.0	灰白色 (7.5YR8/2)	細砂	良好	
2052	溝-4	土師器	鉢	15.7			4.7	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	
2053	溝-4	土師器	鉢	16.2			5.7	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	ススC
2054	溝-4	土師器	鉢	16.9			4.9	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2055	溝-4	土師器	鉢	14.2			(4.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2056	溝-4	土師器	鉢	28.0			7.5	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂 礫	良好	
2057	溝-4	土師器	鉢	15.4			(8.6)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 礫	良好	
2058	溝-4	土師器	鉢	15.2			(7.6)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	黒斑C
2059	溝-4	土師器	鉢	12.2	4.1		7.4	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精良	良好	黒斑C
2060	溝-4	土師器	鉢	18.5			9.8	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	黒斑B、タタキ成形
2061	溝-4	土師器	鉢	37.2			(10.4)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	片口あり
2062	溝-4	土師器	鉢	33.8	30.2		(15.0)	橙色 (2.5YR7/8)	細砂	良好	
2063	溝-4	土師器	鉢	29.8		8.1	19.5	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	ススC'
2064	溝-4	土師器	鉢	29.0		10.1	22.3	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	片口あり、黒斑B C
2065	溝-4	土師器	鉢	15.3			8.8	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂 礫		良好
2066	溝-4	土師器	鉢	16.3	14.3		8.8	淡橙色 (5YR8/3)	細砂	良好	黒斑C
2067	溝-4	土師器	鉢	23.8			13.4	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑A B
2068	溝-4	土師器	鉢	37.2			(23.0)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2069	溝-4	土師器	鉢	30.0		6.7	17.0	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑 B・C
2070	溝-4	土師器	鉢	24.2			(10.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2071	溝-4	土師器	鉢	35.8			(14.8)	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	
2072	溝-4	土師器	鉢	37.2			(13.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂 礫	良好	
2073	溝-4	土師器	鉢	13.0	18.6		15.0	黒褐色 (10YR3/1)	粗砂 細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文 B 2、スス A
2074	溝-4	土師器	鉢	11.1	14.5		12.4	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2075	溝-4	土師器	鉢	10.4	12.4		10.5	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	スス B'
2076	溝-4	土師器	器台	10.4			(5.3)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2077	溝-4	土師器	器台	9.6			(5.8)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 3
2078	溝-4	土師器	器台	10.0		10.5	8.2	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔 4
2079	溝-4	土師器	器台	9.6		12.8	9.1	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔 4
2080	溝-4	土師器	器台	9.5		10.8	8.4	鈍い橙色 (5YR7/3)	精良	良好	透かし孔 3
2081	溝-4	土師器	支脚			9.8	(8.0)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	細砂	良好	
2082	溝-4	土師器	支脚			9.5	(11.5)	明褐色 (5YR7/2)	細砂	良好	スス C
2083	溝-4	土師器	器台	15.4		14.2	8.7	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2084	溝-4	土師器	器台	25.4			(8.0)	橙色 (2.5Y6/6)	細砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2085	溝-4	土師器	器台			22.5	(7.7)	淡赤橙色 (2.5Y7/4)	細砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2086	溝-4	土師器	器台			24.8	(8.1)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	山陰系土器
2087	溝-4	土師器	手焙		18.9		20.9	橙色 (2.5YR7/8)	礫	良好	外面に赤色顔料、黒斑 B
2088	溝-4	土師器	手焙		15.8		(11.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	外面に羽状文
2089	溝-4	土師器	手焙	15.1	15.2		(13.0)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	タタキ成形
2090	溝-16	土師器	壺	12.0	26.8		(19.3)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	細砂	良好	黒斑 B
2091	溝-16	土師器	壺	13.8	30.6	7.6	31.6	明赤褐色 (5YR5/6)	粗砂	良好	黒斑 B・C
2092	溝-16	土師器	壺	12.0			(12.0)	淡橙色 (5YR8/4)	礫	良好	タタキ成形、畿内系土器
2093	溝-16	土師器	壺	13.8			(12.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形、畿内系土器
2094	溝-16	土師器	壺	14.8			(8.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	肩部に波状文、西部瀬戸内系土器
2095	溝-16	土師器	壺		28.2	4.6	(22.2)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	粘土紐輪積み、黒斑 C、畿内系土器
2096	溝-16	土師器	壺	15.2	26.7		(21.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	粗砂	良好	粘土紐輪積み、タタキ成形、畿内系 土器
2097	溝-16	土師器	壺	15.7			(8.8)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	非在地系土器
2098	溝-16	土師器	壺	12.6	21.7		(22.4)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 礫	良好	黒斑 A・B
2099	溝-16	土師器	壺	17.6			(9.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 礫	良好	
2100	溝-16	土師器	壺	17.9	28.1		30.2	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑 B・C
2101	溝-16	土師器	壺	18.1	25.5	4.7	27.7	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	頸部に貝殻圧痕文
2102	溝-16	土師器	壺	19.7	30.1		(30.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂 礫	良好	頸部に刺突文、外面にカゴメ、黒斑 B・C、四国(讃岐)系土器
2103	溝-16	土師器	壺	19.8	29.5	8.2	32.8	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑 B・C、四国系土器

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2104	溝-16	土師器	壺	19.3			(15.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	
2105	溝-16	土師器	壺	18.1			(13.3)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	黒斑B、タキ成形
2106	溝-16	土師器	壺	19.4			(19.6)	灰白色 (10YR8/2)	礫	良好	黒斑B
2107	溝-16	土師器	壺	14.6	26.4		(19.3)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑B、四国系土器
2108	溝-16	土師器	壺	17.8			(10.0)	鈍い橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑A、四国(讃岐)系土器
2109	溝-16	土師器	壺	16.9	31.0	6.5	23.3	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、四国系土器
2110	溝-16	土師器	壺	22.0			(6.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	頸部に突帯、黒斑A、四国系土器
2111	溝-16	土師器	壺	21.9	36.9	8.2	36.5	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	黒斑B、四国(讃岐)系土器
2112	溝-16	土師器	壺	18.5	26.0		(27.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	ススC、黒斑B・BC、四国系土器
2113	溝-16	土師器	壺		28.5		(30.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	外面に赤色顔料、胴部穿孔、黒斑 B・BC、非在地系土器
2114	溝-16	土師器	壺	18.9	27.0		31.8	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	不良	四国(讃岐)系土器
2115	溝-16	土師器	壺	16.3	26.0		28.1	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂 礫	良好	黒斑B・C
2116	溝-16	土師器	壺	16.4	26.4		(25.7)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	
2117	溝-16	土師器	壺	18.0	26.7		(26.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	黒斑C
2118	溝-16	土師器	壺	18.4	32.1	10.5	34.7	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	黒斑C
2119	溝-16	土師器	壺	20.0			(11.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	口縁部に鋸歯文
2120	溝-16	土師器	壺	20.2			(7.0)	浅黄橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に沈線、非在地系土器か
2121	溝-16	土師器	壺	22.0	37.6	9.2	(36.0)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に沈線、非在地系土器か
2122	溝-16	土師器	壺	18.6			(10.1)	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	
2123	溝-16	土師器	壺	18.2			(9.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	礫	良好	
2124	溝-16	土師器	壺	16.6			(18.9)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
2125	溝-16	土師器	壺	17.3	27.2		(19.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に貝殻圧痕文
2126	溝-16	土師器	壺	18.9			(11.8)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	
2127	溝-16	土師器	壺	17.3	29.9	7.6	34.9	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂 礫	良好	黒斑BC
2128	溝-16	土師器	壺	19.4	27.3	6.0	32.7	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	黒斑B・C
2129	溝-16	土師器	壺	19.4	33.0	9.3	35.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	礫 細砂	良好	非在地系土器
2130	溝-16	土師器	壺	20.9		6.7	(31.2)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂 礫	良好	黒斑C
2131	溝-16	土師器	壺	19.5			(13.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	頸部に刺突文
2132	溝-16	土師器	壺	20.4	34.7	12.6	36.5	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂 礫	良好	外面に赤色顔料、黒斑C
2133	溝-16	土師器	壺	18.0	27.2	5.0	36.1	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	黒斑C、タキ成形、四国系土器
2134	溝-16	土師器	壺	17.7	36.5	5.0	39.0	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	黒斑B・C、非在地系土器
2135	溝-16	土師器	壺	22.2			(8.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
2136	溝-16	土師器	壺	23.6			(6.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑A
2137	溝-16	土師器	壺	18.6	32.4	4.7	31.6	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	非在地系土器
2138	溝-16	土師器	壺	14.0			(8.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	礫	良好	黒斑A、山陽(備後)系土器

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2139	溝-16	土師器	壺	19.4	31.1		(30.0)	橙色 (5YR6/8)	礫 粗砂	良好	黒斑A
2140	溝-16	土師器	壺	18.6	30.0		(27.7)	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	黒斑A
2141	溝-16	土師器	壺	17.9			(16.6)	明褐色 (7.5YR7/2)	礫	良好	
2142	溝-16	土師器	壺	17.2	27.5		35.0	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	山陰系土器
2143	溝-16	土師器	壺	17.1	29.0	7.9	33.0	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	肩部に刺突文A6、黒斑BC
2144	溝-16	土師器	壺	19.6			(17.7)	灰白色 (10YR8/1)	粗砂	良好	胴部穿孔
2145	溝-16	土師器	壺	19.8	29.7		37.2	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
2146	溝-16	土師器	壺	20.0	29.4		(33.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	肩部に刺突文C3、黒斑C
2147	溝-16	土師器	壺	24.0			(9.1)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	頸部に刺突文、山陰系土器
2148	溝-16	土師器	壺	23.4			(9.5)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	黒斑A、非在地系土器
2149	溝-16	土師器	壺		30.9		(17.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	黒斑B、タタキ成形、非在地系土器
2150	溝-16	土師器	甕	12.8	13.3	3.6	12.2	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑BC
2151	溝-16	土師器	甕	11.4			(9.6)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 礫	良好	非在地系土器
2152	溝-16	土師器	甕	12.9	15.5		(15.6)	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	ススC'
2153	溝-16	土師器	甕	14.8	16.8	3.5	16.6	淡黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	ススB
2154	溝-16	土師器	甕	15.7	16.7	2.7	21.0	明褐色 (7.5YR7/2)	粗砂	良好	底部穿孔、黒斑C
2155	溝-16	土師器	甕	13.3	14.1	3.0	13.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B・C
2156	溝-16	土師器	甕	13.9	16.0		(11.6)	鈍い橙色 (2.5YR7/3)	粗砂	良好	ススB、非在地系土器
2157	溝-16	土師器	甕	15.7	19.7		(18.6)	淡黄色 (5YR8/3)	粗砂	良好	ススB'、非在地系土器
2158	溝-16	土師器	甕	15.5	20.2		(18.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	礫	良好	肩部に刺突文、ススB'、黒斑B、 非在地系土器
2159	溝-16	土師器	甕	14.8			(15.6)	灰褐色 (5YR5/2)	粗砂 礫	良好	ススB、畿内(河内)系土器
2160	溝-16	土師器	甕	16.3			(7.7)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	
2161	溝-16	土師器	甕	16.4	20.9		(16.5)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	ススB'
2162	溝-16	土師器	甕	17.6	21.2		(15.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	肩部に刺突文A2、ススB
2163	溝-16	土師器	甕	17.0	21.4	5.0	27.3	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	ススB
2164	溝-16	土師器	甕	14.0	15.0		(14.1)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	ススC
2165	溝-16	土師器	甕	14.1	15.5		(16.5)	鈍い橙色 (5YR6/4)	礫	良好	ススB
2166	溝-16	土師器	甕	16.0			(12.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	ススB
2167	溝-16	土師器	甕	18.0			(9.5)	浅黄橙色 (7.5YR6/3)	粗砂	良好	
2168	溝-16	土師器	甕	14.8			(14.4)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	ススC
2169	溝-16	土師器	甕	13.8	18.3		(19.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	ススB'
2170	溝-16	土師器	甕	14.9	19.8		(13.8)	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	ススB
2171	溝-16	土師器	甕	16.4	20.6		(20.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	ススC
2172	溝-16	土師器	甕	15.2	19.0	4.5	21.2	橙色 (7.5YR6/6)	礫	良好	ススC、黒斑C、非在地系土器
2173	溝-16	土師器	甕	18.0	22.0	5.0	28.1	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	ススC

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎 土	焼 成	特 徴
				口 径	最 大 径	底 径	器 高				
2174	溝-16	土師器	甕	15.3			(11.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	
2175	溝-16	土師器	甕	16.4	23.5	5.5	27.0	明赤褐色 (5YR5/6)	粗砂	良好	肩部に波状文、ススC、非在地系土器
2176	溝-16	土師器	甕	15.4			(6.9)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2177	溝-16	土師器	甕	12.6			14.6	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	ススC
2178	溝-16	土師器	甕	12.8	14.6		16.7	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	ススA
2179	溝-16	土師器	甕	18.2	21.1		(12.4)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	ススB
2180	溝-16	土師器	甕	18.4	26.5		(17.4)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	礫	良好	黒斑A
2181	溝-16	土師器	甕	14.5	18.8	4.4	22.1	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	底部穿孔、ススC、黒斑B
2182	溝-16	土師器	甕	14.2	15.9	3.2	16.3	淡黄色 (2.5Y8/4)	細砂	良好	黒斑A-C
2183	溝-16	土師器	甕	21.0	26.6	4.0	28.0	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	ススC、黒斑C
2184	溝-16	土師器	甕	15.0	19.0		(14.3)	橙色 (5YR6/6)	粗砂 礫	良好	ススC
2185	溝-16	土師器	甕	14.3	18.8	3.7	21.0	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 礫	風化	ススC
2186	溝-16	土師器	甕	14.7	21.5	3.0	25.2	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	ススC、黒斑B・C、タタキ成形
2187	溝-16	土師器	甕	15.1			(10.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
2188	溝-16	土師器	甕	16.0	20.3		(18.8)	橙色 (5YR6/8)	礫	良好	肩部に刺突文A2、ススC、タタキ成形
2189	溝-16	土師器	甕	12.8	16.5		(15.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂 礫	良好	タタキ成形
2190	溝-16	土師器	甕	19.5		3.5	23.0	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C、タタキ成形
2191	溝-16	土師器	甕	16.9	19.3	5.2	21.3	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	礫	良好	ススC、黒斑A
2192	溝-16	土師器	甕	15.2	19.8	4.8	21.0	黄灰色 (2.5Y6/1)	細砂	良好	黒斑B・C
2193	溝-16	土師器	甕	16.5	21.2	8.0	23.3	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B・C
2194	溝-16	土師器	甕	17.4	22.3	4.4	27.9	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂 礫	良好	肩部に刺突文B2、ススB、タタキ成形
2195	溝-16	土師器	甕	17.7	21.7		(16.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2196	溝-16	土師器	甕	17.8			(9.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	
2197	溝-16	土師器	甕	13.9	18.4		(19.6)	浅黄橙色 (5YR8/6)	粗砂 礫	良好	ススB、タタキ成形
2198	溝-16	土師器	甕	14.5	17.3	4.4	19.4	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2199	溝-16	土師器	甕	14.6		4.0	13.8	橙色 (7.5YR6/6)	礫	良好	ススB、タタキ成形
2200	溝-16	土師器	甕	13.8	14.3		13.0	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	黒斑A・C、タタキ成形
2201	溝-16	土師器	甕	14.3	18.4	1.4	18.5	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	ススC、黒斑B・C、タタキ成形、 畿内系土器
2202	溝-16	土師器	甕	17.0	20.2		(18.5)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	ススC、タタキ成形
2203	溝-16	土師器	甕	15.3	18.4		(11.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	タタキ成形
2204	溝-16	土師器	甕	16.0	22.0	4.5	25.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	ススB'、タタキ成形
2205	溝-16	土師器	甕	17.0	23.0		(24.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 礫	良好	タタキ成形、畿内(播磨)系土器
2206	溝-16	土師器	甕	12.4	15.5		18.8	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	ススC、黒斑B、タタキ成形
2207	溝-16	土師器	甕	15.9	20.3	4.3	22.5	浅黄橙色 (10YR8/4)	粗砂	良好	ススB、黒斑C、タタキ成形
2208	溝-16	土師器	甕	17.6	21.6	4.0	24.8	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	ススB'、タタキ成形

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2209	溝-16	土師器	甕	13.9			(7.1)	灰白色 (10YR8/1)	粗砂	良好	ススB'、タタキ成形
2210	溝-16	土師器	甕	14.2	16.5	3.4	17.1	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	ススC、タタキ成形
2211	溝-16	土師器	甕	15.8	18.3		(11.0)	鈍い黄褐色 (10YR7/4)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2212	溝-16	土師器	甕	16.6	20.2	3.7	23.2	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂 礫	良好	黒斑C、タタキ成形
2213	溝-16	土師器	甕	17.5			(11.5)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2214	溝-16	土師器	甕	17.8	21.8		(19.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	ススC、タタキ成形
2215	溝-16	土師器	甕	18.4	23.4		(14.5)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	
2216	溝-16	土師器	甕	15.9	19.6	1.8	20.0	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形、畿内(河内)系 土器
2217	溝-16	土師器	甕	13.6	20.3		(16.2)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	礫	良好	黒斑B、タタキ成形
2218	溝-16	土師器	甕	21.5	27.6		(14.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2219	溝-16	土師器	甕	22.2	29.5	5.0	32.4	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	ススC、黒斑C、タタキ成形
2220	溝-16	土師器	甕	15.8			(7.0)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	タタキ成形
2221	溝-16	土師器	甕	16.1	19.8		(15.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2222	溝-16	土師器	甕	16.4			(11.4)	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	タタキ成形
2223	溝-16	土師器	甕	18.1			(6.6)	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	ススA、タタキ成形
2224	溝-16	土師器	甕			3.2	(12.7)	明赤褐色 (5YR5/6)	礫	良好	底部穿孔、ススB、タタキ成形
2225	溝-16	土師器	甕	12.8	14.6	5.3	17.0	橙色 (7.5YR6/6)	礫	良好	ススC、黒斑C
2226	溝-16	土師器	甕	14.3	15.8	5.0	18.9	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	ススB、黒斑C
2227	溝-16	土師器	甕	15.3	19.6		(20.2)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	ススB
2228	溝-16	土師器	甕	15.0	19.4	3.8	21.4	鈍い黄褐色 (10YR7/4)	粗砂	良好	ススB'、黒斑B・C
2229	溝-16	土師器	甕	14.5	21.2	6.3	24.9	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	礫 粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2230	溝-16	土師器	甕	14.8	21.6	6.8	25.9	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2231	溝-16	弥生土器	甕	15.5	18.5		20.7	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線、ススC
2232	溝-16	土師器	甕	12.6	16.9		(12.0)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
2233	溝-B	弥生土器	甕	16.6	21.9	5.7	25.5	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2234	溝-16	土師器	甕	15.8	21.4		(17.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂 礫	良好	口縁部に櫛描沈線
2235	溝-16	土師器	甕	14.2	17.6	3.0	19.0	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、ススB
2236	溝-16	弥生土器	甕	13.0	18.0	4.0	20.0	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線、肩部に刺突文A2、 ススB'
2237	溝-16	土師器	甕	14.0		4.0	23.7	灰黄褐色 (10YR2/6)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、ススB'、黒斑 B・C
2238	溝-16	弥生土器	甕	14.6	19.5		(14.8)	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線、肩部に刺突文A2、 ススA
2239	溝-16	土師器	甕	14.6	18.1	5.0	19.6	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
2240	溝-16	弥生土器	甕	13.2	17.2		(10.8)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、ススB
2241	溝-16	土師器	甕	14.7	19.4		(17.2)	灰褐色 (7.5YR5/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2242	溝-16	弥生土器	甕	14.5	20.2	4.0	22.5	灰白色 (10YR8/1)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線、黒斑B・C
2243	溝-16	土師器	甕	14.0	19.9	3.8	22.0	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑B

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2244	溝-16	土師器	甕	13.6	17.5	4.0	(20.0)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2245	溝-16	土師器	甕	14.1	19.4	5.0	19.5	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C 3、ススC
2246	溝-16	土師器	甕	13.6	18.5	4.5	21.5	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
2247	溝-16	土師器	甕	12.1	18.0		(8.8)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1
2248	溝-16	土師器	甕	15.0			(5.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2249	溝-16	土師器	甕	14.4	20.8		(21.7)	褐灰色 (10YR4/1)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススA
2250	溝-16	土師器	甕	14.3	20.5	4.8	23.0	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑 B・C
2251	溝-16	土師器	甕	14.8	19.6	4.4	26.7	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑B
2252	溝-16	土師器	甕	15.2	21.9	5.8	24.2	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2253	溝-16	土師器	甕	16.0	21.7	5.0	25.5	淡黄色 (2.5Y8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススC
2254	溝-16	土師器	甕	15.8	21.5	3.8	24.9	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、底部穿孔、ススC
2255	溝-16	土師器	甕	12.5			(10.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
2256	溝-16	土師器	甕	13.2	17.2	3.5	19.2	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2257	溝-16	土師器	甕	12.0	17.3	5.0	19.7	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2258	溝-16	土師器	甕	14.5	18.6	4.8	20.1	灰白色 (2.5YR8/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススA
2259	溝-16	土師器	甕	13.4	19.3		21.8	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A~C
2260	溝-16	土師器	甕	14.2	18.9	4.2	21.3	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	肩部に刺突文A4、ススC
2261	溝-16	土師器	甕	13.4	19.0	3.9	20.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'、黒斑 A・B
2262	溝-16	土師器	甕	14.8	21.5		(10.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	
2263	溝-16	土師器	甕	14.3	20.5	5.0	25.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2264	溝-16	土師器	甕	15.6	21.4	4.3	25.8	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	ススB'
2265	溝-16	土師器	甕	16.2	21.0	4.9	23.5	鈍い橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文C 3、ススB
2266	溝-16	土師器	甕	13.2	17.8	2.3	19.7	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2267	溝-16	土師器	甕	13.2	18.4		19.5	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC'
2268	溝-16	土師器	甕	12.4	18.7		(19.4)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 3、ススB
2269	溝-16	土師器	甕	13.2	17.0		(13.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 3、ススB
2270	溝-16	土師器	甕	14.1			(10.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
2271	溝-16	土師器	甕	14.5	18.8	4.4	20.7	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
2272	溝-16	土師器	甕	13.9	19.5		(21.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススC、黒斑B
2273	溝-16	土師器	甕	14.0	19.4		21.4	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
2274	溝-16	土師器	甕	15.3	20.5	5.0	24.3	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2275	溝-16	土師器	甕	15.2	21.0	4.6	24.6	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB'
2276	溝-16	土師器	甕	14.8	20.3	4.5	23.7	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2277	溝-16	土師器	甕	13.0	18.5		(17.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2278	溝-16	土師器	甕	12.0	19.0		(18.8)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススC

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)				色調	胎土	焼成	特徴
				口径	最大径	底径	器高				
2279	溝-16	土師器	甕	13.6	18.8	3.8	19.1	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、黒斑C
2280	溝-16	土師器	甕	12.2	17.7		(16.0)	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2281	溝-16	土師器	甕	13.2			(7.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、黒斑A B
2282	溝-16	土師器	甕	15.2	21.7	4.9	22.9	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2283	溝-16	土師器	甕	13.6	19.5	4.2	20.7	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2284	溝-16	土師器	甕	14.1	18.8		(16.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススA
2285	溝-16	土師器	甕	15.8	20.9	4.2	25.0	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑B
2286	溝-16	土師器	甕	16.0	21.3	4.5	25.3	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2287	溝-16	土師器	甕	14.7	22.0		(23.5)	灰白色 (5YR8/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススB
2288	溝-16	土師器	甕	13.0			(7.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2289	溝-16	土師器	甕	12.5	9.2		(15.8)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC、黒斑A B
2290	溝-16	土師器	甕	11.8	15.8		(15.0)	浅黄橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2291	溝-16	土師器	甕	11.7	16.3		(15.4)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 3、ススC
2292	溝-16	土師器	甕	13.0	16.1		(10.9)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2293	溝-16	土師器	甕	12.7	19.2		(17.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、黒斑A B
2294	溝-16	土師器	甕	15.0	(22.0)		(22.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2295	溝-16	土師器	甕	14.5			(12.3)	鈍い黄橙色 (10YR2/7)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2296	溝-16	土師器	甕	14.2	21.2		(13.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2297	溝-16	土師器	甕	15.7	22.4		(17.8)	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2298	溝-16	土師器	甕	15.0	21.6		(12.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2299	溝-16	土師器	甕	14.2	21.0		(18.0)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2300	溝-16	土師器	甕	15.0	21.5	21.6	(18.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂 礫	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2301	溝-16	土師器	甕	14.4	21.4		(18.7)	浅黄橙色 (10YR8/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2302	溝-16	土師器	甕	14.8	23.0		(14.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1
2303	溝-16	土師器	甕	15.0	22.9		(14.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススB
2304	溝-16	土師器	甕	14.8	23.3	3.1	26.1	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススC、黒斑C
2305	溝-16	土師器	甕	14.3			(12.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2306	溝-16	土師器	甕	15.0			(8.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2307	溝-16	土師器	甕	15.2			(9.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2
2308	溝-16	土師器	甕	13.4	18.5		(16.0)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
2309	溝-16	土師器	甕	14.4	15.8		(7.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	口縁部に沈線、北陸系土器
2310	溝-16	土師器	甕	26.2	30.0	5.5	37.0	鈍い黄橙色 (10YR6/4)	粗砂	良好	ススC、黒斑B・C
2311	溝-16	土師器	高杯	9.9			(8.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	透かし孔3
2312	溝-16	土師器	高杯	10.6			(5.4)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2313	溝-16	土師器	高杯	12.0			(5.9)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2314	溝-16	土師器	高杯	9.6			(5.3)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	手捏ね土器
2315	溝-16	土師器	高杯	11.2			(7.3)	橙色 (2.5YR7/8)	粗砂	良好	
2316	溝-16	土師器	高杯	13.4			(9.6)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2317	溝-16	土師器	高杯	12.3			(9.6)	橙色 (2.5YR6/8)	精良	良好	透かし孔4
2318	溝-16	土師器	高杯	17.0			(10.2)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
2319	溝-16	土師器	高杯	19.2			(7.2)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	粗砂	良好	
2320	溝-16	土師器	高杯	20.2			(7.3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
2321	溝-16	土師器	高杯	16.6			(10.3)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2322	溝-16	土師器	高杯	17.5			(10.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
2323	溝-16	土師器	高杯	16.4		12.0	10.7	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4
2324	溝-16	土師器	高杯	18.7			(10.2)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	粗砂	良好	黒斑A
2325	溝-16	土師器	高杯	20.6			(12.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4、黒斑A
2326	溝-16	土師器	高杯	20.4		13.9	14.4	橙色 (2.5YR7/8)	細砂	良好	透かし孔4
2327	溝-16	土師器	高杯	22.4			(15.5)	赤褐色 (2.5YR5/6)	粗砂	良好	透かし孔4、黒斑A-C
2328	溝-16	土師器	高杯			11.9	(6.1)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2329	溝-16	土師器	高杯			12.7	(5.1)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔4
2330	溝-16	土師器	高杯			15.5	(5.0)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
2331	溝-16	土師器	高杯			16.0	(6.5)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔3
2332	溝-16	土師器	高杯	15.9		12.4	12.5	橙色 (2.5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4
2333	溝-16	土師器	高杯	18.0			(8.4)	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	
2334	溝-16	土師器	高杯	18.8			(7.2)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2335	溝-16	土師器	高杯	14.4			(4.5)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2336	溝-16	土師器	高杯	20.8			(7.4)	橙色 (2.5YR6/6)	精良	良好	外面に赤色顔料
2337	溝-16	土師器	高杯	18.0			(10.4)	橙色 (5YR6/6)	粗砂 礫	良好	
2338	溝-16	土師器	高杯	19.1			(12.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4
2339	溝-16	土師器	高杯	21.0			(7.7)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	黒斑A
2340	溝-16	土師器	高杯	19.7			(11.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	
2341	溝-16	土師器	高杯	19.8			(12.0)	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	
2342	溝-16	土師器	高杯			15.9	(13.8)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	透かし孔4、黒斑C
2343	溝-16	土師器	高杯	21.2			(14.1)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	良好	透かし孔4
2344	溝-16	土師器	高杯			14.0	(8.5)	明赤褐色 (5YR5/8)	粗砂	良好	透かし孔4
2345	溝-16	土師器	高杯			15.3	(8.8)	橙色 (2.5YR6/6)	精良	良好	透かし孔4
2346	溝-16	土師器	高杯	19.9		15.5	14.1	浅黄橙色 (7.5YR4/8)	粗砂	良好	透かし孔4
2347	溝-16	土師器	高杯	20.2		14.2	15.1	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
2348	溝-16	土師器	高杯	18.1			(6.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2349	溝-16	土師器	高杯	18.8			(5.0)	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	
2350	溝-16	土師器	高杯	18.2			(6.9)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
2351	溝-16	土師器	高杯	20.6			(7.3)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	接合部に刻目
2352	溝-16	土師器	高杯	20.7			(6.3)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	
2353	溝-16	土師器	高杯	19.8			(11.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
2354	溝-16	土師器	高杯	20.3			(8.3)	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	
2355	溝-16	土師器	高杯			13.0	(8.8)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2356	溝-16	土師器	高杯	18.4		13.2	12.6	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4、ほぼ完形
2357	溝-16	土師器	高杯	19.4			(8.4)	赤褐色 (10R6/6)	細砂	良好	黒斑A
2358	溝-16	土師器	高杯	20.0		13.9	13.1	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4
2359	溝-16	土師器	高杯	21.8			(12.9)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
2360	溝-16	土師器	高杯	23.5			(7.8)	橙色 (2.5YR7/6)	粗砂	良好	タタキ成形
2361	溝-16	土師器	高杯	25.7			(8.0)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	タタキ成形
2362	溝-16	土師器	高杯	25.1			(14.1)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2363	溝-16	土師器	高杯	21.8		16.5	15.1	橙色 (2.5YR6/8)	礫	良好	透かし孔4、黒斑A、ほぼ完形
2364	溝-16	土師器	高杯	16.7			(10.8)	橙色 (2.5YR6/8)	精良	良好	
2365	溝-16	土師器	高杯	18.0		11.6	13.7	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	透かし孔3、黒斑C
2366	溝-16	土師器	高杯	19.6			(10.5)	浅黄褐色 (10YR8/3)	粗砂	良好	黒斑A
2367	溝-16	土師器	高杯	21.5		15.5	17.3	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4、黒斑A~C
2368	溝-16	土師器	高杯	20.6		14.3	14.4	鈍い橙色 (5YR5/4)	粗砂	良好	透かし孔4
2369	溝-16	土師器	高杯	18.8			(7.0)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	黒斑A
2370	溝-16	土師器	高杯	17.8		9.9	15.8	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	透かし孔4、非在地系土器
2371	溝-16	土師器	高杯	19.3		15.5	13.5	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	精良	良好	透かし孔4
2372	溝-16	土師器	高杯	18.7			(11.8)	淡褐色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	
2373	溝-16	土師器	高杯	16.6			(5.5)	黄褐色 (7.5YR8/8)	精良	良好	
2374	溝-16	土師器	高杯	19.9		13.8	12.6	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4
2375	溝-16	土師器	高杯	22.4			(14.7)	橙色 (2.5YR6/8)	粗砂	良好	透かし孔4
2376	溝-16	土師器	高杯	15.5			(7.2)	黄褐色 (7.5YR8/8)	精良	良好	
2377	溝-16	土師器	高杯	17.0		13.2	13.2	橙色 (2.5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4、黒斑A
2378	溝-16	土師器	高杯	18.4		13.5	15.0	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔3
2379	溝-16	土師器	高杯	19.0			(11.5)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2380	溝-16	土師器	高杯	5.4			(7.5)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2381	溝-16	土師器	高杯	11.6			(10.4)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2382	溝-16	土師器	脚付壺	9.5			(11.4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	
2383	溝-16	土師器	脚付壺	11.2			(17.6)	赤色 (7.5R4/8)	細砂	良好	外面に赤色顔料

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2384	溝-16	土師器	脚付壺	9.1			16.1	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	黒斑B
2385	溝-16	土師器	脚付壺	9.2			(13.7)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
2386	溝-16	土師器	高杯	11.0			(10.4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	
2387	溝-16	土師器	壺	9.2	10.4		10.2	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑A・C
2388	溝-16	土師器	壺	10.4	12.5	3.0	12.0	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
2389	溝-16	土師器	壺	9.2	11.5		(9.4)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂 礫	良好	ススC
2390	溝-16	土師器	壺	8.8	9.8	3.6	9.1	灰白色 (2.5YR8/2)	細砂	良好	黒斑C
2391	溝-16	土師器	壺	9.0			(8.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	
2392	溝-16	土師器	壺	9.2	14.3	4.3	17.2	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
2393	溝-16	土師器	壺	10.9	14.5	2.1	17.0	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	
2394	溝-16	土師器	壺	11.4			(8.7)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	非在地系土器
2395	溝-16	土師器	壺	10.0	15.2	2.1	18.0	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB
2396	溝-16	土師器	小形壺	10.9			10.2	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑C
2397	溝-16	土師器	壺	9.8	11.0	4.8	11.2	橙色 (5YR7/6)	礫 粗砂	良好	黒斑C
2398	溝-16	土師器	壺	11.2	13.6		(11.8)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	黒斑B
2399	溝-16	土師器	壺	12.7			(8.6)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	外面に赤色顔料、黒斑A・A
2400	溝-16	土師器	壺	13.6	15.5	5.8	14.5	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
2401	溝-16	土師器	鉢	12.4		6.1	4.5	灰白色 (5YR8/2)	細砂	良好	
2402	溝-16	土師器	鉢	11.1		3.3	5.1	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	
2403	溝-16	土師器	鉢	11.9		2.9	5.7	灰白色 (5YR8/2)	細砂	良好	黒斑B・C
2404	溝-16	土師器	鉢	14.1			7.5	赤灰色 (2.5YR5/2)	粗砂	良好	黒斑C
2405	溝-16	土師器	鉢	13.6		3.5	8.4	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
2406	溝-16	土師器	鉢	14.9		4.3	7.8	鈍い黄橙色 (10YR5/3)	細砂	良好	タタキ成形、黒斑A～C
2407	溝-16	土師器	台付鉢	12.0	12.1	5.3	6.3	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2408	溝-16	土師器	台付鉢	12.6		4.5	5.8	鈍い黄橙色 (10YR5/4)	細砂	良好	ススA
2409	溝-16	土師器	台付鉢	13.0		5.0	7.1	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	
2410	溝-16	土師器	台付鉢	10.8		3.0	7.3	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	スス
2411	溝-16	土師器	台付鉢	12.3		4.7	7.6	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 礫	良好	
2412	溝-16	土師器	台付鉢	13.8		5.0	7.6	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	ススB
2413	溝-16	土師器	台付鉢	12.9		9.4	10.2	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
2414	溝-16	土師器	鉢	9.6		3.0	5.7	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形
2415	溝-16	土師器	鉢	13.6		1.6	6.9	鈍い黄橙色 (10YR5/4)	細砂	良好	タタキ成形、非在地系土器
2416	溝-16	土師器	鉢	14.3			6.0	淡黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
2417	溝-16	土師器	鉢	15.9		4.5	6.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2418	溝-16	土師器	鉢	19.5			6.9	明赤灰色 (2.5YR7/2)	粗砂	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2419	溝-16	土師器	鉢	16.6			7.0	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	細砂	良好	
2420	溝-16	土師器	鉢	17.2		4.0	7.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2421	溝-16	土師器	鉢	13.1		3.5	6.0	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	ススB
2422	溝-16	土師器	鉢	13.3			6.1	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	黒斑A~C
2423	溝-16	土師器	鉢	13.5		4.8	6.0	淡橙色 (5YR8/3)	精良	良好	
2424	溝-16	土師器	鉢	12.0			6.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
2425	溝-16	土師器	鉢	12.5	12.6	6.0	7.0	淡黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	
2426	溝-16	土師器	鉢	12.3			6.2	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2427	溝-16	土師器	鉢	13.4		3.4	8.6	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
2428	溝-16	土師器	鉢	12.8		2.9	7.8	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2429	溝-16	土師器	鉢	14.2			6.9	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	
2430	溝-16	土師器	鉢	13.2		4.5	8.5	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂 礫	良好	黒斑B
2431	溝-16	土師器	鉢	15.4			8.5	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	
2432	溝-16	土師器	鉢	16.3		4.6	8.9	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	黒斑BC
2433	溝-16	土師器	鉢	15.8		3.0	8.3	鈍い赤褐色 (5YR4/3)	粗砂	良好	ススC
2434	溝-16	土師器	鉢	18.0		4.3	6.0	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
2435	溝-16	土師器	鉢	15.2		3.7	7.7	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑BC
2436	溝-16	土師器	鉢	13.3		5.5	8.5	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2437	溝-16	土師器	鉢	12.8	12.7	3.7	11.1	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	黒斑A~C
2438	溝-16	土師器	鉢	13.0			(8.9)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	内面にコゲ、ススA
2439	溝-16	土師器	鉢	14.2			8.0	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
2440	溝-16	土師器	鉢	14.7		3.0	8.2	橙色 (2.5YR6/6)	細砂	良好	
2441	溝-16	土師器	鉢	17.2			11.1	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂 礫	良好	黒斑BC
2442	溝-16	土師器	鉢	19.8		4.3	10.6	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	
2443	溝-16	土師器	鉢	16.6		5.0	9.1	淡黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	黒斑C
2444	溝-16	土師器	鉢	10.6			7.4	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	
2445	溝-16	土師器	鉢	11.0		2.7	9.0	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑B・C
2446	溝-16	土師器	鉢	9.2	9.4	2.1	7.2	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B
2447	溝-16	土師器	鉢		8.3	2.6	(6.0)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	
2448	溝-16	土師器	鉢	8.3			5.7	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	黒斑AB
2449	溝-16	土師器	鉢	25.2		7.8	15.4	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	
2450	溝-16	土師器	鉢	26.2		6.0	16.5	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	ススA、黒斑A~C
2451	溝-16	土師器	鉢	34.8			14.0	鈍い橙色 (7.5YR2)	粗砂	良好	
2452	溝-16	土師器	鉢	31.6		6.0	18.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑BC、タタキ成形
2453	溝-16	土師器	鉢		33.3	8.5	(23.2)	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	胴部穿孔、黒斑C、タタキ成形

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2454	溝-16	土師器	鉢	(36.2)		6.7	24.0	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑B、タタキ成形
2455	溝-16	土師器	鉢	22.0			18.5	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
2456	溝-16	土師器	鉢	20.3		5.7	16.9	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	
2457	溝-16	土師器	鉢	19.0			(9.9)	褐灰色 (5YR5/1)	粗砂	良好	
2458	溝-16	土師器	鉢	22.8		7.2	15.5	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	凹み底、黒斑B
2459	溝-16	土師器	鉢	40.2		10.2	27.5	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	黒斑B
2460	溝-16	土師器	鉢	26.8		8.7	(14.9)	橙色 (5YR6/6)	礫	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A B
2461	溝-16	土師器	鉢	32.6			(15.2)	淡黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	
2462	溝-16	土師器	鉢	34.5			(14.9)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、黒斑A B
2463	溝-16	土師器	鉢	41.4		9.7	24.0	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑B
2464	溝-16	土師器	鉢	14.3	16.0	4.1	15.2	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2465	溝-16	土師器	台付鉢	17.8	20.0		(15.0)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	黒斑A・B、タタキ成形
2466	溝-16	土師器	鉢	18.6	20.6		13.9	橙色 (7.5YR7/6)	礫 粗砂	良好	黒斑B
2467	溝-16	土師器	鉢	33.6		8.3	22.5	浅黄橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	黒斑B・C
2468	溝-16	土師器	鉢	18.3	20.4	7.0	18.6	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂 礫	良好	ススB
2469	溝-16	土師器	鉢	14.6	14.0	4.3	11.4	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	
2470	溝-16	土師器	鉢	12.4	13.0		12.0	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	黒斑C
2471	溝-16	土師器	鉢	9.4	9.2	2.3	7.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2472	溝-16	土師器	鉢	36.8	38.2		(21.5)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑B・B
2473	溝-16	土師器	鉢	40.8			(14.2)	赤橙色 (10R6/6)	粗砂	良好	山陽(備後)系土器
2474	溝-16	土師器	鉢	40.9		12.4	20.6	黄橙色 (10YR8/6)	礫	良好	黒斑C、山陽(備後)系土器
2475	溝-16	土師器	鉢	30.2		6.0	20.5	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑C
2476	溝-16	土師器	台付鉢	9.4	11.2	4.9	15.0	灰黄褐色 (10YR5/2)	礫	良好	製塩土器、タタキ成形
2477	溝-16	土師器	台付鉢	10.7		4.5	15.5	灰白色 (2.5YR8/2)	粗砂	良好	黒斑B C、タタキ成形、製塩土器
2478	溝-16	土師器	器台	7.5		9.0	8.5	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	
2479	溝-16	土師器	器台	9.8			(7.6)	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	粗砂	良好	
2480	溝-16	土師器	器台	8.2		10.3	8.6	鈍い赤褐色 (5YR5/4)	粗砂	良好	透かし孔4
2481	溝-16	土師器	器台	9.4		11.3	9.1	橙色 (2.5YR6/8)	精良	良好	透かし孔4
2482	溝-16	土師器	器台	9.7		11.6	10.7	淡黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4、完形
2483	溝-16	土師器	器台	10.6		13.3	10.6	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔5、非在地系土器
2484	溝-16	土師器	器台	8.6		9.3	11.0	橙色 (5YR6/8)	礫	良好	透かし孔4
2485	溝-16	土師器	器台	9.3		10.0	8.8	淡黄色 (2.5YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4、非在地系土器、完形
2486	溝-16	土師器	器台			11.6	(7.2)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	透かし孔4
2487	溝-16	土師器	器台	19.6		18.2	13.4	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	黒斑C、山陰系土器
2488	溝-16	土師器	手埴				(16.0)	黄灰色 (2.5Y1/6)	細砂	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2489	溝-16	土師器	手焙		20.2		(11.8)	橙色 (7.5YR6/8)	粗砂	良好	黒斑C
2490	溝-17	土師器	壺	15.3			(10.2)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	ススA
2491	溝-17	土師器	壺	19.2			(20.1)	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	
2492	溝-17	土師器	壺		27.4	5.5	(28.0)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	粘土紐輪積み、黒斑B・C、非在地系土器
2493	溝-17	土師器	壺	14.8	23.5		(23.5)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	
2494	溝-17	土師器	壺	13.0	15.5		19.5	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2495	溝-17	土師器	壺	17.0	23.8	4.4	28.2	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑A・B、非在地系土器
2496	溝-17	土師器	壺	16.4			(16.2)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	
2497	溝-17	土師器	壺				(7.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	頸部に突帯、非在地系土器
2498	溝-17	土師器	壺	17.0			(12.7)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	四国系土器
2499	溝-17	土師器	壺	14.6			(12.2)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	
2500	溝-17	土師器	壺		29.3		(27.3)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	胴部穿孔、黒斑B
2501	溝-17	土師器	壺				(13.2)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	黒斑B、四国系土器
2502	溝-17	土師器	壺	22.5	32.3	6.2	39.9	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	黒斑B・C、四国系土器
2503	溝-17	土師器	壺	20.9	27.0	5.5	34.5	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑C、四国系土器
2504	溝-17	土師器	壺	20.6			(15.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	
2505	溝-17	土師器	壺	16.0	26.4		30.1	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑C
2506	溝-17	土師器	壺	19.2	29.9		(19.7)	赤色 (10YR5/6)	細砂	良好	
2507	溝-17	土師器	壺	20.2			(18.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	黒斑B
2508	溝-17	土師器	壺	19.4			(16.5)	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂 細砂	良好	黒斑B
2509	溝-17	土師器	壺	20.4	34.0	7.2	43.0	明赤褐色 (2.5YR5/6)	粗砂	良好	口縁部に沈線、外面に赤色顔料、黒斑A・C
2510	溝-17	土師器	甕	10.5	12.6		13.0	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑B・BC
2511	溝-17	土師器	甕	18.6	24.2		(18.3)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2512	溝-17	土師器	甕		21.0	5.0	(24.0)	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	ススB、四国(讃岐)系土器
2513	溝-17	土師器	甕	14.3			(9.0)	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	粗砂	良好	タタキ成形
2514	溝-17	土師器	甕	14.2	17.5		(17.5)	明赤褐色 (5YR5/6)	粗砂	良好	ススB'、黒斑C
2515	溝-17	土師器	甕	16.8	18.3		(13.4)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	ススA、タタキ成形
2516	溝-17	土師器	甕	14.1	15.2	3.0	14.9	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑B・C、タタキ成形
2517	溝-17	土師器	甕	17.0	19.8	3.7	20.8	鈍い褐色 (7.5YR5/3)	礫	良好	ススB'、黒斑C、タタキ成形
2518	溝-17	土師器	甕	13.2	18.2		(15.9)	鈍い褐色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に縞沈線、ススB
2519	溝-17	土師器	甕	14.1	20.3		(18.3)	鈍い褐色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	肩部に刺突文A3、口縁部に縞沈線、ススC
2520	溝-17	土師器	甕	14.6	21.2	5.5	24.1	鈍い黄褐色 (10YR7/3)	粗砂	良好	肩部に刺突文A2、口縁部に縞沈線、ススB'、黒斑C
2521	溝-17	土師器	甕	15.5	20.6		(24.3)	灰白色 (7.5YR8/1)	粗砂	良好	口縁部に縞沈線、ススB、黒斑B
2522	溝-17	土師器	高杯	19.8		16.0	12.1	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3、黒斑A
2523	溝-17	土師器	高杯	19.9		15.1	13.5	淡褐色 (5YR8/4)	精良	良好	透かし孔3

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2524	溝-17	土師器	高杯	19.0		14.8	13.8	浅黄橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4
2525	溝-17	土師器	高杯	23.0			(12.8)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	
2526	溝-17	土師器	高杯	21.5		16.7	16.0	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	透かし孔4
2527	溝-17	土師器	高杯	24.4			(14.2)	橙色 (2.5YR7/8)	粗砂	良好	
2528	溝-17	土師器	高杯	23.4			(15.3)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔4
2529	溝-17	土師器	高杯	22.1		16.1	14.6	橙色 (5YR7/6)	粗砂	良好	透かし孔4、黒斑A
2530	溝-17	土師器	高杯	20.7		14.3	14.6	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
2531	溝-17	土師器	高杯			13.8	(1.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	
2532	溝-17	土師器	高杯	19.9			(13.3)	淡橙色 (5YR8/3)	精良	良好	
2533	溝-17	土師器	手焙		15.9		17.4	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑B
2534	溝-17	土師器	鉢	12.4			(3.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑C
2535	溝-17	土師器	鉢	11.6	11.6	3.7	8.8	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	底部穿孔
2536	溝-17	土師器	小形壺	12.4		1.0	7.9	明赤褐色 (5YR5/8)	細砂	良好	黒斑A~C、非在地系土器
2537	溝-17	土師器	器台	10.5		11.8	9.8	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔3
2538	溝-17	土師器	台付鉢	17.8	21.0	13.9	21.0	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	黒斑B・B
2539	溝-17	土師器	鉢	36.4		6.0	23.6	橙色 (5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑BC
2540	溝-17	土師器	鉢	25.3			(14.9)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	黒斑A・B
2541	溝-17	土師器	鉢	32.2		14.2	18.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2542	溝-17	土師器	鉢	28.8		6.7	20.4	明赤褐色 (5YR5/6)	細砂	良好	黒斑A
2543	溝-17	土師器	鉢	27.2			(13.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
2544	溝-17	土師器	鉢	25.5	28.6		(19.0)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	黒斑BC
2545	溝-18	須恵器	高杯			10.8	(7.5)	灰色 (N6/)	細砂	良好	
2546	溝-23	須恵器	杯	12.5			4.4	青灰色 (5BG6/1)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
2547	水田	土師器	壺	14.4			(7.4)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	肩部に鋸歯文
2548	水田	土師器	壺	14.6			(7.5)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2549	水田	土師器	壺	16.6	26.8		(27.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形
2550	水田	土師器	壺	13.0	25.2	4.4	29.7	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	胴部穿孔、黒斑C
2551	水田	土師器	壺	13.6	20.1		20.8	橙色 (2.5YR2/8)	細砂	良好	ススBC
2552	水田	土師器	壺	16.0			(14.2)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂 細砂	良好	タタキ成形、畿内(播磨)系土器
2553	水田	土師器	壺	18.7			(13.8)	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	
2554	水田	土師器	壺	17.6			(12.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	細砂	良好	タタキ成形、畿内系土器
2555	水田	土師器	壺	13.8			(5.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
2556	水田	土師器	壺	17.5			(7.0)	灰褐色 (7.5YR5/2)	細砂	良好	
2557	水田	土師器	壺	16.4			(6.5)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2558	水田	土師器	壺	20.6			(7.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2559	水田	土師器	壺	20.4			(12.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	
2560	水田	土師器	壺				(11.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	礫	良好	
2561	水田	土師器	壺		25.6	7.3	(27.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂 細砂	良好	黒斑C、タタキ成形
2562	水田	土師器	壺				(13.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
2563	水田	土師器	壺	19.2			(5.2)	浅黄色 (2.5Y7/4)	細砂	良好	四国(讃岐)系土器
2564	水田	土師器	壺	19.2			(4.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	四国(讃岐)系土器
2565	水田	土師器	壺	18.4			(6.9)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	礫	良好	四国(讃岐)系土器
2566	水田	土師器	壺	16.0			(7.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	四国(讃岐)系土器
2567	水田	土師器	壺	18.8			(6.7)	灰色 (7.5Y6/1)	細砂	良好	四国(讃岐)系土器
2568	水田	土師器	壺	16.0			(9.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	畿内(播磨)系土器
2569	水田	土師器	壺	21.8			(11.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	非在地系土器
2570	水田	土師器	壺	21.0			(12.5)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	礫	良好	頸部に突帯
2571	水田	土師器	壺	20.0			(8.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2572	水田	土師器	壺	18.7			(11.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
2573	水田	土師器	壺	19.6			(10.1)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2574	水田	土師器	壺	17.9			(6.9)	鈍い橙色 (5YR7/3)	礫	良好	
2575	水田	土師器	壺	21.9			(9.4)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	礫	良好	
2576	水田	土師器	壺	18.8			(4.1)	橙色 (2.5YR7/8)	細砂	良好	口縁部に波状文、畿内系土器
2577	水田	土師器	壺	16.9			(10.5)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	畿内系土器
2578	水田	土師器	壺				(15.4)	橙色 (2.5YR6/8)	礫	良好	黒斑B、畿内系土器
2579	水田	土師器	壺	15.8			(3.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	口縁部に円形浮文、黒斑C、畿内系土器
2580	水田	土師器	壺		16.6		(16.3)	赤橙色 (10R6/8)	細砂	良好	外面に赤色顔料、畿内系土器
2581	水田	土師器	壺	14.8			(8.6)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	
2582	水田	土師器	壺	19.2			(8.4)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
2583	水田	土師器	壺	17.3	28.0		32.1	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	黒斑C
2584	水田	土師器	壺	29.1			(28.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	ススC
2585	水田	土師器	壺	20.6			(18.3)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	肩部に刺突文A2
2586	水田	土師器	壺	20.4			(8.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
2587	水田	土師器	壺	19.2			(6.9)	浅橙色 (5YR8/4)	粗砂	良好	黒斑A
2588	水田	土師器	甕	17.6	23.6		(13.6)	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	細砂	良好	四国(讃岐)系土器
2589	水田	土師器	甕	15.9	19.4		(13.3)	淡黄色 (2.5Y8/3)	粗砂 礫	良好	
2590	水田	土師器	甕	12.8			(11.4)	淡橙色 (5YR8/3)	粗砂	良好	
2591	水田	土師器	甕	13.6			(10.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2592	水田	土師器	甕	13.0	13.8	2.3	12.5	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	黒斑A~C、タタキ成形
2593	水田	土師器	甕	11.2	12.0		(10.0)	鈍い赤褐色 (2.5YR5/3)	礫	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2594	水田	土師器	甕	14.2	15.9	1.3	14.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	ススA、黒斑C、タタキ成形
2595	水田	土師器	甕	11.2	13.9	3.2	17.1	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	ススA-C、タタキ成形
2596	水田	土師器	甕	14.5	14.8		(7.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形
2597	水田	土師器	甕	14.6			(8.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形
2598	水田	土師器	甕	13.3			(6.8)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	タタキ成形
2599	水田	土師器	甕	17.2	23.9		(18.8)	灰白色 (N8/)	礫	良好	黒斑B、タタキ成形、畿内(播磨)系 土器
2600	水田	土師器	甕	17.6			(10.4)	明褐灰色 (7.5Y7/2)	細砂	良好	タタキ成形
2601	水田	土師器	甕	20.8			(8.2)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2602	水田	土師器	甕	13.0	17.2		(10.7)	鈍い橙色 (5YR7/3)	礫	良好	
2603	水田	土師器	甕	10.6	13.6		(11.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススB
2604	水田	土師器	甕	13.2	17.7		19.0	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススB
2605	水田	土師器	甕	12.2	16.9	3.0	16.3	明褐色 (7.5YR7/1)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 3、ススB、黒斑AB
2606	水田	土師器	甕	13.1	18.2		18.3	鈍い黄橙色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススB
2607	水田	土師器	甕	14.2	19.7		21.8	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 1、ススB、黒斑B
2608	水田	土師器	甕	15.1	20.0		24.4	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑C
2609	水田	土師器	甕	15.5	22.7		(25.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文B 2、ススC
2610	水田	土師器	甕	14.8			(24.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススC
2611	水田	土師器	甕	13.7	19.0	3.5	21.1	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 2、ススB
2612	水田	土師器	甕	16.2	31.0		(28.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	山陰系土器
2613	水田	土師器	高杯	12.9			(5.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	
2614	水田	土師器	高杯			15.9	(8.7)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
2615	水田	土師器	高杯				(10.3)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔3
2616	水田	土師器	高杯			13.5	(7.3)	黄橙色 (7.5YR8/8)	精良	良好	透かし孔3
2617	水田	土師器	高杯			17.6	(7.0)	橙色 (2.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
2618	水田	土師器	高杯	19.2			(8.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	
2619	水田	土師器	高杯	20.8		13.4	14.8	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2620	水田	土師器	高杯	20.4		14.2	15.6	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔4
2621	水田	土師器	高杯	20.4			(6.7)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	黒斑A
2622	水田	土師器	高杯	24.0			(7.9)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	タタキ成形
2623	水田	土師器	高杯	17.4		14.1	12.9	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔4、黒斑A
2624	水田	土師器	高杯	21.3			(12.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	黒斑A
2625	水田	土師器	高杯	18.6			(7.5)	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2626	水田	土師器	高杯	20.5			(5.8)	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
2627	水田	土師器	高杯				(6.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	良好	
2628	水田	土師器	壺	8.0	11.9		(12.0)	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂	良好	黒斑A・BC

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2629	水田	土師器	壺	9.9			(8.0)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	
2630	水田	土師器	壺	9.4			(13.2)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	非在地系土器
2631	水田	土師器	壺	10.0	10.6		(9.5)	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	
2632	水田	土師器	壺	11.1	10.0		9.8	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	ススB、山陰系土器
2633	水田	土師器	壺	13.2			(11.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	
2634	水田	土師器	壺		10.0		(9.8)	淡橙色 (5YR8/3)	細砂	良好	
2635	水田	土師器	壺	9.8			9.0	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	
2636	水田	土師器	小形壺	9.8	10.1		(8.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
2637	水田	土師器	鉢	10.2		2.6	8.3	黄灰色 (2.5Y4/1)	細砂	良好	
2638	水田	土師器	鉢	9.0	9.7		7.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑A、完形
2639	水田	土師器	鉢	10.0	11.8		9.4	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	
2640	水田	土師器	鉢	12.4			7.6	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
2641	水田	土師器	鉢	10.8		2.7	6.3	灰白色 (2.5Y8/1)	礫	良好	
2642	水田	土師器	鉢	12.3			5.2	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	完形
2643	水田	土師器	鉢	9.7		3.5	4.2	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	
2644	水田	土師器	鉢	9.6		3.2	5.3	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	ほぼ完形
2645	水田	土師器	鉢	9.8		3.5	7.7	灰黄色 (2.5Y7/2)	細砂	良好	
2646	水田	土師器	鉢	11.2			5.6	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	
2647	水田	土師器	鉢	10.2			6.9	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形
2648	水田	土師器	鉢	13.0			(6.9)	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	細砂 礫	良好	ススBC
2649	水田	土師器	鉢	14.8			6.7	鈍い橙色 (5YR7/3)	粗砂	良好	ススC
2650	水田	土師器	鉢	13.5		4.4	6.7	淡橙色 (5YR8/3)	精良	良好	ほぼ完形
2651	水田	土師器	鉢	15.4			6.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2652	水田	土師器	鉢	12.6			4.5	鈍い橙色 (7.5Y7/3)	細砂	良好	ススB
2653	水田	土師器	鉢	14.8			(3.9)	淡橙色 (5YR8/3)	細砂	良好	
2654	水田	土師器	鉢	16.4			(5.2)	鈍い黄褐色 (10YR7/2)	細砂	良好	
2655	水田	土師器	鉢	14.7			5.3	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	
2656	水田	土師器	鉢	16.4		8.8	5.7	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
2657	水田	土師器	鉢	16.3			7.8	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	ススA
2658	水田	土師器	台付鉢	13.9		4.1	8.5	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	
2659	水田	土師器	台付鉢	13.0	12.7	7.0	8.6	明褐灰色 (7.5Y7/2)	細砂	良好	タタキ成形
2660	水田	土師器	台付鉢	13.5		6.9	7.5	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	ほぼ完形
2661	水田	土師器	台付鉢	15.8			(7.4)	浅黄褐色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2662	水田	土師器	鉢	22.5			13.2	淡赤褐色 (2.5YR7/3)	細砂	良好	ススA、タタキ成形
2663	水田	土師器	鉢	39.4	38.0		22.9	灰黄褐色 (10YR6/2)	細砂	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2664	水田	土師器	鉢	33.0		5.5	19.3	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	黒斑B・C、タタキ成形
2665	水田	土師器	鉢	19.1	21.6	8.9	21.1	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	ススBC
2666	水田	土師器	鉢	19.0	21.0		(11.6)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2667	水田	土師器	鉢	16.2			(7.9)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	黒斑A～C
2668	水田	土師器	鉢	17.6	15.6	6.4	13.3	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	黒斑A～C、タタキ成形、畿内系土器
2669	水田	土師器	鉢	13.9		2.5	13.4	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	細砂	良好	底部に円孔、黒斑BC、畿内系土器
2670	水田	土師器	鉢	37.9			(8.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
2671	水田	土師器	鉢	33.1	34.6		(14.7)	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	
2672	水田	土師器	鉢	34.6	33.2		(14.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	ススB
2673	水田	土師器	鉢	34.5			(11.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
2674	水田	土師器	鉢	38.4	34.6		(15.3)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
2675	水田	土師器	鉢	32.4	33.4		24.6	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	
2676	水田	土師器	器台	15.0			(8.6)	鈍い橙色 (2.5YR6/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2677	水田	土師器	器台				(4.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	山陰系土器
2678	水田	土師器	器台	17.4		19.0	12.9	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2679	水田	土師器	器台	18.8		18.2	11.0	赤色 (10R5/8)	細砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2680	水田	土師器	器台	20.0		18.8	11.0	橙色 (2.5YR6/6)	礫	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2681	水田	土師器	鉢	5.6			(6.1)	褐灰色 (10YR4/1)	細砂	良好	黒斑A～C、手捏ね土器
2682	水田	土師器	鉢	4.9			2.0	鈍い黄橙色 (10YR2/7)	細砂	良好	
2683	水田	土師器	支脚		13.7	7.5	6.0	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2684	水田	土師器	支脚			6.2	(8.9)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑C
2685	水田	土師器	支脚			9.7	12.8	褐灰色 (10YR5/1)	細砂	良好	完形
2686	水田	土師器	器台			9.0	(5.7)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	透かし孔4
2687	水田	土師器	器台			9.3	(6.6)	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
2688	水田	土師器	器台	9.6		11.5	8.5	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
2689	水田	土師器	器台	9.7			(6.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔2段
2690	水田	土師器	鉢				(7.2)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
2691	水田	土師器	鉢				(7.3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
2692	水田	土師器	鉢				(6.2)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	タタキ成形、製塩土器
2693	水田	土師器	手焙			14.8	(14.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	
2694	水田	土師器	甕	12.0			(3.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
2695	水田	土師器	甕	13.0			(5.1)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	
2696	水田	土師器	甕	24.0			(14.2)	黄橙色 (7.5YR7/8)	細砂	良好	粘土紐輪積み
2697	水田	土師器	甕	19.4	23.9		31.8	淡赤橙色 (2.5YR7/3)	細砂	良好	ススC、黒斑BC
2698	水田	土師器	甕	14.5	23.4	7.7	26.7	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 礫	良好	黒斑C

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2699	水田	須恵器	蓋	11.8			4.5	褐灰色 (10YR4/1)	細砂	良好	ロクロ逆回り、完形
2700	水田	須恵器	蓋	11.9			(4.8)	灰色 (N6/)	粗砂	良好	ロクロ逆回り
2701	水田	須恵器	杯	10.7		5.0	5.0	灰色 (N7/)	細砂	良好	ロクロ逆回り
2702	水田	須恵器	杯	10.9			(3.9)	灰色 (N5/)	細砂	良好	ロクロ順回り
2703	水田	須恵器	蓋				(2.9)	青灰色 (5B6/1)	細砂	良好	輪状つまみ
2704	水田	須恵器	蓋				(3.8)	灰色 (N5/)	粗砂	良好	ロクロ順回り、ボタン状つまみ
2705	水田	須恵器	高杯	10.3			(7.2)	青灰色 (5B5/1)	細砂 礫	良好	三方透かし
2706	水田	須恵器	高杯			7.5	(4.8)	灰色 (N6/)	細砂	良好	三方透かし
2707	水田	須恵器	甕	17.6			(6.0)	灰白色 (N6/)	細砂	良好	
2708	包含層	土師器	壺	10.2	28.7		(19.7)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	
2709	包含層	土師器	壺	16.8			(14.0)	鈍い黄橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	
2710	包含層	土師器	壺	19.6	28.4		(21.0)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	黒斑 A
2711	包含層	土師器	壺	16.8			(11.7)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	
2712	包含層	土師器	壺	15.4	25.2		(21.3)	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	黒斑 A B、非在地系土器
2713	包含層	土師器	壺	19.9			(6.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	
2714	包含層	土師器	壺	16.8			(12.0)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	細砂	良好	タタキ成形、非在地系土器
2715	包含層	土師器	壺	16.8			(6.0)	橙色 (5YR6/6)	細砂	良好	四国系土器
2716	包含層	土師器	壺	18.6			(5.7)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	四国系土器
2717	包含層	土師器	壺	18.0			(7.6)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	四国系土器
2718	包含層	土師器	壺	16.8			(8.0)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	四国系土器
2719	包含層	土師器	壺	17.6			(5.0)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	粗砂	良好	外面に赤色顔料、四国系土器
2720	包含層	土師器	壺	15.3			(6.4)	橙色 (5YR7/6)	礫 粗砂	良好	黒斑 A、四国系土器
2721	包含層	土師器	壺	18.4			(7.0)	橙色 (2.5YR6/6)	粗砂	良好	四国系土器
2722	包含層	土師器	壺	18.8			(8.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	外面に赤色顔料、四国系土器
2723	包含層	土師器	壺		23.8		(22.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	黒斑 B
2724	包含層	土師器	壺		28.0	7.8	(32.6)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂 礫	良好	スス C、黒斑 B
2725	包含層	土師器	壺	22.9	36.8		(16.1)	橙色 (5YR6/6)	粗砂 礫	良好	黒斑 C、タタキ成形
2726	包含層	土師器	壺	21.0	33.8		(20.2)	黄橙色 (10YR8/6)	細砂	良好	
2727	包含層	土師器	壺	18.8			(15.0)	灰黄褐色 (10YR6/2)	粗砂	良好	
2728	包含層	土師器	壺	17.6	30.0		(18.5)	橙色 (7.5YR7/6)	礫	良好	非在地系土器
2729	包含層	土師器	壺	16.5	27.5		(27.0)	橙色 (2.5YR6/8)	礫	良好	
2730	包含層	土師器	壺	16.2	25.6		(20.5)	橙色 (7.5YR6/8)	礫	良好	黒斑 B
2731	包含層	土師器	壺	17.2			(10.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	タタキ成形、四国(讃岐)系土器
2732	包含層	土師器	壺	22.4			(7.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
2733	包含層	土師器	壺	11.6			(4.9)	赤色 (10YR5/8)	精良	良好	外面に赤色顔料、非在地系土器

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2734	包含層	土師器	壺	16.5			(9.9)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	黒斑A、山陽(備後)系土器
2735	包含層	土師器	壺	18.6			(5.7)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	非在地系土器
2736	包含層	土師器	壺	16.9			(6.4)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	
2737	包含層	土師器	壺	22.4			(8.8)	橙色 (5YR7/6)	礫	良好	四国系土器
2738	包含層	土師器	壺	16.9			(3.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	口縁部に円形浮文・波状文、外面に 赤色顔料、畿内系土器
2739	包含層	土師器	壺				(8.3)	灰白色 (10YR8/1)	細砂	良好	口縁部に円形浮文・波状文、畿内系 土器
2740	包含層	土師器	壺	18.0			(12.7)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	
2741	包含層	土師器	壺	17.9			(10.4)	灰白色 (10YR8/2)	粗砂	良好	
2742	包含層	土師器	壺	18.4			(3.0)	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	口縁部に線刻
2743	包含層	土師器	壺	18.0			(11.7)	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	山陰系土器
2744	包含層	土師器	壺	15.5	26.1		(16.6)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	黒斑B
2745	包含層	土師器	壺	19.8			(20.0)	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂	良好	肩部に刺突文A 1
2746	包含層	土師器	壺	17.6	26.4		(19.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	細砂	良好	肩部に刺突文A 2
2747	包含層	土師器	壺	21.4	29.8		36.7	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	黒斑C
2748	包含層	土師器	壺	14.6	21.4		(14.0)	鈍い橙色 (5YR6/4)	細砂	良好	肩部に刺突文A 2
2749	包含層	土師器	壺	18.4			(8.1)	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	
2750	包含層	土師器	壺	17.1			(9.7)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2751	包含層	土師器	甕	13.0	13.9		(8.3)	褐灰色 (7.5YR4/1)	粗砂	良好	
2752	包含層	土師器	甕	12.7			(5.8)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	
2753	包含層	土師器	甕	14.9	16.5		(11.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	
2754	包含層	土師器	甕	15.8	18.6		(15.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂 礫	良好	黒斑A B
2755	包含層	土師器	甕	15.2			(9.1)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	ススB、タタキ成形、四国(讃岐)系 土器
2756	包含層	土師器	甕	15.2	21.0		(15.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	
2757	包含層	土師器	甕	13.6	18.3		(12.1)	灰褐色 (7.5YR4/2)	粗砂	良好	タタキ成形、畿内系土器
2758	包含層	土師器	甕	16.0			(6.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	粗砂	良好	タタキ成形
2759	包含層	弥生土器	甕			6.8	(9.4)	明褐色 (5YR7/1)	礫	良好	タタキ成形
2760	包含層	土師器	甕	14.3	16.6		(9.6)	鈍い橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	ススA、タタキ成形
2761	包含層	土師器	甕	18.4	22.8		(11.2)	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	タタキ成形
2762	包含層	土師器	甕	18.0	23.4		15.0	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	ススB、タタキ成形
2763	包含層	土師器	甕		20.1	4.6	(16.2)	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	礫	良好	ススC、黒斑C、タタキ成形
2764	包含層	土師器	甕	14.4			(8.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線、ススB
2765	包含層	土師器	甕	14.2	18.5	4.1	22.7	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に擬凹線、肩部に刺突文B 2 ススB
2766	包含層	土師器	甕	11.8	15.2		(8.3)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A -1、ススB
2767	包含層	土師器	甕	13.2	17.0		(13.9)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A 3、ススB
2768	包含層	弥生土器	甕	16.8	22.2		(12.5)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に擬凹線、ススB

掲載 番号	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2769	包含層	土師器	甕	12.2	16.0		(10.2)	灰白色 (10YR8/1)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB、黒斑B
2770	包含層	土師器	甕	11.3	16.8		(9.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2771	包含層	土師器	甕	13.1	17.6		(11.7)	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2772	包含層	土師器	甕	12.5	17.6		18.9	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2773	包含層	土師器	甕	14.6	20.2		(15.9)	灰白色 (7.5YR8/1)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1
2774	包含層	土師器	甕	14.0	20.9		(18.7)	鈍い橙色 (2.5YR6/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2775	包含層	土師器	甕	12.4	19.2		(20.0)	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2776	包含層	土師器	甕	13.0			(8.1)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2777	包含層	土師器	甕	13.8	18.4		(11.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2778	包含層	土師器	甕	14.8			(15.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2779	包含層	土師器	甕	15.5	23.0		(26.2)	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススC
2780	包含層	土師器	甕	14.2			(8.4)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	口縁部に櫛描沈線、ススB
2781	包含層	土師器	甕	13.8	21.6		(18.0)	鈍い黄橙色 (10YR5/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線、肩部に刺突文A1、黒斑B
2782	包含層	土師器	高杯	10.0		15.9	7.8	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2783	包含層	土師器	高杯			17.3	(7.3)	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔3
2784	包含層	土師器	高杯	13.7		18.8	10.3	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
2785	包含層	土師器	高杯			9.9	(8.1)	橙色 (5YR6/8)	精良	良好	透かし孔3
2786	包含層	土師器	高杯			11.5	(5.4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔3
2787	包含層	土師器	高杯			12.0	(6.0)	明赤褐色 (5YR5/8)	粗砂	良好	透かし孔4
2788	包含層	土師器	高杯			12.1	(6.2)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	透かし孔4
2789	包含層	土師器	高杯			12.9	(6.3)	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	粗砂	良好	接合部に刻目、透かし孔4、黒斑C
2790	包含層	土師器	高杯	19.3			(12.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	細砂	良好	透かし孔4
2791	包含層	土師器	高杯			13.7	(8.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	透かし孔3
2792	包含層	土師器	高杯			15.0	(9.0)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	透かし孔3
2793	包含層	土師器	高杯			12.3	(7.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精良	良好	透かし孔4
2794	包含層	土師器	高杯			13.2	(8.3)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2795	包含層	土師器	高杯			13.1	(6.8)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	透かし孔4
2796	包含層	土師器	高杯			13.2	(7.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	細砂	良好	透かし孔4
2797	包含層	土師器	高杯			16.8	(7.0)	浅黄橙色 (10YR8/2)	精良	良好	透かし孔4
2798	包含層	土師器	高杯			11.0	(8.2)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	透かし孔4、非在地系土器
2799	包含層	土師器	壺	12.5	14.6		17.4	橙色 (2.5YR6/8)	細砂	良好	ススC
2800	包含層	土師器	壺	11.1			(9.0)	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2801	包含層	土師器	壺	5.6	11.9		12.7	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	非在地系土器、ほぼ完形
2802	包含層	土師器	壺		16.3		(11.0)	橙色 (5YR7/8)	精良	良好	
2803	包含層	土師器	壺	12.0	13.8		(11.8)	橙色 (2.5YR7/8)	細砂	良好	黒斑B

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2804	包含層	土師器	壺	13.2	14.7		(12.8)	赤色 (10R4/6)	細砂	良好	
2805	包含層	土師器	蓋	12.5			2.7	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑BC
2806	包含層	土師器	甕	10.6		2.6	10.0	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	黒斑A～C
2807	包含層	土師器	甕	12.5			12.5	鈍い褐色 (7.5YR6/3)	粗砂	良好	
2808	包含層	土師器	甕	6.5			6.4	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	
2809	包含層	土師器	甕	11.8	13.0		(11.6)	灰白色 (2.5Y8/2)	細砂	良好	黒斑B、タタキ成形
2810	包含層	土師器	鉢	10.1		3.0	5.3	鈍い黄橙色 (10YR7/4)	粗砂	良好	
2811	包含層	土師器	鉢	13.3			5.4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	
2812	包含層	土師器	鉢	13.4			(5.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
2813	包含層	土師器	鉢	12.5			4.8	明赤褐色 (2.5YR5/6)	礫 粗砂	不良	
2814	包含層	土師器	鉢	11.0			5.3	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
2815	包含層	土師器	鉢	14.2			5.7	灰褐色 (7.5YR4/2)	粗砂	良好	黒斑A
2816	包含層	土師器	鉢	13.6			6.2	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	
2817	包含層	土師器	鉢	14.0			5.7	鈍い褐色 (7.5YR5/4)	粗砂	良好	
2818	包含層	土師器	鉢	14.8			5.3	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	
2819	包含層	土師器	鉢	15.4			4.8	灰白色 (7.5YR8/2)	粗砂	良好	黒斑C、完形
2820	包含層	土師器	鉢	16.4			5.6	淡白桃黄褐色	粗砂	良好	
2821	包含層	土師器	鉢	17.1			(4.7)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	
2822	包含層	土師器	鉢	16.1			4.8	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	黒斑C
2823	包含層	土師器	台付鉢			4.8	(5.5)	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	タタキ成形、製埴土器
2824	包含層	土師器	台付鉢	14.3		5.6	6.0	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	細砂	良好	山陰系土器
2825	包含層	土師器	台付鉢	16.7			(5.1)	鈍い橙色 (5YR7/4)	精良	良好	山陰系土器
2826	包含層	土師器	台付鉢	17.2			(5.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	粗砂	良好	山陰系土器
2827	包含層	土師器	鉢	15.1			8.2	明褐灰色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	黒斑A～C
2828	包含層	土師器	鉢	11.9		4.1	7.1	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	黒斑BC
2829	包含層	土師器	鉢	11.8		4.4	7.3	赤橙色 (10R6/6)	細砂	良好	外面に赤色顔料、ほぼ完形
2830	包含層	土師器	鉢	14.4		3.7	8.0	橙色 (7.5YR6/8)	礫	良好	
2831	包含層	土師器	鉢	11.8		3.3	7.6	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	黒斑BC
2832	包含層	土師器	鉢	13.5			8.0	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	口縁部に櫛描沈線
2833	包含層	土師器	鉢	13.2			8.9	橙色 (5YR7/6)	精良	良好	黒斑A～C
2834	包含層	土師器	鉢	10.0	11.5		9.2	淡橙色 (5YR8/4)	粗砂 細砂	良好	肩部に刺突文A1、黒斑C
2835	包含層	土師器	鉢	16.0			8.2	明赤褐色 (2.5YR5/6)	細砂	良好	黒斑B
2836	包含層	弥生土器	鉢	13.5	15.7	6.0	13.7	橙色 (2.5YR7/8)	粗砂	良好	黒斑C、完形
2837	包含層	土師器	鉢	34.8			(12.7)	橙色 (5YR6/8)	粗砂	良好	タタキ成形
2838	包含層	土師器	鉢	33.6			(15.9)	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	外面に赤色顔料

掲載 番号	遺 構 名	種別	器種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2839	包含層	土師器	鉢	37.5			(21.0)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂	良好	黒斑 B C
2840	包含層	土師器	鉢	40.4			(21.8)	鈍い橙色 (5YR7/4)	粗砂	良好	
2841	包含層	土師器	器台	10.5		10.8	9.0	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	透かし孔 6、非在地系土器
2842	包含層	土師器	器台	6.7		11.8	8.6	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	透かし孔 4、非在地系土器
2843	包含層	土師器	器台	8.3		12.6	8.9	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	透かし孔 4
2844	包含層	土師器	器台	9.9		10.6	8.8	橙色 (5YR6/6)	精良	良好	透かし孔 3
2845	包含層	土師器	器台	9.3		10.0	8.6	橙色 (7.5YR6/6)	粗砂	良好	山陰(因幡)系土器
2846	包含層	土師器	器台	15.0		16.6	9.4	明赤褐色 (2.5YR5/6)	細砂	良好	外面に赤色顔料、山陰系土器
2847	包含層	土師器	支脚				(11.0)	鈍い褐色 (7.5YR5/3)	粗砂	良好	タタキ成形
2848	包含層	土師器	支脚				(10.6)	褐灰色 (10YR5/1)	粗砂	良好	
2849	包含層	土師器	手焙				(7.5)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	粗砂 礫	良好	黒斑 A
2850	包含層	土師器	手焙				(10.7)	橙色 (5YR6/8)	細砂	良好	黒斑 A
2851	包含層	土師器	甌	25.9		7.6	26.5	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	完形
2852	包含層	土師器	鉢	12.6	16.1	5.8	13.2	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	粗砂	良好	
2853	包含層	土師器	甕	14.4	17.0		16.7	橙色 (5YR6/6)	粗砂	良好	スス B
2854	包含層	土師器	高杯			14.8	(9.3)	橙色 (5YR7/8)	細砂	良好	黒斑 C
2855	包含層	須恵器	壺	11.0			(4.0)	灰色 (N5/)	細砂	良好	口縁部に波状文
2856	包含層	須恵器	甕	22.0			(5.0)	灰色 (5Y5/1)	細砂	良好	
2857	包含層	須恵器	蓋	12.0			(4.5)	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	
2858	包含層	須恵器	杯	11.6	14.2		5.0	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	
2859	溝-28	土師器	高杯			10.0	(7.0)	橙色 (2.5Y7/6)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2860	溝-28	土師器	高杯				(6.0)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2861	溝-28	土師器	高杯				(5.8)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2862	溝-27	土師器	杯	13.7		9.3	2.9	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2863	溝-28	土師器	杯	13.9		11.0	2.9	橙色 (7.5YR7/6)	精良	良好	外面に赤色顔料
2864	溝-28	土師器	杯	16.9		11.8	2.8	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	細砂	良好	外面に赤色顔料
2865	溝-28	土師器	杯	15.0			3.0	鈍い橙色 (5YR7/4)	細砂	良好	
2866	溝-28	須恵器	鉢	41.4		34.0	9.1	灰色 (5Y6/1)	粗砂	良好	
2867	溝-28	須恵器	蓋	11.0			(1.9)	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	ボタン状のつまみ
2868	溝-28	須恵器	蓋				(1.9)	灰色 (5Y5/1)	細砂	良好	ボタン状のつまみ
2869	溝-28	須恵器	蓋				(1.9)	灰白色 (5Y7/1)	細砂	良好	ボタン状のつまみ
2870	溝-28	須恵器	蓋	15.1			(2.5)	灰白色 (N7/)	細砂	良好	ボタン状のつまみ
2871	溝-28	須恵器	蓋	17.4			(2.2)	灰色 (N6/)	細砂	良好	ボタン状のつまみ
2872	溝-28	須恵器	蓋	18.5			(2.1)	灰色 (N6/)	精良	良好	
2873	溝-28	須恵器	蓋	18.7			(2.4)	灰色 (5Y6/1)	精良	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2874	溝-28	須恵器	杯	12.7		7.5	4.0	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	
2875	溝-28	須恵器	杯	12.6		8.8	4.3	灰白色 (7.5Y7/1)	粗砂	良好	
2876	溝-27	須恵器	杯	13.3		9.0	4.3	灰白色 (2.5Y7/1)	粗砂	良好	
2877	溝-27	須恵器	杯	13.8		10.0	(3.7)	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	
2878	溝-27	須恵器	杯	14.0		9.2	4.2	灰白色 (2.5Y8/1)	細砂	良好	
2879	溝-27	須恵器	杯	14.4		11.0	3.6	灰色 (5Y5/1)	細砂	良好	
2880	溝-28	須恵器	杯	14.6		11.2	3.7	青灰色 (5PB6/1)	細砂	良好	
2881	溝-28	須恵器	杯	14.8		10.4	4.4	灰色 (5Y6/1)	細砂	良好	
2882	溝-28	須恵器	杯	14.8		10.8	4.1	灰白色 (2.5Y7/1)	細砂	良好	
2883	溝-28	須恵器	杯	16.4		12.6	4.1	灰色 (5Y5/1)	細砂	良好	
2884	溝-28	須恵器	杯			11.2	(2.1)	灰白色 (N7/1)	礫	良好	
2885	溝-28	須恵器	鉢			12.2	(6.5)	明青灰色 (5PB7/1)	細砂	良好	
2886	溝-28	須恵器	甕	33.2			(7.0)	灰白色 (5Y7/1)	細砂	良好	
2887	溝-28	須恵器	甕	38.8			(15.7)	灰色 (5Y5/1)	細砂	良好	口縁部にヘラ描文
2888	溝-28	須恵器	甕		41.2		(45.8)	灰白色 (N7/)	細砂	良好	
2889	包含層	土師器	高杯				(6.6)	浅黄橙色 (2.5Y8/3)	粗砂	良好	外面に赤色顔料
2890	包含層	須恵器	杯	12.0		8.5	4.2	灰白色 (5Y8/1)	粗砂	良好	
2891	包含層	須恵器	杯			9.9	(1.7)	明青灰色 (5PB7/1)	細砂	良好	
2892	包含層	須恵器	杯			12.1	(2.0)	灰色 (N6/)	細砂	良好	
2893	包含層	須恵器	鉢			10.3	(3.7)	灰白色 (7.5Y6/1)	粗砂	良好	
2894	包含層	土師器	小皿	6.8		5.2	1.5	淡黄色 (2.5Y8/4)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
2895	包含層	土師器	小皿	8.3		6.8	1.2	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精良	良好	底部ヘラキリ
2896	土壙墓-6	土師器	小皿	8.2		6.7	1.6	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
2897	土壙墓-6	土師器	小皿	7.6			1.6	鈍い赤橙色 (10R6/4)	精良	良好	黒斑A
2898	土壙-166	土師器	碗	14.0			5.3	鈍い黄橙色 (10YR6/3)	細砂	良好	早島式土器
2899	土壙墓-8	土師器	小皿	6.6		3.1	1.3	浅黄橙色 (10YR8/3)	精良	良好	底部ヘラキリ
2900	土壙墓-8	土師器	小皿	7.0		5.2	9.1	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2901	土壙墓-9	土師器	小皿	7.4		5.5	1.4	浅黄橙色 (10YR8/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2902	土壙-182	土師器	小皿	6.1		4.2	1.0	鈍い橙色 (5YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2903	土壙-182	土師器	碗			3.5	(1.8)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	早島式土器
2904	土壙-182	亀山焼	鍋				(2.7)	灰白色 (N7/)	細砂	良好	
2905	土壙-182	土師器	碗			4.2	(1.3)	灰白色 (7.5YR8/1)	細砂	良好	早島式土器
2906	土壙-182	土師器	碗			4.0	(1.9)	明褐色 (7.5YR7/2)	細砂	良好	早島式土器
2907	土壙-182	土師器	鍋				(5.6)	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	
2908	土壙-182	土師器	鍋				(4.5)	鈍い橙色 (7.5YR6/4)	細砂	良好	スス

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2909	土城-182	亀山焼	甕				(3.5)	灰白色 (10YR7/1)	細砂	良好	
2910	溝-43	亀山焼	播鉢				(7.7)	灰黄色 (2.5Y7/2)	粗砂	良好	
2911	溝-43	亀山焼	甕				(6.7)	灰色 (N6/)	細砂	良好	
2912	溝-43	亀山焼	播鉢	38.7			(10.2)	鈍い黄橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	
2913	溝-43	土師器	鍋	44.2			(6.3)	橙色 (2.5YR7/6)	細砂	良好	
2914	溝-43	土師器	碗	13.3		6.7	4.2	灰白色 (10YR7/1)	精良	良好	早島式土器
2915	溝-64	土師器	碗			4.4	(0.9)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	早島式土器
2916	溝-64	土師器	碗			3.8	(1.1)	淡黄色 (2.5Y8/3)	細砂	良好	早島式土器
2917	包含層	土師器	小皿	7.4		5.1	0.9	鈍い黄橙色 (10YR7/2)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2918	包含層	土師器	碗			6.6	(2.0)	灰白色 (10YR8/2)	細砂	良好	早島式土器
2919	包含層	土師器	碗			7.5	(1.5)	灰白色 (10YR8/2)	精良	良好	早島式土器
2920	ビット	土師器	小皿	5.8		4.9	1.0	淡橙色 (5YR8/4)	精良	良好	底部ヘラキリ
2921	ビット	土師器	小皿	7.1		5.5	1.5	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2922	ビット	土師器	小皿	8.0		6.9	1.6	鈍い橙色 (5YR6/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2923	ビット	土師器	小皿	8.8		5.8	1.8	橙色 (7.5YR7/6)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
2924	ビット	土師器	小皿	8.6		7.2	1.9	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2925	ビット	土師器	小皿	7.5		5.6	1.4	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
2926	ビット	土師器	小皿	8.1		6.5	1.5	鈍い橙色 (10YR7/3)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
2927	ビット	土師器	小皿	8.1		5.3	1.4	橙色 (5YR7/6)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2928	ビット	土師器	小皿	9.4		7.3	1.5	橙色 (7.5YR7/6)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2929	ビット	土師器	小皿	9.5		6.6	1.5	淡橙色 (5YR8/4)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2930	包含層	土師器	小皿	10.3		7.2	1.5	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2931	包含層	土師器	小皿	12.0		7.8	2.4	鈍い橙色 (7.5YR7/4)	粗砂	良好	底部ヘラキリ
2932	包含層	土師器	小皿	12.8		11.2	2.1	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	底部ヘラキリ
2933	ビット	土師器	碗	9.2		4.6	2.9	淡橙色 (5YR8/3)	精良	良好	
2934	ビット	土師器	碗	9.9		5.2	2.6	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗砂 礫	良好	黒斑A
2935	ビット	土師器	碗	9.8		2.4	3.2	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	良好	
2936	ビット	土師器	碗	10.0			3.9	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	
2937	包含層	土師器	脚台	4.9			(3.1)	灰白色 (2.5Y8/2)	粗砂	良好	
2938	包含層	土師器	脚台	6.2			(3.6)	淡黄橙色 (2.5Y8/3)	粗砂 礫	良好	
2939	包含層	備前焼	灯明皿	9.8			1.5	鈍い橙色 (7.5YR7/3)	細砂	良好	
2940	包含層	白磁	碗	5.4			1.9	灰白色 (10Y7/1)	精良	良好	
2941	包含層	唐津焼	碗			4.2	(1.9)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精良	良好	
2942	包含層	土師器	碗	14.7		6.3	5.7	浅黄橙色 (10YR8/4)	細砂	良好	早島式土器
2943	包含層	青磁	碗	15.0			(6.2)	オリーブ灰色 (10Y6/2)	精良	良好	

掲載 番号	遺 構 名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	胎土	焼成	特 徴
				口径	最大径	底径	器高				
2944	包含層	備前焼	甕	20.2			(8.4)	灰オリーブ色 (7.5Y5/2)	粗砂	良好	
2945	包含層	土師器	鍋	30.0			10.3	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	細砂	良好	ススA~C
2946	包含層	魚住焼	搦鉢	26.0			(7.7)	青灰色 (5PB6/1)	粗砂	良好	
2947	包含層	備前焼	搦鉢	27.4		16.9	11.3	灰赤色 (10R5/2)	粗砂	良好	
2948	包含層	備前焼	搦鉢	26.9		14.0	11.6	灰色 (N5/)	礫	良好	

中屋調査区石器一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法量 (cm)			重量 (g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
S 29	包含層	石鏃	サヌカイト	1.55	0.85	0.24	0.3	弥生中～後期	平基鏃
S 30	包含層	石鏃	サヌカイト	2.45	1.90	0.45	1.6	弥生中～後期	平基鏃
S 31	包含層	石鏃	サヌカイト	2.70	1.90	0.35	1.6	弥生中～後期	平基鏃
S 32	包含層	石鏃	サヌカイト	2.55	2.05	0.35	1.8	弥生中～後期	平基鏃
S 33	包含層	石鏃	サヌカイト	2.99	1.94	0.37	2.4	弥生中～後期	平基鏃
S 34	包含層	石鏃	サヌカイト	3.90	2.20	0.45	3.4	弥生中～後期	平基鏃
S 35	竪穴住居-27	石鏃	サヌカイト	5.15	2.35	0.45	5.7	弥生中～後期	平基鏃
S 36	包含層	石鏃	サヌカイト	5.35	1.55	0.57	4.2	弥生中～後期	有茎鏃C
S 37	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.10)	1.35	0.30	(0.8)	弥生中～後期	有茎鏃C
S 38	包含層	石鏃	サヌカイト	(2.65)	1.20	0.40	(1.5)	弥生中～後期	有茎鏃C
S 39	包含層	石鏃	サヌカイト	4.95	1.45	0.55	3.5	弥生中～後期	有茎鏃C
S 40	竪穴住居-16	石鏃	サヌカイト	2.85	1.50	0.38	1.5	弥生後期	有茎鏃A
S 41	包含層	石鏃	サヌカイト	5.75	2.15	0.70	6.3	弥生中～後期	有茎鏃A
S 42	包含層	石鏃	サヌカイト	(3.05)	2.15	0.50	(3.4)	弥生中～後期	有茎鏃A
S 43	包含層	石鏃	安山岩	(3.55)	1.90	0.45	(3.1)	弥生中～後期	有茎鏃B
S 44	竪穴住居-26	石鏃	サヌカイト	(3.25)	1.70	0.55	(2.8)	弥生中期	有茎鏃B
S 45	袋状土壙-16	石鏃	サヌカイト	4.65	1.60	0.40	2.4	弥生後期	有茎鏃B
S 46	袋状土壙-20	石包丁	サヌカイト	11.00	4.90	1.40	109.1	弥生後期	
S 47	包含層	石包丁	サヌカイト	10.70	4.75	1.25	75.5	弥生中～後期	
S 48	包含層	石包丁	安山岩	(9.45)	4.75	1.00	(47.1)	弥生中～後期	
S 49	包含層	石包丁	サヌカイト	9.40	5.55	1.50	106.5	弥生中～後期	
S 50	溝-3	石包丁	サヌカイト	9.40	5.00	0.90	55.6	弥生中～後期	
S 51	包含層	石包丁	サヌカイト	9.40	4.80	0.55	35.7	弥生中～後期	
S 52	溝-3	石包丁	サヌカイト	11.35	5.60	1.20	82.7	弥生中～後期	
S 53	溝-3	石包丁	サヌカイト	13.30	6.00	1.23	86.9	弥生中～後期	
S 54	溝-3	石包丁	サヌカイト	13.40	6.00	1.95	102.5	弥生中～後期	
S 56	包含層	石包丁	サヌカイト	(4.15)	4.85	1.08	(27.3)	弥生中～後期	
S 57	竪穴住居-52	石包丁	サヌカイト	(4.00)	4.25	0.80	(15.4)	弥生中～後期	
S 58	包含層	石包丁	サヌカイト	(3.20)	3.70	0.95	(12.9)	弥生中～後期	
S 59	包含層	石包丁	サヌカイト	(3.90)	4.20	0.70	(11.0)	弥生中～後期	
S 60	包含層	石包丁	サヌカイト	(4.15)	4.75	1.10	(24.2)	弥生中～後期	
S 61	包含層	石包丁	サヌカイト	(3.60)	4.50	1.00	(20.3)	弥生中～後期	
S 62	土壙-72	石包丁	サヌカイト	(3.45)	5.10	0.78	(14.9)	弥生後期	
S 63	溝-3	石包丁	サヌカイト	(4.30)	4.50	0.68	(14.1)	弥生中～後期	
S 64	溝-3	石包丁	サヌカイト	(6.20)	5.35	1.55	(54.7)	弥生中～後期	
S 65	土壙-72	石包丁	サヌカイト	(4.80)	4.00	0.95	(24.1)	弥生後期	
S 66	竪穴住居-75	石包丁	サヌカイト	(5.50)	2.45	1.10	(17.8)	弥生中～後期	
S 67	包含層	石包丁	結晶片岩	(6.95)	4.90	0.70	(32.1)	弥生中～後期	磨製
S 68	包含層	刃器	サヌカイト	7.10	4.60	1.15	38.3	古墳前～中期	
S 69	包含層	刃器	サヌカイト	(4.95)	6.05	0.80	(25.0)	弥生中～後期	
S 70	包含層	刃器	サヌカイト	5.55	3.20	0.95	18.7	弥生中～後期	
S 71	包含層	刃器	サヌカイト	6.00	3.85	0.82	20.4	弥生中～後期	
S 72	包含層	刃器	サヌカイト	(6.45)	3.95	0.51	(14.3)	弥生中～後期	
S 73	包含層	刃器	サヌカイト	(4.90)	4.60	0.97	(23.5)	弥生中～後期	
S 74	溝-3	刃器	サヌカイト	6.90	6.55	1.00	50.9	弥生中～後期	
S 75	溝-3	刃器	サヌカイト	19.30	10.55	1.80	262.9	弥生中～後期	
S 76	包含層	刃器	サヌカイト	6.60	4.90	0.73	23.5	弥生中～後期	
S 77	包含層	不明石器	サヌカイト	(7.25)	4.65	0.90	(23.8)	弥生中～後期	
S 78	竪穴住居-16	不明石器	サヌカイト	(5.80)	5.20	1.15	(38.3)	弥生後期	
S 79	包含層	不明石器	サヌカイト	(6.75)	4.45	0.95	(25.7)	弥生中～後期	
S 80	包含層	不明石器	サヌカイト	(6.30)	5.30	1.02	(42.3)	弥生中～後期	
S 81	包含層	石鏃	安山岩	23.10	11.70	2.40	674.0	弥生中～後期	

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法 量 (cm)			重量 (g)	時 期	備 考
				長さ	幅	厚さ			
S 82	袋状土壙-24	石斧	玢岩	(10.45)	6.80	5.18	(614.3)	弥生中～後期	大型蛤刃
S 83	竪穴住居-19	石斧	安山岩	14.65	6.40	4.75	798.5	弥生中～後期	大型蛤刃
S 84	包含層	石斧	安山岩	19.50	8.10	5.90	1492.5	弥生中～後期	大型蛤刃
S 85	包含層	石斧	玢岩	(10.20)	5.10	5.20	(404.7)	弥生中～後期	大型蛤刃
S 86	包含層	石斧	玢岩	(8.80)	6.90	4.95	(416.5)	弥生中～後期	大型蛤刃
S 87	包含層	石斧	凝灰岩	(7.80)	7.10	3.50	(233.8)	弥生中～後期	大型蛤刃
S 88	竪穴住居-70	石錘	斑岩	5.70	5.45	3.63	163.3	古墳前期	打欠き
S 89	包含層	石錘	安山岩	6.00	6.00	3.90	185.6	古墳前期	有溝
S 90	竪穴住居-99	石錘	玢岩	7.40	7.25	4.40	333.2	古墳前期	打欠き
S 91	竪穴住居-82	石錘	花崗岩	9.85	7.85	5.60	578.5	古墳前期	打欠き
S 92	竪穴住居-70	石杵	安山岩	1.80	5.15	4.15	337.6	古墳前期	水銀朱付着
S 93	井戸-1	砥石	流紋岩	8.00	2.95	1.70	71.0	弥生後期	
S 94	竪穴住居-48	砥石	流紋岩	2.70	1.80	1.38	10.3	古墳前期	
S 95	袋状土壙-31	砥石	流紋岩	5.30	3.15	2.20	53.7	弥生後期	
S 96	土壙-40	砥石	流紋岩	13.10	3.50	2.65	133.3	弥生後期	
S 97	竪穴住居-46	砥石	泥岩	9.00	2.65	2.25	70.6	古墳前期	
S 98	竪穴住居-78	砥石	流紋岩	10.60	8.05	5.80	471.0	古墳前期	
S 99	竪穴住居-44	砥石	-	6.90	1.70	1.75	25.3	古墳前期	
S 100	竪穴住居-78	砥石	頁岩	5.60	4.45	1.45	56.5	古墳前期	
S 101	竪穴住居-79	砥石	頁岩	3.95	2.70	2.00	34.0	古墳前期	
S 102	竪穴住居-79	砥石	流紋岩	2.75	3.40	1.10	13.5	古墳前期	
S 103	竪穴住居-91	砥石	流紋岩	8.00	2.90	2.25	70.6	古墳前期	
S 104	竪穴住居-70	砥石	流紋岩	9.85	3.55	3.30	156.5	古墳前期	
S 105	土壙-148	砥石	閃緑岩	11.70	6.15	5.30	331.4	古墳前期	
S 106	竪穴住居-80	砥石	頁岩	4.25	1.65	1.45	15.1	古墳前期	
S 107	竪穴住居-69	砥石	流紋岩	3.10	2.40	1.15	(11.3)	古墳前期	
S 108	竪穴住居-92	砥石	頁岩	10.75	5.10	3.30	156.0	古墳前期	
S 109	竪穴住居-98	砥石	頁岩	6.15	5.55	7.10	270.5	古墳前期	
S 110	竪穴住居-106	砥石	安山岩	13.45	4.55	1.85	191.4	古墳前期	
S 111	竪穴住居-104	砥石	流紋岩	4.45	4.10	2.95	74.6	古墳前期	
S 112	竪穴住居-115	砥石	-	10.30	2.90	2.20	76.7	古墳中期	
S 113	竪穴住居-73	砥石	頁岩	10.40	3.65	2.15	75.1	古墳前期	
S 114	溝-16	砥石	流紋岩	8.65	7.50	3.70	970.4	古墳前期	
S 115	溝-4	砥石	流紋岩	7.90	3.55	2.30	47.3	古墳前期	
S 116	溝-4	砥石	頁岩	5.85	2.30	1.05	12.4	古墳前～中期	
S 117	土壙墓-9	砥石	流紋岩	(9.50)	4.02	1.10		中世	
S 118	水田	砥石	頁岩	8.90	3.35	2.15	83.8	古墳前～中期	
S 119	溝-16	砥石	流紋岩	9.55	2.55	3.35	81.6	古墳前期	
S 120	溝-4	砥石	頁岩	6.55	3.70	3.95	177.3	古墳前～中期	
S 122	溝-3	砥石	玄武岩	15.70	6.20	6.70	825.9	弥生中～後期	
S 123	竪穴住居-36	砥石	閃緑岩	18.40	9.25	8.50	1177.0	古墳前期	
S 124	竪穴住居-70	砥石	閃緑岩	20.10	7.15	5.90	870.4	古墳前期	
S 125	土壙-108	砥石	安山岩	12.30	11.25	2.10	352.7	弥生中期	
S 126	竪穴住居-119	砥石	閃緑岩	12.50	9.20	4.55	190.5	古墳中期	
S 127	竪穴住居-82	砥石	粘板岩	18.00	16.10	4.35	1879.7	古墳前期	
S 128	竪穴住居-119	砥石	流紋岩	11.90	12.00	5.00	1262.6	古墳中期	
S 129	竪穴住居-122	砥石	流紋岩	14.70	5.30	5.90	666.0	古墳前期	
S 130	包含層	砥石	流紋岩	20.00	5.85	4.50	739.0	中世	
S 131	包含層	台石	玢岩	19.20	11.80	9.60	4400.0	-	

中屋調査区土製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	法 量 (cm)				重量 (g)	色調	胎土	時 期	備 考
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C18	溝-3	分銅形土製品	(10.20)	7.05	1.30		(105.8)	鈍い赤褐色	細砂	弥生中期	櫛描文
C19	溝-3	分銅形土製品	(6.50)	6.80	1.20		(48.1)	黒褐色	細砂	弥生中期	櫛描文、穿孔
C20	包含層	分銅形土製品	(5.75)	5.50	0.92		(32.4)	灰白色	細砂	弥生中期	櫛描文、穿孔
C21	溝-3	分銅形土製品	(7.30)	6.50	1.30		(57.1)	淡橙色	細砂	弥生中期	櫛描文
C22	土壇-87	分銅形土製品	(5.60)	(6.70)	1.40		(81.3)	灰黄褐色	細砂	弥生中期	櫛描文
C23	包含層	分銅形土製品	(6.20)	9.00	1.40		(74.1)	橙色	細砂	弥生中~後期	
C24	包含層	分銅形土製品	(3.55)	(4.65)	1.15		(14.1)	鈍い黄橙色	細砂	弥生中~後期	刺突文、穿孔
C25	包含層	分銅形土製品	(5.05)	(5.50)	1.00		(25.0)	橙色	細砂	弥生中~後期	刺突文、穿孔
C26	溝-3	分銅形土製品	(4.88)	5.30	1.68		(35.0)	橙色	精良	弥生中~後期	刺突文
C27	包含層	分銅形土製品	(6.20)	(7.50)	1.30		(54.9)	橙色	細砂	弥生中~後期	刺突文、穿孔
C28	竪穴住居-105	有溝管状土錘	8.20	4.50		0.45	148.0	橙褐色	細砂	古墳前期	
C29	竪穴住居-106	有溝管状土錘	(7.25)	4.10		0.80	(61.2)	橙色	細砂	古墳前期	
C30	竪穴住居-106	管状土錘	7.50	5.45		1.85	(202.8)	鈍い橙色	細砂	古墳前期	円筒形
C31	包含層	管状土錘	7.00	4.20		1.65	(114.9)	灰白色	細砂	-	円筒形
C32	包含層	管状土錘	7.20	3.20		1.60	62.0	橙色	細砂	-	円筒形
C33	包含層	管状土錘	(7.10)	2.75		1.05	(43.8)	鈍い赤褐色	精良	-	円筒形
C34	包含層	管状土錘	7.40	2.70		1.15	46.6	赤褐色	精良	-	円筒形
C35	包含層	管状土錘	7.25	2.80		1.00	49.8	灰黄色	細砂	-	円筒形
C36	竪穴住居-91	管状土錘	4.40	4.30		1.70	98.3	鈍い橙色	細砂	古墳前期	円筒形
C37	包含層	管状土錘	6.30	3.90		1.90	70.3	橙色	細砂	-	円筒形
C38	竪穴住居-91	管状土錘	6.60	2.80		1.15	54.0	橙色	細砂	古墳前期	円筒形
C39	竪穴住居-113	管状土錘	6.45	2.90		1.20	49.1	浅黄橙色	粗砂	古墳前期	円筒形
C40	包含層	管状土錘	5.60	3.10		1.15	47.3	浅黄橙色	細砂	-	円筒形
C41	溝-16	管状土錘	5.18	2.38		0.80	35.5	褐灰色	細砂	古墳前期	円筒形
C42	溝-16	棒状土錘	9.35	3.20		0.60	78.0	鈍い黄褐色	粗砂	古墳前期	両端穿孔
C43	包含層	管状土錘	7.80	1.80		0.60	22.8	灰白色	細砂	-	紡錘形
C44	溝-67	管状土錘	6.00	1.85		0.60	16.9	鈍い橙色	細砂	中世	紡錘形
C45	竪穴住居-118	管状土錘	5.75	1.65		0.60	14.7	黒色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C46	竪穴住居-118	管状土錘	5.40	2.00		0.55	17.5	鈍い黄褐色	細砂	-	紡錘形
C47	竪穴住居-118	管状土錘	5.00	2.00		0.70	16.5	鈍い赤褐色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C48	竪穴住居-118	管状土錘	4.95	1.90		0.65	14.5	鈍い黄褐色	細砂	古墳中期	紡錘形
C49	竪穴住居-118	管状土錘	4.55	1.80		0.60	13.4	灰褐色	礫、粗砂	古墳中期	紡錘形
C50	竪穴住居-118	管状土錘	4.70	1.80		0.65	13.0	橙色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C51	溝-28	管状土錘	(5.20)	1.70		0.65	(12.6)	赤黒色	精良	古代	紡錘形
C52	竪穴住居-118	管状土錘	5.25	1.75		0.60	13.1	鈍い橙色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C53	溝-67	管状土錘	(4.20)	2.10		0.55	(12.7)	灰褐色	細砂	中世	紡錘形
C54	包含層	管状土錘	4.80	1.60		0.60	(8.6)	黒色	粗砂	-	紡錘形
C55	溝-67	管状土錘	4.75	1.60		0.60	9.5	黒色	細砂	中世	紡錘形
C56	溝-67	管状土錘	4.70	1.40		0.60	8.0	黒褐色	細砂	中世	紡錘形
C57	包含層	管状土錘	4.60	1.60		0.60	9.2	褐灰色	粗砂	-	紡錘形
C58	溝-28	管状土錘	4.50	1.55		0.50	9.5	鈍い橙色	細砂	古代	紡錘形
C59	溝-28	管状土錘	4.40	1.75		0.55	10.7	鈍い黄褐色	細砂	古代	紡錘形
C60	溝-67	管状土錘	(4.80)	1.65		0.55	(10.7)	鈍い褐色	細砂	中世	紡錘形
C61	包含層	管状土錘	(3.90)	1.45		0.50	(5.4)	鈍い橙色	細砂	-	紡錘形
C62	溝-67	管状土錘	4.50	1.70		0.50	11.0	鈍い赤褐色	細砂	中世	紡錘形
C63	竪穴住居-118	管状土錘	4.40	1.60		0.50	8.5	鈍い橙色	細砂	古墳中期	紡錘形
C64	包含層	管状土錘	4.55	1.75		0.60	9.6	鈍い橙色	細砂	-	紡錘形
C65	竪穴住居-118	管状土錘	4.35	1.70		0.60	10.5	鈍い橙色	細砂	古墳中期	紡錘形
C66	竪穴住居-118	管状土錘	4.25	1.60		0.60	9.3	灰褐色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C67	竪穴住居-118	管状土錘	4.10	1.55		0.60	8.6	褐灰色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C68	竪穴住居-118	管状土錘	4.00	1.50		0.60	(8.4)	鈍い黄褐色	粗砂	古墳中期	紡錘形
C69	竪穴住居-118	管状土錘	3.50	1.40		0.65	6.4	黒褐色	粗砂	古墳中期	紡錘形

掲載 番号	遺構名	器 種	法 量 (cm)				重量 (g)	色 調	胎 土	時 期	備 考
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C 70	溝-28	管状土錘	2.50	2.40		0.20	13.3	橙色	細砂	古代	球形
C 71	竪穴住居-47	管状土錘	3.10	4.15		0.90	50.3	橙色	細砂	古墳前期	偏球形
C 72	竪穴住居-55	紡錘車	3.60	3.50	1.90	0.60	25.2	橙色	細砂	古墳前期	
C 73	竪穴住居-79	紡錘車	6.50	7.10	0.35	0.40	20.5	鈍い黄橙色	細砂	古墳前期	土器片加工
C 74	竪穴住居-70	紡錘車	(2.70)	3.40	0.40	0.35	(5.2)	黒褐色	細砂	古墳前期	土器片加工
C 75	包含層	紡錘車	2.80	2.90	0.45	0.40	4.2	鈍い橙色	細砂	-	土器片加工
C 76	水田	紡錘車	(2.70)	3.30	0.35	0.40	(4.0)	灰黄色	細砂	古墳前期	土器片加工
C 77	竪穴住居-106	紡錘車	5.80	5.45	0.55	0.70	18.3	灰黄褐色	細砂	古墳前期	
C 78	溝-3	土製円盤	5.90	5.50	1.10		41.7	明褐灰色	細砂	弥生中期	脚台充填部か
C 79	溝-4	不明土製品	4.10	5.80	4.80		168.0	明褐灰色	細砂	古墳前期	支脚か
C 80	包含層	円筒埴輪	(7.70)	(7.00)	1.20		(75.1)	淡黄橙色	細砂	-	
C 81	土壙-183	不明土製品	(5.60)	5.40	(4.90)		(108.7)	青灰色	細砂	中世	当具状
C 82	包含層	羽口	(12.8)	8.10	7.50		(348.7)	褐灰色	細砂、礫	古墳中期	
C 83	溝-28	平瓦	34.30	(15.80)	2.30		(480.9)	灰色	礫	古代	凸面縄目
C 84	溝-28	平瓦	(32.30)	(24.10)	(2.80)			灰色	礫	古代	凸面縄目
C 85	溝-28	平瓦	(15.90)	(9.90)	(2.80)			褐灰色	礫	古代	凸面縄目
C 86	溝-28	平瓦	(11.30)	(8.80)	(2.90)			灰色	礫	古代	凸面縄目
C 87	溝-28	平瓦	(16.70)	(24.10)	(2.80)		(611.0)	灰色	礫	古代	凸面縄目
C 88	溝-28	平瓦	(19.80)	(23.10)	2.70			灰白色	細砂	古代	凸面縄目
C 89	溝-27	丸瓦	(10.30)	(10.80)	2.20			灰白色	礫	古代	凸面ナデ
C 90	溝-27	平瓦	(15.20)	(16.80)	(1.90)			灰色	礫	古代	凸面縄目
C 91	ピット	平瓦	(19.20)	(19.30)	(2.35)			鈍い黄橙色	細砂	古代	凸面縄目
C 92	包含層	丸瓦	(10.20)	(9.45)	1.80			灰白色	細砂	古代	凸面縄目
C 93	包含層	平瓦	(8.40)	(7.90)	(2.50)			橙色	礫	古代	凸面縄目

中屋調査区金属器一覽表

掲載 番号	遺構名	器 種	材質	法 量 (cm)			重量 (g)	時 期	備 考
				長さ	幅	厚さ			
M 6	土壇-110	鏡	銅	6.65	6.65	0.35	41.32	古墳前期	重圈文
M 7	竪穴住居-94	鍔	銅	(2.10)	1.10	0.40	(1.15)	古墳前期	
M 8	溝-16	鍔	鉄	(2.85)	(1.05)	0.20	(1.50)	古墳前期	
M 9	溝-65	鍔	鉄	(3.20)	1.00	0.40	(2.52)	古墳前期	
M10	溝-4	鍔	鉄	(3.70)	1.10	0.30	(2.19)	古墳前期	
M11	溝-16	鍔	鉄	(2.90)	(1.15)	0.25	(3.00)	古墳前期	
M12	包含層	鍔	鉄	(3.85)	1.70	0.50	(6.15)	古墳前期	
M13	溝-27	鍔	鉄	(3.25)	1.00	0.25	(1.82)	古代	
M14	竪穴住居-88	鍔	鉄	(3.70)	1.30	0.30	(3.38)	古墳前期	
M15	溝-16	鍔	鉄	(2.85)	1.60	0.25	(3.00)	古墳前期	
M16	竪穴住居-75	鍔	鉄	(3.30)	1.70	0.25	(2.55)	古墳前期	
M17	竪穴住居-25	鍔	鉄	(3.90)	(1.40)	0.30	(2.07)	弥生後期	
M18	包含層	鍔	鉄	(3.80)	1.80	0.20	(3.38)	古墳前期	
M19	包含層	鍔	鉄	(5.30)	1.80	0.50	(7.53)	古墳前期	
M20	竪穴住居-26	鍔	鉄	(5.00)	1.80	0.30	(5.45)	弥生後期	未製品か
M21	竪穴住居-52	鍔	鉄	(4.60)	1.40	0.20	(3.19)	古墳前期	
M22	竪穴住居-84	鍔	鉄	(4.20)	1.40	0.50	(5.52)	古墳前期	
M23	竪穴住居-42	鍔	鉄	(5.35)	1.75	0.45	(7.30)	古墳前期	
M24	竪穴住居-21	鍔	鉄	(5.70)	1.20	0.40	(4.43)	弥生後期	
M25	包含層	鍔	鉄	(3.30)	1.75	0.50	(4.60)	古墳前期	
M26	溝-16	鍔	鉄	3.70	1.60	0.35	7.60	古墳前期	
M27	竪穴住居-42	鍔	鉄	(2.35)	(1.60)	0.35	(2.30)	古墳前期	
M28	溝-16	鍔	鉄	(2.80)	1.45	0.40	(2.70)	古墳前期	
M29	溝-4	鍔	鉄	(10.30)	3.05	0.55	(34.90)	古墳前期	
M30	溝-4	鍔	鉄	(6.25)	(3.30)	0.50	(18.60)	古墳前期	
M31	竪穴住居-69	鍔	鉄	(6.80)	1.05	0.40	(5.30)	古墳前期	
M32	溝-16	鍔	鉄	(8.75)	2.00	0.35	(9.80)	古墳前期	
M33	水田	鍔	鉄	(10.50)	1.50	0.40	(11.63)	古墳前期	
M34	竪穴住居-99	鍔	鉄	(3.70)	1.70	0.20	(2.22)	古墳前期	
M35	溝-16	鍔	鉄	(4.05)	1.75	0.30	(4.30)	古墳前期	
M36	竪穴住居-52	鍔	鉄	(4.60)	1.30	0.80	(6.59)	古墳前期	
M37	溝-28	鍔	鉄	(4.70)	(2.40)	0.30	(7.19)	古墳前期	
M38	ピット	鍔	鉄	(4.60)	(1.60)	0.30	(6.20)	中世	
M39	溝-4	鍔	鉄	(2.80)	(1.20)	0.60	(5.55)	古墳前期	
M40	包含層	手鎌	鉄	(3.10)	(4.70)	0.40	(13.55)	古墳前期	
M41	竪穴住居-43	手鎌	鉄	2.20	(5.90)	0.35	(16.44)	古墳前期	
M42	竪穴住居-70	手鎌	鉄	2.80	(4.50)	0.30	(13.21)	古墳前期	
M43	包含層	手鎌	鉄	(3.80)	(2.50)	0.20	(7.80)	古墳前期	
M44	水田	鍬・鋤	鉄	5.20	9.10	0.40	65.82	古墳前期	
M45	竪穴住居-28	斧	鉄	9.10	4.00	0.80	(54.56)	弥生後期	
M46	竪穴住居-82	鉈	鉄	(5.10)	0.90	0.30	(4.31)	古墳前期	
M47	包含層	鉈	鉄	(6.90)	0.90	0.25	(6.08)	古墳前期	
M48	竪穴住居-105	錐	鉄	(8.30)	0.55	0.45	(3.47)	古墳前期	
M49	竪穴住居-103	鉈	鉄	(6.70)	1.00	0.70	(7.94)	古墳前期	未製品か
M50	竪穴住居-72	刀子	鉄	(8.40)	1.30	0.20	(10.49)	古墳前期	鹿角装
M51	竪穴住居-59	刀子	鉄	(8.50)	1.70	0.20	(10.85)	古墳前期	
M52	水田	刀子	鉄	(10.10)	1.65	0.30	(15.70)	古墳前期	
M53	竪穴住居-52	刀子	鉄	(2.95)	0.60	0.40	(1.14)	古墳前期	
M54	水田	刀子	鉄	(5.40)	1.60	0.20	(5.63)	近世	
M55	包含層	刀子	鉄	(4.80)	1.30	0.20	(4.87)	-	
M56	包含層	刀子	鉄	(3.30)	1.10	0.25	(2.50)	古墳前期	茎
M57	包含層	刀子	銅	(6.30)	1.40	0.30	(7.19)	近世	柄

掲載 番号	遺構名	器種	材質	法 量 (cm)			重量 (g)	時 期	備 考
				長さ	幅	厚さ			
M58	土壙墓-9	剃刀	鉄	(18.70)	2.40	0.25	(31.83)	中世	
M59	土壙墓-5	刀	鉄	(39.20)	(3.70)	0.90	(165.20)	中世	
M60	土壙-182	釘	鉄	(7.60)	0.70	0.80	(18.34)	中世	
M61	包含層	釘	鉄	(8.00)	0.95	0.50	(20.30)	中世	
M62	包含層	釘	鉄	(5.90)	0.70	1.80	(10.46)	中世	
M63	包含層	釘	鉄	(5.00)	0.80	0.80	(7.60)	中世	
M64	包含層	釘	鉄	(4.70)	0.75	0.40	(5.80)	中世	
M65	溝-17	釘	鉄	(2.80)	0.60	0.60	(2.70)	中世	
M66	土壙墓-7	釘	鉄	(2.40)	0.60	0.60	(1.80)	中世	
M67	竪穴住居-52	釘	鉄	(3.30)	0.50	0.50	(2.00)	中世	
M68	ピット	釘	鉄	(3.60)	0.60	0.50	(2.00)	中世	
M69	包含層	釘	鉄	(5.30)	0.50	0.40	(4.20)	中世	
M70	包含層	釘	鉄	(1.75)	1.00	0.40	(1.46)	中世	
M71	溝-43	釘	鉄	(2.80)	0.03	0.45	(3.25)	中世	
M72	包含層	釘	鉄	5.80	0.60	0.50	4.17	中世	
M73	ピット	釘	鉄	(1.50)	0.30	0.50	(0.40)	中世	
M74	包含層	釘	鉄	(6.50)	0.90	0.75	(7.23)	中世	
M75	溝-4	釘	鉄	(4.90)	0.55	0.40	(3.20)	中世	
M76	竪穴住居-52	釘	鉄	(2.40)	0.50	0.40	(1.31)	中世	
M77	包含層	釘	鉄	(11.30)	0.60	0.50	(20.20)	中世	
M78	土壙-177	不明金具	鉄	(5.40)	0.80	0.30	(6.73)	古墳前期	
M79	竪穴住居-37	不明金具	鉄	(5.10)	1.10	0.30	(5.91)	古墳前期	
M80	包含層	不明金具	鉄	(3.10)	0.90	0.70	(3.50)	中世	
M81	包含層	不明金具	鉄	(2.90)	0.70	0.70	(2.77)	中世	
M82	竪穴住居-55	不明金具	鉄	(8.20)	1.55	0.20	(10.58)	古墳前期	
M83	包含層	鈎針	銅	6.30	3.00	0.45	10.10	中世	
M84	溝-4	不明金具	鉄	(3.90)	2.30	0.20	(6.04)	古墳前期	
M85	土壙-171	鈎	鉄	(7.50)	(5.40)	0.80	(38.64)	中世	
M86	包含層		鉄	(5.00)	1.90	0.45	(11.85)	古墳前期	鉄素材か
M87	溝-16	鈍	鉄	7.10	1.00	0.22	5.54	古墳前期	未製品か
M88	竪穴住居-52		鉄	(2.40)	0.25	0.35	(0.38)	古墳前期	鉄素材か
M89	竪穴住居-52		鉄	(2.10)	0.40	0.35	(0.52)	古墳前期	鉄素材か
M90	竪穴住居-52		鉄	(1.30)	0.40	0.35	(0.47)	古墳前期	鉄素材か
M91	包含層		鉄	4.70	1.10	0.20	3.40	古墳前期	鉄素材か
M92	包含層		鉄	1.25	(0.60)	0.40	(0.71)	古墳前期	鉄素材か
M93	包含層		鉄	2.65	1.30	0.30	1.57	古墳前期	鉄素材か
M94	包含層		鉄	2.60	1.00	0.35		古墳前期	鉄素材か
M95	溝-70	銭	銅	2.45	2.45	0.12	(2.60)	中世	開元通寶
M96	溝-70	銭	銅	2.40	2.40	0.10	2.90	中世	開元通寶
M97	ピット	銭	銅	2.20	2.20	0.10	1.65	中世	淳化元寶
M98	包含層	銭	銅	2.41	2.41	0.11	3.10	中世	天聖元寶
M99	溝-70	銭	銅	2.45	2.45	0.10	3.30	中世	皇宋通寶
M100	ピット	銭	銅	2.21	2.21	0.11	2.50	中世	元豊通寶

中屋調査区玉類一覽表

掲載 番号	遺構名	器 種	材質	法 量 (mm)				重量 (g)	色 調	時 期	備 考
				長さ	幅	厚さ	孔径				
J 1	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.00	5.00		2.00	(0.1)	暗緑灰色	古墳中期	欠損
J 2	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.00	5.20		2.00	(0.1)	緑灰色	古墳中期	欠損
J 3	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.00	5.00		1.85	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 4	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.75	5.00		2.00	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 5	竪穴住居-114	白玉	滑石	2.50	4.85		2.00	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 6	竪穴住居-114	白玉	滑石	2.50	5.00		1.75	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 7	竪穴住居-114	白玉	滑石	4.25	4.75		1.75	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 8	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.00	5.00		2.00	(0.1)	暗緑灰色	古墳中期	欠損
J 9	竪穴住居-114	白玉	滑石	1.50	4.80		2.00	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 10	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.00	4.80		2.00	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 11	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.20	5.00		2.00	(0.1)	暗緑灰色	古墳中期	欠損
J 12	竪穴住居-114	白玉	滑石	2.50	4.80		2.00	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 13	竪穴住居-114	白玉	滑石	1.90	4.75		2.00	(0.1)	緑灰色	古墳中期	欠損
J 14	竪穴住居-114	白玉	滑石	1.75	5.00		2.00	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 15	竪穴住居-114	白玉	滑石	2.00	5.00		1.80	(0.1)	緑灰色	古墳中期	欠損
J 16	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.80	5.00		2.00	0.1	緑灰色	古墳中期	
J 17	竪穴住居-114	白玉	滑石	3.50	5.00		2.00	0.1	緑灰色	古墳中期	
J 18	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.20	4.85		1.75	0.1	緑灰色	古墳中期	
J 19	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.25	4.70		1.80	0.1	緑灰色	古墳中期	
J 20	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.35	4.05		1.75	0.1	暗灰色	古墳中期	
J 21	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.70	4.10		1.80	0.1	暗灰色	古墳中期	
J 22	竪穴住居-119	白玉	滑石	1.40	4.95		2.00	0.1	暗灰色	古墳中期	
J 23	竪穴住居-119	白玉	滑石	1.70	4.00		1.70	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 24	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.05	3.95		1.75	0.1	暗緑灰色	古墳中期	
J 25	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.85	5.20		1.90	0.1	暗灰色	古墳中期	
J 26	竪穴住居-119	白玉	滑石	2.85	5.20		2.00	0.1	暗灰色	古墳中期	
	竪穴住居-119	白玉	滑石	1.70	4.30		2.00	0.1	暗灰色	古墳中期	
J 27	竪穴住居-119	勾玉	滑石	39.00	20.50	4.30	2.00	5.5	暗緑灰色	古墳中期	
J 28	竪穴住居-119	平玉	琥珀	13.50	(8.25)	8.0	1.90	(0.9)	赤褐色	古墳中期	欠損
J 29	竪穴住居-119	平玉	琥珀	(13.50)	(8.25)	(7.5)	2.00	(0.6)	赤褐色	古墳中期	欠損
J 30	竪穴住居-114	管玉	凝灰岩	18.00	5.00		3.00	0.8	青灰色	古墳中期	
J 31	竪穴住居-124	管玉	滑石	25.00	7.50		2.00	1.8	暗緑灰色	古墳中期	

遺構名称对照表

竪穴住居

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者	報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居-14	M 6Ⅳ区	住居19	亀山	竪穴住居-60	M 7Ⅱ区	住居 5	井上
竪穴住居-15	M 6Ⅳ区	住居21	〃	竪穴住居-61	M 7Ⅱ区	住居 6	〃
竪穴住居-16	M 3Ⅳ区	住居 2	井上	竪穴住居-62	M 5Ⅱ区	No44住居	高畑
竪穴住居-17	M 3Ⅳ区	住居 3	〃	竪穴住居-63	M 5Ⅱ区	No48住居	〃
竪穴住居-18	M 3Ⅰ区	住居 7	〃	竪穴住居-64	M 5Ⅱ区	No49住居	〃
竪穴住居-19	M 3Ⅰ区	住居 9	〃	竪穴住居-65	M 5Ⅱ区	No36住居	〃
竪穴住居-20	M 3Ⅰ区	住居 3	山磨		M 7Ⅰ区	住居 1	中野
竪穴住居-21	M 3Ⅰ区	住居 6	〃	竪穴住居-66	M 5Ⅱ区	No57住居	高畑
竪穴住居-22	M 3Ⅰ区	住居 4	〃	竪穴住居-67	M 5Ⅱ区	No51住居	〃
竪穴住居-23	M 3Ⅴ区	住居 1	井上	竪穴住居-68	M 5Ⅱ区	No14住居	〃
竪穴住居-24	M 5Ⅰ区	住居18	鳥崎		M 5Ⅲ区	No21住居(古)	光永
竪穴住居-25	M 5Ⅰ区	住居16	〃	竪穴住居-69	M 5Ⅱ区	No14住居	高畑
竪穴住居-26	M10Ⅰ区	住居 1	〃		M 5Ⅲ区	No21住居(新)	光永
竪穴住居-27	A 2区	住居44	高畑	竪穴住居-70	M 5Ⅰ・Ⅲ区	No29住居	鳥崎・光永
竪穴住居-28	M 5Ⅲ区	住居40	光永		M 5Ⅱ区	No18住居	高畑
竪穴住居-29	M 5Ⅲ区	住居20	〃	竪穴住居-71A	M 5Ⅰ区	住居 9(新)	鳥崎
竪穴住居-30	M 6Ⅲ区	住居35	〃	竪穴住居-71B	M 5Ⅰ区	住居 9(古)	〃
竪穴住居-31	A P 7区	3号住居	亀山	竪穴住居-72A	M 5Ⅰ区	住居 4(古)	〃
竪穴住居-32A	M 6Ⅳ区	住居 2(新)	〃	竪穴住居-72B	M 5Ⅰ区	住居 4(新)	〃
竪穴住居-32B	M 6Ⅳ区	住居 2(古)	〃	竪穴住居-73	M 5Ⅰ区	住居 6	〃
竪穴住居-33	M 6Ⅳ区	住居	〃	竪穴住居-74	M 5Ⅰ区	住居 5	〃
竪穴住居-34	M 6Ⅳ区	住居	〃	竪穴住居-75	M 5Ⅰ区	住居 3	〃
竪穴住居-35	M 6Ⅳ区	住居 1	〃	竪穴住居-76	M 5Ⅰ区	住居 2	〃
竪穴住居-36	M 6Ⅳ区	住居 3	〃	竪穴住居-77	M 5Ⅰ区	住居10(古)	〃
竪穴住居-37A	M 6Ⅳ区	住居 5(古)	〃	竪穴住居-78	M 5Ⅰ区	住居10(新)	〃
竪穴住居-37B	M 6Ⅳ区	住居 5(新)	〃	竪穴住居-79	M 5Ⅰ区	住居11	〃
竪穴住居-38A	M 6Ⅳ区	住居12(古)	〃	竪穴住居-80	M 5Ⅰ区	住居13	〃
竪穴住居-38B	M 6Ⅳ区	住居12(新)	〃	竪穴住居-81	M 5Ⅰ区	住居12	〃
竪穴住居-39	M 6Ⅳ区	住居14	〃	竪穴住居-82	M 5Ⅰ区	住居 7	〃
竪穴住居-40A	M 3Ⅱ区	住居 2	〃	竪穴住居-83	M 5Ⅰ区	住居19	〃
竪穴住居-40B	M 3Ⅱ区	住居 1	〃	竪穴住居-84	M 5Ⅰ区	住居 8	〃
竪穴住居-41	M 6Ⅳ区	住居13	〃	竪穴住居-85	M 5Ⅰ区	住居21	〃
竪穴住居-42	M 3Ⅲ区	住居 2	〃	竪穴住居-86	M 5Ⅰ区	住居20	〃
竪穴住居-43	M 6Ⅳ区	住居17	〃		A 2区	住居 3	高畑
竪穴住居-44A	M 6Ⅳ区	住居18(古)	〃	竪穴住居-87	M 5Ⅰ区	住居15	鳥崎
竪穴住居-44B	M 6Ⅳ区	住居18(中)	〃	竪穴住居-88	M 5Ⅰ区	住居 1	〃
竪穴住居-44C	M 6Ⅳ区	住居18(新)	〃		M 5Ⅲ区	No 8住居	光永
竪穴住居-45A	M 6Ⅳ区	住居16(古)	〃	竪穴住居-89A	M 5Ⅲ区	住居19	〃
竪穴住居-45B	M 6Ⅳ区	住居16(新)	〃	竪穴住居-89A	M 5Ⅲ区	住居19	〃
竪穴住居-46A	M 3Ⅲ区	住居 5(古)	〃	竪穴住居-90A	M 5Ⅲ区	住居22	〃
竪穴住居-46B	M 3Ⅲ区	住居 5(新)	〃	竪穴住居-90B	M 5Ⅲ区	住居22	〃
竪穴住居-47	M 3Ⅲ区	住居 3	〃	竪穴住居-91A	M 5Ⅰ区	住居14	鳥崎
竪穴住居-48	M 3Ⅲ区	住居 1	〃	竪穴住居-91B	M 5Ⅰ区	住居14	〃
竪穴住居-49	M 6Ⅳ区	住居20	〃	竪穴住居-92	A 2区	No 2住居	高畑
竪穴住居-50	M 2区	住居 1	中野	竪穴住居-93	A 2区	No 7住居	〃
竪穴住居-51	M 2区	住居 5	〃	竪穴住居-94	A 2区	No 5住居	〃
竪穴住居-52	M 3Ⅰ区	住居10	井上	竪穴住居-95	A 2区	住居 1	〃
竪穴住居-53	M 2区	住居 3	〃	竪穴住居-96	M 5Ⅲ区	住居17	光永
竪穴住居-54	M 3Ⅰ区	住居 5	山磨	竪穴住居-97	M13Ⅱ区	No 4住居	中野
竪穴住居-55	M 3Ⅰ区	住居 1	井上	竪穴住居-98	M13Ⅰ区	No 6住居	高畑
竪穴住居-56	M 7Ⅱ区	住居 1	〃	竪穴住居-99	M13Ⅰ区	No 8住居	〃
竪穴住居-57	M 7Ⅱ区	住居 8	〃	竪穴住居-100	M13Ⅲ区	住居 2	亀山
竪穴住居-58	M 7Ⅱ区	住居 2	〃	竪穴住居-101	M13Ⅲ区	住居 2	〃
竪穴住居-59	M 7Ⅱ区	住居 7	〃	竪穴住居-102	A P 7区	2号住居	〃

遺構名称对照表

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居-103	A P 7 区	1号住居	亀山
竪穴住居-104	B P 7 区	住居8	大橋
竪穴住居-105	B P 7 区	住居4	〃
竪穴住居-106	B P 7 区	住居5	〃
竪穴住居-107	B P 7 区	住居6	〃
竪穴住居-108	B P 7 区	住居1	〃
竪穴住居-109	B P 7 区	住居2	〃
竪穴住居-110	B P 7 区	住居7	〃
竪穴住居-111	B P 7 区	住居3	〃
竪穴住居-112A	B P 7 区	住居10	〃
竪穴住居-112B	B P 7 区	住居10	〃
竪穴住居-113	B P 7 区	住居9	〃
竪穴住居-114	M 6 Ⅱ区	住居1	亀山
竪穴住居-115	A 1 区	住居25	高畑
竪穴住居-116	M 2 区	住居2	中野
竪穴住居-117	M 3 Ⅰ区	住居8	山磨
竪穴住居-118	M 3 Ⅰ区	住居2	〃
竪穴住居-119	M 7 Ⅱ区	住居3	井上
竪穴住居-120	M 7 Ⅱ区	住居4	〃
竪穴住居-121	水路2区	2号住宅	亀山
竪穴住居-122	M 5 Ⅱ区	No 7 住居	高畑
竪穴住居-123	M 5 Ⅱ区	No 6 住宅	〃
竪穴住居-124	M 13 Ⅲ区	住居1	亀山

掘立柱建物

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
掘立柱建物-1	M 10 Ⅰ区	建物1	島崎
掘立柱建物-2	M 6 Ⅳ区	建物2	亀山
掘立柱建物-3	M 5 Ⅱ区	No 8 建物	高畑
掘立柱建物-4	M 6 Ⅱ区	建物1	亀山
掘立柱建物-5	M 6 Ⅱ区	建物2	〃
掘立柱建物-6	A 1 区	建物1	高畑
掘立柱建物-7	M 6 Ⅳ区	建物1	亀山
掘立柱建物-8	M 3 Ⅲ区	建物1	〃
掘立柱建物-9	M 3 Ⅰ区	建物1	山磨
掘立柱建物-10	M 2 区	建物1	中野
掘立柱建物-11	M 2 区	建物2	〃
掘立柱建物-12	M 7 Ⅰ区	建物2	〃
掘立柱建物-13	M 7 Ⅰ区	建物1	〃
掘立柱建物-14	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	建物1	島崎・光永
掘立柱建物-15	M 10 Ⅱ区	建物2	島崎

袋状土壇

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
袋状土壇-1	M 6 Ⅳ区	土壇3	亀山
袋状土壇-2	M 6 Ⅳ区	土壇5	〃
袋状土壇-3	M 6 Ⅳ区	土壇4	〃
袋状土壇-4	M 6 Ⅳ区	土壇2	〃
袋状土壇-5	M 6 Ⅳ区	土壇1	〃
袋状土壇-6	A 1 区	土壇31	高畑
袋状土壇-7	A 1 区	土壇33	〃
袋状土壇-8	A 1 区	土壇29	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
袋状土壇-9	M 6 Ⅳ区	土壇7	亀山
袋状土壇-10	M 6 Ⅳ区	土壇6	〃
袋状土壇-11	M 3 Ⅱ区	土壇3	〃
袋状土壇-12	M 6 Ⅳ区	土壇8	〃
袋状土壇-13	M 3 Ⅲ区	土壇24	〃
袋状土壇-14	M 3 Ⅲ区	土壇15	〃
袋状土壇-15	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇57	井上
袋状土壇-16	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇56	〃
袋状土壇-17	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇48	〃
袋状土壇-18	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇45	〃
袋状土壇-19	M 3 Ⅳ区	土壇2	〃
袋状土壇-20	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇26	〃
袋状土壇-21	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇44	〃
袋状土壇-22	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇39	〃
袋状土壇-23	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇3	〃
袋状土壇-24	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇2	山磨
袋状土壇-25	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇14	〃
袋状土壇-26	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇16	〃
袋状土壇-27	M 3 Ⅳ区	土壇1	井上
袋状土壇-28	M 3 Ⅳ区	土壇3	〃
袋状土壇-29	M 3 Ⅳ区	土壇7	〃
袋状土壇-30	M 3 Ⅳ区	土壇4	〃
袋状土壇-31	M 3 Ⅳ区	土壇6	〃
袋状土壇-32	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土壇13	山磨
袋状土壇-33	M 7 Ⅱ区	土壇8	井上
袋状土壇-34	M 7 Ⅱ区	土壇7	〃
袋状土壇-35	M 7 Ⅱ区	土壇3	〃
袋状土壇-36	M 7 Ⅱ区	土壇4	〃
袋状土壇-37	M 7 Ⅱ区	土壇5	〃
袋状土壇-38	M 7 Ⅱ区	土壇6	〃
袋状土壇-39	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇20	島崎・光永
袋状土壇-40	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇25	〃
袋状土壇-41	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇21	〃
袋状土壇-42	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇12	〃
袋状土壇-43	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇13	〃
袋状土壇-44	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇18	〃
袋状土壇-45	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇22	〃
袋状土壇-46	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇19	〃
袋状土壇-47	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇23	〃
袋状土壇-48	A 2 区	土壇11	高畑
袋状土壇-49	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇7	島崎・光永
袋状土壇-50	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇11	〃
袋状土壇-51	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇9	〃
袋状土壇-52	M 5 Ⅲ区	土壇27	光永
袋状土壇-53	M 5 Ⅲ区	土壇38	〃
袋状土壇-54	M 5 Ⅲ区	土壇36	〃
袋状土壇-55	M 5 Ⅲ区	土壇29	〃
袋状土壇-56	M 5 Ⅲ区	土壇26	〃
袋状土壇-57	M 5 Ⅲ区	土壇41	〃
袋状土壇-58	M 5 Ⅲ区	土壇37	〃
袋状土壇-59	M 5 Ⅲ区	土壇34	〃
袋状土壇-60	M 5 Ⅲ区	土壇30	〃
袋状土壇-61	M 5 Ⅲ区	土壇25	〃
袋状土壇-62	M 5 Ⅰ・Ⅲ区	土壇10	島崎・光永

遺構名称対照表

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
袋状土壌-63	M13Ⅱ区	土壌13	中野
袋状土壌-64	M13Ⅱ区	土壌14	〃
袋状土壌-65	M13Ⅱ区	土壌11	〃
袋状土壌-66	M13Ⅱ区	土壌12	〃
袋状土壌-67	M13Ⅱ区	土壌15	〃
袋状土壌-68	M13Ⅰ区	土壌16	高畑
袋状土壌-69	M13Ⅰ区	土壌12	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-84	水路2区	土壌	亀山
土壌-85	M7Ⅱ区	土壌2	井上
土壌-86	M7Ⅰ区	土壌2	中野
土壌-87	M10Ⅰ区	土壌3	島崎
土壌-88	M10Ⅰ区	土壌2	〃
土壌-89	M10Ⅰ区	土壌1	〃
土壌-90	M5Ⅱ区	No34土壌	高畑
土壌-91	M5Ⅱ区	No62土壌	〃
土壌-92	M5Ⅱ区	No35土壌	〃
土壌-93	M5Ⅱ区	No21土壌	〃
土壌-94	M5Ⅱ区	No47土壌	〃
土壌-95	M5Ⅱ区	No33土壌	〃
土壌-96	M5Ⅱ区	No59土壌	〃
土壌-97	M5Ⅱ区	No19土壌	〃
土壌-98	M5Ⅰ・Ⅲ区	土壌17	島崎・光永
土壌-99	M5Ⅰ・Ⅲ区	土壌8	〃
土壌-100	M5Ⅲ区	土壌24	光永
土壌-101	M5Ⅲ区	土壌39	〃
土壌-102	M5Ⅲ区	土壌31	〃
土壌-103	M5Ⅲ区	土壌33	〃
土壌-104	A2区	土壌16	高畑
土壌-105	M13Ⅰ区	土壌13(B)	中野
土壌-106	M13Ⅰ区	土壌15	〃
土壌-107	M13Ⅰ区	土壌17	〃
土壌-108	BP7区	土壌3	大橋
土壌-109	A1区	土壌	高畑
土壌-110	M6Ⅳ区	ヒット	亀山
土壌-111	M3Ⅲ区	ピット	〃
土壌-112	M2区	土壌10	中野
土壌-113	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌34	井上
土壌-114	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌29	〃
土壌-115	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌25	〃
土壌-116	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌31	〃
土壌-117	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌36	〃
土壌-118	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌53	〃
土壌-119	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌20	〃
土壌-120	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌49	〃
土壌-121	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌5	山磨
土壌-122	M7Ⅱ区	土壌1	井上
土壌-123	M10Ⅰ区	土壌4	島崎
土壌-124	M5Ⅰ・Ⅲ区	土壌5	島崎・光永
土壌-125	M5Ⅱ区	No5土壌	高畑
土壌-126	M5Ⅱ区	No40土壌	〃
土壌-127	M5Ⅱ区	No11土壌	〃
土壌-128	M5Ⅱ区	No43土壌	〃
土壌-129	M5Ⅱ区	No9土壌	〃
土壌-130	M5Ⅱ区	No22土壌	〃
土壌-131	M5Ⅱ区	No45土壌	〃
土壌-132	M5Ⅱ区	No52土壌	〃
土壌-133	M5Ⅱ区	No18土壌	〃
土壌-134	M5Ⅰ・Ⅲ区	土壌3	島崎・光永
土壌-135	M5Ⅱ区	No30土壌	高畑
土壌-136	M5Ⅱ区	No12土壌	〃
土壌-137	M5Ⅰ・Ⅲ区	土壌2	島崎・光永

土壌

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壌-41	A1区	土壌32	高畑
土壌-42	A1区	土壌32	〃
土壌-43	M6Ⅳ区	土壌14	亀山
土壌-44	M3Ⅱ区	ヒット	〃
土壌-45	M3Ⅲ区	土壌1	〃
土壌-46	M3Ⅱ区	土壌5	〃
土壌-47	M3Ⅲ区	ピット	〃
土壌-48	M3Ⅱ区	土壌1	〃
土壌-49	M3Ⅲ区	土壌2	〃
土壌-50	M3Ⅲ区	土壌12	〃
土壌-51	M3Ⅲ区	土壌13	〃
土壌-52	M3Ⅲ区	土壌11	〃
土壌-53	M3Ⅲ区	土壌18	〃
土壌-54	M6Ⅳ区	土壌28	〃
土壌-55	M2区	土壌12	中野
土壌-56	M2区	土壌11	〃
土壌-57	M2区	土壌14	〃
土壌-58	M2区	土壌8	〃
土壌-59	M2区	土壌7	〃
土壌-60	M2区	土壌3	〃
土壌-61	M2区	袋状ピット1	〃
土壌-62	M2区	袋状ピット4	〃
土壌-63	M2区	袋状ピット5	〃
土壌-64	M2区	袋状ピット2	〃
土壌-65	M2区	袋状ピット3	〃
土壌-66	M2区	袋状土壌	〃
土壌-67	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌32	井上
土壌-68	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌58	〃
土壌-69	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌55	〃
土壌-70	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌52	〃
土壌-71	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌51	〃
土壌-72	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌30	〃
土壌-73	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌46	〃
土壌-74	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌21	〃
土壌-75	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌37	〃
土壌-76	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌41	〃
土壌-77	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌42	〃
土壌-78	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌43	〃
土壌-79	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌19	〃
土壌-80	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌4	〃
土壌-81	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌10	〃
土壌-82	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌11	〃
土壌-83	M3Ⅰ・Ⅲ区	土壌17	〃

遺構名称対照表

土墳墓

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土墳-138	A 2 区	土墳40	高畑
土墳-139	A 2 区	土墳26	〃
土墳-140	A 2 区	土墳45	〃
土墳-141	A 2 区	土墳14	〃
土墳-142	A 2 区	土墳15	〃
土墳-143	A 2 区	土墳30	〃
土墳-144	A 2 区	土墳12	〃
土墳-145	A 2 区	土墳58	〃
土墳-146	A 2 区	土墳59	〃
土墳-147	A 2 区	土墳13	〃
土墳-148	M 5 Ⅲ区	土墳16	光永
土墳-149	M13Ⅰ区	土墳10	高畑
土墳-150	M13Ⅰ区	土墳14	〃
土墳-151	M13Ⅱ区	土墳 6	中野
土墳-152	M13Ⅰ区	土墳 7	高畑
土墳-153	M13Ⅲ区	土墳 2	亀山
土墳-154	A P 7 区	土墳 2	〃
土墳-155	A P 7 区	土墳 9	〃
土墳-156	A P 7 区	土墳12	〃
土墳-157	A P 7 区	土墳 6	〃
土墳-158	A P 7 区	土墳 7	〃
土墳-159	A P 7 区	土墳 8	〃
土墳-160	A P 7 区	土墳 4	〃
土墳-161	A P 7 区	土墳10	〃
土墳-162	A P 7 区	土墳 5	〃
土墳-163	B P 7 区	土墳 2	大橋
土墳-164	B P 7 区	土墳 3	〃
土墳-165	B P 7 区	土墳 1	〃
土墳-166	M 6 Ⅳ区	土墳 7	亀山
土墳-167	M 6 Ⅳ区	土墳10	〃
土墳-168	M 6 Ⅳ区	土墳 9	〃
土墳-169	M 6 Ⅳ区	土墳 8	〃
土墳-170	M 6 Ⅳ区	土墳 4	〃
土墳-171	M 6 Ⅳ区	土墳 2	〃
土墳-172	M 6 Ⅳ区	土墳18	〃
土墳-173	M 6 Ⅳ区	土墳17	〃
土墳-174	M 6 Ⅳ区	土墳15	〃
土墳-175	M 6 Ⅳ区	土墳24	〃
土墳-176	M 3 Ⅲ区	方形土墳 1	〃
土墳-177	M 6 Ⅳ区	土墳16	〃
土墳-178	M 6 Ⅳ区	土墳20	〃
土墳-179	M 6 Ⅳ区	土墳21	〃
土墳-180	M 3 Ⅲ区	方形土墳 2	〃
土墳-181	M 2 区	土墳 1	中野
土墳-182	M 2 区	土墳 2	〃
土墳-183	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土墳 7	井上
土墳-184	M 5 Ⅱ区	No42土墳	高畑
土墳-185	M 5 Ⅱ区	No 4 土墳	〃
土墳-186	M 5 Ⅱ区	No39土墳	〃
土墳-187	M 5 Ⅱ区	No16土墳	〃
土墳-188	M 5 Ⅱ区	No37土墳	〃
土墳-189	M 5 Ⅱ区	No46土墳	〃
土墳-190	M 5 Ⅱ区	No32土墳	〃
土墳-191	M 5 Ⅱ区	No13土墳	〃

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土墳墓- 2	M 3 Ⅲ区	土墳11	亀山
土墳墓- 3	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土墳54	井上
土墳墓- 4	M 3 Ⅰ・Ⅲ区	土墳24	〃
土墳墓- 5	A 1 区	No 2 土墳墓	高畑
土墳墓- 6	M 6 Ⅳ区	土墳墓 1	亀山
土墳墓- 7	M 3 Ⅲ区	土墳墓 4	〃
土墳墓- 8	M 3 Ⅲ区	土墳墓 1	〃
土墳墓- 9	M 3 Ⅲ区	土墳墓 2	〃
土墳墓-10	M 3 Ⅲ区	土墳墓 3	〃
土墳墓-11	M 3 Ⅲ区	土墳墓 5	〃

土器棺墓

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土器棺墓- 7	A 1 区	No14土器棺	高畑
土器棺墓- 8	M 3 1 区	土器棺 1	井上

調査担当者は調査主任のみ記した

報告書抄録

ふりがな	つでらいせき3							
書名	津寺遺跡3							
副書名	山陽自動車道建設に伴う発掘調査							
巻次	12							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	104							
編著者名	亀山行雄 井上弘 大橋雅也 金田善敬 久保恵里子 小林闘士 澤山孝之 島崎東 高畑知功 中野雅美 長谷川澄博 光永真一 山磨康平							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3				TEL 086-293-3211			
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6				TEL 086-224-2111			
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
ツデラ 津寺	オカヤマシ 岡山市津寺	33201		34度 40分 24秒	133度 49分 20秒	19880401～ 19900331 (掲載分)	7,658	山陽自動車 道建設に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
津寺	集落 水田 官衙 墓	弥生	竪穴住居 18軒 掘立柱建物 1棟 井戸 1基 袋状土壙 69基 土壙 68基 土壙墓 2基 土器溜り 1基 溝 6条	弥生土器・石器(石 包丁・石鏃・石斧ほ か)・土製品(分銅形 土製品・紡錘車ほ か)・金属器		弥生時代から中・近世に かけての大規模な集落遺 跡		
		古墳	竪穴住居 93軒 掘立柱建物 2棟 土壙 57基 土壙墓 1基 土器棺墓 2基 溝 12条 水田	土師器・須恵器・石 器(石杵・石錘・砥 石)・土製品(土錘・ 羽口・埴輪)・金属 器(銅鏡・銅鏃・鉄 鏃・鉄鎌・鉄斧ほ か)・玉(勾玉・管 玉・白玉・平玉)				
		古代	溝 9条	土師器・須恵器・石 器(砥石)・土製品 (土錘・瓦)・金属器 (鉄鏃・鉄釘)		官衙遺構		
		中世～近 世	掘立柱建物 12棟 井戸 1基 土壙 26基 土壙墓 7基 溝 56条 水田	土師器・陶器(備前 焼・亀山焼・魚住焼 ほか)・磁器(青磁・ 白磁)・石器(砥石) ・土製品(土錘)・金 属器(鉄刀・鉄釘・ 銅銭・釣針ほか)・ 木器(椀・草履)				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104

津 寺 遺 跡 3

山 陽 自 動 車 道
建設に伴う発掘調査12

(本文編)

1996年 3 月20日 印刷

1996年 3 月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下246

印 刷 サンコー印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104

津 寺 遺 跡 3

山 陽 自 動 車 道 建 設
に 伴 う 発 掘 調 査 12

(図 版 編)

1 9 9 6

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104

津 寺 遺 跡 3

山 陽 自 動 車 道 建 設
に 伴 う 発 掘 調 査 12

(図 版 編)

1 9 9 6

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会

実測図版

遺構

1. 弥生時代の遺構
2. 古墳時代の遺構
3. 古代の遺構
4. 中・近世の遺構

遺物

1. 弥生時代の土器
2. 古墳時代の土器
3. 古代の土器
4. 中・近世の土器
5. 石器
6. 土製品
7. 玉類
8. 金属製品
9. 木製品

凡 例

1. 図版に示した方位は磁北である。
2. グリッドは国土地理院第5座標系により、100mごとに設定した。
3. 図版に示した標高は、海拔高である。
4. 図版の縮尺は、原則として次のように統一した。

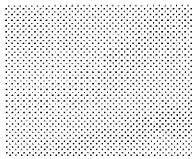
遺構

竪穴住居・掘立柱建物 1/60・1/80 井戸・土塋・土塋墓・土器棺墓 1/30・1/40

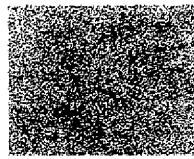
遺物

土器 1/4 土製品・石製品・木製品・金属製品 1/3・1/2 玉類 1/1

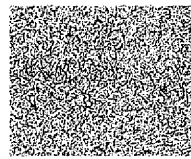
5. 遺構の平面図において、一点叉線は底面の輪郭を、二点叉線は最大幅の輪郭を表現している。
6. 炭・灰や粘土・焼土の分布、被熱範囲は、次のスクリーントーンで表示した。



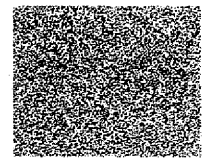
粘 土



炭 ・ 灰



焼 土



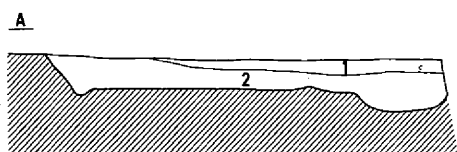
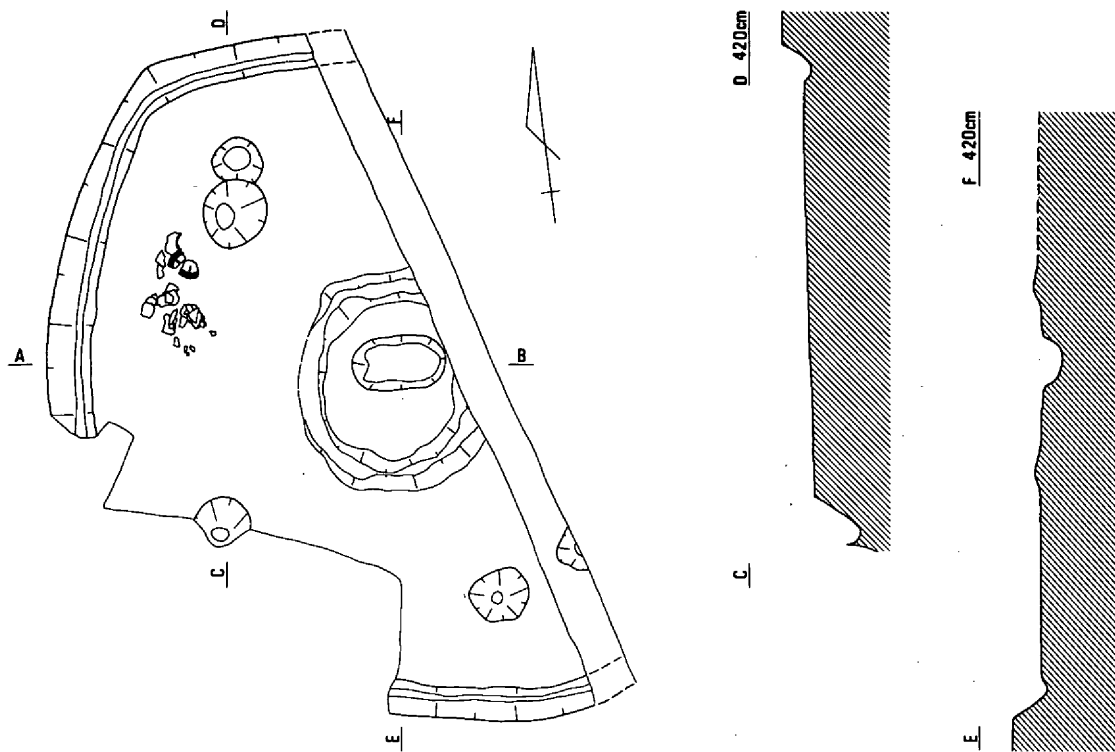
被熱範囲

7. 遺構・遺物には、それぞれの種別に応じて、「津寺遺跡2」からの通し番号を付した。

また、遺物にはそれぞれの材質を表示するため、番号の前に次の記号を付した。

土製品 C 石製品 S 木製品 W 金属製品 M 玉類 J

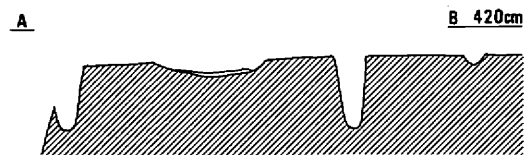
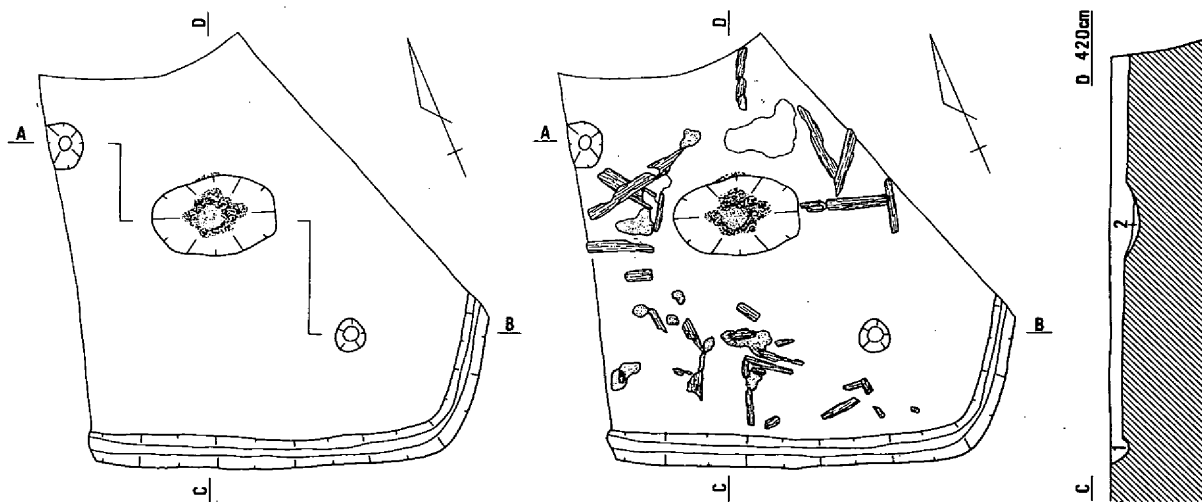
8. 遺物の上・下端線が中軸線の左右で途切れているものは、径が不確かであることを表す。



B 420cm

1. 褐色微砂 2. 暗褐色微砂

竖穴住居-14

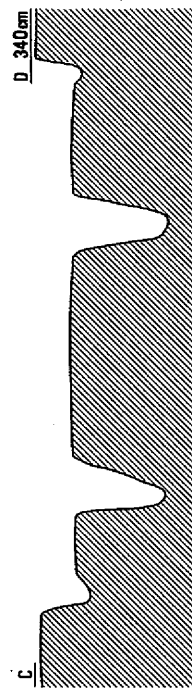
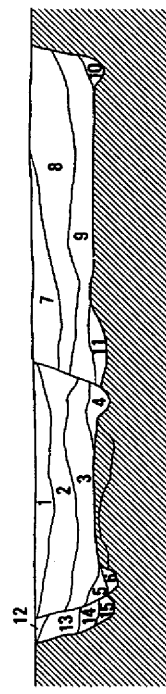
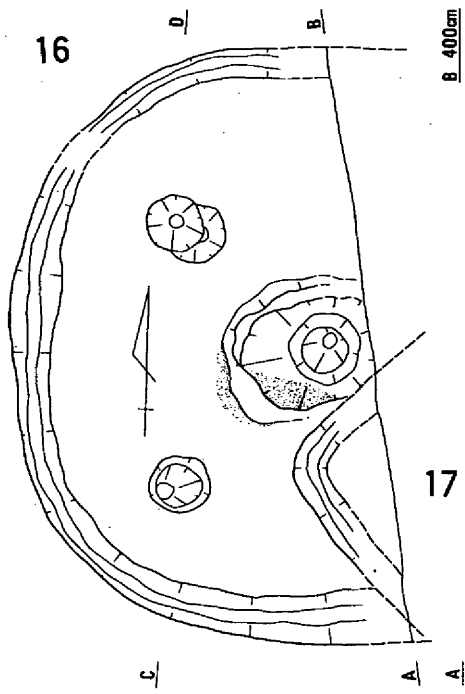


B 420cm

1. 暗褐色微砂 2. 淡褐色微砂

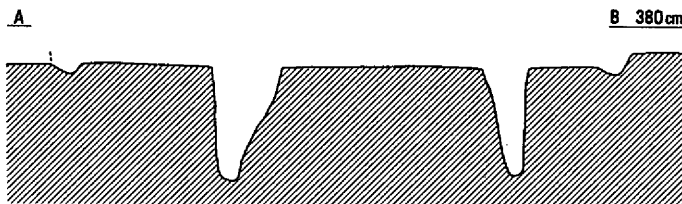
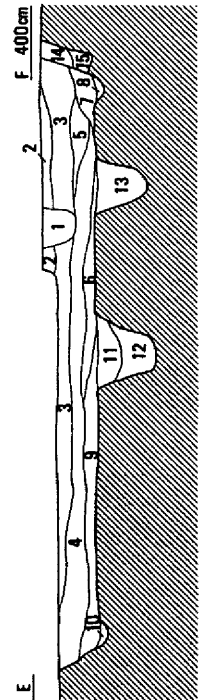
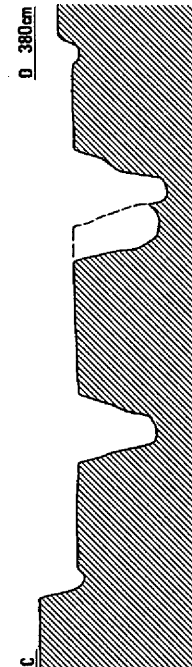
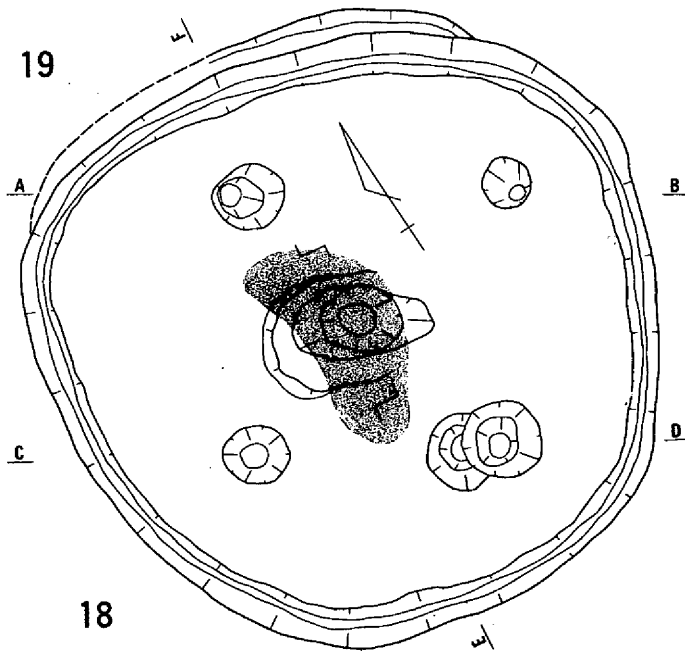
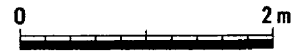


竖穴住居-15



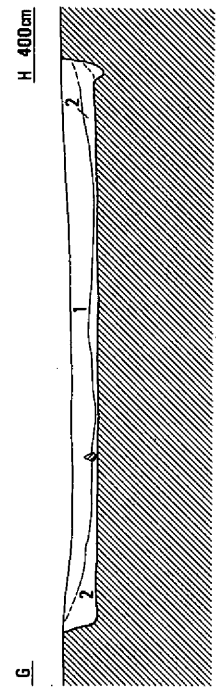
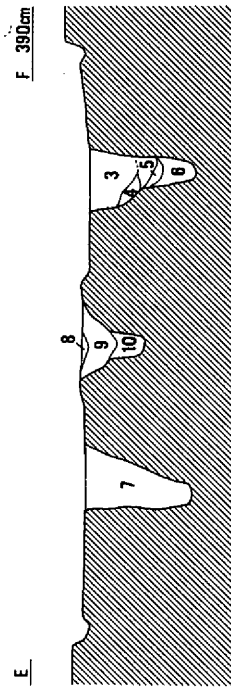
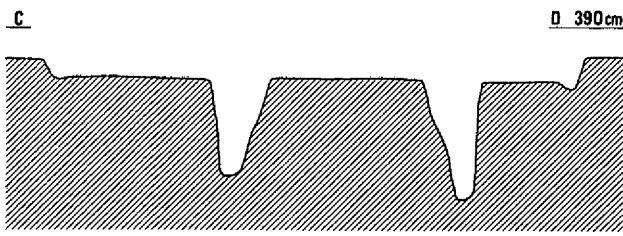
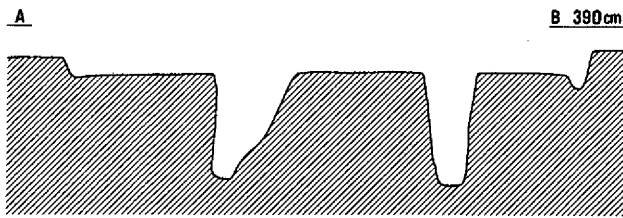
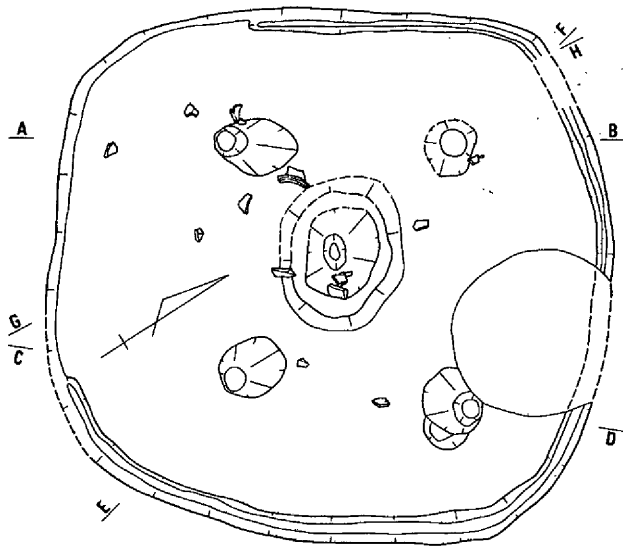
1. 茶褐色粘质土
2. 茶褐色粘质土 (炭含 τ)
3. 暗黄褐色粘质土 (土器、炭含 τ)
4. 暗黄褐色微砂粘质土
5. 明茶褐色粘质土
6. 暗茶褐色粘质土 (炭含 τ)
7. 暗茶褐色粘质土
8. 明茶褐色砂质土
9. 茶灰色砂质土
10. 暗茶褐色粘质土
11. 黑茶褐色粘质土 (炭含 τ)
12. 暗茶褐色粘质土
13. 明茶褐色砂质土
14. 茶灰色砂质土
15. 茶色粘质土

竖穴住居-16·17



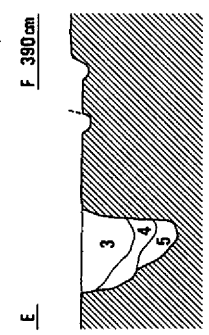
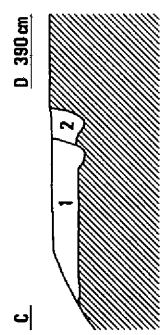
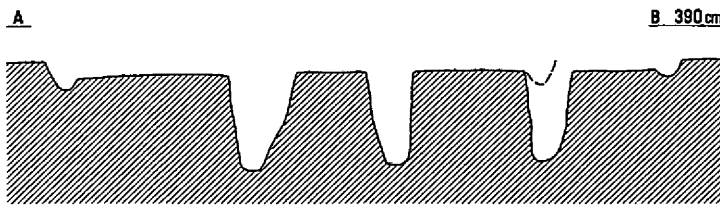
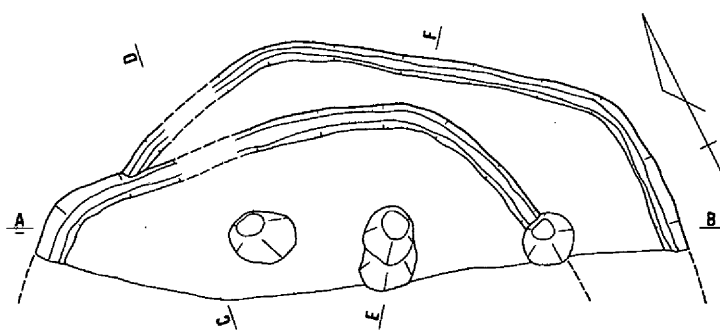
1. 暗黄褐色粘质土
2. 暗褐色粘质土
3. 暗茶褐色粘质土
4. 茶褐色粘质土
5. 茶褐色粘质土 (炭含 τ)
6. 暗黄褐色粘质土 (土器、炭含 τ)
7. 暗黄褐色微砂粘质土
8. 明茶褐色粘质土
9. 暗茶褐色粘质土 (炭含 τ)
10. 暗茶褐色粘质土
11. 暗茶褐色粘质土
12. 明茶褐色砂质土
13. 茶灰色砂质土
14. 暗茶褐色粘质土
15. 黑茶褐色粘质土 (炭含 τ)

竖穴住居-18·19



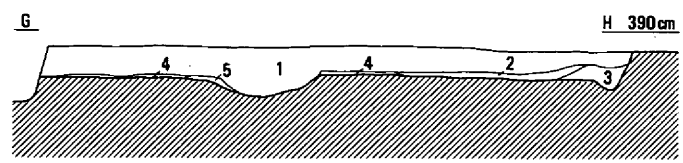
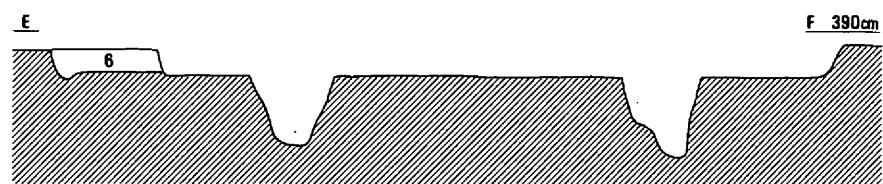
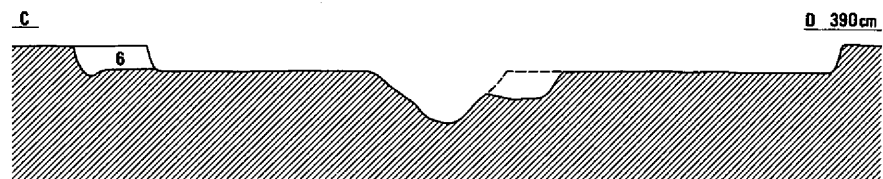
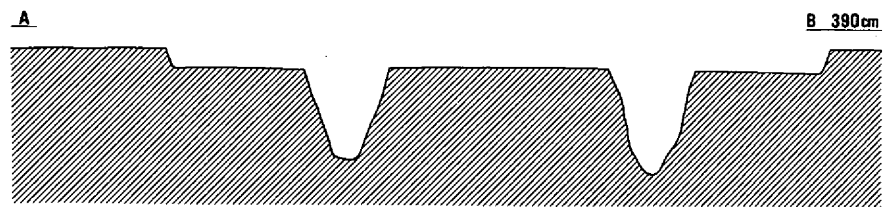
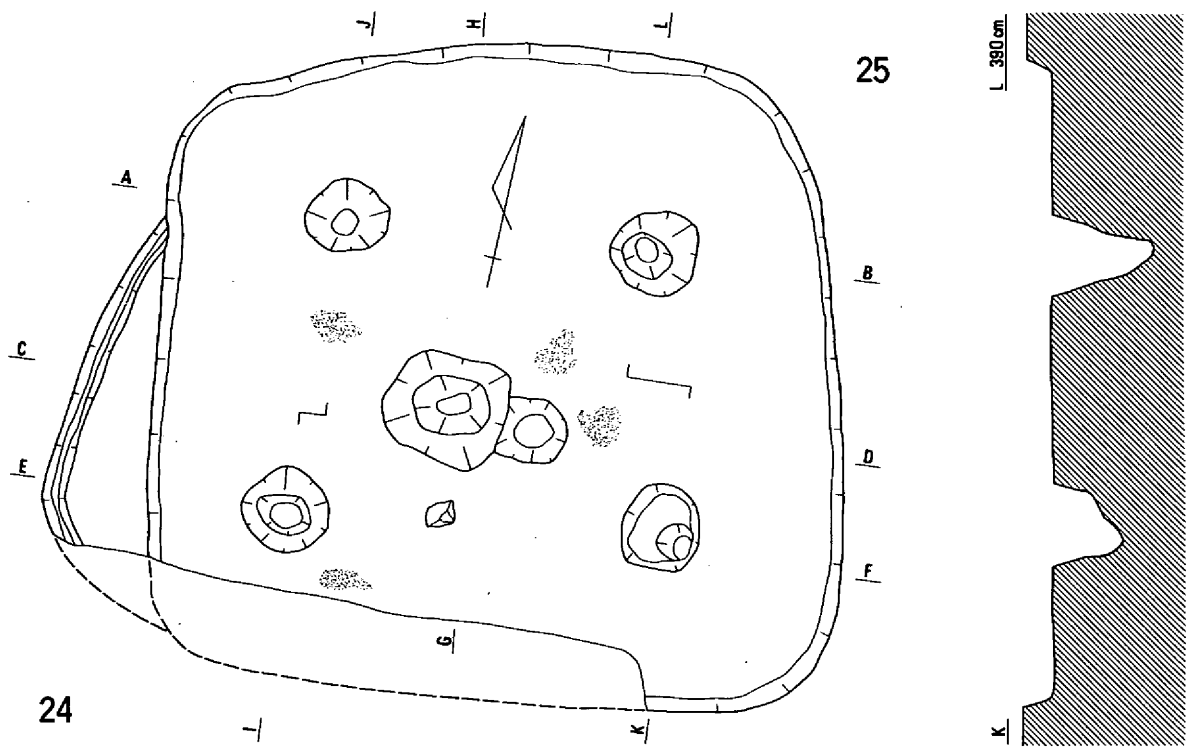
- 1. 明茶褐色粘質微砂
- 2. 黄灰色粘質微砂
- 3. 淡褐色砂質土
- 4. 茶色砂質土
- 5. 淡茶色粘質土
- 6. 淡茶色砂質土
- 7. 淡褐色砂質土
- 8. 明黄茶褐色粘質微砂
- 9. 黄茶褐色粘質微砂
- 10. 淡茶色砂質土

竖穴住居-20



- 1. 灰茶褐色粘質微砂
- 2. 明黄茶褐色粘質微砂
- 3. 明茶褐色粘質微砂
(炭、地山土含む)
- 4. 暗黄茶褐色粘質微砂
(炭、地山土含む)
- 5. 暗黄茶褐色粘質微砂
(焼土含む)

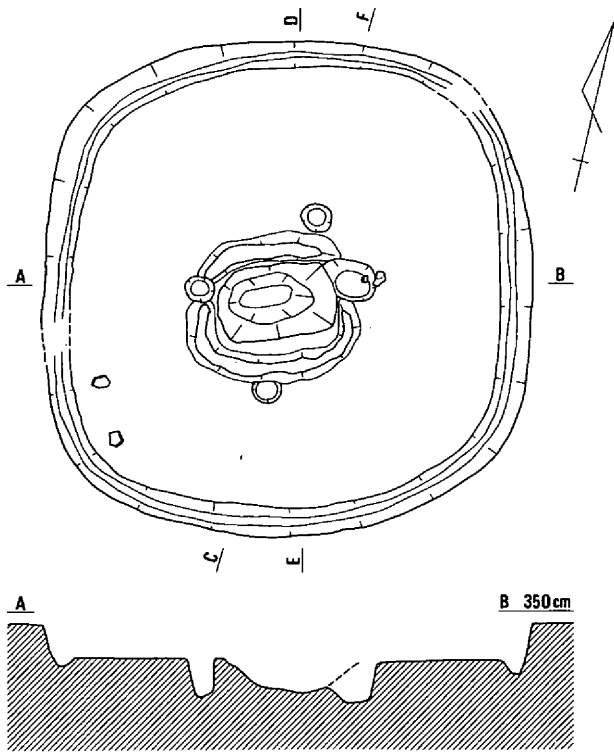
竖穴住居-21 · 22



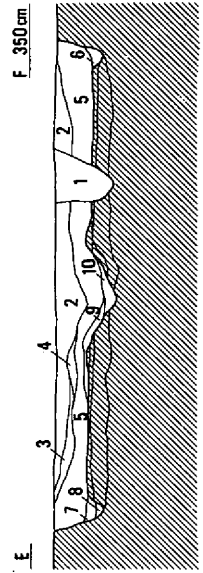
1. 橙灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土
3. 暗黄灰褐色砂質土
4. 黄橙色粘質砂
5. 黑灰褐色粘質土 (炭含む)

竖穴住居—24・25

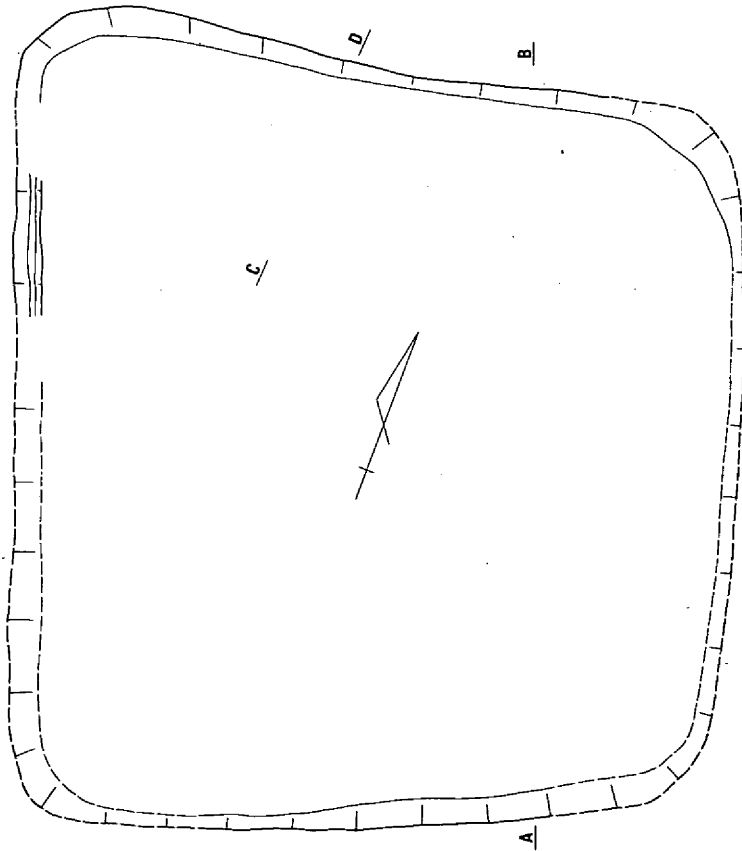




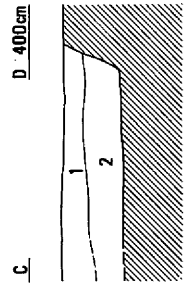
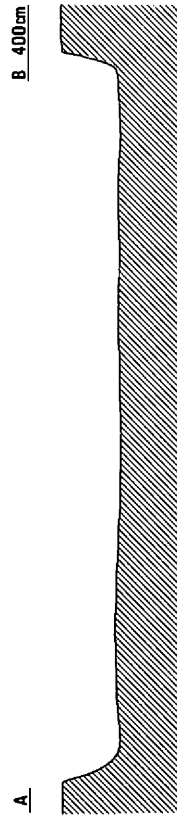
竪穴住居-26



- 1. 溝-8埋土
- 2. 茶灰色粘質土
- 3. 黒灰色土 (炭含む)
- 4. 茶灰色粘質土 (炭含む)
- 5. 黄灰色土
- 6. 黄灰色土
- 7. 茶色粘土
- 8. 黄灰色土
- 9. 暗灰黄色土
- 10. 茶色粘土 (炭、灰、焼土含む)

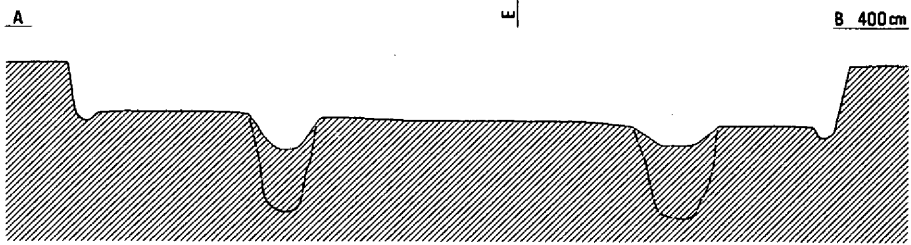
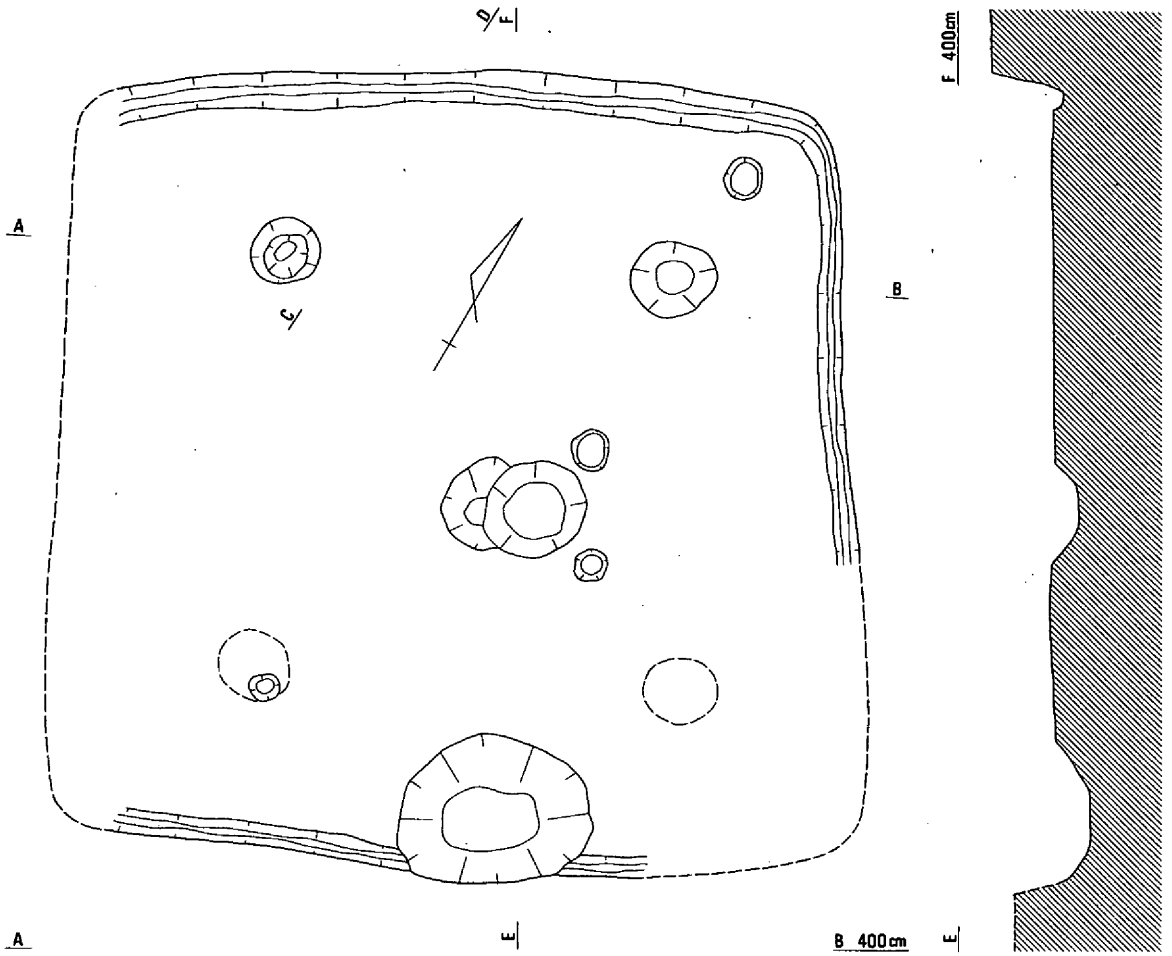


竪穴住居-29

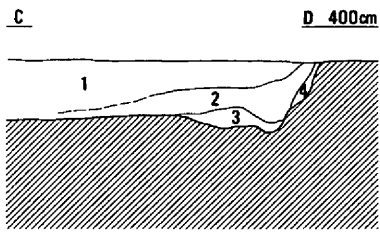


- 1. 茶褐色微砂
- 2. 暗灰茶褐色微砂

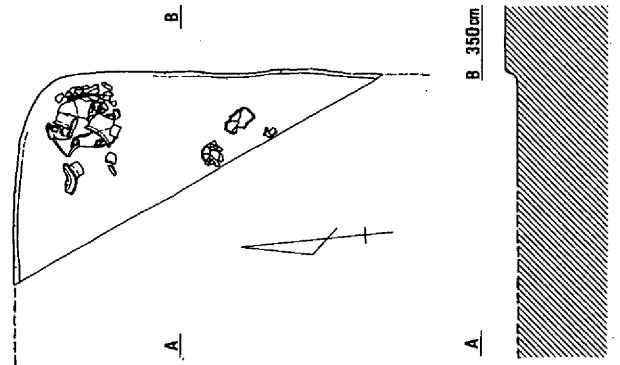




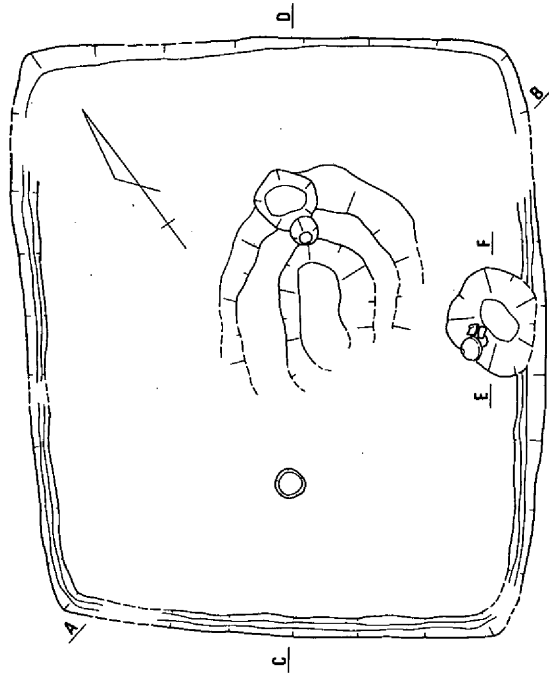
- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 暗灰茶褐色微砂
- 3. 灰茶褐色土
- 4. 茶褐色土



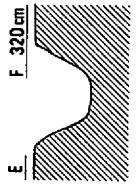
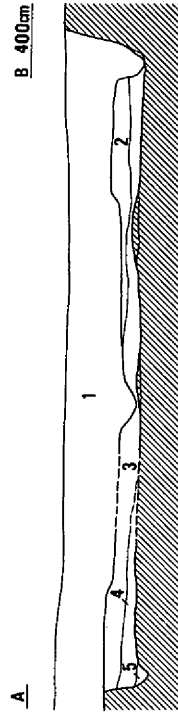
豎穴住居—28



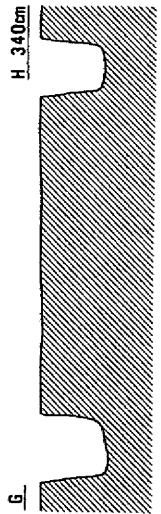
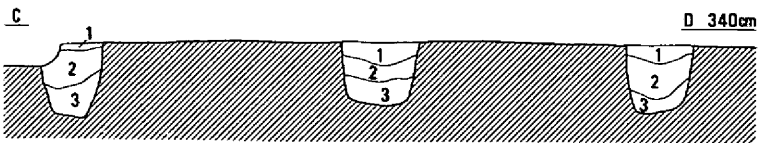
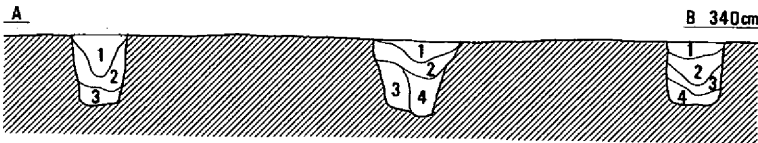
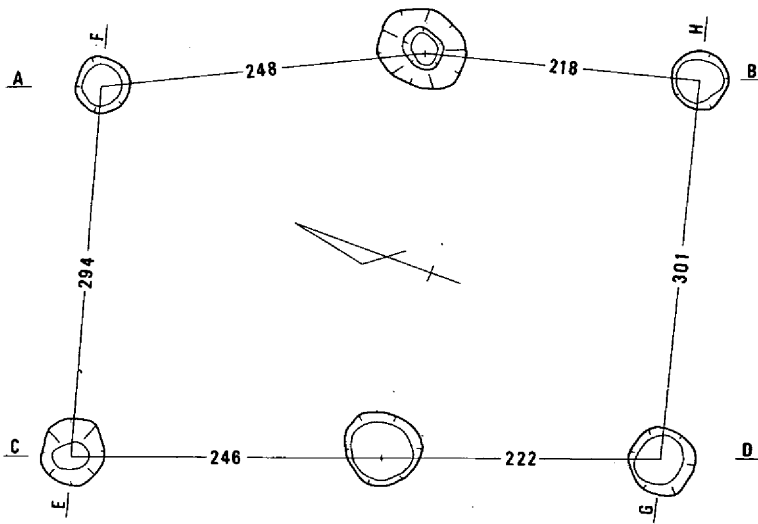
豎穴住居—31



竖穴住居-30



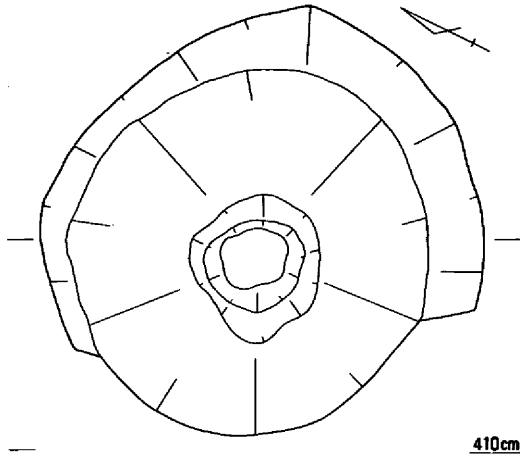
1. 住居22埋土
2. 淡灰茶褐色土
3. 灰茶褐色土
4. 灰茶褐色微砂
5. 茶褐色微砂



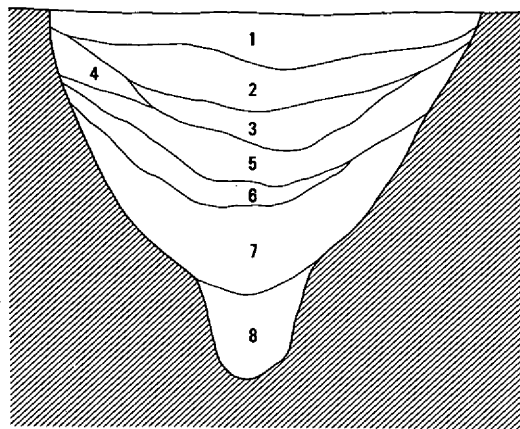
1. 暗褐色砂質土
2. 茶褐色砂質土
3. 黄褐色砂質土 (炭含む)
4. 淡黄褐色弱粘質土

掘立柱建物-1



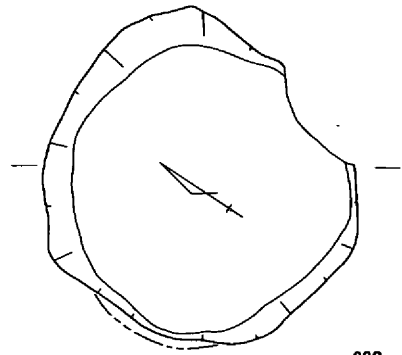


410cm

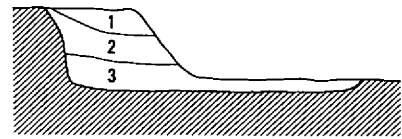


- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 明茶褐色微砂
- 3. 暗褐色微砂
- 4. 茶褐色微砂
- 5. 暗黄褐色微砂
- 6. 暗褐色微砂
- 7. 黄褐色粘质微砂
- 8. 黄茶色微砂

井戸-1

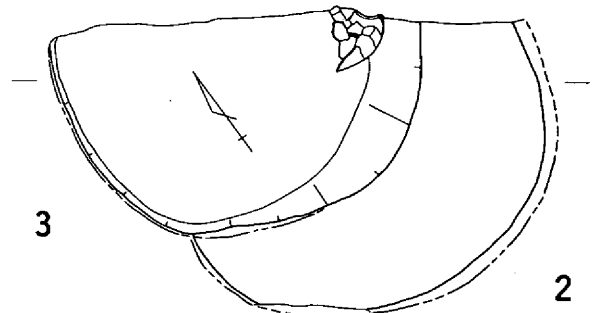


390cm

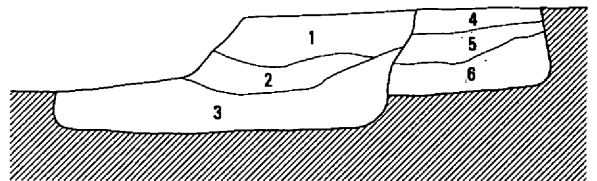


- 1. 褐色微砂
- 2. 暗褐色微砂
- 3. 暗黄褐色微砂

袋状土壤-1

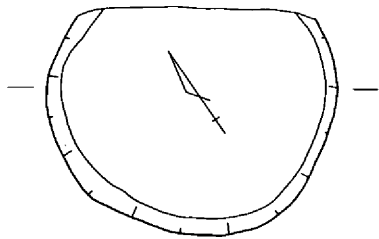


390cm

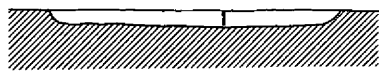


- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 茶褐色微砂
- 3. 暗褐色微砂
- 4. 褐灰色微砂
- 5. 黄灰色微砂
- 6. 暗黄灰色微砂

袋状土壤-2·3



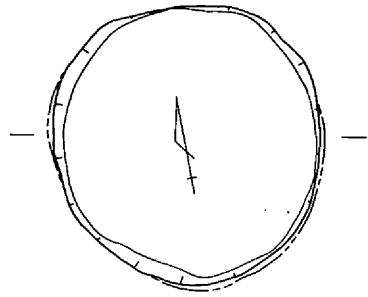
370cm



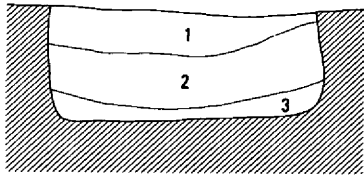
- 1. 褐色微砂

袋状土壤-4



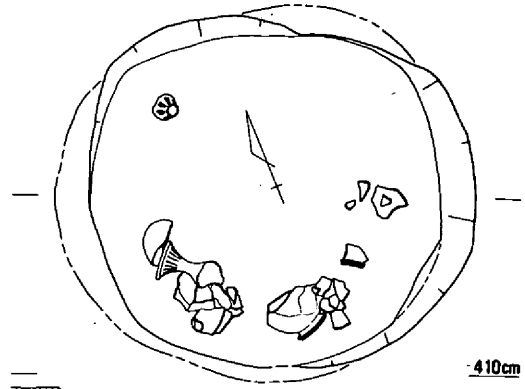


360cm

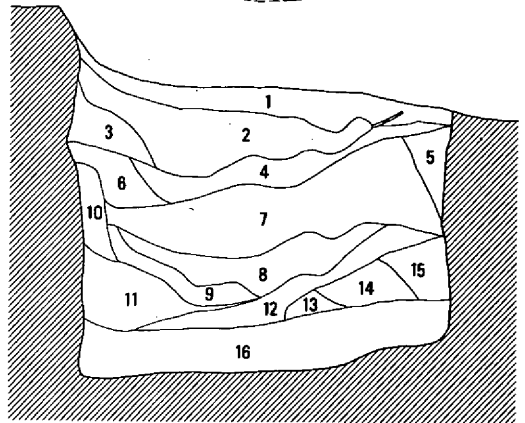


- 1. 褐色微砂
- 2. 暗褐色微砂
- 3. 暗黄褐色微砂

袋状土壤—5

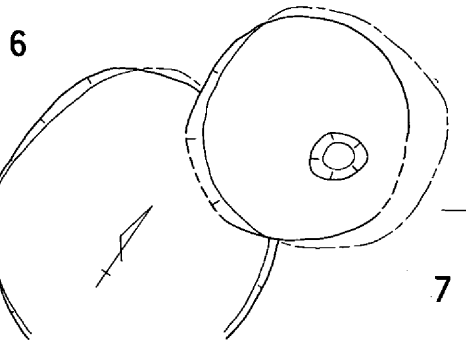


410cm

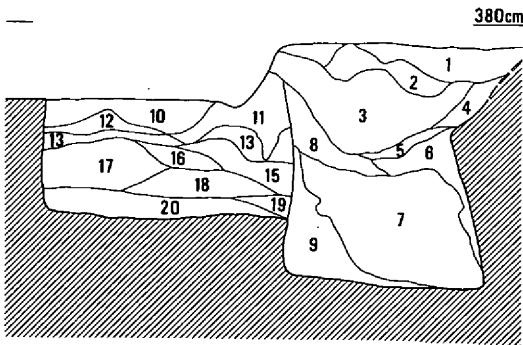


- 1. 褐色砂质土
- 2. 明黄褐色砂质土
- 3. 暗赤褐色砂质土
- 4. 暗赤褐色砂质土
- 5. 黄褐色砂质土
- 6. 暗茶褐色砂质土
- 7. 黄茶褐色砂质土
- 8. 明黄褐色粘质土
- 9. 暗赤褐色砂质土
- 10. 暗茶褐色粘质土
- 11. 暗茶褐色砂质土
- 12. 暗赤褐色砂质土
- 13. 暗茶褐色砂质土
- 14. 暗赤褐色砂质土
- 15. 明黄褐色粘质土
- 16. 赤灰褐色砂质土

袋状土壤—8



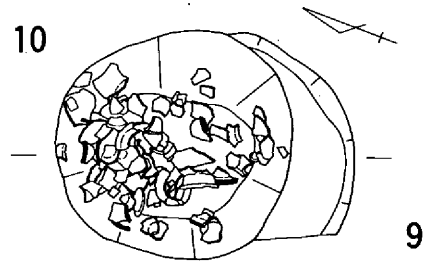
7



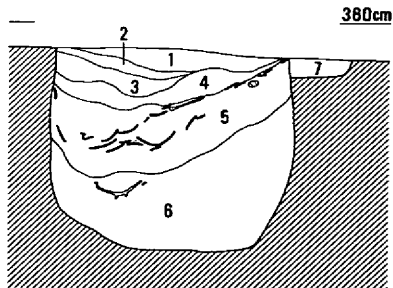
380cm

- 1. 暗黄灰色砂质土
- 2. 黄灰色粘质土
- 3. 暗灰褐色砂质土
- 4. 暗黄灰色砂质土
- 5. 暗灰褐色粘质土
- 6. 暗灰褐色砂质土
- 7. 暗黄褐色粘土
- 8. 暗黄褐色粘质土
- 9. 暗赤褐色粘质土
- 10. 暗黄灰色粘质土
- 11. 暗灰褐色砂质土
- 12. 暗灰褐色粘质土
- 13. 暗灰色砂质土
- 14. 暗赤褐色砂质土
- 15. 暗黄灰色土
- 16. 暗黄灰褐色土
- 17. 暗灰色中砂
- 18. 暗灰色砂质土
- 19. 暗黄灰色砂质土
- 20. 暗黄褐色粘土

袋状土壤—6·7



9

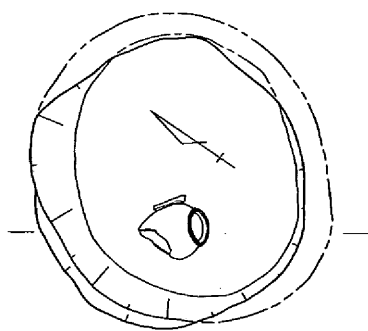


380cm

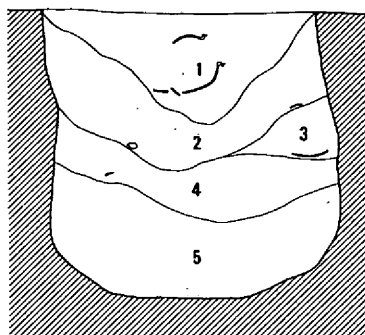
- 1. 暗黄褐色微砂
- 2. 暗褐色微砂
- 3. 暗茶褐色微砂
- 4. 暗黄褐色粘土
- 5. 暗褐色粘质微砂
- 6. 黄褐色粘质微砂

袋状土壤—9·10



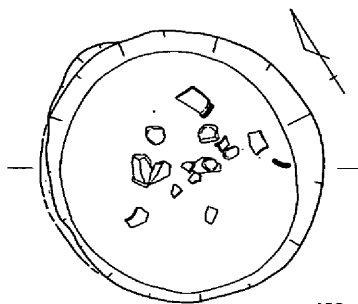


380cm

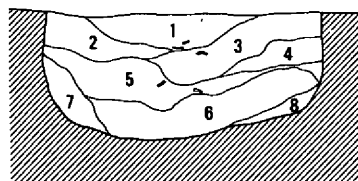


- 1. 暗茶色粘質微砂
- 2. 茶褐色粘質微砂 (土器·炭含む)
- 3. 褐色粘質微砂
- 4. 暗灰褐色粘質微砂
- 5. 暗灰色粘質微砂

袋状土壤-11

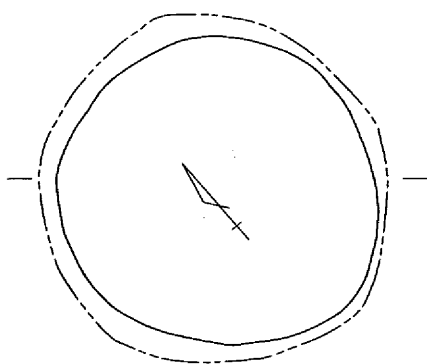


400cm

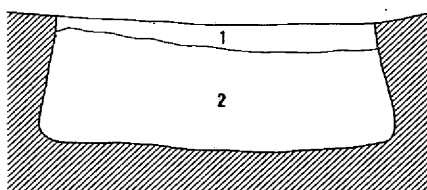


- 1. 暗茶灰色砂質土
- 2. 明茶褐色砂質土
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 明茶褐色砂質土
- 5. 黄褐色粘質土
- 6. 暗茶褐色砂質土
- 7. 黄茶褐色砂質土
- 8. 明黄褐色粘質土 (土器·炭含む)

袋状土壤-13

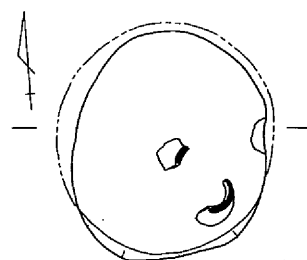


380cm

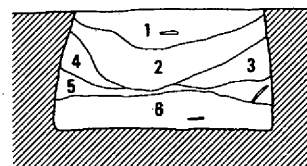


- 1. 褐色微砂
- 2. 暗褐色微砂

袋状土壤-12



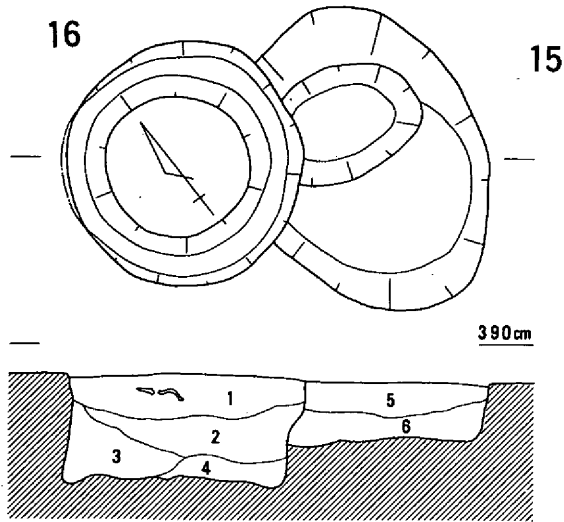
410cm



- 1. 暗茶褐色微砂 (炭含む)
- 2. 茶褐色微砂
- 3. 暗褐色微砂
- 4. 褐灰色微砂
- 5. 黄灰色微砂
- 6. 暗黄灰色微砂

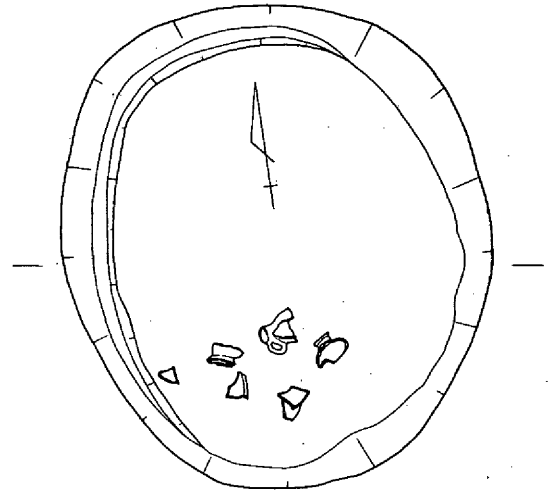
袋状土壤-14





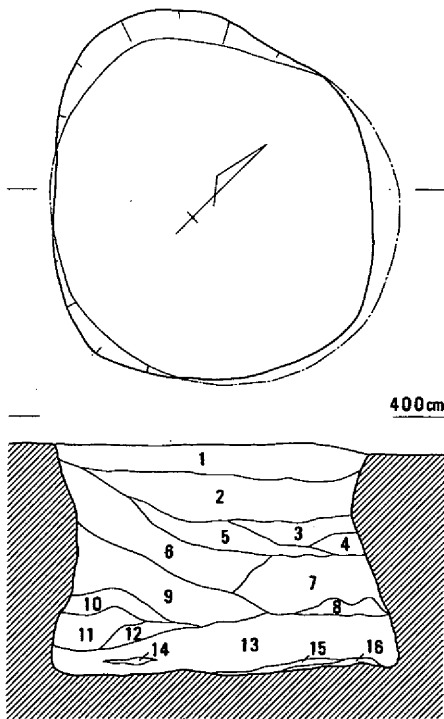
- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 茶褐色粘質土 (土器含む) | 4. 黄茶色粘質土 |
| 2. 茶色粘質土 (炭含む) | 5. 淡褐色砂質土 (炭含む) |
| 3. 淡茶色粘質土 | 6. 淡黄茶色粘質土 |

袋状土壙-15・16



- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 茶褐色粘質土 (炭含む) | 7. 明茶色粘質土 |
| 2. 明褐色粘質土 (炭、土器片を含む) | 8. 黒茶色粘質土 (炭多く含む) |
| 3. 暗褐色粘質土 (焼土、炭、土器片を含む) | 9. 淡茶色粘質土 |
| 4. 淡褐色粘質土 | 10. 明黄茶色粘質土 |
| 5. 茶色粘質土 | 11. 淡黄茶色粘質土 |
| 6. 淡茶色粘質土 | 12. 淡黄茶色微砂質土 |
| | 13. 明黄茶色微砂質土 |

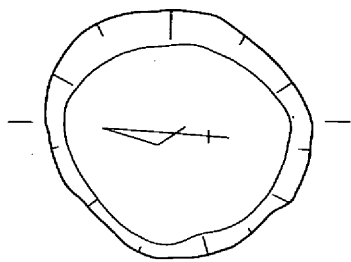
袋状土壙-18



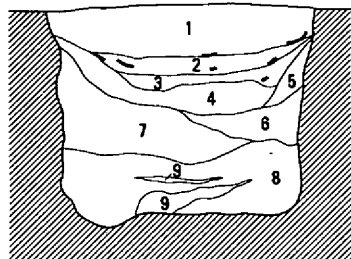
- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 茶褐色粘質土 (Maあり) | 8. 明黄色粘質土 |
| 2. 明茶褐色粘質土 | 9. 薄灰茶色微砂粘質土 (炭を含む) |
| 3. 明茶褐色微砂粘質土 | 10. 灰黄色微砂 |
| 4. 灰黄色微砂 | 11. 明黄色微砂粘質土 |
| 5. 茶褐色微砂粘質土 (炭を含む) | 12. 明灰黄色微砂 |
| 6. 薄茶褐色微砂粘質土 (炭を含む) | 13. 灰茶褐色微砂粘質土 (炭を含む) |
| 7. 灰黄色微砂 (炭を含む) | 14. 明灰黄色微砂 |
| | 15. 明黄褐色粘質土 |
| | 16. 明灰黄色微砂 |

袋状土壙-17



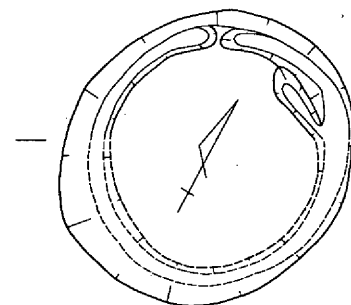


400cm

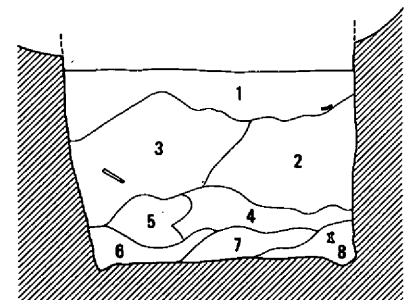


- 1. 茶褐色粘質土 (炭、土器含む)
- 2. 茶褐色粘質土 (炭、土器含む)
- 3. 黒灰茶色粘質土 (炭含む)
- 4. 濃茶褐色粘質土 (炭含む)
- 5. 明黄褐色粘質土
- 6. 明茶褐色粘質土 (炭含む)
- 7. 明茶褐色粘質土
- 8. 明黄茶色微砂
- 9. 明黄褐色粘質土

袋状土壙-19

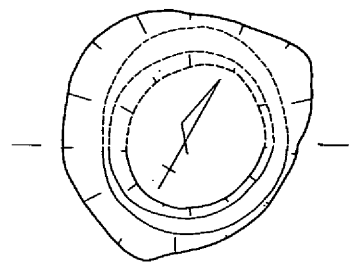


400cm

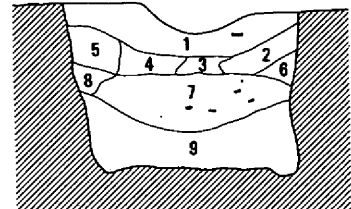


- 1. 茶褐色粘質土 (土器含む)
- 2. 明茶色粘質土
- 3. 茶色粘質土 (土器、炭含む)
- 4. 淡茶色粘質土 (炭含む)
- 5. 茶色粘質土
- 6. 明灰茶色粘質土
- 7. 明灰茶色粘質土
- 8. 明灰茶色粘質土 (土器含む)

袋状土壙-22

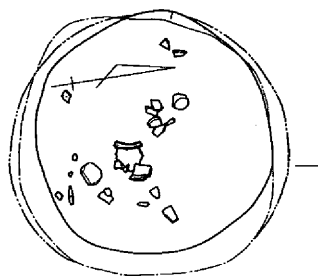


410cm

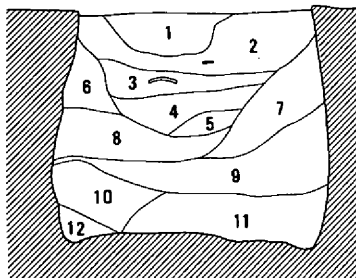


- 1. 茶褐色粘質土 (土器、炭含む)
- 2. 明褐色粘質土 (炭含む)
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 褐色粘質土
- 5. 淡褐色粘質土
- 6. 淡茶色砂質土 (土器、炭含む)
- 7. 黒褐色粘質土 (土器含む)
- 8. 茶色微砂質土
- 9. 黄褐色微砂質土

袋状土壙-21

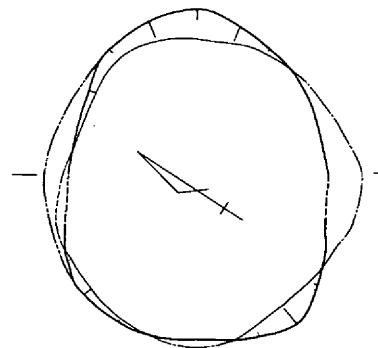


390cm

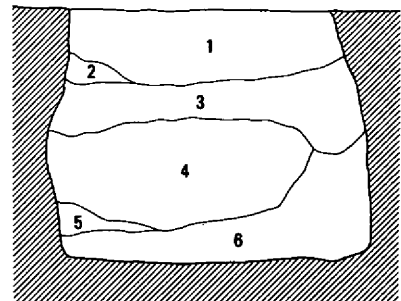


- 1. 黒褐色粘質土 (土器、炭含む)
- 2. 淡黒褐色土 (炭含む)
- 3. 淡黒茶色土 (炭含む)
- 4. 淡黒茶色土
- 5. 淡黒茶色土
- 6. 淡黒褐色土 (炭を含む)
- 7. 淡黒茶色土
- 8. 淡黄茶色土
- 9. 淡黄茶色粘質土
- 10. 淡黄茶色微粘質土
- 11. 淡黄茶色粘質土 (炭を含む)
- 12. 淡黄茶色粘質土 (炭を含む)

袋状土壙-20



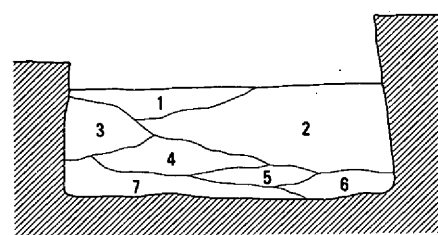
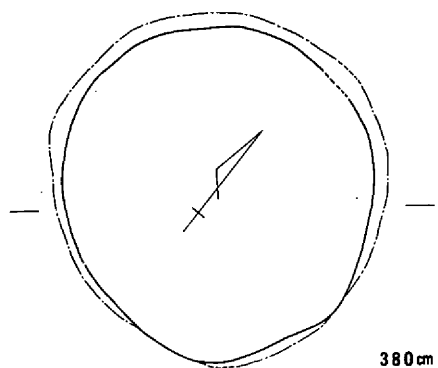
410cm



- 1. 黄褐色砂質土
- 2. 黄茶褐色砂質土
- 3. 黄褐色砂質土
- 4. 暗黄褐色砂質粘質土
- 5. 暗茶褐色砂質土
- 6. 暗黄褐色粘質土

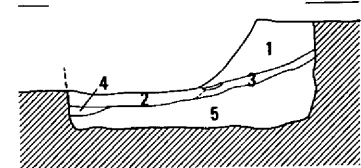
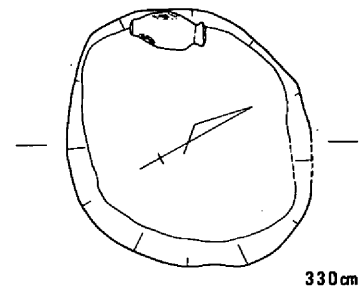
袋状土壙-23





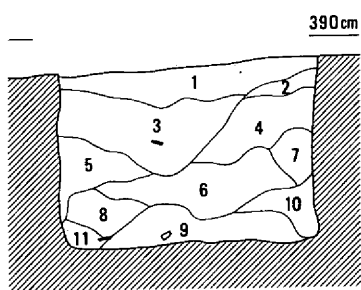
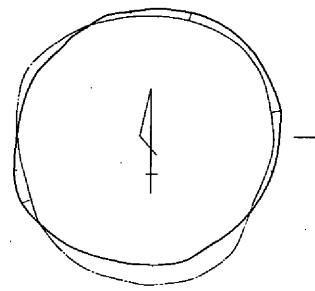
- 1. 明黄茶褐色粘質微砂
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 黄褐色粘質砂
- 4. 暗褐色粘質微砂
- 5. 灰黄色粘質微砂
- 6. 黄褐色粘質微砂
- 7. 灰黄褐色砂質

袋状土坑—24



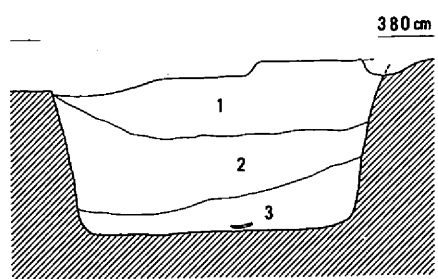
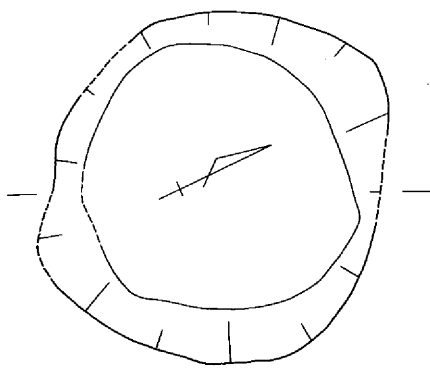
- 1. 明黄褐色粘質微砂
- 2. 黑灰色粘質土 (グライ化)
- 3. 灰茶褐色粘質土
- 4. 灰黄色粘質土
- 5. 灰黄褐色粘質微砂

袋状土坑—25



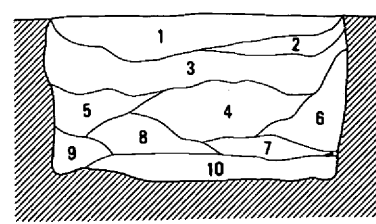
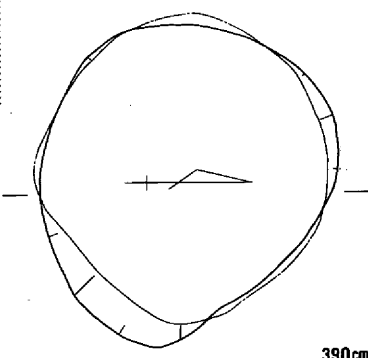
- 1. 茶色粘質土
- 2. 淡茶色粘質土
- 3. 明茶褐色粘質土 (炭、土器含む)
- 4. 淡灰茶色粘質土 (炭含む)
- 5. 黄茶褐色粘質土
- 6. 黄茶色粘質土 (地山土含む)
- 7. 明茶褐色粘質土 (炭含む)
- 8. 灰黄茶色粘質土 (炭含む)
- 9. 暗灰茶色粘質土 (土器、炭を多量に含む)
- 10. 灰茶色粘質土
- 11. 灰黄茶色粘質土

袋状土坑—27



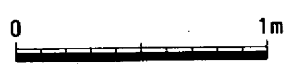
- 1. 茶褐色土粘質微砂
- 2. 暗黄茶褐色微砂
- 3. 灰黄褐色粘質微砂

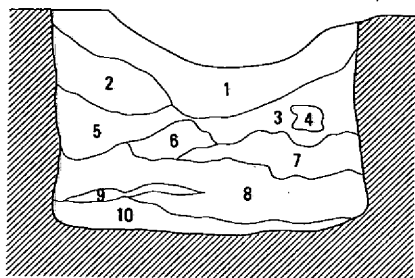
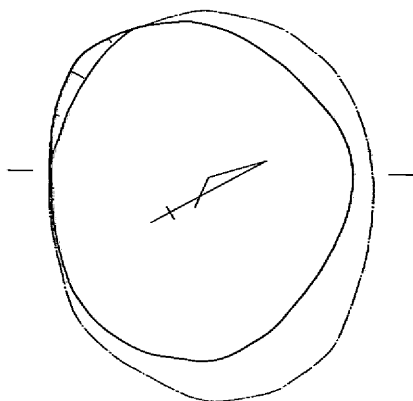
袋状土坑—26



- 1. 黄茶色粘質土
- 2. 黄褐色粘質土 (炭含む)
- 3. 黄褐色粘質土 (炭含む)
- 4. 淡黄褐色粘質土
- 5. 明黄褐色粘質土
- 6. 淡黄茶色粘質土
- 7. 明黄茶色粘質土 (炭含む)
- 8. 明黄茶色粘質土
- 9. 明黄茶色粘質土
- 10. 淡黄褐色粘質土

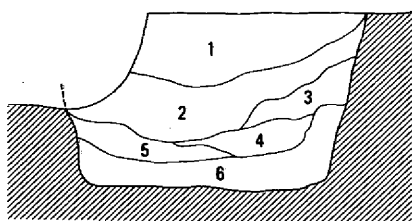
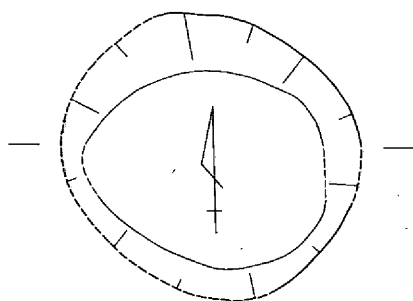
袋状土坑—28





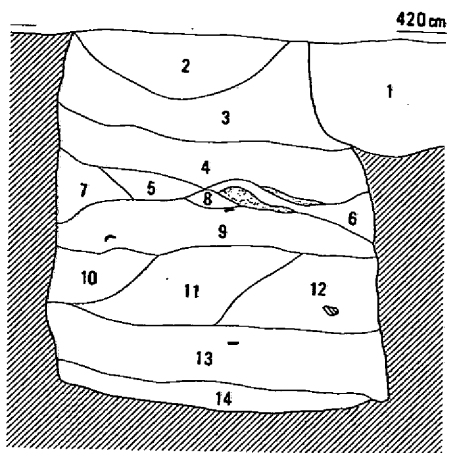
- | | |
|------------|------------|
| 1. 茶褐色粘質土 | 6. 黄茶色粘質土 |
| 2. 茶褐色粘質土 | 7. 黄茶色粘質土 |
| 3. 黄褐色粘質土 | 8. 暗茶褐色粘質土 |
| 4. 明黄茶色粘質土 | 9. 茶褐色粘質土 |
| 5. 黄茶色粘質土 | 10. 淡褐色粘質土 |

袋状土壙—30



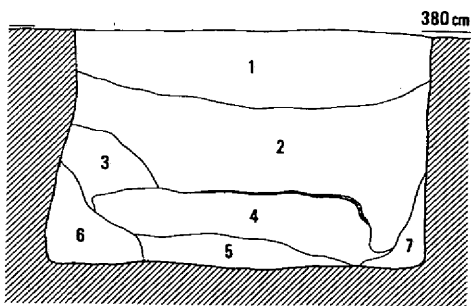
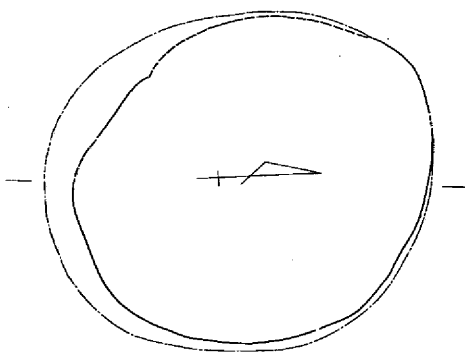
- | | |
|-----------------------|-------------|
| 1. 明茶褐色粘質微砂
(炭を含む) | 4. 灰茶粘質微砂 |
| 2. 灰黄色砂質土 | 5. 灰茶色砂質土 |
| 3. 白灰色砂質土 | 6. 明灰茶褐色砂質土 |

袋状土壙—32



- | | |
|-------------|--------------|
| 1. 暗灰茶褐色粘質土 | 8. 淡黑茶色粘質土 |
| 2. 茶褐色粘質土 | 9. 黑茶褐色粘質土 |
| 3. 暗茶褐色粘質土 | 10. 明黄褐色粘質土 |
| 4. 茶褐色粘質土 | 11. 淡黑黄褐色粘質土 |
| 5. 暗灰褐色粘質土 | 12. 淡黑黄褐色粘質土 |
| 6. 淡黑茶色粘質土 | 13. 淡黑黄褐色粘質土 |
| 7. 暗灰茶褐色粘質土 | 14. 灰黄褐色粘質土 |

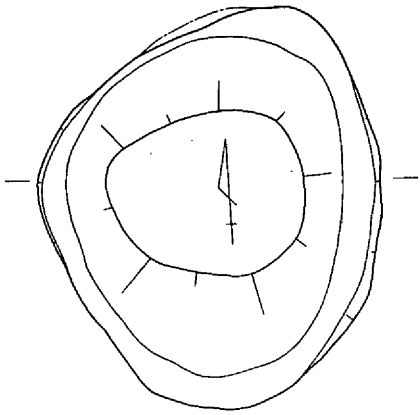
袋状土壙—29



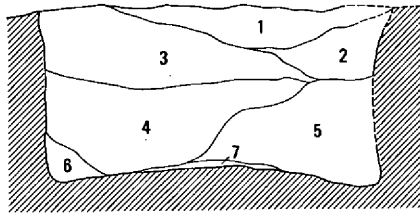
- | | |
|------------------|----------------------|
| 1. 暗茶褐色粘質微砂 | 5. 明黄灰茶色粘質土 (炭、燒土含む) |
| 2. 茶褐色粘質土 (土器含む) | 6. 明黄茶色粘質土 (炭含む) |
| 3. 黄茶色粘質土 (土器含む) | 7. 明黄茶色粘質土 |
| 4. 黄褐色粘質土 (炭含む) | |

袋状土壙—31



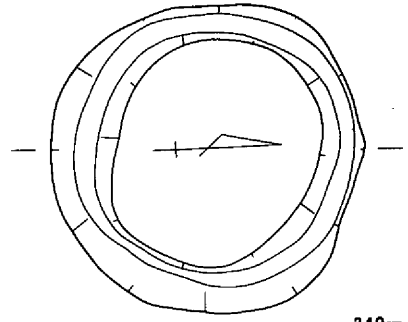


340cm

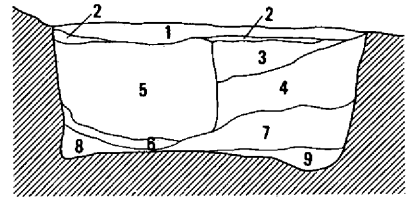


- 1. 明茶褐色粘質土
- 2. 茶褐色細~微砂
- 3. 暗茶褐色粘質土
- 4. 茶褐色粘質土
- 5. 灰茶色細砂
- 6. 暗黄褐色粘質土
- 7. 茶褐色粘質土

袋状土壙-33

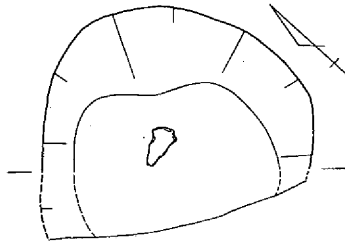


340cm

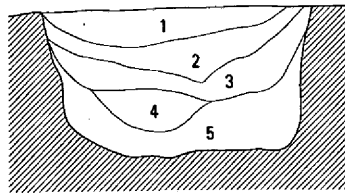


- 1. 黄茶褐色細砂
- 2. 黄褐色土
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 暗茶褐色粘質土
- 5. 茶褐色微砂
- 6. 茶褐色微砂
- 7. 茶褐色粘質土
- 8. 灰茶色微砂
- 9. 茶褐色微砂

袋状土壙-34

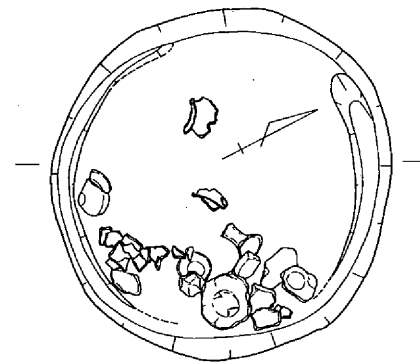


390cm

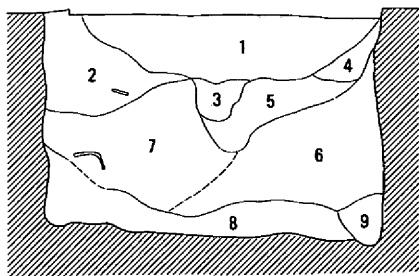


- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 明褐色粘質土
- 3. 明黄灰茶色微砂質土
- 4. 暗褐色粘質土
- 5. 茶褐色粘質土 (炭含む)

袋状土壙-35

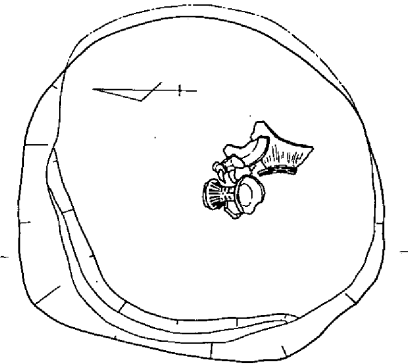


390cm

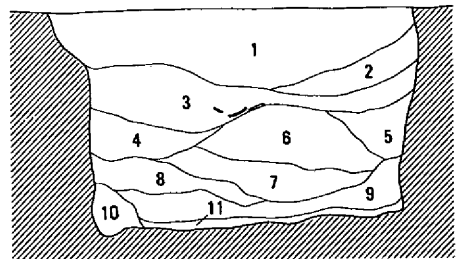


- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 茶褐色粘質土 (土器含む)
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 茶褐色粘質土
- 5. 明茶色粘質土
- 6. 明茶色砂質土
- 7. 明茶色粘質土 (炭含む)
- 8. 淡茶色粘質土
- 9. 灰茶色粘質土

袋状土壙-36



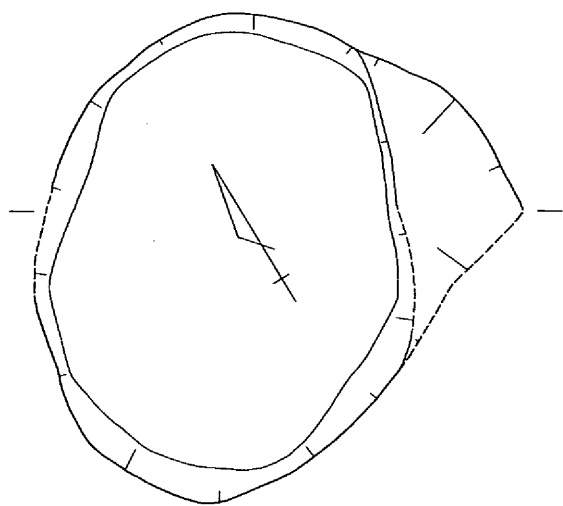
360cm



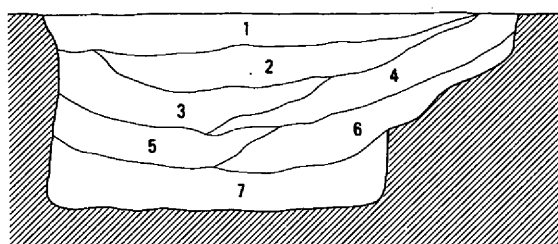
- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 明茶オリーブ色粘質土
- 3. 茶褐色粘質土 (炭片、土器含む)
- 4. 暗茶褐色粘質土
- 5. 暗茶オリーブ色粘質土
- 6. 暗茶灰褐色粘質土
- 7. 黄茶褐色粘質土 (炭含む)
- 8. 黄茶褐色粘質土
- 9. 淡灰オリーブ色粘質土
- 10. 茶灰オリーブ色粘質土
- 11. 灰オリーブ色粘質土

袋状土壙-37



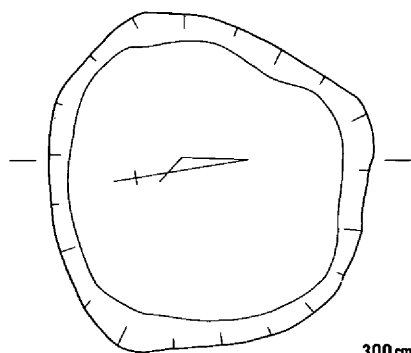


350cm

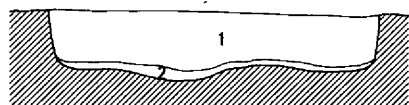


- | | |
|------------|------------------------|
| 1. 茶褐色粘质土 | 5. 暗茶灰色细砂粘质土
(土器含む) |
| 2. 黄茶褐色粘质土 | 6. 暗茶灰色砂 |
| 3. 暗茶褐色粘质土 | 7. 茶灰色微-细砂
(土器含む) |
| 4. 暗茶褐色粘质土 | |

袋状土壤-38

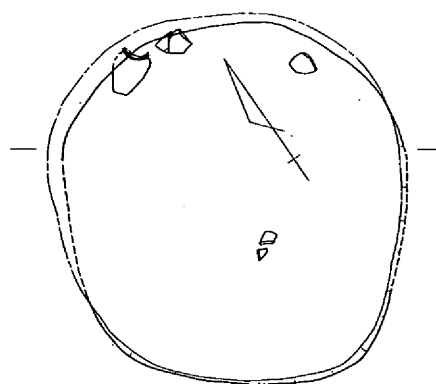


300cm

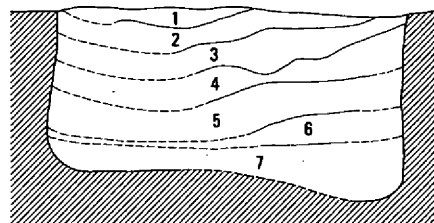


- | | |
|------------|------------|
| 1. 暗黄灰色砂质土 | 2. 青灰白色砂质土 |
|------------|------------|

袋状土壤-40

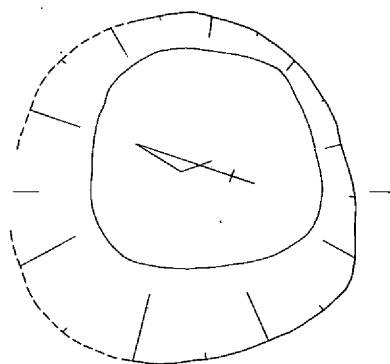


340cm

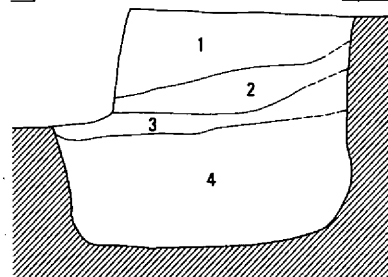


- | | |
|------------|-------------|
| 1. 黑褐色粘质砂 | 5. 黑灰色粘质土 |
| 2. 暗黄褐色粘质土 | 6. 明黄灰色砂质土 |
| 3. 暗黄褐色砂质土 | 7. 明黄褐色微砂质土 |
| 4. 暗黑灰色砂质土 | |

袋状土壤-39



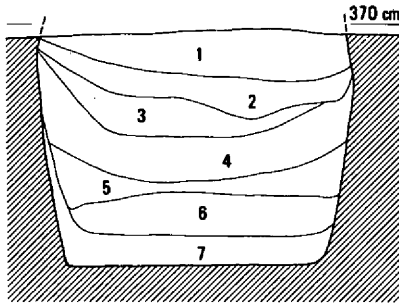
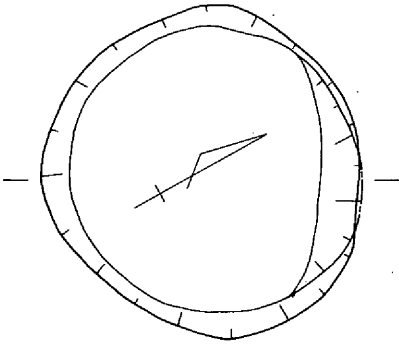
370cm



- | | |
|------------|------------|
| 1. 暗黑灰色粘质土 | 3. 暗黄褐色粘质土 |
| 2. 暗黄灰色砂质土 | 4. 青灰褐色砂质土 |

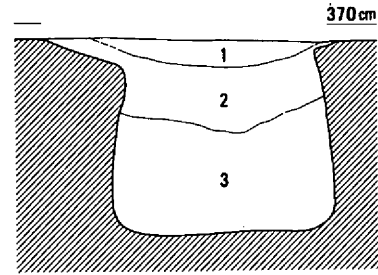
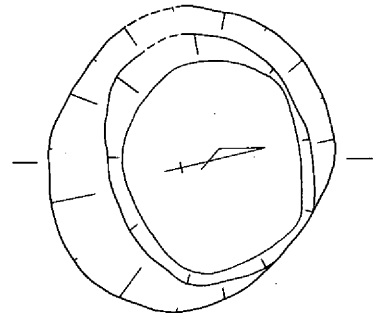
袋状土壤-41





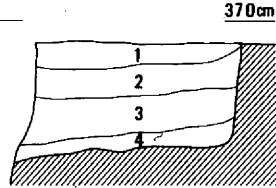
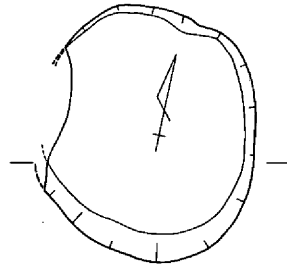
- 1. 橙灰褐色砂質土
- 2. 濃橙灰褐色砂質土
- 3. 黄灰褐色砂質土
- 4. 橙灰色砂質土
- 5. 濃黄灰色粘質砂
- 6. 淡灰色土 (炭含む)
- 7. 暗灰色土 (炭含む)

袋状土壤-42



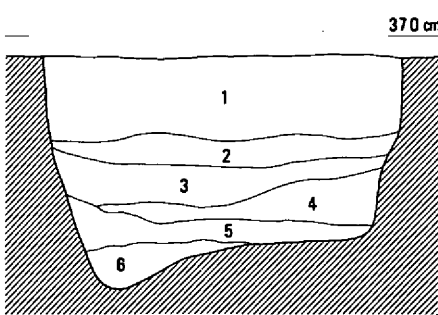
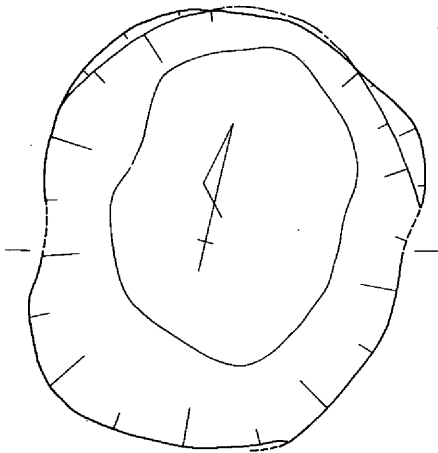
- 1. 淡灰黄色砂
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 暗灰茶色砂質土

袋状土壤-43



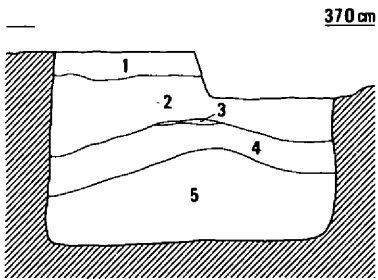
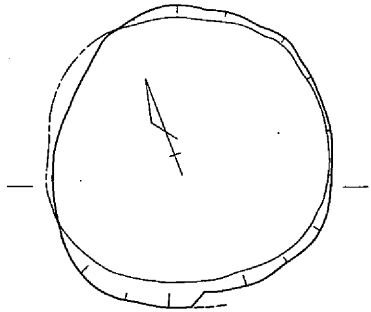
- 1. 明黄茶色土
- 2. 黄茶色弱粘質土
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘質土

袋状土壤-45



- 1. 黄茶色土
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. 黄色砂
- 4. 灰茶色砂質土
- 5. 淡黄灰色砂
- 6. 暗灰色砂質土

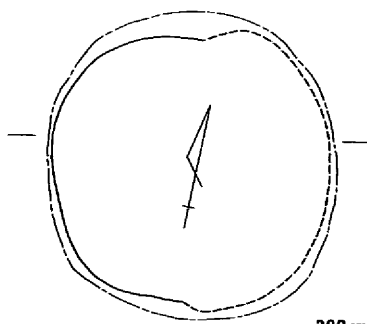
袋状土壤-44



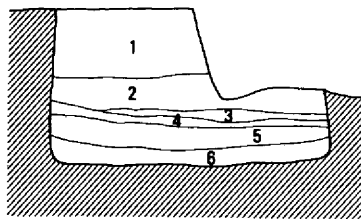
- 1. 茶色砂
- 2. 茶褐色砂質土
- 3. 黄色粘土
- 4. 暗茶色砂質土
- 5. 暗灰茶色粘質砂

袋状土壤-46



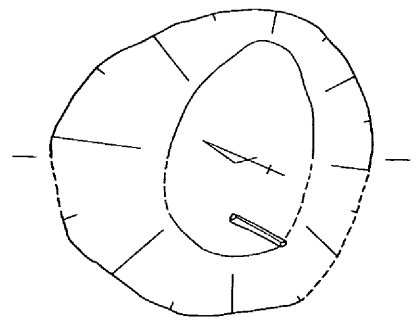


390cm

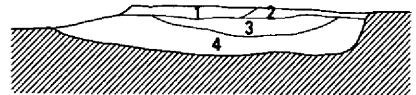


- 1. 灰茶色砂質土
- 2. 灰黄色土
- 3. 黄色粘質土
- 4. 暗灰色砂
- 5. 黄灰色砂
- 6. 暗灰色砂 (炭含 τ)

袋状土壤-47

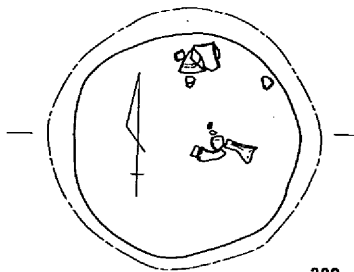


330cm

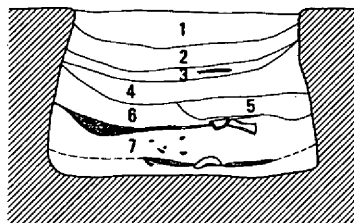


- 1. 黄茶色砂質土
- 2. 灰茶褐色砂質土
- 3. 暗灰橙褐色砂質土
- 4. 黄灰褐色砂質土

袋状土壤-50

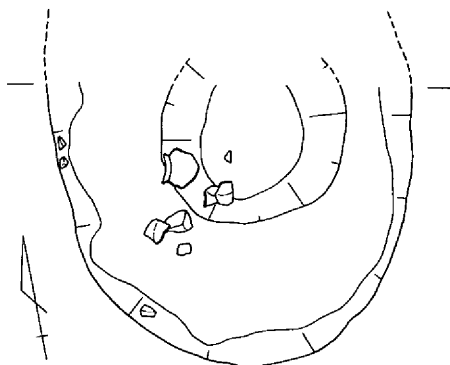


380cm

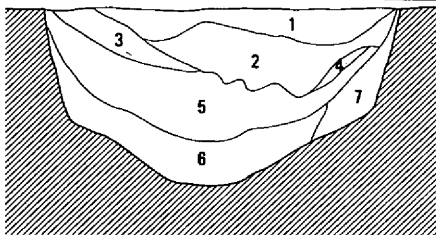


- 1. 黄茶褐色砂質土
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 暗黄灰褐色砂質土 (炭含 τ)
- 4. 淡黄灰褐色砂質土
- 5. 黄灰色粘質砂
- 6. 暗灰褐色粘質土 (土器、炭含 τ)
- 7. 黄灰褐色砂質土層

袋状土壤-49

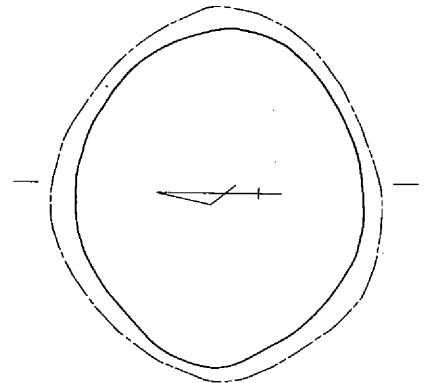


400cm

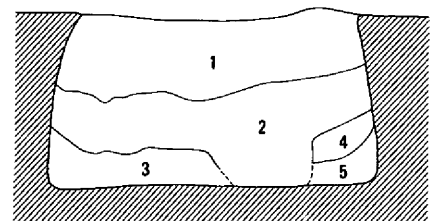


- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 暗黄茶褐色砂質土 (炭含 τ)
- 3. 黄茶褐色砂質土
- 4. 淡黄褐色砂質土
- 5. 黄褐色砂質土
- 6. 暗茶褐色砂質土 (炭土含 τ)
- 7. 浓黄褐色砂質土

袋状土壤-48



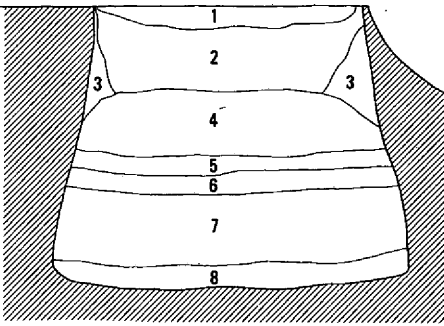
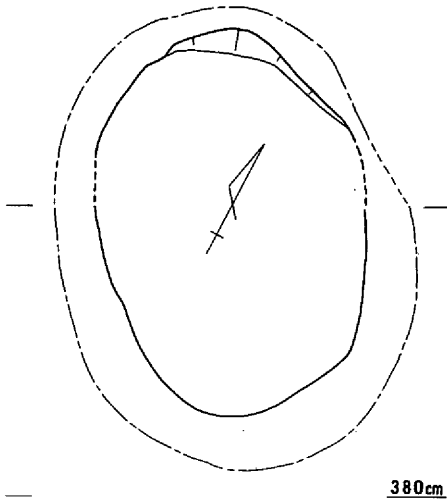
330cm



- 1. 黄灰褐色砂質土
- 2. 黄灰色砂質土
- 3. 浓黄灰色粘質細砂
- 4. 淡黄灰色砂質土
- 5. 浓黄灰色細砂 (炭含 τ)

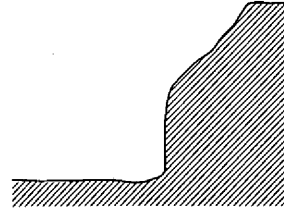
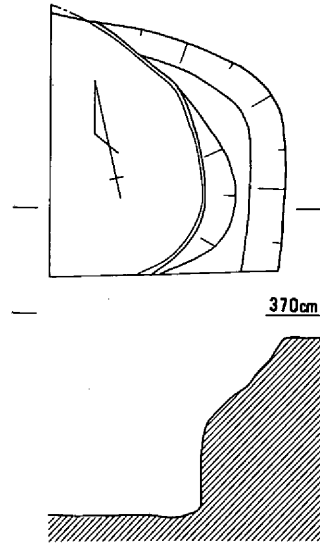
袋状土壤-51



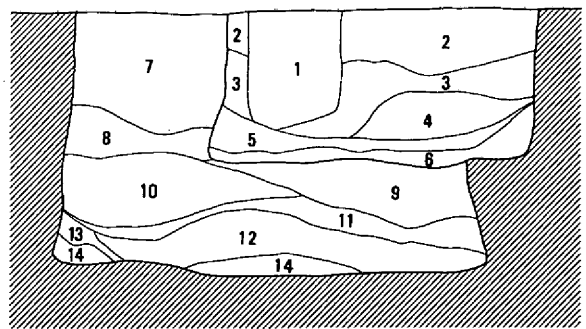
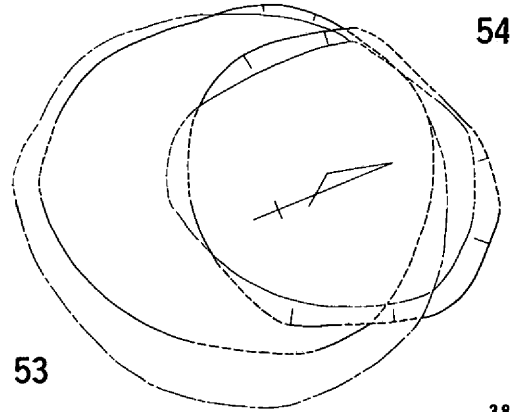


- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 暗灰茶褐色土 | 5. 灰褐色粘質微砂 |
| 2. 灰茶褐色土 | 6. 暗灰茶色粘質微砂 |
| 3. 灰茶色土 | 7. 暗灰褐色粘質微砂 |
| 4. 灰褐色土 | 8. 暗灰色土 |

袋状土壤—52

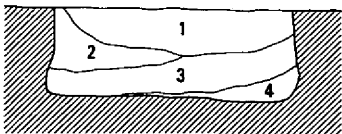
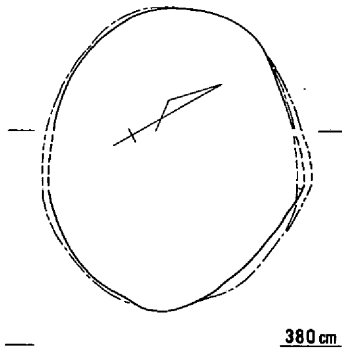


袋状土壤—58



- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. 暗灰茶褐色微砂 (土器含む) | 8. 茶褐色微砂 |
| 2. 灰茶褐色土 | 9. 暗灰褐色土 |
| 3. 灰茶褐色土 (炭含む) | 10. 灰褐色土 |
| 4. 暗灰茶褐色土 (炭含む) | 11. 灰褐色土 (炭含む) |
| 5. 黄灰茶色土 (炭含む) | 12. 暗青灰褐色土 |
| 6. 暗灰茶褐色土 | 13. 灰褐色細砂 |
| 7. 灰茶褐色微砂 | 14. 灰褐色粘質微砂 |

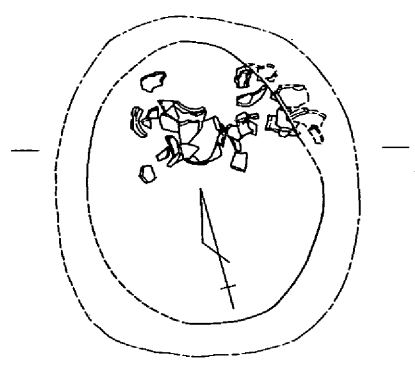
袋状土壤—53·54



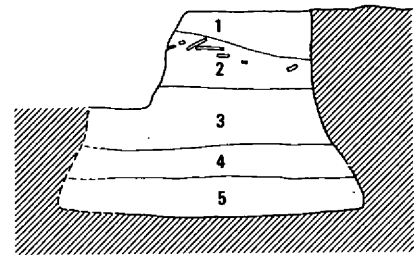
- | | |
|-----------|------------|
| 1. 暗灰茶褐色土 | 3. 灰茶色土 |
| 2. 灰茶褐色土 | 4. 灰茶色粘質微砂 |

袋状土壤—55



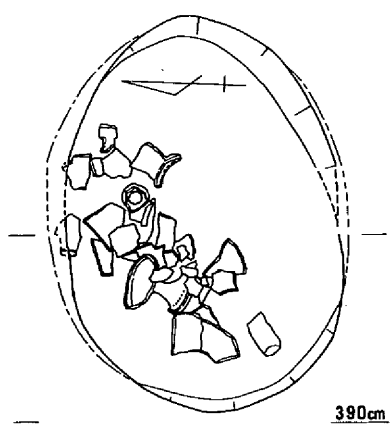


370cm

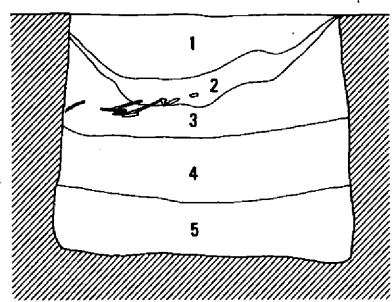


- 1. 茶褐色微砂
- 2. 暗茶褐色微砂 (土器·炭含 \pm)
- 3. 暗灰茶褐色微砂
- 4. 暗灰茶色微砂
- 5. 灰茶色粘质土

袋状土壤—59

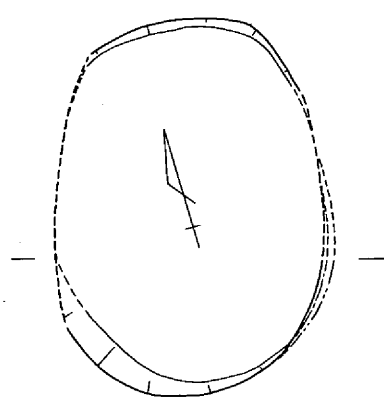


390cm

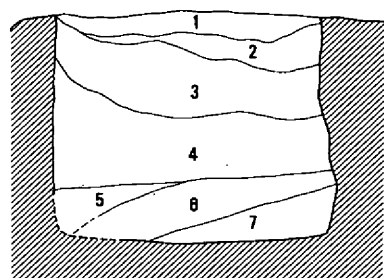


- 1. 灰茶褐色土
- 2. 暗灰茶褐色土 (炭含 \pm)
- 3. 灰茶色土
- 4. 暗灰茶色土
- 5. 暗绿灰褐色土

袋状土壤—56

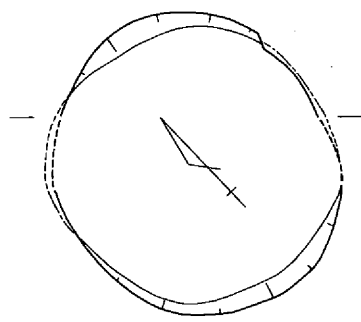


380cm

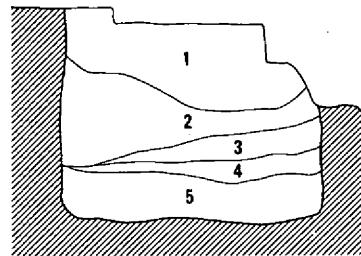


- 1. 暗灰茶褐色土
- 2. 暗灰褐色土
- 3. 灰茶褐色土
- 4. 暗灰褐色微砂
- 5. 暗灰茶褐色微砂
- 6. 暗灰茶色微砂
- 7. 暗灰褐色微砂

袋状土壤—60



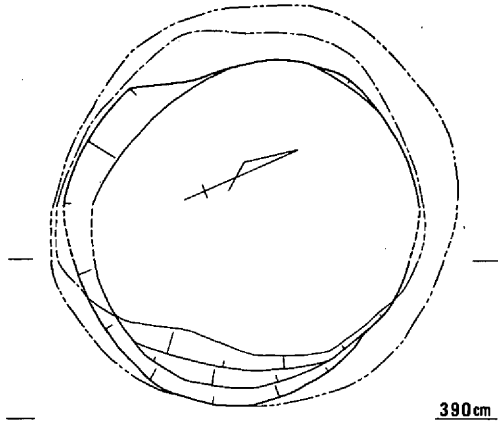
370cm



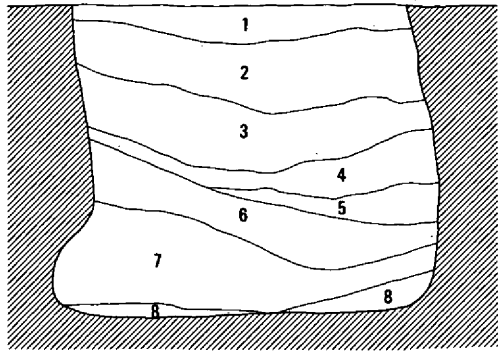
- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 灰茶褐色土
- 3. 暗茶褐色土 (炭含 \pm)
- 4. 暗褐色土
- 5. 褐色微砂

袋状土壤—57



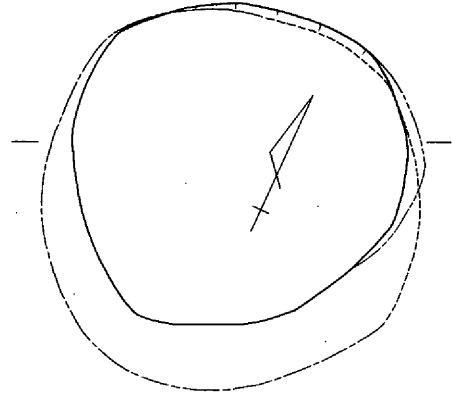


390cm

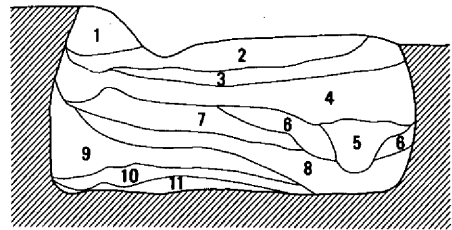


- 1. 暗灰茶褐色土
- 2. 灰茶褐色土
- 3. 灰茶色土
- 4. 暗灰茶色土
- 5. 茶褐色土
- 6. 暗灰茶色粘质微砂
- 7. 暗灰褐色粘质微砂
- 8. 暗灰色粘质微砂

袋状土坑—61

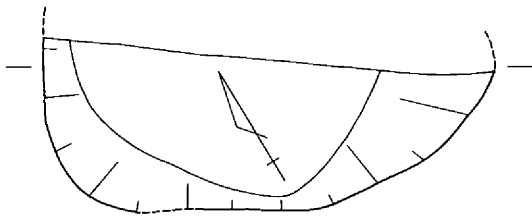


340cm

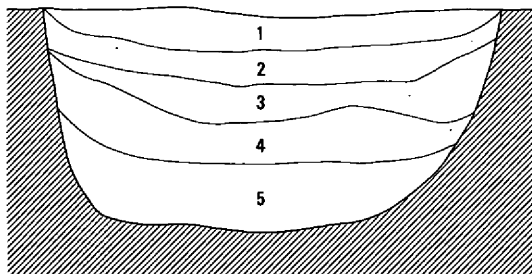


- 1. 黄色砂
- 2. 暗灰色粘质土
- 3. 黄色砂
- 4. 暗灰色粘质土
- 5. 黄色砂
- 6. 暗黄灰色粘质土
- 7. 黄色砂
- 8. 暗灰色粘质土 (炭含 ψ)
- 9. 黄灰色砂
- 10. 灰色砂 (炭含 ψ)
- 11. 黄灰色砂

袋状土坑—62

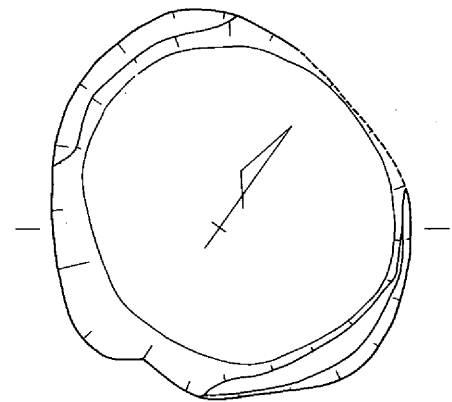


410cm

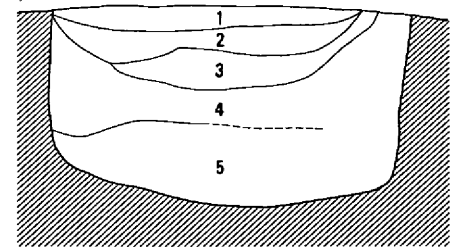


- 1. 灰黄褐色砂泥
- 2. 灰黄褐色泥砂
- 3. 灰茶褐色泥砂
- 4. 淡茶褐色砂泥
- 5. 茶褐色砂泥

袋状土坑—63



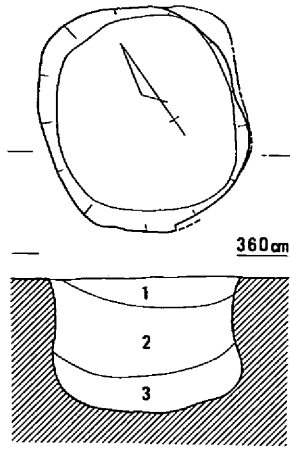
350cm



- 1. 茶灰色砂质土
- 2. 茶灰色砂质土
- 3. 茶黄褐色砂质土
- 4. 淡茶灰色砂质土 (炭含 ψ)
- 5. 灰褐色砂质土

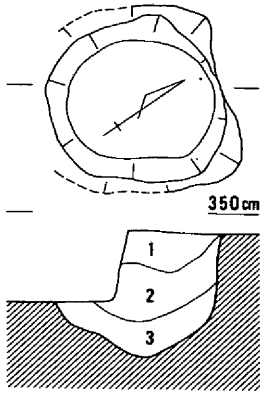
袋状土坑—64





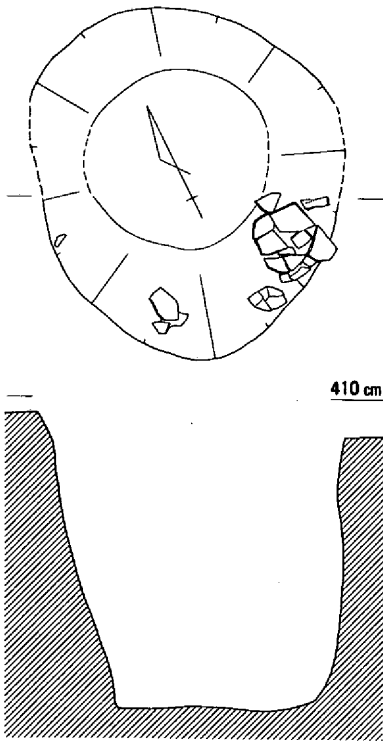
- 1. 暗茶褐色砂泥
- 2. 茶褐色泥砂 (地山土含む)
- 3. 暗茶褐色砂泥

袋状土壙—65

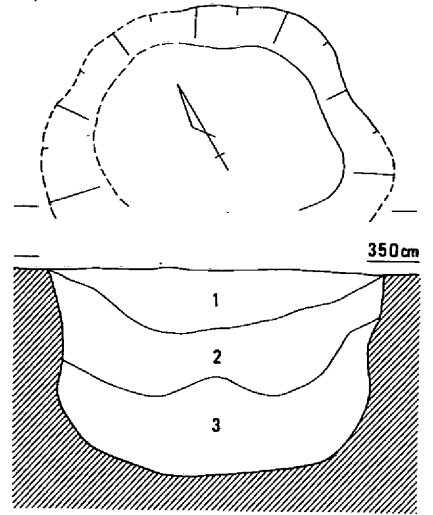


- 1. 暗茶褐色砂泥
- 2. 茶褐色泥砂
- 3. 暗茶褐色泥砂

袋状土壙—66

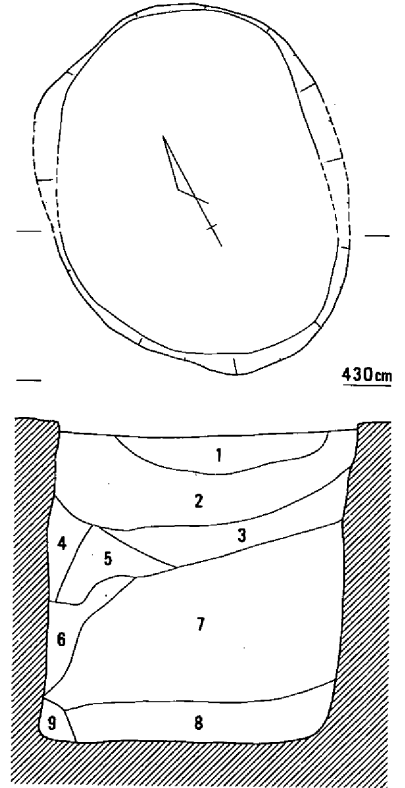


袋状土壙—68



- 1. 灰褐色砂質土
- 2. 茶灰褐色砂質土
- 3. 茶褐色砂泥

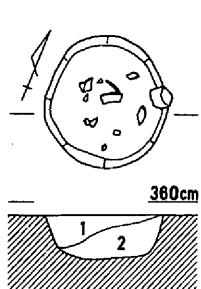
袋状土壙—67



- 1. 暗茶褐色粘質土 (燒土含む)
- 2. 茶褐色粘質土
- 3. 茶色粘質土
- 4. 茶色粘質土
- 5. 黑灰茶色粘質土
- 6. 黄茶色粘質土
- 7. 淡茶色粘質土
- 8. 灰黄茶色粘質土
- 9. 淡灰黄茶色微砂質土

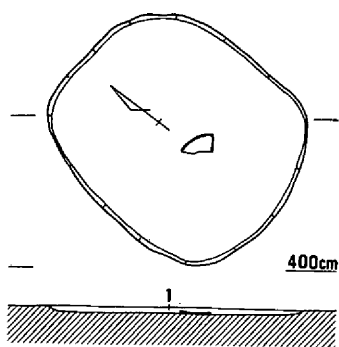
袋状土壙—69



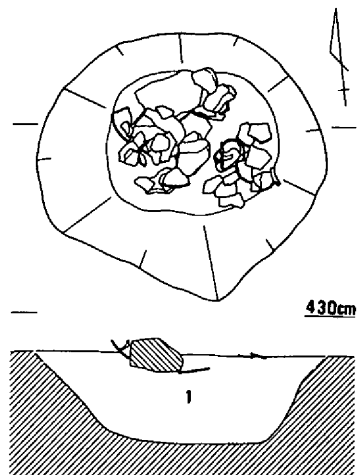


- 1. 明褐色砂質土
- 2. 灰褐色砂質土

土壤-41

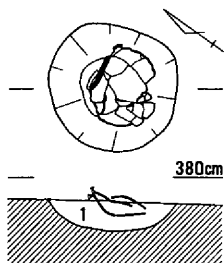


土壤-42



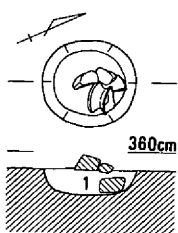
- 1. 暗褐色微砂

土壤-43



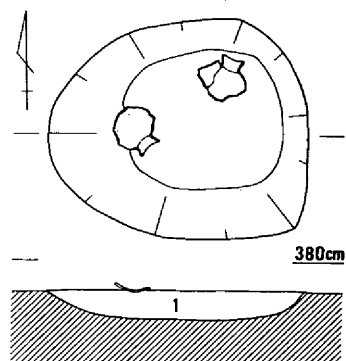
- 1. 暗褐色微砂

土壤-45



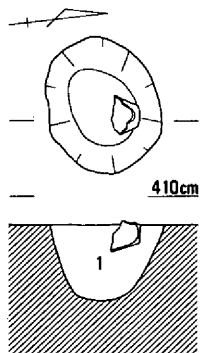
- 1. 暗褐色微砂

土壤-44



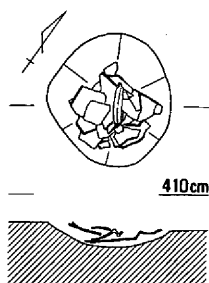
- 1. 褐色微砂

土壤-49

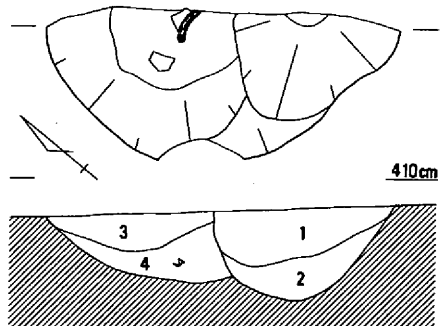


- 1. 暗褐色微砂

土壤-47

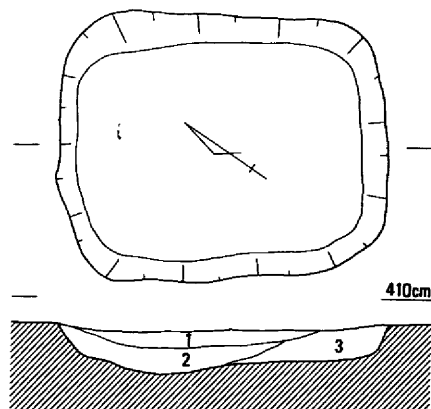


土壤-48



- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 暗黄褐色微砂
- 3. 茶褐色微砂
- 4. 暗褐色微砂

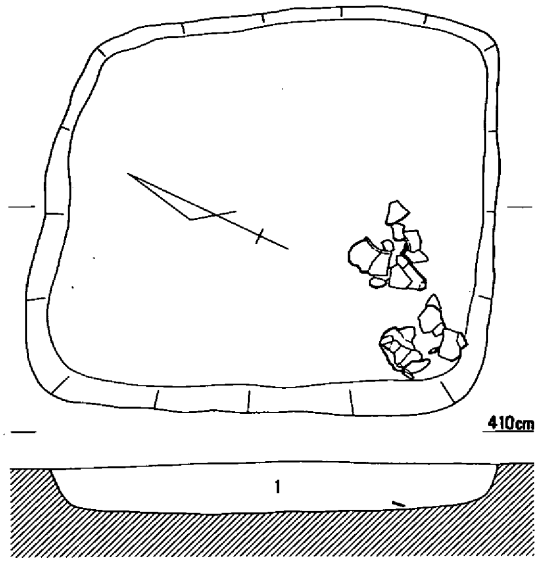
土壤-51



- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 暗褐色微砂
- 3. 暗褐色細砂

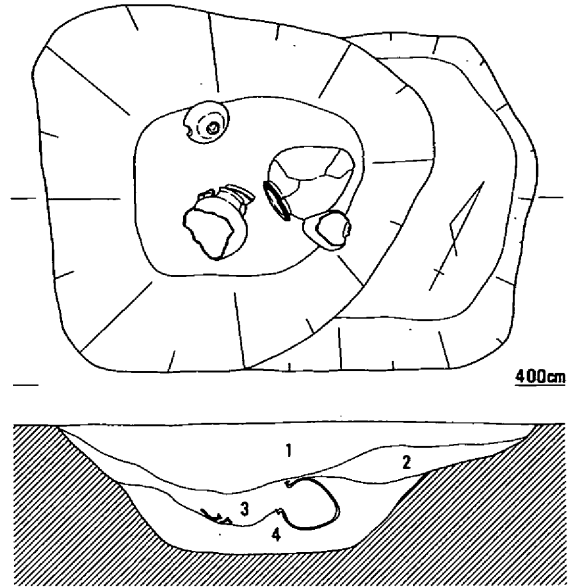
土壤-50





1. 褐色微砂

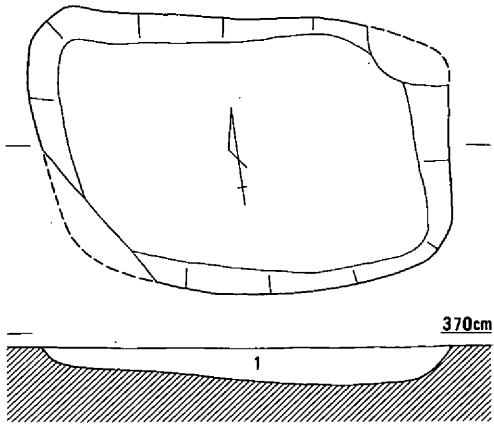
土壤-52



1. 暗褐色微砂
2. 暗茶褐色微砂

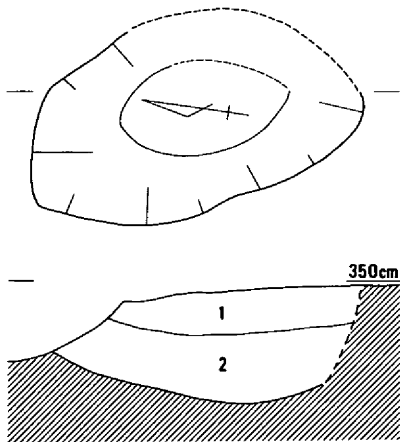
3. 褐色粘質微砂
4. 明褐色粘質微砂

土壤-53



1. 暗褐色微砂 (地山土含む)

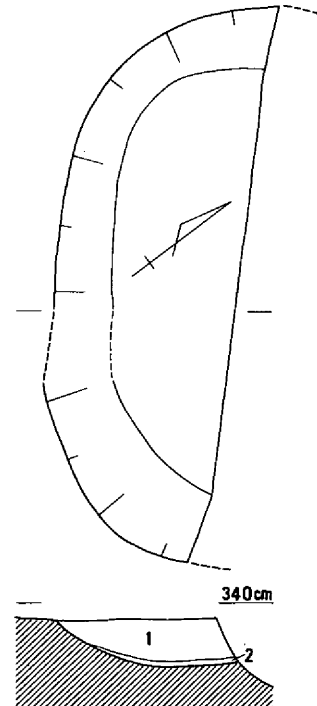
土壤-54



1. 灰褐色砂質土

2. 灰茶褐色砂質土

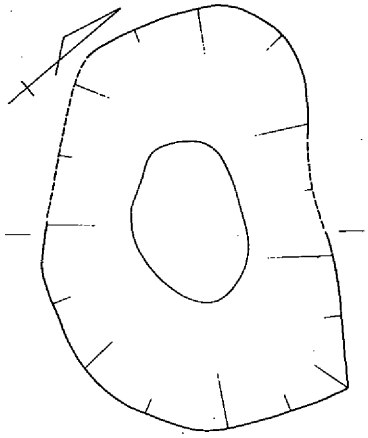
土壤-55



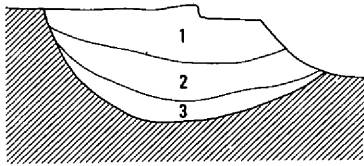
1. 淡茶褐色泥砂 (炭・焼土を含む)
2. 淡褐色泥砂

土壤-56



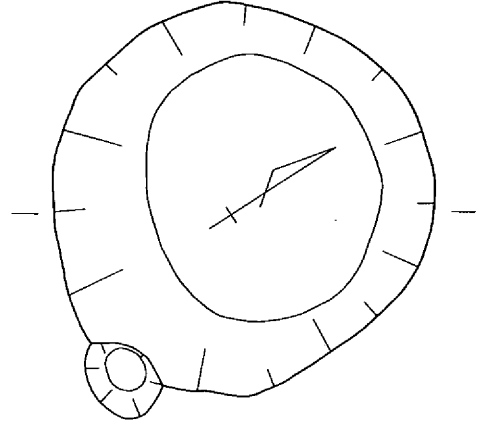


350cm

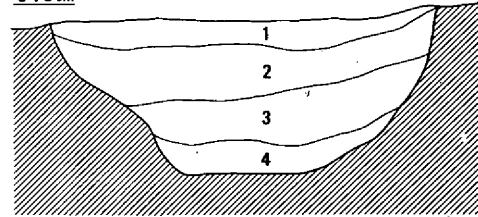


- 1. 暗褐色泥砂
- 2. 茶褐色泥砂
- 3. 淡黄褐色泥砂 (炭·土器含む)

土壤-57

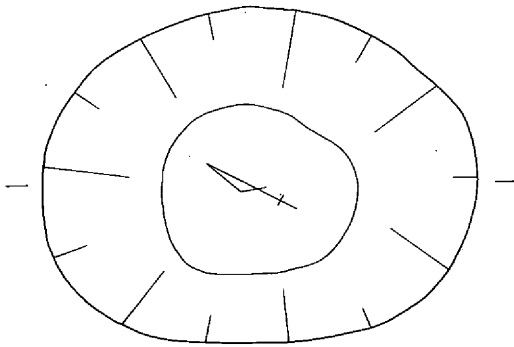


340cm

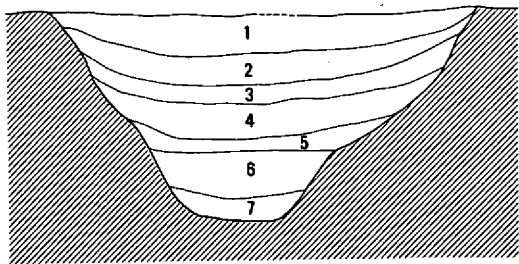


- 1. 暗黄褐色泥砂
- 2. 黄灰褐色泥砂
- 3. 暗青灰色粘质土
- 4. 褐色砂泥

土壤-58

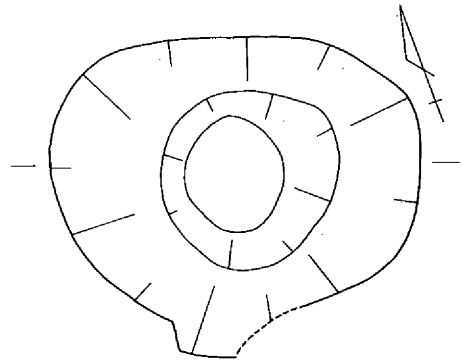


350cm

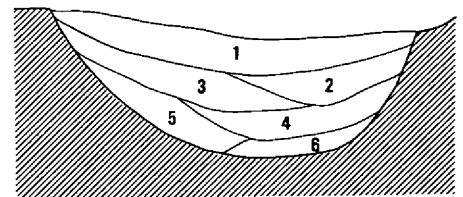


- 1. 黄褐色泥砂
- 2. 暗黄褐色砂质土
- 3. 灰黄褐色砂质土
- 4. 淡褐色砂质土
- 5. 暗青灰色砂土
- 6. 暗青灰褐色砂质土
- 7. 暗灰白色砂

土壤-59



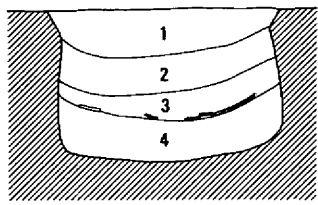
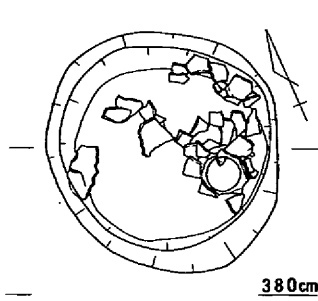
400cm



- 1. 暗褐色泥砂
- 2. 褐色泥砂
- 3. 青灰褐色砂质土
- 4. 灰褐色砂质土
- 5. 灰褐色砂土
- 6. 青灰褐色粘质微砂

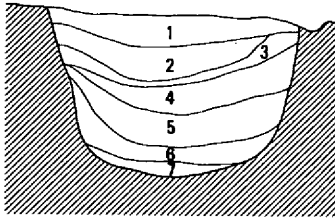
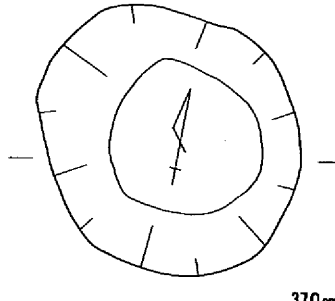
土壤-60





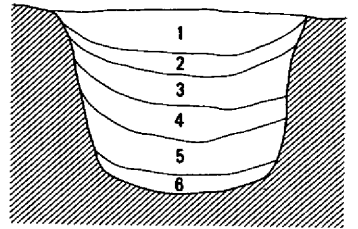
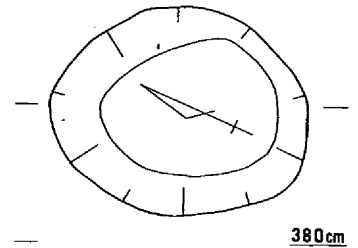
- 1. 暗黄褐色泥砂 (炭含 ψ)
- 2. 暗灰褐色砂質土
- 3. 灰褐色砂質土 (土器含 ψ)
- 4. 淡茶灰色泥砂

土壤-61



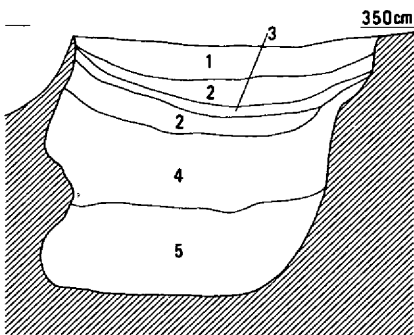
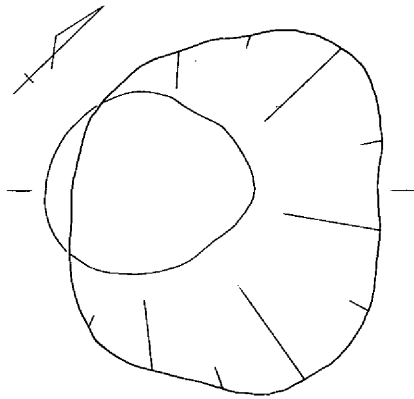
- 1. 褐色泥砂
- 2. 淡褐色泥砂
- 3. 褐色砂泥
- 4. 暗黄褐色泥砂
- 5. 黄褐色泥砂
- 6. 黄褐色砂泥
- 7. 淡黄褐色粘質土

土壤-62



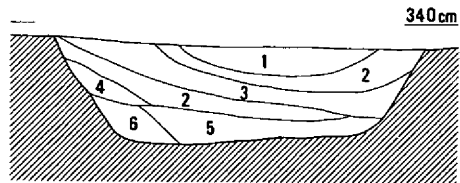
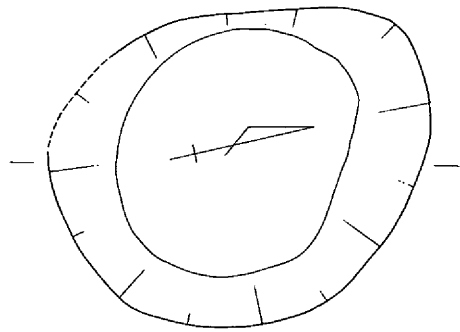
- 1. 褐色泥砂
- 2. 淡褐色泥砂
- 3. 黄褐色泥砂
- 4. 明黄褐色砂質土
- 5. 淡黄褐色粘質土
- 6. 褐色粘質土

土壤-63



- 1. 暗茶褐色泥砂
- 2. 淡茶褐色泥砂
- 3. 暗茶灰色泥砂
- 4. 茶灰色砂質土
- 5. 暗灰褐色砂質土

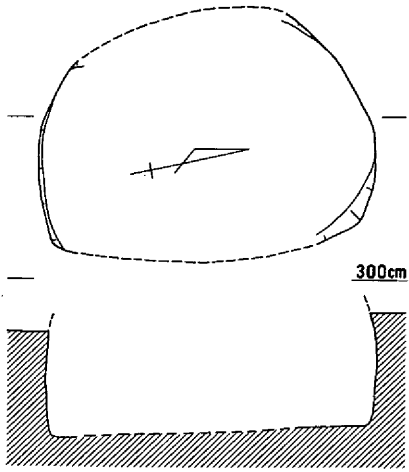
土壤-64



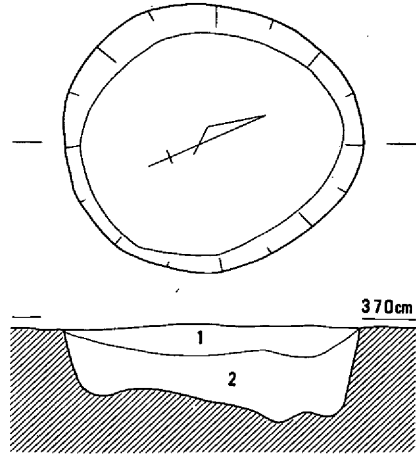
- 1. 淡茶灰色砂質土
- 2. 淡茶灰色砂土
- 3. 茶灰色砂質土
- 4. 淡茶褐色泥砂
- 5. 茶灰色粘質土
- 6. 淡灰褐色砂質土

土壤-65



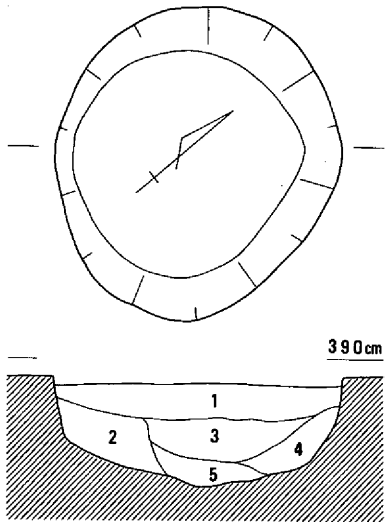


土壙-66



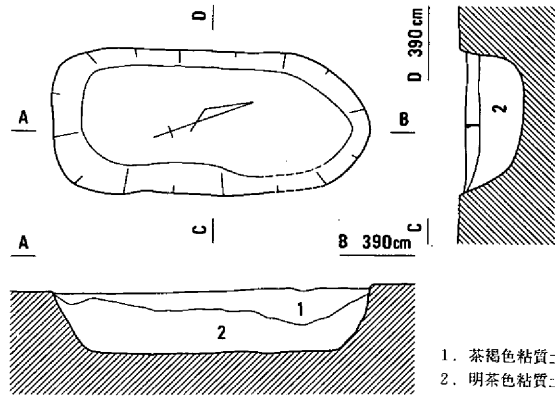
1. 茶色砂質土 2. 茶色微砂粘質土 (炭含む)

土壙-67



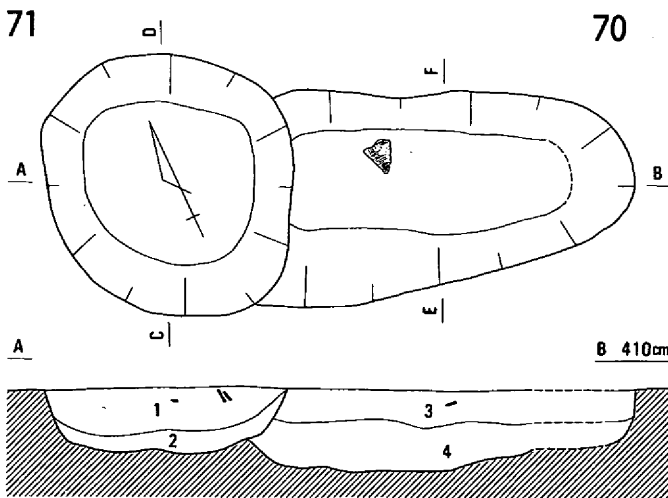
1. 茶褐色粘質土 4. 淡茶色粘質土
2. 明茶色粘質土 5. 明茶褐色粘質土
3. 茶色粘質土

土壙-68



1. 茶褐色粘質土
2. 明茶色粘質土

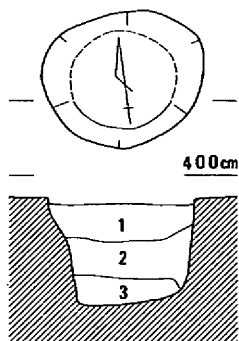
土壙-69



1. 黒褐色粘質土 (土器含む)
2. 暗褐色粘質土
3. 茶褐色粘質土
4. 黄色粘質土

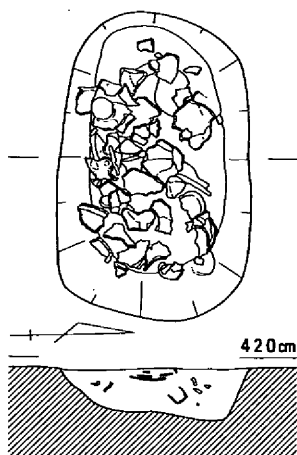
土壙-70・71





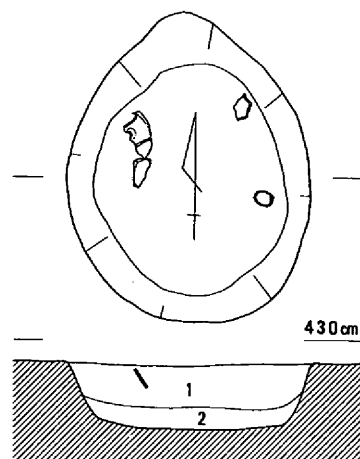
- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 茶色粘質土
- 3. 明茶色粘質土

土壤-73



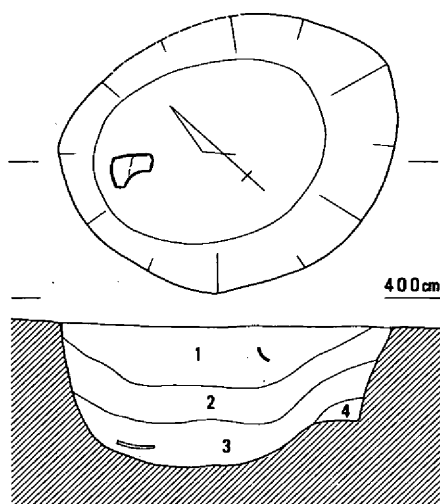
- 1. 濃茶褐色粘質土
(土器含む)

土壤-72



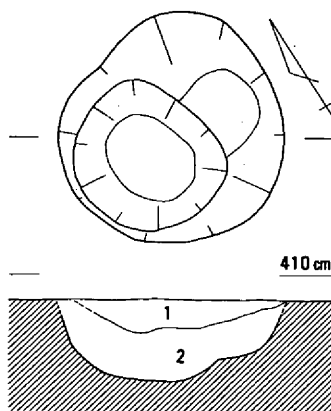
- 1. 濃茶色粘質土
- 2. 濃茶灰褐色粘質土

土壤-74



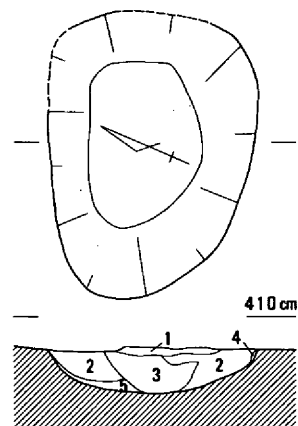
- 1. 茶褐色粘質土
(炭、土器含む)
- 2. 茶色粘質土
- 3. 明茶色粘質土
- 4. 淡茶色粘質土

土壤-76



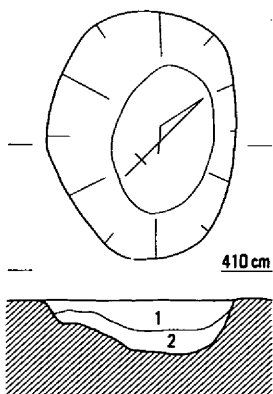
- 1. 茶褐色粘質土 (炭含む)
- 2. 暗茶褐色粘質土 (炭含む)

土壤-75



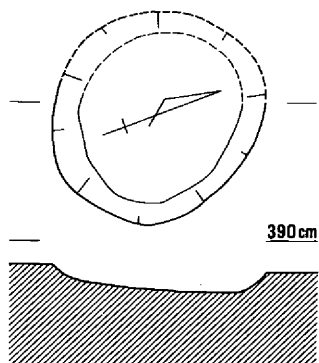
- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 茶色粘質土
- 3. 暗褐色粘質土
- 4. 明褐色粘質土
- 5. 明茶色粘質土

土壤-77

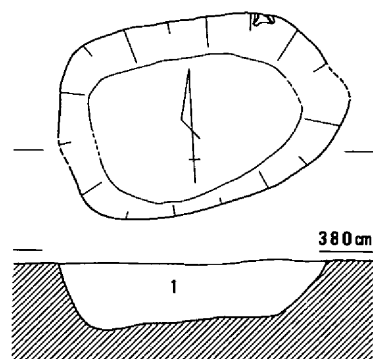


- 1. 茶褐色粘質土 (土器を含む)
- 2. 暗褐色粘質土

土壤-78



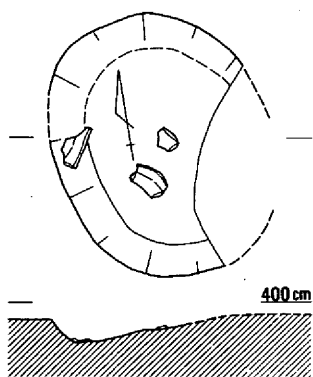
土壤-79



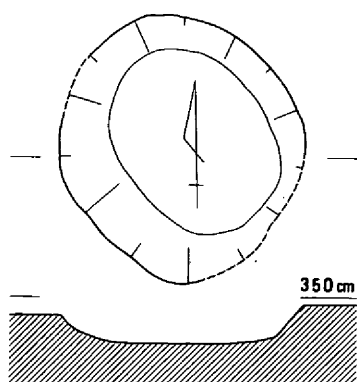
- 1. 暗褐色粘質土 (地山土含む)

土壤-80

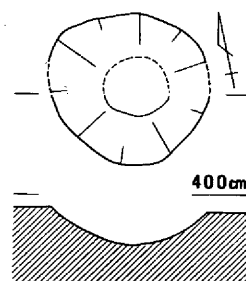




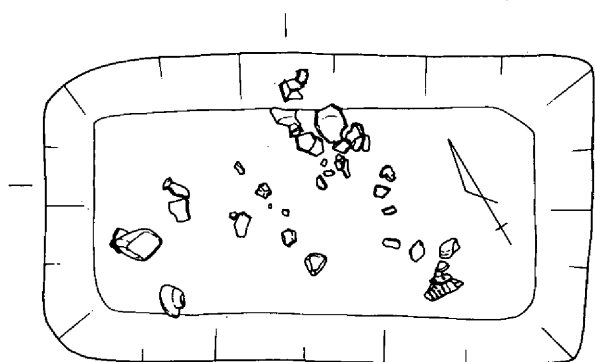
土壙-81



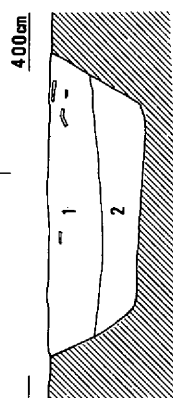
土壙-82



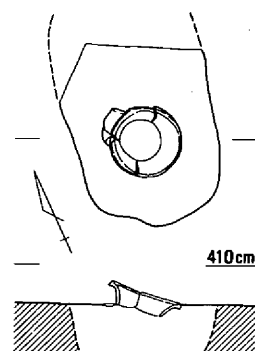
土壙-83



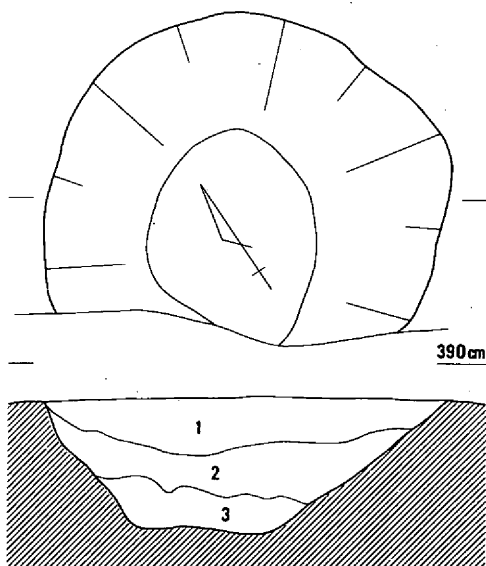
土壙-86



- 1. 灰褐色泥砂
(炭·土器含む)
- 2. 明灰黄褐色砂質土

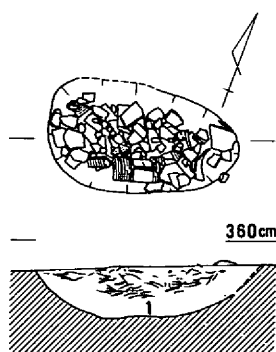


土壙-84



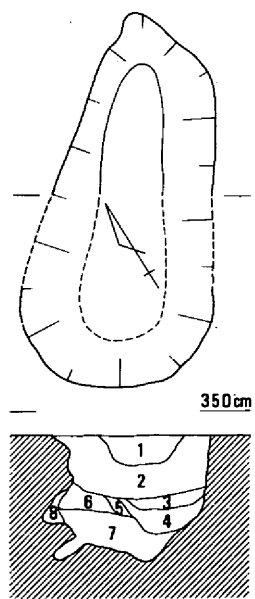
- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 明褐色粘質土
- 3. 明茶色砂質土

土壙-85



- 1. 暗灰色砂

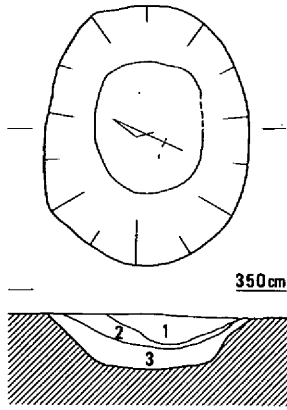
土壙-87



- 1. 灰茶色粘質土
- 2. 茶灰褐色土 (炭、燒土塊、灰含む)
- 3. 黄灰色粘質土
- 4. 暗茶灰色土 (炭、燒土塊含む)
- 5. 黄灰色粘質土
- 6. 暗茶灰色土 (炭、燒土塊、灰含む)
- 7. 灰黄色粘質土
- 8. 灰褐色土

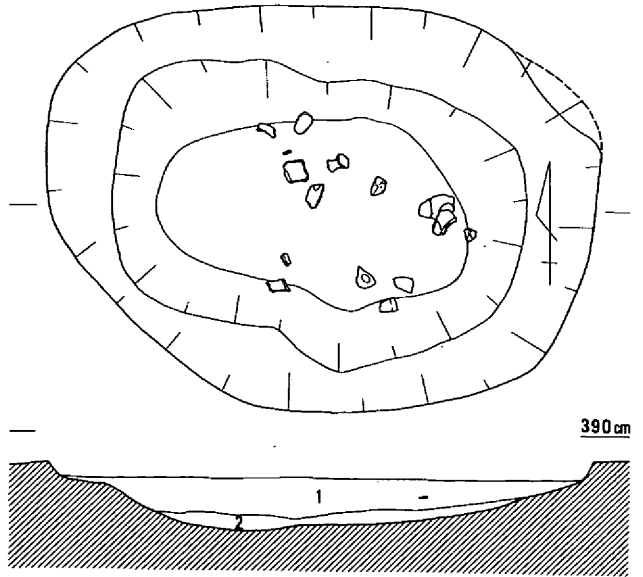
土壙-88





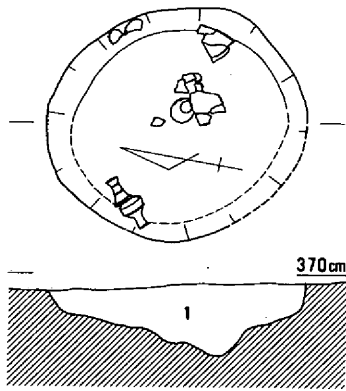
- 1. 黑灰色土 (炭含む)
- 2. 暗灰色土 (焼土・炭含む)
- 3. 灰黄色土

土壤-89



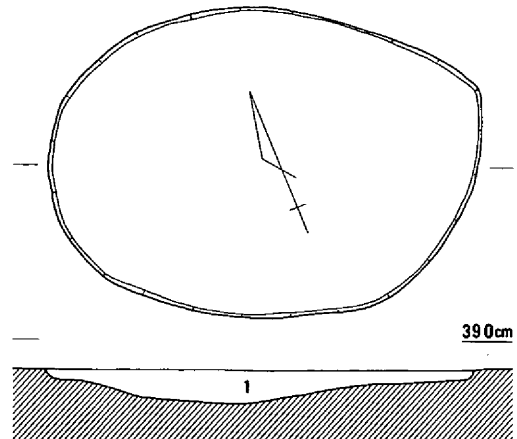
- 1. 暗茶灰褐色粘質微砂
- 2. 暗茶灰色粘質微砂

土壤-90



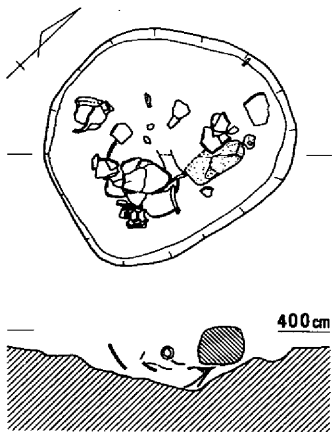
- 1. 暗茶灰色粘質微砂

土壤-91

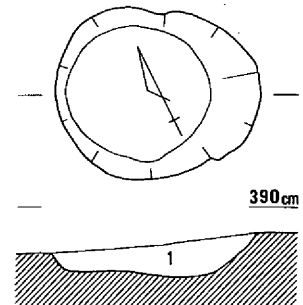


- 1. 暗茶灰色粘質微砂

土壤-92



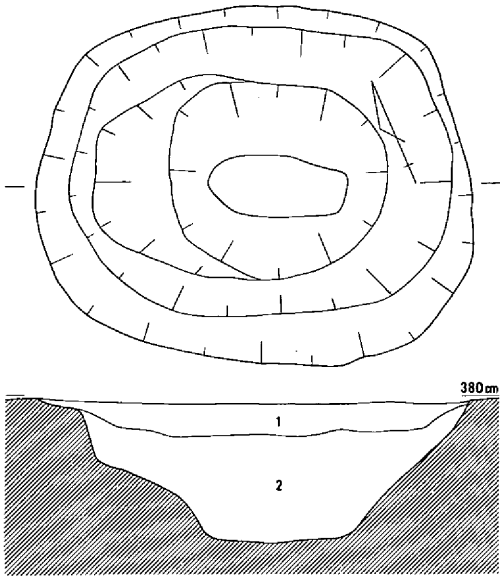
土壤-93



- 1. 暗茶褐色粘質微砂

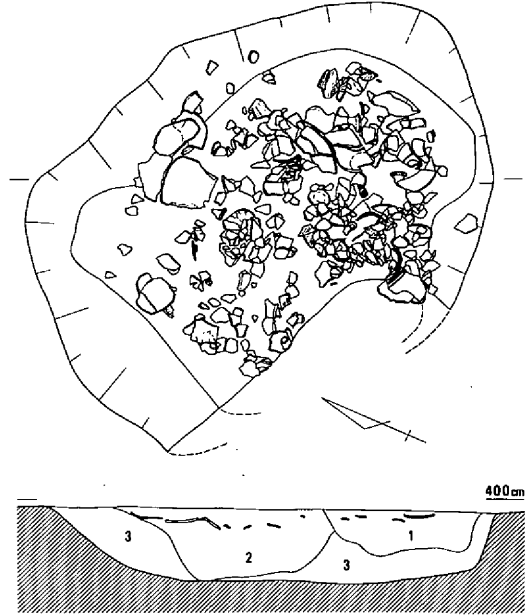
土壤-94





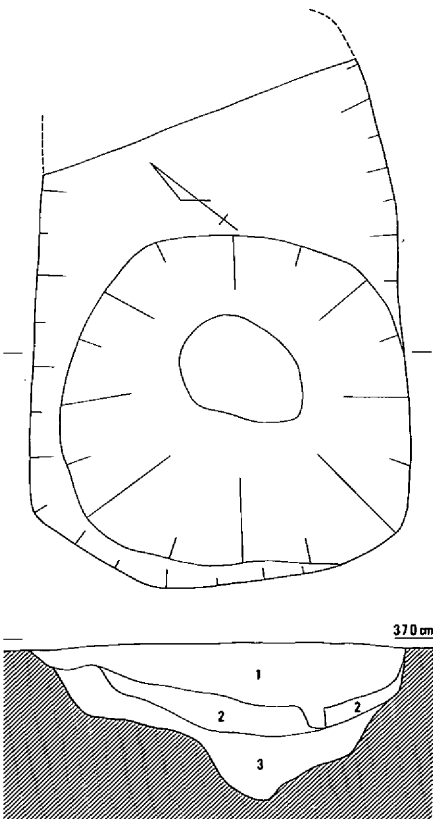
1. 暗茶褐灰色粘质微砂 2. 暗茶灰色粘质微砂

土壤-95



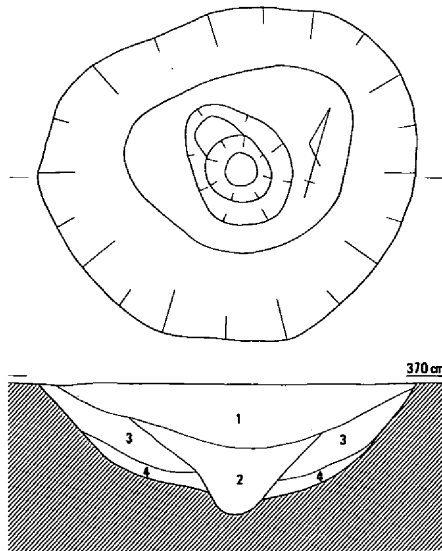
1. 青灰黄褐色砂质土 3. 暗黄褐色粘质土
2. 暗黄灰褐色粘质微砂

土壤-97



1. 暗茶褐灰色粘质微砂 3. 暗茶色微砂
2. 暗茶灰褐色微砂

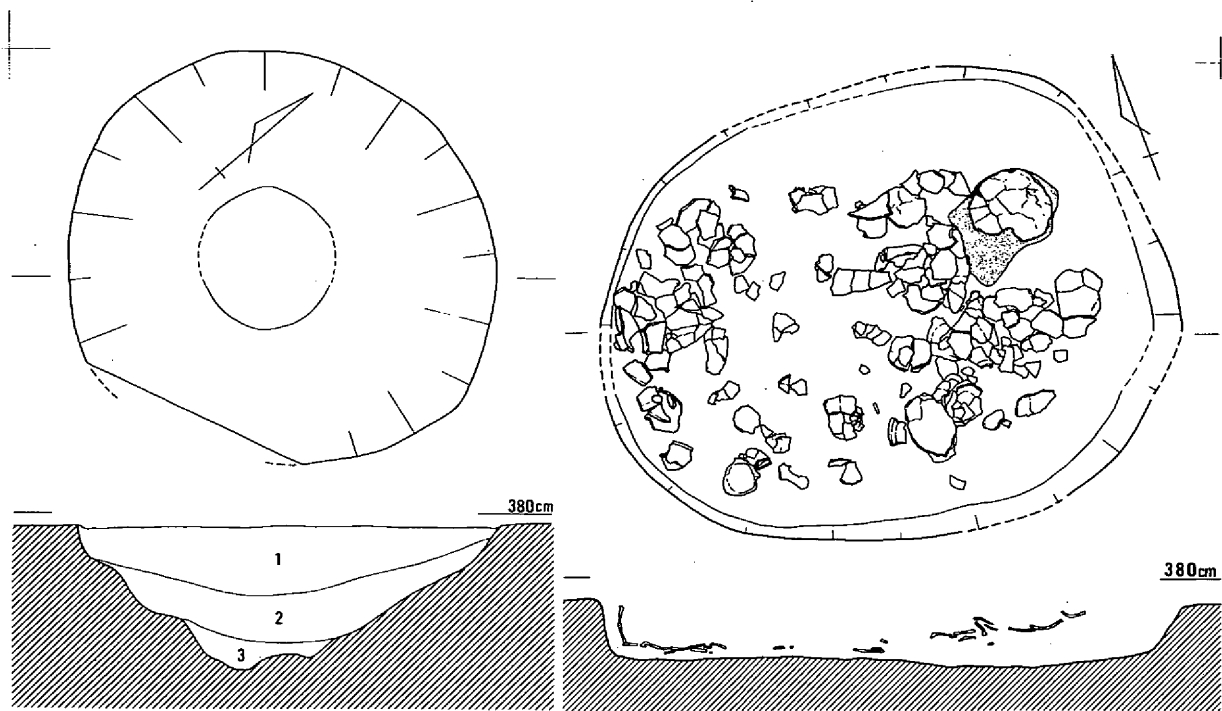
土壤-96



1. 茶灰色粘质砂 3. 茶灰色砂质土
2. 暗灰茶色土

土壤-98

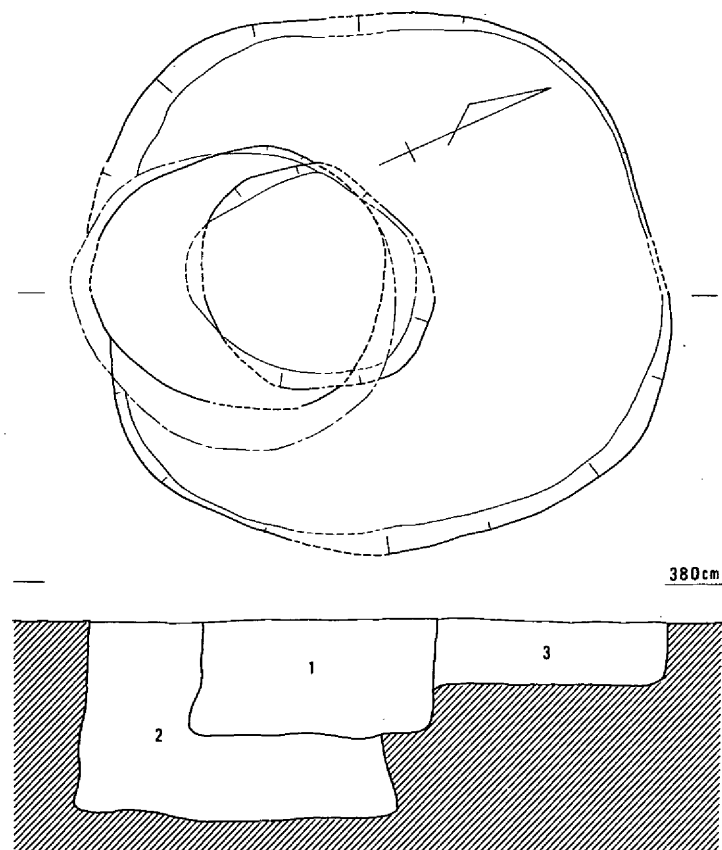




- 1. 黄灰色粘质砂
- 2. 茶灰色粘性砂质土
- 3. 暗茶灰色粘质土

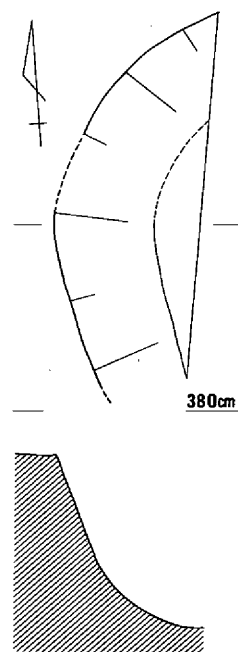
土壤-99

土壤-100



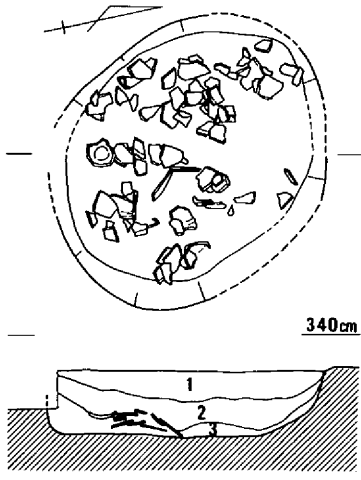
- 1. 袋状土壤54埋土
- 2. 袋状土壤53埋土
- 3. 暗灰褐色粘质土

土壤-101



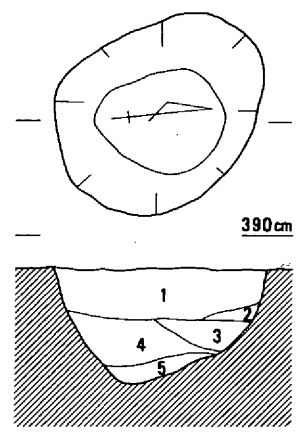
土壤-102





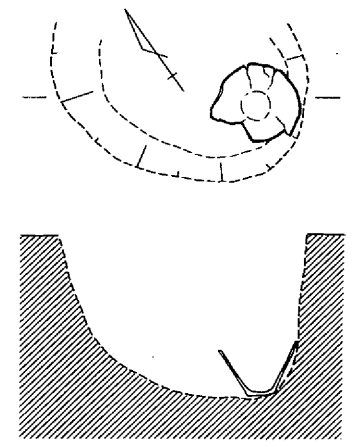
- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 茶褐色微砂
- 3. 淡茶褐色微砂 (炭含心)

土壤-103

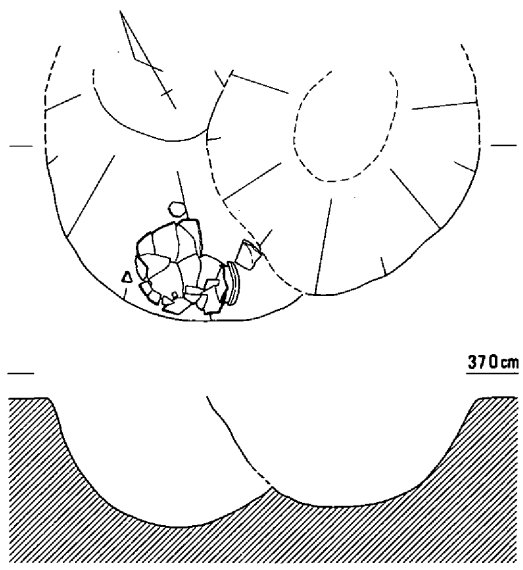


- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 暗茶褐色砂質土
- 4. 暗黄褐色砂質土
- 5. 暗茶褐色砂質土

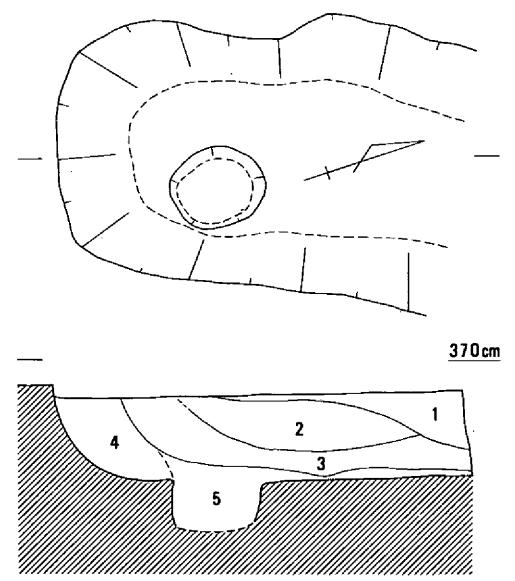
土壤-104



土壤-107

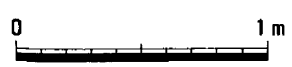


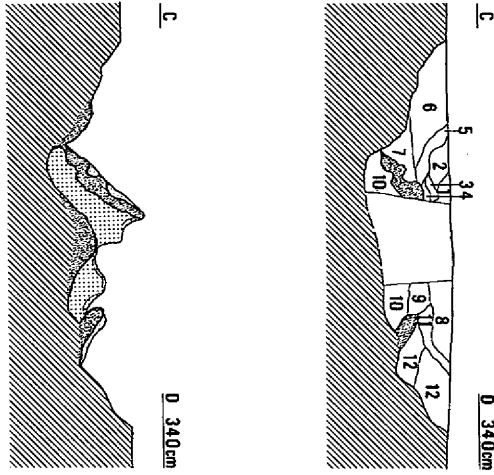
土壤-105



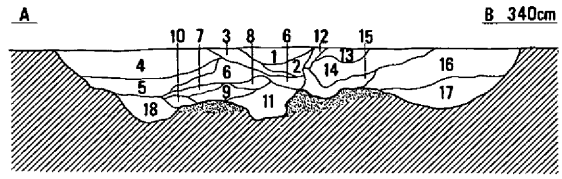
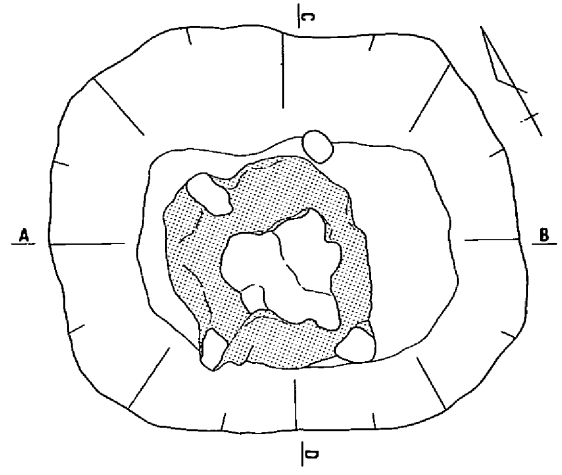
- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 淡茶褐色砂質土
- 3. 暗茶褐色砂質土
- 4. 明茶褐色粘質土
- 5. 淡茶褐色砂質土

土壤-106

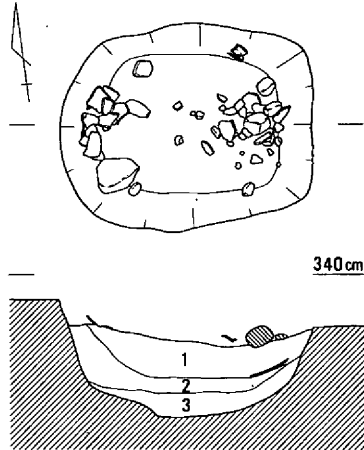




- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1. 褐色砂質土 | 9. 暗赤褐色砂質土 | 13. 暗茶褐色砂質土 |
| 2. 明黃褐色砂質土 | 10. 暗茶褐色粘質土 | 14. 暗赤褐色砂質土 |
| 3. 暗赤褐色砂質土 | 11. 暗茶褐色砂質土 | 15. 明黃褐色粘質土 |
| 4. 暗赤褐色砂質土 | 12. 暗赤褐色砂質土 | 16. 赤灰褐色砂質土 |
| 5. 黃褐色粘質土 | 7. 黃茶褐色砂質土 | |
| 6. 暗茶褐色砂質土 | 8. 明黃褐色粘質土 | |

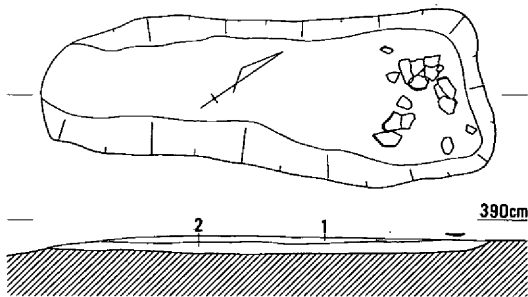


土壤-46

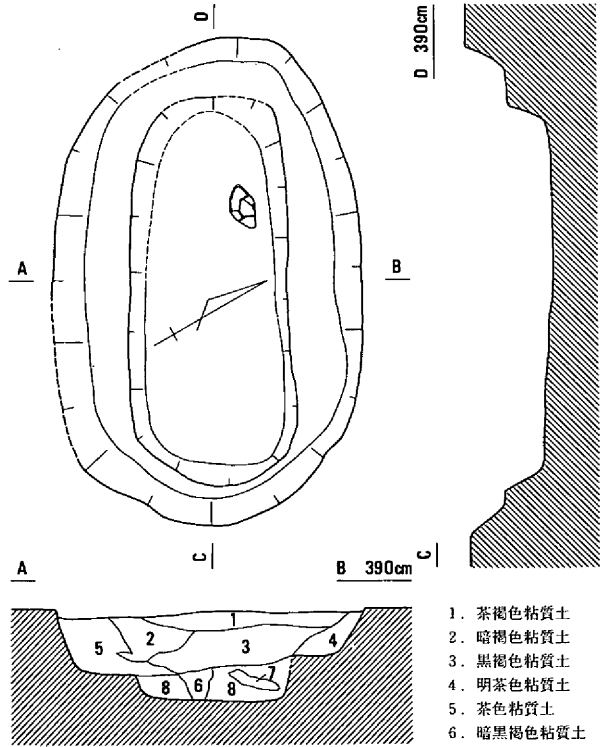


1. 暗黃茶色粘質微砂 (土器·燒土多)
2. 黃褐灰色細砂
3. 灰褐色粘質微砂 (炭多)

土壤-108



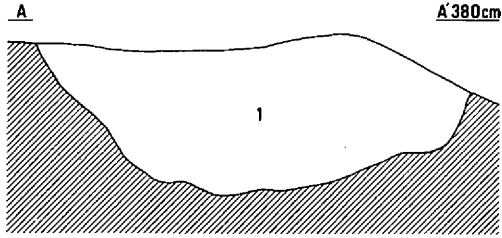
土壤墓-2



1. 茶褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 黑褐色粘質土
4. 明茶色粘質土
5. 茶色粘質土
6. 暗黑褐色粘質土
7. 淡黑褐色粘質土
8. 茶褐色粘質土

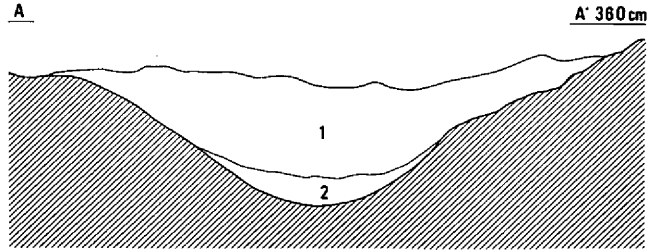
土壤墓-3





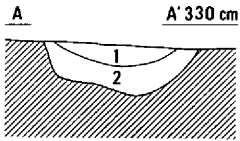
1. 灰色粗砂 (雑含む)

溝-2



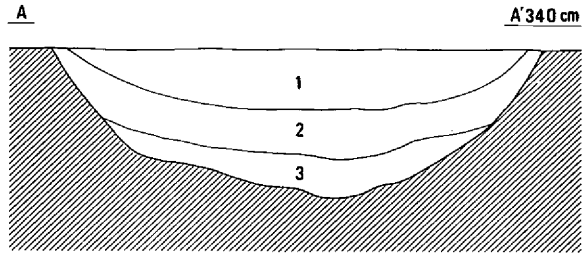
1. 茶灰色砂質土 (炭、雑含む) 2. 淡灰色粗砂

溝-3



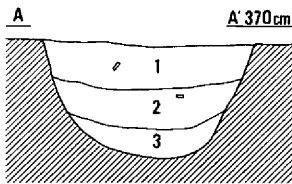
1. 黄褐色弱粘質土
2. 明黄褐色弱粘質土

溝-13



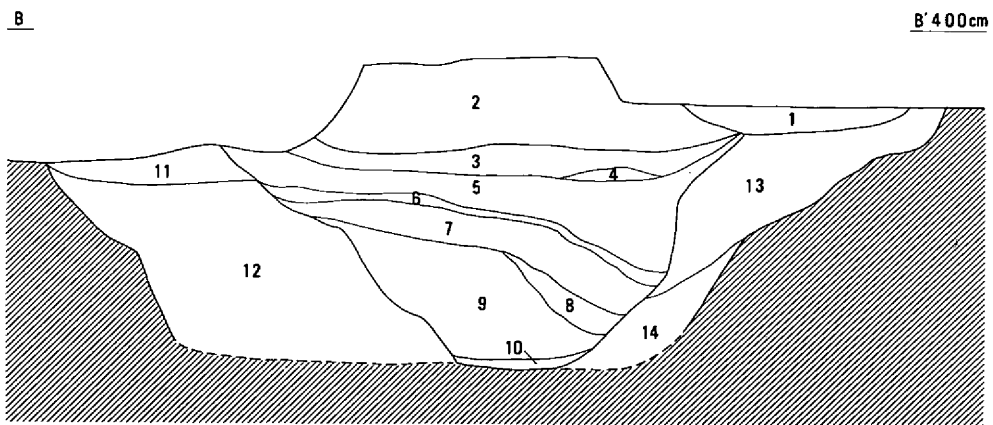
1. 黄茶褐灰色砂質土 2. 黄褐色土 3. 茶灰色細砂

溝-14



1. 暗灰黄褐色泥砂 2. 黄褐色泥砂 3. 黄褐色粘泥砂

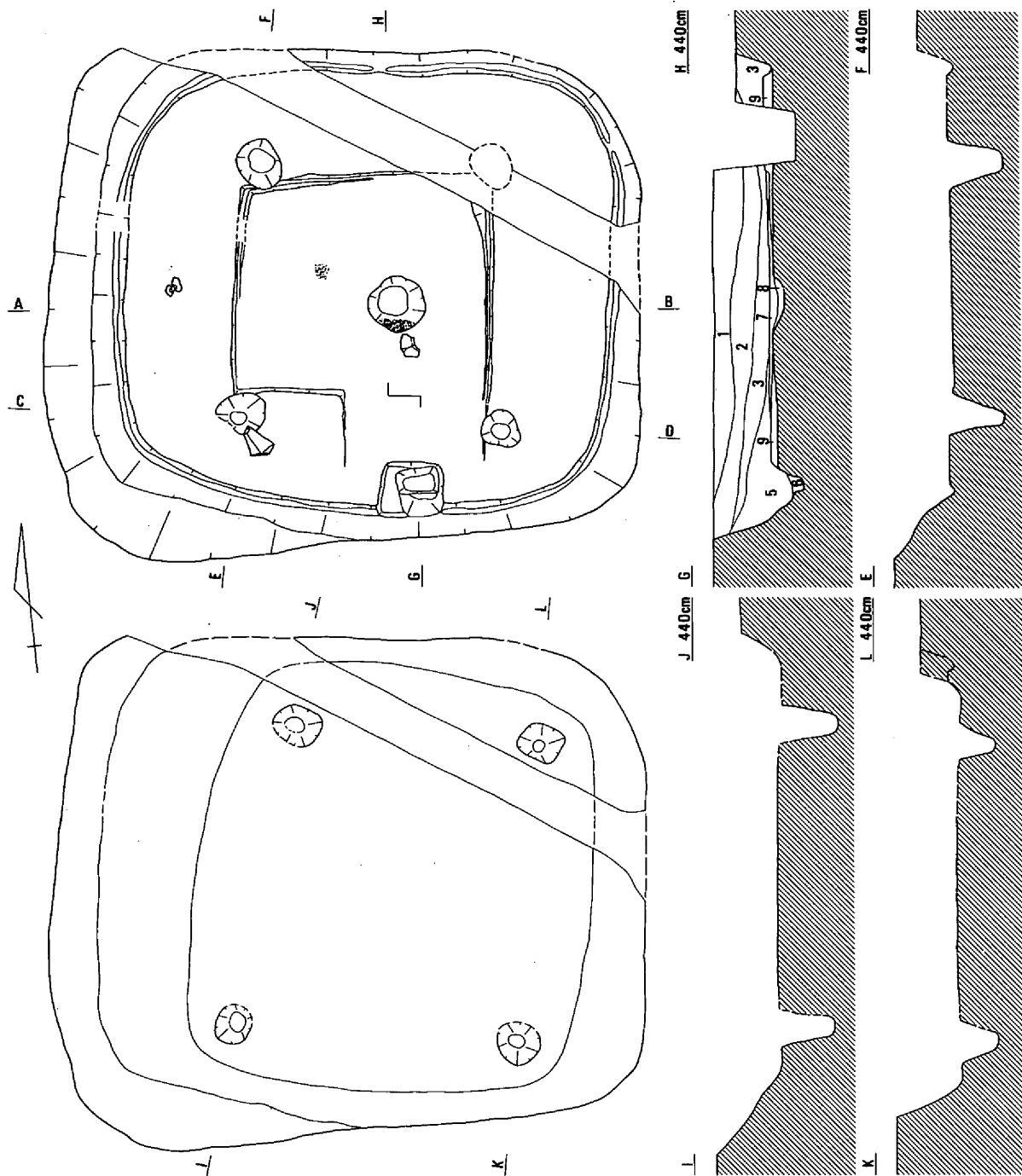
溝-15



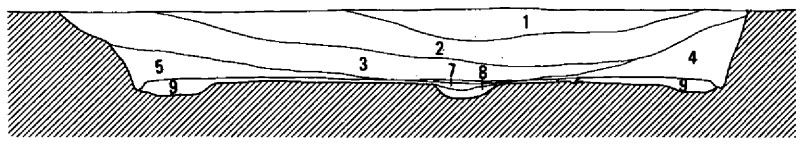
1. 淡茶色細砂粘質土	6. 薄茶色粘質土	11. 青灰色粘土
2. 茶褐色粗砂	7. 薄灰茶色細砂	12. 青灰色粘土 (炭、焼土含む)
3. 灰白色荒砂	8. 薄茶色粘土混じり細砂	13. 茶-青灰色粘質土
4. 薄茶色荒砂	9. 薄灰茶色細砂	14. 灰色粘土 (炭含む)
5. 薄灰茶色細砂	10. 灰色シルト	

溝-12





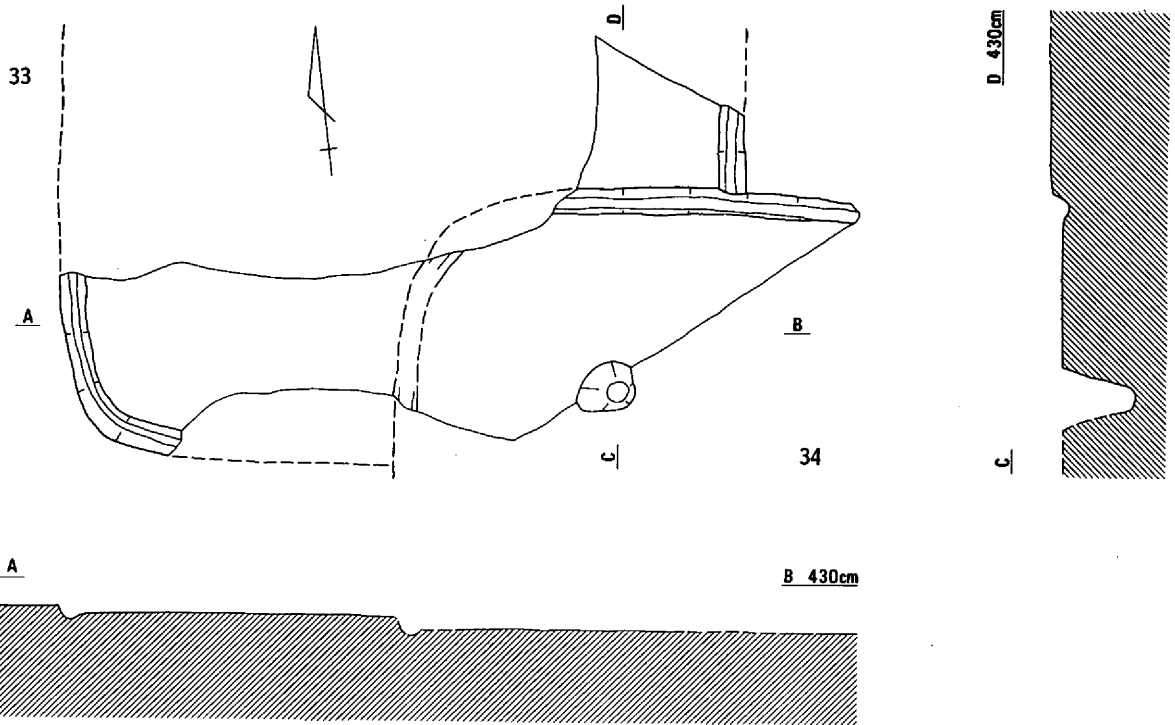
A **B 440cm**



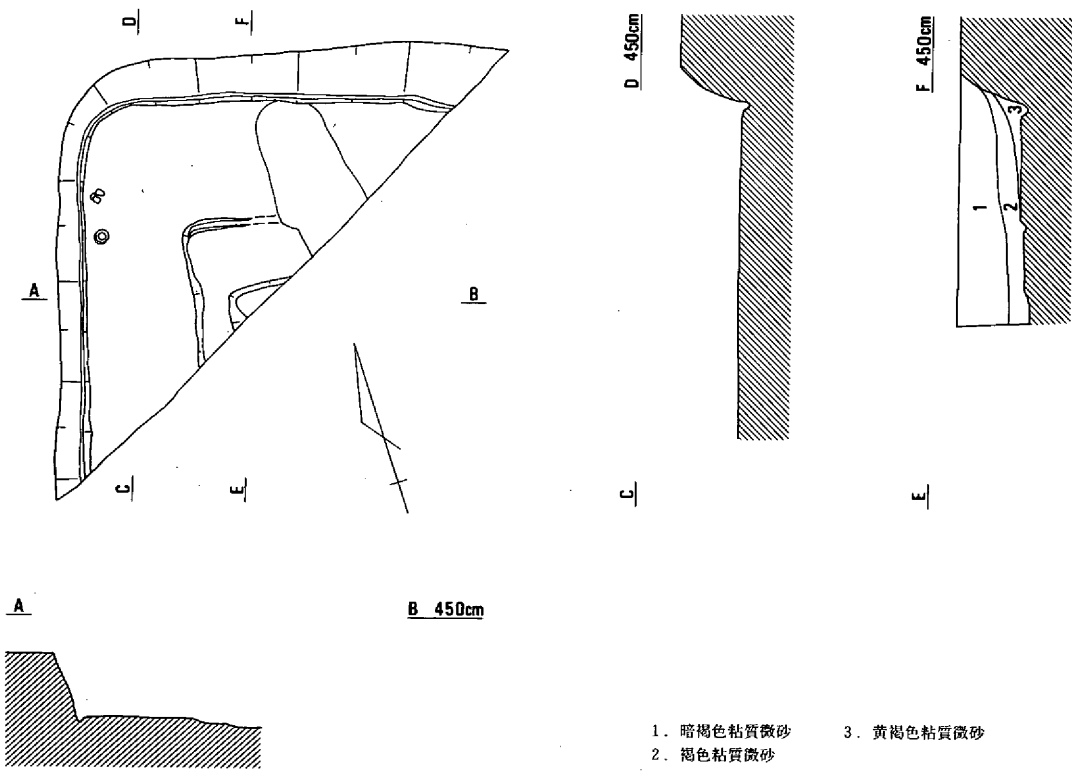
- | | |
|------------------|-------------|
| 1. 暗褐色微砂 | 6. 黑灰色 |
| 2. 褐色微砂 (土器·炭含む) | 7. 暗黄褐色粘質微砂 |
| 3. 褐色微砂 | 8. 暗灰褐色微砂 |
| 4. 暗黄褐色微砂 | 9. 黄褐色粘質微砂 |
| 5. 褐色微砂 (燒土含む) | |

C **D 440cm**



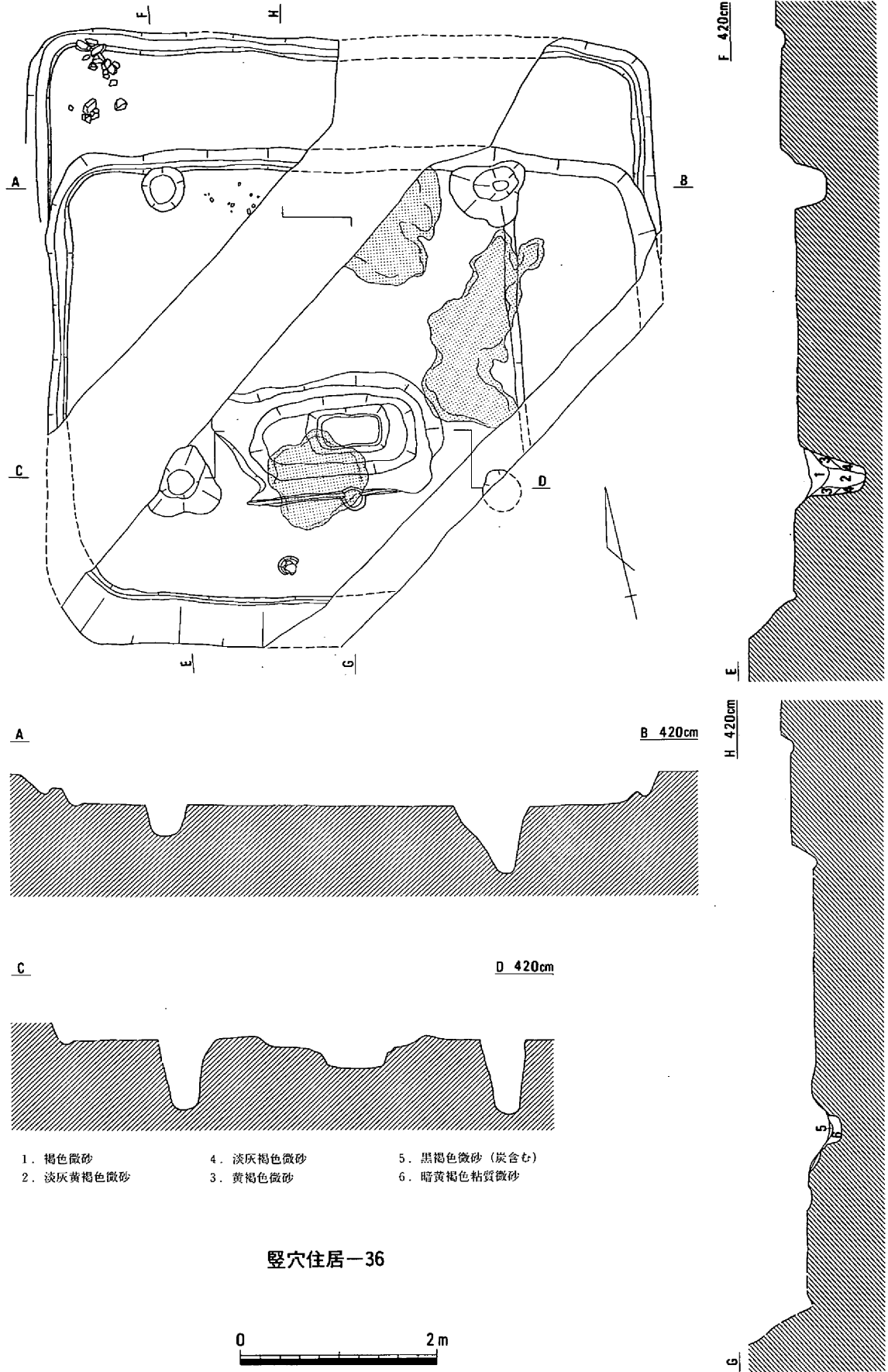


竖穴住居—33·34

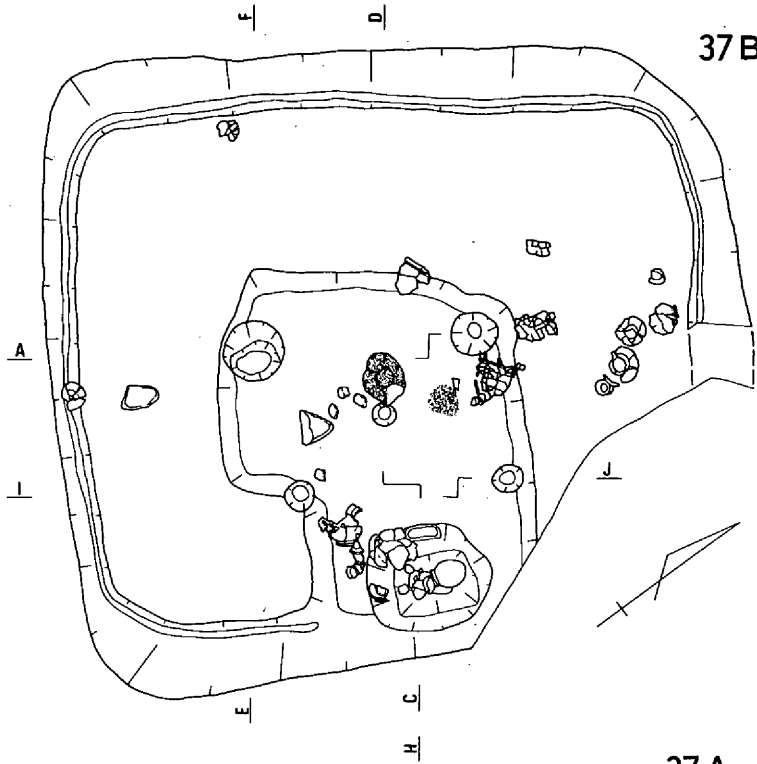


竖穴住居—35

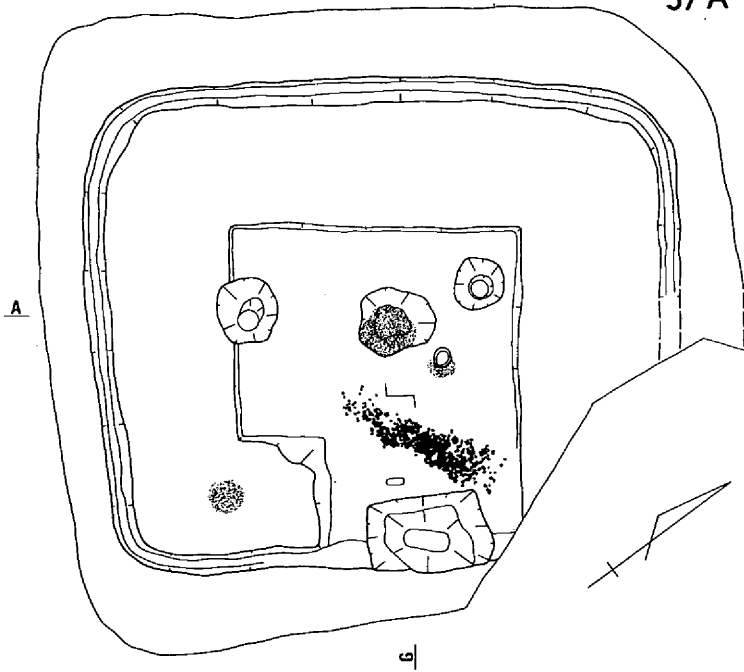
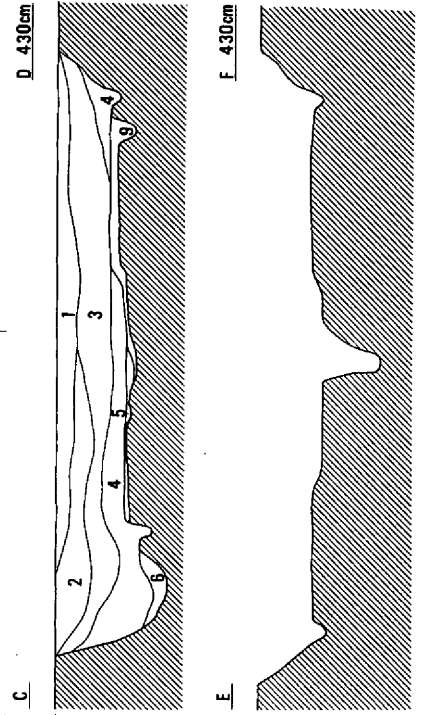




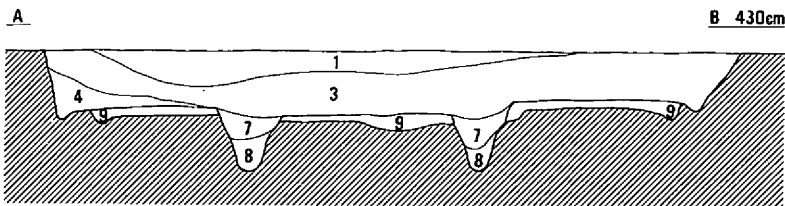
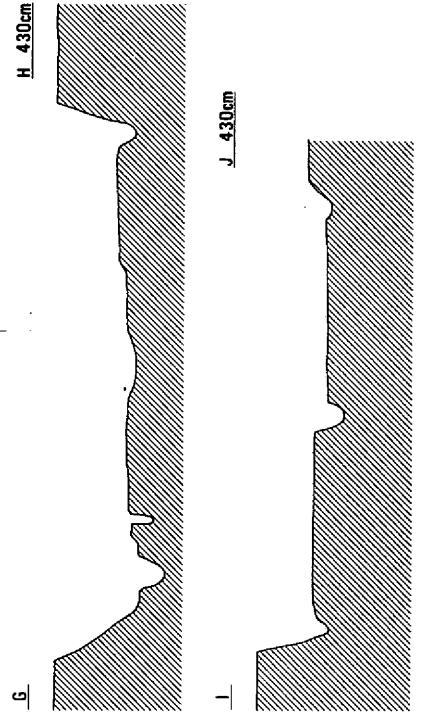
竖穴住居-36



37B



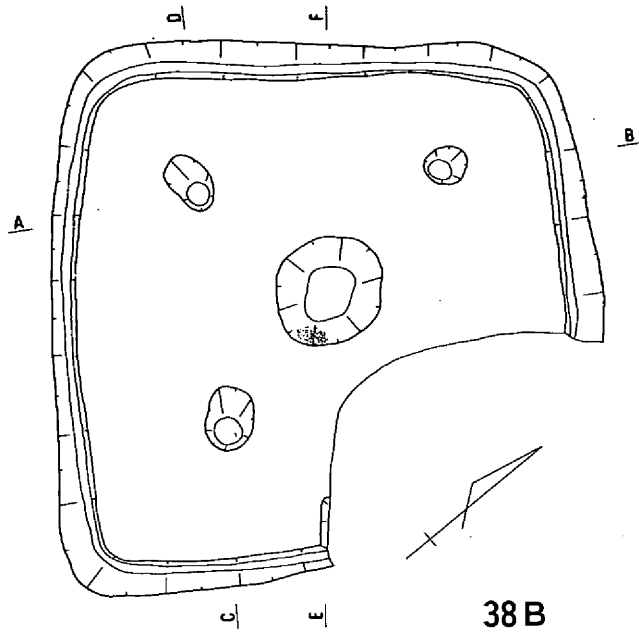
37A



- 1. 褐色粘質微砂
- 2. 暗褐色粘質微砂
- 3. 褐色微砂
- 4. 淡灰褐色微砂
- 5. 黒褐色微砂 (炭含む)
- 6. 暗黄褐色粘質微砂
- 7. 褐色粘質微砂 (地山ブロック含む)
- 8. 褐黄色粘質微砂
- 9. 黄褐色土

竪穴住居-37



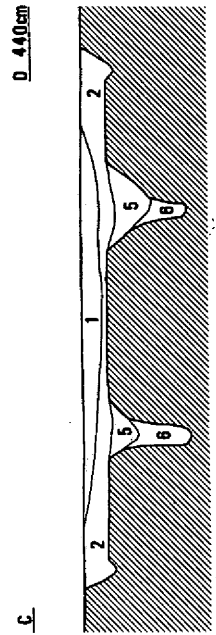


38 B



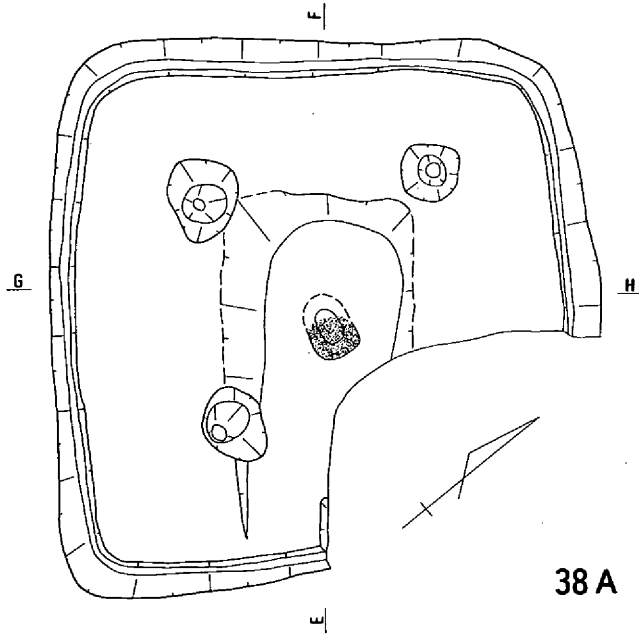
F 4.40cm

E

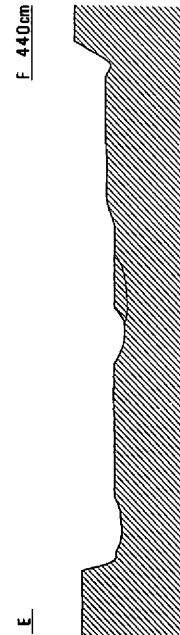


D 4.40cm

C

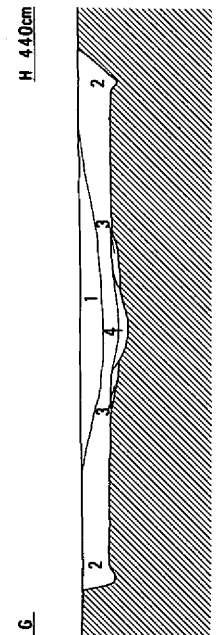


38 A



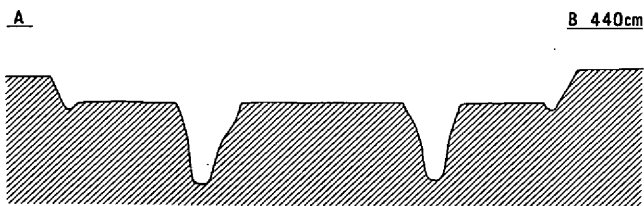
F 4.40cm

E



H 4.40cm

G



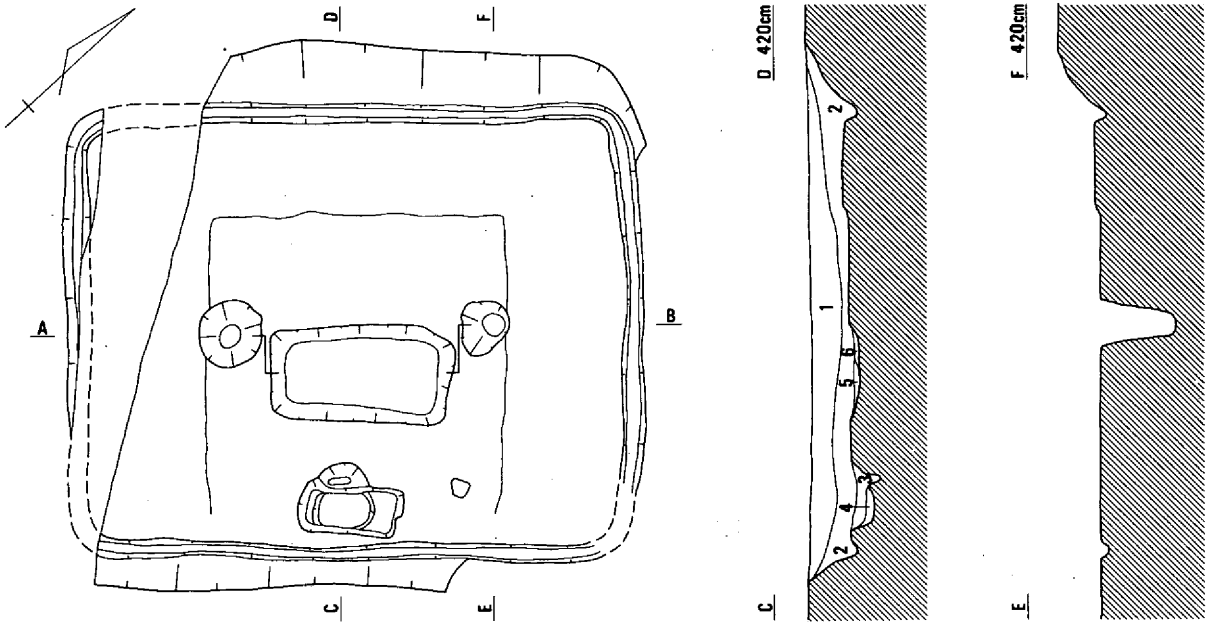
A

B 4.40cm

- | | |
|-----------|----------------|
| 1. 暗褐色微砂 | 4. 淡灰褐色微砂 |
| 2. 暗地灰色微砂 | 5. 黑褐色微砂 (炭含土) |
| 3. 黄褐色微砂 | 6. 暗黄褐色粘质微砂 |

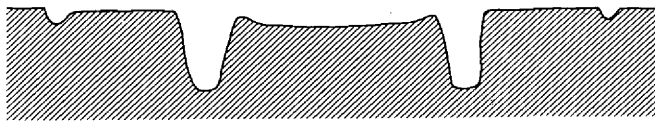
竖穴住居-38





A

B 420cm

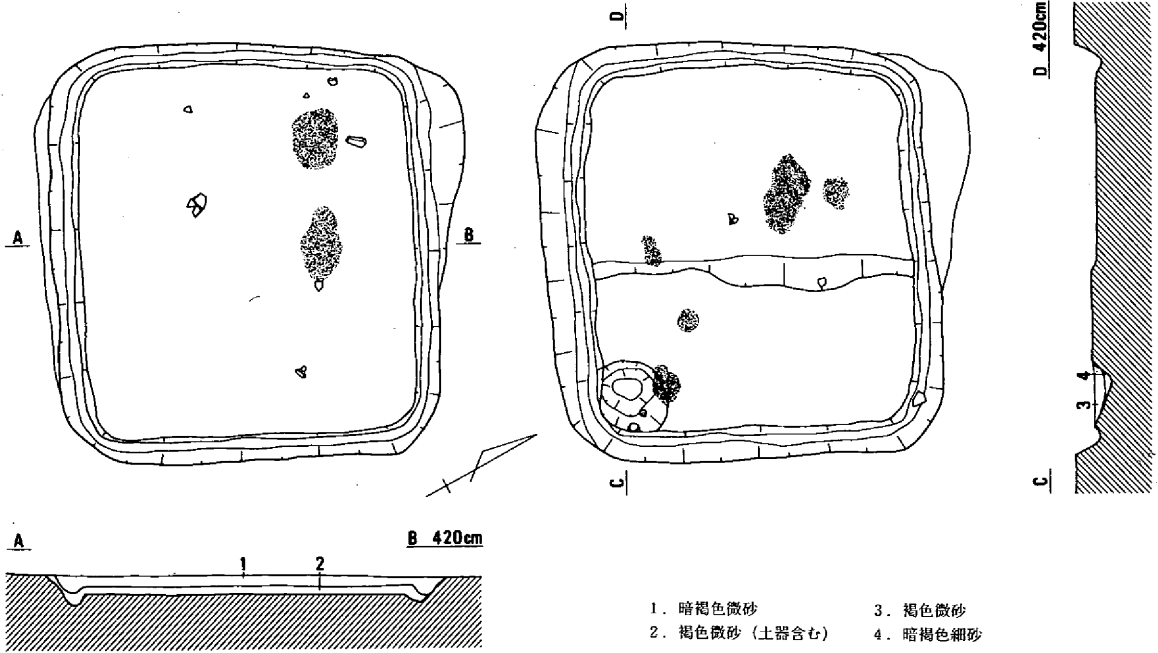


- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. 暗褐色微砂 | 4. 暗灰褐色微砂 |
| 2. 暗灰褐色微砂
(炭・焼土含む) | 5. 暗黄褐色粘質微砂*
(地山ブロック含む) |
| 3. 暗褐色微砂 | 6. 暗黄褐色粘質微砂 |

竪穴住居-39

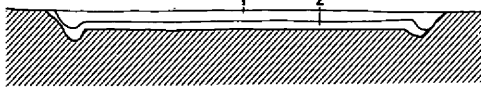
40B

40A



A

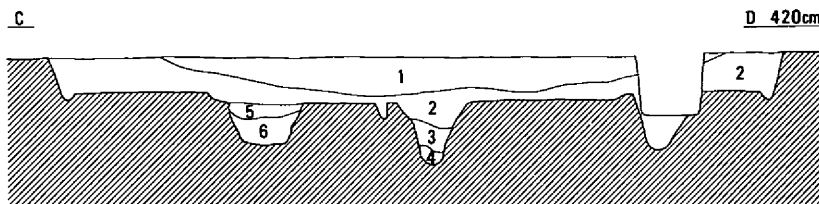
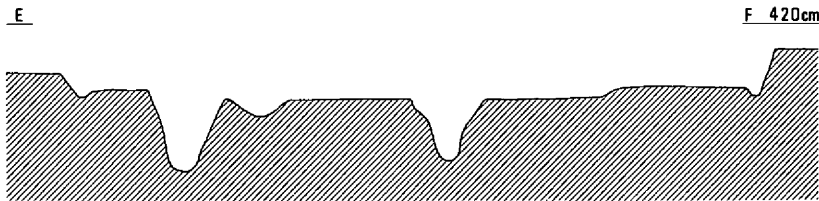
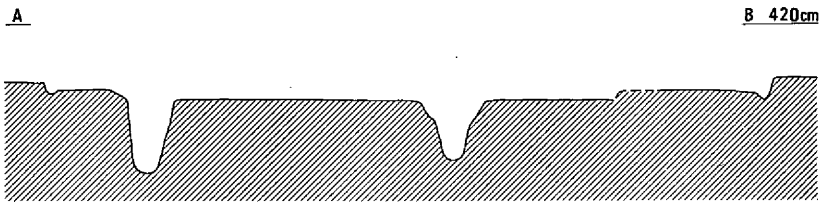
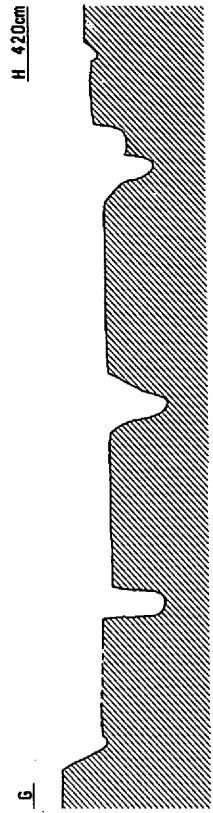
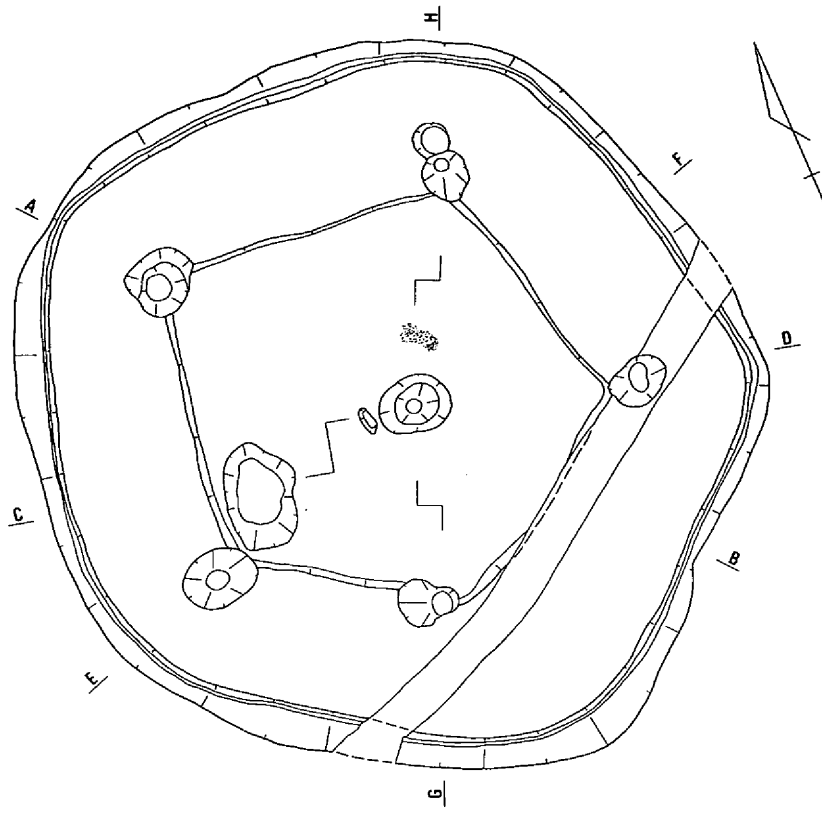
B 420cm



- | | |
|----------------|----------|
| 1. 暗褐色微砂 | 3. 褐色微砂 |
| 2. 褐色微砂 (土器含む) | 4. 暗褐色細砂 |

竪穴住居-40

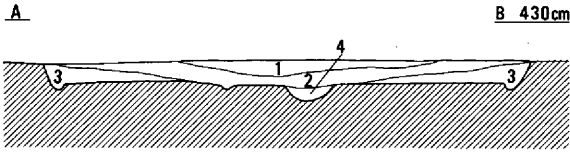
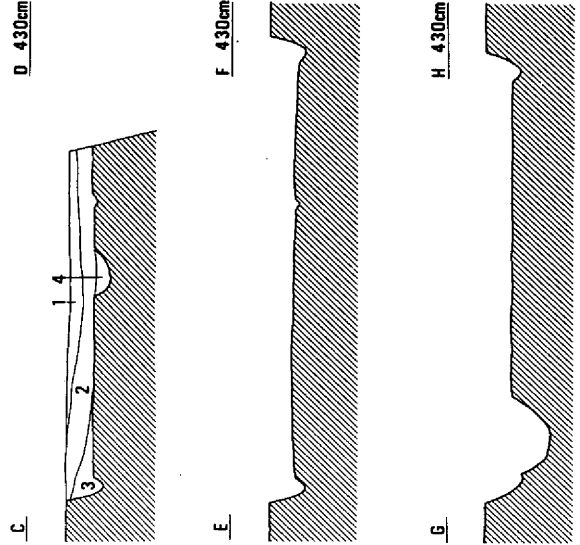
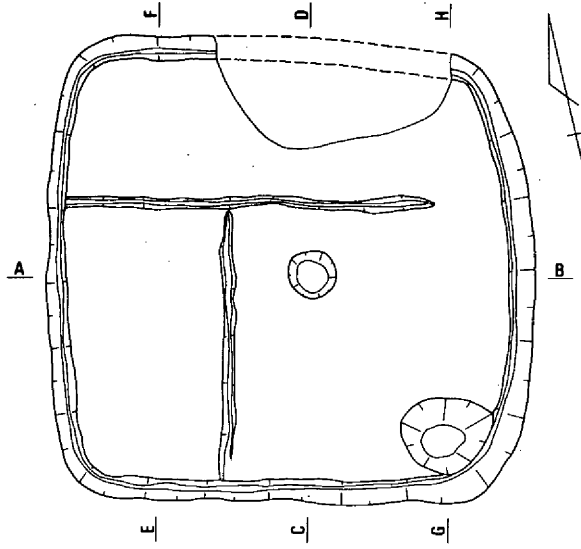




1. 暗褐色微砂
2. 暗茶褐色微砂
(地山ブロック含む)
3. 暗黄褐色微砂
(炭含む)
4. 暗褐色粘質微砂
(地山ブロック含む)
5. 暗褐色微砂
(地山ブロック含む)
6. 褐色微砂
(地山ブロック含む)

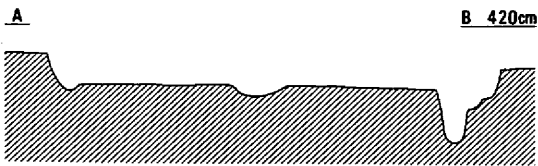
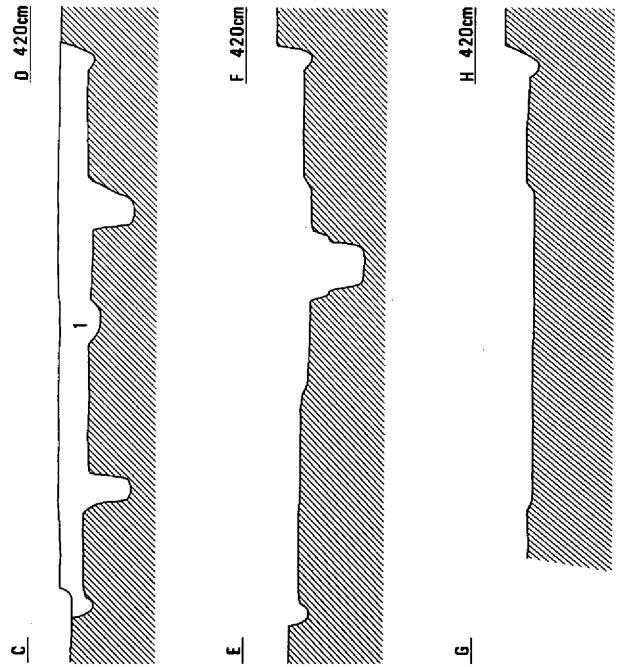
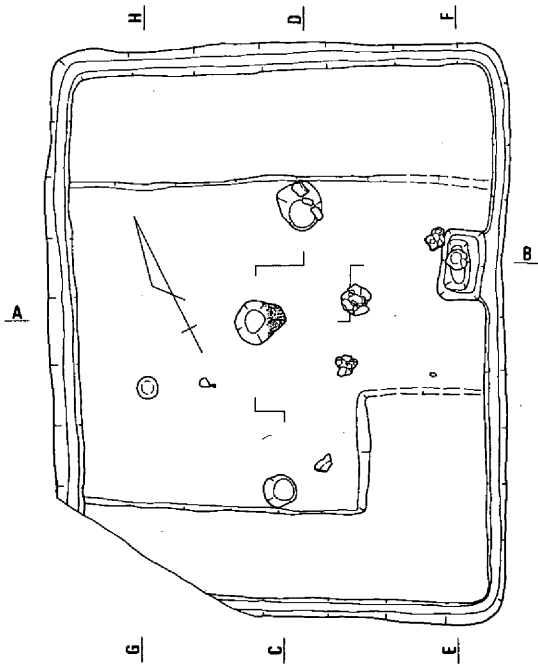
竪穴住居-41





- 1. 暗茶褐色微砂 (土器・炭含む)
- 2. 茶褐色微砂 (土器・炭含む)
- 3. 暗褐色微砂
- 4. 暗褐色細砂

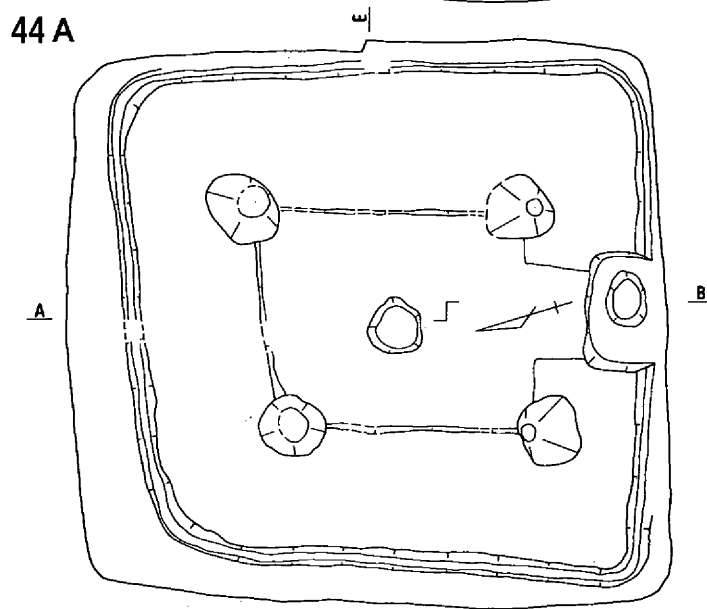
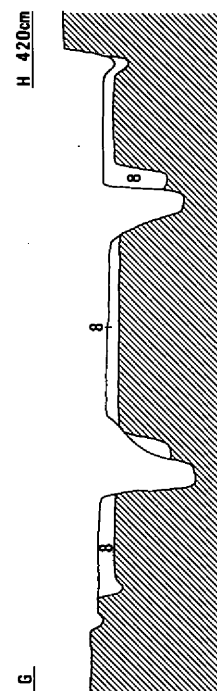
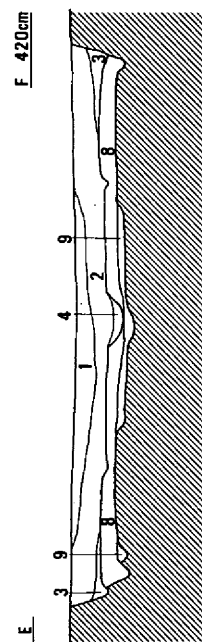
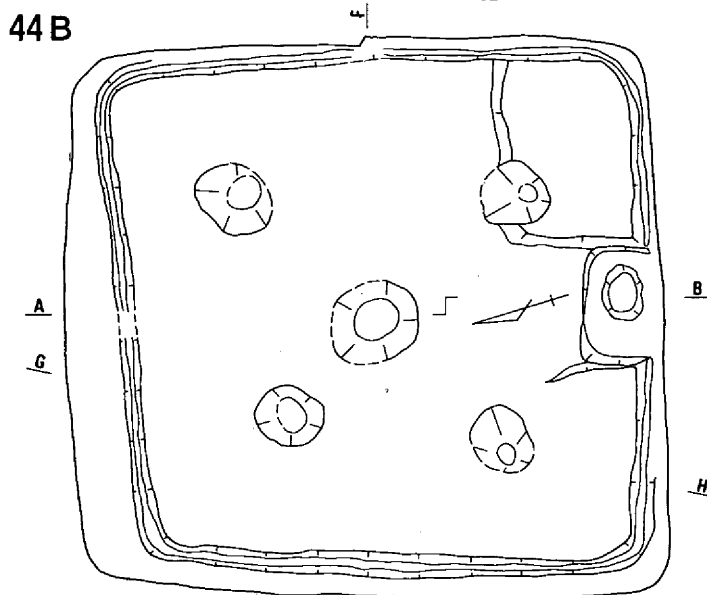
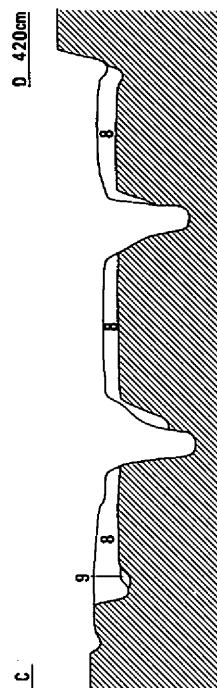
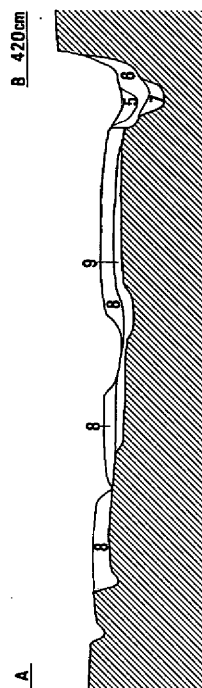
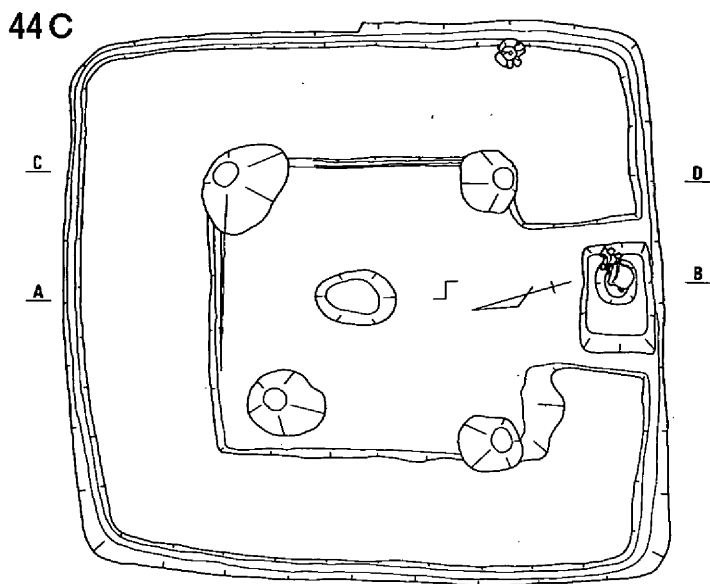
竖穴住居-42



- 1. 褐色微砂



竖穴住居-43

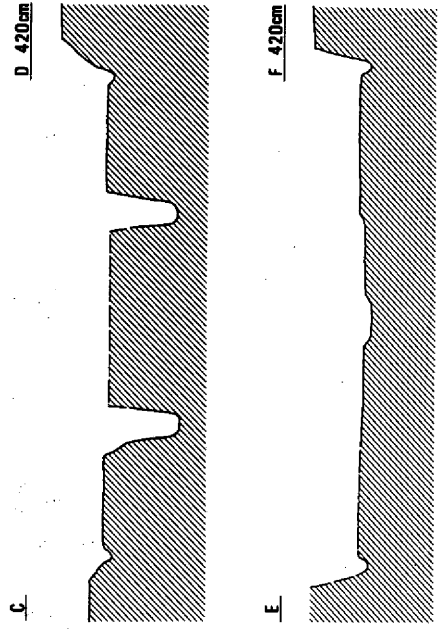
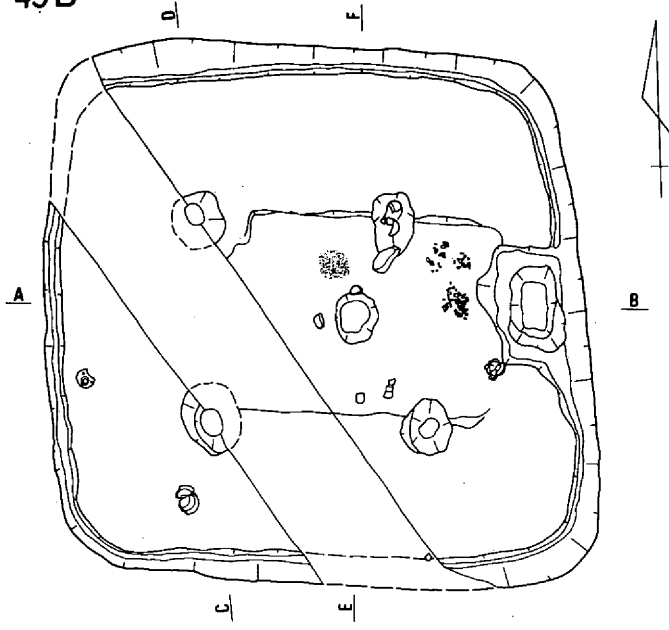


- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 暗褐色微砂 | 5. 暗褐色微砂 (土器含む) |
| 2. 茶褐色微砂 | 6. 暗褐色微砂 (炭含む) |
| 3. 褐色微砂 | 7. 暗茶褐色微砂 |
| 4. 暗黄褐色微砂 (地山土含む) | 8. 明褐色微砂 |
| | 9. 黄褐色微砂 |

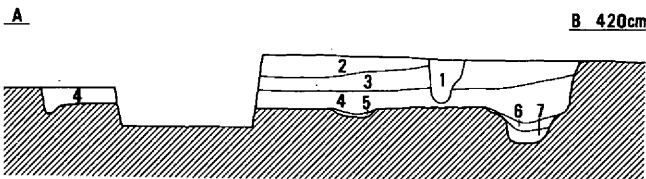
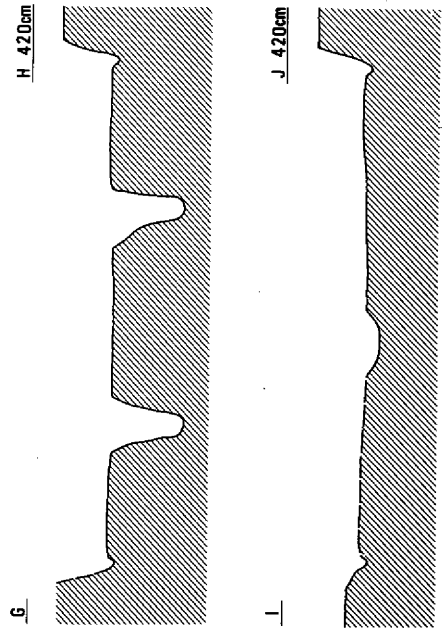
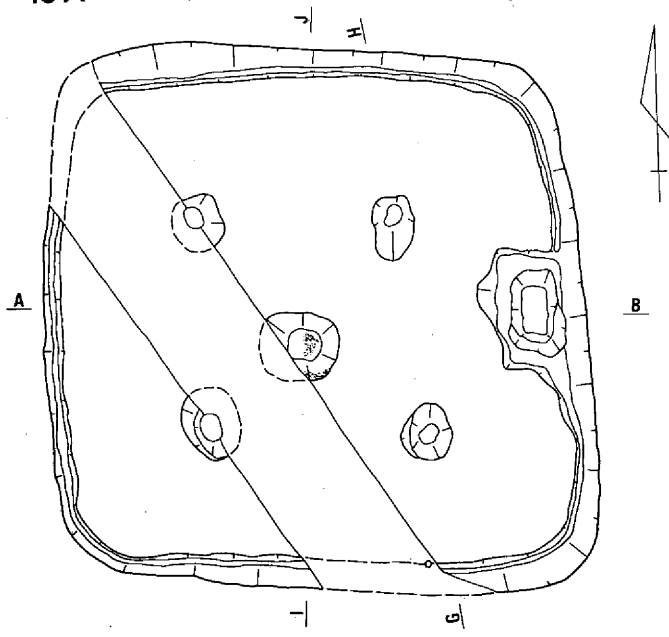


竖穴住居-44

45 B



45 A

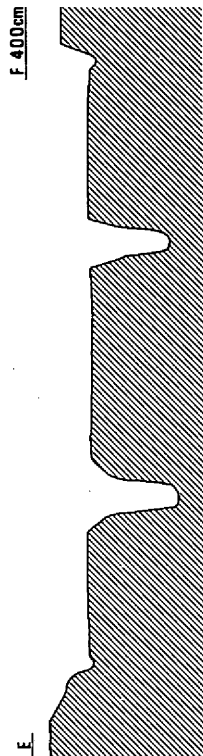
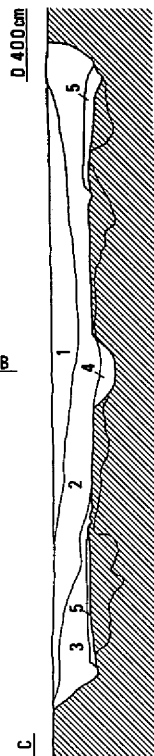
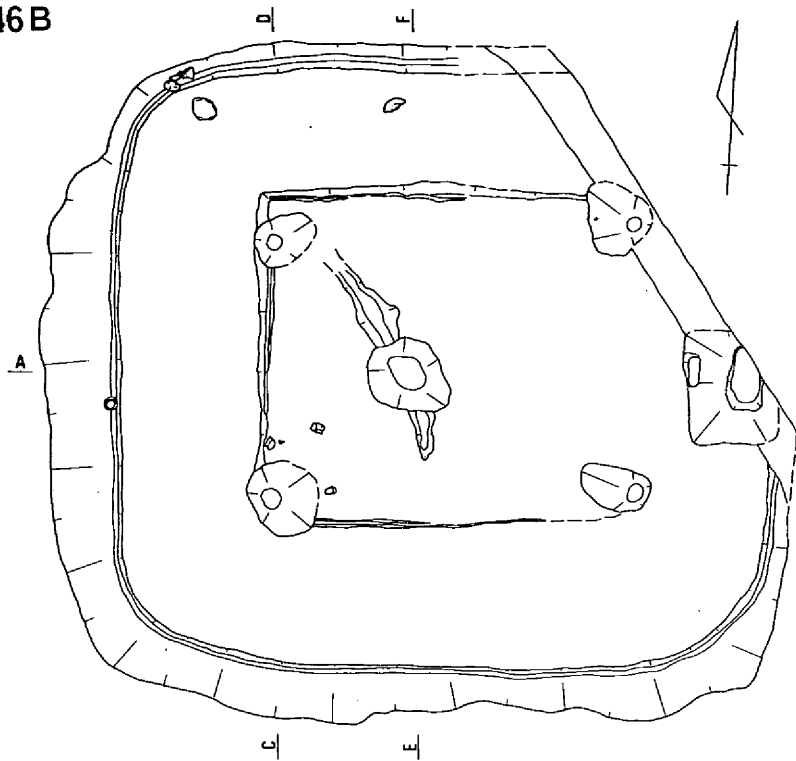


- 1. 灰褐色微砂
- 2. 暗褐色微砂
- 3. 暗黄褐色微砂
- 4. 暗褐灰色微砂
- 5. 黑灰色微砂 (灰含砂)
- 6. 灰褐色粘质微砂
- 7. 黄褐色微砂

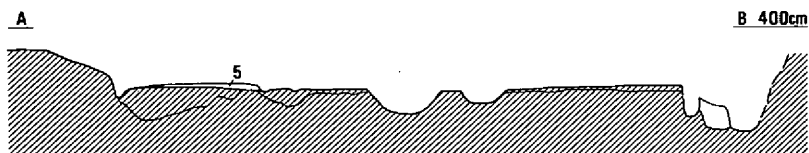
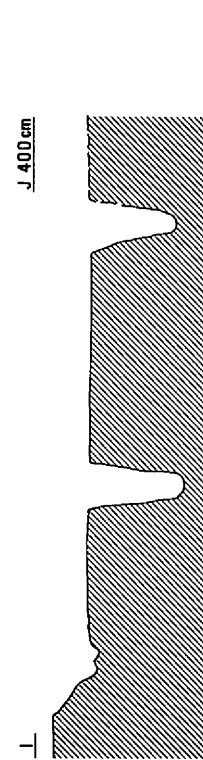
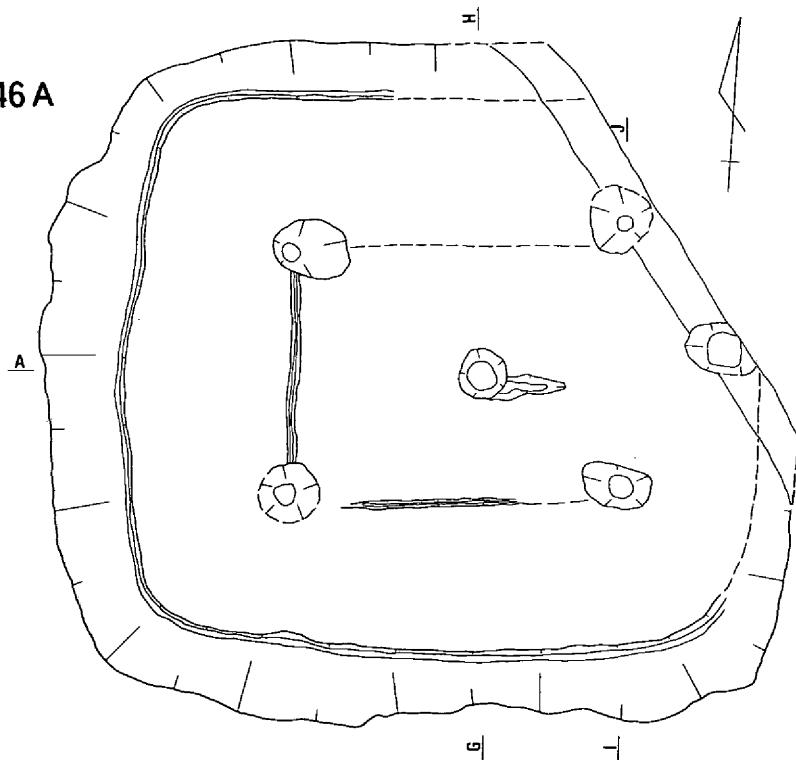
竖穴住居-45



46 B



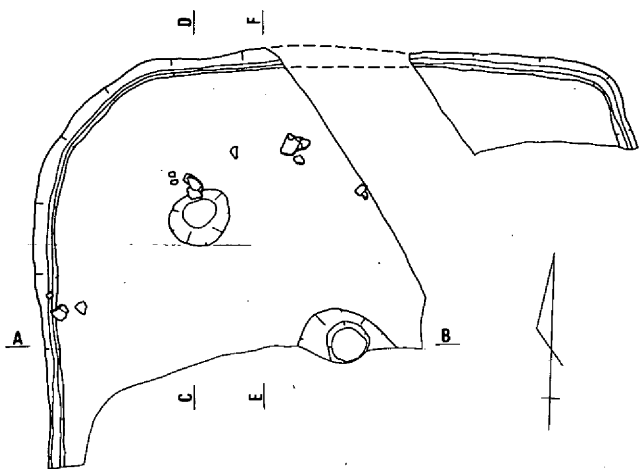
46 A



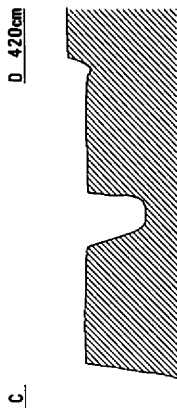
- 1. 茶褐色微砂
- 2. 灰褐色粘質微砂
- 3. 暗褐色微砂
- 4. 茶褐色微砂
- 5. 黃褐色微砂

豎穴住居—46

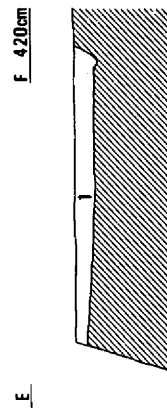




A B 420cm



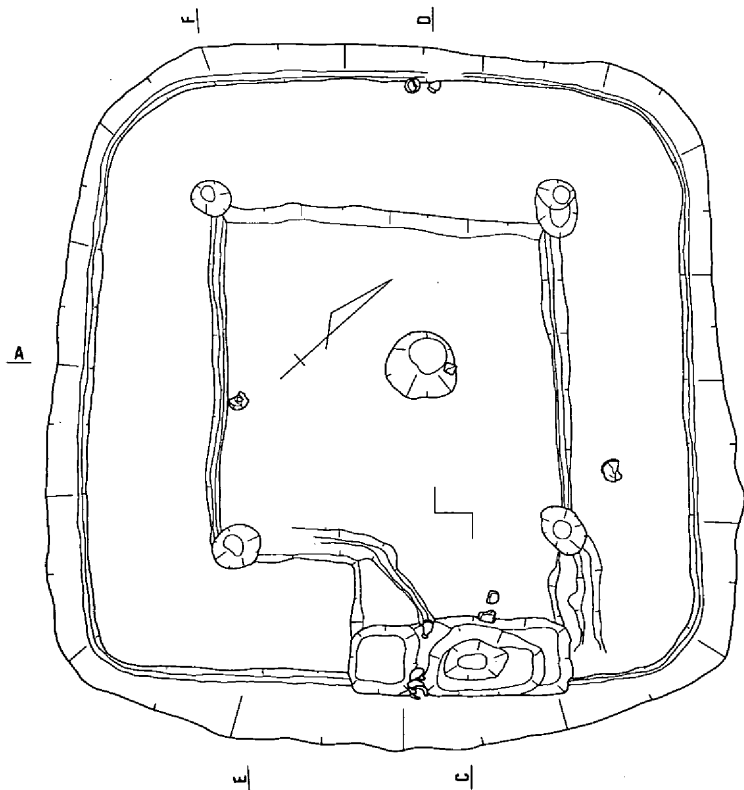
D 420cm C



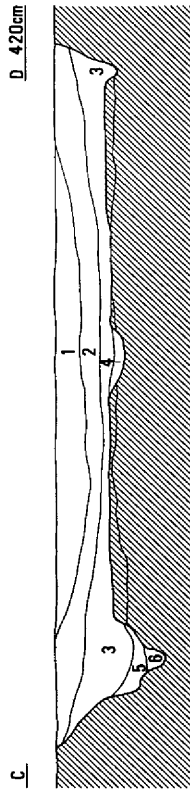
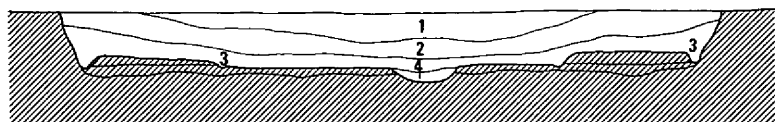
F 420cm E

1. 暗黄褐色微砂

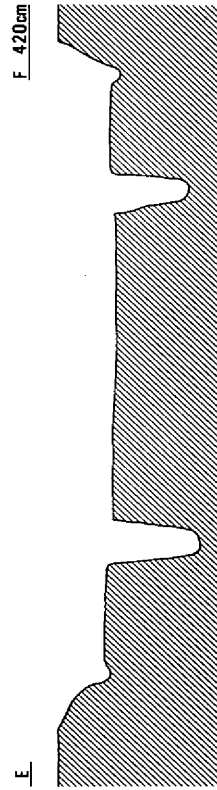
竖穴住居-47



A B 420cm



D 420cm C

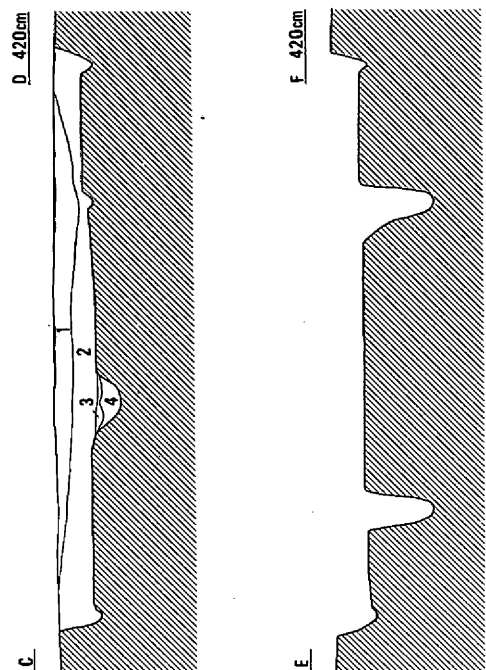
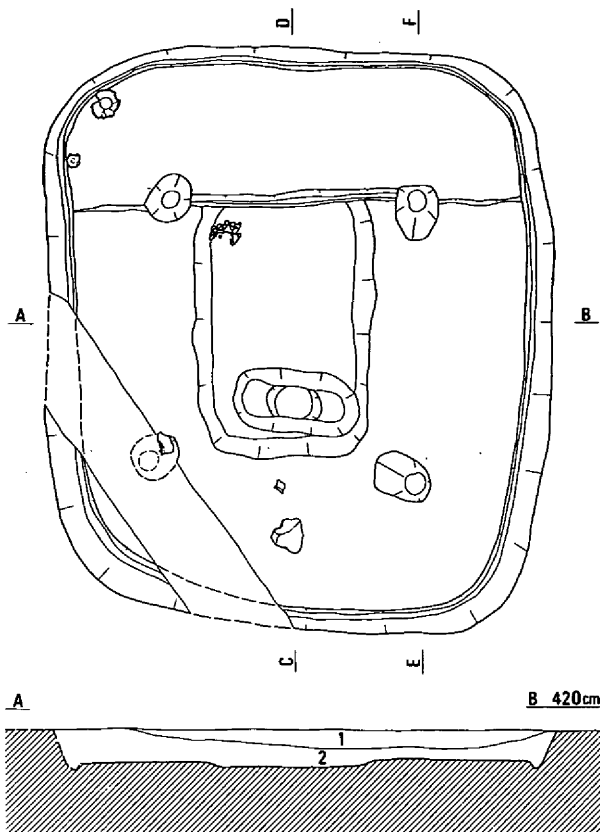


F 420cm E

- 1. 明褐色微砂
- 2. 茶褐色微砂
- 3. 褐色微砂
- 4. 暗褐色微砂
- 5. 暗黄褐色微砂
- 6. 暗灰色粘质微砂

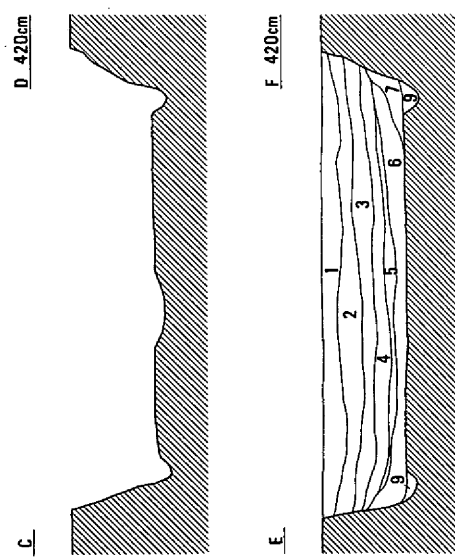
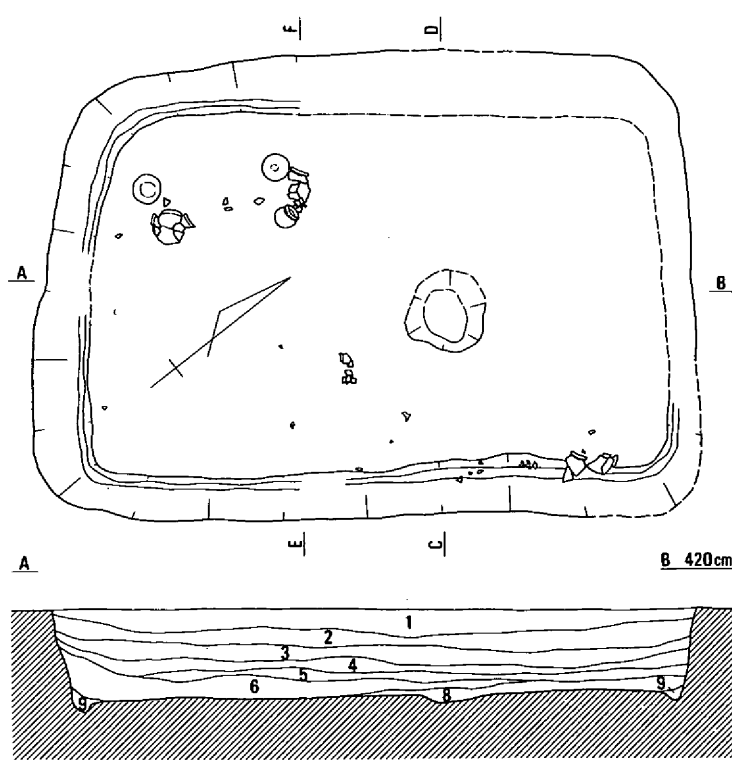
竖穴住居-48





- 1. 黄褐色微砂
- 2. 暗黄褐色微砂
- 3. 暗褐色微砂
- 4. 暗褐色微砂 (炭含む)

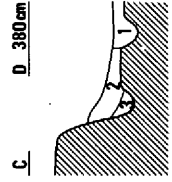
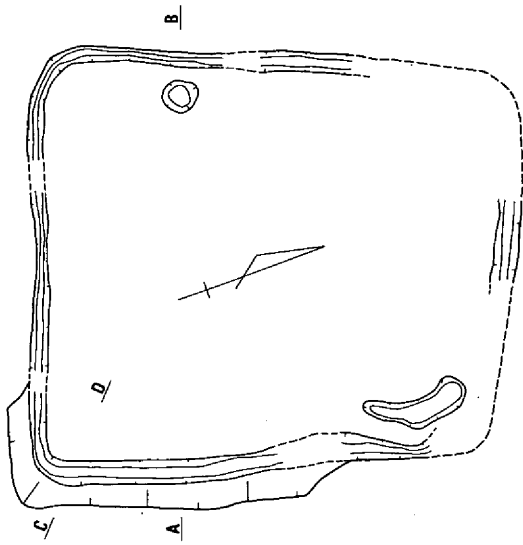
竖穴住居-49



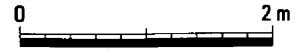
- 1. 淡黄褐色泥砂
- 2. 茶褐色泥砂
- 3. 浓茶褐色泥砂
- 4. 明黄褐色砂质土
- 5. 淡黑褐色砂质土
- 6. 明黄茶褐色粘质土
- 7. 明黄茶褐色泥砂
- 8. 暗黑褐色泥砂 (炭層)
- 9. 暗茶褐色砂质土

竖穴住居-50

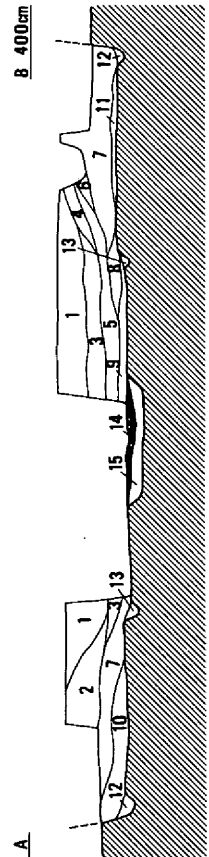
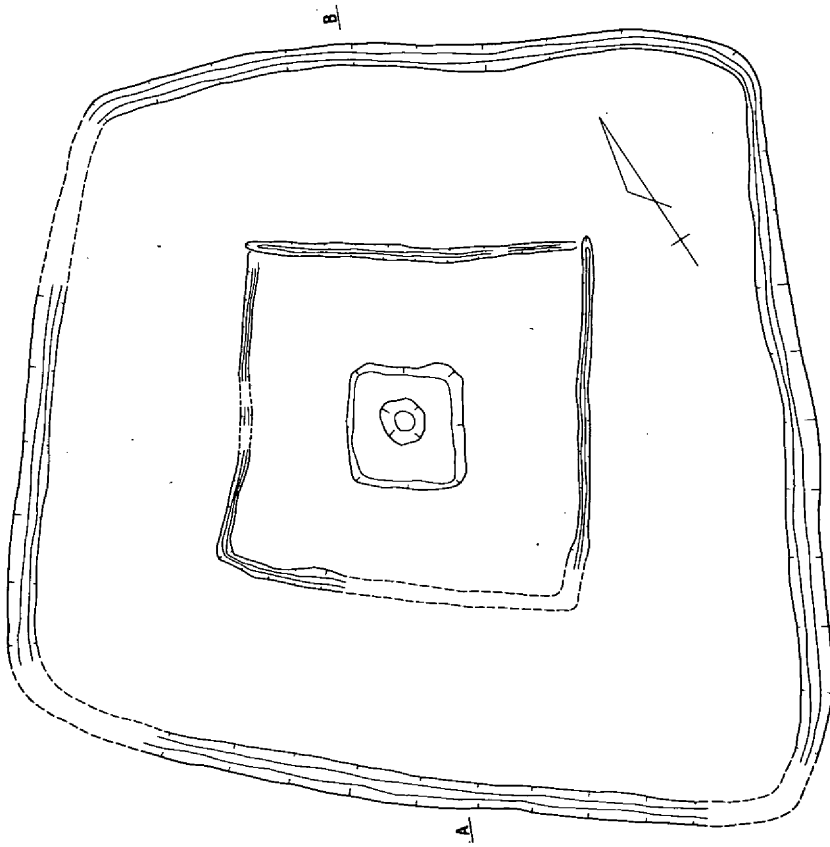




- 1. 竖穴住居50埋土
- 2. 淡黑褐色泥砂
- 3. 黄褐色粘质土
- 4. 暗黄褐色泥砂
- 5. 明黄褐色泥砂

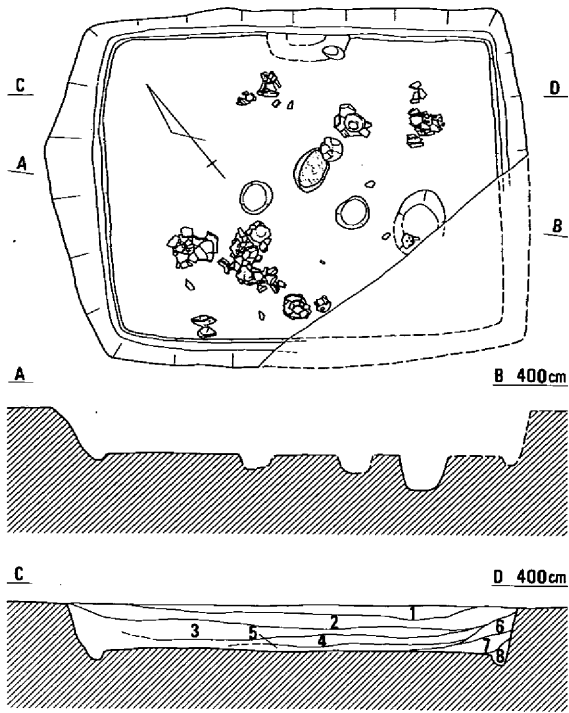


竖穴住居—51



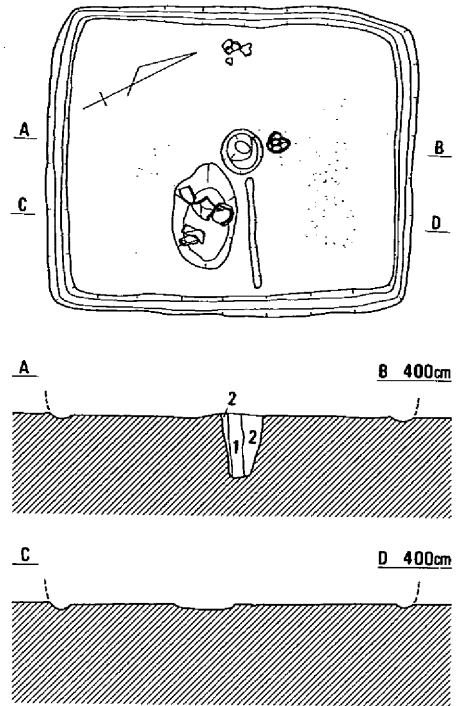
- | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 浓茶褐色粘质土 | 5. 浓茶褐色粘质土 | 9. 茶褐色微砂粘质土 | 13. 茶褐色粘质土 |
| 2. 明茶褐色砂质土 | 6. 薄茶色砂质土 | 10. 明茶色砂质土 | 14. 炭层 |
| 3. 茶褐色粘质土 | 7. 茶褐色砂质土 | 11. 明茶色微砂 | 15. 明茶色微砂 |
| 4. 薄茶色砂质土 | 8. 薄茶色粘质土 | 12. 薄茶色微砂 | |

竖穴住居—52



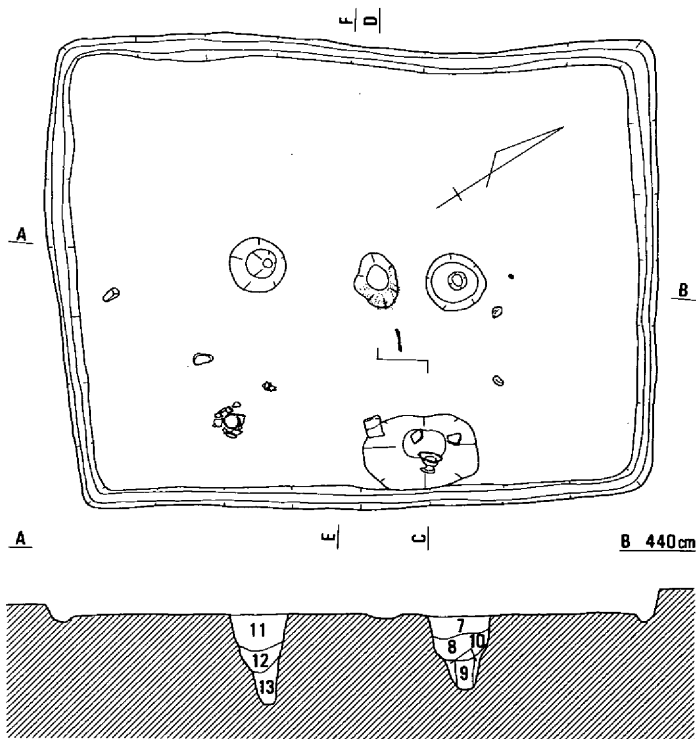
- | | | |
|------------|-----------|-----------|
| 1. 淡茶黄褐色泥砂 | 3. 黄褐色泥砂 | 6. 茶黄色泥砂 |
| 2. 暗茶褐色泥砂 | 4. 茶黄褐色泥砂 | 7. 淡茶褐色泥砂 |
| (炭・焼土を含む) | 5. 茶褐色泥砂 | 8. 茶褐色泥砂 |

竖穴住居—53



- | |
|--------------------|
| 1. 黄茶褐色粘質微砂 (炭を含む) |
| 2. 明黄茶褐色粘質微砂 |

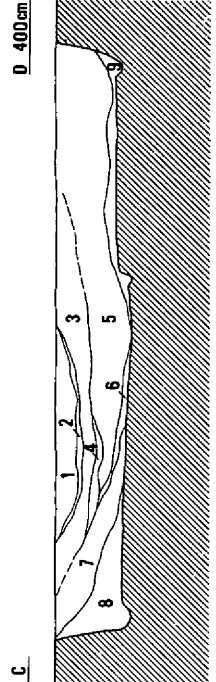
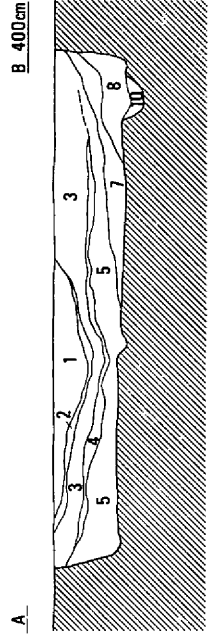
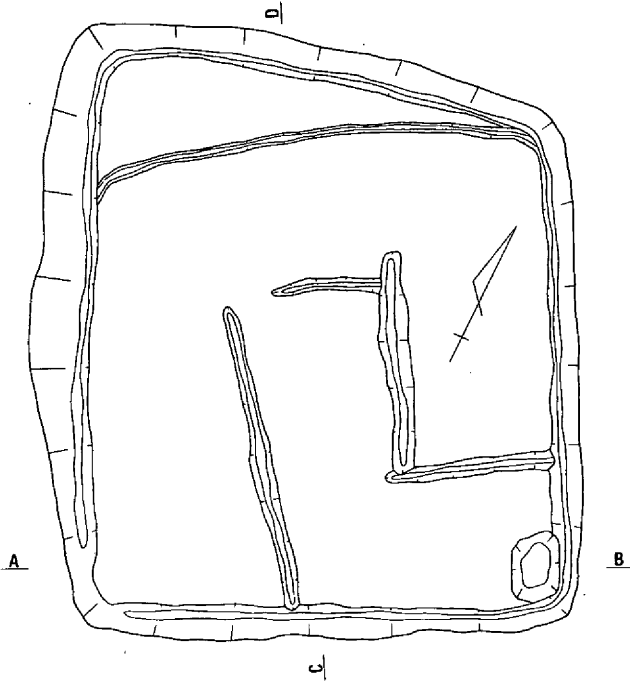
竖穴住居—54



- | | |
|------------------------|--------------|
| 1. 暗茶褐色粘質土 | 8. 明黄褐色砂質土 |
| 2. 暗茶褐色粘質土 (やや粘性を帯びる) | 9. 明黄灰褐色粘質土 |
| (やや砂質) | (柱痕跡) |
| 3. 暗赤橙褐色砂質土 (焼土を多量に含む) | 10. 明黄褐色砂質土 |
| 4. 暗茶褐色粘質土 | 11. 明黄茶褐色粘質土 |
| 5. 暗灰茶褐色砂質土 | 12. 明灰茶褐色粘質土 |
| 6. 灰茶褐色砂質土 | 13. 灰茶褐色粘質土 |
| 7. 濃茶褐色砂質土 (柱痕跡) | |

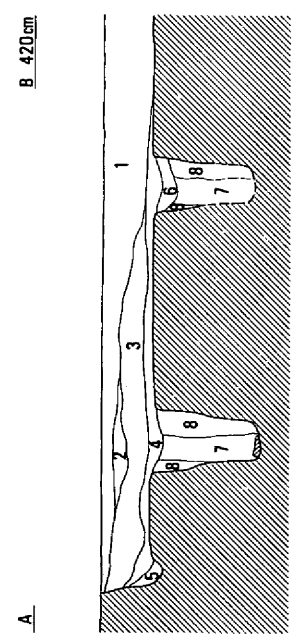
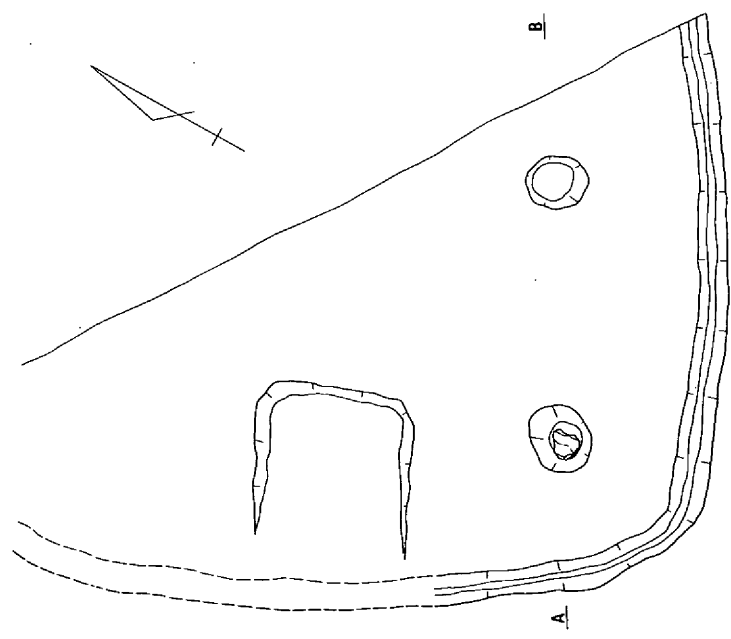
竖穴住居—55





豎穴住居-56

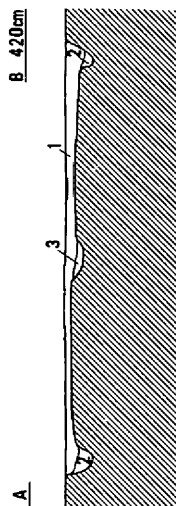
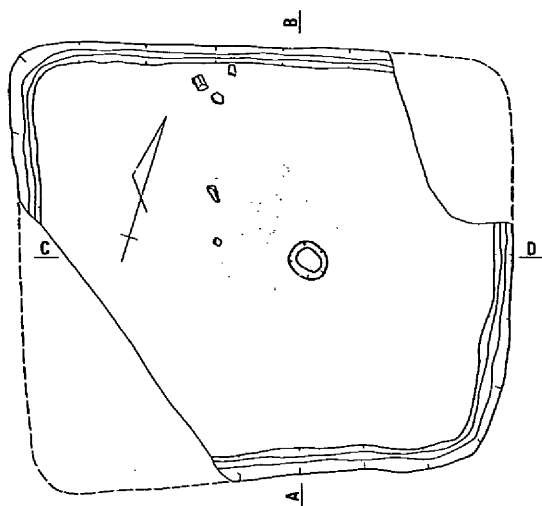
- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 7. 青灰色粘質土 |
| 2. 褐色粘質土 | 8. 茶褐色粘質土
(3層より砂質) |
| 3. 茶褐色粘質土 | 9. 赤黒色灰色砂質土
(土器片、炭を含む) |
| 4. 淡褐色粘質土
(焼土を含む) | 10. 黄灰色粘質土 |
| 5. 茶色粘質土 | |
| 6. 赤褐色粘質土 | |



豎穴住居-57

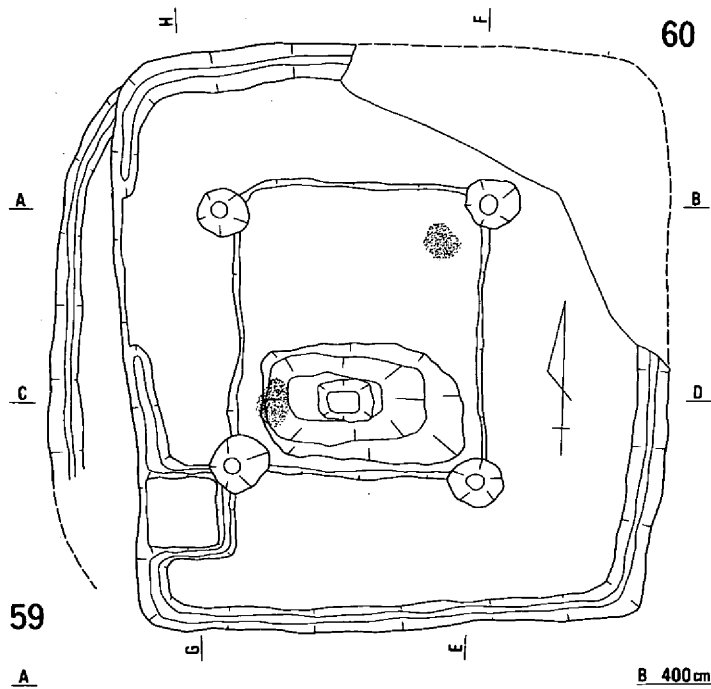
- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 中世溝の埋土 | 5. 灰茶色粘質土 |
| 2. 淡褐色粘質土
(炭を含む) | 6. 褐色粘質土
(炭、焼土を多含) |
| 3. 茶色粘質土 | 7. 黄褐色粘質土 |
| 4. 茶青灰色粘質土 | 8. 淡茶色粘質土
(柱痕跡) |



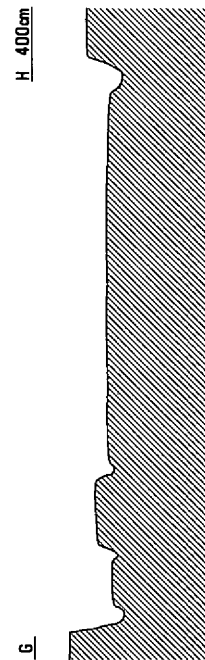
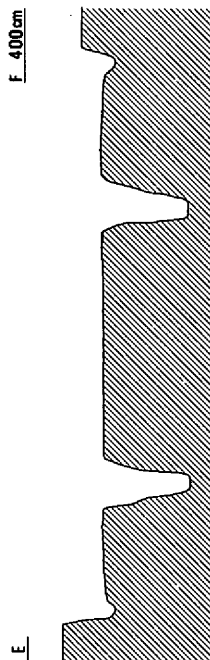


竪穴住居-58

1. 暗茶褐色粘質土 (微砂を少し含む)
2. 茶褐色粘質土 (砂を含む)
3. 薄黒茶褐色砂質土

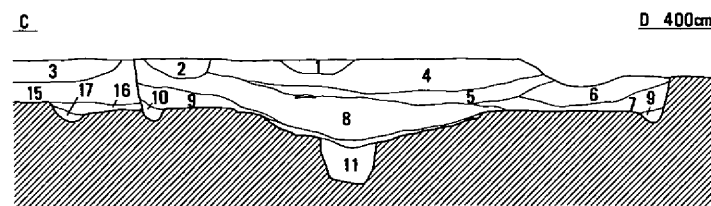
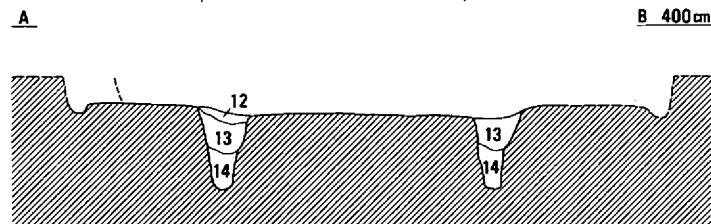


60



59

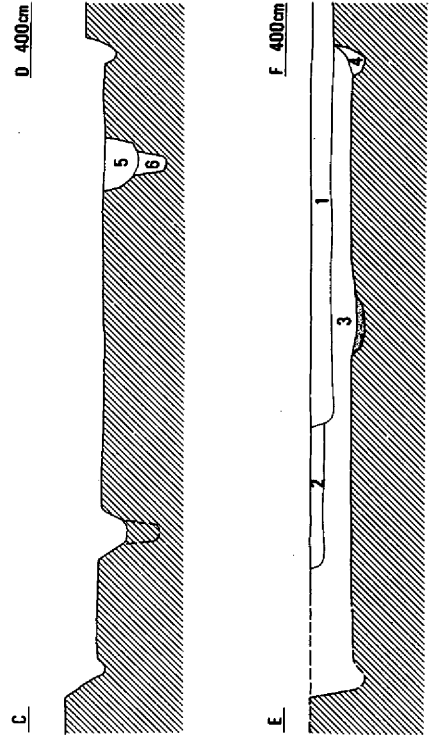
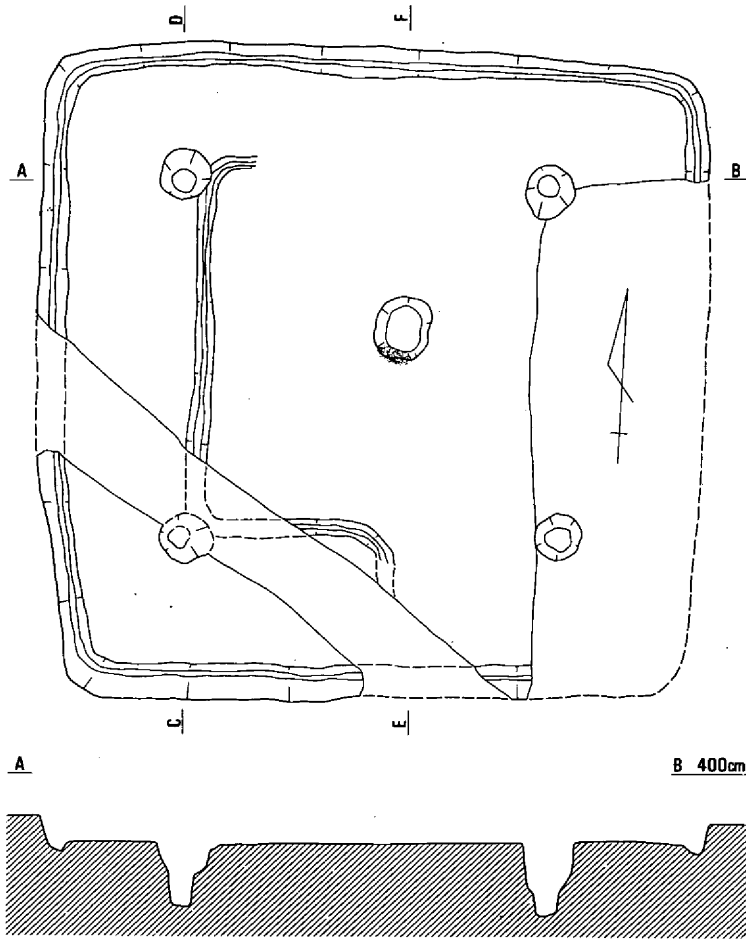
B 400cm



1. 溝の埋土
2. 竪穴住居-119の埋土
3. 竪穴住居-120の埋土
4. 暗茶褐色粘質土
5. 黒灰褐色粘質土
6. 茶褐色粘質土
7. 灰茶褐色粘質土
8. 茶褐色粘質土 (少し黄色を帯びる)
9. 茶褐色粘質土 (地山土を含む)
10. 暗灰茶褐色微砂混じり粘質土
11. 暗茶褐色粘質土 (炭を多量に含む)
12. 茶黄色粘質土 (地山土を含む)
13. 茶褐色粘質土
14. 灰茶褐色粘質土
15. 茶褐色粘質土 (竪穴住居6の埋土)
16. 茶褐色粘質土 (竪穴住居7の埋土)
17. 茶褐色粘質土 (地山土を含む)

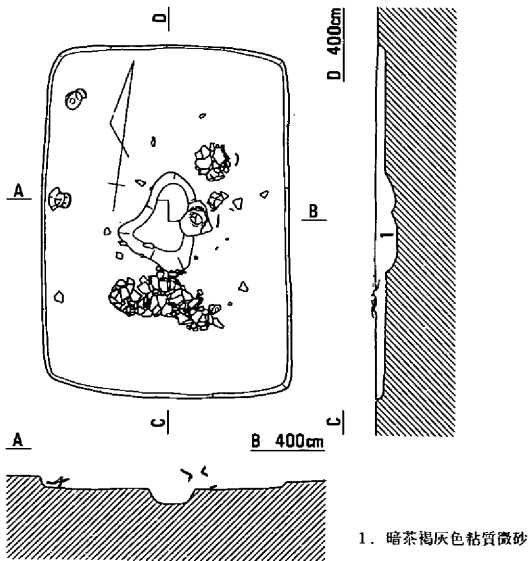
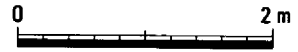


竪穴住居-59・60



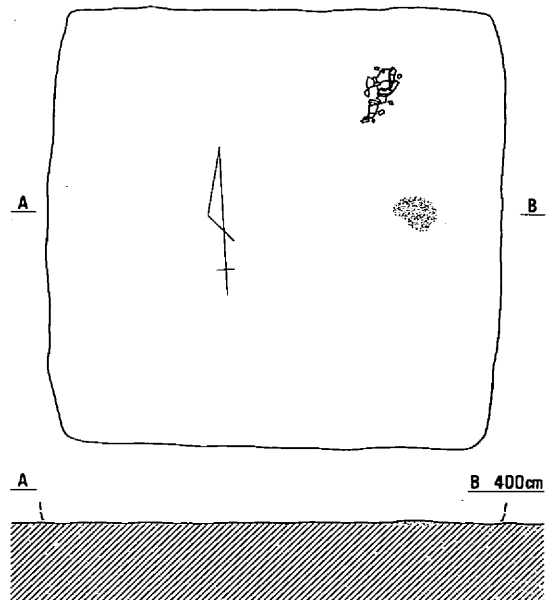
- 1. 竪穴住居-119の埋土
- 2. 竪穴住居-120の埋土
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 暗茶褐色細砂粘質土
- 5. 黄茶褐色粘質土 (地山土を含む)
- 6. 茶褐色粘質土

竪穴住居-61

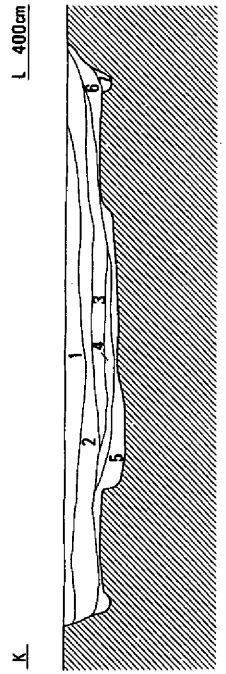
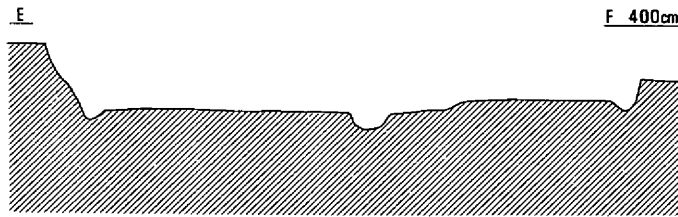
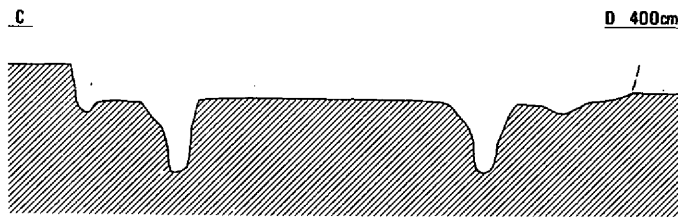
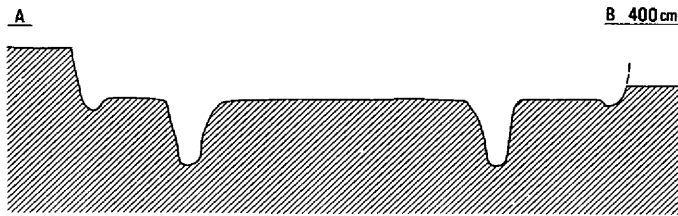
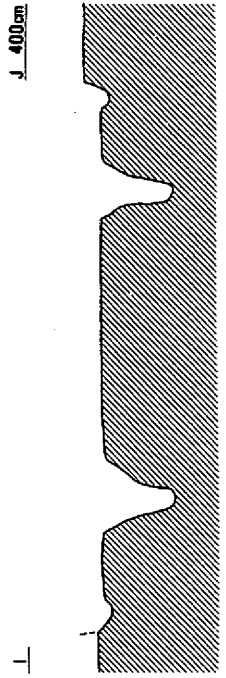
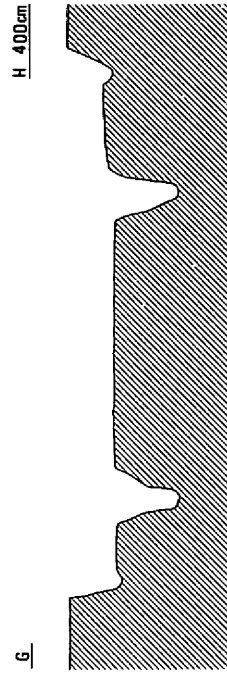
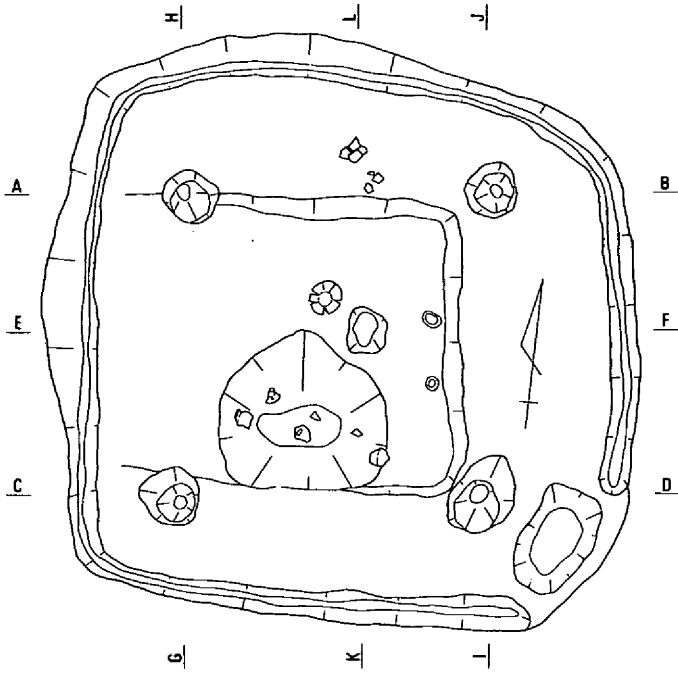


- 1. 暗茶褐灰色粘質微砂

竪穴住居-62



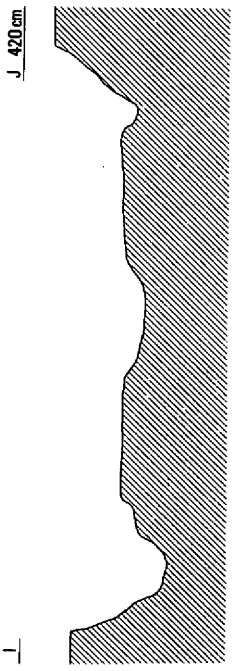
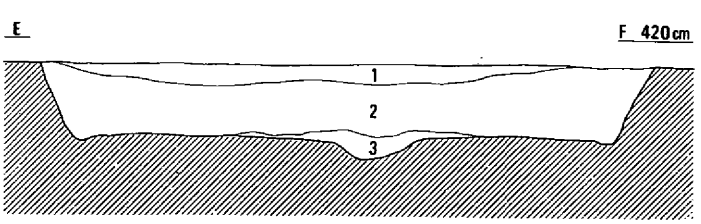
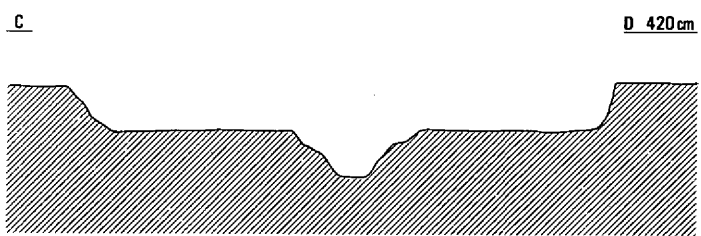
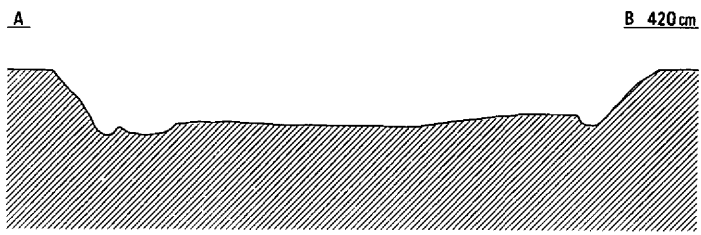
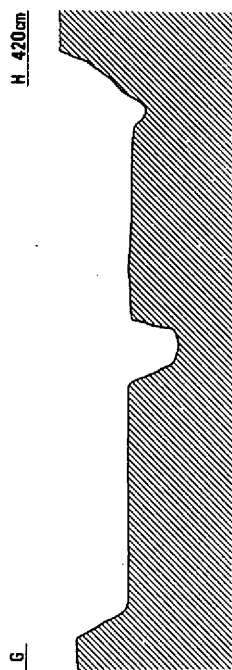
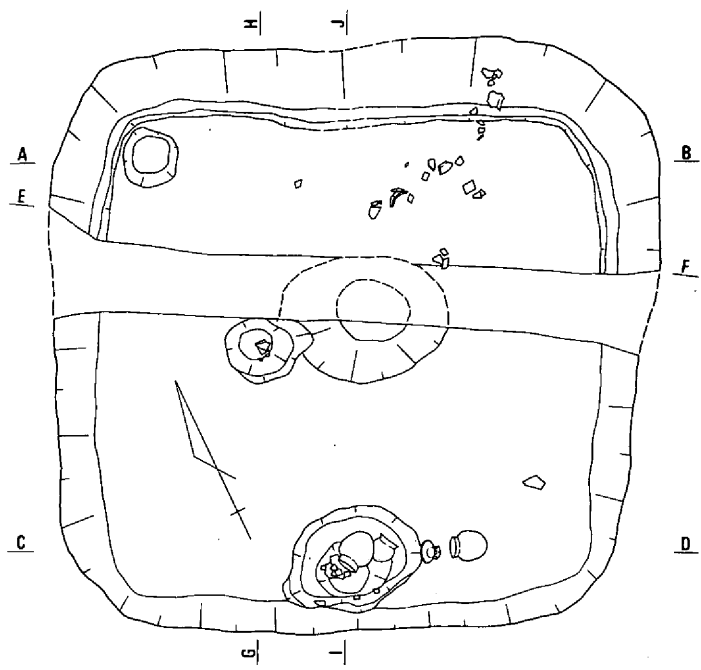
竪穴住居-63



1. 暗赤茶褐色粘質土 (粘性弱)
2. 暗赤黄灰色粘質土 (粘性強)
3. 暗赤灰褐色粘質細砂 (粘性弱)
4. 暗赤紫灰褐色粘質微砂
5. 暗赤灰褐色粘質土 (灰、炭多含c)
6. 暗茶灰褐色粘質微砂
7. 暗黄赤灰色粘質微砂

豎穴住居-64

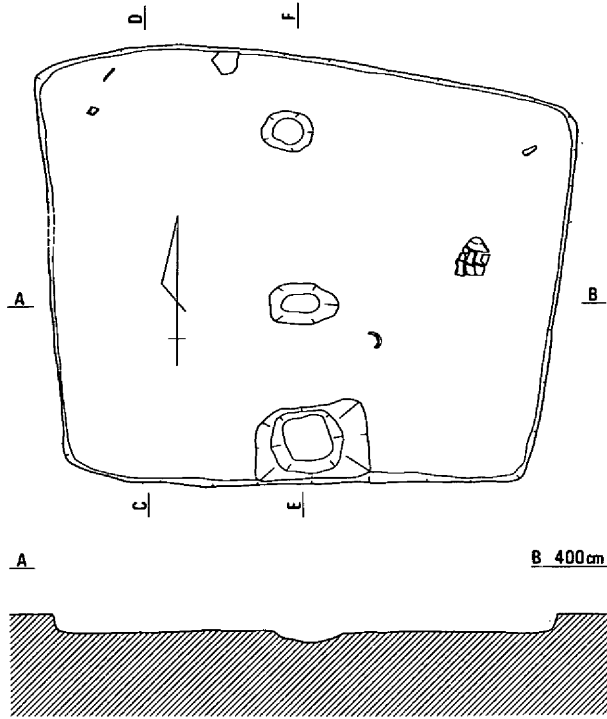




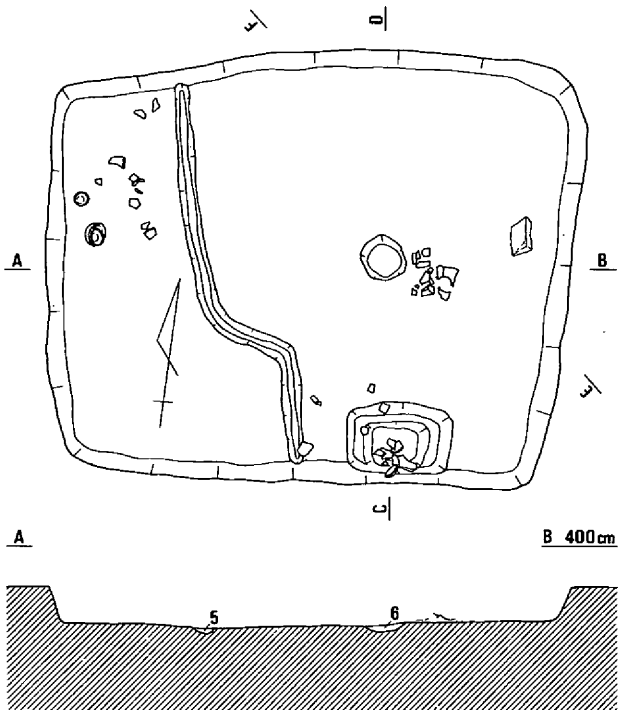
- 1. 暗茶灰色粘質微砂
- 2. 暗茶褐色粘質微砂
- 3. 暗灰茶色粘質微砂 (炭を含む)

竪穴住居-65





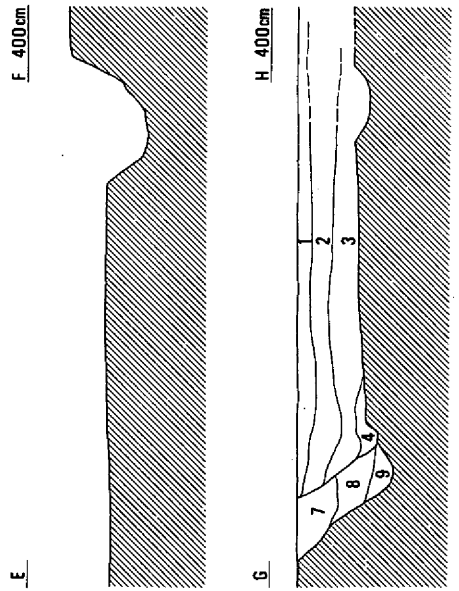
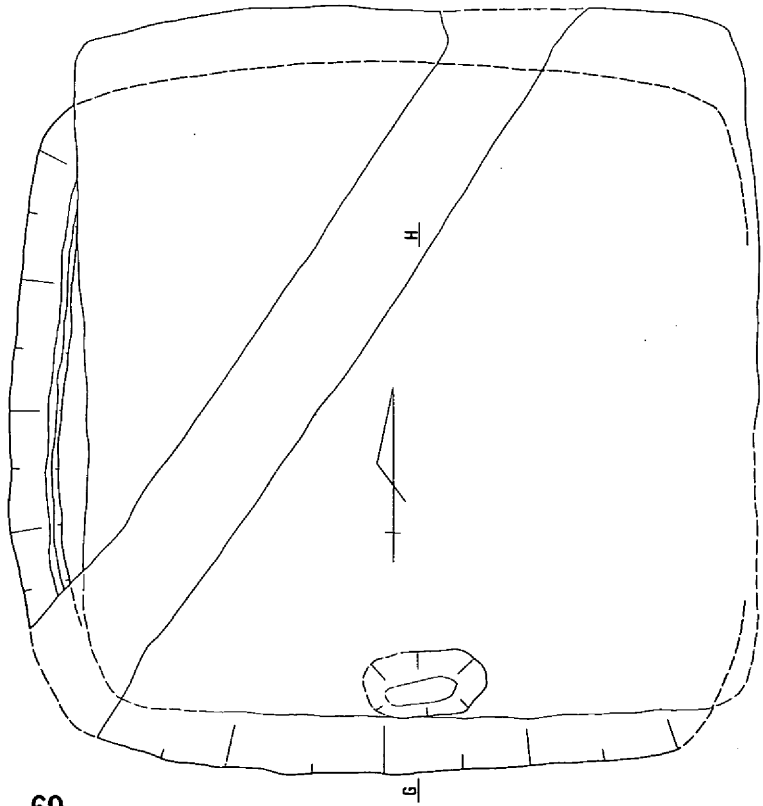
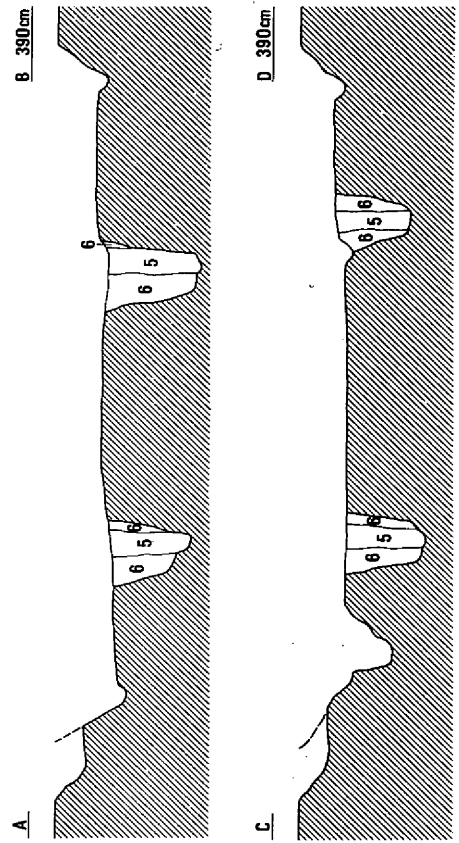
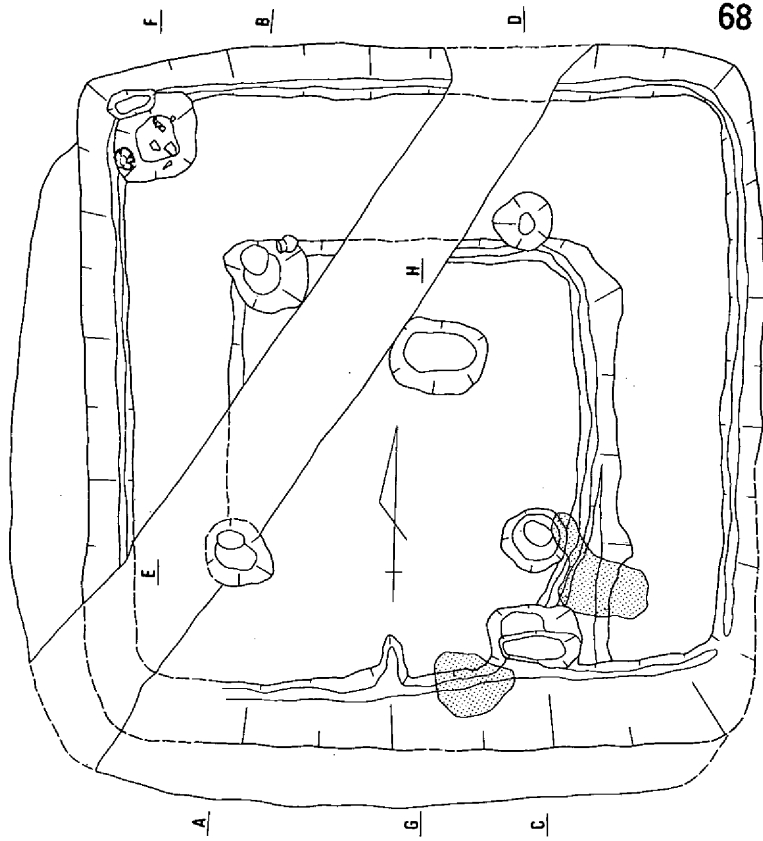
竖穴住居—66



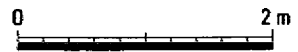
竖穴住居—67

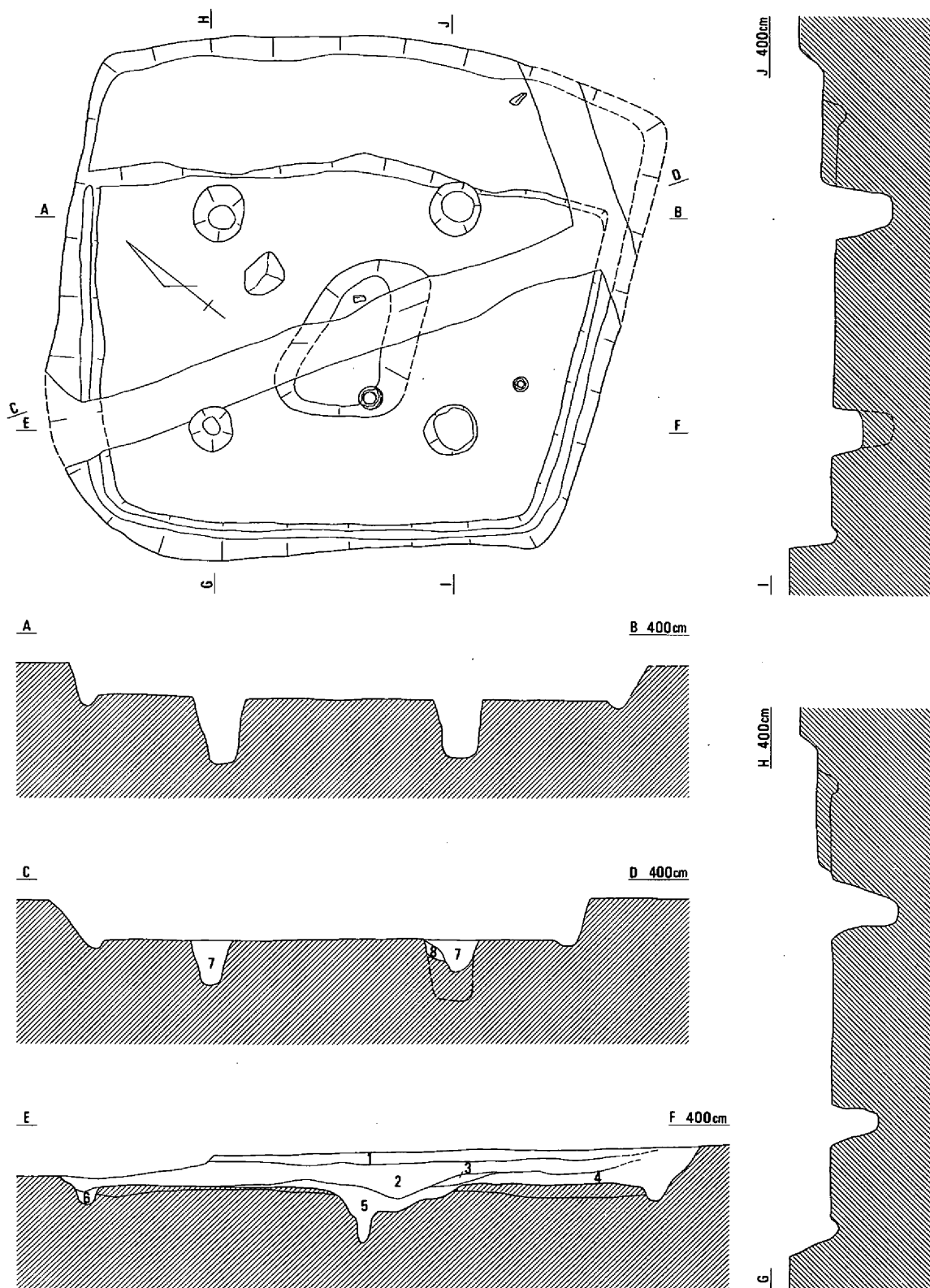
- 1. 暗黑灰色粘質微砂
- 2. 暗茶色粘質微砂
- 3. 暗茶色粘質微砂
- 4. 濃暗茶色粘質微砂

- 5. 暗茶色粘質微砂
- 6. 暗茶色粘質微砂
- 7. 暗茶色粘質微砂

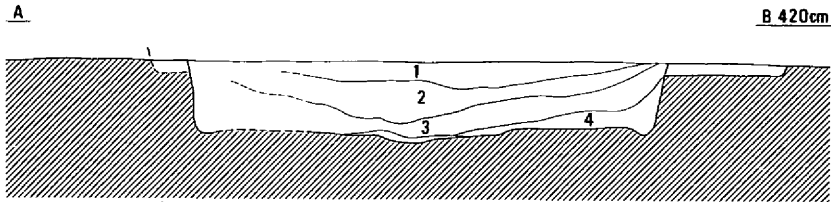
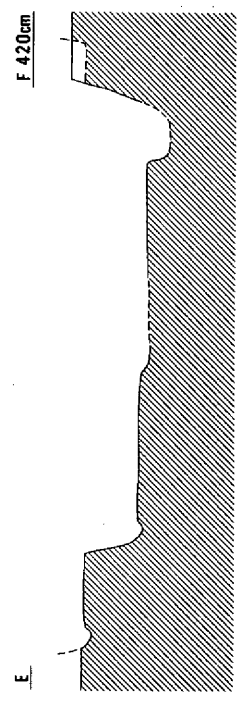
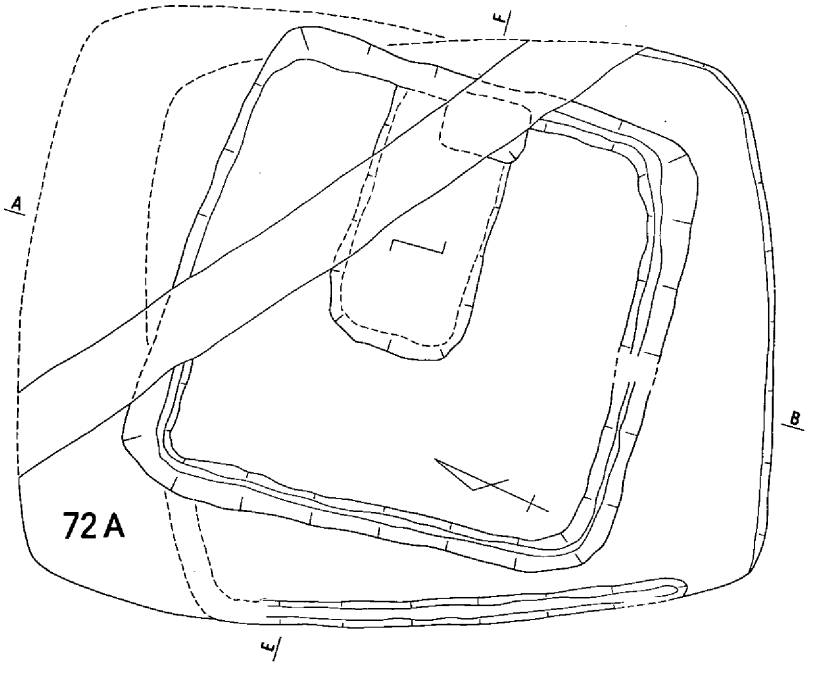
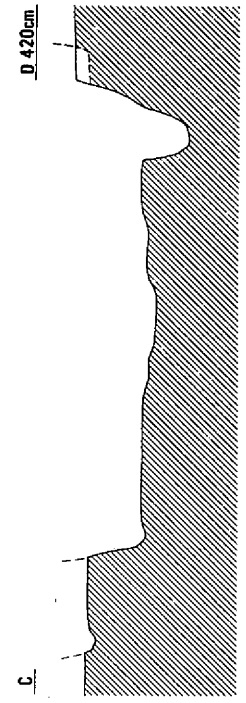
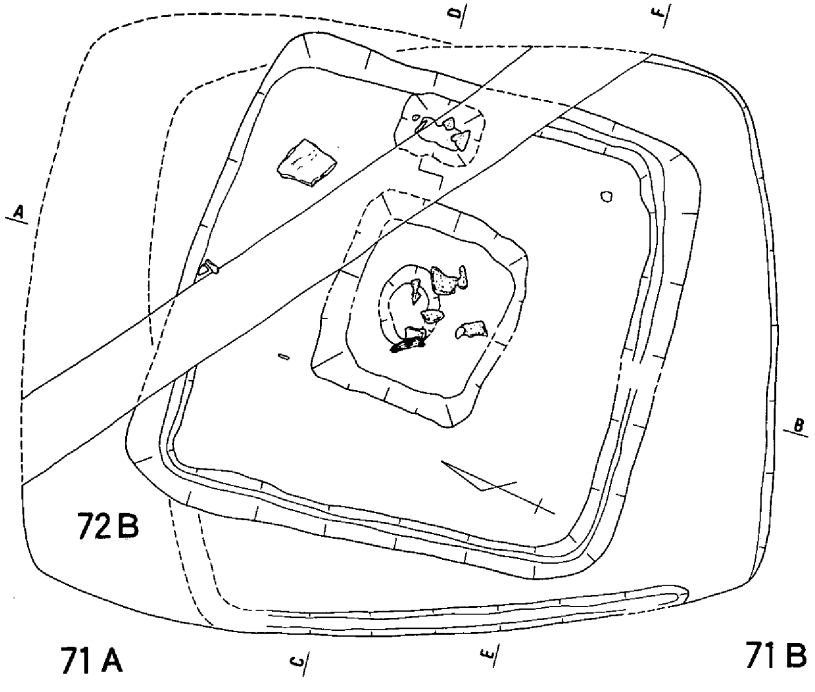


- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 淡灰茶褐色微砂 | 6. 暗茶灰色粘质微砂 |
| 2. 暗灰褐色微砂 | 7. 暗灰茶色微砂 |
| 3. 暗灰茶褐色微砂 | 8. 暗灰茶色土 |
| 4. 暗灰茶色微砂 | 9. 方形土壟埋土 |
| 5. 暗灰茶色粘质微砂 | |





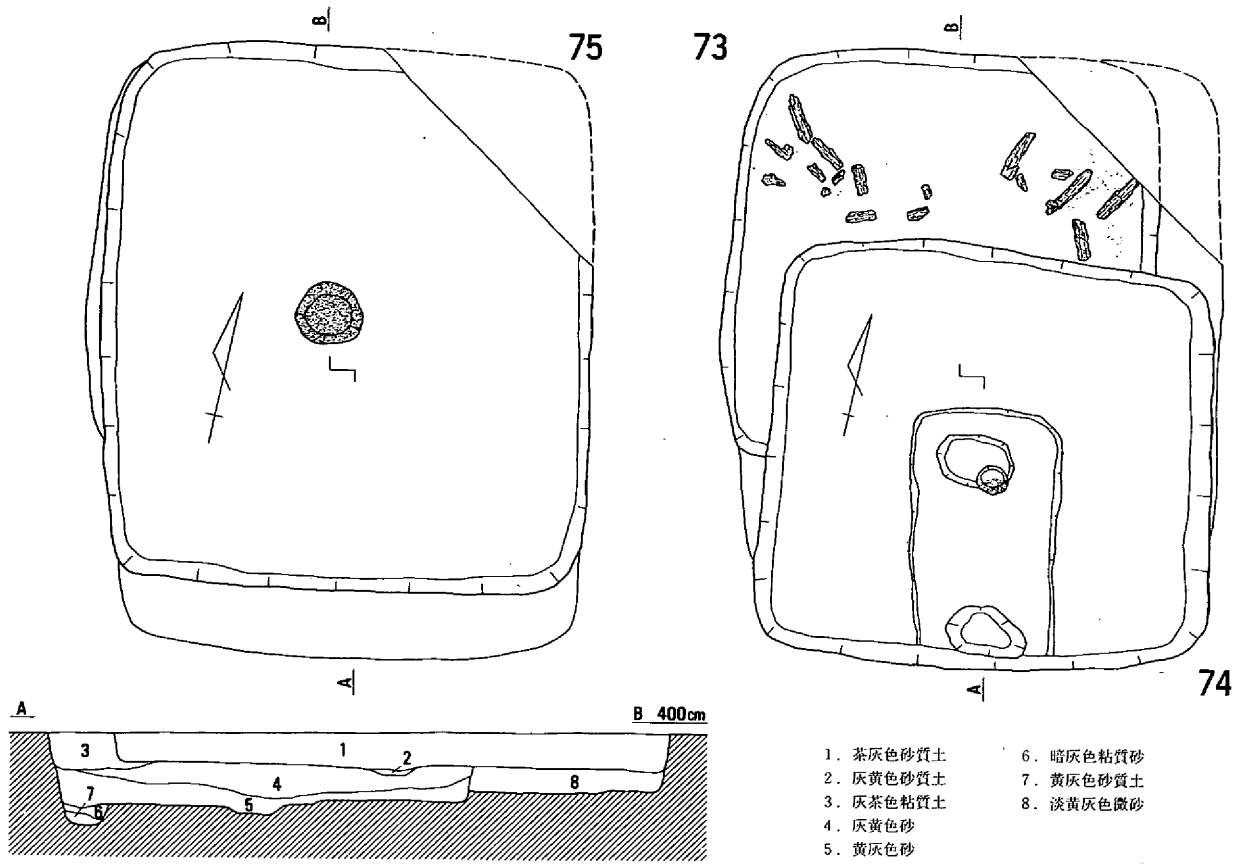
- | | | |
|-------------|---------------|------------|
| 1. 暗紫灰褐色粘质土 | 4. 暗黄紫灰褐色粘质微砂 | 7. 暗灰褐色砂质土 |
| 2. 暗赤黄褐色粘质土 | 5. 炭化物+粘土互层 | 8. 暗黄褐色粘质砂 |
| 3. 暗赤灰褐色粘质土 | 6. 灰褐色砂质土层 | |



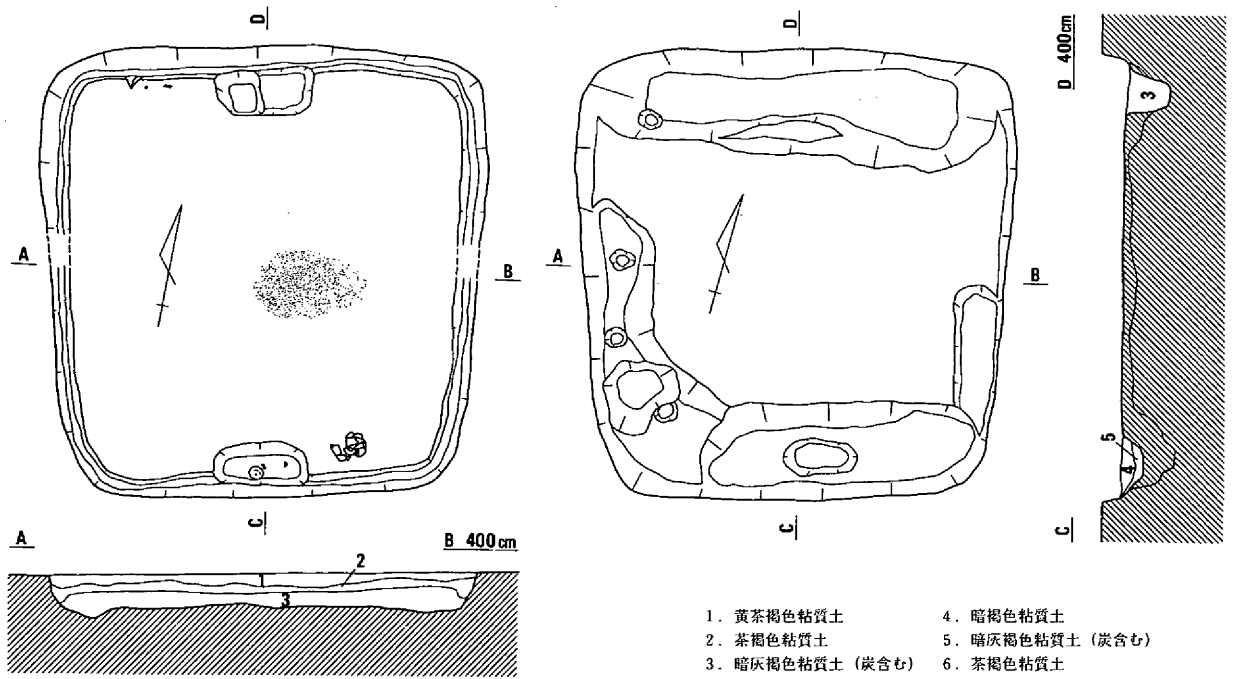
- 1. 茶灰色土
- 2. 灰褐色粘质砂
- 3. 淡灰色砂 (炭、烧土含む)
- 4. 灰白色砂 (炭、烧土含む)

竖穴住居-71・72



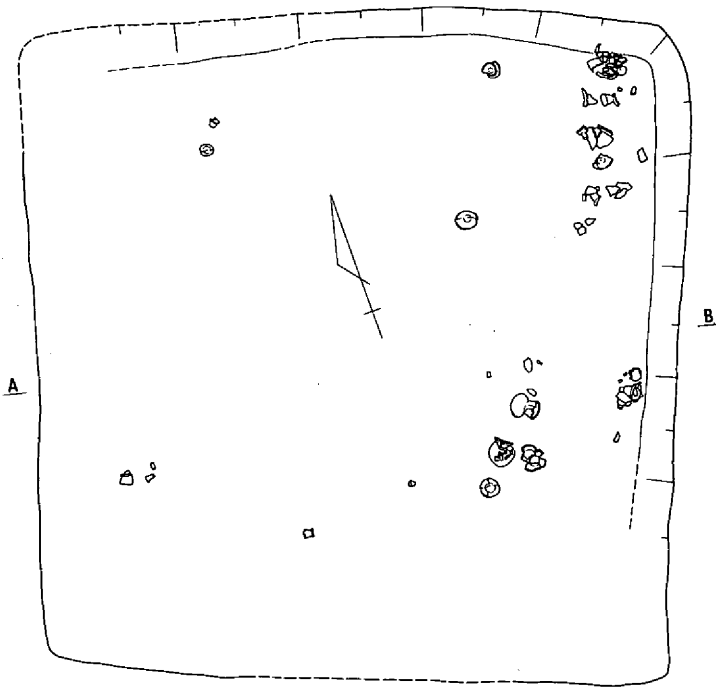


豎穴住居—73~75

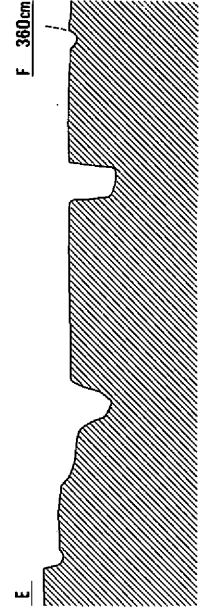
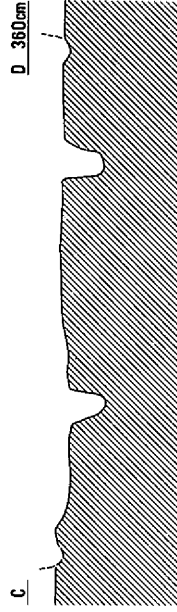


豎穴住居—76

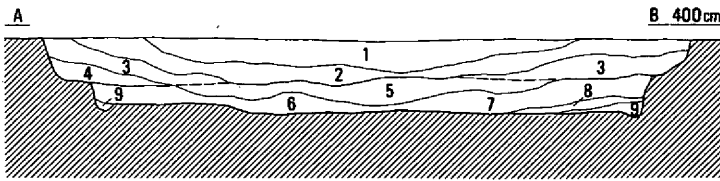
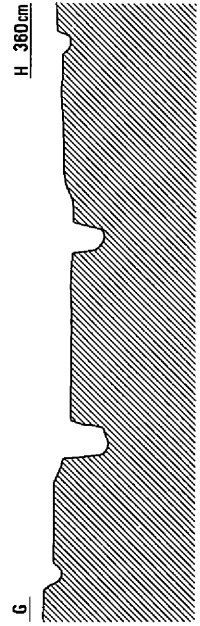
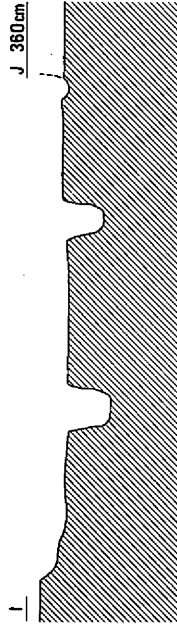
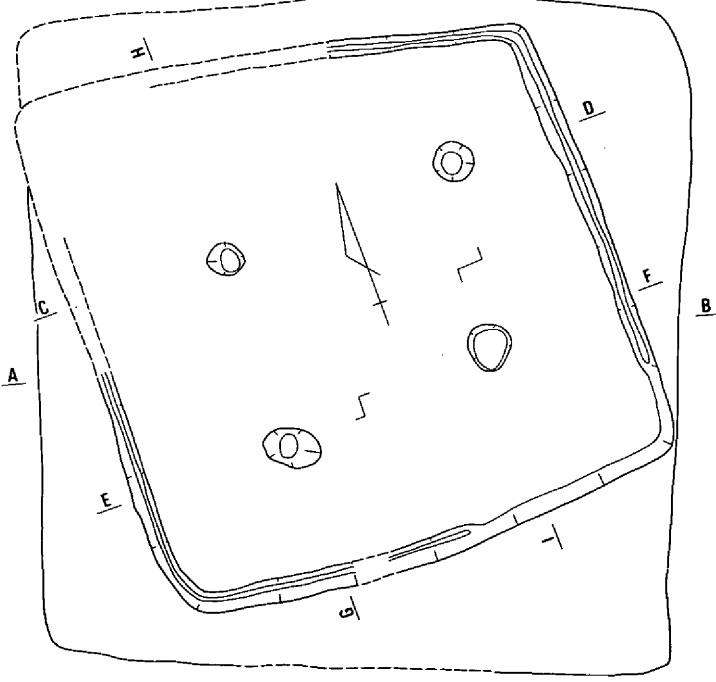




78

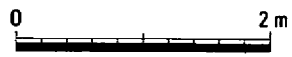


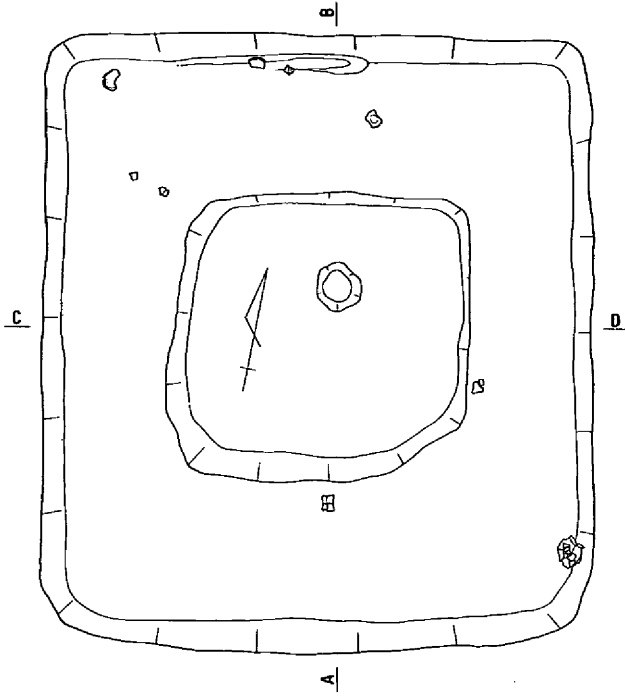
77



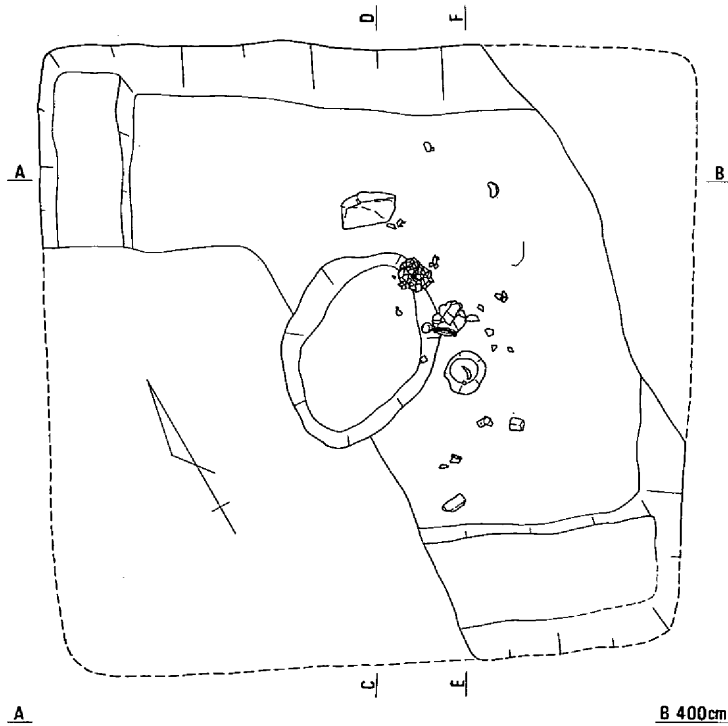
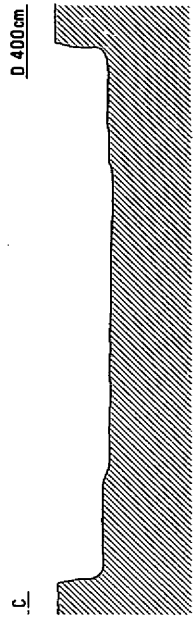
- 1. 明黄褐色粘质土
- 2. 暗黄褐色粘质土
- 3. 黑褐色微砂质土
- 4. 暗黑褐色微砂质土
- 5. 暗茶褐色微砂质土
- 6. 暗黑褐色砂质土
- 7. 暗黑灰色砂质土
- 8. 明黄灰色砂质土
- 9. 暗黑褐色粘质土

竖穴住居-77·78

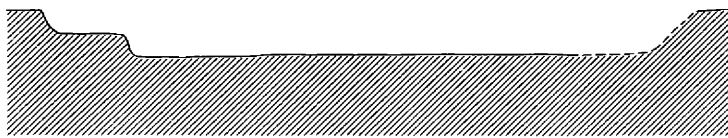
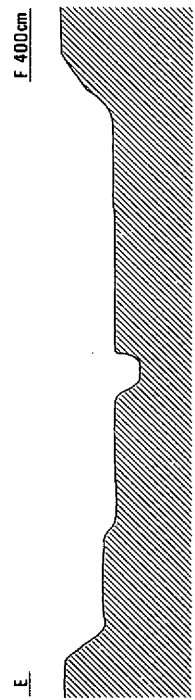
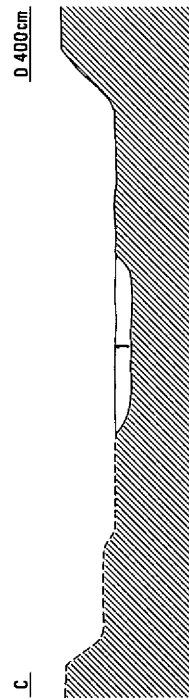




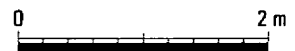
竖穴住居-79

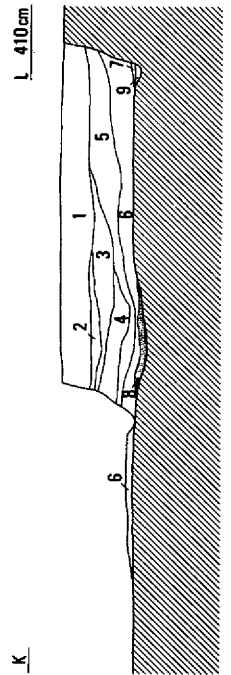
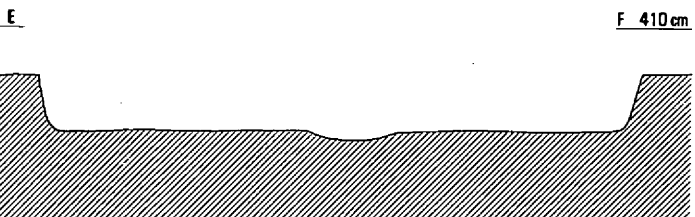
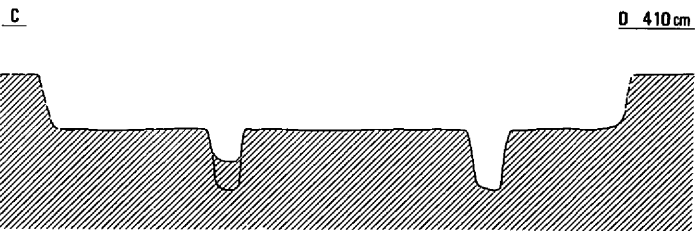
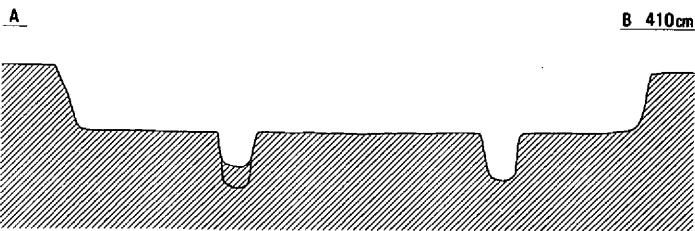
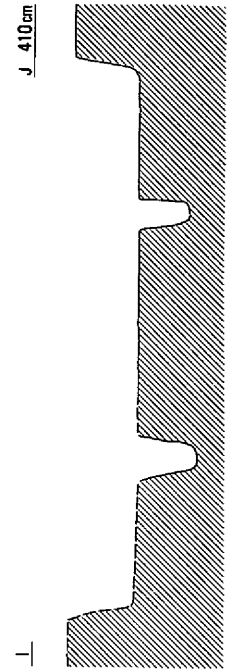
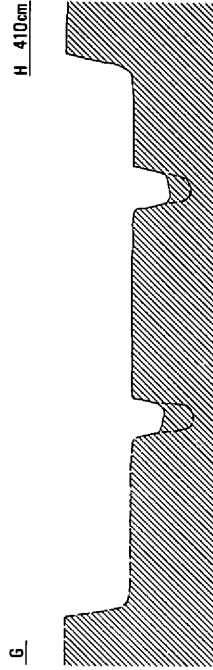
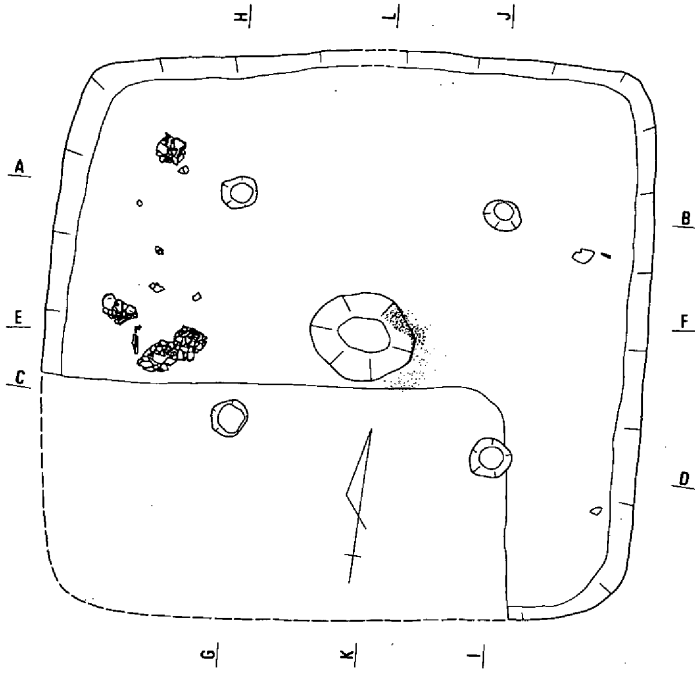


竖穴住居-80



1. 黑褐色粘質土 (炭含む)

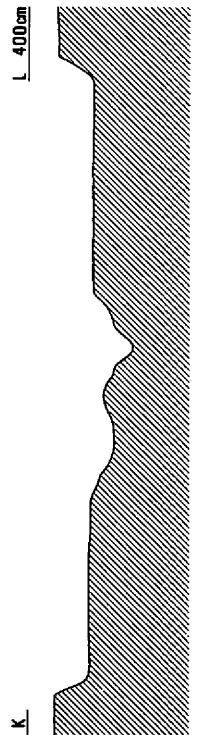
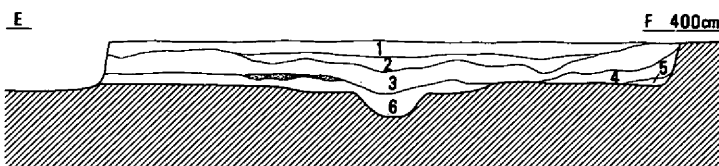
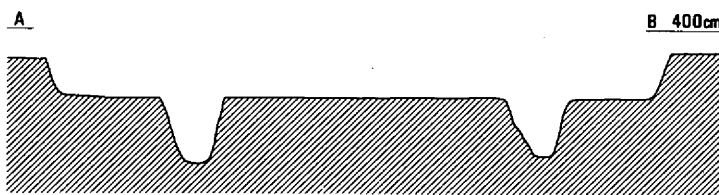
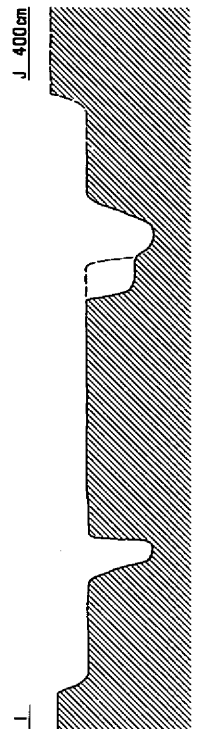
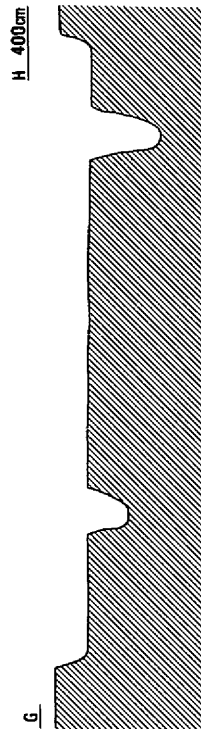
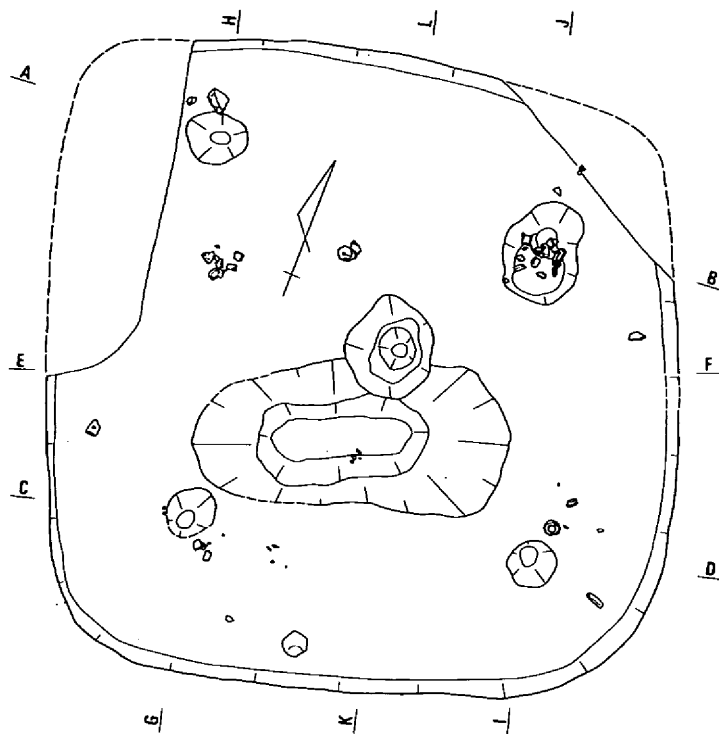




竖穴住居-81

- 1. 茶灰黄色砂質土
- 2. 黄色砂
- 3. 灰黄色粘質土
- 4. 黄橙色砂
- 5. 灰茶色粘質砂
- 6. 黄灰色砂質土
- 7. 灰色土 (炭含む)
- 8. 黑灰色粘質土 (炭、燒土含む)
- 9. 黄灰色砂

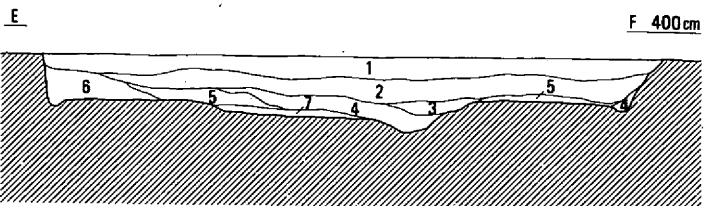
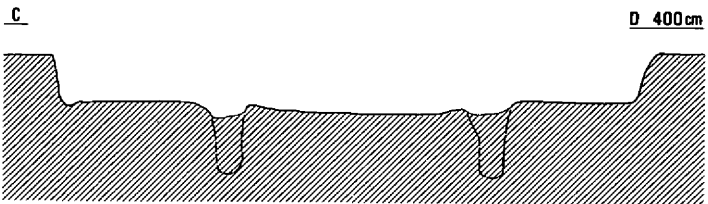
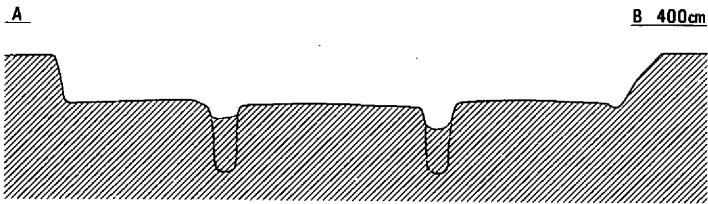
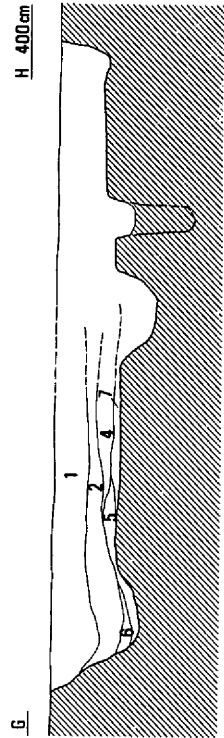
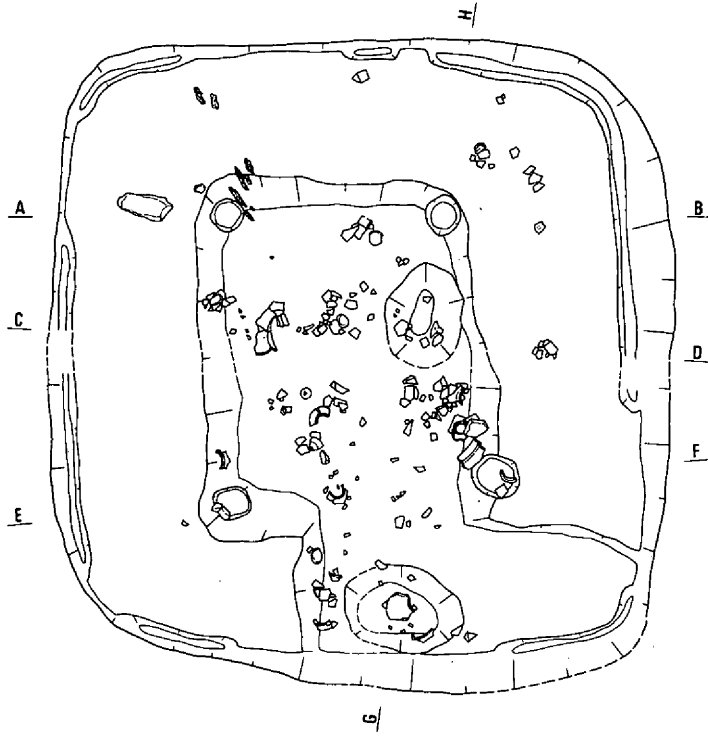




- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. 暗黄黑褐色粘质土 | 4. 暗黄灰色砂质土 |
| 2. 暗黄灰褐色粘质土 | 5. 暗灰褐色砂质土 |
| 3. 暗青黄褐色粘质土
(炭、烧土含む) | 6. 暗黄灰色粘质砂
(烧土含tr) |

竖穴住居-82

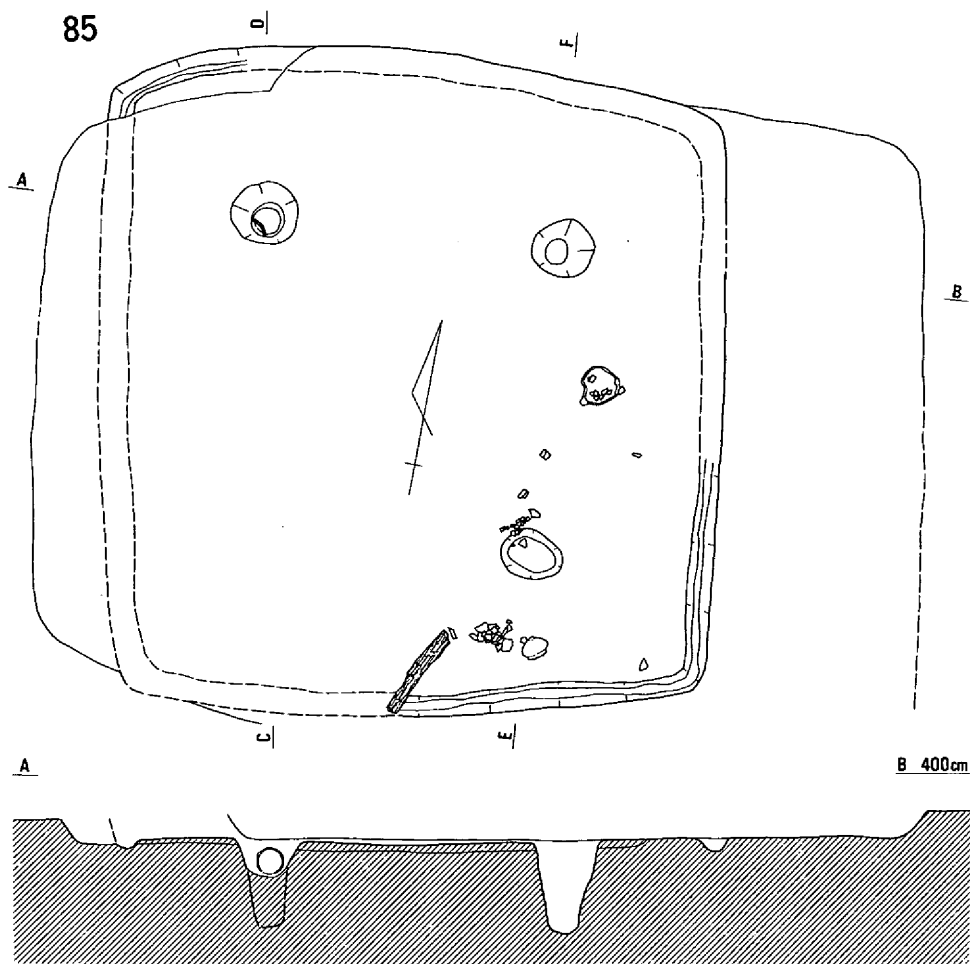
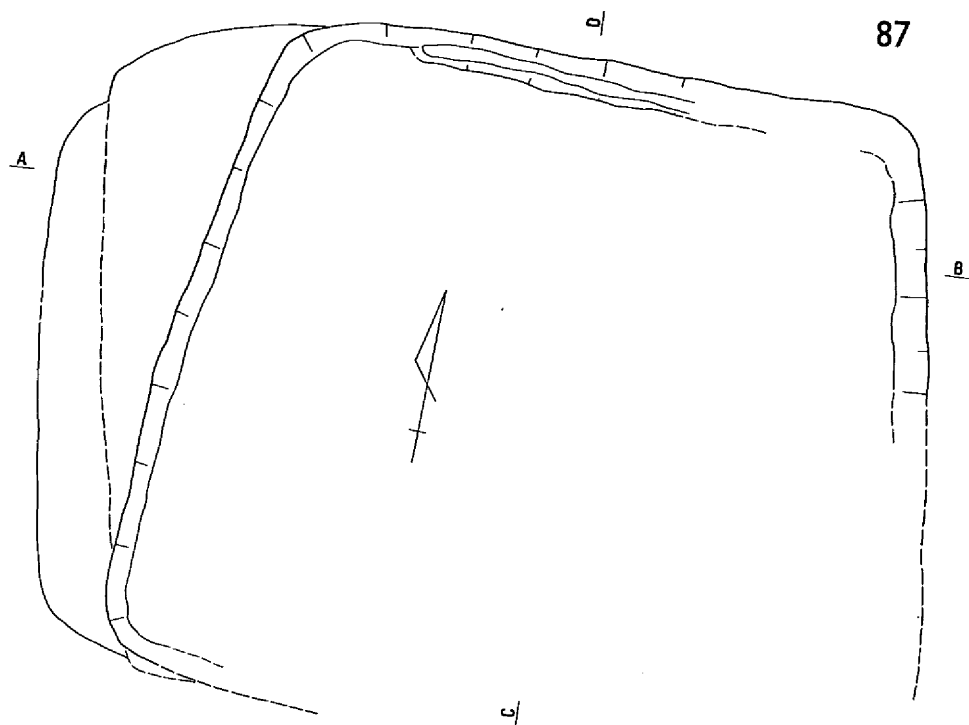




- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 明茶褐色粘質土
- 3. 黄灰褐色粘質土 (炭含 t)
- 4. 暗灰褐色粘質土 (炭含 t)
- 5. 黄茶褐色粘質土
- 6. 明茶褐色粘質土
- 7. 暗灰褐色粘質土 (炭含 t)

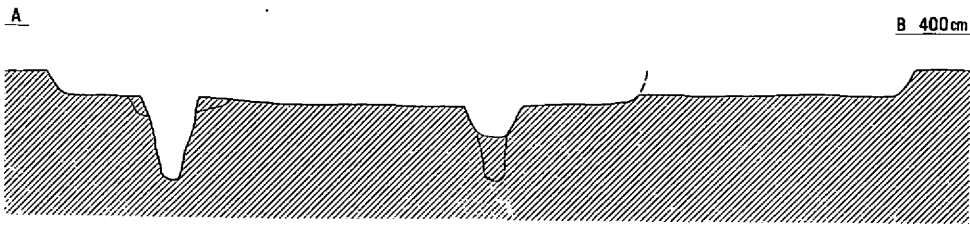
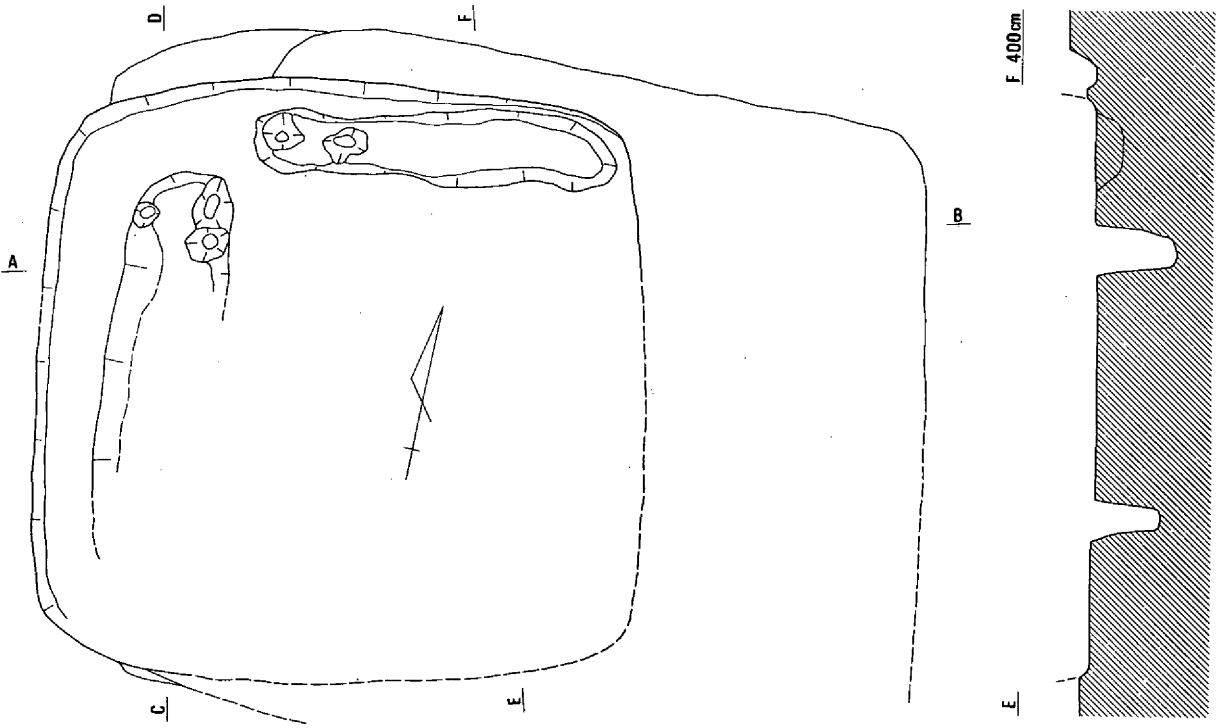
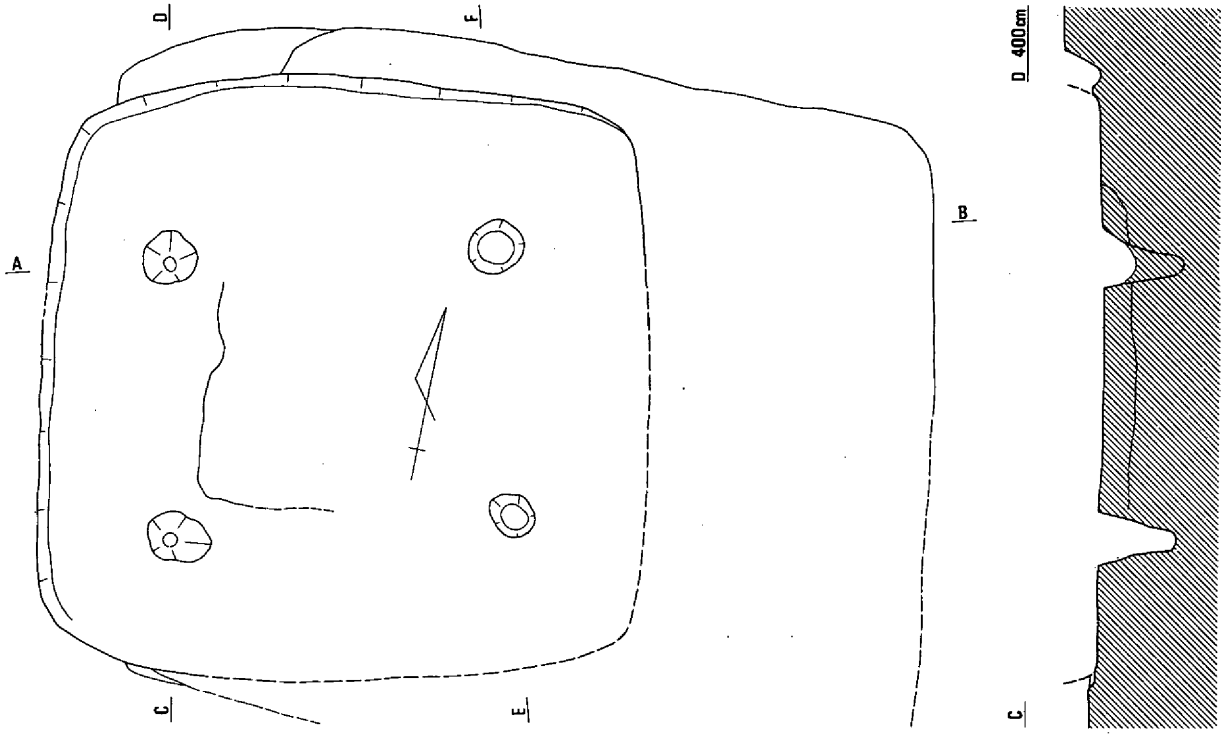
竖穴住居-84





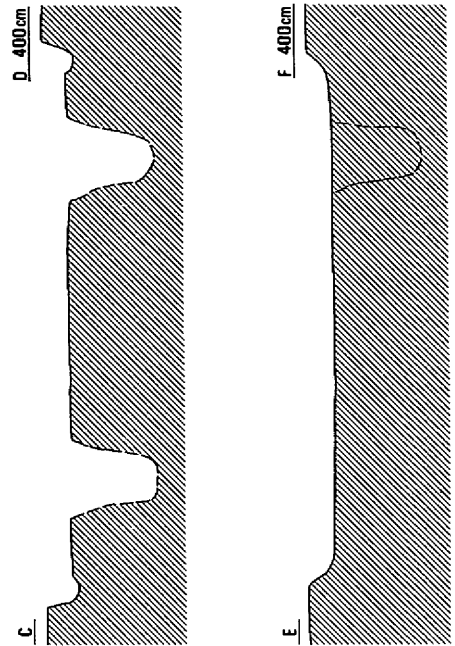
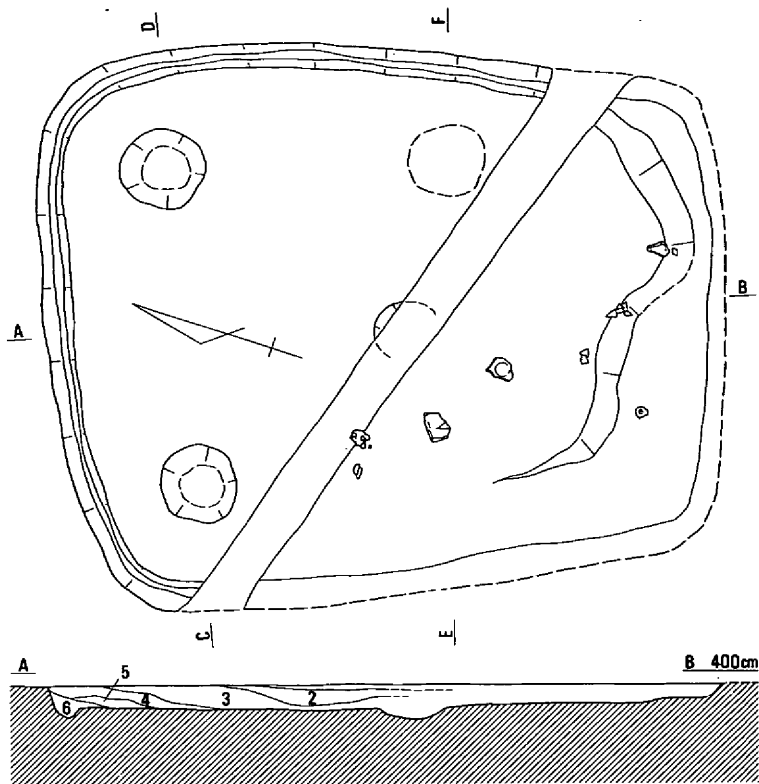
竖穴住居—85·87



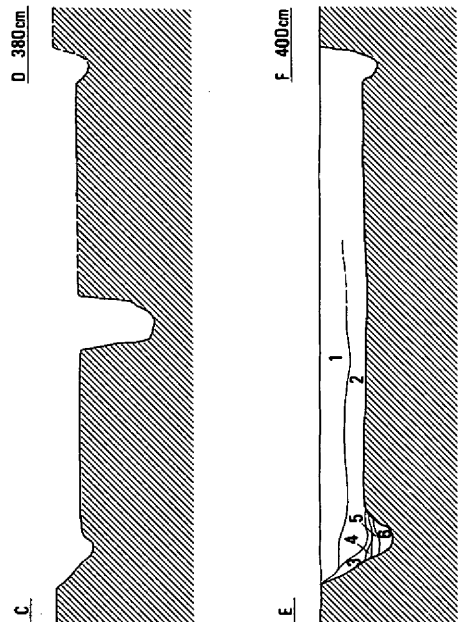
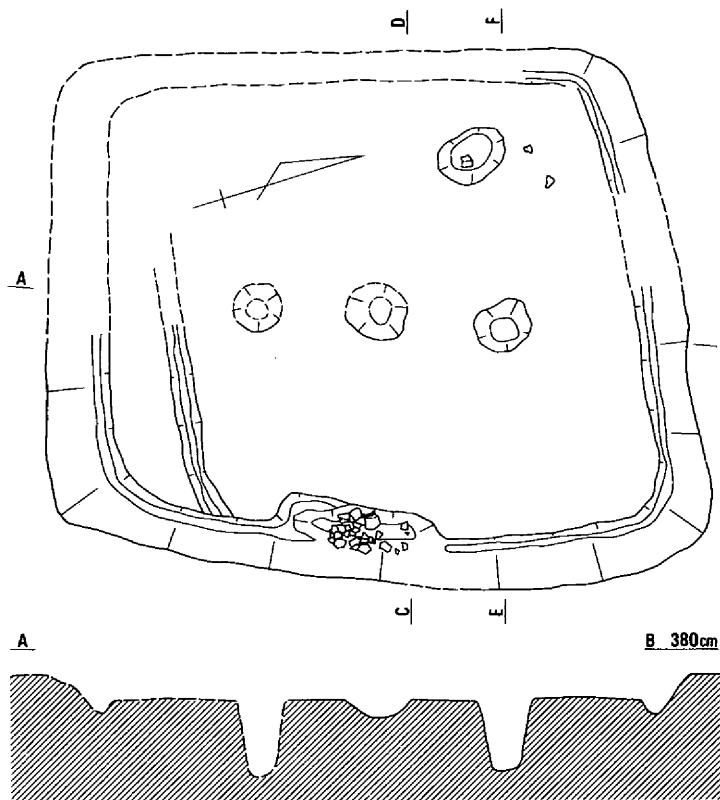


竖穴住居-86



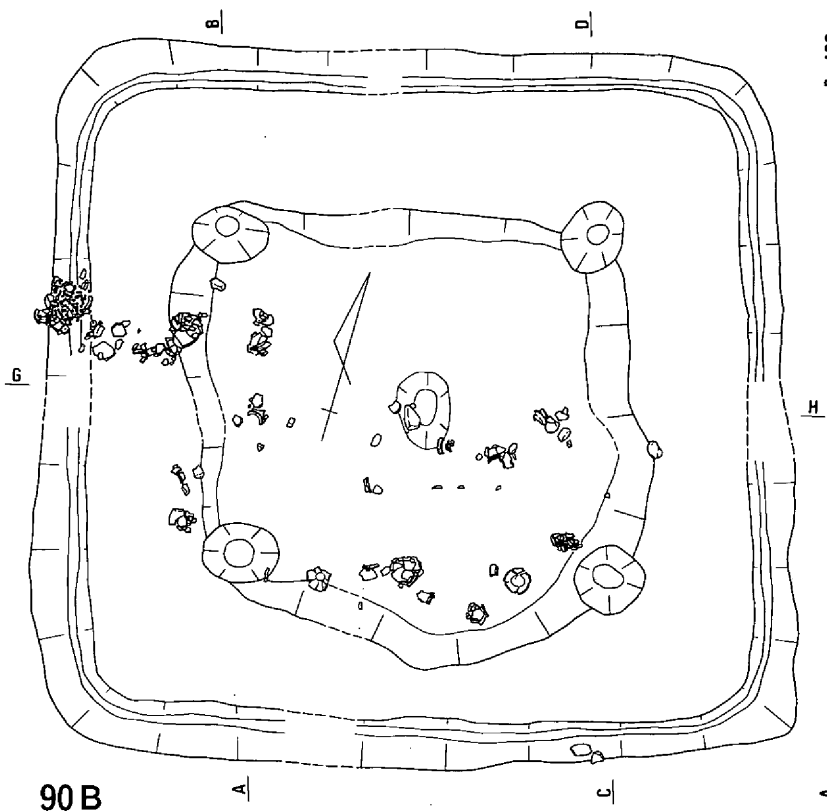


竖穴住居-88

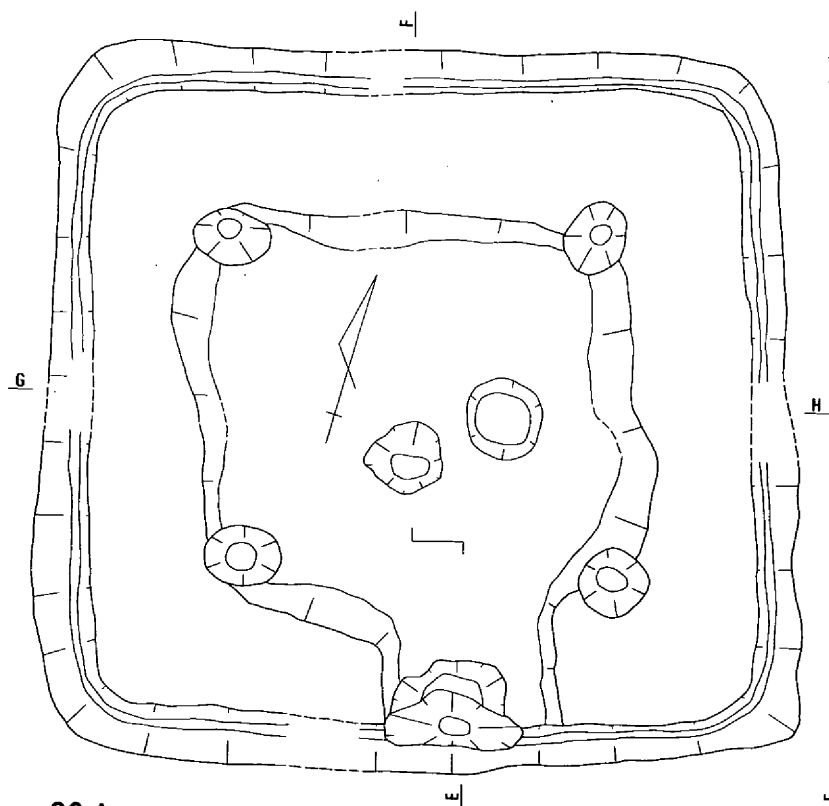
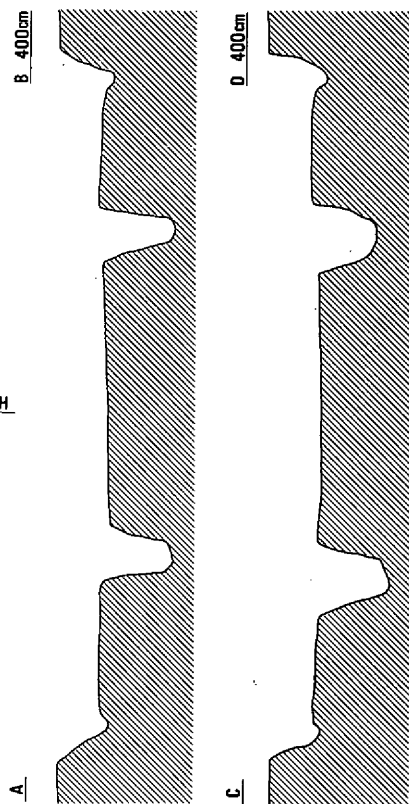


竖穴住居-89

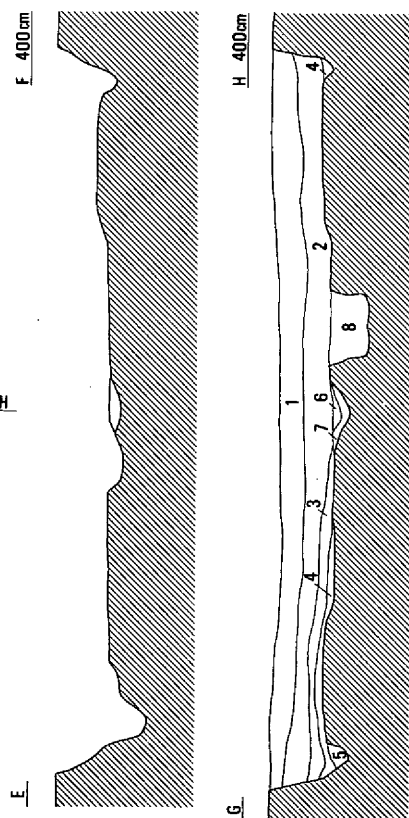




90B

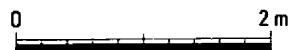


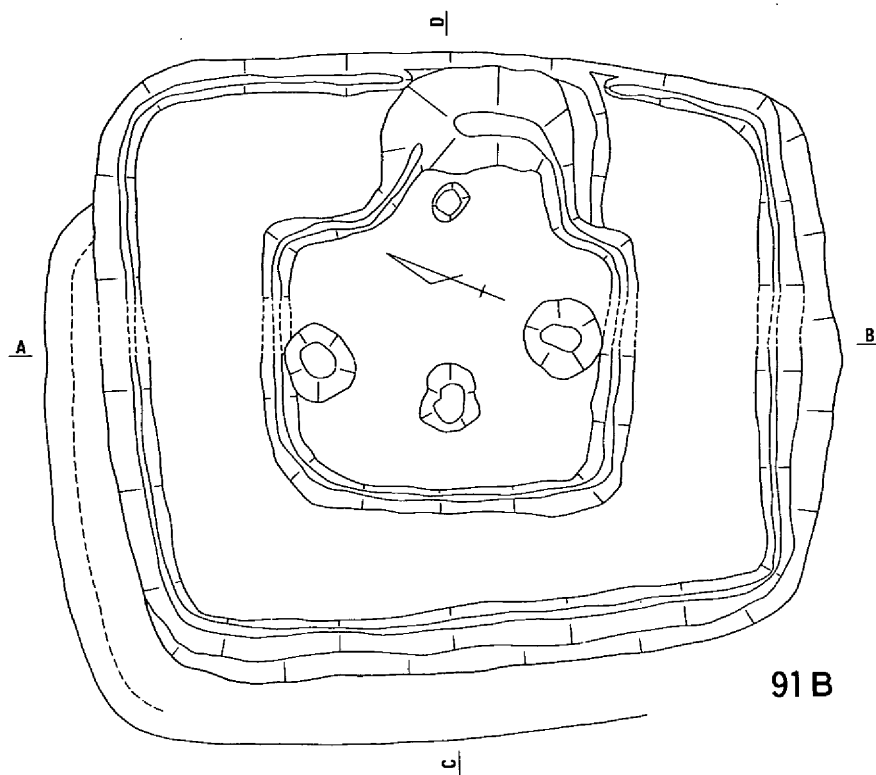
90A



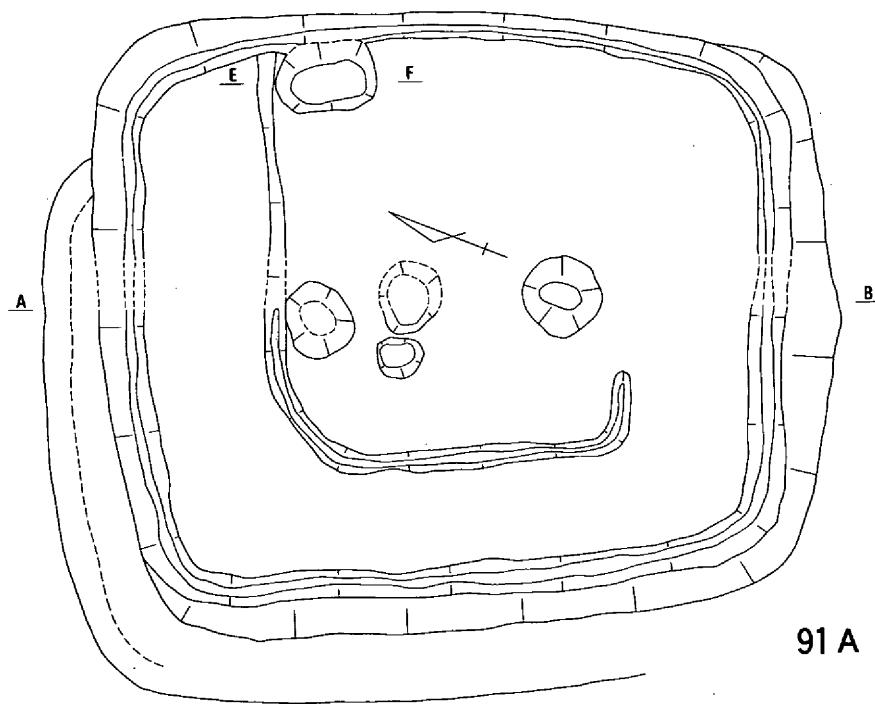
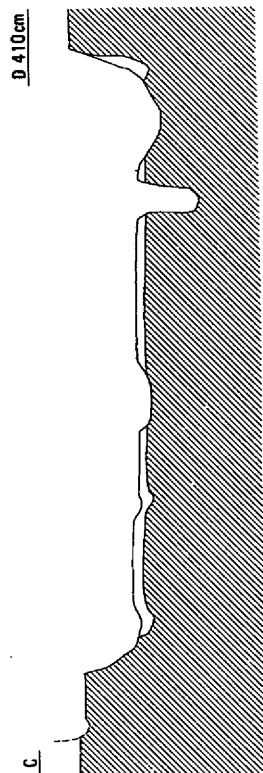
- 1. 灰茶褐色土
- 2. 暗灰褐色土
- 3. 灰褐色土
- 4. 暗灰褐色微砂
- 5. 暗茶褐色微砂
- 6. 灰褐色土 (炭含む)
- 7. 灰褐色微砂 (炭含む)
- 8. 淡灰茶褐色土

竖穴住居-90

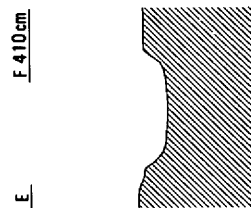




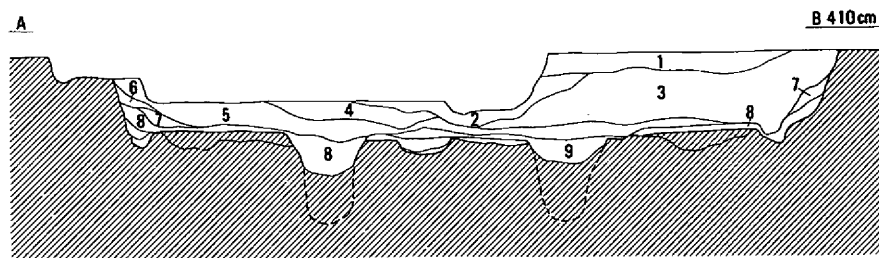
91 B



91 A

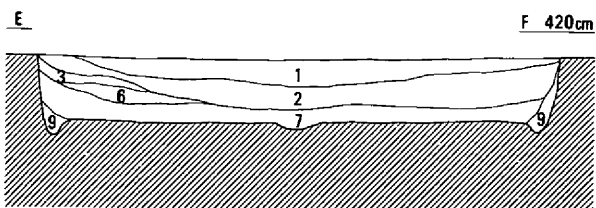
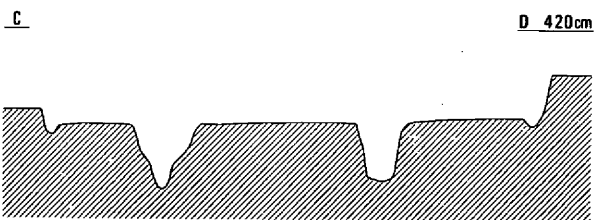
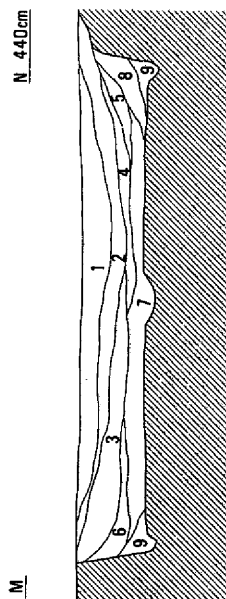
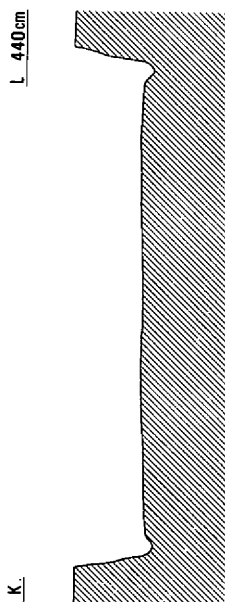
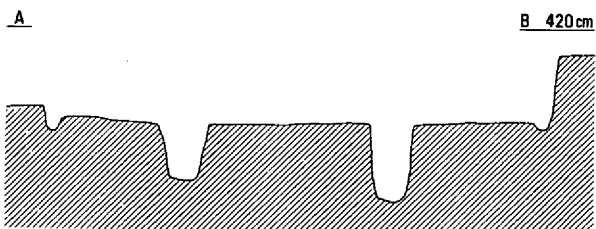
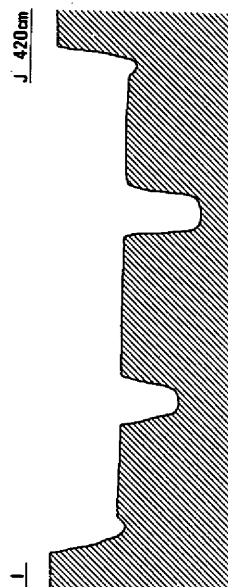
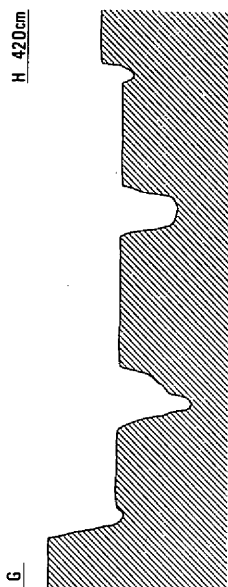
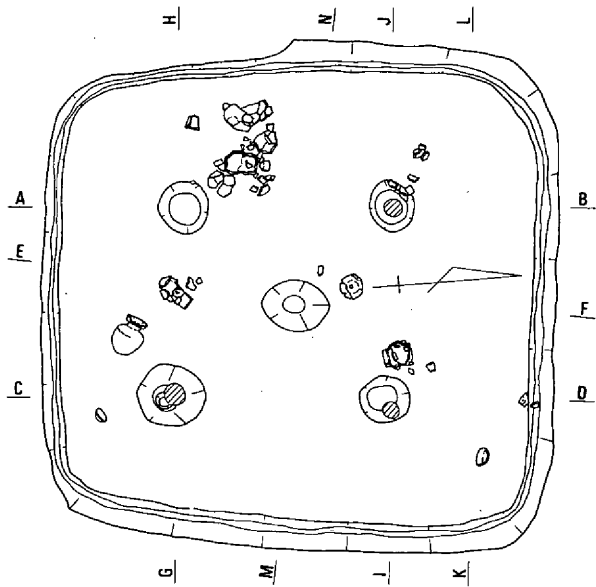


- 1. 暗灰色粘质土
- 2. 茶灰色粘质土
- 3. 暗黄灰色砂质土
- 4. 灰色土
- 5. 暗黄灰色粘质土
- 6. 黑灰色土
- 7. 灰黄色土
- 8. 黄色粘土
- 9. 黄色粘土



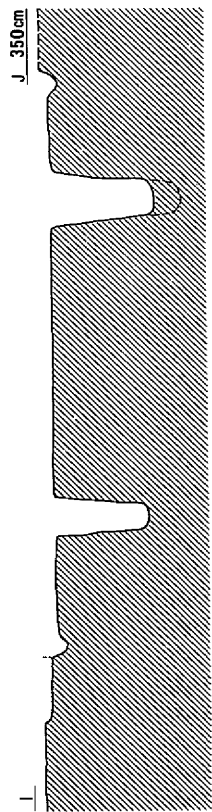
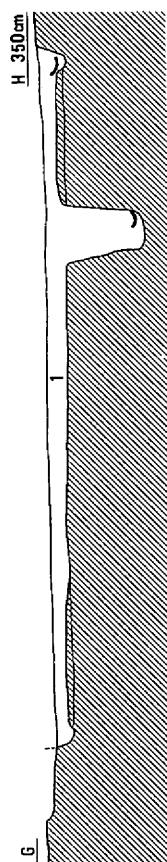
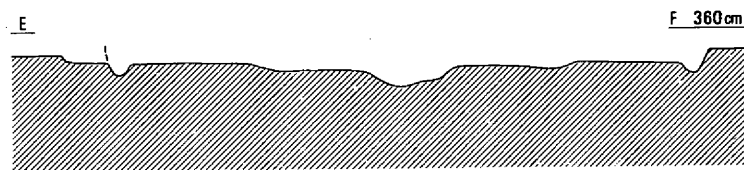
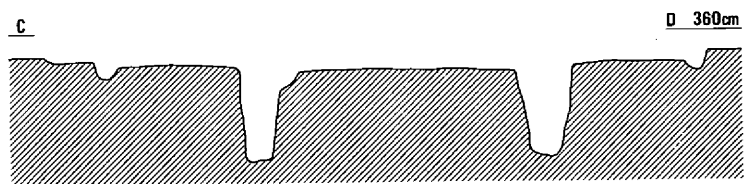
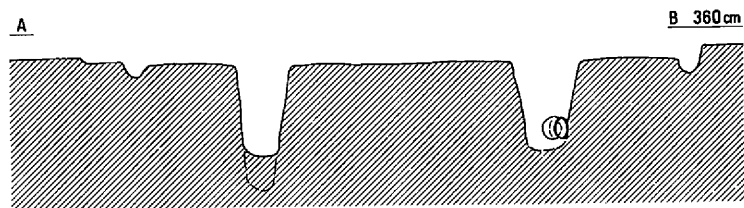
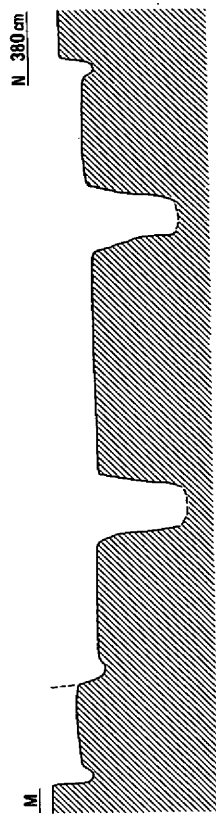
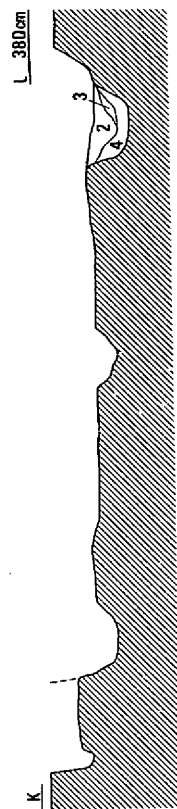
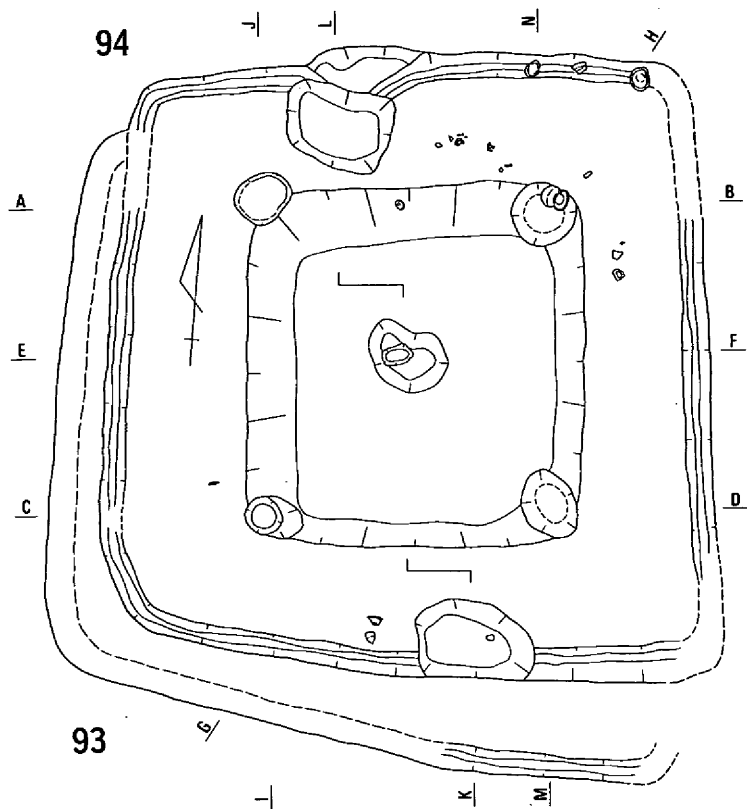
竖穴住居—91





- | | |
|-------------|------------|
| 1. 灰黄褐色粘质土層 | 6. 暗褐色砂質土 |
| 2. 灰黄褐色粘質土 | 7. 青灰褐色砂質土 |
| 3. 灰黄褐色弱粘質土 | 8. 淡暗褐色砂質土 |
| 4. 灰黄褐色砂質土 | 9. 青灰褐色砂質土 |
| 5. 灰黄褐色砂質土 | |

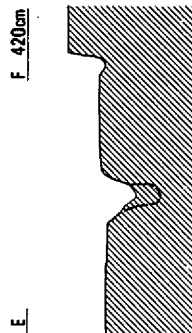
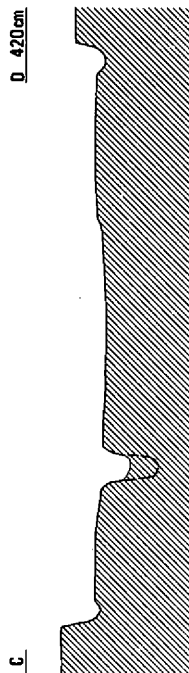
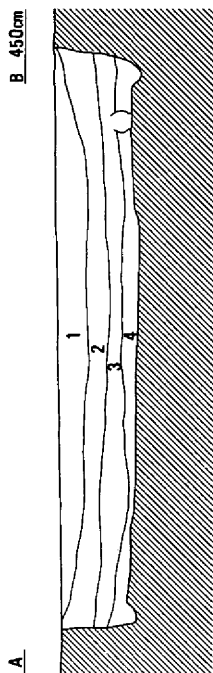
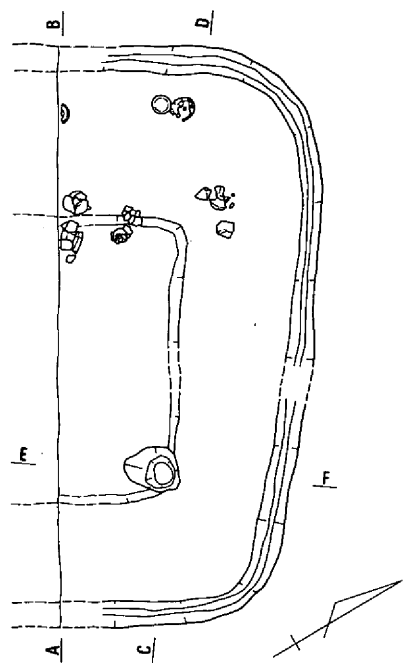




- 1. 暗黄褐色砂质土层
- 2. 暗褐色砂质土层
- 3. 黄灰褐色砂质土层
- 4. 黄灰褐色粗砂土层

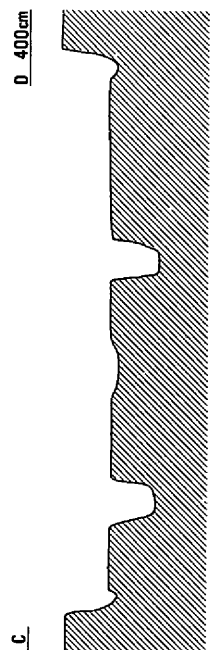
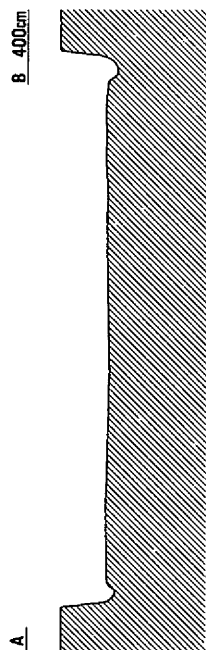
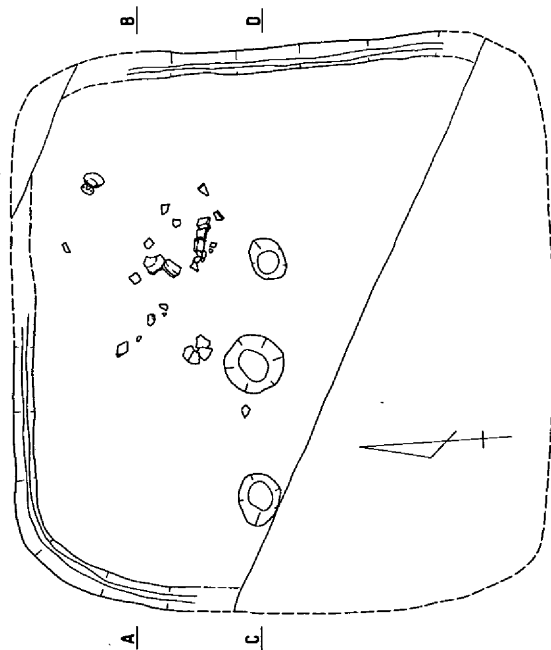
竖穴住居—93·94





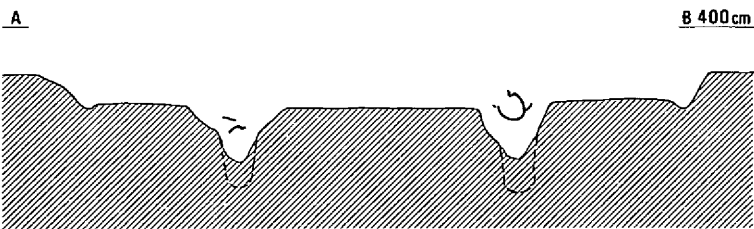
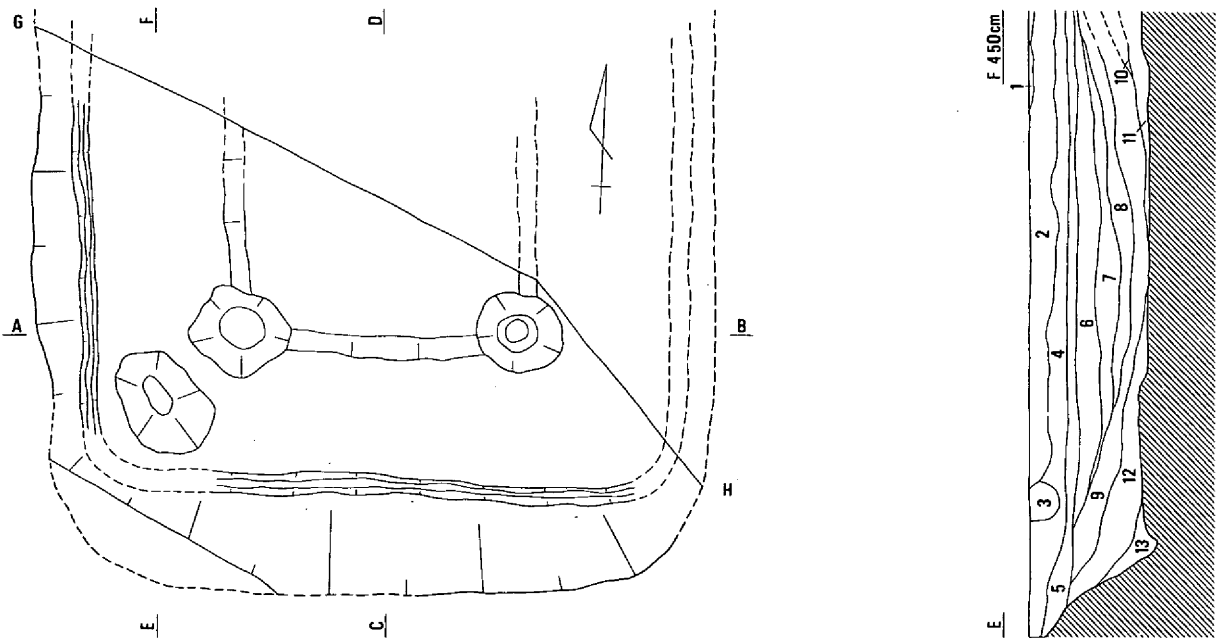
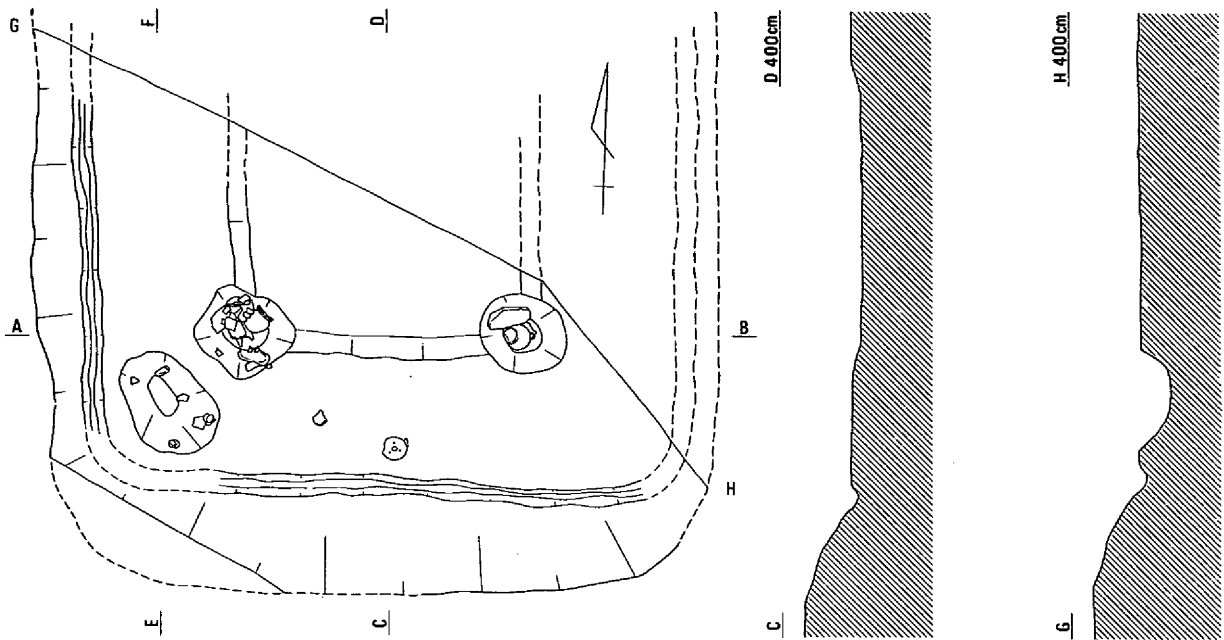
1. 灰褐色砂泥
2. 暗黄褐色砂泥
3. 暗茶褐色砂泥
4. 暗褐色泥砂
(粗砂まじり)

竪穴住居-97

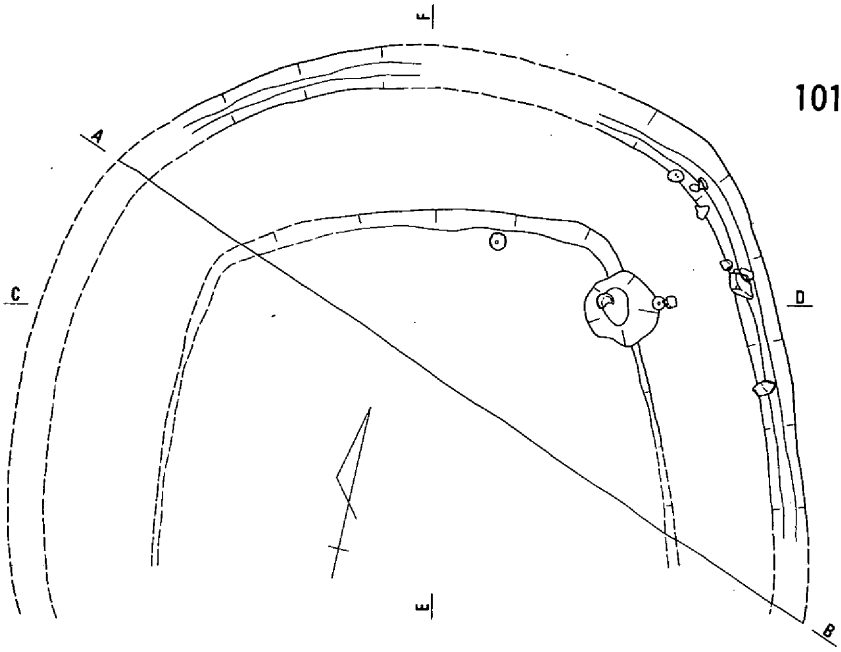


竪穴住居-98





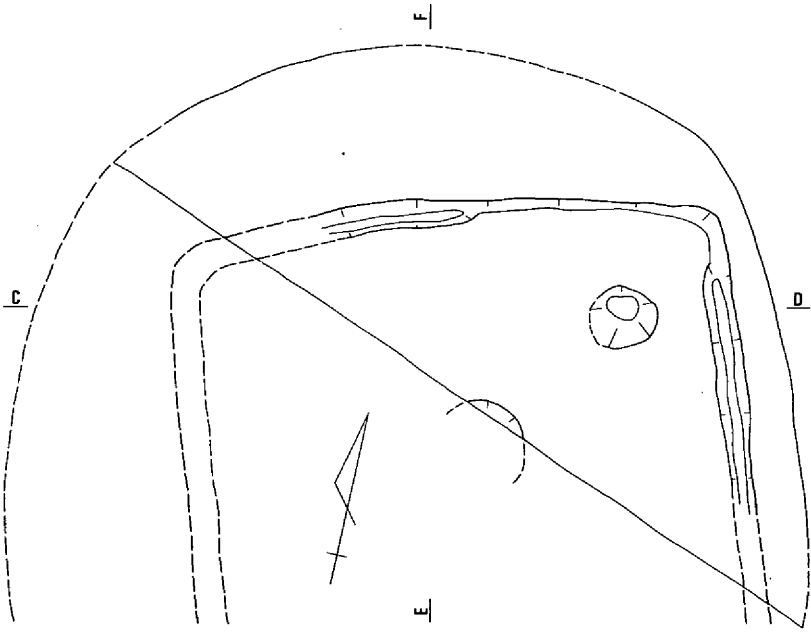
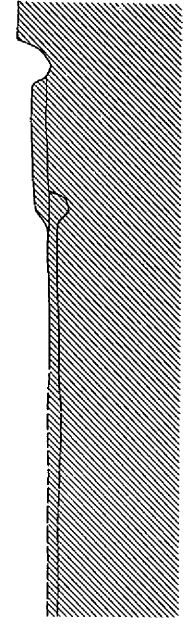
- 1. 黄色微砂
- 2. 暗灰茶色粘质微砂
- 3. 淡黄色粘质微砂
- 4. 茶灰色粘质土微砂
- 5. 茶灰色粘质微砂
- 6. 灰茶色粘质微砂
- 7. 暗黄褐色粘质微砂
- 8. 暗灰黄褐色粘质微砂
- 9. 暗茶褐灰色粘质微砂
- 10. 暗灰黄褐色粘质微砂
- 11. 暗茶褐灰色粘质微砂
- 12. 暗茶褐灰色粘质微砂
- 13. 暗茶褐色微砂



101

F 400cm

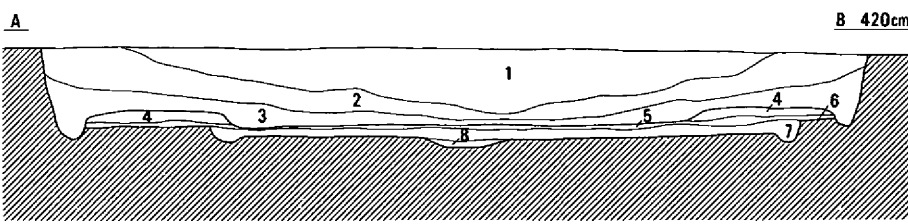
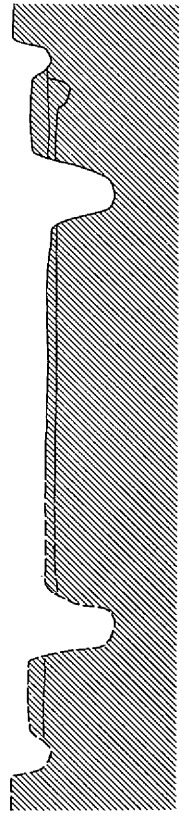
E



100

D 400cm

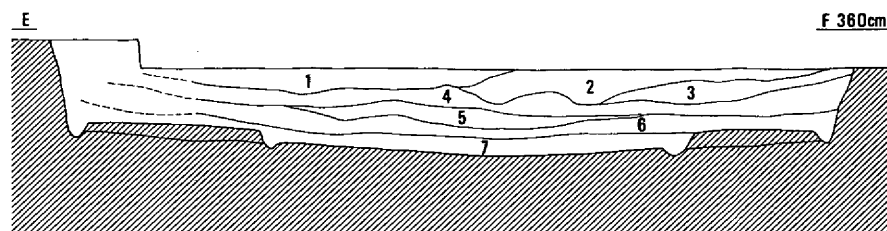
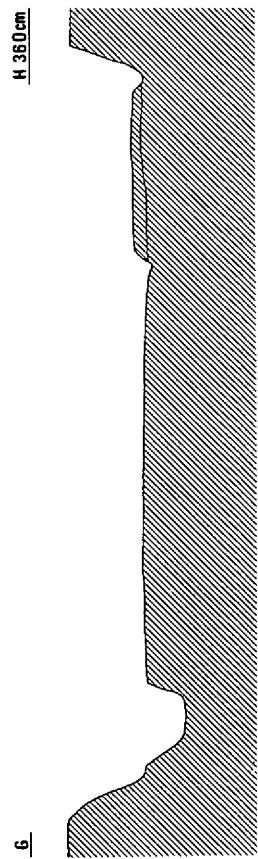
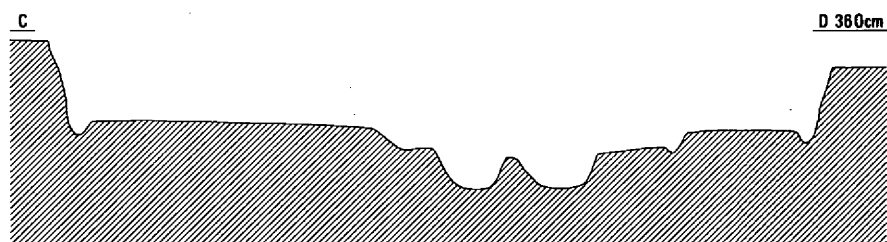
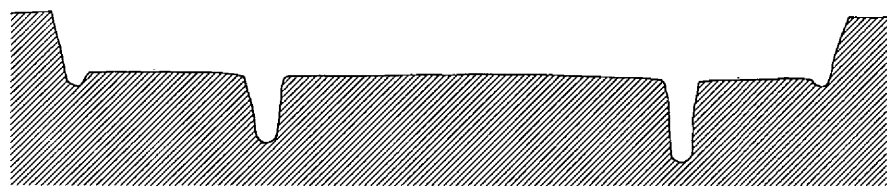
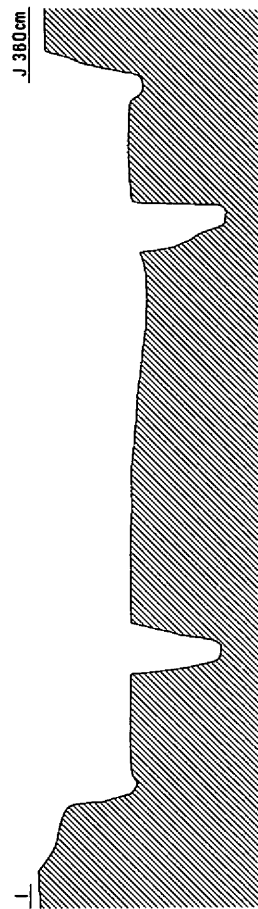
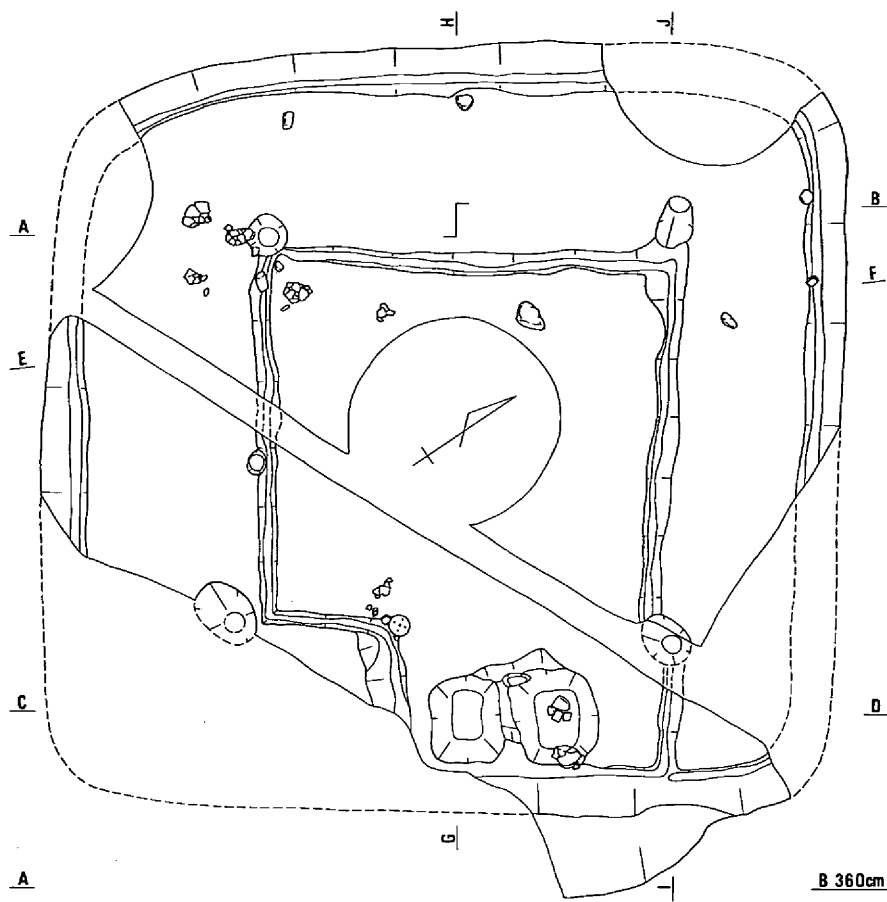
C



- 1. 暗茶褐色粘質土微砂 3. 暗青褐色粘質土微砂 5. 黑褐色微砂 7. 暗黃褐色微砂
- 2. 暗褐色粘質土微砂 4. 褐色微砂 6. 褐色微砂 8. 灰黃褐色微砂

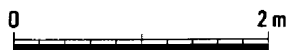


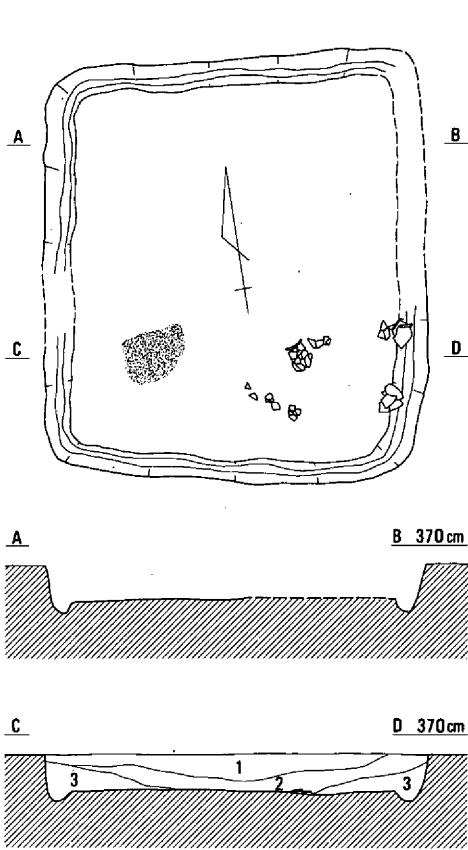
竖穴住居-100·101



- 1. 黑褐色粘質微砂 3. 明褐色細砂 5. 暗褐色粘質微砂 7. 暗褐色粘質微砂
- 2. 茶褐色粘質微砂 4. 暗黃色細砂 6. 暗茶褐色粘質微砂

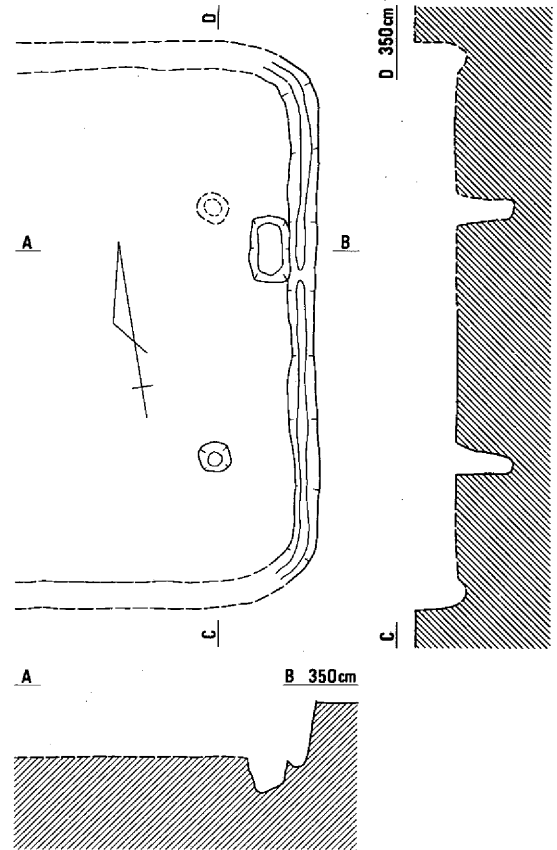
竖穴住居-102



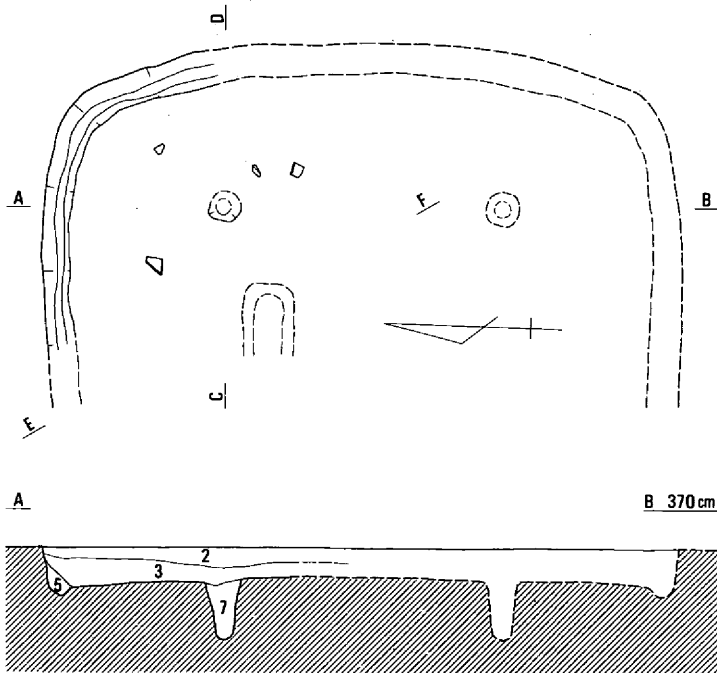


- 1. 茶褐色粘質細砂
- 2. 暗茶色粘質微砂
- 3. 黃茶色細砂

豎穴住居—103



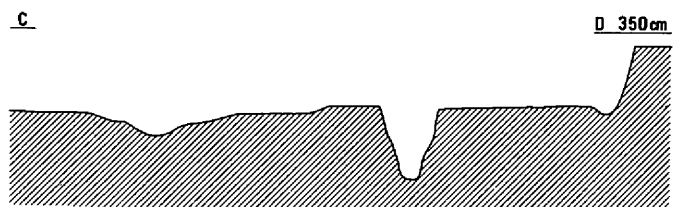
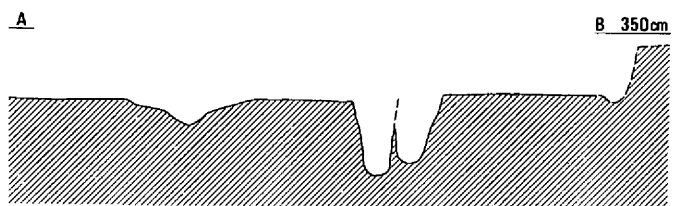
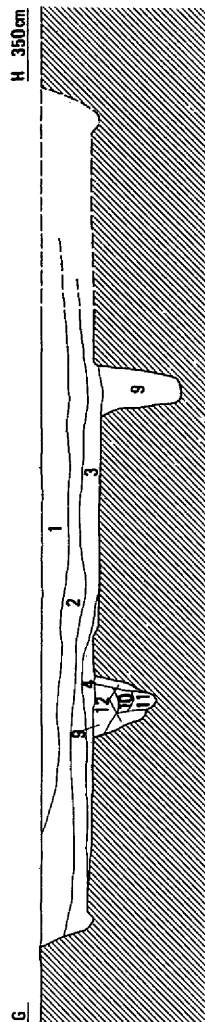
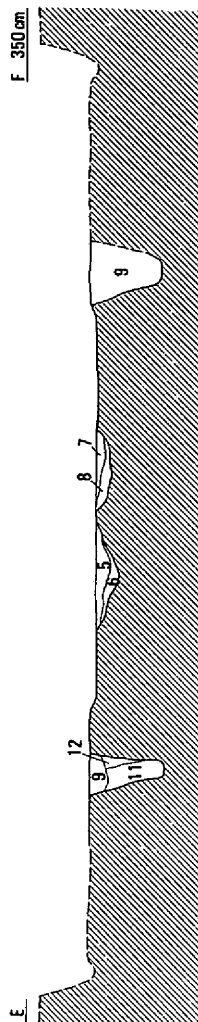
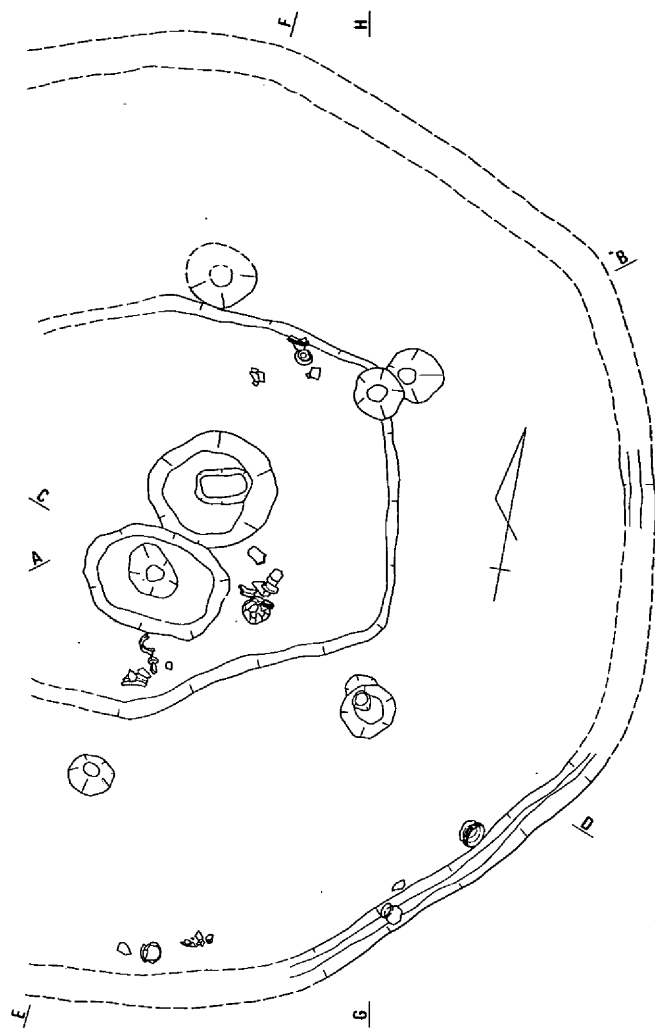
豎穴住居—104



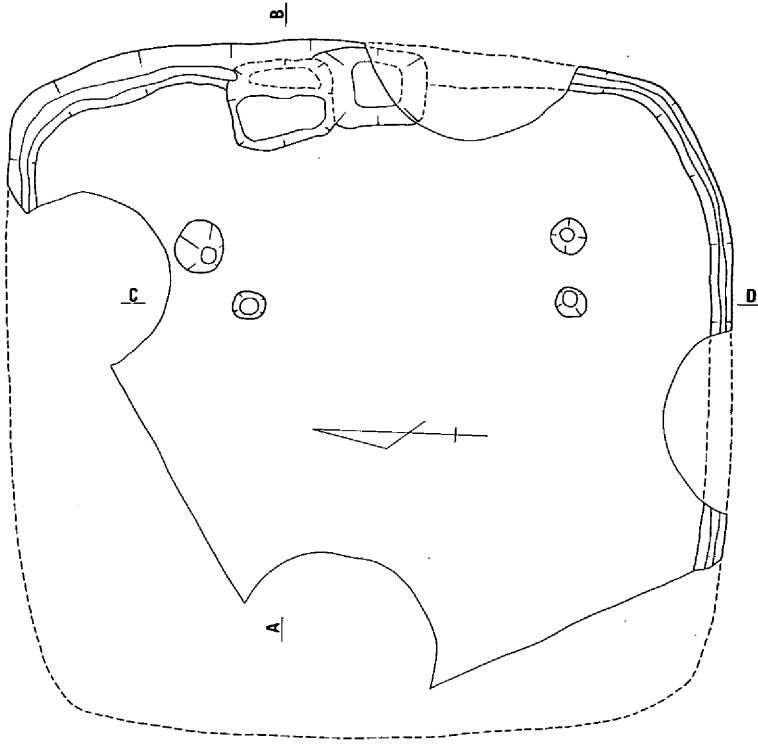
- 1. 暗茶褐色粘質土
- 2. 茶褐色粘質土
- 3. 茶褐色粘質土
- 4. 黃褐色粘質土
- 5. 暗灰茶褐色粘質土
- 6. 暗茶褐色粘質土
- 7. 暗黃褐色粘質土

豎穴住居—105

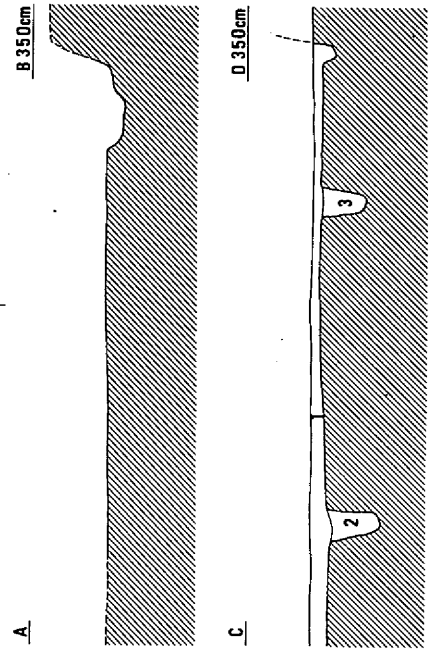




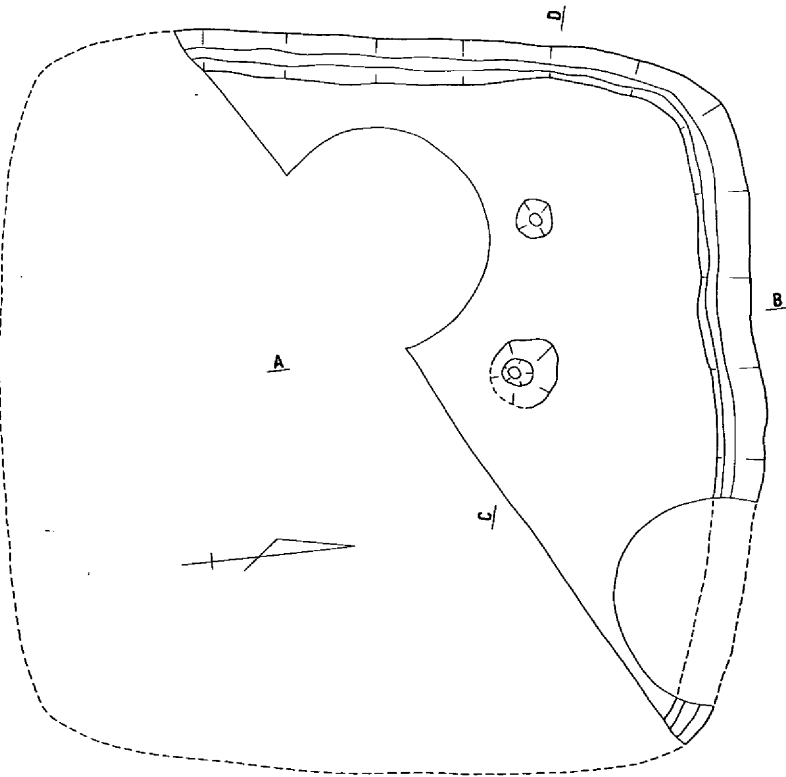
1. 茶褐色粘質土
2. 濃茶褐色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土
4. 暗灰黄褐色粘質土
(貼り床)
5. 濃茶褐色粘質土 (炭含む)
6. 黑色炭層 (焼土含む)
7. 赤褐色焼土 (炭含む)
8. 濃茶褐色粘質土 (炭含む)
9. 暗褐色粘質土
10. 黄褐色粘土
11. 暗茶褐色粘質土
12. 暗茶褐色粘質土 (地山土含む)



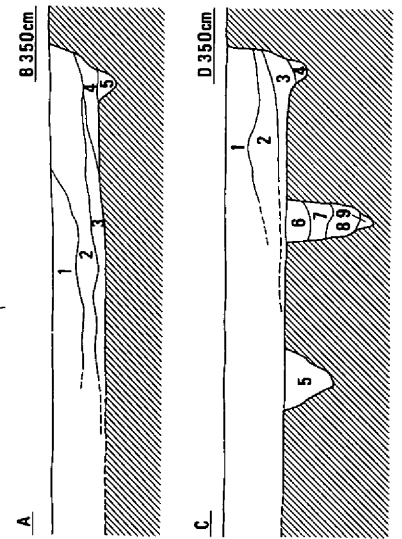
竖穴住居-107



1. 暗灰茶色粘质土 (地山土を含む)
2. 暗茶褐色粘质土
3. 暗褐色粘质土

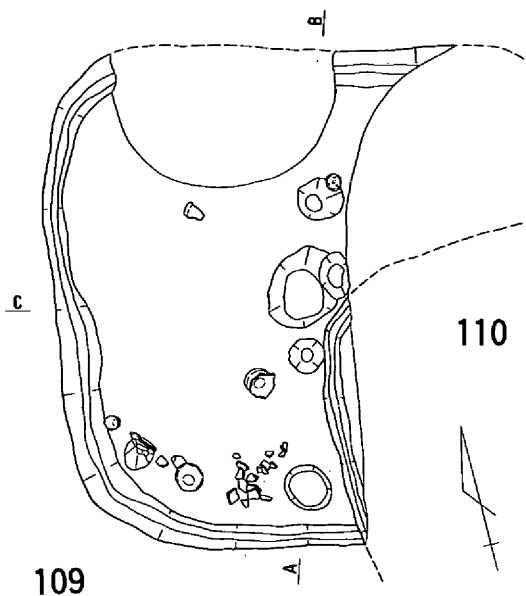


竖穴住居-108



1. 明茶褐色粘质土
2. 茶褐色粘质土 (炭含む)
3. 黄灰茶褐色粘质土
4. 黑茶褐色粘质土 (炭含む)
5. 淡茶色粘质土
6. 黄茶褐色粘质土
7. 暗茶褐色粘质土
8. 暗茶褐色粘质土
9. 灰茶褐色粘土 (柱痕跡)

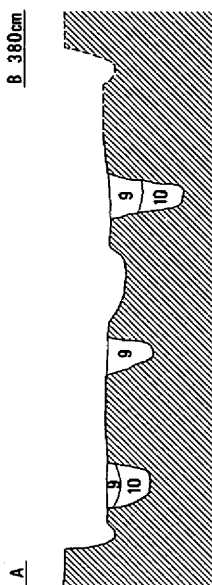




109

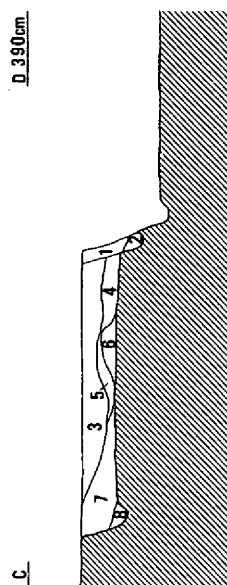
110

竖穴住居-109·110



B

A

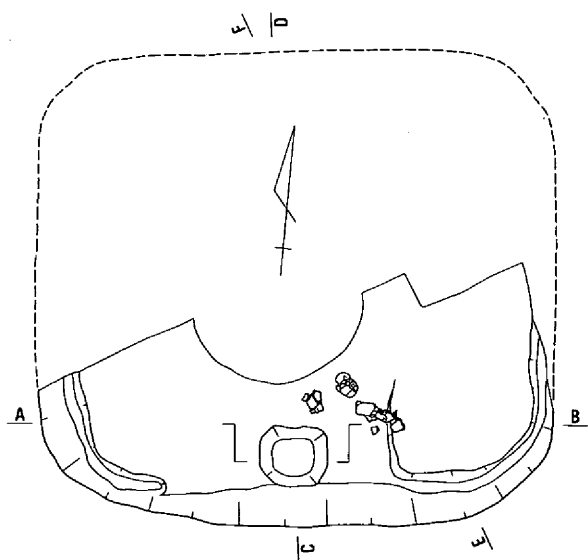


D

C

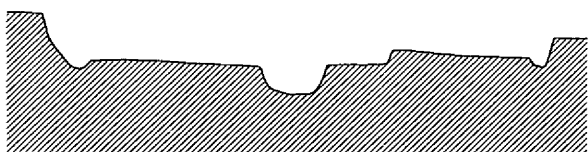
1. 暗茶褐色粘質土
2. 茶褐色粘質土
3. 暗黄褐色粘質土
4. 暗黄褐色粘質土
5. 暗黄褐色粘質土

6. 灰茶褐色粘質土 (炭含む)
7. 暗茶褐色粘質土
8. 暗灰茶褐色粘質土
9. 黄茶褐色粘質土
10. 黄褐色粘質土



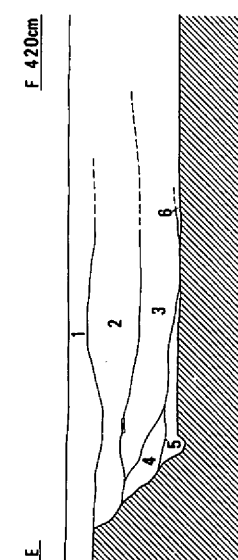
A

B 380cm



D 380cm

C



F 420cm

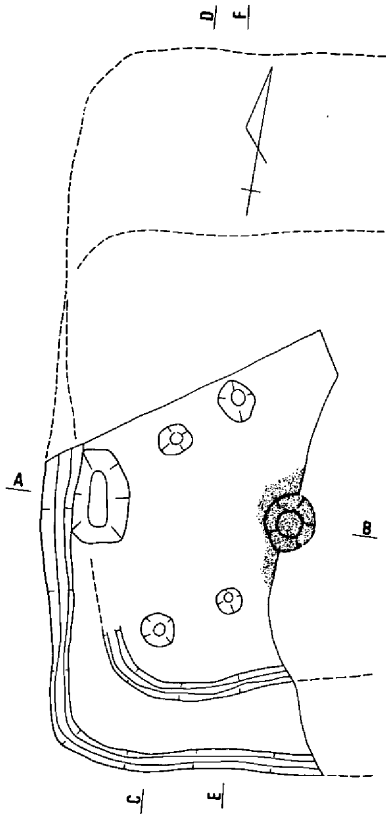
E

1. 暗褐色粘質土 (土器含む)
2. 濃黄褐色粘質土
3. 暗灰茶褐色粘質土 (土器含む)

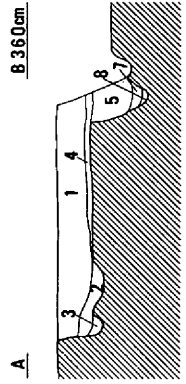
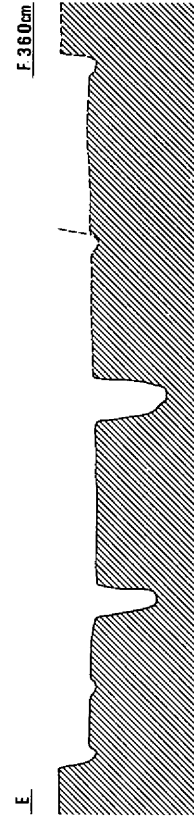
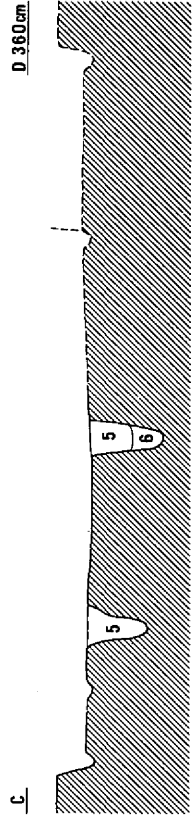
4. 茶褐色粘質土
5. 灰茶褐色粘質土
6. 灰茶褐色粘質土

竖穴住居-111

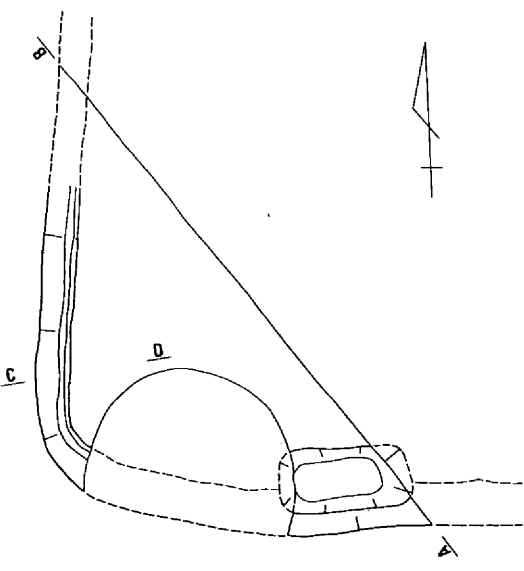




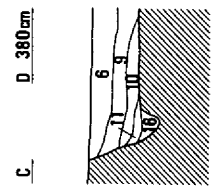
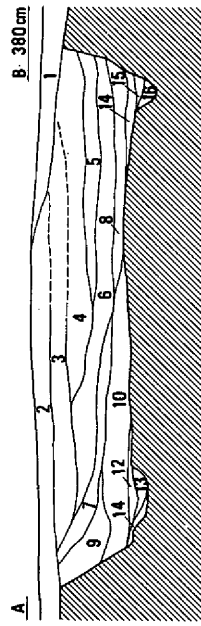
豎穴住居-112



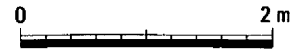
- 1. 暗茶褐色粘質土 (地山土含む)
- 2. 灰褐色粘質土
- 3. 黄褐色微砂混じり粘質土
- 4. 黄褐色砂質土 (貼り床)
- 5. 暗茶褐色粘質土
- 6. 暗茶褐色微砂粘質土
- 7. 黑色炭層
- 8. 暗灰色微砂

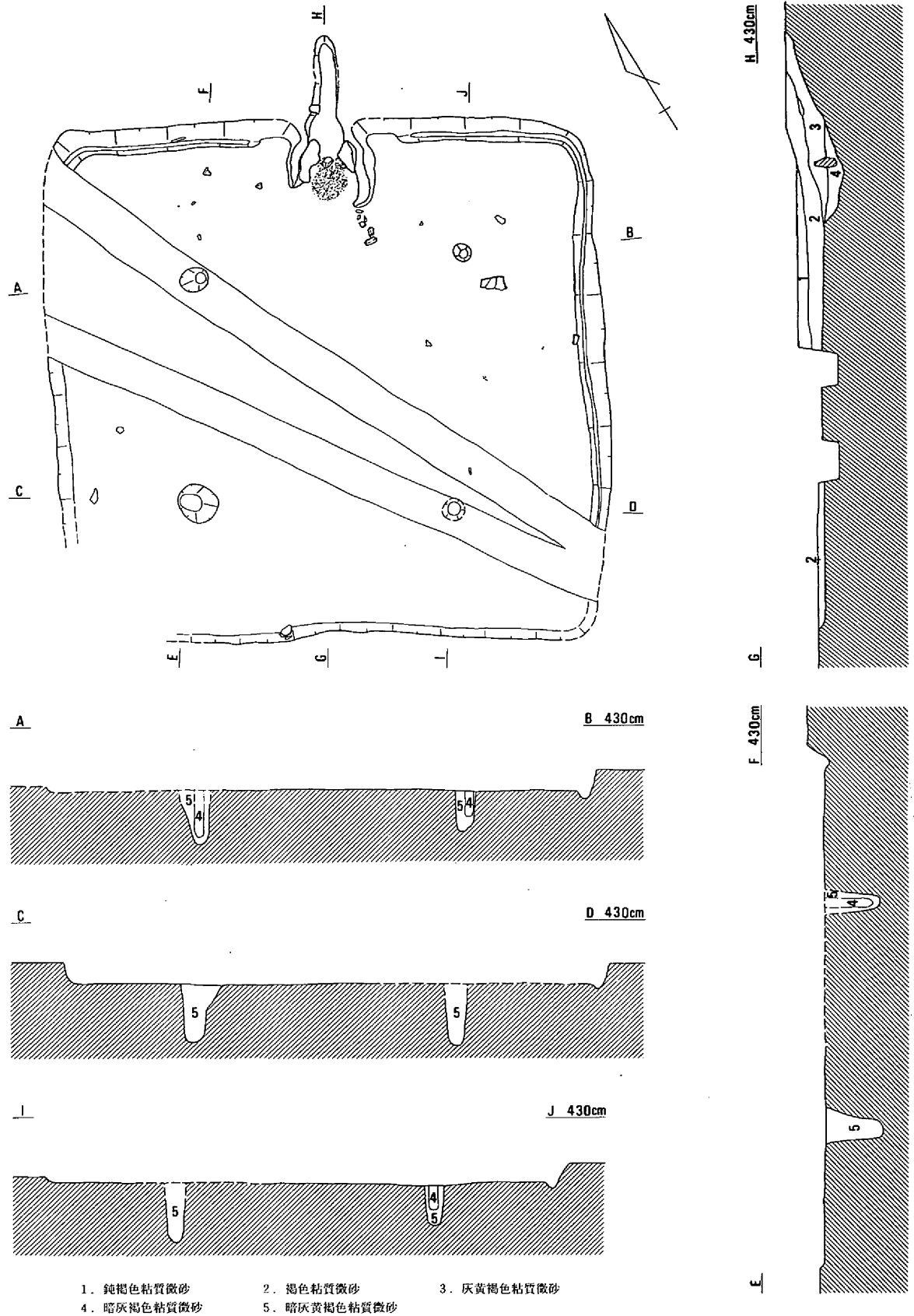


豎穴住居-113



- 1. 青白灰色微砂
- 2. 茶褐色粘質土
- 3. 濃茶褐色粘質土
- 4. 薄茶色粘質土
- 5. 暗黄褐色粘質土
- 6. 茶褐色粘質土
- 7. 茶褐色粘質土
- 8. 灰茶褐色粘質土
- 9. 暗灰茶褐色粘質土
- 10. 暗茶褐色粘質土
- 11. 黑茶色粘質土
- 12. 暗灰茶褐色砂粘質土
- 13. 暗灰褐色砂粘質土
- 14. 暗灰茶褐色粘質土
- 15. 黑灰茶色粘質土
- 16. 黑茶色微砂粘質土

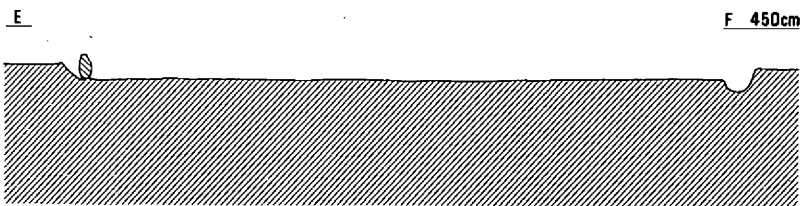
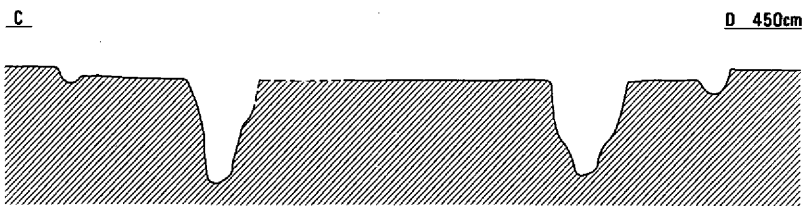
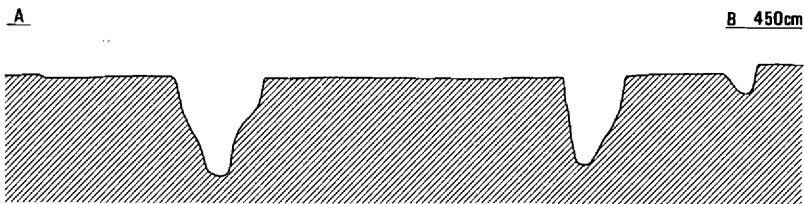
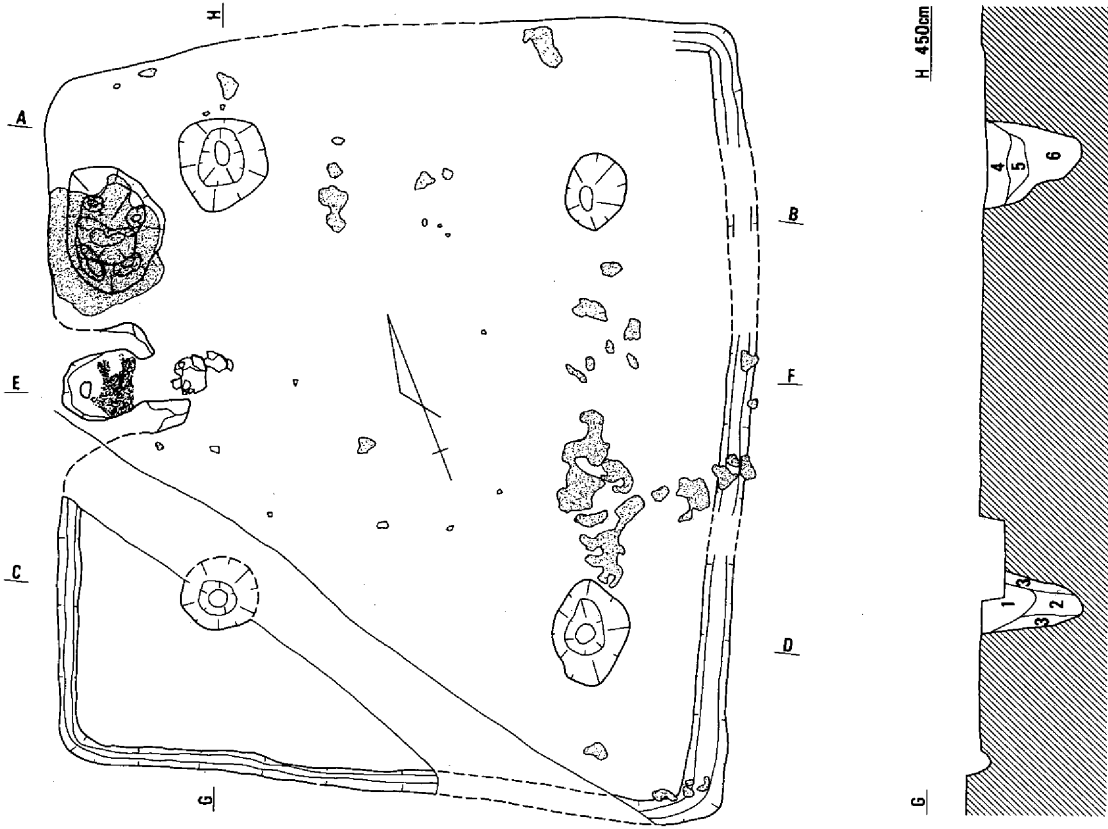




- 1. 鈍褐色粘質微砂
- 2. 褐色粘質微砂
- 3. 灰黃褐色粘質微砂
- 4. 暗灰褐色粘質微砂
- 5. 暗灰黃褐色粘質微砂

嬰穴住居-114

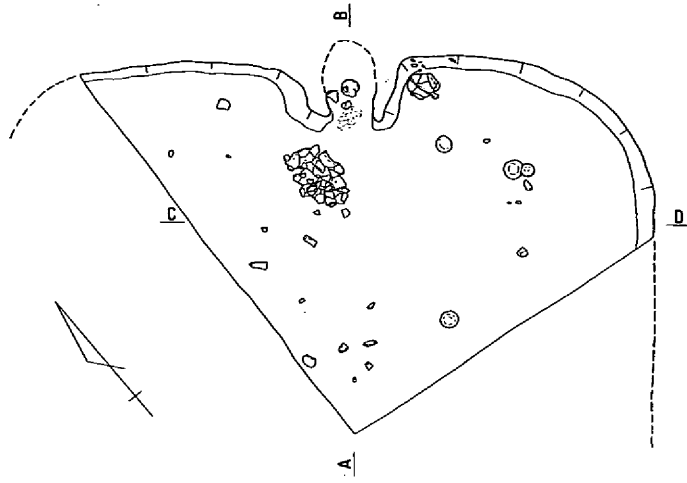




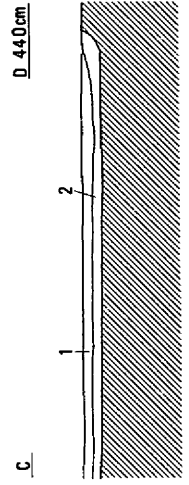
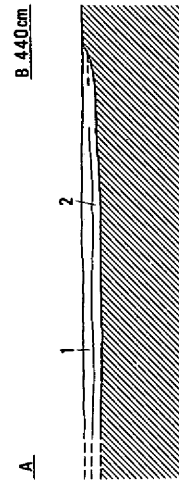
- 1. 暗赤褐色粘質土
- 2. 灰褐色砂質土
- 3. 暗灰褐色砂質土
- 4. 暗赤褐色粘質土
- 5. 暗黃灰色砂質土
- 6. 暗赤褐色砂質土



豎穴住居—115



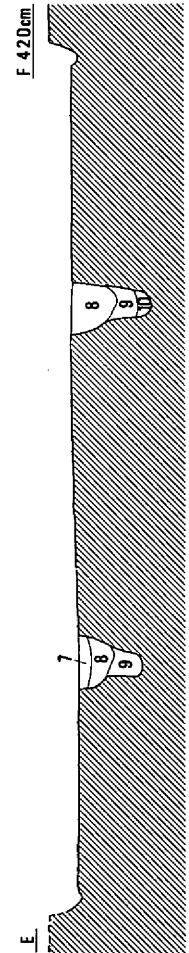
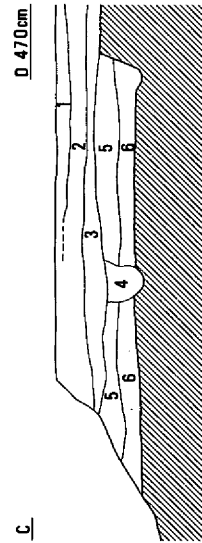
竖穴住居-116



1. 青灰褐色粘质土 2. 灰黄褐色粘质土

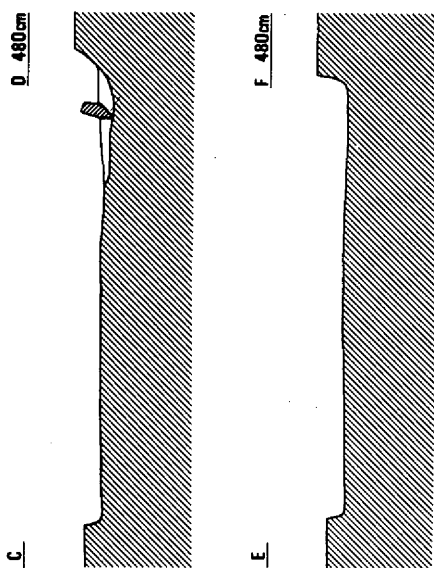
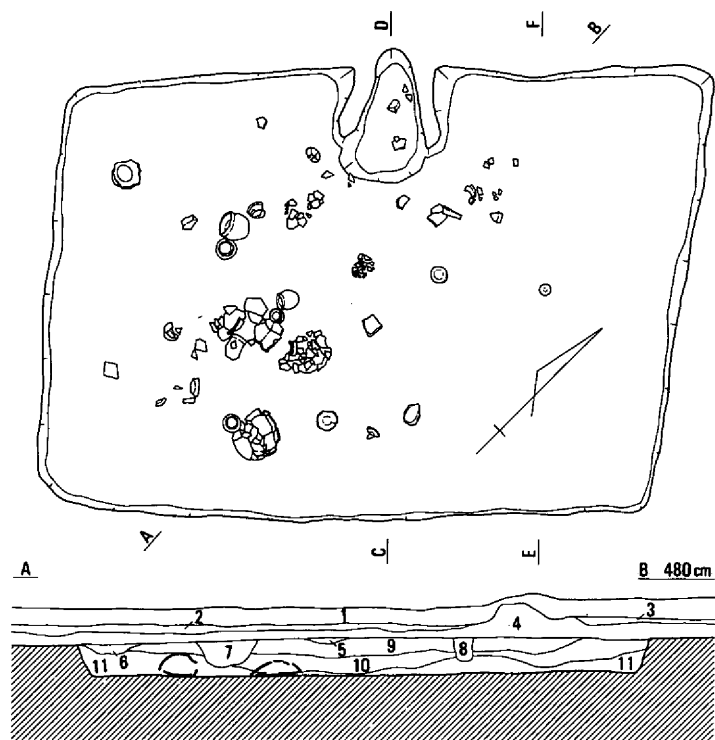


竖穴住居-117



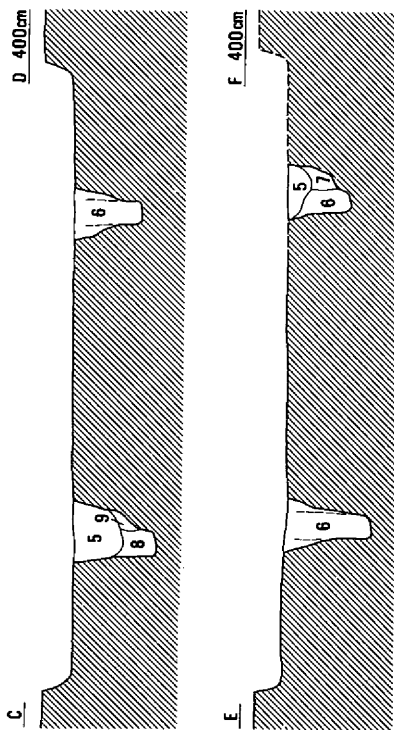
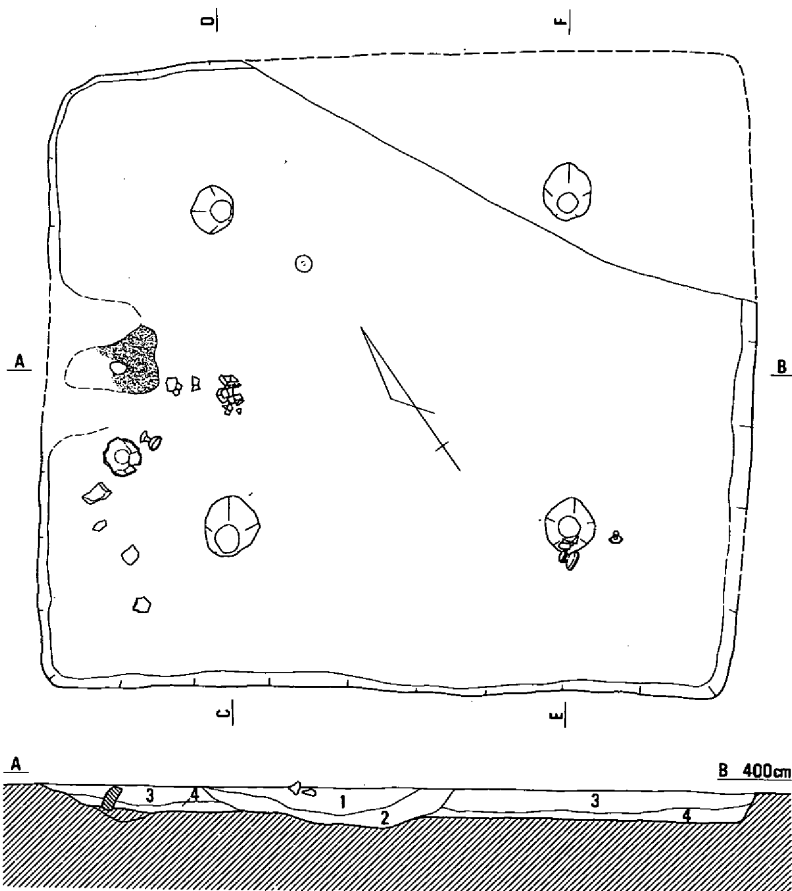
- | | | | |
|---------------|------------------|-----------|------------|
| 1. 灰黑色土 (耕作土) | 4. 黄茶褐色粘质土 | 7. 暗茶褐色土 | 9. 黄褐色砂质土 |
| 2. 黄茶色砂质土 | 5. 茶褐色粘质土 (烧土含七) | 8. 褐色微粘质土 | 10. 灰褐色砂质土 |
| 3. 黄褐色粘质土 | 6. 茶褐色粘质土 | | |





- 1. 灰黑色土
- 2. 灰茶褐色土
- 3. 茶褐色土
- 4. 茶褐色土
- 5. 明茶褐色砂質土
- 6. 暗褐色土
- 7. 明褐色土
- 8. 明褐色土 (柱穴)
- 9. 茶褐色微砂質土
- 10. 茶褐色微砂質土
- 11. 茶褐色微砂質土

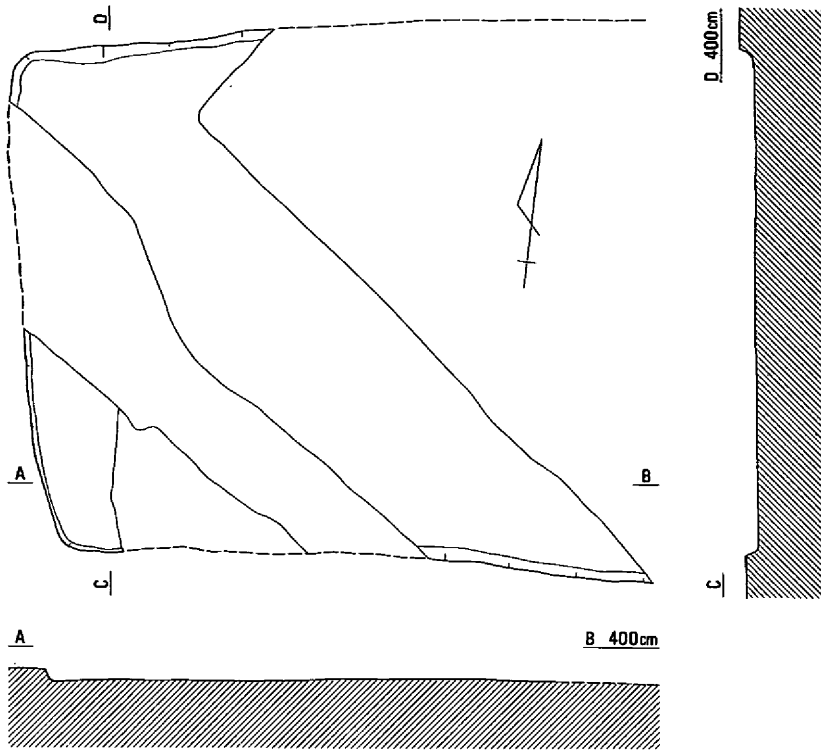
豎穴住居-118



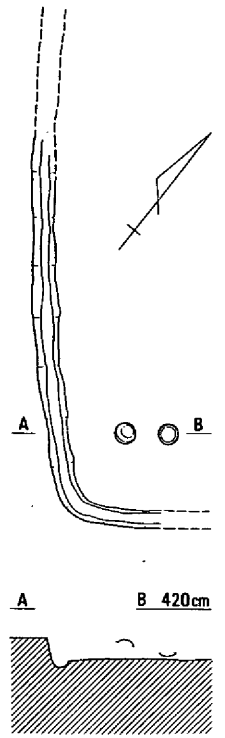
- 1. 黑茶褐色粘質土 (溝埋土)
- 2. 淡灰褐色粘質土 (溝埋土)
- 3. 淡茶褐色粘質土
- 4. 茶褐色粘質土

豎穴住居-119

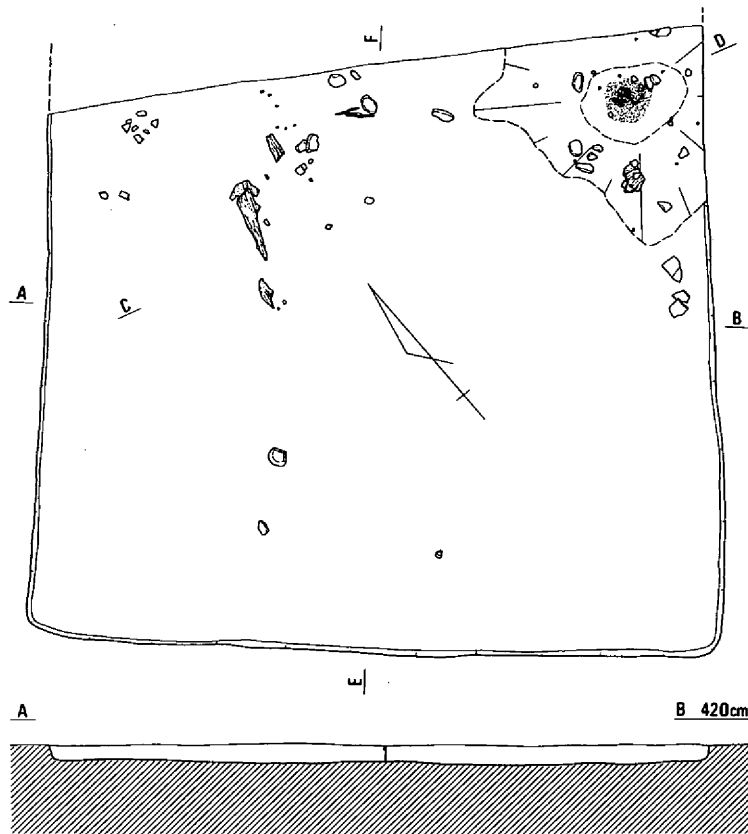




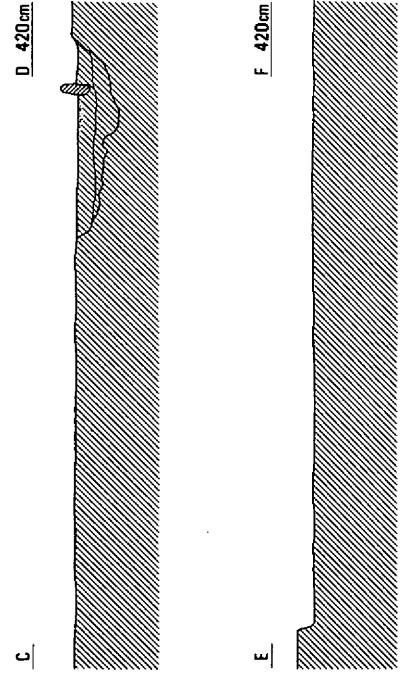
竖穴住居-120



竖穴住居-121

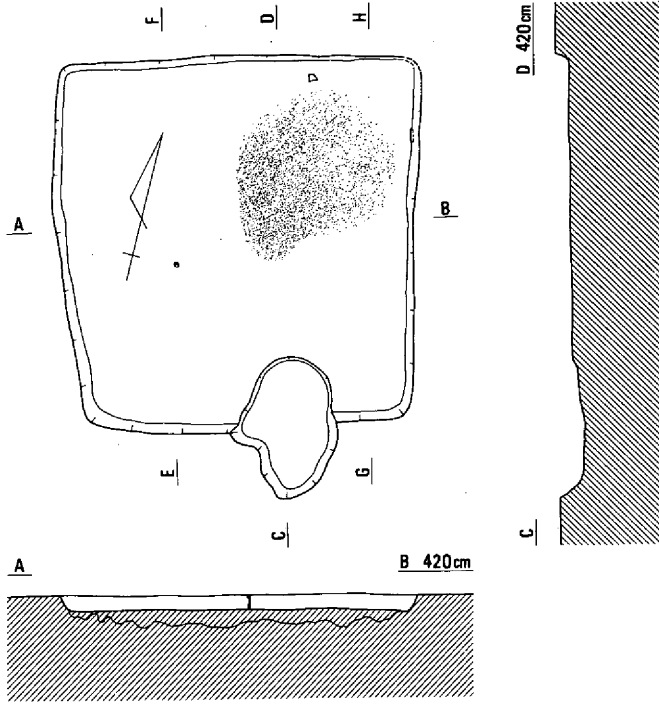


竖穴住居-122



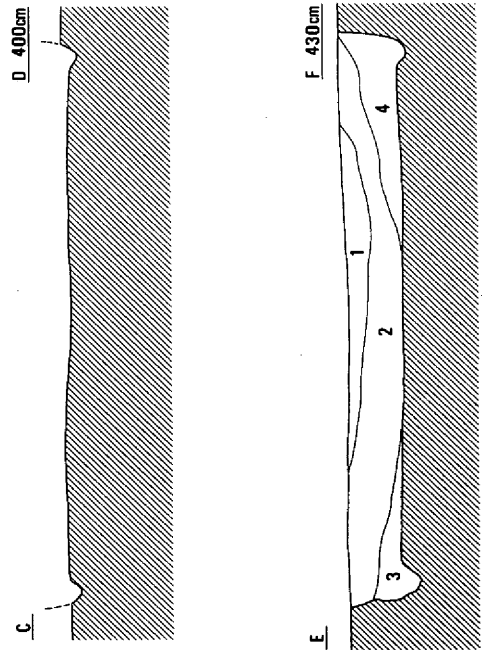
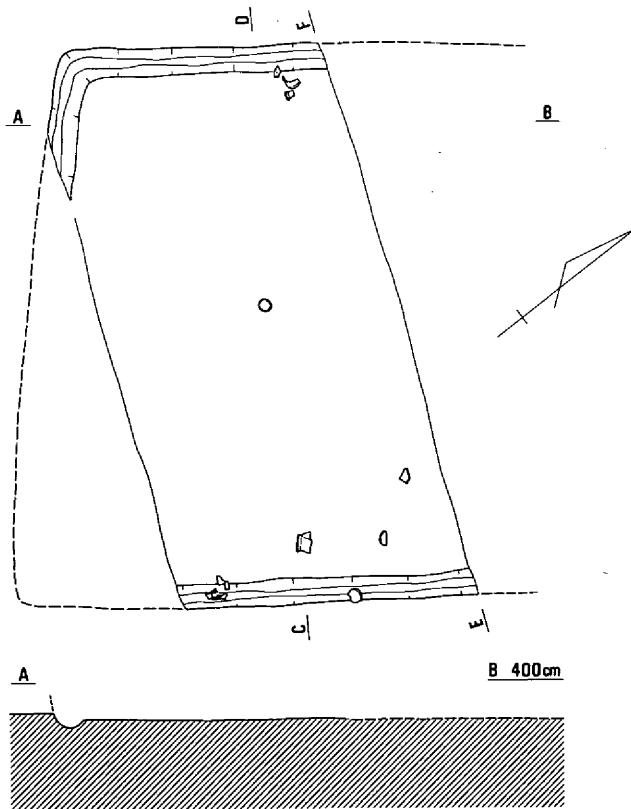
1. 暗茶灰色粘質微砂





1. 暗茶灰色粘質微砂

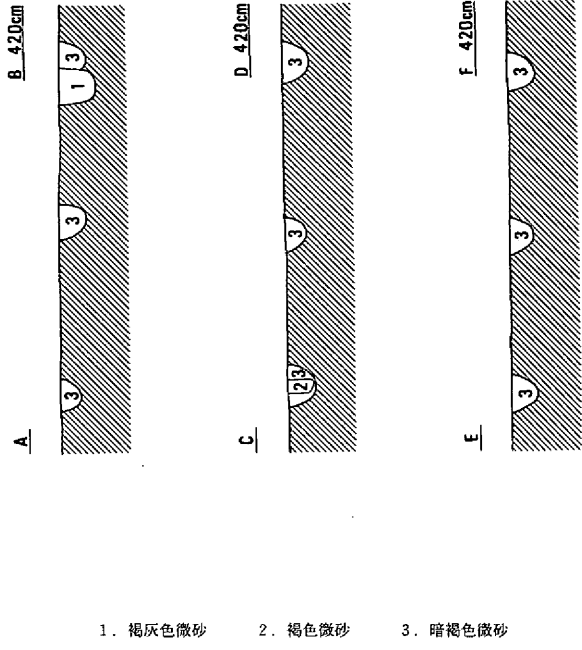
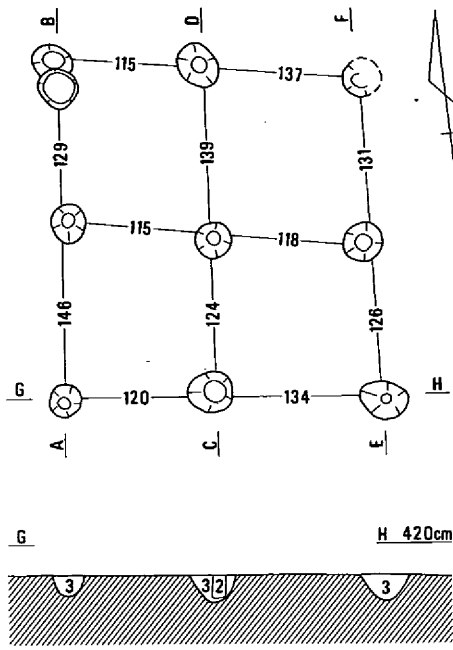
豎穴住居-123



1. 暗黃褐色粘質微砂土 3. 暗褐色微砂土
2. 暗茶褐色粘質微砂土 4. 暗褐色微砂土

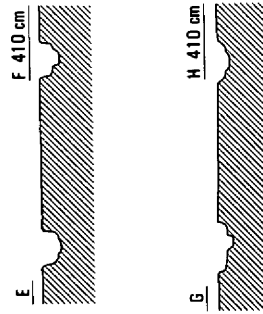
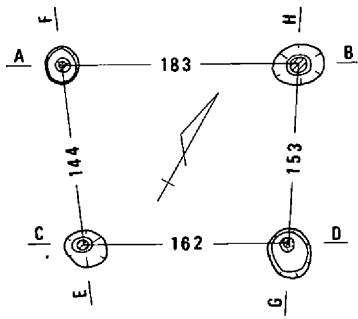
豎穴住居-124





- 1. 褐灰色微砂
- 2. 褐色微砂
- 3. 暗褐色微砂

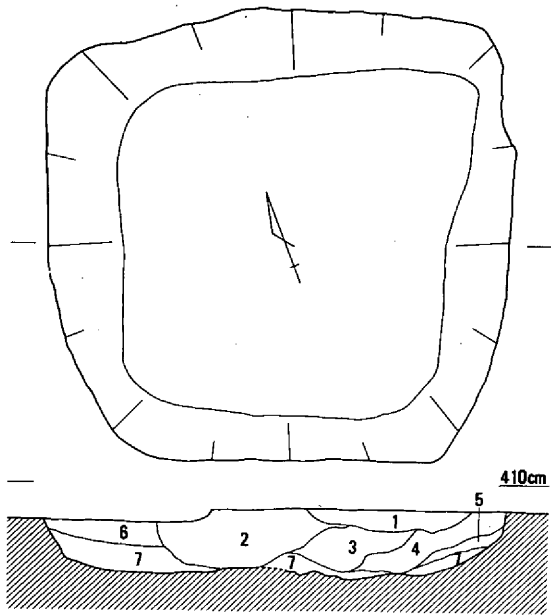
掘立柱建物一 2



- 1. 暗灰茶色粘質微砂
- 2. 暗茶灰色粘質微砂

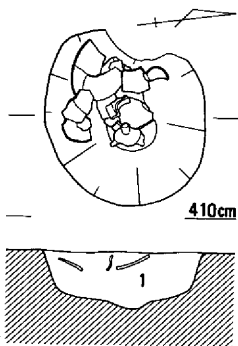
掘立柱建物一 3





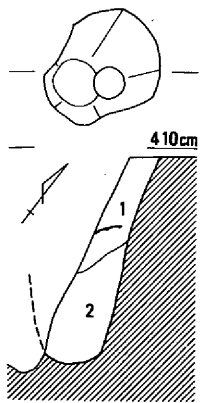
- 1. 暗灰褐色砂質土
- 2. 暗茶褐色砂質土
- 3. 黄茶褐色砂質土
- 4. 暗灰褐色砂質土
- 5. 暗灰褐色粘質土
- 6. 暗灰茶色砂質土
- 7. 黄褐色砂質土

土壤-109



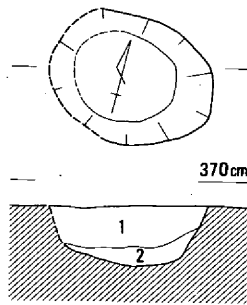
- 1. 暗褐色微砂

土壤-111



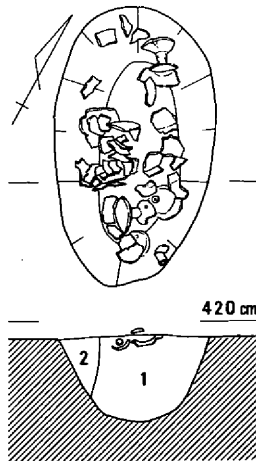
- 1. 黑灰色土
- 2. 褐色微砂

土壤-110



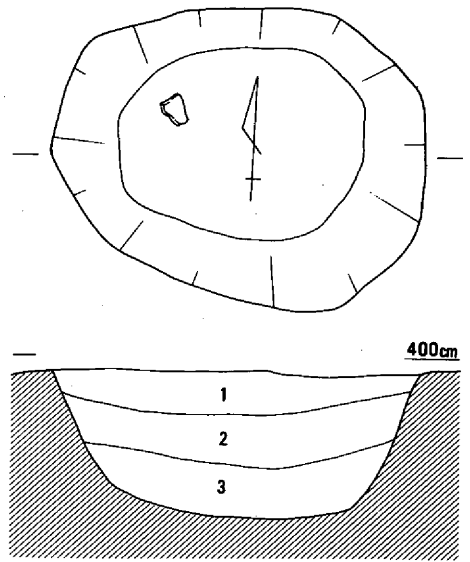
- 1. 暗茶褐色粘質土
- 2. 濃茶色微砂

土壤-113



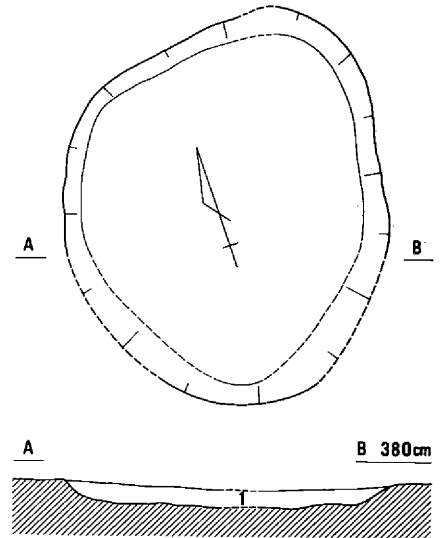
- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 茶色粘質土

土壤-116



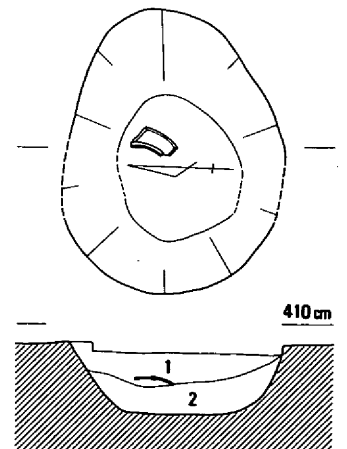
- 1. 暗灰褐色泥砂
- 2. 黑茶褐色砂質土
- 3. 暗褐色砂質土

土壤-112



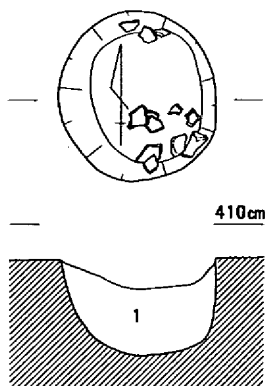
- 1. 濃茶褐色粘質土 (炭を多く含む)

土壤-114

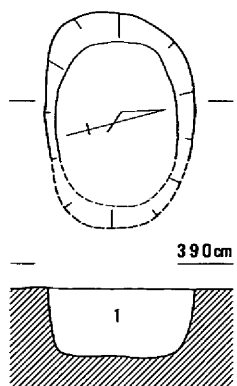


- 1. 茶褐色粘質土
- 2. 茶褐色微砂質土

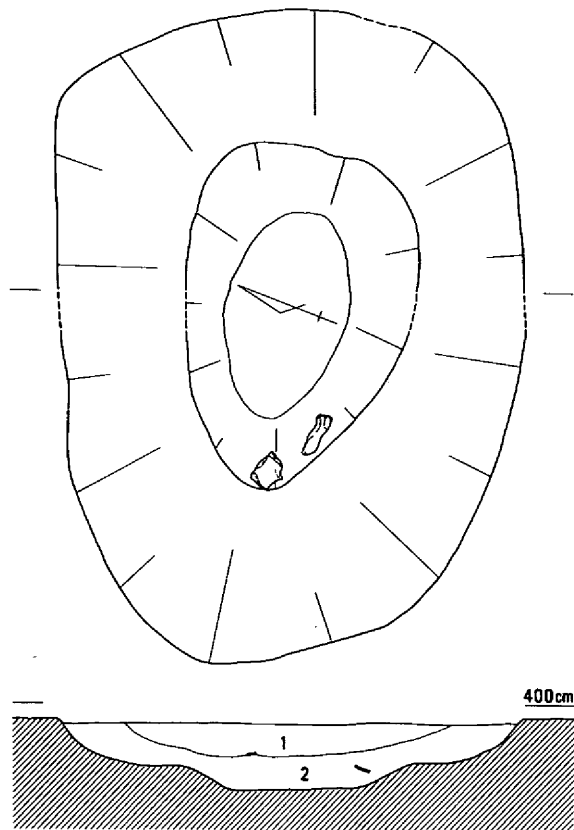
土壤-115



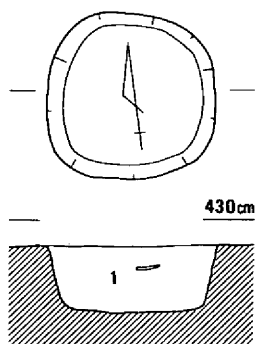
1. 暗茶褐色粘質土
土壤-117



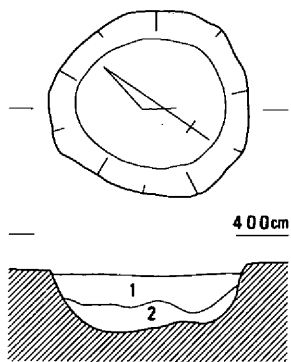
1. 茶褐色粘質土
土壤-118



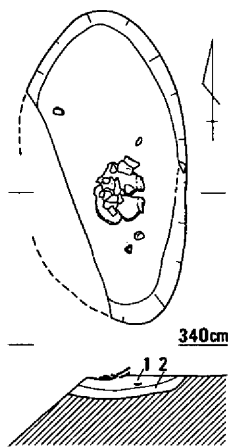
1. 暗褐色粘質土 2. 黄褐色砂質土
土壤-121



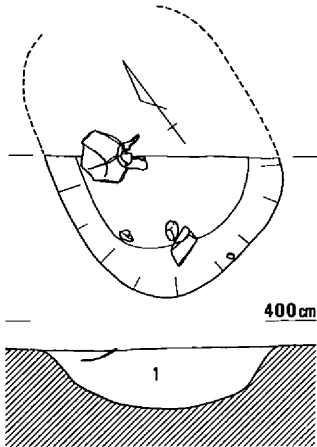
1. 黑茶褐色粘質土
(炭含む)
土壤-119



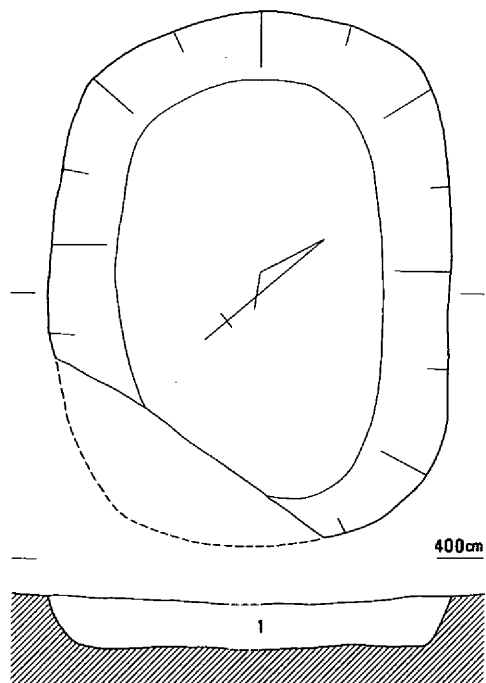
1. 褐色粘質土 (焼土含む)
2. 明茶色粘質土 (炭含む)
土壤-120



1. 暗褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土
土壤-123

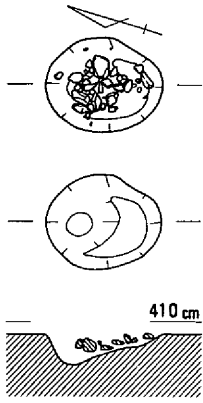


1. 暗青灰色粘質土
土壤-124

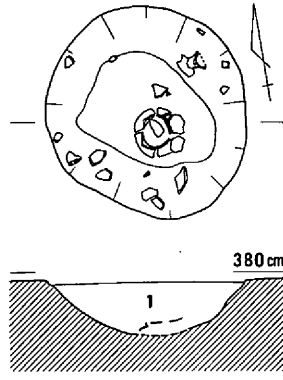


1. 黄褐色砂質土 (炭含む)
土壤-122

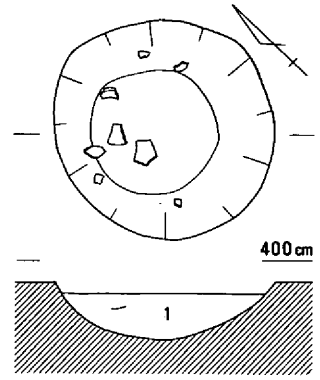




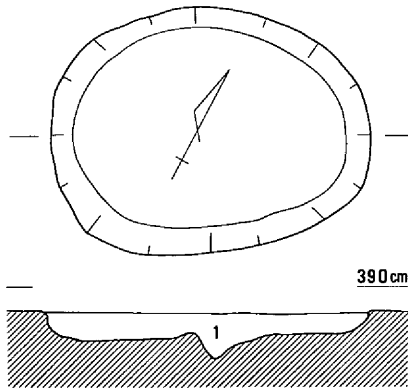
土壤-125



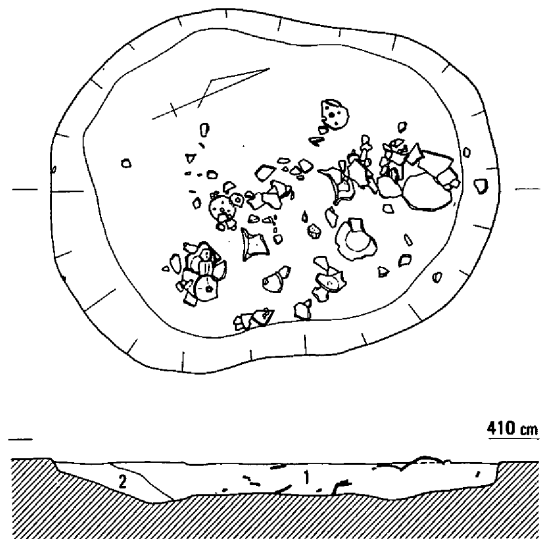
1. 暗茶灰色粘質微砂
土壤-126



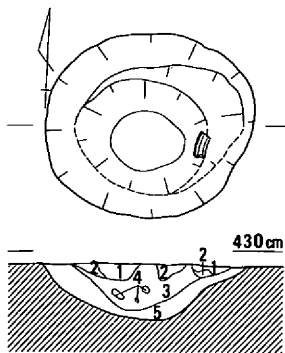
1. 暗茶灰色粘質微砂
土壤-127



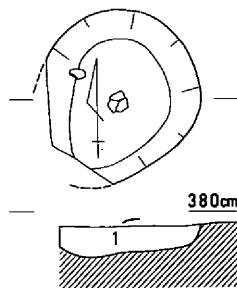
1. 暗茶褐灰色粘質微砂
土壤-128



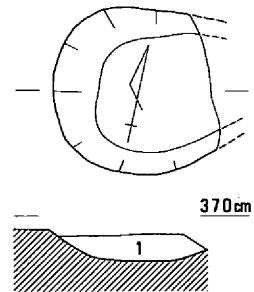
1. 暗灰茶色微砂 2. 暗灰茶色粘質微砂
土壤-129



1. 暗灰白色粘土
2. 暗黄茶色粘土
3. 暗灰茶色粘質微砂
4. 暗黄茶色粘土
5. 暗茶灰色粘質微砂
土壤-130

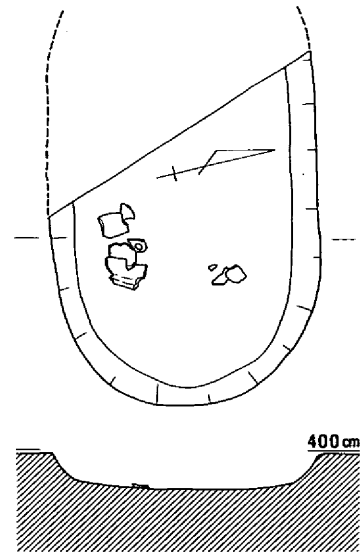
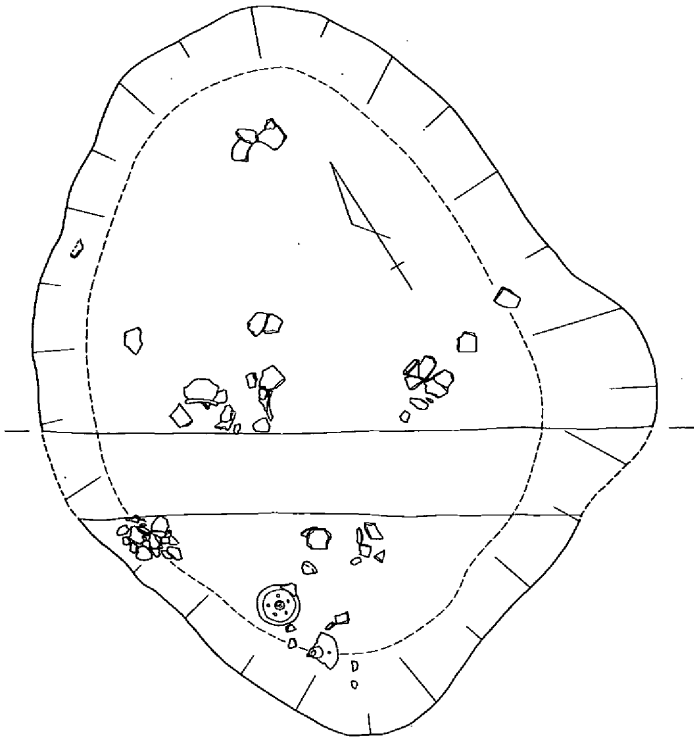


1. 暗茶灰褐色粘質微砂
土壤-131

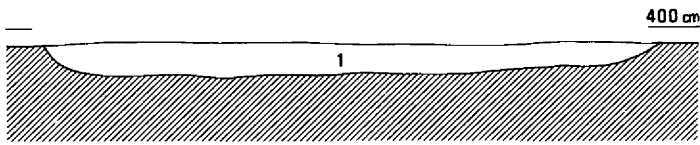


1. 暗茶色粘質微砂
土壤-132



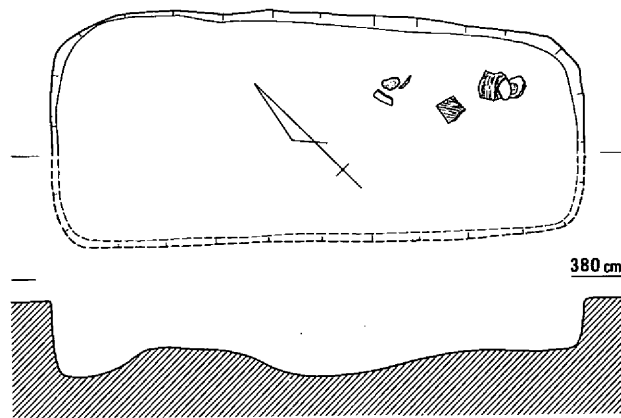


土壤-134

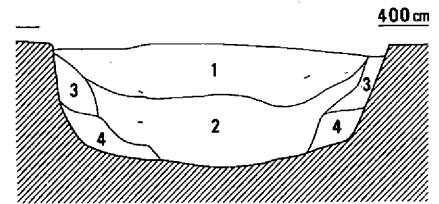
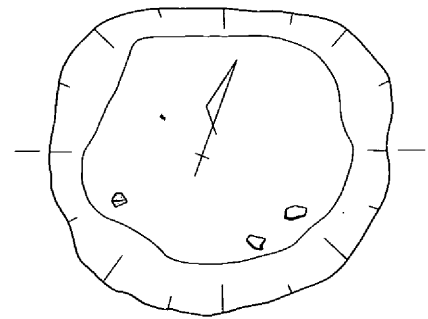


1. 暗茶灰色粘質微砂

土壤-133



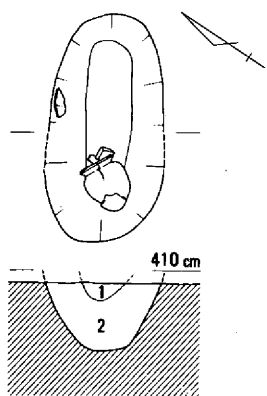
土壤-135



1. 暗茶褐色粘質微砂 3. 暗茶灰色粘質微砂
2. 暗灰茶色粘質微砂 4. 暗茶灰色微砂

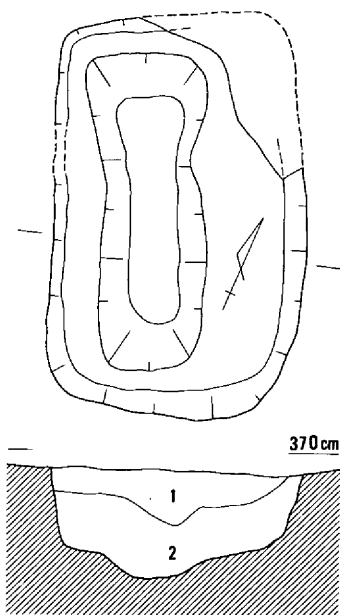
土壤-136





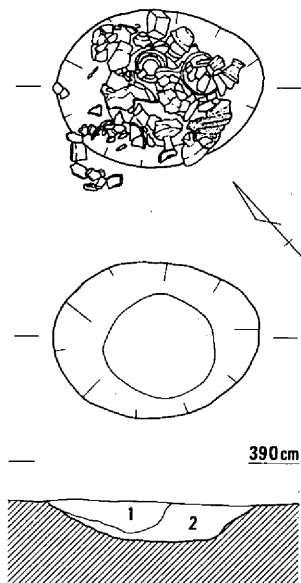
- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 茶褐色粘質土

土壤-137



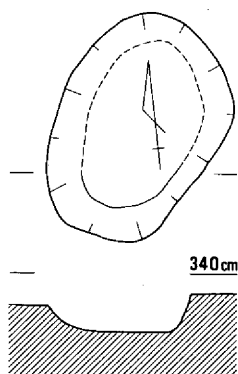
- 1. 暗黄褐色砂質土
- 2. 暗褐色砂質土

土壤-138

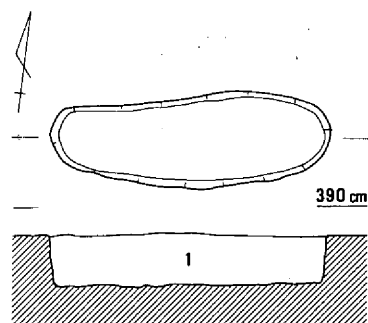


- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 黄褐色砂質土

土壤-139

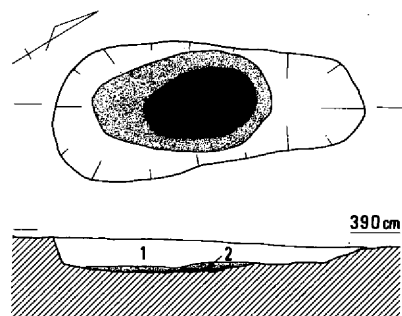


土壤-140



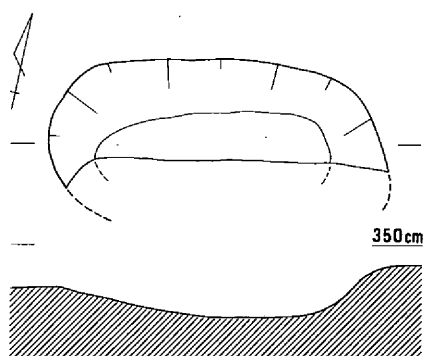
- 1. 暗褐色砂質土

土壤-141

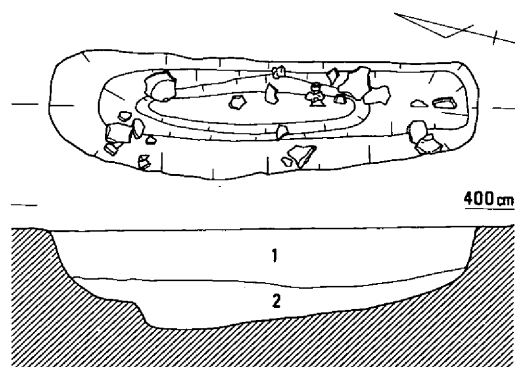


- 1. 黄褐色砂質土
- 2. 炭、燒土層

土壤-142



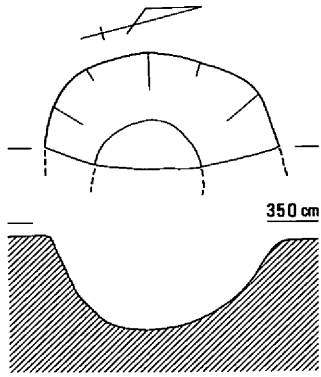
土壤-143



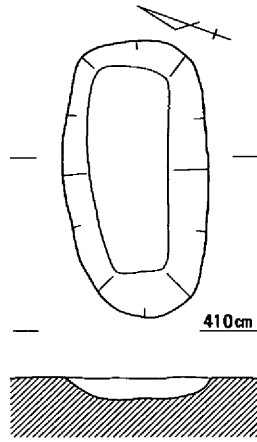
- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 暗茶褐色弱粘質土

土壤-144

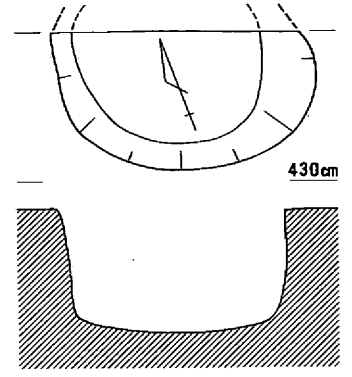




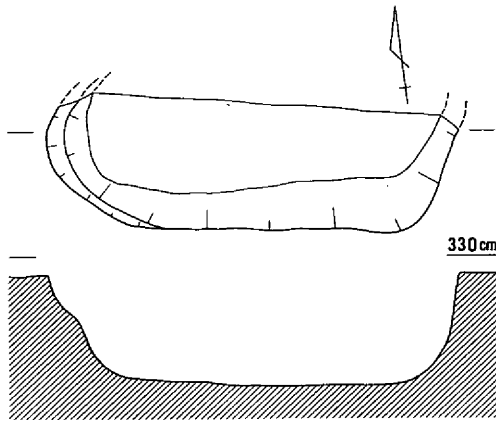
土壤-145



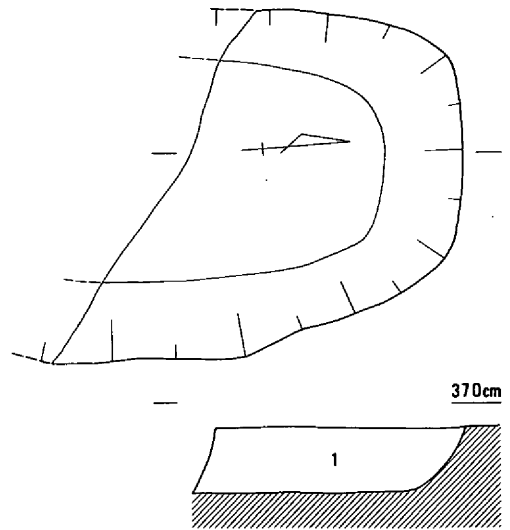
土壤-148



土壤-149

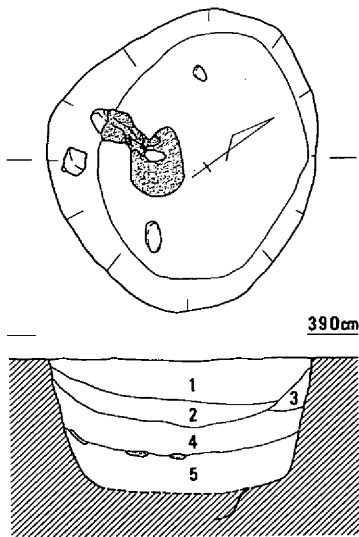


土壤-146



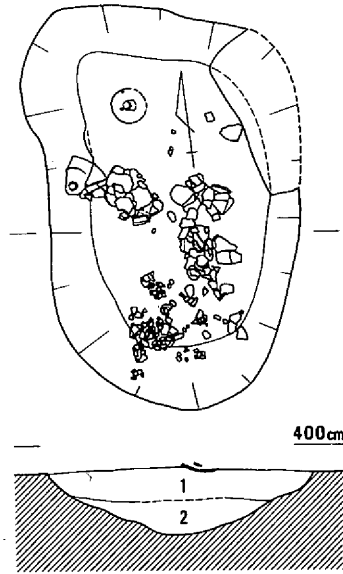
1. 淡茶色粘質土

土壤-150



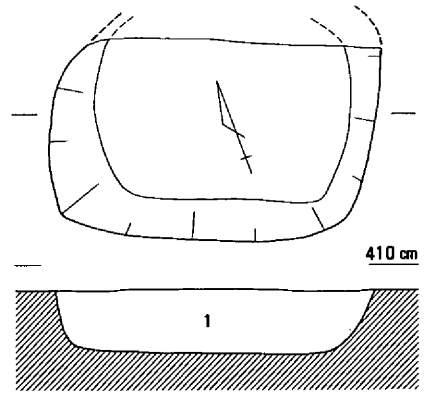
- 1. 黃褐色弱粘質土
- 2. 暗黃褐色弱粘質土
- 3. 褐色土
- 4. 灰褐色土
- 5. 暗褐色土

土壤-147



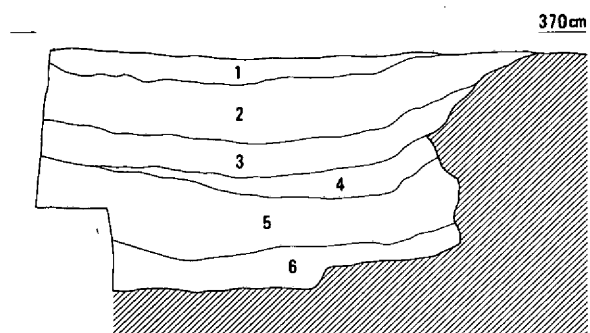
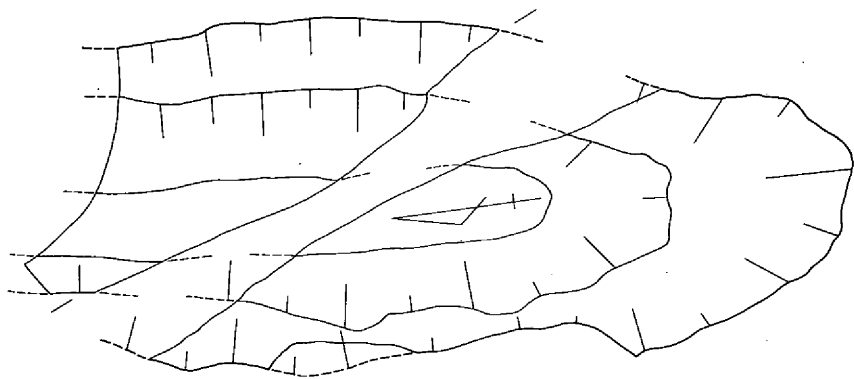
- 1. 茶褐色泥砂
- 2. 褐色泥砂

土壤-151



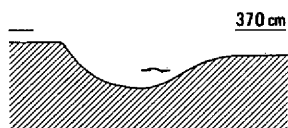
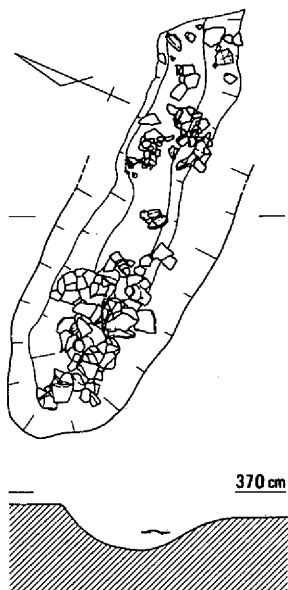
1. 茶褐色粘質土

土壤-152

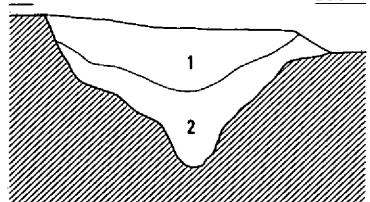
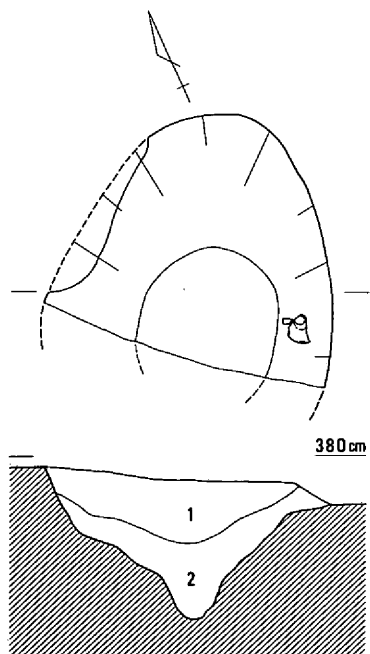


- 1. 暗褐灰色粘質微砂
- 2. 黑褐色細砂
- 3. 地褐色細砂
- 4. 暗黃褐色細砂
- 5. 褐色粘質細砂
- 6. 黃褐色細砂

土壤—154

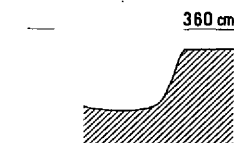
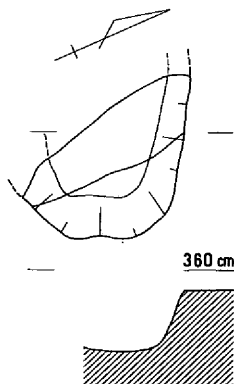


土壤—155

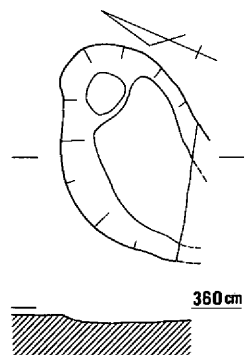


- 1. 暗褐色粘質微砂土
- 2. 暗地褐色粘質微砂土

土壤—153

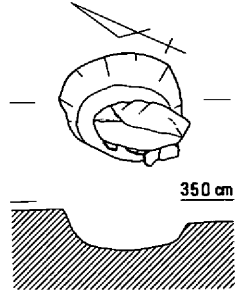
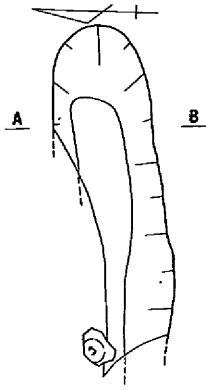


土壤—156

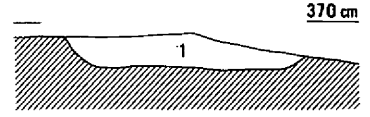
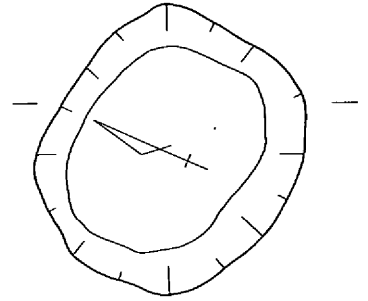


土壤—157



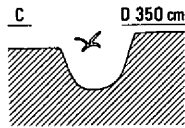
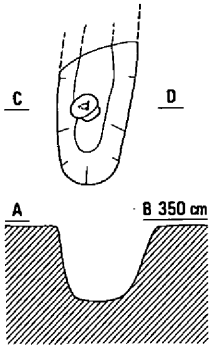


土壤-159

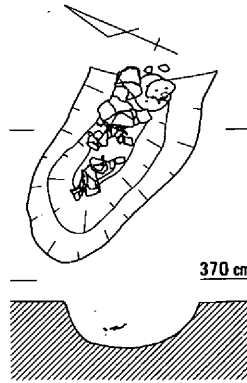


1. 褐色微砂

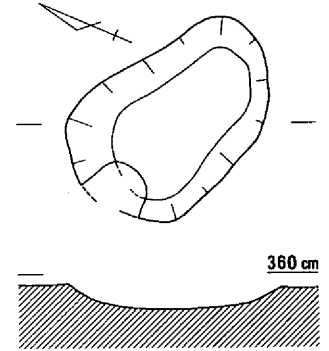
土壤-160



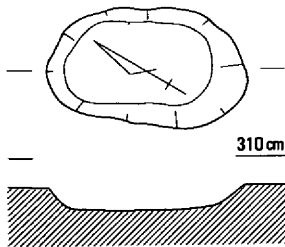
土壤-158



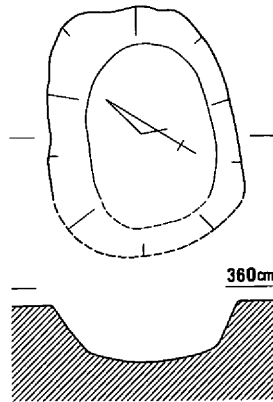
土壤-161



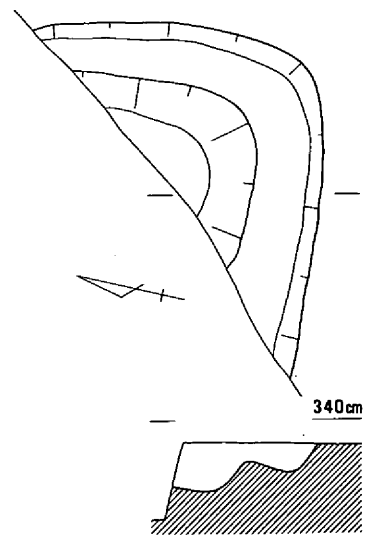
土壤-162



土壤-163

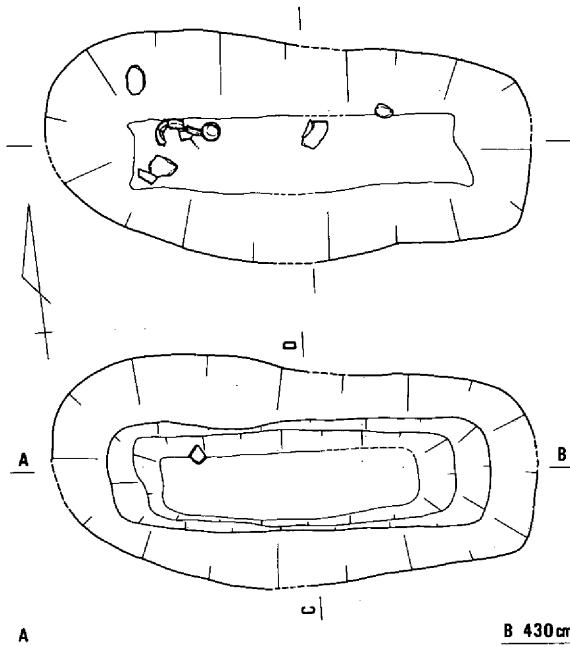


土壤-164

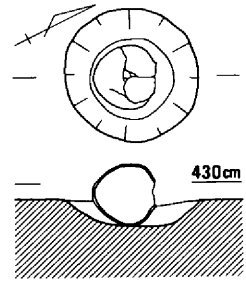


土壤-165

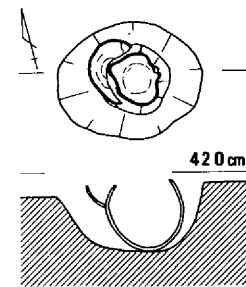




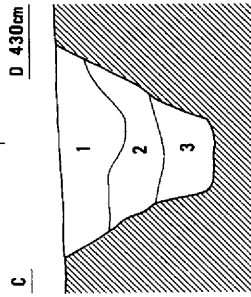
土坑墓—4



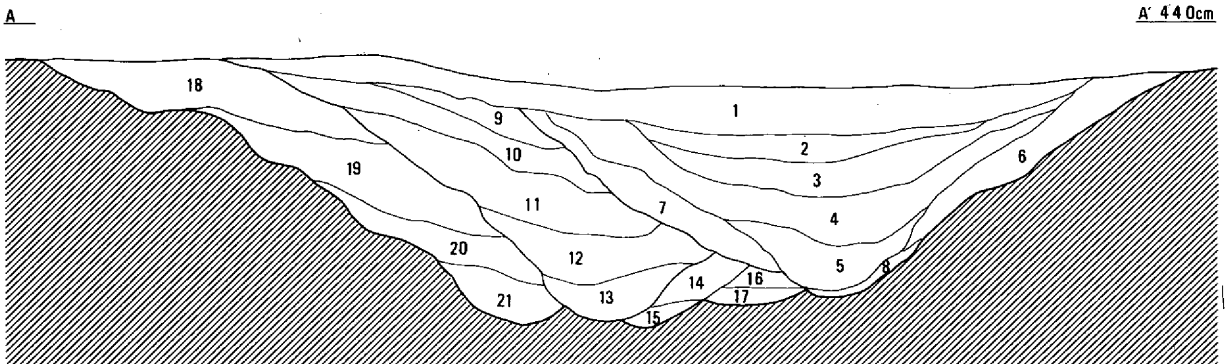
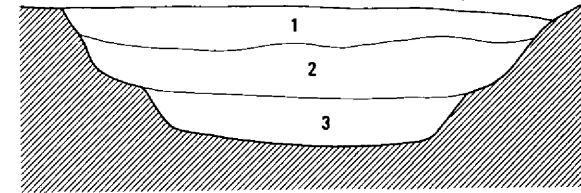
土器棺—7



土器棺—8

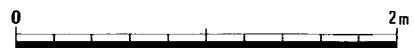


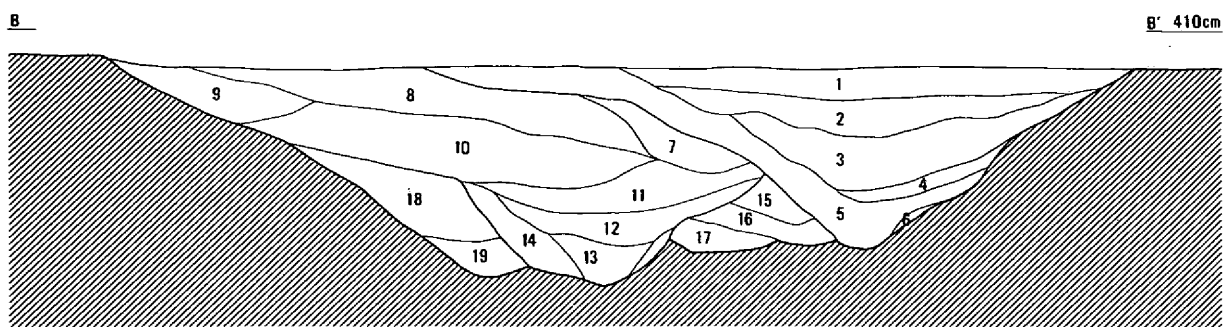
- 1. 暗茶褐色粘质土
- 2. 暗灰茶色粘质土
- 3. 浓灰色粘质土



- | | | | |
|-----------------------------|---------------|--------------|------------|
| 1. 明茶色细砂 | 7. 灰黄褐色粘质微砂 | 13. 暗黄褐色粘质微砂 | 19. 暗褐色微砂 |
| 2. 灰黄褐色细砂 | 8. 暗褐色粘质微砂 | 14. 褐色微砂 | 20. 暗黄褐色微砂 |
| 3. 灰黄褐色粘质土 (土器·碟含 τ) | 9. 黑褐色微砂 | 15. 暗灰黄褐色细砂 | 21. 暗黄褐色细砂 |
| 4. 暗灰黄褐色粘质土 (土器·碟含 τ) | 10. 暗灰褐色粘质微砂 | 16. 灰黄褐色细砂 | |
| 5. 暗灰褐色粘质土 (土器·碟含 τ) | 11. 暗灰黄褐色粘质微砂 | 17. 暗灰黄褐色细砂 | |
| 6. 灰黄褐色粘质微砂 | 12. 灰黄褐色粘质微砂 | 18. 黑褐色微砂 | |

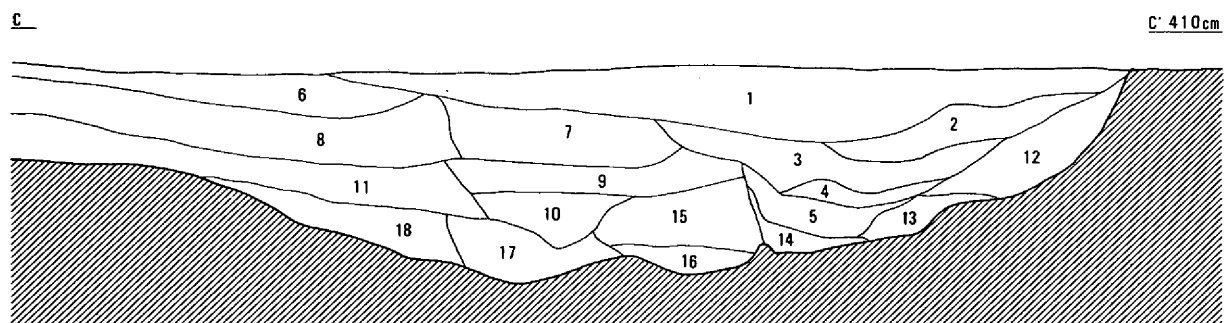
沟—4





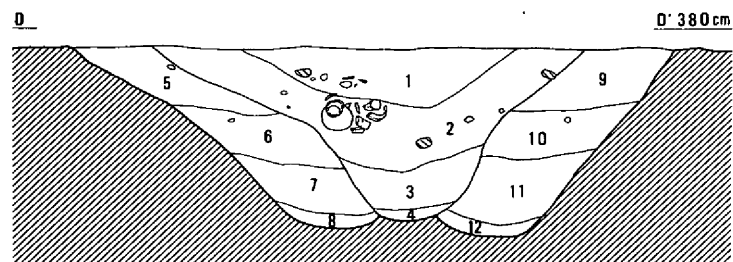
- | | | | |
|--------------------|-----------------|--------------|--------------|
| 1. 明茶色細砂 | 6. 褐色粘質微砂 | 11. 暗褐色粘質微砂 | 16. 褐灰色粗砂 |
| 2. 灰褐色細砂 | 7. 褐色粘質微砂 | 12. 灰色粗砂 | 17. 茶灰色細砂 |
| 3. 暗灰褐色粘質微砂 | 8. 暗褐色微砂 (土器片多) | 13. 暗灰色粗砂 | 18. 暗茶褐色粘質微砂 |
| 4. 黒灰褐色粘質微砂 (土器含む) | 9. 暗褐色細砂 | 14. 暗褐灰色粗砂 | 19. 暗茶灰色細砂 |
| 5. 黒褐色粘質微砂 | 10. 茶褐色粘質微砂 | 15. 暗褐灰色粘質微砂 | |

溝-4



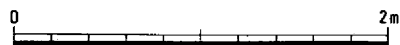
- | | | | |
|------------|------------------|--------------|--------------|
| 1. 淡灰黄色シルト | 6. 暗灰黄色シルト | 11. 暗灰茶褐色砂質土 | 16. 暗灰色砂質土 |
| 2. 暗灰黄色シルト | 7. 灰褐色砂質土 | 12. 暗灰褐色粘質土 | 17. 灰茶褐色泥砂 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 8. 暗灰色砂質土 (土器含む) | 13. 灰橙色砂質土 | 18. 暗灰茶褐色砂質土 |
| 4. 暗灰褐色砂質土 | 9. 暗灰褐色砂質土 | 14. 暗灰褐色砂質土 | |
| 5. 灰色泥砂 | 10. 暗灰色泥砂 (土器含む) | 15. 淡橙灰褐色砂質土 | |

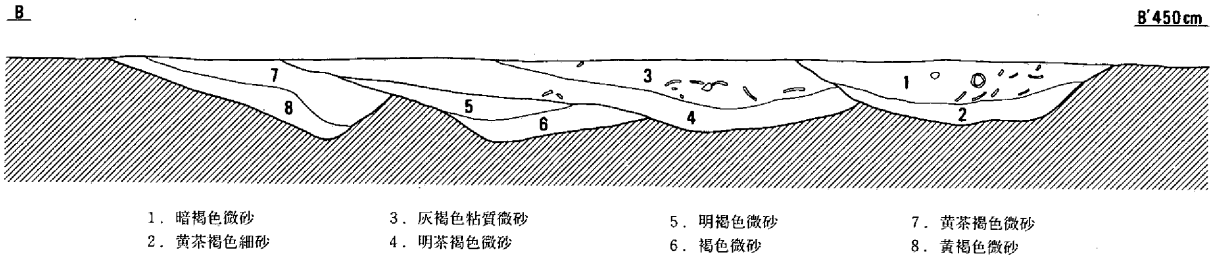
溝-4



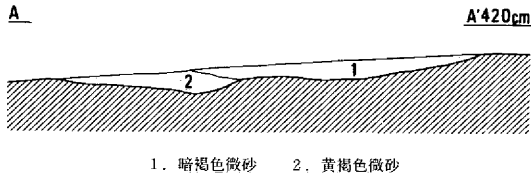
- | | | |
|--------------|------------|-------------|
| 1. 淡灰綠色粘土 | 5. 暗灰褐色砂質土 | 9. 暗灰褐色砂質土 |
| 2. 黄茶灰色粘性砂質土 | 6. 灰褐色粘質土 | 10. 灰褐色粘質土 |
| 3. 淡灰色粗砂 | 7. 灰茶色粘質土 | 11. 灰茶褐色粘質土 |
| 4. 淡灰色粘土 | 8. 淡灰色粘土 | 12. 淡灰色粘土 |

溝-4

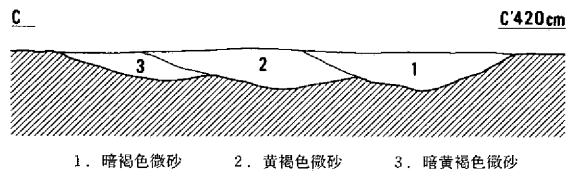




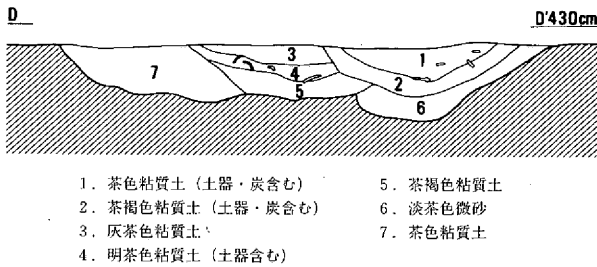
溝-16



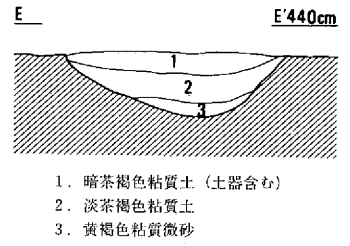
溝-16



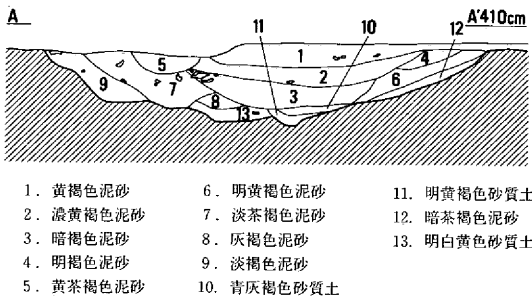
溝-16



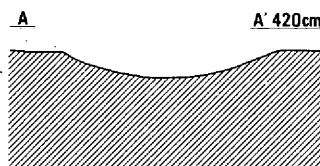
溝-16



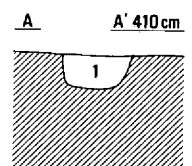
溝-16



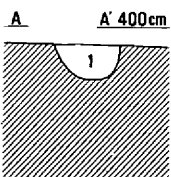
溝-17



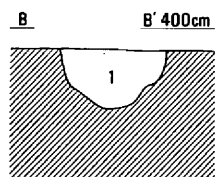
溝-18



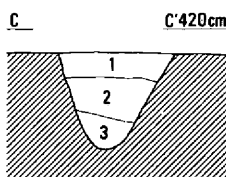
溝-23



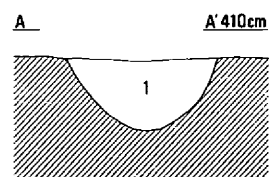
溝-24



溝-24

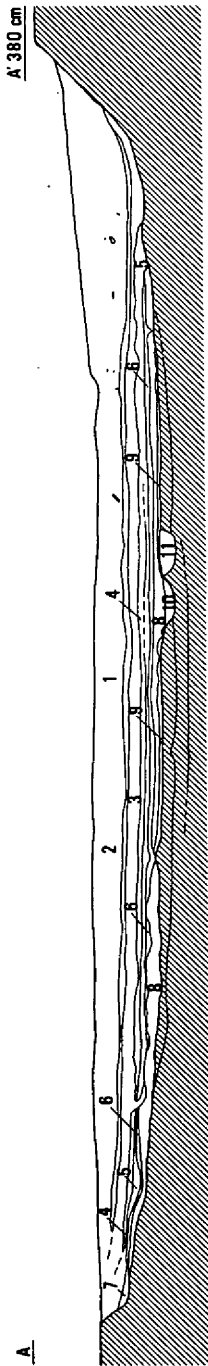


溝-24



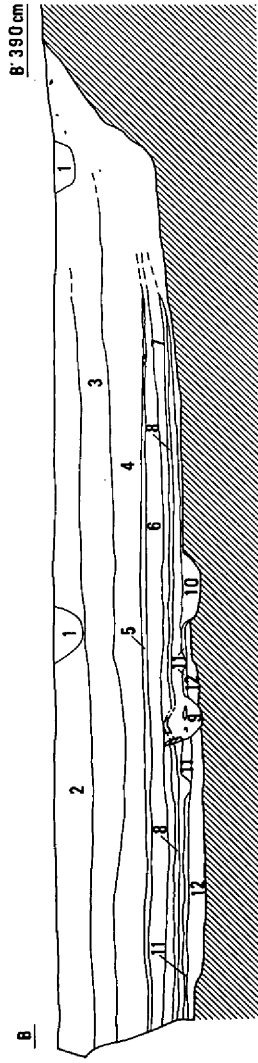
溝-26





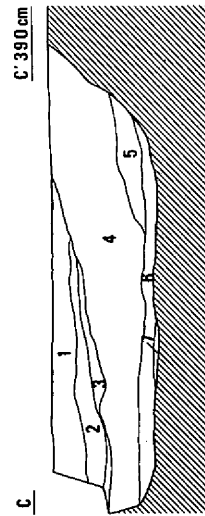
1. 淡茶灰色粘土
2. 淡明褐色粘土 (鉄沈着)
3. 淡茶灰色粘土 (微砂混じり)
4. 明褐色粘土 (鉄沈着)
5. 明褐色粘土 (鉄沈着)
6. 明褐色粘土 (鉄沈着)
7. 茶灰色粘土
8. 灰茶色粘土
9. 淡明褐色粘質土 (鉄、マンガン沈着)
10. 淡茶灰色粘質土
11. 淡茶灰色砂質土

水田



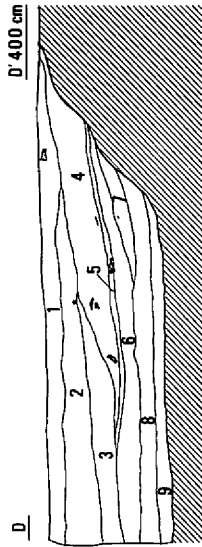
1. 暗灰色粘質微砂
2. 茶色粘質微砂
3. 茶色微砂 (排水砂)
4. 淡茶色粘土
5. 明褐色粘質土
6. 淡茶色粘土
7. 暗黄褐色粘質土
8. 暗赤黄褐色粘質微砂 (鉄沈着)
9. 暗赤黄褐色粘質微砂 (マンガン沈着)
10. 茶色弱性粘土
11. 暗赤黄褐色粘質微砂 (鉄沈着)
12. 淡茶色粘質微砂 (マンガン沈着)

水田



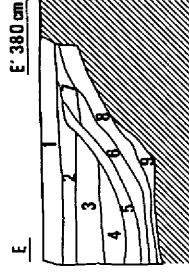
1. 明茶褐色粘質土
2. 暗茶褐色砂質土
3. 暗茶褐色微砂質土
4. 明黄褐色粘質土
5. 淡茶褐色砂質土
6. 明茶褐色微砂質土
7. 明黄褐色粘質土

水田



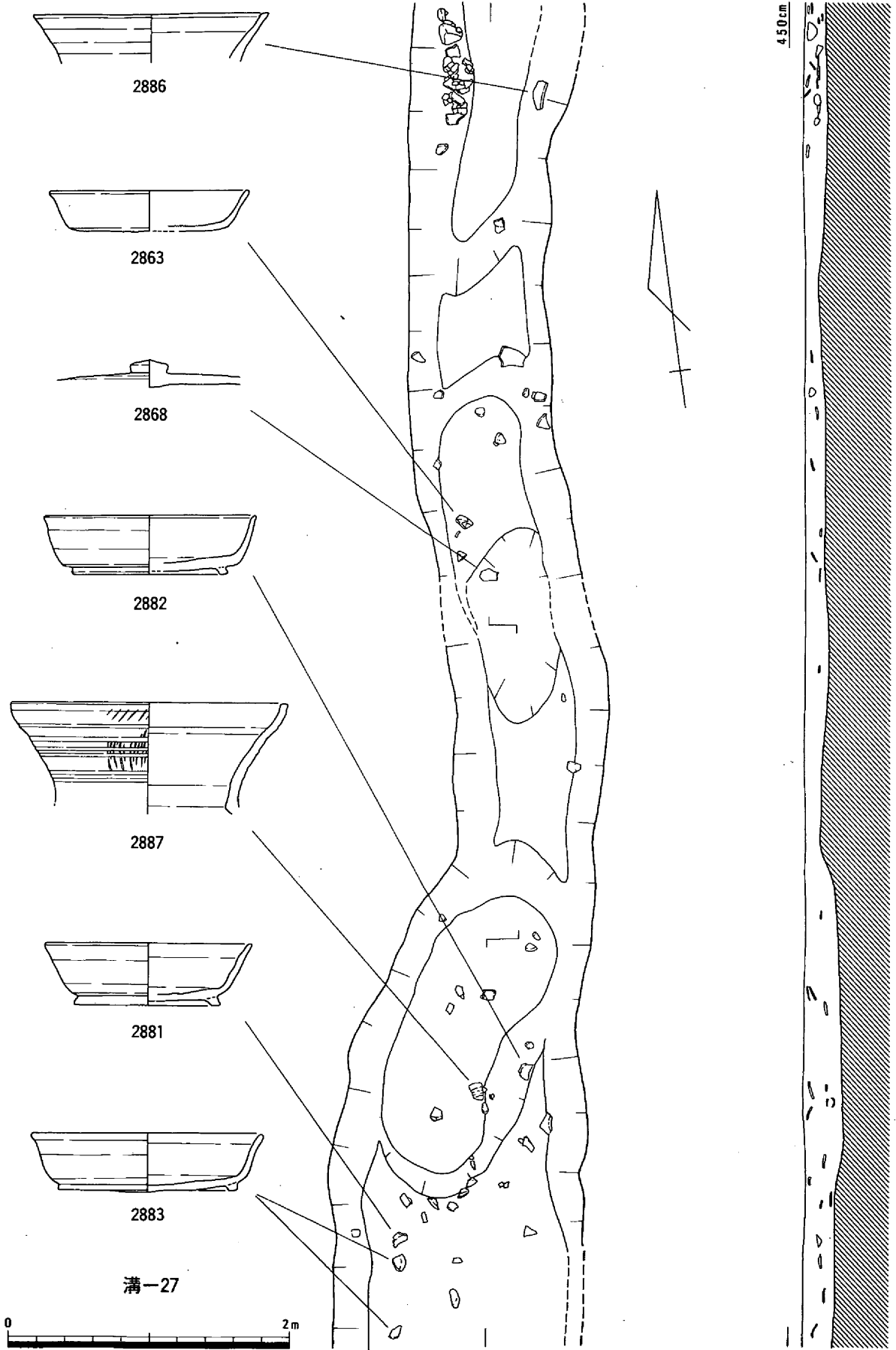
1. 黒褐色粘質土層 (マンガン粒沈着)
2. 明黄褐色粘質土層
3. 暗黄褐色微砂質土層
4. 暗茶褐色粘質土 (土器含多)
5. 暗褐色砂質土
6. 暗灰褐色粘質土
7. 暗茶褐色粘質土
8. 淡赤褐色粘質土
9. 明黄褐色粘質土

水田



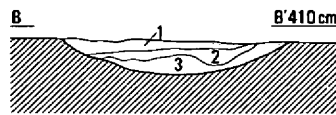
1. 黒褐色粘質土
2. 明黄褐色粘質土
3. 暗黄褐色粘質土
4. 暗黄褐色微砂質土
5. 暗灰褐色粘質土
6. 暗茶褐色弱粘質土
7. 淡赤褐色粘質土 (鉄、マンガン沈着)
8. 明黄灰色粘質土 (鉄、マンガン沈着)
9. 明灰白色砂質土 (マンガンで固結)

水田



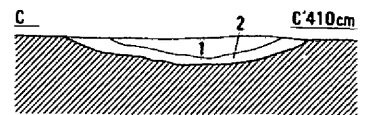


溝-27



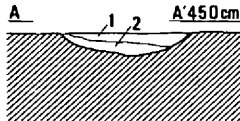
- 1. 淡灰茶褐色微砂
- 2. 灰茶褐色粘質微砂
- 3. 灰茶色微砂

溝-27



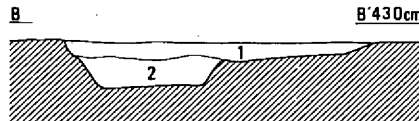
- 1. 淡灰茶褐色微砂
- 2. 淡灰茶色微砂

溝-27



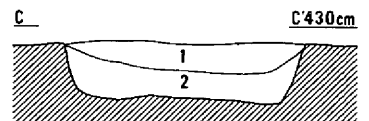
- 1. 明灰黃褐色粘質微砂
- 2. 灰褐色粘質微砂

溝-28



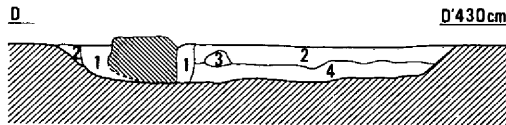
- 1. 明灰褐色粘質土
- 2. 灰茶褐色砂質土

溝-28



- 1. 灰茶褐色粘質土
- 2. 暗灰茶褐色粘質土

溝-28



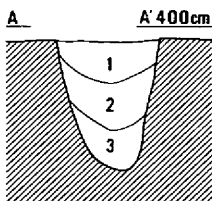
- 1. 灰黃褐色粘質土
- 2. 白灰黃褐色粘質土
- 3. 暗茶褐色粘質土
- 4. 灰黃茶褐色粘質土

溝-28



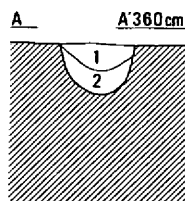
- 1. 淡灰褐色微砂
- 2. 淡灰茶褐色微砂
- 3. 灰茶褐色粘質微砂

溝-28



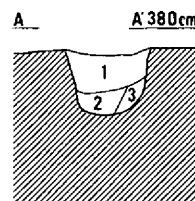
- 1. 灰黃褐色粘質土
- 2. 暗黃褐色泥砂
- 3. 暗茶褐色泥砂

溝-29



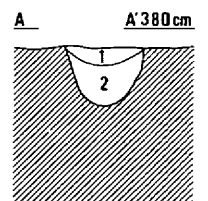
- 1. 淡黑褐色泥砂
- 2. 暗黃褐色泥砂

溝-30



- 1. 黃褐色泥砂
- 2. 淡褐色泥砂
- 3. 灰黃褐色砂質土

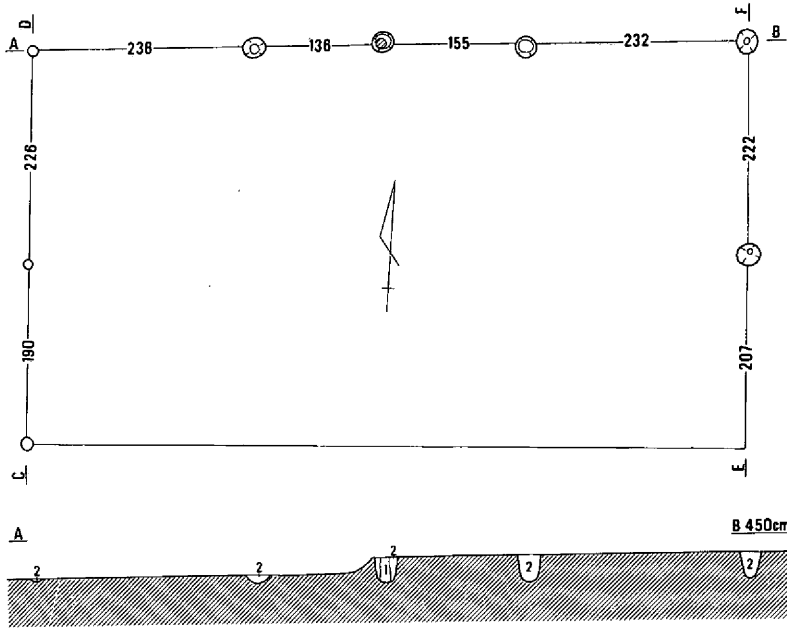
溝-33



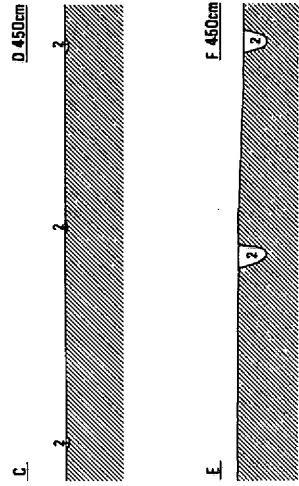
- 1. 黃褐色泥砂
- 2. 灰黃褐色砂質土

溝-34

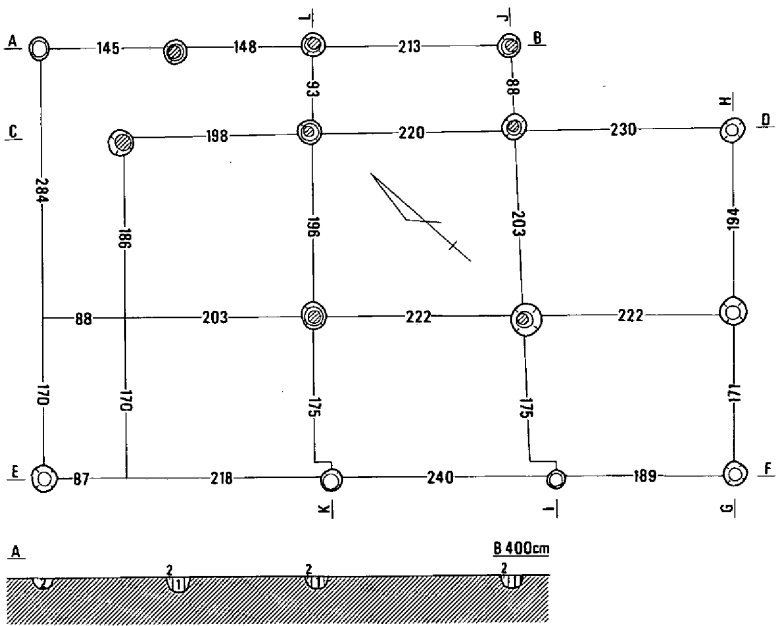




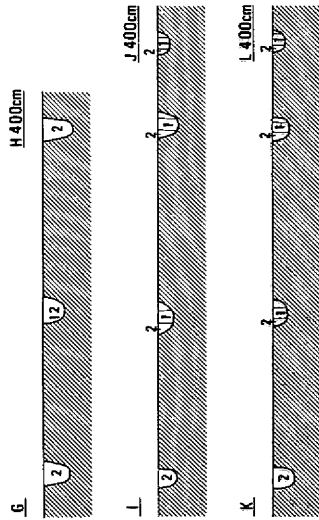
掘立柱建物—4



- 1. 暗灰褐色微砂
- 2. 灰黄褐色微砂

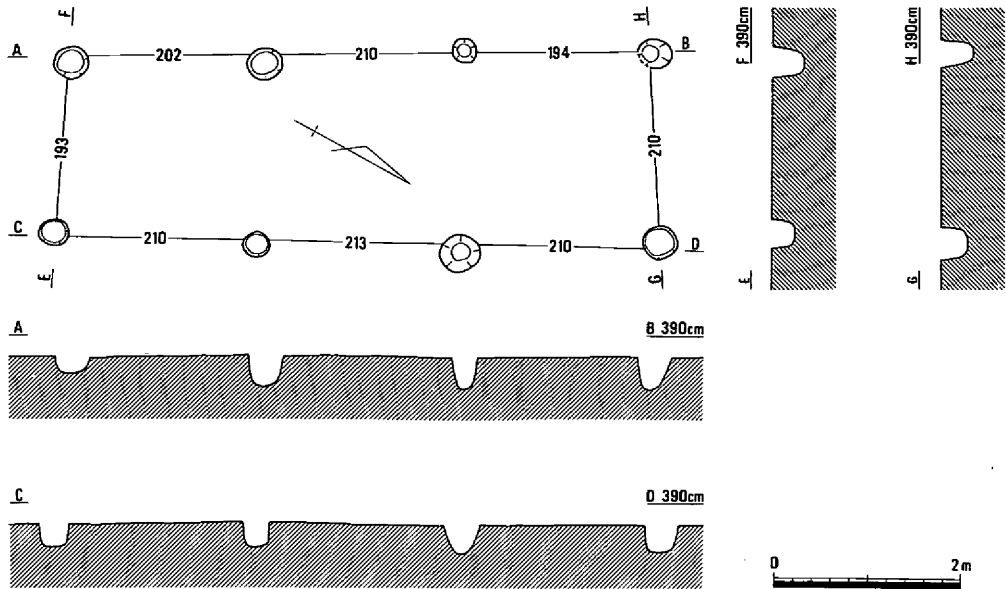


掘立柱建物—5

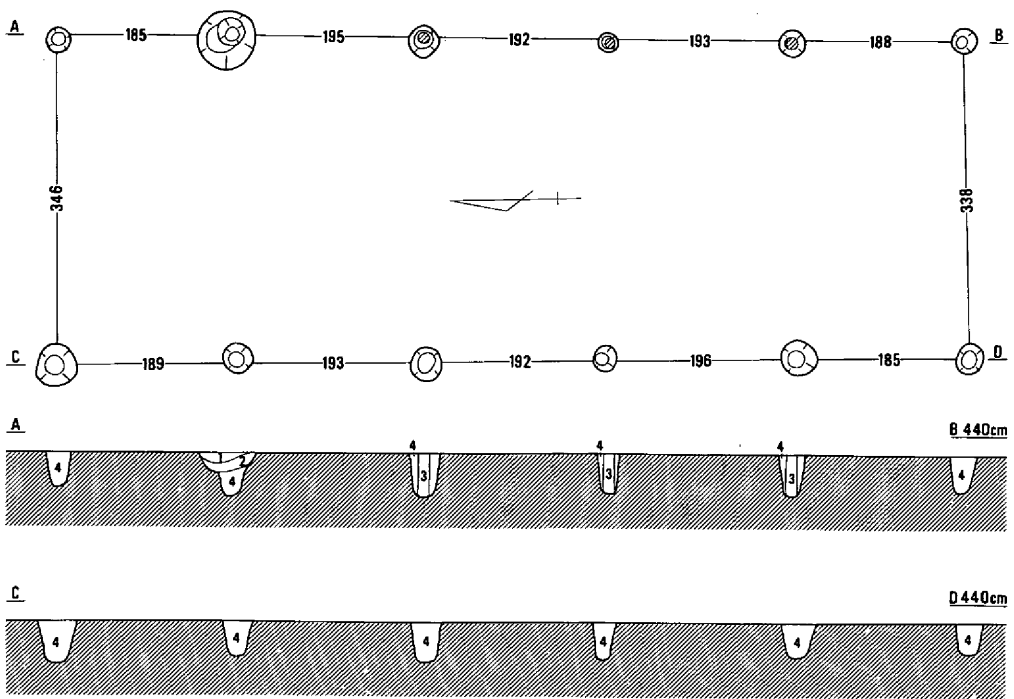


- 1. 暗灰褐色微砂 (炭含む)
- 2. 灰褐色微砂



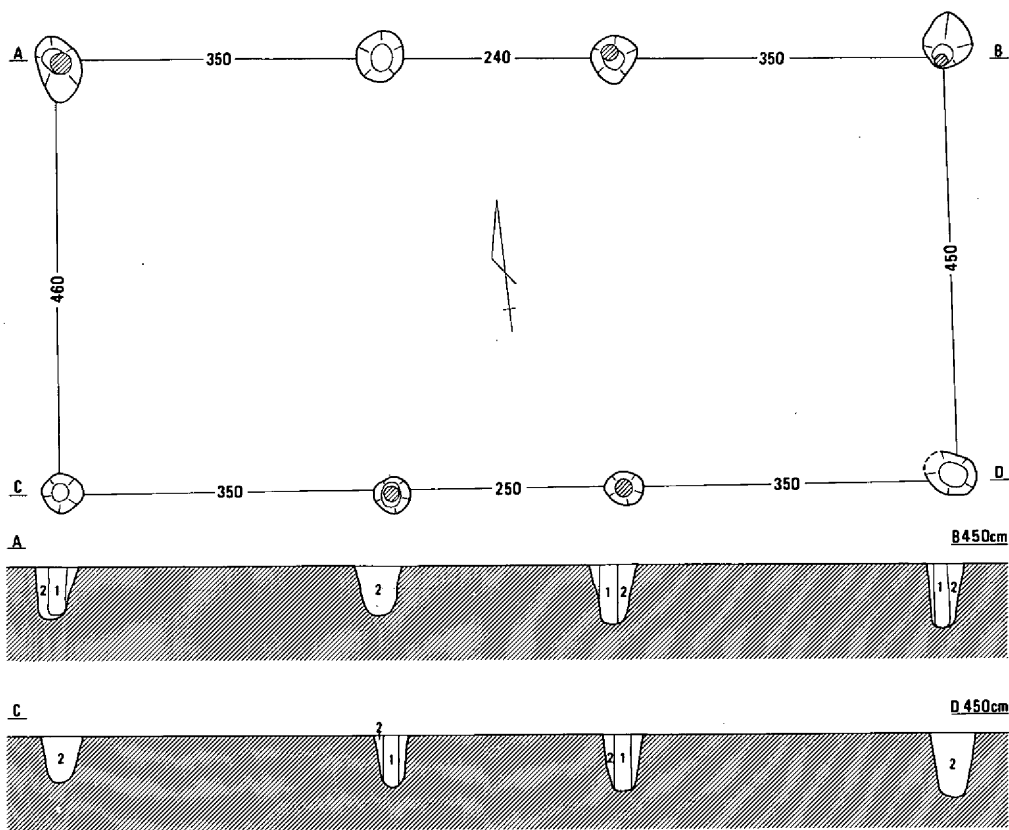


掘立柱建物—6



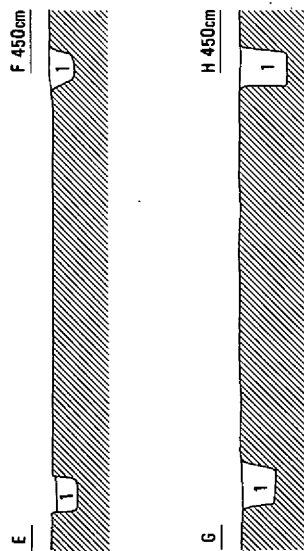
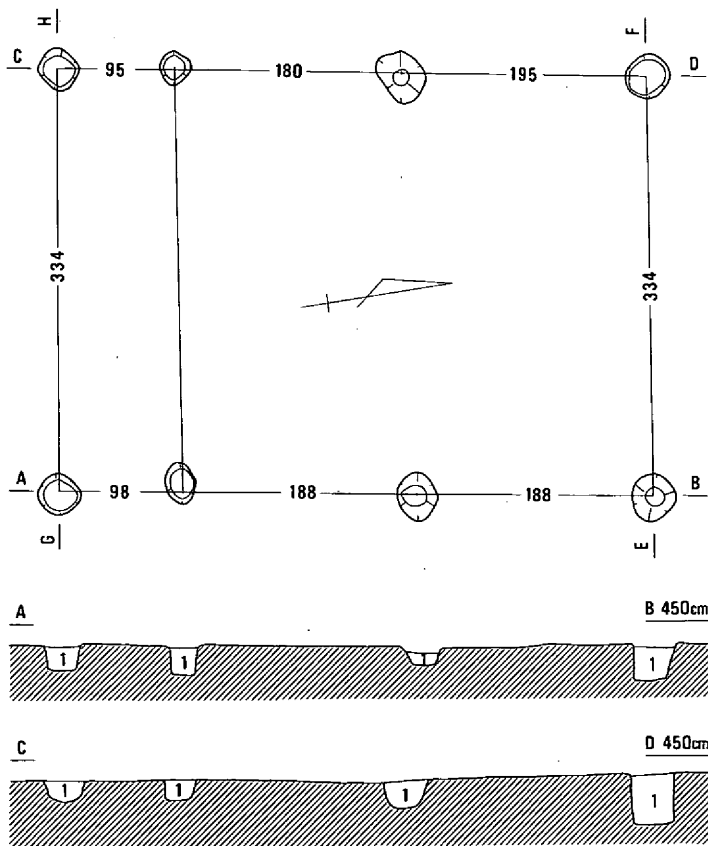
- 1. 暗褐色微砂
- 2. 灰褐色微砂
- 3. 暗灰褐色微砂
- 4. 灰黄褐色微砂

掘立柱建物—7



1. 暗灰褐色微砂 2. 灰褐色微砂

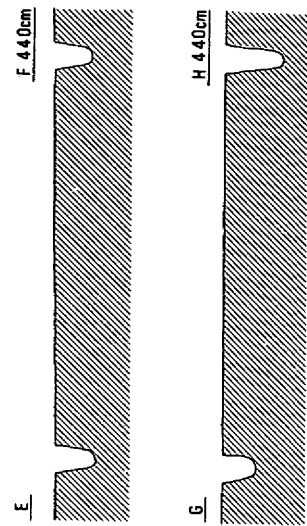
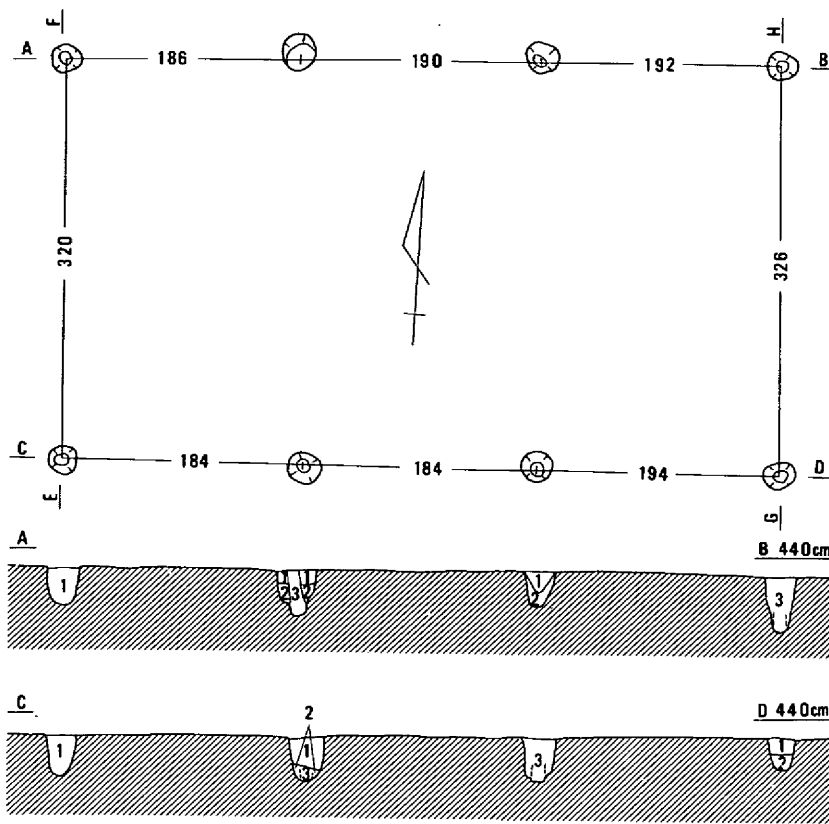
掘立柱建物—8



1. 白黄茶褐色砂质土

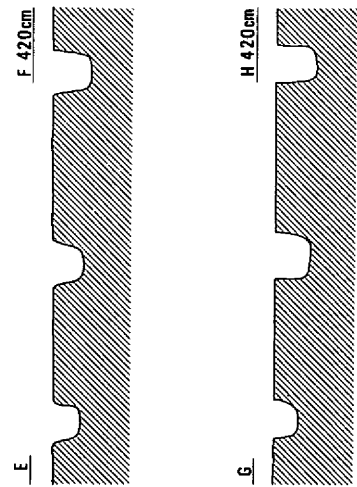
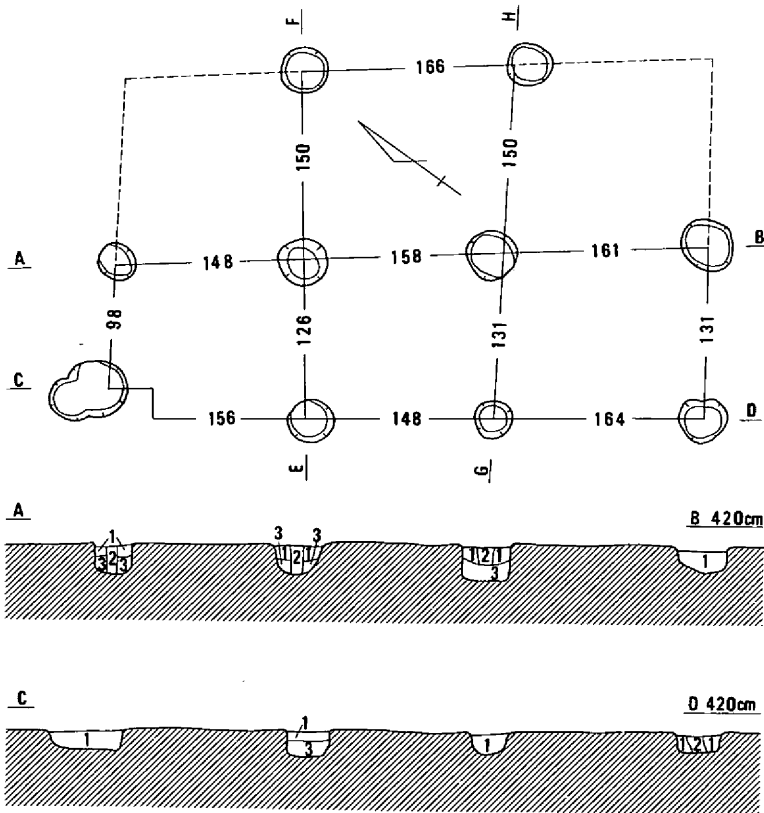


掘立柱建物—9



- 1. 淡黄褐色泥砂
- 2. 茶褐色泥砂
- 3. 柱痕

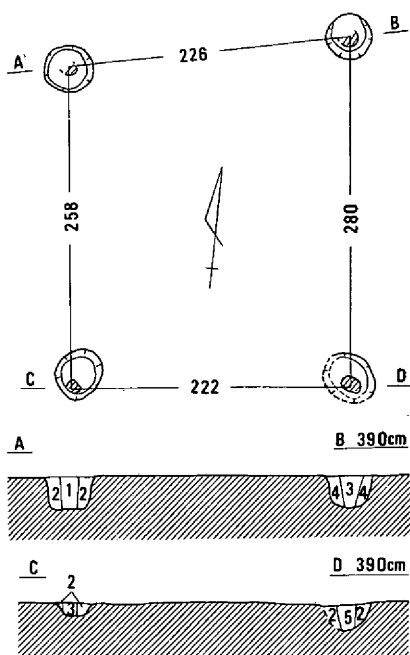
掘立柱建物-10



- 1. 灰黄褐色砂质土
- 2. 灰黄褐色砂质土
- 3. 灰黄色砂质土

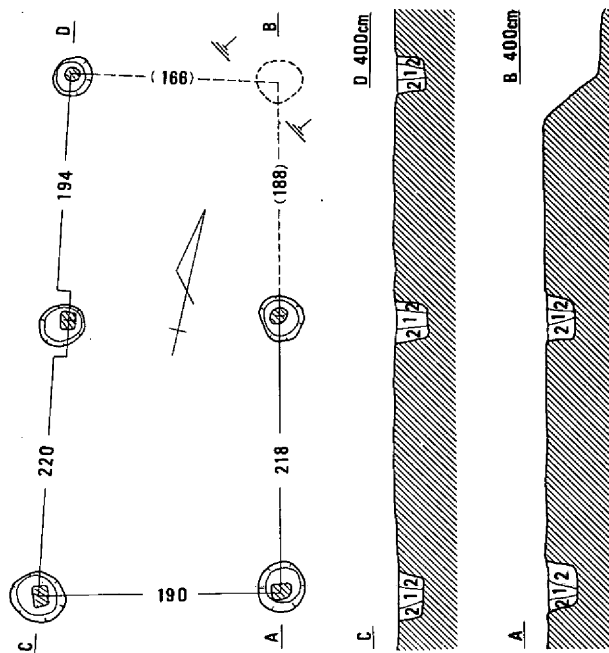


掘立柱建物-11



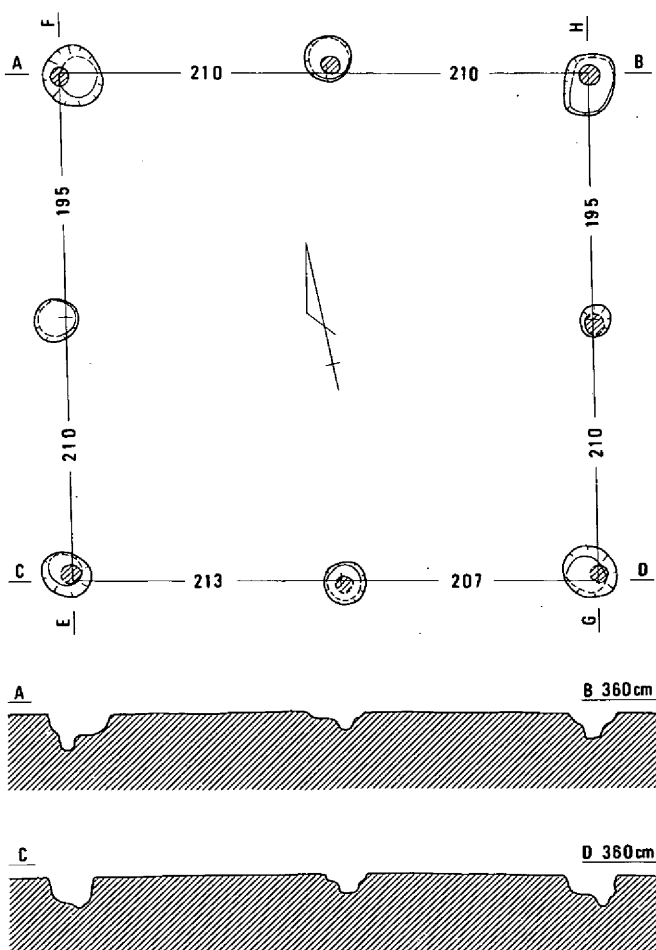
- 1. 淡灰褐色泥砂
- 2. 淡黄褐色砂泥
- 3. 淡灰褐色砂质土
- 4. 淡灰黄褐色泥砂
- 5. 灰褐色泥砂

掘立柱建物—12

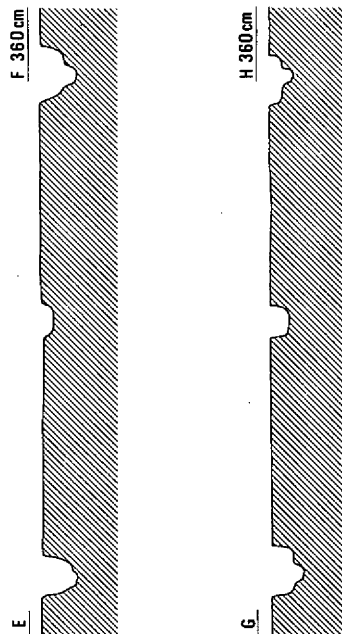


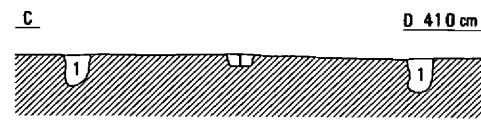
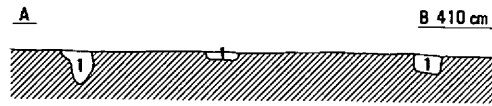
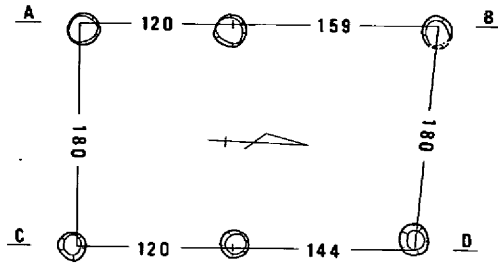
- 1. 黄灰褐色粘质泥砂
- 2. 淡灰黄褐色泥砂

掘立柱建物—13



掘立柱建物—14

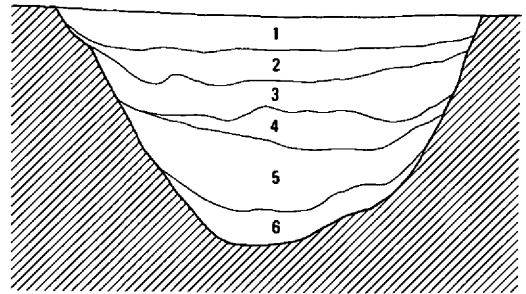
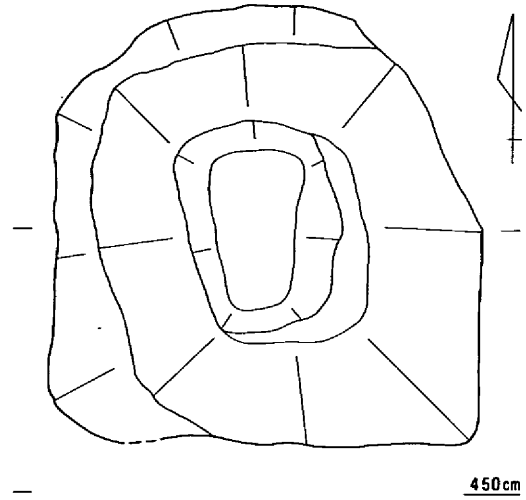




1. 淡黄褐色土

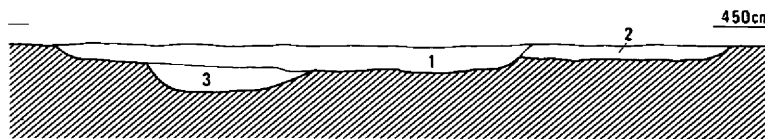
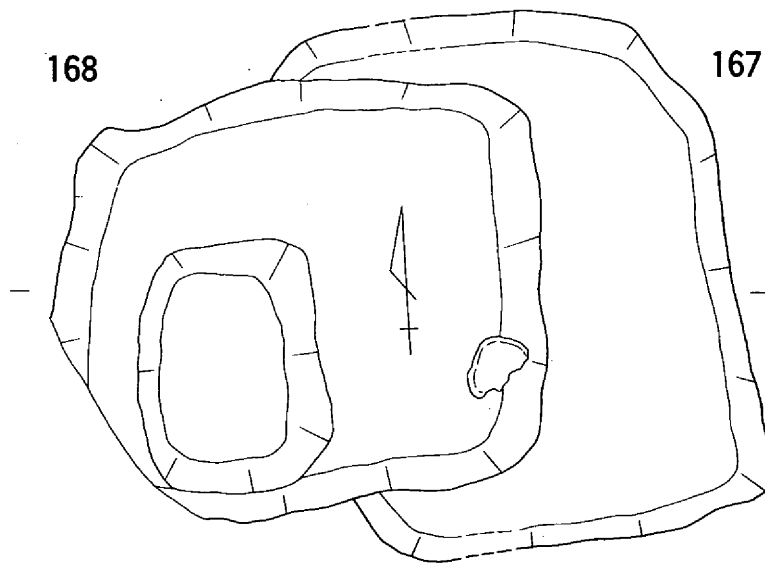


掘立柱建物-15



- 1. 灰黄褐色微砂土
- 2. 灰黄茶色微砂土
- 3. 灰黄褐色微砂土
- 4. 青灰黄褐色土
- 5. 青灰色粘质土
- 6. 暗青灰色粘质土

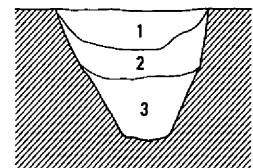
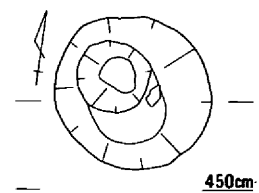
井戸-2



- 1. 灰褐色微砂土
- 2. 灰褐色微砂土
- 3. 褐灰色微砂



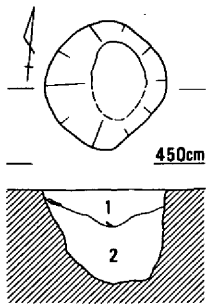
土壤-167·168



- 1. 暗褐色微砂
- 2. 灰褐色微砂
- 3. 明灰褐色微砂

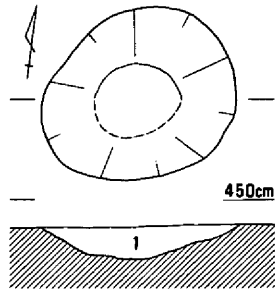
土壤-166





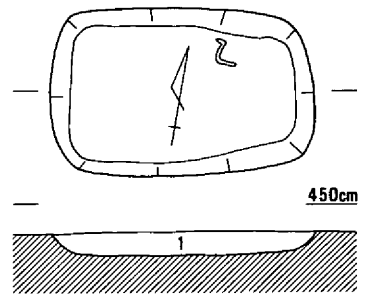
- 1. 黑灰色微砂
- 2. 暗灰色微砂

土壤-169



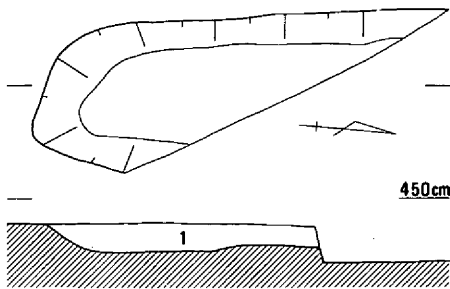
- 1. 灰黄褐色微砂

土壤-170



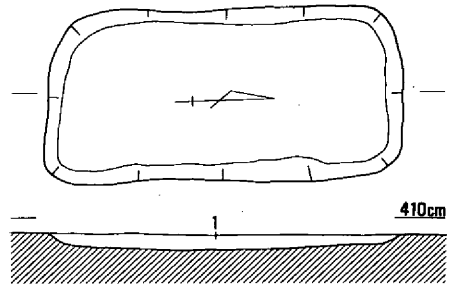
- 1. 淡青灰色微砂

土壤-171



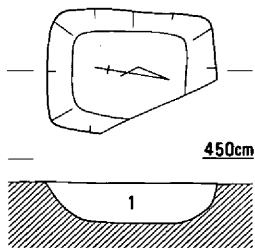
- 1. 灰褐色微砂

土壤-172



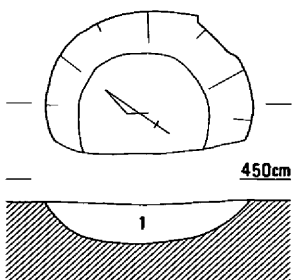
- 1. 灰褐色微砂

土壤-175



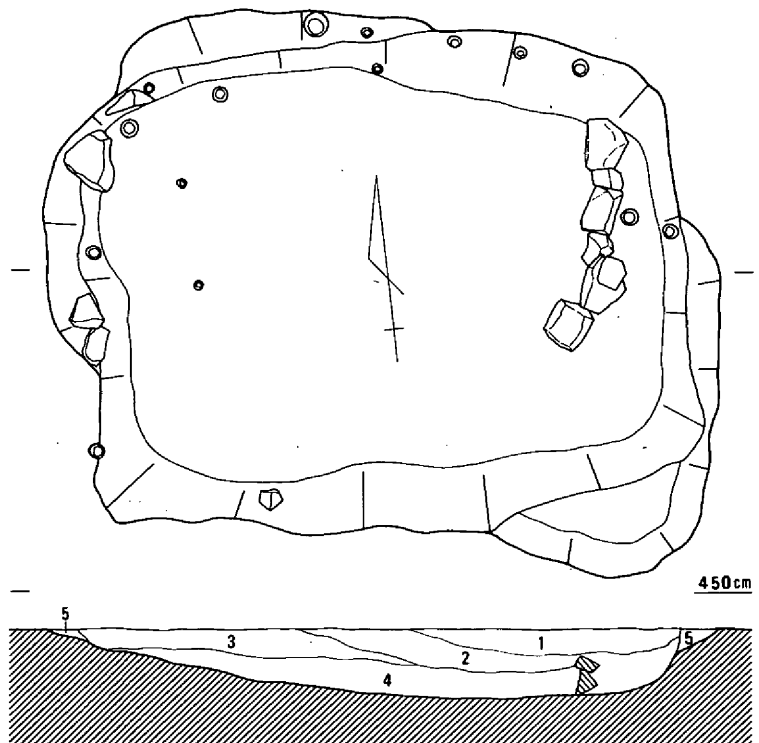
- 1. 灰褐色微砂

土壤-173



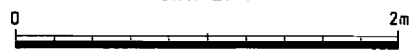
- 1. 灰褐色微砂

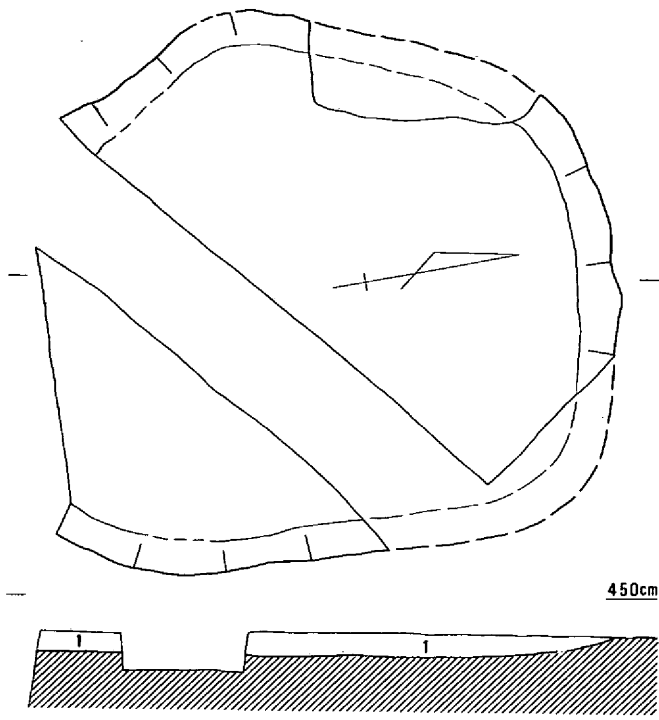
土壤-174



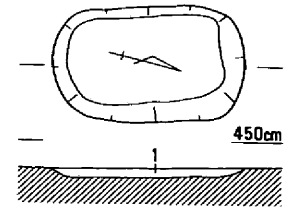
- 1. 灰褐色微砂
- 2. 暗灰色微砂
- 3. 灰色微砂
- 4. 淡褐色微砂
- 5. 暗褐色微砂

土壤-176

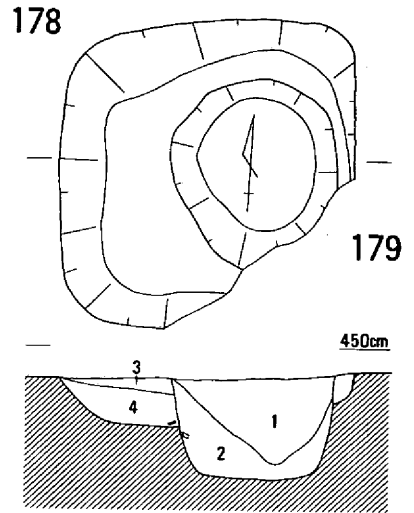




1. 灰褐色微砂
土壤-180

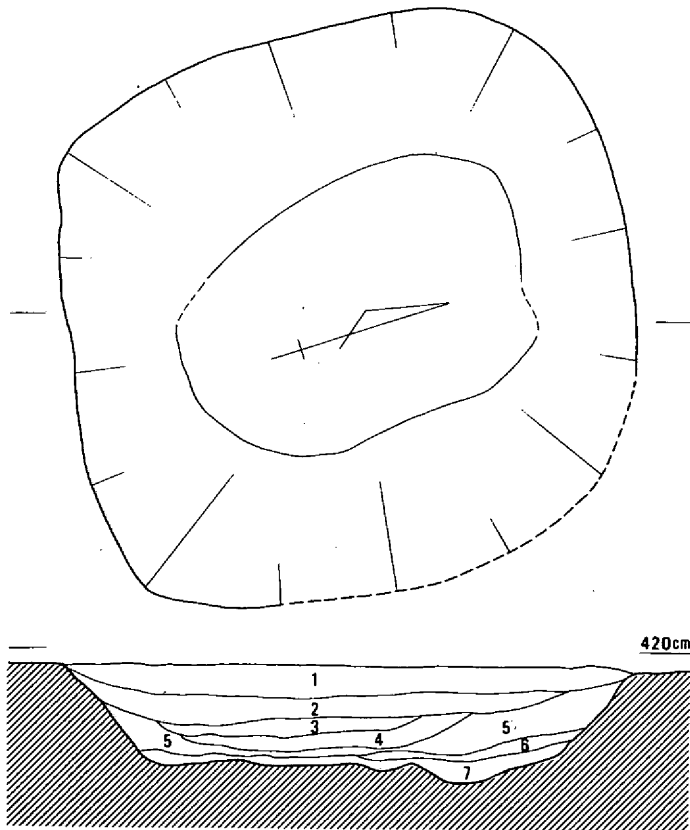


1. 灰褐色微砂
土壤-177



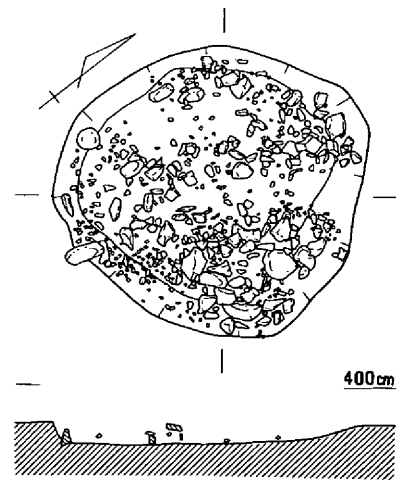
1. 明灰褐色微砂土 3. 灰褐色微砂土
2. 暗灰褐色微砂土 4. 淡褐色微砂土

土壤-178·179



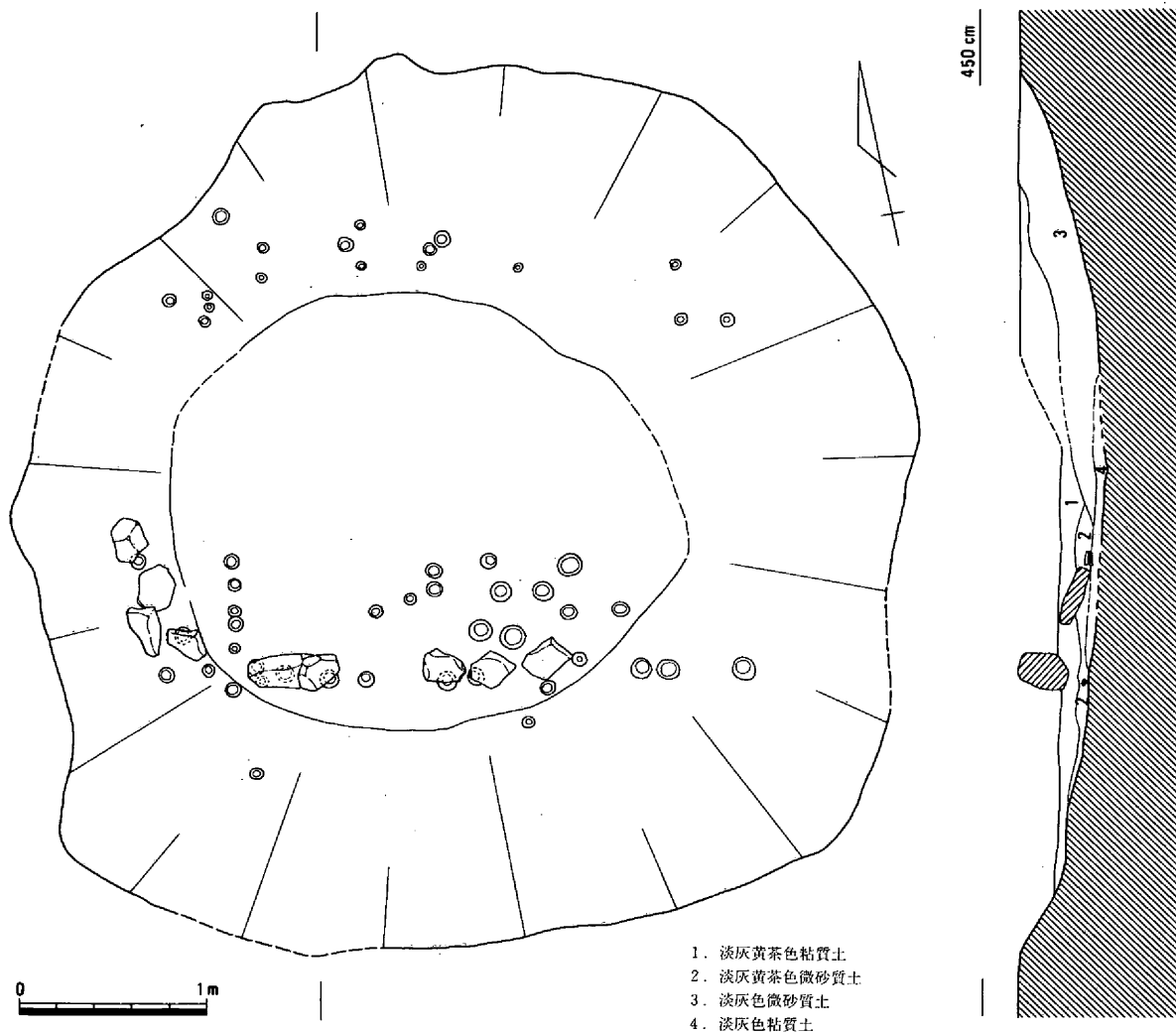
1. 灰黄褐色砂质土 4. 灰褐色砂质土 6. 灰白色砂质粘土
2. 灰黄褐色砂质土 5. 黄灰色砂质土 7. 黄灰白色砂质土
3. 灰褐色砂质土

土壤-181

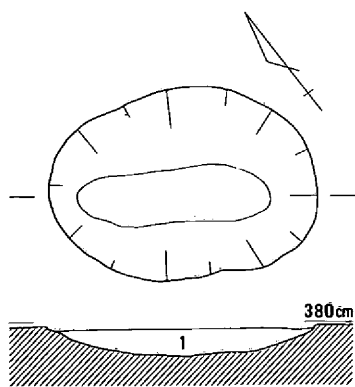


土壤-182



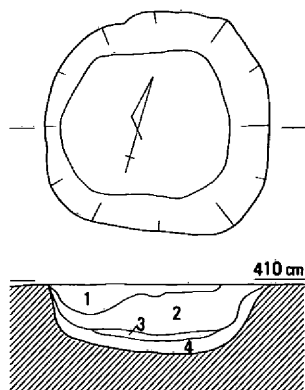


土壤-183



1. 暗茶灰色粘质微砂

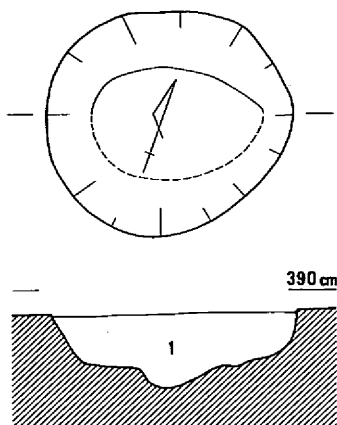
土壤-184



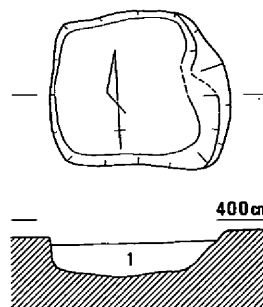
1. 暗灰茶色粘质微砂 3. 暗灰色粘质土
2. 暗茶灰色粘质微砂 4. 暗灰色粘质微砂

土壤-185

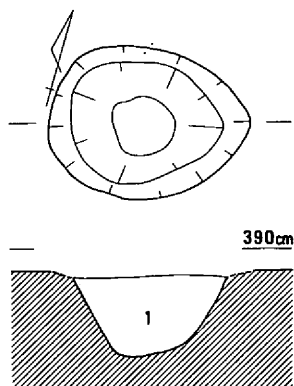




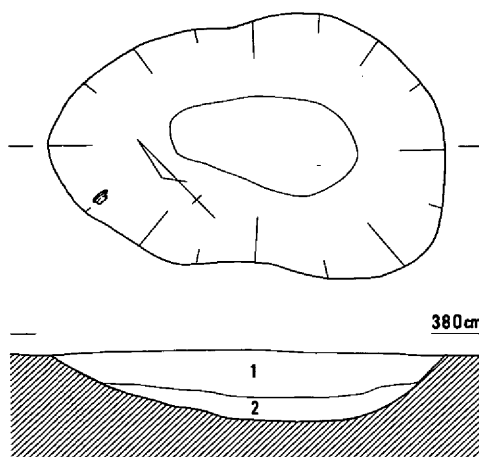
1. 暗茶灰色粘質微砂
土壌-186



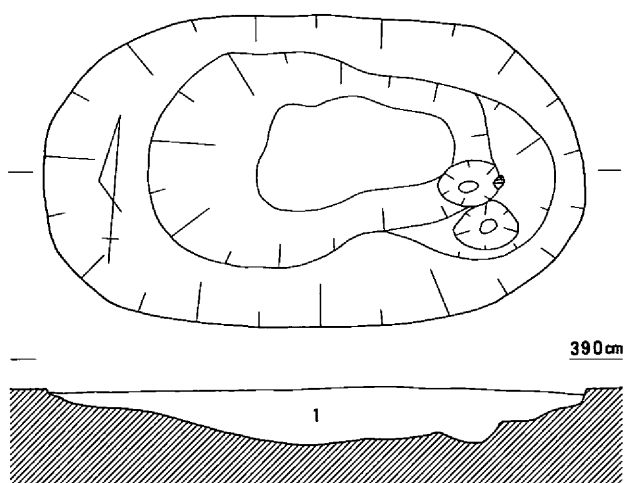
1. 粘質微砂 (グライ化)
土壌-187



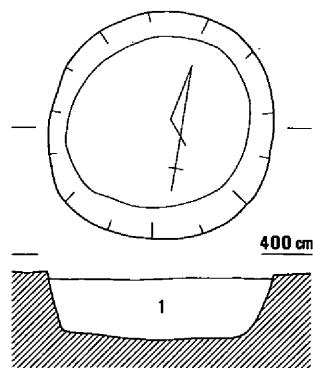
1. 暗茶灰色粘質微砂
土壌-188



1. 暗茶灰色粘質微砂 2. 暗茶灰色粘質微砂
土壌-189

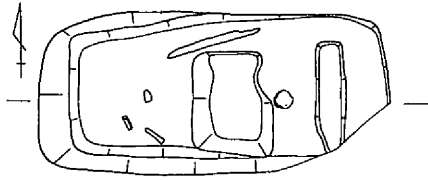


1. 暗茶灰色粘質微砂
土壌-190

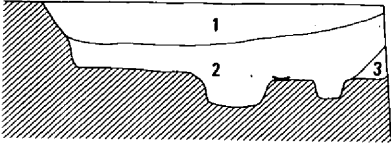


1. 暗茶灰色粘質微砂
土壌-191



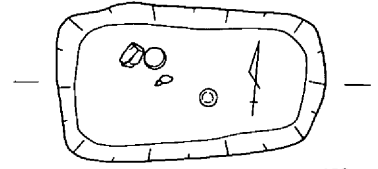


450cm

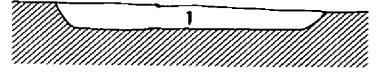


- 1. 灰白色粘质土层
- 2. 灰白色砂质土层
- 3. 暗灰白色砂层

土壙墓—5

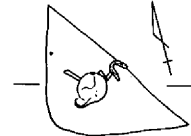


450cm



- 1. 灰褐色微砂

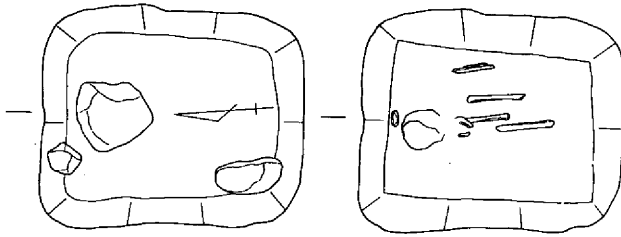
土壙墓—6



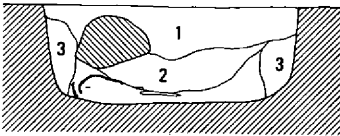
430cm



土壙墓—7

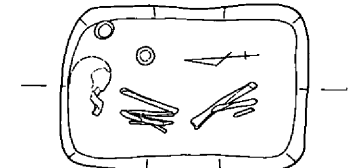


490cm

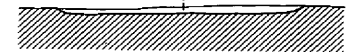


- 1. 淡褐灰色微砂
- 2. 淡褐色微砂
- 3. 淡茶色微砂

土壙墓—9

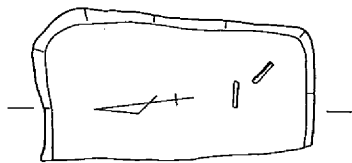


440cm



- 1. 灰褐色微砂

土壙墓—8

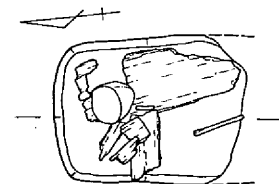


415cm



- 1. 灰褐色微砂

土壙墓—10



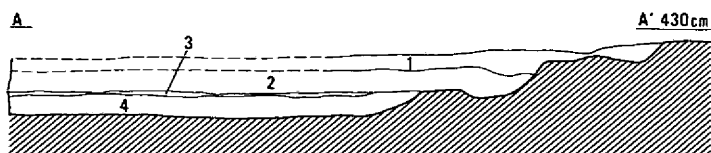
415cm



- 1. 灰褐色微砂

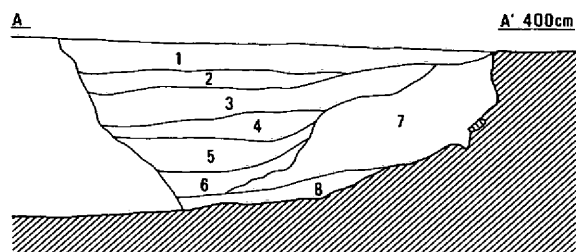
土壙墓—11





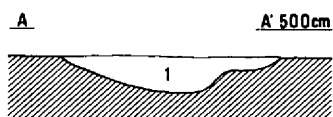
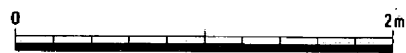
- 1. 淡灰白色砂質土 (洪水砂)
- 2. 淡灰色粘質土 (水田層)
- 3. 鉄、マンガ層
- 4. 淡灰色粘質土

近世水田



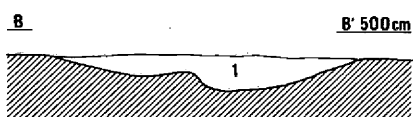
- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 暗青灰色砂質土
- 3. 青灰色微砂質土
- 4. 淡青灰色砂質土
- 5. 緑青色砂質土
- 6. 青灰色砂質土
- 7. 青灰色粘質土
- 8. 暗青灰色微砂質土

溝-70



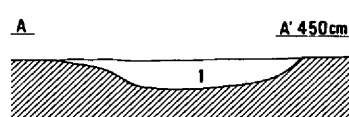
- 1. 灰褐色微砂

溝-35



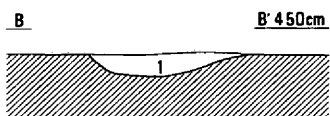
- 1. 灰褐色微砂

溝-35



- 1. 灰褐色微砂

溝-36

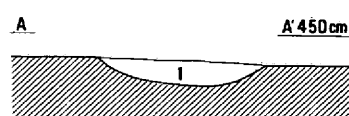


- 1. 灰褐色微砂

溝-36

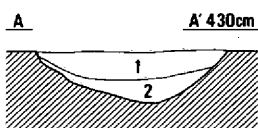


溝-36



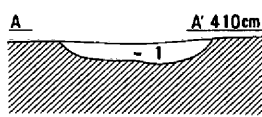
- 1. 暗灰褐色微砂

溝-37



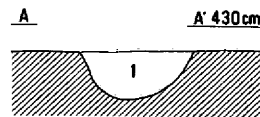
- 1. 暗褐色砂泥
- 2. 暗茶褐色砂泥

溝-38



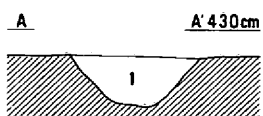
- 1. 暗灰茶色粘質微砂

溝-72



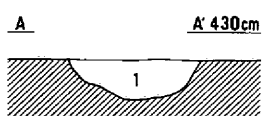
- 1. 暗灰褐色粘質土

溝-42



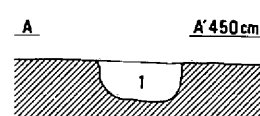
- 1. 暗灰褐色粘質土

溝-43



- 1. 暗灰褐色粘質土

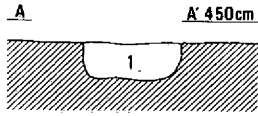
溝-44



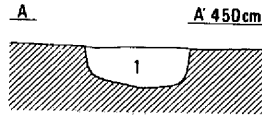
- 1. 灰褐色砂質土

溝-45

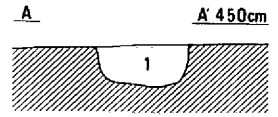




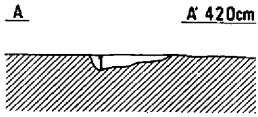
1. 灰褐色砂質土
溝-46



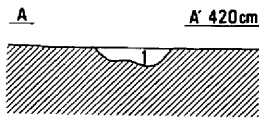
1. 灰褐色砂質土
溝-47



1. 灰褐色砂質土
溝-48



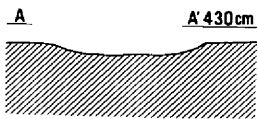
1. 灰褐色微砂
溝-49



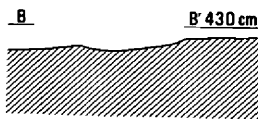
1. 灰褐色微砂
溝-50



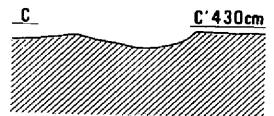
溝-56



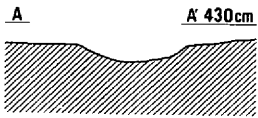
溝-57



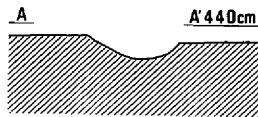
溝-57



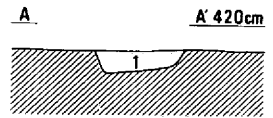
溝-57



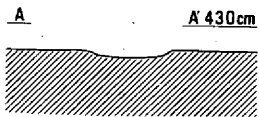
溝-62



溝-63



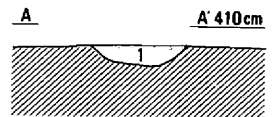
1. 明褐色微砂
溝-64



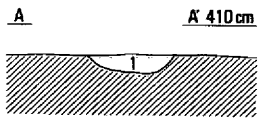
溝-68



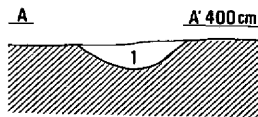
溝-69



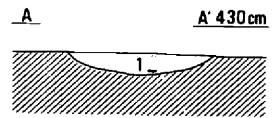
1. 褐黄色砂泥(鉄分多)
溝-80



1. 褐黄色砂泥
溝-81

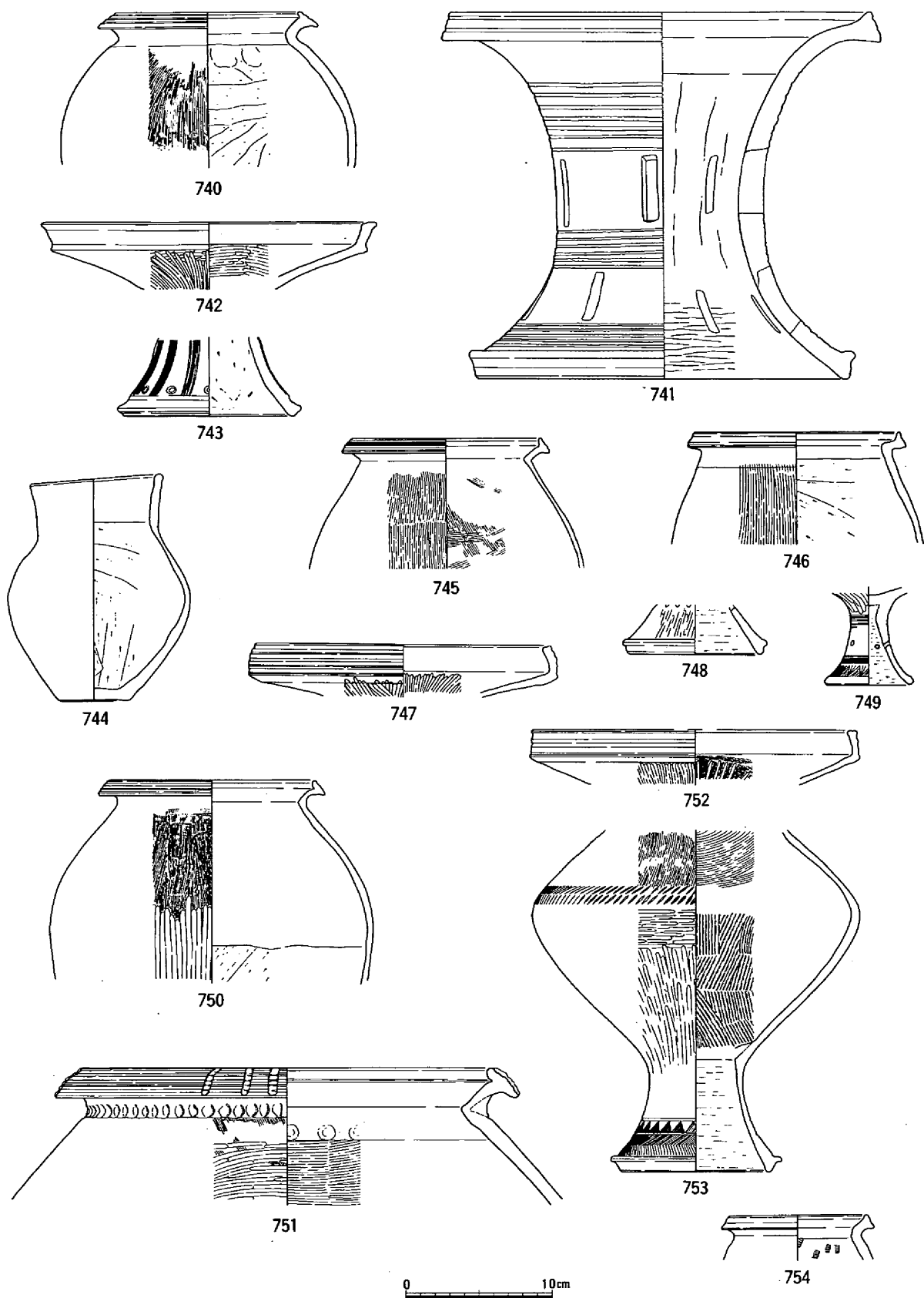


1. 淡黄褐色土
溝-73



1. 暗灰色粘質微砂
溝-76

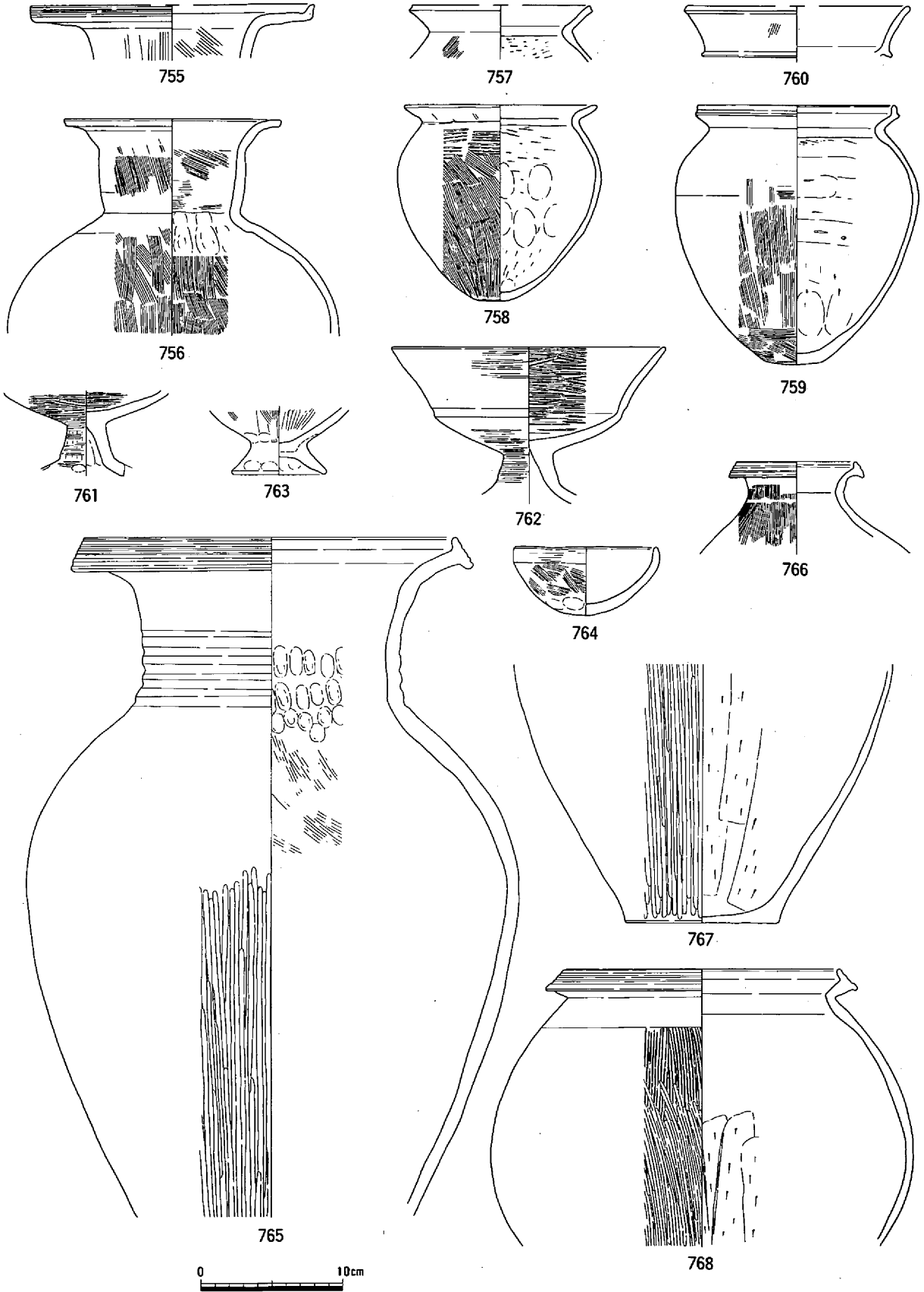




竖穴住居—14 740~741
竖穴住居—19 745·747~749

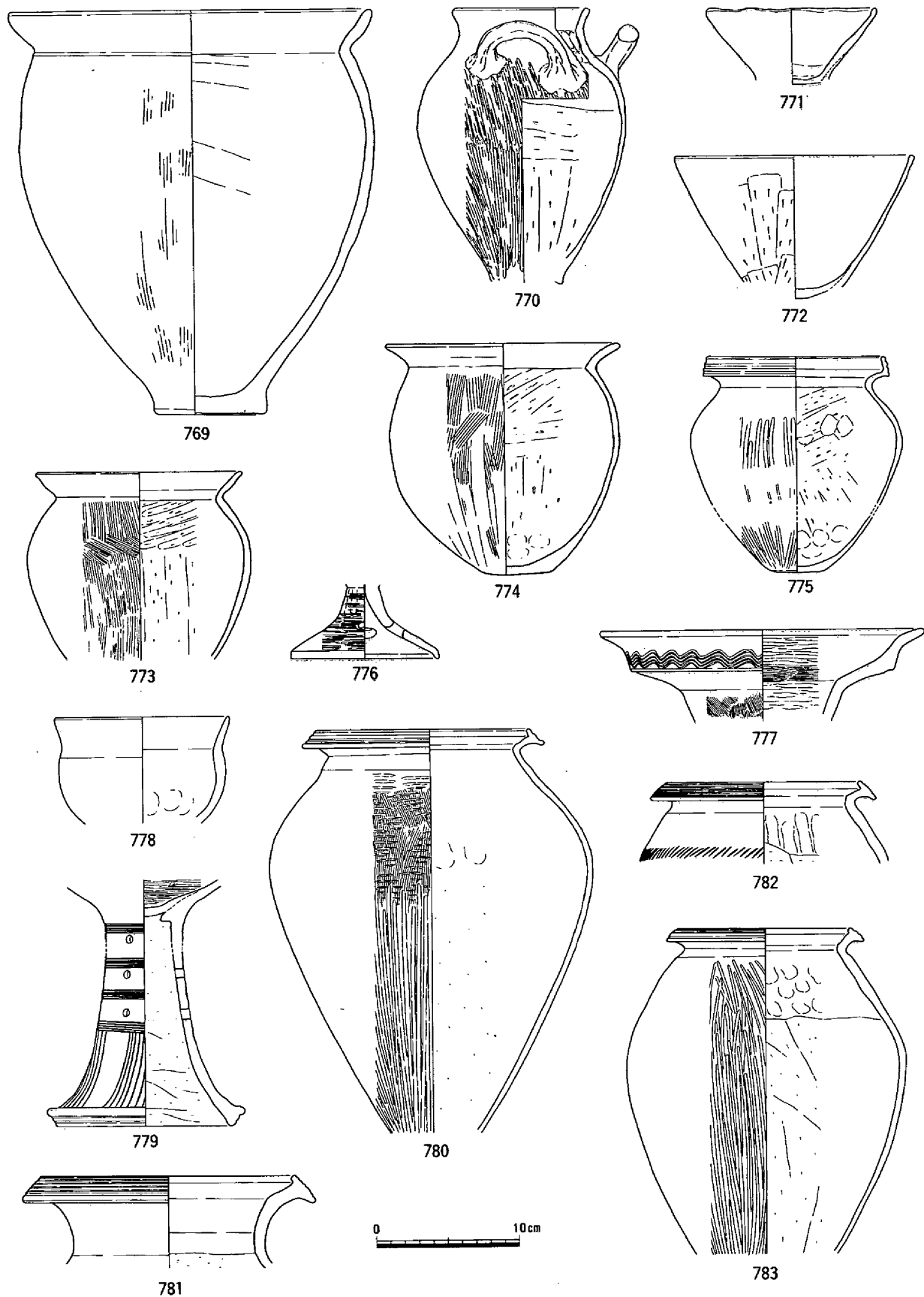
竖穴住居—16 742~743
竖穴住居—20 750~753

竖穴住居—18 744·746
竖穴住居—22 754



豎穴住居—29 755~764

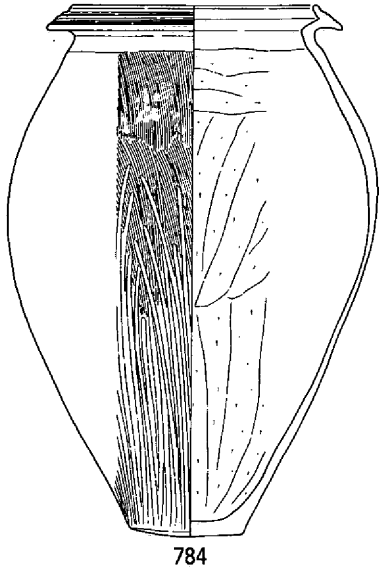
豎穴住居—31 765~768



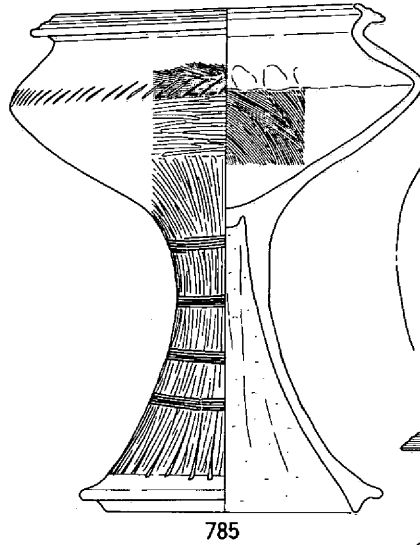
竖穴住居—31 769~772
袋状土壙—1 779

竖穴住居—30 773~776
袋状土壙—3 780

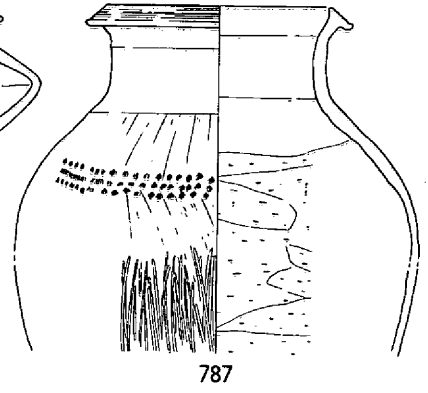
井戸—1 777~778
袋状土壙—8 781~783



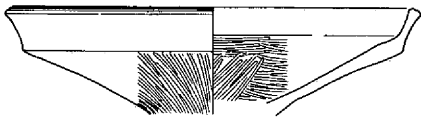
784



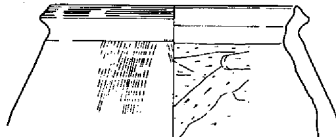
785



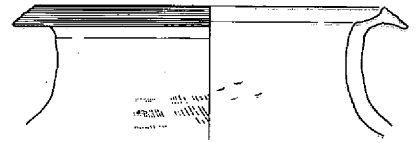
787



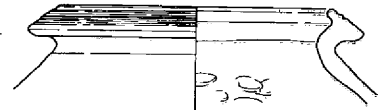
786



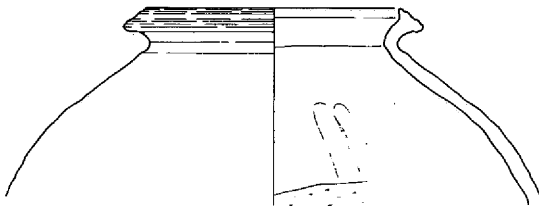
789



788



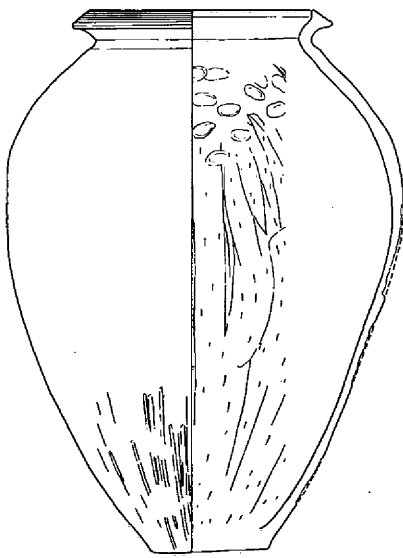
790



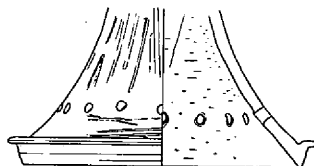
792



791



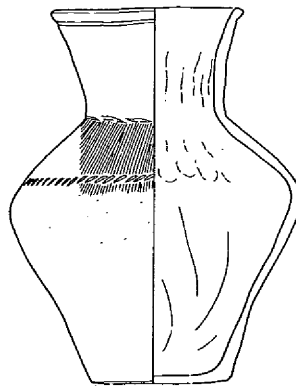
793



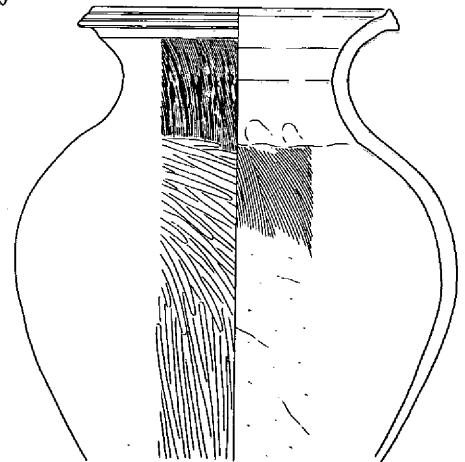
795



794



796



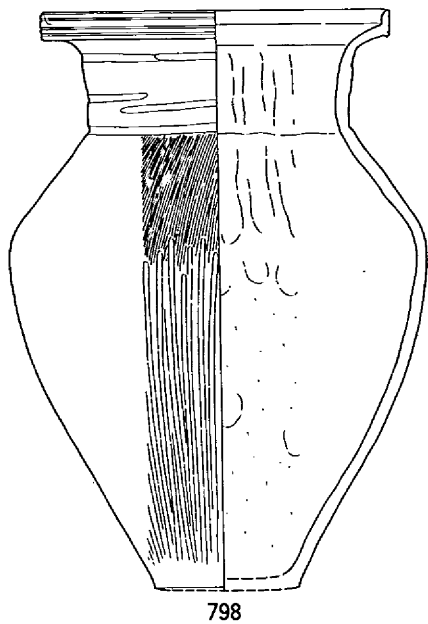
797



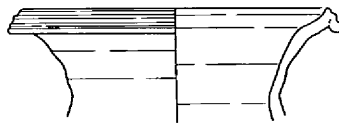
袋状土壙—8 784 ~786

袋状土壙—11 787~795

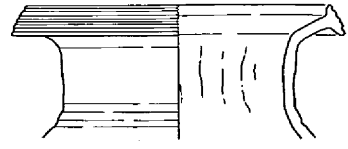
袋状土壙—10 796~797



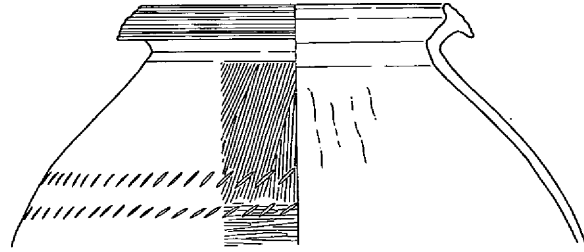
798



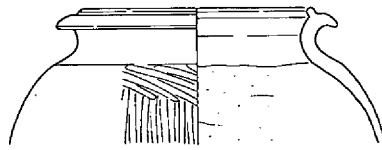
799



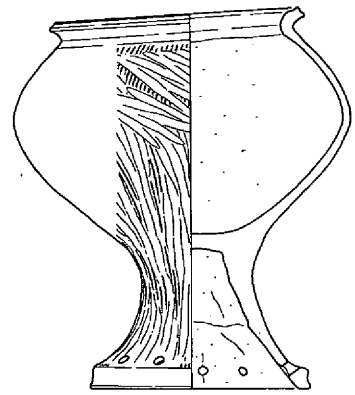
800



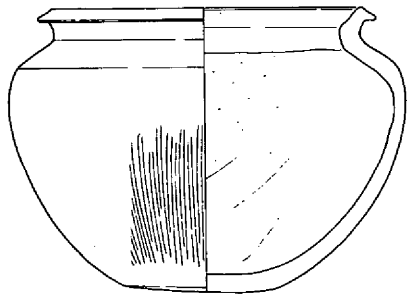
801



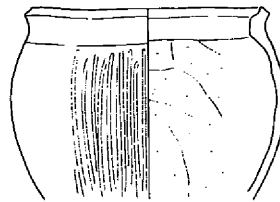
802



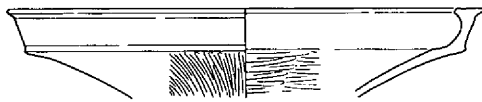
805



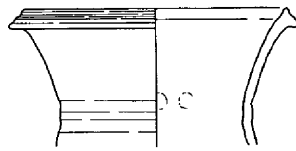
803



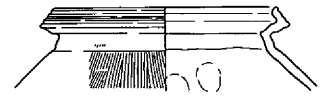
804



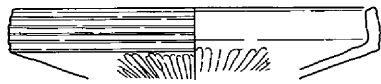
806



807



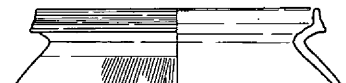
808



810



811



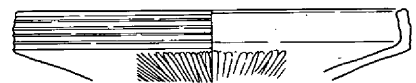
809



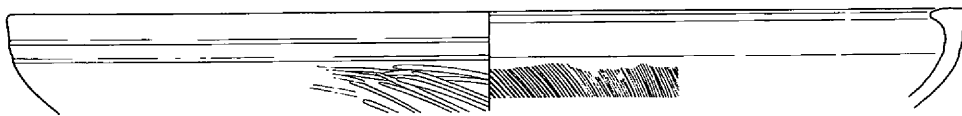
813



814



812



815

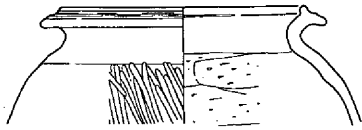


袋状土壙—10 798~806

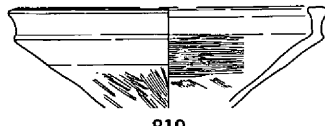
袋状土壙—13 807~815



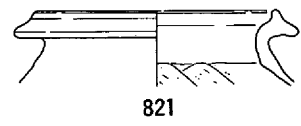
816



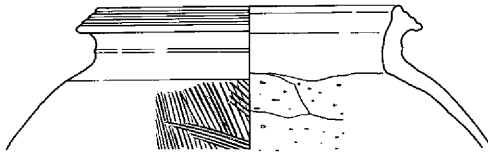
817



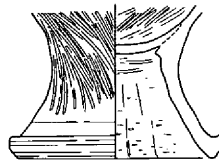
819



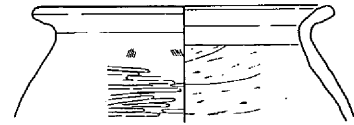
821



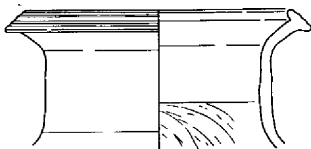
818



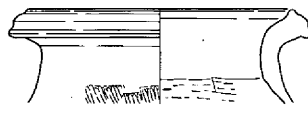
820



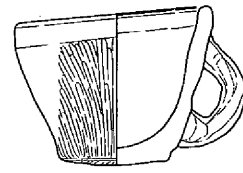
822



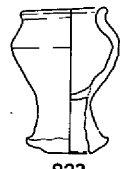
824



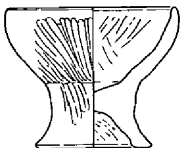
825



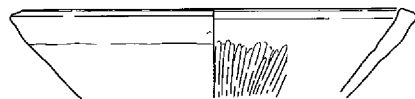
828



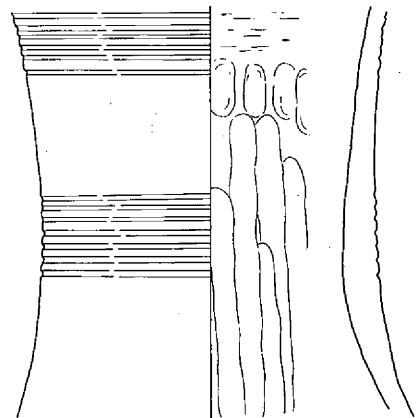
823



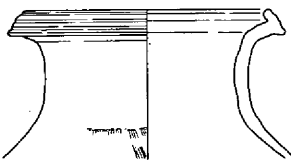
826



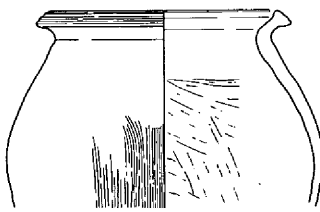
827



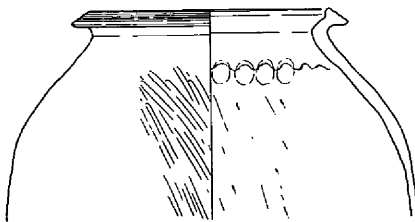
833



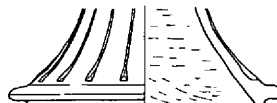
829



830



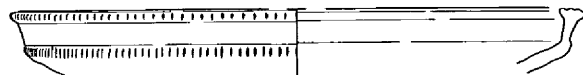
831



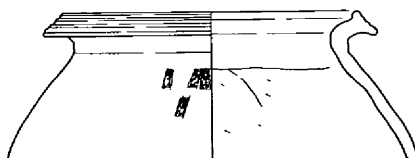
832



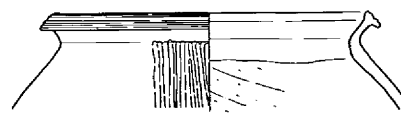
834



837



835



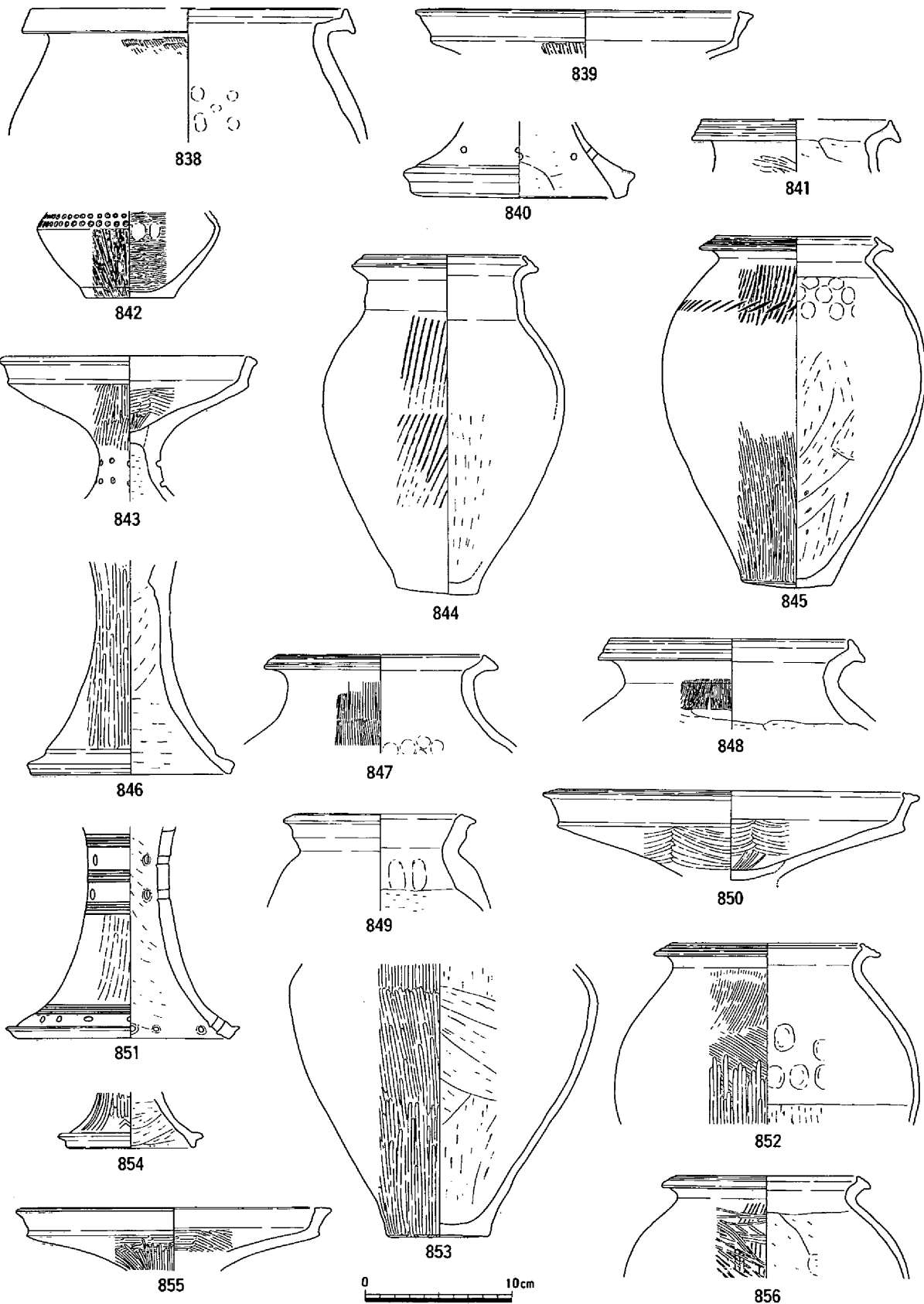
836



袋状土壙—13 816
 袋状土壙—17 820~823
 袋状土壙—20 834~837

袋状土壙—14 817~818
 袋状土壙—18 824~828

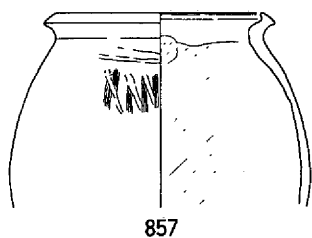
袋状土壙—16 819~820
 袋状土壙—19 829~833



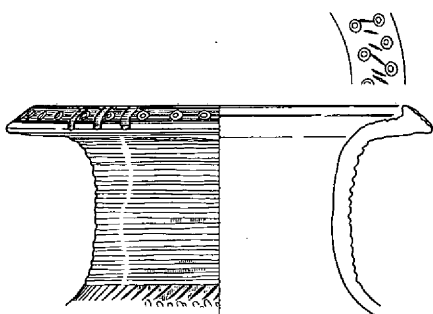
袋状土壙—22 838~840
 袋状土壙—27 845~846
 袋状土壙—32 856

袋状土壙—24 841~843
 袋状土壙—26 847~851

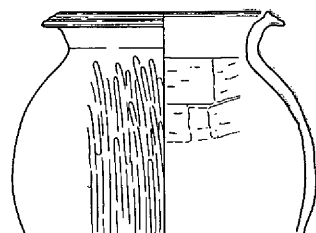
袋状土壙—25 844
 袋状土壙—28 852~855



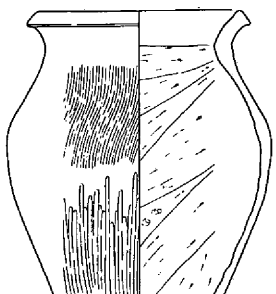
857



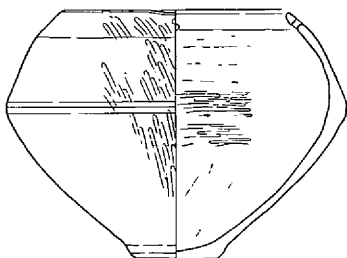
859



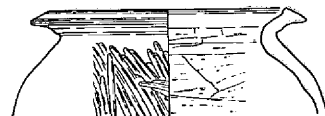
860



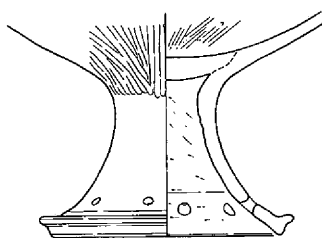
858



862



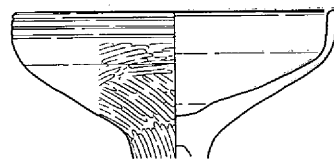
863



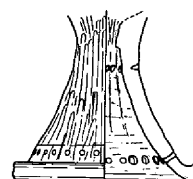
861



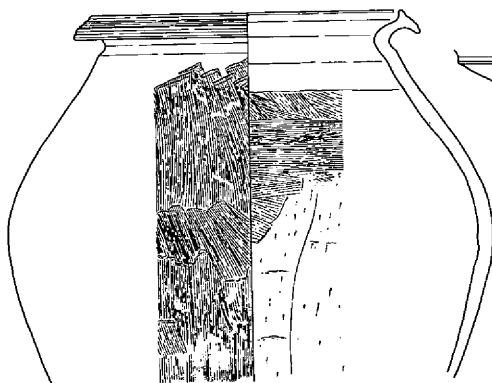
867



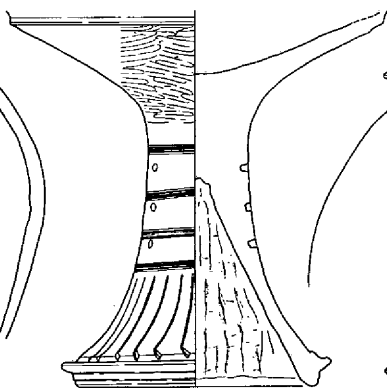
864



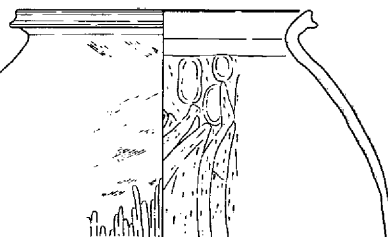
865



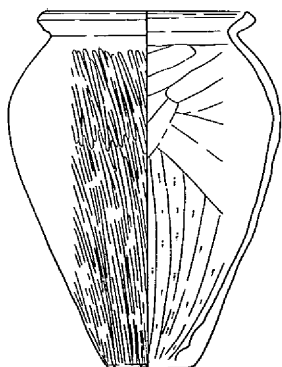
866



868



869



870



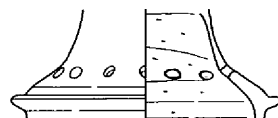
871



873



872



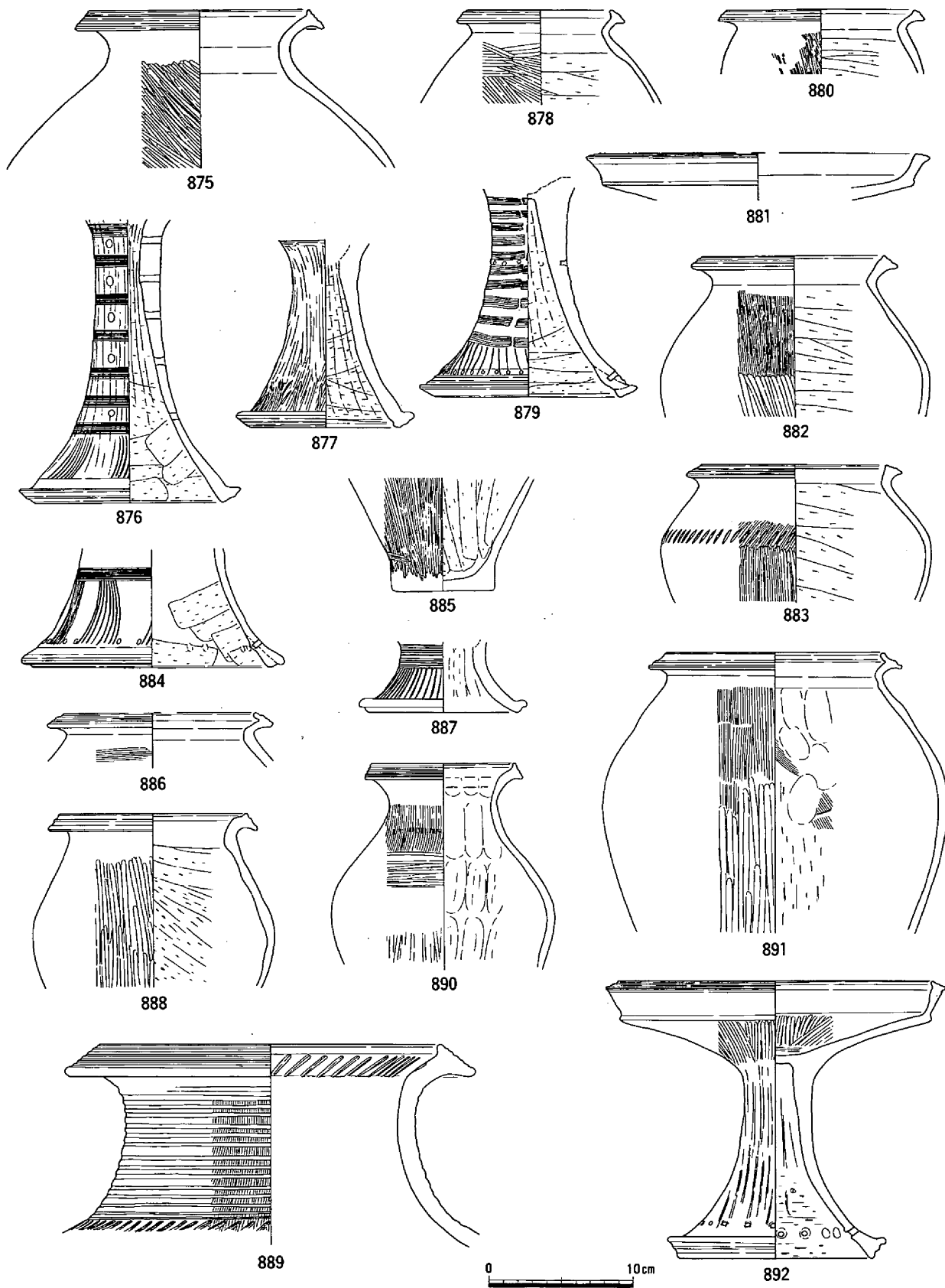
874



袋状土壙—32 857
袋状土壙—36 862~865
袋状土壙—39 870~874

袋状土壙—31 858~860
袋状土壙—37 866~868

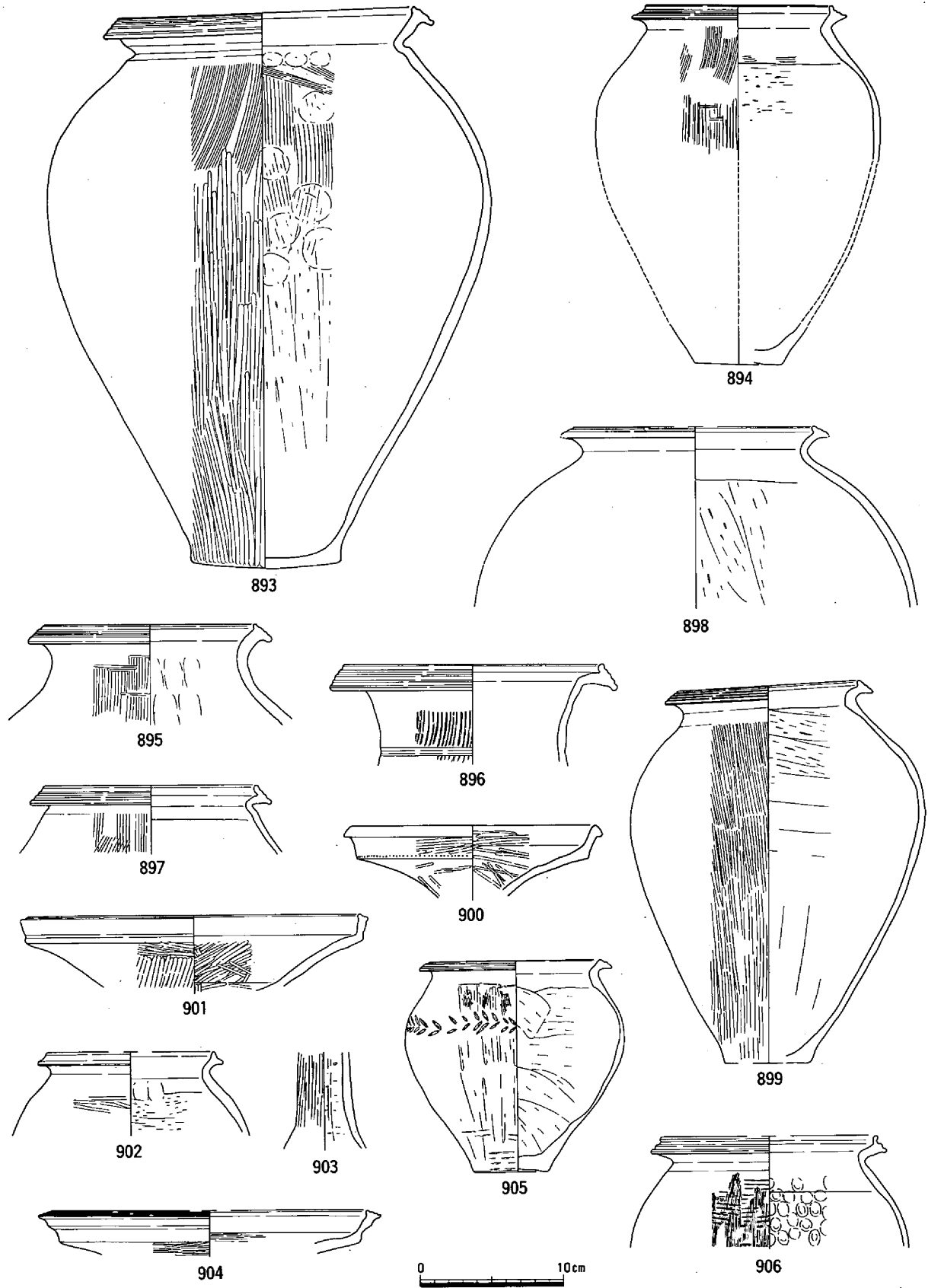
袋状土壙—33 861
袋状土壙—38 869



袋状土壙—40 857~877
 袋状土壙—49 882~883
 袋状土壙—52 886~887
 袋状土壙—56 890~892

袋状土壙—42 878~879
 袋状土壙—50 884
 袋状土壙—53 888

袋状土壙—46 880~881
 袋状土壙—51 885
 袋状土壙—54 889



袋状土壙—56 893

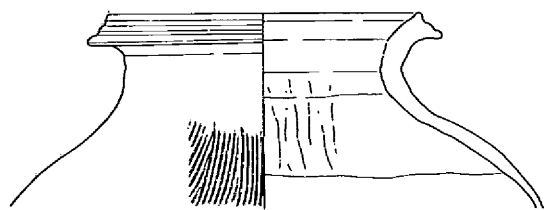
袋状土壙—59 898~901

袋状土壙—57 894

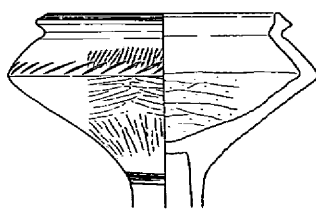
袋状土壙—61 902~904

袋状土壙—58 895~897

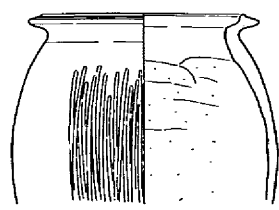
袋状土壙—69 905~906



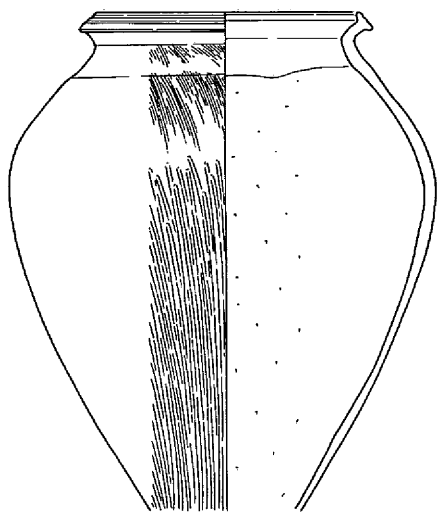
907



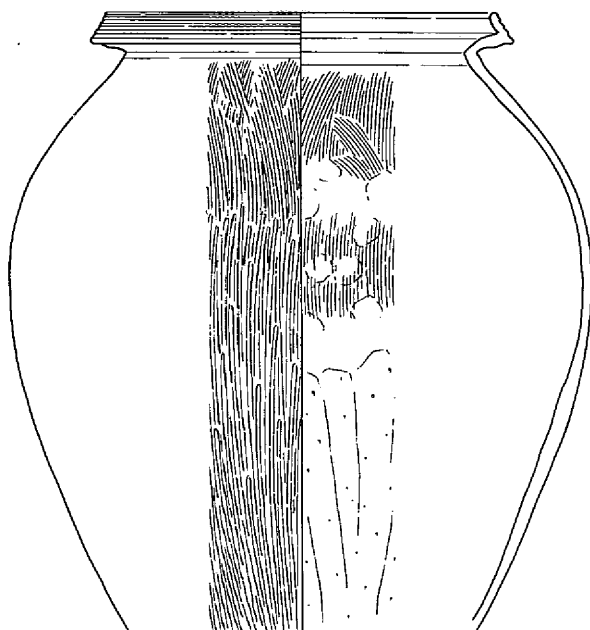
908



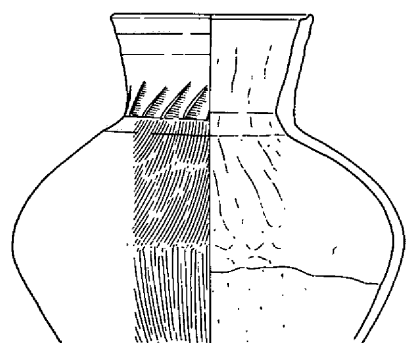
909



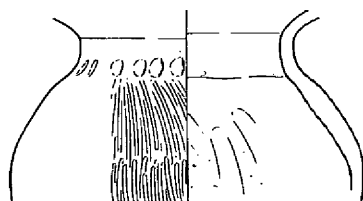
910



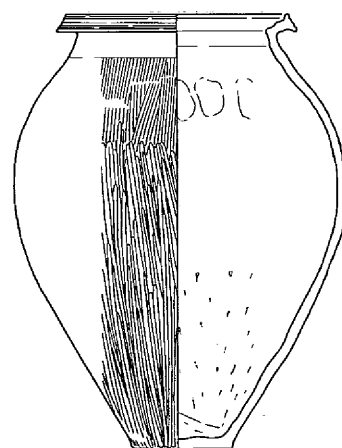
911



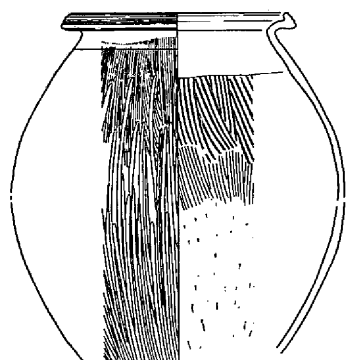
912



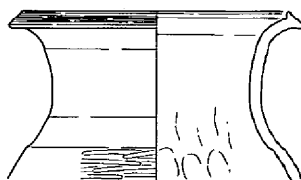
915



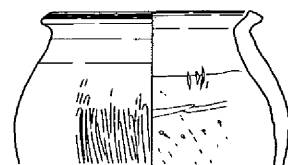
914



913



916



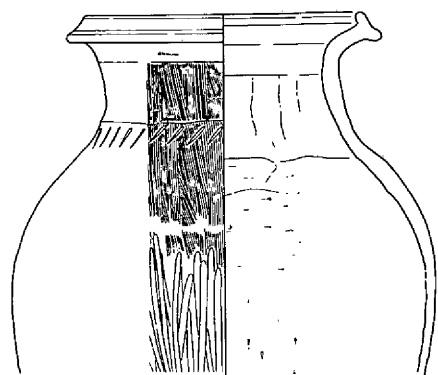
917



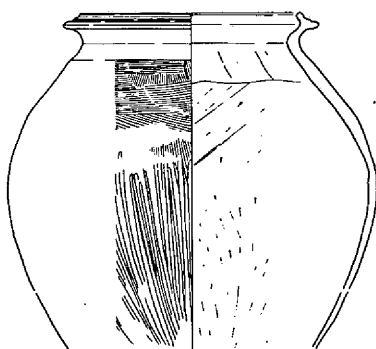
土壤—41 907~909
土壤—49 912

土壤—45 910
土壤—52 913~914

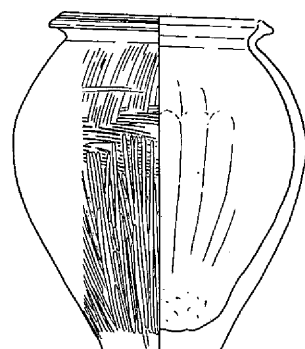
土壤—48 911
土壤—53 915~917



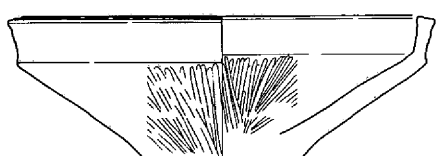
918



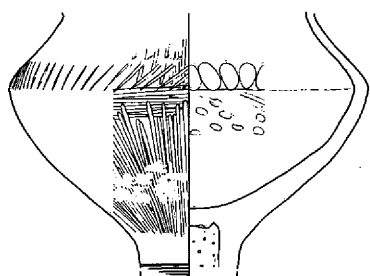
919



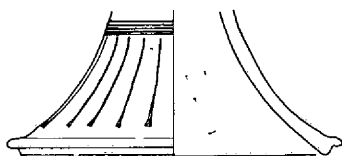
920



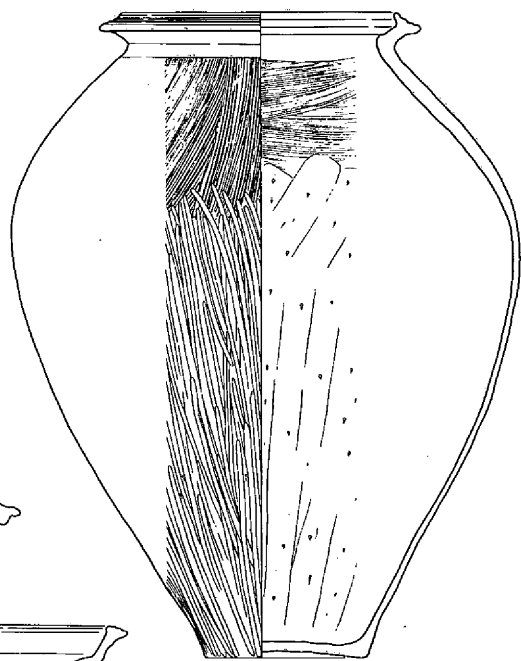
923



922



924



921



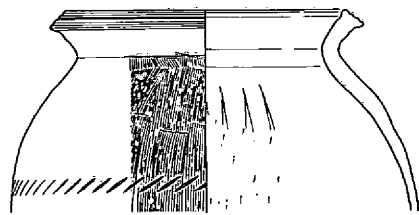
926



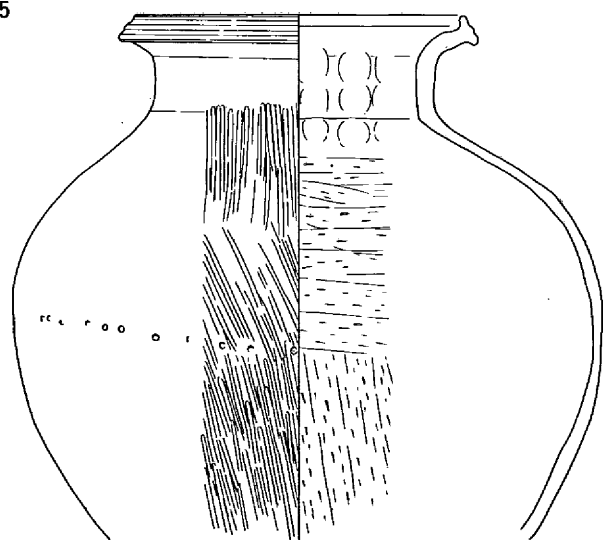
925



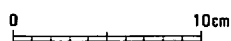
928



929



927



土壤—53 918~924
土壤—65 928

土壤—57 925~926
土壤—67 929

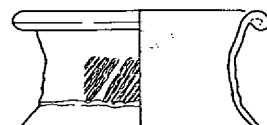
土壤—61 927



930



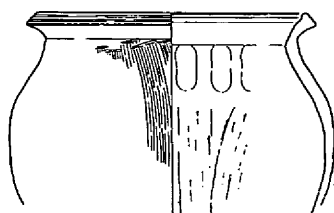
932



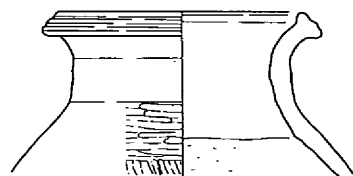
934



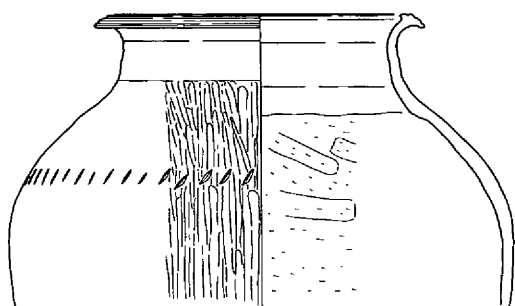
933



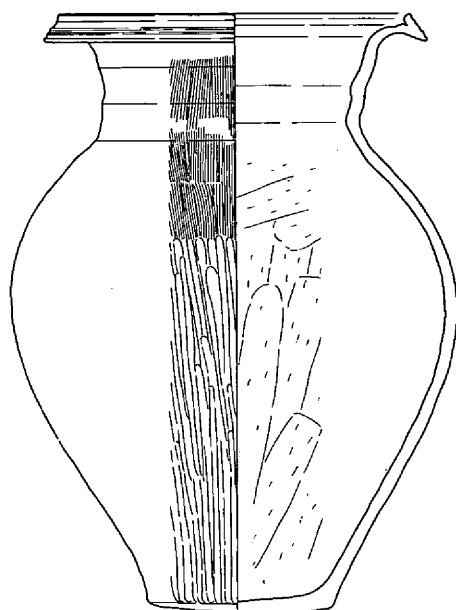
931



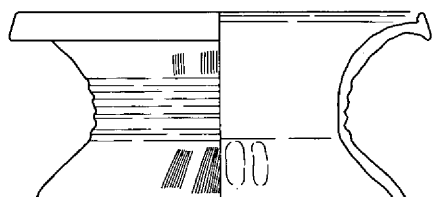
935



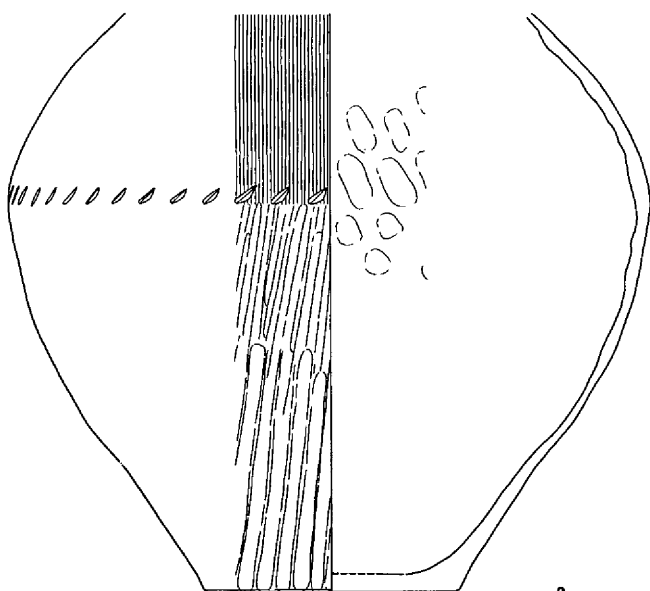
936



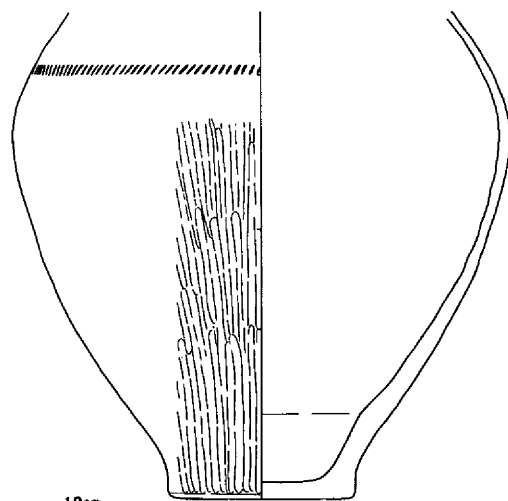
937



938



939



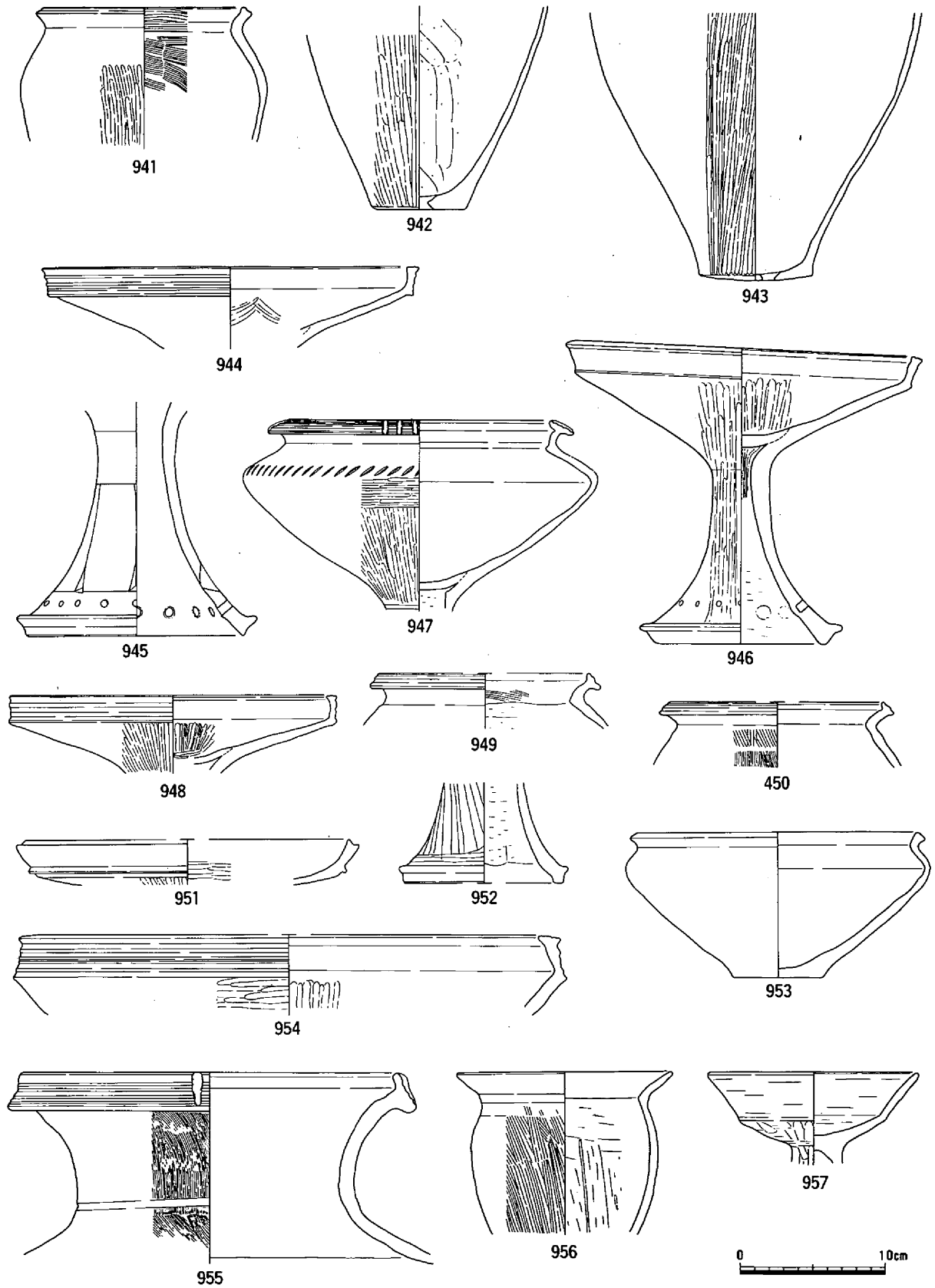
940



土壙—67 930~931

土壙—70·71 932~933

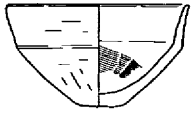
土壙—72 934~940



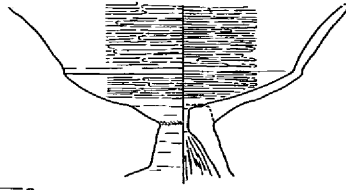
土壙—72 941~947
 土壙—80 950~952
 土壙—84 955

土壙—74 948
 土壙—81 953
 土壙—86 956~957

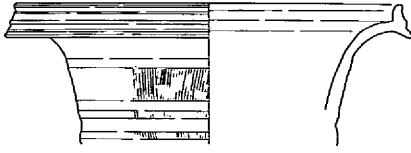
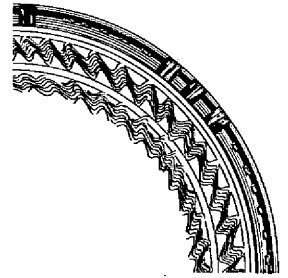
土壙—75 949
 土壙—82 954



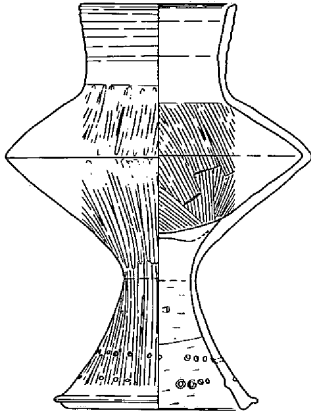
958



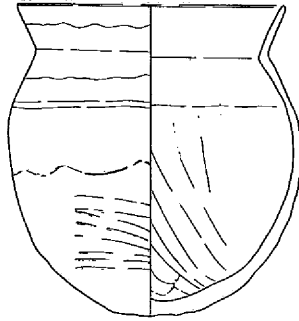
959



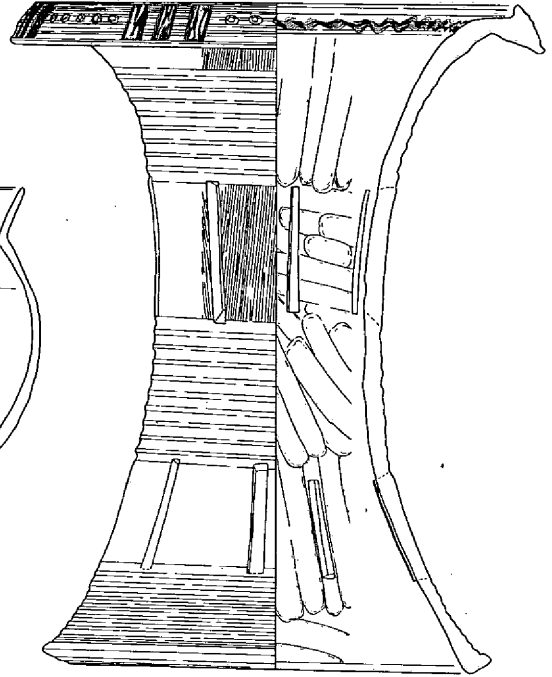
960



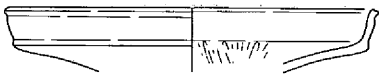
961



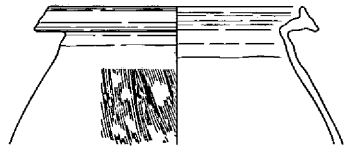
962



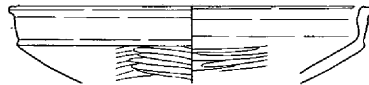
965



963



966



964



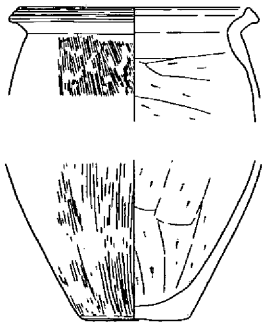
968



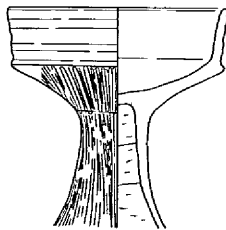
967



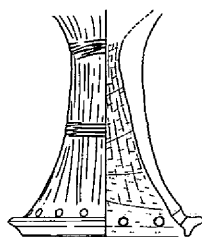
969



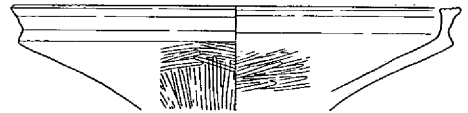
971



972



973



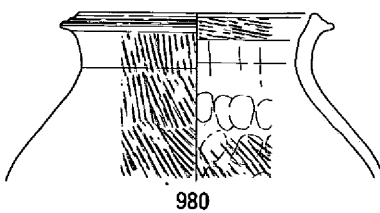
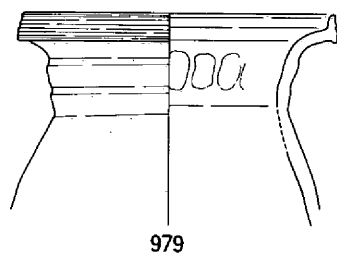
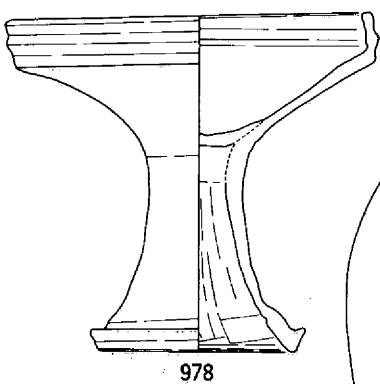
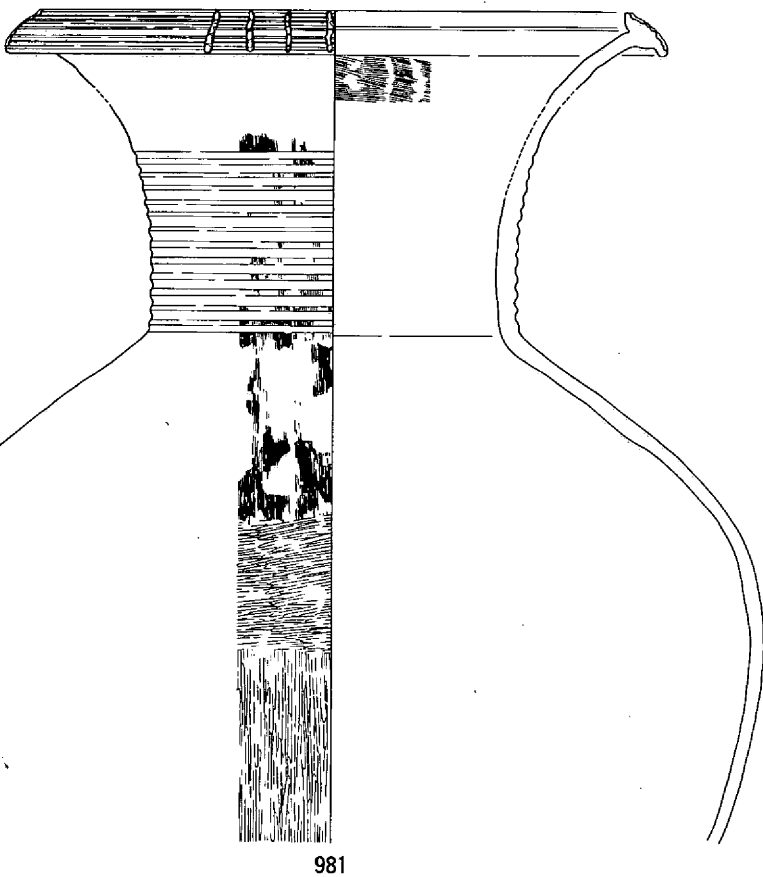
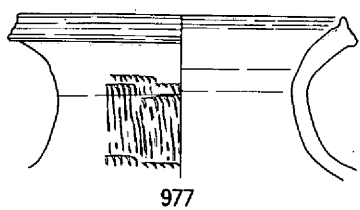
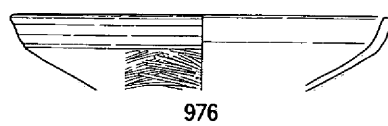
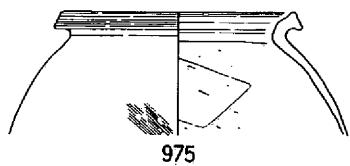
970



土壤—86 958·959
土壤—90 968~970

土壤—87 960~965
土壤—91 971~973

土壤—88 966·967



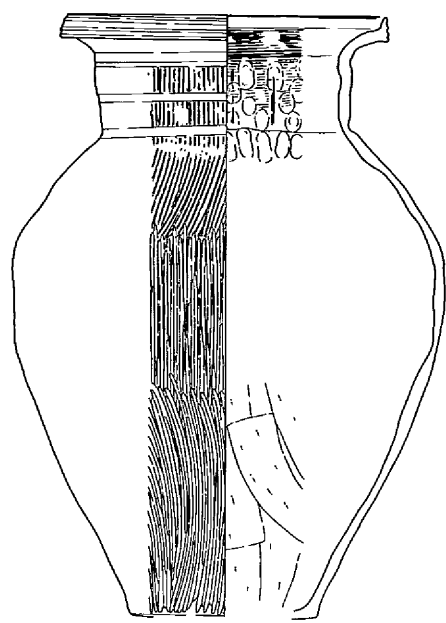
981

982

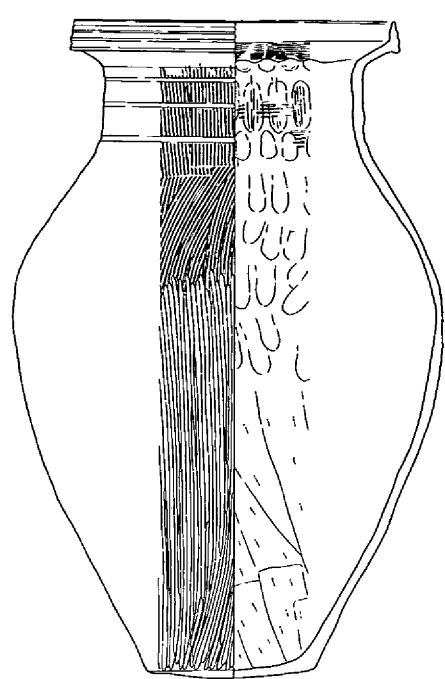
土壤—91 974
土壤—95 980

土壤—92 975 · 976
土壤—97 981 · 982

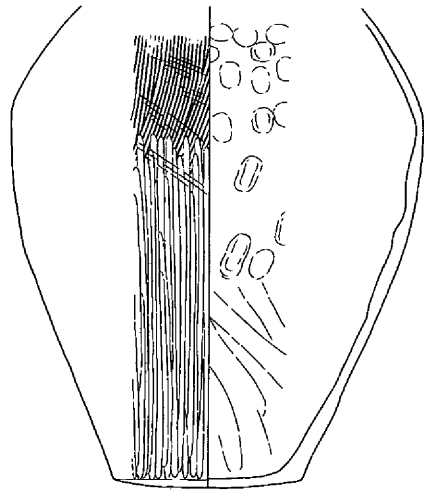
土壤—93 977~979



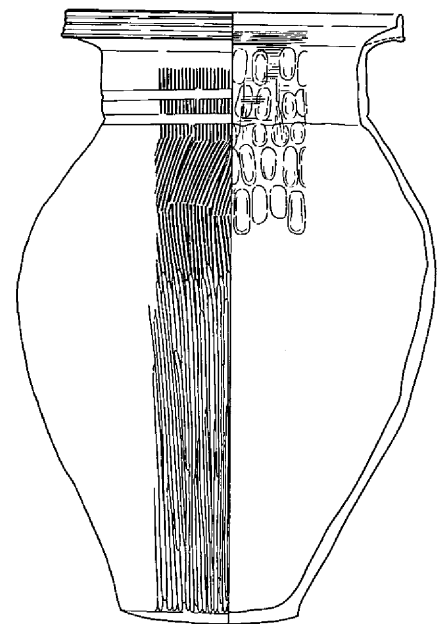
983



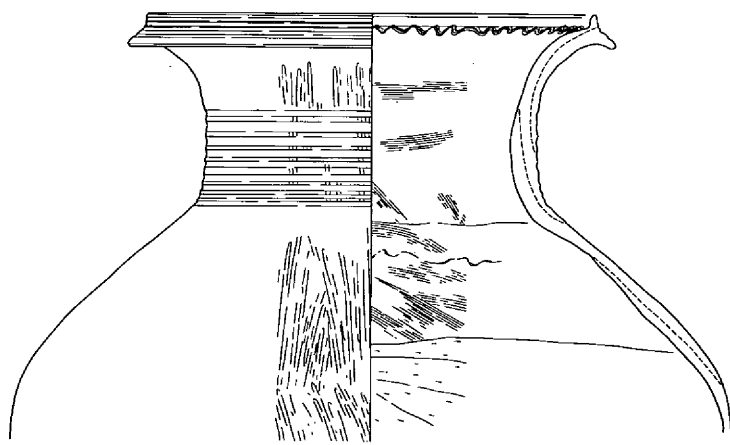
984



985

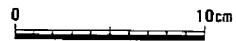
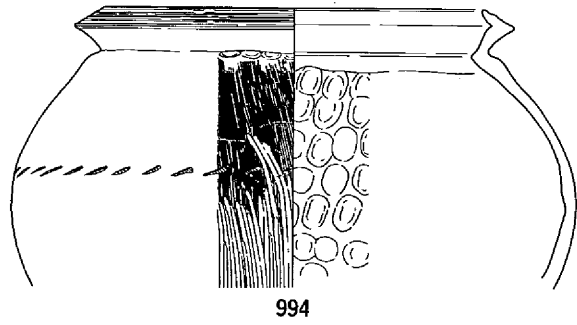
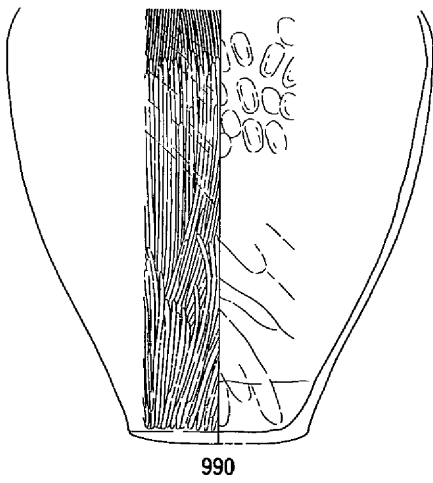
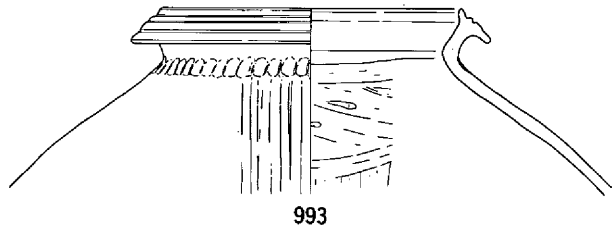
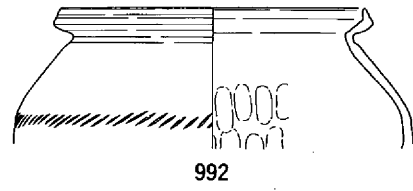
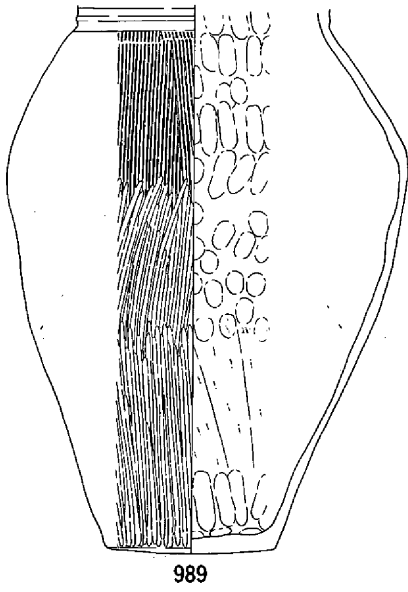
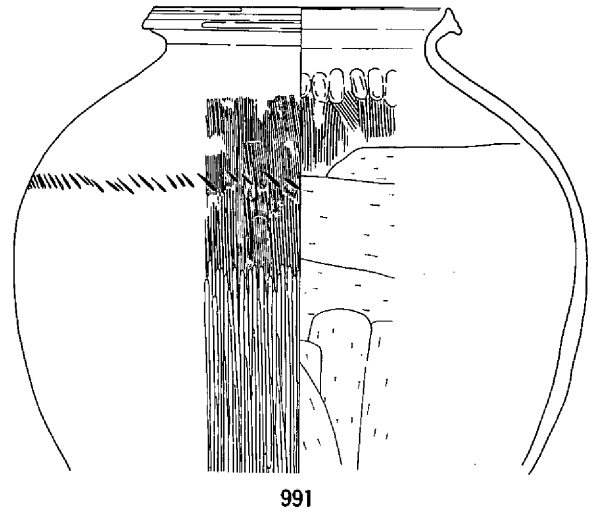
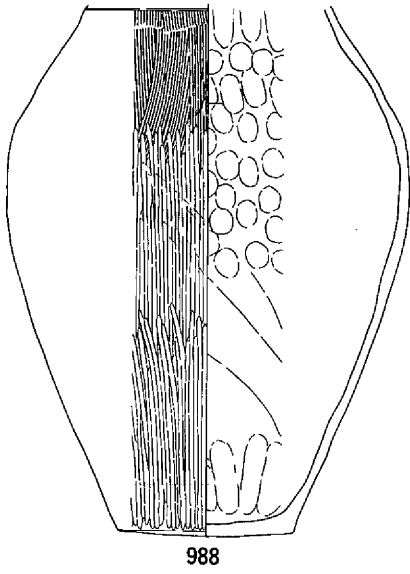


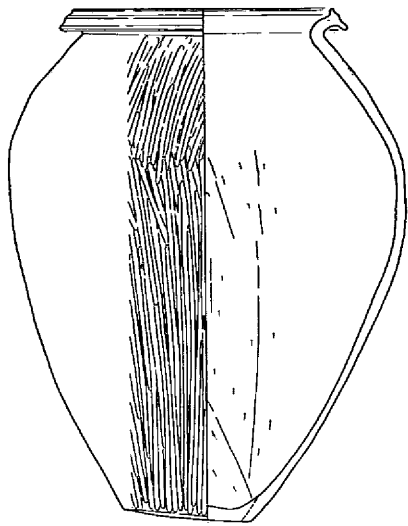
986



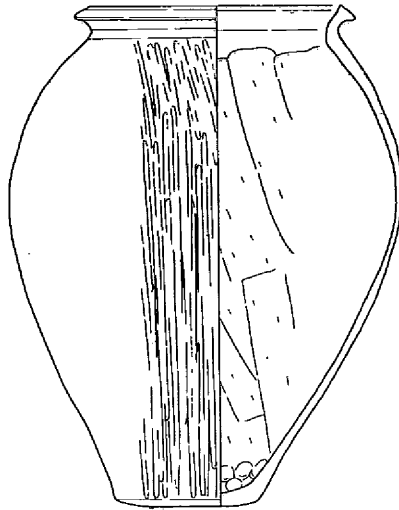
987



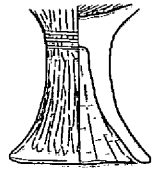




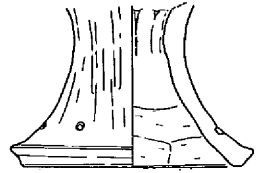
995



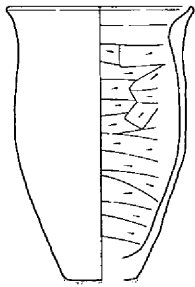
996



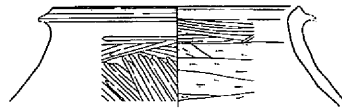
997



998



999



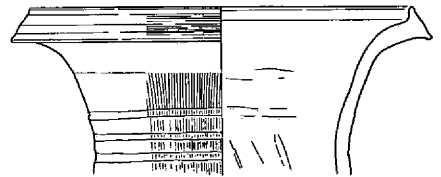
1000



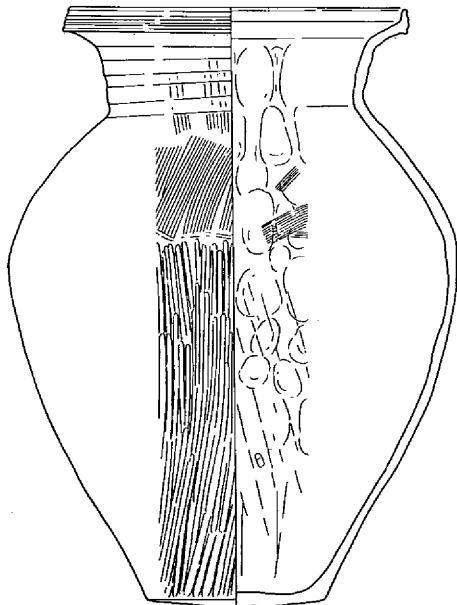
1001



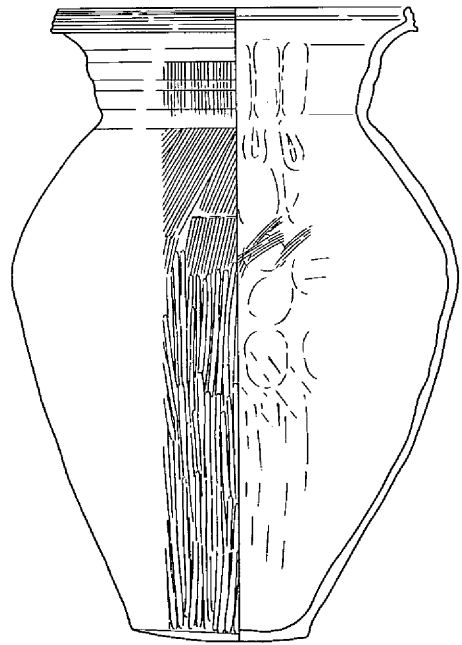
1002



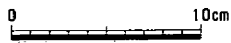
1003



1004



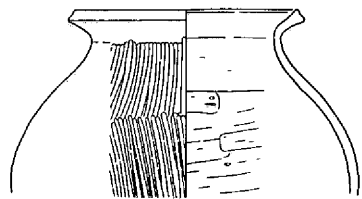
1005



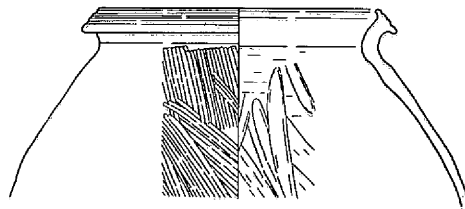
土壤—97 995~998
土壤—100 1002~1005

土壤—98 999

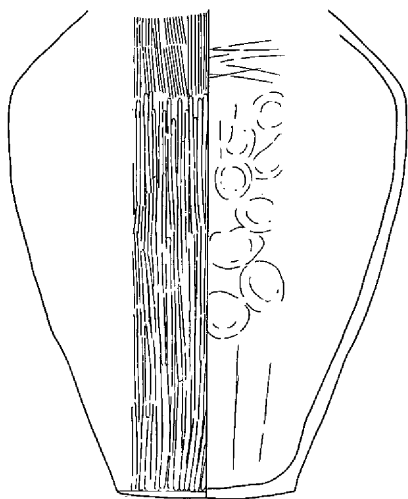
土壤—99 1000~1001



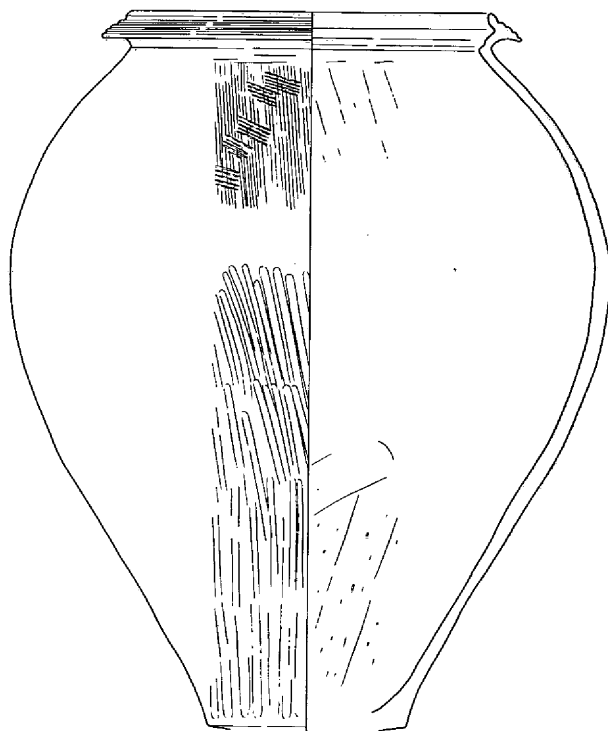
1006



1009



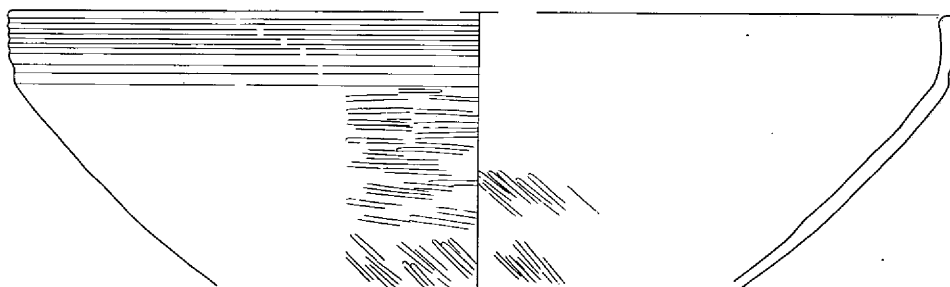
1007



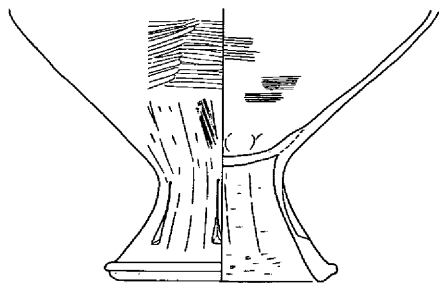
1010



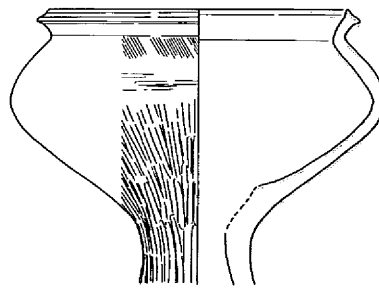
1008



1011

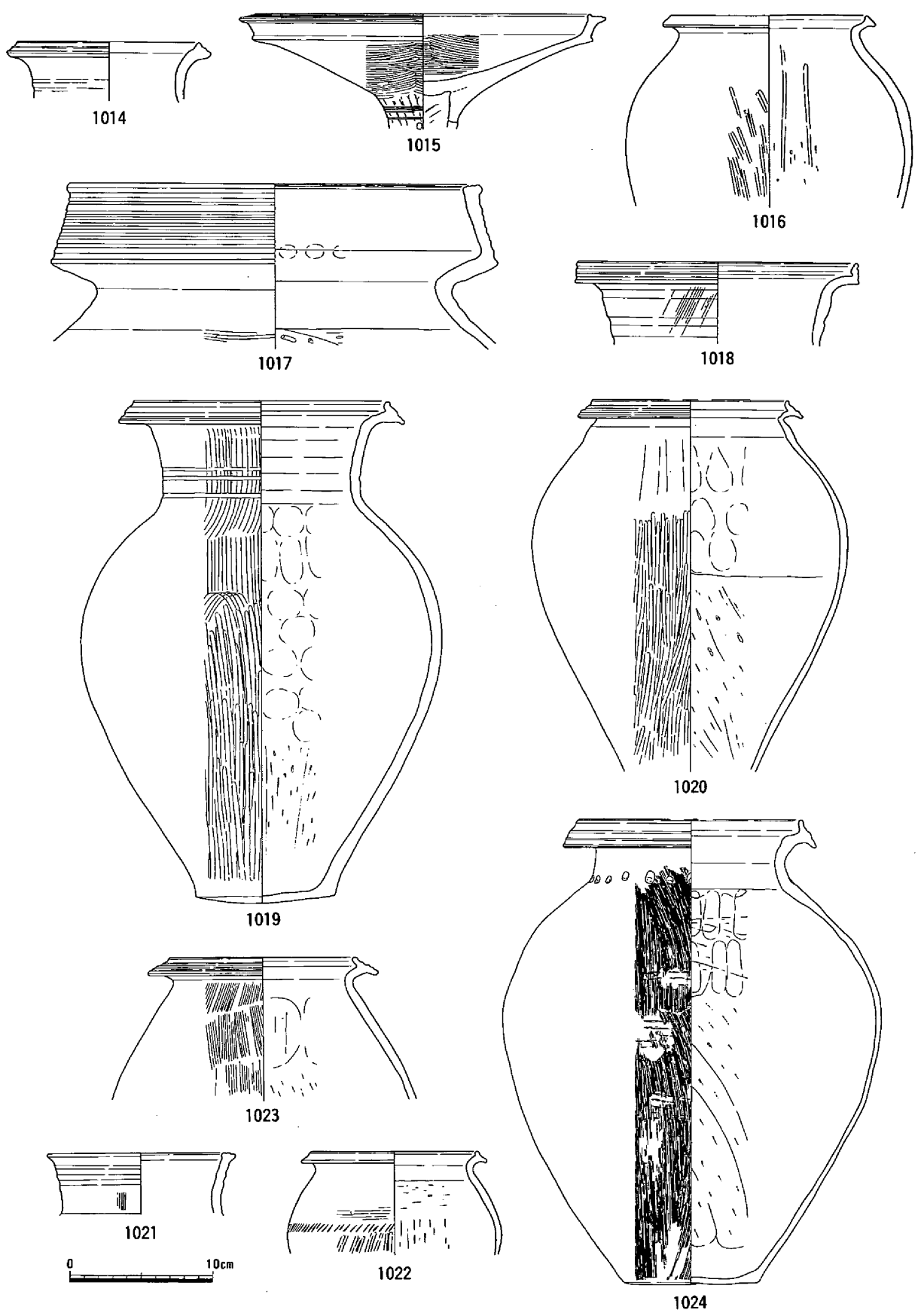


1012



1013

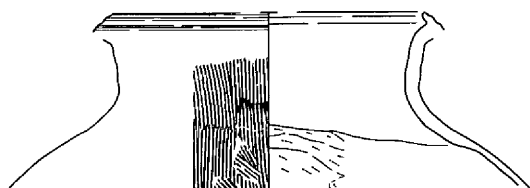




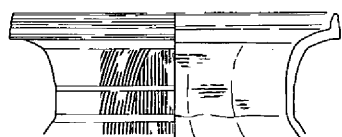
土壤—101 1014~1015
土壤—105 1024

土壤—102 1016~1020

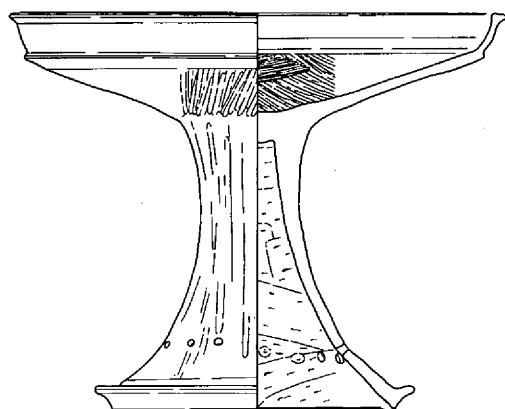
土壤—103 1021~1023



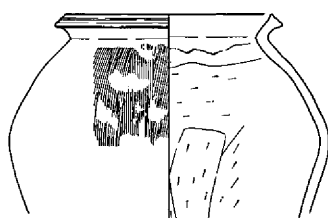
1025



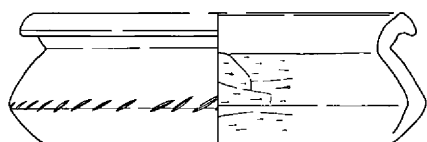
1026



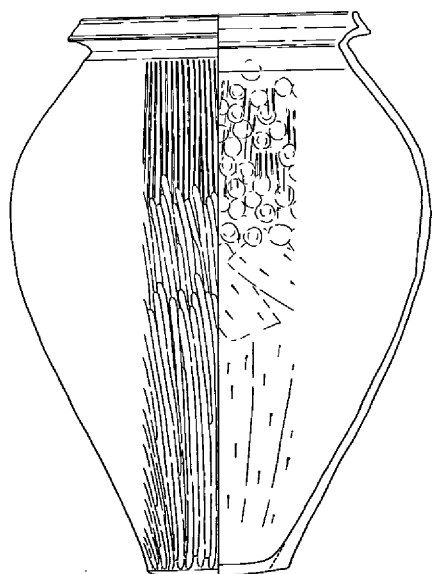
1028



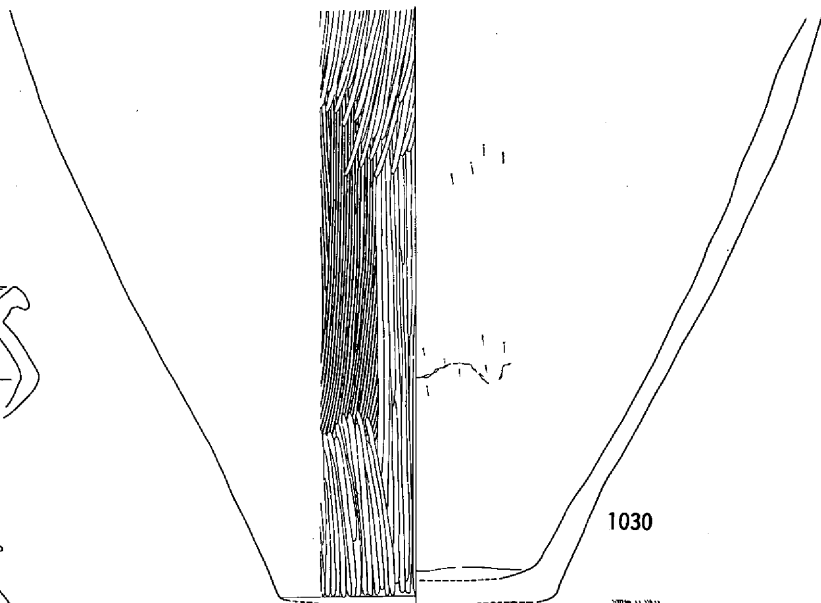
1027



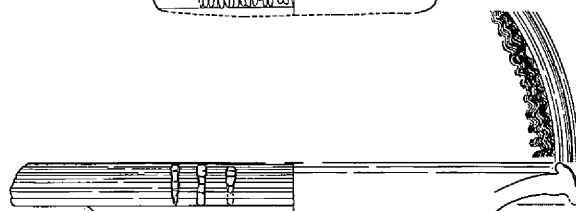
1029



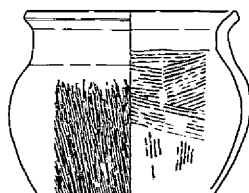
1032



1030



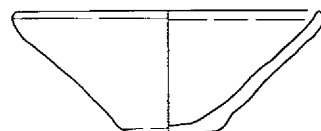
1031



1033



1034



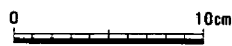
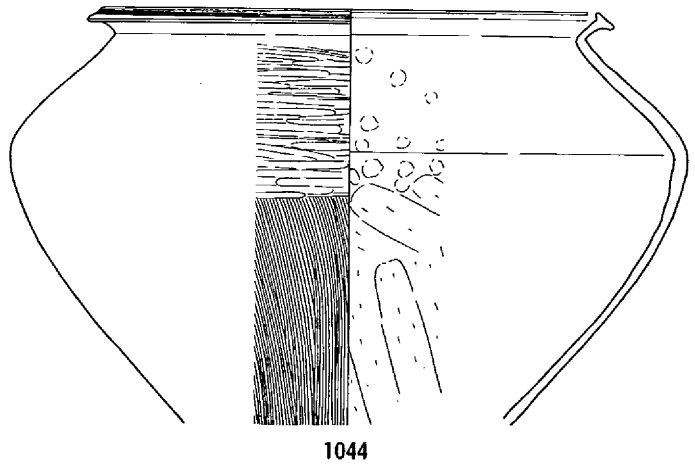
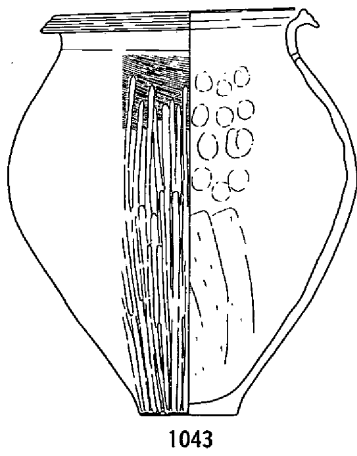
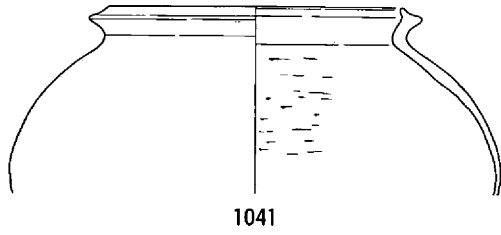
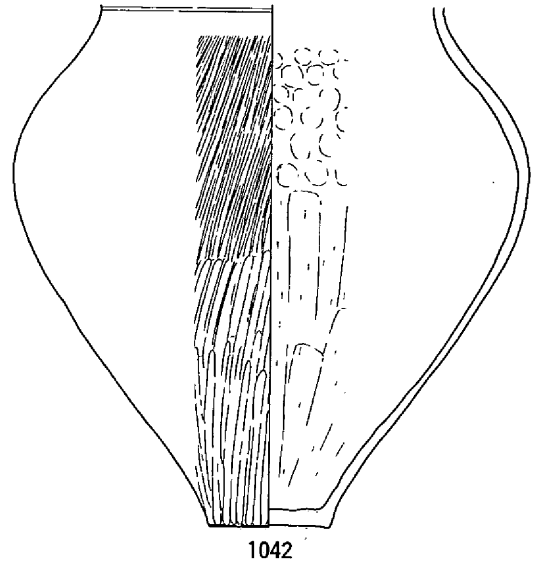
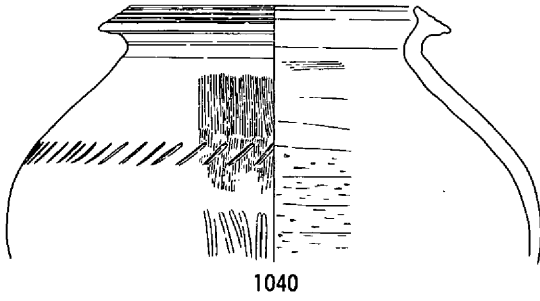
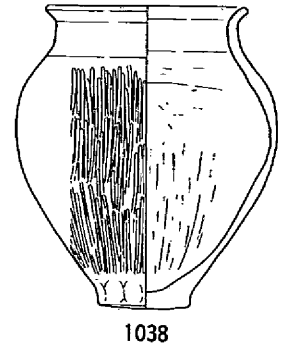
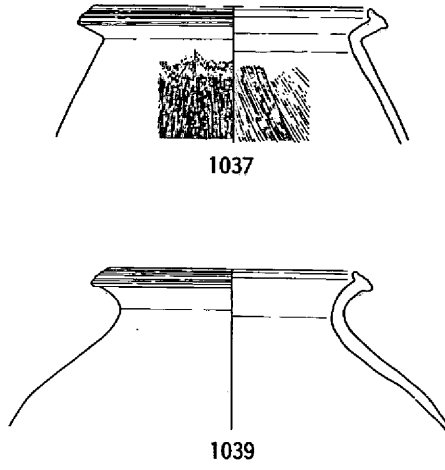
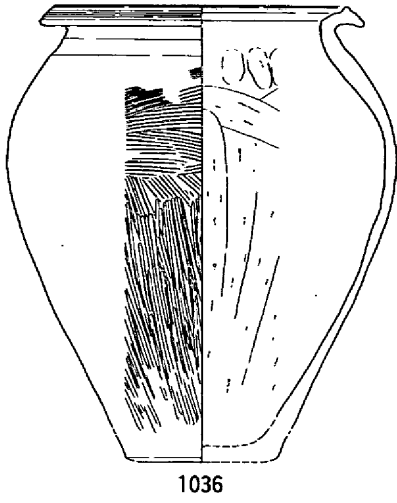
1035



土壤—105 1025~1028
土壤—108 1031~1035

土壤—106 1029

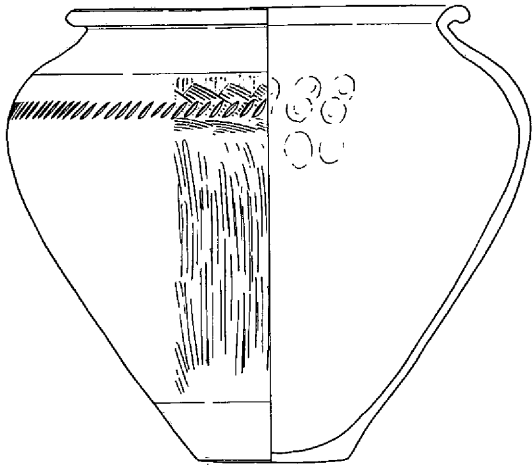
土壤—107 1030



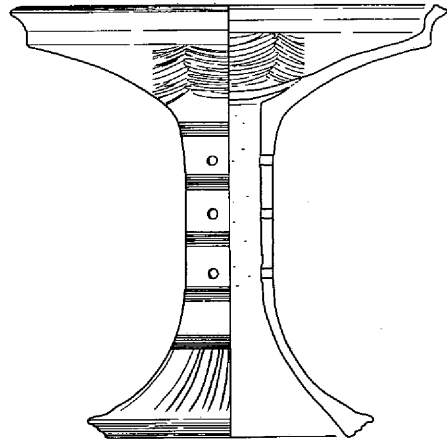
土壙墓—2 1036

土壙墓—3 1037

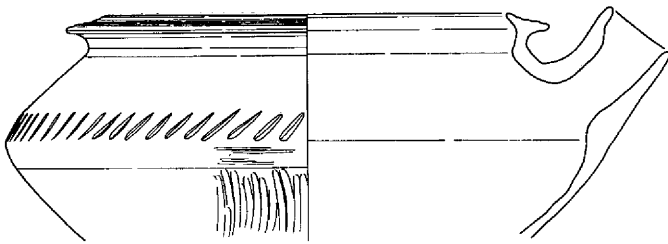
土器溜り—1 1038~1044



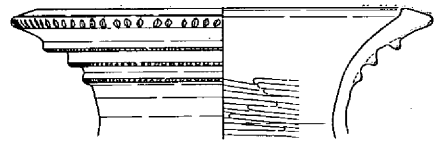
1045



1046



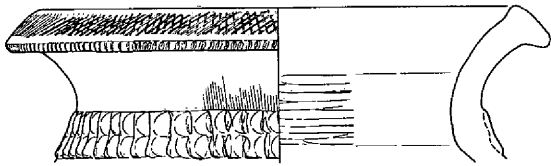
1047



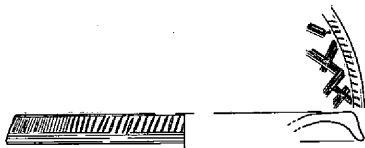
1048



1049



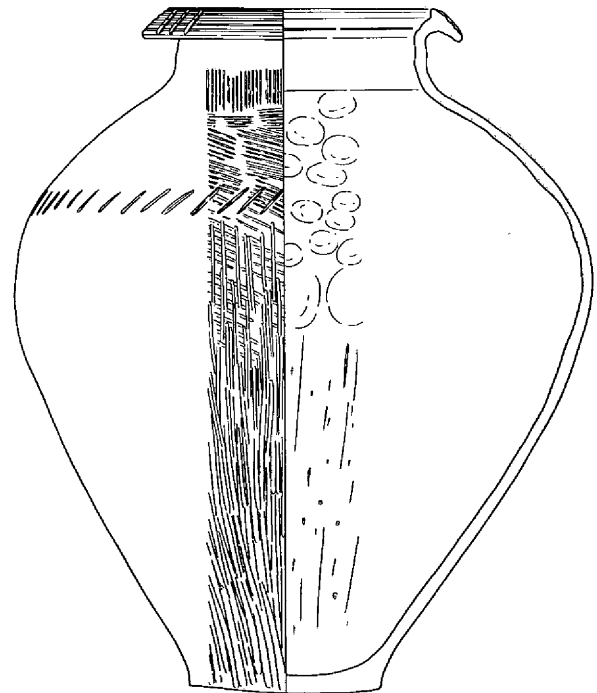
1050



1051



1052

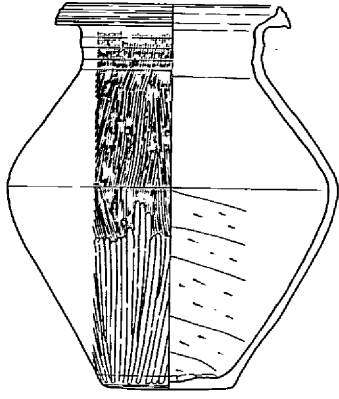


1053

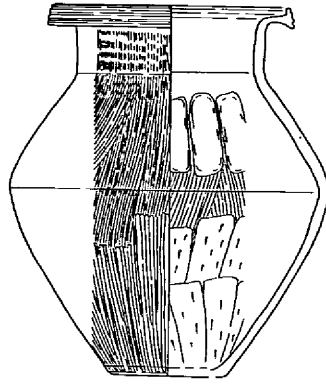


土器溜り一 1045~1047

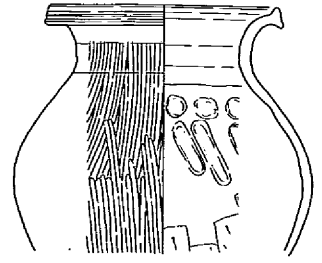
溝一3 1048~1053



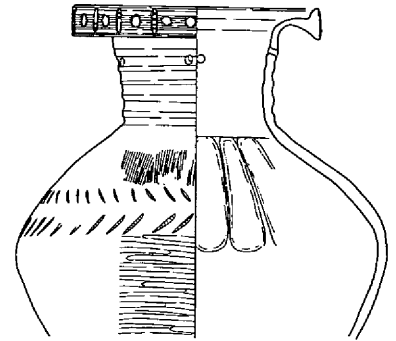
1054



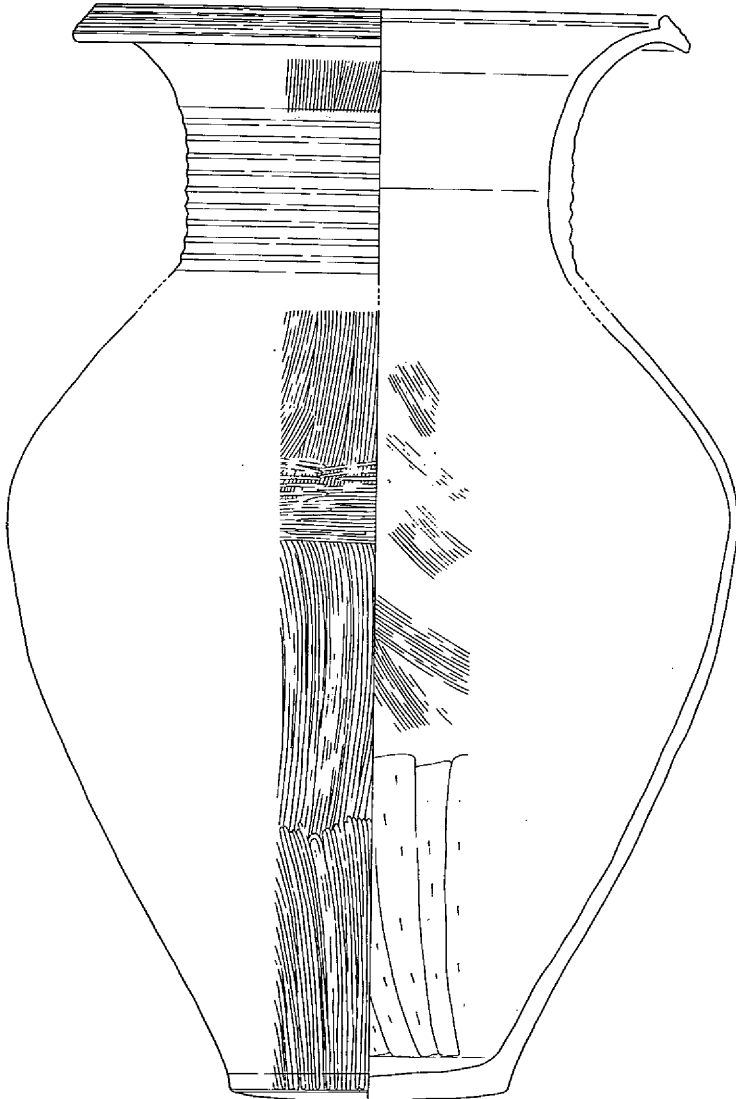
1055



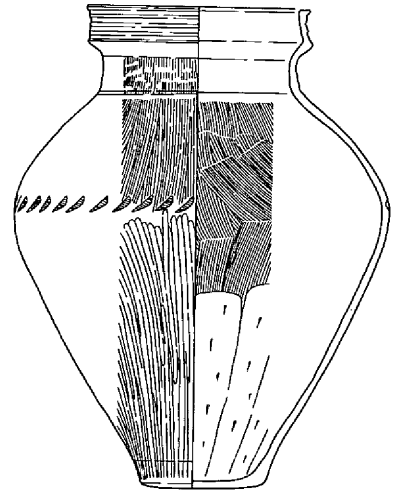
1056



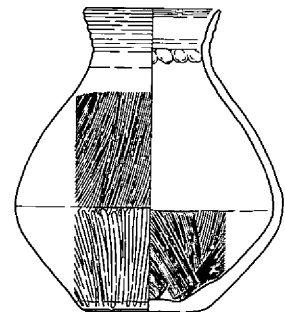
1058



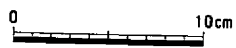
1057

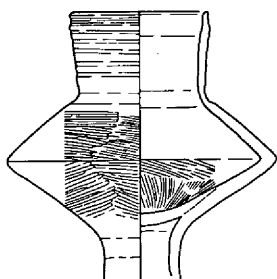


1059

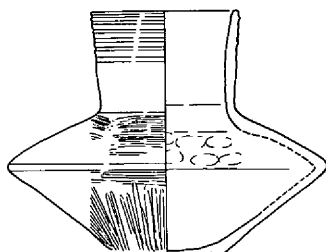


1060

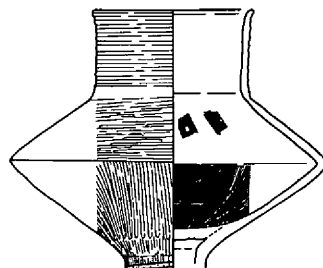




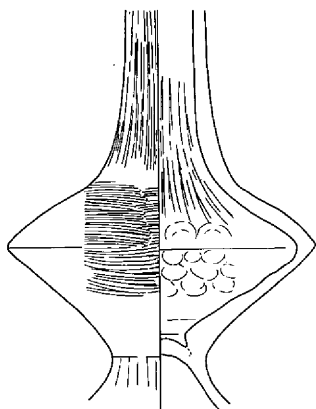
1061



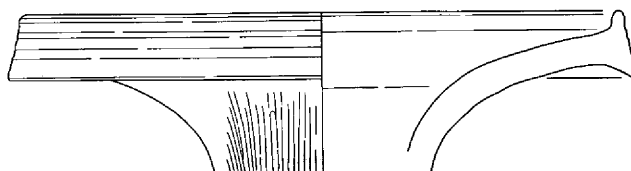
1062



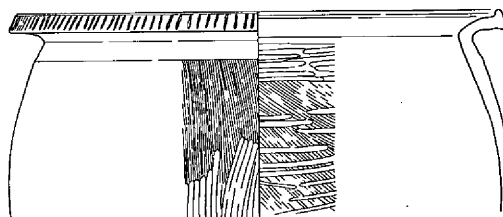
1063



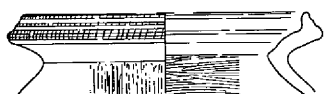
1064



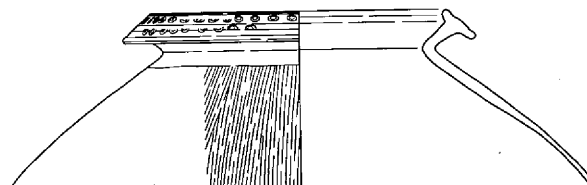
1065



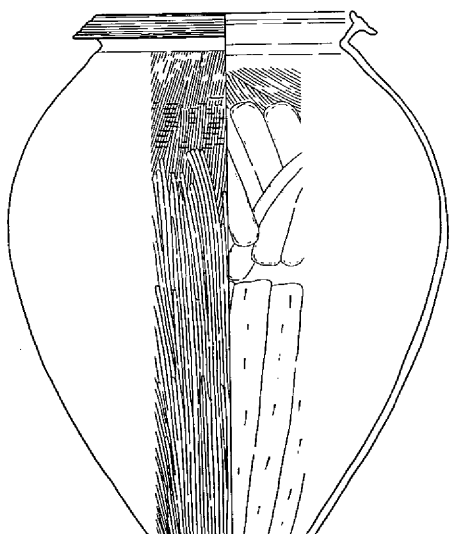
1067



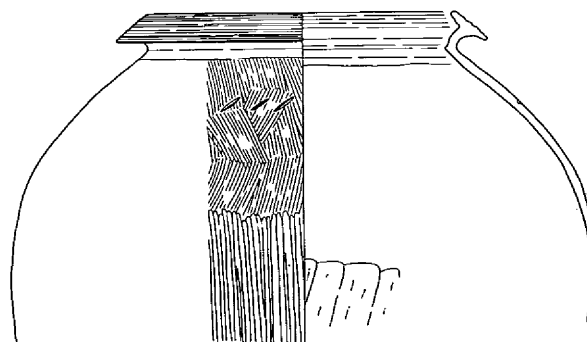
1066



1069

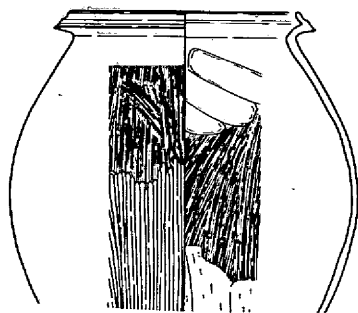


1068

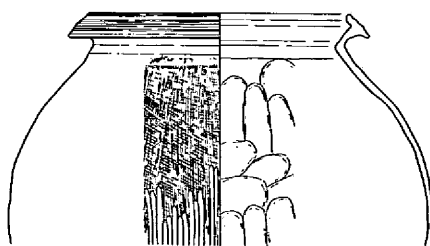


1070

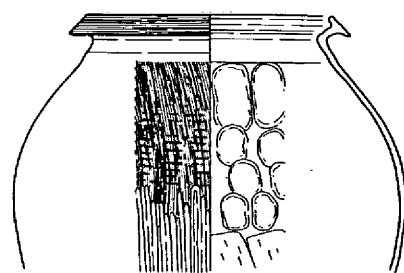




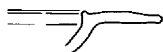
1071



1072



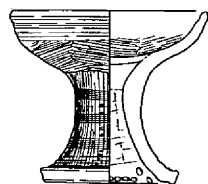
1073



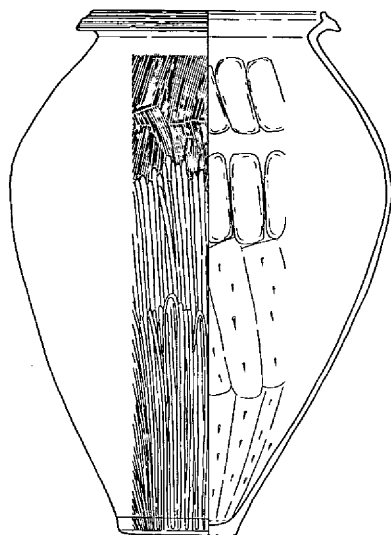
1077



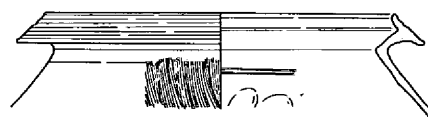
1078



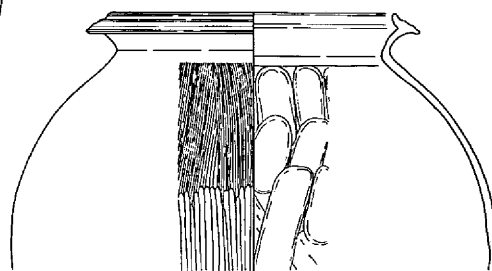
1079



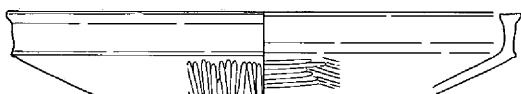
1074



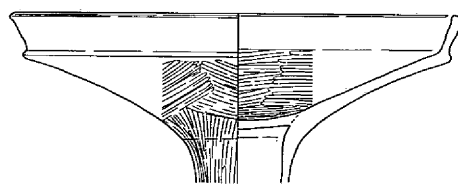
1075



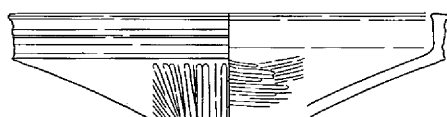
1076



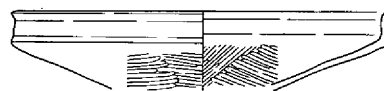
1080



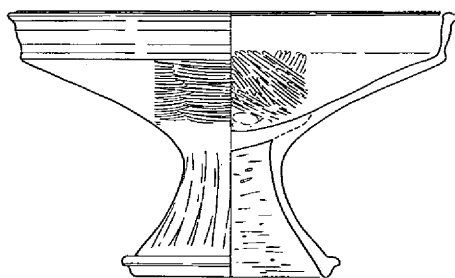
1082



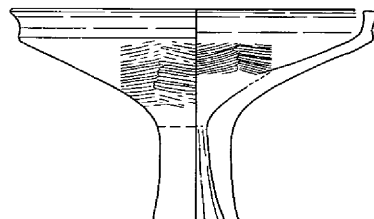
1081



1083

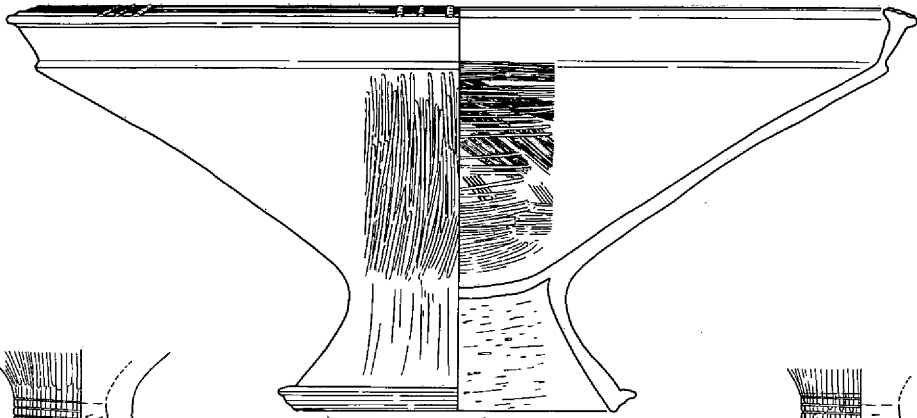


1084

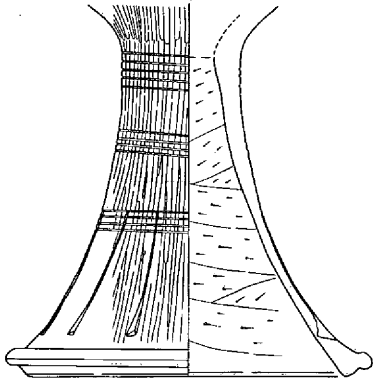


1085

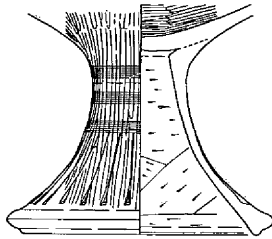




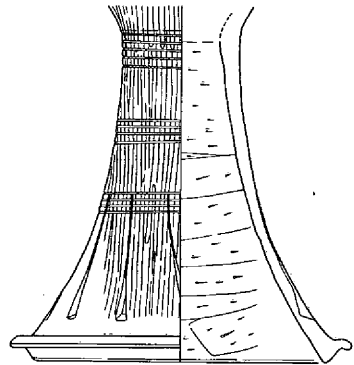
1086



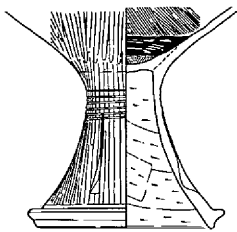
1087



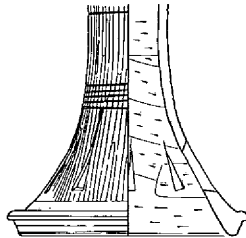
1088



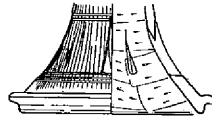
1089



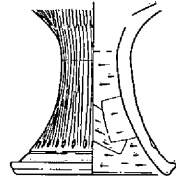
1090



1091



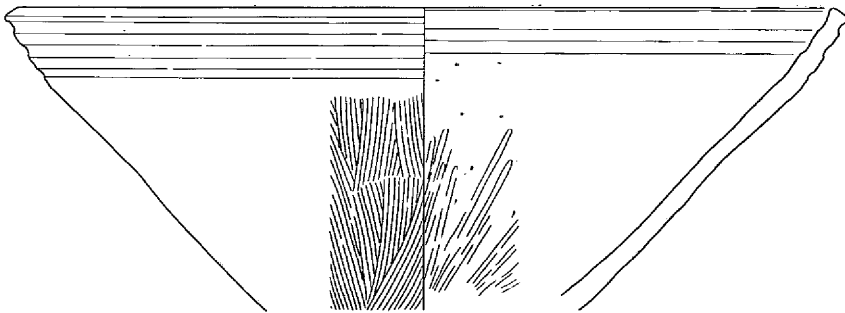
1092



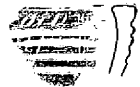
1093



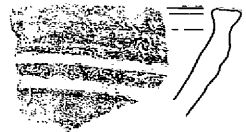
1094



1097

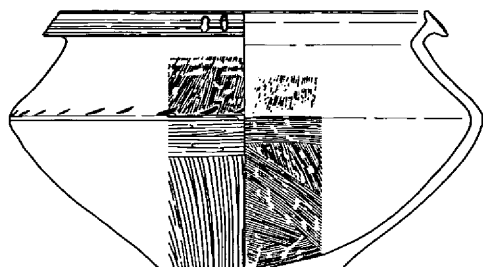


1095

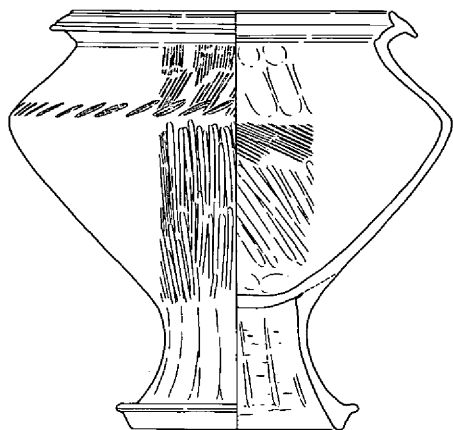


1096

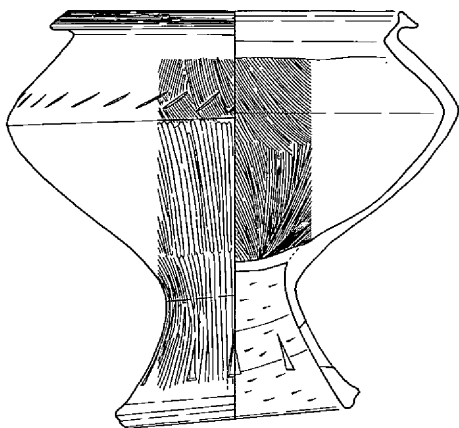




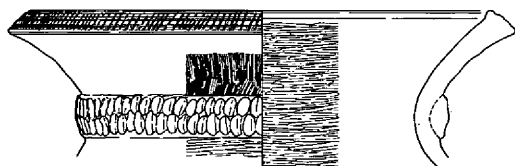
1098



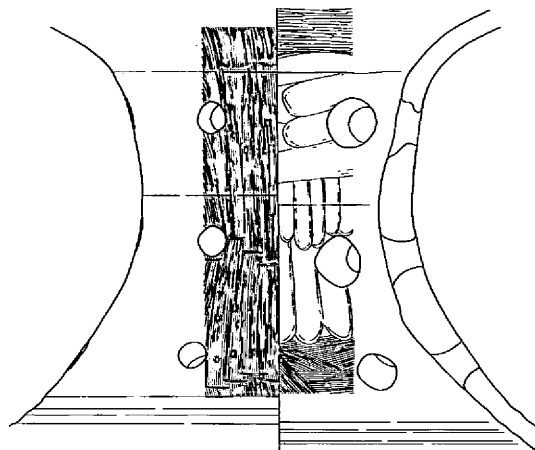
1099



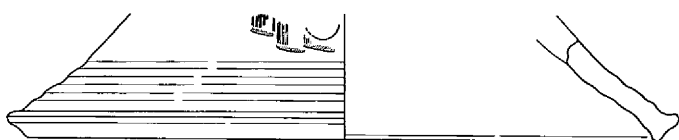
1100



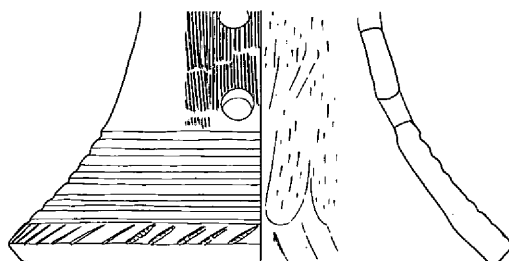
1105



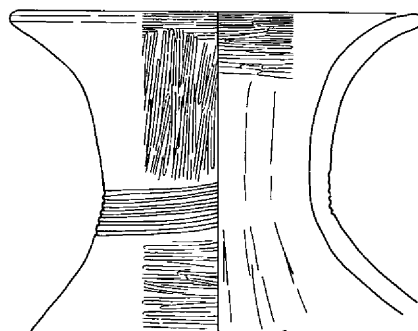
1101



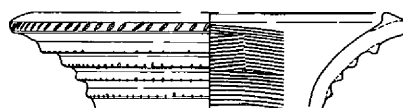
1102



1103



1104



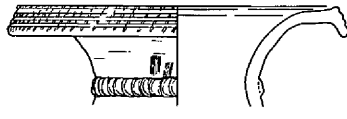
1106



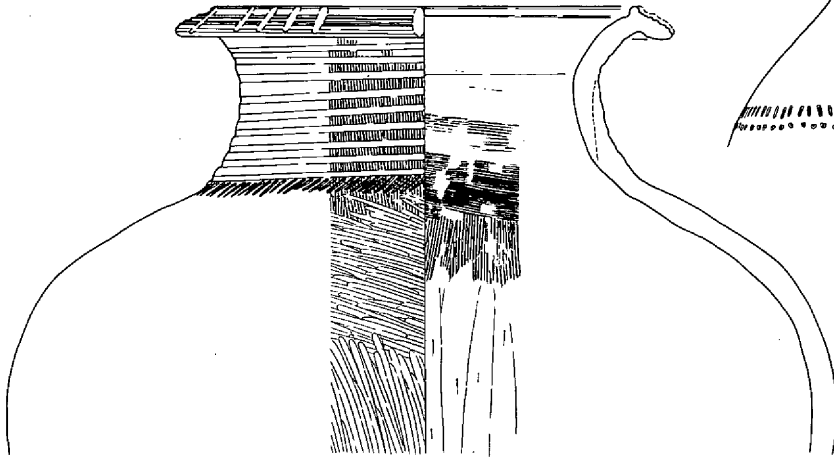
溝—3 1098~1103 包含層 1104~1106



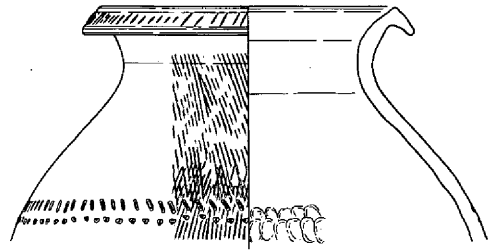
1107



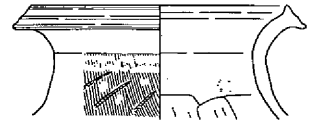
1108



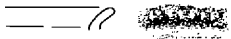
1110



1109



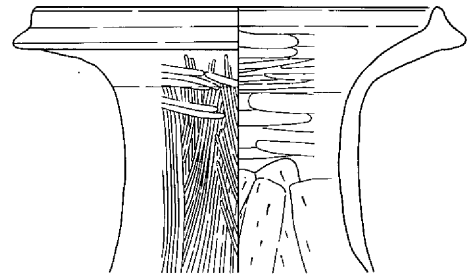
1111



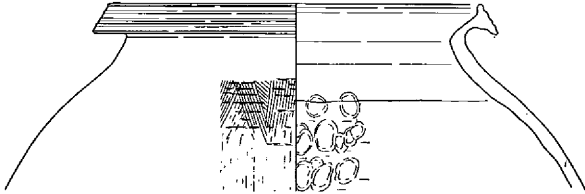
1113



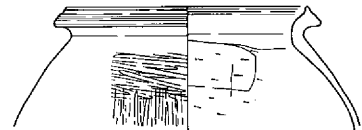
1114



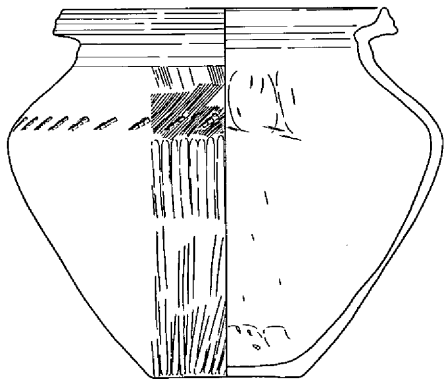
1112



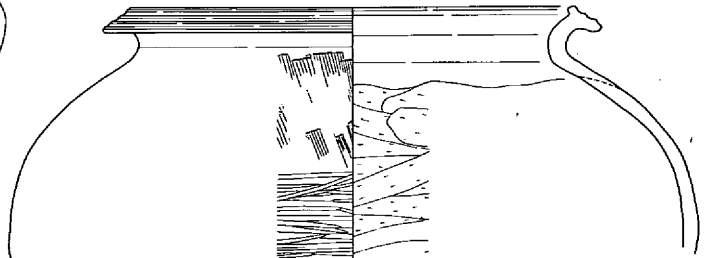
1115



1116



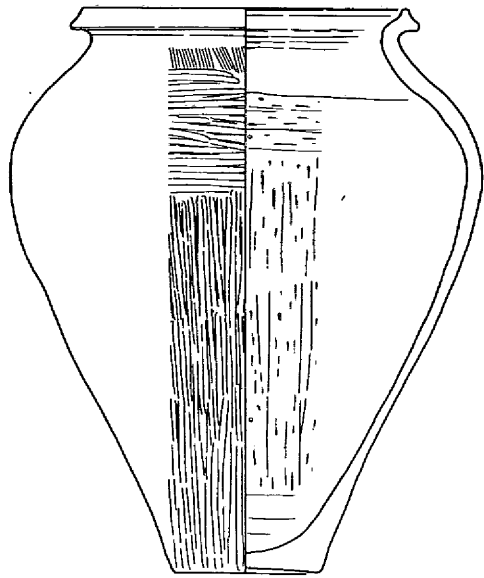
1117



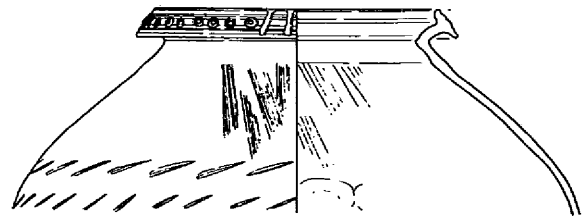
1118



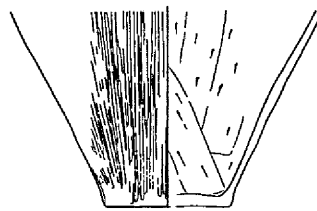
包含層 1107~1118



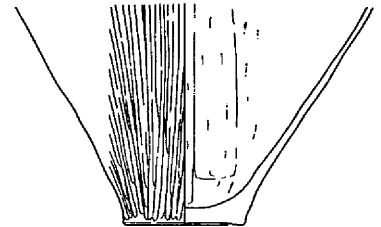
1119



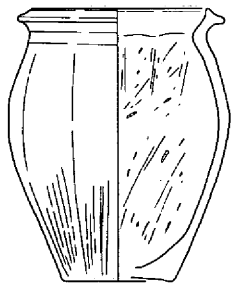
1120



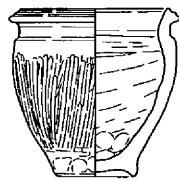
1121



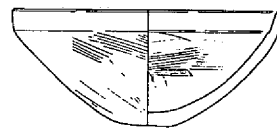
1122



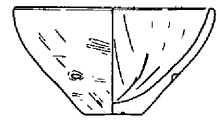
1123



1124



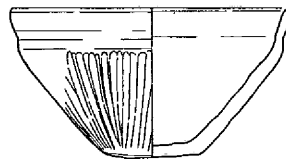
1126



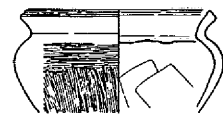
1127



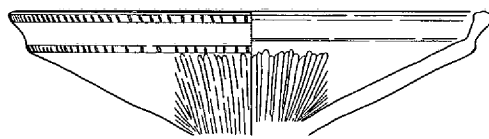
1125



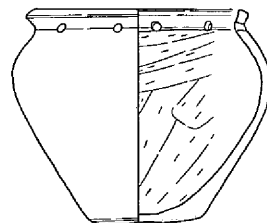
1128



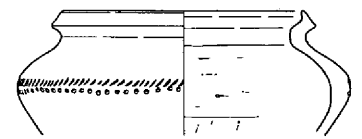
1129



1132



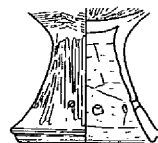
1130



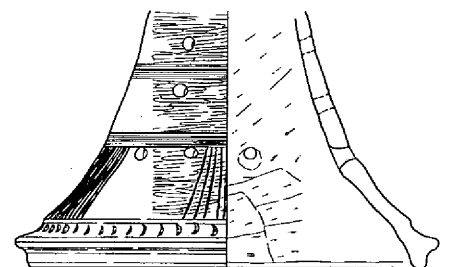
1131



1133



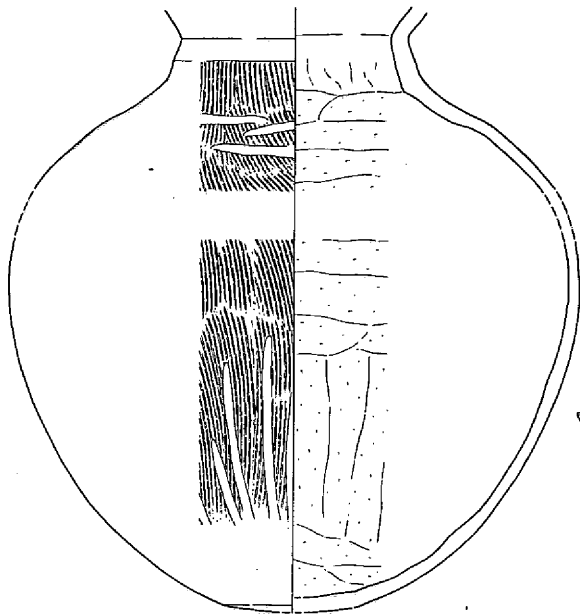
1135



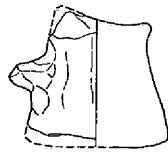
1136



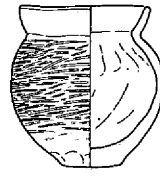
包含層 1119~1136



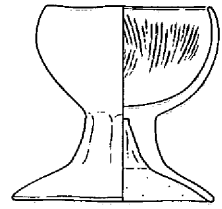
1137



1142



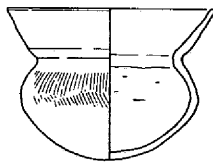
1138



1139



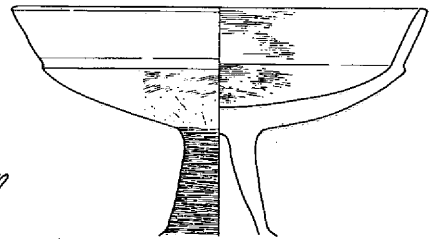
1143



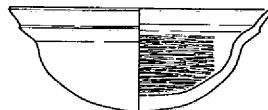
1144



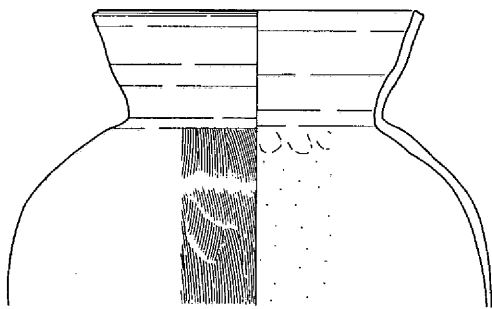
1140



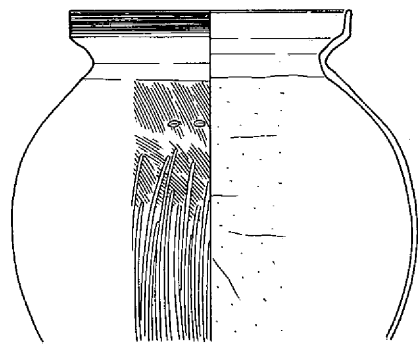
1141



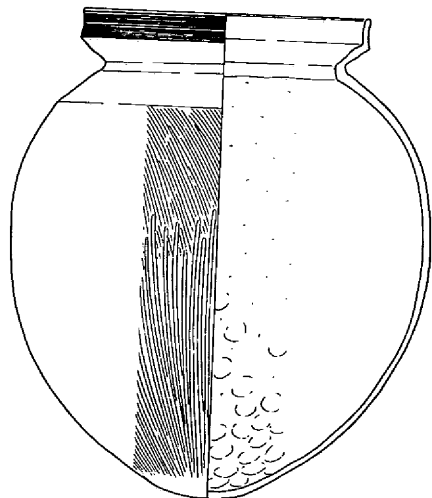
1145



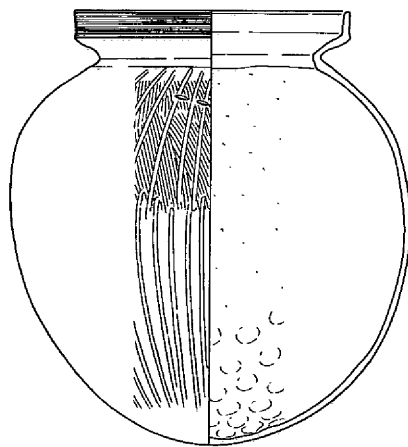
1146



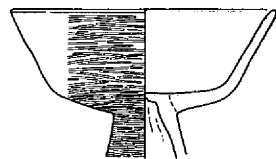
1147



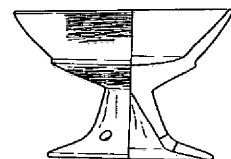
1148



1149



1150



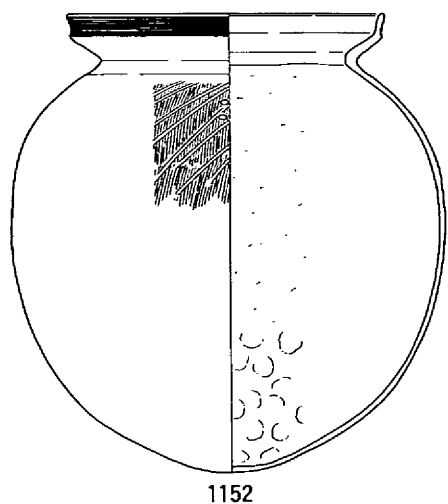
1151



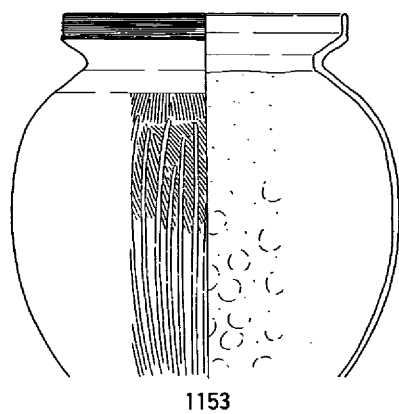
豎穴住居—32 1137~1139 · 1143
豎穴住居—36 1141

豎穴住居—34 1140
豎穴住居—37 1146~1151

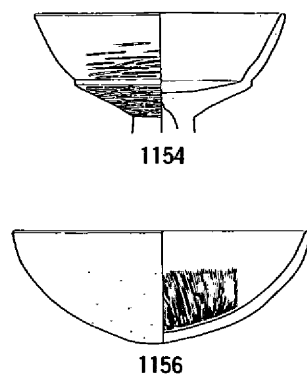
豎穴住居—35 1142 · 1144~1145



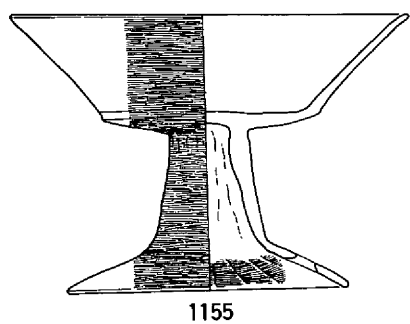
1152



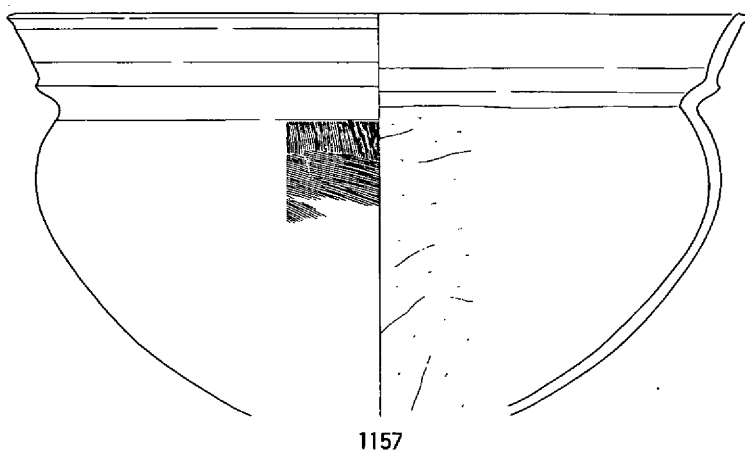
1153



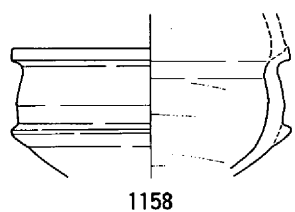
1154



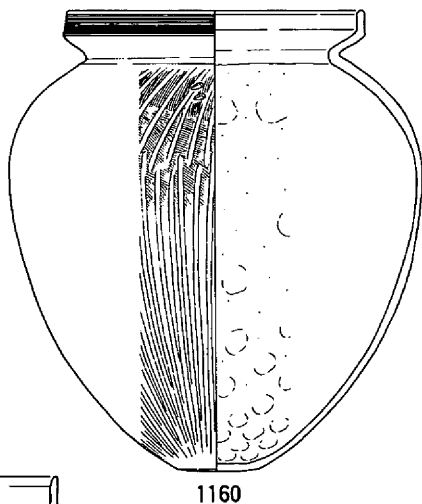
1155



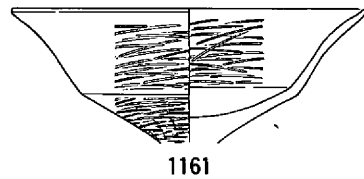
1157



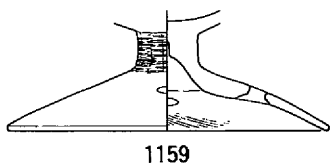
1158



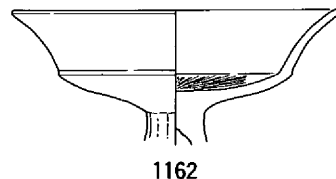
1160



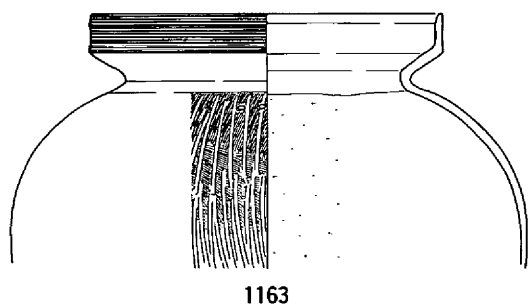
1161



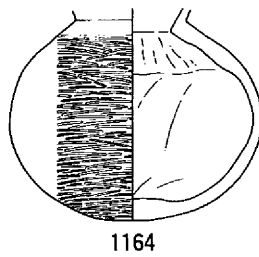
1159



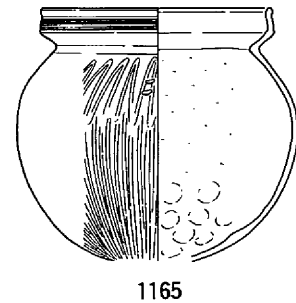
1162



1163



1164



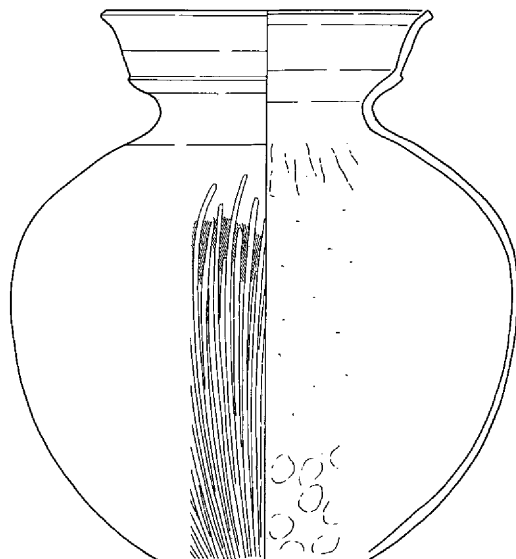
1165



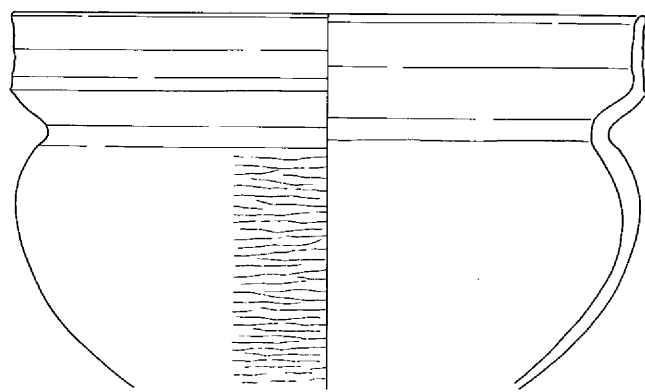
豎穴住居—37 1152~1157
豎穴住居—41 1163~1165

豎穴住居—38 1158~1159

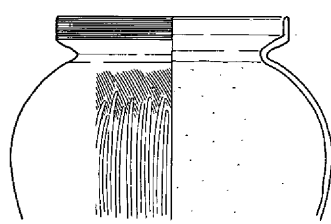
豎穴住居—39 1160~1162



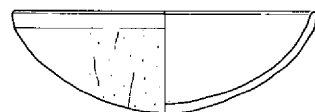
1166



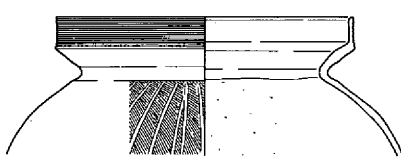
1169



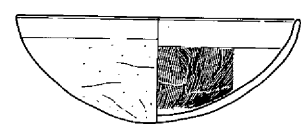
1168



1170



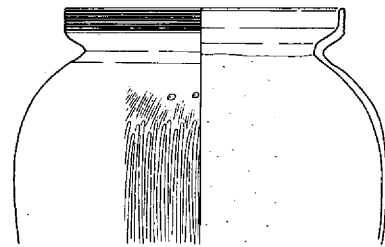
1167



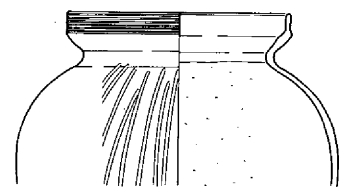
1171



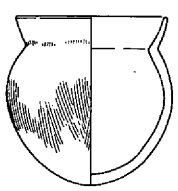
1172



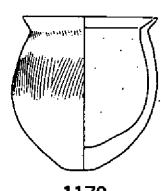
1173



1174



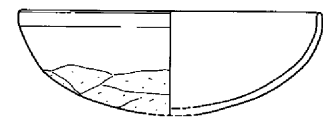
1177



1178



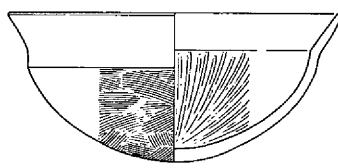
1175



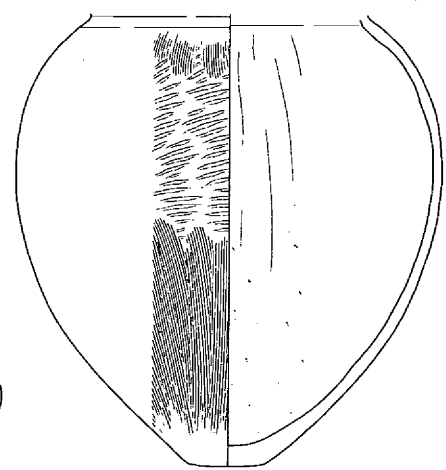
1176



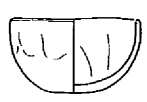
1179



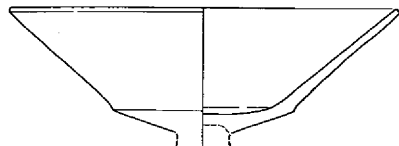
1183



1182



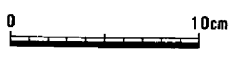
1180



1181



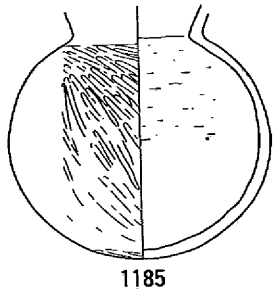
1184



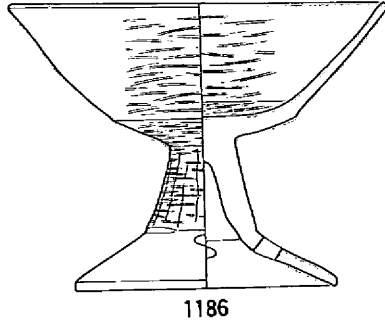
豎穴住居—41 1166
豎穴住居—45 1177~1184

豎穴住居—42 1167~1171

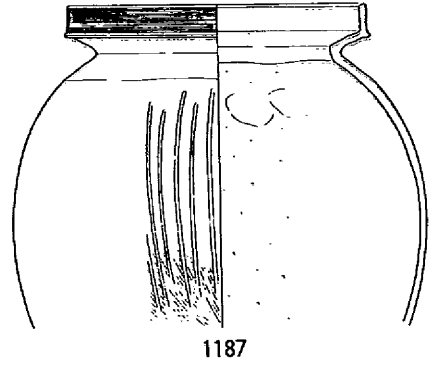
豎穴住居—44 1172~1176



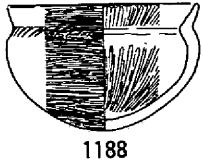
1185



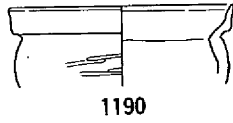
1186



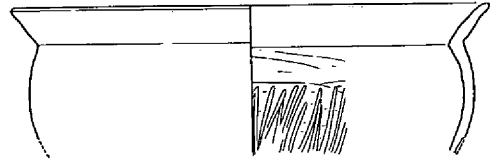
1187



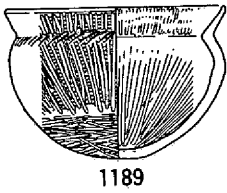
1188



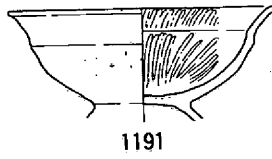
1190



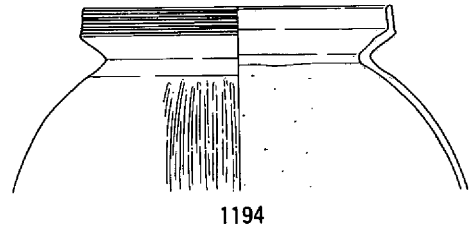
1193



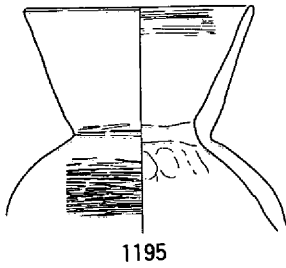
1189



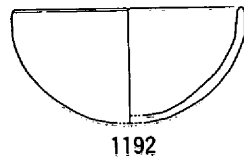
1191



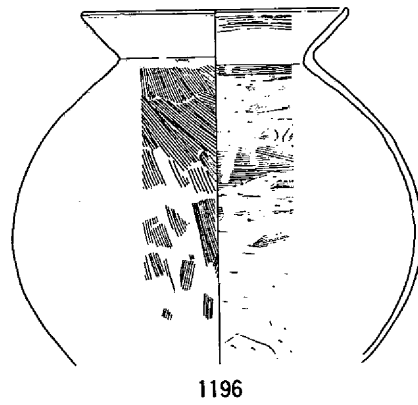
1194



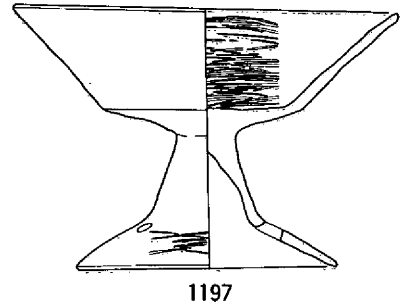
1195



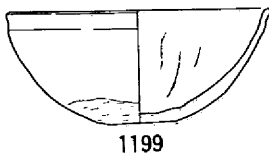
1192



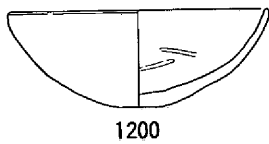
1196



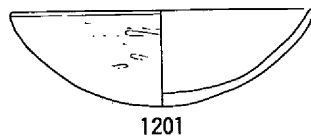
1197



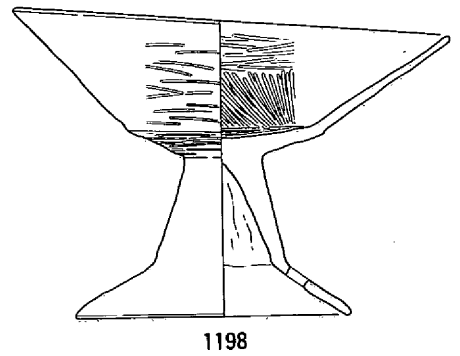
1199



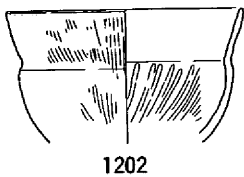
1200



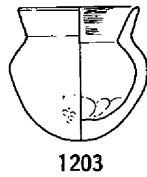
1201



1198



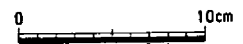
1202

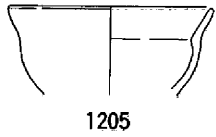


1203

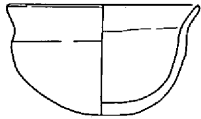


1204

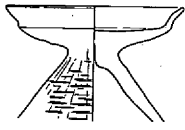




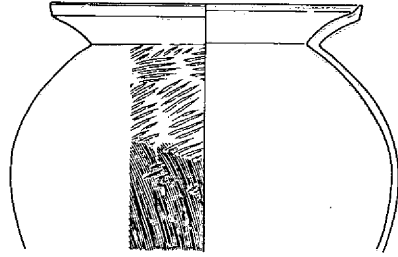
1205



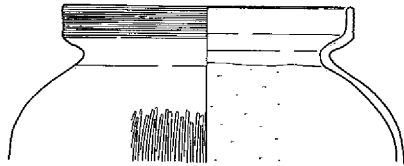
1026



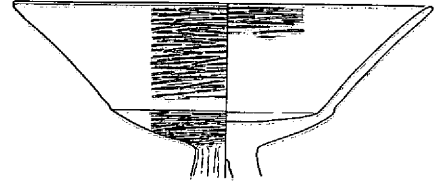
1207



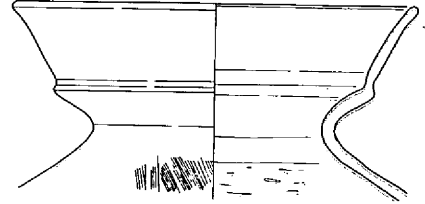
1208



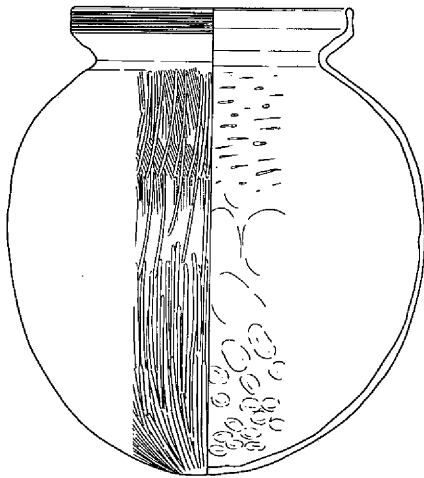
1209



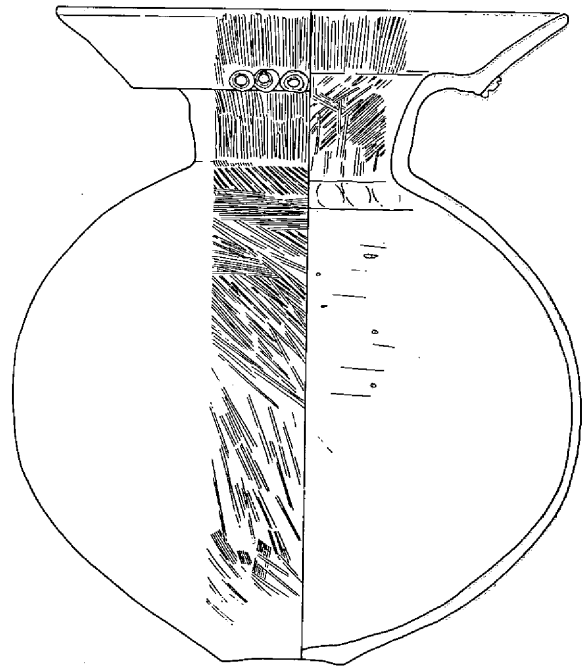
1210



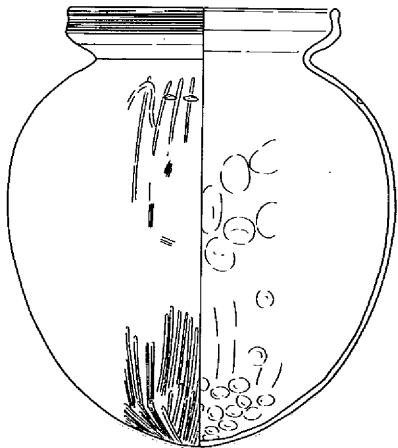
1211



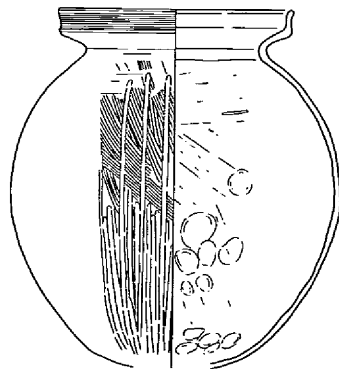
1213



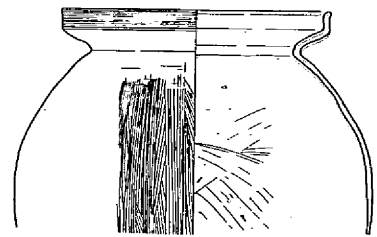
1212



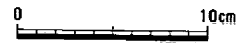
1214



1215



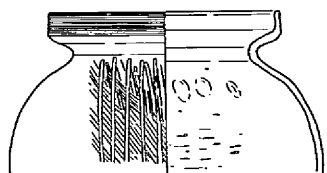
1216



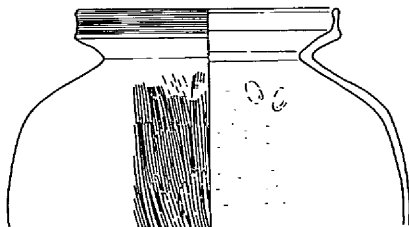
竖穴住居—48 1205~1207

竖穴住居—49 1208~1210

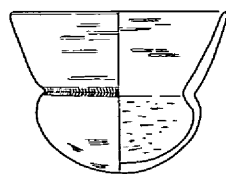
竖穴住居—50 1211~1216



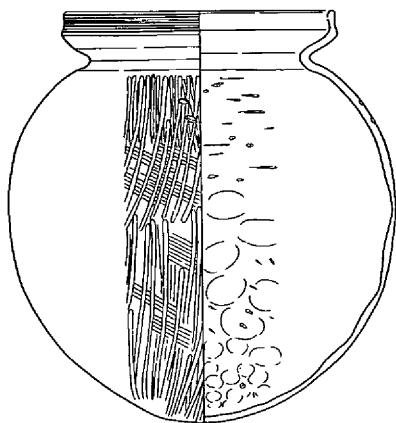
1217



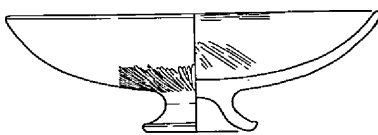
1218



1220



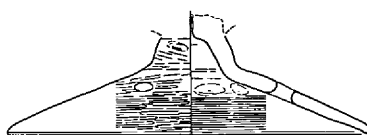
1219



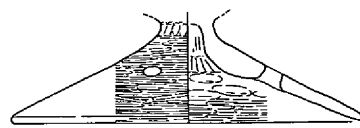
1221



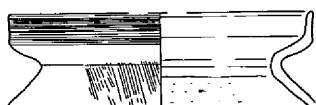
1222



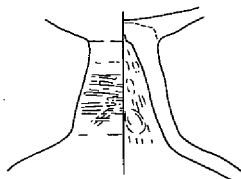
1223



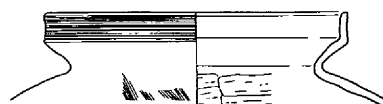
1224



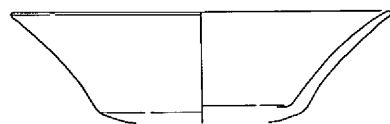
1225



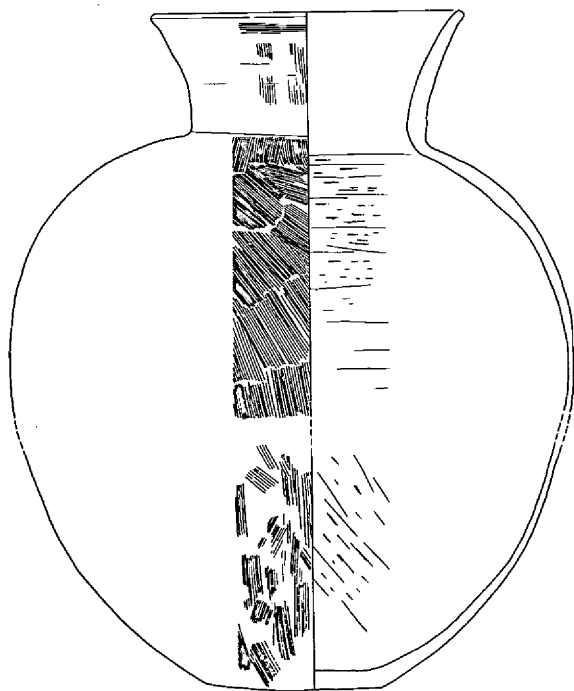
1226



1227



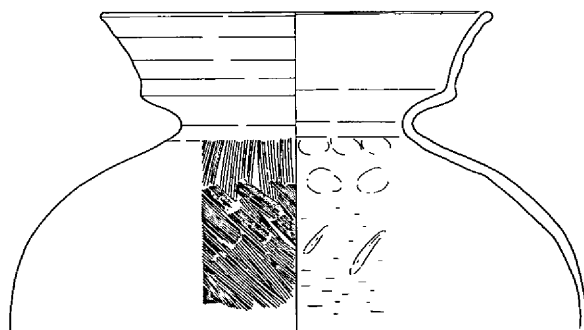
1228



1229



1230



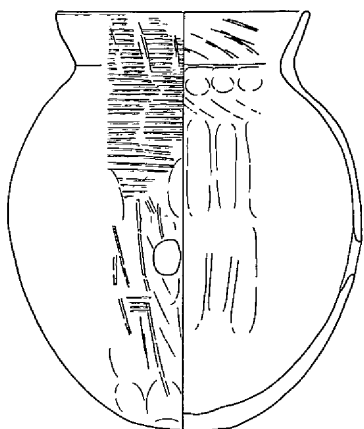
1231



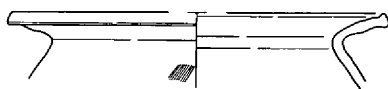
竖穴住居—50 1217~1224

竖穴住居—51 1225~1226

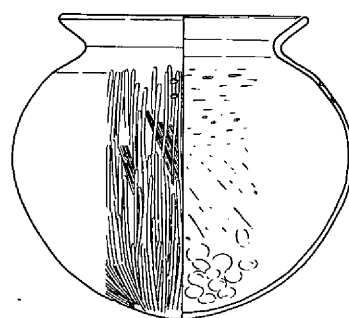
竖穴住居—52 1227~1231



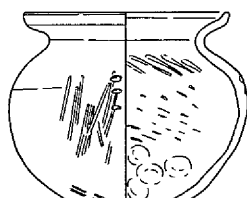
1232



1233



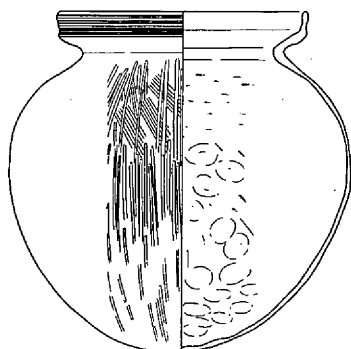
1235



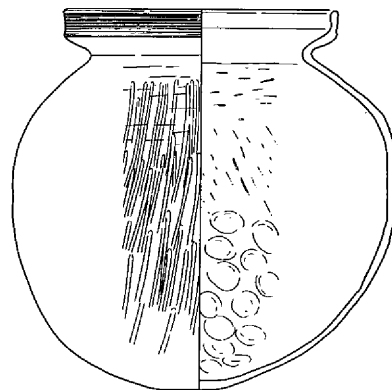
1234



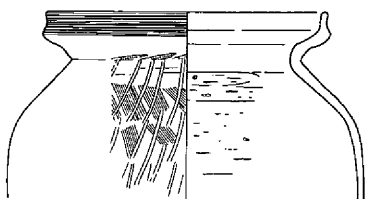
1236



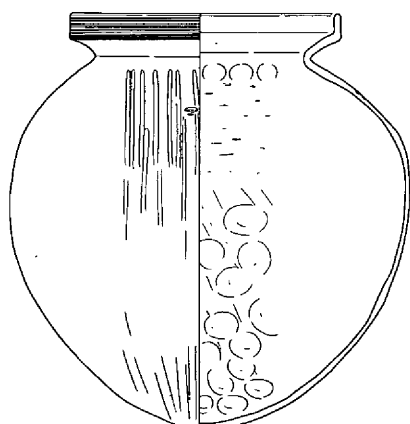
1238



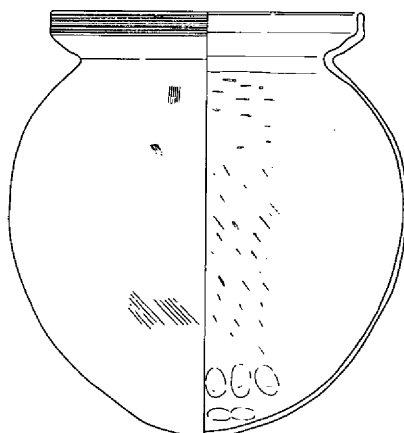
1239



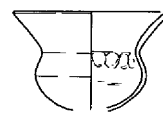
1237



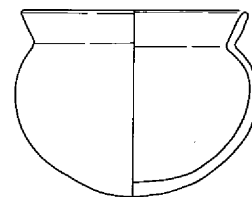
1240



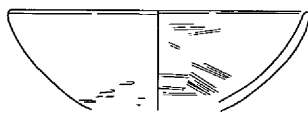
1241



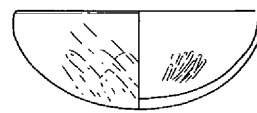
1245



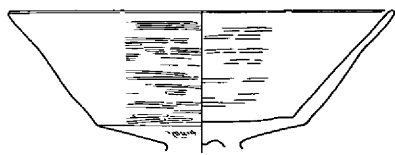
1246



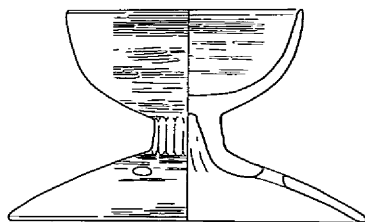
1247



1248



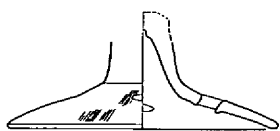
1242



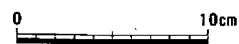
1244

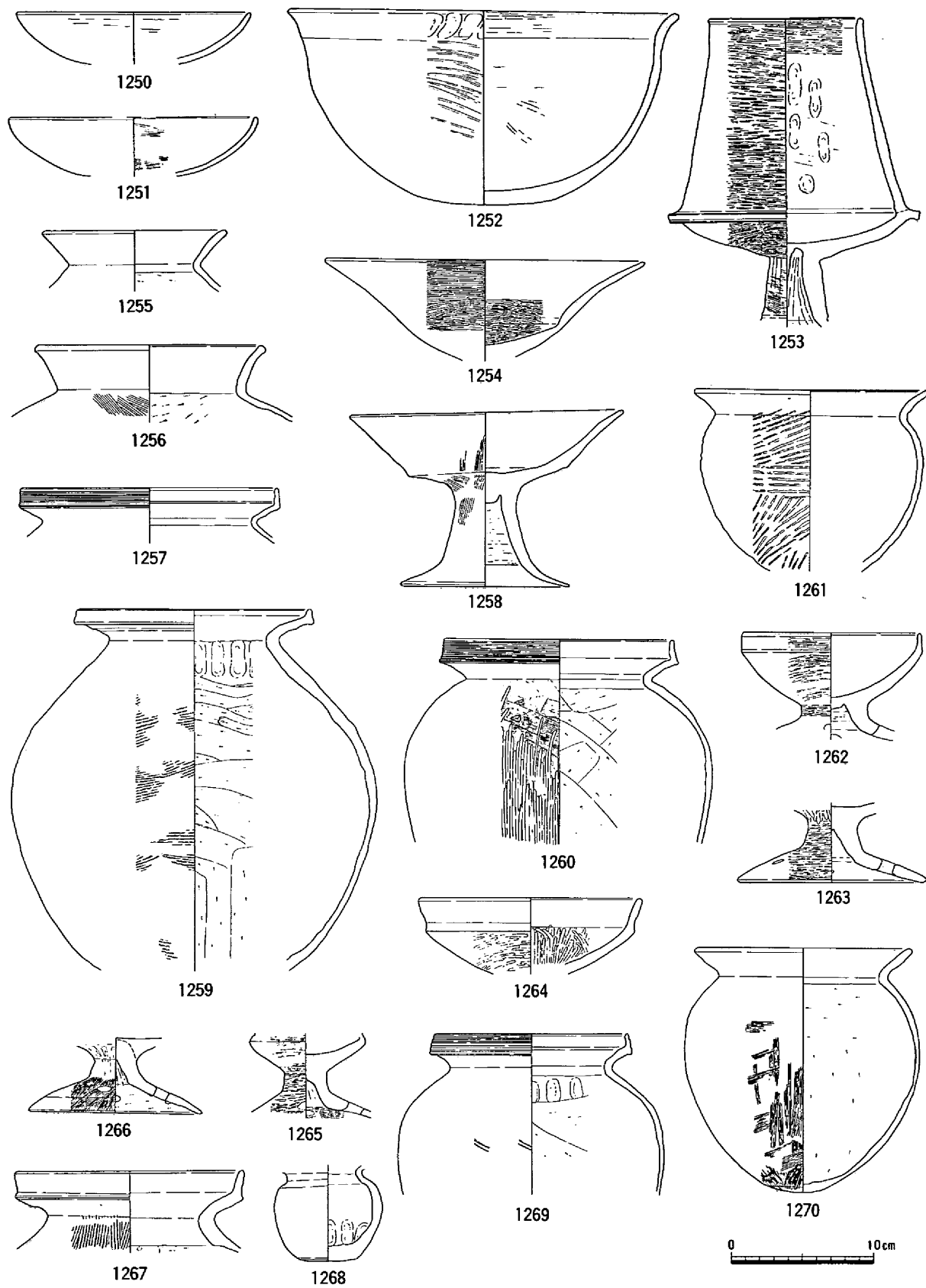


1249



1243

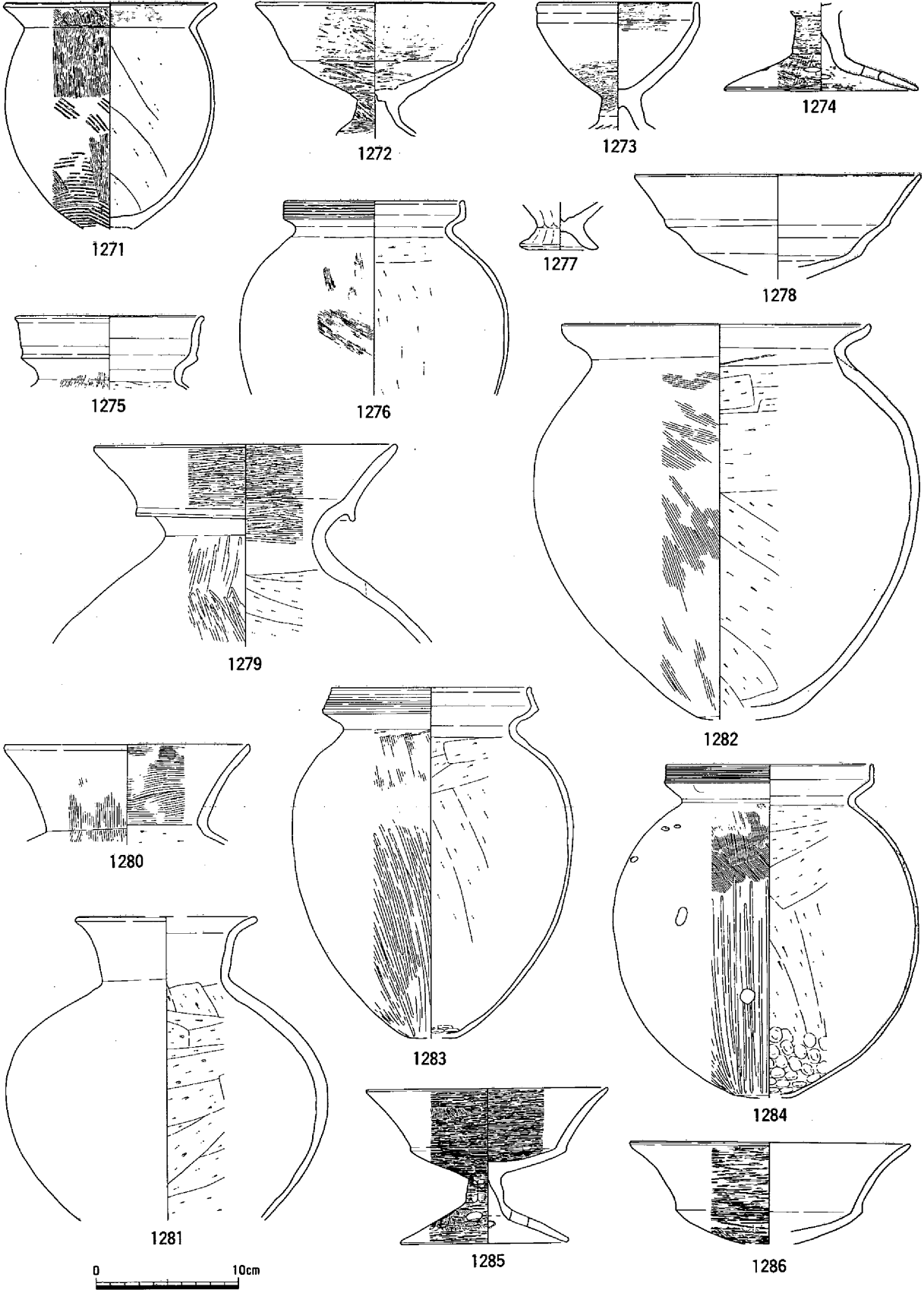




竖穴住居—53 1250~1252
 竖穴住居—56 1259~1266

竖穴住居—54 1253~1254
 竖穴住居—60 1267~1270

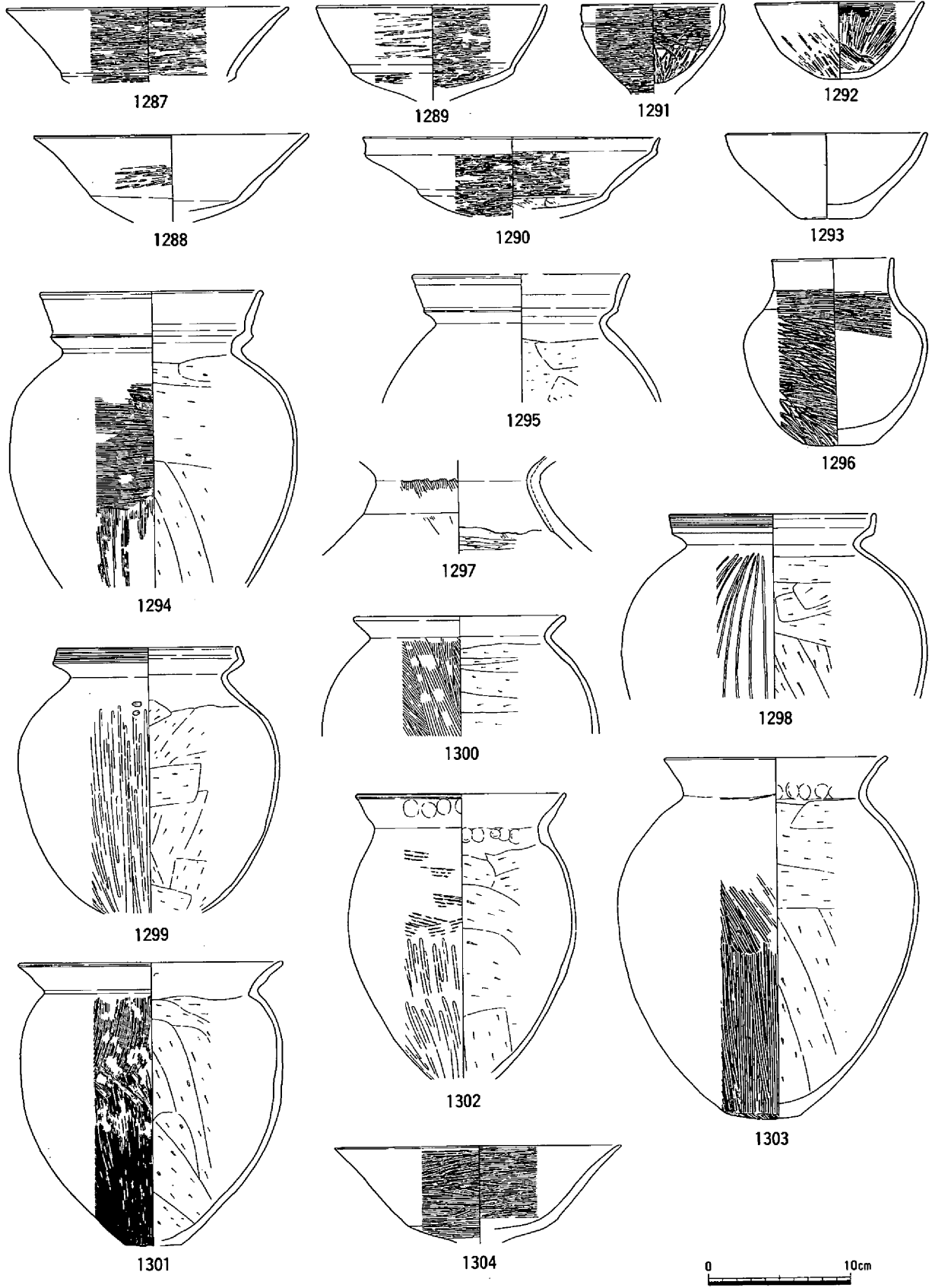
竖穴住居—55 1255~1258



豎穴住居—60 1271~1274

豎穴住居—61 1275~1278

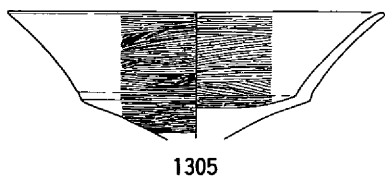
豎穴住居—62 1279~1286



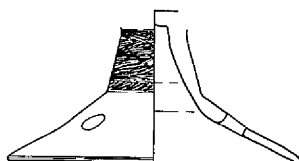
豎穴住居—62 1287~1293

豎穴住居—63 1294~1295

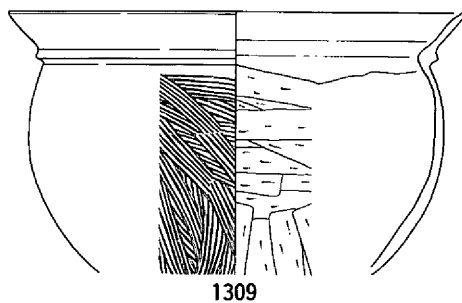
豎穴住居—64 1296~1304



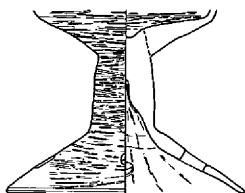
1305



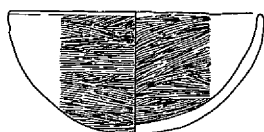
1306



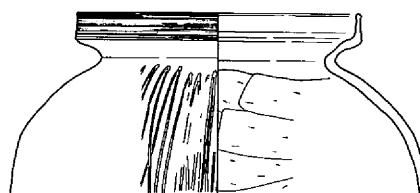
1309



1307



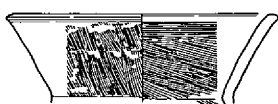
1308



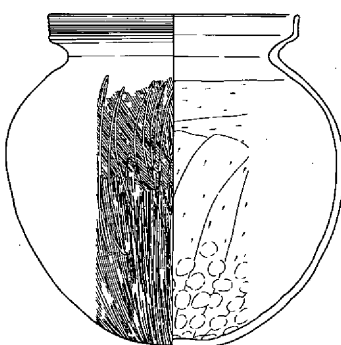
1312



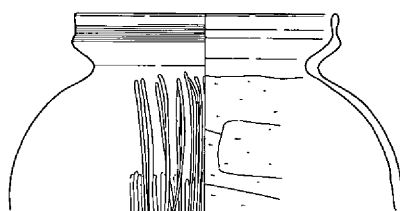
1310



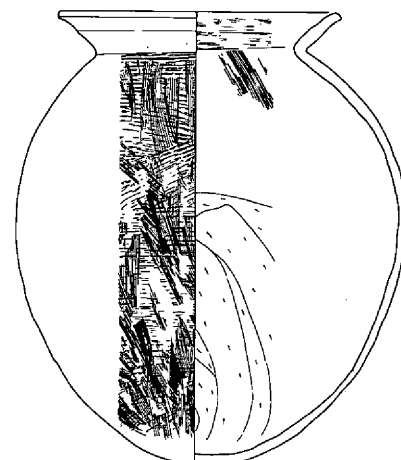
1311



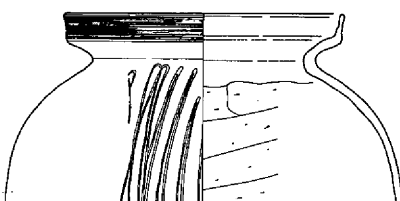
1313



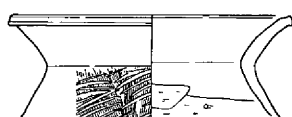
1314



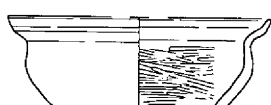
1316



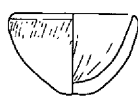
1315



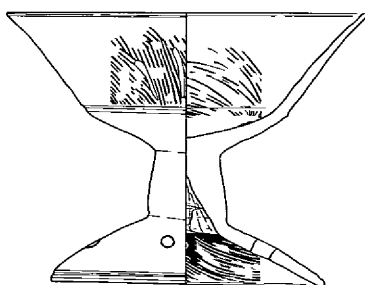
1317



1321



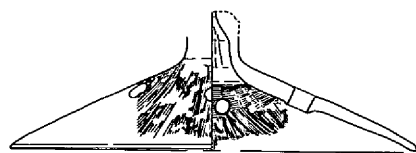
1323



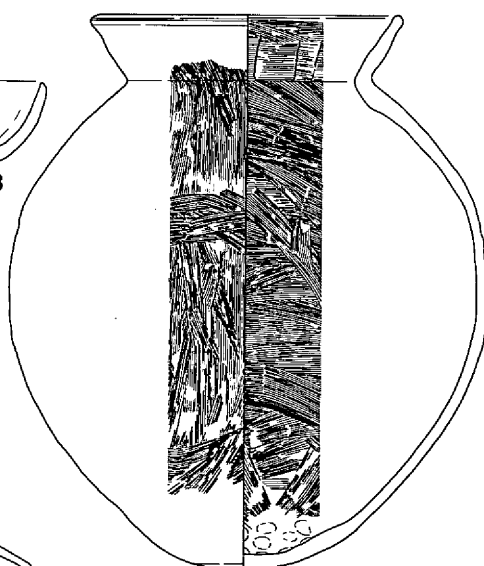
1319



1322



1320

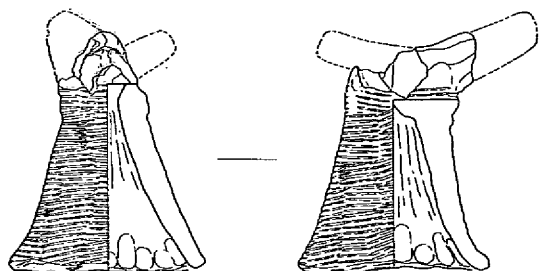


1318



豎穴住居—64 1305~1309

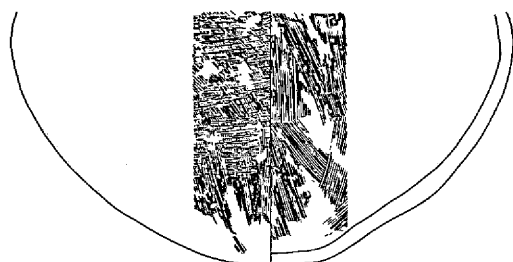
豎穴住居—65 1310~1323



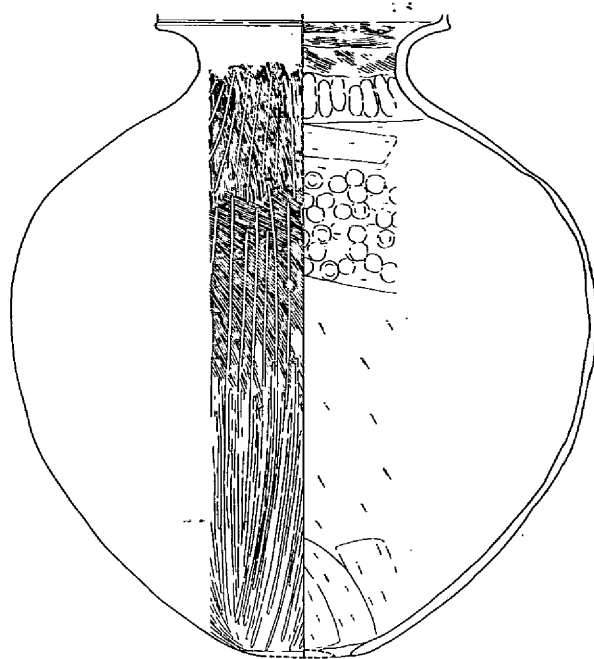
1324



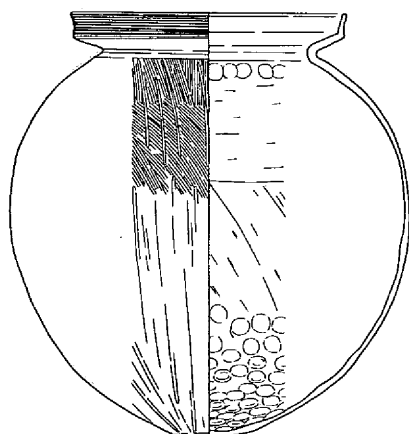
1325



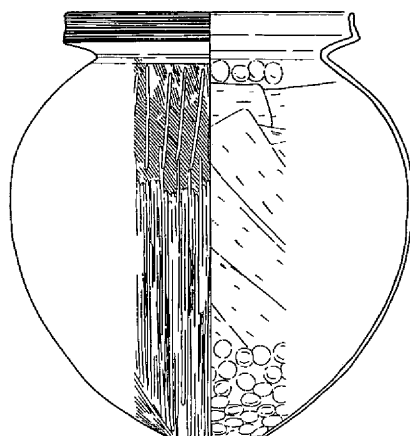
1326



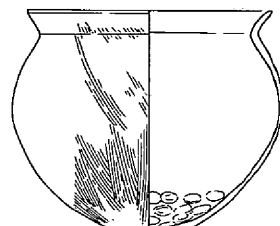
1327



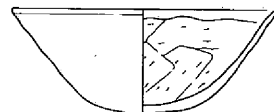
1328



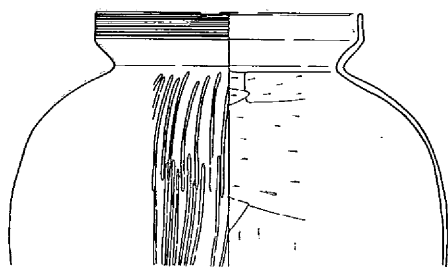
1329



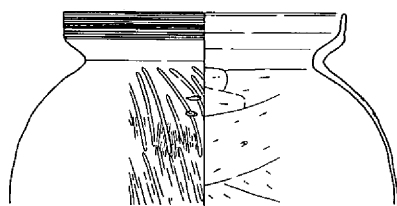
1333



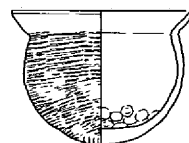
1334



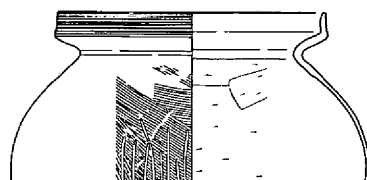
1330



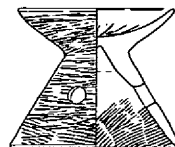
1331



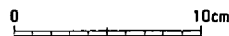
1335



1332



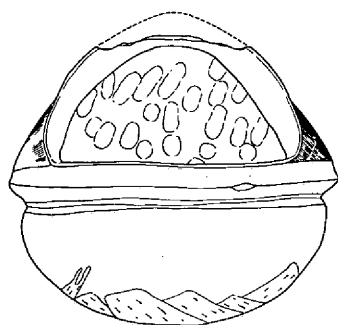
1336



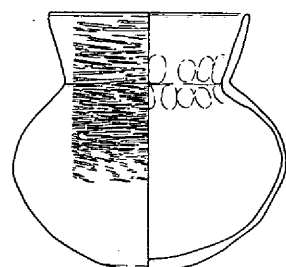
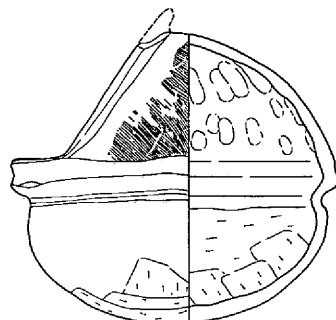
豎穴住居—65 1324

豎穴住居—66 1325~1326

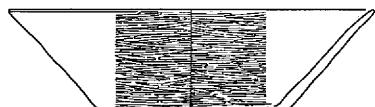
豎穴住居—67 1327~1336



1337



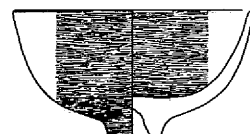
1338



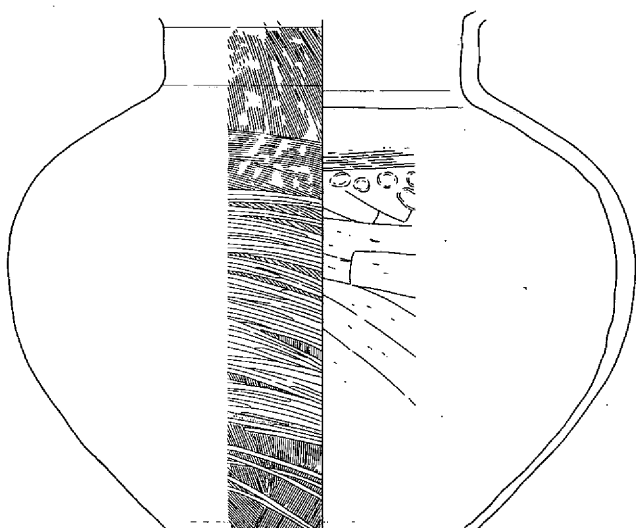
1339



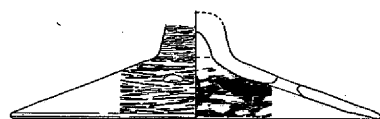
1340



1341



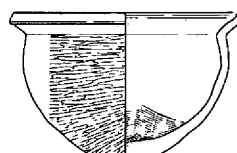
1346



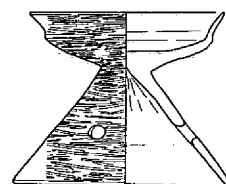
1342



1343



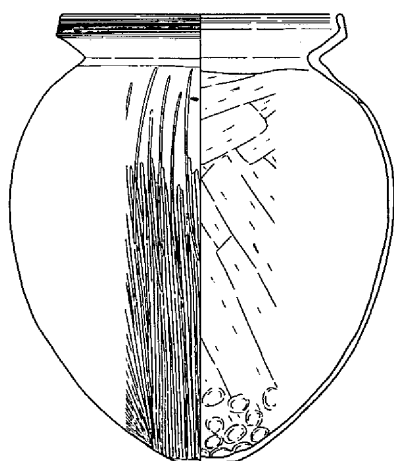
1344



1345



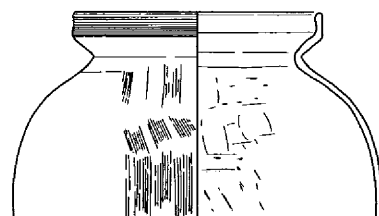
1347



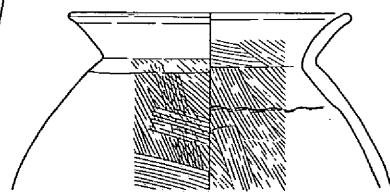
1349



1350



1348



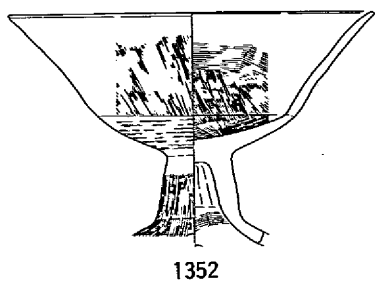
1351



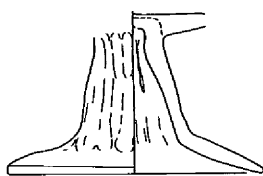
竖穴住居—67 1337

竖穴住居—68·69 1338 ~1345

竖穴住居—70 1346~1351



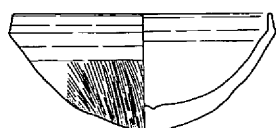
1352



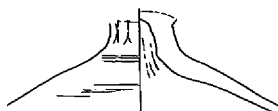
1353



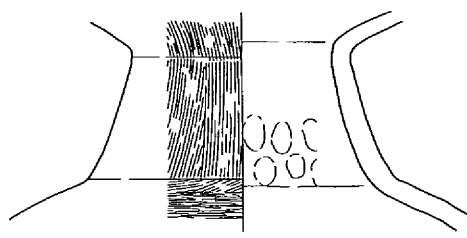
1359



1355



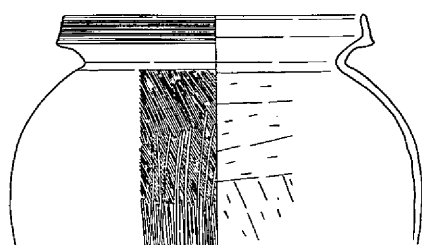
1354



1360



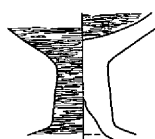
1356



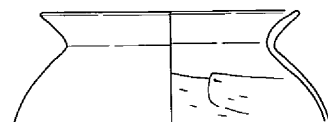
1357



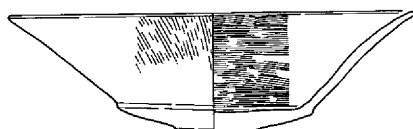
1361



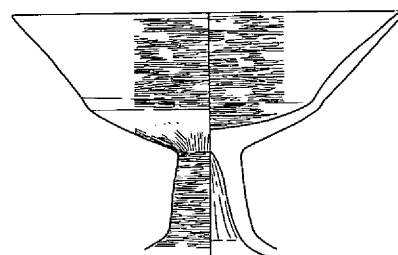
1358



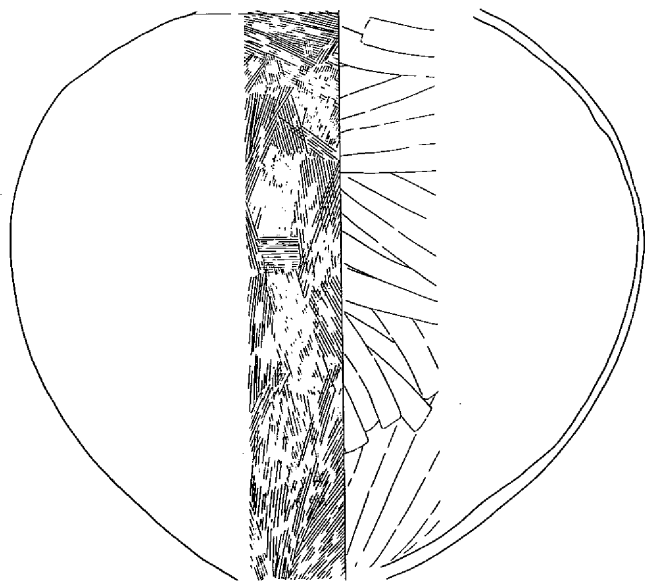
1362



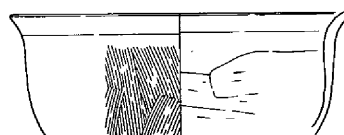
1365



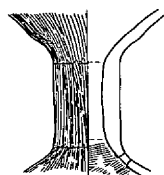
1363



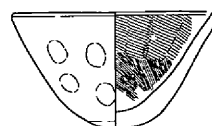
1364



1367



1366



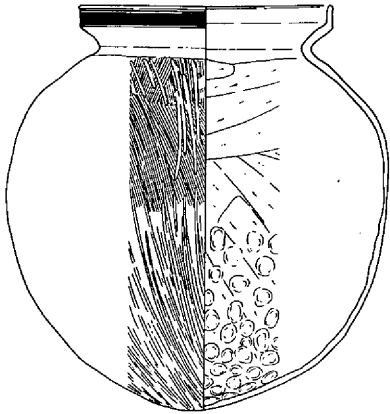
1368



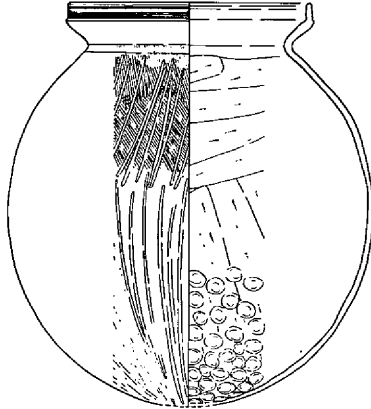
豎穴住居—70 1352~1356
豎穴住居—75 1360~1363

豎穴住居—73 1357~1358
豎穴住居—76 1364~1368

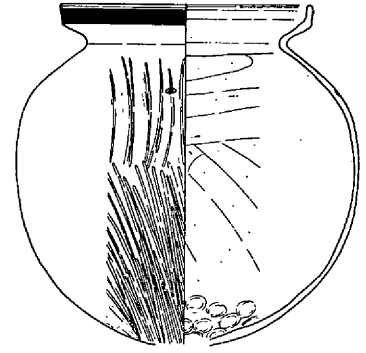
豎穴住居—74 1359



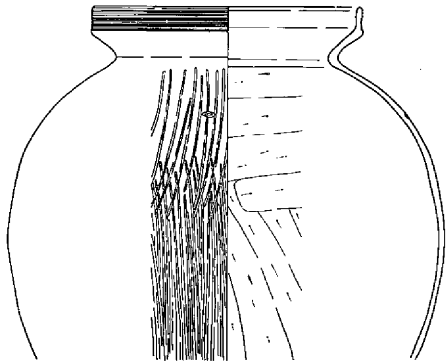
1369



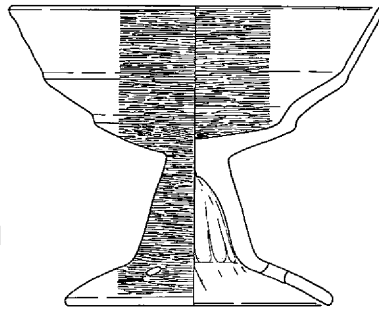
1370



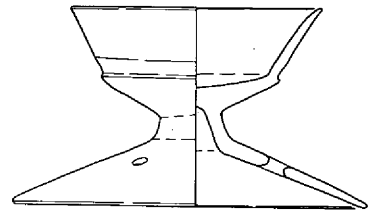
1371



1372



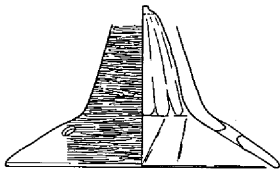
1373



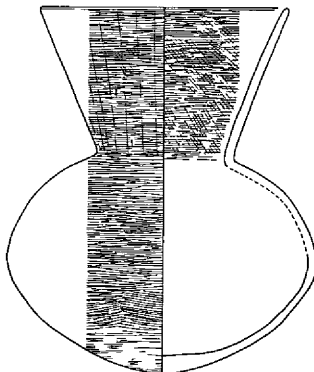
1374



1379



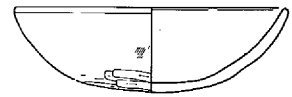
1375



1377



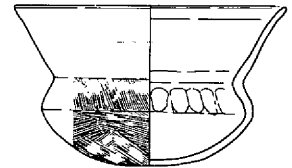
1378



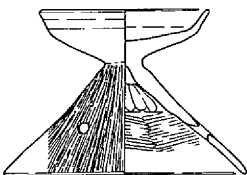
1380



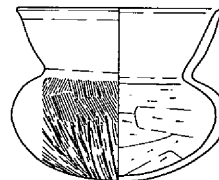
1381



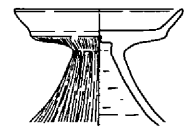
1382



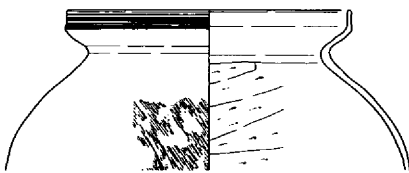
1376



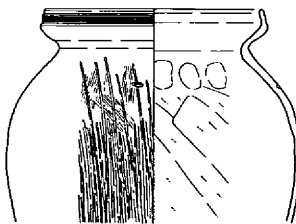
1383



1387



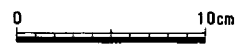
1384



1385

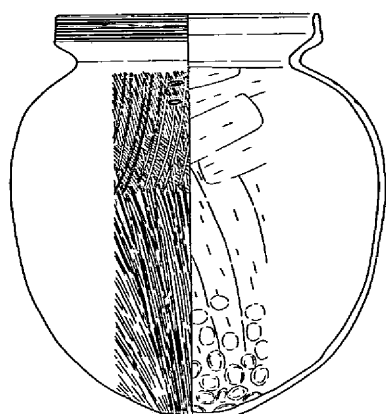


1386

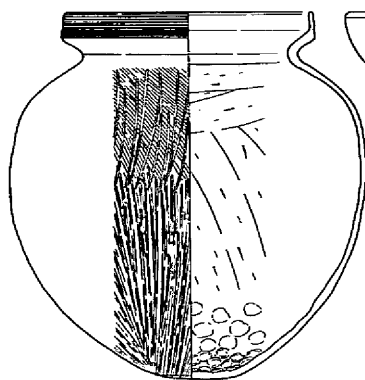


豎穴住居—77·78 1369~1383

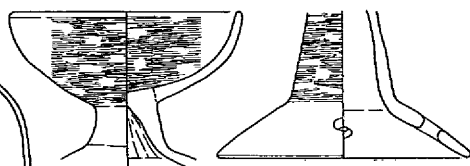
豎穴住居—79 1384~1387



1388

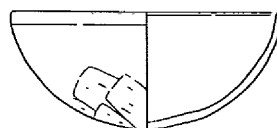


1389



1390

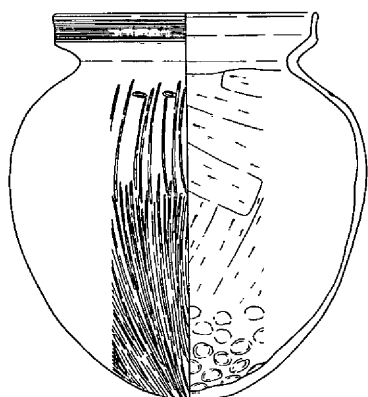
1391



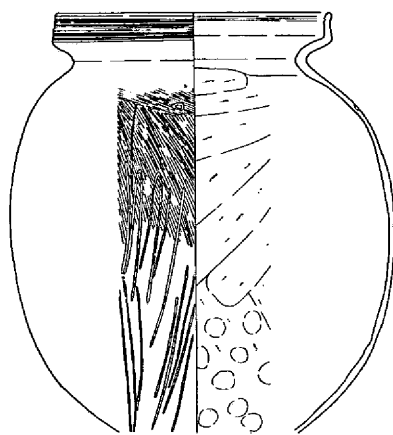
1392



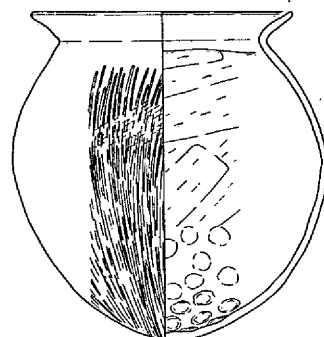
1393



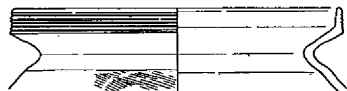
1394



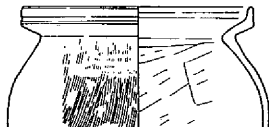
1395



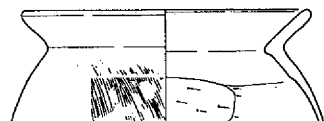
1396



1397



1400



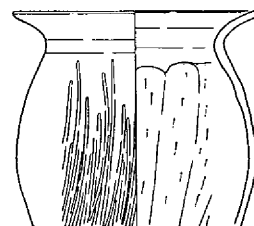
1403



1398



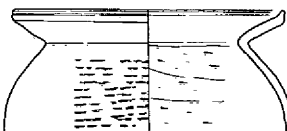
1401



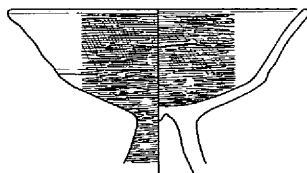
1404



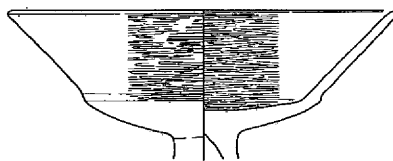
1399



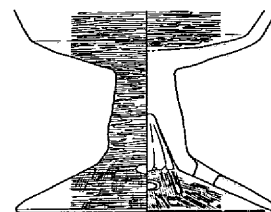
1402



1405



1406



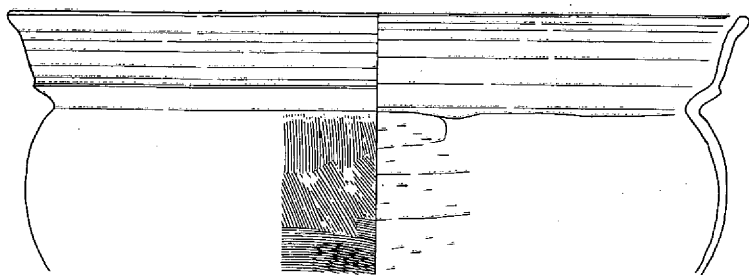
1407



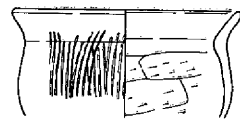
竖穴住居—80 1388~1393

竖穴住居—81 1394~1396

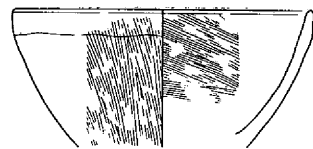
竖穴住居—82 1397~1407



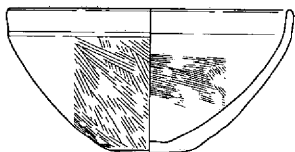
1408



1411



1412



1409



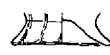
1410



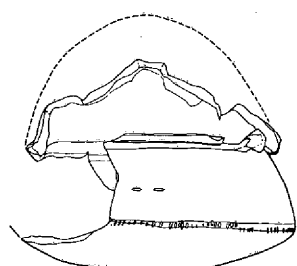
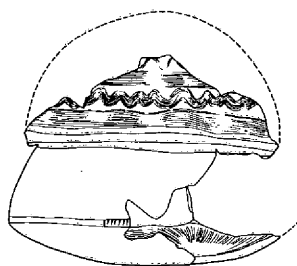
1413



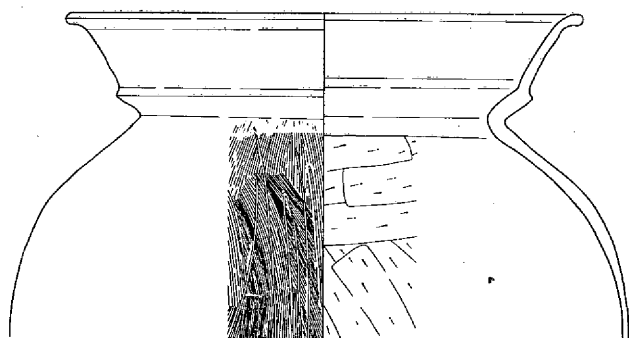
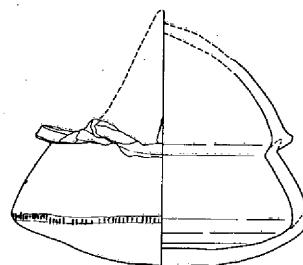
1414



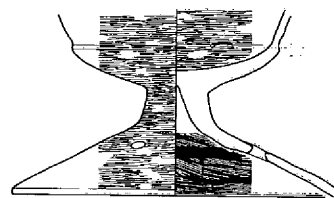
1415



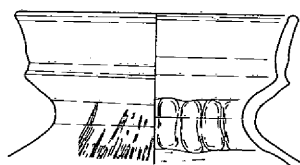
1416



1418



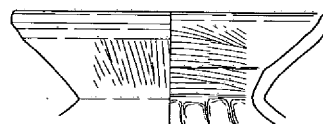
1417



1419



1420



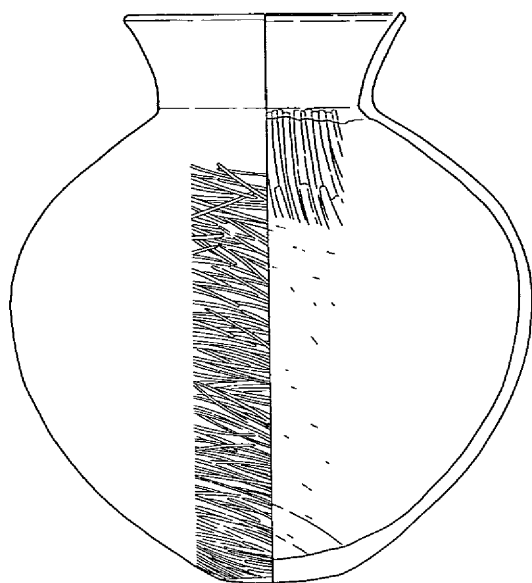
1421



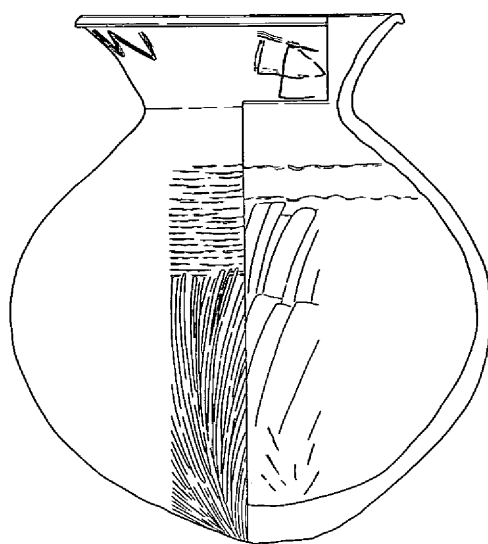
竖穴住居—82 1408~1416

竖穴住居—83 1417

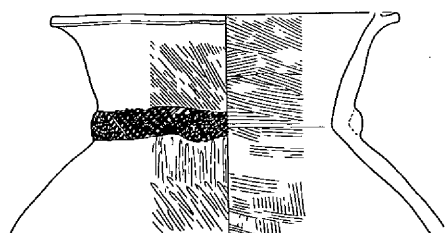
竖穴住居—84 1418~1421



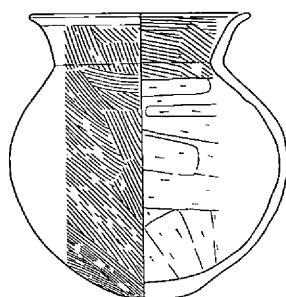
1422



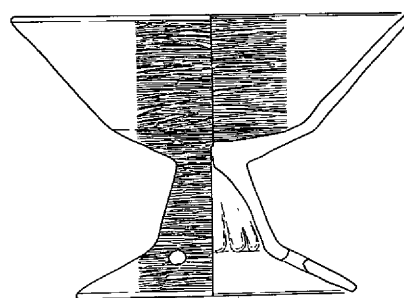
1423



1424



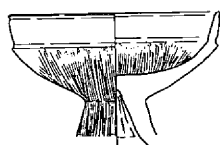
1425



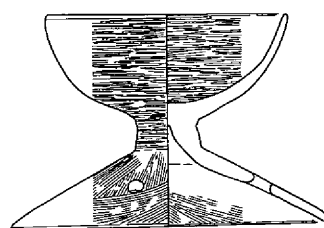
1429



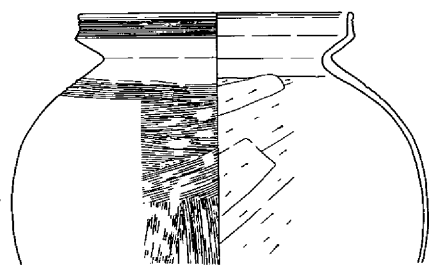
1426



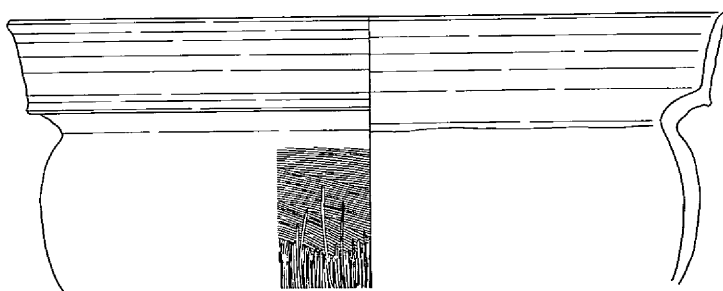
1431



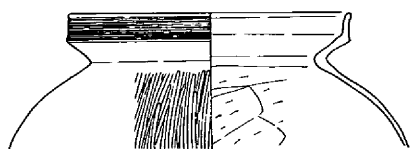
1430



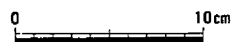
1427

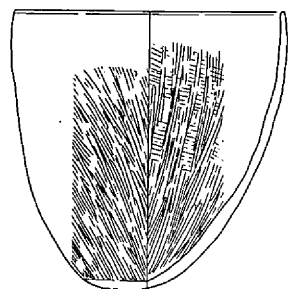


1432

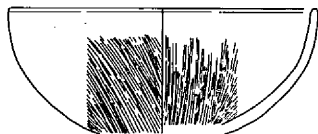


1428





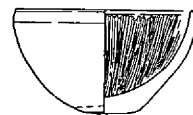
1433



1434



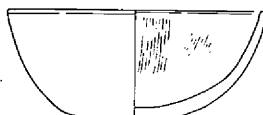
1435



1436



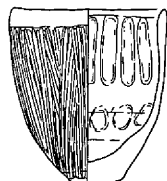
1437



1438



1439



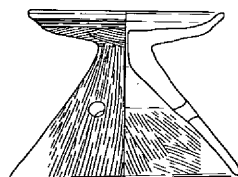
1440



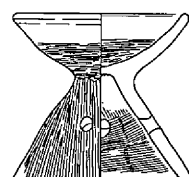
1441



1444



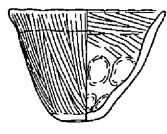
1447



1448



1445



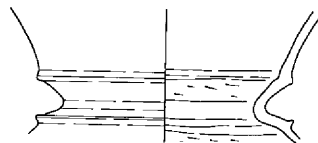
1442



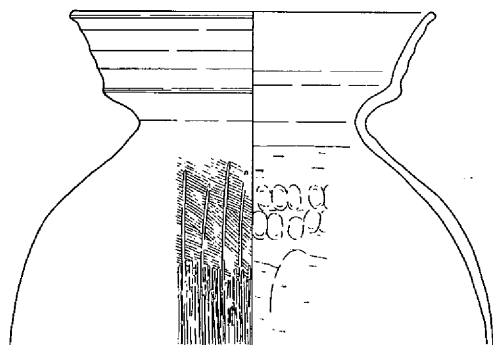
1443



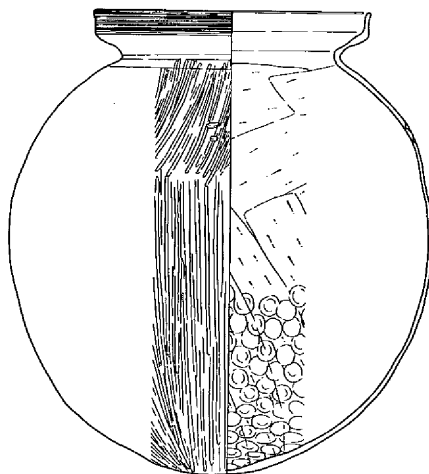
1446



1449



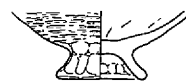
1450



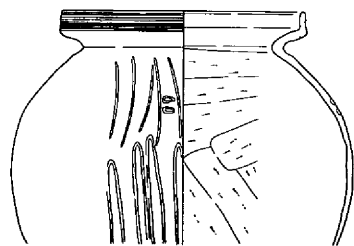
1451



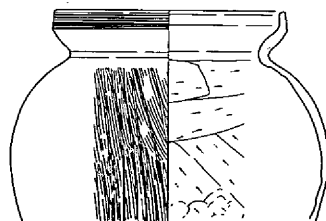
1452



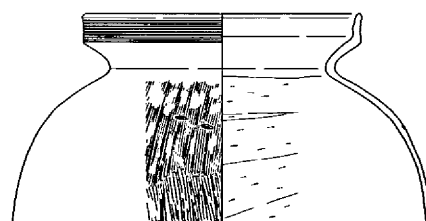
1453



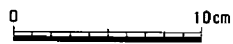
1454



1455



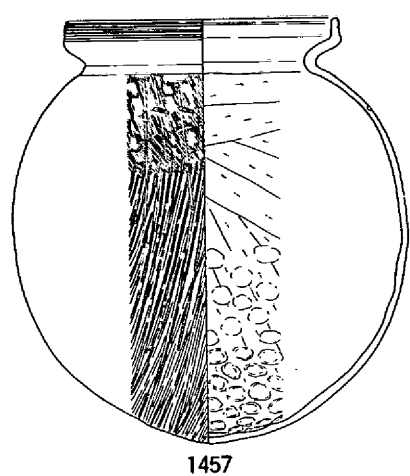
1456



竖穴住居—84 1433~1449

竖穴住居—86 1450~1453

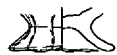
竖穴住居—87 1454~1456



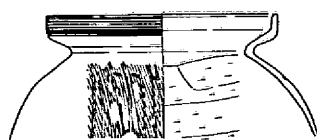
1457



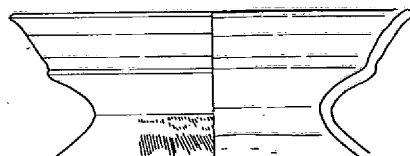
1461



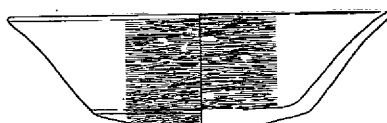
1462



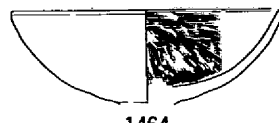
1458



1463



1459



1464



1460



1465



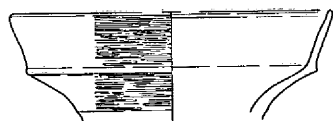
1466



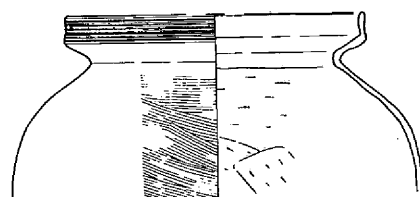
1467



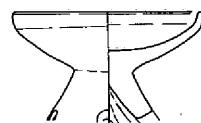
1468



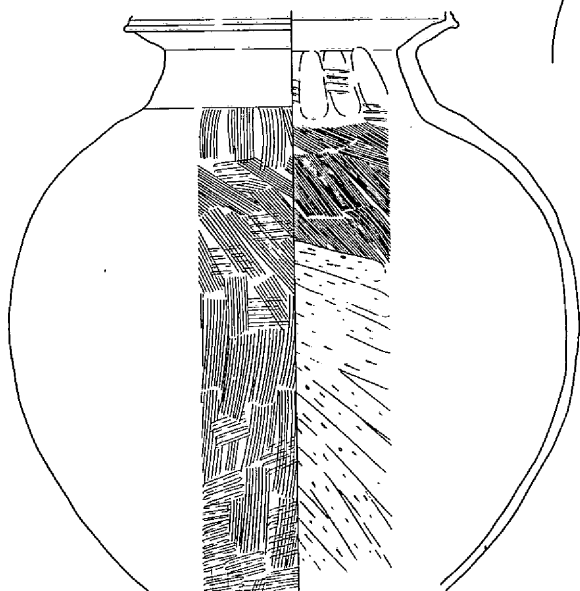
1469



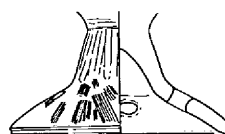
1471



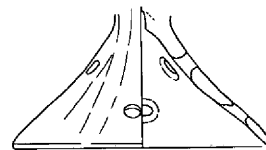
1473



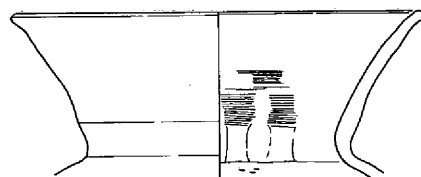
1470



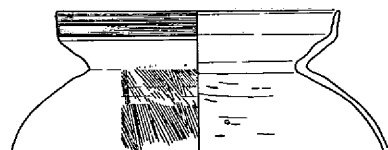
1472



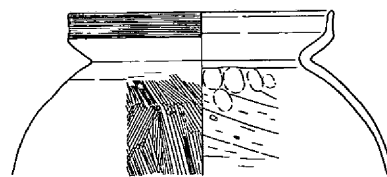
1474



1475



1476



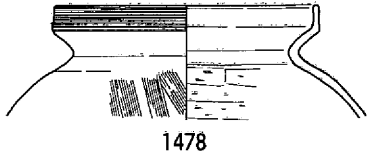
1477



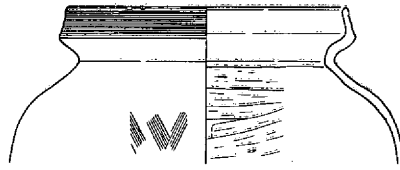
豎穴住居—87 1457~1462
豎穴住居—90 1475~1477

豎穴住居—88 1463~1468

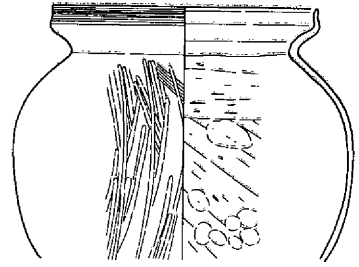
豎穴住居—89 1469~1474



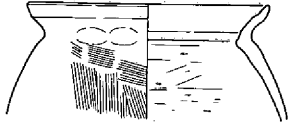
1478



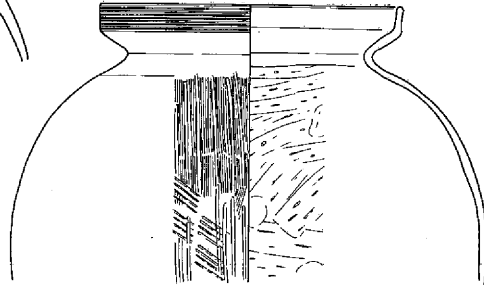
1479



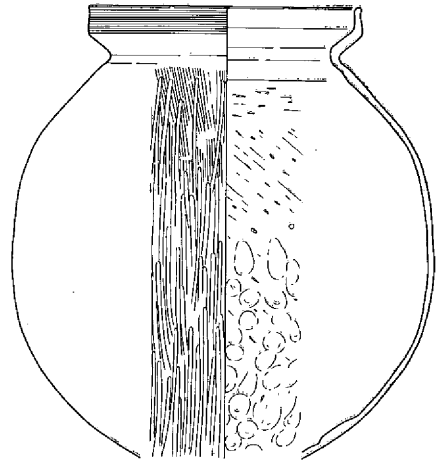
1480



1483



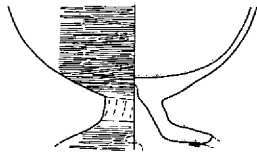
1481



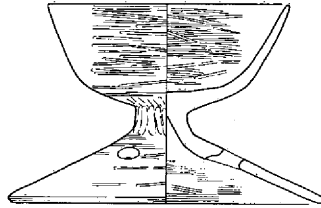
1482



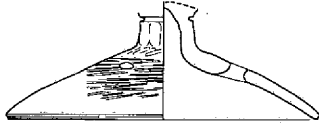
1484



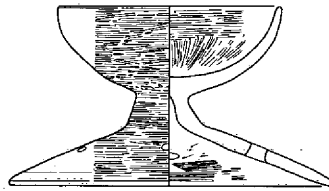
1485



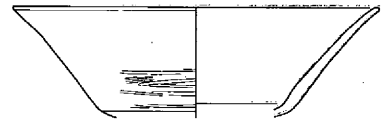
1488



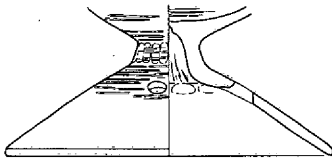
1486



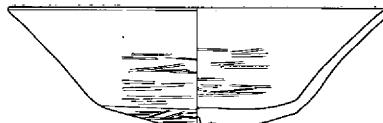
1489



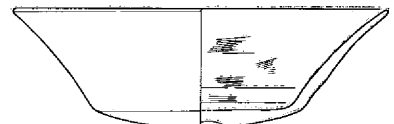
1490



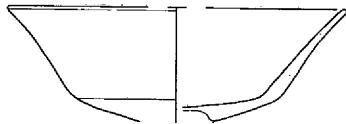
1487



1493



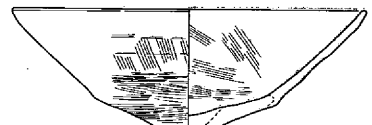
1491



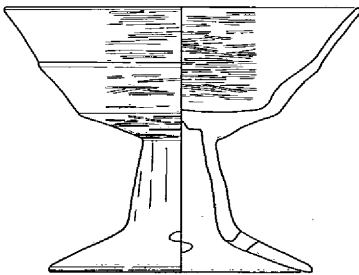
1492



1494



1495



1496



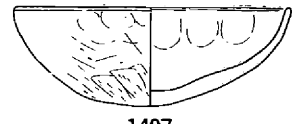
1498



1499

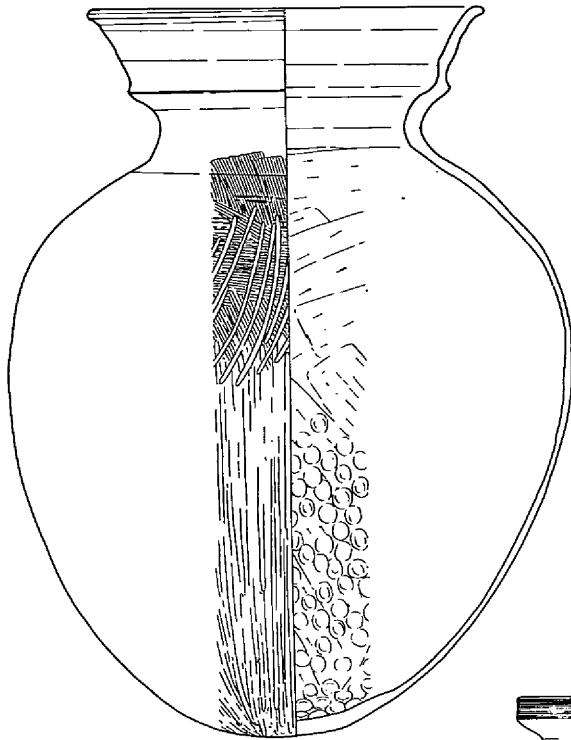


1500

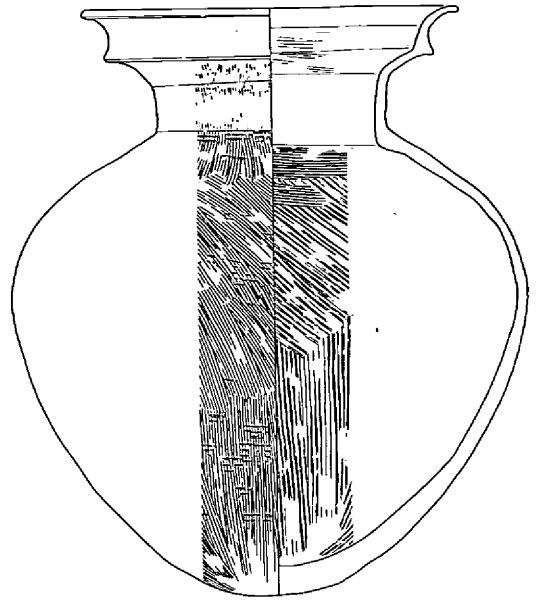


1497

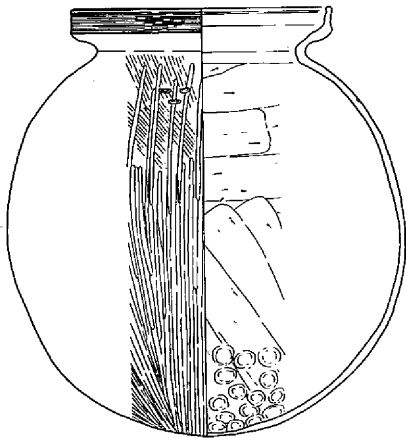




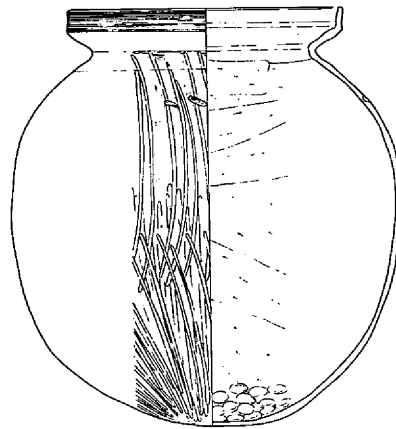
1501



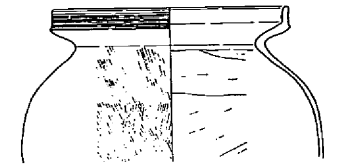
1502



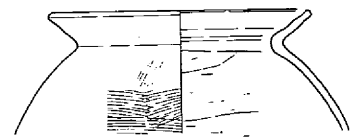
1503



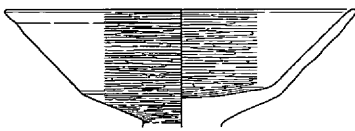
1504



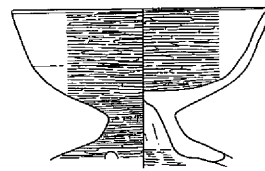
1505



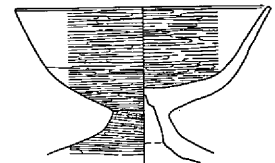
1506



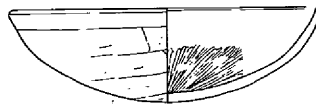
1507



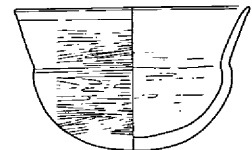
1508



1509

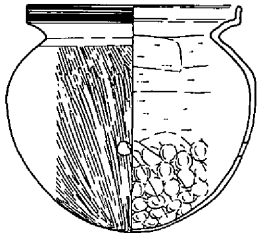


1510

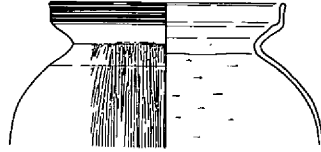


1511

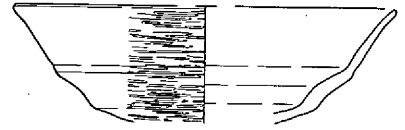




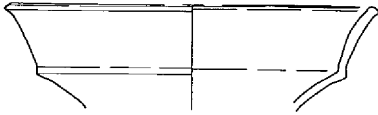
1512



1513



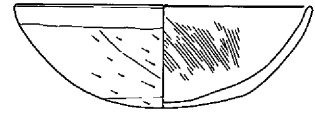
1514



1515



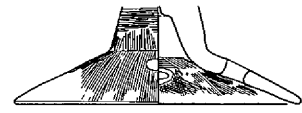
1516



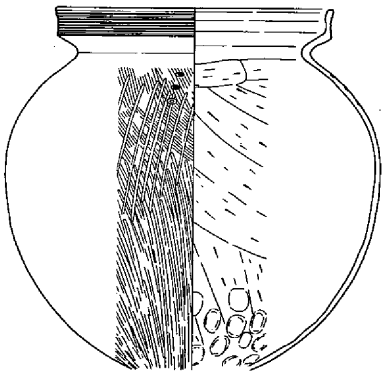
1517



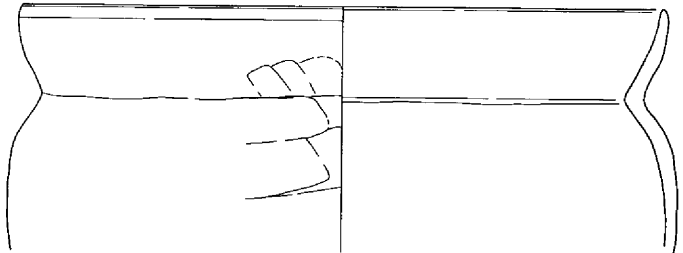
1519



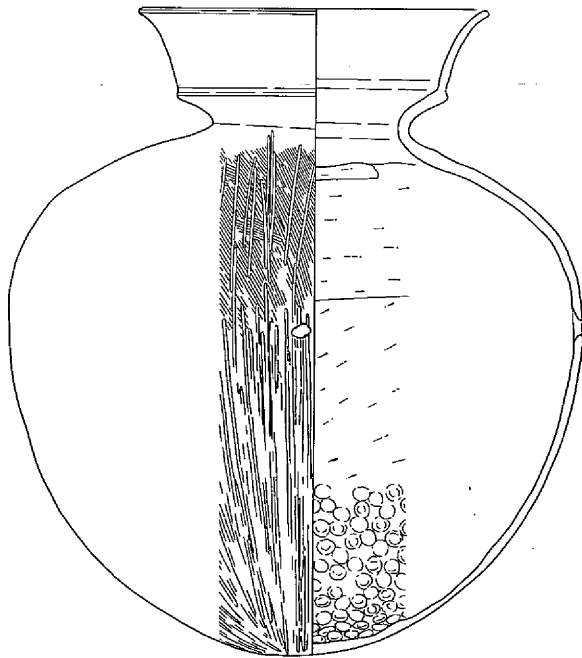
1520



1518



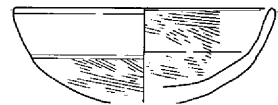
1521



1525



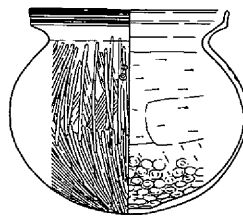
1522



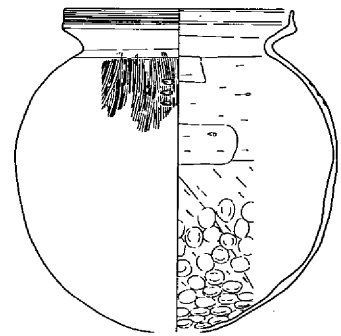
1524



1523



1526



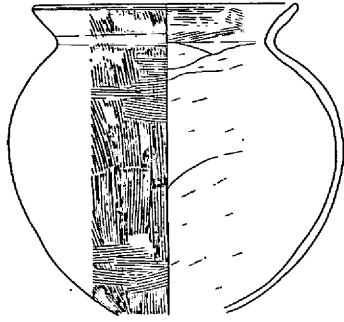
1527



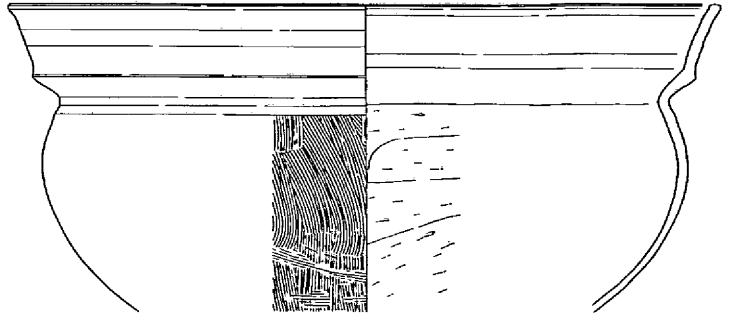
豎穴住居—94 1512~1517

豎穴住居—96 1518~1524

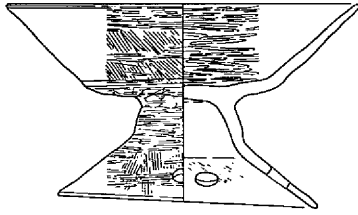
豎穴住居—97 1525~1527



1528



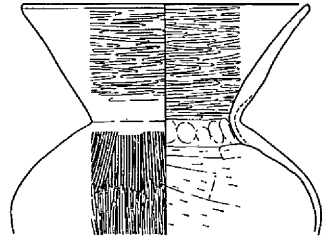
1530



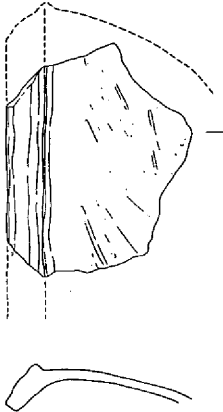
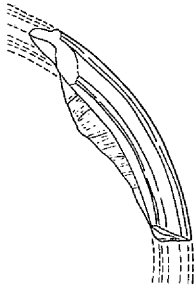
1529



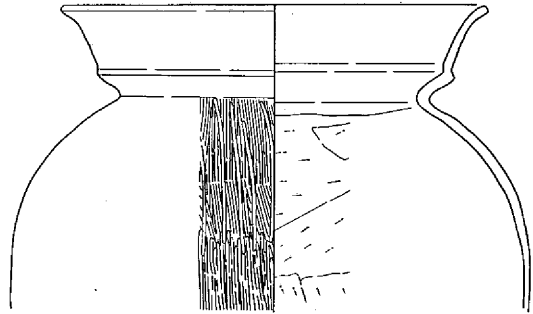
1531



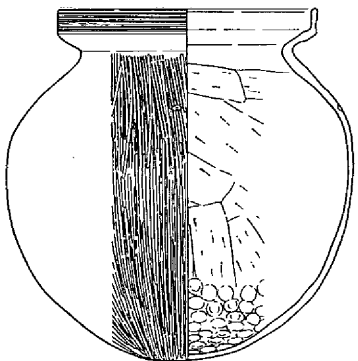
1532



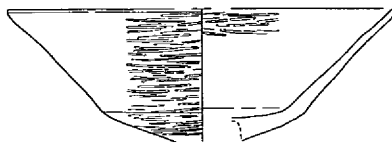
1533



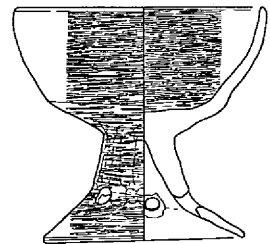
1534



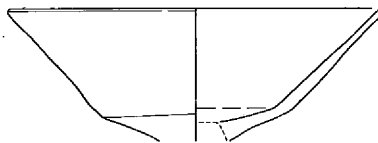
1535



1536



1538

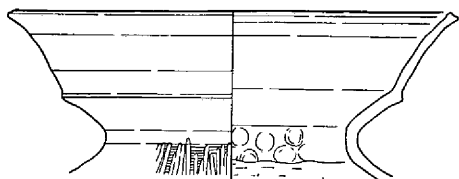


1537

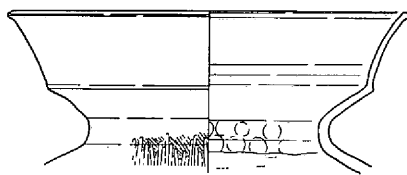


豎穴住居—97 1528~1533

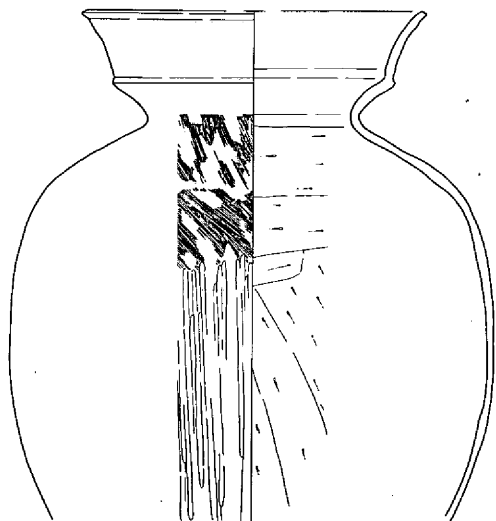
豎穴住居—98 1534~1538



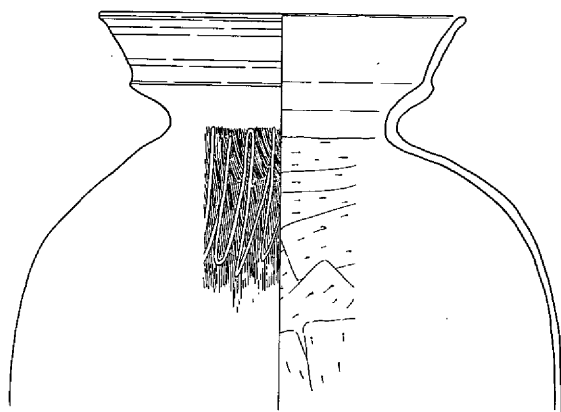
1539



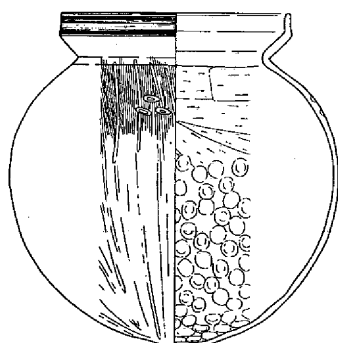
1540



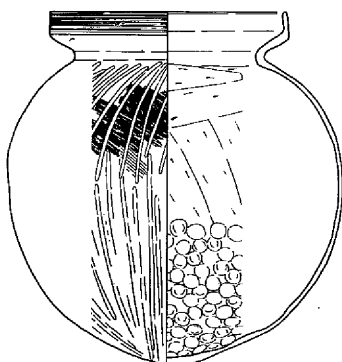
1541



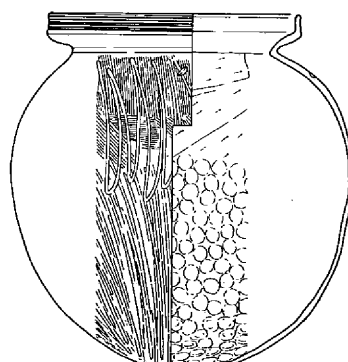
1542



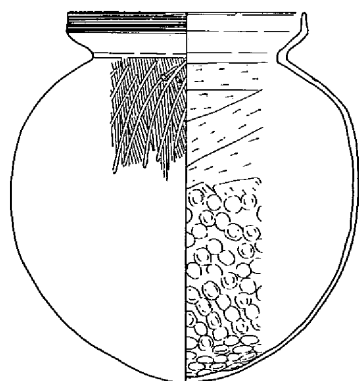
1543



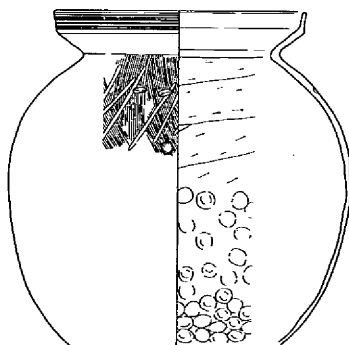
1544



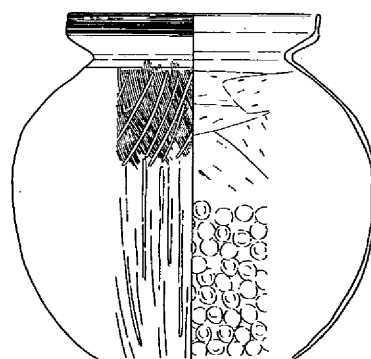
1545



1546

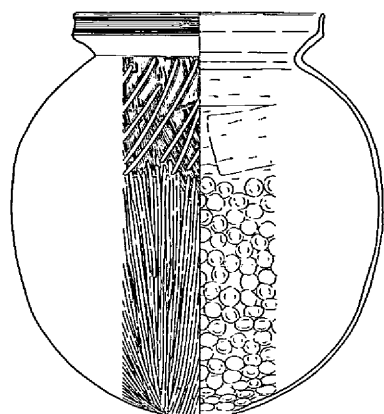


1547

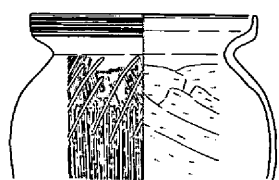


1548

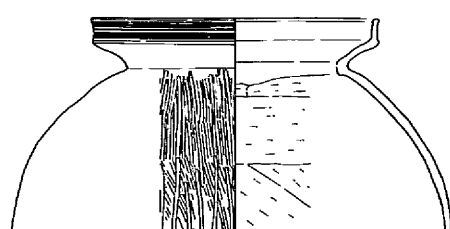




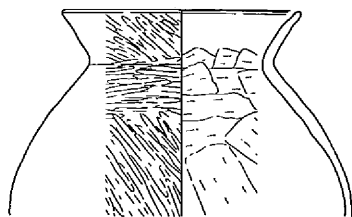
1549



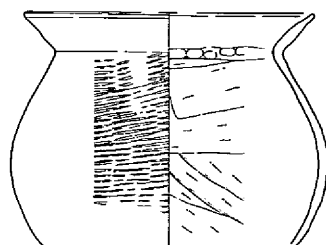
1550



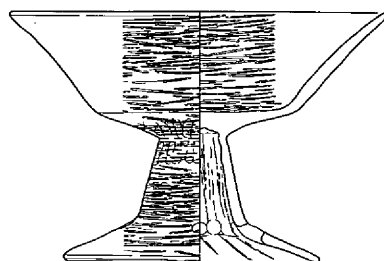
1551



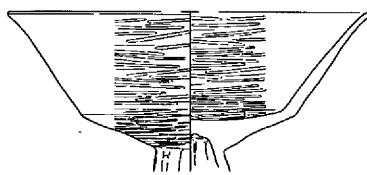
1552



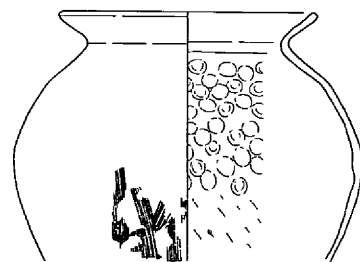
1553



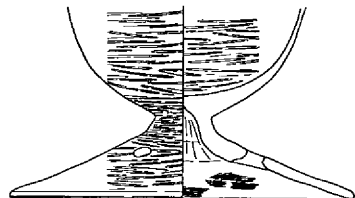
1555



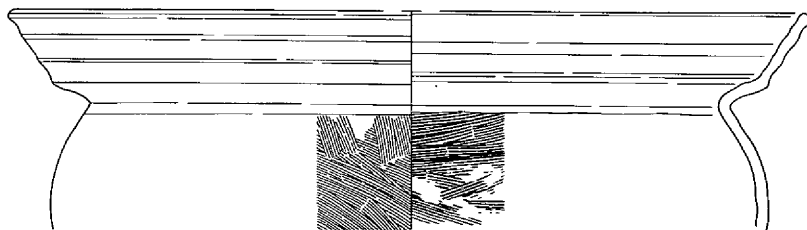
1556



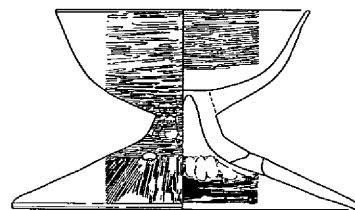
1554



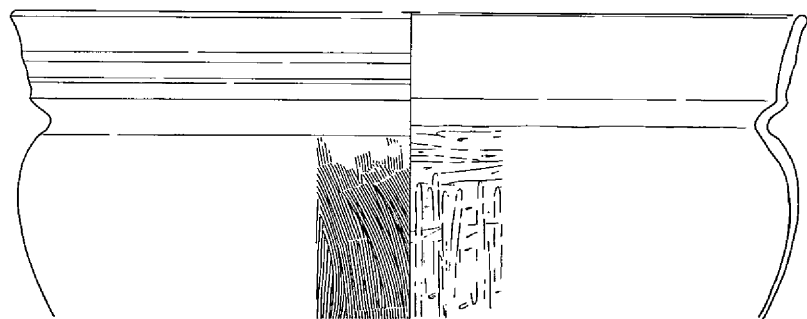
1557



1559

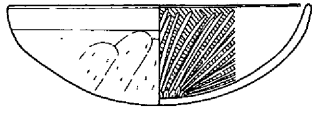


1558

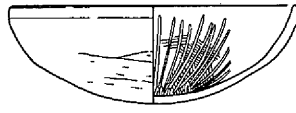


1560





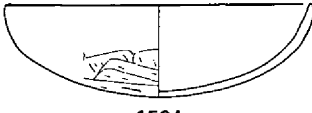
1561



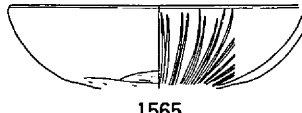
1562



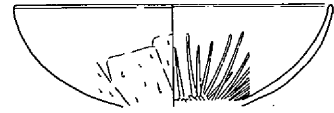
1563



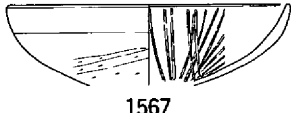
1564



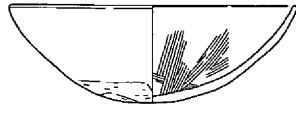
1565



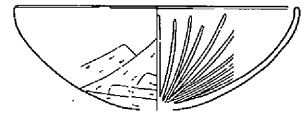
1566



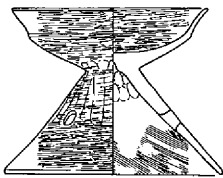
1567



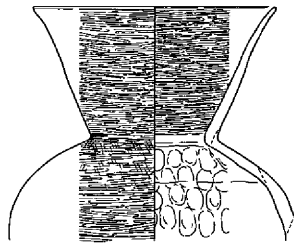
1568



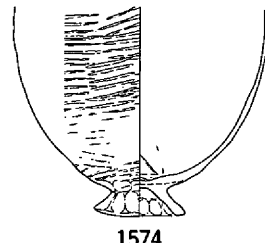
1569



1570



1572



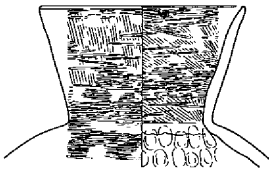
1574



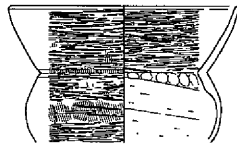
1576



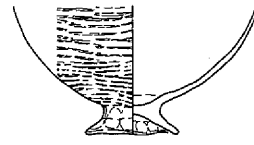
1577



1571



1573



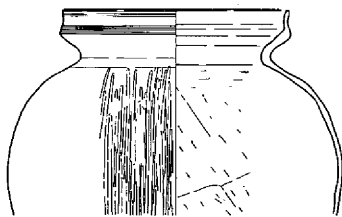
1575



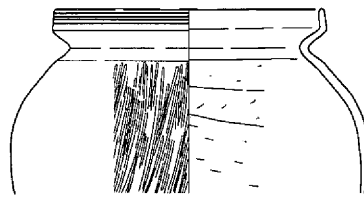
1578



1579



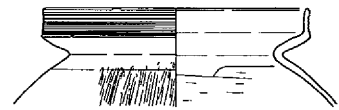
1580



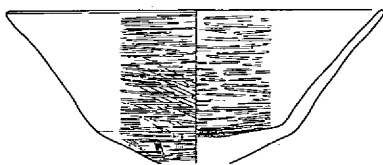
1581



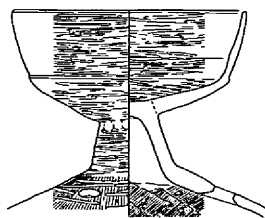
1582



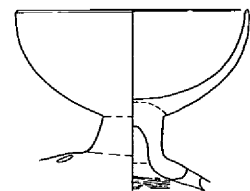
1583



1584



1585

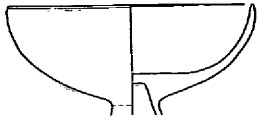


1586



豎穴住居—99 1561~1579

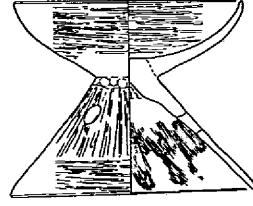
豎穴住居—100·101 1580~1586



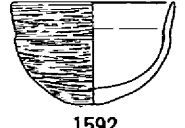
1587



1588



1589



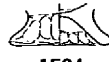
1592



1590



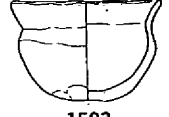
1591



1594



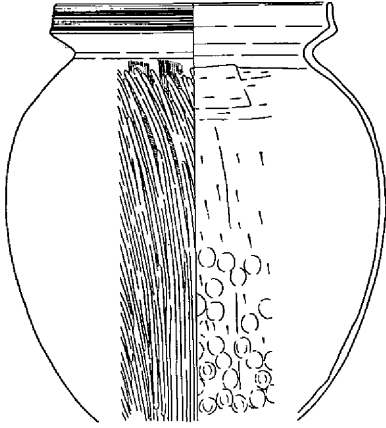
1595



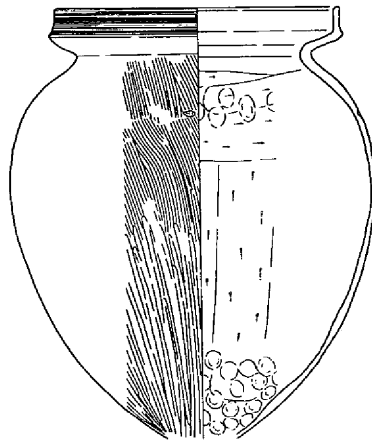
1593



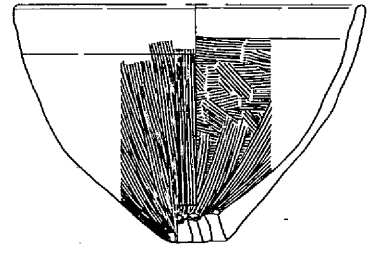
1596



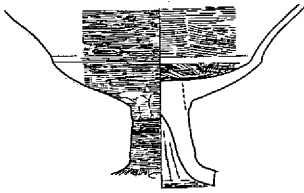
1597



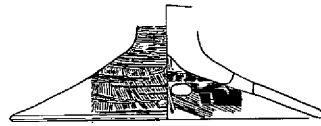
1598



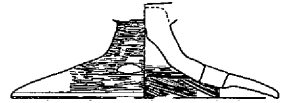
1599



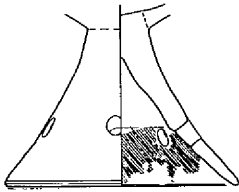
1600



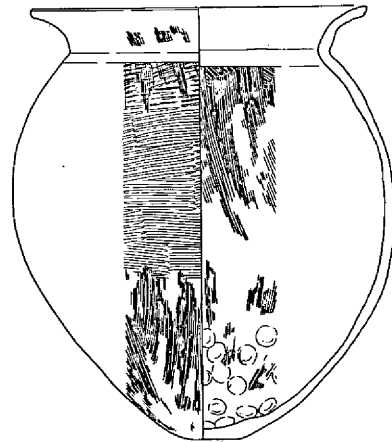
1601



1602



1603



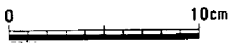
1604



1605



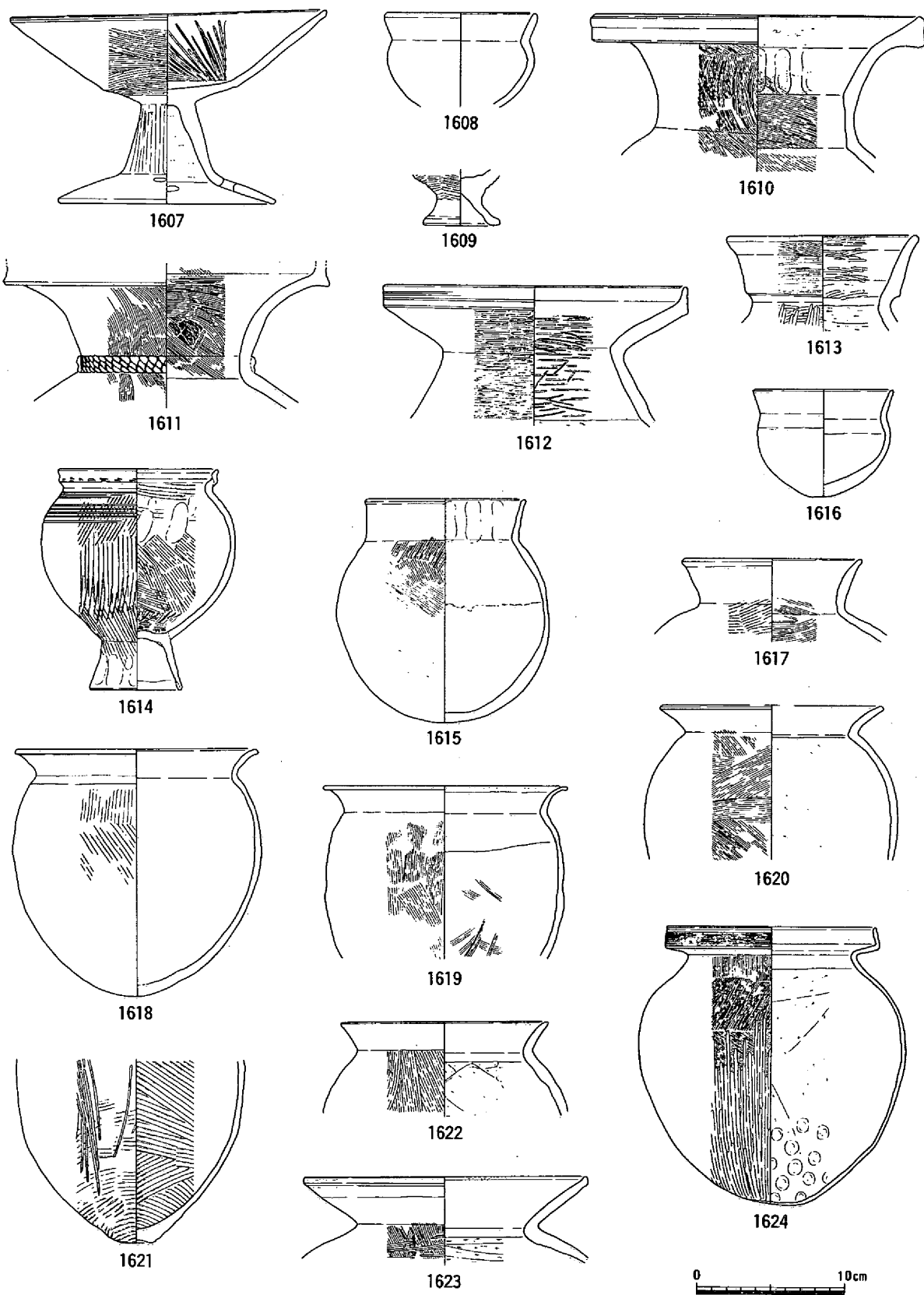
1606



竖穴住居—100·101 1578~1596

竖穴住居—102 1597~1603

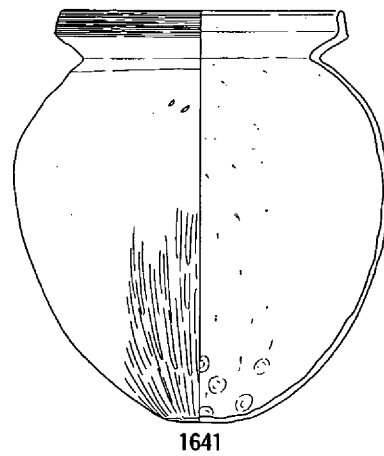
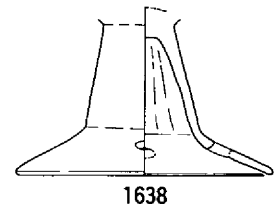
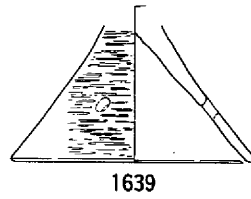
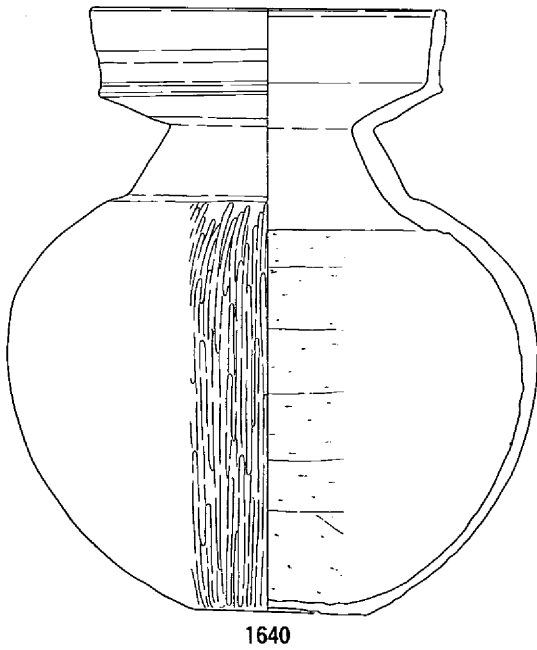
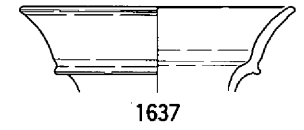
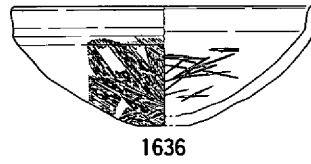
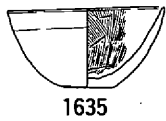
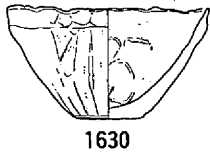
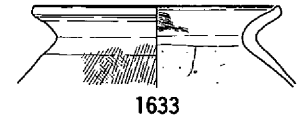
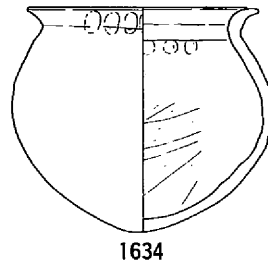
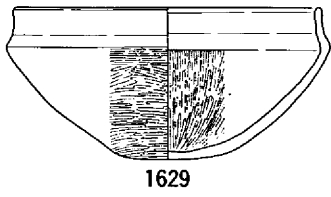
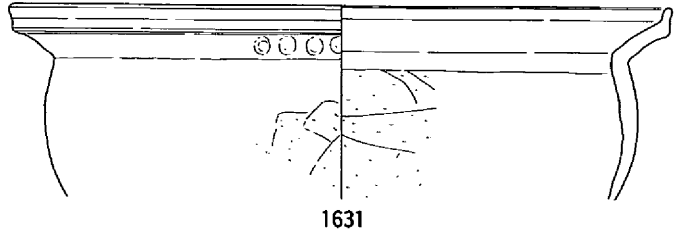
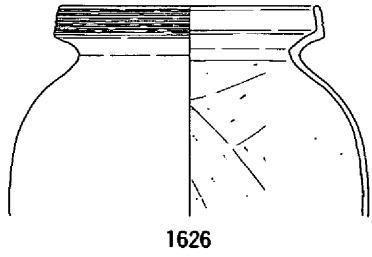
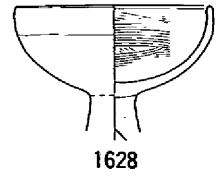
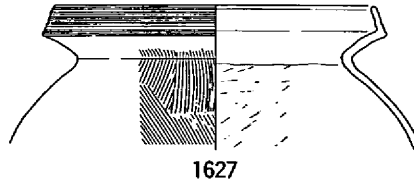
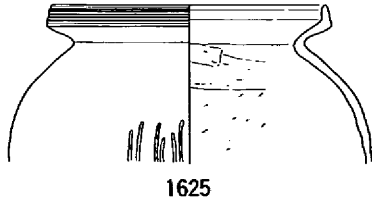
竖穴住居—103 1604~1606



豎穴住居—104 1607

豎穴住居—105 1608~1609

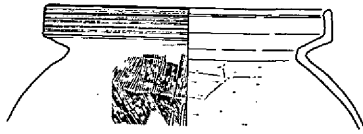
豎穴住居—106 1610~1624



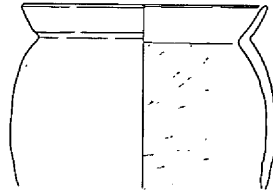
豎穴住居—106 1625~1631
豎穴住居—109 1640~1641

豎穴住居—107 1632~1636

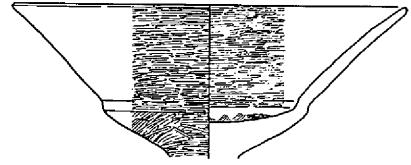
豎穴住居—108 1637~1639



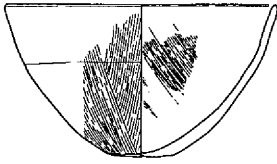
1642



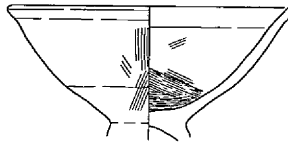
1643



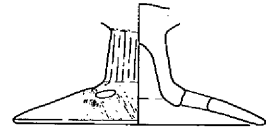
1644



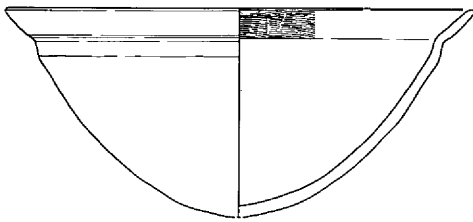
1647



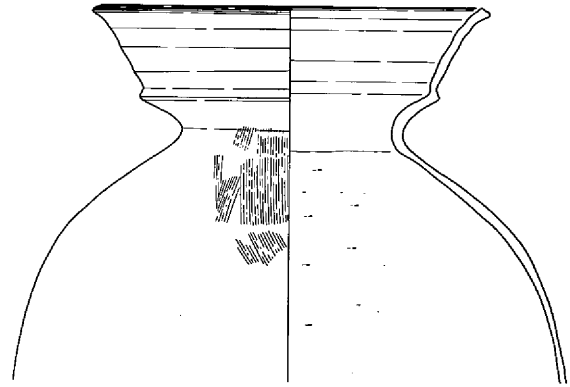
1646



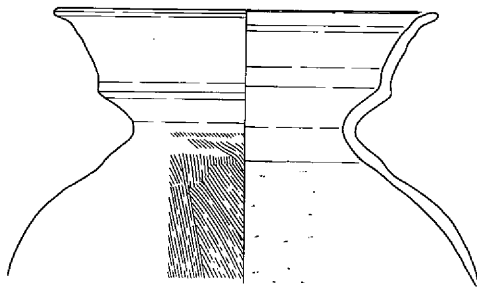
1645



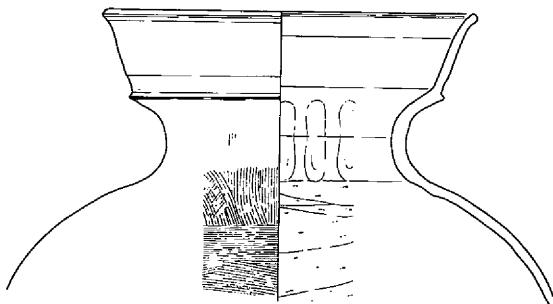
1648



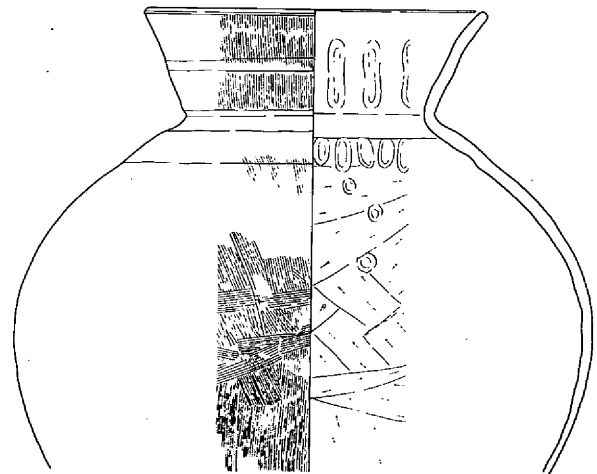
1651



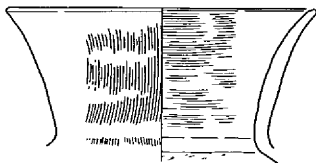
1649



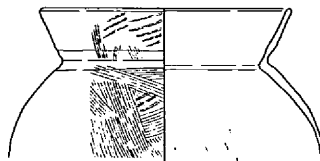
1650



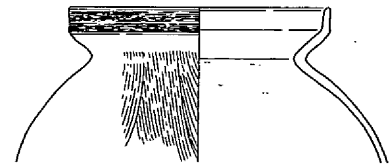
1652



1653



1654

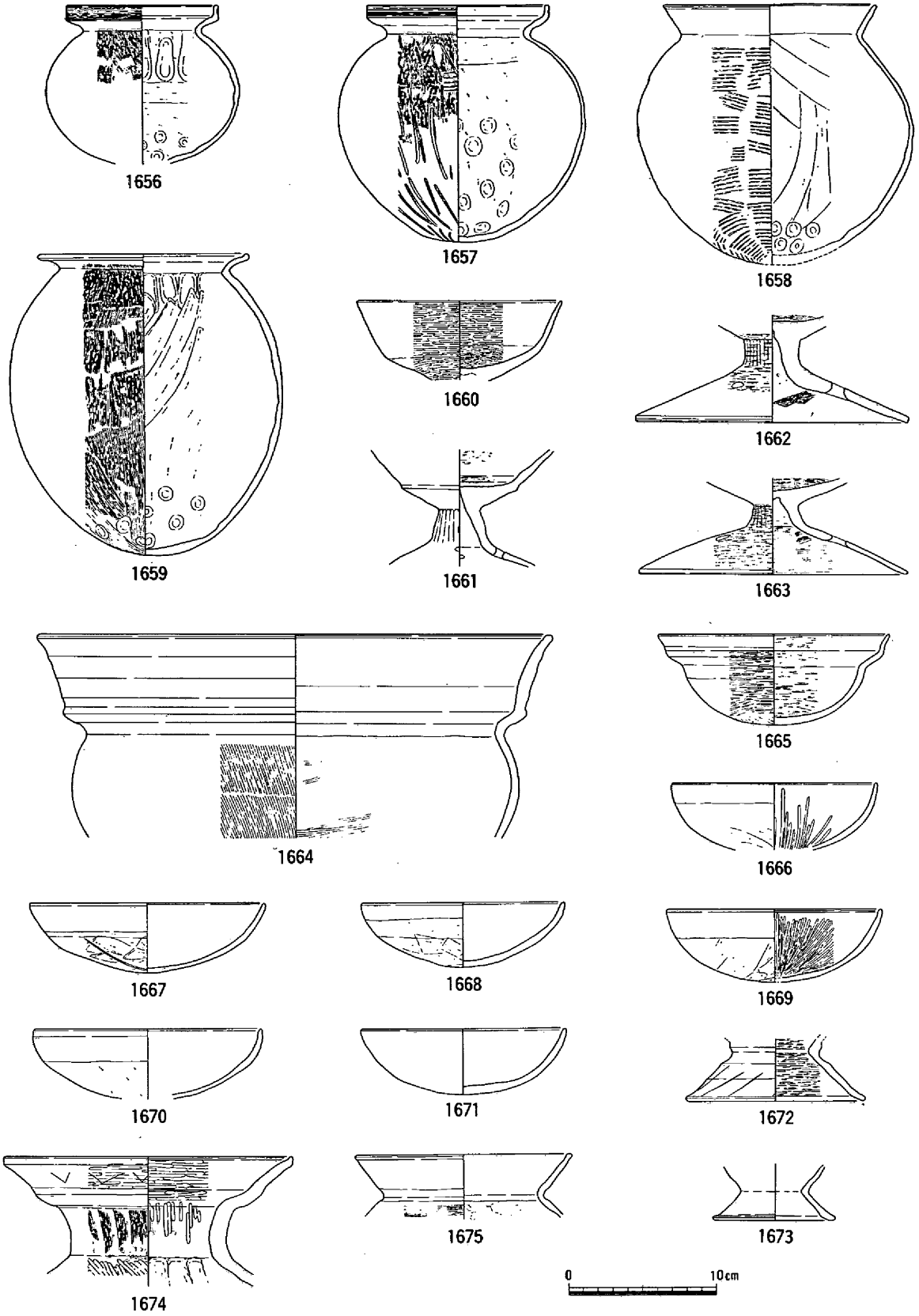


1655



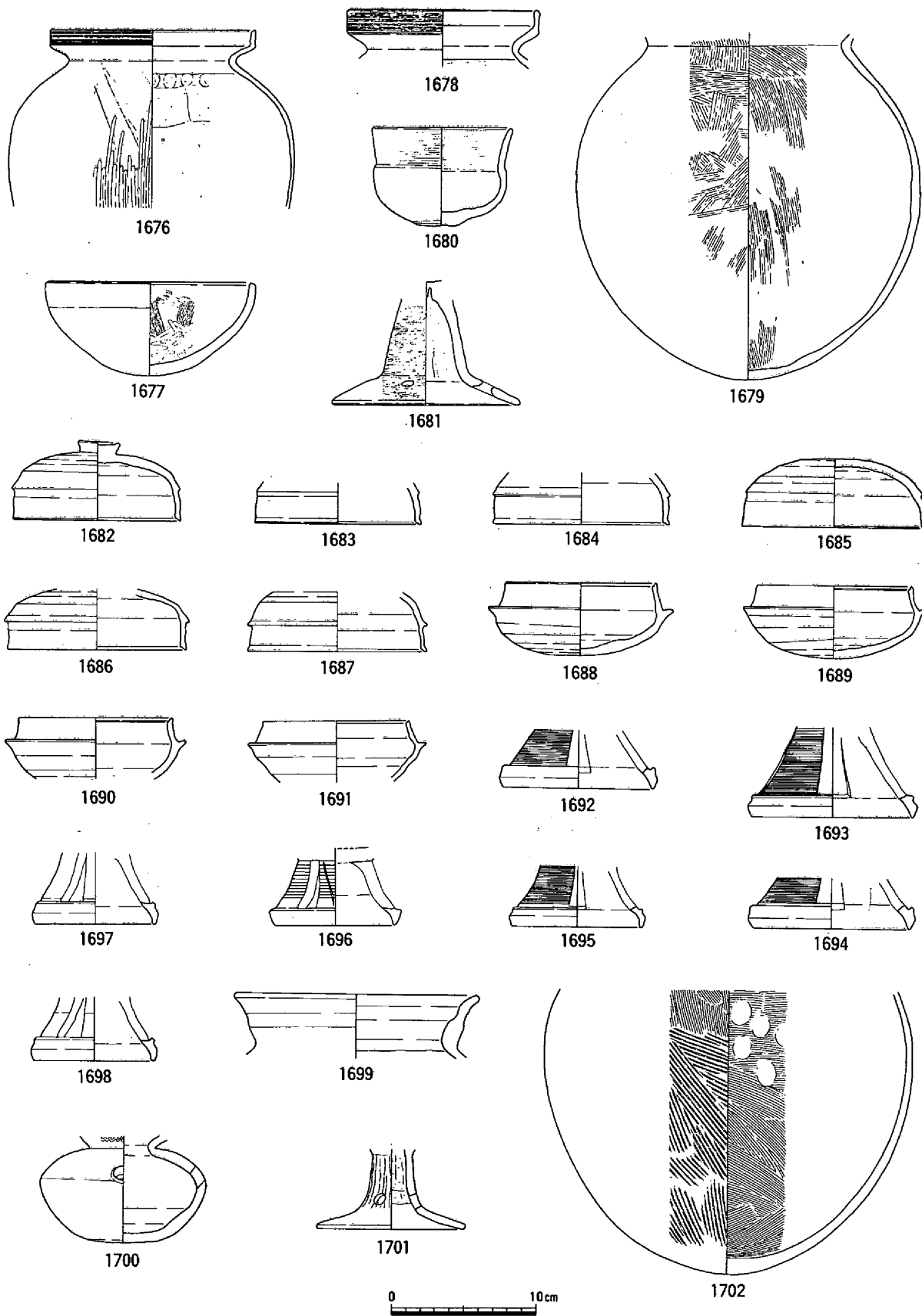
竖穴住居—109 1642~1648

竖穴住居—111 1649~1655



豎穴住居—111 1656~1673

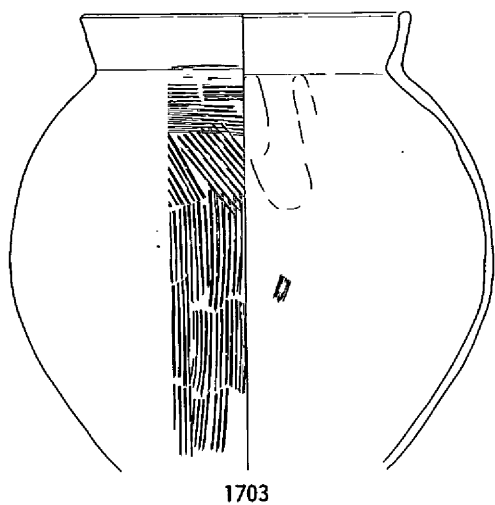
豎穴住居—112 1674~1675



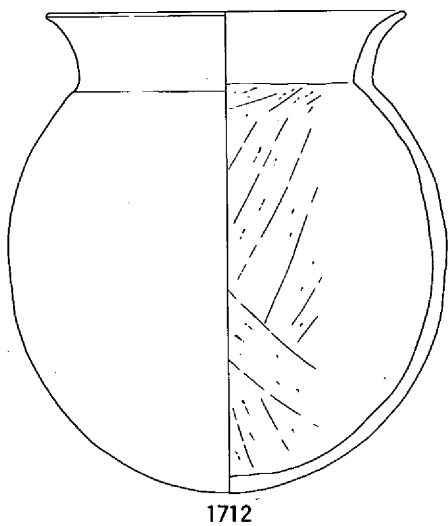
竖穴住居—112 1676~1677
竖穴住居—115 1700~1702

竖穴住居—113 1678~1681

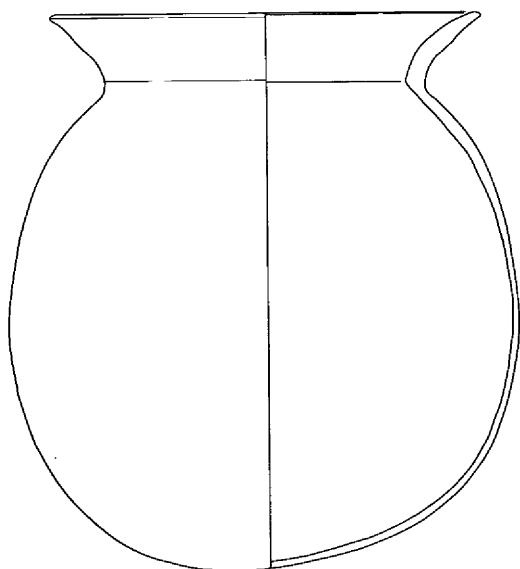
竖穴住居—114 1682~1699



1703



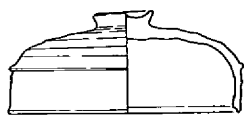
1712



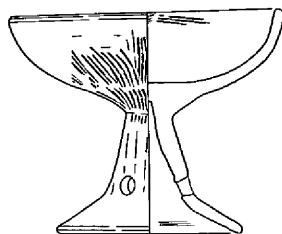
1713



1705



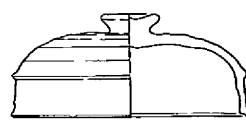
1707



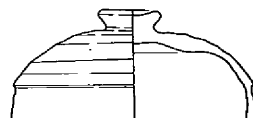
1704



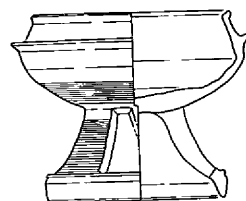
1710



1706



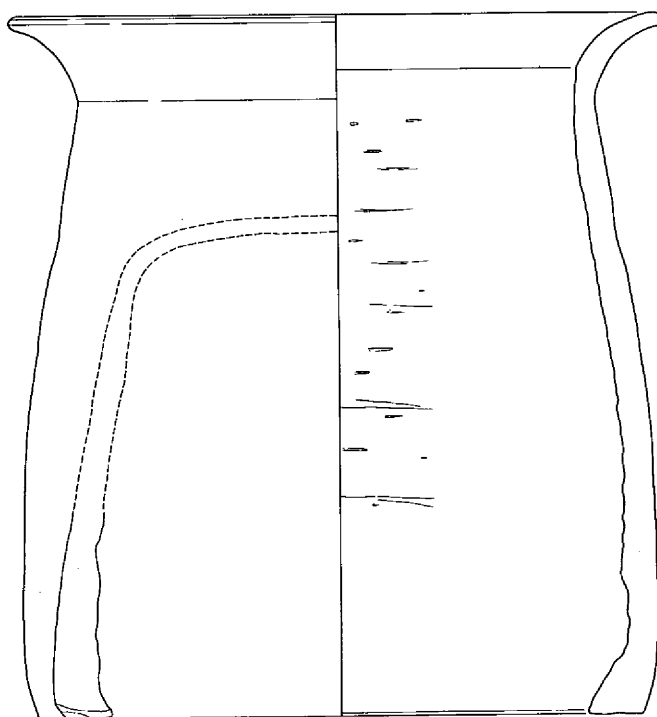
1708



1709



1711

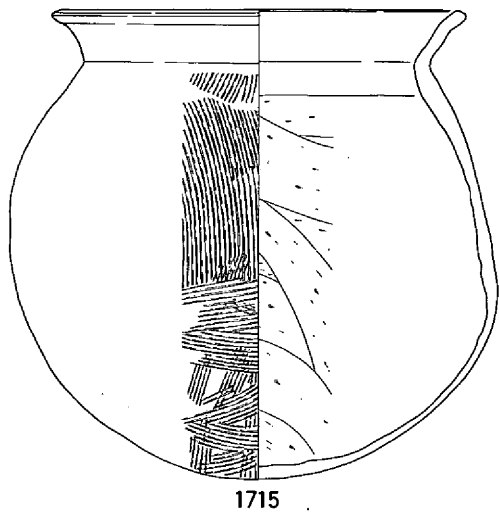


1714

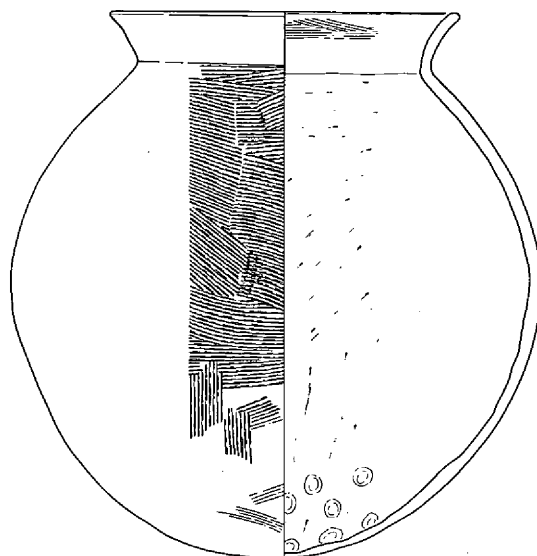


竖穴住居—116 1703~1709

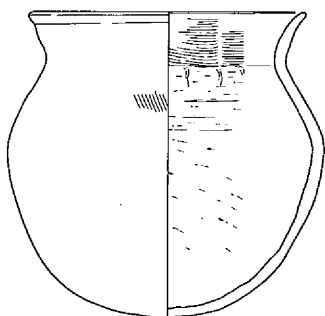
竖穴住居—117 1701~1714



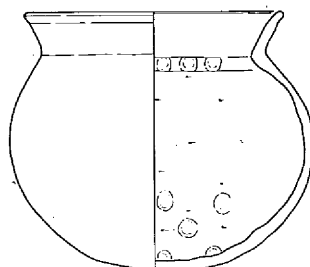
1715



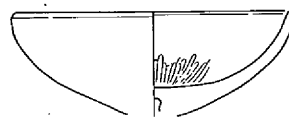
1716



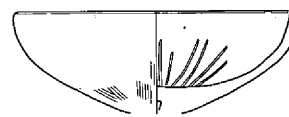
1717



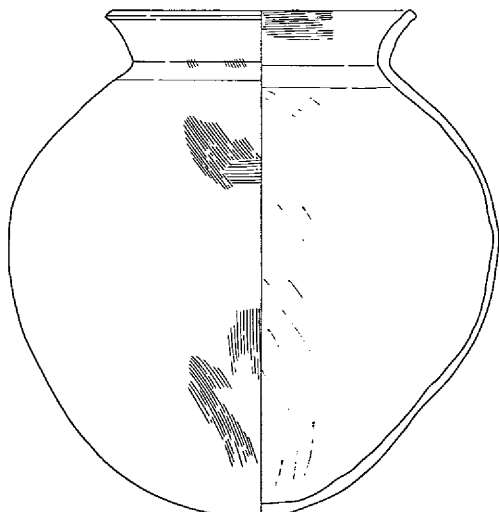
1718



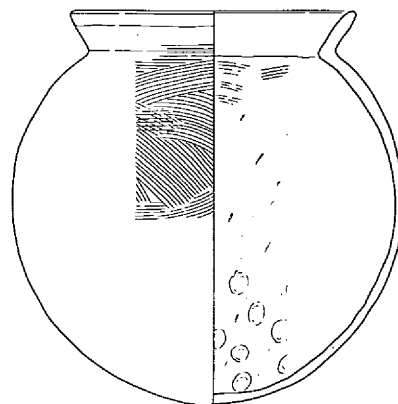
1721



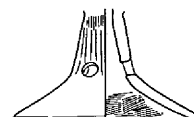
1722



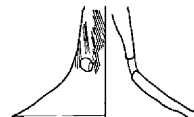
1719



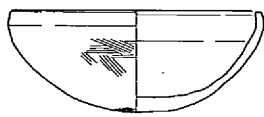
1720



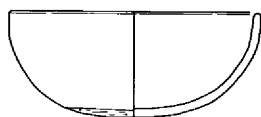
1723



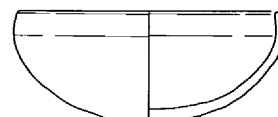
1724



1725



1726

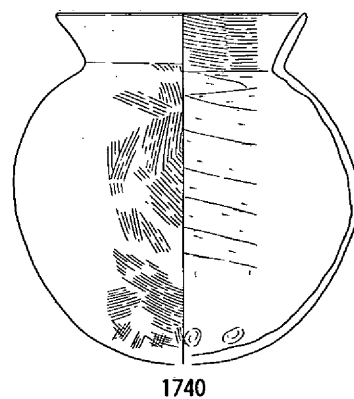
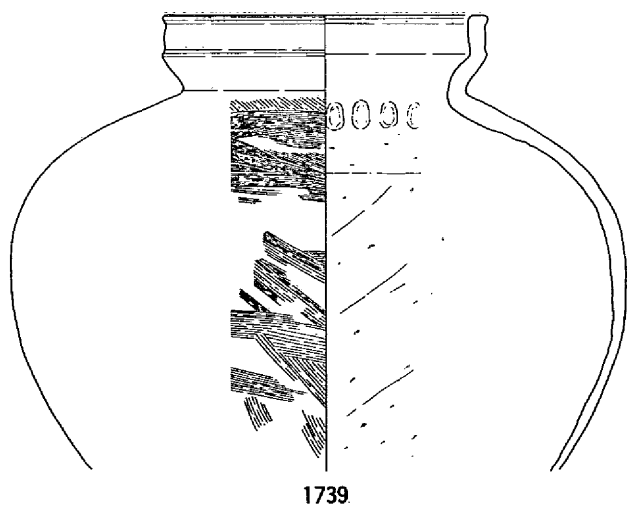
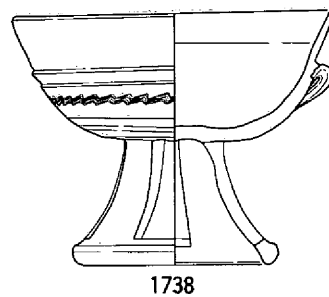
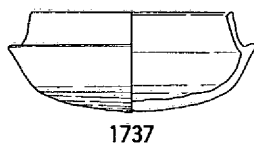
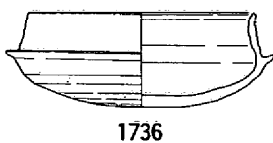
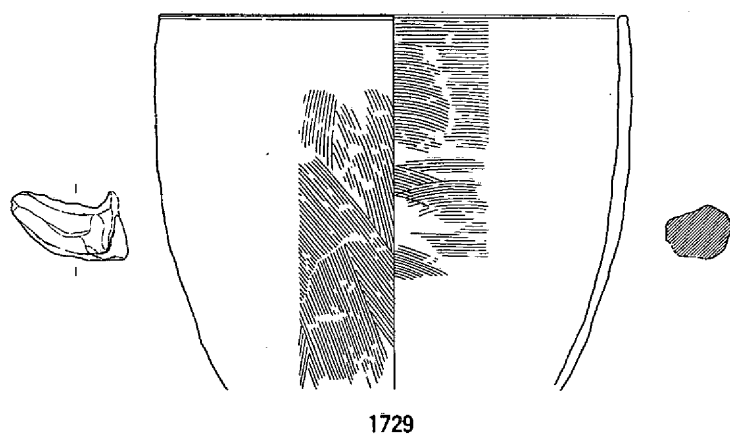
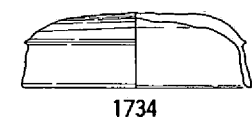
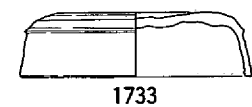
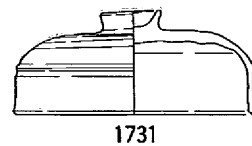
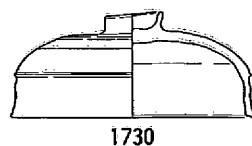
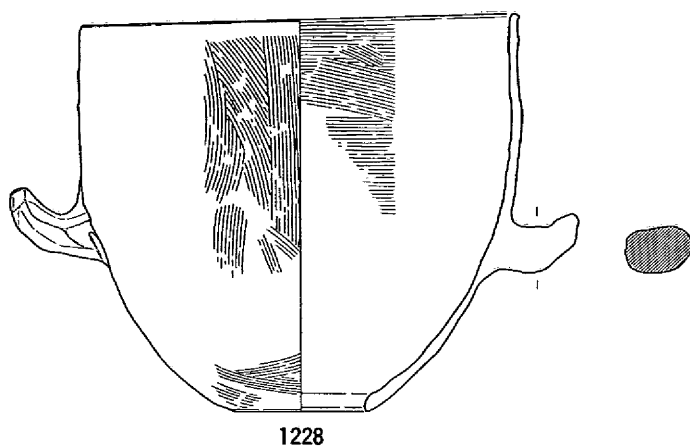


1727



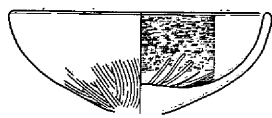
竖穴住居—117 1715

竖穴住居—118 1716~1727

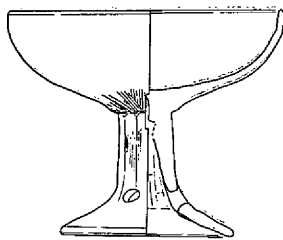


豎穴住居—118 1728~1738

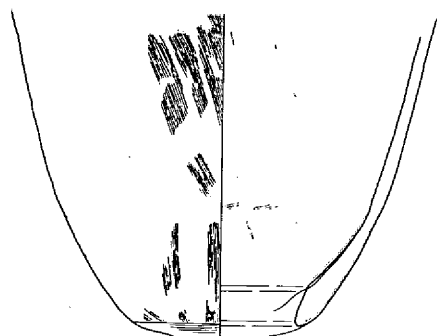
豎穴住居—119 1739·1740



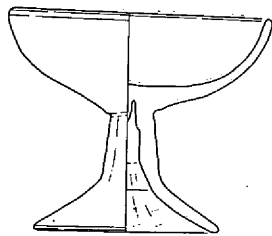
1741



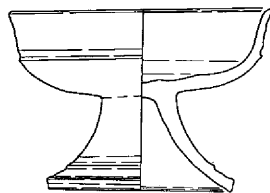
1743



1744



1742



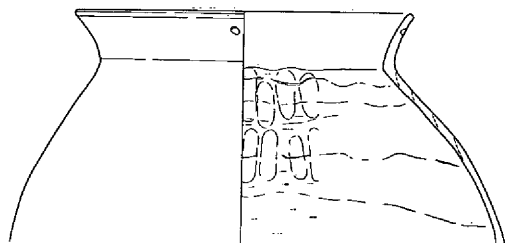
1746



1745



1747



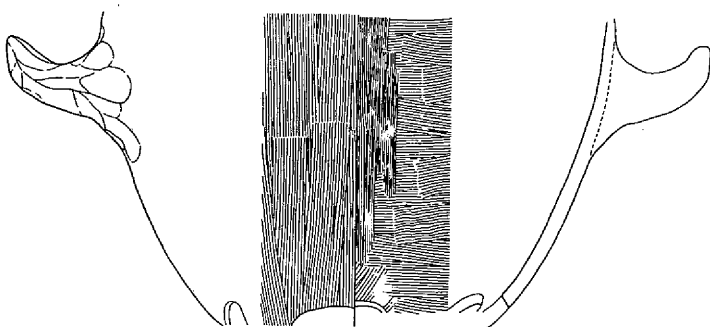
1749



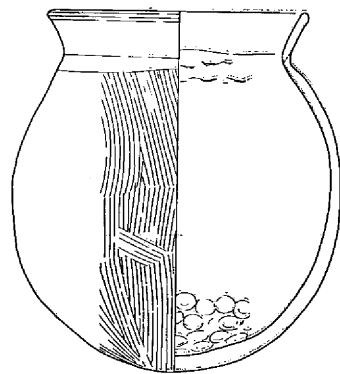
1751



1748



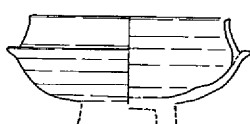
1750



1752



1754



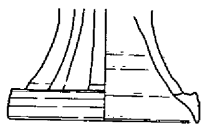
1755



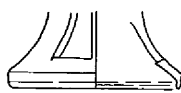
1756



1753



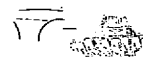
1757



1758



1759



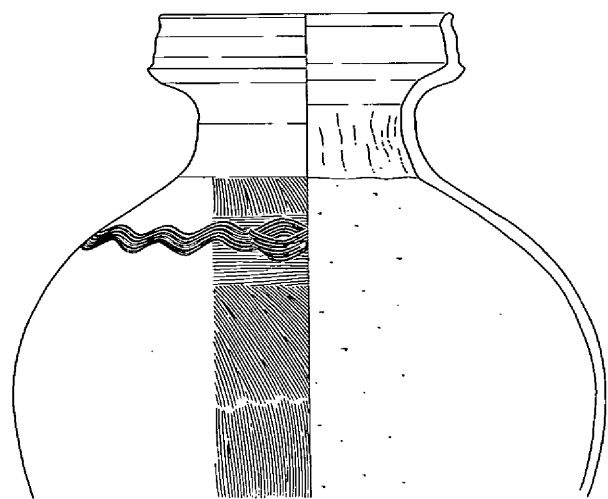
1760



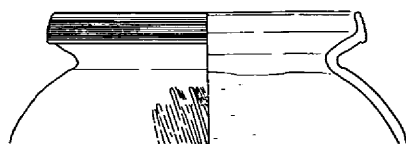
竖穴住居—119 1741~1746
竖穴住居—124 1752~1760

竖穴住居—121 1747·1748

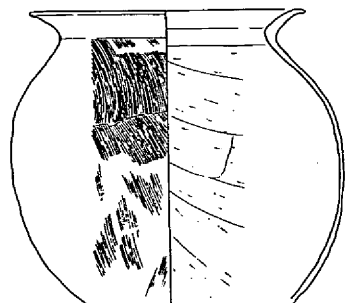
竖穴住居—122 1749~1751



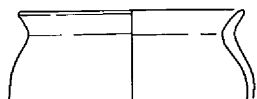
1761



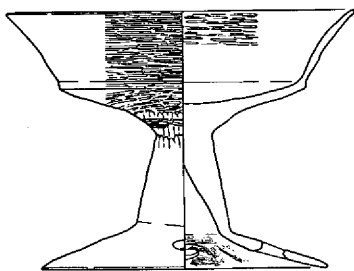
1762



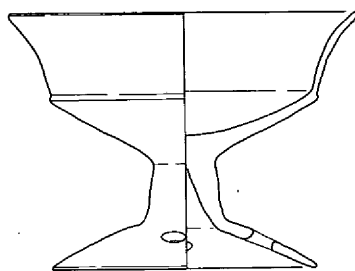
1763



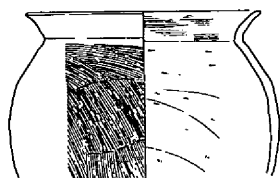
1764



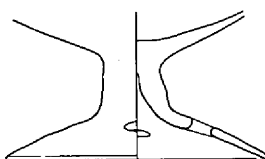
1766



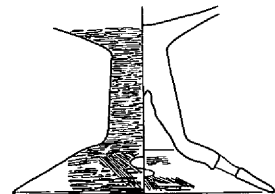
1767



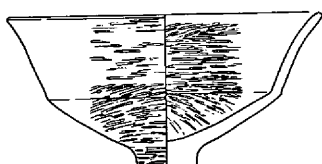
1765



1769



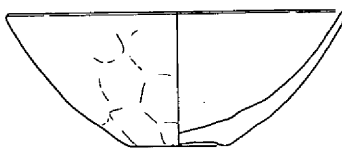
1770



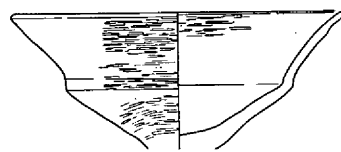
1768



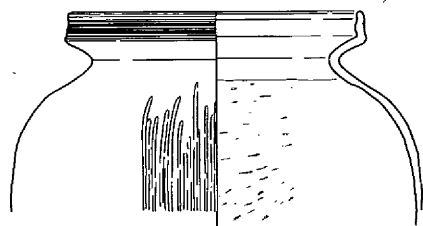
1771



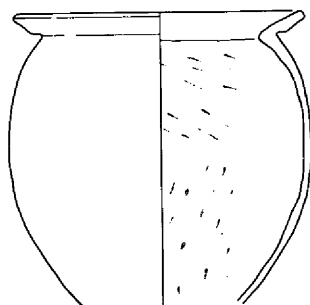
1772



1775



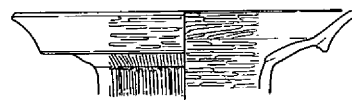
1773



1774



1776



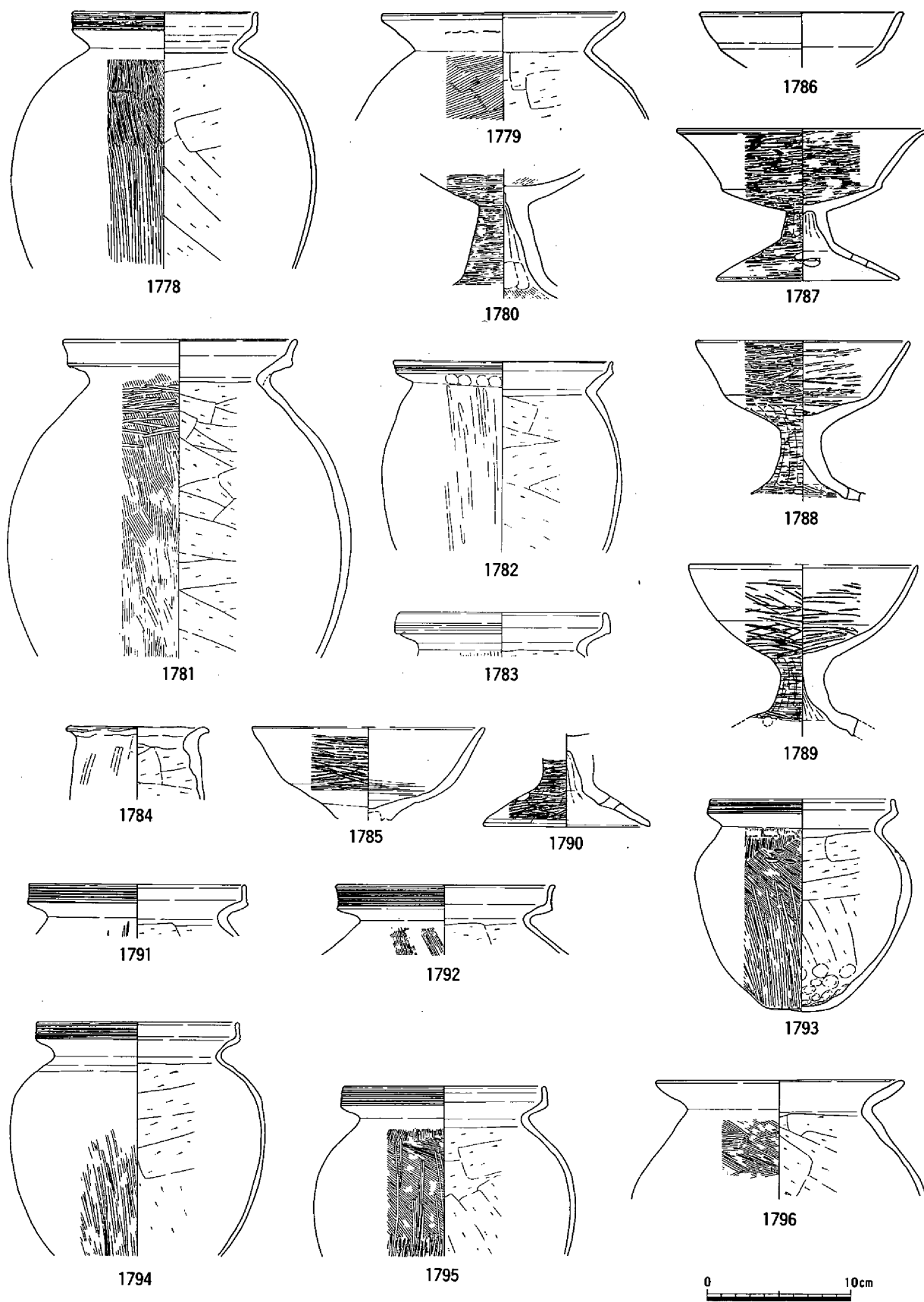
1777



土壤—111 1761
土壤—117 1773~1776

土壤—115 1762
土壤—120 1777

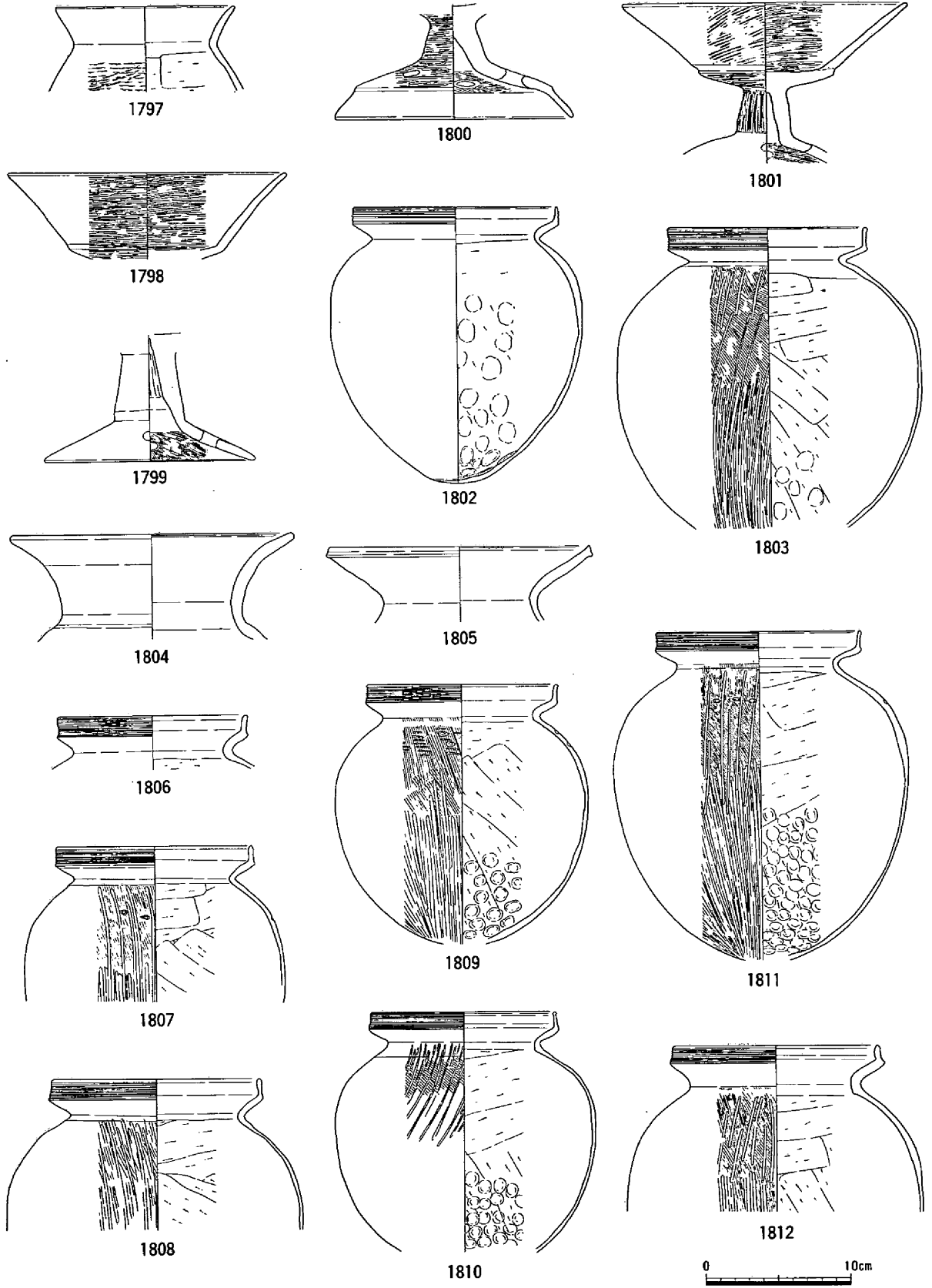
土壤—116 1763~1772



土壙—123 1778
 土壙—129 1781~1785·1787~1790
 土壙—133 1793~1796

土壙—126 1779~1780
 土壙—130 1791

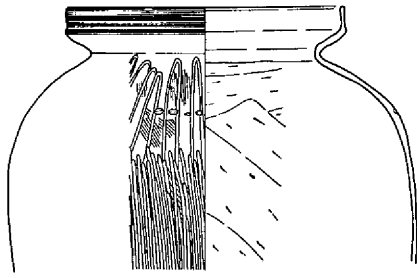
土壙—127 1786
 土壙—131 1792



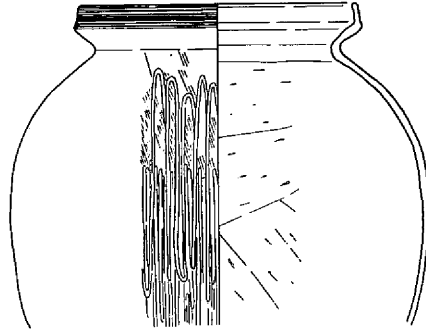
土壙—133 1797~1800
土壙—139 1804~1812

土壙—135 1801

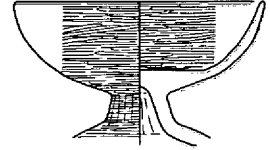
土壙—137 1802~1803



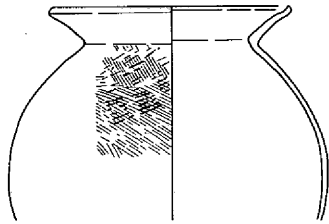
1813



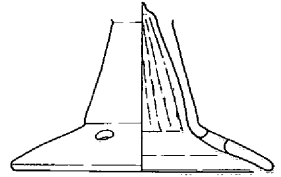
1814



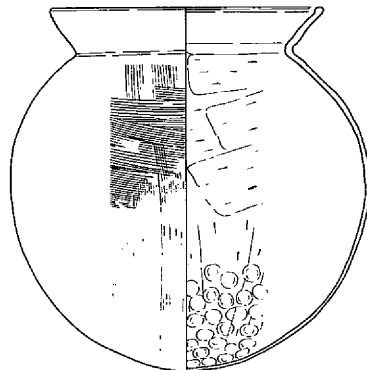
1818



1815



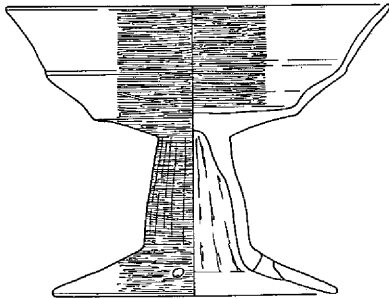
1819



1816



1820



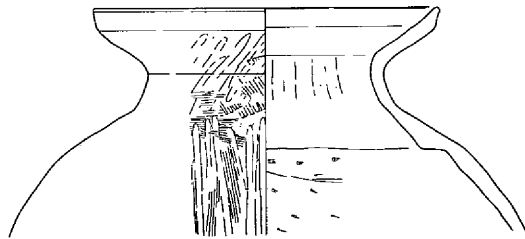
1817



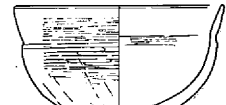
1821



1824



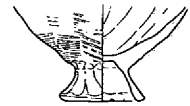
1826



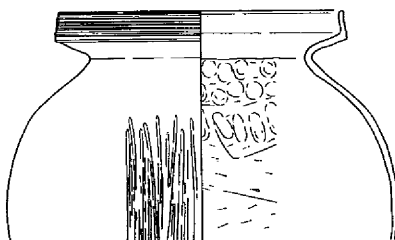
1822



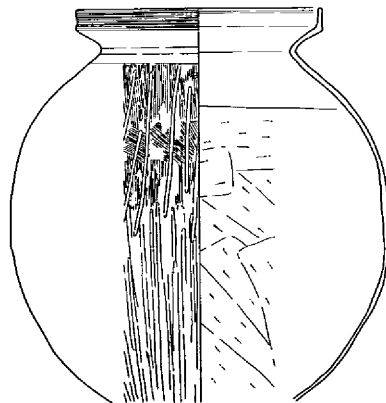
1825



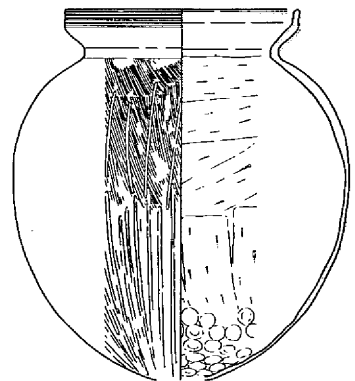
1823



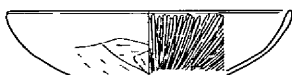
1827



1829



1830



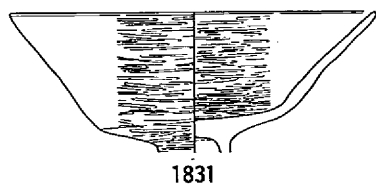
1828



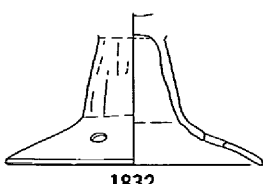
土壤—139 1813~1823
土壤—149 1827·1828

土壤—144 1826
土壤—151 1829·1830

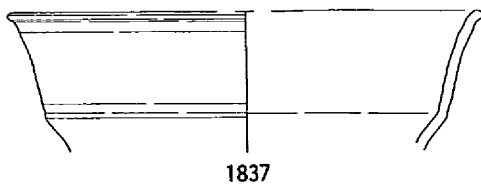
土壤—148 1824·1825



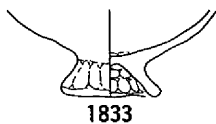
1831



1832



1837



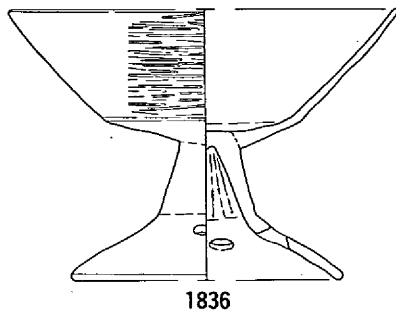
1833



1834



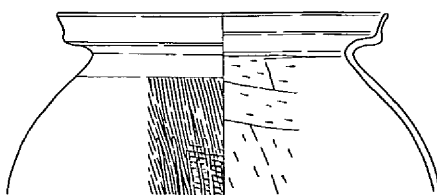
1835



1836



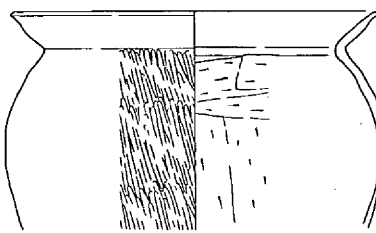
1838



1839



1841



1840



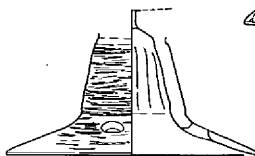
1843



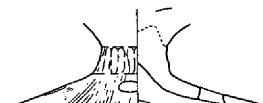
1842



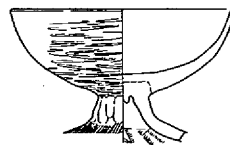
1844



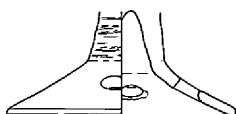
1846



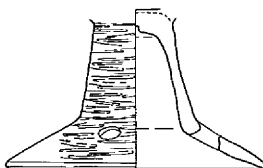
1848



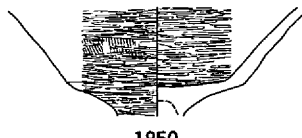
1449



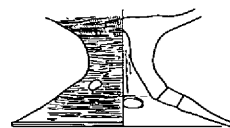
1845



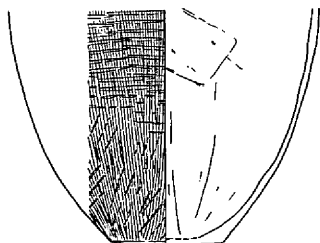
1847



1850



1851



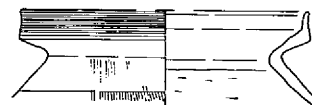
1852



1853



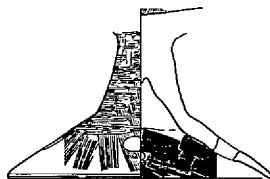
1854



1857



1855



1856



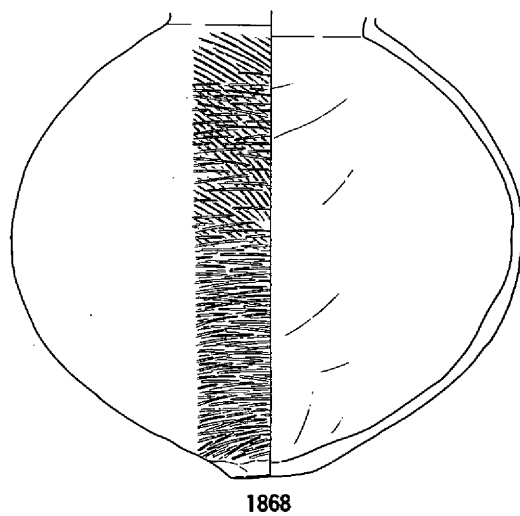
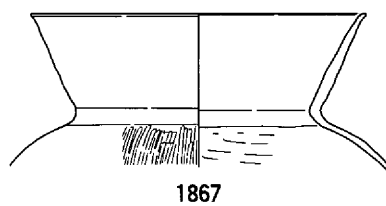
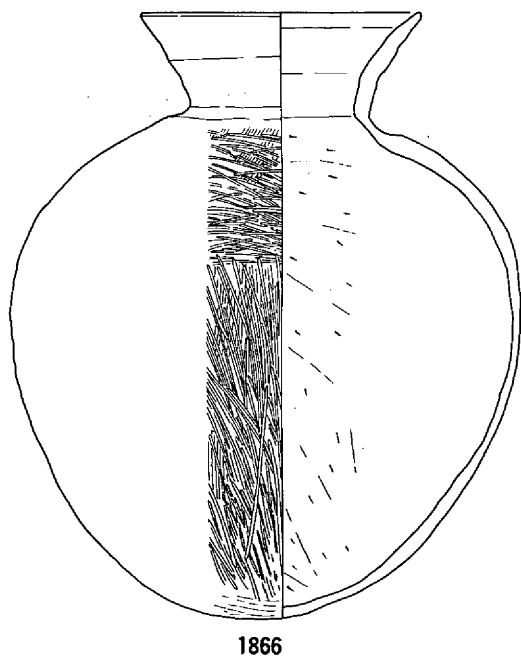
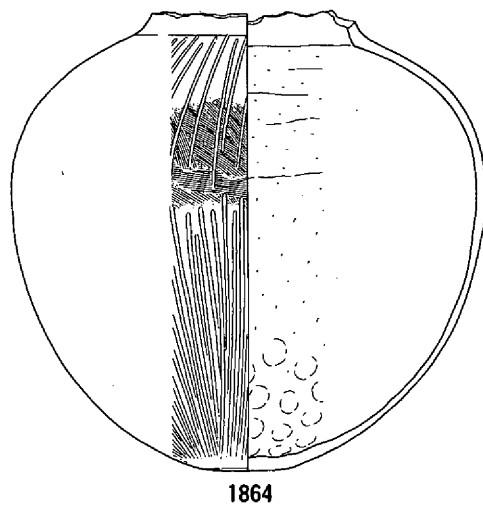
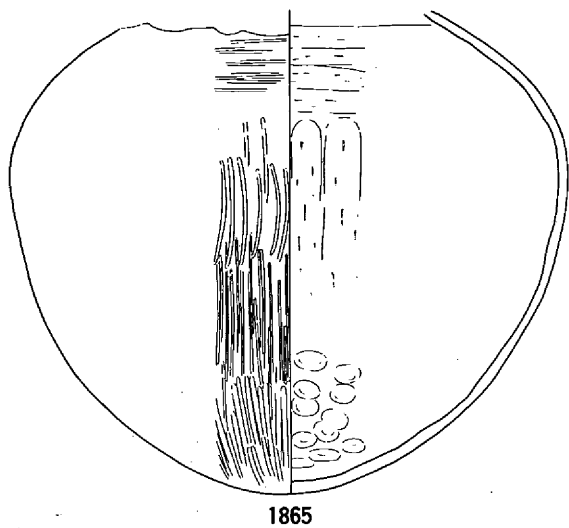
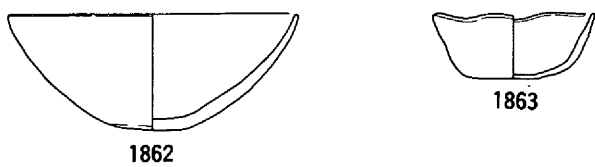
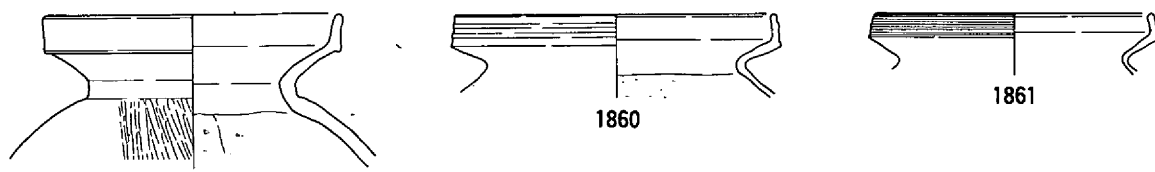
1858



土壙—151 1831~1835
土壙—155 1843~1847·1853
土壙—159 1852

土壙—153 1836
土壙—156 1848
土壙—160 1854~1856

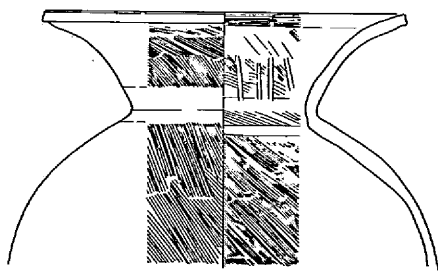
土壙—154 1837~1842
土壙—158 1849~1851
土壙—161 1857~1858



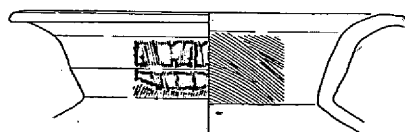
土壙墓—4 1859~1863
溝—4 1866~1868

土器棺墓—7 1864

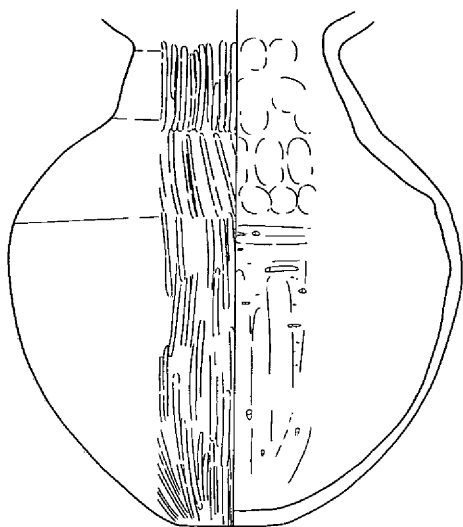
土器棺墓—8 1865



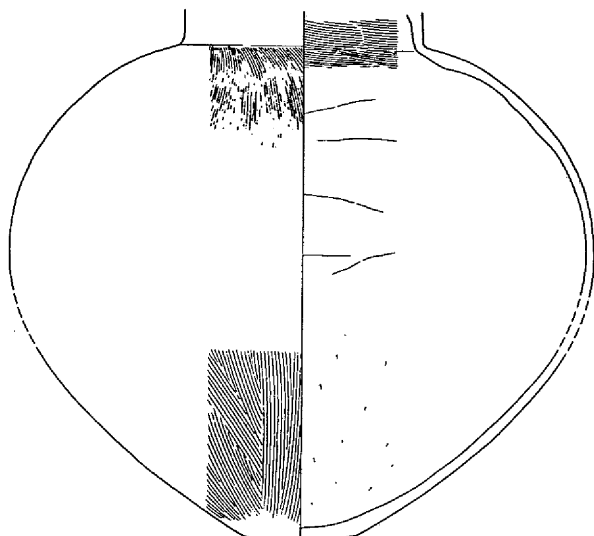
1869



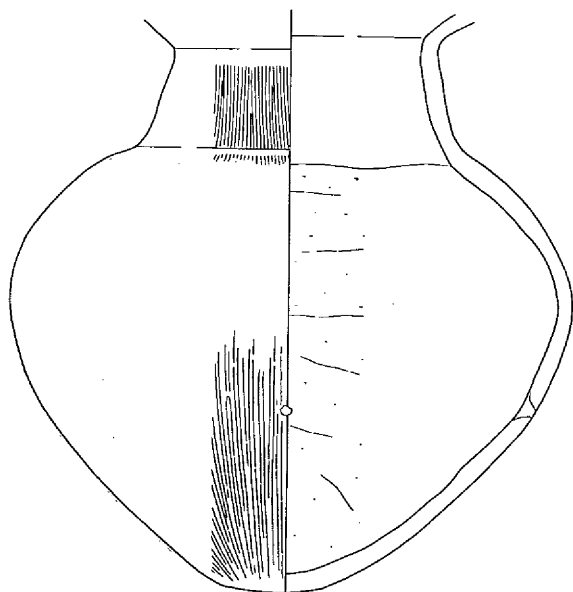
1870



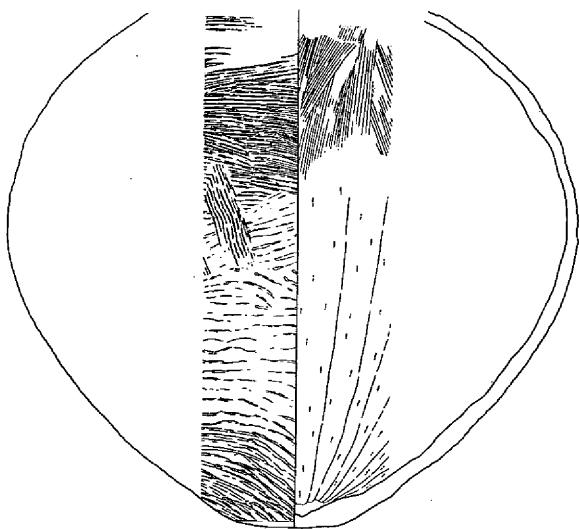
1871



1873

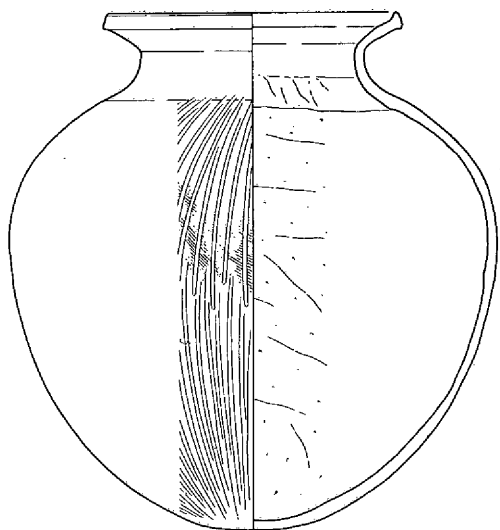


1872

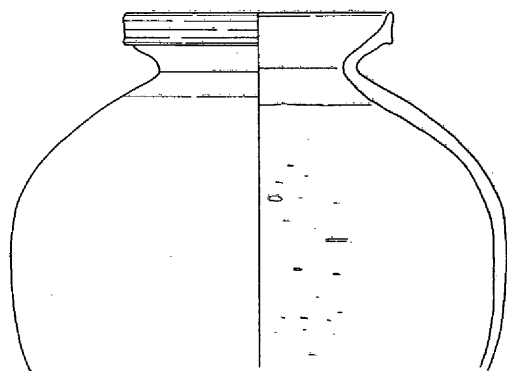


1874

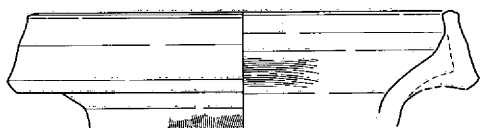




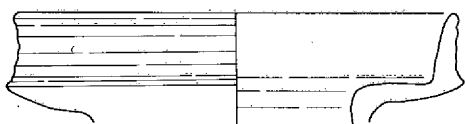
1875



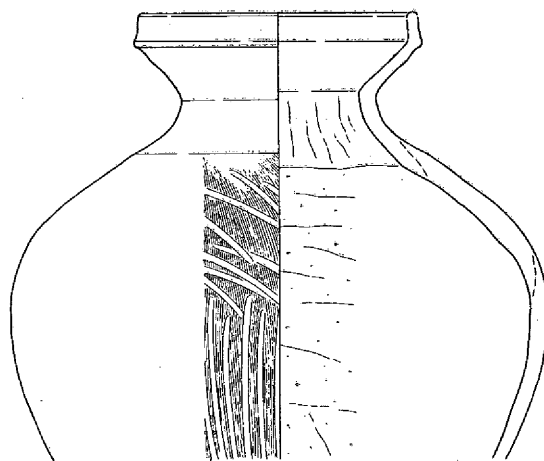
1876



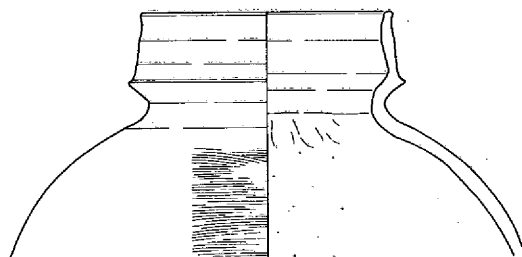
1878



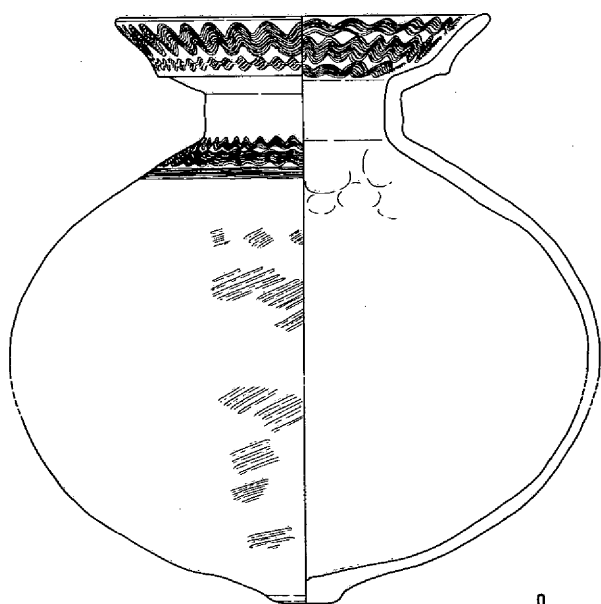
1879



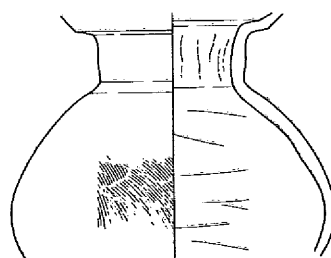
1877



1880

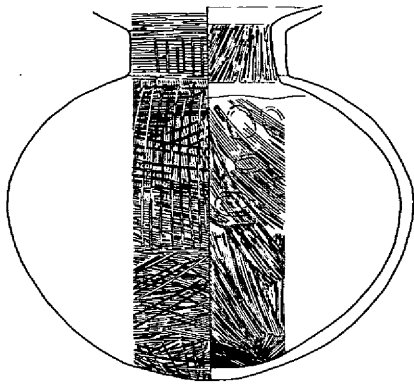


1881

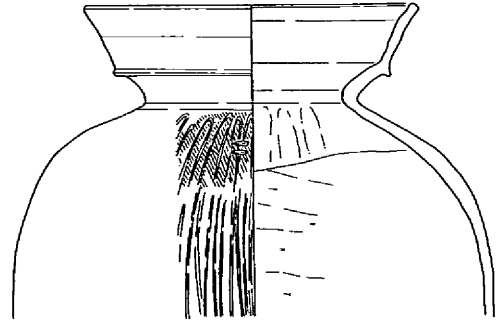


1882

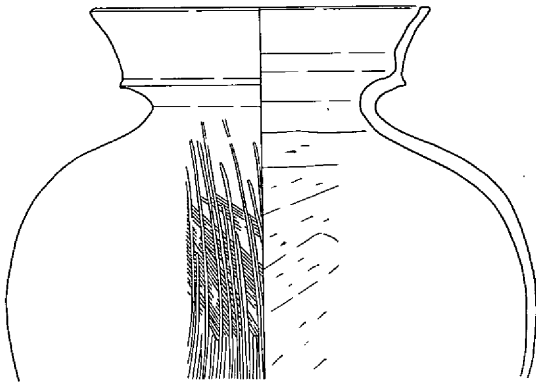




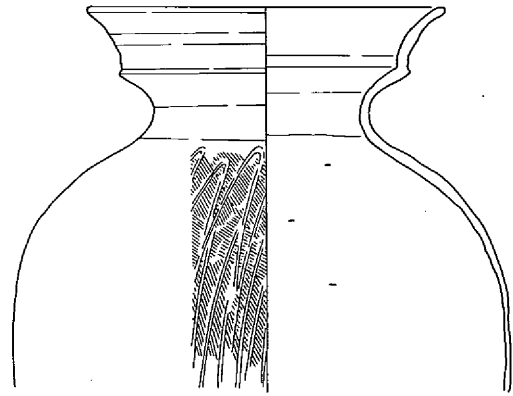
1883



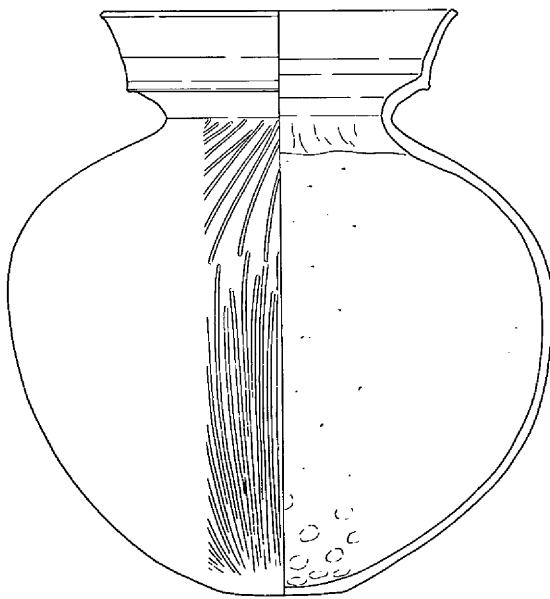
1884



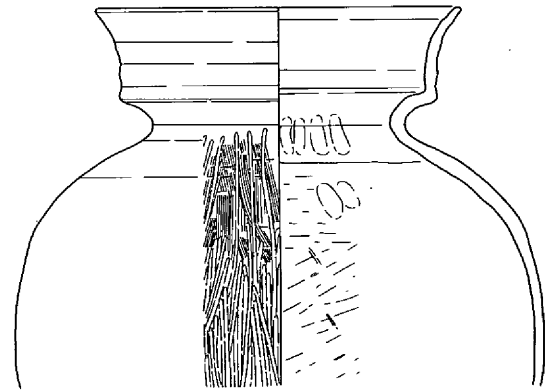
1885



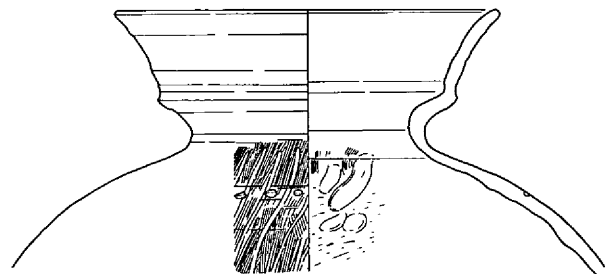
1886



1887

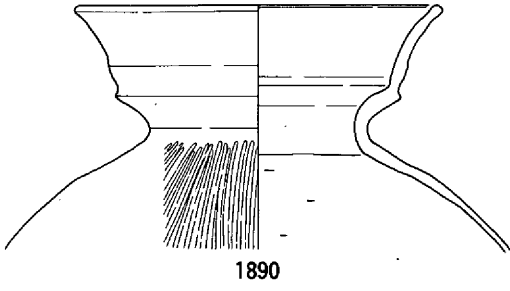


1888

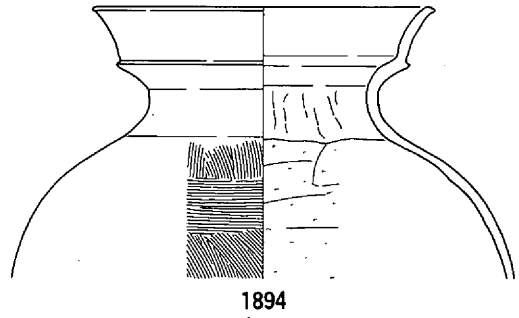


1889

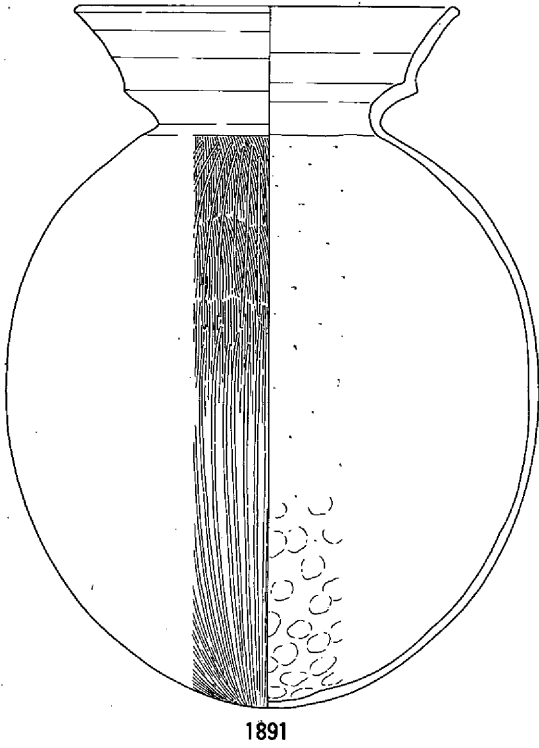




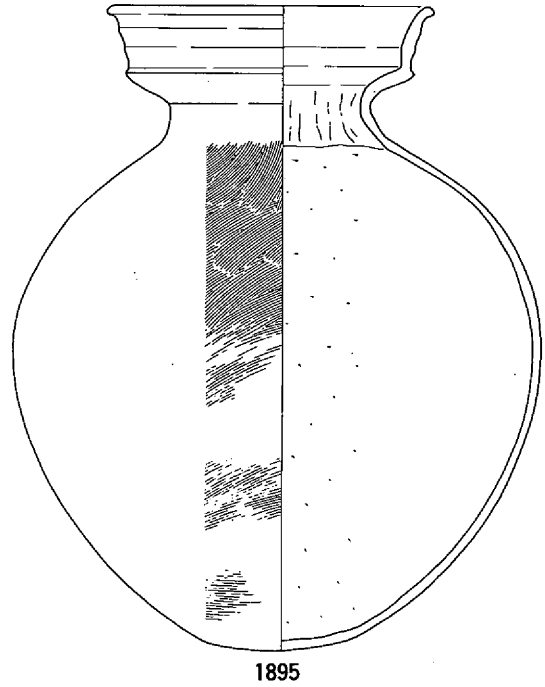
1890



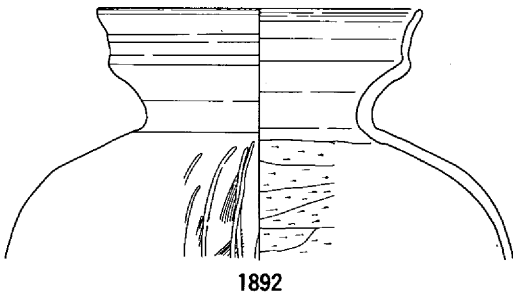
1894



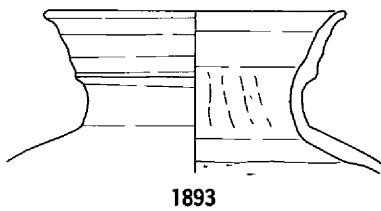
1891



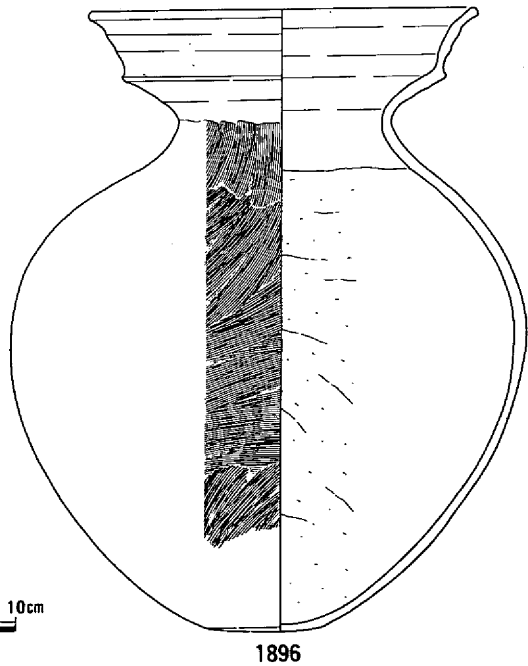
1895



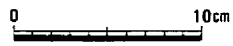
1892

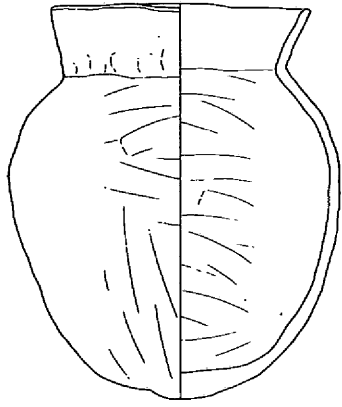


1893

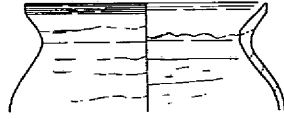


1896

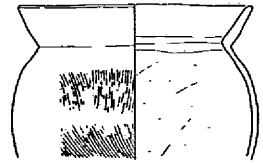




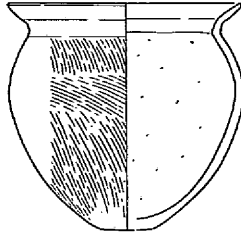
1897



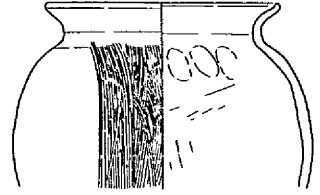
1898



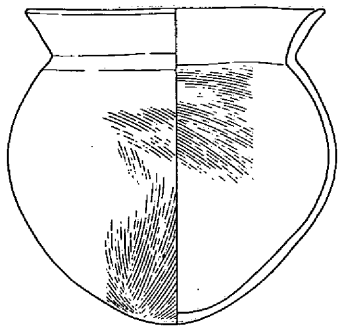
1900



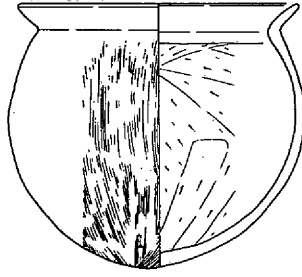
1899



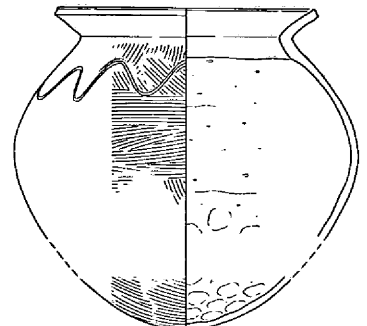
1901



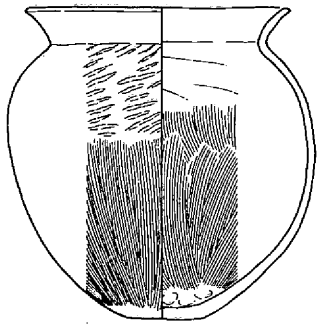
1902



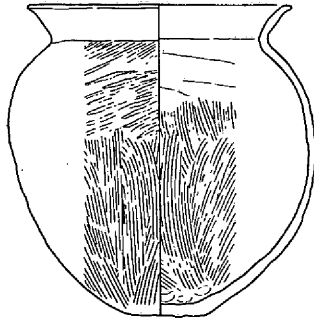
1903



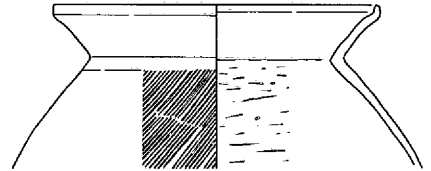
1908



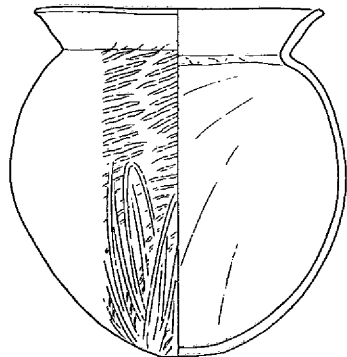
1905



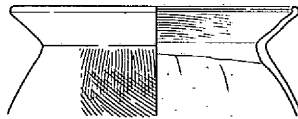
1904



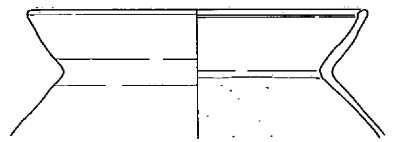
1909



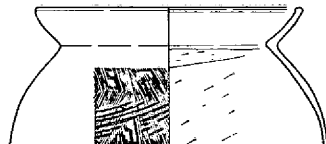
1906



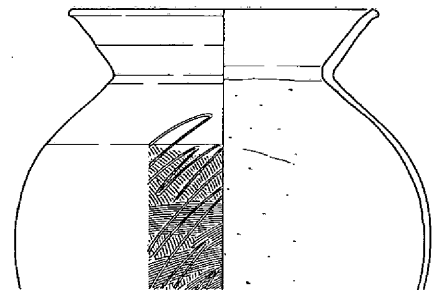
1910



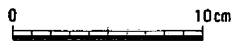
1911



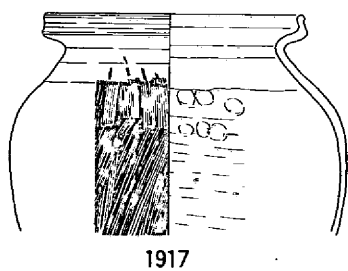
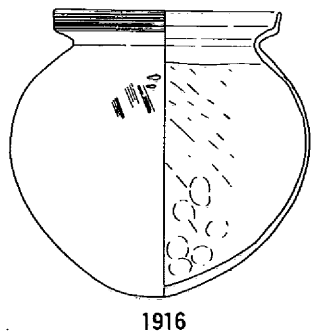
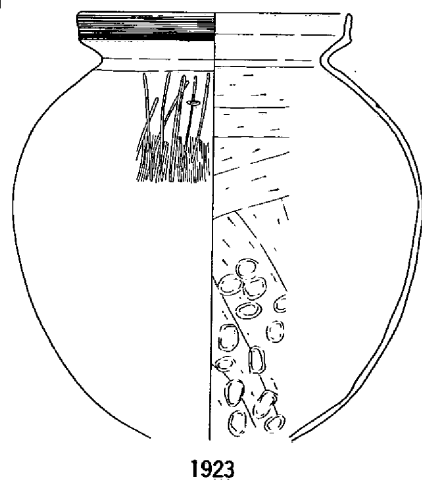
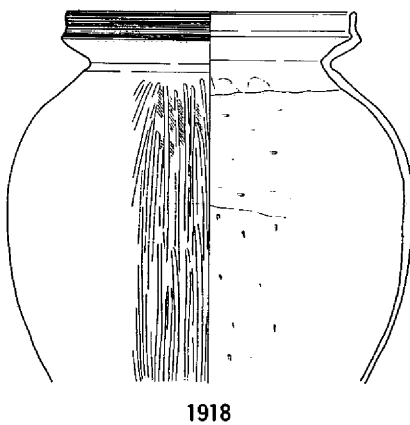
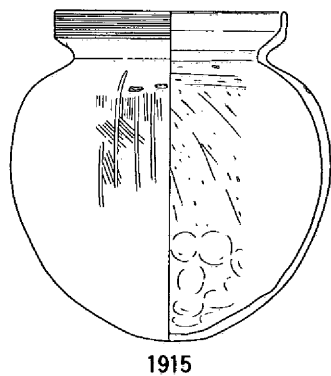
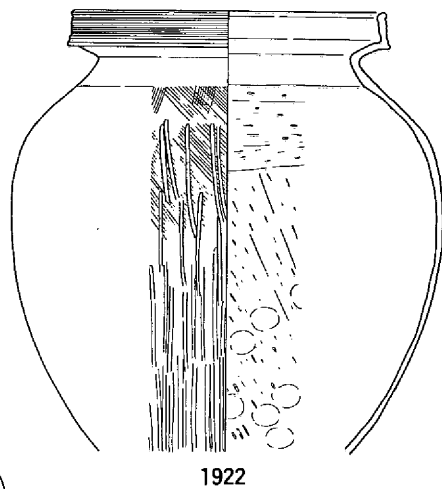
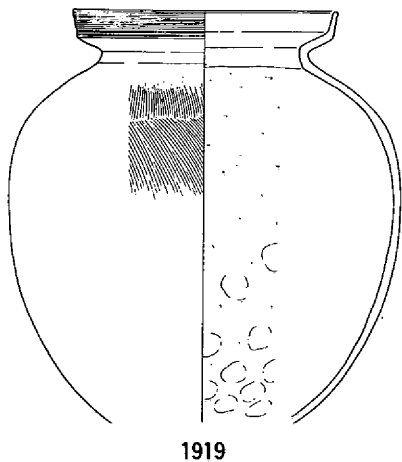
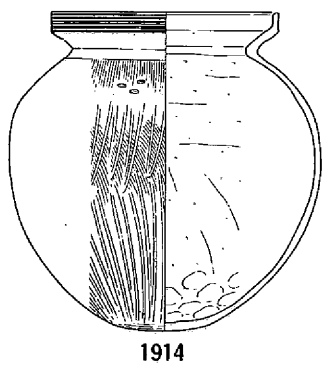
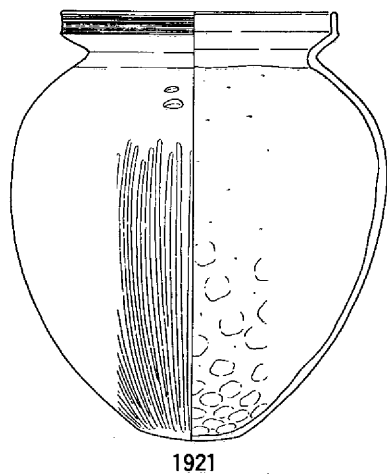
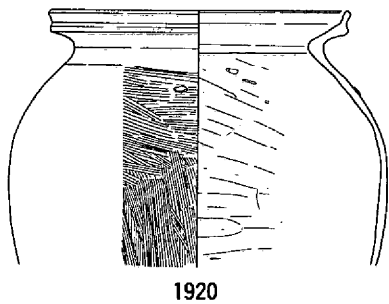
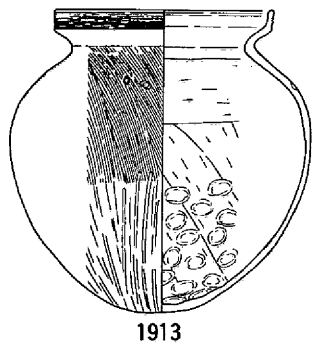
1907



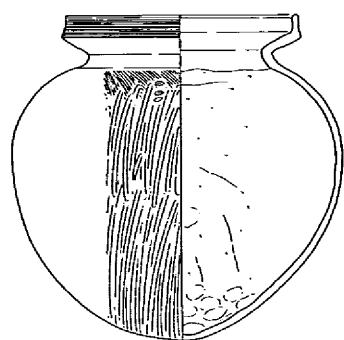
1912



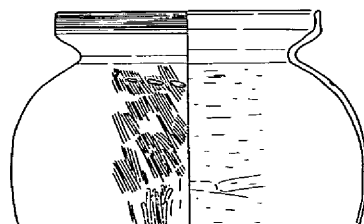
溝一4 1897~1912



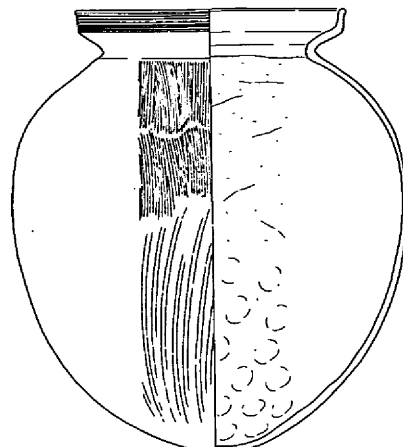
溝一4 1913~1923



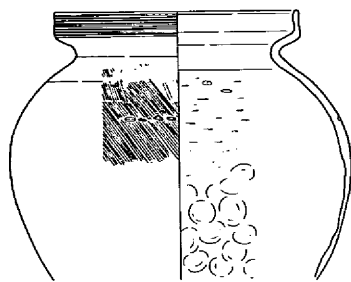
1924



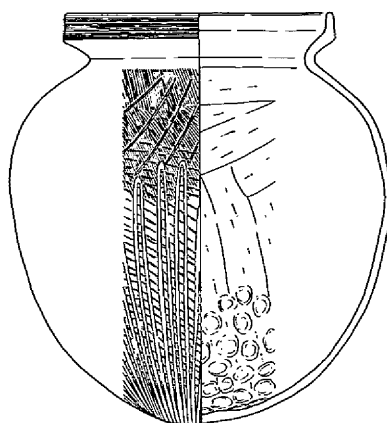
1928



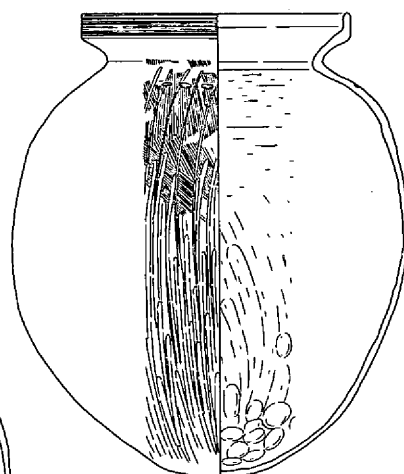
1932



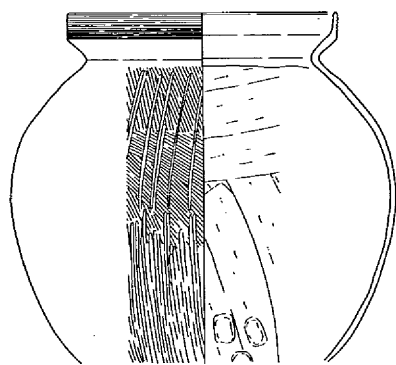
1925



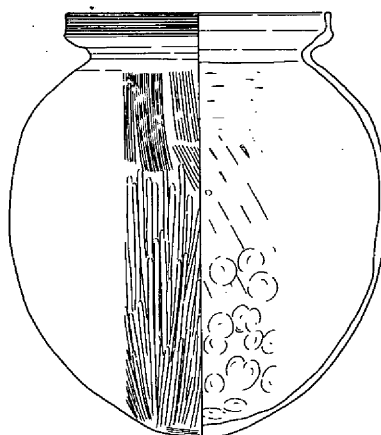
1929



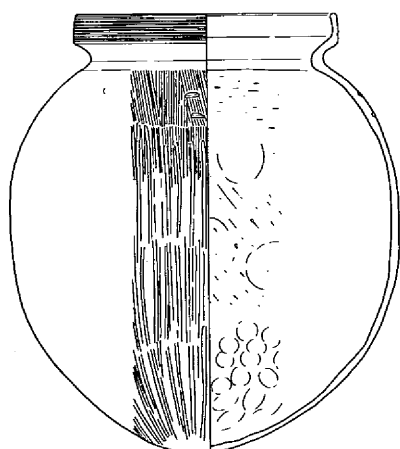
1933



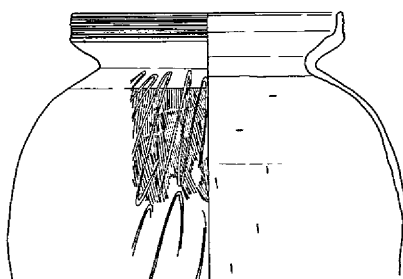
1926



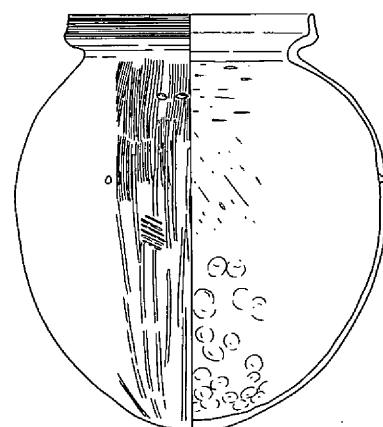
1930



1927



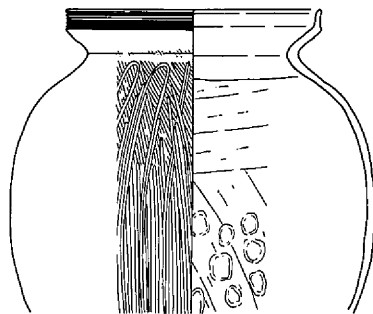
1931



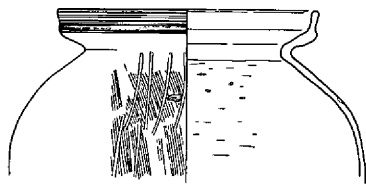
1934



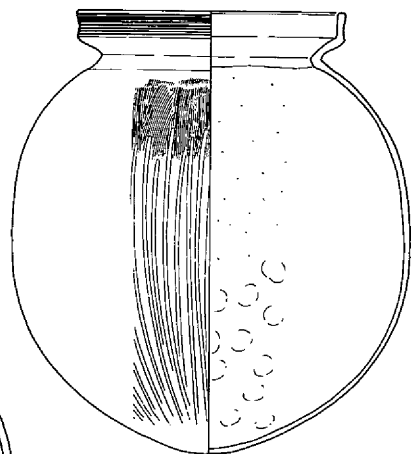
溝一4 1924~1934



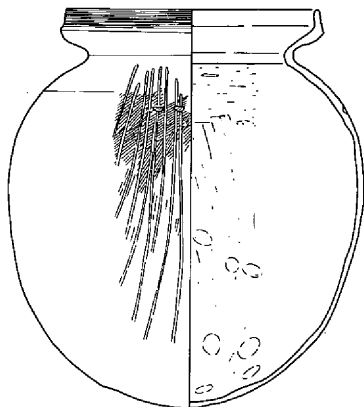
1936



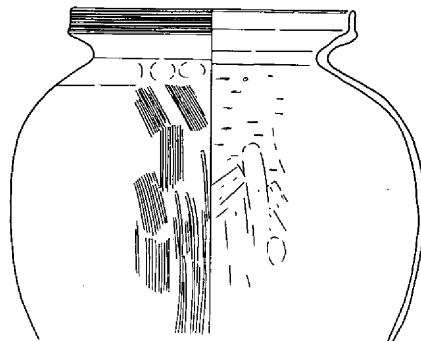
1939



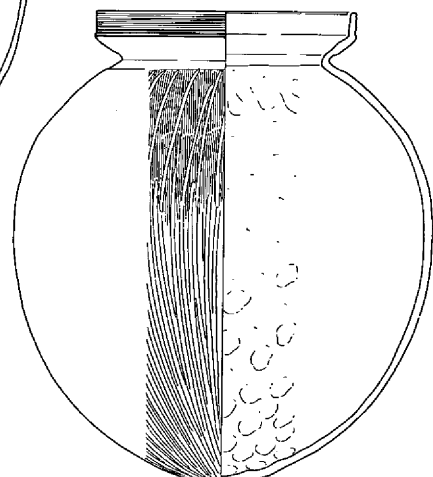
1943



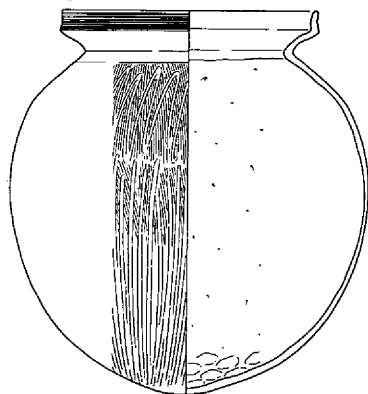
1937



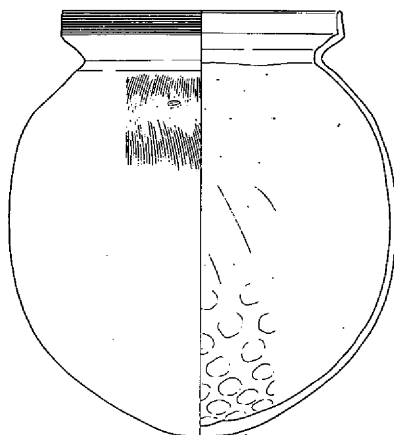
1940



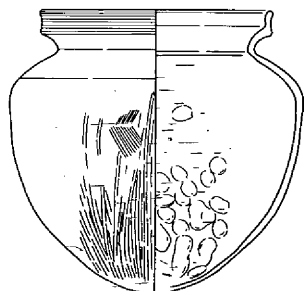
1944



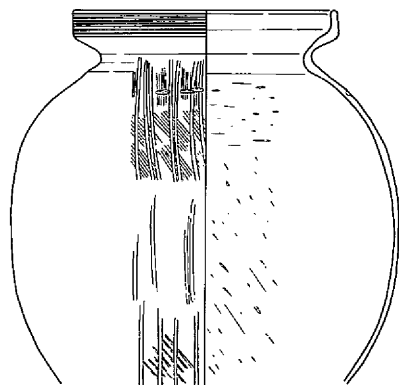
1938



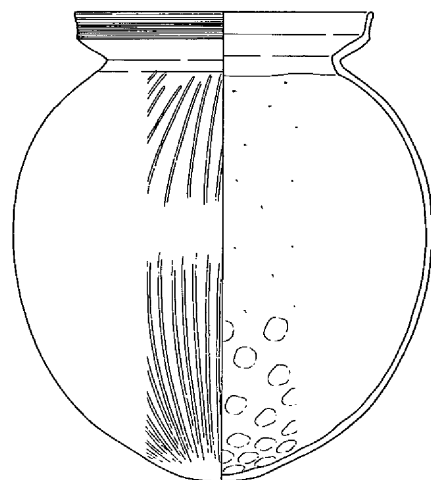
1941



1935



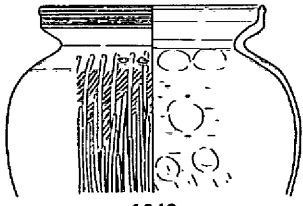
1942



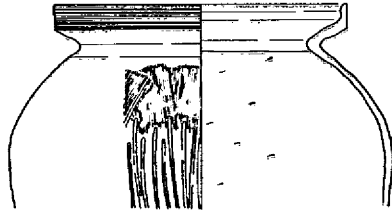
1945



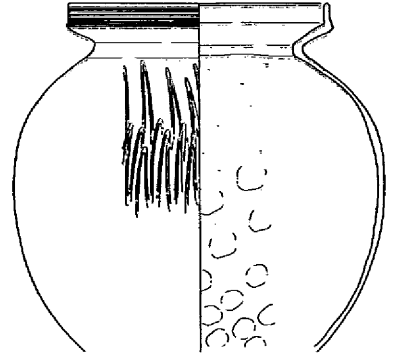
沟—4 1935~1945



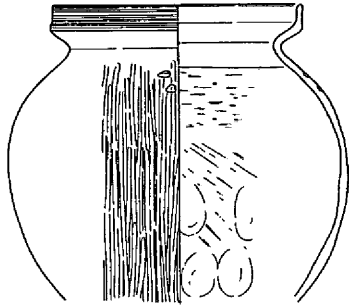
1946



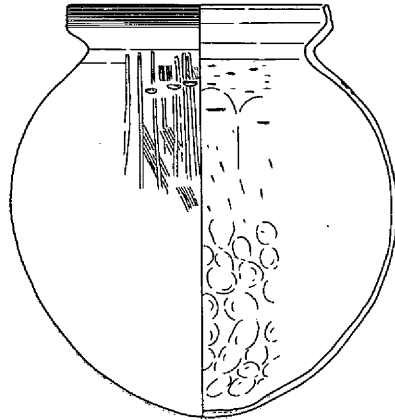
1951



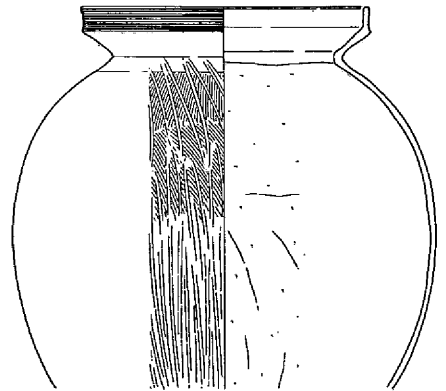
1955



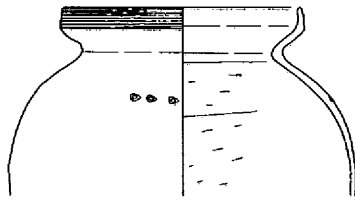
1947



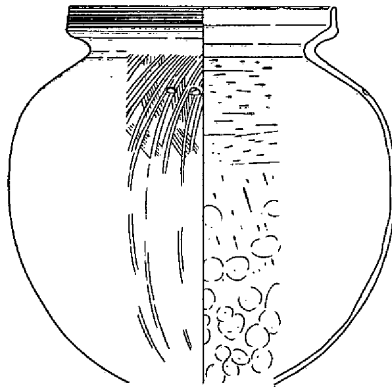
1952



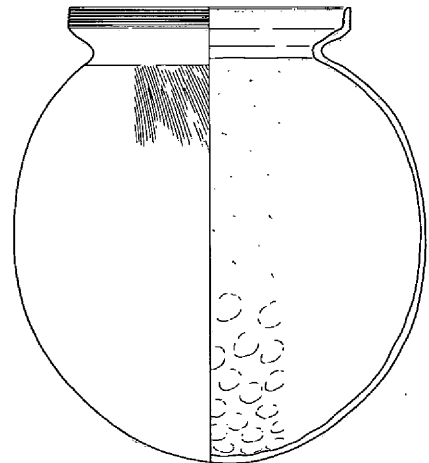
1956



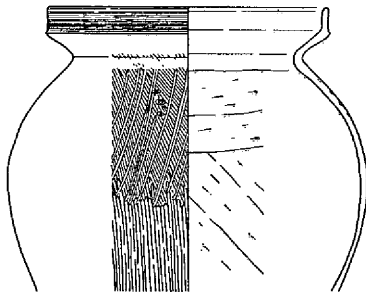
1948



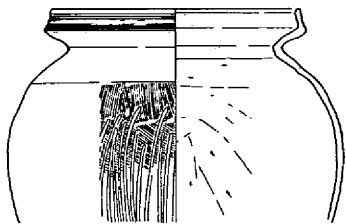
1953



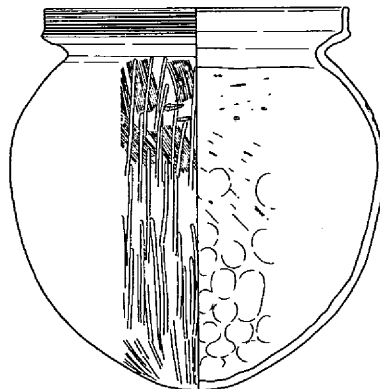
1957



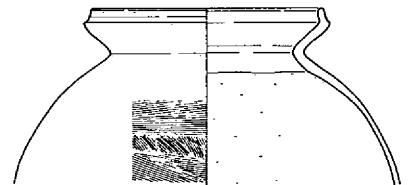
1949



1950



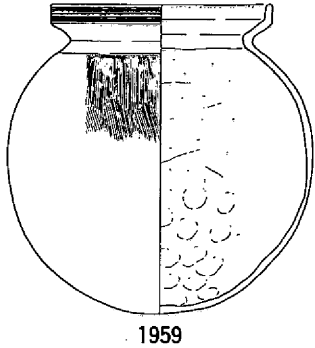
1954



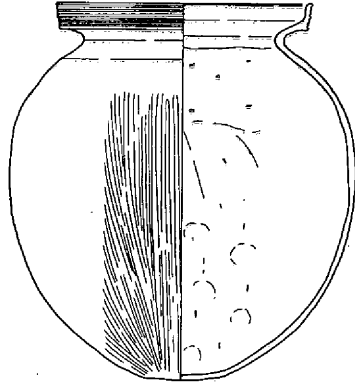
1958



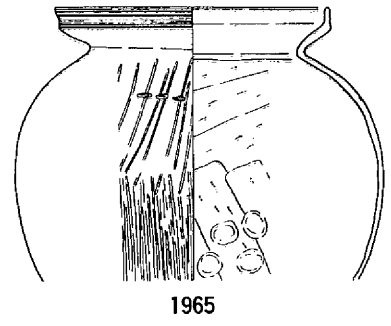
沟—4 1946~1958



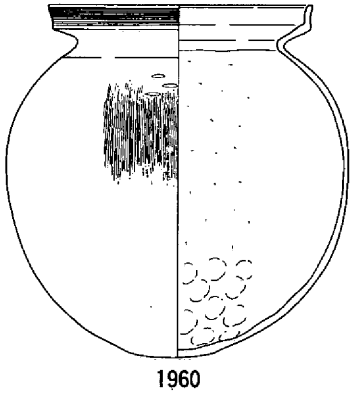
1959



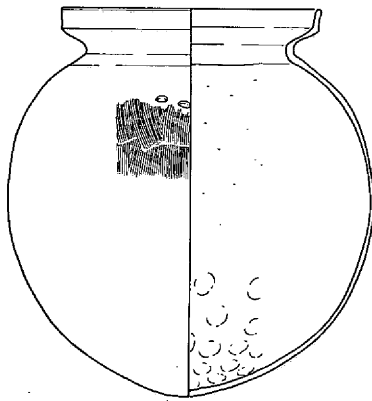
1962



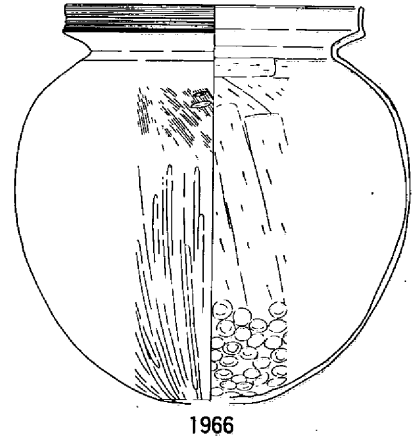
1965



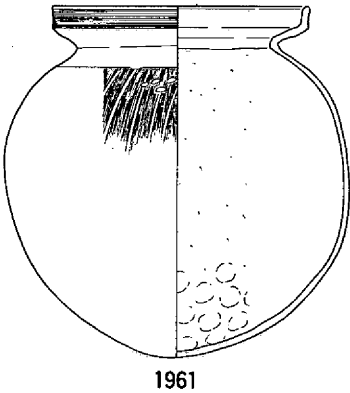
1960



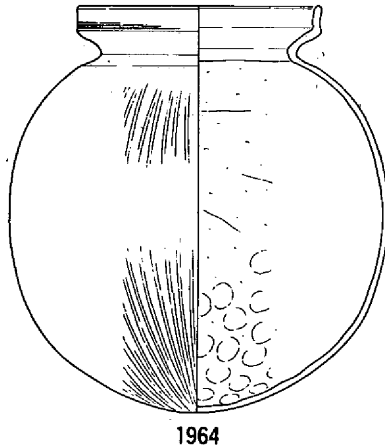
1963



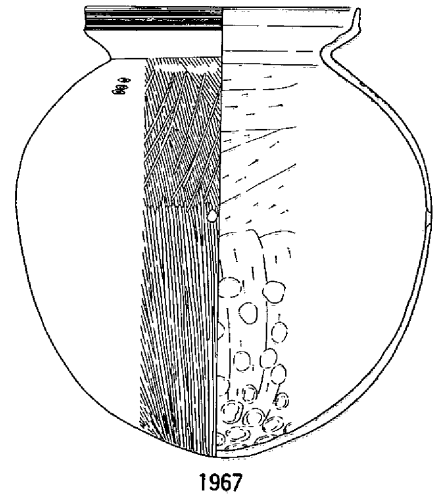
1966



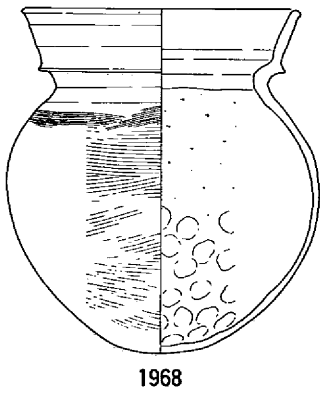
1961



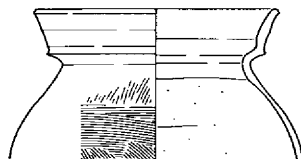
1964



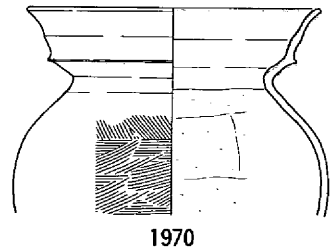
1967



1968



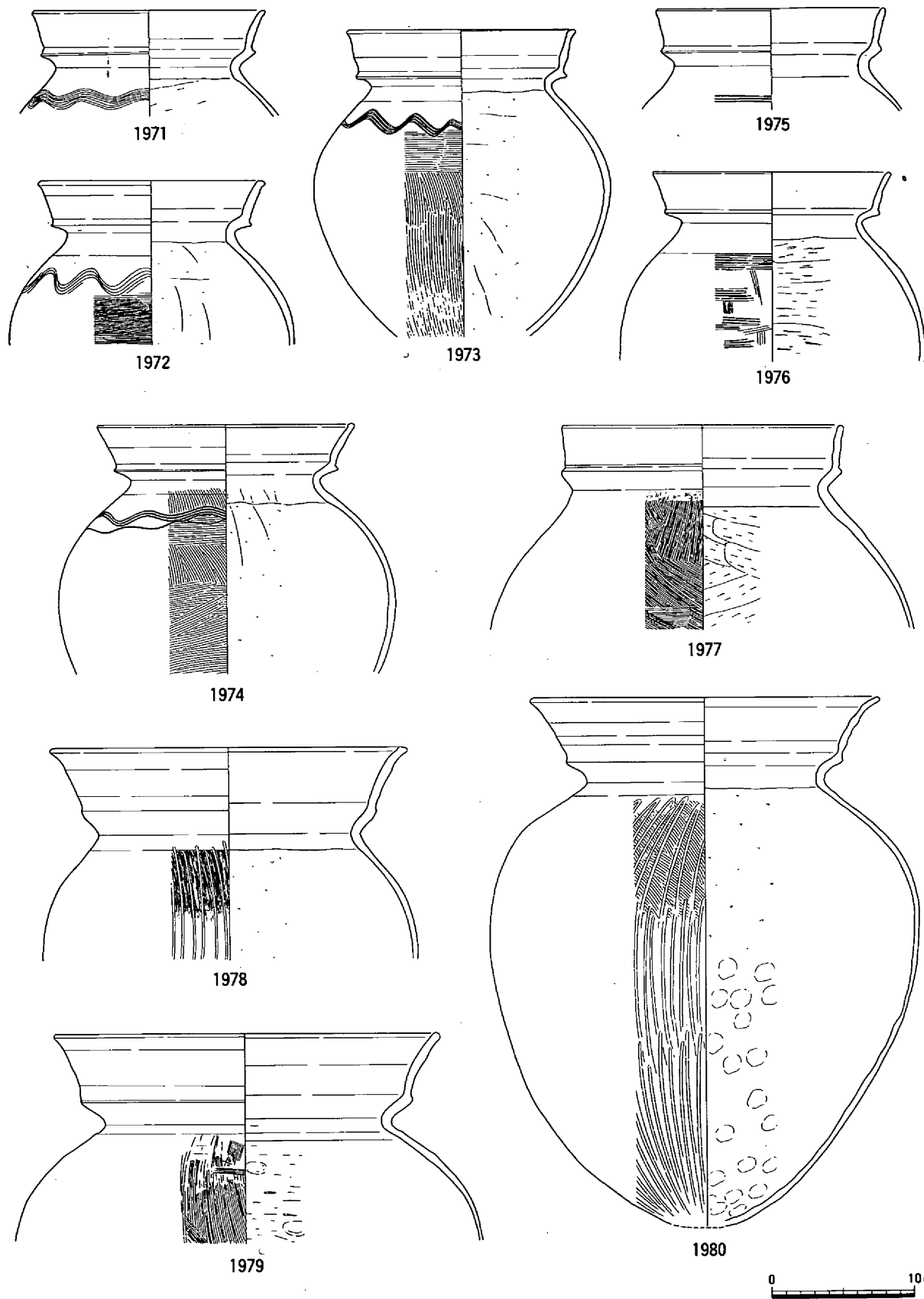
1969



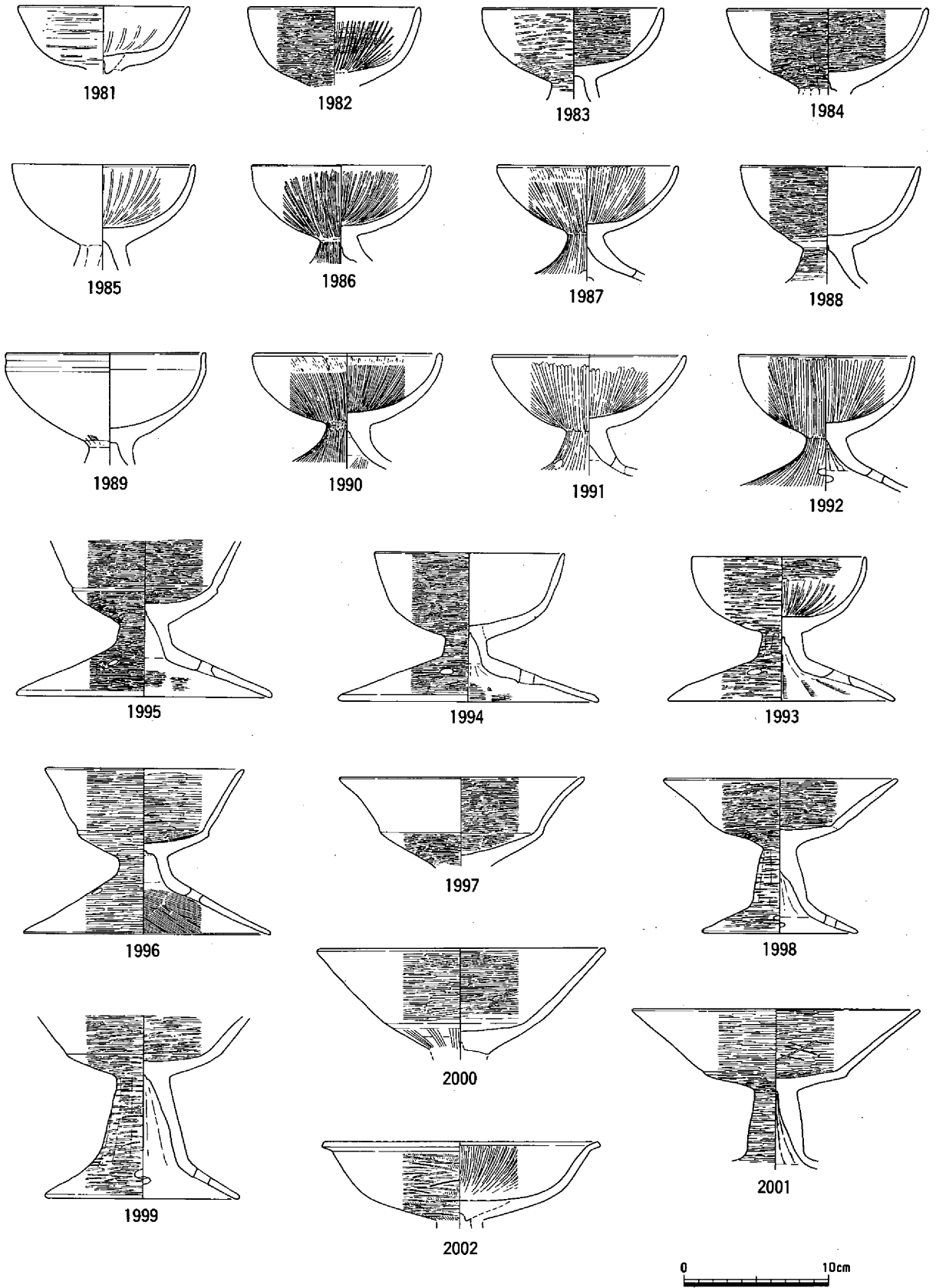
1970



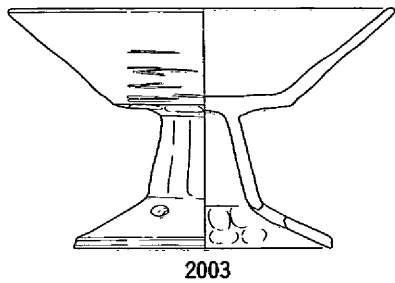
溝一4 1959~1970



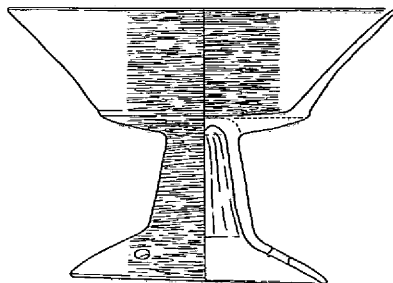
溝一4 1971~1980



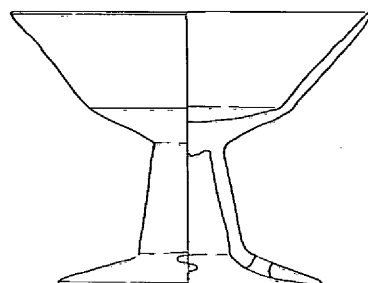
溝一4 1981~2002



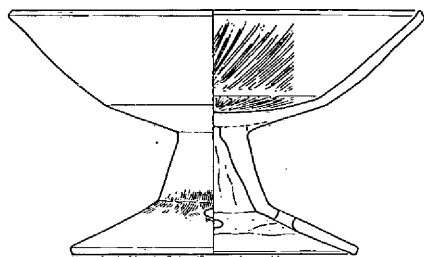
2003



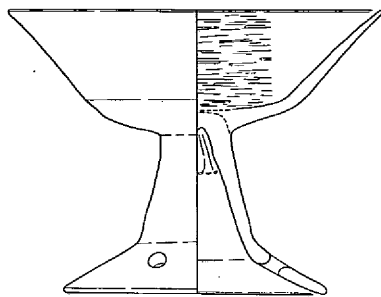
2004



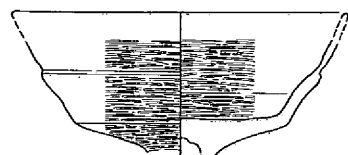
2005



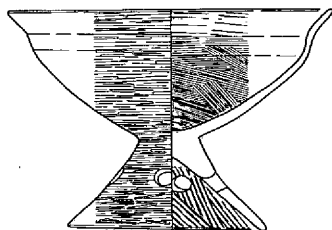
2007



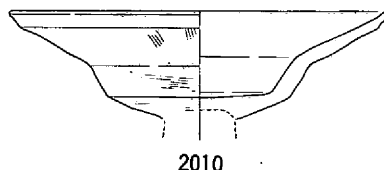
2006



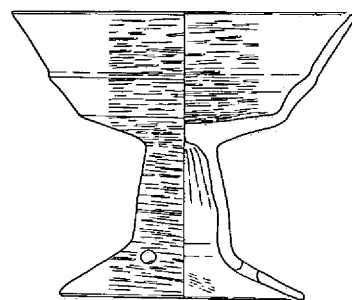
2008



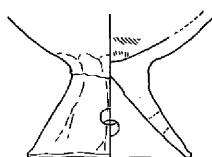
2011



2010



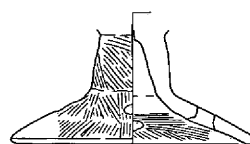
2009



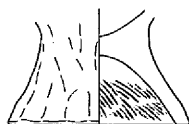
2012



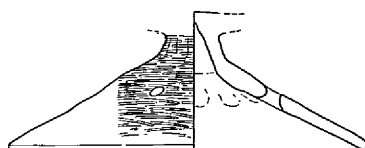
2015



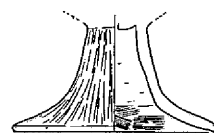
2019



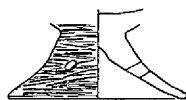
2013



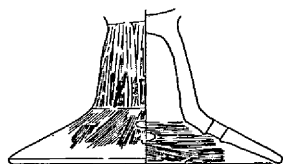
2016



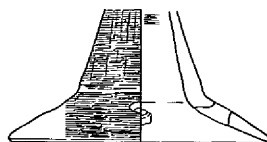
2020



2014



2017

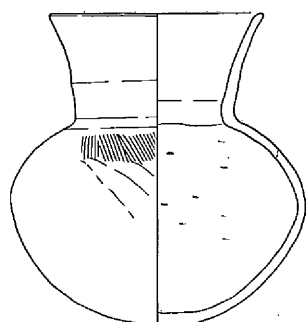


2018

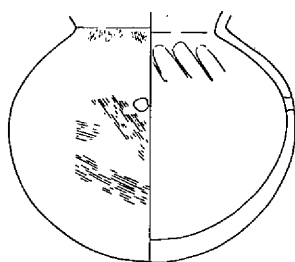


2021

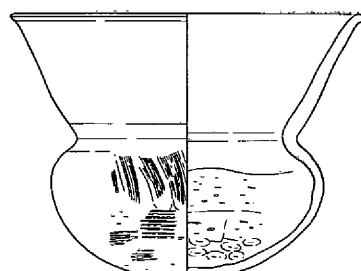




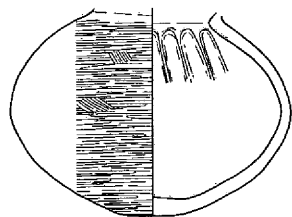
2022



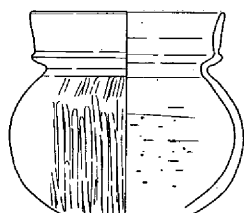
2024



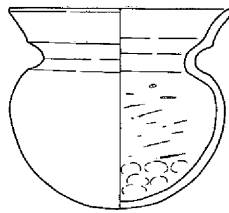
2028



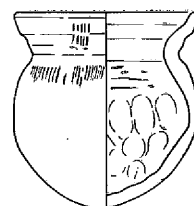
2023



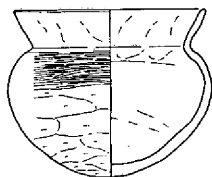
2025



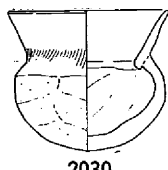
2026



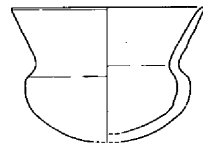
2027



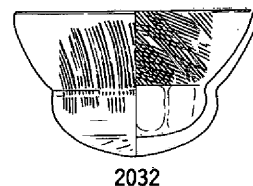
2029



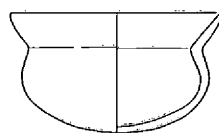
2030



2031



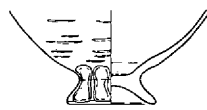
2032



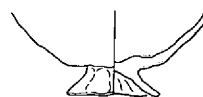
2033



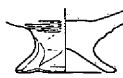
2034



2035



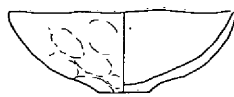
2036



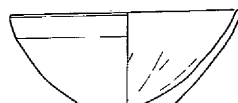
2037



2038



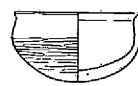
2041



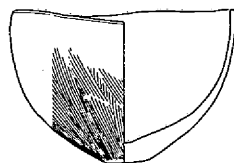
2042



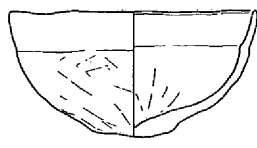
2039



2040



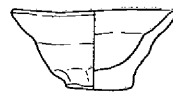
2043



2044



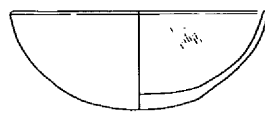
2047



2049



2045



2046



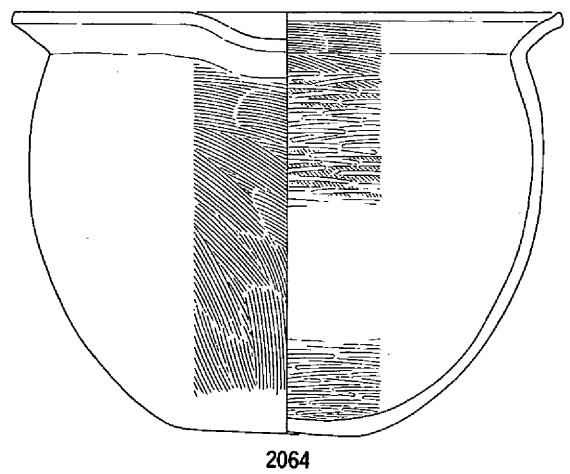
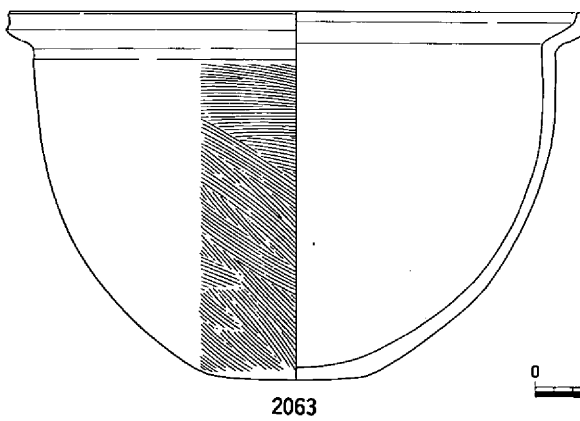
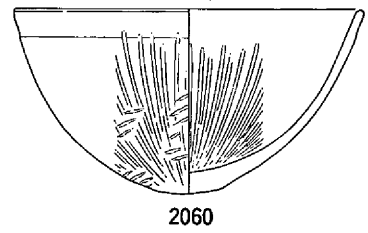
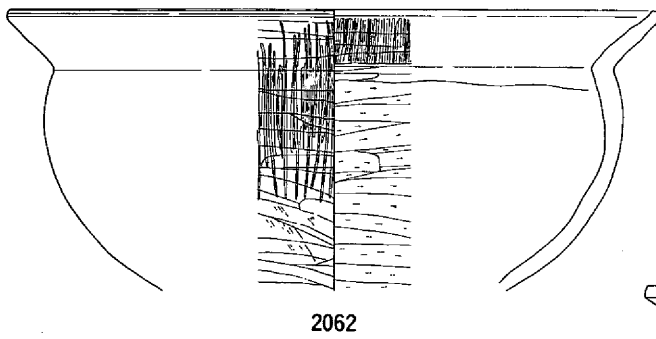
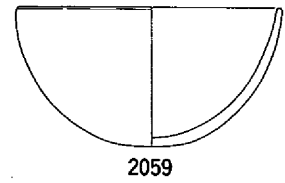
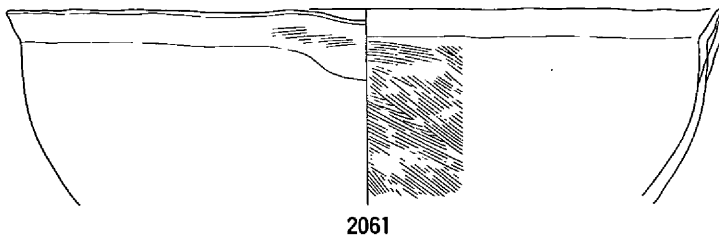
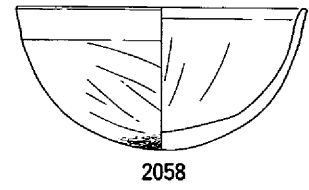
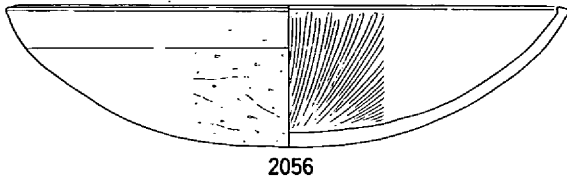
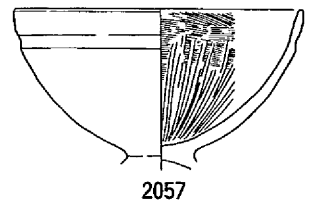
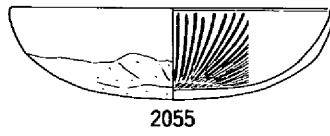
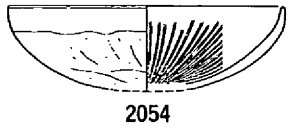
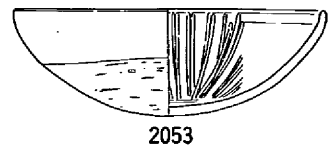
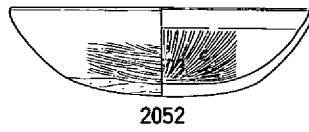
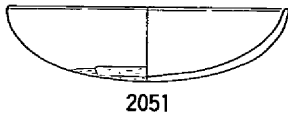
2048

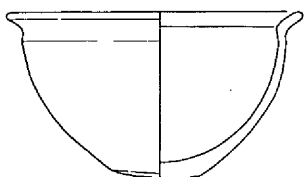


2050



溝一4 2022~2050

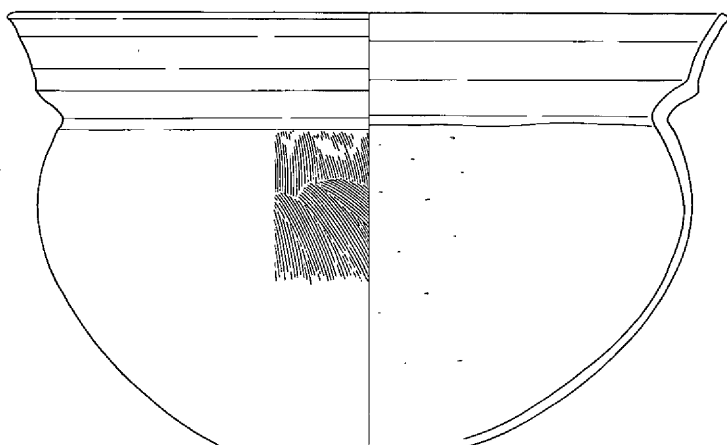




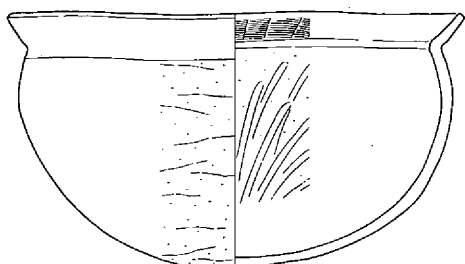
2065



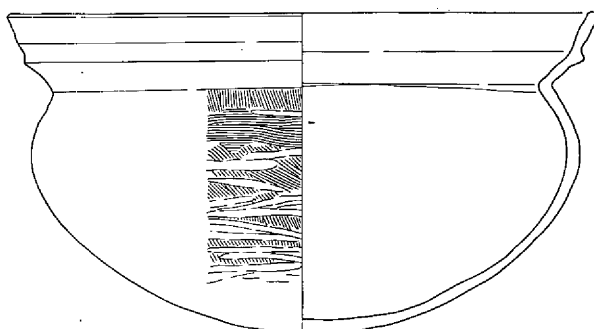
2066



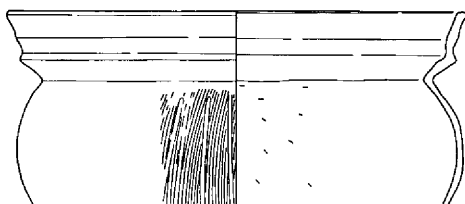
2068



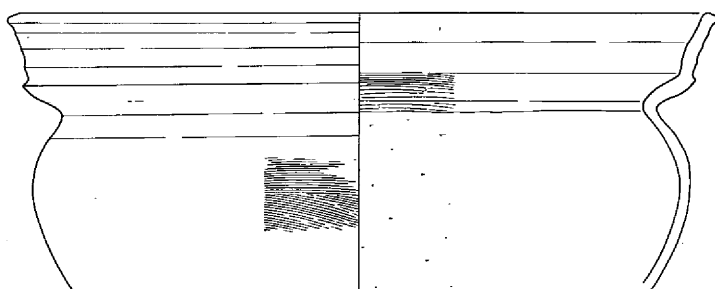
2067



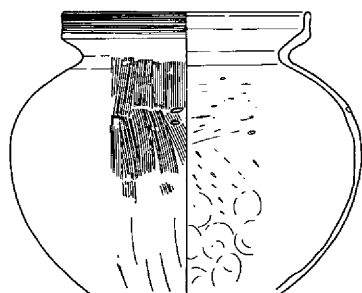
2069



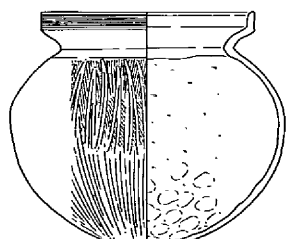
2070



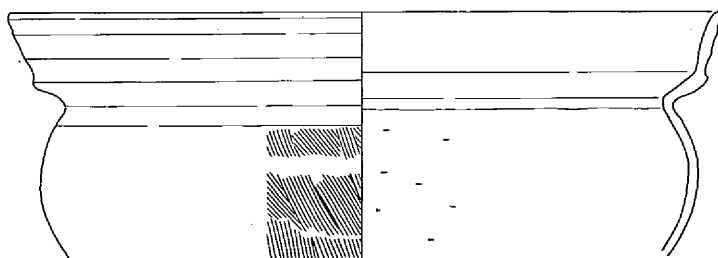
2071



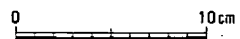
2073

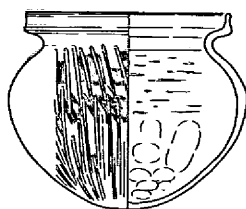


2074

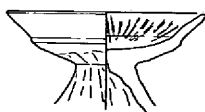


2072

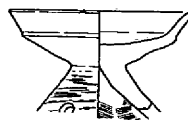




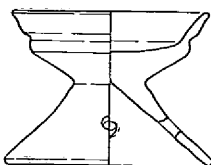
2075



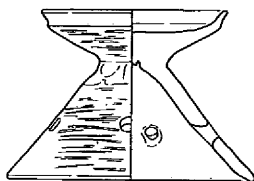
2076



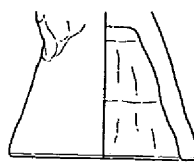
2077



2078



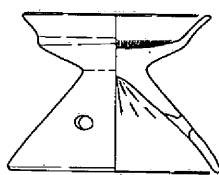
2079



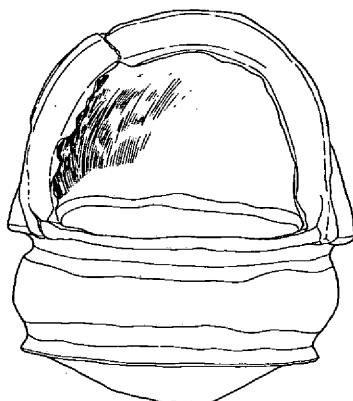
2081



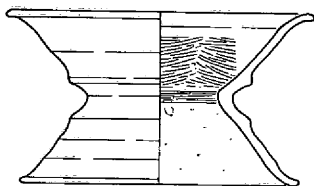
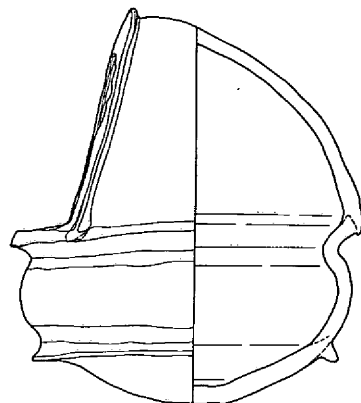
2082



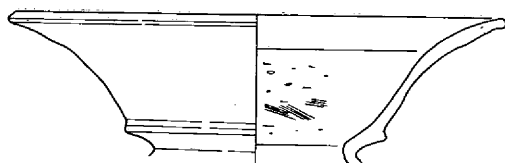
2080



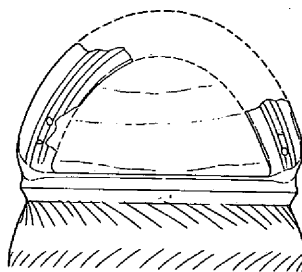
2087



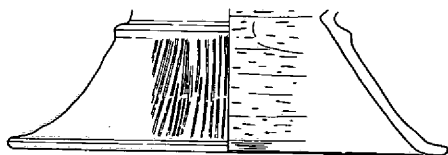
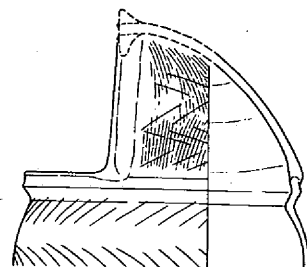
2083



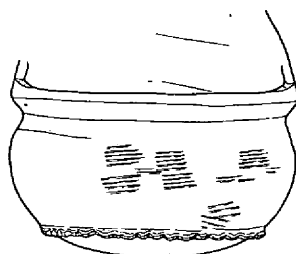
2084



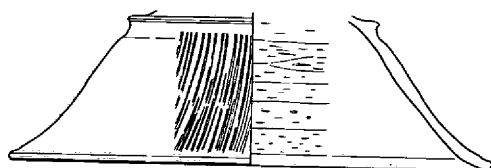
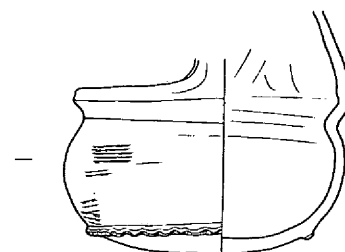
2088



2085

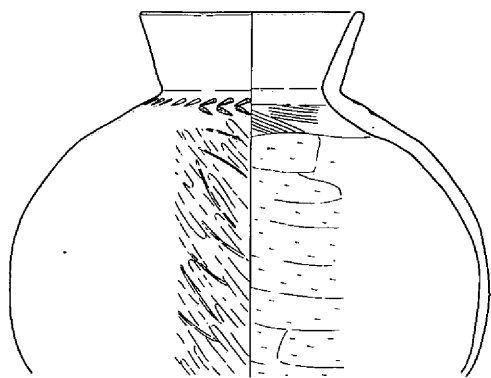


2089

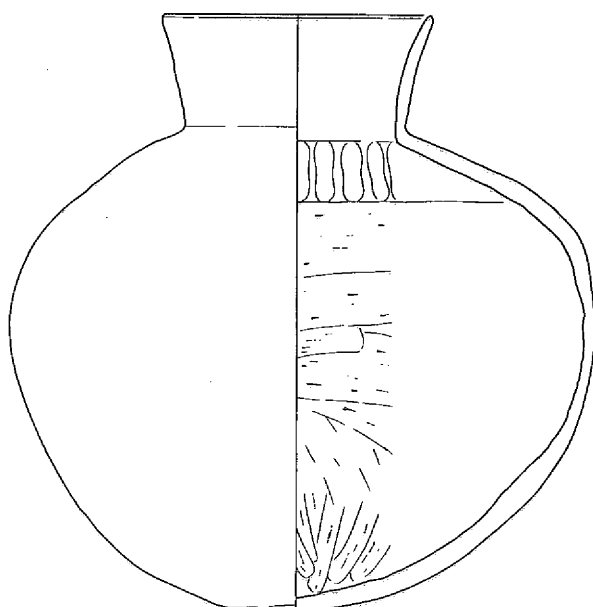


2086

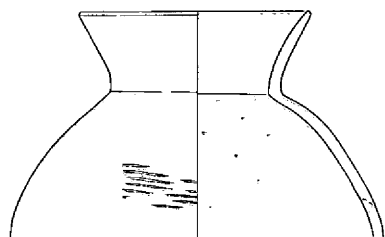




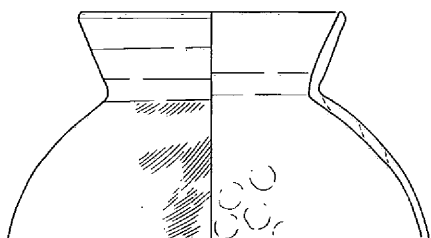
2090



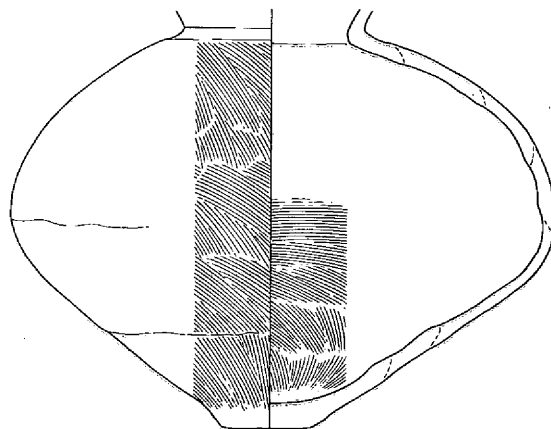
2091



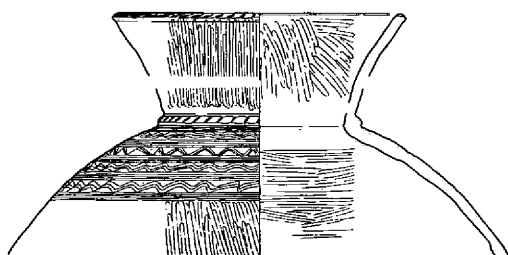
2092



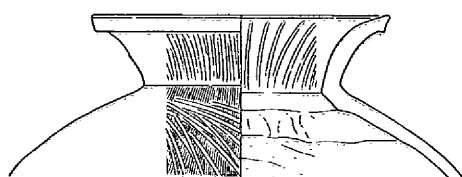
2093



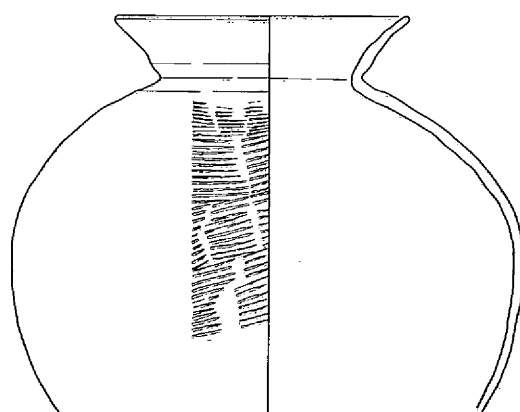
2095



2094

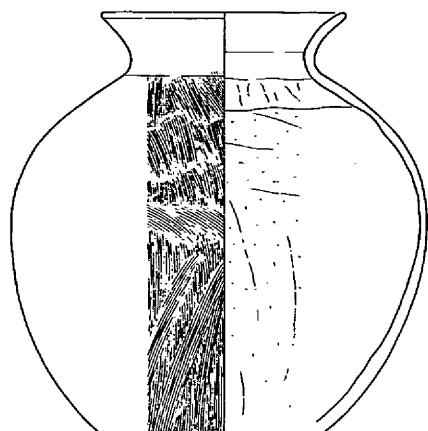


2097

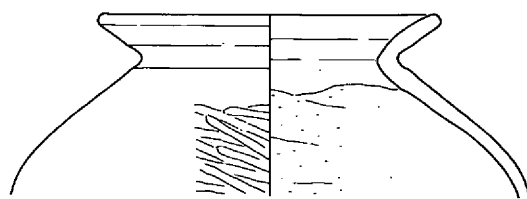


2096

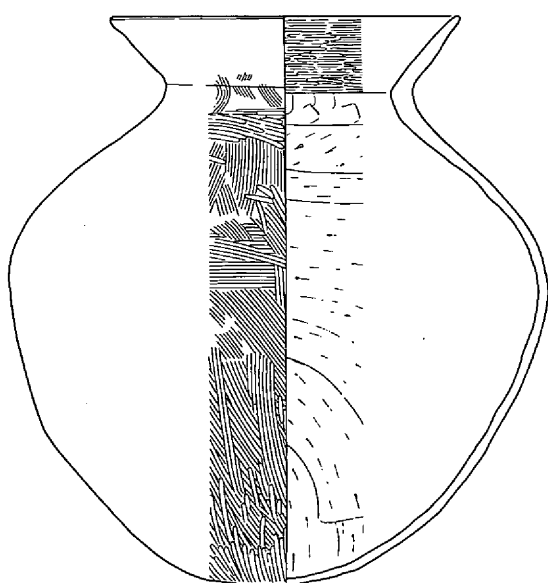




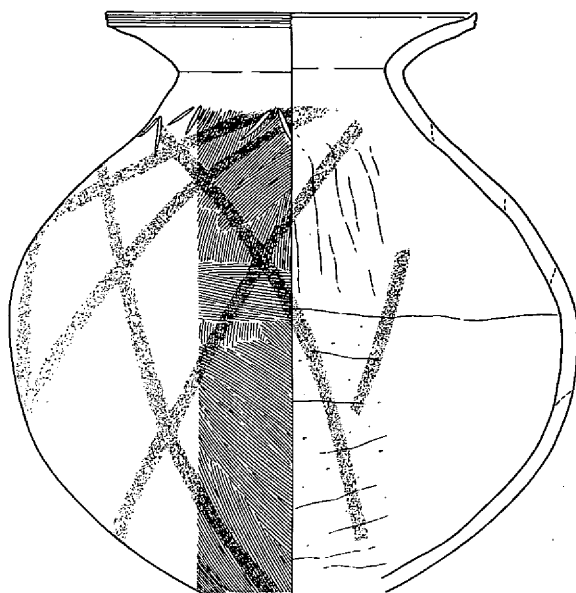
2098



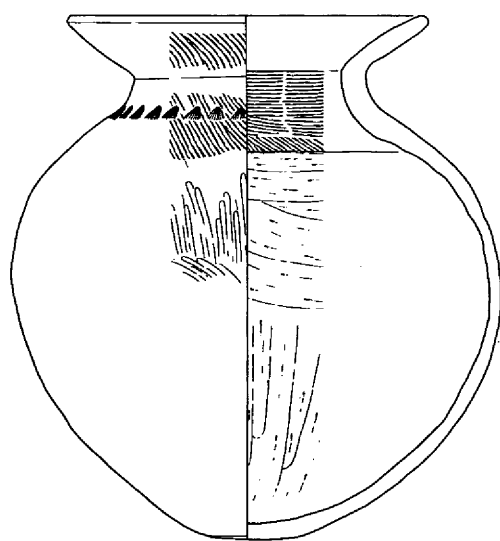
2099



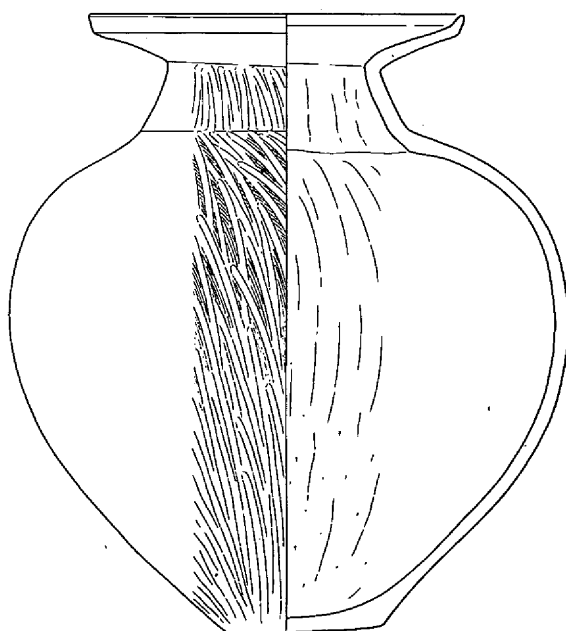
2100



2102

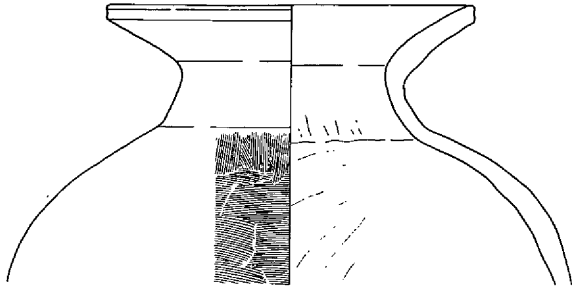


2101

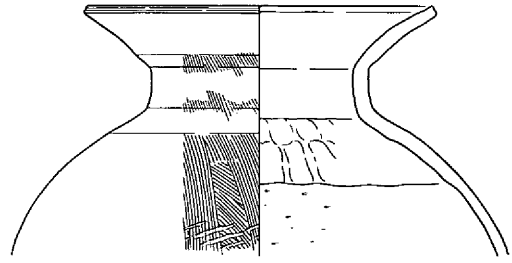


2103

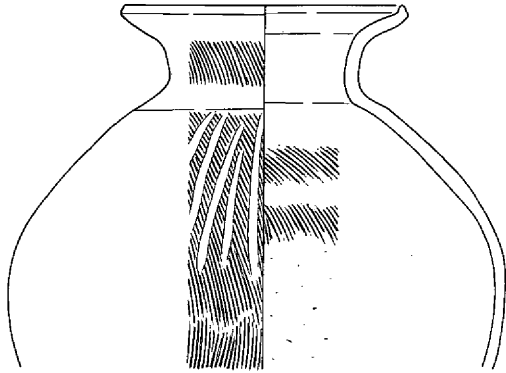




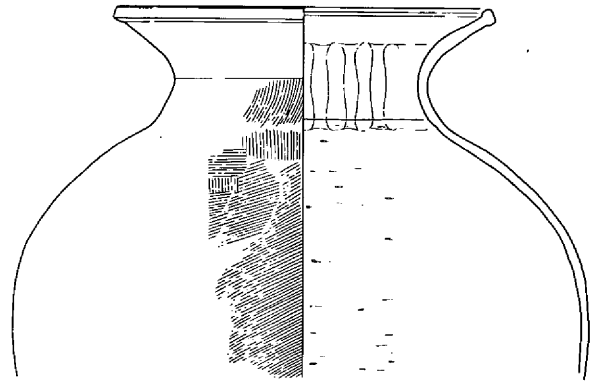
2104



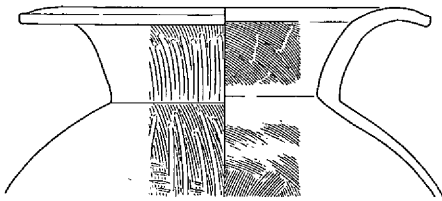
2105



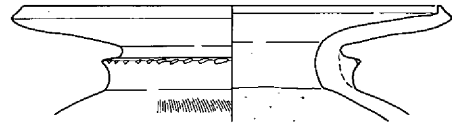
2107



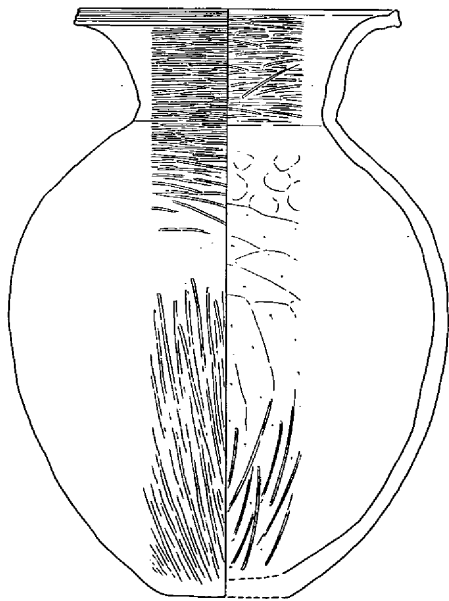
2106



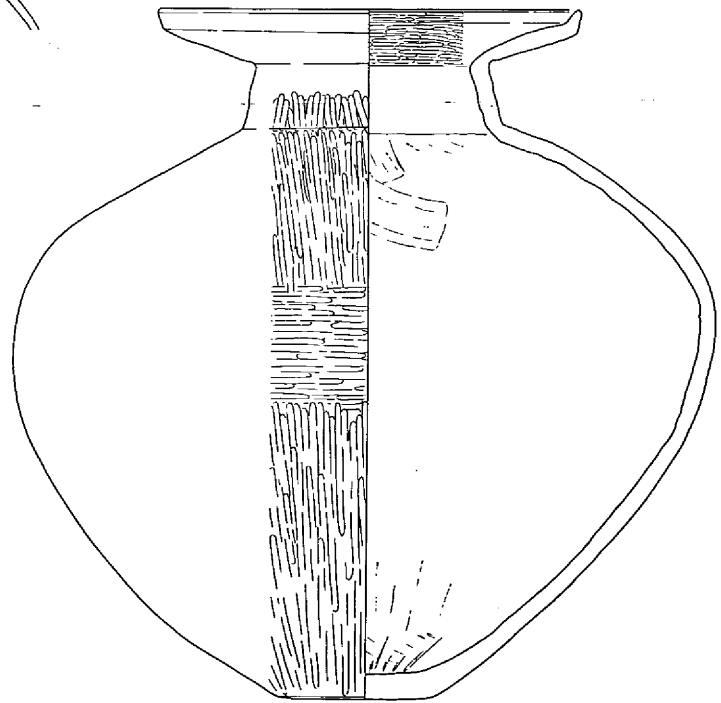
2108



2110

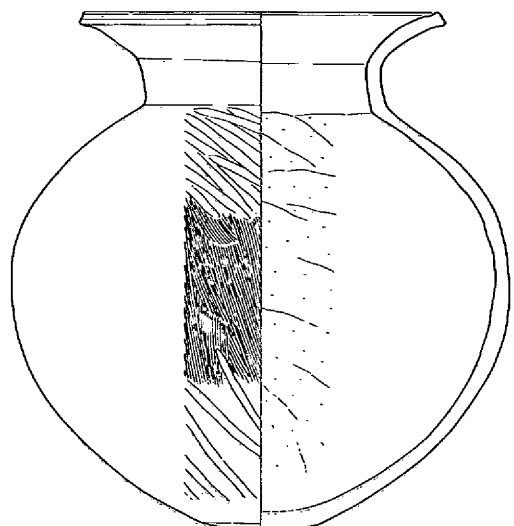


2109

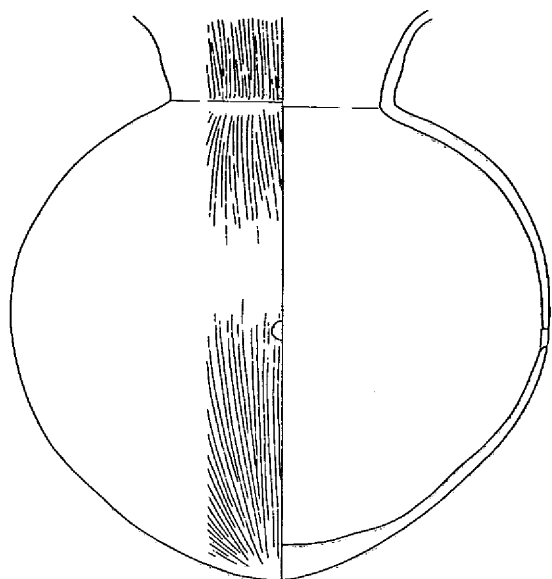


2111

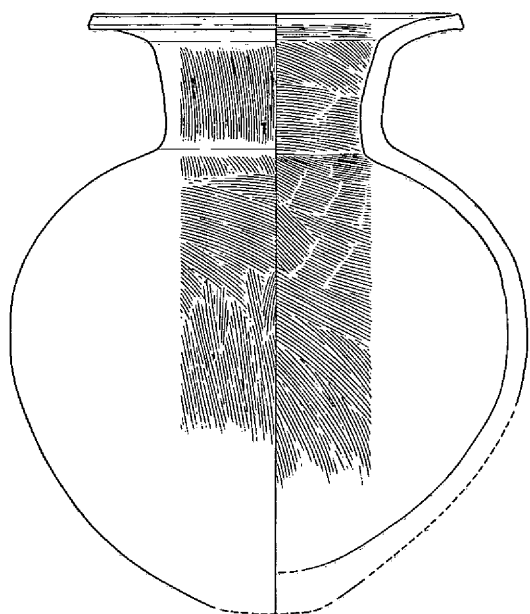




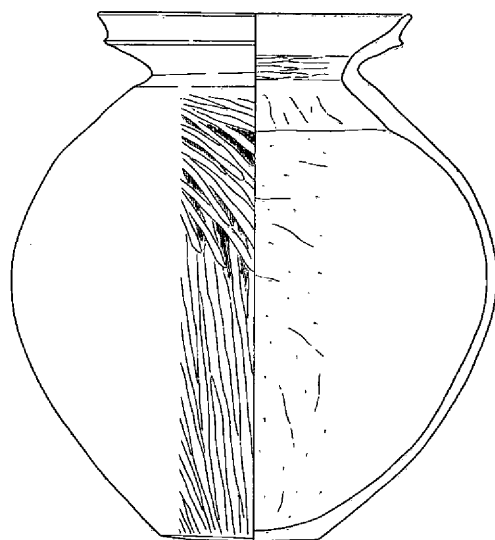
2112



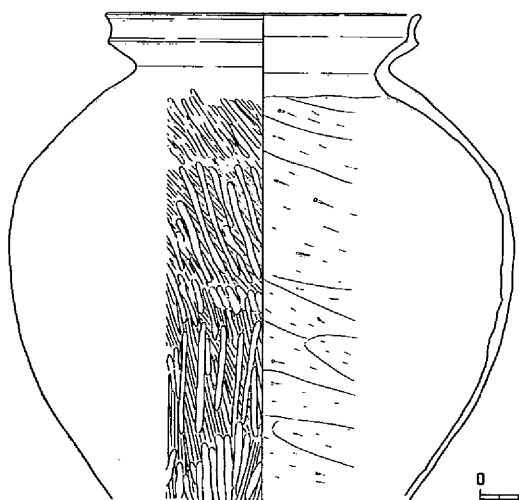
2113



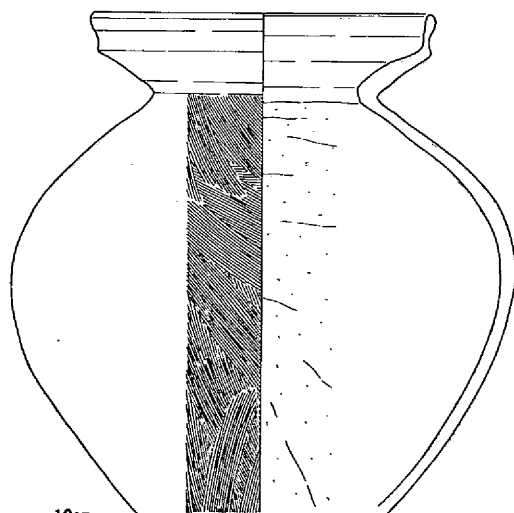
2114



2115

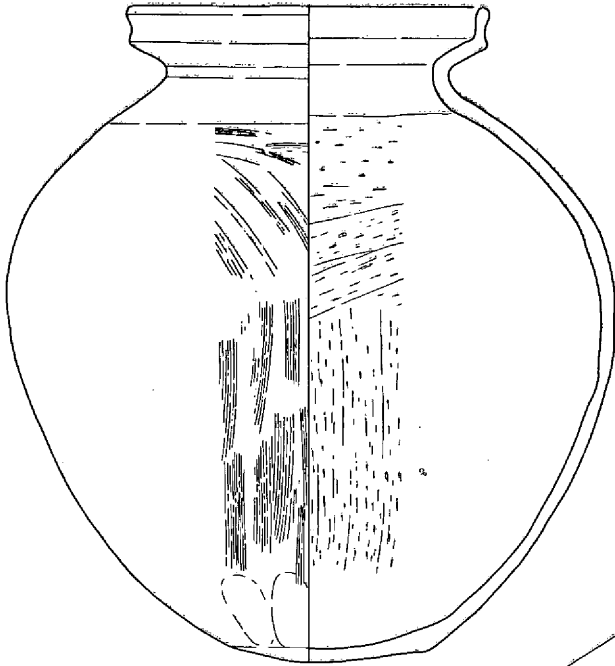


2116

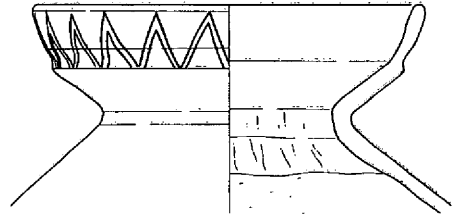


2117

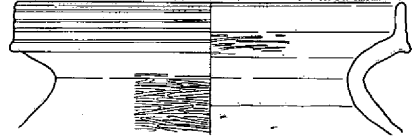




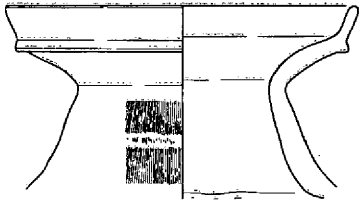
2118



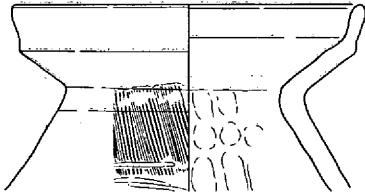
2119



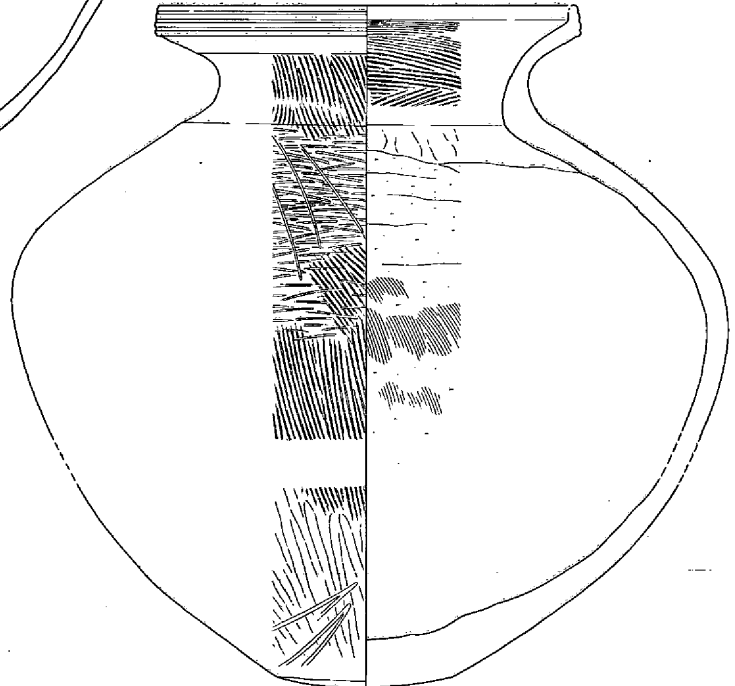
2120



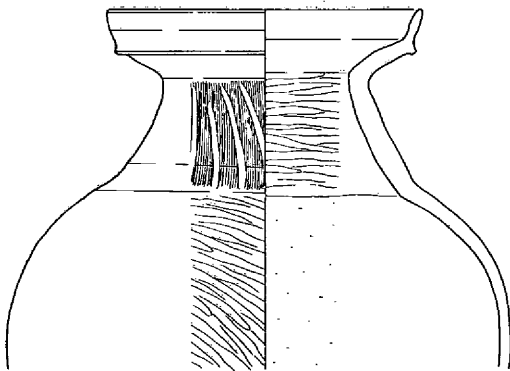
2122



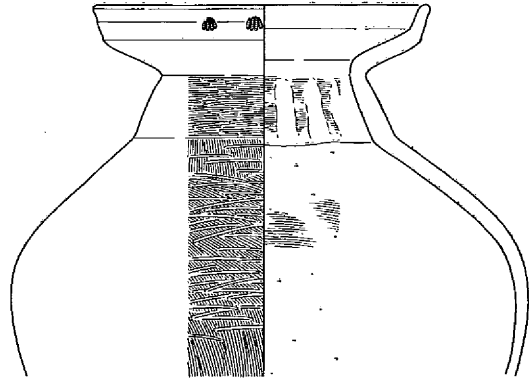
2123



2121

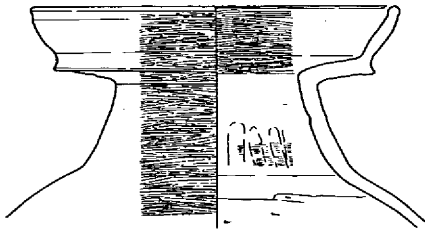


2124

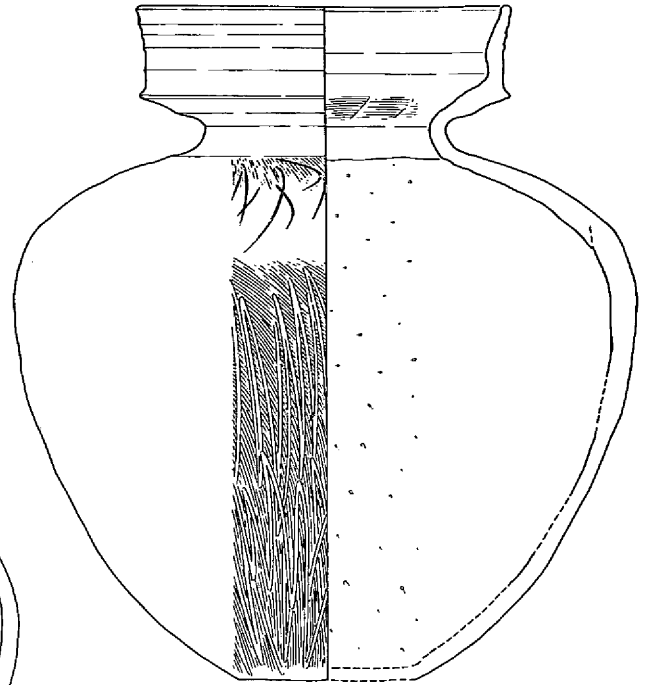


2125

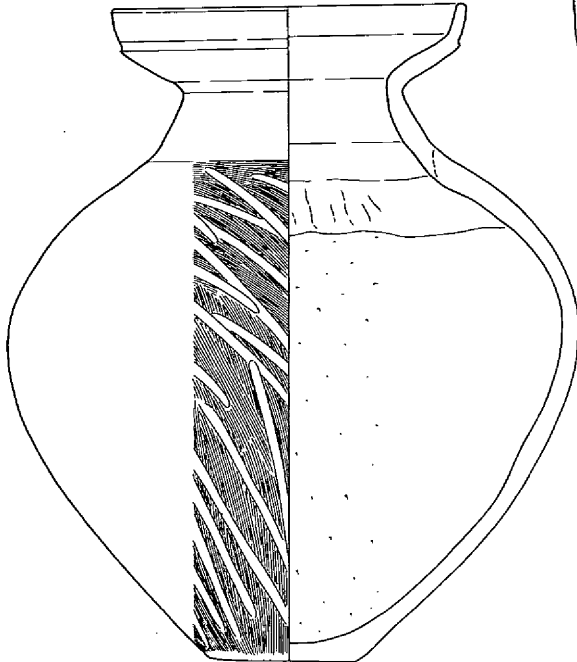




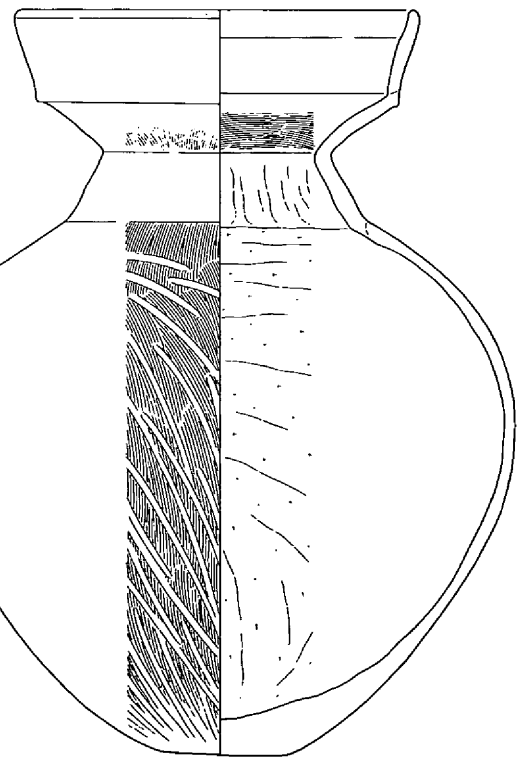
2126



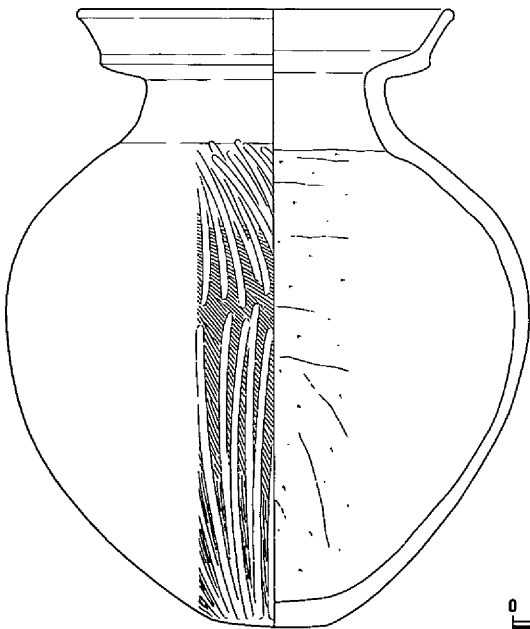
2129



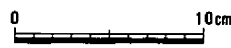
2127

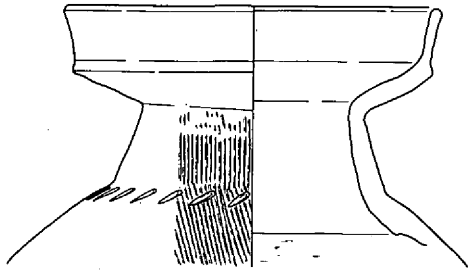


2130

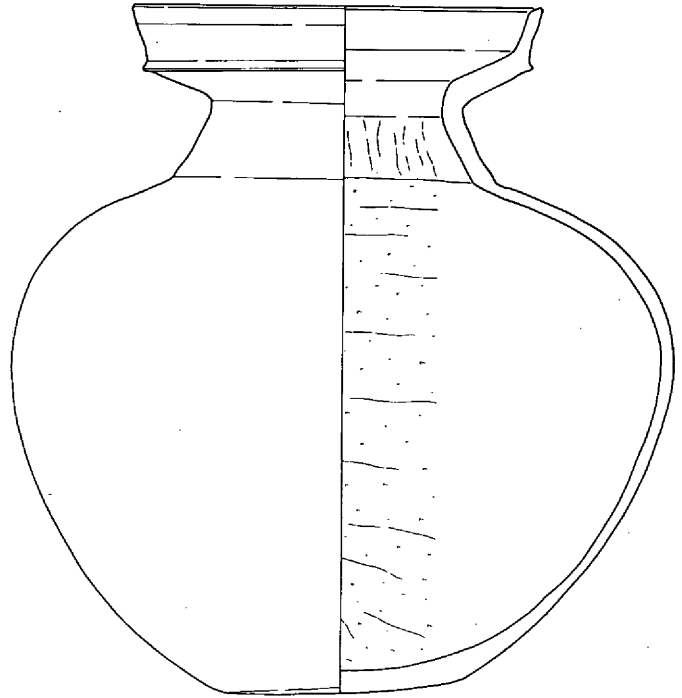


2128

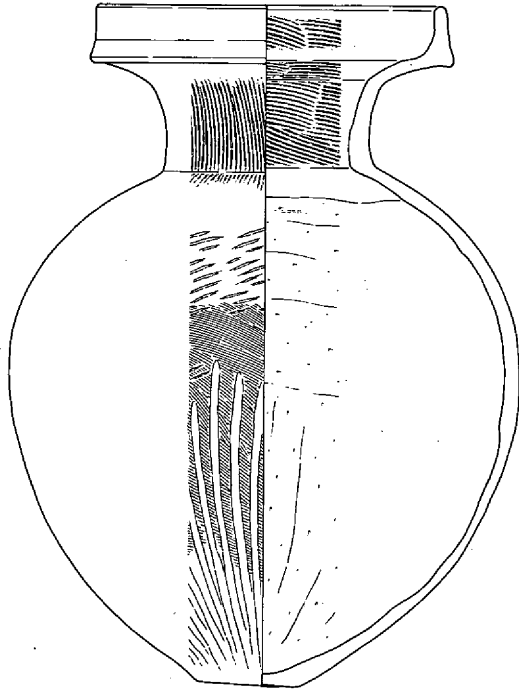




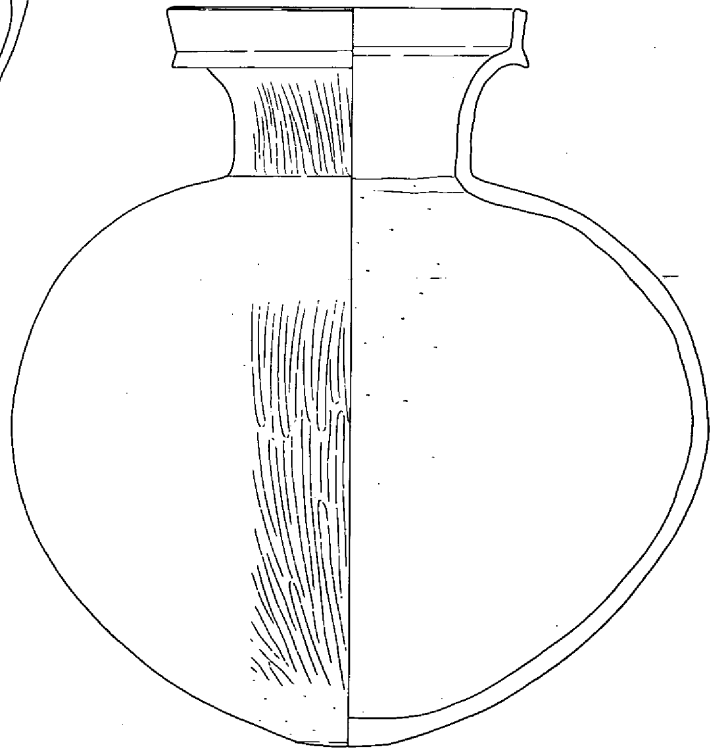
2131



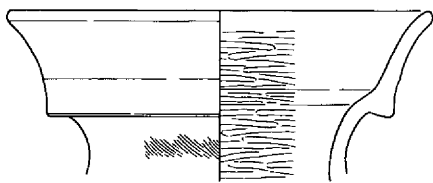
2132



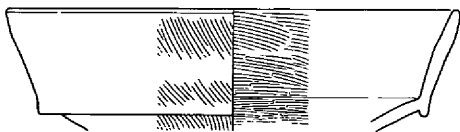
2133



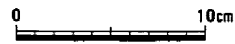
2134

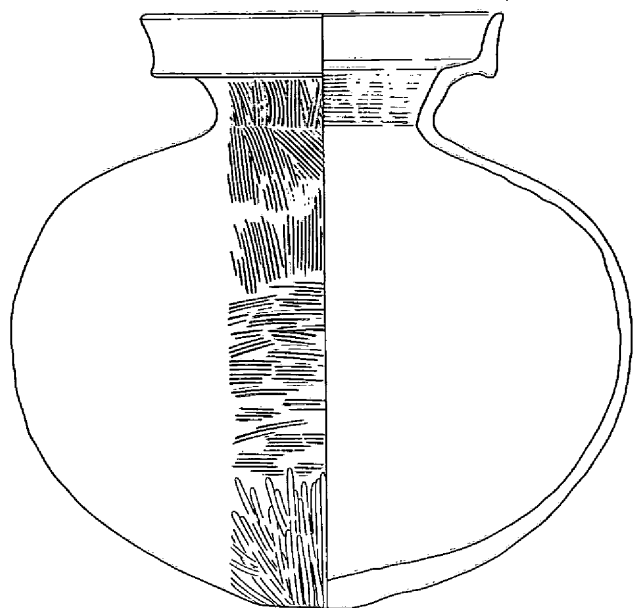


2135

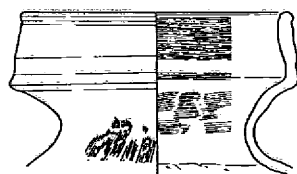


2136

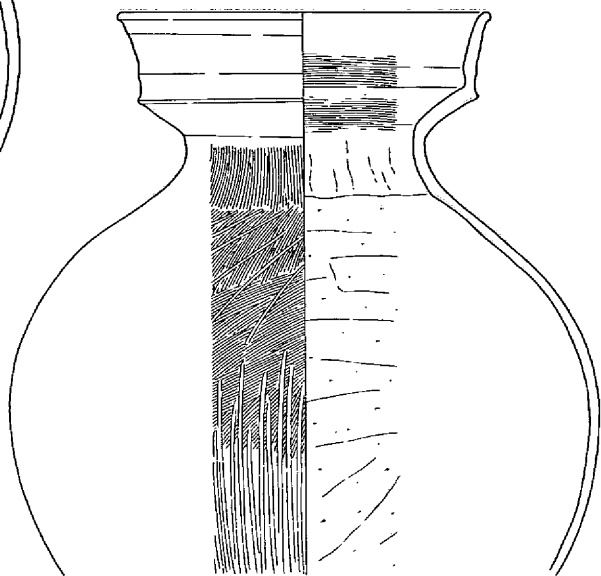




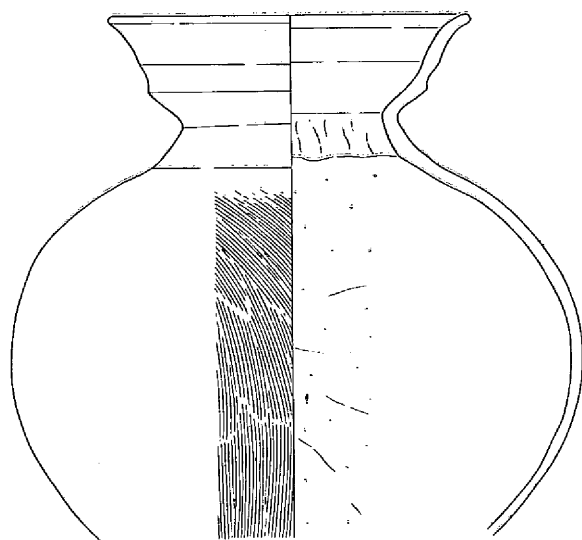
2137



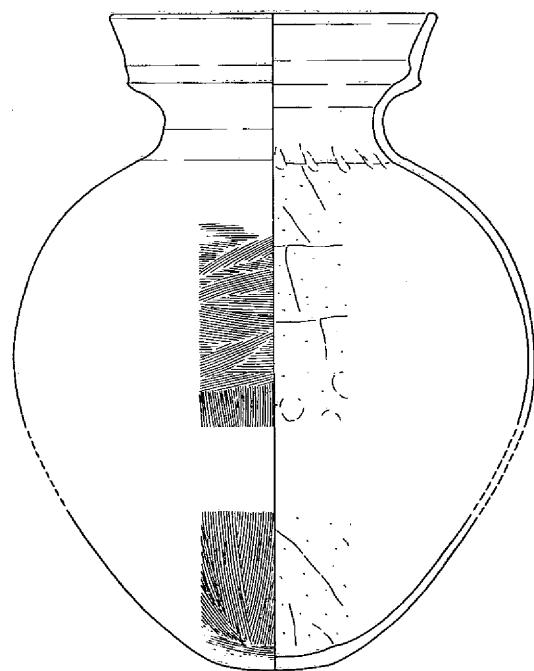
2138



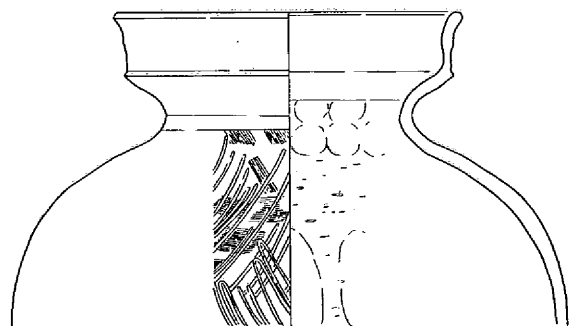
2139



2140

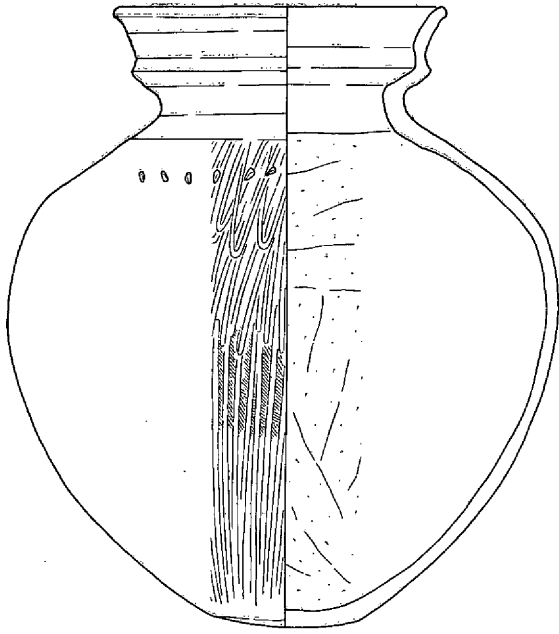


2142

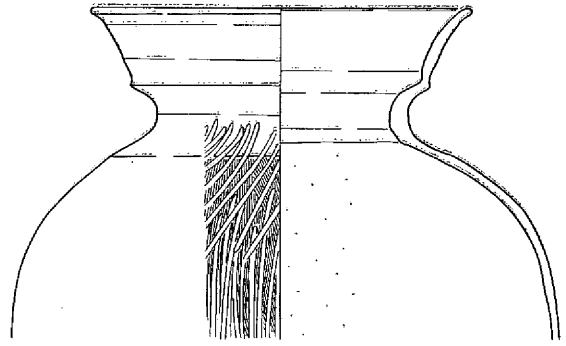


2141

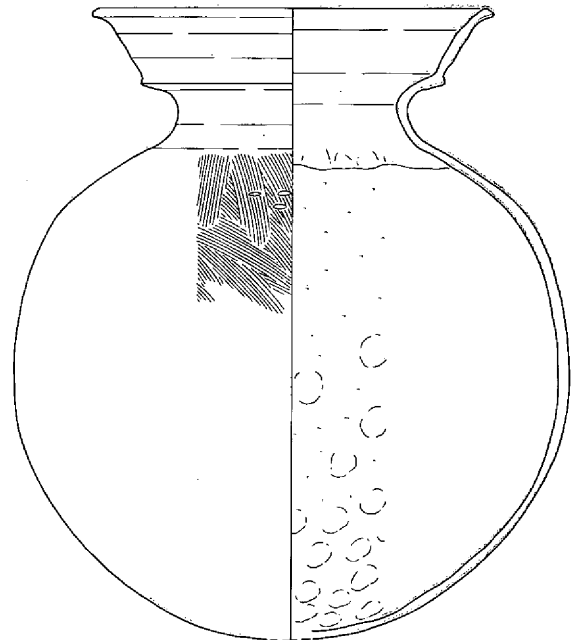




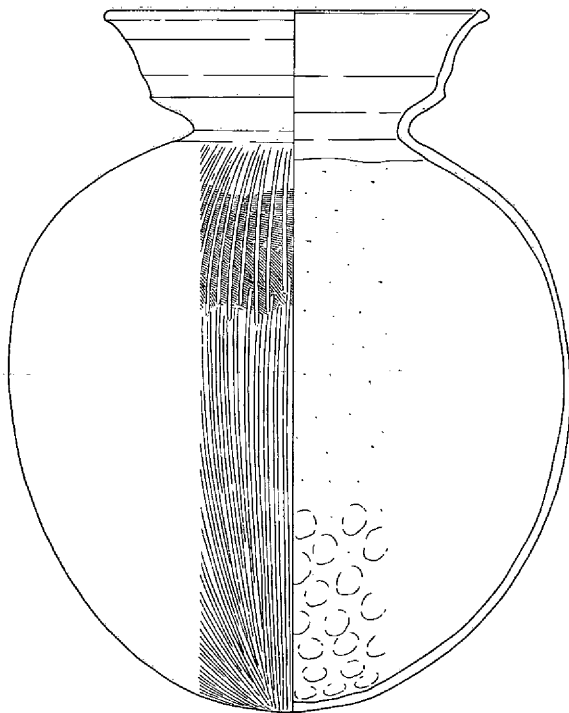
2143



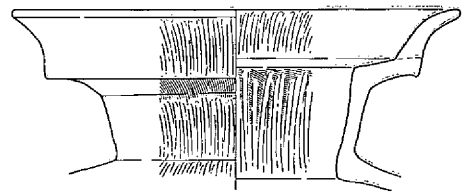
2144



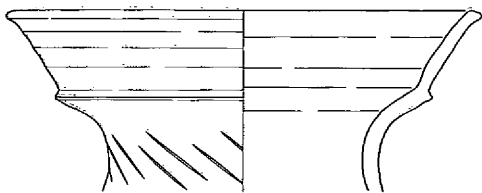
2146



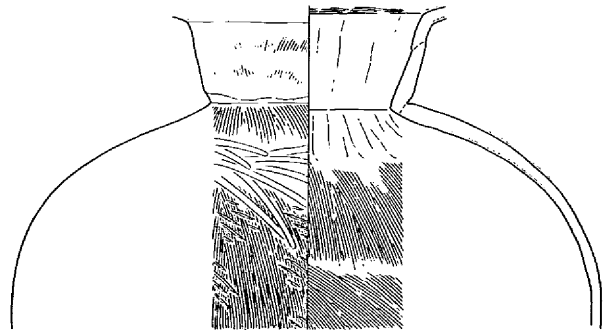
2145



2148

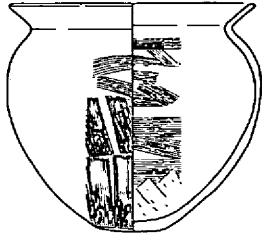


2147

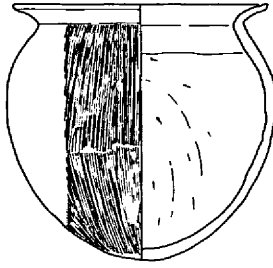


2149

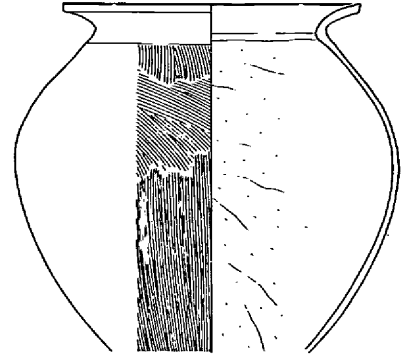




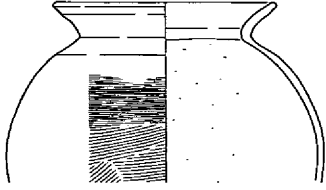
2150



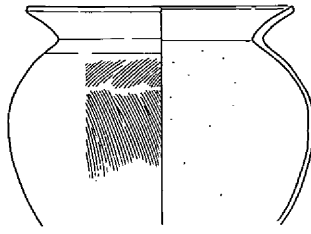
2155



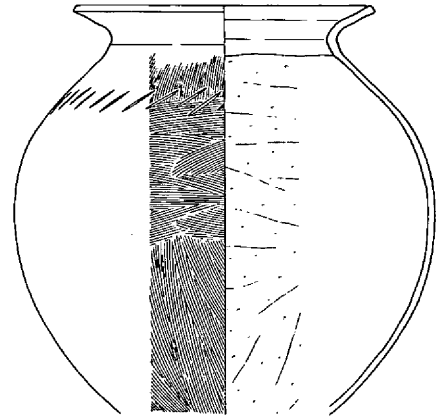
2157



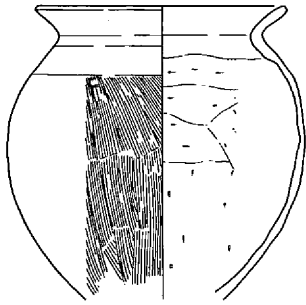
2151



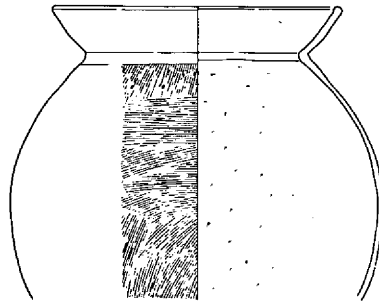
5156



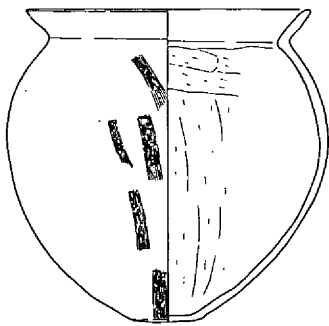
2158



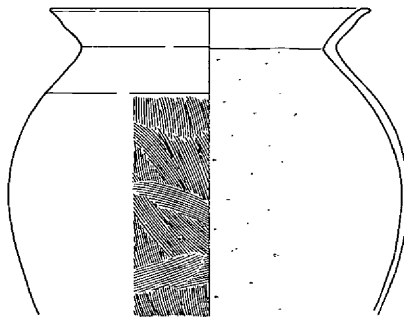
2152



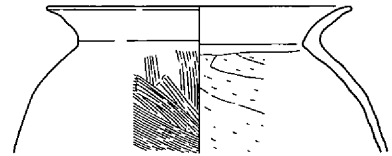
2159



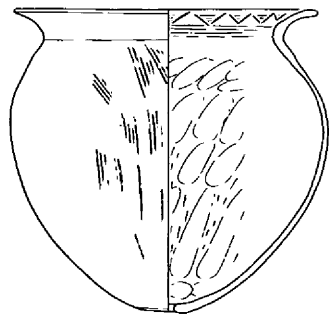
2153



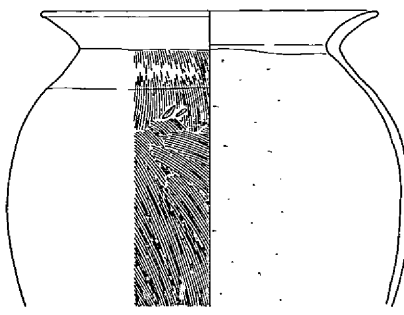
2161



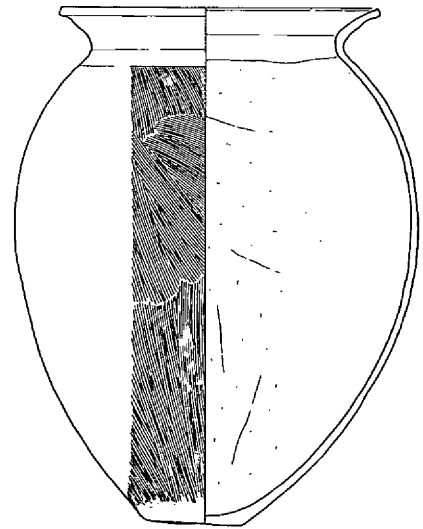
2160



2154

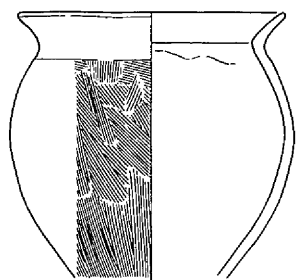


2162

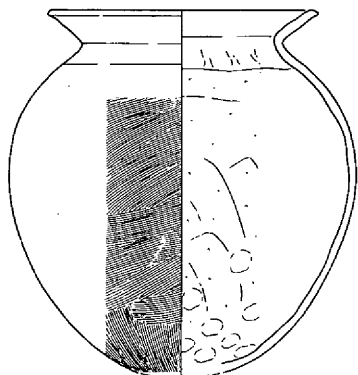


2163

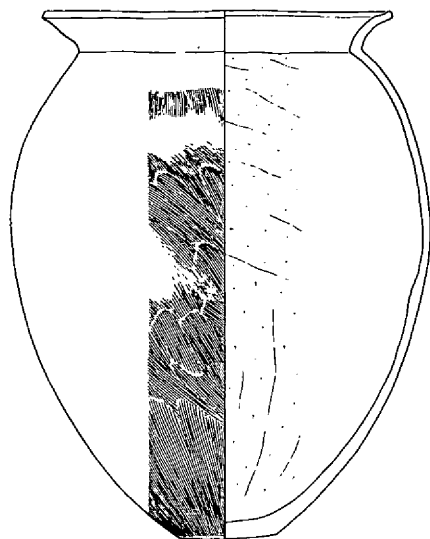




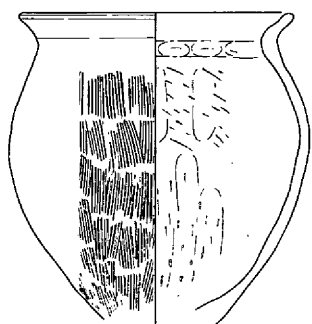
2164



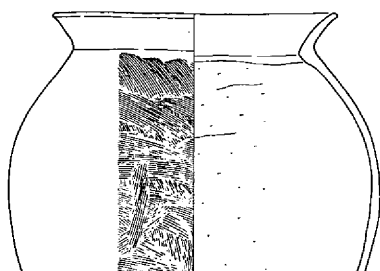
2169



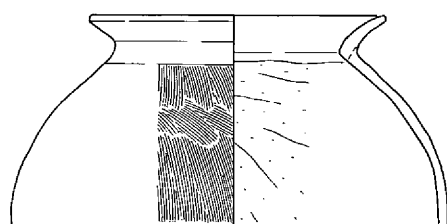
2173



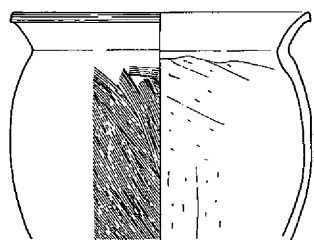
2165



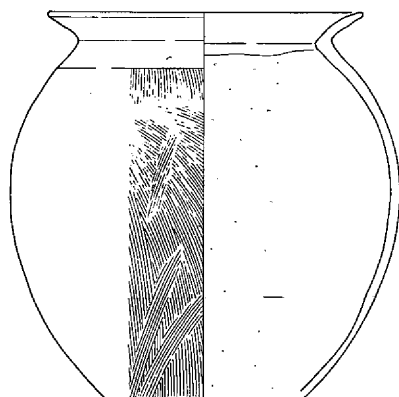
2170



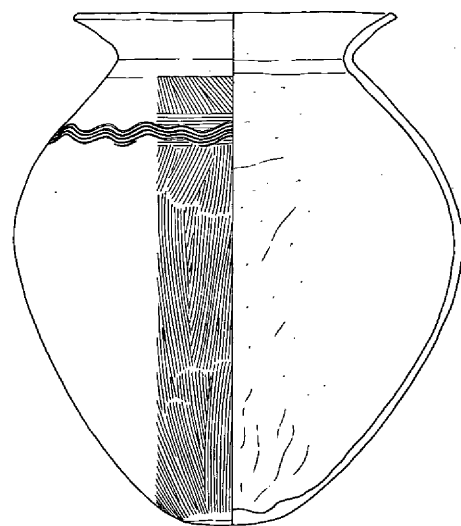
2174



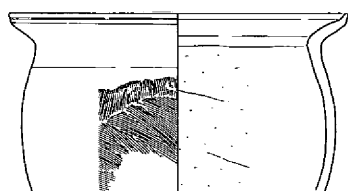
2166



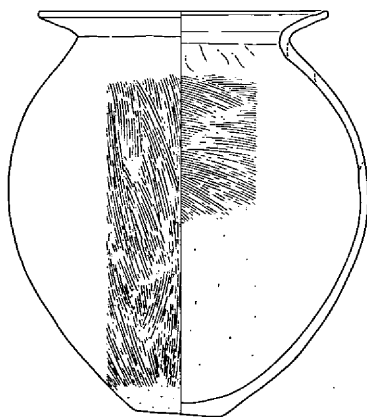
2171



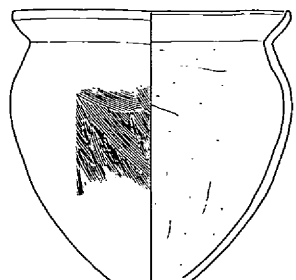
2175



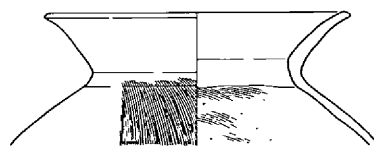
2167



2172

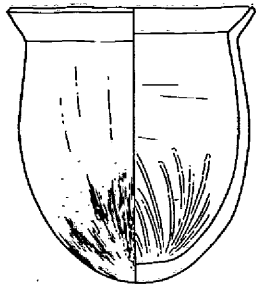


2168

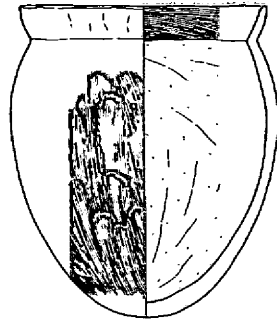


2176

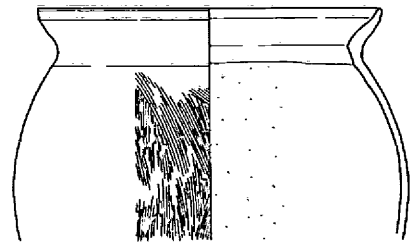




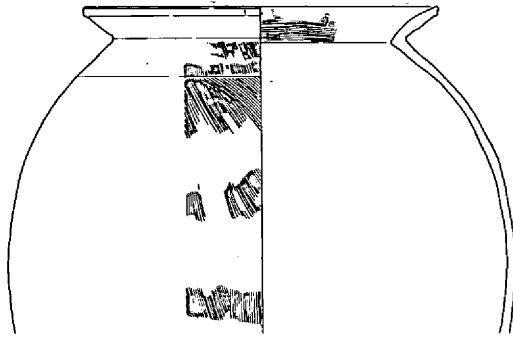
2177



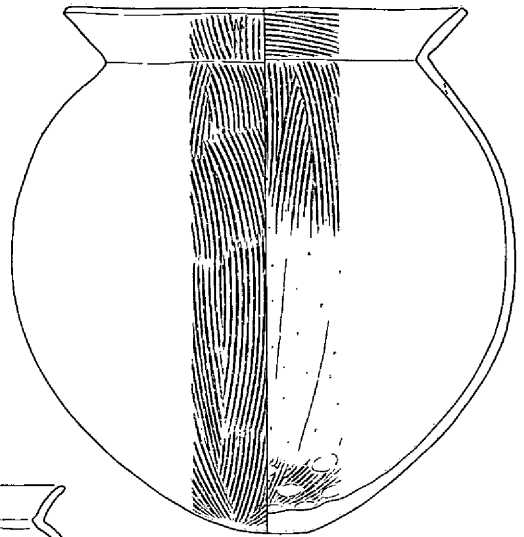
2178



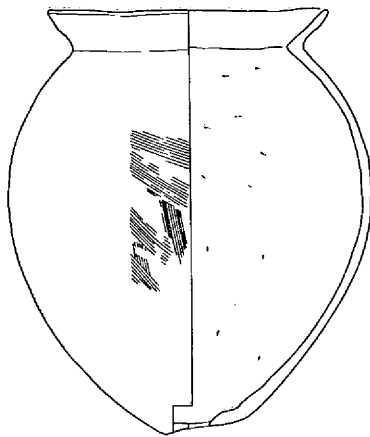
2179



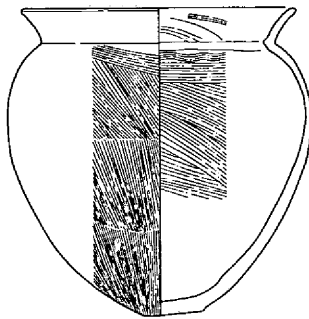
2180



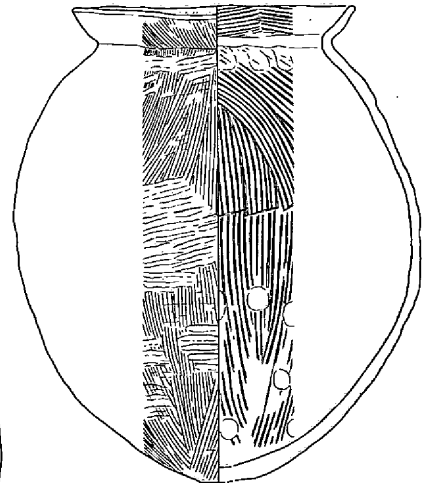
2183



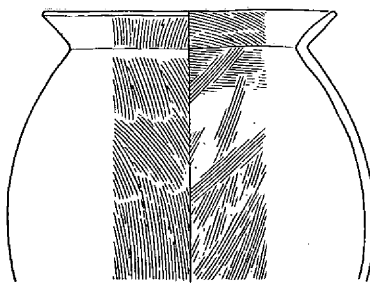
2181



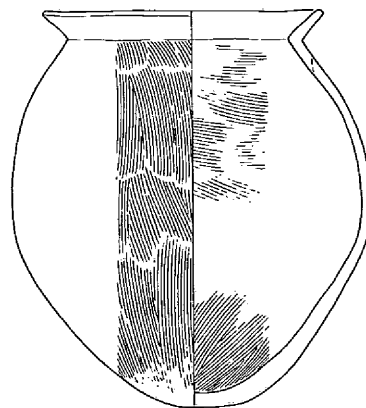
2182



2186



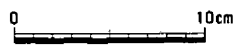
2184

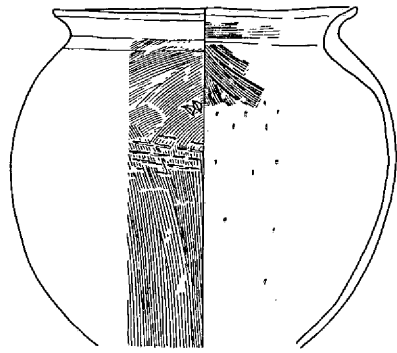


2185

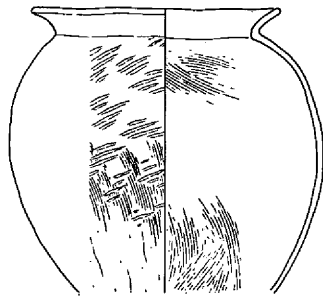


2187

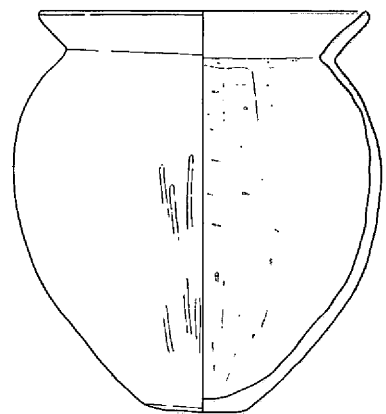




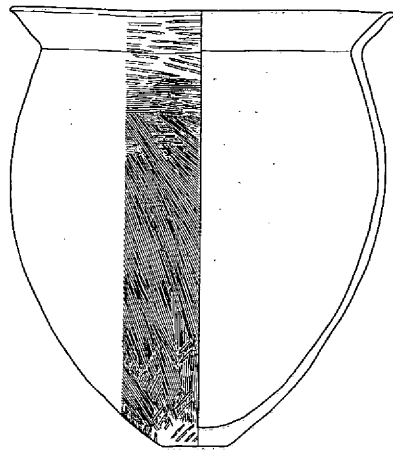
2188



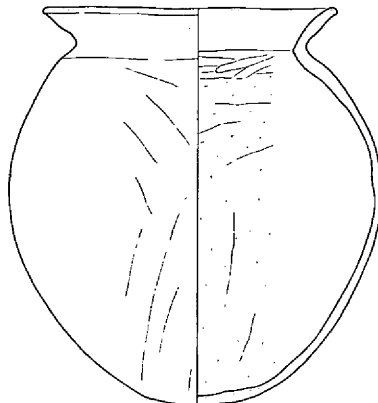
2189



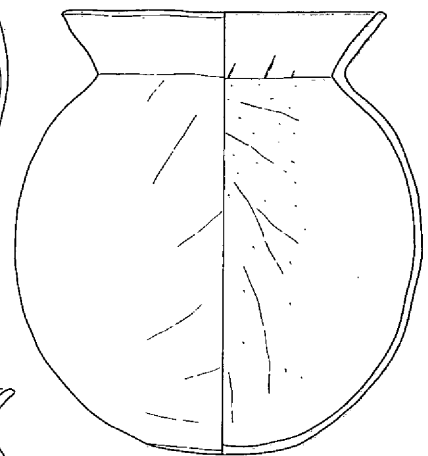
2191



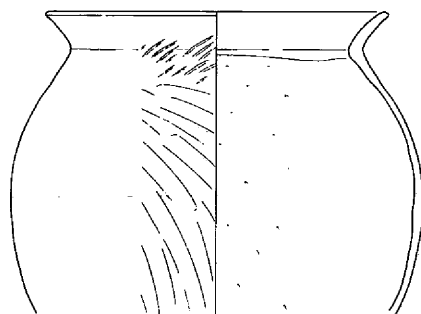
2190



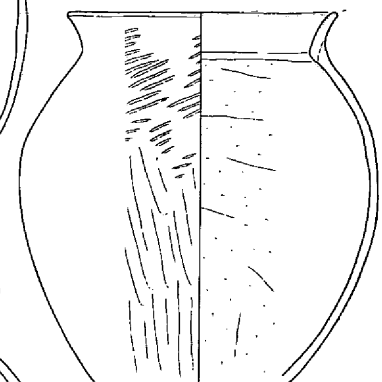
2192



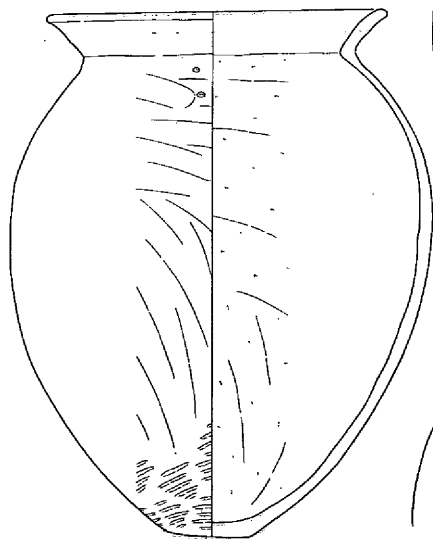
2193



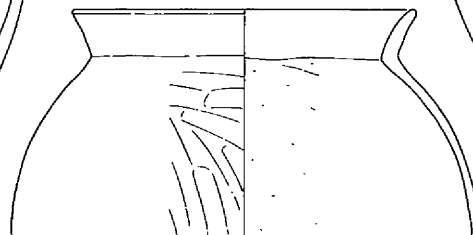
2195



2197

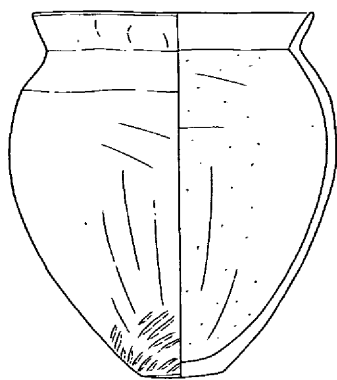


2194

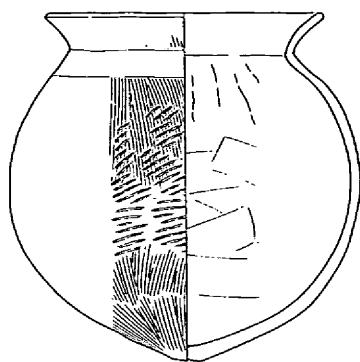


2196

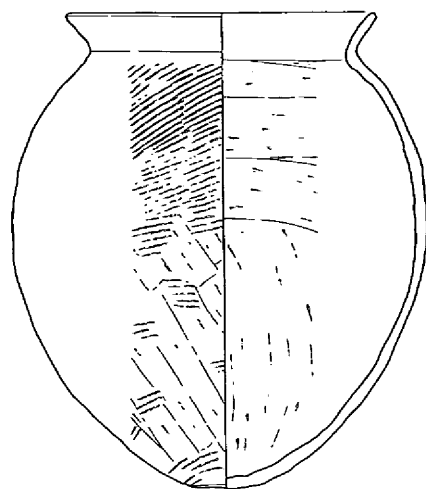




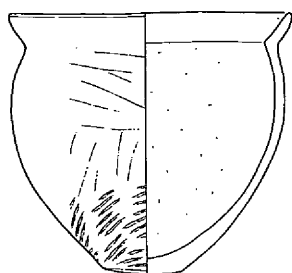
2198



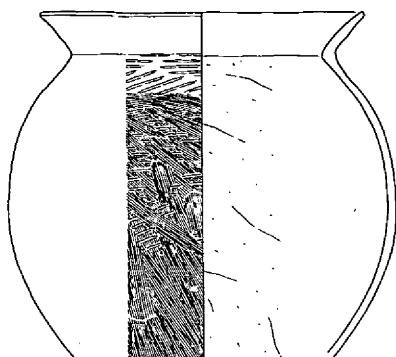
2201



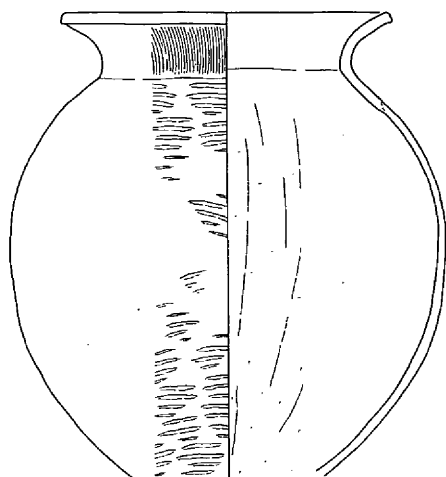
2204



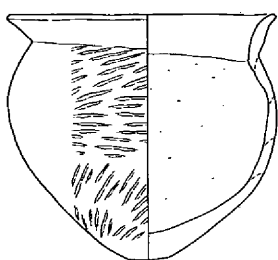
2199



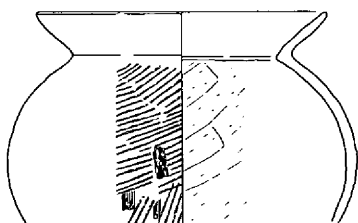
2202



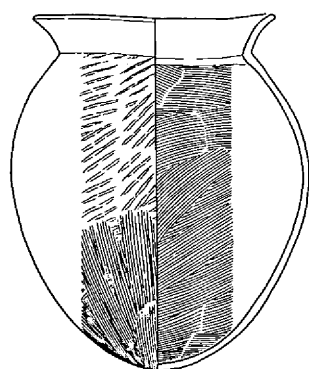
2205



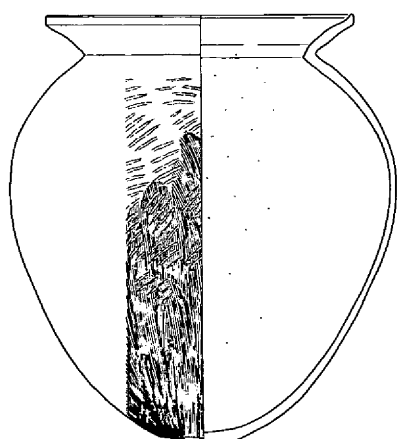
2200



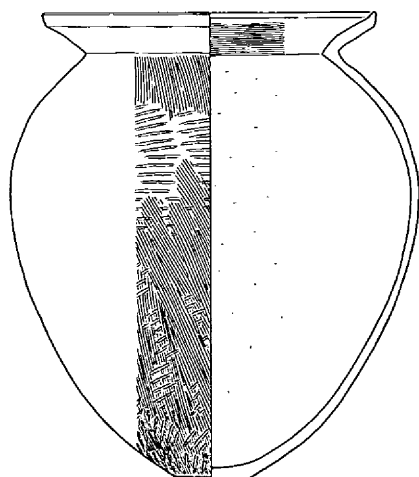
2203



2206

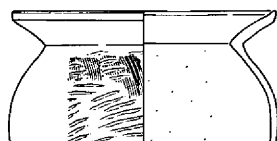


2207

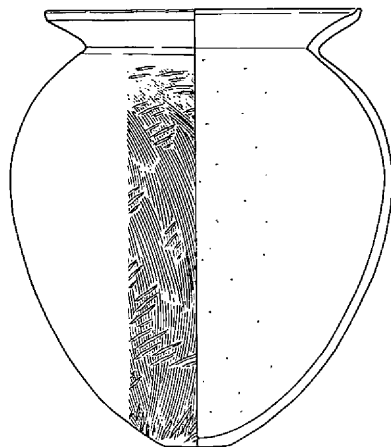


2208

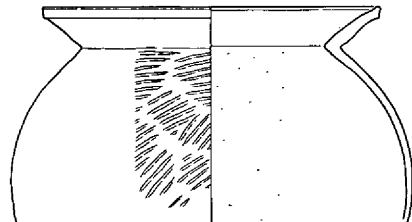




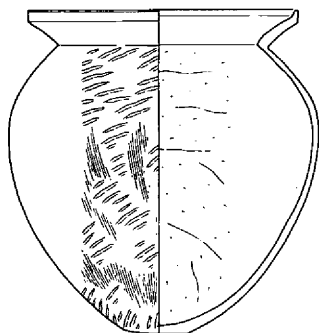
2209



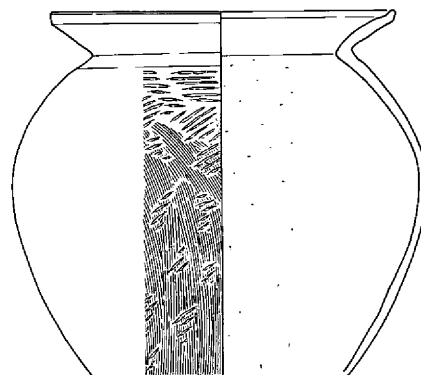
2212



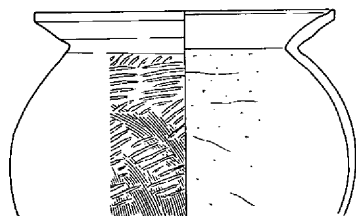
2213



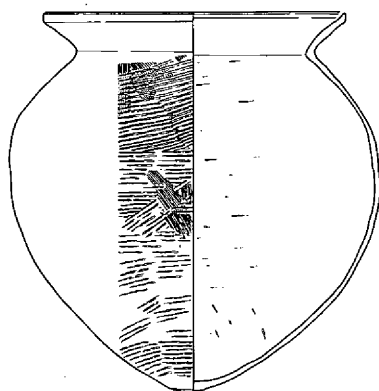
2210



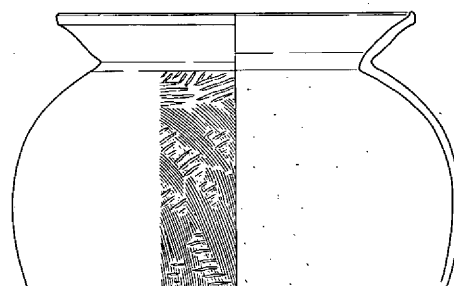
2214



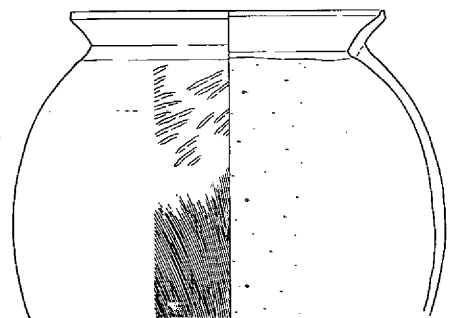
2211



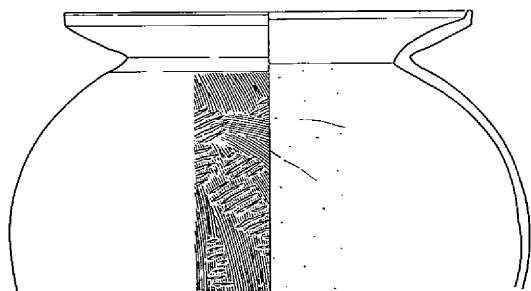
2216



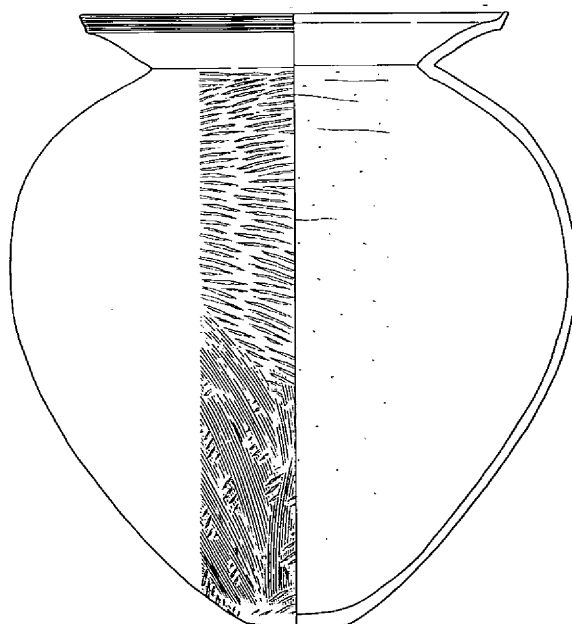
2215



2217

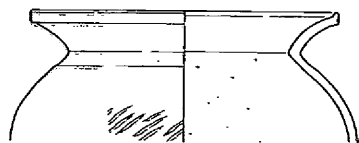


2218

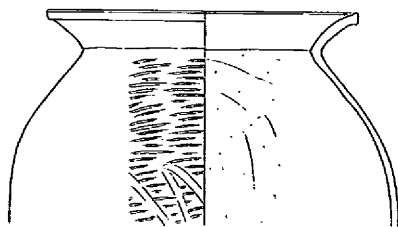


2219

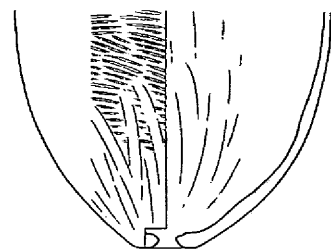




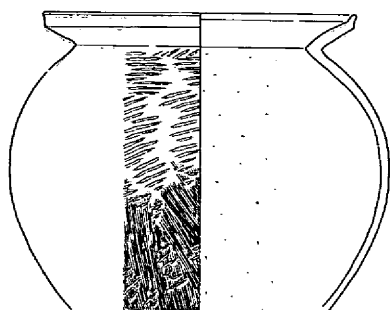
2220



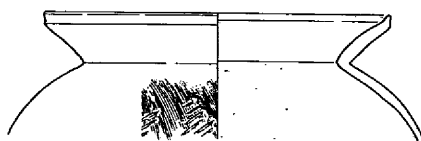
2222



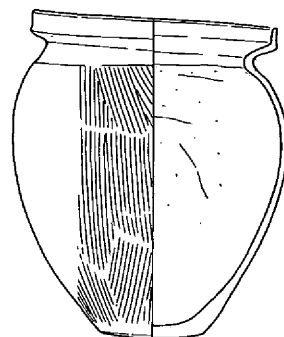
2224



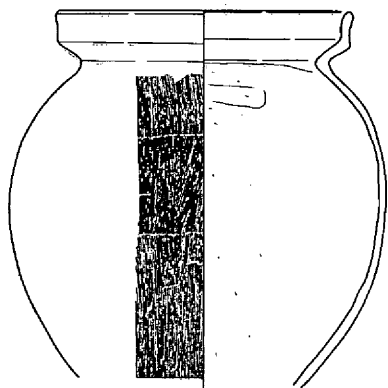
2221



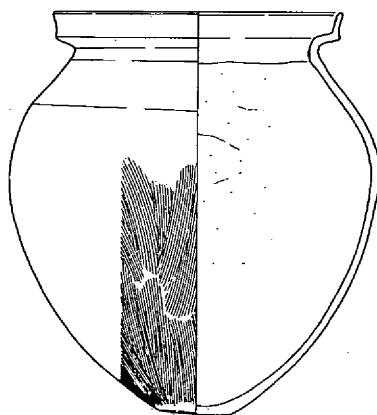
2223



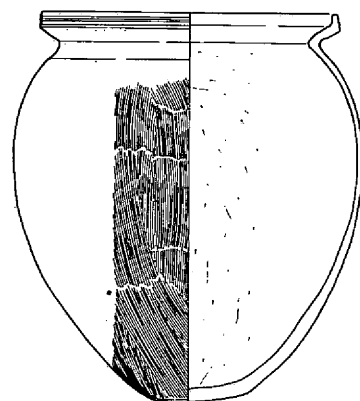
2225



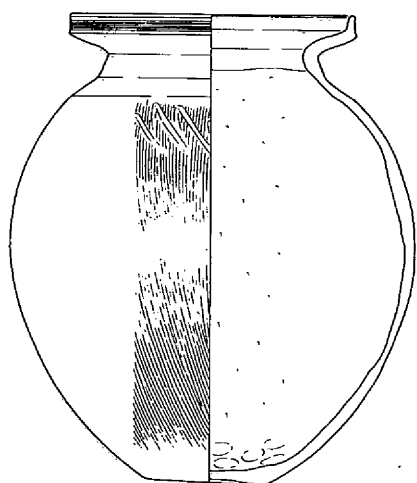
2227



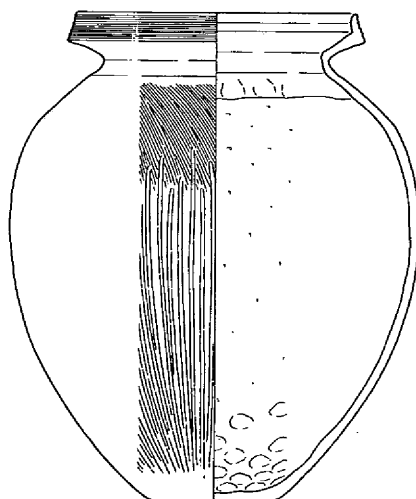
2228



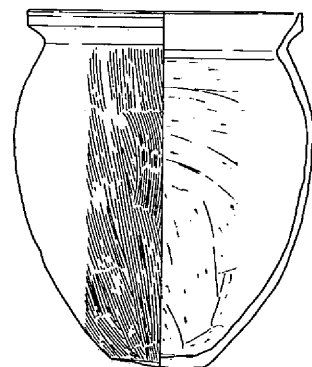
2231



2229

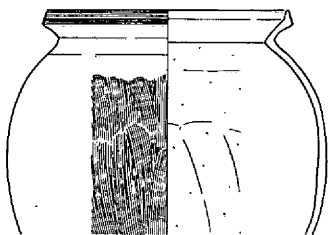


2230

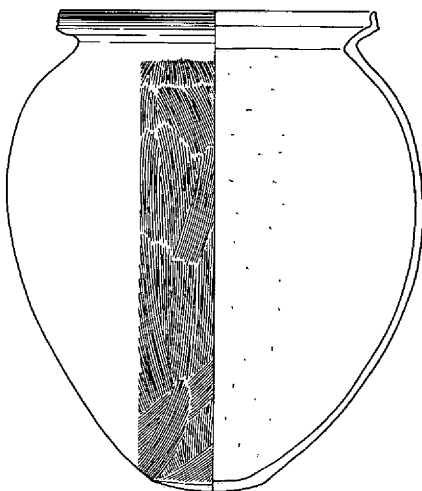


2226

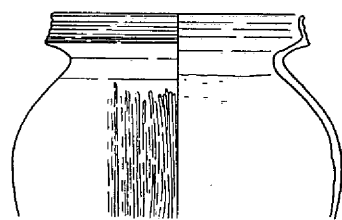




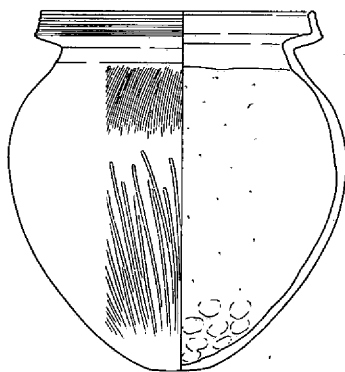
2232



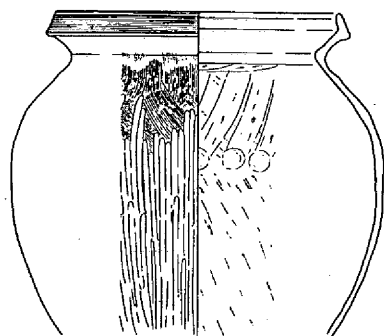
2233



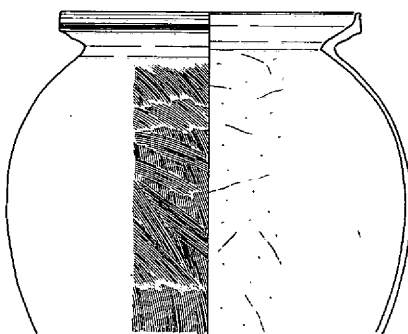
2240



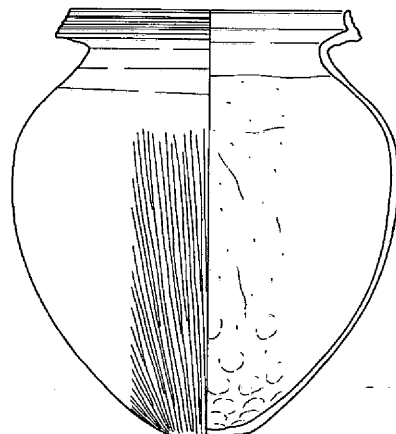
2235



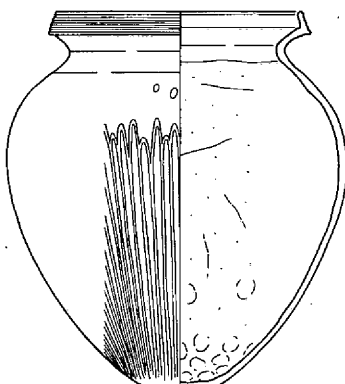
2241



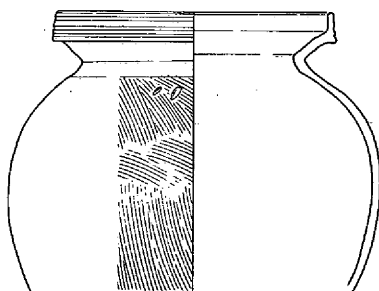
2234



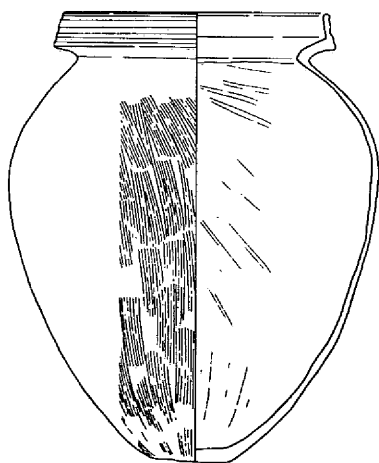
2242



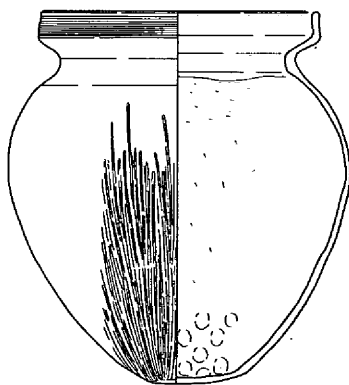
2236



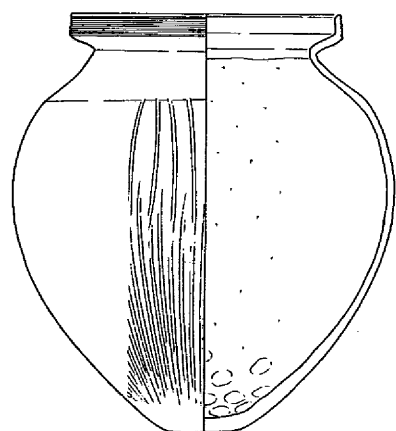
2238



2237

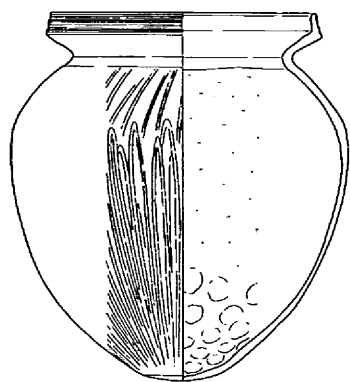


2239



2243

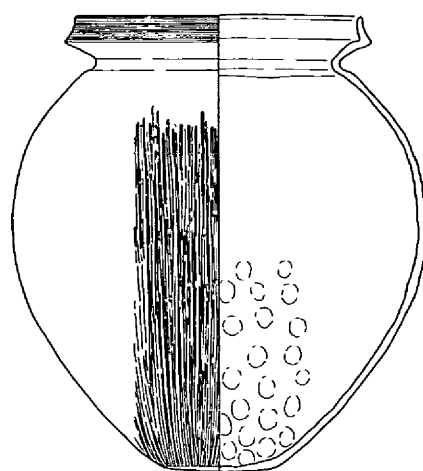




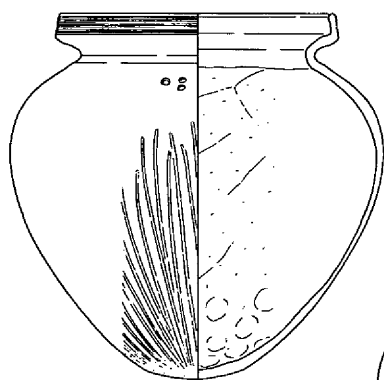
2244



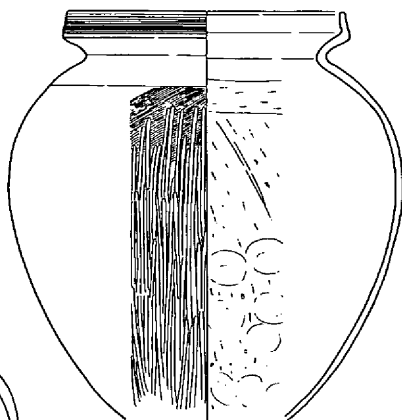
2248



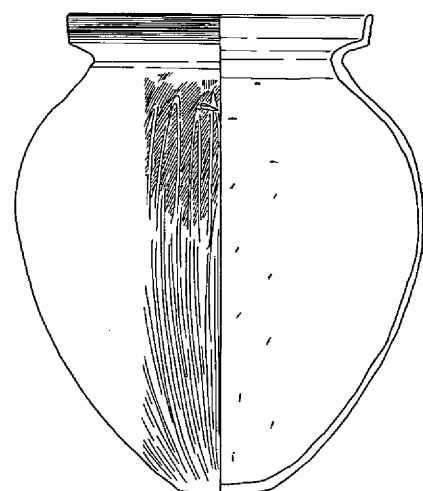
2252



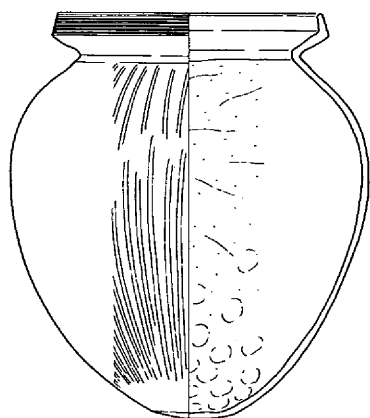
2245



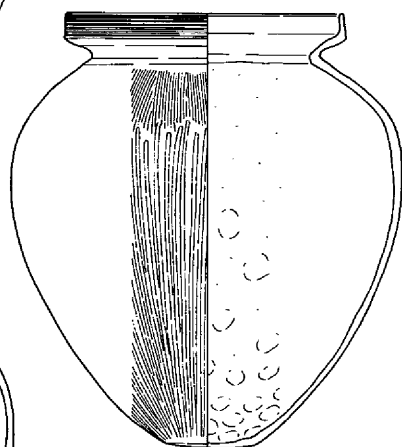
2249



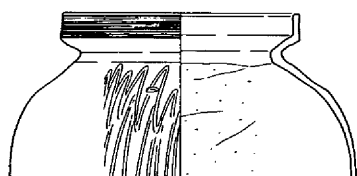
2253



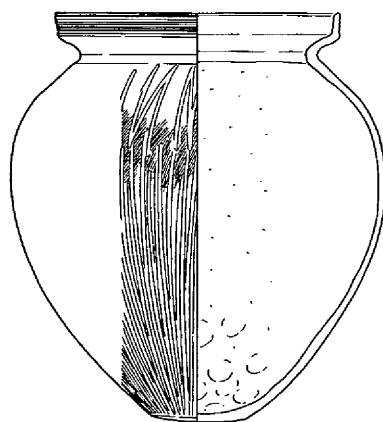
2246



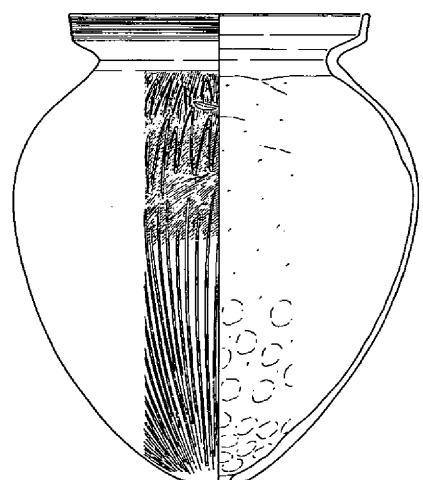
2250



2247

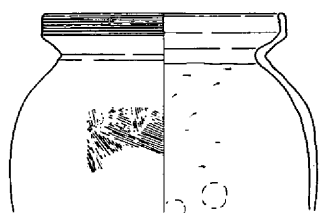


2251

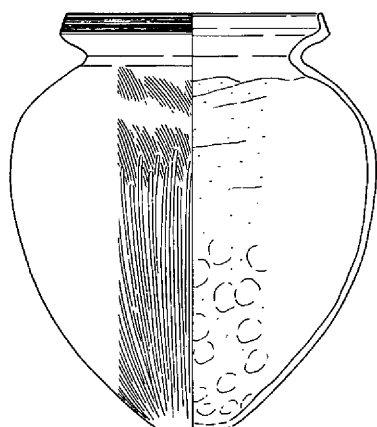


2254

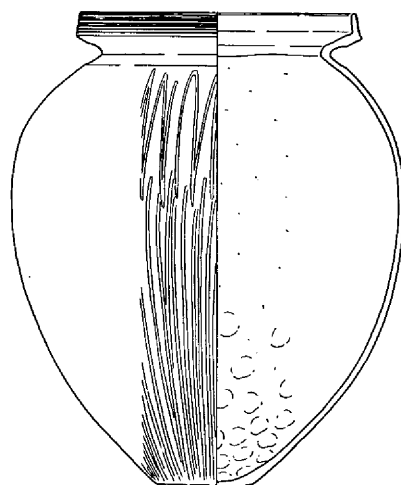




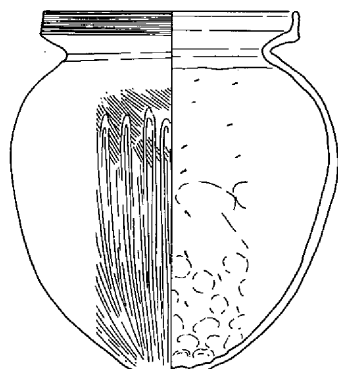
2255



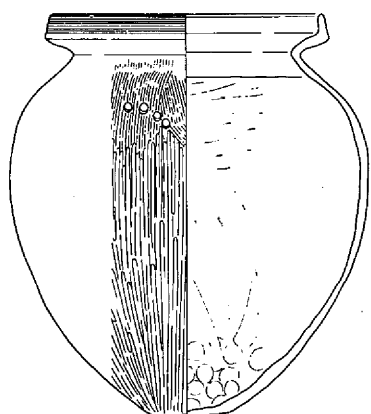
2259



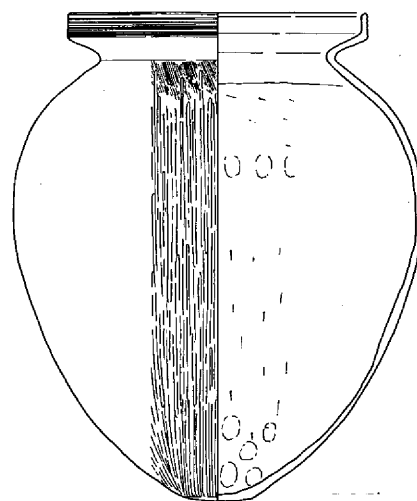
2263



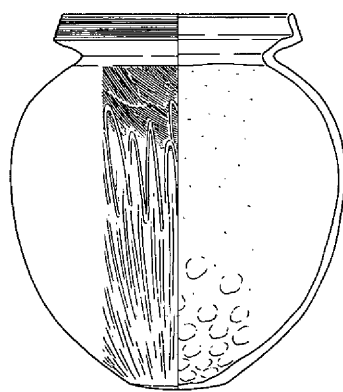
2256



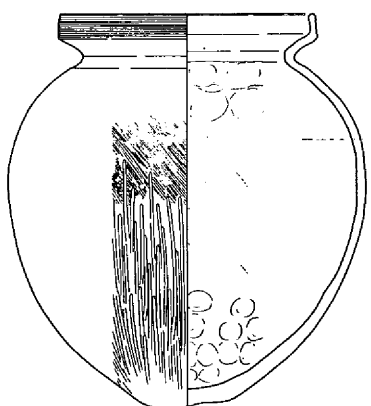
2260



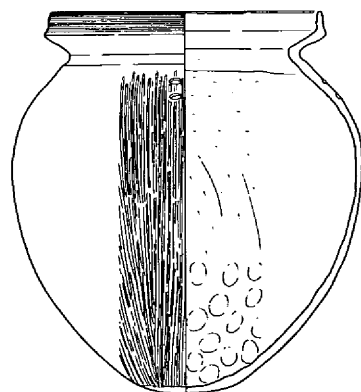
2264



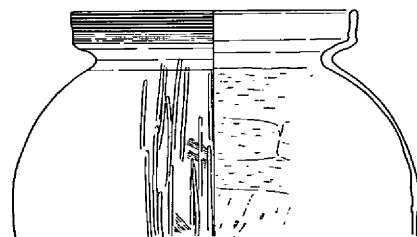
2257



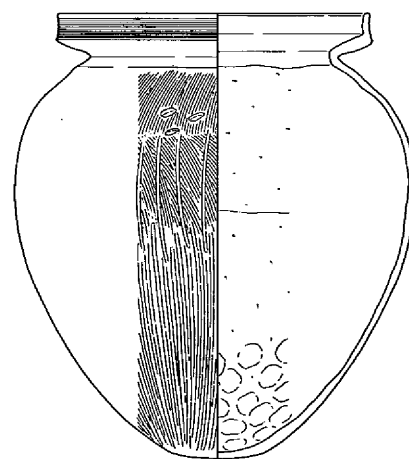
2261



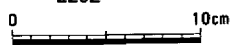
2258

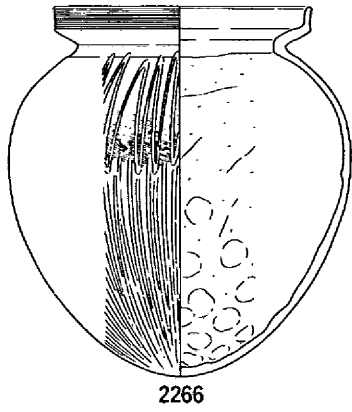


2262

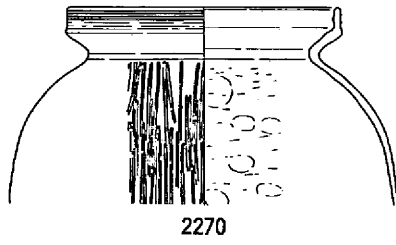


2265

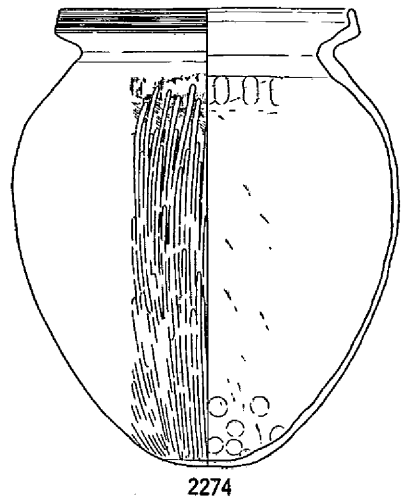




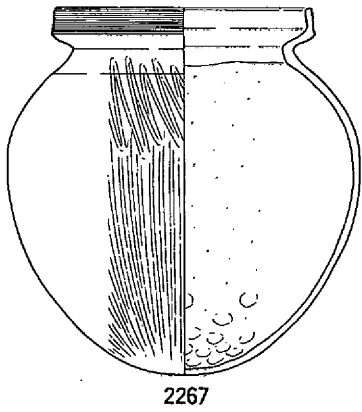
2266



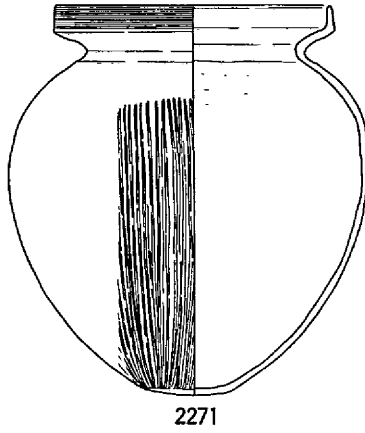
2270



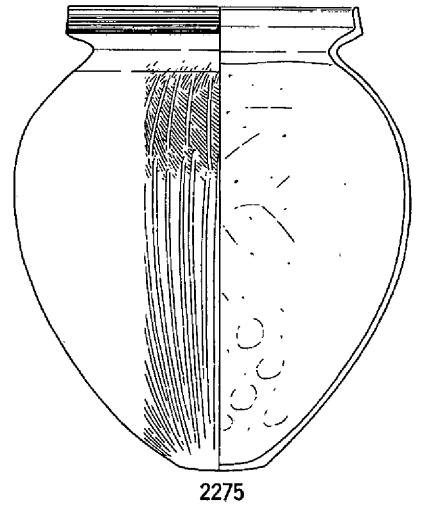
2274



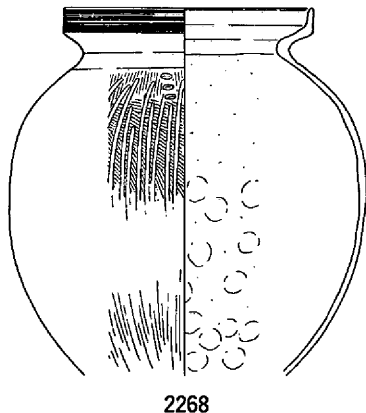
2267



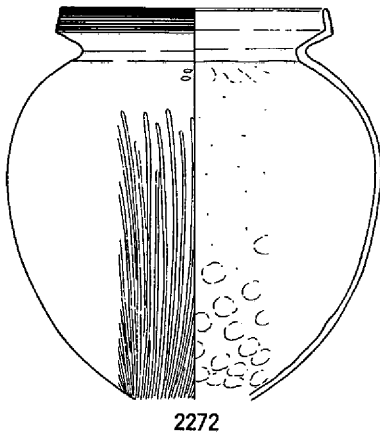
2271



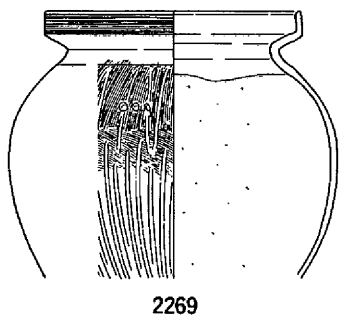
2275



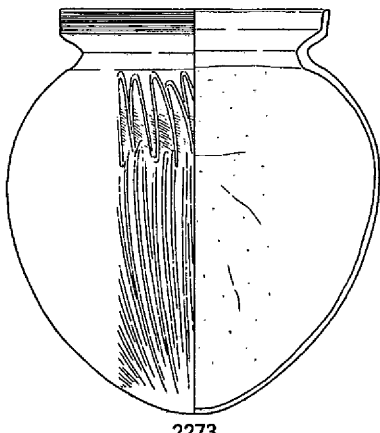
2268



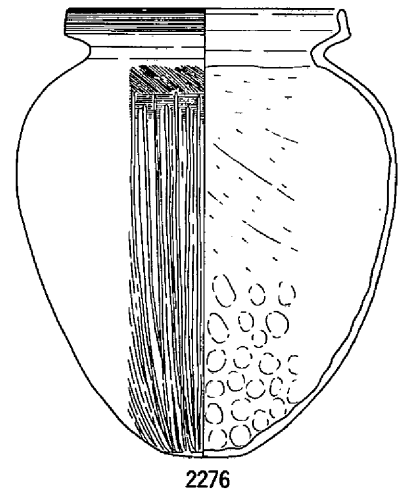
2272



2269

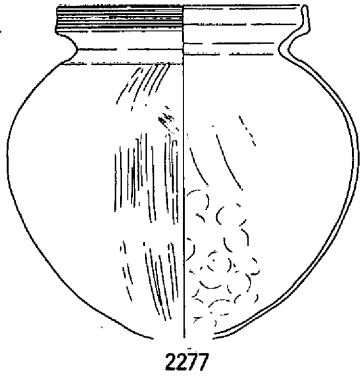


2273

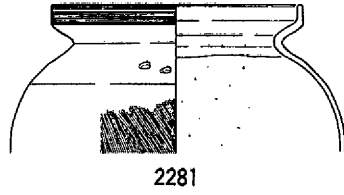


2276

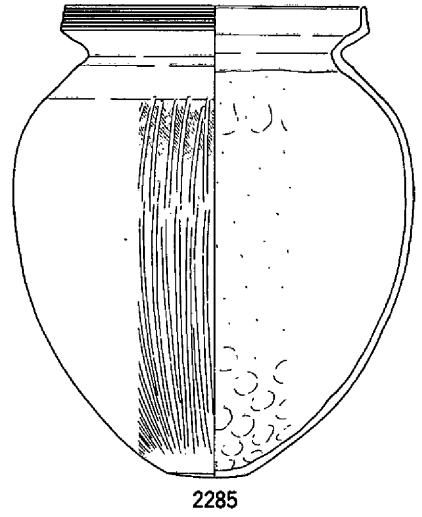




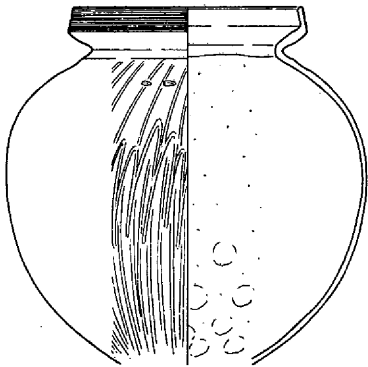
2277



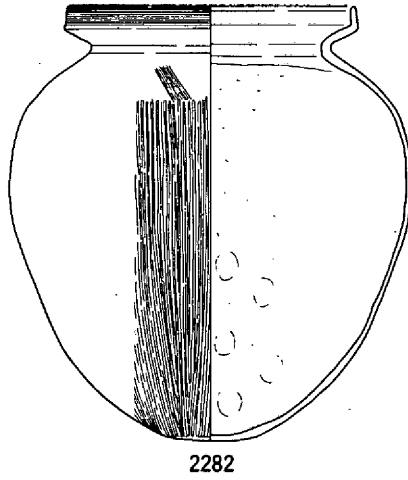
2281



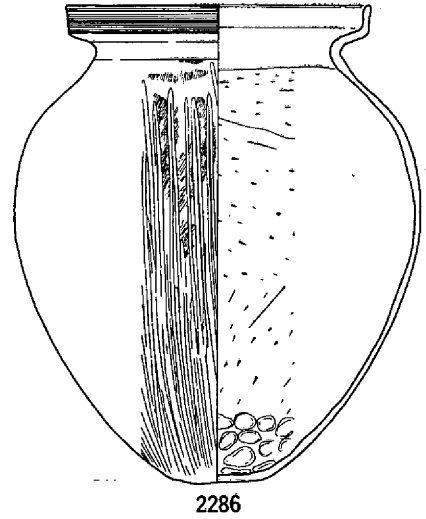
2285



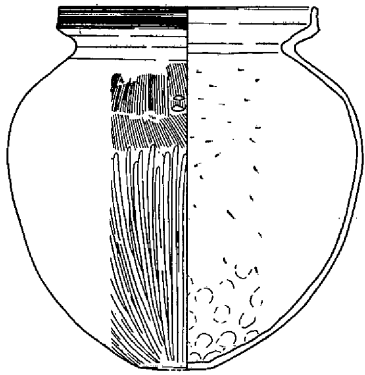
2278



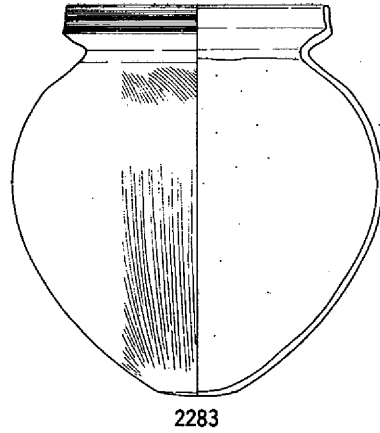
2282



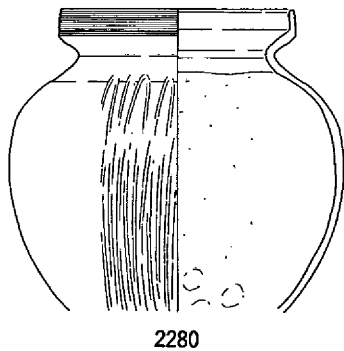
2286



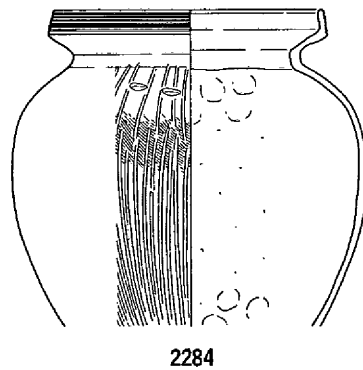
2279



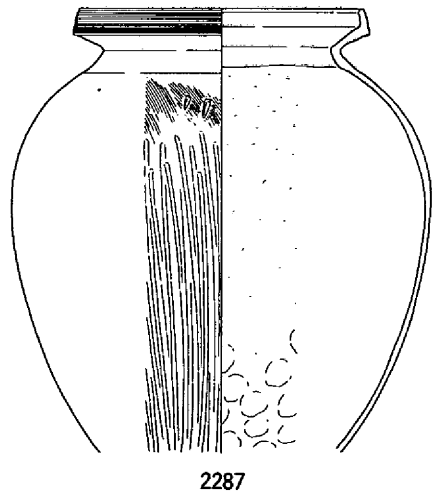
2283



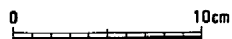
2280



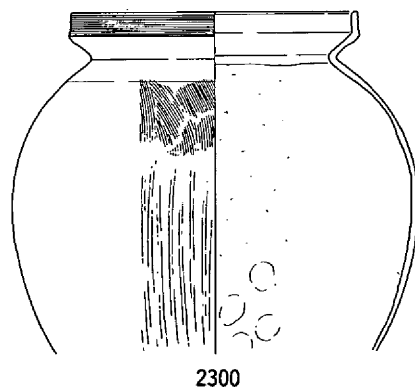
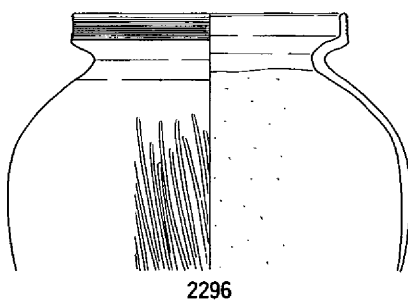
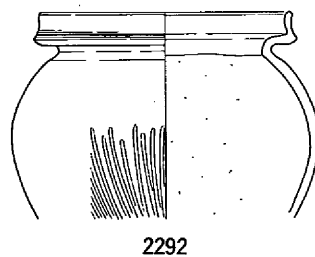
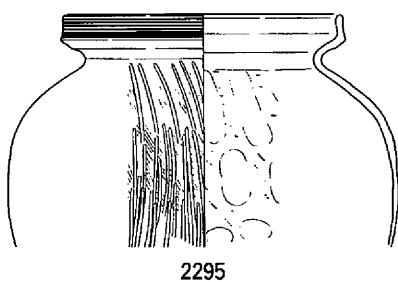
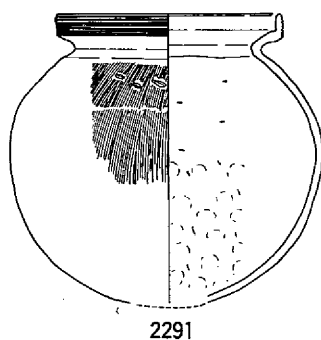
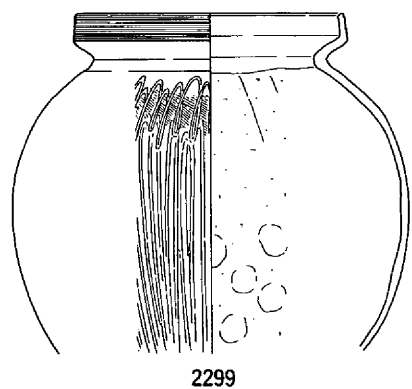
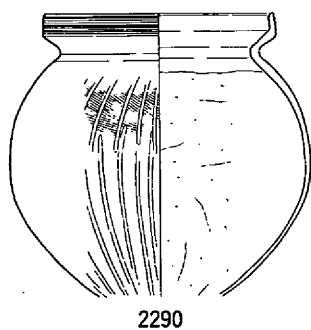
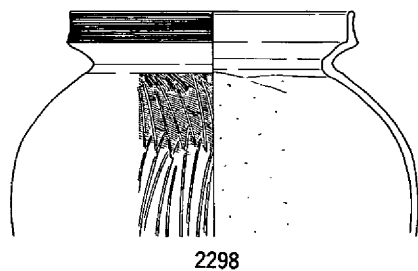
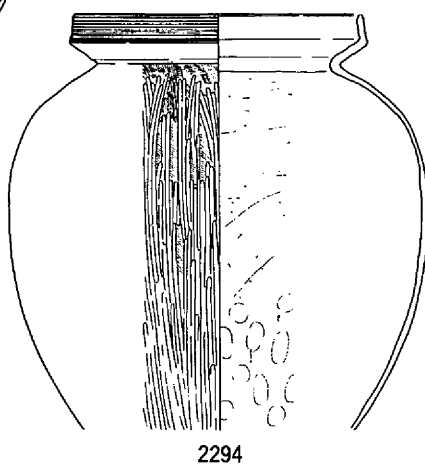
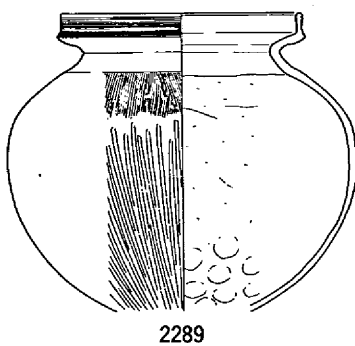
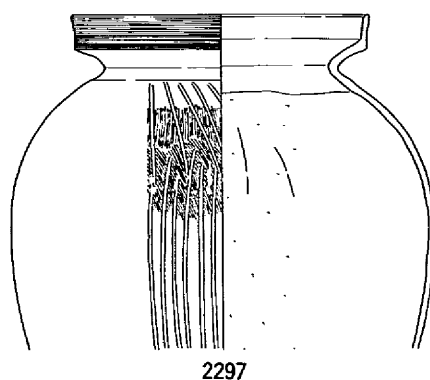
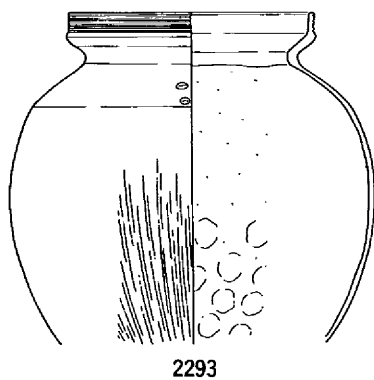
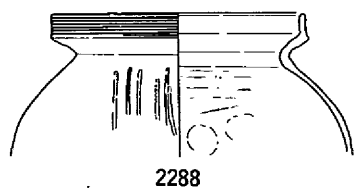
2284



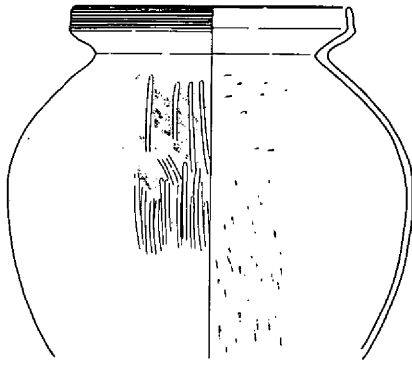
2287



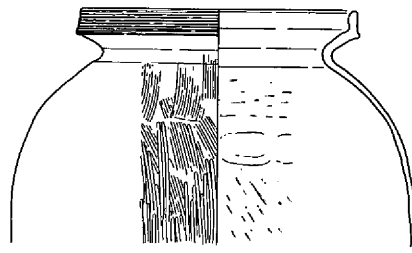
溝-16 2277~2287



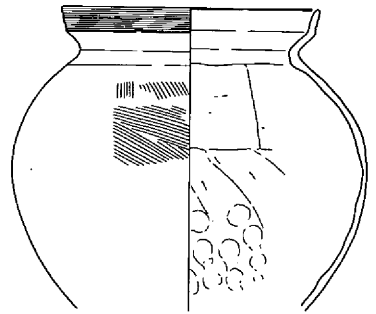
溝一16 2288~2300



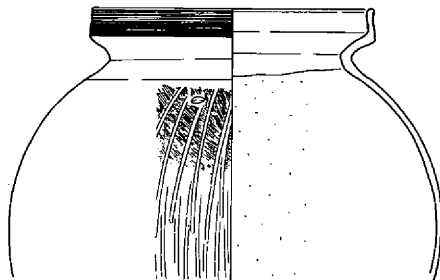
2301



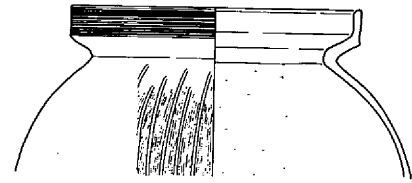
2305



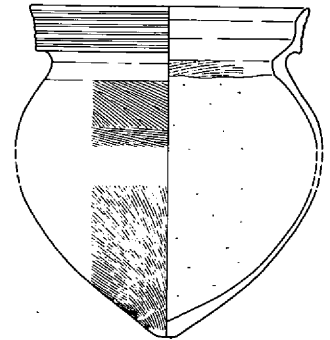
2308



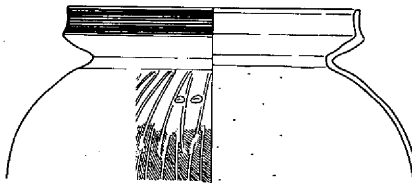
2302



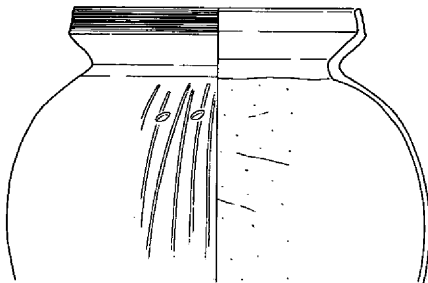
2306



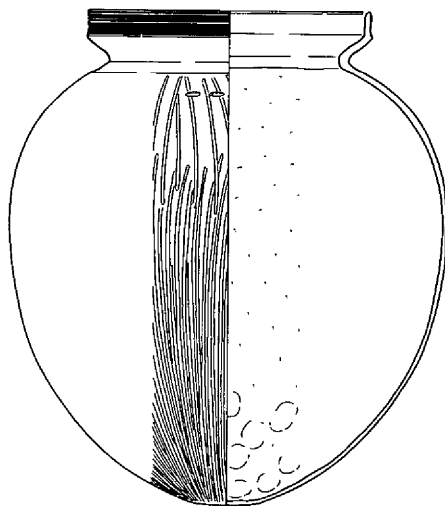
2309



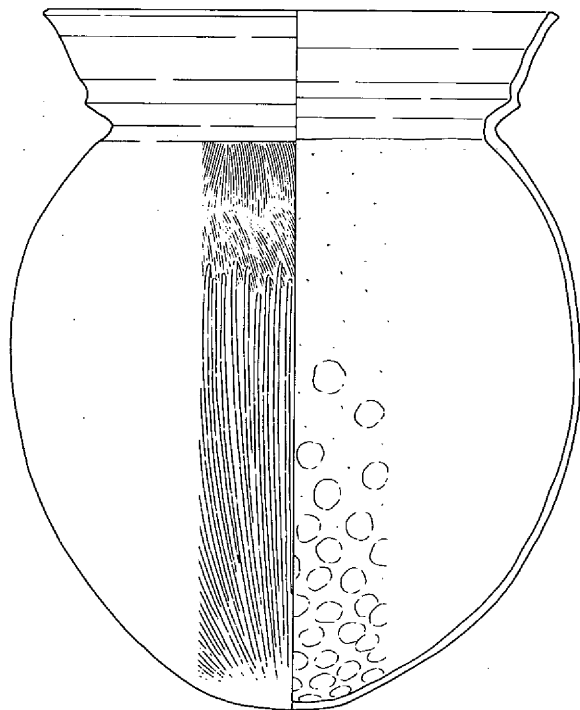
2307



2303



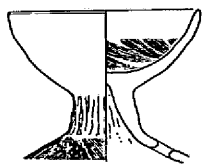
2304



2310



溝一16 2301~2310



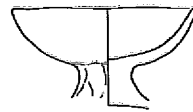
2311



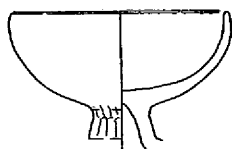
2312



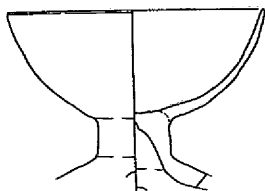
2313



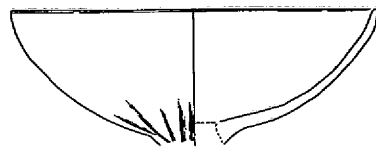
2314



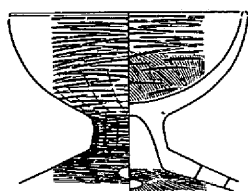
2315



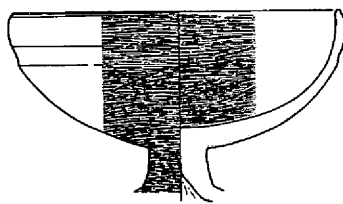
2316



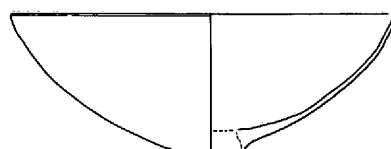
2319



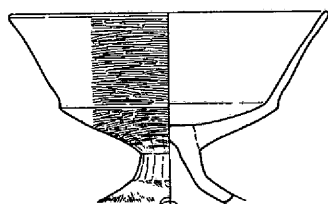
2317



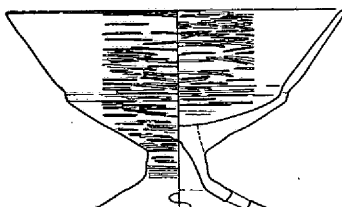
2318



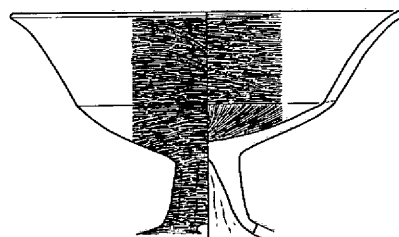
2320



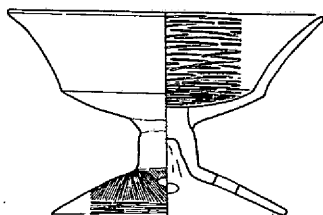
2321



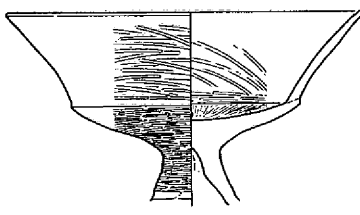
2322



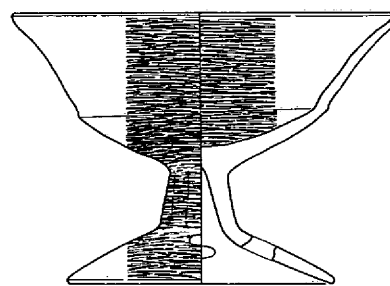
2325



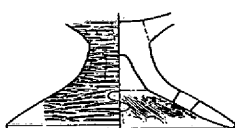
2323



2324



2326



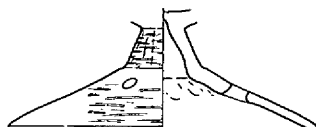
2328



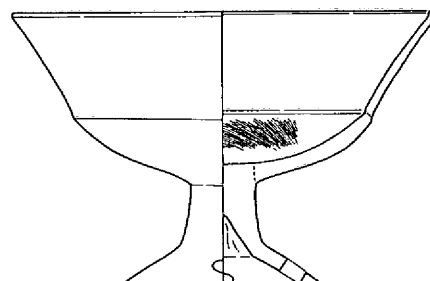
2330



2329

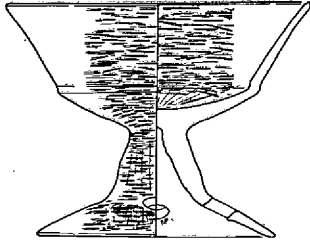


2331

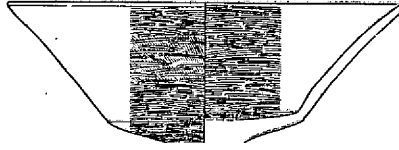


2327





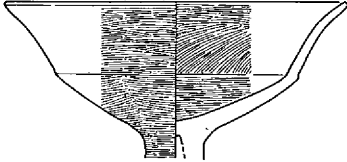
2332



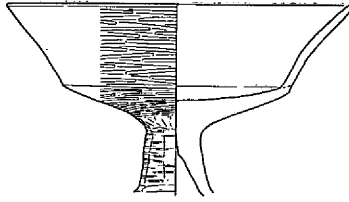
2336



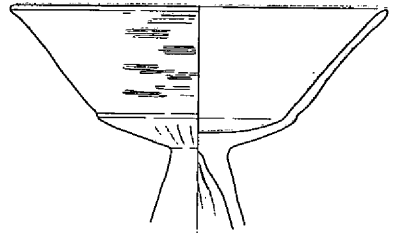
2339



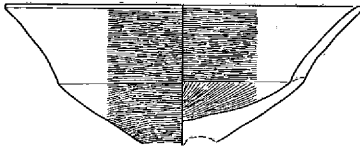
2333



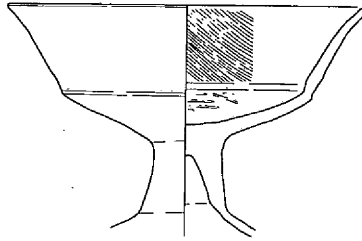
2337



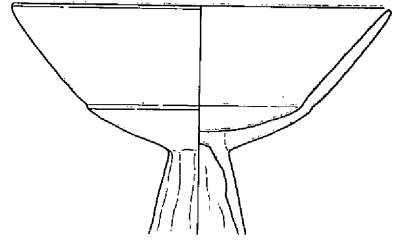
2340



2334



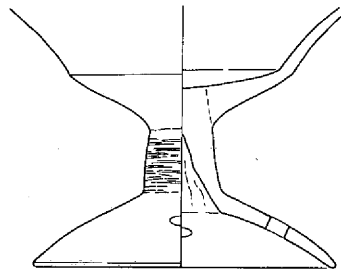
2338



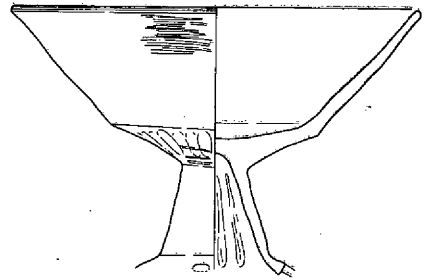
2341



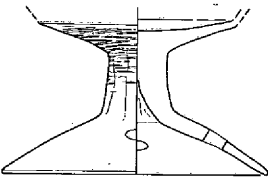
2335



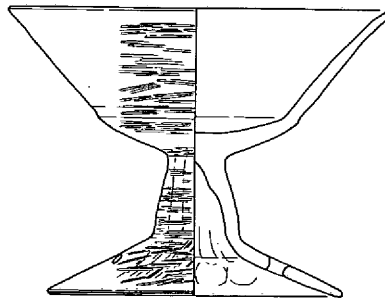
2342



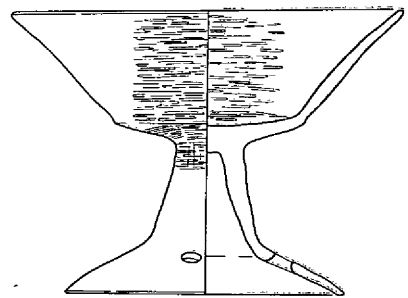
2343



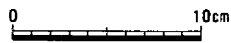
2344

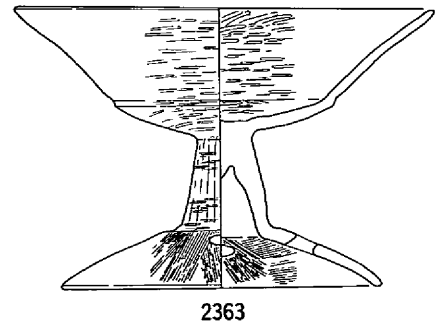
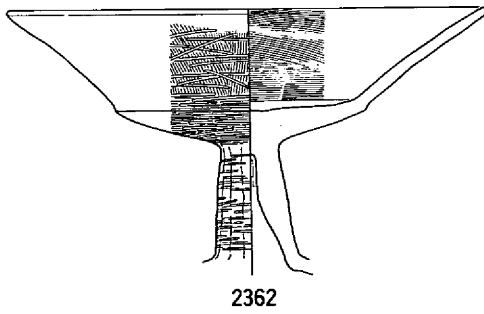
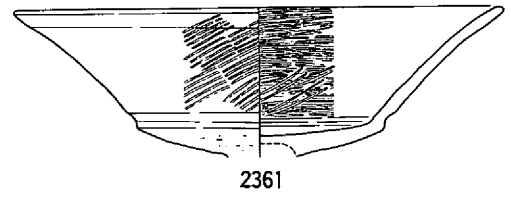
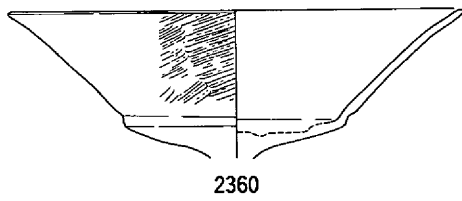
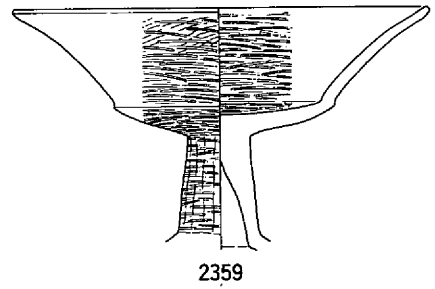
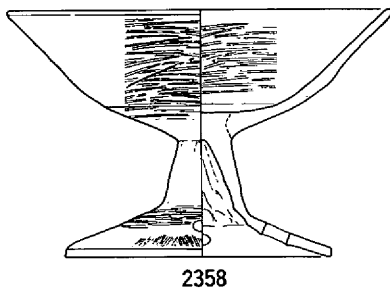
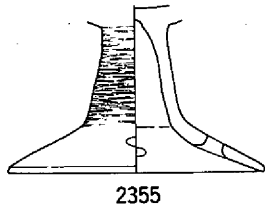
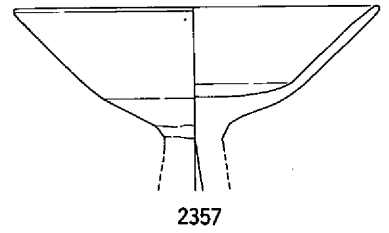
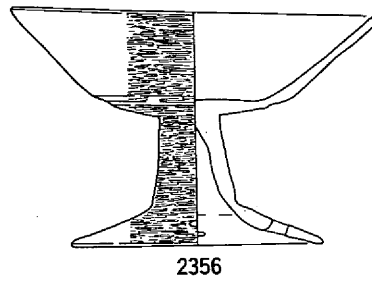
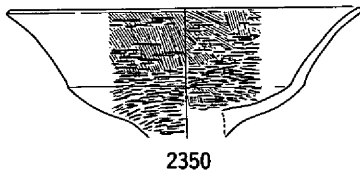
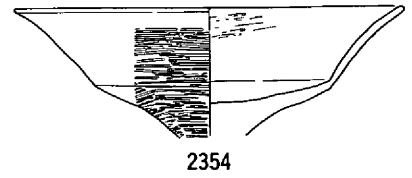
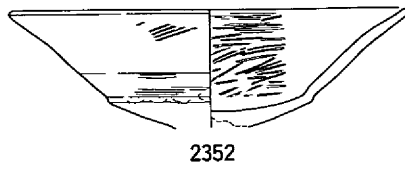
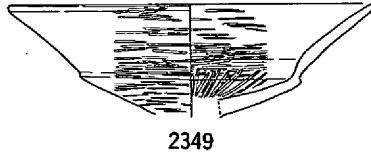
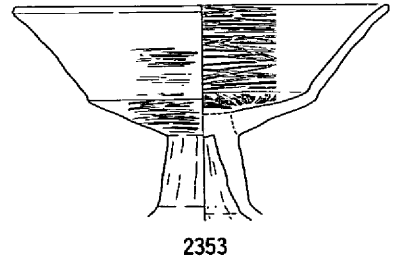
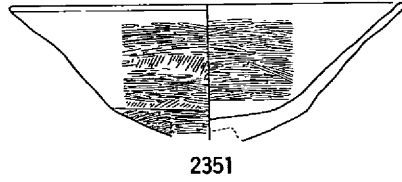
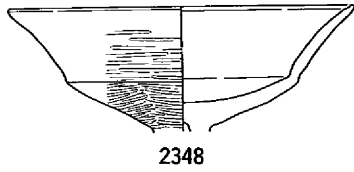


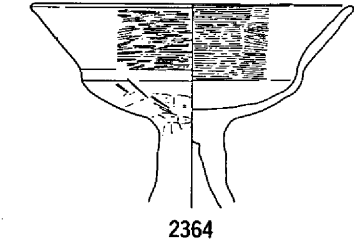
2346



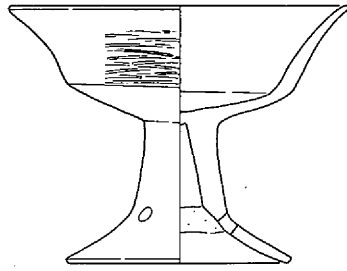
2347



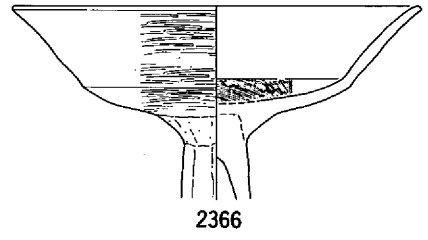




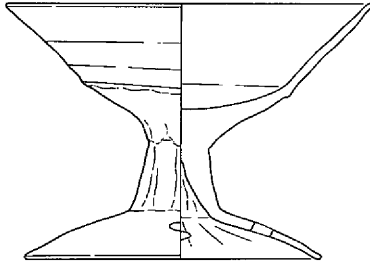
2364



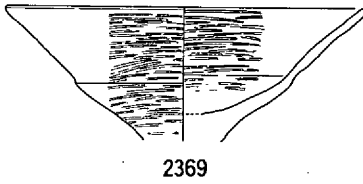
2365



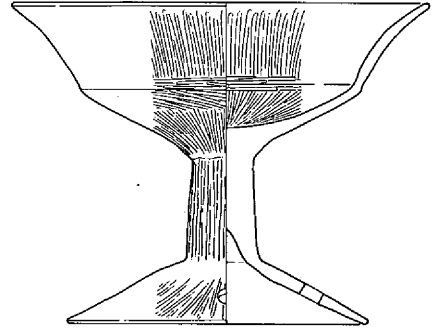
2366



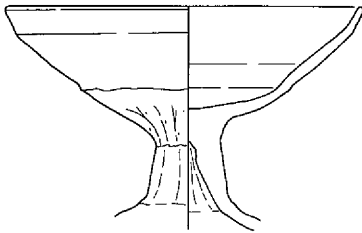
2371



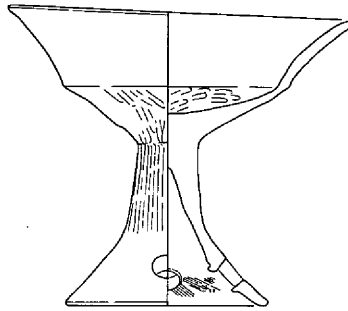
2369



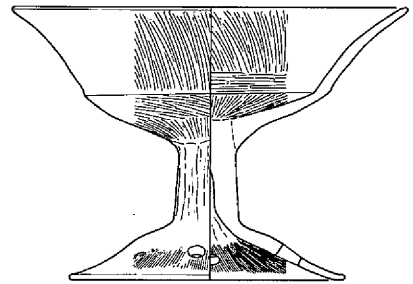
2367



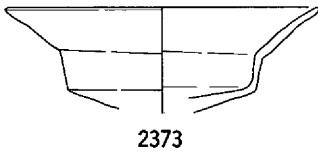
2372



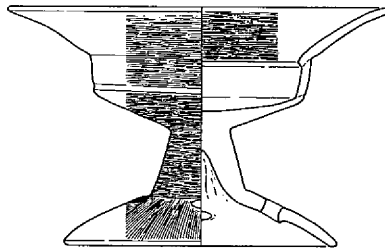
2370



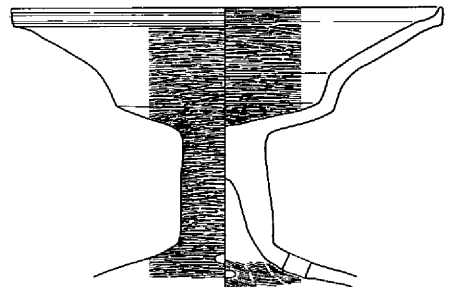
2368



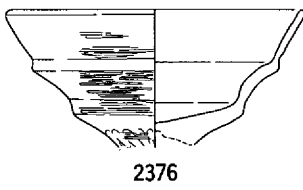
2373



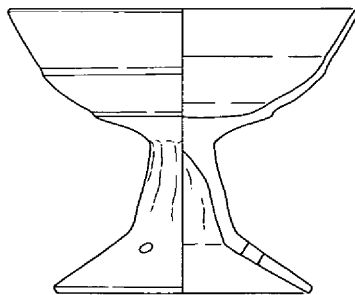
2374



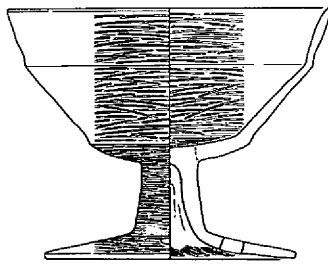
2375



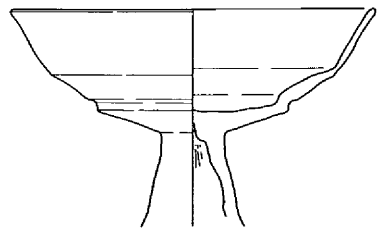
2376



2378

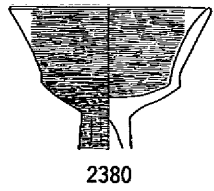


2377

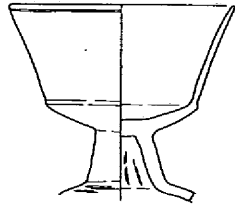


2379

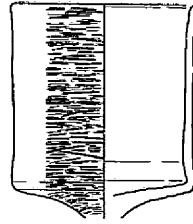




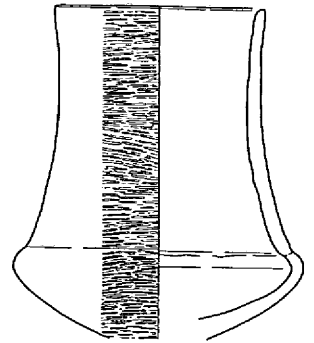
2380



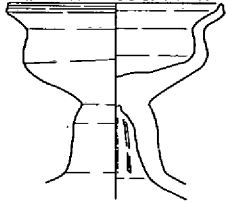
2381



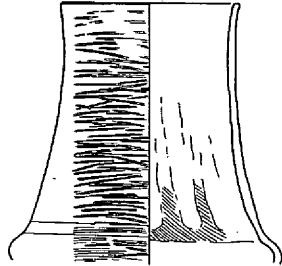
2382



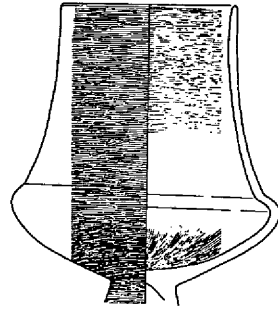
2383



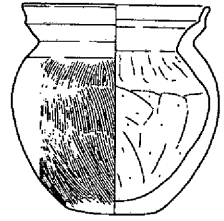
2386



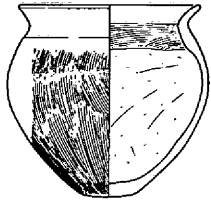
2385



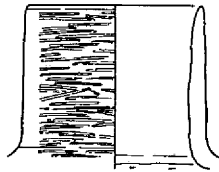
2384



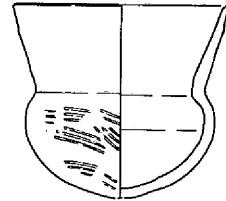
2387



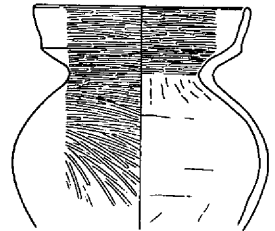
2387



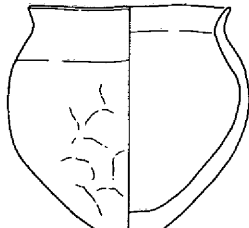
2391



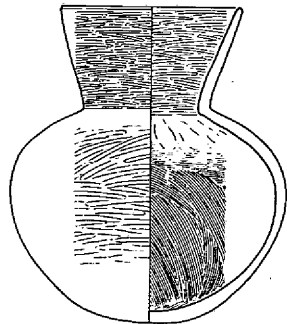
2396



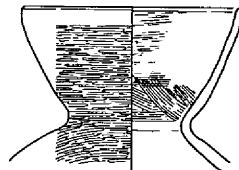
2398



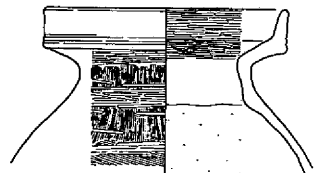
2388



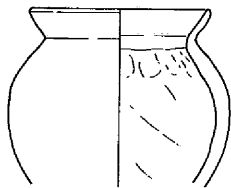
2392



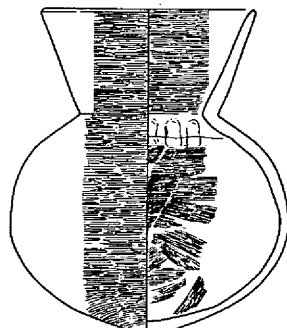
2394



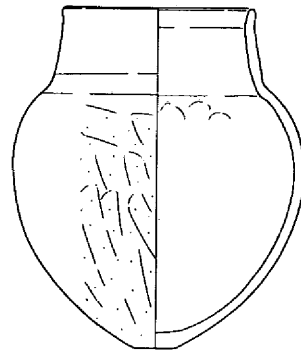
2399



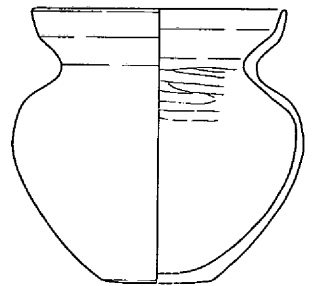
2389



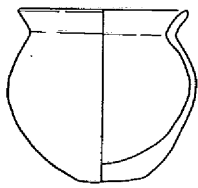
2393



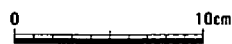
2395



2400

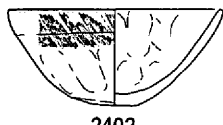


2390

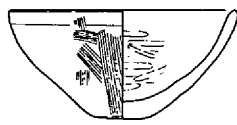




2401



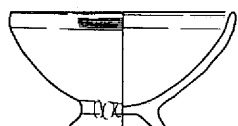
2402



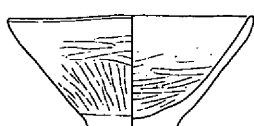
2403



2404



2407



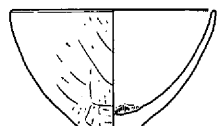
2409



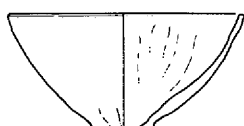
2406



2405



2410



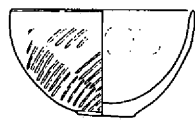
2411



2412



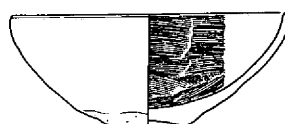
2408



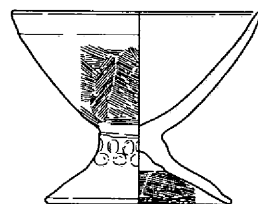
2414



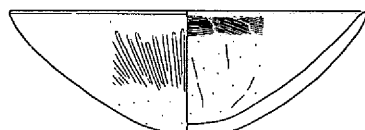
2415



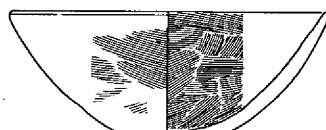
2416



2413



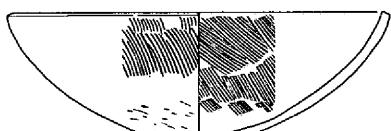
2417



2419



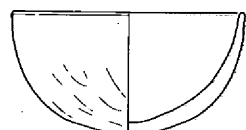
2421



2418



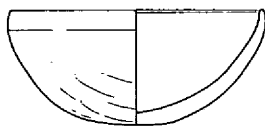
2420



2422



2423



2424

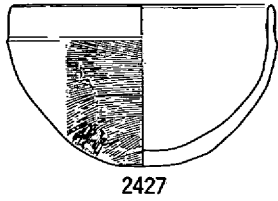


2425

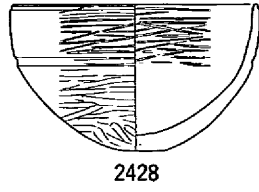


2426

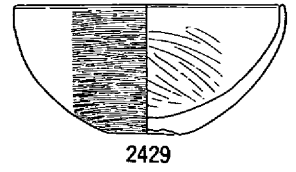




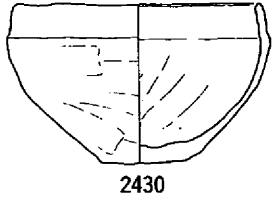
2427



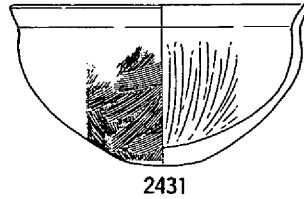
2428



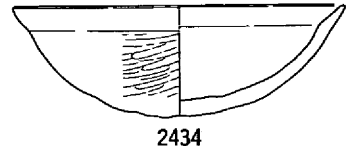
2429



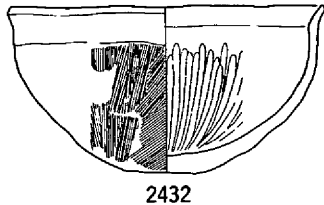
2430



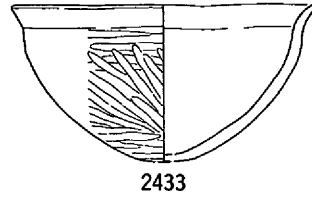
2431



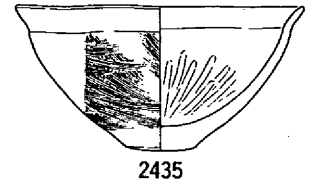
2434



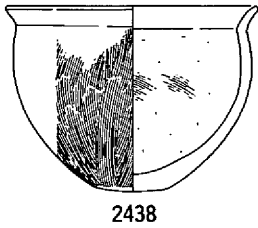
2432



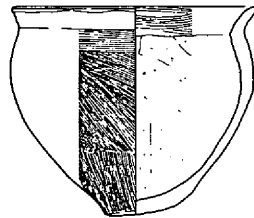
2433



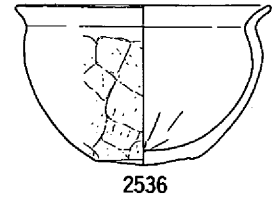
2435



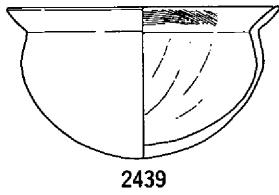
2438



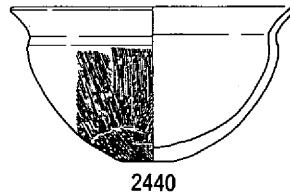
2437



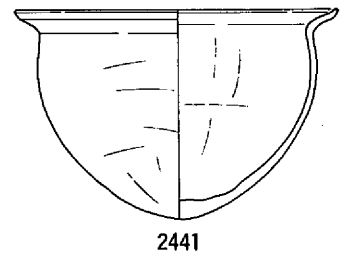
2536



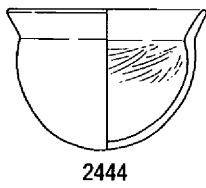
2439



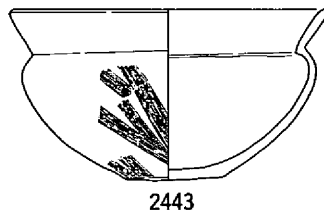
2440



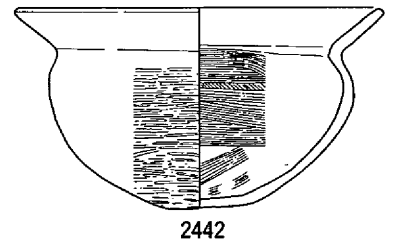
2441



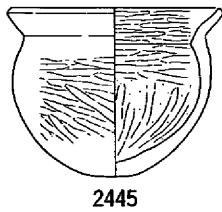
2444



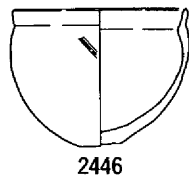
2443



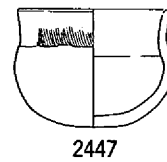
2442



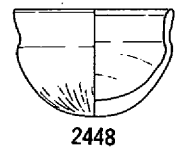
2445



2446

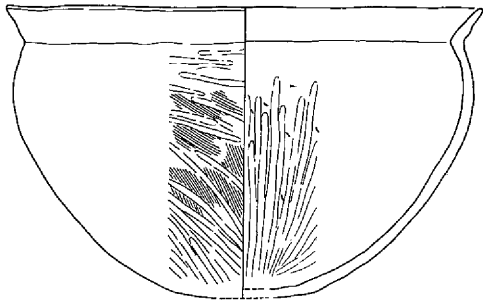


2447

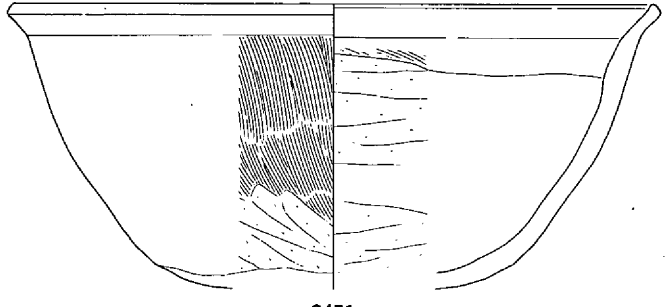


2448

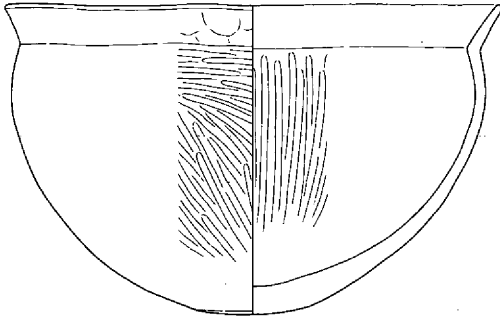




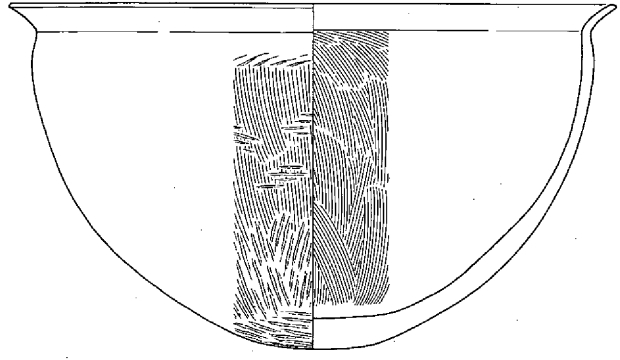
2449



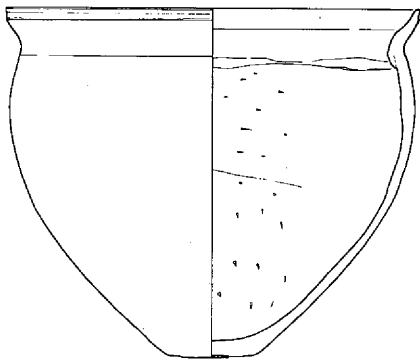
2451



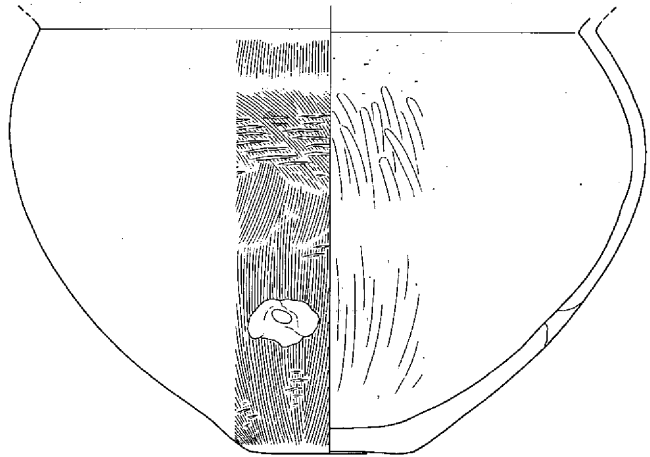
2450



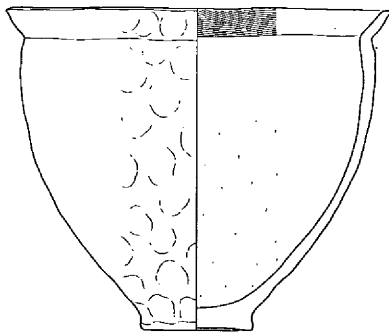
2452



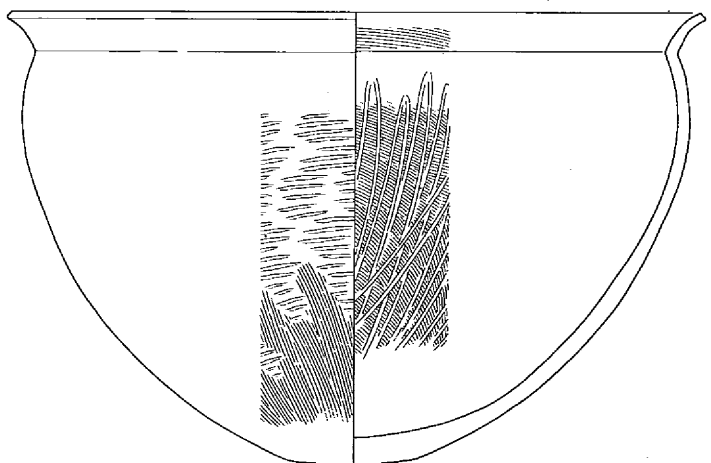
2455



2453

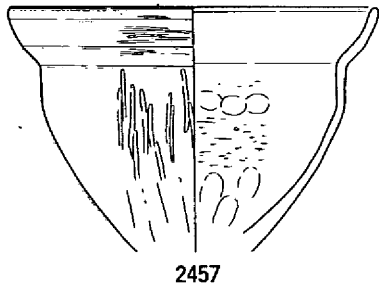


2456

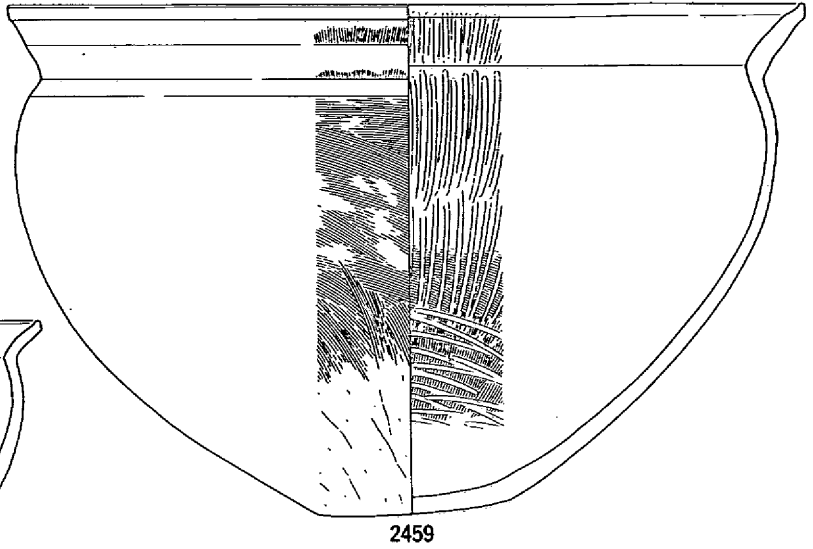


2454

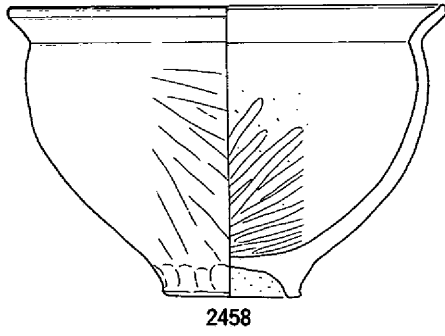




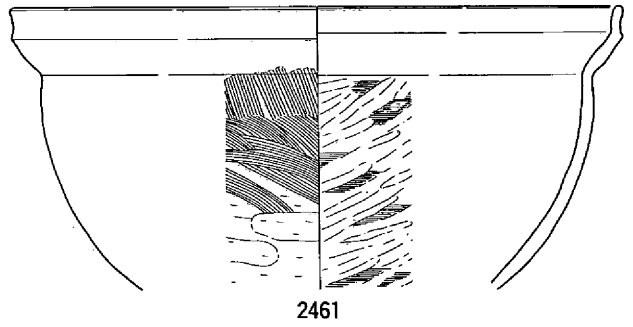
2457



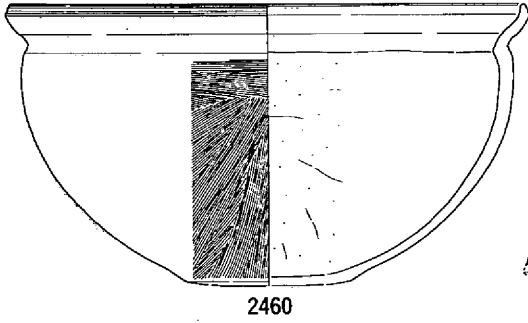
2459



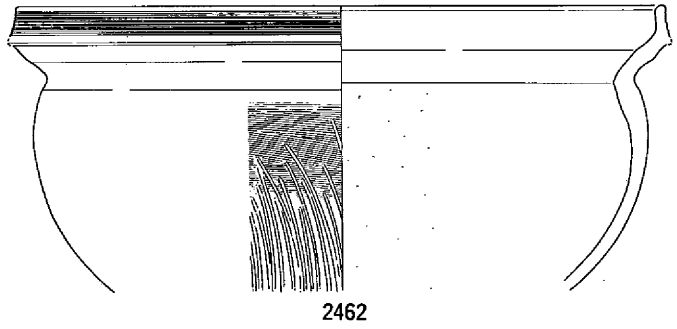
2458



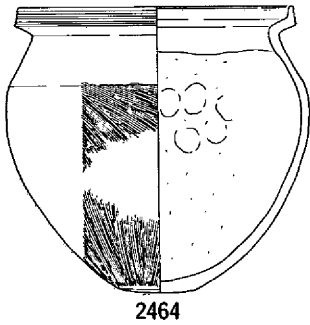
2461



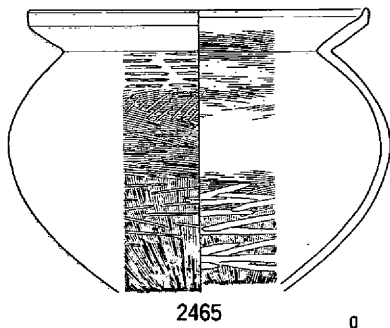
2460



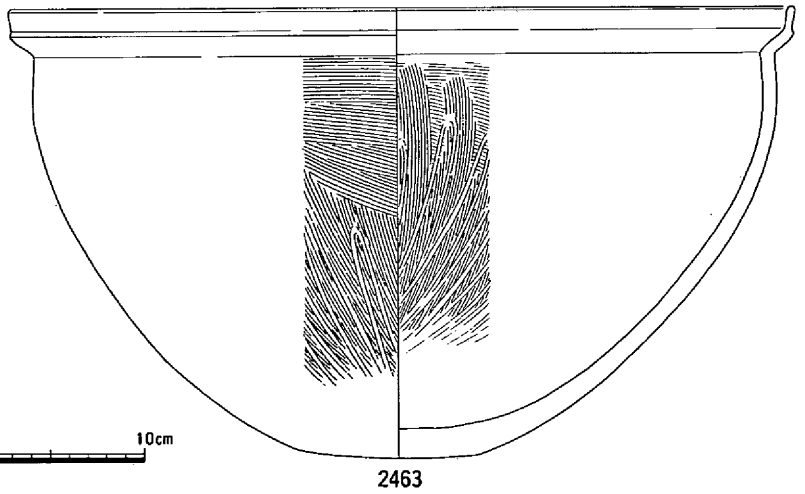
2462



2464

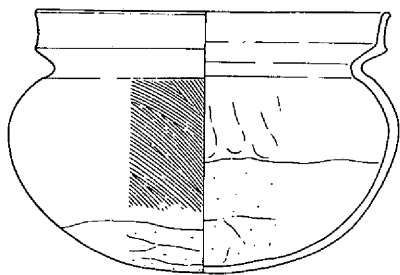


2465

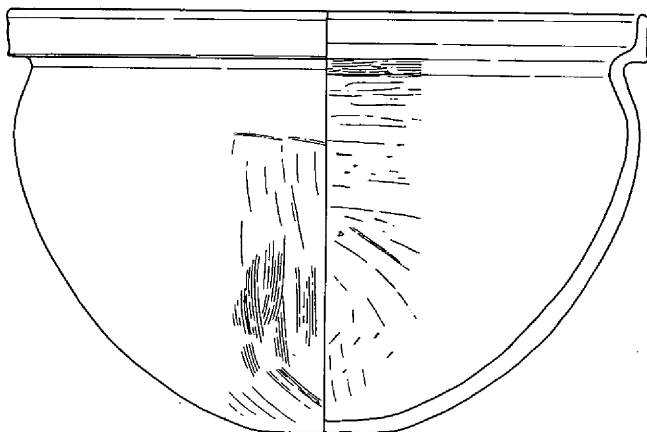


2463

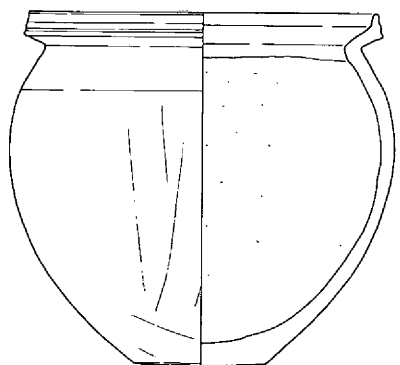




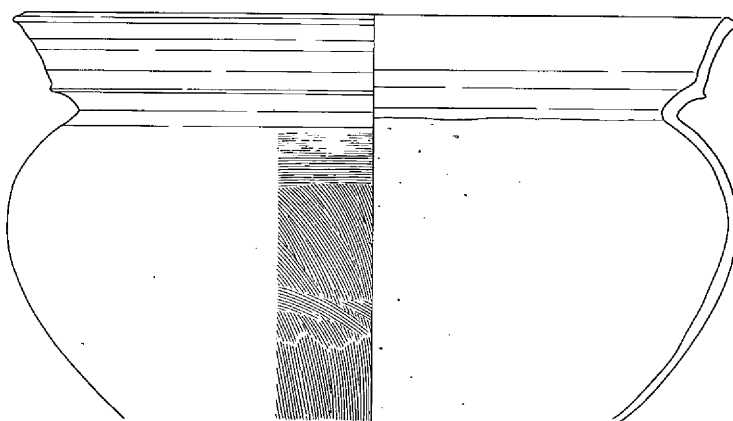
2466



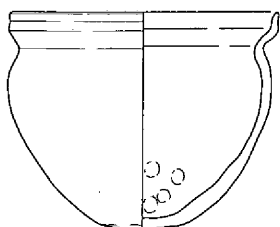
2467



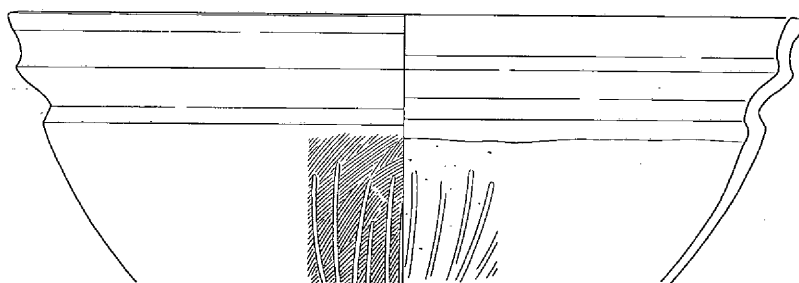
2468



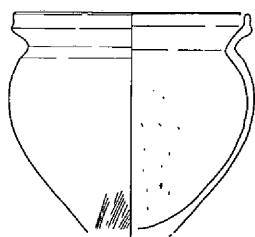
2472



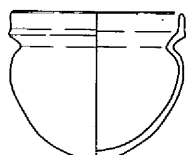
2469



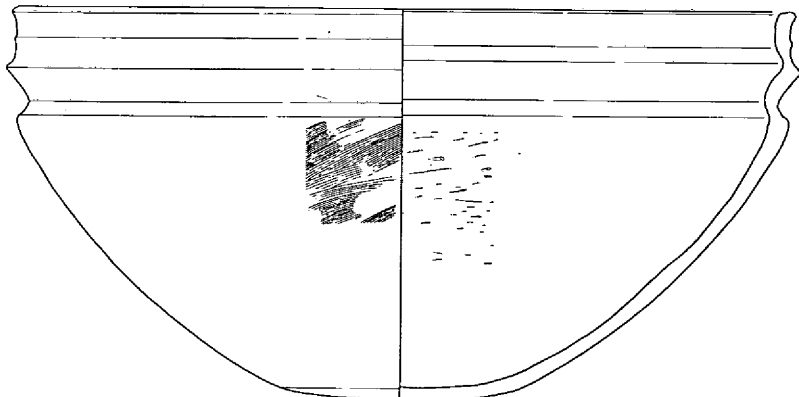
2473



2470

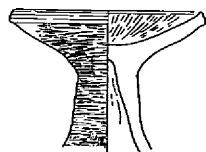


2471

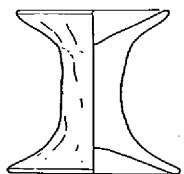


2474

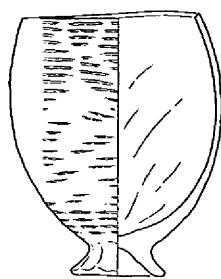




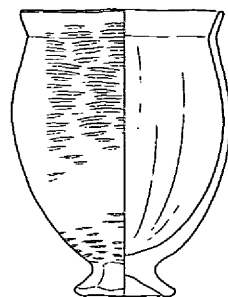
2479



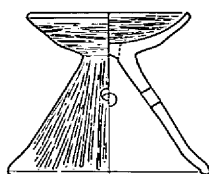
2478



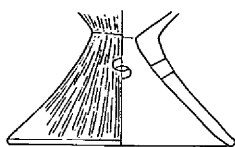
2476



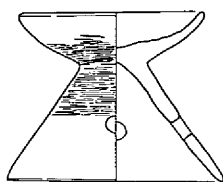
2477



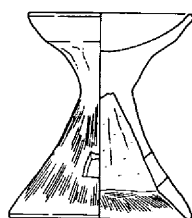
2480



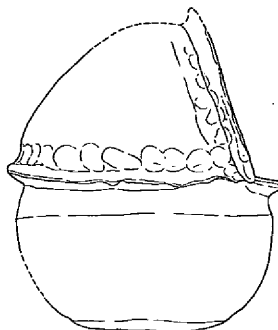
2486



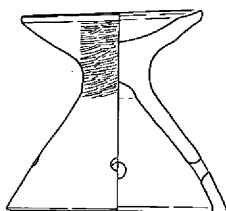
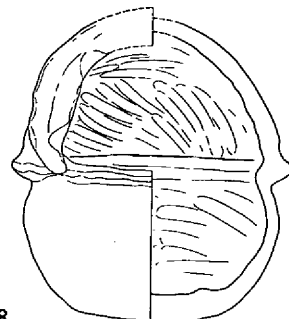
2481



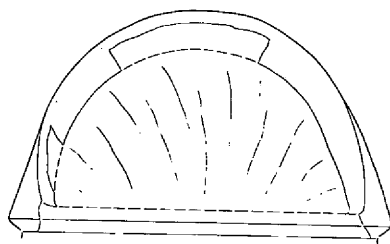
2484



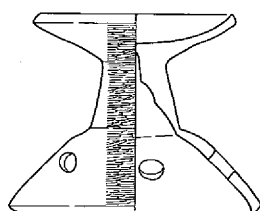
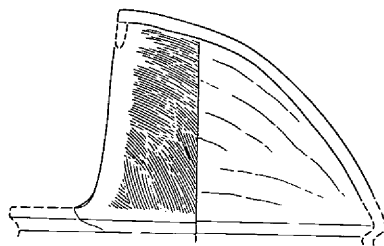
2488



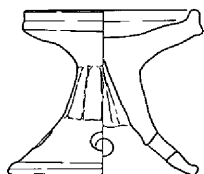
2482



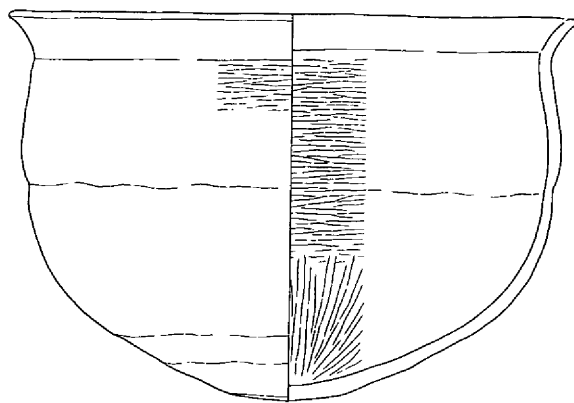
2489



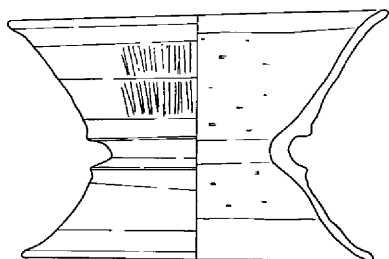
2483



2485

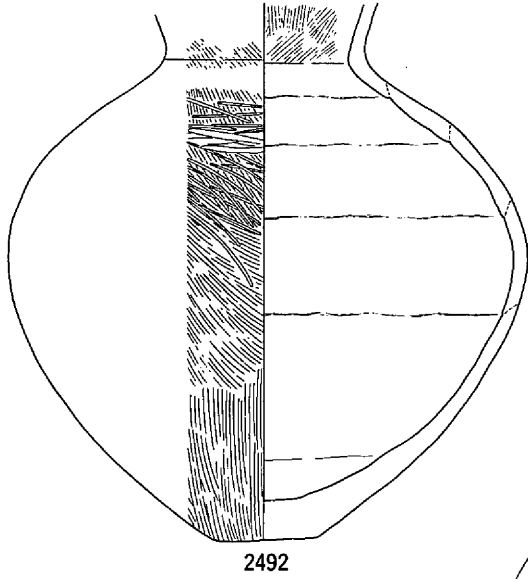


2475

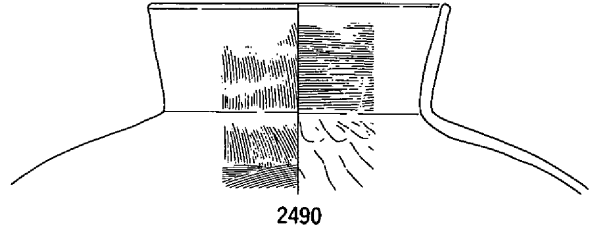


2487

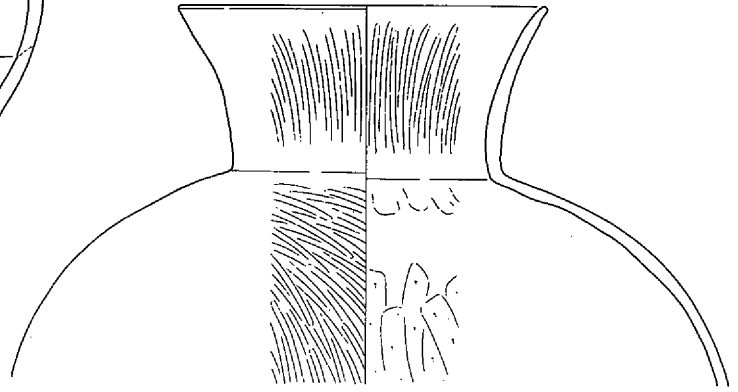




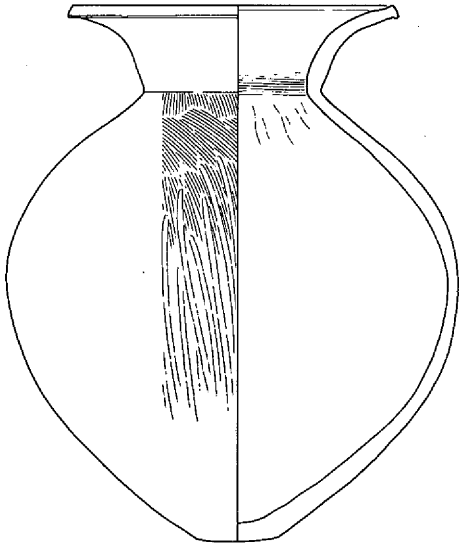
2492



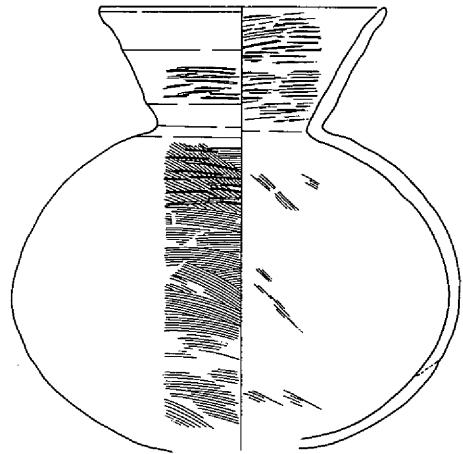
2490



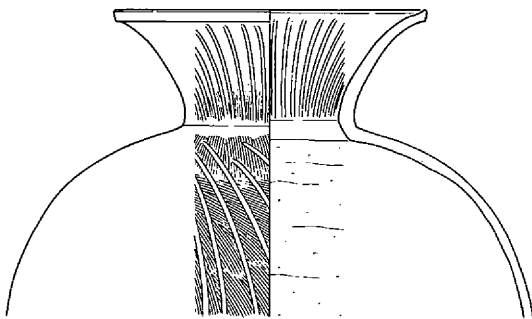
2491



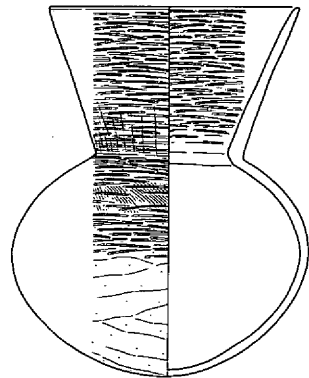
2495



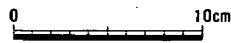
2493

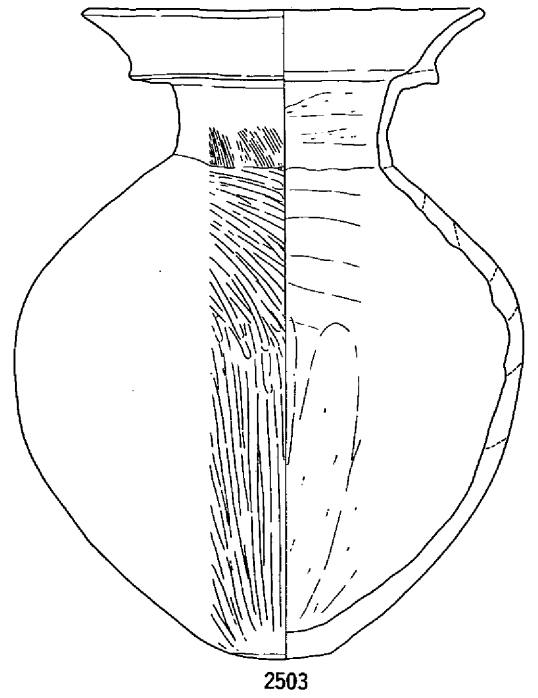
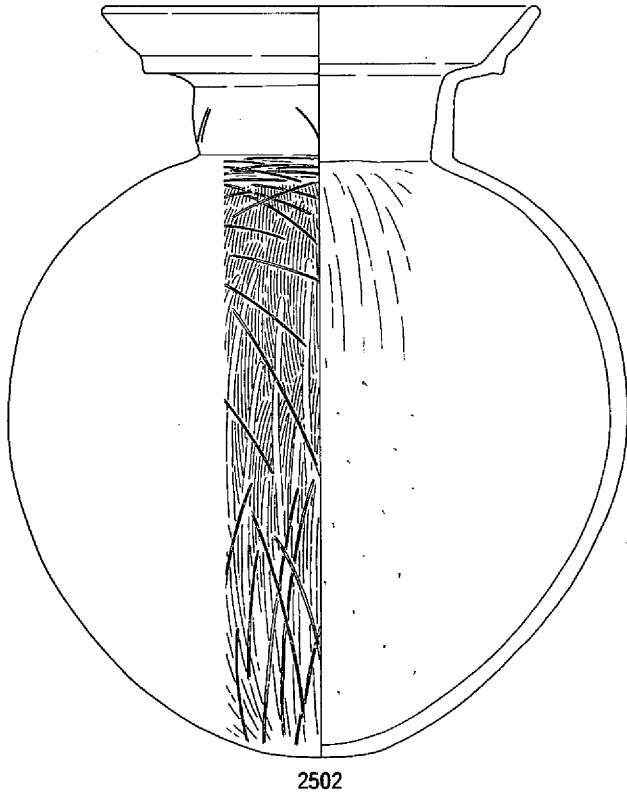
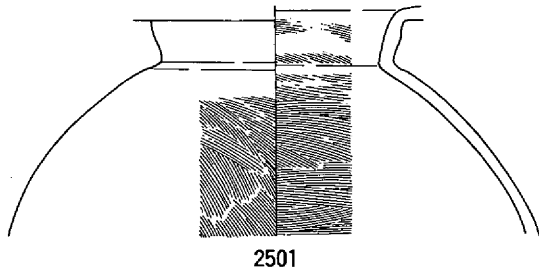
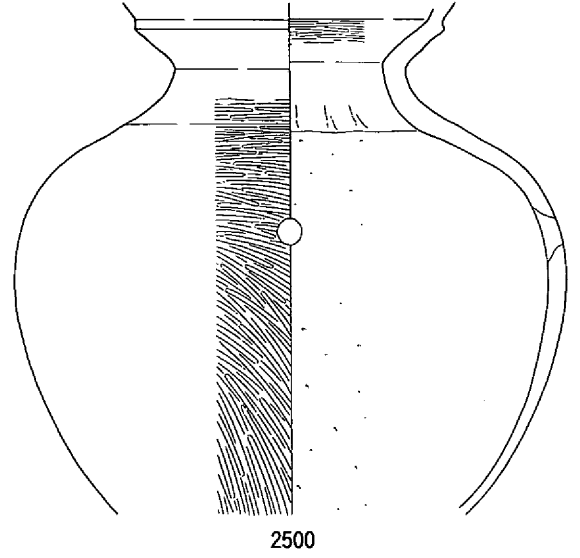
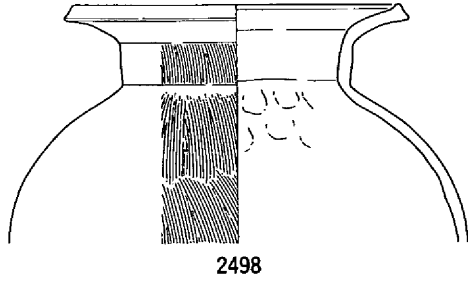
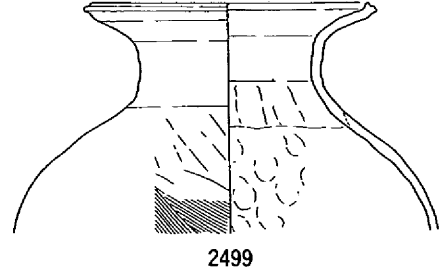
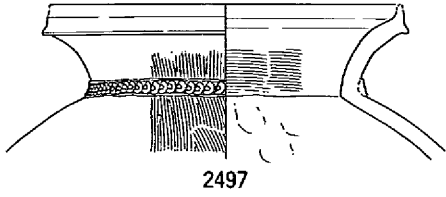


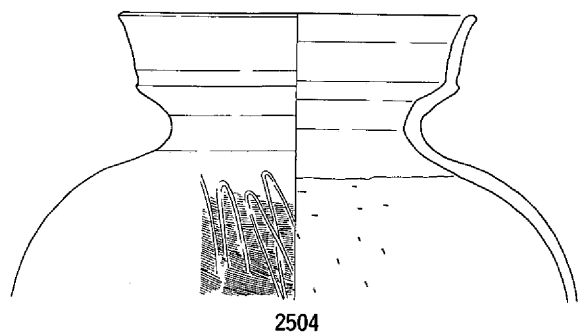
2396



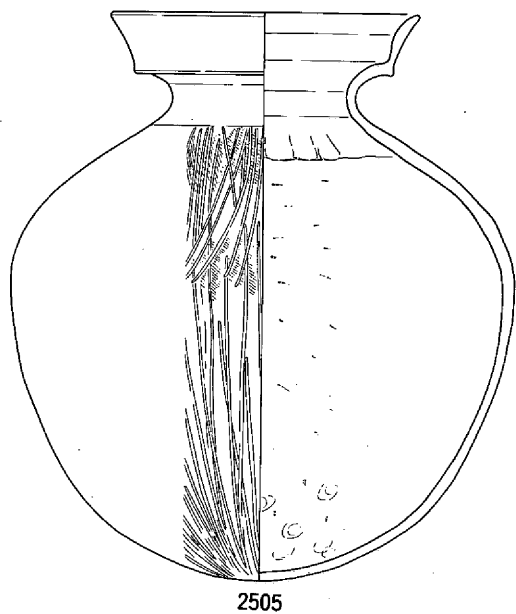
2394



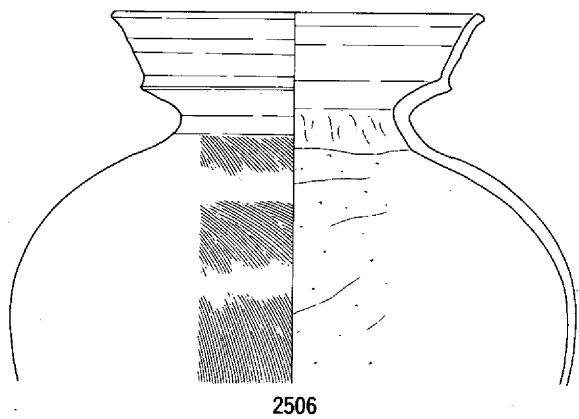




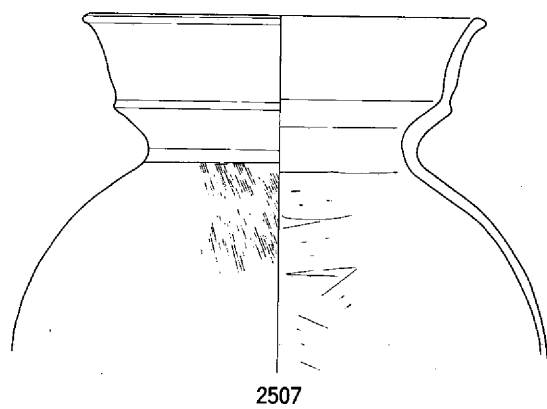
2504



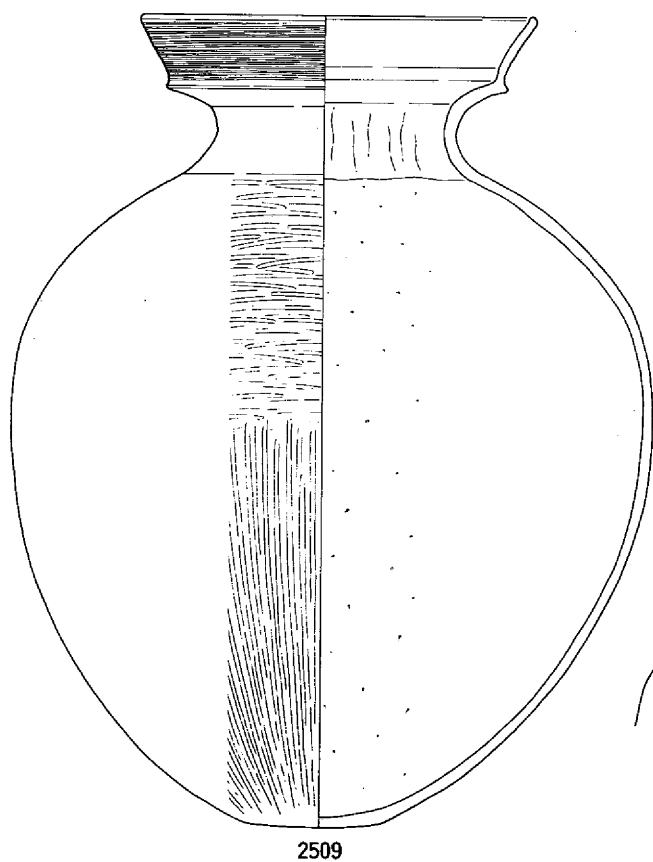
2505



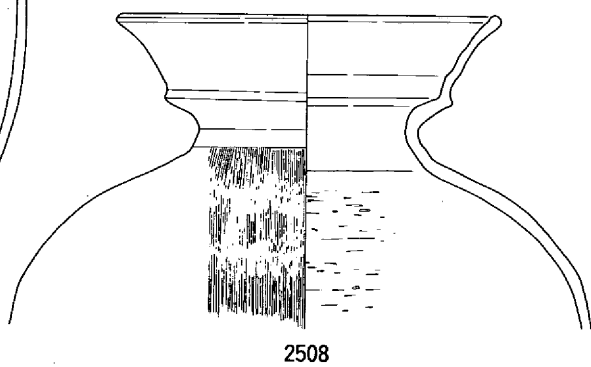
2506



2507

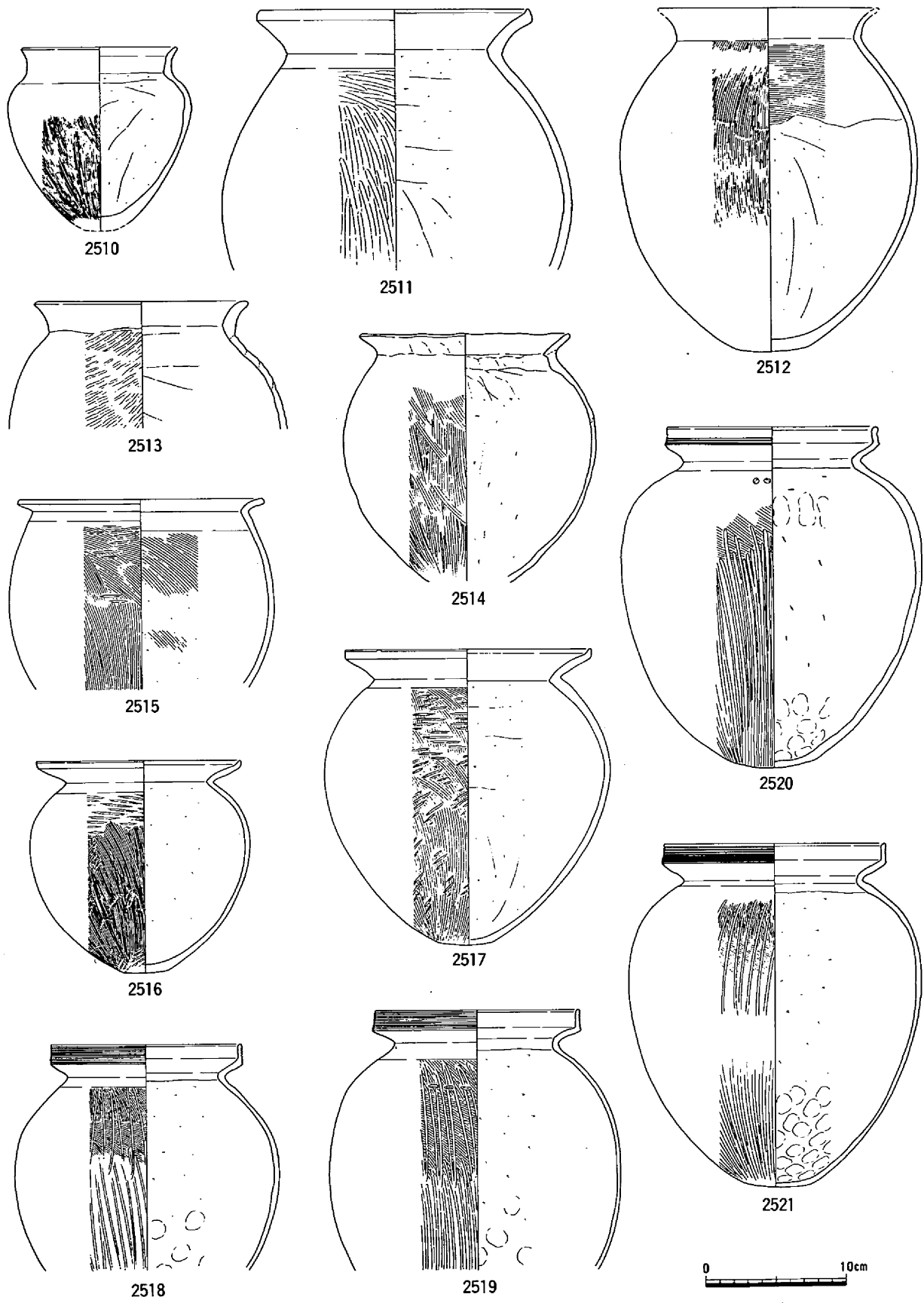


2509

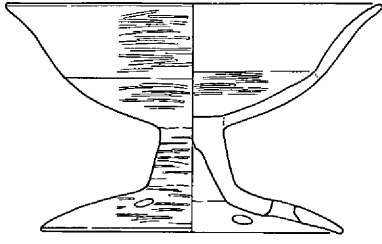


2508

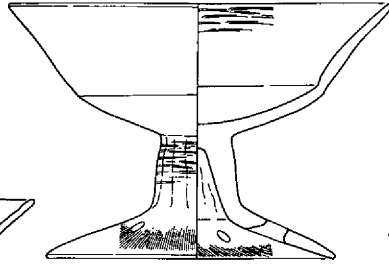




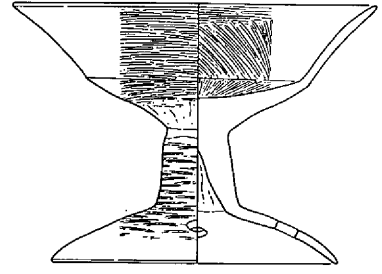
溝一17 2510~2521



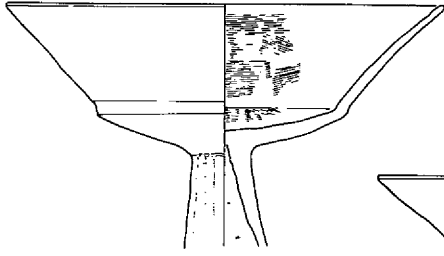
2522



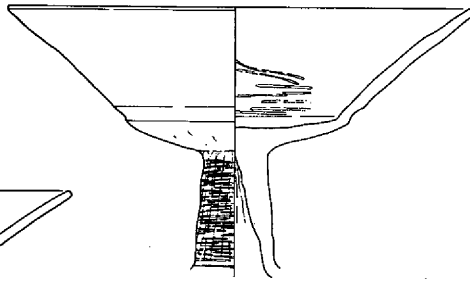
2523



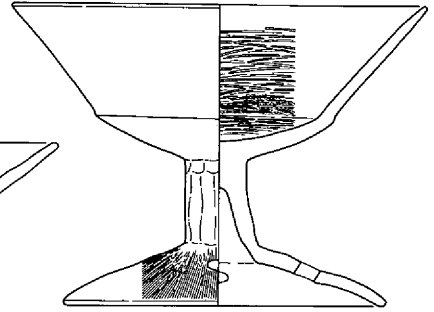
2524



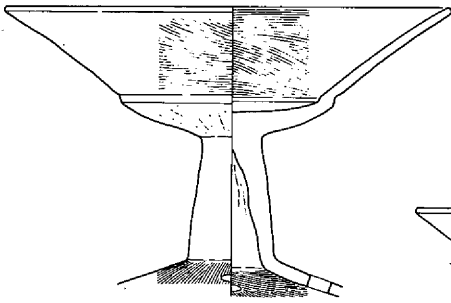
2525



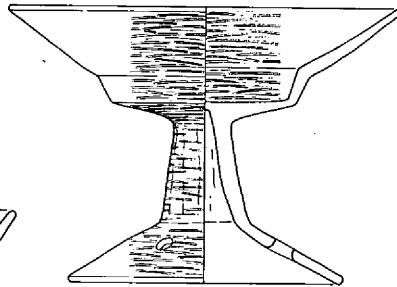
2527



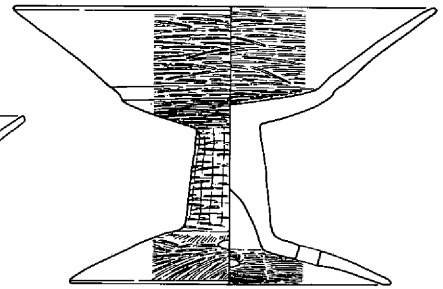
2526



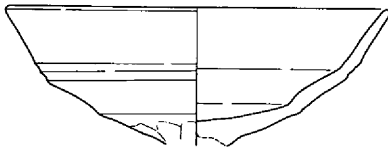
2528



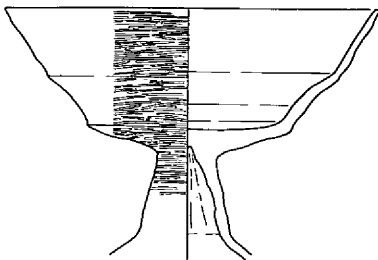
2530



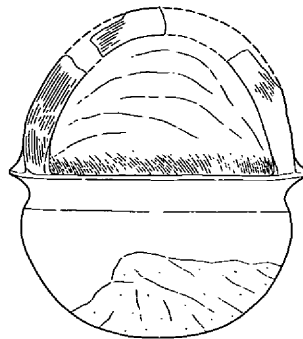
2529



2531

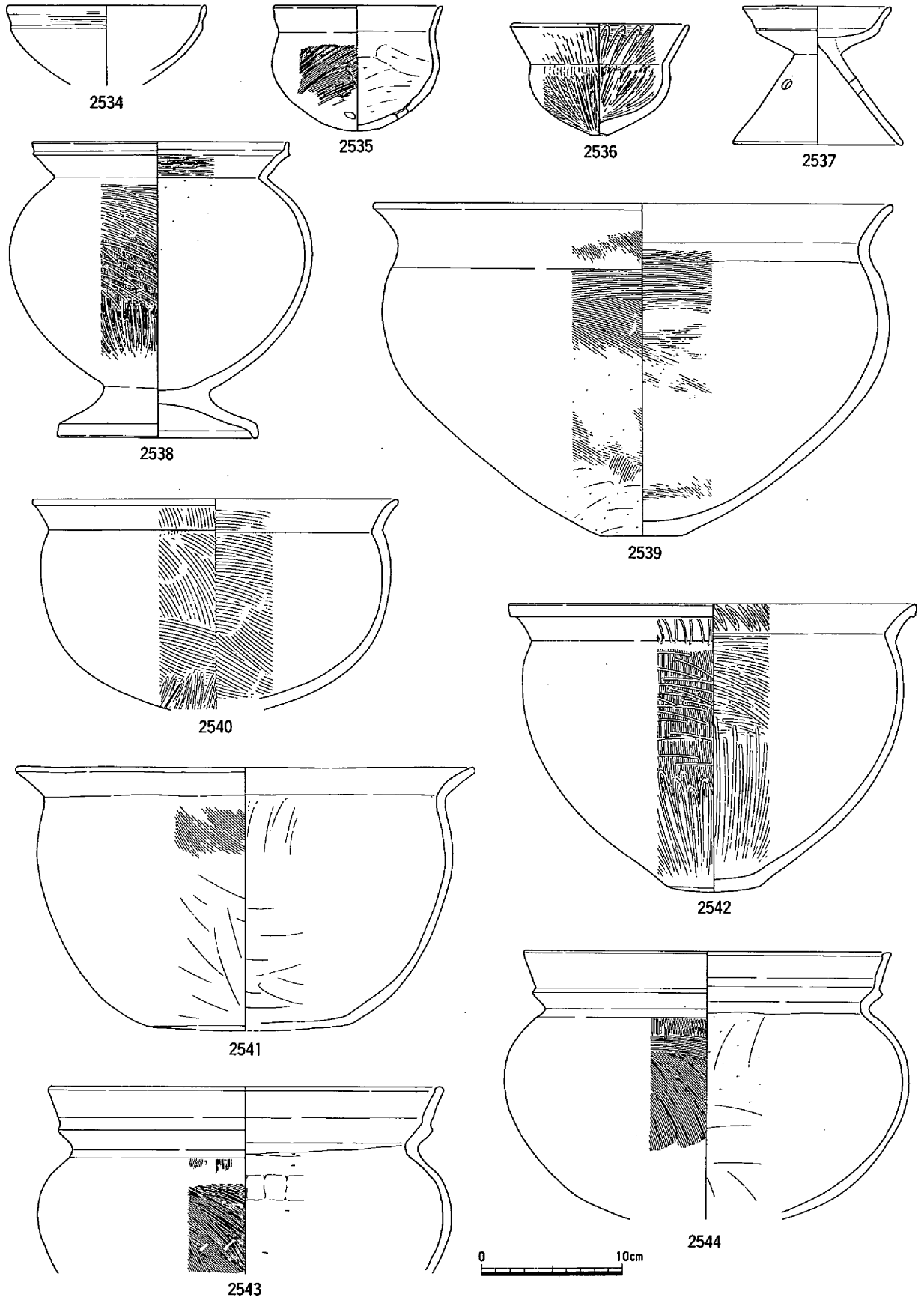


2532

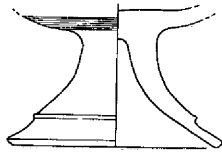


2533





溝一17 2534~2544



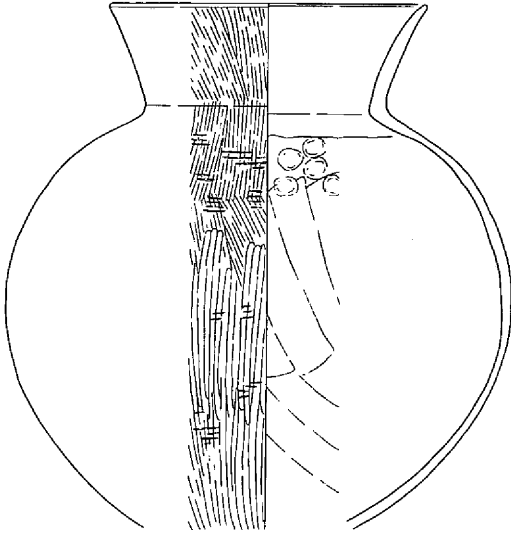
2545



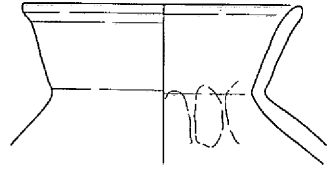
2546



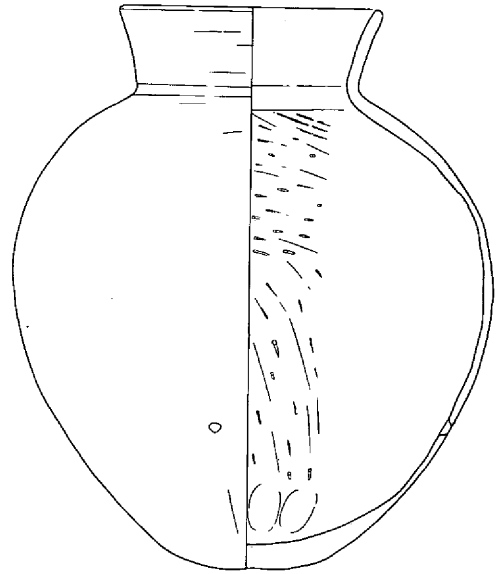
2547



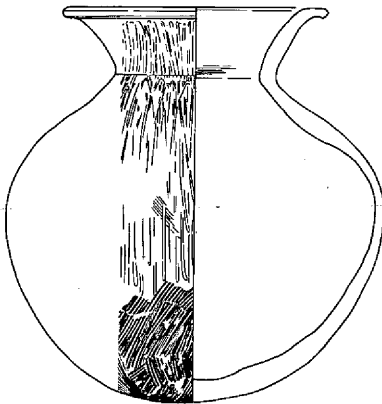
2549



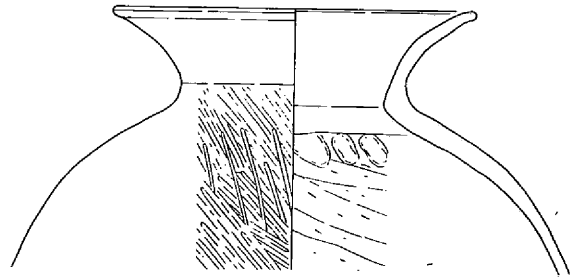
2548



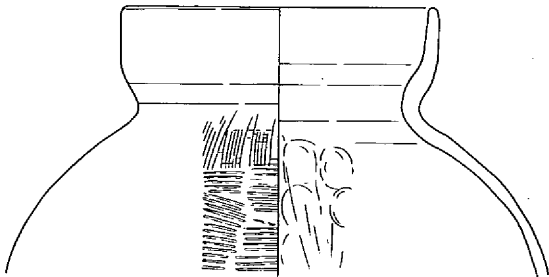
2550



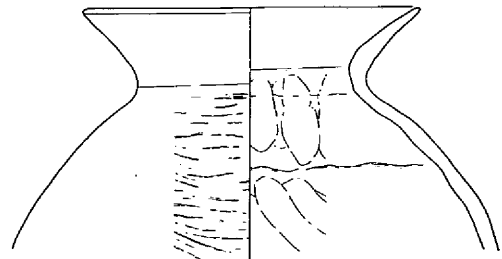
2551



2553



2552



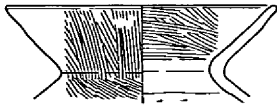
2554



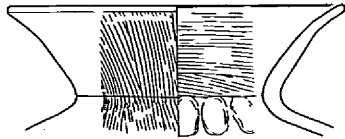
溝—18 2524

溝—23 2546

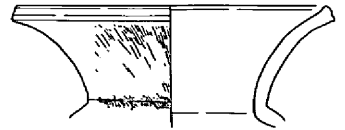
水田 2547~2554



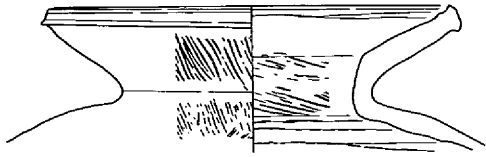
2555



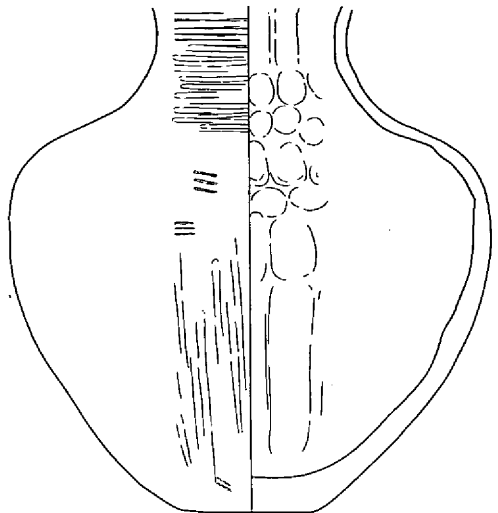
2556



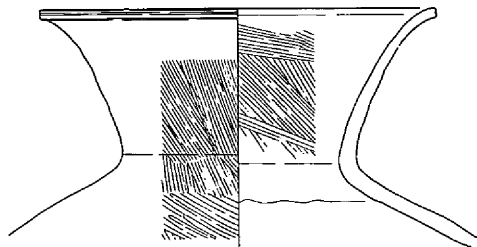
2557



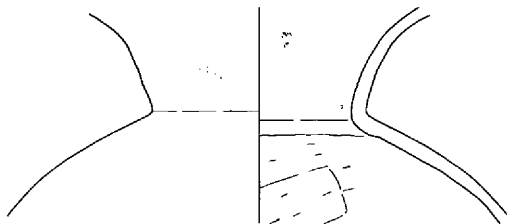
2558



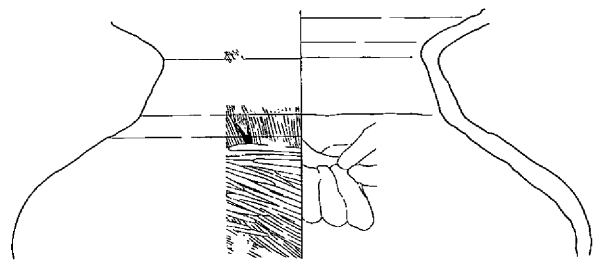
2561



2559



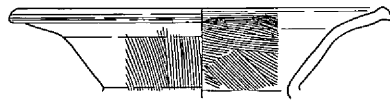
2560



2562



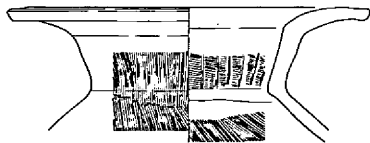
2563



2564



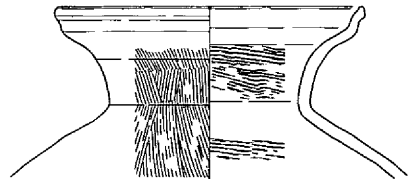
2565



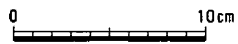
2566



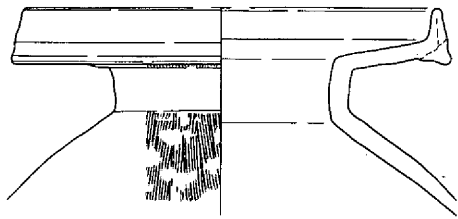
2567



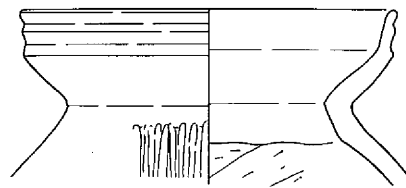
2568



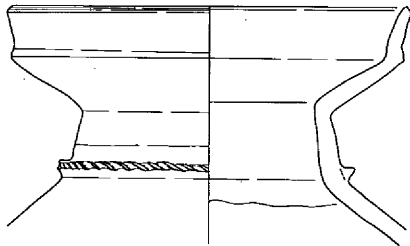
水田 2555~2568



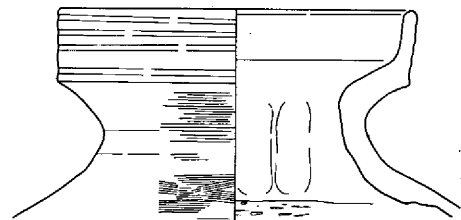
2569



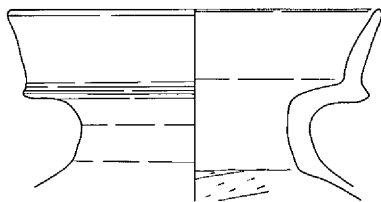
2571



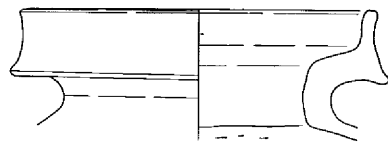
2570



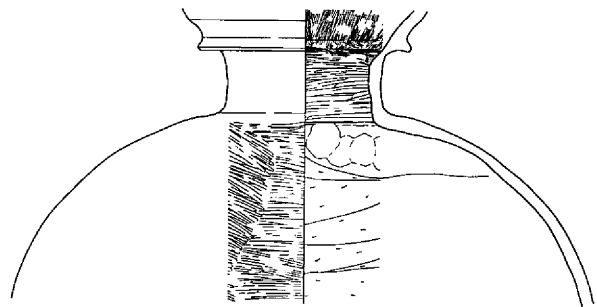
2572



2575



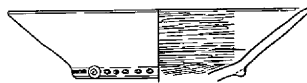
2574



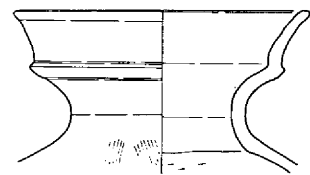
2578



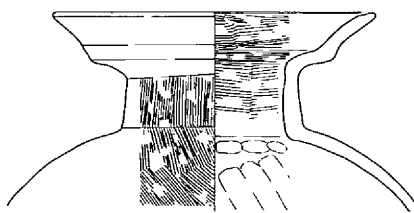
2576



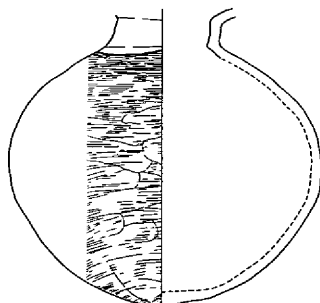
2579



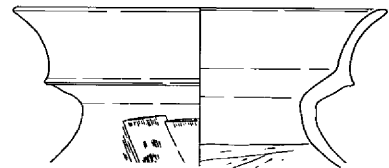
2581



2577

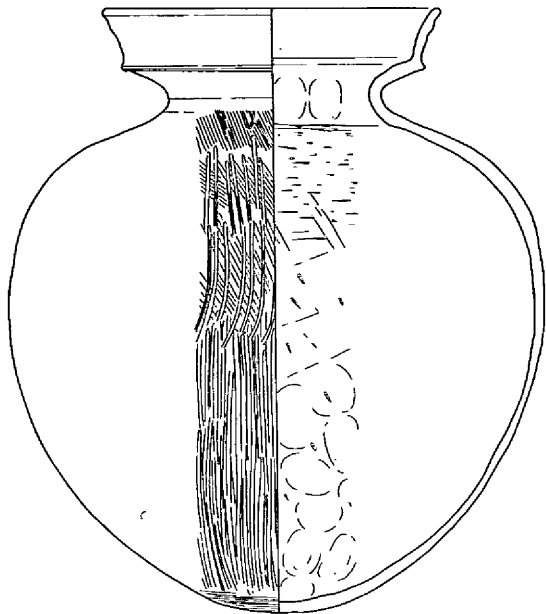


2580

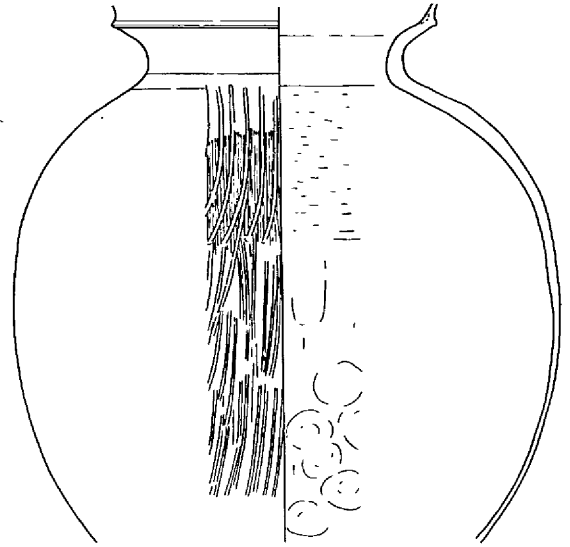


2582

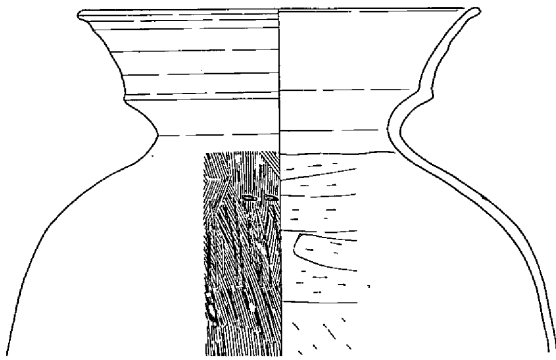




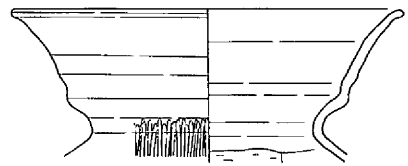
2583



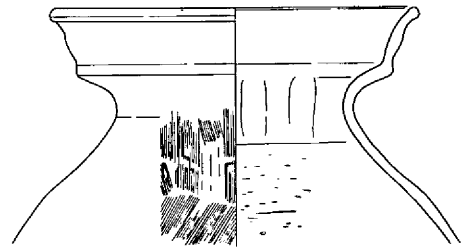
2584



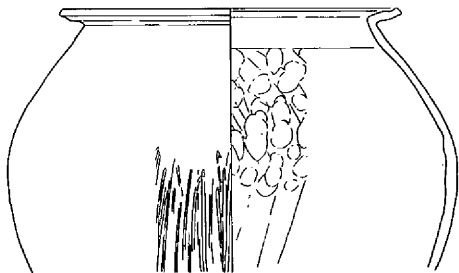
2585



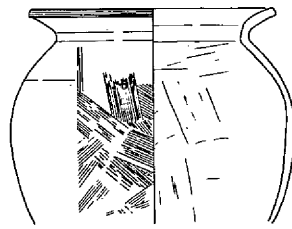
2586



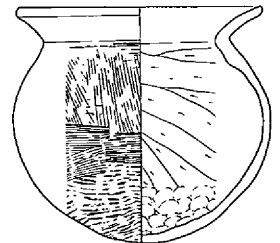
2587



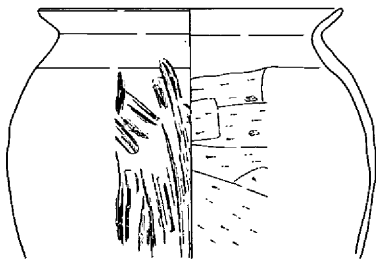
2588



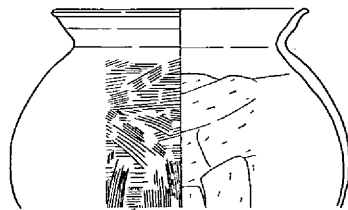
2590



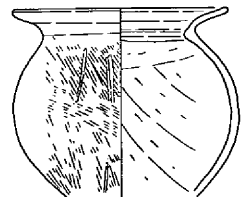
1592



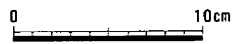
2589

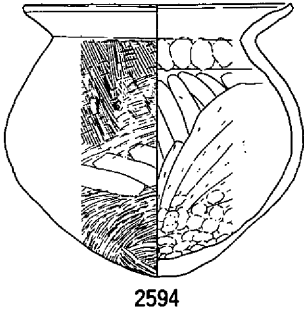


2591

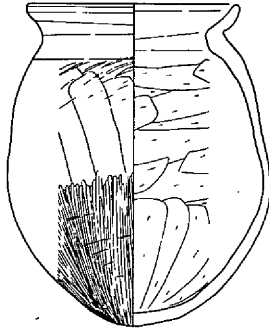


2593

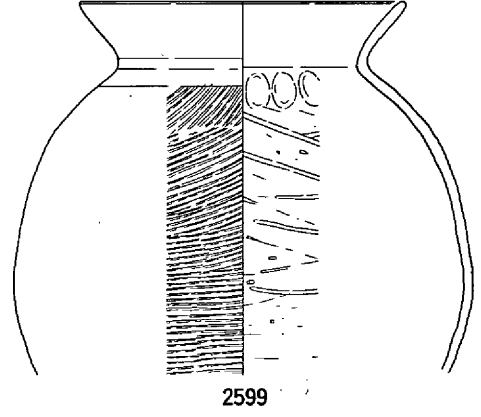




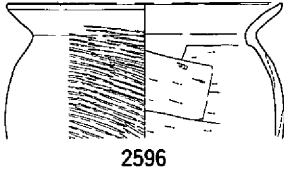
2594



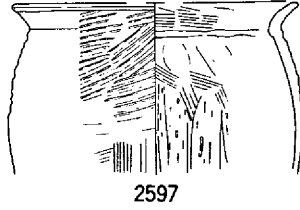
2595



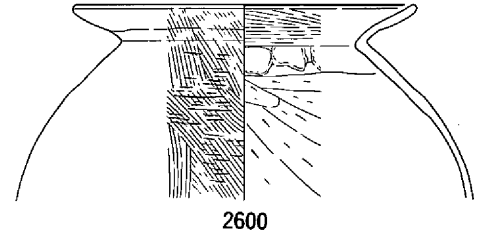
2599



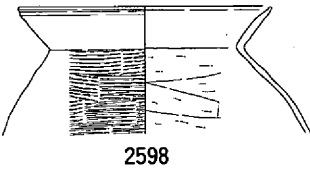
2596



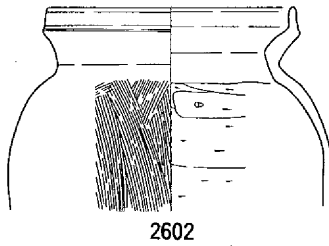
2597



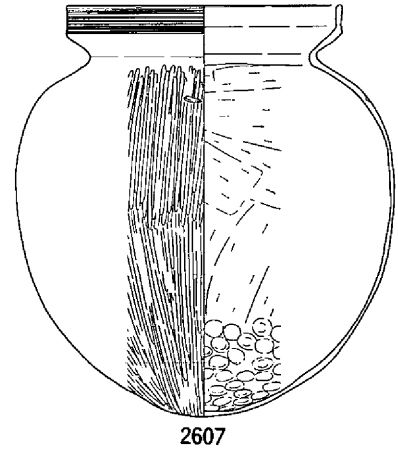
2600



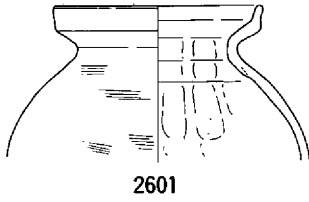
2598



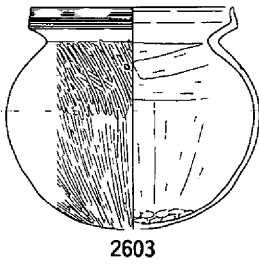
2602



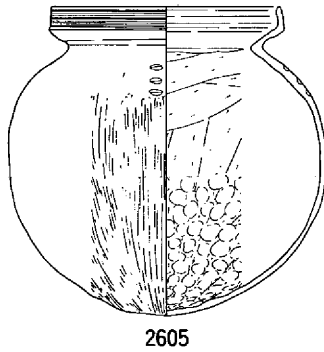
2607



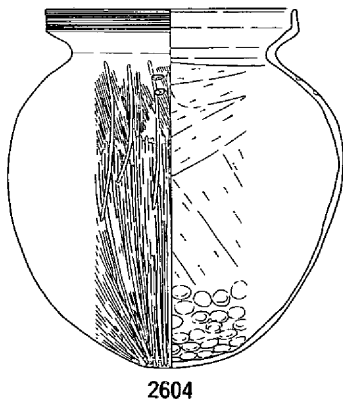
2601



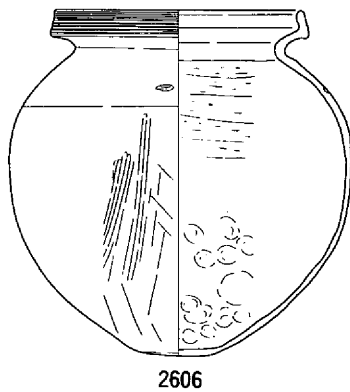
2603



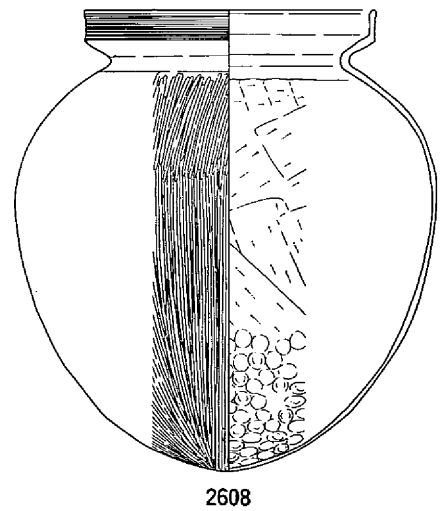
2605



2604



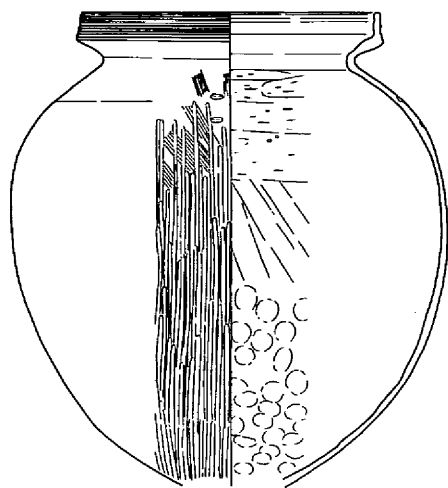
2606



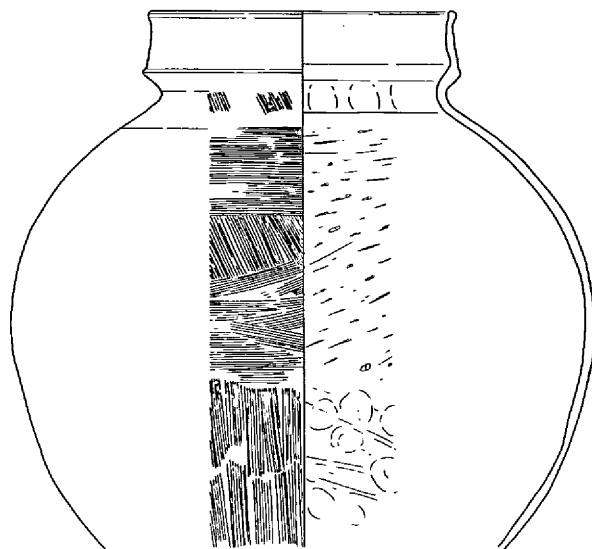
2608



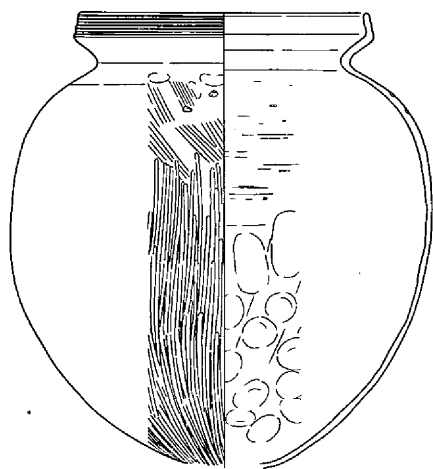
水田 2594~2608



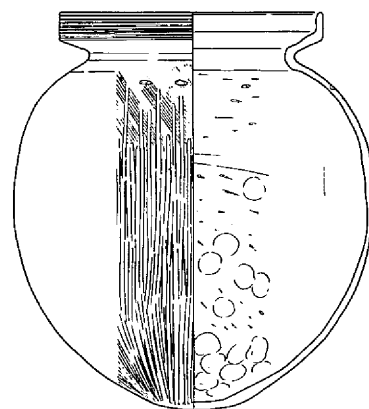
2609



2612



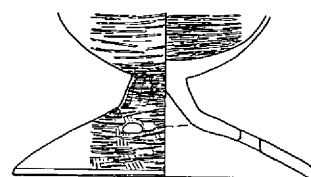
2610



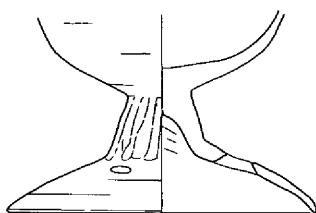
2611



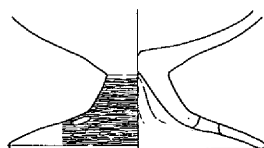
2613



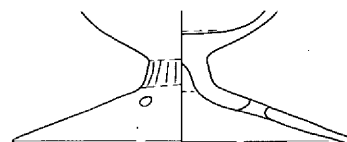
2614



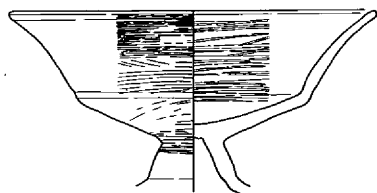
2615



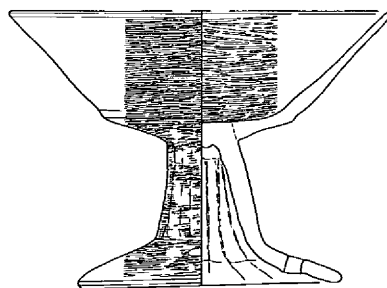
2616



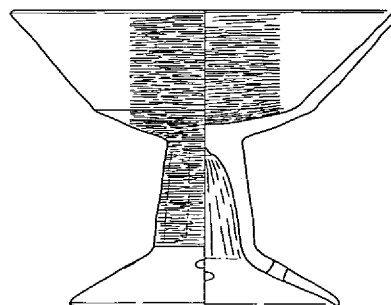
2617



2618

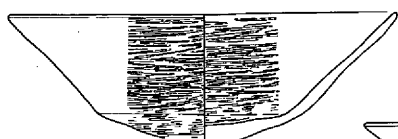


2619



2620

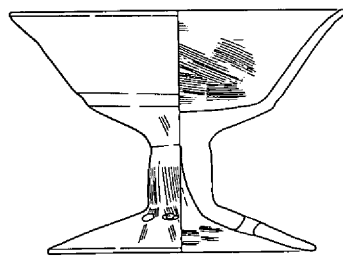




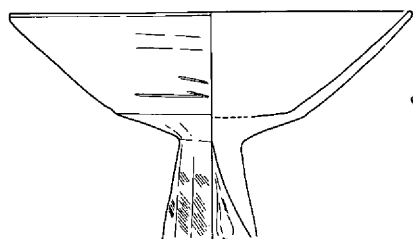
2621



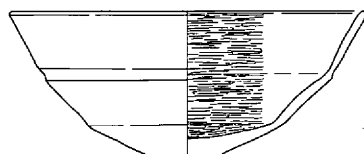
2622



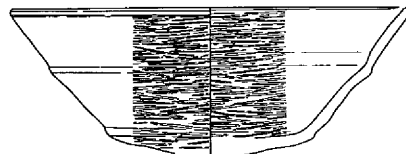
2623



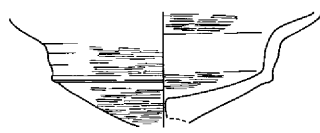
2624



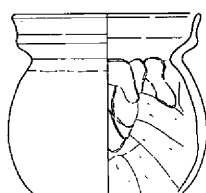
2625



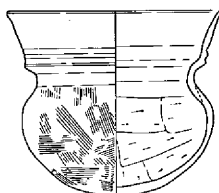
2626



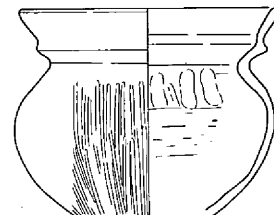
2627



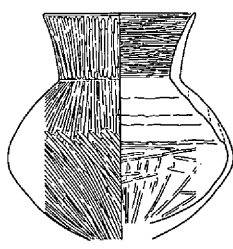
2631



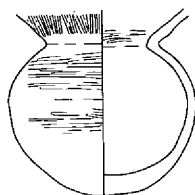
2632



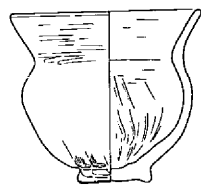
2633



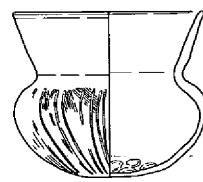
2628



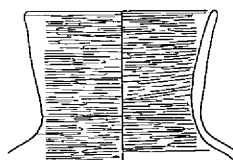
2634



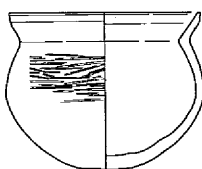
2635



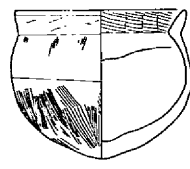
2636



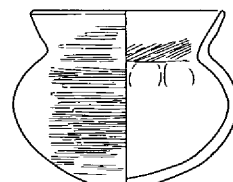
2629



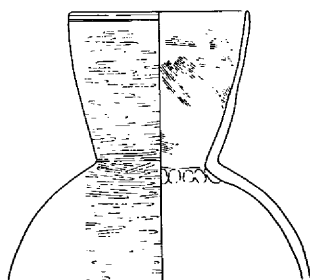
2637



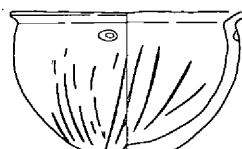
2638



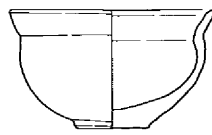
2639



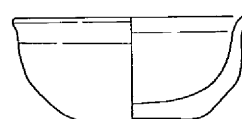
2630



2640



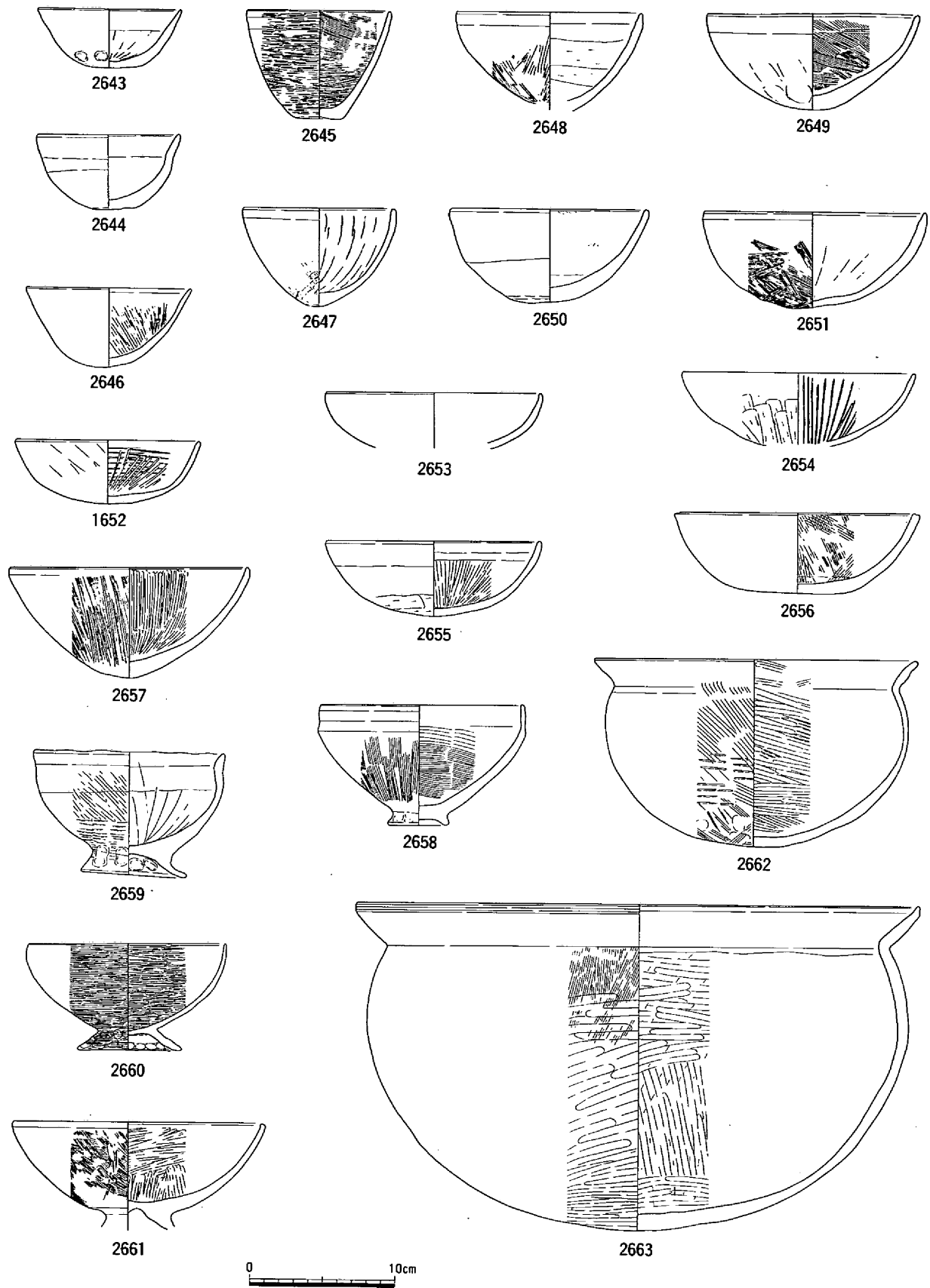
2641



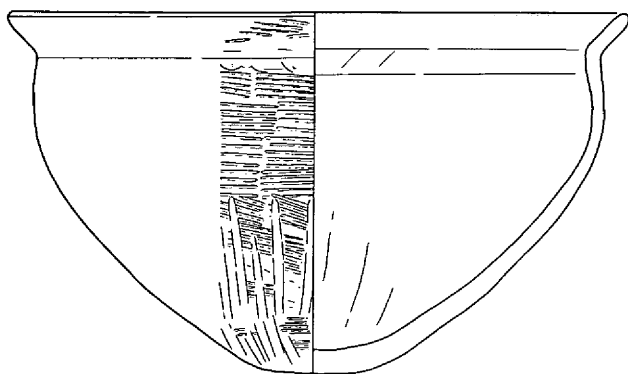
2642



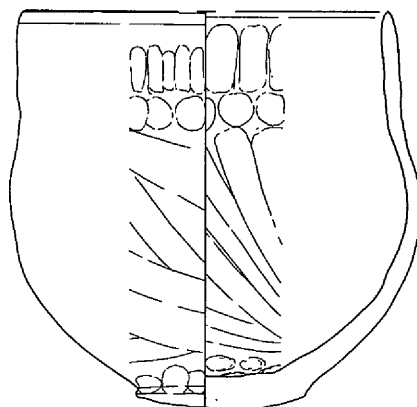
水田 2621~2642



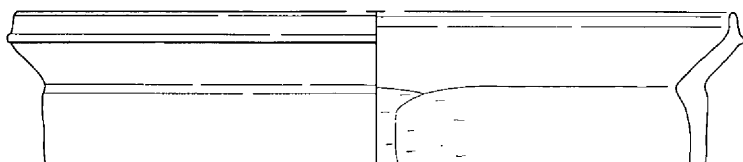
水田 2643~2663



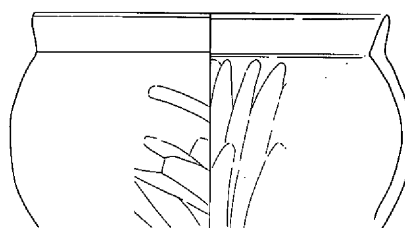
2664



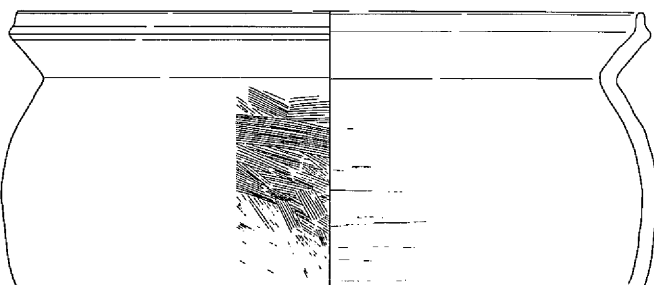
2665



2670



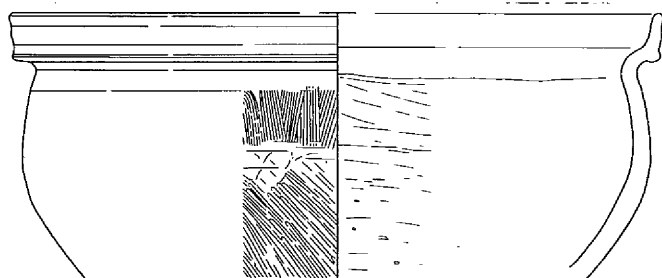
2666



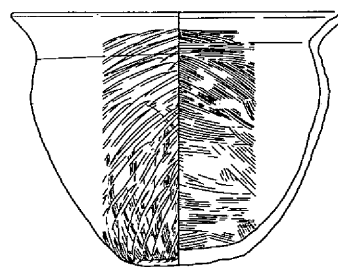
2671



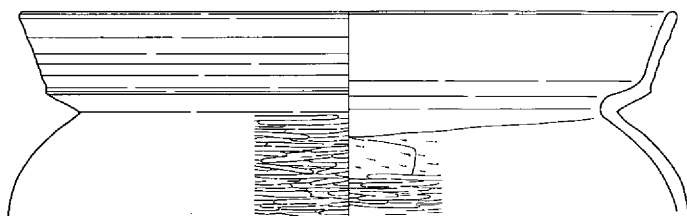
2667



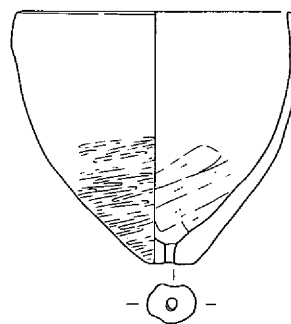
2672



2668

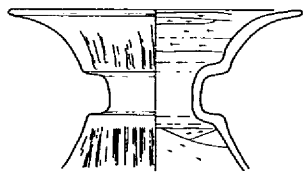


2673



2669

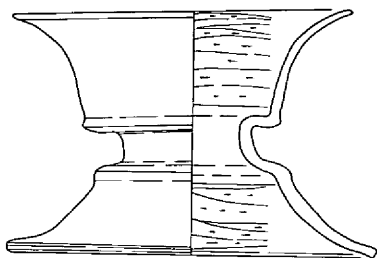




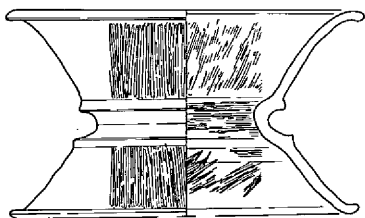
2676



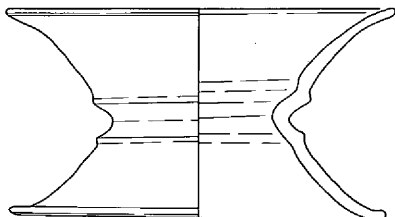
2677



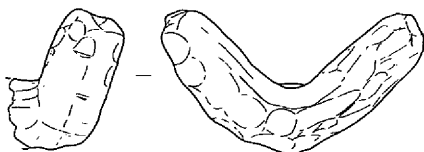
2678



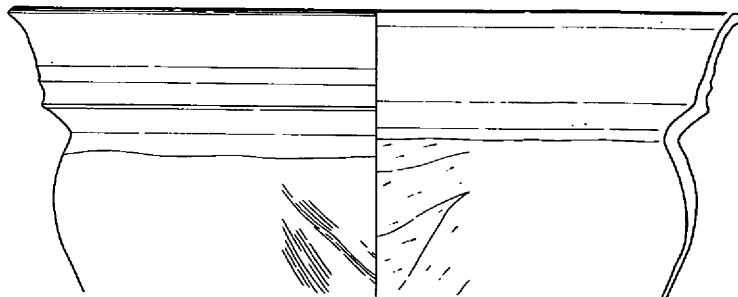
2679



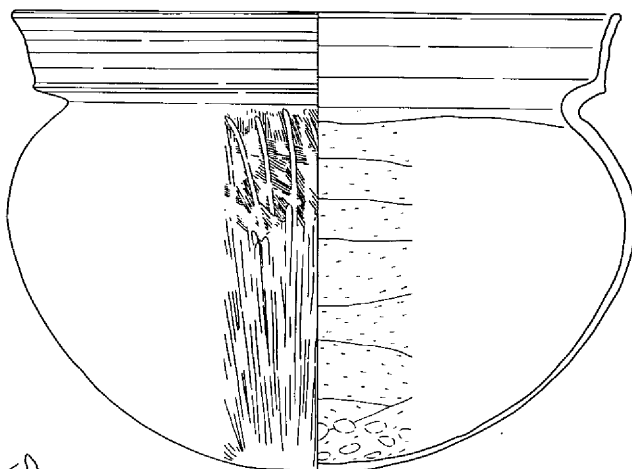
2680



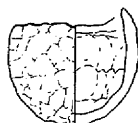
2683



2674



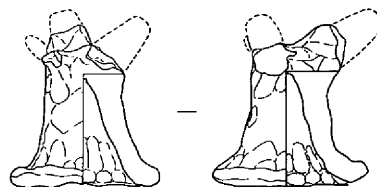
2675



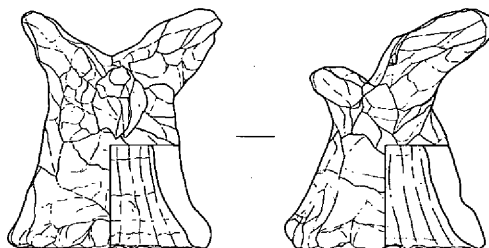
2681



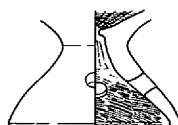
2682



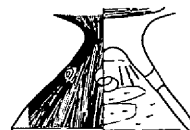
2684



2685

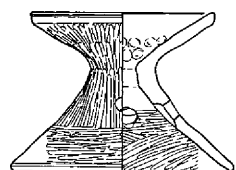


2686

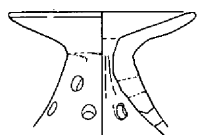


2687





2688



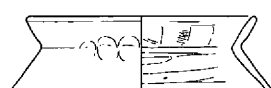
2689



2690



2691



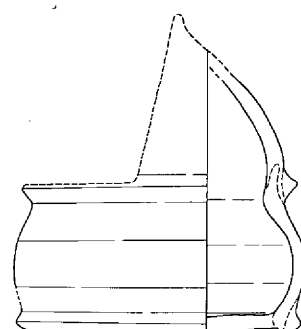
2694



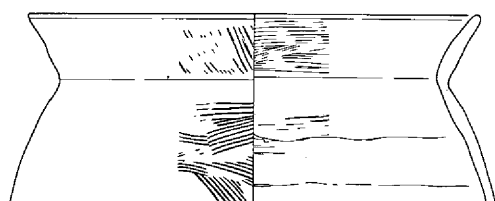
2695



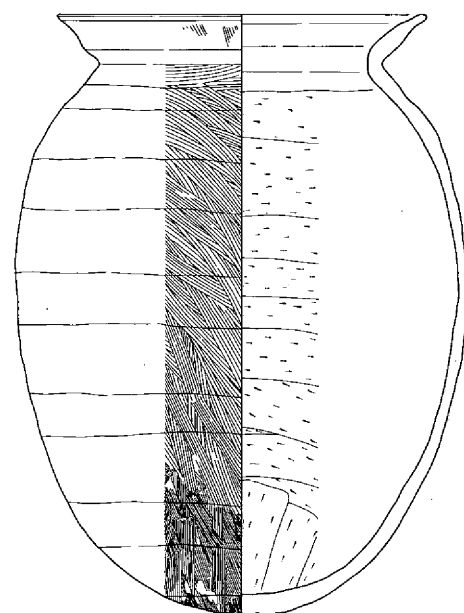
2692



2693



2696



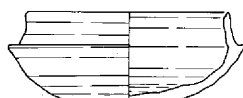
2697



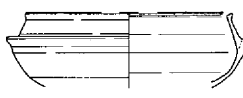
2699



2700



2701



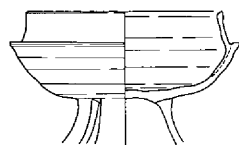
2702



2703



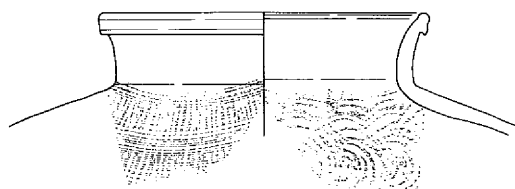
2704



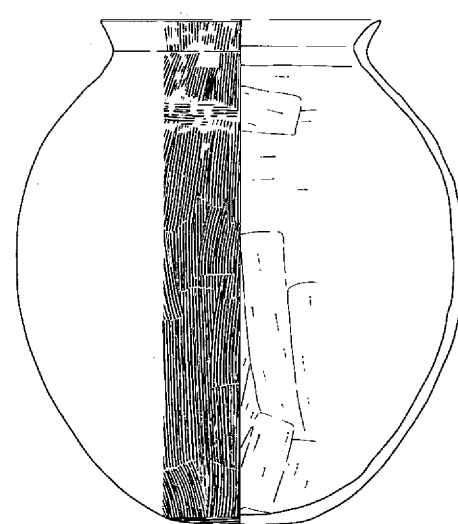
2705



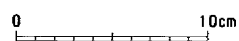
2706

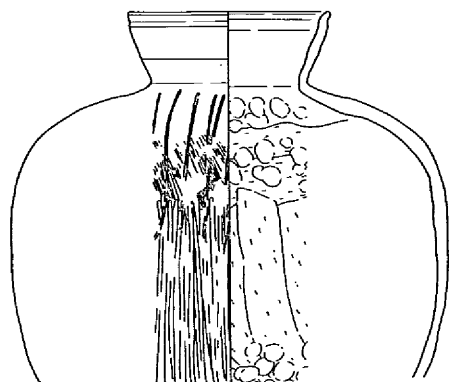


2707

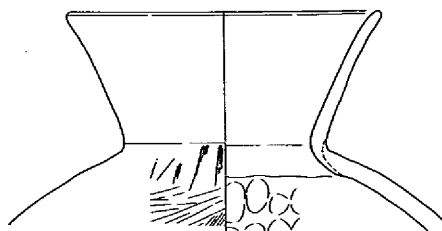


2698

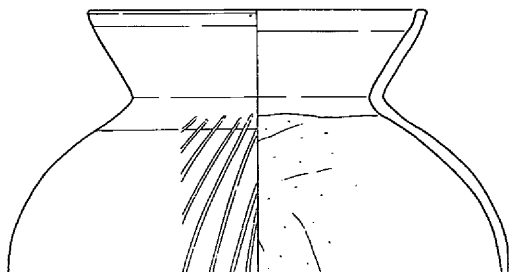




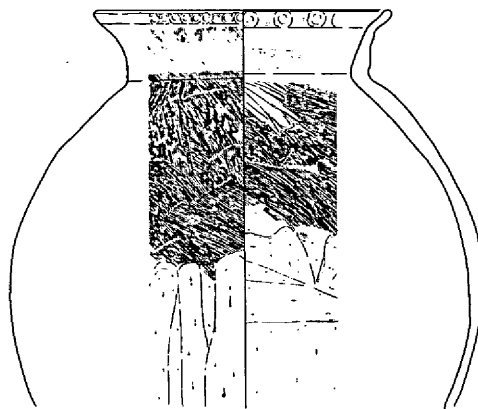
2708



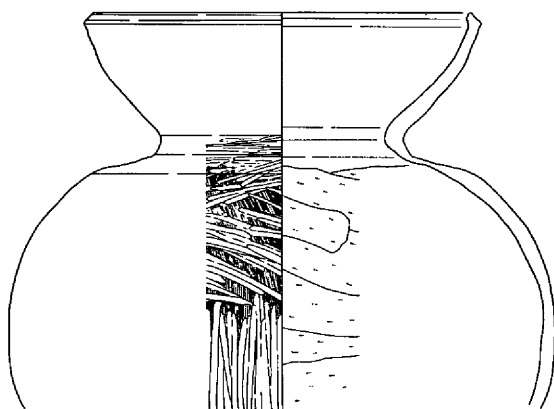
2711



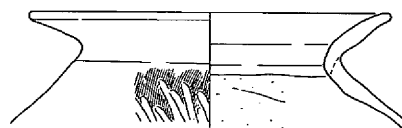
2709



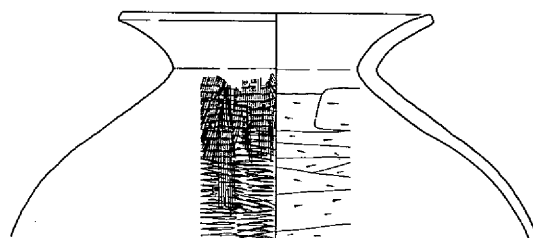
2712



2710



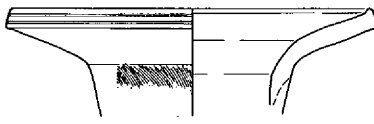
2713



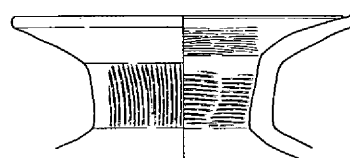
2714



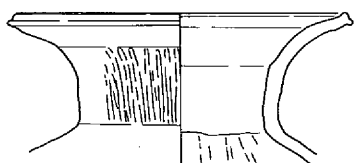
2715



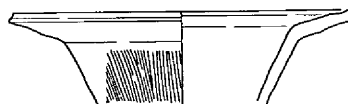
2716



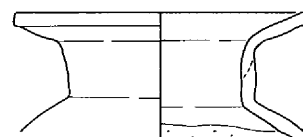
2717



2718



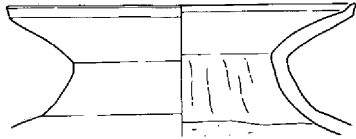
2719



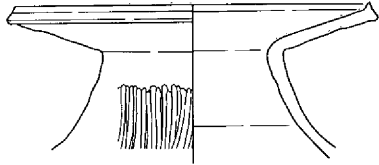
2720



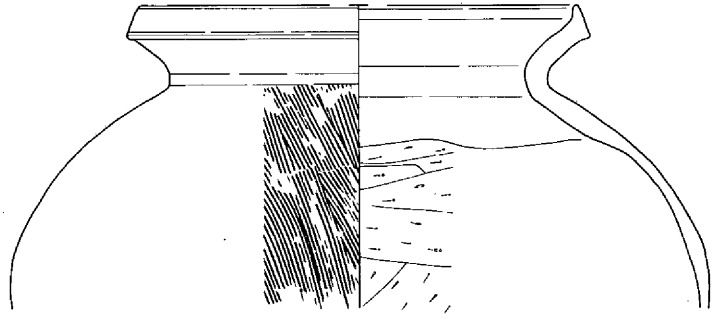
包含層 2708~2720



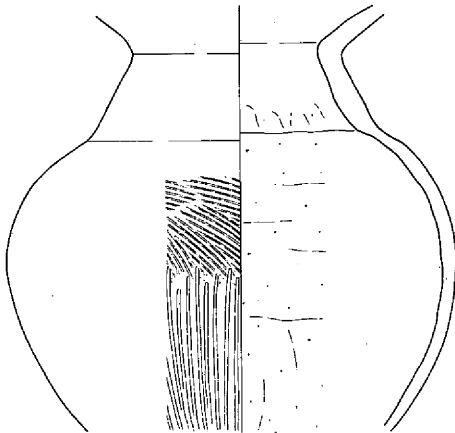
2721



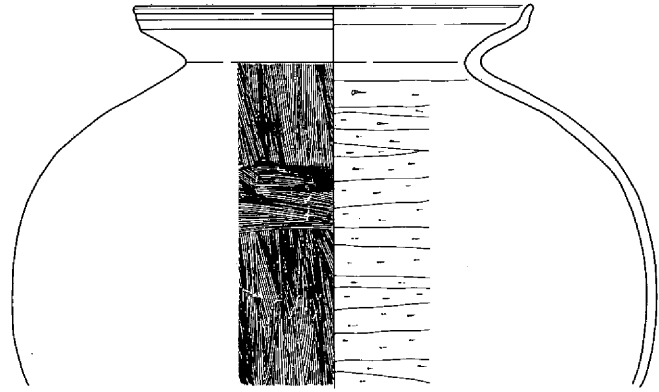
2722



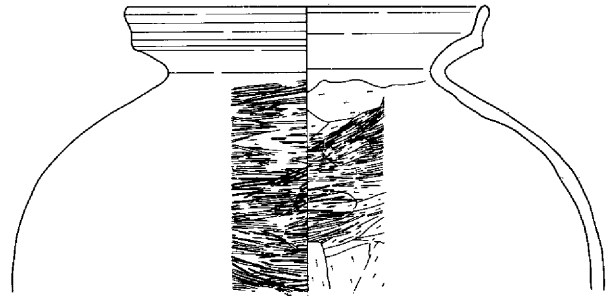
2725



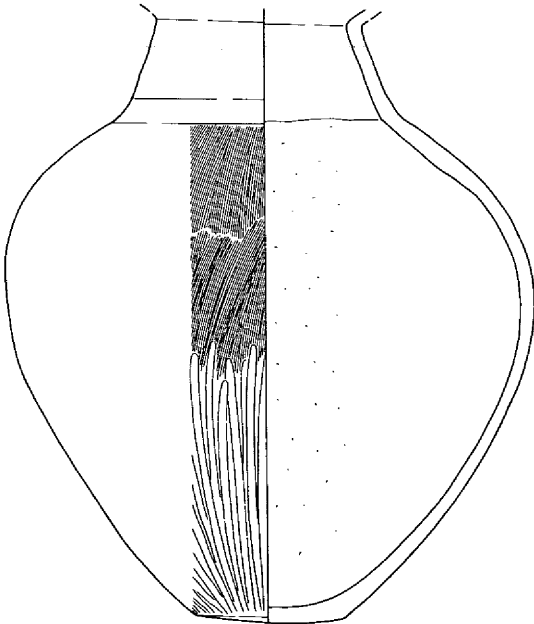
2723



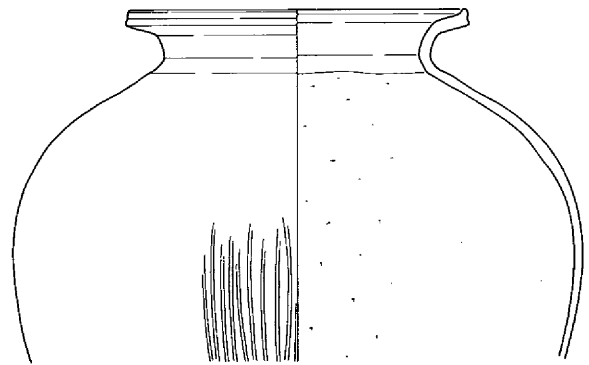
2726



2727



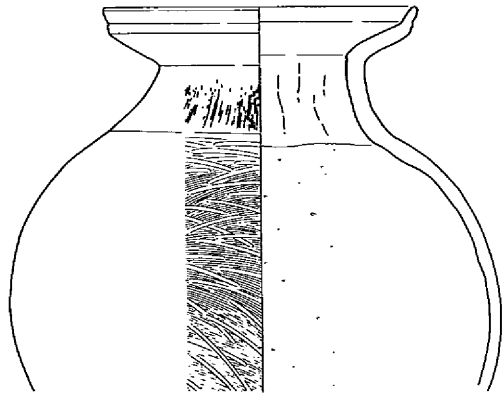
2724



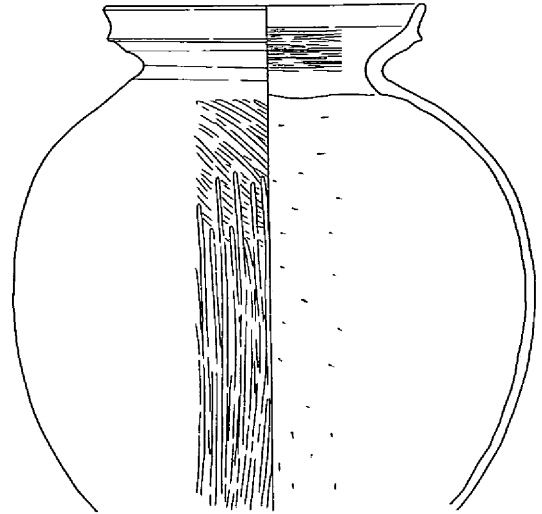
2728



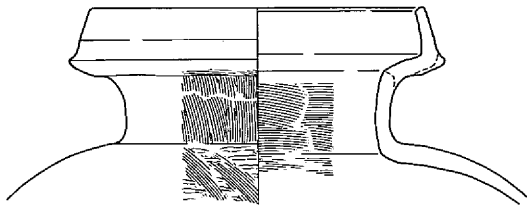
包含層 2721~2728



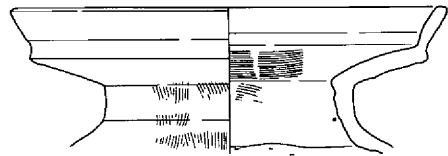
2730



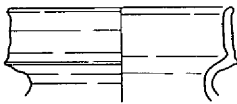
2729



2731



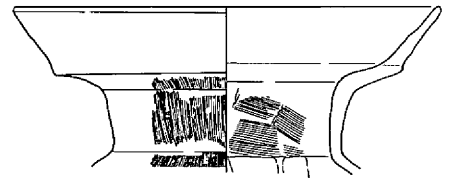
2732



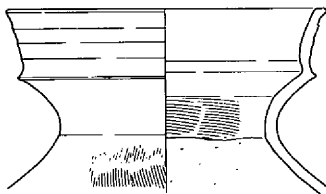
2733



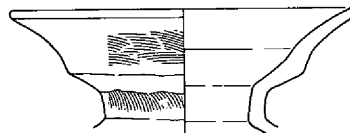
2735



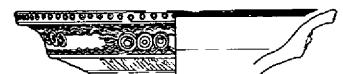
2737



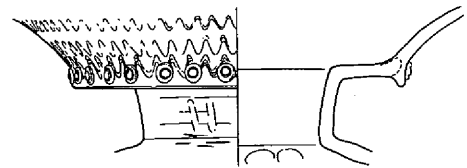
2734



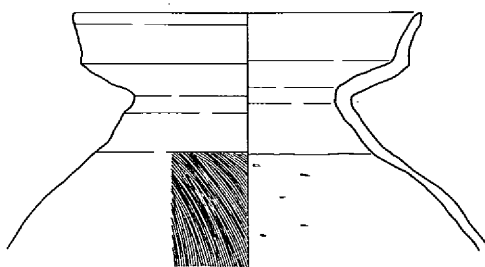
2736



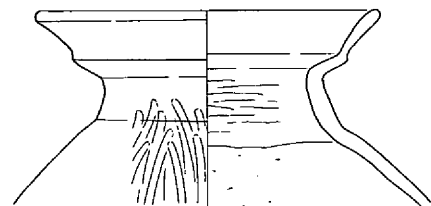
2738



2739



2740



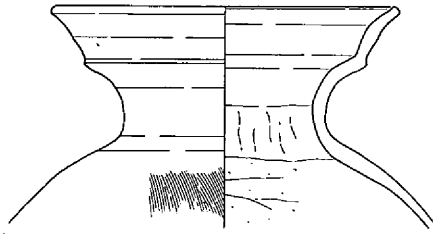
2741



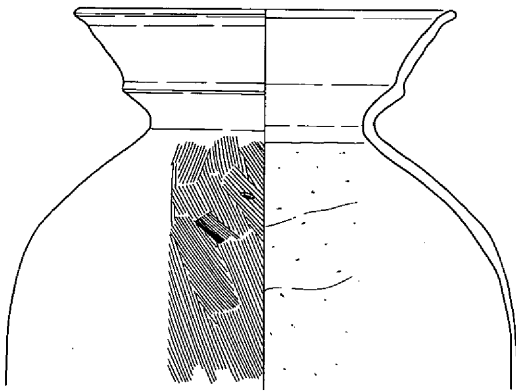
包含層 2729~2741



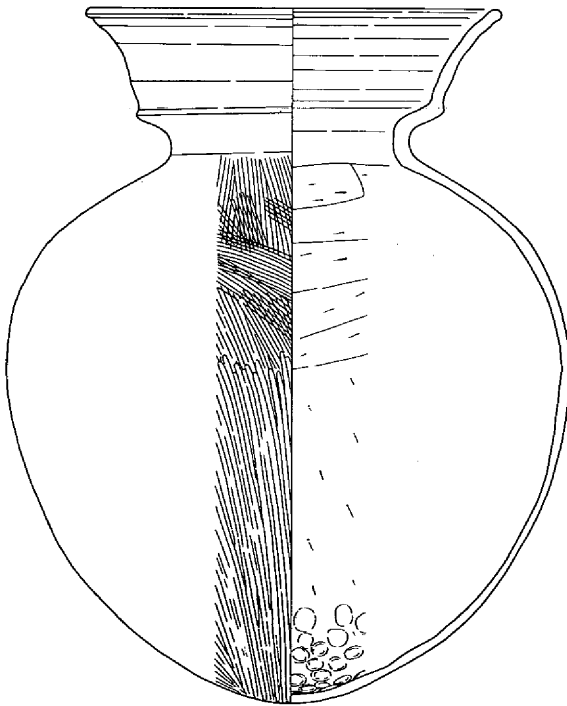
2742



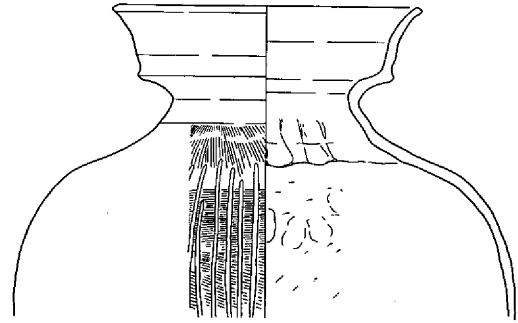
2743



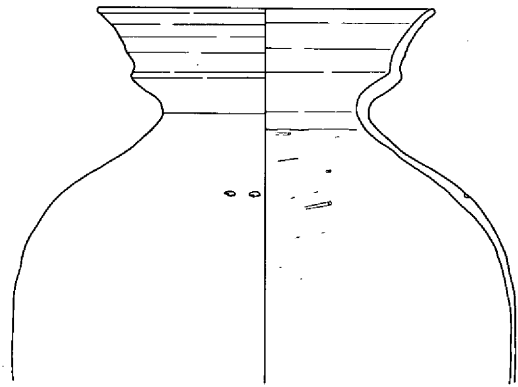
2745



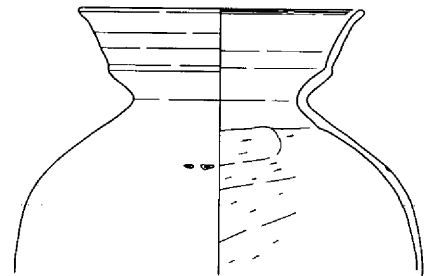
2747



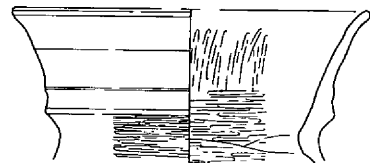
2744



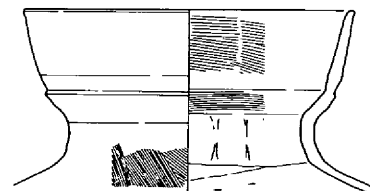
2746



2748



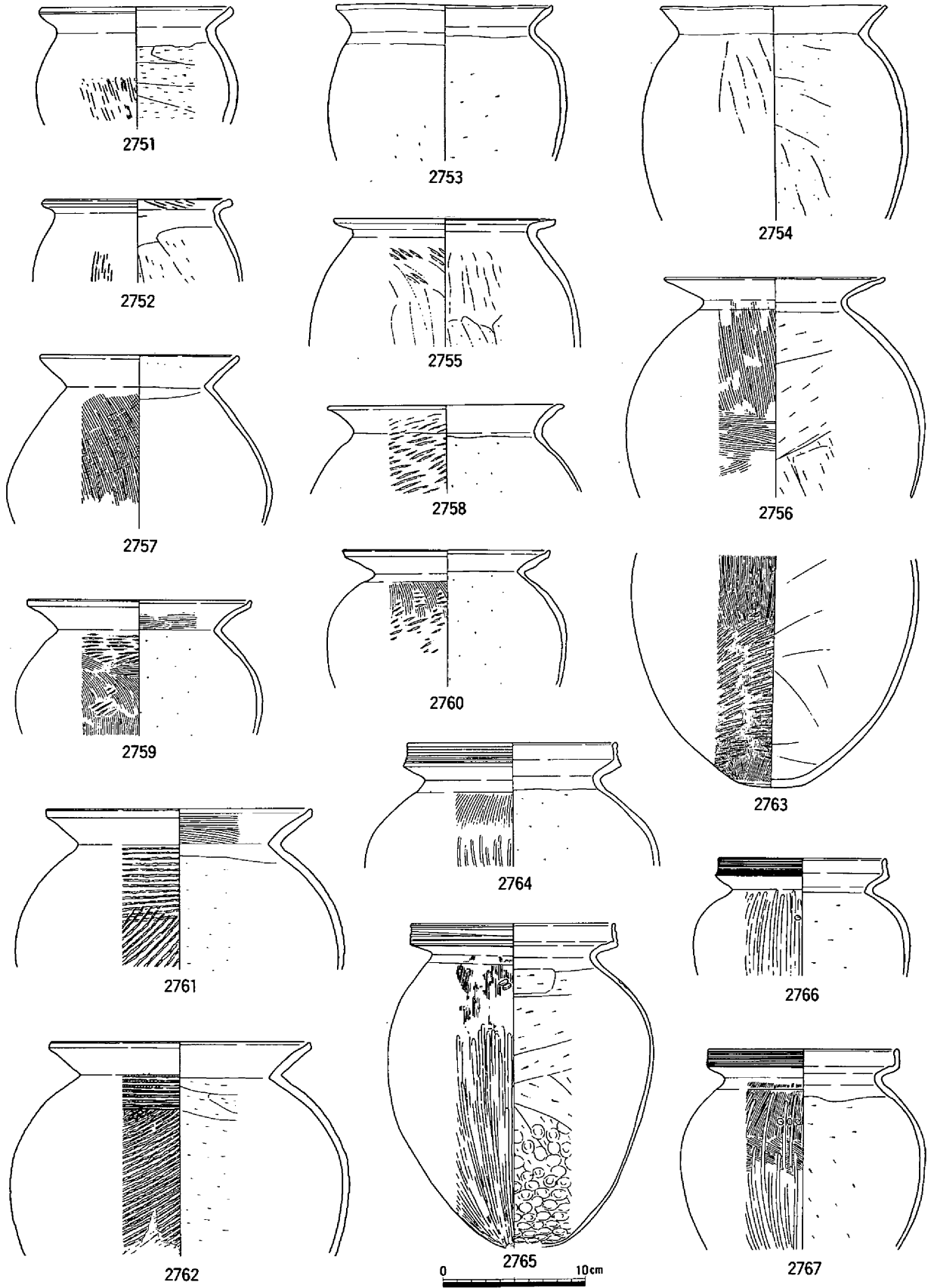
2749



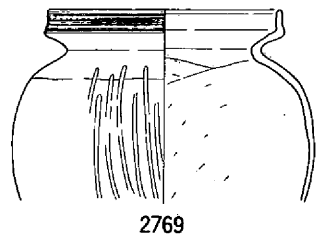
2750



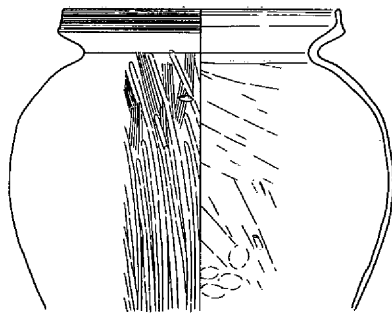
包含層 2742~2750



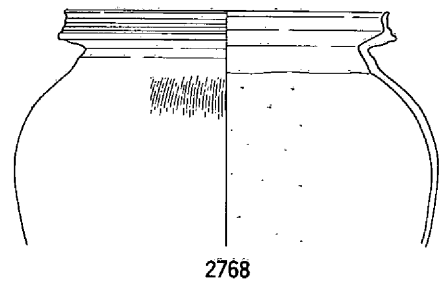
包含層 2751~2767



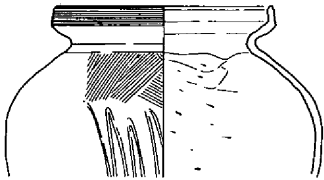
2769



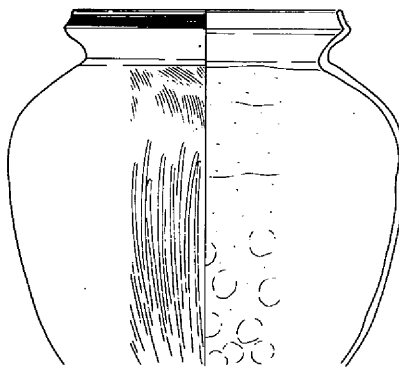
2773



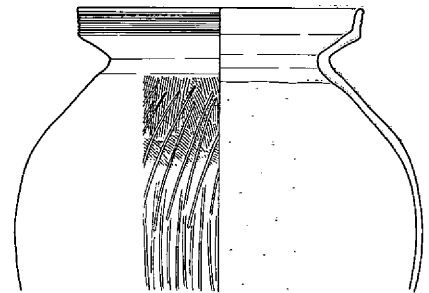
2768



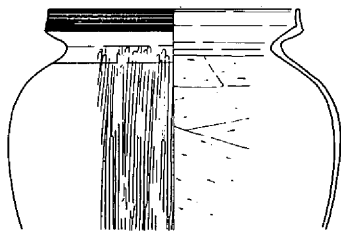
2770



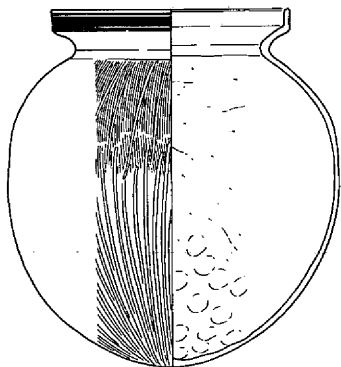
2774



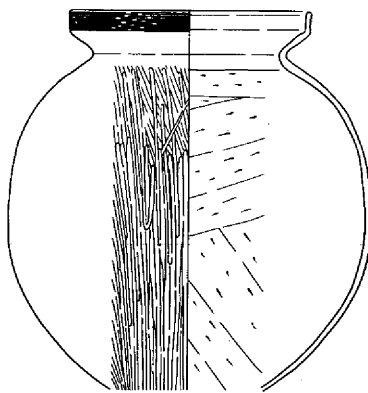
2778



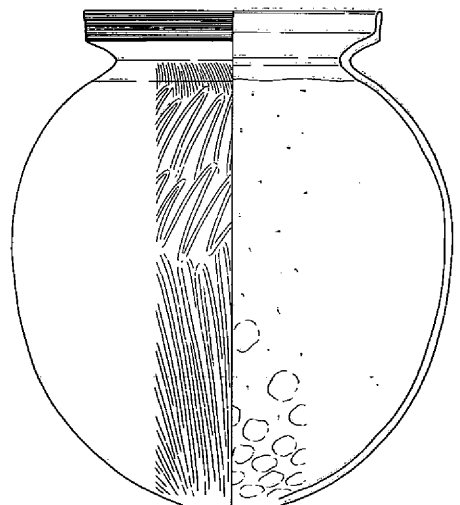
2771



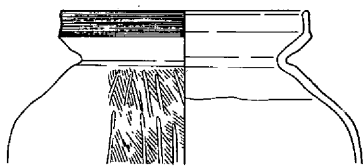
2772



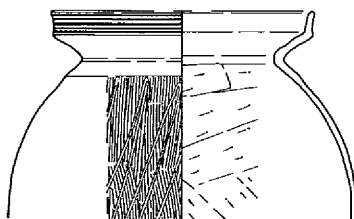
2775



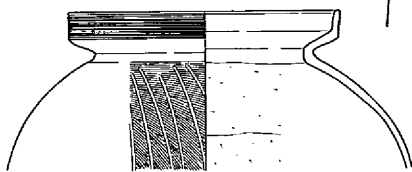
2779



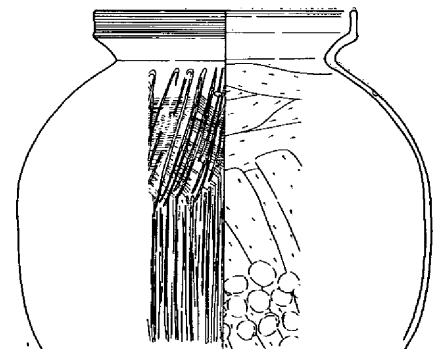
2776



2777



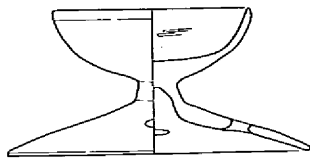
2780



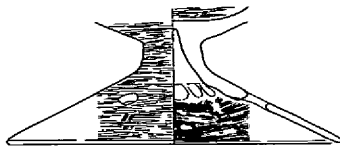
2781



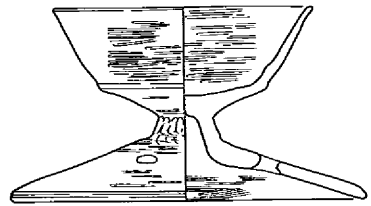
包含層 2768~2781



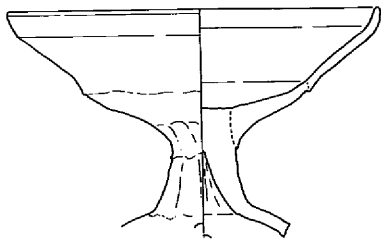
2782



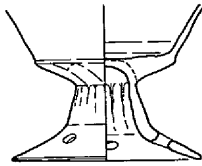
2783



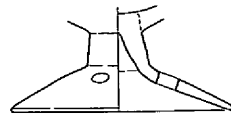
2784



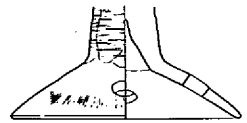
2790



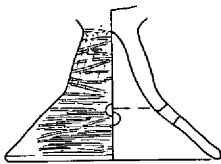
2785



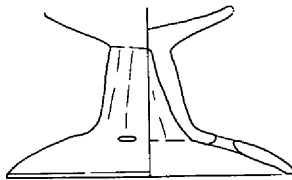
2786



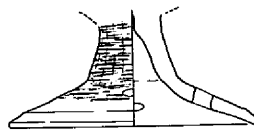
2787



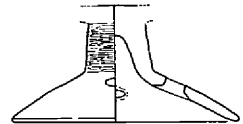
2798



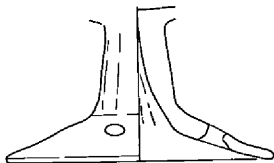
2792



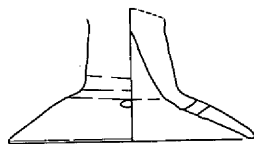
2789



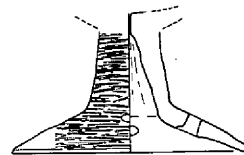
2788



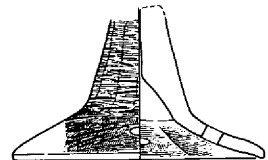
2791



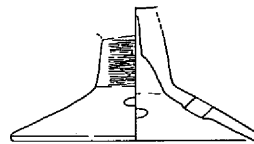
2797



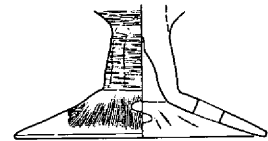
2793



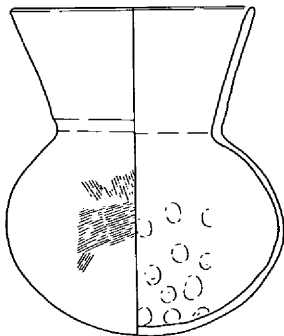
2794



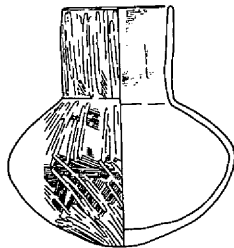
2796



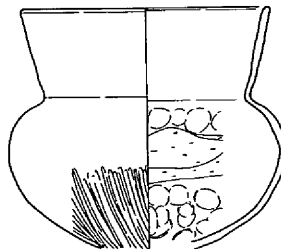
2795



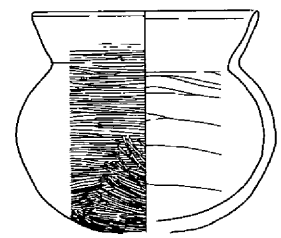
2799



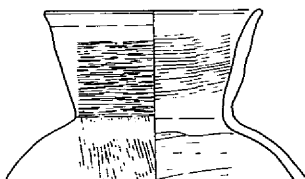
2801



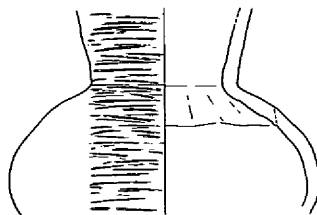
2804



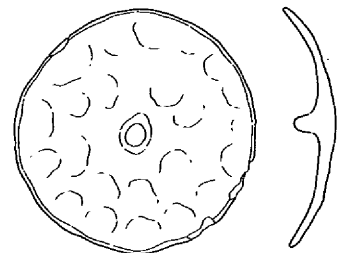
2803



2800



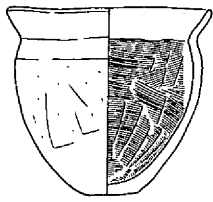
2802



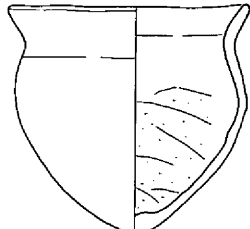
2805



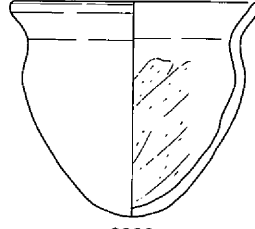
包含層 2782~2805



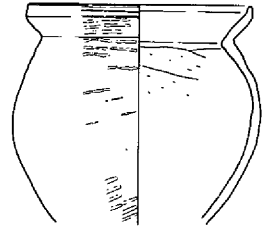
2806



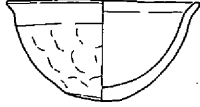
2807



2808



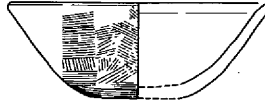
2809



2810



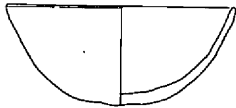
2811



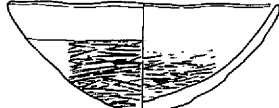
2812



2813



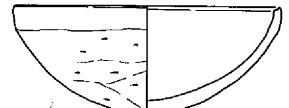
2814



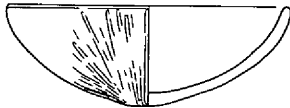
2815



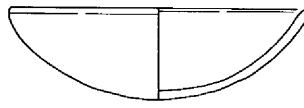
2816



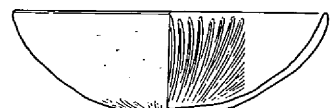
2817



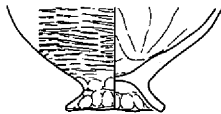
2818



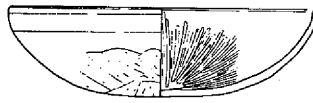
2819



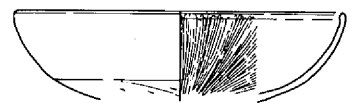
2820



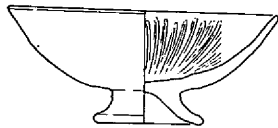
2823



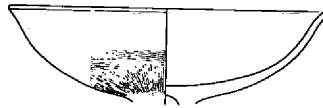
2822



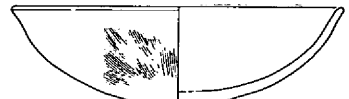
2821



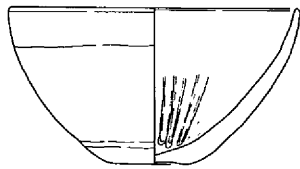
2824



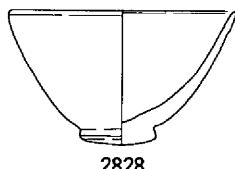
2825



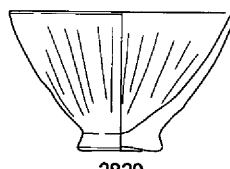
2826



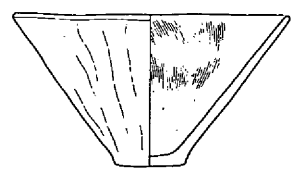
2827



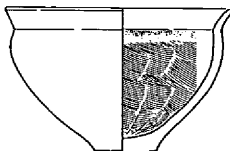
2828



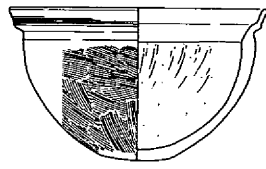
2829



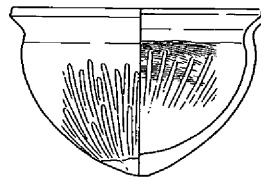
2830



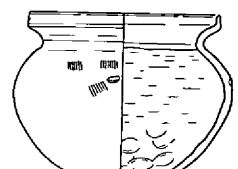
2831



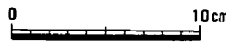
2832



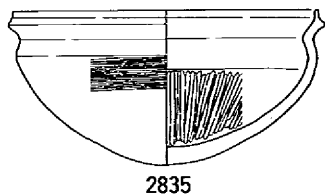
2833



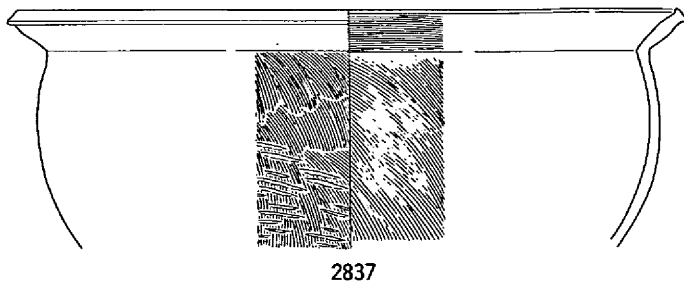
2834



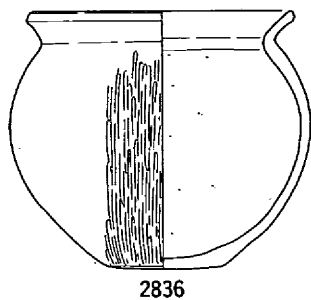
包含層 2806~2834



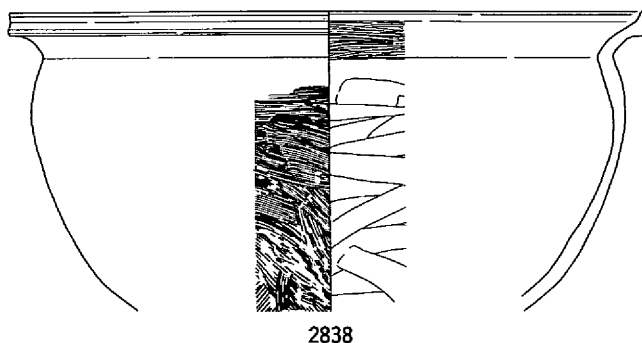
2835



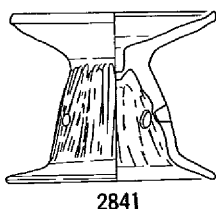
2837



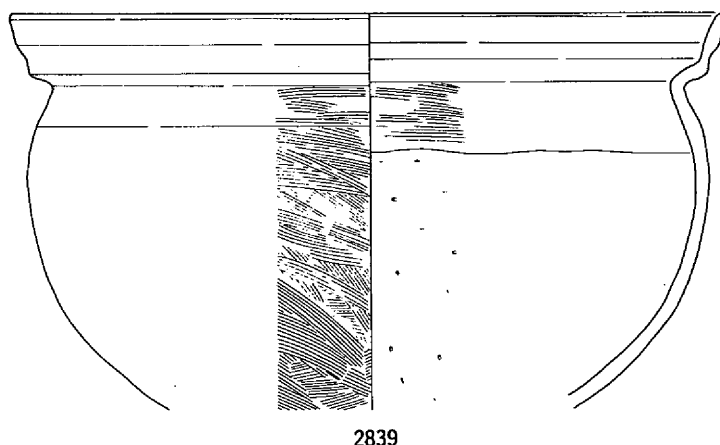
2836



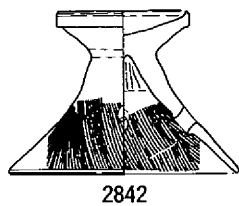
2838



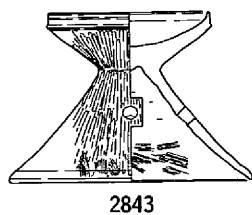
2841



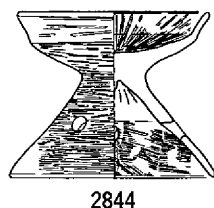
2839



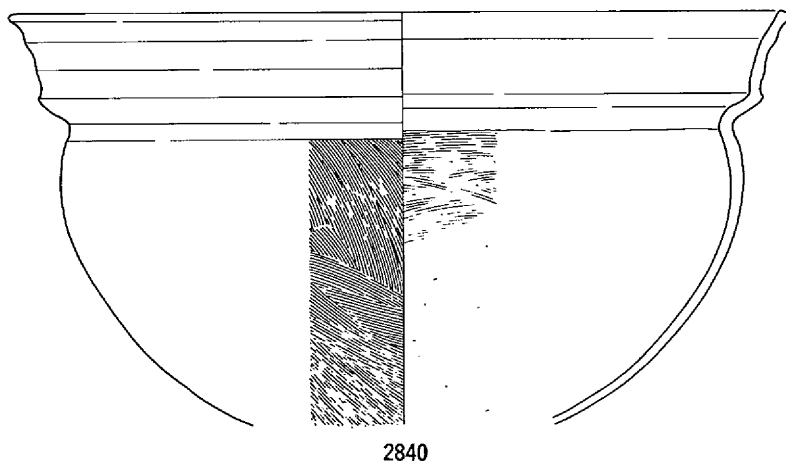
2842



2843



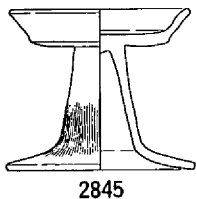
2844



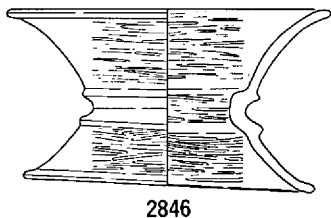
2840

0 10m

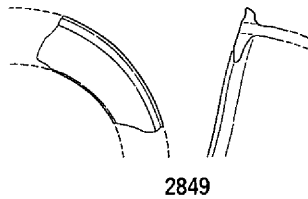
包含層 2835~2844



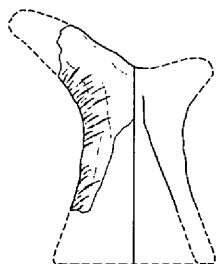
2845



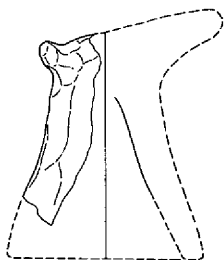
2846



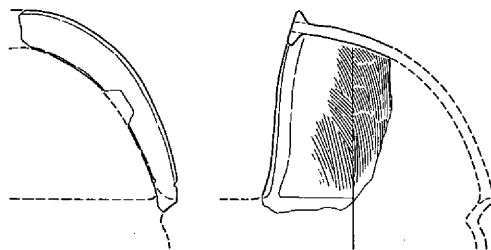
2849



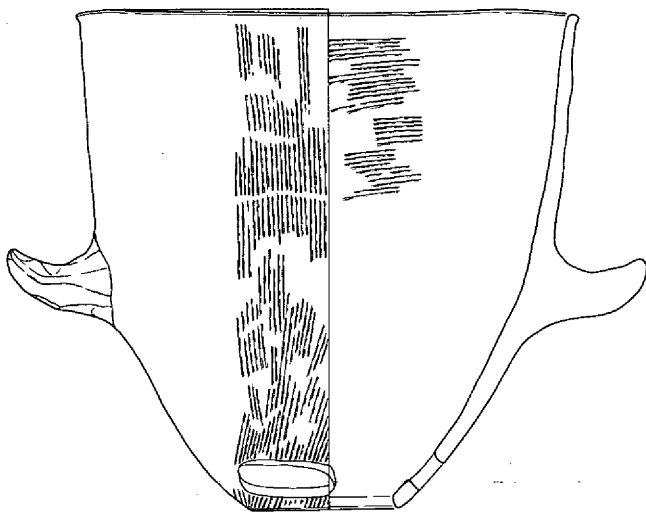
2847



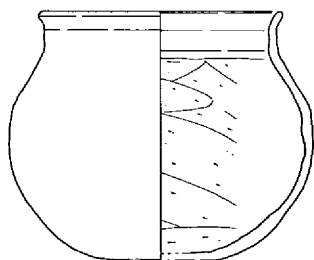
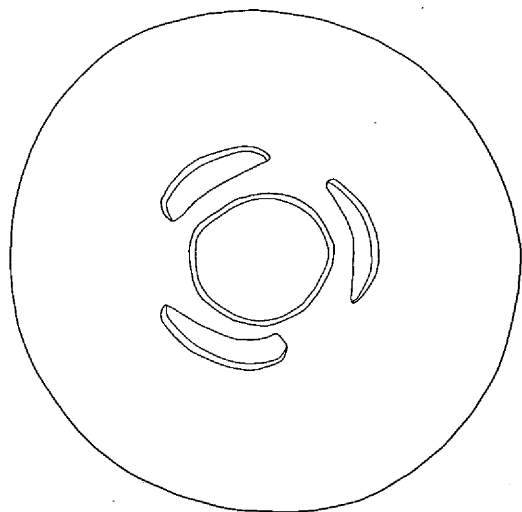
2848



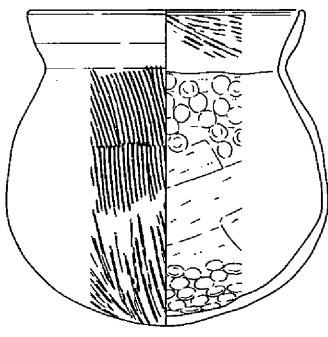
2850



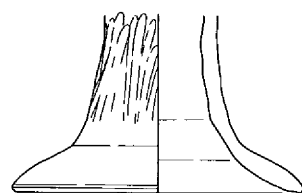
2851



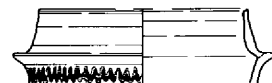
2852



2853



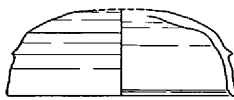
2854



2855



2856



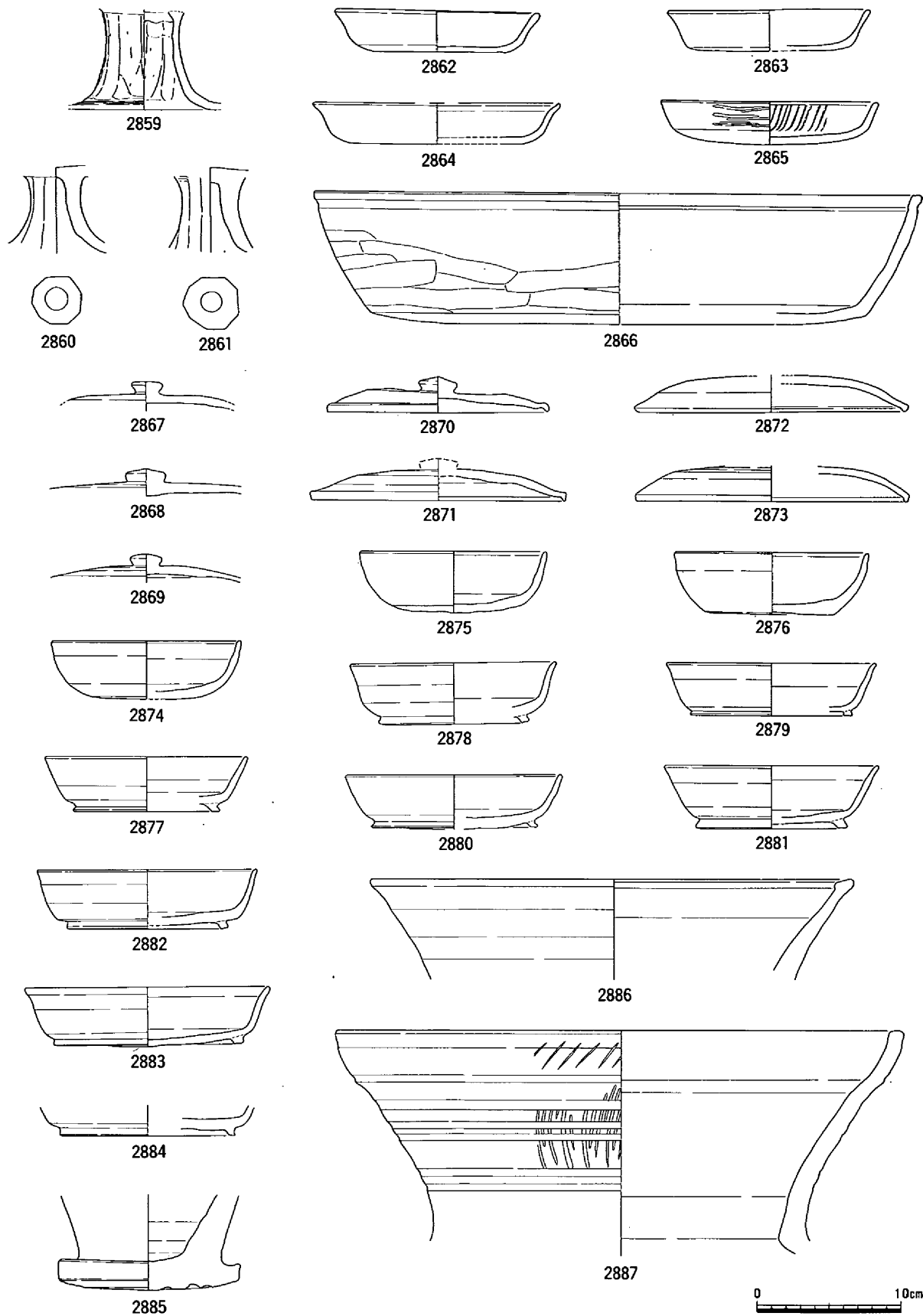
2857



2858

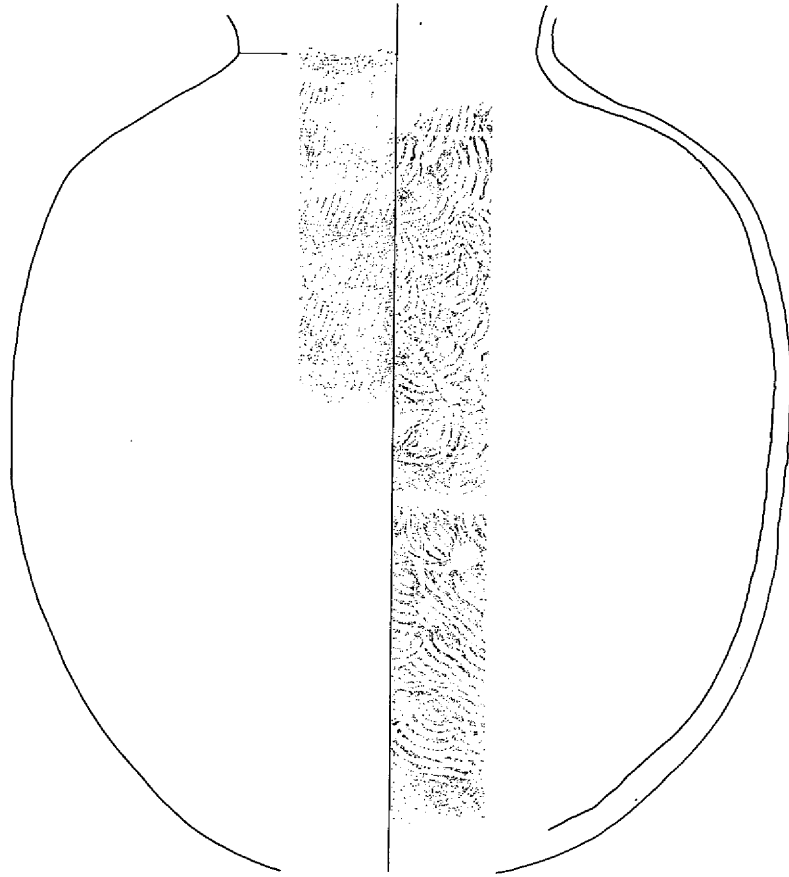


包含層 2845~2858



溝一27 2859~2866

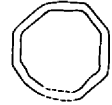
溝一28 2867~2887



2888



2889



2890



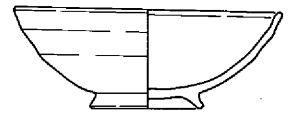
2891



2892



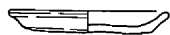
2893



2898



2894



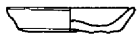
2895



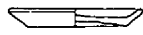
2896



2897



2899



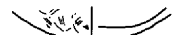
2900



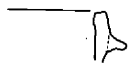
2901



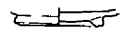
2902



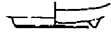
2903



2904



2905



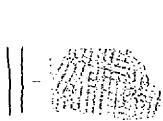
2906



2907



2908



2909



2910



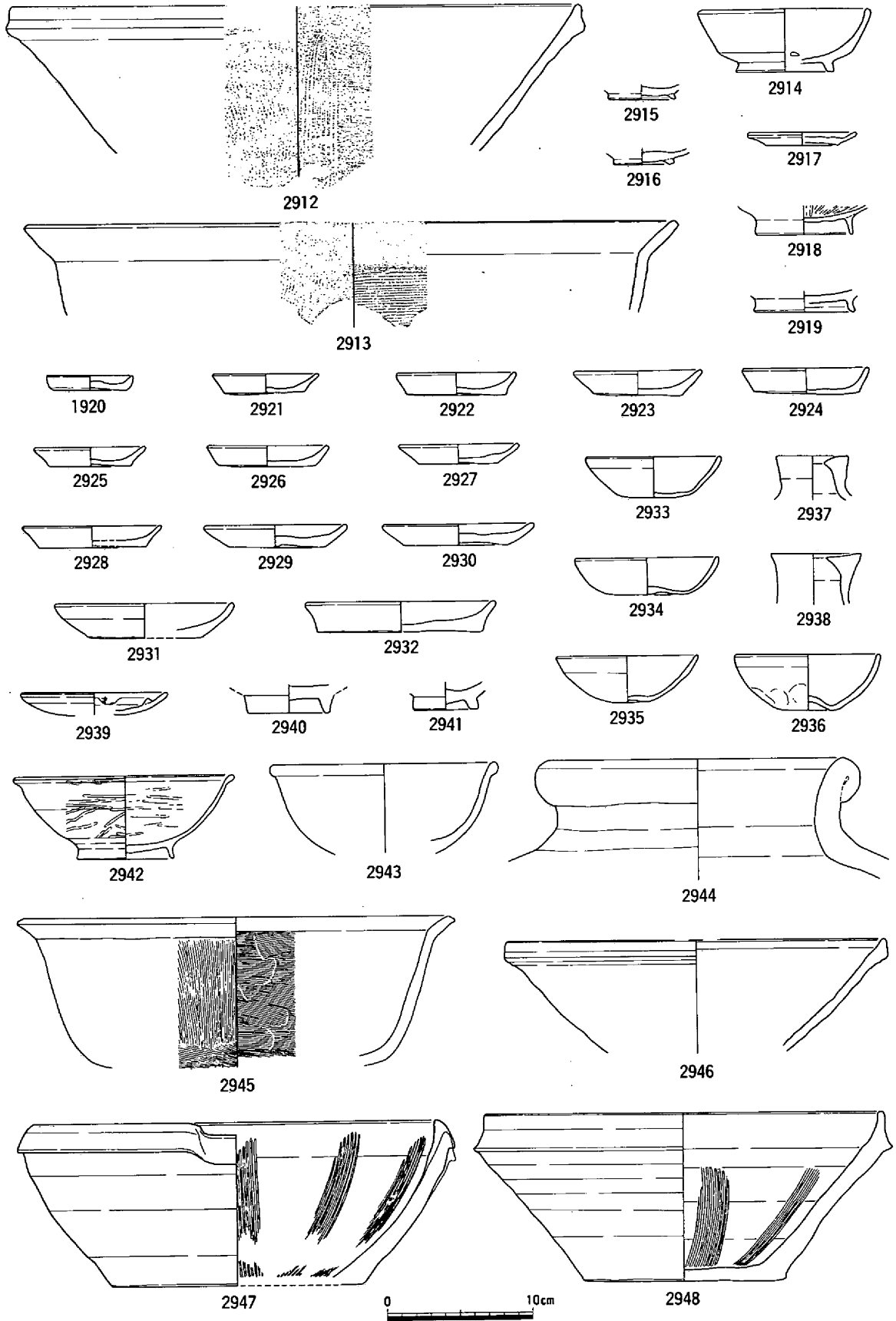
2911



溝—28 2888
 土墳墓—8 2899·2900
 土墳—182 2902~2909

包含層 2889~2895
 土墳墓—9 2901
 溝—43 2910~2911

土墳墓—6 2896·2897
 土墳—166 2898

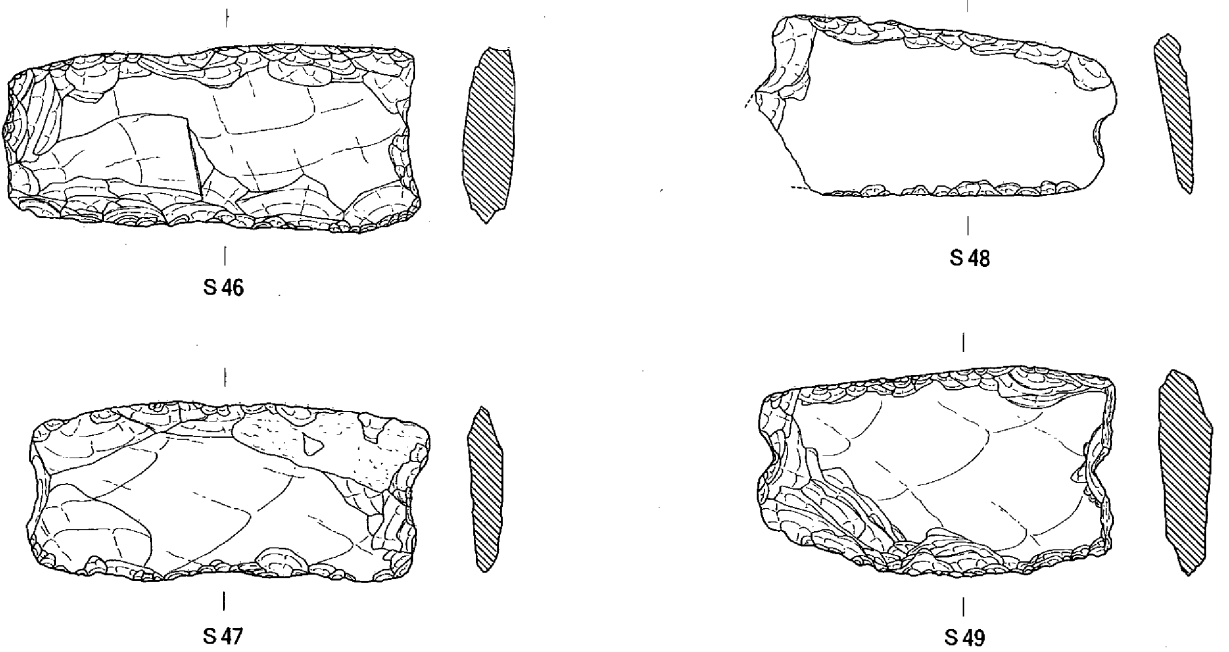
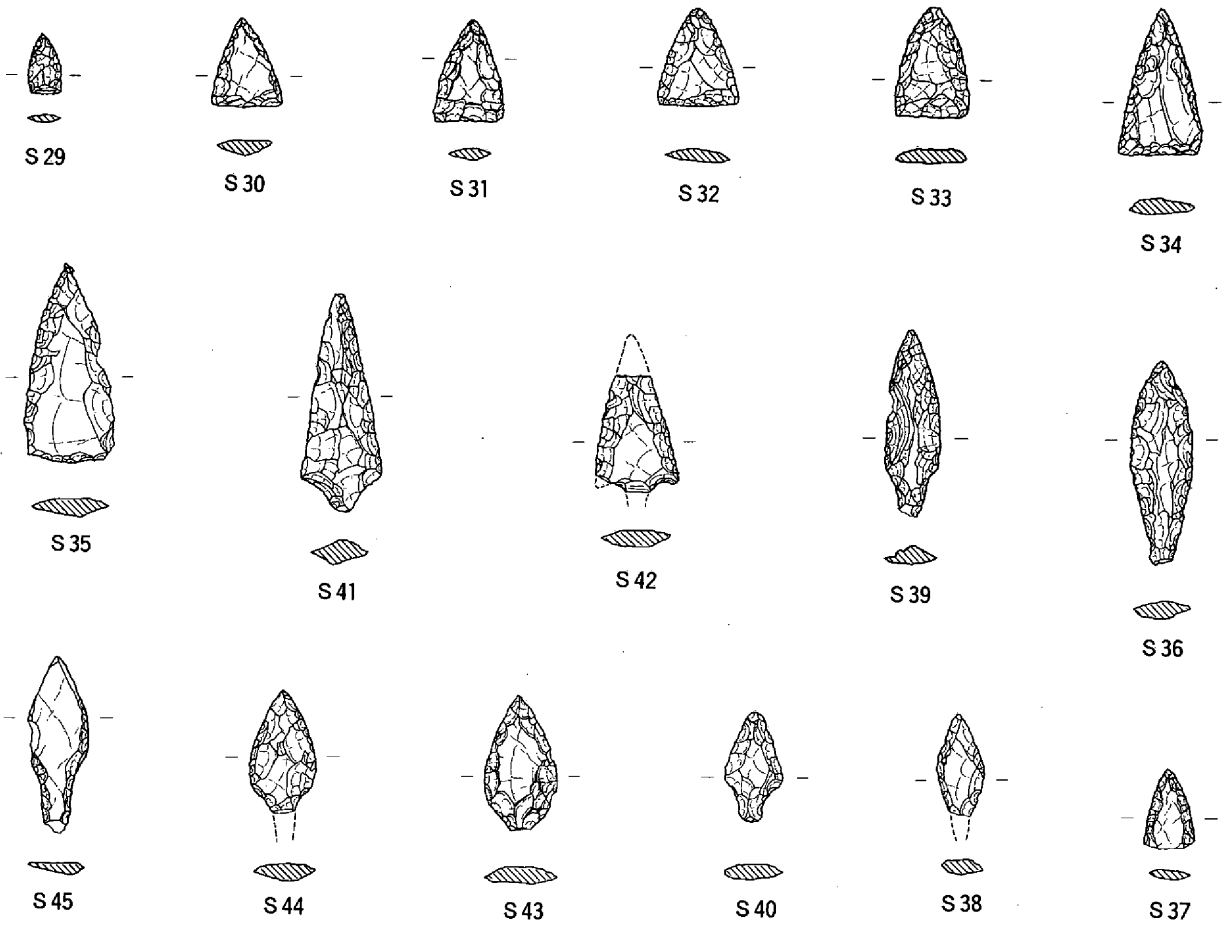


溝—43 2912~2914

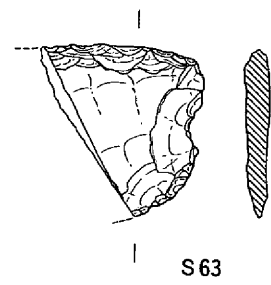
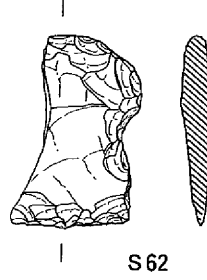
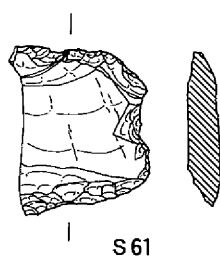
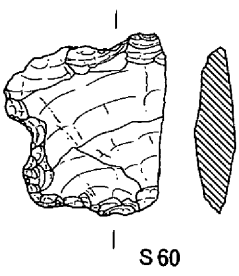
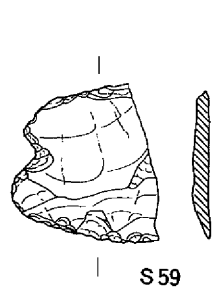
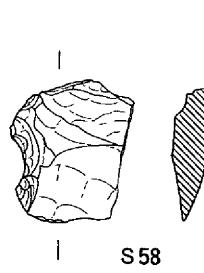
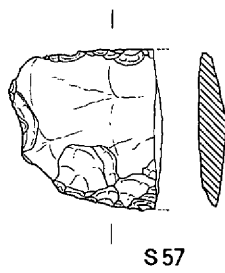
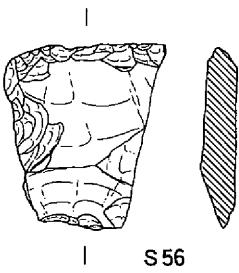
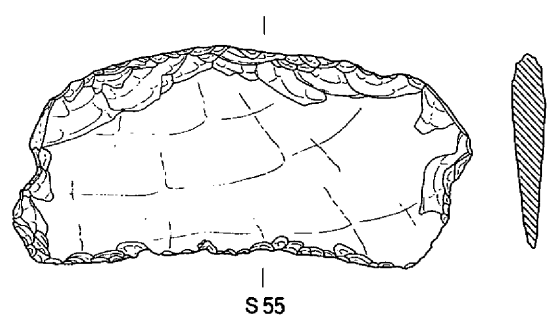
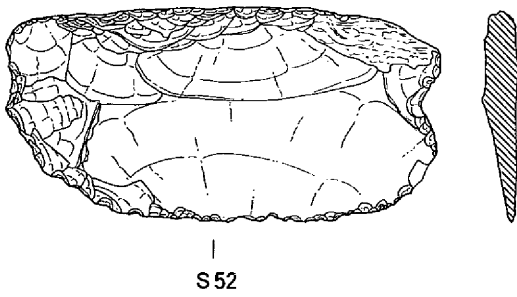
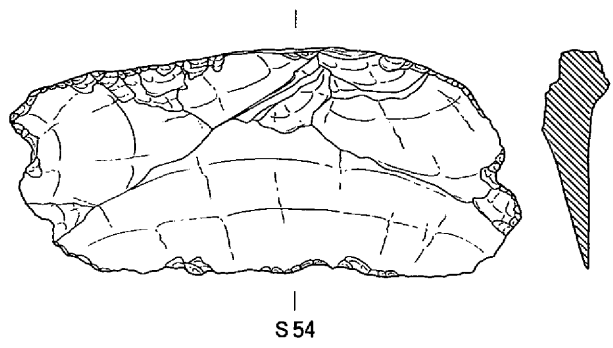
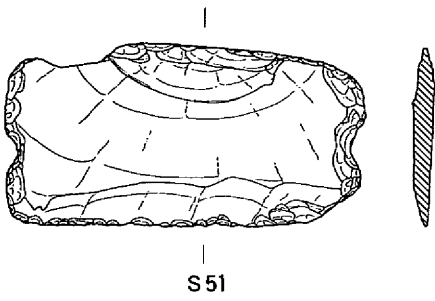
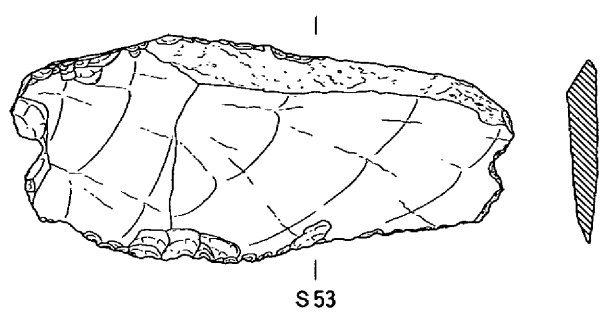
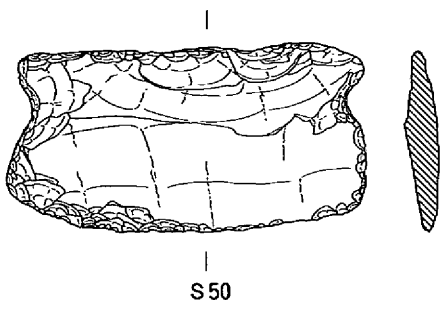
溝—64 2915・2916

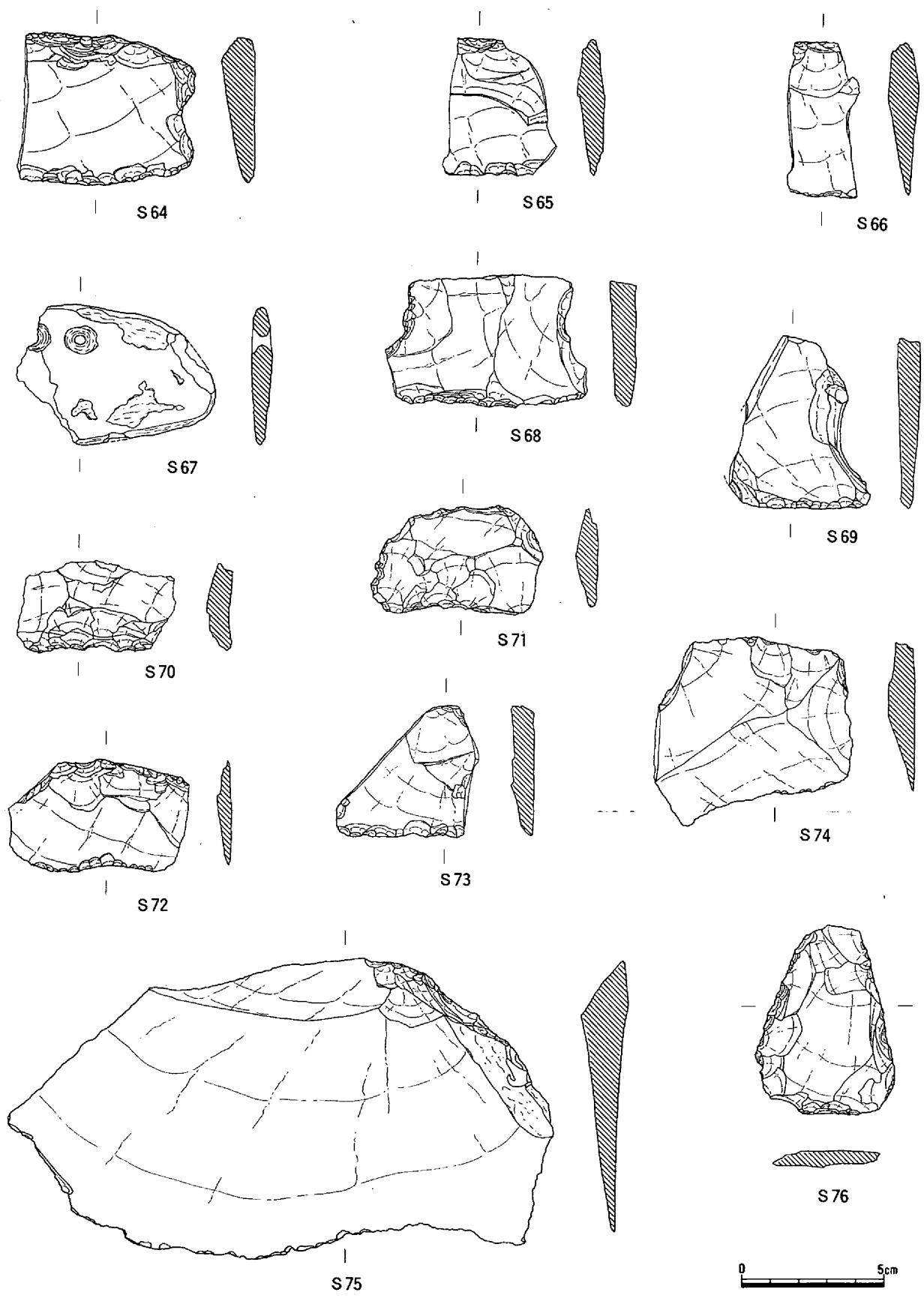
ピット 2920~2929・2933~2936

包含層 2917~2919・2930~2932・2937~2948

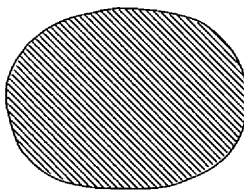
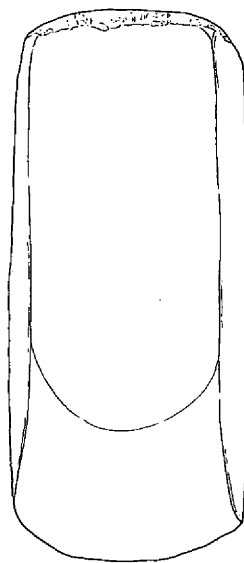
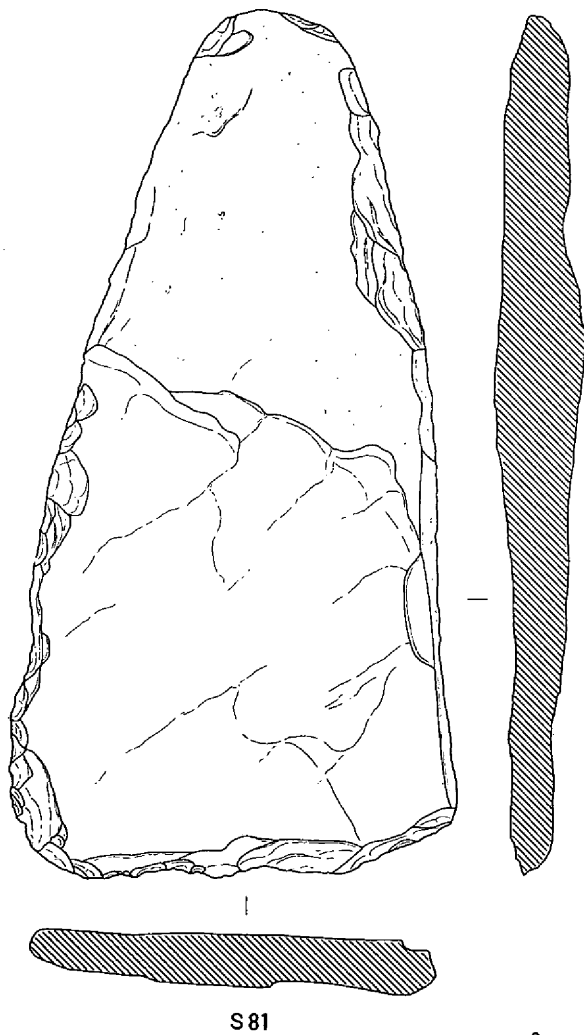
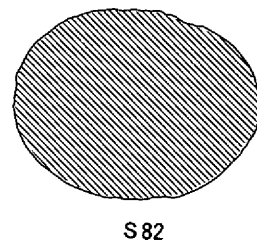
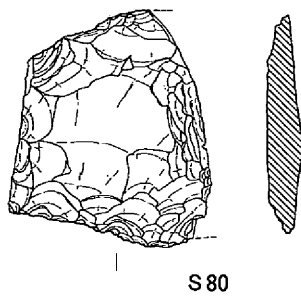
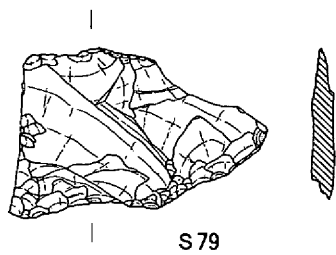
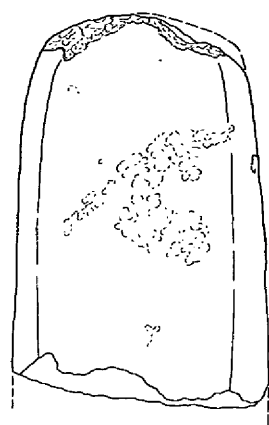
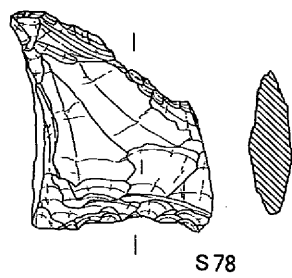
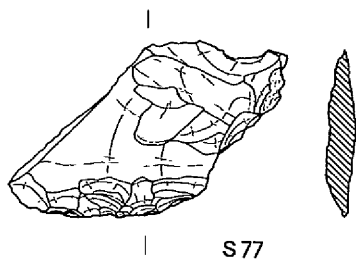


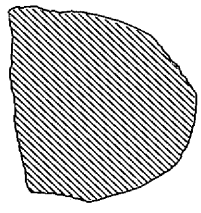
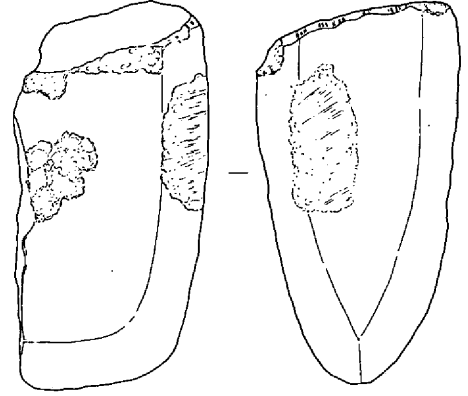
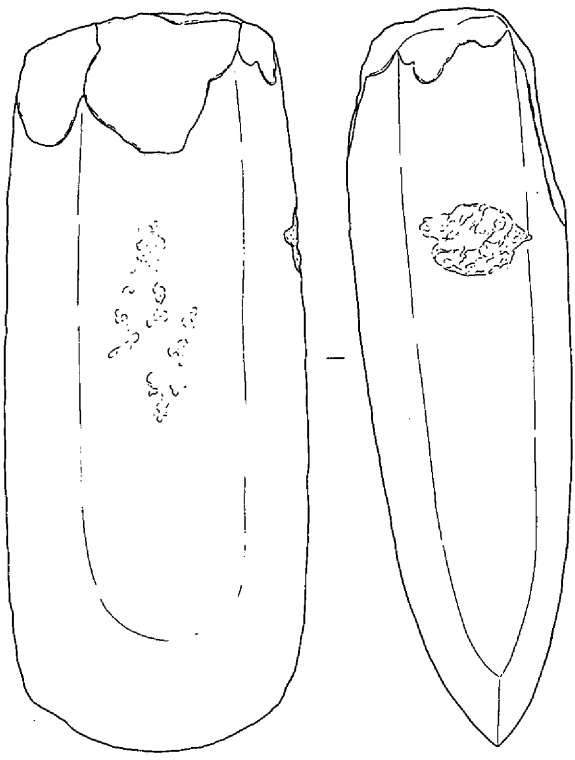
中屋調査区出土石製品 1



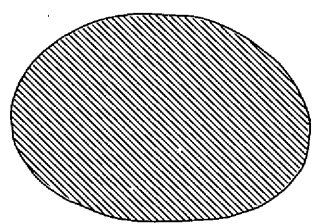


中屋調査区出土石製品 3

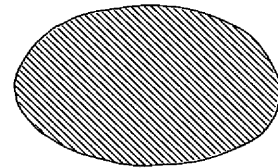
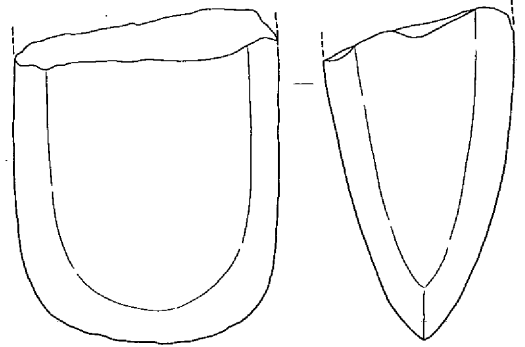




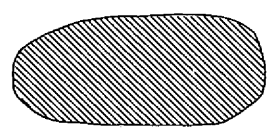
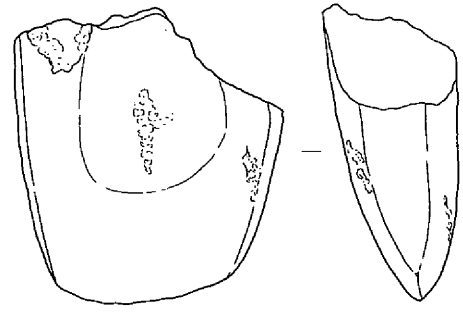
S 85



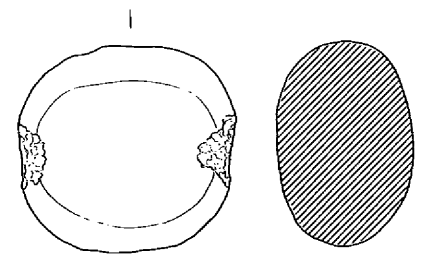
S 84



S 86



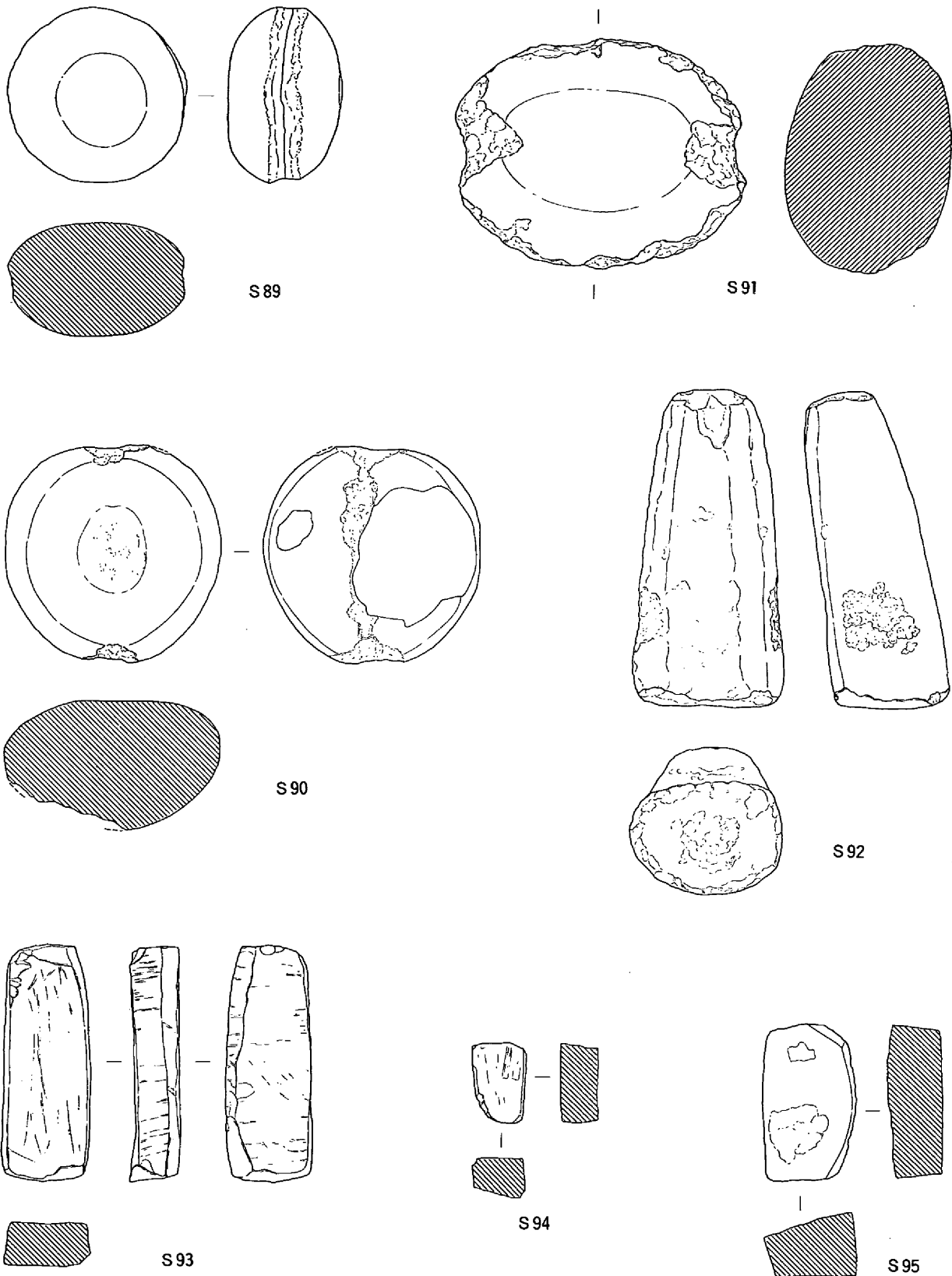
S 87



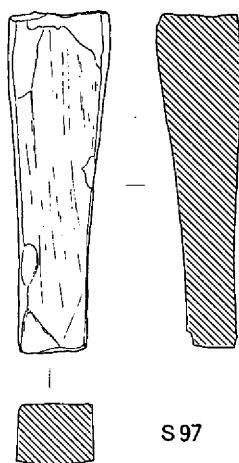
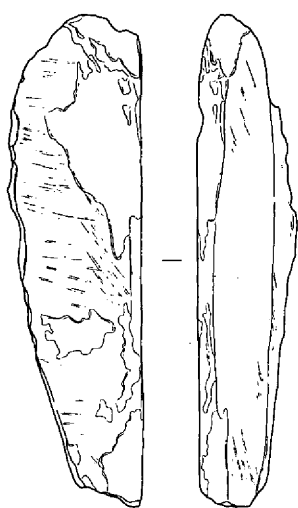
S 88



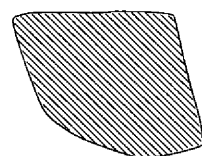
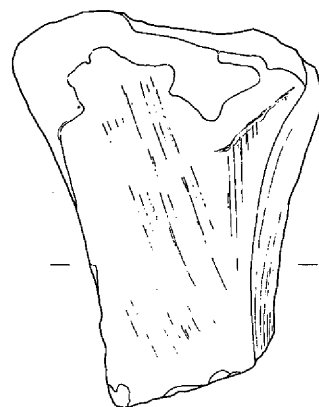
中屋調査区出土石製品 5



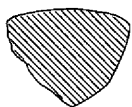
中屋調査区出土石製品 6



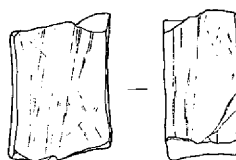
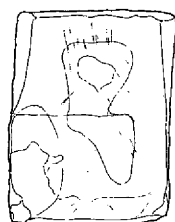
S97



S98



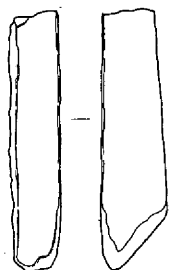
S96



S101



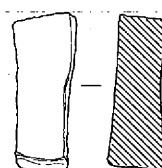
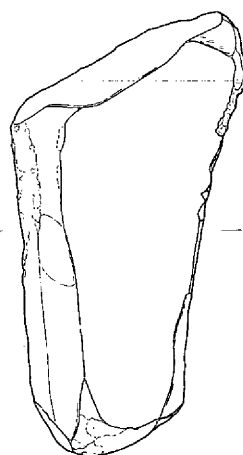
S102



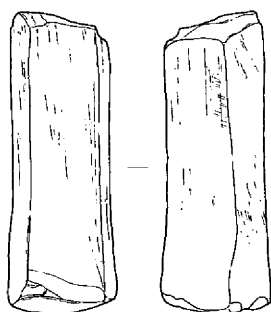
S100



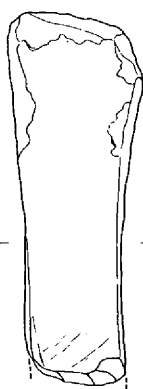
S99



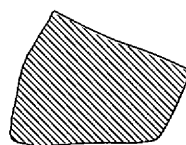
S106



S103



S104

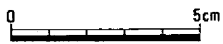
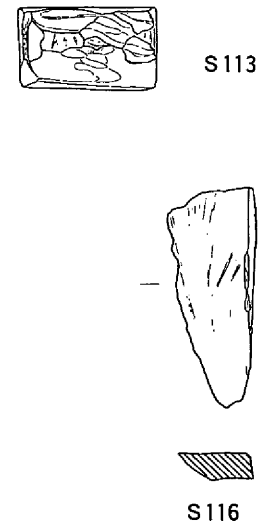
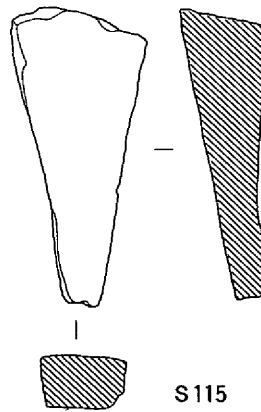
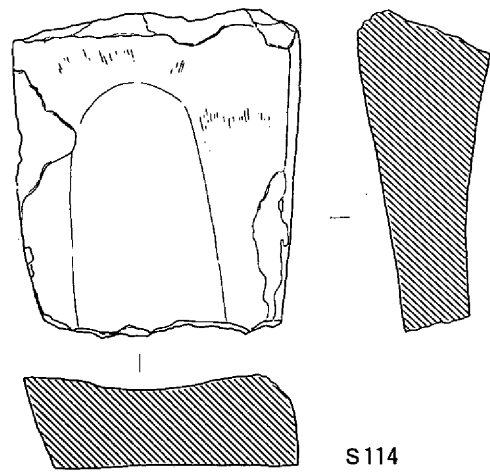
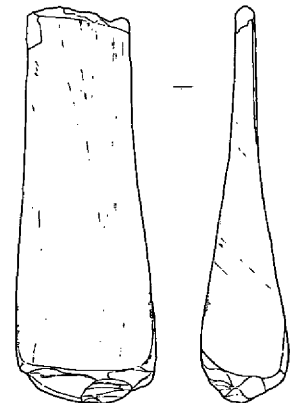
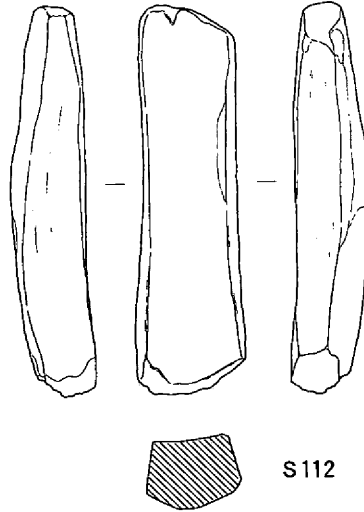
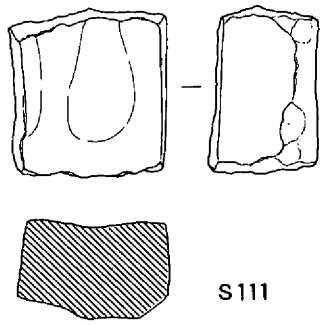
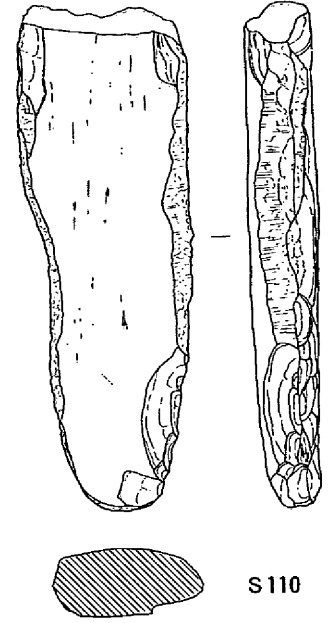
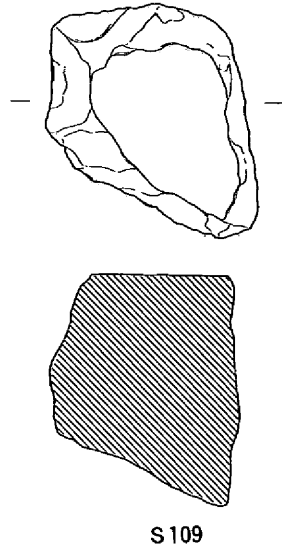
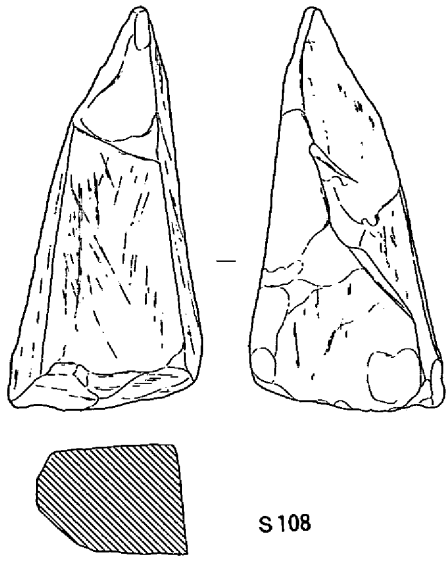


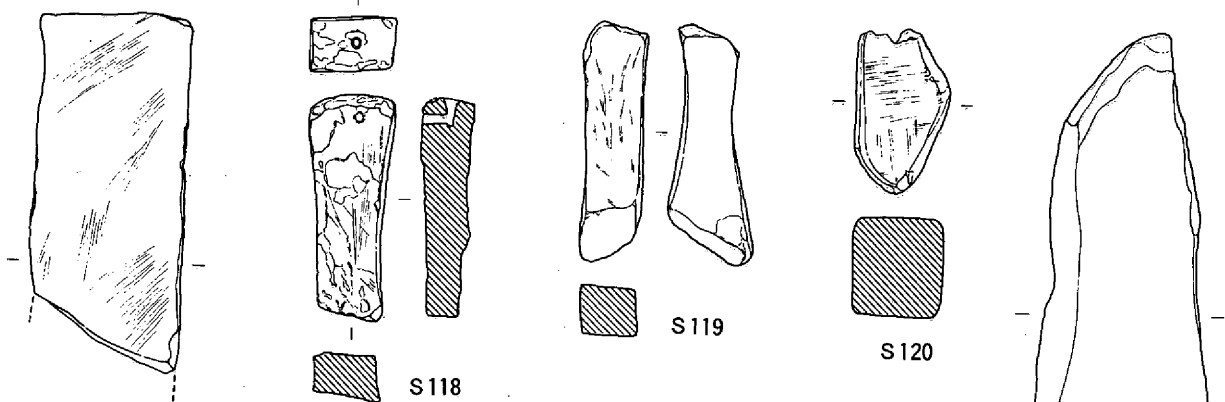
S105



S107





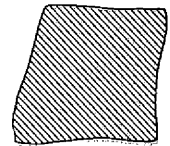
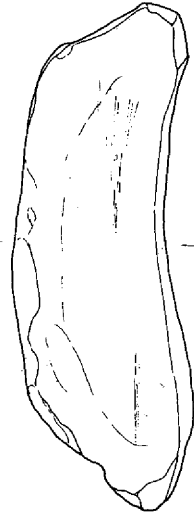
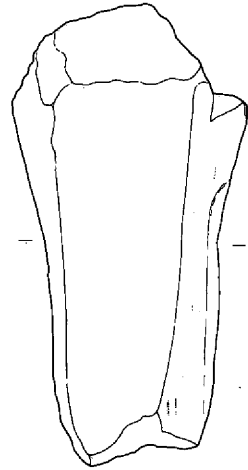
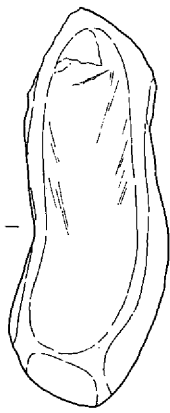


S117

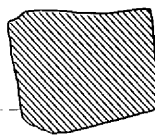
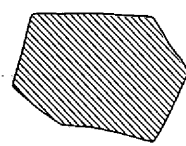
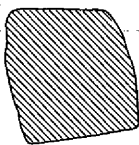
S118

S119

S120



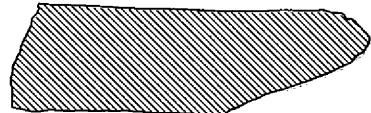
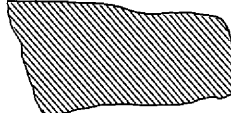
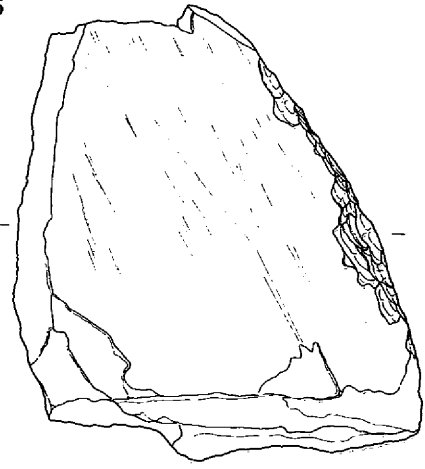
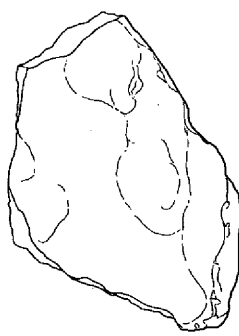
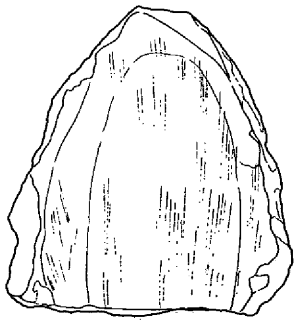
S121



S122

S124

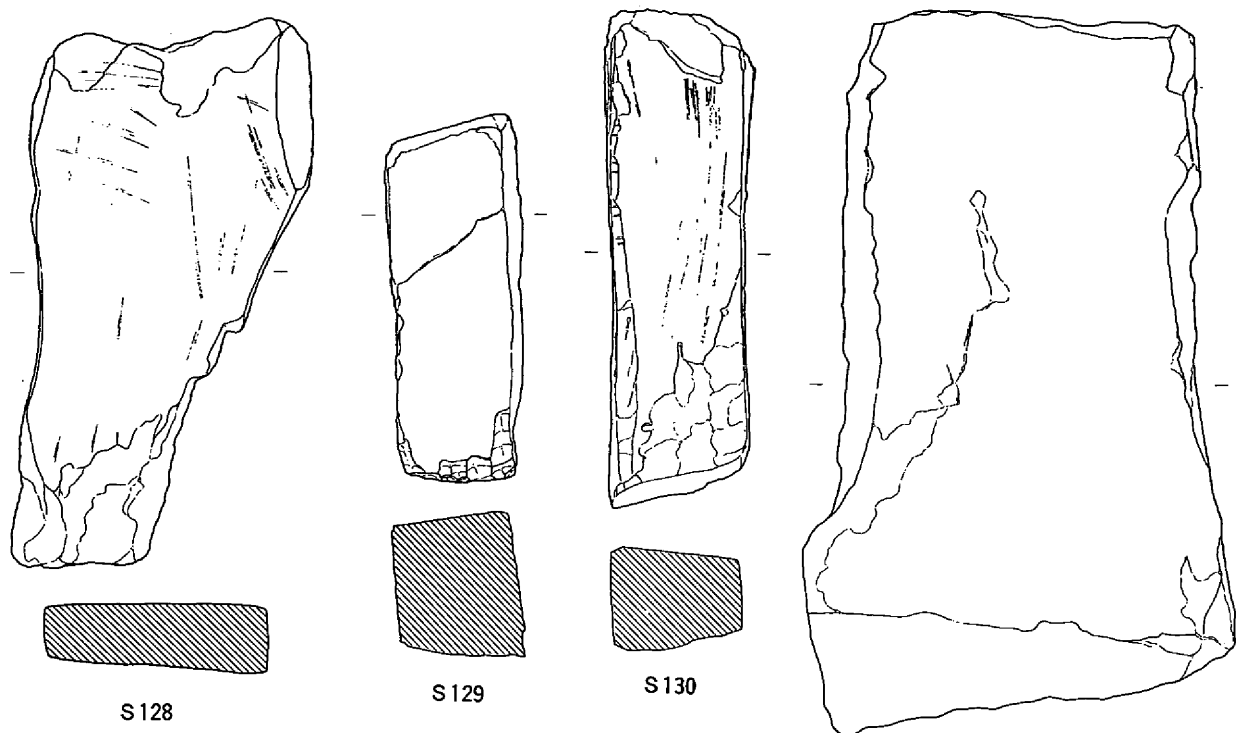
S125



S123

S126

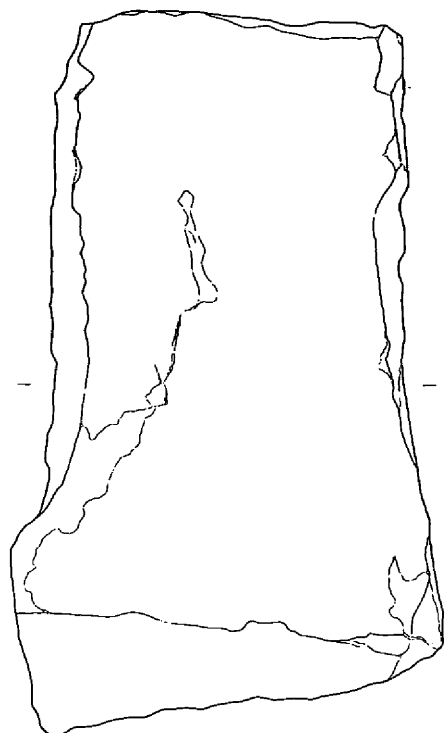
S127



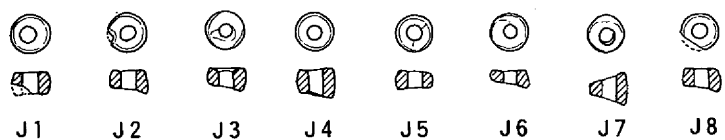
S128

S129

S130



S131



J1

J2

J3

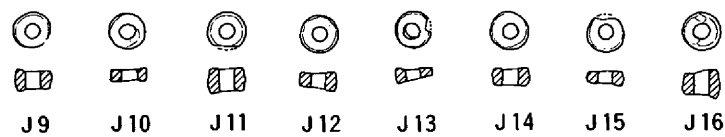
J4

J5

J6

J7

J8



J9

J10

J11

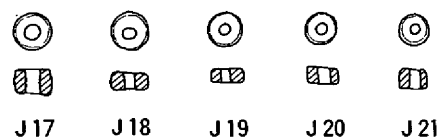
J12

J13

J14

J15

J16



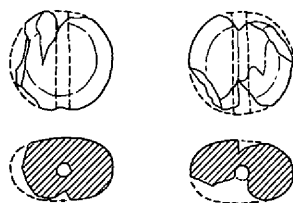
J17

J18

J19

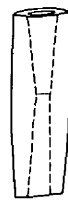
J20

J21



J27

J28



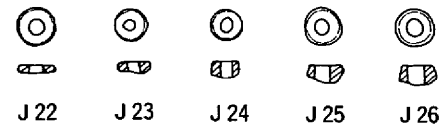
J29



J30



J31



J22

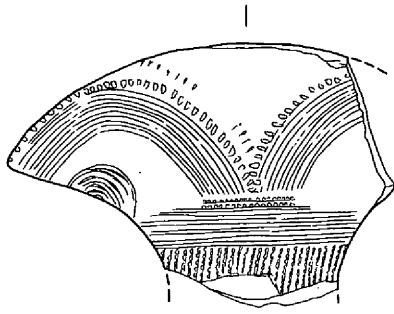
J23

J24

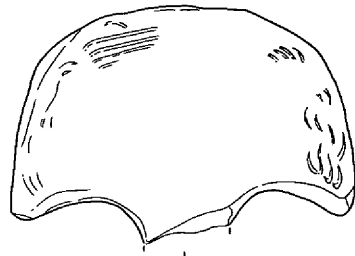
J25

J26

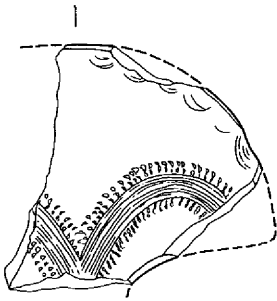




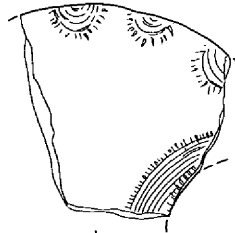
C18



C23



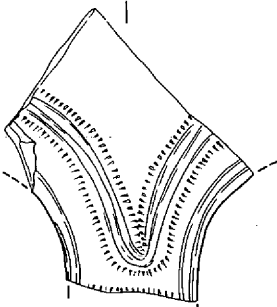
C19



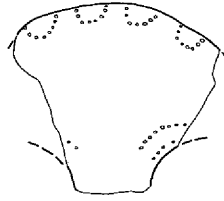
C20



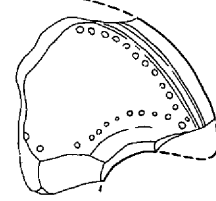
C24



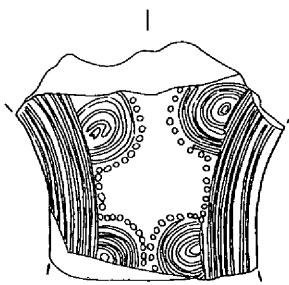
C21



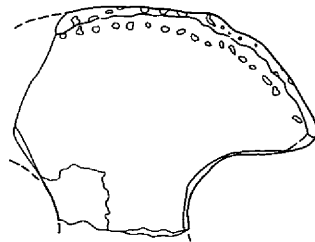
C25



C26

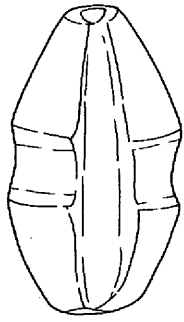


C22

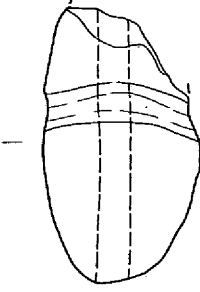
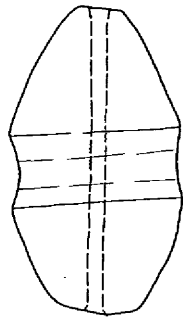


C27

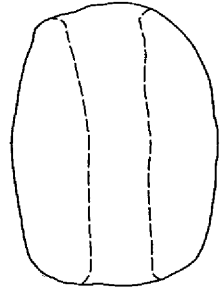
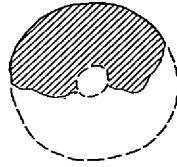




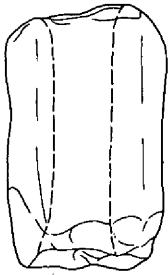
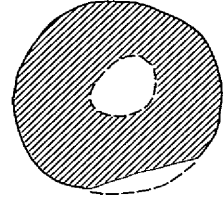
C28



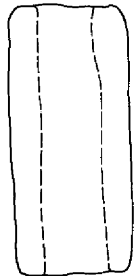
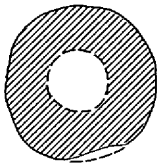
C29



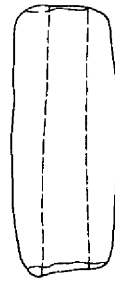
C30



C31



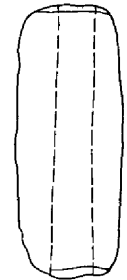
C32



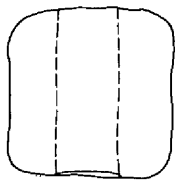
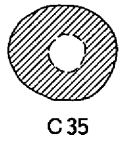
C33



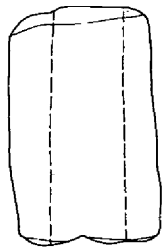
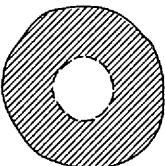
C34



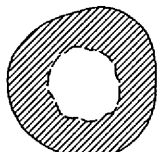
C35



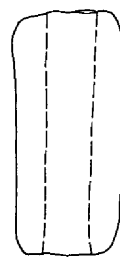
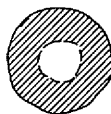
C36



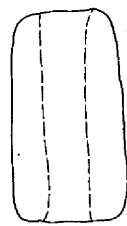
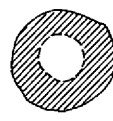
C37



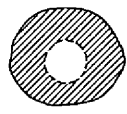
C38

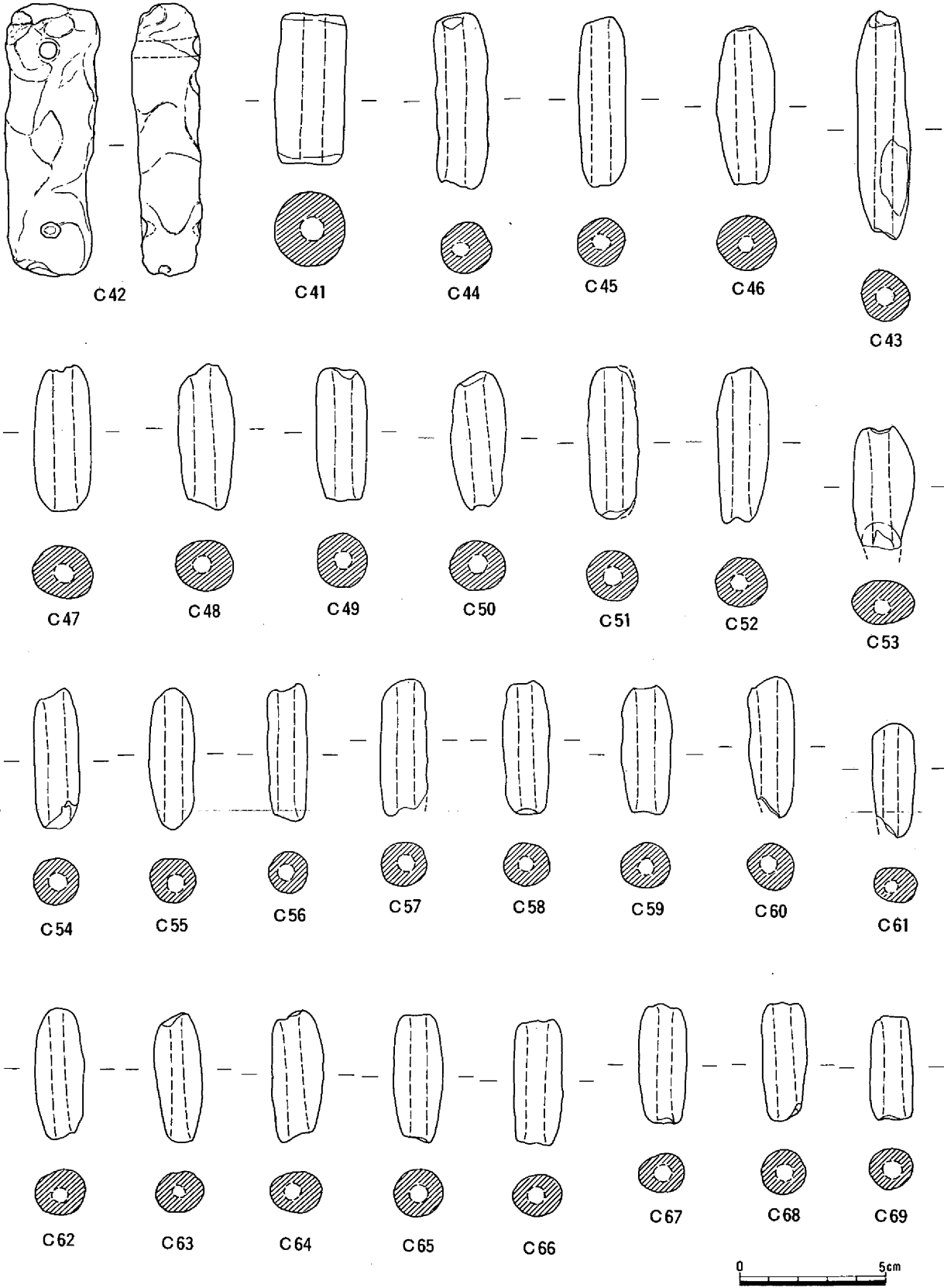


C39

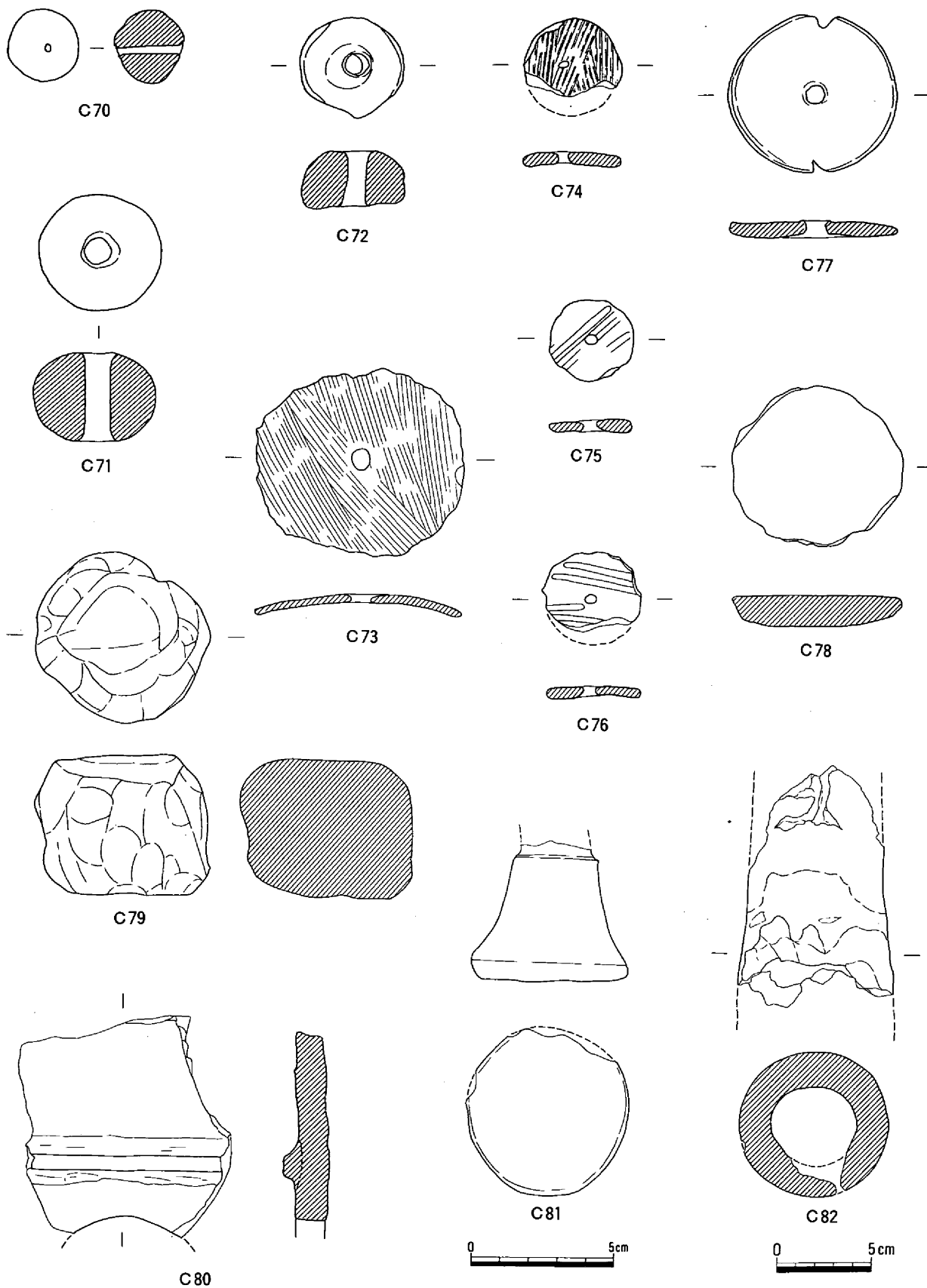


C40





中屋調査区出土土製品 3



中屋調査区出土土製品 4

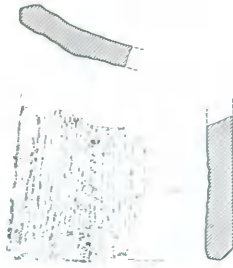


C83

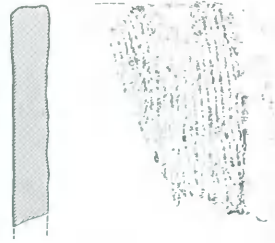


C84

0 10cm



C85



C86

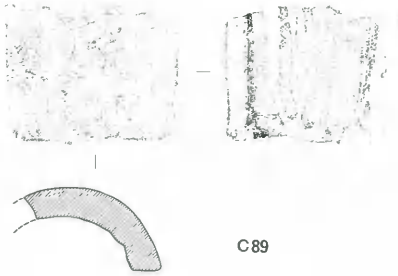


C87

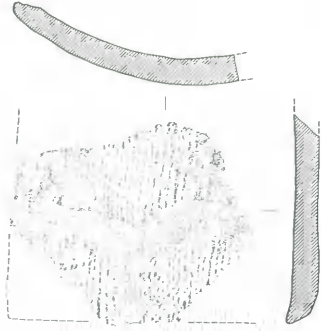


C88

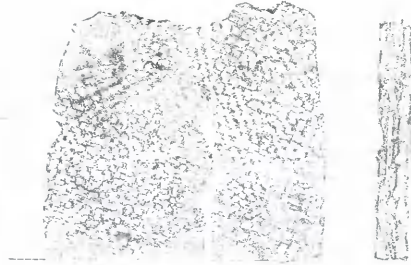
0 10cm



C89



C90



C91



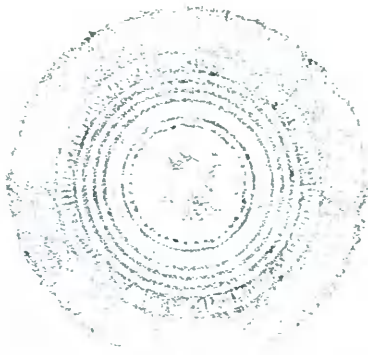
C93



C92



0 10cm



M6



M18



M17



M16



M19



M20



M21



M7



M8



M9



M10



M11



M12



M15



M14



M13



M22



M25



M26



M23



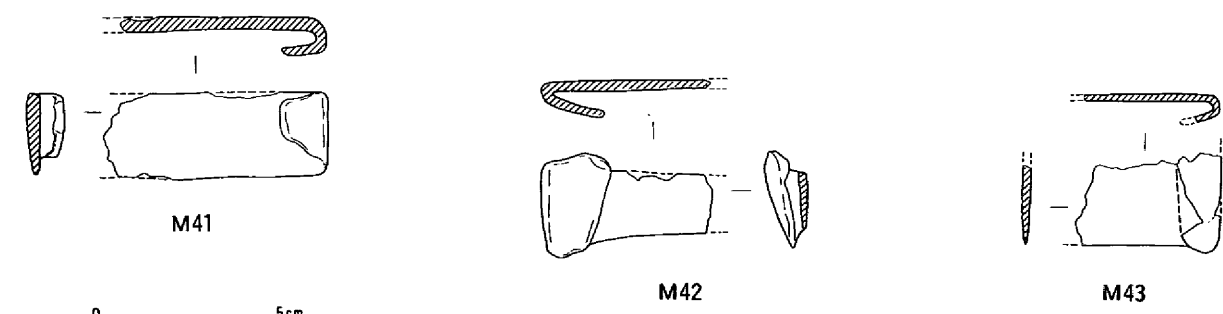
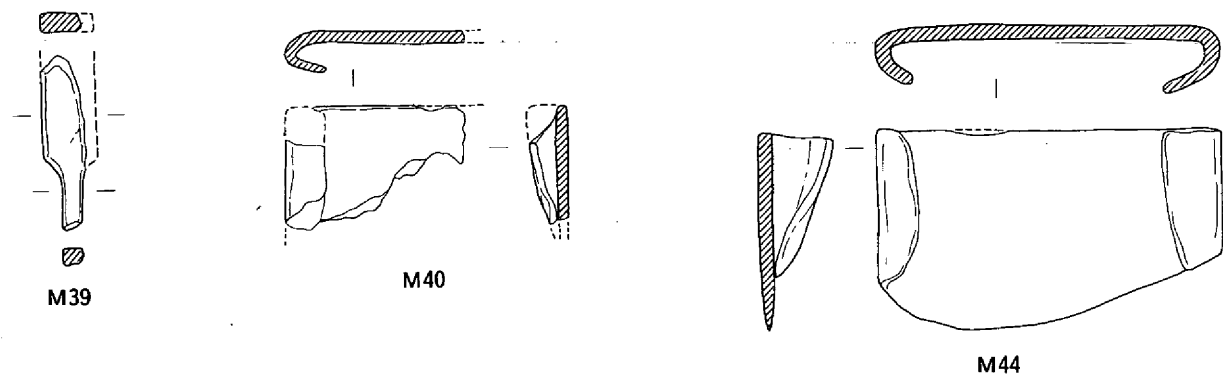
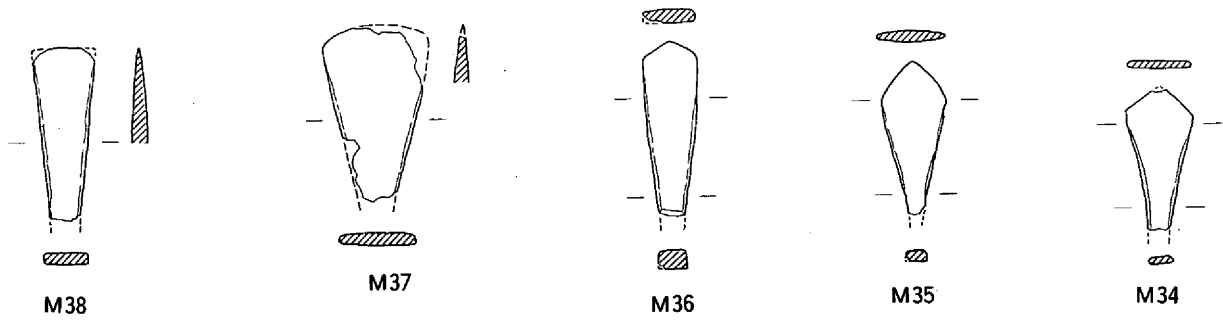
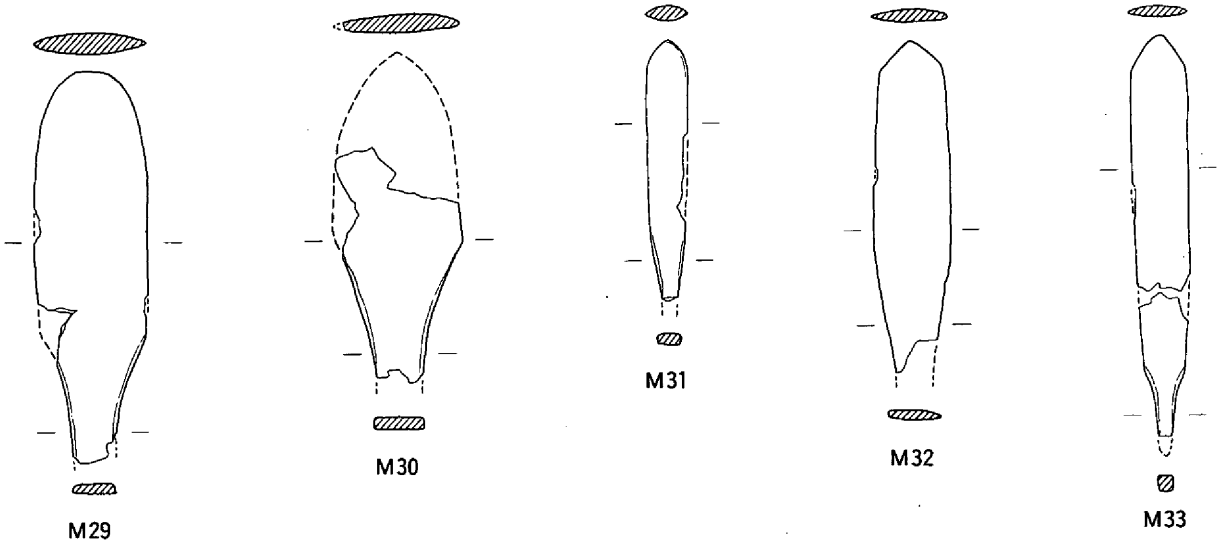
M24



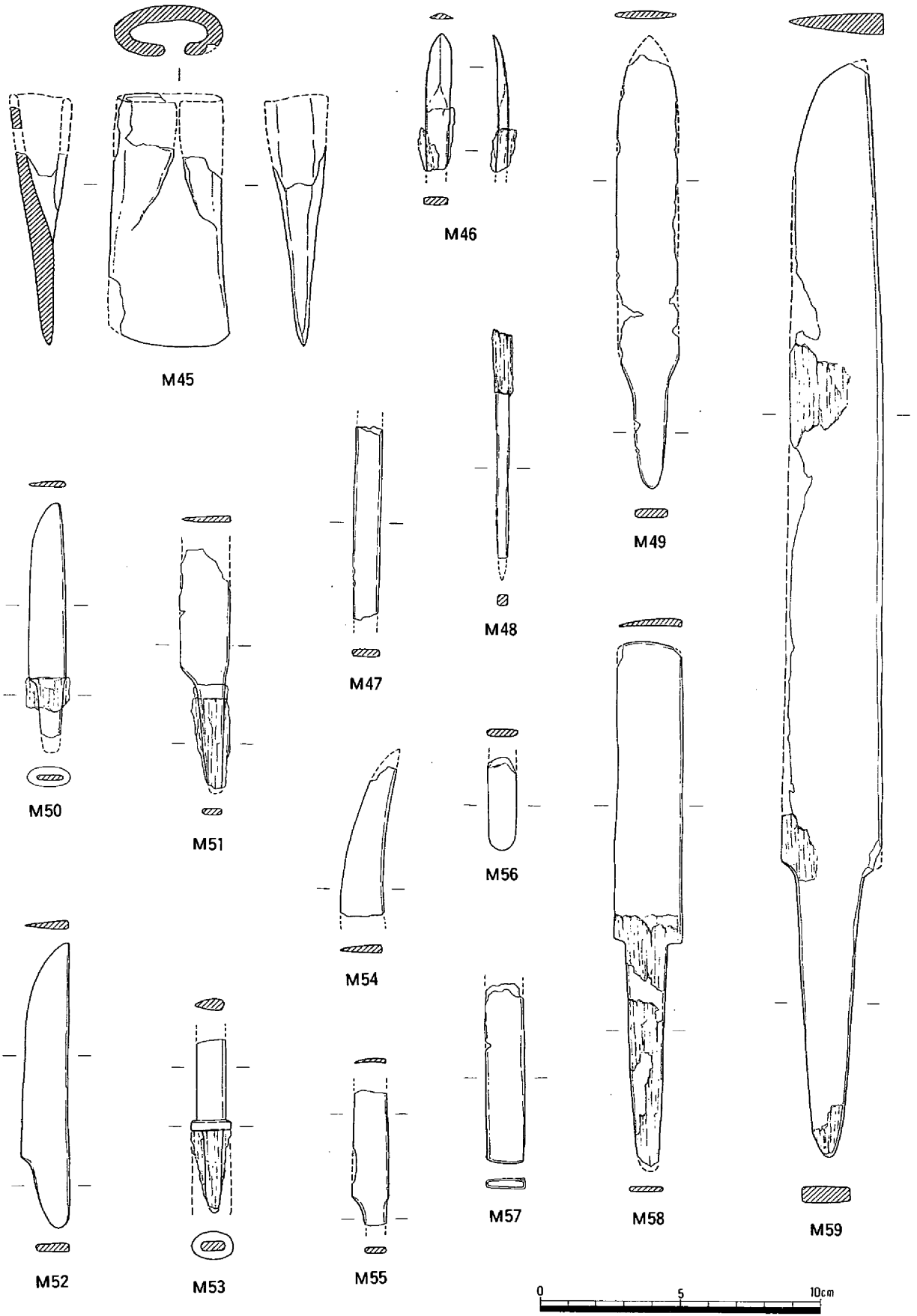
M27



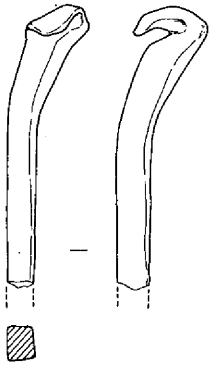
M28



中屋調査区出土金属製品 2



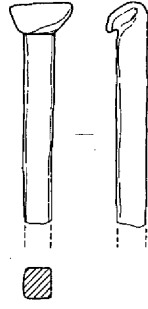
中屋調査区出土金属製品 3



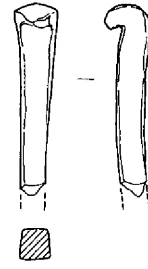
M60



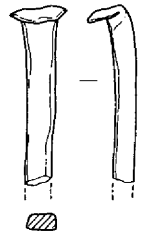
M61



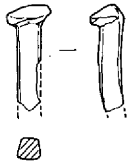
M62



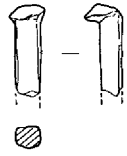
M63



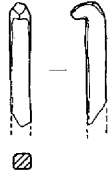
M64



M65



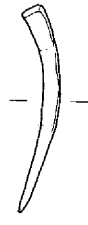
M66



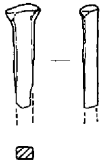
M67



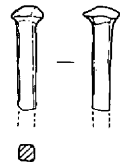
M68



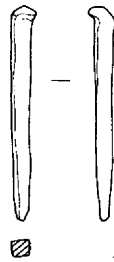
M69



M70



M71



M72



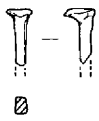
M75



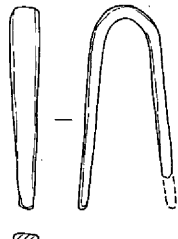
M76



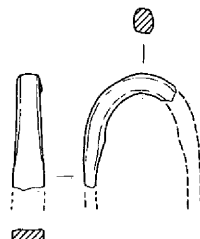
M77



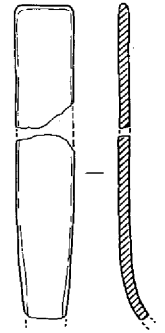
M73



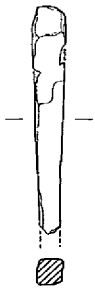
M78



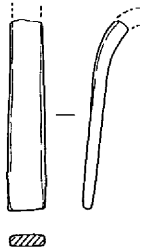
M80



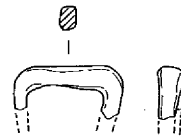
M82



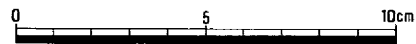
M74

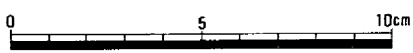
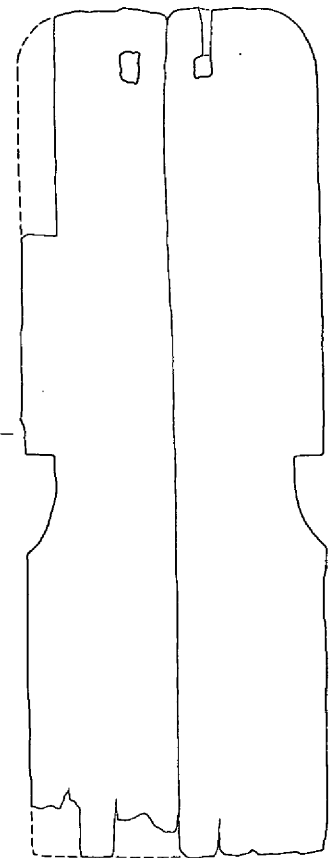
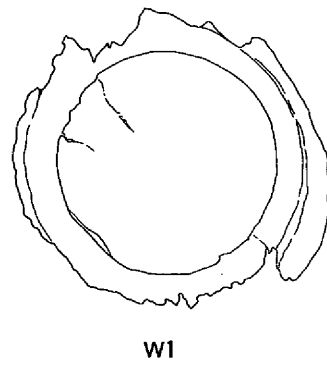
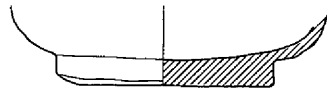
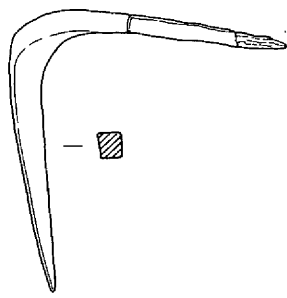
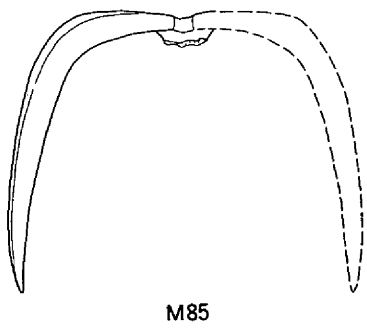
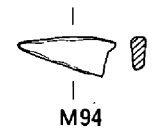
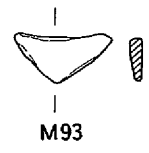
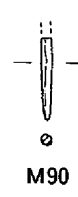
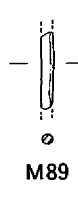
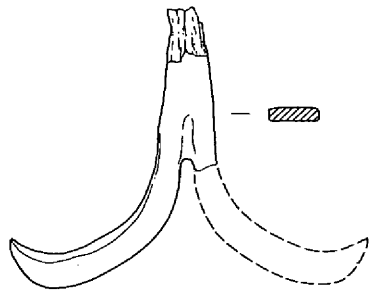
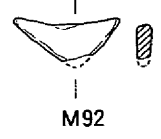
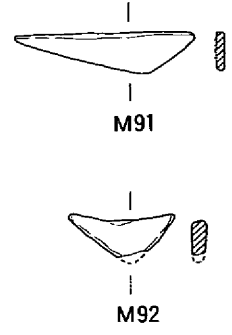
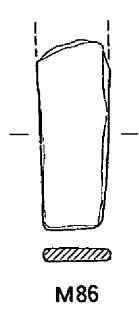
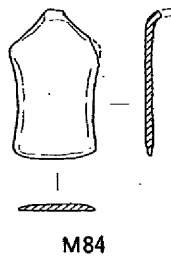
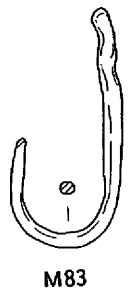


M79



M81





写 真 図 版

遺 構

1. 弥生時代の遺構
2. 古墳時代の遺構
3. 古代の遺構
4. 中・近世の遺構

遺 物

1. 弥生時代の土器
2. 古墳時代の土器
3. 古代の土器
4. 中・近世の土器
5. 石器
6. 土製品
7. 玉類
8. 金属製品

竪穴住居-14
(南西から)



竪穴住居-14
中央穴(東から)



竪穴住居-14
遺物出土状況
(東から)





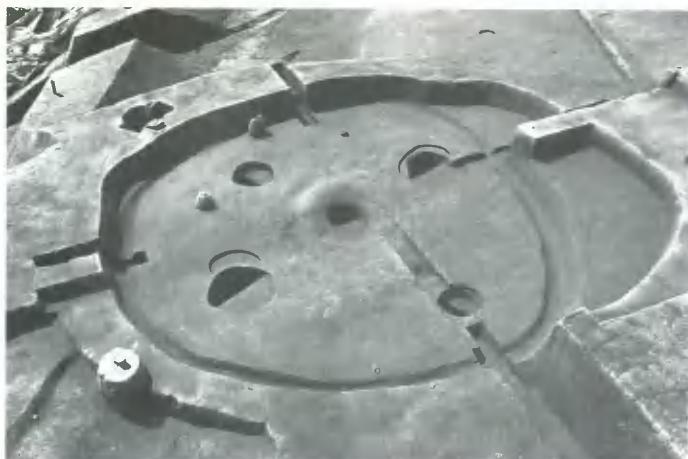
竪穴住居-15
(南から)



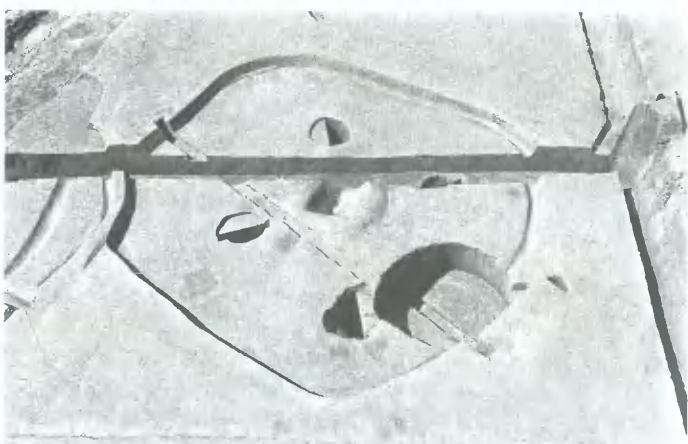
竪穴住居-15
中央穴 (北から)



竪穴住居-16・17
(西から)



豎穴住居-18・19
(東から)



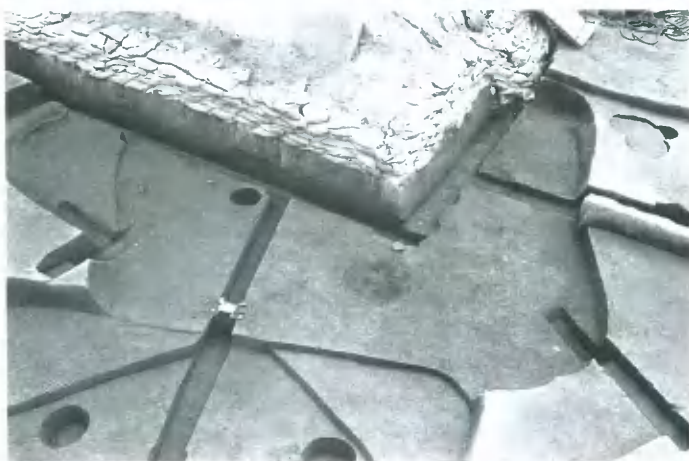
豎穴住居-20
(東から)



豎穴住居-25
(北から)



竪穴住居-28
(西から)



竪穴住居-29
(北から)



竪穴住居-28
(北から)

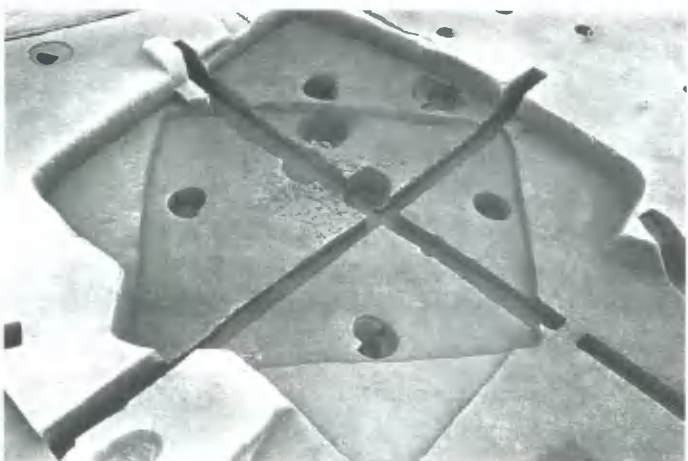
竪穴住居-31
(西から)



竪穴住居-31
出土遺物 (南から)



竪穴住居-30
(北西から)





井戸-1
土層断面(南西から)



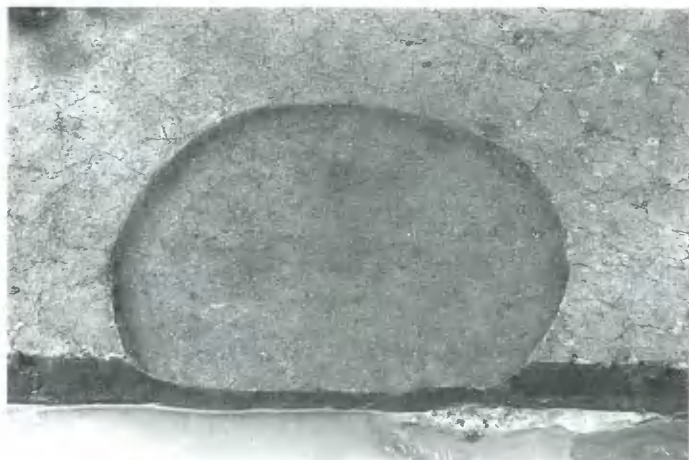
井戸-1
(南西から)



袋状土壌-1~5
(北東から)



袋状土壙-1
(北東から)



袋状土壙-4
(北東から)



袋状土壙-3
(北東から)



袋状土壙-5
(東から)



袋状土壙-6
(北から)



袋状土壙-7
(北西から)



袋状土壙-10
(南東から)



袋状土壙-12
(南西から)



袋状土壙-13
(西から)



袋状土壙-14
(西から)



袋状土壙-18
(北から)



袋状土壙-19
(西から)

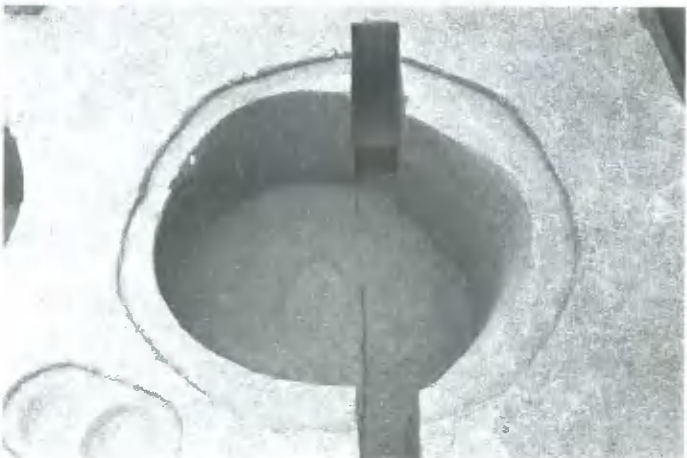
袋状土壙-25
(南から)

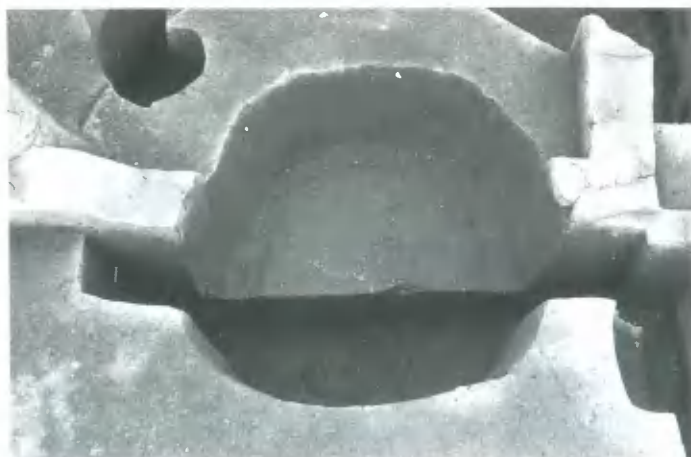


袋状土壙-27
(東から)

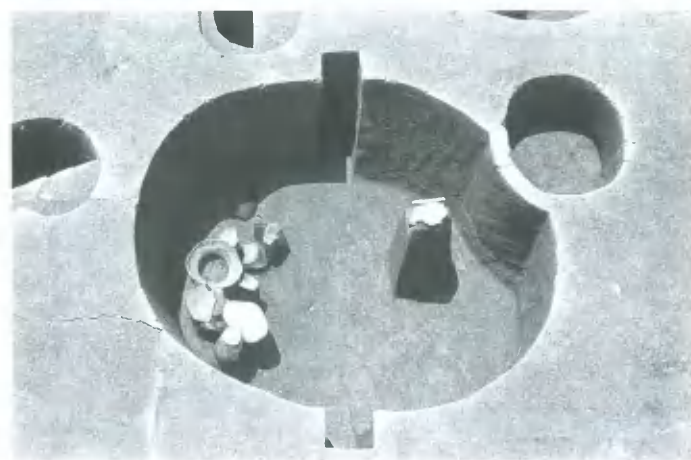


袋状土壙-31
(西から)





袋状土壙-34
(西から)



袋状土壙-36
(北東から)



袋状土壙-37
(東から)



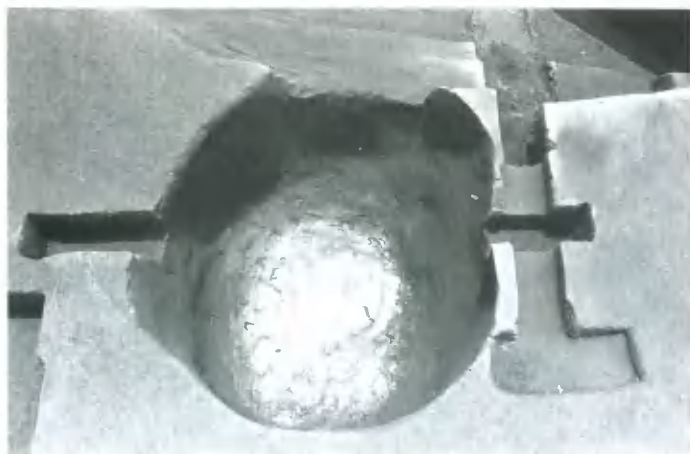
袋状土壙-37
(東から)



袋状土壙-41
(西から)



袋状土壙-42
(南東から)



袋状土壺—44
(北から)



袋状土壺—45
(北から)



袋状土壺—46
(北から)



袋状土壙-47
(南から)



袋状土壙-49
(南西から)



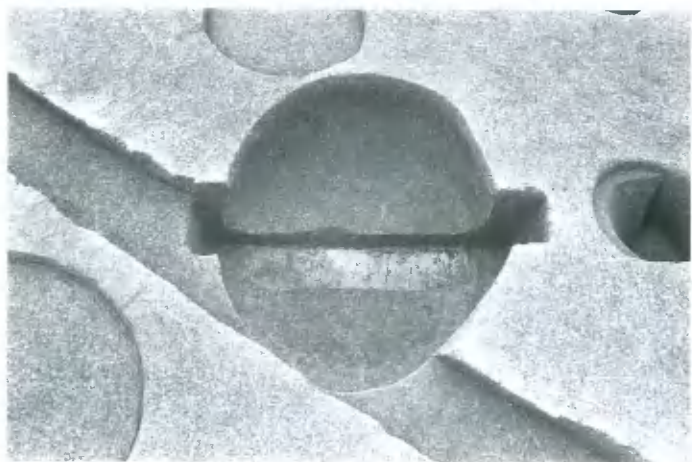
袋状土壙-51
(西から)



袋状土壙-52
(南西から)



袋状土壙-53
(西から)



袋状土壙-55
(東から)

袋状土壙－57
(南西から)



袋状土壙－61
(北から)

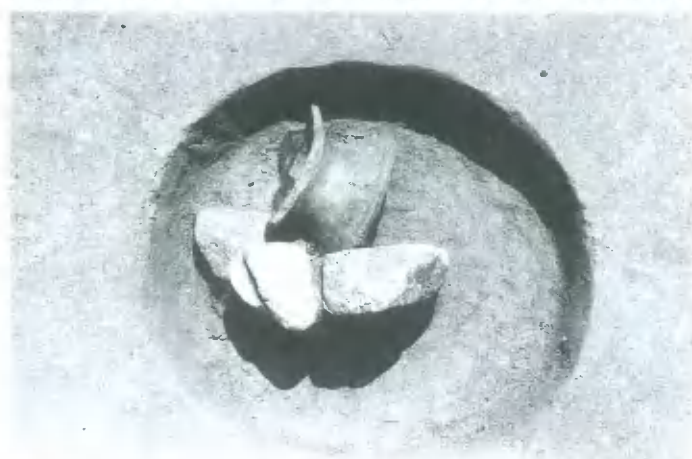


袋状土壙－69
(南から)





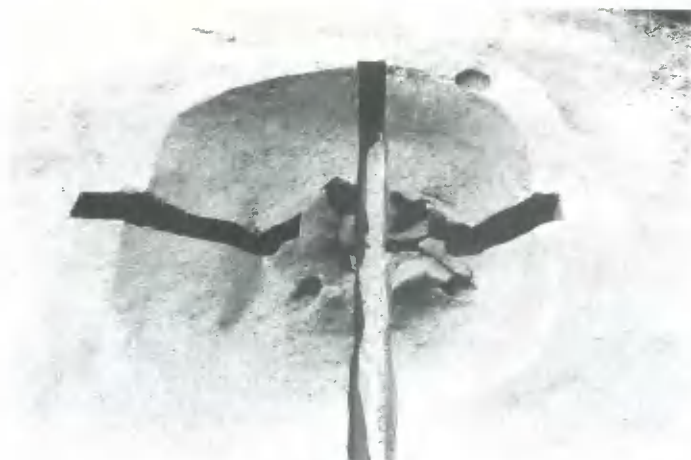
土壙-43
(北東から)



土壙-44
(西から)



土壙-45
(東から)



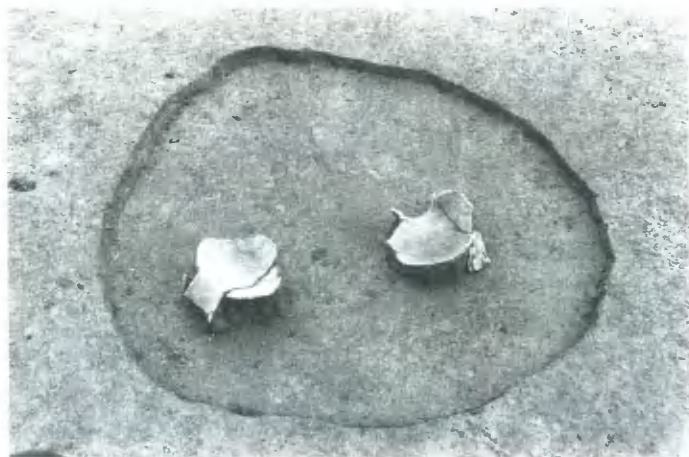
土壙-46
(北西から)



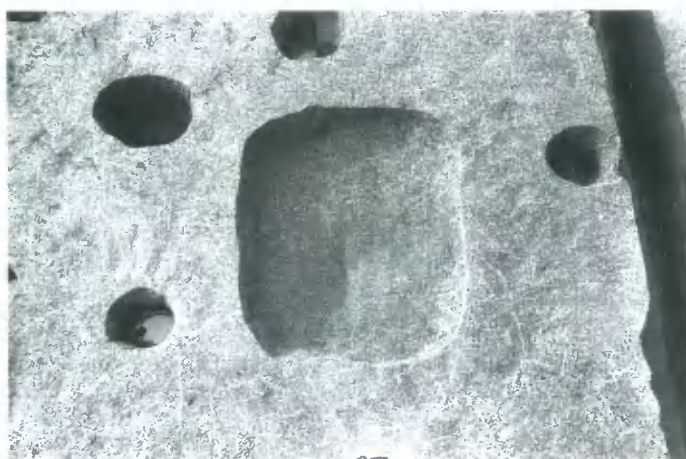
土壙-46
部分 (西から)



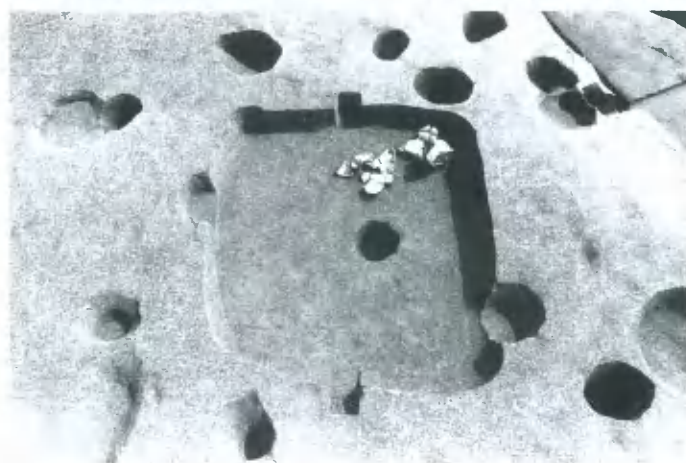
土壙-48
(東から)



土壙-49
(北から)



土壙-50
(南東から)

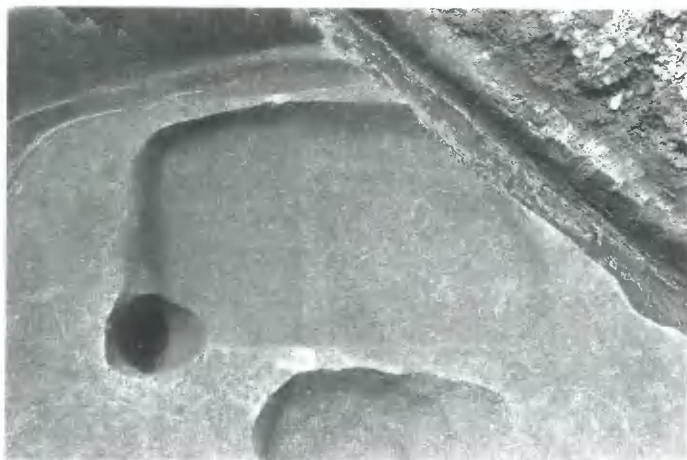


土壙-52
(北から)

土壙-53
(南東から)

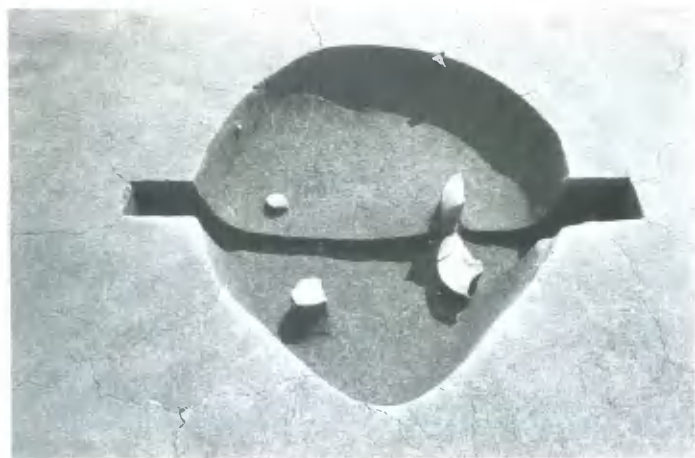


土壙-54
(北から)

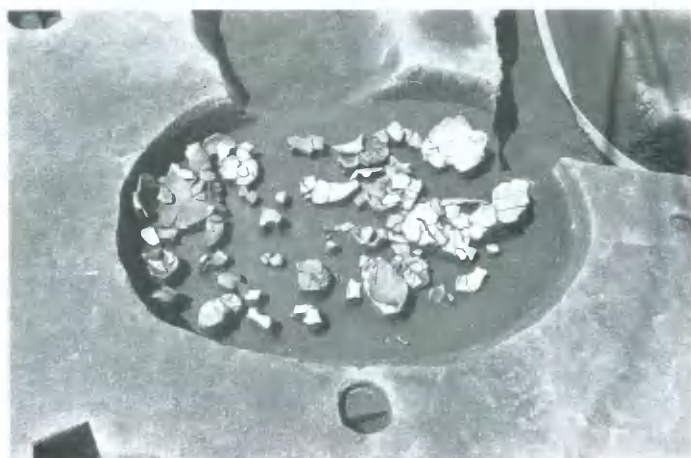


土壙-72
(南から)





土壇-74
(北から)



土壇-100
(南から)



土器溜り
(北西から)

弥生時代全景
(南から)



溝-3
(北東から)



溝-3
遺物出土状況
(南西から)





竪穴住居-32
(北から)



竪穴住居-32
中央穴(東から)



竪穴住居-35
(南から)

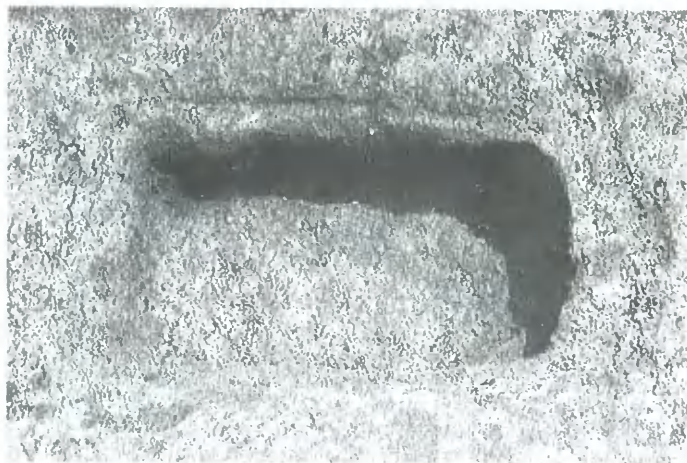
竪穴住居-35
(東から)



竪穴住居-36
(南から)



竪穴住居-36
中央穴 (南から)

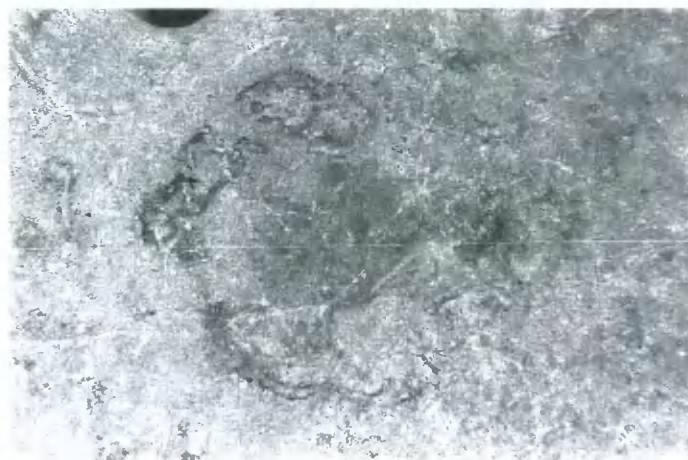




竪穴住居-37B
(南東から)



竪穴住居-37B
遺物出土状況
(南東から)



竪穴住居-37B
中央穴 (南西から)

竪穴住居-37A
(南東から)



竪穴住居-38B
(南東から)



竪穴住居-39
(南東から)





竪穴住居-39
方形土坑(北西から)



竪穴住居-39
中央穴(北西から)



竪穴住居-37~41
(南から)



竪穴住居-40B
(南西から)



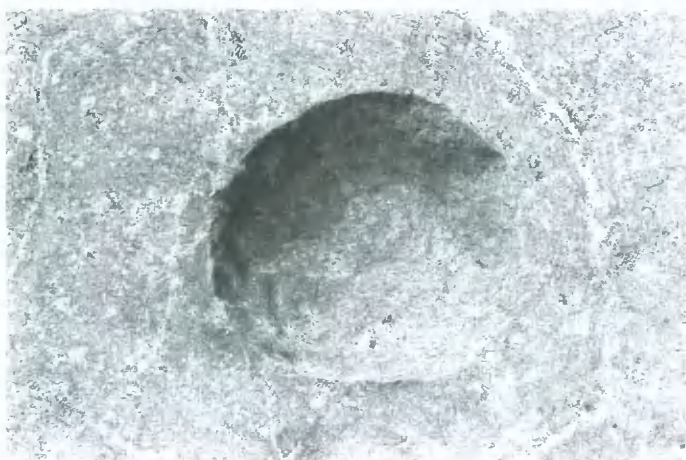
竪穴住居-41
(北東から)



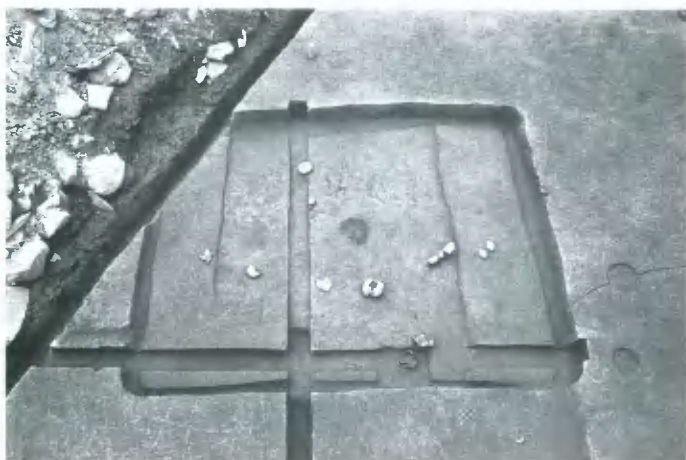
竪穴住居-41
中央穴 (北から)



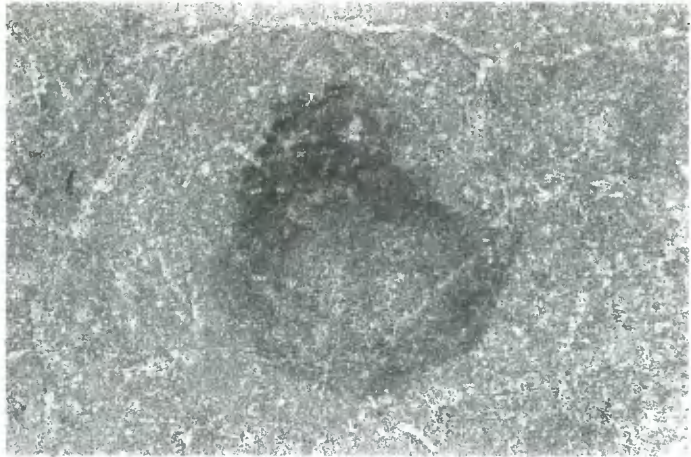
竪穴住居-42
(南から)



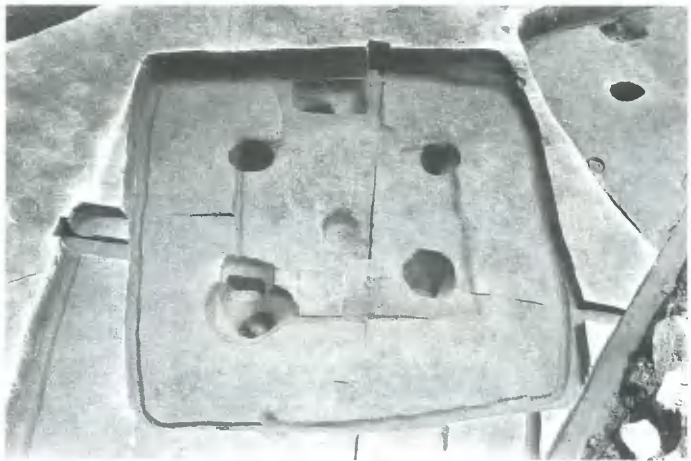
竪穴住居-42
中央穴(東から)



竪穴住居-43
(南東から)



竪穴住居-43
中央穴（北西から）



竪穴住居-44
（北東から）



竪穴住居-44
方形土壘（北東から）



竪穴住居-45B
(西から)

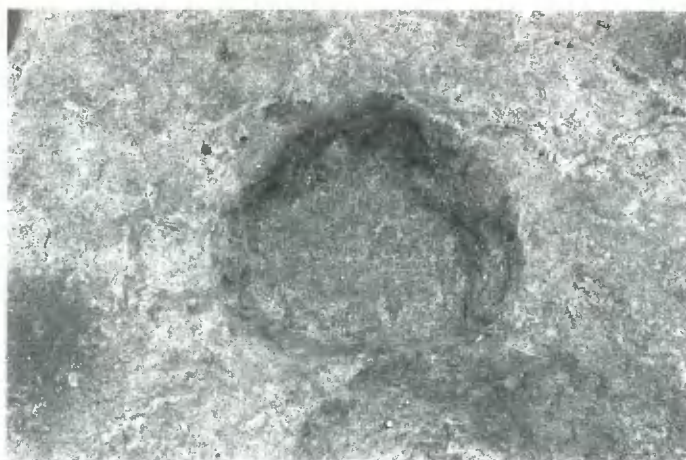


竪穴住居-45B
方形土壇 (西から)



竪穴住居-45B
小ピット (南から)

竪穴住居-45B
中央穴（西から）



竪穴住居-45B
柱穴（西から）



竪穴住居-45B
遺物出土状況
（西から）





竪穴住居-46B
(西から)



竪穴住居-46A
(西から)



竪穴住居-46B
中央穴 (南から)

竪穴住居-48
(北西から)

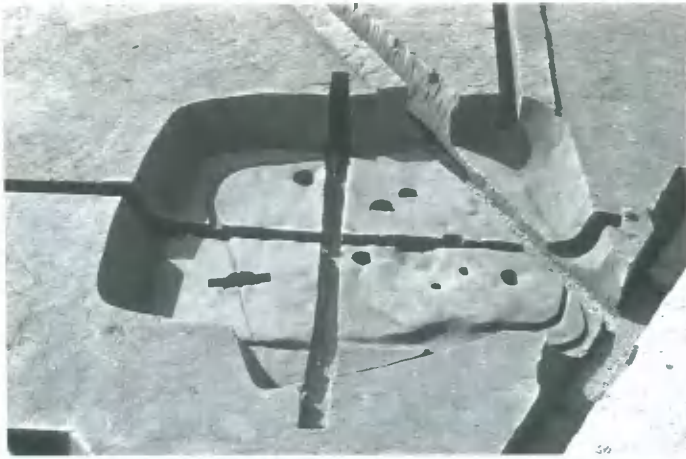


竪穴住居-48
方形土壇(北西から)



竪穴住居-49
(北から)





竪穴住居-50・51
(東から)



竪穴住居-50
遺物出土状況
(南西から)



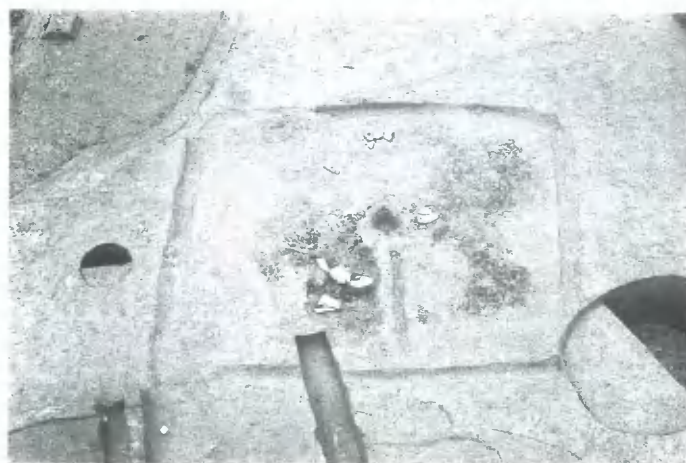
竪穴住居-50
遺物出土状況
(南東から)



竖穴住居-52
(北西から)



竖穴住居-53
(南西から)



竖穴住居-54
(南東から)



竪穴住居-55
(南西から)



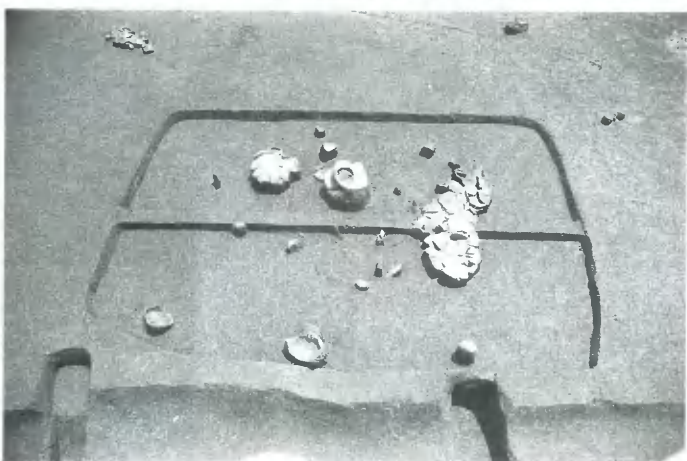
竪穴住居-56
(北から)



竪穴住居-58
(南西から)



竪穴住居-60
(南から)



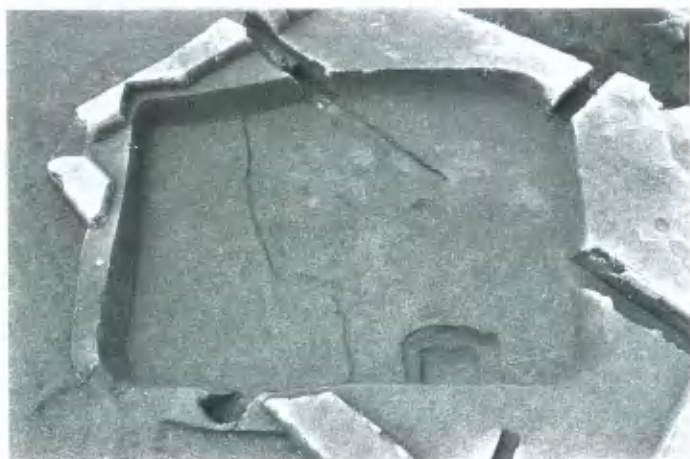
竪穴住居-62
(西から)



竪穴住居-64
(北から)



竪穴住居-65
(南西から)

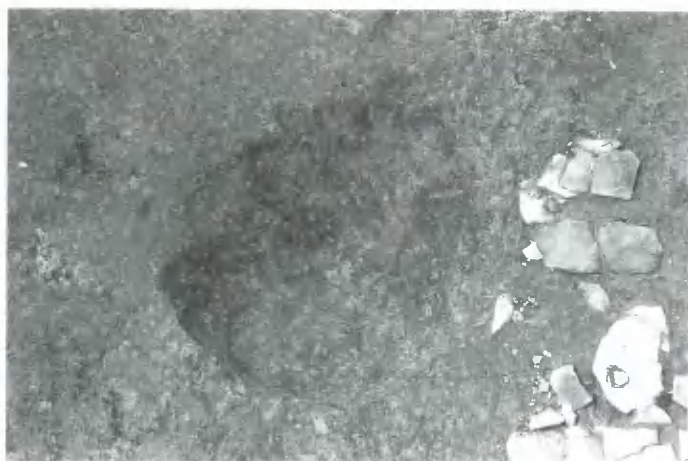


竪穴住居-67
(南から)



竪穴住居-67
方形土壇 (南から)

竪穴住居-67
中央穴 (南から)



竪穴住居-68
方形土壇 (南から)



竪穴住居-72
(西から)

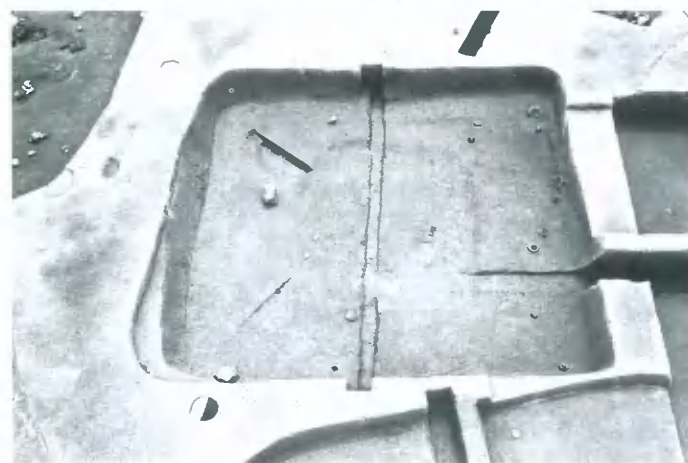




竪穴住居-74
(北から)



竪穴住居-76
(北から)



竪穴住居-79
(東から)

竪穴住居-81
(南から)

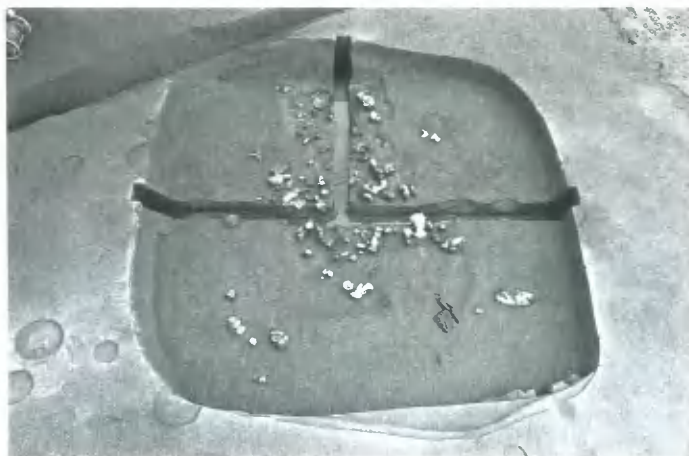


竪穴住居-82
(南から)



竪穴住居-82
柱穴 (南から)





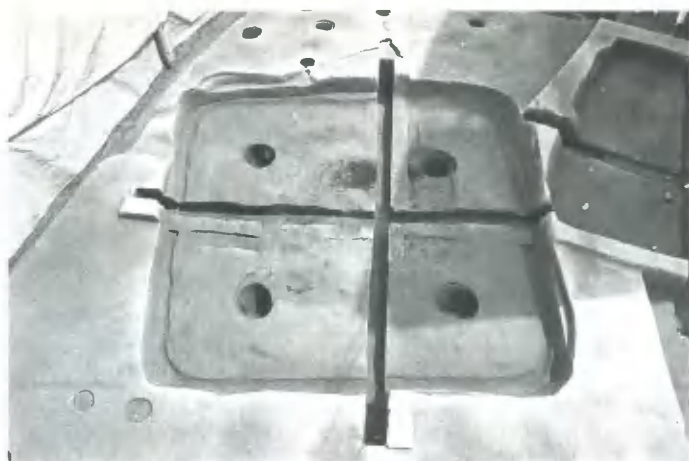
竪穴住居-84
(北から)



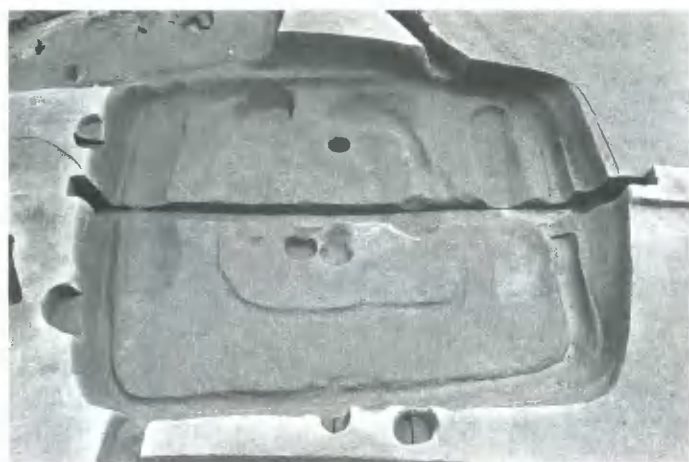
竪穴住居-84
(北から)



竪穴住居-88
(北から)



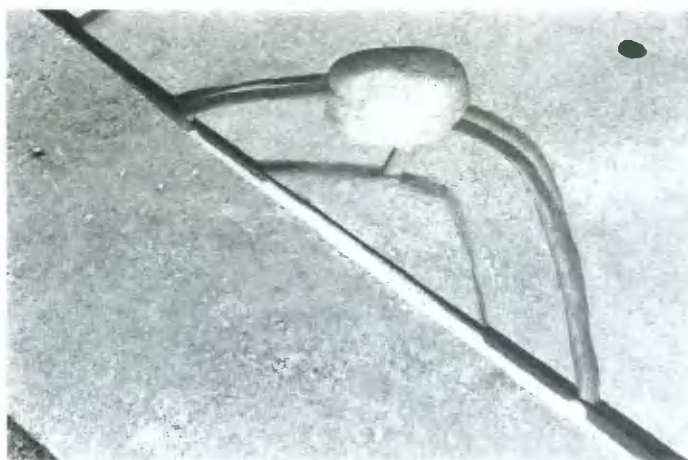
竪穴住居-90
(北から)



竪穴住居-91
(南西から)



竪穴住居-94・95
(東から)



竪穴住居-101
(南東から)



竪穴住居-102
(北東から)



竪穴住居-102
遺物出土状況
(北西から)

竪穴住居-102
方形土壙(北西から)



竪穴住居-103
(北から)



竪穴住居-103
遺物出土状況
(西から)





竪穴住居-114
(北西から)



竪穴住居-114
カマド (南から)



竪穴住居-114
遺物出土状況
(東から)

竪穴住居-117
(北から)



竪穴住居-117
カマド (南東から)



竪穴住居-118
(南西から)

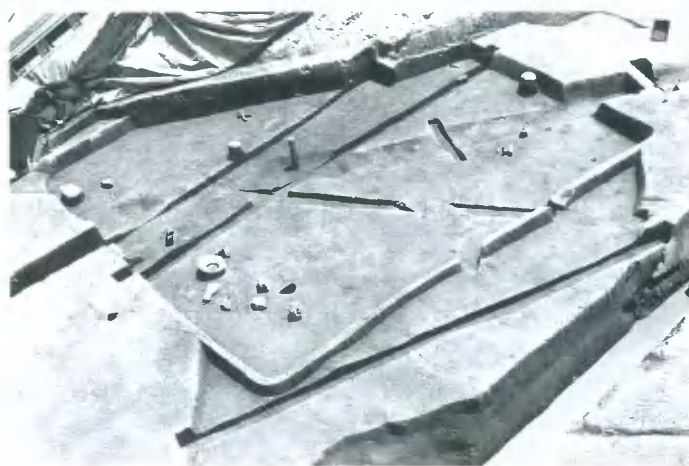




竪穴住居-118
遺物出土状況
(南から)



竪穴住居-118
カマド (南から)

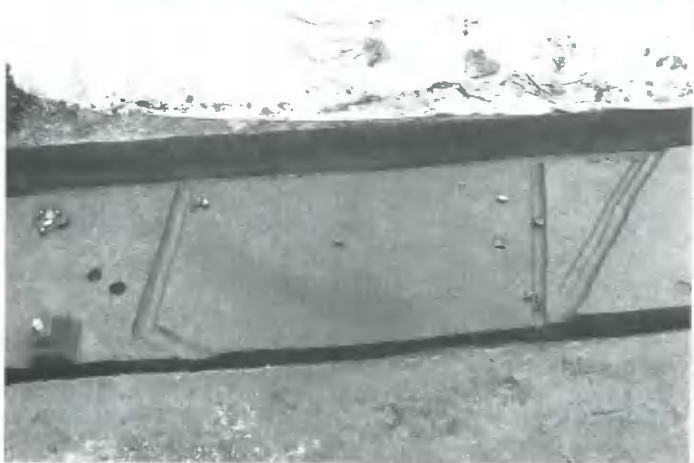


竪穴住居-119・120
(西から)

竪穴住居-119
遺物出土状況
(北東から)

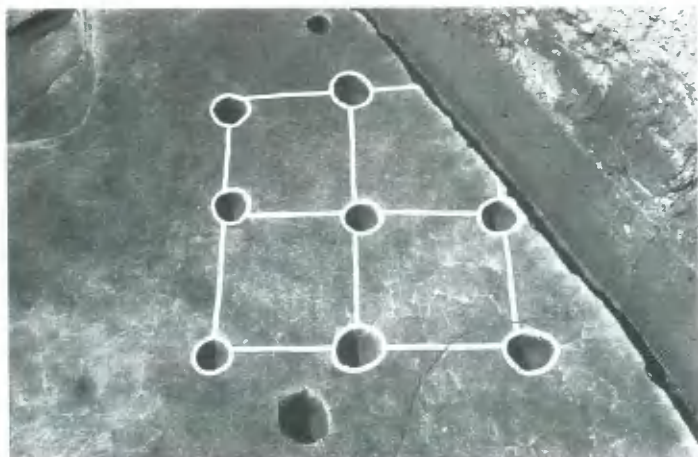


竪穴住居-124
(南西から)



竪穴住居-124
遺物出土状況
(南西から)





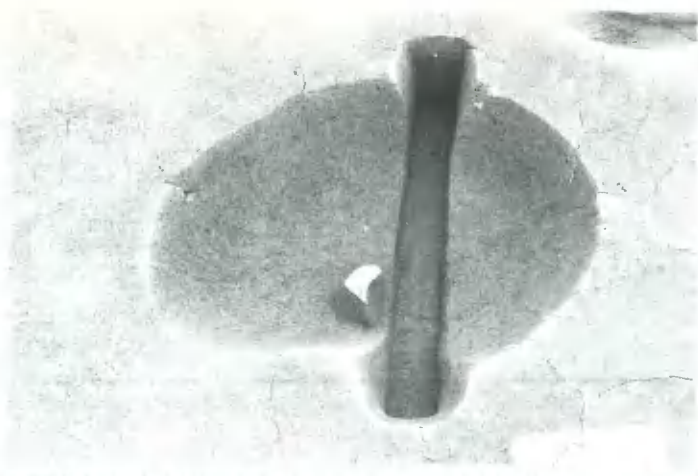
掘立柱建物-2
(南から)



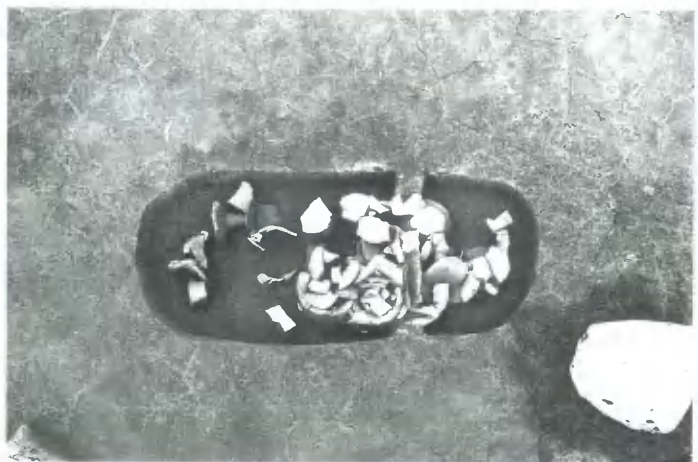
土壇-111
(北から)



土壇-110
(南から)



土壙-115
(西から)



土壙-116
(南西から)



土壙-119
(南から)



土壇-126
(東から)



土壇-127
(西から)



土壇-134
(東から)

溝-4
(北東から)

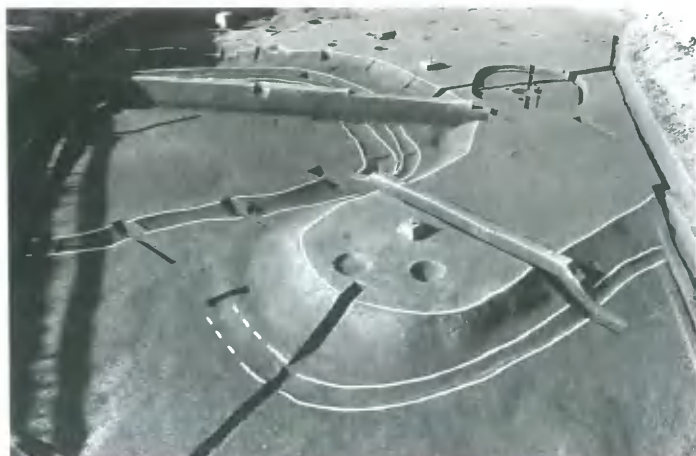


溝-4
(北東から)



溝-4
(南東から)





水田
検出状況(南から)



水田
発掘作業風景
(西から)



包含層
遺物出土状況
(西から)



溝-28
(南から)



溝-27・28
(南から)



中世全景 1
(北西から)

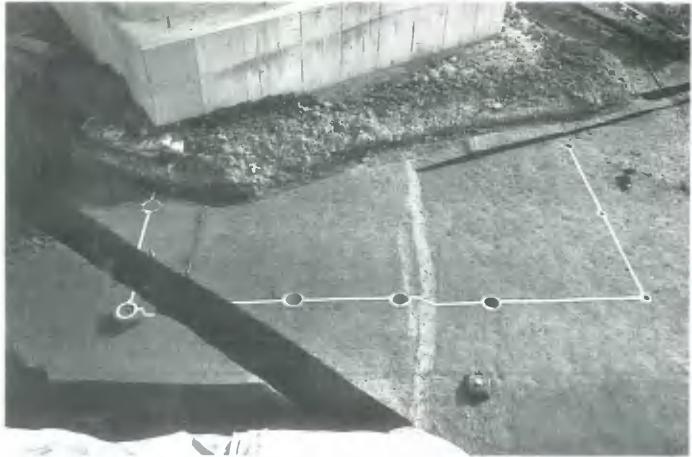


中世全景 2
(北から)

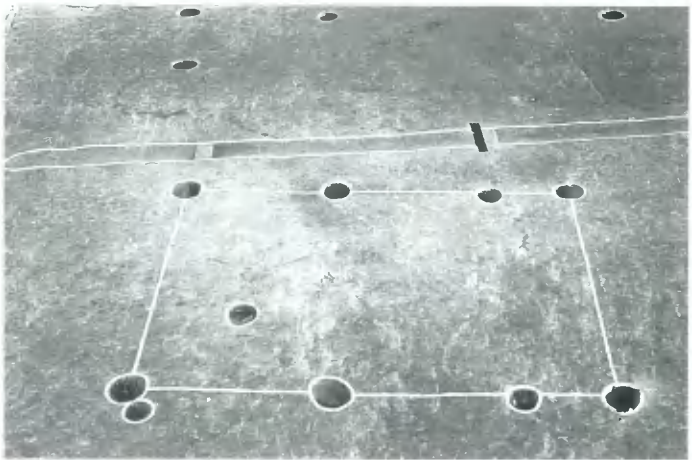


中世全景 3
(西から)

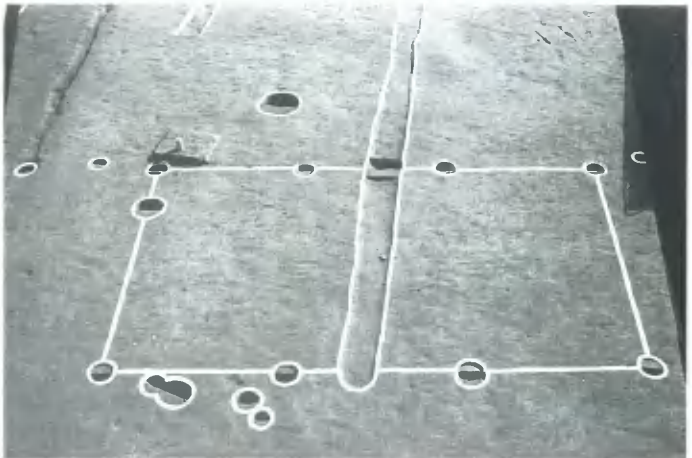
掘立柱建物-04
(北から)

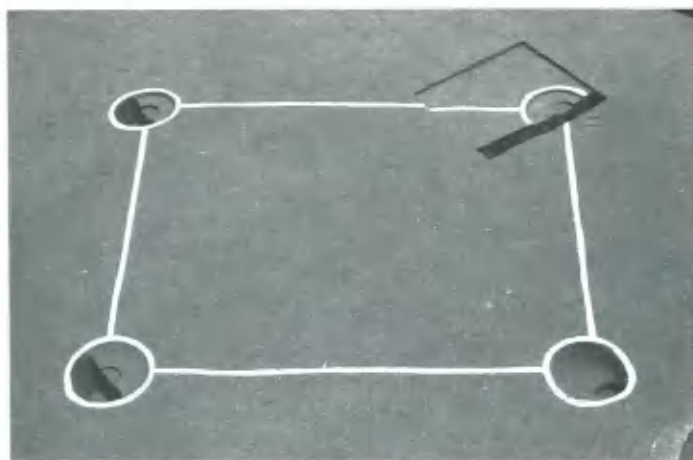


掘立柱建物-09
(西から)

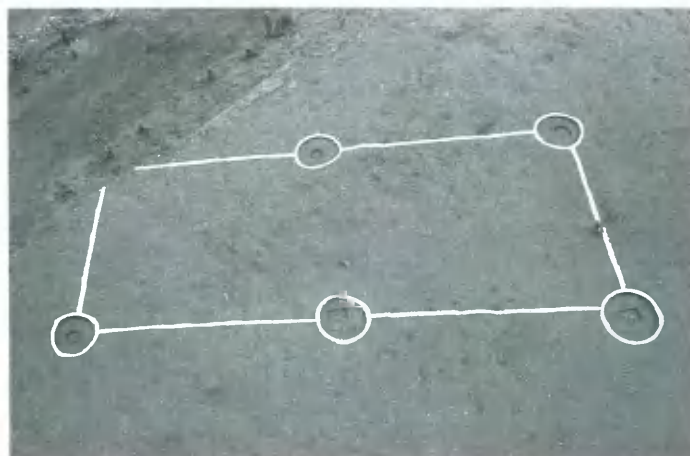


掘立柱建物-10
(北から)





掘立柱建物-12
(南から)



掘立柱建物-13
(南西から)



井戸-2
(東から)

井戸-2
遺物出土状況
(北から)



土壙-176
(西から)



土壙-180
(南から)





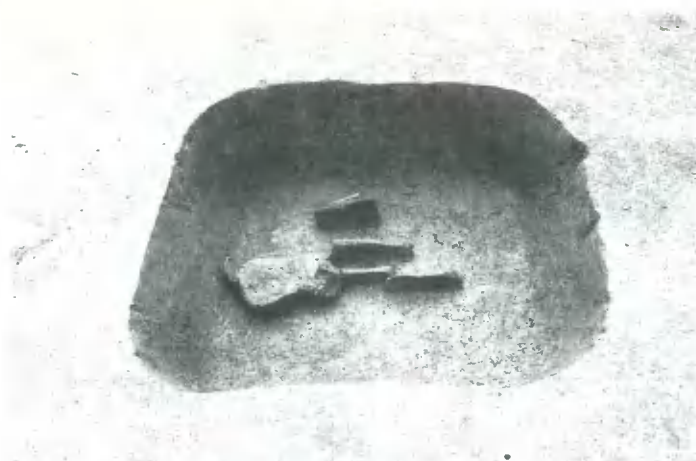
土壙墓-5
(南から)



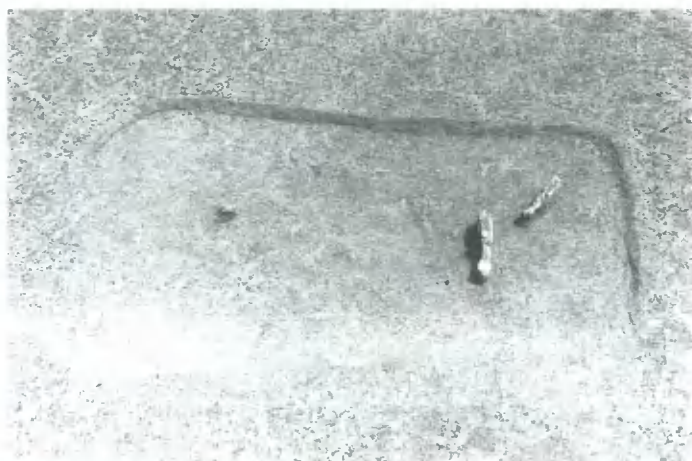
土壙墓-6
(南から)



土壙墓-8
(西から)



土墳墓-9
(西から)



土墳墓-10
(西から)



土墳墓-7
(南西から)



741



1/4

769

1/4



744

1/3



770

1/3



765

1/4



780



785

784



1/3



793

1/3

袋状土壙-3 780 袋状土壙-8 784·785 袋状土壙-11 793



797

1/3



796

1/3



805

1/3



798

1/3



803

1/3



828

1/3



865

1/3



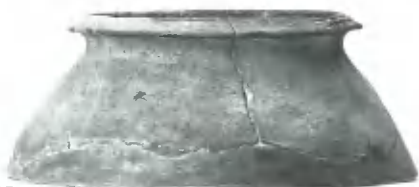
861

1/3



844

1/3



835

1/3



862

1/3



845

1/3



868

1/3

袋状土壙—18 828

袋状土壙—20 835

袋状土壙—25 844

袋状土壙—27 845

袋状土壙—33 861

袋状土壙—36 862·865

袋状土壙—37 868



893



1/4

892

1/3



899



1/3

910

1/3

袋状土壙—56 892·893

袋状土壙—59 899

土壙—48 910



914

1/3



912

1/3



918

1/4



921

1/4



920

1/3

土壤-49 912

土壤-52 914

土壤-53 918·920·921



927

1/5



937

1/4



946

1/4



955

1/4



974

1/4



961

1/3



953

1/3

土壙-61 927
土壙-84 955

土壙-72 937·946
土壙-87 961

土壙-81 953
土壙-91 974



962

1/3



965

1/4



984

1/4



983

1/4



991

1/5



993

1/5

土壤-87 962·965

土壤-97 983·984·991·993



986



1/4 995

1/3



1019

1/4 996



1/3



1004



1/4

1005

1/4



1059



1/3

1057

1/5

土城-100 1004·005

溝-3 1057·1059





1086

1/4



1100

1/4



1084

1/3



1099

1/4



1104

1/3

溝-3 1084·1086·1099·1100

包含層 1104



1141

1/3



1148

1/4



1155

1/3



1152

1/4



1149

1/3



1147

1/4



竖穴住居-37 1151·1156·1166 竖穴住居-39 1160 竖穴住居-41 1165
 竖穴住居-45 1177·1179 竖穴住居-46 1188·1189 竖穴住居-48 1201·1203



1196

1/3



1197

1/3



1212

1/5



1219

1/3



1232

1/3



1213

1/3

竖穴住居-46 1196
竖穴住居-53 1232

竖穴住居-48 1197

竖穴住居-50 1212·1213·1319



1235

1/3



1234

1/2



1238

1/3



1239

1/3



1241

1/3



1240

1/3



1245



1/3

1247

1/2



1248

1/3



1252

1/3



1253

1/3



1258

1/3



1266

1/3



1263

1/3



1262

1/3

竖穴住居-53 1245・1247・1248・1252 竖穴住居-54 1253
竖穴住居-55 1258 竖穴住居-56 1262・1263・1266



1259

1/4



1267

1/3



1271

1/3



1273

1/3



1268

1/3



1274

1/3



1281

1/3



1284

1/3

竖穴住居-56 1259 竖穴住居-60 1267・1268・1271・1273・1274
竖穴住居-62 1281・1284



1282



1293

1/3



1/3

1313

1/3



1283

1/3



1318

1/3

竖穴住居-62 1282・1283・1293

竖穴住居-65 1313・1318



1316

1/3



1319

1/3



1324

1/3



1337

1/3



1371

1/3



1370

1/3



1369

1/3



1377

1/3



1373

1/3



1381

1/3



1382

1/3



1374

1/3



1380

1/3



1376

1/3



1416

1/3



1424

1/3



1423

1/4



1425

1/3



1430

1/3



1422

1/4

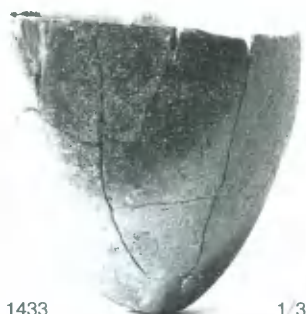


1429

1/3

竖穴住居-82 1416

竖穴住居-84 1422~1425·1429·1430



1433

1/3



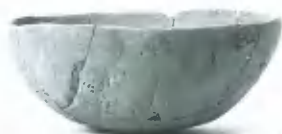
1440

1/3



1441

1/3



1437

1/3



1442

1/3



1443

1/3



1438

1/3



1447

1/3



1448

1/3



1482



1/3 1496

1/3

竖穴住居-84 1433・1437・1438・1440~1443・1447・1448
竖穴住居-90 1482・1496



1489



1/3

1488

1/3



1501



1497

1/3



1/5

1503

1/5



1502



1/5

1504

1/5

竖穴住居-90 1488・1489・1497

竖穴住居-92 1501・1502~1504



1508

1/3



1509

1/3



1510

1/3



1511

1/3



1543

1/3



1545

1/3



1544

1/3



1546

1/3



1555

1/3



1561

1/3



1562

1/3



1558

1/3



1566

1/3



1570

1/3



1567

1/3



1599

1/3



1599

1/3



1607

1/3



1610

1/4



1614

1/3



1612

1/3



1615

1/3



1618

1/3



1629

1/3



1624

1/3



1634

1/3



1635

1/3



1647

1/3



1640

1/4



1641

1/3



1644

1/3



1645

1/3



1654

1/3



1651

1/4

竖穴住居-107 1634·1635
竖穴住居-111 1651·1654

竖穴住居-109 1640·1641·1644·1645·1647





豎穴住居-114 1682・1688・1689 豎穴住居-115 1700
 豎穴住居-116 1703~1709 豎穴住居-117 1712



1713

1/4



1717

1/3



1715

1/4



1719

1/4



1720

1/3



1716

1/4

竖穴住居-117 1713·1715

竖穴住居-118 1716·1717·1719·1720



1721

1/3



1724

1/3



1718

1/3



1722

1/3



1723

1/3



1727

1/3



1725

1/3



1726

1/3



1730

1/3



1728

1/3



1731

1/3



1734

1/3



1732

1/3



1733

1/3



1736

1/3



1738

1/3



1735

1/3



1737

1/3



1739

1/3



1740

1/3



1741

1/3



1746

1/3



1742

1/3



1743

1/3



1745

1/3



1747

1/3



1748

1/3

豎穴住居-118 1735·1737·1738 豎穴住居-119 1739~1743·1745·1746
豎穴住居-121 1747·1748



1761

1/4



1765

1/3



1772

1/3



1766

1/3



1787

1/3



1809

1/3



1816

1/3

土壙-111 1761 土壙-116 1765·1766·1772 土壙-129 1787
土壙-139 1809·1816



1811

1/3



1815

1/3



1862

1/3



1817

1/3



1864

1/3



1865

1/4

土壙-139 1181·1815·1817
土器棺墓-8 1865

土壙墓-4 1862 土器棺墓-7 1864



1866

1/4



1869

1/4



1875

1/4



1879

1/4



1882

1/3



1881

1/4



1880

1/4



1887

1/4



1886

1/4



1893

1/4



1896

1/4



1884

1/4



1892

1/5



1897

1/3



1902

1/3



1904

1/3



1903

1/3



1908

1/3



1905

1/3



1912

1/3



1907

1/3



1915

1/3



1957

1/3



1921

1/3



1913

1/3



1928

1/3



1934

1/3



1932

1/3



1930

1/3



1924

1/3



1965

1/3



1948

1/3



1950

1/3



1926

1/3



1931

1/3



1959

1/3



1962

1/3



1940

1/3



1938

1/3



1937

1/3



1941

1/3



1943

1/3



1976

1/3



1968

1/3



1974

1/3



1973

1/3



2074

1/3



2075

1/3



1994

1/3



2003

1/3



2006

1/3



2017

1/3



2022

1/3



2028

1/3



2030

1/3



2026

1/3



2032

1/3





2064

1/4



2068

1/5



2067

1/4



2069

1/4



2080

1/3



2083

1/3



2087

1/3



2091

1/5



2090

1/4



2092

1/3



2076

1/4



2098

1/3



2100

1/4



2105

1/4



2106

1/5



2112

1/4



2109

1/4



2114

1/4



2102

1/5



2108

1/3



2110

1/4



2121

1/5



2111

1/5



2115

1/4



2103

1/4



2127

1/4



2119

1/4



2134

1/5



2130

1/4



2137

1/5



2133



1/4 2129

1/4



2145



1/4 2146

1/4



2169

1/3



2178

1/3



2172

1/3



2198

1/3



2157

1/3



2158

1/3



2201

1/3



2181

1/3



2183

1/4



2188

1/3



2192

1/3



2185

1/3



2194

1/3



2163

1/3



2173

1/3



2175

1/3



2200

1/3



1/3



2206

1/3



2314

1/3



2197

1/3



2193

1/3





2291

1/3



2256

1/3



2235

1/3



2272

1/3



2242

1/3



1/3



2245

1/3



2246

1/3



2243

1/3



2764

1/3



2250

1/3



2251

1/3



2267

1/3



2278

1/3



2259

1/3



2257

1/3



2275

1/3



2263

1/3



2285

1/3



1/3



2254

1/3



2253

1/3



2231

1/3



2233

1/3



2366

1/3



2265

1/3



2304

1/4



1980

1/4



2377

1/3



2356

1/3



2310

1/4



2769

1/3



2358

1/3





2370

1/3



2451

1/4



2371

1/3



2459

1/5



2472

1/5



2368

1/3



2466

1/3



2441

1/3



2475

1/4



2199

1/3



2460

1/3



2168

1/3



2464

1/3



2463

1/5



2457

1/3



2458

1/3



2456

1/3



2442

1/3



2455

1/3



2468

1/3

溝-16 2455~2458

水田 2468

溝-17 2542





2499

1/3



2494

1/4



2503

1/4



2509

1/5



2512

1/3



2502

1/5



2516



1/3 2515

1/3



2517



1/3

1/3



2538

2512

1/3



1/3 2544

1/4



2523

1/3



2524

1/3



2526

1/3



2525

1/3



2528

1/3



2529

1/3



2549

1/4



2550

1/4



2551

1/3



2595

1/3



2583

1/4



2593

1/3



2606

1/3



2594

1/3



2611

1/3



2623

1/3



2632

1/3



2633

1/3



2635

1/3



2642

1/3



2652

1/3



2660

1/3



2649

1/3



2658

1/3



2659

1/3



2662

1/3



2668

1/3



2665

1/3



2669

1/3



2578

1/3



2679

1/3



2692

1/3



2691

1/3



2680

1/3



2685

1/3



2699

1/3



2701

1/3



2697

1/3



2799



1/3 2745

1/4



2757

1/3



2712

1/4



2846

1/3



2843

1/3



2851

1/4

包含層 2712・2745・2757・2799・2843・2846・2851



2875

1/2



2870

1/2



2876

1/2



2882

1/2



2936

1/2



2883

1/2



2888

1/6



2898

1/2



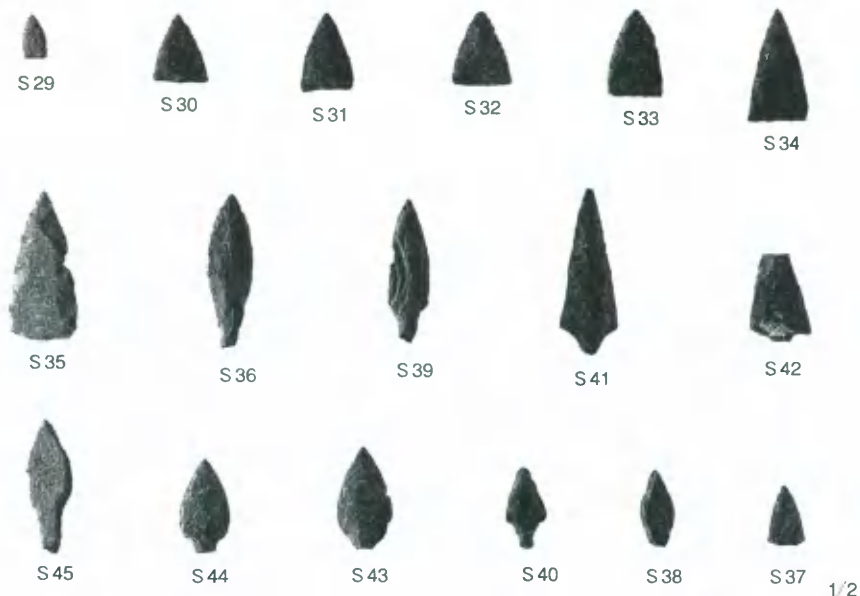
2942

1/2

溝-27 2876
包含層 2942

溝-28 2870・2875・2882・2883・2888
ピット 2936

土壇-166 2898



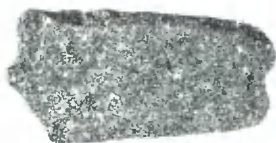
中屋調査区出土石器 1



中屋調査区出土石器 2



S46



S48



S47



S52



S49



S53



S50



S54



S51



S55



S89



S91



S92



S88



S90

中屋調査区出土石器 4

1/2



S81



S84



S83



S82



S86



S85

中屋調査区出土石器 5

1/3



C18



C19



C22



C21



C25

1/2

中屋調査区出土土製品 1



C26



C25



C24



C27



C23

1/2

中屋調査区出土土製品 2



C28



C30



C31



C71



C36



C40



C38



C34



C42

1/2

中屋調査区出土土製品 3



C43



C45



C46



C47



C48



C49



C50



C51



C52



C54



C55



C56



C57



C44



C58



C51



C62



C63



C64



C65

1/2

中屋調査区出土土製品 4



C70



C72



C74



C77



C75



C80



C76



C78

1/2

中屋調査区出土土製品 5



C89



C92



C91



C84

1/4

中屋調査区出土土製品 6



M6



1/1

中屋調査区出土銅鏡

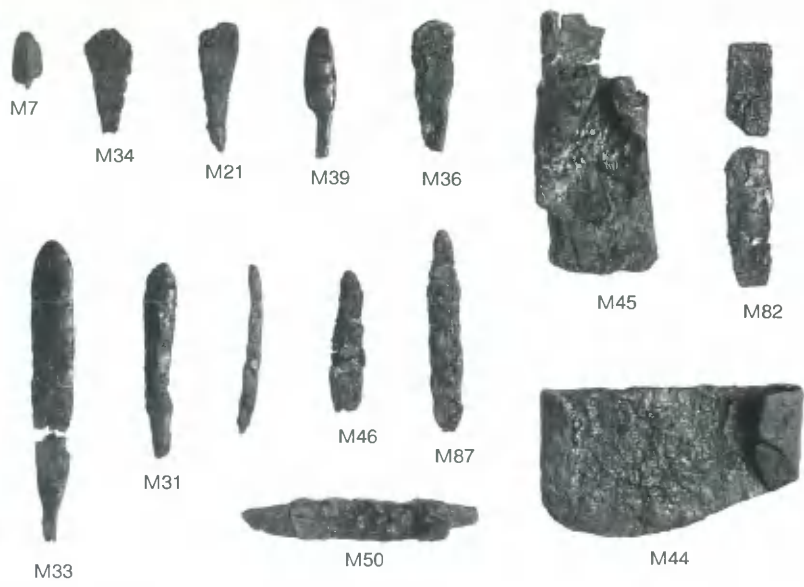


J31

J30

1/1

中屋調査区出土玉類



中屋調査区出土金属製品 1

1/2



中屋調査区出土金属製品 2

1/2

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104

津 寺 遺 跡 3

山 陽 自 動 車 道
建設に伴う発掘調査12

(図版編)

1996年3月20日 印刷

1996年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下246

印 刷 サンコー印刷株式会社